

どうしても叶えたい願いの為にその気になる綾小路と、別にどう
でもいい願いでなんとなくいるオリ主

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

綾小路清隆の願よくいに必要なのは異常オリキャラか——それとも天才おさななしみ(?)か
……

どんな願いでもたったひとつだけ叶えることができる十二大戦と、
どんな願いでもたったひとつさえ叶うことのない十二大戦——
その完結間際にささやかれた『学校に通ってみたい』と言う願い。

その願いが大戦で発揮されなかった才能『想像イメージナリー・チャイルド認信』によって生まれ
た子に継承された。

十二戦士と十二戦犯全ての遺伝子を不完全ながらも受け継ぎ……
そして交じり合い複雑に相互干渉し戦士とも戦犯とも似つかない彼
は何者になるのか？

目次

願いは叶えられた。	1
赤ちゃんが・・・	11
噛んで含めるように○○	25
選択の余地なく○○	35
お友達が・・・	49
遊ぶ金、欲しさに○○①	62
叶えたい願いの為に。	74
上から見ていたから。	88
狙い澄まして○○	102
自分が・・・	115
助けが・・・	128
平和裏に○○	136
事件は起きないほうがいい。	149
知る必要のないこと。	167
住所が・・・	185
紳士的に○○	202
統べて○○	220
特例の安売り。	236
干支の名になぞらえた。	255
罰が・・・	268
騙して○○	284
名前が・・・	299
ご主人様が・・・	315
先に進める為に。	330

不自由な夏休み

相応の値段を

半日だけのアルバイト

ダブルデート

季節は移る。

勝ちが・・・

異常に○○

うじゃうじゃ○○

夢が・・・

誓って○○

健康が・・・

新しい風の吹き始め。

兆しはひとつに非ず。

モルモットが・・・

名誉が・・・

酔った勢いで○○

事態は斜め上をいくもの。

忘れた頃に来るもの。

数えて○○

金が・・・

才能が・・・

ウエットに○○

正しさが・・・

もう予兆は過ぎている。

差し障りの無い風景

347

359

372

386

402

419

433

448

464

480

497

511

529

545

560

576

590

610

625

642

661

679

697

712

726

割と古くからある、おまじない

大晦日は猫の手も借りたい

別のおめでとうを聞いて

再び、外にて。

嫌々○○

病的に○○

水が・・・

星が・・・

のっぴきならない状況に持って行けば。

マジヨリテイの中のマイノリティ。

遊ぶ金、欲しさに○○②

啄んで○○

仕えて○○

お洋服が・・・

ふろしきが広がった、予期せぬ形で。

イレギュラーな試験。

間を取って○○

選択肢が・・・

生かして○○

豊かに○○

時間が・・・

無言で○○

もう喋っていいですよ。

願いは叶えられた。

春の入学式、高度教育高等学校にバスで向かう者、電車で向かう者、徒歩で向かう者も居る中でそれは宛ら妖怪のように海の中から現れた。濡れた黒髪がべつたりと顔面に張り付いて目を隠しており、徐々に現れる肉体は細身ではあるが適切に鍛えられた筋肉でできていた。

人工島に施設された校舎並びに生活施設の端にある堀に手を掛けて上がってくる一糸纏わぬ姿は通報必死であるが、幸いにも見咎める者は誰も居らず上がりきり地面に足を付いた瞬間に声をかけられた。

「ようこそ牛井うしいえいじ嬰兒」

シルクハットを被った老人、十二大戦の審判役ドウデキヤプルが慥慥無礼に頭を下げ、タオルと下着、制服を差し出した。

無言のまま身体を拭き着衣を済ませると嬰兒は若干濡れている髪をかき上げて醜くも整つてもいない顔と黒い目が表れ口を開いた。

「……まあ一応、別の牛から生まれたとは言え、あの天才の名を使うのは正直恐れ多いぞ」

「それは失礼しました。しかしもう戸籍も用意しておりますので」

「手遅れって訳ね」

「理解が早くて助かります。それでは貴方様はI—Dに配属で教室はあちらになります」

紳士風にお辞儀をしながら腕を伸ばして方向を指し嬰兒は歩き出す。

「ああ、分かっているとは思いますがこの学校のルール及びこの国の法律に違反した場合はどんな些細なことであつても問答無用で退学になりますのでご注意ください」

嬰兒は足を止めて向き直る。

「その方がそちら側には好都合じゃないのか？こんなことするのなんて所詮は体裁の為なんだし………なんなら今から罪を犯そうか？」

殺意を込め構えようとすることもドウデキヤプルは煙のように消えた。

なんとも不毛で実りのないと嘆息しながら嬰兒は改めて教室に向

うのだった。

俺、僕、私……一人称はどうしようと考えながら指定された教室1—Dに向う。そして扉を開けるが誰も居ない。実はもう入学式で置いていかれたのかと考えていると廊下からうじゃうじゃと人の気配がやって来た。

つまり一番乗りなのか。机にあるネームプレートから自分の席を探すと廊下際の一番前、要するに今日の前の席がそうだ………出直そうかな。

と考える間もなく気配は直ぐそこまで来ていたので嘆息しながら席に着く。

案の定、入ってきたクラスメイトたちはまず初めに俺を見て来た。あ、一人称が確定した。

無視する者、適当な挨拶だけする者が殆どだが柄の悪い赤い短髪からメンチを切られ、目を逸らすと不機嫌な顔のままスルーしていき、逆に爽やかな感じの男女二人には満面の笑みで挨拶された。

ホント、色んな人が居るんだなあ。しかし折りしも……かどうかは分からないがいきなりクラスメイトのほぼ全てを見れた。これだ『子』の戦士の能力があれば一人ひとりに声を掛けられるんだけど、生憎とそれは受け継いでいない。大戦が始まる前に既に死んでいたからなあ……『子』から受け継いだのはチーズが好きと言う好みだけ、ああ、ホントに惜しい。

見た限りかなり容姿のいい女子ばかりだし手当たり次第に声をかければ一人くらいは当たりが見つかったかもしれないし、さっきの赤髪にしても不遜な態度で爪を研いでいる金髪くんにしても聴くだけ聴いて分岐を消滅させれば今後の学校生活を円満に出来るかもしれないのに。

などと無いモノねだりの妄想に没頭していたら、いつの間にか担任と思われる女教師が壇上に立っていた。

タイトスーツを何とも色っぽく着込み目つきは悪いものの整った顔に長い黒髪をポニーテールにし如何にも規律を重んじるといった

印象を抱かせる。

ただ、それだけの印象だ。勘の類ではあるが監視役ではなさそう
だ。

「えー新入生諸君、私はDクラスを担当する茶柱佐枝だ」

と自己紹介からはじまり担当教科やクラス替えが無いこと、この学
校だけのローカルルールの説明に入った。

外部への接触禁止など俺には関係ない部分は聞き流していたが、学
生証をかねたSシステムと言う現金代わりのポイント端末には耳を
疑った。学校の敷地内とは言えひと月に10万もの金額をくれると
は……もしかしてこの学校自体、過去の大戦の優勝者が願った結果な
のか？進学率、就職率100%もそれなら分かる気がする……俺がこ
こに居るのも込みで。

そんなこんなで説明も終わり茶柱先生が出て行くと教室がざわつ
く、俺も俺で有意義な学生生活を思い描きながら端末を眺めている
と、

「皆、少しいいかな。僕らは今日から同じクラスで過ごすことになる。
だから自発的に自己紹介をして——」

「あー、だったらいいかな」

笑顔で挨拶をしてくれた爽やか男子の言葉を遮って席を立つとク
ラスみんなの注目を一齐に浴びた。

「俺の名は牛井嬰兒。俺は苗字で呼ばれるのが好きじゃなくてな。出
来れば俺の事は名前と呼んで欲しい……それに抵抗があるなら適当
なあだ名でも結構だが『丑』が付くだけは勘弁して欲しい」

言いたい事を言い切った後で一瞬沈黙が起きるが、茶髪ポニーテ
ールのギャル風女子が声を上げる。

「ええー、自分の苗字が嫌ってちよつと変」

「そうだね。そこまで可笑しな苗字じゃないのに」

「何か訳あり？ってか今からカミングアウトとか？」

似たような気質の女子たちが続いて嫌な意味で面白がられそうな
雰囲気の流れそうだが……さて、どうしようか。

「別にいいだろう」

助け舟を出してくれたのは爽やかくのではなく、眼鏡を掛けたいかにも真面目そうな男子だった。

「人にはそれぞれ事情があるんだ。無理に聞き出すなんて悪趣味だ。それとついでだから言う。俺は幸村輝彦と言うが俺は嬰兒とは違いい名前で呼ばれることが嫌いだ。だから俺の事は幸村と苗字で通してもらいたい」

幸村が黙り俺への追求はなくなりそうだが、嫌な空気が漂い始めた。もうちよつとタイミングを計るべきだったかな……こんな時、『子』の能力があれば――。

「うん、分かった。確かに本人が嫌がるのを無理に聞くのは良くない。ちなみに僕の名前は平田洋介。中学では普通に名前で呼ばれてたから嬰兒くん同様に洋介って呼んでくれて構わない」

そもそも言いだしっぺである爽やかくんこと平田が絶妙に場の空気を引き戻し、それを皮切りにクラスでは自己紹介が始まった。

取り留めてインパクトが強かったのは爽やか女子こと櫛田桔梗の、「ここにいる全員と仲良くなりたいたいです。自己紹介が終わったら是非私と連絡先を交換してください」

で、赤髪は不機嫌な態度で名乗らずに教室を出て行き、不遜な態度の金髪は、

「私は高円寺六介。いずれこの日本を背負って立つ男だ」

だった。まあ何はともあれ良かった、良かった。幸村と平田には後で礼を言っておこう。

その後、特に語ることも無く入学式は終わりその日は解散。

俺はそのまま寮に直帰した。

与えられた部屋は最低限の家具が揃っており水も問題なく出る。しかし、こと俺に関してプライバシーが護られる道理など通じるはずも無い。教室や廊下、敷地内のいたる所にある監視カメラからしてこの部屋にもある可能性は大だ。

目耳鼻全てを使って隈なく探したがカメラはおろか盗聴器の類もなかった。

考えすぎだったか。

国家もとい十二大戦を運営する者たち力は侮れないが、この学校を出たら直ぐに消える俺如きにそんな労力は無駄とか？

しかしそうなる通る場所、居る場所にあったあのカメラはなんだったんだ。もしかして俺は早速間違えたのか？十二大戦なんか関係ない事情があるのか？確かめる必要ありか。

ベランダに出てまだ明るい空を見上げると鳥が群れを成して飛んでいた。一先ずは運が味方したかな。

『鵜の目、鷹の目』で鳥と同調。敷地内に散らせてまずは手当たり次第に場所の情報を送らせる。

敷地内の至る所、異様な数の監視カメラのように思えたが……よくよく見ると死角とも呼べる場所もそれなりにある。

しかも明らかに不自然な形で。

モールの方に意識を向けてみると豪く意気消沈としている者たちと陽気な者たちがかかり目に付いた。

なんとも甘い学校だと思っていたが認識を改める必要がありそうだな。

おや、なんだかコンビニで赤髪が揉めているようだ……見た感じ相当しようもない事で……ホントに高校生か、コイツ？

いつそ『お友達』にしてしまった方がいいんじゃないか。まあ殺人罪で即退学、俺の命も終わりだからやれない。

ああ、面倒臭いぞ。三年しかないんだから平穩無事に過ごせぬもんなあ……!!?

そんなこんなで敷地内を流し見していたら杖を着いた一人の少女が目にと留まった。

小柄で可憐な顔立ち、銀髪のショートカットにベレー帽。目を『魚』式に切り替えるとどうやら怪我による障害でなく先天性の病気のようだ。それにしても、なんだらうこの気持ちは？

ああ是非お近づきになりたい。

よしならば膳は急げだ。しかしこんなことなら帰る前に服ぐらい買っとけばよかつたなあ。

まあ、今日はみんな似たようなものだろうし別にいいか。

件の彼女の元へは割りと早く辿り着いたが………さて、なんと声を掛けたものか？

って言うか美少女をジッと見続ける俺って見るやつが見たらまんま変質者だな。

…。

何か話題、話題、あの娘………じゃなくてもこの際いいから、興味を持たれる話題を………。

何も浮かばないまま目当ての娘はどんどん行ってしまう——どうしようかと考えてたら、後ろの方から別の気配がして、

「なにかお困りですか？」

白いロングヘアを腰までなびかせた、おとなしそうな印象の女子が声をかけられた。

目当ての銀髪の娘から意識を切らないまま振り返る——心配そうに………それとも怪訝そうに俺の顔を見ている。

さつきまで視線の先には無防備な女子が居たからな………やっぱ傍から見れば怪しいよな。

ただずつと口ごもってたら、本当に誤解されかねない。

俺もだが、銀髪の娘もしつかりと視界に入れてる——このままだとあの娘にまで警戒されてしまう。

「ああ、いや………その『どんな願いでもひとつだけ叶えられる』としたら、何を願う？」

咄嗟にそんな言葉が出てきてしまった。

「え、なんでもですか?」

「そう、何でも」

問われた女子はますます怪訝な顔をしながら聞き返し、俺は反射的に答えると目線を上に向けて「うくん」と少し唸りながら、

「そうですね。私なら絶版になってしまった小説の続きが読みたいですわね」

「へえ、本好きなんだ」

「はい。とつても」

満面の笑みでの即答——このまま話を切り上げてさっきの女の子にと思ったのだが——

「ちなみにSFとかではこの手の話はお話には、悪質な裏や落とし穴があつたりするのが定番セオリーなんですけど……そう言う小説とかのお話ですか?」

思いのほか食い付かれてしまった——適当に濁しても良かったが、何故だか言っておかなければならないという情動が込み上げてきて、「この『願い』は全てが終わった後の報酬であり、支払う側も払うだけの意義があり、受け取る側も願いによって生じるリスクや責任を全うできる実力者であり、もし負い切れなかったとしてもキチンと処理する仕組みが備わっている……と言うか、自身に負い切れない責任とか以前にそこに思慮が行き届かない奴なんぞ、権利とか資格以前の話、論外の更に外だ」

と偉く饒舌に一気にまくし立ててしまった。

「ははあゝゝ、なるほど」

白髪ロングの少女は感心したように聞き入っており——そしていつの間にか目当ての杖を突いた銀髪ショートにベレー帽の少女も声の届く範囲に来ていた。

なんだろう凄くばつが悪い。

「まあそういう奴が願いについて苦惱する『お話』について、俺ならどうするかとか考えてたんだ。仮に願いを百個に増やすのも有りだけど、人の欲望が百で終わるとも思えないし、小さな自己満足で済ま

すのがベターかなって」

上手く誤魔化せたか自信がなく相手の顔をうかがうと、

「……私の願いは譲りませんが、その『お話』の人がどう思うか中々、気になりますね」

面白そうに興味深そうな顔をしていた——視界の端にいる目当ての少女も顎に指を当てて何かしら考え込んでいるようだ。声をかけたいが目の前の少女をほっぽり出す無礼を第一印象にするのは避けたい。

「ああ——出来ればもう少しその『お話』について聞きたいですが、それはまたの機会にした方が良さそうですね。

自己紹介が遅れましたね。私はI—C、椎名ひよりです。」

躊躇していたのを読み取ったのか椎名の方から切り上げを申しだされてしまった……ちよつと格好悪いな——とか思っていたら目当ての少女は既に歩き出して遠くに行こうとしていた。

「俺は牛井嬰兒、I—Dだ。

初対面で変に思うだろうが、俺のことは牛井と苗字では呼ばないて貰いたい」

「ええ、構いません。では今度はゆっくり出来る時に『お話』を聞かせてください」

軽く挨拶して椎名も去っていく。

杖を付いている分、目当ての少女はまだすぐ近くにいるが、どう声をかけようか余計に分からなくなってしまった………どうしよう？せめて名前だけでも知りたいんだが——

とか考えている間にどんどん離れて行ってしまおう——仕方ない日を改めよう。

なんだか喉も乾いたし、気の利いた話をできそうにもなさそうだな。

すぐ近くの自販機でミネラルウォーターを買って一気飲みすると、ふと道の反対側の先にあるごみ箱が目に入った。

「……………」

特に意味があるわけもなく俺は飲み干したペットボトルを投げ、そ

れはごみ箱に向かつてキレイな放物線を描きながら入った。

うん、身体機能に不備はなさそうだ。今日生まれたてのほやほやであるが心配はない——それが確かめられたし、何も初日からあれこれする必要はない。

時間が欲しいと思うほど窮している訳じゃない、また明日にしよう。

嬰兒が情けない言い訳で自分を収めて帰っていくのをケヤキモールの職員は眺めていた。

その場にいたのはただの偶然であり、本来は台車にある荷物を届ける途中に嬰兒の仕草が目に入り足を止めた。

そこまで長い距離があるわけではないが、見た目ほど簡単じゃないコントロールが要求されそうなことを簡単にやってのけた。

(今年の新入生もまた面白そうだな)

と益体のないことを思ったが直ぐに仕事の途中だと急いで届け先の店舗に向かったが、慌てたのがいけなかったのか危うく一般生徒とぶつかりそうになってしまった。

幸い相手は気にしていないと言ってくれたが迷惑をかけてしまったと謝罪し心中で反省しながら仕事に戻っていった。

一方、ぶつかりそうになった生徒である綾小路清隆は止めた足を動かそうとせず、目に入った風に揺れている木々に感じ入っていた。

普通の何気ない光景だが彼にとってはどうにも新鮮であり、

(少し遠回りになるが——)

と進路を変えた。

(たったひとつの願い……私なら——)

杖を付きながら反対側の手で風になびく銀髪ショートを抑えながら彼女、坂柳有栖はついさつき耳に挟んだ会話を思い出し、そして連想していた。

約8年前に父親に連れられた白い施設で、彼女がチェスを始める切っ掛けになったガラス越しに見た一人の少年を思い出していた。彼ともう一度会いたい——出来るならチェスでも何でもいい気が済むまで戦いたいと懐かしい思い出に触発されて気持ちのいい妄想が駆け巡り、彼女の口に心底楽しそうな笑みが浮かぶ。が、それは一瞬だった。

何故なら——

「どうかしたのか？」

彼女の歩は止まり目を丸く見開きながら反対側から歩いてきた綾小路清隆を見ていた。

あまりの展開に流石に啞然としてしまったが、すぐに持ち直して嬉しそうに口を開いた。

「お久しぶりです。綾小路清隆くん」

「……………」

ただでさえ初対面のはずの相手にすれ違いざまに不可解な顔をされ、更にはいきなり名乗ってもいないのに名前を言われ今度は綾小路が啞然とした。

そして、直ぐに記憶を思い出そうとするが全く見たこのない少女に困惑を隠せない。

「ふふ、無理ありません。あなたは私を知りません。」

私だけが一方的に知っているだけ、なので名乗ります」

綾小路の正面に立ち真っ直ぐに顔と目を合わせる。

「私の名前は坂柳有栖と申します」

赤ちやんが・・・

翌日の1—Dの教室——

(坂柳有栖——アイツはオレの敵なのか?)

昨夜の夕方から綾小路の脳裏には坂柳有栖がいた。それこそ寮に戻っても食事も満足に出来ず一睡も出来ない………とまではいかないまでも、大して食べる気にもなれず浅い眠りしか取れなかったためコンディションはかなり悪かった。

自由と平穩を求めてやって来た学校で初日から躓いた——そんな気分登校したため、授業初日から心此処に在らずの状態になってしまい、それぞれの授業方針も放課後の部活説明のアナウンスも右から左に聞き流してその日は終えてしまった。

放課後の部活説明を受けるため体育館に行く俺は、あの少女がいなか兔に角、目を光らせていた『鶉の目鷹の目』が使えれば楽なんだが早々、鳥が密集している所になどありつけず数羽くらいは見つけてられるかと思つたが、昨日のただ働きで警戒されたのか遂に見つけられなかった。

人が、特に新入生が集まる催しなら居るかもしれないと淡い期待を胸に先を急ぐ。

体育館には既に数十人の生徒が集まっており俺は出来るだけ前の位置まで進んでいき見て回つたが既にいる中には居ないようだから、入る際に受け取つたパンフレットを見る振りをしながら『地の善導』を発動、入り口の近くまで行つて杖を付く振動が無いかを探索する。

所定の時間が過ぎいくつかの部活代表による入部説明がある中でも目当ての反応はない。どうやら空振りだったみたいだ。茶道部や書道部と言つた文科系ならもしかしてと思つたんだが……。

心の中で愚痴つている間にも説明会は続き、最後となるシャープなメガネをかけた知的な男子生徒が壇上に立つ。

しばらくは無言のまま集まっている一年が冷やかす声を上げるが、やがてなくなり一同が静まり返って三十秒ほどして口が開いた。

「私は生徒会長を務めている、堀北学と言います」

続く演説自体はそれほど特別なものはなく、部活との掛け持ちは禁止、安易な考えでの生徒会入りは歓迎しないと淀みなく簡潔に——それδειながら威厳を感じさせる言葉で紡いだ。

どこことなくだが丑の戦士に通じるものがあるなと言う心証だ。

あの男も皆殺しの天才と言われながらも決して殺戮者ではなく己の力を己の信念と考えによって磨いた“正しさ”に用い追及していた。

あの絶対を思わせる雰囲気は才能と努力による確かな実力による土台に培ってきた正しさによる裏打ちを感じさせる……と言ってもまだまだ十代の若造だ、丑と比較するなんて文字通りで十年は早いだろう。

しかし、お目当ては果たせなかったが無駄足にはならず済んだ。

何よりあの生徒会長を見ていたら、あの娘に対するモヤモヤした思いに何だか形が掴めてきたのは何よりの収穫だ。

「あれー、嬰兒くんじゃん」

名を呼ばれ顔を向けるとDクラスの同級生——確か、松下千秋がいた。彼女の近くには佐藤麻耶と篠原さつきが一緒にいた。

二人は俺との話など望んでいない顔をしており仕方ないとばかりに松下に続いた。

「嬰兒くんも部活はいるの?」

篠原が尋ねてくるに首を横に振りながら答えた。

「いや、俺は人探しに来ただけだ。そちらは入りたい部活が?」

「うん。わたしは料理部に入るの」

「ところで人探しって、早速彼女探してたの?」

篠原が答えるのと息の合わせるように佐藤が訊いて来る。

「そんなんじゃないよ。知り合いに似てるのがいたから気になっただけさ」

「え、知り合いってやっぱ嬰兒くんの好きな人とか?」

どうも佐藤は恋バナに飢えているようで、どう答えても色恋の方向に行きそうだ。健全な高校生の思考とさえいえばそれまでだが、さて、どう答えるのがいいものか……本当のことを言う訳にもいかないし、更に発展してあの娘のことを根掘り葉掘り訊かれるのも好ましくない。かと言って適当な嘘も思いつかない、ならば――

「さっきの生徒会長だよ。俺の尊敬する人にどことなく似てるなつて」

さっきの心象を交えた答えを言うと、思った通り佐藤も後ろにいる篠原も松下も驚いた顔をしており、口を開く前に、

「言つとくがそう言う意味じゃないから妙な邪推はやめてくれよな」

「わ……わたしはまだ何も――」

「顔に書いてあるぞ」

語気を強めて言うのと黙り込み沈黙が生まれる。

「それはそうとさっきの生徒会長さん凄かったよね」

松下がそれをいち早く破り方向転換を図り、あとの二人もそれに乗ったようで、

「うん。全員を黙らせるなんて普通じゃできないよね」

「彼氏とかにはちよつと無理だけど、あんな人が一緒だったら頼りになるよね」

「ああ、俺の知り合いも味方になると頼もしいと思わせる人だった」
「だった？」

松下が俺の単語に引つ掛かりを覚えたのか気まずそうな目を向けてくると、二人も察したのか顔色を悪くした。

「……今のは気にしないでくれ。それじゃあ」

「あ、うん、引き留めてごめん」

流星にこの空気で声をかける度胸もないようで、あっさり解放された。

しかし、さっきの会話からしてあいつ等の主導権を握っているのは松下千秋か。しかもあとの二人には気づかせないようにしながら――とか思つてそうだな。

体育館を出る際にDクラスの男子が三人ほど目に入ったが、やつぱ

り興味がわからないし何も感じないので今日はそのまま寮に戻ろう。
あーあ、明日にはあの娘に会えるといいな。

翌朝——廊下で『地の善導』を張り巡らせて彼女のクラスはすんなりとAクラスだと分かった……昨日もこうしておけば良かった。

しかし、声をかける切っ掛けはなくプランもなしにAクラスの近くまで来てしまったが、ここからどうしようか？と考えていたら廊下にあの娘が歩いてきた。すぐ後ろにサイドテールの女子を引き連れる形で、どう見てもお友達って感じじゃないなあ。

それにしても気の所為かこの前よりも足取りテンポが明るいような——何か良いことでもあったのか？

「坂柳さくん、あたしたちグループチャット作ったんだけど一緒にどう？」

教室のドアを開け、中から呼ばれあの娘が答えた……苗字は坂柳か。

「ええ、いいですよ。真澄さんもどうです？」

「アンタがそうしろってんなら」

後ろに控えていた女子に機嫌よく話を振るが、真澄と呼ばれた女子は不機嫌な顔でぶっきら棒に答えた。

「ふふ、私のことは有栖でいいですよ？」

「ハッ！遠慮しとくわ」

悪態付きながらも端末を取り出し教室に入って行く二人を見ながら、俺は早々に退散し自分の教室に向かった。

初めて見た時とは違い気持ちを落ち着けたのもそうだが、昨日の生徒会長をお目にかかったのがやはり大きかった。

あの娘——坂柳有栖への思いに確信が持てた。

生徒会長同様に似てるんだ、十二戦士の一人に。それでいながら會長と違い明らかに彼女とは違う戦士の気質を感じ取ったから興味がそぞられた……これが戦士としての共感から来るものか戦犯のふざ

けた思い入れから来たものなのかは定かに出来ないのが、ちよつともどかしいな。

はあ、それにしても短い恋の予感だったなあ……気持ちさがハッキリするまでは坂柳のことをもしかしてとか、あの娘との赤ちゃんが——とか言う想いなのかとも思っていたのに。

やはり俺は殺しあう者の気質でしか人を判断できないのか？

こんな俺が高校生活だけの人生でどんな意味を見出せるのか………見いだせないなら、いつそ派手にぶち壊すのも手かもしれないな。

そのまま四日ほどが経ったが特に語ることはない、と言うか語りたくない日常が続いた。

授業を遅刻するわ私語をするわで煩いわ、それを教師連中が全く見咎めないのもムカつくわ。

ハッキリ言つて赤ん坊の相手しているほうがまだマシだ！………やっぱり牡牛の影響が一番濃いのかなあ、赤ちゃんこどもは宝物で手厚たいせつくに育てなければならぬと言う感情が一の曇りもなくある。

それを思えば、こいつ等は指導者もさることながら親にも恵まれなかったのか？平和国家に生まれ育ったからって、それだけで良しとして終わりには出来ないってことか。大戦の一番の実力者ともいえる『申』はそれでも平和の価値を信じるだろうことも同時に確信してしまふ。

やはり俺の心は俺のものでない継ぎ接ぎだらけの紛い物か？

なんであれ俺はこいつ等の親でもなければ指導する立ち位置にいる訳でもない。

で、その立ち位置の居る者たちは——

「見学者は十六人か。随分と多いようだが、まあいいだろう」

明らかにサボっている生徒にも一切咎めない。

ちなみに今は水泳の授業であり、健全な男子高生はスク水スクイーズの女子高

生にはしやぎ引かれる面白くもない光景がさつきまで繰り広げられていた。

「俺が担当するからには必ず泳げるようにしてやる。それは後で必ず役に立つ。必ず、な」

それは、それは是非とも『子』に聞かせてあげたい言葉だ——それと今更言うまでもないだろうが俺はカナヅチではない。繰り返すが『子』から受け継いだのはチーズが好きと言う食の好みだけ……どうせなら才も受け継ぎたかったし才能がダメならそれだけにして欲しかった。なんでこんな知りたくもない、しようもない情報なんて受け継いでいるのだろう。

「早速だがこれから競争をする一位には俺から五千ポイントの特別ボーナスを一番遅かった奴は補習を受けさせるから覚悟しとけよ」

思わぬ報酬でクラスは盛り上がり、更に男子には女子の特に榎田桔梗やそれに劣るが堀北鈴音がスタートラインにつくと歓声を上げた。

俺を含めそんな目を向けなかったのは平田と綾小路の二人。平田はまだしも綾小路は若干やつれた顔をしていた。体つきからして運動が苦になるタイプじゃないのは明白なのに、入学してまだ日が浅いのに一体、何があったのか？

女子が泳いでいる間は平田が、男子が一段落して次に進んでいる間は榎田がそれとなく声をかけていたが芳しくない結果になったようだ。

その間に競争は決着し、女子の一位を取ったのは水泳部の小野寺かや乃で男子の一位は高円寺であった。

「綾小路くん、少しいいかな?」

面白くもないわりに騒がしい授業を終えて帰ろうとしたところに平田が声を掛けた。

「手短に頼む」

「じゃあ単刀直入に、悩みがあるなら話してくれないかな? はたから

見て思い詰めてるのは分かる。クラスメイトとして力になりたいんだ」

ストレートに気持ちを伝える平田に綾小路は一瞬考えてストレートに聞き返すことにした。

「じゃあ、その前に聞いておきたいんだが平田は軽井沢と付き合ってるのか？」

「え、どこでそれを？……もしかして綾小路くん——」

綾小路の質問もだが平田の反応にクラス中の視線が集まる。その中には話題にあつた女子、軽井沢恵もおり冷や汗が浮かんでいた。

第三者から見れば彼女を奪い合う三角関係勃発を予感させ、当事者——特に取り合われるかも知れない軽井沢からすれば、洒落じやすまない修羅場に身を置くことになるという焦りに映つただろう。

ある者は固唾を飲み、ある者は興味津々にまたある者は不安からくる緊張で身を固めるも共通する好奇心が一同の目に宿っており、ある意味で期待とも言える感情を持って事の発端である綾小路の言葉を待つ。

「安心しろ、他人の彼女に手を出すような真似はしない。」

ただ、質問を噛み砕くと入学前からののか、そうでないのかが気になつてな」

「噛み砕くという割にはよく判らないけど、軽井沢さんと会つたのはこの学校に入ってからだよ」

「そうか」

綾小路が一呼吸置き次の言葉を出す前に、

「ちよつと、人の恋愛事情に勝手に踏み込んでこないでよ！」

軽井沢が平田の前に立ち猛烈に抗議する。見ていた者にとって、それは見世物や酒の肴にされては堪らないと言う普遍的な行動と移り「まあ、そうだろうな」と言う小さな共感を与え、それでいながら重い緊張感の中で大胆に行動できる胆力への称賛の念を抱く者も少なからず居た。

そして彼女の行動はこれ以上の問答はするなど無言でいつているも同然であり、場の空気は一気に変わった。

「ちよ、ちよつと落ち着いて——」

「いや、デリカシーを欠いた問いをしたのはオレだ。悪かった」

噛みついてきた軽井沢と宥めようとする平田に素直に頭を下げる綾小路。

そのまま目線を床に固定しながら思う。

(もし会話が続いたら、初対面の女をどう口説いたんだとか、オレのこの気持ちに恋愛感情なのか教えて欲しいとか、もっとがつついたことも訊いてたな)

綾小路は恋を知らない。男女の付き合いを知らない。故に知りたいたいという探求心を危うく抑えられなかったろうと。本来は坂柳に対する気持ちの整理の切っ掛けにでもなればと思っていたのに、まだ見ぬものに対することを学習するのになら流れてしまった。

(これじゃホワイトルームと大差ないな……そんなのから抜け出したくて此処に来たのに)

「あ……えつと、つまり綾小路さんの悩みて？」

頭を下げたままの綾小路に遠慮がちに平田が訊くと、

「オレにも分からん」

頭を上げて短く答えた。その目は平田を見ておらず、こちらもまた軽い気持ちで踏み込んではいけなと言わんばかりの空気が流れ気まぎれになる。

「……っ、もう行くー！平田くん！」

軽井沢が強引に腕を引き平田を連れて行くこうとする。

「あ、うん。ごめん、僕の方こそ配慮が足りなかったみたいで」

去り際にも相手を建てようと発したのか本心か、そのまま教室を去っていくカップルに続き、綾小路も含め残っていたクラスメイトも帰路に就いた。

(今日も何も起きないか……)

入学初日に名乗られて以来、坂柳からの接触はない。

あの男の息がかかったとまでは思わないが、今日の今日まで不気味

なほどの沈黙——ひよつとして知っているのは名前だけで、詳細は知らないのかと希望的観測も浮かびはしたが、どうしても樂觀視することが出来ず答えの出ない問いが頭の中でグルグルと回り、疑心暗鬼に近い精神状態だった。

(なんで、こんなことになるんだ?)

答えが出ないと分かっていると思わずにはいられない。先ほどのクラスでのやり取りも平穏な学生生活を求めた当初の目的からすればマイナスであるが、ほんの僅かでもガス抜きしなければ……何より誰が敵かも分からないのでは精神的にも成り立たないと、なんでもいから今の状況を抜け出す取っ掛かりが欲しかった。

「あ、やっと来た。待ってたんだよ、綾小路くん」

校舎を出てすぐに声を掛けられ顔を向けると笑顔の櫛田が近づいて来た。

見るものが見れば惚れ込みそうだが、今の綾小路には坂柳からのと言う疑念がついて回り素直に歓迎できなかった。

「あははは——ひどい顔してるね。恋に悩むのは青春の醍醐味だけど、それも過ぎると毒になるよ」

教室での一幕があったばかりなのに踏み込んでくる櫛田に対して綾小路は返事に迷った。

そんな綾小路の素振りを見て取ったのか櫛田は絶妙な距離で足を止める。向かい風に乗って華の香りがやって来たがリラックスするにはとても足りなかった。

「あのさ、もしかして綾小路くんが気にしてるのって堀北さんだったりする?」

「違う。どうして堀北が出てくる?」

質問に即答し問い返す。可能ならそのまま全然関係のない方向に会話の流れを持っていきたいと気持ちを込めて。

「いやあ、隣の席だし、あの通りの美少女だから好きになっても可笑しくないなああって。……それにちよつと言い方が悪いけど堀北さん近寄りがない空気出してるから、それで声を掛けられなくてなやんでるのかなあって」

一見、櫛田の言っていること自体には不自然はない無難な推測とも思えるが、はつきり言っておらず、気に掛ける素振りはおろか目の端にいったこともなく推測には穴だらけどころか脈絡もないと言えた。

（そういえば——『ここにいる全員と仲良くなりたいです』とか初日に言ってたな）

ともすれば櫛田の目当ては堀北であり、自分の目的の為に綾小路をダシにするつもりなんだろうと考えを巡らせた。

（推測を口に出して話を終わらせるのもいいが——）

櫛田の言動や可愛さからして交友範囲がクラス外に広がっていても不思議ではない。坂柳の回し者の可能性もあるにはあるが、それなら猶更ここで話を終わらせるのは惜しい。

どこまで話していいものかと……不自然じゃなく、もしバラされても申し開きができる内容を組み立てる。

「残念ながら全然違う。ただ……ここだけの話にしてくれるなら聞いてもらいたいんだが？」

「うん。いいよ」

遠慮がちに言う綾小路に嫌な顔ひとつせずに応じる姿は宛ら天使のようだ。

少なくとも外面が良いのは間違いないので話してすぐにバラされ噂になる可能性は低く、本心からそう言ってくれるなら尚のこと問題ない。

そう判断して綾小路は切り出した。

「櫛田は坂柳有栖を知ってるか？」

「Aクラスの生徒でしょ。確か病気で運動が出来なくて杖を付いている……綾小路くんの目当てって彼女なの、それとも知り合い？」

「後者だ。この学校で八年ぶりに再会したんだ」

「わあ！幼馴染ってやつだあ！しかも高校に入ってからからの再会ってまるで恋愛漫画みたい」

いかにも興味津々と言った表情を見せて目を輝かせる。

「ああ……だが向こうはしっかりと憶えてるようだがオレの方は情け

ない話、どうにも記憶が朧気な………どんな奴だったか、さっぱり思い出せないんだ」

「そうだよ。まあ、漫画や小説じゃないんだからそれが普通だよ。相槌を打ちながらも残念そうな表情を作る。」

可愛い娘にこんな表情をされれば、普通なら大なり小なり自責の念を打つが、実際は坂柳の口から出た言葉を基にした作り話であり、少々の後ろめたさはあるがそれ以外の感情はない。

「それでなくても八年も経って、今の坂柳がどんな感じなのかも分かんなくてな」

その後ろめたさを敢えて噛んで、それでいながら含めるように視線を逸らす。

「それで話しかけられなくて、それでいながら恥ずかしくて相談もできなかつたんだ。なんとも純情だねえ、綾小路くん」

得意げに笑みを浮かべる櫛田は笑顔のままに言った。

「うん、分かった。私、Aクラスの子にも知り合い居るからそれとなく聞いてみるよ」

「それは有難いが……もう他クラスに友達作ったのか？」

「私はクラスだけじゃなくて皆とお友達になりたいんだあ」

笑顔で惚気るように言う姿は本当に天使のような姿だ。

「でも、その前にまずはクラスのみんなどとお友達になりたい。」

だからさ、綾小路くんも私と堀北さんがお友達になれるように協力してくれないかな？」

「お安い御用とは言えないが、微力は尽くす……すまんあ、これくらいしか言えなくて」

「構わないよ。無理して欲しいわけじゃないから」

相手への配慮も忘れない姿に綾小路は少しだけ凶々しくなることにした。

「そう言ってくれると助かる。ただ、どちらにしても明日からしなやか？今日は色々と気持ちの整理も付きたいし……それと堀北のことに関して気長に取り組みたいんだが、櫛田の方もゆっくりでいいから……」

「さつきも言ったけど綾小路くんのペースで全然かまわないよ……
『急いては事を仕損じる』とも言うしね」

快諾をした櫛田は手を差し出し、綾小路も応じるように手を差し出して握手する。

「それじゃ、これからよろしくね」

「ああ、こっちも頼む」

その日はそれで解散となり綾小路は寮に櫛田は他に用があるとのことで別れた。

部屋に戻る途中、戻った後も櫛田との会話を再生する。

応酬話を仕掛けた綾小路に櫛田は見事に対応し、こっちの要求を受ける代わりに自分の要求を通してきた。それでいながら腹の内を全く見せないこちらに対しても向こうも手ごたえを感じさせる肝心な情報を一切与えなかった——どうにも一筋縄ではいかない人物のようで、寧ろそれぐらいの方が信じるに値すると評価をつける。

(それにしても堀北か……あいつらの方こそ知り合いなのか?)

根拠と呼べるもののない直感であるが少し気に留めておこうと綾小路はそのままベッドに横になる。

(ああ、坂柳と会うのがもつと後だったら……:……:ホント、どうしてこうなるのか?)

夢見た平穏な高校生活は一日も持たなかった。せめて一週間、欲を言えば一か月、贅沢を望めるなら半年以上は先にして欲しかった——目を閉じながらそんなことを思った。

ただその日は割とすぐに眠れ、入学して今日までではよく眠れた。

入学してから三週間——日に日にDクラスの授業態度は悪化しており、それに伴い俺のストレスも溜まっていった。

戦士と戦犯、立場は違えど共に戦場を知る者たちの記憶は全てではないが、それなりにある。一応言っておくとあくまで彼等の記憶の断片を感情移入した映画のような感覚で得ているだけだから、これはあ

くまで俺の意見………のはずだ。

家を追われ故郷を追われ高等教育を受けられない者たちが沢山いる現実を知識としてしか知らず自ら放棄するようなのを目にするのは本当に不愉快だ。

こんな奴らの生活のために命を懸けて戦っている戦士にも心底同情する——なんて言ったら『申』だったら誰かのためにその手を血に染めている戦士への侮辱だと窘められ、『丑』だったら「正しいことをしなくていい理由探しかね？」とか言われそうな気がする。

そして戦争と犯罪を憎む『戦犯』たちなら、戦争が無くても犯罪者になってたかもとかふざけた開き直りでも言うか……。

ああ、何度も思ったが、なんで俺はここにいるんだ?!

『いかなる形であれ物事には結末が必要ですので』

ドウデキャプルの丁寧な口調でありながらの偉そうな答えが頭に浮かんで、思わず俺は——ドカッ!!——と拳を叩きつけて机を半分破壊してしまった。

当然、教室中の注目を浴びてしまったが静かにはなった。

「あー、牛井。連絡入れるから今すぐ新しい机を取りに行け。次の授業には絶対にサボっては駄目だから」

これでも注意しないのかとも思ったが、なんとも分かり易い台詞があり、ほぼ真つ二つになった机を持ち上げて教室を出る。

二時限目担当の数学教師が端末を取り出して話すのを見ながら出ていく俺を呆然としながら無言で見ているクラスメイト達——インパクトの強さは分かるが本当に気にすべきところが違うだろう。

クラス端末に指示された場所に向かうと本当に新しい机が用意されていた。

しかしこれって『器物破損』だよな。じゃあ、どのみち退学だし……櫛田にならって「お友達作り」でもして派手な終わりをとか考えもしたが——。

「壊した机は君のポイントから引いておくから」

と持ってきた職員から小型決済機を差し出され結構な金額が減った。

ただこれで弁償により示談と言う形になったかも知れないので大人しく教室に戻った。

俺が戻った後の教室は流石にしんとしており、三時間目の社会、茶柱先生の授業は静かに入った。

「これより月末の小テストを取り行う」

先の先生から話を聞いているのか今の状況にも何も言わず淡々と問題用紙を配る。

絶対にサボっちゃいけない理由はこれか……別段、特別な何かを期待した訳じゃなかったが少し拍子抜けだ。

テスト内容は全教科合わせて二十問だが、腐っても医師であり大戦に最後まで残った『魚』の知能も『牡牛』と同じくらい受けついでいる俺には試験とすらいえないレベルの物だ。

最後の三問だけは見比べると難度が違うようだが……そもそもテストを受けること自体が初めての俺にはこれが普通なのかそうでないのかが判断付かない。

現役高校生だった『子』——ああ、新たに受け継ぎたかったものが追加された。なぜこんなにもしようもなく要らないものばかり受け継いでしまったのだろうか？

と心の中で愚痴りながら、俺は数学の難度の高い三問にあと一問と他の教科を二問ずつの十二問だけ解いてテストを終えた。

そして、その日の昼休みと放課後、更には四月の残りも俺の周り人が寄り付かなくなった………ああ、やっぱり終わったかな俺の学校生活——。

噛んで含めるように○○

五月の初め、俺にポイントは振り込まれていなかった——やっぱり俺の学校生活はもう終わりと言う意味か？

ま、問題行動を起こしたのは事実ではあるし仕方ないか……なんて物分かりのいい態度で肅々と完結おわりを受け入れるつもりなどない。

どうせ隔離された空間で俺の行動の一切も記録にも記憶にも残さないようにされるなら盛大なイベントを起こして戦犯たちの横槍により捻じ曲げられた十二大戦の終わりがどんなものか知らしめてやろう……そうすれば少しは有力者あいつらも十三回目きに神経質になるか——希望的観測だが十二戦士を生き返らせて十二回目を仕切り直そうとするかもしれない。

まあ、そうだな——まずはクラスメイト全員を“お友達”にするところから始めよう。

そう思いながら教室に入ったのだが、クラスの中に浮かない顔をする者や困惑している者がかなりいる。一部のバカは能天気にはしゃいでいるが……。

手始めにあいつ等から……と思っていたら割とすぐに担任が来てしまった——しかもその表情はいつもより険しそうだが、なんとなく楽しそうにも見えた。

もう少しだけ様子を見るか？

大人しく席に着き全員が静かに茶柱先生を見る——先の机割のインパクトがよつぽど強かったのか、あれ以来、騒がしいのは殆どない……須藤あたりは堂々と居眠りしているが……

「さてホームルームを始めるが、その前に質問があるか？」

茶柱先生の言葉を皮切りに一斉に手が挙がった。

「先生、今朝ポイントが振り込まれてなかったんですけど？」

「ポイントは間違いなく振り込まれている」

「え……でも？」

どうやらポイントが無しなのは、俺だけではなくクラス全体のような——早とちりでの“お友達造り”計画は保留かな？

「……本当に愚かな生徒たちだな。お前らは」

なんだろう言葉に愉悦が混じっているような気が？

「愚かって……でも実際に振り込まれてないわけだし……」

「ははは、なるほど、そういうことかねティーチャー。理解できたよ」
高田寺の発言に理解できてない大半の生徒は困惑し、理解できたらう生徒は顔をしかめる。

「簡単な話、私たちは0ポイントを支給されたということだよ」

「なんだよ、それ。話が違うじゃねえか!？」

机に足を乗せ偉そうに語る高田寺に回りが食って掛かった。

「うくん、どうも耳の機能も違うようだね。私が聞いた話とは随分違うようだ——と言うことではないのかな、ティーチャー?」

高田寺は不遜な態度のまま担任を指さす。

「態度に問題はあるが、その通りだ」

茶柱先生はそこで何故か高田寺でなく俺を一瞥する——それも誰からも分かるようにワザとらしく……ああ、どうにも愉快じゃない予感しかしないな。

「遅刻欠席、九十八回。授業中の私語や携帯を触った回数、三百六十回。極めつけは学校の備品を破壊。ひと月でよくここまでやらかしたものだ」

ああ、ホームルーム^こ後の展開が手に取るように分かったな。なんとも意地の悪い女だ。

「入学初日に説明した通り、この学校は実力で生徒を測る。そして今回、お前たちは評価0を受けた。それだけだ」

言い回しは不快で美しくないが、このひと月に合点がいった——やはり早とちりは駄目だな。国家が運営しているんだ常識もマナーもなっていないこんな餓鬼どもにひと月に10万も貰えるなんて甘いわけがない。十二大戦同様にそれなりの意義が含まれており、それに相当するコストも掛かっていて然りだ。

しかし、優秀な人材を育む常套手段は競争だったりする。そうなる
と……

「これは各クラスの成績表だ」

先生が白い厚手の紙を黒板に貼る。

見てみるとAクラス940、Bクラス650、Cクラス490、Dクラス0と綺麗に揃っており、どうにも分かり易い構図が導き出される。

「この学校では優秀な生徒からAクラスへ、ダメな生徒ほどDクラスに配属されるように分けられる。つまりお前たちは最悪の不良品であることを証明した訳だ」

ああ、俺の場合は急ごしらえの粗悪品の方が合ってるかな。

などと思っているのは俺だけでクラス全体ではシヨックを隠せないようだ……高円寺と綾小路を除いて。

進学就職100%の謳い文句に釣られた口ではないのか。カラクリを理解して状況を覆す算段でも付いているのか？……はたまた、ただの能天気野郎ってことはないよな？

「まあ、体面を気にするだけのプライドがあるなら上のクラスに上がるように頑張るんだな。ポイントは直接クラスに反映されるからCクラス以上のポイント得れば、お前たちがCクラスとなり、CクラスがDに落ちる」

この話は少しばかりの希望が持てそうだが、先生にそんなつもりはないようで、また新たな紙を張り付ける。内容からしてこの前のテストの結果、俺は60点で平均に一歩及ばない。

「全く中学で何を勉強して来たんだ？これが本番だったら七人は退学になっていたところだ」

「た、退学!？」

「この学校では中間、期末で一科目でも赤点を取れば即退学となる。今回のテストなら32点未満の生徒全員だな」

流石に聞き捨てならないようで該当者の七人が声を上げたが、先生は淡々と説明をするだけで取り合わない。

「最後にこの学校での進学就職100%の話だが、お前たち低レベルにまで適応されるほど世の中は甘くない」

「つまり恩恵を受けるにはCクラス以上にならないと駄目だよ」

「それは違うな平田。その恩恵を受けられるのはAクラスのみだ。そ

れ以外の生徒には学校は何ひとつとして保証はしない」

俺の場合は命すら無くなるから全く持って無関係だけだな。

それにしても最後に勝たなきや望みを叶えられないなんて、まんま十二大戦のそれと通じる。規模は比べ物にならないが、やっぱりこの学校はかつての優勝者が願った結果なのかな？ならばいつ創られ、どの戦士の願いによるものかは知りたいな——仮に空振りであつても俺が学校生活を送るのに調度いい理由でもあるな。

そうなると校長や理事に会うのが手っ取り早いが普通には会えないだろうし、問題起こして会つても教えてくれるかは分からないし、その時点で消されたら元も子もない。教職員を通してヤバイ気がするし、無難に生徒会あたりが妥当か？それとも割と近くに関係者がいたりするかもしれないから、まずはそつちから当たるか？

「冗談じゃない!!」

おお、考え事してたら叫び声で意識が教室に戻った。

声の主はクールを気取っている幸村で立ち上がり憤っていた。ま、当然と言えば当然か。テストの成績は同率首位で三つあつた難問のひとつを解く学力はあつたということ、そもそもDクラスであること自体が不服なのは容易に想像でき、他の首位連中も同様の顔をしていると思いきや高円寺だけがふんぞり返つたままで爪を研いでいる。

「男子たるものがみつともない。なんとも無様なことだ」

「……高円寺、お前はDクラスであることに何の不服もないってのか？」

「私は私自身がどれだけ優秀かを知っている。他者が下した評価など関係ない。」

なにより将来に学校や国の世話になる気もない、高円寺コンツェルンを継ぐことは決まっている。DもAも些細な事なのだよ」

きつぱり言い切る姿は傲慢であるが不遜ではない。客観的に見て、この男がD判定であるのは性格の一点のみだろう……だからこそ、このまま唯々諾々と学校側に対しても周りに対しても黙っているとは思えない。しかし、きつとそれを見れるのはきつと最後の最後、これも希望的観測だが少しは面白そうだから小さく期待にしよう。

俺の期待感と違い幸村は言うべきことがなくなり腰を下ろす。

「さて、浮かれ気分は払拭されたようだな。自分たちの悲惨な状況を理解したなら三週間後の中間試験で退学にならないよう熟考してくれ。お前たち全員が乗り切れる方法はあると確信している。実力者に相応しい行動をすることを望む」

言うべきことは言ったと茶柱先生は教室を去っていった……：その際、扉を閉めるのが若干乱暴に見えたのは多分、気のせいだろう。

程なくしてクラスは不平不満を喚き散らし、このまま学級崩壊でも思ったが平田が率先して收拾に努め櫛田がフォローする形で落ち着きを取り戻した。

「みんな少し真剣に聞いて欲しい」

タイミングを見計らって平田が仕切り始めた。

「今月、僕たちはポイントを貰えなかった。これは今後の学校生活において大きく付きまとう問題だ。まさか卒業まで0ポイントで生活する訳にはいかないだろう」

「そんなの絶対嫌!!」

「だからこそ来月は絶対にポイントを獲得しなきゃいけない」

良い感じに話を進めようとする——と言っても遅刻、授業中の私語厳禁や携帯を弄らないと当たり前前のご確認しているだけ、須藤はどうにも不機嫌であり、今までの授業を最も不真面目に受けていた自分を責められていると逆恨みの感情を抱いているのかな。

「なんでお前にそんなこと指示されなきゃならねえんだよ。ポイントが減らねえなら無意味じゃねえか。

大体、そんなことより机割ったバカに謝らせるのが先じゃねえのか」

ほら来た。自分よりも悪い奴がいると他者を貶め自分をマシに見せようとする。あわよくば自分もと須藤と連んでいる池と山内も続き、こぞつて俺に非難の目を向けて罵ってきた。

「そうだ！牛井があんなことしなきゃ少なくとも0にはならず済んだかもしれないんだぞ！」

「俺なんて今朝、ジュースも買えなかったんだからな！」

別に俺のことが有っても無くても結果は変わらなかったと思うが。率直にそう言っても良かったが、それこそ益体のない議論になりそうだし適当に肯定してから、ちよつと灸を据えてやるか。

「俺としては、もっと早くにああしての方がマシになってたと思うがな」

と思っていたら幸村が話に入ってきた。

「嬰兒が、ああ」してからの授業は静かで俺としては良かった……いや寧ろあれが普通で今までののがどうかしてたんだ。

高校生にもなつて当たり前のことも守れないなんて、そもそも嬰兒の所業の原因はお前らにイラついたからじゃないのか？」

「僕もやり方はどうかと思うけど、幸村君の言うことも尤もだし——何より吊し上げて責任を擦り付けるやり方は嫌いだ。これはDクラス総じての責任なんだから」

平田も幸村の言に乗り非難が俺から須藤、池、山下に移る。

「ね、この話はもう終わりにしよう。もう過ぎたことなんだし、それよりこれからの——」

「ああ、俺が机壊したのは嫌な奴の顔が思い浮かんで、つい、やつちまっただけなんだが」

櫛田が上手く締めようとしたが俺が割って入ったことで再び非難の視線が俺に向く。

庇ってくれた三人は「なんで余計なことを」と言いたげな顔を作るが、俺としてはこんな形で終わるのは好みじゃない。

「なんだよ。やつぱりお前のしたことがトドメになったんじゃないか」

山内が大儀を得たりと俺を指さして非難を再開しようとするが、須藤と池はそれでも悪いと自覚があるのか黙っていた。援軍もなく一人調子に乗って更なる文句を付けようとするが、そんなのに律義に付き合うつもりはない。

俺も山内に一步近づいて指をさす。

「な、なんだよ?」

困惑する相手に俺は冷めた目を向けた口を開く。

「ねくんねくん、ころりよ、おころりよ」

「「「「?」」」」」

俺の突然の奇行にクラス全員が目を疑う。

「ぼくやは、よいこだ。ねんねしなく」

俺は気にせずそのまま、パチン、と指を鳴らす。同時に山内は体勢を崩して床に倒れた。

「「え?」」

「ぐがー、ぐがー——」

近くにいた者たちが顔を除くと山内は気持ちよくイビキをかいていた。

「本当に愚かだね。こんなあっさり催眠に掛かるなんて」

「「……………」」

俺の発言に今度は耳を疑ったようだが目の前にある現実は紛れもなく真実であると語っている。

「気の強い奴やしっかりした奴なら、もつと手こずるんだが、この手のバカは単純でいい」

「嬰兒くん!クラスメイトをモルモット扱いするのは——」

いち早く櫛田が抗議するのを再び声を被せる。

「いっそのこと、一人ひとり試してどこまでの不良品かも調べてみるか?」

「絶対にダメだ!!!」

平田の怒鳴り声にクラスの目が集まる。

「僕らは実験動物じゃないんだ。ましてや、そんなやり方で人を測ろうなんて人間のすることじゃない!」

正論であり、ある意味で正解である言だ。

そして、このやり取りでクラスのリーダーは平田であると印象が広まっただろう。殆どの生徒が同調するように頷き、俺に協調を求めている……しかし、それでも例外はある。

「いやはや面白い特技を持っているね。嬰兒ボーイ、ただもつと美しいやり方を学ぶことをお勧めするよ」

高円寺が言葉通り面白そうな口調で水を差し、続くように事の発端であり言い出しっぺである須藤も立ち上がり、

「はん。正義マンごっこならお前らだけでやれよ」

と吐き捨てて教室を去る。

「うくん、アイツなら三秒で——」

「嬰兒くん！」

俺の発言に不穏なものを感じたのか今度は櫛田が声を被せてきた。

「分かったよ。ここで約束しよう、安易に今のようなことはしない」

この宣誓でクラスの緊張の糸が解け安堵しそうになるが、それはもう少しだけ先だ。

「しかし、俺は俺を守るために使うことに躊躇するつもりはない。それれも一応、覚えておいてくれ」

「な!？」

誰かが抗議しようとするが指を差し出して黙らせた。

放課後、ほぼ全ての生徒が教室に残り平田主催の対策会議に臨もうとしていたが、俺は参加する気はないので早々に帰ることにする。

『生徒の呼び出しをします。一年Dクラス、綾小路くん、牛井——』

呼び出し音が中途半端に切れたが肝心な部分は聞き取れた。

俺は兎も角、綾小路も……さて、なんだったんだらうか？

放送室では突然、割って入って電源を切った坂柳理事長と茶柱佐枝が向かい合っていた。放送をした生徒は早々に立ち去らせた。

「茶柱先生、牛井嬰兒君に関しての問題は何があっても僕に上げるよう再三にわたって厳命したはずですよね？」

「担任として少し話をするだけで——」

「こと彼に関しては何らゆる理屈は通じません。今回は大目に見ますが、次も取り決めを無視するなら服務規程違反並びに特定秘密保護法違反により早急に警察に突き出します」

問答無用であり自らの学校から犯罪者がでるのも厭わないとキツパリ言う姿に逆に興味が沸く。

それ程までの重要人物——それが二人もいるなら今度こそ悲願が叶うかもしれないと心の中で期待感が募る。

「公式では十年以下の懲役とありますが、特例として一生を刑務所で迎えることになります。そうしたいなら止めませんか?」

「また特例ですか? 一体、あの生徒は何者なんですか?」

「知らなくていいことです。この話はこれで終わりとなります。」

それと綾小路先生のご息も呼び出したようですが、どうやら僕の見込みは外れだったようですね。貴女ではなく真嶋先生に預けるべきでした」

ただの愚痴なのか嫌味なのか、茶柱には後者に聞こえ無意識の感情が表に出た。

「今になってのクラス替えは不可能ですが、貴女を担当から外す権限はありません」

「脅迫ですか?」
バワハラ

「どう取ってもらっても結構ですが、僕は貴女が憎くて言っている訳じゃなく、逆に無事でいて欲しいんです。彼は一介の教師がどうこうしていい次元にいません……なにかあれば僕でも庇いきれない」

理事長の声も表情も真剣そのものであり、改めてトンデモのない奴をクラスに持ったと思ひ知らされる。

「話は以上です。二人が待っているかもしれないので行ってあげてください、しかし牛井くんは絶対に直ぐに帰してください。絶対に」

去る時まで念押しする姿もそうだが、そもそもどうやってこんなに早く放送室に来たのかが分からない。

二人を呼び出そうとしたのは前々から決めていたわけでもなく誰かに話してもいない。なにか得体のしれないものを感じ茶柱佐枝は

背筋が凍り付く錯覚を覚えた。

そして廊下を歩く坂柳理事長の背後には然も当然のようにドウデヤギャプルがおり、手腕を讃えていた。

「いやはや迅速な対応、お見事です。これなら『あの方々』も安心してしよう」

「全てアナタのお膳立てでしょう。白々しい……兎に角、あれで懲りてくれればいいのですが」

「ご心配なく、問題が起こればこちらで処理します。そちらの手を煩わせることも責任を追究することも致しませんのでご安心を」

「それが却って物騒で怖いんですけどね」

理事長室に着き扉を開けるとドウデヤギャプルはその前で足を止めて一礼し次の瞬間には消えていた。

常識では考えられない事態を目の前にして気が重くなるが、しかしそのお陰でひとりの少年に僅かな希望を与えることもできた……何度味わったか分からない複雑な心境で部屋に入った。

選択の余地なく〇〇

五月に入り一週間が過ぎた。あの中途半端な呼び出しには行く気になれず、後で綾小路に話をとまったが何故だが妙に近い時間差で堀北も戻ってきて、ただならぬ予感がして止めておいた。

授業は須藤が居眠りしている以外は皆、まじめに受けておりやっとな普通に過ごせたが、それだけでは足りないのも分かり切っており中間テストに向けての勉強会が平田主導で提案されたが、集った赤点組は四人——最も行かなければならない三人は須藤に釣られる形で参加しなかったらしい。

その内の一人である池は俺に『う……嬰兒の催眠でこうパツと頭良くなったりしないか?』とか聞いてきたりもしたが、生憎と俺の催眠は相手を眠らせることしかできないと伝えると「使えないな」と言った顔で去っていった。

この意見には俺も一部同意だ。『牡羊』のように対象になりきることの出来るほどの自己催眠なら色々と選択の幅も増えて動き易かったのに、結局地道に聞きこみするしかなく——しかし先の一件が広まったのか全く成果が上がらなかった。

時を同じくして綾小路清隆も自身が置かれている状況にお手上げ状態であり、頭を抱えていた。

先週の呼び出しにとりあえず行ってみると早々に指導室に押し込められて、直後に来た堀北と茶柱とのやり取りを無理やり聞かされ直ぐに引っぱり出された。

堀北はDクラス配属が不服で抗議したが茶柱は明確な回答をせず綾小路の出した入試、小テスト全科目50点を出して煙に巻いた。偶然と言いつ張ったが通じていないのは明白であり、その時に坂柳有栖の顔が浮かび担任教師も自分の事情を知っているのでは?——と疑念が浮かんだ。自分がしたことへのただの興味かも知れないが、そん

な樂觀できない。

そもそも呼び出されるような問題行動など起こした覚えは皆無で、現状に納得できない堀北とのやり取りを聞かせ同伴させる意図からして狙いはひとつしか思い浮かばない。

茶柱の目的はAクラス浮上。堀北と暗黙に利害が一致したことも悟った——最初から注意深く、警戒心を高めてなければたどり着けない結論だ。

改めて坂柳の顔が頭に再生される。

彼女との出会いがなければ気の緩みと欲している平穩により、ここまでの深読みはしなかっただろう。

坂柳がAクラスである以上、グルである可能性は低い但她が情報を回した可能性も否めないと確かめようのない憶測が次々と浮かんで消える。

こんな思いをするなら、いつそのこと坂柳と同じクラスであり堂々と接触して問い質して全てに白黒つけた方がまだマシだったが、クラス同士での戦いが明言された以上は簡単には接触できない……彼女からの接触もないのも自クラスのまとめに時間を割いていると考えるのが妥当だ。

(一縷の望みは櫛田か……)

彼女とは坂柳の情報と引き換えに堀北との間を取り持つと約束をしている。

幸いと言っていいのか、先の件から堀北は綾小路を手駒にしようとして色々と仕掛けてきているが、正直クラス争いなど知ったことではない彼にはどうしても誠意を込めた対応が出来ず——それでいながら坂柳の情報はどうしても欲しいので堀北に櫛田と一緒に勉強会を開くことを提案してみたりもしたが失敗の連続だった。

赤点組に手を差し伸べることで自体は消極的ながらも賛同してくれるのだが、そこに櫛田を入れるとなるとどうにも否定的になってしまう。

『自分のことが嫌いな人間と一緒に不快に感じないの?』か……やっぱり入学前からの知り合いなのか、あの二人?』

ぶつちやけ他人に手を差し伸べる精神的余裕のない綾小路からすれば、榊田抜き勉強会など論外だ。二人の接点なり因縁なりを探るゆとりもない、思い浮かぶあの二人の共通点は目的の為に綾小路をダシにしようしていることだけ……。

堀北はAクラスに上がる為の赤点組の勉強会、榊田は堀北との距離を詰めて何かを探りたいのか？

(堀北の言うことを信じるならばだけどな……)

そうなるとより深くどちらかに歩み寄り踏み込んでいかないと埒が明かない。それは綾小路のことも詮索されるリスクも同時に発生してしまう。

疑心暗鬼が募りすぎて誰も信じることが出来なくなってしまう——信じることが出来なくなると、信じていることが出来なくなると、利用できる頼りになる「誰か」を探すことに切り替えたが、中間テストまで二週間を切って、どこもかしこもピリピリしているのでは現実的に不可能だ。

(現時点で使えるのは榊田だ……手ぶらで行っても得るものは恐らくない。だったら——)

綾小路は榊田の端末に赤点組を勉強会に参加させる助力とその場に堀北も同席させるメールを送る。

暫くして快諾の返信が来て、直ぐに堀北に勉強会ただしそこに榊田がいることを伏せた内容のメールを送ると「よくやったわ」と返信が来た。

榊田の要求を汲めば長い目で見たらマイナスだが、少なくとも勉強会が済んだ後に綾小路の要求がどうなっているかを聞く体裁は出来た。

(試験が終われば坂柳の方から接触してくる可能性は大いにある。最低限、心の準備が出来る情報が手に入ればいいんだが……)

リスクとメリットが吊り合っているとは言えない行動だが——誰が敵かも分からない、使える駒もカードもない、そんな中で自分ひとりの力で何もかもどうにかできると思うほど綾小路は自惚れてはいない。

使える武器が手に入る可能性が低くてもあるなら、リスクを背負うことを承知でやるしかない……何も手に入らなかったなら今度こそ開き直るまで。

そう思い綾小路は腹を括った。

勉強会当日、綾小路の隣には不機嫌な堀北、その向かいには笑顔の榊田、榊田のそばには赤点組の須藤、池、山内と沖屋という男子がいた。

「どういうこと綾小路くん？」

「堀北の希望に100%添えなかったのは済まなかったが、これがオレの精一杯だ」

「はあ、意外に使えないわね。」

悪いけど榊田さんアナタは成績も悪くないし外れてくれないかしら？」

「えー、榊田ちゃんと勉強できるっていうから来たのにだったら俺も抜けるけど」

「それじゃあ、俺も」

池と山内が席を立とうとし須藤も無言でカバンを手にしようとする。

「今回は彼女も一緒にやりましょう」

「うん、頑張ろうね。堀北さん」

仕方なしに前言を撤回し榊田も笑顔で応じたことで勉強会が始まったが……始まりから散々なものだった。

そもそも少々の危機感があっても榊田の色気に釣られて渋々やっているのだ。身が入るわけもなく、その榊田が丁寧に教えてもダメで始まって早々に事が進まなくなった。

「あなたたち、よくこれで合格できたわね。牛井くんに頼んで性根を矯正してもらった方がいいんじゃないかしら」

現実的に希望が見いだせず半ば本気かもしれない言葉が堀北から出たが一同は困惑し、

「堀北、嬰兒の催眠は眠る以外は出来ないって言ってたぞ」

直接聞いた池が、

「つてか、みんな知ってるよな」

直接、催眠に掛かりそれをネタに言い広めた山内が、

「あ、うん……あの後、割とすぐに皆に広まったと思ってたんだけど」
より多くの交友関係を築いている櫛田が、

「はん、まさか俺以上にクラスに興味ない奴がいるとはな」

自分でさえ知っていると言っていると須藤も鼻を鳴らして、堀北に憐みの目を向けた。

「~~~~~」

思わぬところで恥をかき堀北は顔を赤くする。

「なら猶更~~~~で頑張るしかないでしょ！退学になりたくなければ、しつかり勉強するのみよ！」

誰がどう見ても苦し紛れの虚勢だが、意外にかわいいところが現れて場の空気が一気に軽くなり、仕方ないなとより素直に堀北の言葉に耳を傾けた。

しかし、だからと言って特効薬のような効果はあるはずもなく目ぼしい成果もなく、その日は解散となった。

(予想外に上手くいっただな……とつとと決裂するかと思ってたんだが)

綾小路は海の近くにある堀に向かいながら今日の成果に気を良くしていた。

当初の予想では堀北も須藤たちもお互いに話が合わず譲る気もなかったために互いに言いたいことを言い合って勉強会は散々な結果でお流れになり、それでも形だけでも間を取り持ったとして櫛田に坂柳のことを聞くつもりだったが、予期せぬ要因でどうにか最悪の結果は避けられ、良好とはいえぬまでも悪くもない終わりにこぎ着けられた。
(これなら櫛田も文句なく話に応じてくれるな)

そして肝心の櫛田は勉強会が終わっても寮には戻らず夜の道を通って海に向かっていった。どうにか追いついて要件を済ませたいのだが、待ち合わせの可能性もあり折角の悪くない状態にヒビを入れる

事態は避けたいと中々距離を縮めることが出来なかった。

当の櫛田は海沿いのフェンスの前で立ち止まっており、やはり待ち合わせかと暫く待つこととした。

(こんな時間に人気のない場所……深夜デートかな?)

——若干の好奇心もあつて物陰からこつそりのぞき込む姿は変質者そのものである。

そして――。

「あー、ウザい」

普段の櫛田からは考えられない声色であつた。そのままフェンスを蹴りながらもそれは続く。

「マジでウザい。死ねばいいのに……お高く留まったと思いきや可愛い子ぶつて——あのアバズレ。あーホント最悪、堀北ウザい、ほんつとうにウザい」

暴言がエスカレートしフェンスを蹴る力も増していった。

(今日は出直すか……)

櫛田の裏の顔を見てここに留まるのは不味いと本能と理性、両方が訴えていた。

吐き出した内容から堀北を嫌っているのは疑う余地がなく、堀北から聞いた心象が正しかつたと裏付けが取れ、そんな堀北に近づいたため綾小路に近づいた理由は間違いなく穏やかなものじゃないのは想像に難くない。

(しかし今の所は坂柳に対する唯一の情報源でもあるし、後日話をし……それで櫛田とのことは終わりにしよう)

早々に結論づけて去ろうとした時、

「誰?!」

櫛田の声に心臓が跳ねるが、その視線は背後にいる綾小路でなくフェンスの向こう側の海に向けられていた。

堀の下から片手をかけて牛井嬰兒が姿を現す……反対側の手にはなぜかぐつたりとしたネズミが握られていた。

全く、久しぶりに十二戦士たちを偲びながら黄昏てたのに下品な声で台無しだ。

柵に手をかけて登ろうとしたらネズミが目に入り捕まえ少し力を籠めたら意識を失った。

さて、声の主は誰かと思ってたら、なんとクラスのアイドル的存在、櫛田ではないか——さっきの内容からして相当ため込んでたんだな……同情はしないけど。

「……………ここで、なにしてるの?」

「少し昔を懐かしんでな。それにしても凄い迫力だったな、クラスのアイドルの裏の顔」

とぼけるのも無理だろうから思ってた通りのことを言う。櫛田は顔を顰めた——その顔も普段の明るくて優しい印象からほど遠い暗く陰のある陰惨な印象……ホントに同一人物か?

「何、脅迫でもしようっての?」

しかも思考もかなり後ろ向きで声も攻撃的ときたもんだ。優しくあしらって、お茶を濁すのもいいが、今日ここに来たのは俺だけでは目的達成が困難でどうしようか思案するためでもあり、櫛田の表の顔は俺の目的にはとても好都合。

「まあね。お前の表の顔を持って頼みたいことが有ってな」

「……………普通、そういうことストレートに言う?大体、アンタが何言っただって私が言いがかりだっただって言えば誰も信じてくれないわよ」

櫛田の声は確信めいている。

まあそうだろうな。普段の行いが違う——誰にでも優しく好かれ慕われている櫛田と滅多に爆発しないとはいえ荒い気象を持ち怪しげな特技でクラスメイトをモルモツツ扱った俺——どちらを信じるかは自明の理だ。

「アンタの特技で今見たことを忘れますって言うてくれた方がまだ、話をする気も慣れたんだけどな」

残念だと言わんばかり櫛田は近づいてきて両手で俺の空いている手を取って自分の胸に押し当てた。

「おいおいおい、色仕掛けで口止めか?」

……なんて温い展開な訳もないよな。この暗い表情からして俺——じゃなくても誰に対しても引くつもりない暗い根性が目に浮かぶようだ。

「明日の朝に退学して——それとも警察に突き出される方がいい？」

「交渉の余地は無しか」

「堂々と脅迫するなんていう奴とどんな交渉しろっていうのよ？」

正に正論。一度屈すれば際限なくたかってくる——そんな危険人物を放置するなど論外である。実に理にかなっているが、言うとおりの日には俺の命はなくなる——そして、こんな女の為に投げ出すほど俺は命を安売りするつもりはない。

「で、返答は？」

櫛田は手を胸に押し当てたまま渴いた瞳で問う。

さしずめ高校最後の夜ぐらいいい思いをさせてあげようと言う気遣いのつもりもあるかも知れないがそれは櫛田自身の首を絞めることになる。『水瓶』モードを発動、櫛田の体内の血流を操作し重要臓器に血が回らないようにした。

「……があー……………」

櫛田は掴んでいた手を放してもがき苦しんで倒れていく。

その姿を見ながら、しゃがみ込み櫛田の頭に手を乗せる。

「悪いけどさ。俺、お前如きの手拍子に乗ってやるほど、お人好しじゃないんだよね」

「……………た、たす……………」

たった今、脅迫して俺に助けを求める……ま、それだけ苦しいってことか——折角だからなんで苦しいかくらいは教えてやるか。

「冥途の土産に教えてやろうか。」

今、お前の体内の血流を操作して疑似的に多臓器不全に近い症状を出している。このままだと朝には廃人になる」

淡々と絶望的宣告をする姿に櫛田も戦慄する。

「そうなりたくないなら、俺と話をしよう。イエスなら瞬きを——」
言い切る前に櫛田は苦悶の表情で目を閉じ、また開けようと藻掻く。

頭から手を離すと櫛田の呼吸は落ち着き、

「ガハッ、ガハッ……」

咳込みながら俺を化け物のような目で空恐ろしく見る。

「あんた……なんなのよ？」

「お前からの質問を許した覚えはないが」

再び手を見せると櫛田は声もなく怯え、離れようとする。恐怖の鮮度は最高潮、今ならどんな要求でも通りそうだな。

「わ……私が死んだら、アンタ……殺人犯よ………退学どころじゃ

後ずさりながらも負けじと反撃して来た——思いのほか根性あるなあ。いやあ正直見くびってたよ。

ならば俺もそれにこたえて、いずれ実行するかもしれないプランを披露しよう……ただ語りたいわけじゃないぞ。

「そうだな。その時は、」

片手で持っていたネズミの首を軽く折り地面に捨てる。

一見すれば次は自分だという警告に思えるだろうが、落ちたネズミは首をおかしな方向に向けたまま走り出し櫛田の前に……『死体作り』ネクロマンチストを実践してみせたら顔色の悪さが真っ青から真っ黒になったように影が増した。

無理もない——俺だって本来の持ち主である『卯』と戦場で対峙するのは一番避けたいんだ。一介の女子高生が見てこの程度で済んでいるだけ大したものだろう。

「俺さ。殺した相手と“お友達”になることができる特技があるんだ」

理解の追い付かない展開に櫛田の思考は恐怖やパニックを通り越してしまい、もう声も出ない。

そんな櫛田に構わず説明を続ける。

「だから捕まる前に——そうだな、まずはDクラスのみんなを“お友達”にしてそこから学校全体に輪を広げていこう。ああ、櫛田はさっきの状態のままが一番最後に“お友達”してそれを特等席で見せて

あげよう」

学校全体を人質に取っていると洒落にならない宣言である……しかも自身が引き金になってそれが起こるなど、精神が粉々になってしまふどころじゃすまない。なんだかんだでちゃんと良心があるんだ。それでも、もうすでに櫛田の心は限界ギリギリでいつ決壊してもおかしくなさそうだから、いい加減に本題に入ろう。

「そう言う訳で櫛田——俺の頼み、聞いてくれるか？」

櫛田はブンブンと首を縦に振った……ま、それ以外の選択肢もないか。

「じゃあ、質問。生徒、特に一年でこの学校の関係者の身内がいたりはしないか？」

「……そ、それなら………Aクラスの坂柳………が理事長の………娘だつて」

なんと、あの娘の名前がここで出るとは、これはまた因果なものだ。しかも理事長の娘と来たものだ——存外、俺のことも知ってるかもしれないなあ。

改めてお近づきになる必然性が出来た——がこの時の俺の心に浮かんできたのは大戦前夜に友誼を交わしていた二人の女戦士……やはり恋心ではないと実感してしまい複雑な気持ちだ。

「坂柳ね……彼女についてはどこまで知ってる？主に交友関係——もちろんさっきの質問に沿った意味で？」

「お、同じクラスの……あ、綾小路………がお、おさな………なじみ………つて………」

「何、綾小路が？意外に近くに居るもんだな」

近くの物陰の気配は最初から気づいていたので説明の最中、遠回りにネズミを走らせて誰なのかを確かめたら綾小路その人——多分、櫛田に用があつたんだろうけど、あつさりと売られて堪ったものじゃないと顔に書いてあり冷や汗が浮かんでいた——かと言って追い詰められている櫛田を責めるような目を向けていない。

そんな綾小路に構わず時は進んでいく。

「じゃあ、あとは綾小路に聞くとするか。もう行つていいよ」

言った瞬間に櫛田は一目散に駆け出した。

おお、火事場の馬鹿力か——猛烈な速さだ。

あつという間に櫛田の姿は小さくなつていき、さつきまでいた場所には櫛田の物と思われる学生端末があつた。

「やれやれ、世話の焼ける女だ」

学生証を拾い上げ少し見て手を当てている——ちなみにネズミの目から見える綾小路はもう冷や汗が引いており立ち去ろうとしたのか振り返つたら目が合つてしまった。

ま、バレたならそれはそれでいい。

「こんばんは。覗きが趣味とは感心しないな綾小路」

振り向きもしないまま声を発すと観念したのか物陰から出てくる綾小路。

立ち上つて櫛田の端末をポケットに入れ振り返る。覚悟を決めた顔をしてるかと思いきやいつもと変わらぬぼんやりとした目のままで、ちよつと拍子抜けだな……それともポーカーフェイスかな？ そうだつたらいいなあ。

「こんな風にちゃんと話すのは初めてだな」

「そうだな」

まずは世間話のように切り出し、平然と答えたため混乱はなさそうだ。なら単刀直入に言つても問題はないだろう。

「話は聞いてよな？ なら俺の聞きたいことも言わなくてもいいよな？」

「ああ、最初から聞いてた——で済まないが櫛田が言ったのは出鱈目だ。オレは坂柳とは幼馴染じゃない……彼女のことが知りたくて櫛田に嘘をついたんだ」

櫛田に矛先を向けられないようフォローを入れたのか、嘘をつける状態じゃなく発した情報に間違いと言つたなら心象が悪くなると判断したのか出た言葉に嘘はなさそうだった。

でも内容は気になるな。

「ほう、お前もか？ で、なんで彼女のことを一目惚れでもしたのか？ 簡潔に答えて欲しいんだが」

「オレたちは幼馴染って関係じゃないが、向こうはオレのことを知ってるみたいだな」

綾小路の返答は淀みなく俺に対しても誠意を見せており少なくとも最後まで聞くには値する。

「オレの平穏な学生生活をどうにかする相手なのかがずっと気になってたんだ」

この答えには謎かけのような挑戦が垣間見える。俺に考えて答えを出せってか？

そうして手柄に酔ったのに付け入って自分のペースに持つていこうって算段か？

「俺は簡潔にと言ったが」

と言ってやっても良かったが、ここはあえて乗ることにする。

この状況下になってまで出た『平穏が学生生活』からして綾小路の平穏はこの学校限定であり、それがないと平穏とは無縁になってしまいう日常……実は戦士だったりとか？

そして坂柳の方は知っていると櫛田から聞き出した彼女が理事長の娘であると言う情報——国家運営による学校の理事長の娘が知っているというなら、綾小路も近い立場にいることは突飛な話ではない……合わせてみると、有力者側だったりするのか？

実は俺の監視役……いや、今日までクラス全体に目を光らせていたがそんな素振りには欠片もなかった。消去法で考えられるのは俺同様に訳あり、それも国家レベルの事情が絡んでいる生徒であること。

つまりは自分を売りこんでいるのか——同時に俺が組むに値するかも値踏みしている。

「俺はあの娘をどうこうする気はないぞ」

「だが用はあるんだろう。当面の利害は一致してると思うが？」

「俺は少し話がしたいだけ——お前が求めるほどの労力を割くには全然足りないと思うが？」

「ならば今度はオレを試してみたらどうだ——嬰兒」

綾小路がそう言ったと同時に『寅』の酔拳に倣って踏み込んで蹴りを放つ。

「?!」

ほう。やつこのこととは言え防御したか——だが体勢が崩れて隙だらけだぞ。無防備な顔面目掛けて拳を振り下ろすが届く前に綾小路の拳が腹に入る……カウンターだ。

だが想定内——『寅』から『午』に切り替え防御術『鎧』は発動済み。よって入った拳の方を痛め綾小路が苦悶の表情を造る。

それでも俺の拳を回避しようと首を逸らそうとするが、そもそも俺は当てるつもりはなく綾小路が倒れると拳は同時に地面につき——ここで『申』の『仙術』により地面の一部が窪んで塵状にまで砕かれる。そのまま肘を曲げて首を抑え込もうと見せたら、

「参った。降参だ」

あつさりと負けを認め両手を上げようとしたので解放する。

上体を起こした綾小路に構わず俺は大気に散った塵を集めて再び地面に手を付くと窪んだ箇所が元通りになった。

「この目で見ても信じられないな——お前、一体何者なんだ？」

ニュアンスからして答えを期待してなさそうだが、

「お前の知らない外の世界の猛者たち——それを半端に受ついで出来損ないさ」

皮肉を込めて言ってやる——どっちが強いかはもう分ってるはず無策で危険に飛び込む狂気は持つてはないだろう。

だが興味は益々、増したようでこれまでにない光が綾小路の目に宿っていた。

「訳が分からないがそれはいい——ので改めて交渉したい。お前の望みを聞き代わりにオレの要望も叶えて欲しい。勿論、一蓮托生じゃないし条件が合わなければ無理強いはしない」

……なにが食指を動かしたのか知らないが、意外にしつこいな。つかか目的と手段が入れ替わっているように感じるのは気のせいかな？

なんにしてももう夜も遅いし、

「ま、考えておく……そうだな、次の中間が終わるまでには返答しよう」

「分かった」

先送りにして今夜はお開き、別れてすぐ俺は「ふああ〜」と欠伸をしながら部屋に帰った。

お友達が・・・

嬰兒と別れた後、綾小路は真っ直ぐ寮の部屋には戻らず、夜風に当たりながら痛めた右手をさすっていた。

(鉄骨……いや、それ以上の硬度だった。外の世界の猛者か——あの異常チカラがあれば)

綾小路にとつての平穩はこの学校内だけであり、だからこそ何が何でも退学は回避して普通の学生として三年間を過ごし卒業したかった。

その後は、行く当ても頼るべき相手もない彼は元の場所に戻り、父親の敷いた道——指導者として道を進むことは消極的ながらも諦めていた。

(だが、牛井アイツ嬰兒のチカラの一端だけでも強力——まだ見ぬ全てをオレの制御下に置くことができたなら……)

相手を眠らせる限定の催眠術、殺した死体を使役、自身の強力な格闘能力、非常な硬度を持つ肉体、地面を塵にして再び元通りにする超能力としか言いようのない非常識なチカラのオンパレード……：……：おそらくは、まだまだ見せていないものもある——そんな気がしてならない。

(出来るだけ早く全てを把握したいな……その上で屈服か籠絡できるのが理想だが、それは無理と思っただ方がいいな)

非常識な能力を有しながら嬰兒には一片の自惚れもなく隙も見せなかった——綾小路が知らないだけで、嬰兒だけが特別な存在と言う訳ではないのだろう。

まだ見ぬ未知への好奇心も相まって、益々もって嬰兒(の能力)が欲しくなる。

(信頼を築くにしろ築けないにしろ、まずはアイツが欲しがっている物を与えるところからか——そしてオレの考え通りなら、かなりの割合で目的が被っているはず)

執事の勧めで入った高度教育高等学校。

この学校なら権威あある父親男も手が出せないと話に乗った。しかも

自身がいた白い施設——ホワイトルームが停止している現状も相まって入学の難易度が格段に下がっていて、あの男も綾小路が与り知らぬ事態の対応で他にかまけている余裕がないとも言っていた。

牛井嬰兒は坂柳有栖……正確にはこの学校の理事長の娘に興味を持っていた。

そんな自分と明らかに異常な嬰兒せいとが同時に入学……おそらく嬰兒こそがホワイトルーム停止の要因なのだろう。

（根拠は希薄だが、そこから見えるこの学校はオレにとっての避難シェルターで嬰兒アイツにとつては座敷牢……おいそれと関係者に接触できないから、近い立場から何かを探ろうとしているって所か）

坂柳が綾小路を知っていたのも父親絡みと考えるのが妥当であり、背景が見えてくれば格段に不安感が低くなった。

いずれ接触してきても訳が分からないまま対峙しなければならぬ心配はなくなった。

その時に嬰兒を同席させ、自分をどうこうするつもりがあるのか問い質し、もしそうなら見返りとして嬰兒の望みを要求し、その貸しで嬰兒にこちらの要求を通す——使えるのは一回切りかも知れないが、始めの一步としては悪くはない。

（まあ、そうなるとしても中間が終わってからか、来月になってからだろう）

考えを整理した綾小路の目は他の何にも例えられないくらいの暗い輝きが宿っており、表情も冷たく凍り付いているに近かった。

痛みも少し引き、そろそろ部屋に戻ろうとした時、

「鈴音。ここまで追ってくるとはな」

寮の裏手から声が聞こえ、隠れながら見てみると堀北が壁に押し付けられている場面に遭遇した。

「もう兄さんの知っている私ではありません。追いつくために来ました」

奇妙な逢引きだもと思ったが全くの見当違いだった。しかし兄妹喧嘩にしては一方的過ぎて先程の嬰兒とのやり取りが脳裏をかすめた。

「追いつく——Dクラスになったと聞いたが何ひとつ変わっていないな。俺の背中をただ見てるだけで、何も分かっていない。この学校に来たのは失敗だったな」

「すぐにAクラスに上がってみせます。絶対に——」

「無理だな。お前では無様に足掻く姿を晒すだけ……わざわざ俺に恥をかかせに来たのか？」

まさに取り付く島もない——堀北を押し付けた手を振り上げて掌底を打ちこむ構えを取ろうとする。

それを堀北自身は不安そうな顔をしながらも無言で受け入れようとする。しかし、撃ち込まれる前に堀北兄の手は何者かに掴まれた。

「——何者だ、貴様？」

「あ、綾小路くん!?!」

鋭い眼光を向けた兄と驚いた顔をする妹。

「兄妹喧嘩にしてもやりすぎだぞ」

「お前も盗み聞きとは感心しないな」

睨み合いを続ける綾小路と兄に堀北が絞り出すように言った。

「やめて、綾小路くん……」

洩々と手を放す綾小路だが、その瞬間に拘束の裏拳が襲い掛かった。咄嗟に身を引いて避けると急所を狙った蹴りが放たれ、半身にしてかわす。

「?!」

二度に渡り攻撃を外され疑問の表情を造った堀北兄は右手を開いたまま伸ばしてくるが、綾小路ははたいて飛びのき間合いを取る。

(掴まれれば投げ飛ばされてた……まあ、どの攻撃も嬰兒に比べれば欠伸が出る速度だったが)

ついさつき完敗した殴り合いを思い出しながら、目の前にいる堀北兄は常識内での優秀な人間であるを見て、改めて牛井嬰兒の異常性を実感する。

「いい動きだな。何か習ってたのか？」

興味を持った目で問われる。

「まあ、色々……そちらもかなり強いな？」

警戒していた時の気が抜けきっていないのか、答えたら問い返してしまった。

「空手と合気道——合わせて九段だ。中々、面白そうな男だな」

堀北兄はゆっくり妹に目を向ける。

「鈴音、お前に友達がいたとは正直驚いた」

「彼は友達なんかじゃありません」

「相変わらず孤高と孤独を履き違えてるな——上のクラスに上がりたのなら死ぬ気で足掻け」

そう言つて綾小路の横を通り過ぎて去っていった。

静寂が訪れて座り込み俯く堀北。

綾小路はかける言葉が思い浮かばず立ち去ろうとしたが、

「最初から見てたの？……それとも偶然？」

堀北に問われて立ち去るタイミングを見失う。

「偶然だ。夜風に当たってたら声が聞こえてな——立ち入るつもりはなかったんだが」

「アナタのこと……よくわからないわ」

バツが悪そうに言う綾小路に堀北は俯いたまま言った。

「堀北も普通の女の子なんだな」

綾小路から素直に思った感想がでたら堀北は刺すような視線を向けた。

「戻りましょう」

立ち上がり歩き出そうとする堀北に今度は綾小路が声を掛ける。

「いや、ついでだから話させてくれ。次の勉強会だが榎田は来ない——代わりにえ……牛井を誘いたいんだが？」

「前者はいいけど後者は理解できないわね……もしかして今日のことで私に変な気を？」

榎田の参加は最初から反対であり、嬰兒ことも全く知らずに思わぬ醜態をさらしてしまった自分に挽回の機会を与えようとしているのかと不快な睨みを向ける。

「そうじゃない。悪いが次ので堀北の依頼は完了とさせてほしい……ついさつき牛井と共通の目的を見つけてな。オレたちはそつちに集

中したいんだ」

綾小路は首を横に振って要点を話す。

「……そう、まあ、いいわ。正直、手応えがなさ過ぎてどうしようかと思ってたし——この際だから彼らを切り捨てるのも考慮に入れるわ」
「もう諦めるのか？」

堀北は軽く息を吐いて了承するも話の流れが予想外の方向に向かい、綾小路は自分の提案で勉強会時の下らない一幕を思い返させてしまい——悪くないと思っていたのは自分だけだったかと、提案を破棄しようと言おうとするが、その前に堀北は饒舌に語る。

「勘違いしないで恥かいたとか、そんな理由じゃないわ。私は私のためにAクラスを目指す。その為に開いた勉強会よ——成果が見込めないなら、マシな生徒を良くしていく方が現実的だわ」

「で、お前の眼鏡に適わなきゃ、また切り捨てるのか？」

責められているように感じたのか堀北に再び睨まれる。

「クラスメイトを見捨てる人間に未来はないなんて寝言を言うつもり？」

「いいや、これは突き詰めれば須藤たちの問題だ。お前がそうしたいなら止めるのもありだろう」

あつさりと肯定され堀北は再び歩き出そうとする——その肩を綾小路は掴む。

「まだ何かあるの？」

足を止めて不機嫌に振り向くが、普段の堀北なら綾小路の手を振り払って反撃を加えている。それが無いのは彼女自身に迷いがあり止めて欲しい願望もあるのだろう——十中八九、無自覚になのだろうが……。

(まあ、乗りかかった船だ)

そう心の中で呟いて綾小路は言った。

「堀北の言うこと間違っはいいないが正しいとも思えん」

「アナタ、何様のつもり？」

「オレだって正解なんて分からん。だが、お前の欠点なら分かる」

堀北は鼻で笑って言ってみると向き直る。

「お前の欠点は他人を足手まといと決めつけて直ぐに突き放してしま
う——相手を見下すその考え方が、お前がDクラスに落とされた理由
じゃないのか」

「……言いたい放題ね。今までビクビクしていた癖に別人のよう——
さつき牛井くんと会ったって言ってたけど、何を吹き込まれのかしら
？」

「アイツなら苗字で呼ばないでくれと言いそうだな」

「そう、ならアナタじゃなくて牛井くんに聞くことにするわ。それ
じゃ」

これ以上の会話は無意味と判断したのか踵返してエレベーターに
入っていく堀北を綾小路は眺める。

（その調子で怒らせて少しでも嬰兒の本音とチカラを引き出してくれ
るのを——期待しないで願ってるよ）

今の綾小路にとって最早、坂柳有栖と牛井嬰兒以外はいつでもい
い。

未来の希望が僅かでも見えたなら使えるものは使う。全ての人間
は道具でしかないのだから——最後に綾小路清隆が勝つ為の。

「ふあああ」

欠伸をしながら向かった教室で俺は櫛田を探す。

昨夜、物は試しでやってみた事は上手くいった……俺自身は使えな
かったらどうしようかと思っていたんだが、お、居た居た。もしかし
たら休んでるかもと思っていたんだが、やはり根性はあるか。

「……………」

もつとも俺を目の端で捉えて僅かに冷や汗が浮かんだが気にしな
いで近づいて声を掛ける。

「櫛田、これお前のだろ」

落としていった学生端末を差し出すと、

「あ、拾ってくれてたんだ、ありがとう」

笑顔で礼を言ってきたが冷や汗が張り付いているぞ。第一、こんな大事な物をなくして気が付かなかったなんて既に普通じゃないと言ってるも同然、大半のクラスメイトは気付いていないが、平田あたりは心配そうに近づいてきて声を掛けた。

「櫛田さん、何かあったの?」

「えー、やだなー、別に何も——」

「実は昨日の夜に櫛田と神について議論してな」

櫛田が誤魔化そうとするが、その前に俺が話に割って入る。

「え、カミ?」

「髪って、櫛田さんイメチェンでもするの?」

平田の後ろにいた軽井沢が素っ頓狂な声を上げ、取り巻きの佐藤が勘違いして問いかけるが櫛田は返す言葉が思い浮かばないのか、困った顔で固まってしまう。

「こっちの神だよ」

俺は手を合わせて合掌し拝むような仕草を示す。

「なに……ひよつとして綾小路くんにも説法でもしたの——ならとも陳腐ね」

予想外の所から声がして見ていると堀北が澄まし顔でおり、隣の席の綾小路はいつものポーカーフェイスのままだが横目で堀北を見ている——あの後に何があったのやら?

会話を櫛田に戻しても良かったがまだ立ち直っていないようだし、ただ待ってるのも何なんで堀北近くに行き言った。

「堀北は神を信じないのか?」

「少なくとも私には必要ないわ」

「そんなんで幸せか?」

「私の幸せをアナタに……ましてや神なんて居るかもどうか分からない存在に決められるなんてゴメンだわ」

不機嫌を隠そうせずに質問に答えてくる堀北——それにしてもどうにも言葉が刺々しいが俺、何かしたのか?

「信じることで救われるとか言うなら、お金でも権力でも好きに信じればいいじゃない」

「その理屈なら神を信じても良さそうだが」

俺は俺で引く気はないと示すと堀北が睨みつけてくる——ああ、喧嘩になるなら『牡羊』の催眠で、

「ちよ、ちよつと落ち着こう二人とも」

と思つてたら平田が間に入つてきた——丁度いいな。

「平田はどうなんだ、神を信じるか？」

「え……」

返答に詰まる姿を見ながら、それでもせかさずに無言のままどう答えるかを待つ。

クラスの和を重んじて玉虫色の答えを口にするか、この場は俺を建てて思つてもいけないことを述べるか、堀北を建てながら俺を窘めようとするか？

時間にして数秒もないはずが途轍もなく長く感じる沈黙の後に平田の口が開く。

「ごめん……僕の心は神を信じることを受け入れられない」

ほう。ここまで偽らずに俺を否定してくるとは……。

「そっか、やっぱり平田とは生涯友達になれそうにないな」

俺の台詞に不穏な空気が流れ、クラス内が一気に緊張してきた。気の弱い奴らやこの前、俺に楯突いて、あつさり返り討ちにされた三バカなんかは固唾をのんで俺と平田を見ている。

「だが誠意をもつて正直に答えてくれたことには俺も敬意を称す。友達にはなれないが、良いクラスメイトではいよう。改めて三年間、よろしく」

握手を求めると平田をはじめ周りの緊張も一気に抜けて、机に突っ伏す者、安堵に讚えあう者もいるなかで平田は心底嬉しそうな顔で手を差し出して握手に応じた。

「ああ、それで十分だ。よろしく頼むよ、嬰兒くん」

でも、これで話はお終いとは行かない。

「ちなみに櫛田も神を信じない口だそうだから、堀北とも仲良くできそうだな」

話を再び櫛田に向けると肩を小さく震わせた。

「え、いや、別に……そんなことは………」

「いい機会だろ——櫛田だって人の子なんだ。ストレスだって溜まるし、弱音や泣き言を吐きたい場面もある。お前らも櫛田が優しいからって甘えてばかりいないで、偶には櫛田を助けたり、頼つてもいいくらいはしてやれ。それでこそ『お友達』だろ」

「!!?……………うん……………そうだね」

俺の勝手なフォローに余計な事を思っていたようだが、最後の『お友達』に顔を青くして思わず肯定してしまったようだ。

でも事情を知らないクラスにはイメージが崩れて嫌われると思つたのだろう。

「ああ、ごめんね。櫛田さん……嬰兒くんの言う通りわたしたち確かに甘えてた」

「これからはあたしたちのこと、頼つてほしい……櫛田さんみたいには出来ないかもだけど、それでも少しは力になれると思うから」

櫛田と特に仲が良かった井の頭と王が近づいて『大丈夫だよ』と言ってくる姿に櫛田は涙を浮かべる……もつとも何に対してかは分かりかねるが。

そして俺以上に分かってないクラスの奴ら、特に男子は自分たちも力になるぞと櫛田にアピールしまくっている……下心見え見えで、また櫛田のストレスが増加しそうだな。

「嬰兒、神を信じる者同士で頼みがあるだが」

顔を向けると綾小路が……ただの方便だったんだが、なんともノリのいい奴か？

「言ってみな」

「言うまでもないかも知れないが櫛田とは信じるものの違いで意見が割れて喧嘩しちまってな……代わりと言っちゃなんだが今、堀北とオレがやってる勉強会に参加して欲しいんだが？」

「え、綾小路……櫛田ちゃんと喧嘩したのか？」

てつきり皆、櫛田に言ってると思つてたんだが池が聞きつけて話に入ってくる。

「それでなんで、う……嬰兒なんだよ？」

続くように山内も——こいつらもメンバーとするなら須藤もか。
そう思い目を向けると不機嫌な顔で睨み返される。

「なんだよ。言いたいことが有るなら言えよ」

ハッキリ言って歓迎されていないし、俺自身も赤点組コイツラの尻ぬぐいなんてしたくない……………綾小路め、何を考えてこんなことを？

「嬰兒が見てれば緊張感が高まって、いい刺激になると思ってたな。」

それに嬰兒がいると例え喧嘩になりそうになってもサツと終わりそうだし…………正直、オレじや止めきれぬ自信がない」

尤もらしいことを並べながら、俺と近い間であり自分が下であるときり気なくアピール——こんなことで俺に取り入れると思ってる…………訳もないよな。

これは昨夜の交渉の続き——この誘いに乗れば俺の望みを聞くと、まあ、こんなところかな。

……………………メリツトが思い浮かばないから断ってもいいが、次から次に来られたら面倒だし、明確に断るだけの理由も無いか。

「分かった。いつだ？」

「取りあえずは昼休み、昼食が終わったら図書室で」

「なら昼飯を奢ってくれ、そろそろ苦しくてな」

「いきなりか。オレもそこまで余裕ないから高いのは勘弁してくれよ」

早速、要求してみる軽い要求同士で貸し借り無し。勿論、後で付け入られないように安い定食にするつもりだ。

よしんば組むとしても主導権は俺だ。

それとも俺が心地よく踊りたくなる手拍子を奏でられるか？お手並み拝見と行こう。

「ねえ、それ、私も混ぜたっていい？」

嬰兒くんに話したいことが有るし、綾小路くんとも仲直りもかねて私もポイント出すし」

そこに櫛田が笑顔のまま言ってきた。

平田と堀北とひと括りにして友達になれないとしたにも関わらず諦めない姿に皆は流石だと感心し、昨夜の一件を知っている綾小路は

驚くが非難の目を向けることもなく冷めた目で俺が決めていいとこつちを見る。

「ああ、いいぞ」

ちなみに俺は榊田の動機は分かり切っているので了承する。

昼休み、賑やかカフェで俺と綾小路、榊田は同じテーブルにつき、手ごろなメニューを頼んでいた。

ちなみに俺は1ポイントも出さず、綾小路が一割、榊田が九割の振り分けだったりする。

「まずは綾小路くんに謝る。」

「ごめんね——こいつに怖い目にあわされたの想像がつく」

頭を下げる榊田に綾小路は冷めた目のまま応じる。

「ああ、殺されるかと思うぐらいの力の差を感じた」

恐怖に駆られたとは言え、あつさりとしたのだ。この支払いもお詫びの印……だけではなかったりするんだな。

「で、聞きたいんだと——これはどういうこと?」

内心は兎も角、外面は冷静を保って端末を差し出すと殆ど10万——この昼飯代しかポイントが減ってないことを示しており、綾小路も興味深そうに俺を見てきた。

「俺の特技のひとつだ。まあ、遠慮なく受け取れ」

『亥』の能力『湯水ソニックロードのごとく』の応用、機関銃じゃなくて電子マネーに適応できるか、ずっとやってみたかったんだよな。

「特技って……正規の手段じゃないってことだよな?こんなのがバレたら——」

「退学どころか逮捕されるかもな」

上ずった声の榊田に綾小路が代弁するように言ってきた。

ああ、だから試せなかった——しかし俺の敵に回ったんだったら遠慮は無用だ。

だから——

「バレないようになに頑張れ、お前なら難しくないだろう」

交友関係が広く、優しくて人気のある櫛田なら大量のポイントも貸してもらったと言えばまず疑われないだろうし、ばら撒く用途も苦じゃないだろう。

それでもバレた時のことを考えるのも人間だつたりするから、

「アンタのことは何も言わないし邪魔もしない。だからこのポイント無しにしてよ」

「ああ、それは無理だ。うまく活用してくれ」

犯罪の関りをチャラにして欲しい懇願をあつさり切る。まあ、実際に増やすことは出ても逆は出来ないしな。

「櫛田。ポイントは有って困るもんじゃない……確かに方法は異質だがシステムの不備だと言い逃れが出来ないこともない。手取り早く元の金額に戻すようにオレも考えるから、そう悲観的なるな」

「あのさ、綾小路くん……私が言うのもなんだけど裏切った相手に手を差し伸べられて簡単に信じられる？」

おつしやる通り、裏切ったのと窮地を救ったので籠絡しようと打算を働かせていると考えるのが妥当——追い詰められても櫛田の思考はそこまで鈍っていない、普段からストレスを貯めこんで耐性ができているのか？世の中、何が幸いするのか分からないものだ。

「別に信じなくてもいい——ただオレの予想では割とすぐに大量のポイントが入り用になる。その時に普段通りに協力してくれれば面倒がなくていいんだ」

「訳、分かんない？」

それは俺も同感だ——意味深なことと言って何を企んでいるのか？早くも新しいアピールか？そうだとしたなら、お手並み拝見と行くか。

「その時が来れば分かる。今はただ、オレの言ったことを胸に留めていてくれ」

そう言っただけで食事を始めたので俺も少しゆっくりと櫛田も続いた。

それにしても凄い女子の多さだなと思っただけなら見知った顔が、

「はい。高円寺くん、あーん」

「ハハ！やはり女性は年上に限るねえ」

高円寺を囲んでいるのは一人二人じゃない言うことからして上級生……一体、何に群がっているのやら？

ま、大体の察しは付くから普通なら呆れるか僻むのだが、親の七光りで満足する玉じゃあるまい——羊の皮をかぶった狼ならぬコヨーテ、そう思わせた俺の期待を裏切らないでくれよ。

昼食を済ませて櫛田と別れ、俺と綾小路は図書室に向かう。

遅れては後が煩いと少し速足で向かったが綾小路は遅れずに付いてきており、予定より早めに到着し、堀北たちはまだのようで、どうせならと見渡した際に見つけたスタイル抜群のストロベリーブロンドの美少女がいる席のすぐ隣を確保し、時間通りに堀北と須藤たちは合流した。

遊ぶ金、欲しさに〇〇①

勉強会は俺の予想以上に軟化した雰囲気であり、堀北は普通の勉強では効果が薄いと新しい方法を考案したこともあって、思ったよりも悪くない時間だった。

時々、池と山内が俺と堀北を交互に見て忍び笑いをしているが何があつたのやら。

だが悪くないだけで良いとも言い難い——正解するたびに騒がしく得意がり、俺が煩いと指を向けて大人しくさせる。

どうしてこんなお守りをしなくちゃなんのだと、退屈がてらに隣の席の美少女を視界に入れながら机に手を置き『地の善導』を発動——流石に何を書いているかは分からなかった。

でも、ちよつと気になって見てみる——教科書からして同じ一年、しかも勉強している教科も同じか、もう少し集中してみるか臆気でも内容と学力が分かるかも知れないし……ん？

クラスが違うからか？隣の女子が書いているテンポと合致する問題が出てこない……いや、繰り返すが実際に何を書いているのかを導き出せないし俺の思い過ぎしの可能性も十分あるが、もしもそうでなかったなら……。

考えがまとまらず、かと言ってバカ正直に聞く訳にもいかない。

「牛井くん、イラついているのは分かるけどもう少し我慢してくれないかしら」

イライラで知らないうちに貧乏ゆすりしてしまい、勘違いした堀北が上から目線で俺に注意してくる。

「こんなこととして意味あるのか？」

って俺としたことが、こんなミスは坂柳を前したときだけだったというのに。

「どういう意味だ。俺たちじゃ勉強するだけ無駄だった言うのか？」

俺の発言にカチンときたのか須藤が怒りを向ける。

「いや、そうじゃなくて……俺たち何か間違えてないか？」

「はあ、訳分かんねえぞ?」

さてどう説明しようか……不本意だが綾小路にフォローを頼もうか?と考えていたら隣の席の美少女が立ち上がった。

「君たち、図書室は静かに。そうじゃなくても喧嘩は良くないよ」

「あ、部外者は——」

「済まない、騒がせるつもりはなかった。須藤も誤解させたなら謝る。悪かった」

仲裁に入った女子に須藤は噛みつきこうとするが俺は素直に頭を下げて須藤にも謝罪した。

「ちつ、なんなんだよ?」

須藤は仕方なく座るが池と山内は突然の美少女の登場に鼻の下を伸ばす。

「時間は有限よ。下らないことは後にして」

堀北の冷徹な一言により慌てて教科書に顔を向ける二人。

「にやははは、ユニークな人たちだね。」

あ、私は Bクラスの一之瀬帆波。君は?」

「牛井嬰兒、1—Dだ。初対面でなんだが俺のことは苗字で呼ばないで貰いたい」

「オツケー、嬰兒くんかあ——気のせいかもしれないけど、さつきから見られてるように感じたんだけど?」

一之瀬の問いと一緒に勉強していたBクラスの生徒も俺に呆れた目を向け、同じDクラスの連中も「そういうことか」と言いたげな軽蔑の視線を送ってくる。

何が言いたいのかは物凄く分かり易いが、実態は違うと正直に言う訳にもいかないが、切り抜ける算段は実は付いていたりする。

「ああ、実は俺の知り合いに何処となく似てるなと思ってな」

「知り合い——私に似てるの?」

「誰よりも正しくあろうとし、誰よりも優しく、みんなと仲良くしたいって綺麗事を本気で叶えようとする聖人にして究極の平和主義者だ」

言葉を交わしたともいえないが、喧嘩の仲裁をしたときに見えた

『申』の面影は事実であり、嘘はついていない。

もつとも苦しい言い訳だと勘繰るだろうが、押し通すまで——来るなら来いだ。

「おお、確かに一之瀬さんと同じだ」

「知らないだけで結構いるのかな。そんな善人って」

「と思っただけで俺と反対側の一之瀬の隣に座っていた女子が肯定してほかの面々も続いた。

「もう、みんな持ち上げないでよ。」

「それと嬰兒くん、事情は分かった——よかったら連絡先交換しない、その人の話もつと聞きたいんだ」

「あっさりと俺の言葉を信じてフレンドリーに接してくる姿に益々『申』が重なる。」

「それは構わないが」

俺は端末を取り出し、連絡先を交換する。

「ちょうどそのタイミングで昼休みの終わりが来てしまい、そのまま解散となった。」

教室に戻る途中、池と山内が羨ましそうに面白そうにからかってきた。

「いや、ちゃっかり他クラスの女子と連絡先交換とは嬰兒もやるなあ」

「ホント、しかもあんな美少女……なあ、あとで俺にも連絡先教えてくれよ」

「やれやれ、別に教えても一之瀬なら怒らなそうだが……いや後ろにいた奴らが何を思うか——」

「そういうのはテストを乗り切った後にしてくれないかしら」
堀北が怒りを隠そうともせず話を一刀両断する。

「……………」

池と山内は早々に撤退し、必然的に堀北の怒りは俺に向く。

「牛井くんも決して楽観できる成績じゃなかったわよね。ナンパなんてしてる余裕あるのかしら?」

「だから誤解だつて——さっき言ったのは紛れもなく本心だ」

「聖人にして平和主義者に似ているんだっただかしら……正直、信じられないわね。人は誰しも打算的に動く者、仮にそうした行動をとる人がいても心の中では——」

「それ以上言うな」

「……………!?!」

あまりの不快さに殺意を込めて堀北を黙らせる。

見ていた三バカも息を飲み——綾小路はいつも通りの顔なれど、偉く注目している風に見える……おそらくとしか言えないが。

まあ兎に角、今は言つてやりたいことを吐き出したい。

「アレは嫌と言うほど過酷な現実を見て自身も危険な目にあつても尚、綺麗事を貫く女だ。

堀北、お前が知つている以上に世界はずつとずっと広いんだ。あんまり自分を過大評価してるんじゃないねえ」

感情的になつてしまったが、引く気も撤回する気もない。

こと『申』に関してだけはどんな侮辱も許さない——勿論、十二戦士は誰ひとり、野次馬が何を言つて汚される安い存在ではないが『申』は別格だ。十二大戦さえも止めようとした——出来るかも知れなかった唯一の戦士だ……ああ、出来るなら俺の学校生活と『申』が生き返るのを替えてもらいたいな。

「アナタの方こそ随分と偉そうね——でもそうね、悪かつたわ。アナタの知り合いを悪く言いそうになつたのは私の失言だわ。

でもあなた個人思い入れで勉強会を阻害したのも事実。私はAクラスに上がるのを目標に定めている。上のクラスを目指す邪魔は金輪際しないで貰いたいわ」

売り言葉に買い言葉か——あくなき向上心と自分の邪魔はするなね。須藤たちの面倒を見るのもあくまで自分の目的の為、善意などではないか。

分かつていない訳では無かつただらうが、ハッキリ言葉にされて三バカも少なからずショックのようだ。

しかし今ので大体分かつた。

「堀北、そのモチベーションじゃ、お前は真の意味で強くなれないぞ」

「……………」

「それはお前の正しきじゃない。誰か別の奴の正しき——その真似事だ。」

自分の為は大いに結構だが、本当に己の願いに即してるのどうか、少し考えてみたらどうだ？」

Aクラスになることで何を成したいのかは知らないが、肝心な資質を自ら潰している……それじゃ堀北の願いは叶わない。

そのことを堀北は気付いていない。

目的が達成できない理由が分からないままじゃ成長など見込めない。仮に奇跡が起きてAクラスに届いたとしても同じ——堀北鈴音は報われないだろう。

堀北の文句が来ると思ったが、堀北は綾小路を睨み、無実だと言わんばかりに綾小路は首を振っている。

心当たりがあるのか………ならさっさと気付け、そう思いながら俺たちは教室に入ってしまった。

「茶柱先生、確認したいことが有ります」

「なんだ綾小路？今朝から思っていたが随分と昨日までとは様子が違うな——まあ、それはいい。用件は手短かに頼むぞ」

「中間テストの範囲ですが……オレたちが聞いた通りで合ってますか？」

放課後の職員室の前でひとり尋ねてきた綾小路——その情報源は嬰兒の図書室で感じた違和感だったりした。

(嬰兒アイツの思い過ゴしであれ、そうじゃないであれ、これでまたひとつ能力が分かる)

綾小路としてはこうした機会はもう少し先になると想定していたが、早目に情報を得られるのに越したことはない——学校行事やクラス争いなど、どうしてもよかったが目的達成の手段として使えるなら話は違う。

その個人の打算まみれの行動は茶柱にとっては何であれAクラスを目指すのにやる気を出してくれたのかと期待を僅かだが沸かせた。「ああ、そう言えばテスト範囲が変更になったのを伝え忘れてたな。いやお前のお陰でミスに気付けた」

しかし、そんなことは御くびにも出さずスラスラと何かを紙に書いて綾小路に手渡す。

内容が変更になった出題範囲——勉強会でした部分は殆ど入っておらず嬰兒の思い過ごしじゃないことが立証された。

「悪いが綾小路から伝えて貰えないか。まだ十日以上あるから今から勉強すれば楽勝だろう」

教師としてあるまじきミスをしたにも関わらず悪びれる様子もなく、周りの教師も誰ひとり気にしてもいない………尋ねた綾小路も全く気にしていない。

（能力を聞き出す切り口が明確になったな——ついでのテスト範囲変更の情報が使えるかどうかを試してみるか）

と言うより茶柱の言うことも耳に入っていない。適当に相槌を打って職員室を出て嬰兒に連絡を入れる。

「お前の言う通り、テスト範囲が変更になってた」

『そうか……出来ればハズレであって欲しかったな』

「それよりも」

『分ってる。焦るな』

そのまま『E』の『地の善導』——地面からの振動を感知しソナーのように状況を把握する概要を話す。

ぶつちやけ嬰兒にとっては秘密でも何でもないためにあつさりと……。

「それで、この情報はどうする？そもそもはお前が気付いたんだし——」

『なんて説明するんだ？破棄しようが手柄を取ろうが綾小路の好きにしていい』

「範囲は聞かないのか？」

ツー、ツー、答える前に通話は切れており流石の綾小路もゾンザイ

な対応に心中に冷たい風が吹いた気がした。

(取り敢えず櫛田に伝えるのが順当だが……)

綾小路は端末を操作して次の相手に連絡を入れる。

何だろうか？

いつも通りに朝のホームルームを待っているだけなのにクラス中から嫌な視線や忍び笑いが向けられている——主に女子からは軽蔑交じりで男子からは軽蔑と好奇の半々で。

原因に全く心当たりがないからモヤモヤした気持ちでいたら、堀北が教室に入ってきて真っ直ぐに俺の席まで来た。

「牛井くん。まずはお礼を言っておくわ」

「お礼？」

訳が分からずにいると堀北は一枚の用紙を差し出して続けた。

「テスト範囲の変更の件——今でも正直、厳しいけど……もつと遅くを知るよりはマシだったわ」

昨夜の綾小路に頼んだやつか——堀北に伝えたのは、まあいいとして、どう伝えたんだ？

それがさつきからのこのモヤモヤの答えになっていると、無意識が言っている。

「ただ今回は結果的にクラスのメリットになったけど……同じ女として言うわ。気になるからって視姦する紛いな行為は絶対にやめてちょうだい」

おい、綾小路……貴様ああ——

「確かに一之瀬さんは同性の私から見ても魅力的な娘だけど、好意の向け方が100%間違っているわ。しかも……彼女の書いてるものまでチェックするなんて——」

ある意味、間違っていないが断じて視姦などしていない。

誤解だと言いたいが、そうすると範囲変更をどう知ったのかとなり、全く知らないのとぼけて綾小路の仕業だと言っても、一緒に同席

していた堀北には通じないだろうし、返って心象が悪くなるのは自明だ。

ならば――

「クラスの為になったことに免じて今回は胸に閉まっておくけど、今のままじゃ、アナタ絶対に一之瀬さんに嫌われるわよ」

「じゃ、堀北が間を取り持って正しい手順とやらを示してくれないか？ 恥ずかしい話、俺そういう経験皆無でさ――どうすれば綺麗に気持ち伝えられるのか、全く分からないんだ」

話の流れを俺の不快な行為の断罪から恋愛相談に切り替える。

無理に話を打ち切っても嫌なイメージは残り続けるし、徹底的に膿を出し切って更生しようとしていると示した方が、悪い心象を払拭しきれる可能性が高いだろう。

「……ああ……えっと、私もそういうのはちよつと……」

「同じ女として、堀北ならどうすれば好印象を示せると思う？ 是非、忌憚のないアドバイスを頼む」

結構真剣な目と声で言うところ堀北の余裕が目に見えて消えていき、クラスの目も俺への嫌悪から堀北が何を言うかに興味が移っていた。

見た目は文句なしの美少女だが、あれだけキツイ性格なら言い寄られたことなんてなさそうだし――さて、ホントどんな言葉が飛び出してくるのかな？

皆が期待を膨らませていると教室のドアが開き茶柱先生が入って来て、堀北は早々に自分の席に行った。

「ホームルームを始めるぞ。席に就け」

時間はどうやら堀北の味方だったようでなし崩しに話は中断されてしまった。

俺の希望としてはこのまま話がうやむやになって忘れ去られて欲しいな……ああ、後で一之瀬に告白をなんてことになったらどうしようかな？

昼休み、綾小路は端末に送られてきた「随分と面白いことをしてくれたな」と記されたメールを冷めた目で見ていた。

(嬰兒おまえが言ったんだぞ。オレの好きにしていって)

そのまま心の中で思ったことを綴り返信する。

(さて次は)

ある目的を思い浮かべ食堂に向かう。

適当な定食を頼み、混雑している食堂の中で目当ての定食を食べている生徒を探し出し近くに座る。

「先輩であつてますよね？オレ、一年Dクラスの綾小路って言います」

「……確かに三年だが、それがなんだ？」

興味なさげに無料の山菜定食を食べ続けるのを見ながら話を続ける。

「先輩もおそらくDクラスですよね？」

「お前になんの関係がある？鬱陶しい」

「交渉をお願いしたいんです。受けてくれればお礼もします」

トレイをもつて席を立とうとするのに待ったをかける。

「礼？」

「ええ、一年時の一学期の中間と小テストの問題——それを買取りたいんです」

「……いくら払える？」

「一万、頑張つて一万五千が限度です」

「倍は必要だ」

「それだと手持ちが……もう二万しか残つてないんで」

「だったら他也連れて来た来い。俺だけならそれで手を打てるが、生憎と問題は持つてない。心当たりのある知り合いに頼むことになるから、どうしても三万は必要だ」

「分かりました。じゃ、ポイントを出せる知り合いに連絡を入れますから少しだけ待つて貰えますか？」

綾小路は榎田宛にメールを送ると程なくして三万ポイントが送られてきた。

「お前……Dクラスじゃなかったのか？」

あまりの手際の良さに戸惑いの声がかかる。

「Dクラスですよ。だから、みんな焦ってるんですよ」

その返答に納得したのか、それ以上の追及はなかった。

赤点は即退学——それを身に染みて分かっているのだろう。おそらくだが容赦なく退学を突き付けられ去っていったクラスメイトを思い出したのか苦い顔をしていた……単に食べている山菜が苦いだけなのかもしれないが。

「ポイントは先払いだぞ」

「勿論、構いません。でも裏切ったら騙されてポイントを巻き上げられたと訴えますからね」

「心配するな。ポイントの譲渡は記録されるから、そんな真似されたらこっちもタダじゃ済まない」

終始、出てきた言葉に淀みはなく態度も明らかに慣れていて、この手の交渉が初めてでないことを窺わせる。

先の小テストでは明らかに高校一年では解けない問題が組まれており、急な範囲変更も教師たちは何ひとつ思うことなく平然としており、にも関わらず中間テストの説明時に茶柱は『お前たち全員が乗り切れる方法はあると確信している。実力者に相応しい行動をすることとを望む』と意味深な台詞を言っていた——須藤たちの学習態度や学力を把握しているにも関わらず。

導き出されるのは単純な勉強ではない裏技的攻略法があるということ。『実力者に相応しい行動』を加味すると広い視野で見た上で確実に赤点以上の点数を取る環境が用意されていて、それに気付けるかどうか今回の学校が測りたい実力——不測の事態でも乗り切れるかどうかなんだろうと。

綾小路はこの会話で建てていた仮説をほぼ確信し、ポイントの振り込みを手早く済ませた。

振り込まれたポイントを確認し山菜定食も食べ終わって三年の先輩はさっさと席を立った。

綾小路は自分の定食を食べながら待っていると端末に依頼したテストの添付画像が送られてきた。

内容は予想通り、先の小テストと全く同じであり綾小路の仮説が実証された。

(あとはこれをどうするか?)

昨夜同様に堀北に渡してもクラスのメリットになっても綾小路のメリットにはならない。

嬰兒に渡して出方を窺っても流石にもう無視はされないだろうが、今朝の一件で腹を立てていることは間違いないから、いい結果になる確率は低いだろう。

順当にポイントを払った櫛田に渡して広めてもらうのが無難か――綾小路の予想では後々にさらなるポイントが必要とされるからクラスの株を上げるメリットを与えておくのもいいだろう。

(そもそもオレが考えていた使用用途じゃないしな)

綾小路は結論を出して櫛田の端末に連絡を入れた。

日にちは進み中間テスト前日の放課後になった。

俺はさっさと帰ろうとしたが櫛田が大量の紙の束を持って教壇に立ち大事な話があると言って、クラス全員が座ったままだ。

「みんな、今日まで沢山勉強してきたと思う。そのことで少し力になれると思うの」

櫛田がプリントを配り、一番前の席に居る者たちに渡していき、その一人である俺の手には絶対に触れないように端もって渡された。

櫛田が速足で教壇に戻っていくのを見ながら俺はプリントを後ろに回す。

プリントを見てみると、内容はテスト問題だった。

「実はこれ過去問なんだ。一昨年の中間テスト、これとほぼ同じ問題なんだって」

櫛田の説明にクラス中が喚起する。

「ウオオー！マジかよ」

「こんなのあるなら無理して勉強頑張らなくても良かったなあ」

「けど助かるぜ」

特に池、山内、須藤の三バカは大いに喜んでおり、他の面々も嬉しい知らせに興奮していた。

「櫛田さん、お手柄ね」

そこに珍しく堀北も称賛を送った。

しかし、俺は何となくそれを言うべき相手が違うような気がした。

そもそも過去問とは言え無料^{タダ}で手に入るとは思えんし、間違いなく『湯水の^ノご^リとく^{ロード}』で増やしたポイントを使ったと見ている。

そして、それを考え付く——考えると言っていた相手と言えば。

俺はさり気なく綾小路に目を向けるが相変わらずのポーカーフェイス……お前なら俺（十二戦士・戦犯）の能力を有効活用できるぞと言いたいのか？

今回はクラスの為でしか使い道がなかったが、もつと多くのことが出来るそう言っている……そんな風に勝手に思ってるぞ。

そのまま帰り支度をはじめ、他の連中も帰っていく中で、

「櫛田さん。あなた、私のことが嫌いよね？」

「そうだね。大っ嫌い」

そんなやり取りが耳に入った……ま、どうでもいいか。

叶えたい願いの為に。

テスト当日の朝、誰ひとり欠席なくクラス全員自信に満ちた表情で茶柱先生を見ていた。

「落ちこぼれに最初の関門が来たというのに随分と自信がありそうだな」

「このクラスで赤点を取る生徒はいないと思いますよ」

「ほう、随分な自信だな平田」

先生は問題を配り始めながら続けた。

「ならば、もし今回と七月の期末で赤点者が出なかったら、夏に青い海に囲まれた島で夢のようなバカンスに連れて行ってやろう」

「「うおおおおお!!!!」」

男子に気合が入り先生と女子が若干引くが、俺には海に囲まれた島なんて嫌なイメージしかない……ってか本来の十二大戦は大都市を無人にして行われるはずだった。十二戦犯が横槍を入れなければ俺が今ここにすることもなかった。思い出したらまたイライラしてきたぞ。

——だが抑えろ、落ち着け、また机を割るわけにもいかない。

深呼吸して気持ちを静め問題を見ると昨日渡された過去問と殆ど同じ問題が並んでいた。

これなら『魚』に切り替えなくてもすぐに終わりそうだ。

二限、三限と進んでいき休み時間に入る。

「楽勝だな、中間テスト！」

「俺、120点取っちゃうかも」

池と山内の明るい声がよく響くが、須藤の表情は暗かった。

「須藤くん、大丈夫？」

三人の勉強を見ていた堀北が声を掛ける……ちなみに俺と綾小路も何だかんだと一回きりでなく最後まで付き合わされたので僅かだが気になり耳を傾ける。

「わりい……寝落ちしちゃって、英語だけはやってねえんだ」

おお、ここに来てまでピンチを醸し出すとは退屈させない男だ……

ダメな意味で。

堀北も焦って須藤に近づき付け焼刃の対策を施しているが、傍から見てる限りはダメかなこりゃ。

「な、なあ嬰兒の催眠で英語だけでもどうか——」

「無理。俺の催眠じゃこんな場面を切り抜けられない」

山内が話を振ってきたのを容赦なく切る。

そう『牡羊』から受け継いだ催眠ではどうにも出来ない。

「催眠ならか？」

いつの間にか近くに来ていた綾小路が小声で尋ねた。

そう毒殺師である『戌』の秘薬ワンマンアミー——肉体の潜在能力を引き出す毒を調整し、集中力を極限まで高め一夜漬けならぬ十分漬けならなんとかなる……かも知れない。本来は戦闘用に使うものだし、そんなセコイ使い方など考えたこともなかったので結果は未知数。

そうじゃなくても俺は何も言わない——俺には須藤を助ける気などないのだから。

「まあ、いいや」

無言のままにいる俺に綾小路は言った……こいつも手助けは無理と諦めたかな。

「どうにか出来るものは、もうお前から受け取ってるしな」

おいおい……一体、何のことだよ？

須藤が赤点取ってもどうにか出来るって？それも俺がしたことか？……全く予想がつかないが、ことはまだ終わらないのか。

テストの結果発表の日、クラスが固唾を飲んで待っている中でその時が来た。

茶柱が氏名と点数の一覧が乗せられた紙を黒板に張り付ける。国語、数学と張り出されていき、そこには100点と記された生徒が数多くあり、届かずとも高得点である生徒はそろって歓喜の声を上げ

た。

だが一部の生徒は緊張したままであり、英語が張り出された瞬間に穴が開くほど集中して見た。

「つしやー」

須藤が叫び立ち上がる——心配だった英語は39点、前回の赤点ラインの32点を上回っており退学が回避された。

池と山内も一緒に喜んでいたが、茶柱が赤ペンを出して須藤の名前の上に一本の線を引いた。

「あ……う？」

「お前は赤点だ須藤」

「ふざけんな！赤点は32点だろ!!」

茶柱の宣告に須藤は猛烈に抗議する。

「それは前回だ。赤点ラインはテスト毎に異なり、それは平均点割る2。今回は40点が赤点だ——お前は1点足りなかった。だから退学だ」

「聞いてねえぞ、そんな話！」

淡々と語る茶柱に対して須藤は興奮が増していく。

そこに堀北が手を上げる

「……先生、今のお話だと矛盾が生じます。」

私の計算では正確には平均点は39.8点——前回は32.2点で小数点が切り捨てられます。私の考えが間違っているなら理由を教えてくださいませんか？」

一縷の望みが生まれ須藤の退学が回避できるのかと注目が集まる。

「なるほど。だから堀北、須藤が退学にならないようワザと英語だけは手を抜いたのか」

茶柱の言う通り堀北は英語51点で他は満点であった——平均点を可能な限り下げて須藤の退学を回避させようとしていた。

「茶柱先生」

「ああ、答えは簡単だ。小数点は切り捨てでなく四捨五入だ——と言うか私の話から分からないお前じゃあるまい……残念だがこれが事実だ」

最後の希望は潰え、茶柱は話が終わると教室を去りクラスに静寂が訪れる。

「……お前、俺のこと嫌ってんじゃねえのか？」

「私は私の目的の為にやっただけよ。勘違いしないで」

須藤が力ない声で訊き、堀北はゆっくりと腰を下ろしながら答えた。

隣の席で端末を弄っていた綾小路は入れ替わりに立ち上がる。

（……かなりの賭けだったが、1点ならなんとかなるな）

「神に祈りにでも行くのか？」

「まあ、そんなところだ」

嬰兒の問いにあっさりとは肯定し、そのまま教室を出て行った。

その少し後で榎田——ほぼ同時に堀北が立ち上がり目を合わせて、

堀北は構わずに榎田は一瞬だけ嬰兒を見てから教室を出た。

嬰兒は窓の外にいる鳥に目を向けていた。

教室を出た綾小路は窓の外を見ながら待っていたような茶柱に追いついた。

「先生、単刀直入に言います。須藤の点数を1点売ってください」

「……本当にいきなりだな。それでいながら、ぶっ飛んだこと言うな」

「先生は入学初日にいいましたよね。この学校の中においてポイントで買えないものはないと」

「確かに言ったが、それでもテストの点数を売ってくれと申し出たのはお前が初だ……どうすればそんな発想が出るのか？何故、須藤の為にそこまでするのか？よければ聞かせて欲しいな——私にはそこまですぐクラスメイトに愛着があるようには見えなかったのにな」

質問はしたが茶柱は綾小路がまともに答えるとは思っていない。

理事長から僅かながら入学の事情を聴いており、本来は最も優秀かそれ以上な生徒であるのは知っているが、同時にこの学校に逃げるためにやってきたことも知っており、どんな些細な問題やそれに繋がりがねない注目は避けたいはず。

当たり障りのない答えか哲学的なことでも言って誤魔化すのが関の山だろう。

「簡単な話、オレにも欲しいものがあるんです。その為にはオレはオレの価値を証明する必要がある——その手段が今は学校の試験であり、絶望的にある須藤の退学を回避する事しか存在しないんですよ」
「……………欲しいもの？Aクラスに上がることではないよな？」

完全に予想外の返答であり一瞬、思考が固まってしまいニュアンスには茶柱佐枝の願望が若干見せた。

もつとも五月に呼び出された時から薄々感づいていた綾小路は得にも何も思わずハッキリと告げる。

「全然違います。オレが欲しているのはもつと先にあります…………ただ、その過程の中で結果としてAクラスに近づけるかもしれません」
(……………そうでないかも知れないがな)

茶柱にも飴を与えている状況で余計なことは心の中だけで呟く。

「それで須藤の点数ですが、売ってくれますか？」

「この場で10万出すなら売ってやろう」

これ以上ペースを持っていかれたくないのか茶柱は早く話を切り上げるように言った。

「分かりました。ただ一緒に出してくれる奴と連絡を取るから少し待ってください」

「今すぐ払えと言ったんだが」

「一分も掛かりません。生徒の一生が掛かってるんですから教師としてその程度は待ってくれませんか」

綾小路は櫛田に連絡し嬰兒によって増やされたポイントと僅かな借金を申し出て金額を揃えようとしたが、

「——私も出します」

「わ、私も」

背後から堀北と櫛田が現れた。

「いつから居た？」

流星に綾小路も背中目に目がある訳じゃなく気付かず——もしかしたら嬰兒もいるかと思いい見渡すが鳥が窓の外にいただけであり、改めて自分も常識の中の存在だと認識した。

「この件はギリギリまで点数を下げきれなかった私の落ち度……………だか

「私が4万、綾小路くんと櫛田さんが3万づつ——」

「堀北さんが3万4千で私たちが3万3千だよ」

「でもこれは私の——」

「私が出したいんだよ……だからこれで良いんだよ」

「……分かったわ」

櫛田の口調は優しいものの有無を結わさぬ強いニュアンスであり堀北も押し切られた。

「それじゃあ先生、そう言うことで」

茶柱は綾小路たちの学生端末を取り上げる。

「確かに受理しよう。退学取り消しの件はお前たちから伝えておけ……それにしても面白い生徒だと思っていたが、思っていた以上の不良品だなお前たちは」

皮肉なのか発破をかけているのか茶柱が処理を終え端末を返した時、

「ガアッ！ガアッ！」

鳥が威嚇するような鳴き声を上げて飛んでいき、時間を見ると一時間目の始まりが迫って来ていた。

「話は終わりだ。早く教室に戻れ」

水を差され場は一気に白け茶柱は職員室に綾小路達は教室に戻っていった。

「ねえ、綾小路くんの欲しいものってなんなの？」

戻る途中、堀北が訊き櫛田も目を向ける。

ただ、なんとなくである為、言いたくないと言われれば謝罪して終わりにするつもりだった。

「平穩……いや安心かな」

以外にあっさり答えられたものの理解が出来ず更に追求しようとしたが、教室についてしまい須藤への説明と間もなくしての授業開始で訊くことは叶わなかった。

その日の夜、綾小路は嬰兒を探して歩いていた。

（坂柳は早ければ明日にでもオレに接触してくるかもしれない。嬰兒

の望みを叶えるとしたならその時……それを逃したら次はいつになるか分からない)

綾小路は綾小路で坂柳と話時のことは決めており、今夜はそれを餌に嬰兒と打ち合わせをして備えておきたかった。

しかし端末に連絡を入れてもメールを送っても不備により不可と表示され、仕方なく自分の足で探している。

寮の周辺からずっと範囲を広げ、外に出ていた者に聞いても手掛かりはなく人気のない所、この前のフェンスの向こうの海の前かと思っただが空振りであった。

ならばと逆に人気の多いケヤキモールに足を延ばす。

中間テストが終わった打つ上げであろう多くの生徒たちがレストランやカフェで騒いでいたが嬰兒の姿はない。

(そもそもこんな場所にいたなら連絡が付かないわけがない……職員、いや運営側に呼ばれてるのか?)

信憑性のある推測に今夜会うのは無理かもしれないと諦めようとした時、空腹であることに気付き近くの店でテイクアウトできるメニューを注文しようと列に並ぼうとした時、横から声がかかった。

「こんばんは。奇遇ですね」

テラスに座っている坂柳有栖が笑みを浮かべており、すぐ近くにはサイドテールの女子、神室真澄もいた。

会うのは明日以降と思っていたのだが、完全に藪蛇になってしまった形だ。

ともあれ坂柳はただ挨拶をしただけであり、

「ああ、こんばんは。本当に偶然だな」

綾小路も普通に挨拶を返す。

「ふふ、よかつたら一緒にご飯、どうですか?」

「え、ちよつと!?!」

「邪魔しちや悪いだろう。今回は遠慮するよ」

真澄が声を上げたのを見て綾小路は断ろうとした。

「ああ、別にいいわよ。なんか私の方が邪魔みたいだし」

神室は早々に席を立ち行ってしまい、なし崩しに綾小路は席に座っ

た。手ごろなメニューを注文し待っている間、ニコニコしている坂柳に無言のまま見ており料理が来てようやく口を開く。

「オレは食べたらずくに帰るぞ」

「ええ、今夜はご飯を一緒にするだけですよ。」

色々と警戒されているのは察しますが、少なくとも今は綾小路くと戦いたいとは思っていません」

「Aクラスも何も問題無しって訳じゃないのか？」

「ええ、私とは全く相性の悪い男子が出張っていて、ちよつと」

「その割には余裕そうだな」

「ええ、全ては時間の問題。彼——葛城くんでは私には役不足ですから」

本当に戦いたいののは綾小路であると言外に言っており少し辟易する。

「そういうのは勘弁してほしいかったな」

「その気持ちもお察しますが出会ってしまったのですから……ほしかった？」

坂柳の予想とは違う返答に疑問符が浮かぶ。

それに答えるように綾小路は順番に語る。

「オレは当初、目立たないことを基本にこの学校で三年間の平穩を満喫するつもりだった。」

だが、お前に出会ったのを切っ掛けに考えが変わった……いや、欲が出てきたと言って方がいいか」

「欲、ですか」

坂柳の目に好奇の光が宿る。

「ああ、三年の平穩じゃなくもつと長い安定を手に入れたい。」

その為に色々と動こうかと思案を巡らせている。で、そのひとつにお前のことも利用しよう思っているんだ」

「——随分とストレートに来ましたね」

流石に目を丸くしたが、口元は楽しそうだった。

「互いの親が国に関わっていると知っている前提で話をしてるんだが、違ったか？」

「おや、既に父のことをご存じでしたか——ええ、私の父と綾小路くんのお父様は近い間柄にあります。その関係でホワイトルームに連れて行っていただき、アナタを知りました。

それ以外では余りいい思い出とは言いがたいですね……天才とは生まれながらの者、それを人工的に生産するなんてナンセンスだと今でも思っています」

言葉を紡ぐたびに坂柳の声は好戦的になっていき、綾小路は彼女の願いを半ば悟った。

「お前にオレが倒せるのか？」

「偽りの天才を葬ることこそ、天才の役目だと自負しています」

少し前の綾小路なら矛盾した期待を抱いただろう。

それは自身を作り上げた父親の敗北を意味するのだから——
だが、

「……悪いがオレはもう負けた。それもついこの前な」

「……………私をからかっています？」

坂柳が意味を理解するのに間を要し、綾小路を凝視する。

「まごうことなき事実だ。オレは手も足も出なかった——世の中、本当に広いものだと思ったな」

「どなたか、お伺いしても？」

「実を言うとお前に会わせようと思つて、さっきまで探してたんだ。紹介はまたの機会つてことにしてくれないか」

「綾小路くんの駒ですか。だったら会ってみるのも悪くないですね」

坂柳はまだ半信半疑のようでも自分の戦意を削いで綾小路からそろそろと疑っているようだ。

「ちなみに戦ったのは、ただの喧嘩だ。ブラフ、駆け引き、戦略、あらゆる状況も覆す戦闘能力の持ち主……心底もう戦いたくないな、アイツとは」

綾小路は偽らずに話した。

そして、そこには期待が多分にあった——異常な能力を持つのは嬰兒だけではなく、同じ相手を複数送り込まれる可能性は充分にあるが、殺した相手を操れる『死体作り』ネクロマンチストは敵を裏切ること心配のない駒

に出来る。

もしも能力もそのままに使えるなら、あの男への対抗手段としては十二分に成り立つ。

だからこそ牛井嬰兒の全てを暴き知りたい——そしてまだ見ぬ外の世界に嬰兒よりもヤバイ奴がいるのなら、自分の味方として確保する方法を見つけ出す足掛かりにもなる。

「喧嘩ですか……だったら私には問題外ですね」

坂柳の口調には些かの安心があった。

肉体に大きなハンデを抱える身には割り込む余地はなく、自身の得意とする土俵で対等な勝負をして綾小路清隆に勝つと言う目標はどうにか崩れずに済んだ。

そして直ぐに頭を切り替えて言った。

「先程、私を利用したいと仰ってましたね」

「ああ、言ったな」

「つまりその方は綾小路くんの完全な味方じゃなく、それを成すために私にも何か差し出せるものがある？」

「話が早くて助かる。勿論、お前にもメリツトは用意するつもりだ」

「じゃあ、私と勝負してください。綾小路くん」

「承る」

互いに欲するものの為に即答し、とんとん拍子に話は進んでいく。

（順序が変わったが、まあ修正範囲内だ）

綾小路としては今夜の交渉は嬰兒として坂柳に話を持って行くつもりだったのだが、嬰兒の機嫌を取って話をしやすくなるなら悪くはない。

（目の前にいる私より、その方に対して気持ちが向かっている………どうにも面白くないですね）

一方の坂柳は自身の望んでいた展開になっているにも関わらず素直に喜べない歯痒さがあった。

綾小路清隆と初めて会った日から、いつか再会し相まみえたい——それか二度と会わないかもしれない。そんな相反する気持ちを抱えながら過ごしてきた日々によく光明が見えたというのに全く知

らない第三者に横槍を入れられている気分だった。

「それで勝負内容はどうする？オレとしては直ぐに準備可能なら今直ぐ……はちよつと勘弁してほしいから、明日でもいいが？」

「郷にいては郷に従え。折角ですからこの学校のルール、試験にのつとつてその結果で勝敗を決めませんか？」

「オレはDでお前はA、差は一目瞭然だ。もしも縮まってからだと言うなら相当先の話になるぞ？」

「あら、良いではないですか。その方が盛り上がって勝負するにもテンションが上がります」

そこで言葉を切つて坂柳は身を乗り出すように綾小路に顔を近づけて愛しいそうな目を向ける。

「私のもつと時間をかけて綾小路くんを知りたいんです。

ずっと会いたかった幼馴染と再会した気持ちなんです——簡単に決着がついてしまつては余りにも名残惜しいです」

初めて向けられる感情に綾小路は戸惑い言葉が出てこない。それでも何とか——

「じゃあ、オレから提案がある。

「8年ぶりに再会した幼馴染つて設定を隠すのは無しにしないか？」

「良いんですか？」

あまりに予想外すぎて坂柳も面食らう。

「ああ、お前が好戦的であるのは理解した。あくまでクラス争いとして勝負したいなら、その条件でオレの動き易いように立ち回るのは可能だ」

（そう、あくまで嬰兒を籠絡するために余計な問題に関わらないようにする口実作りだ）

そう自分に言つて聞かせるも、それが明確な理由でないと訳が分からないモヤモヤが心中にあった。

「それでは私からもひとつ。幼馴染ならお互いに名前呼び合ひませんか」

「ああ、別に構わない」

「ありがとうございます。清隆くん」

「どういたしまして。有栖——いつでも来てくれとは言えないが、会うなり勝負時は正々堂々で頼む」

「はい。それではそろそろお暇しましょうか」

坂柳は笑顔いっぱい立ち上がった時、彼女の上に白い霧が降り注いだ。

「クシュッ………!!?」

肌が凍るような冷気を感じて思わずクシヤミが出て、そのままバランスを崩して倒れそうになるのを綾小路が抱きかかえて支える。

(雪……この季節に?)

綾小路は心中で驚きながら上空を見ようとした時、足元が凍っているかのような感触に足を滑らせ坂柳を腕に抱えたままバランスを崩した。

「!!??」

どうにか踏みとどまったが抱きかかえられ制服の襟をつかんでいた坂柳に引っ張られる形で綾小路清隆と坂柳有栖の唇が密接に重なった。

余りの驚きのあまり——ガツシャーン!!——と手を付いていたテールブルがひっくり返って店中並びに近くを通っていた生徒、職員全員が二人の濃厚なキスシーンに注目した。

「「きゃー!!!だいたくん!!」」

「仲がいいのは結構だけど場所を選べよ」

「くっそう……見せつけやがって」

「つてかあれ坂柳だよな。一緒にいるの誰だ?」

主に女子からは黄色い悲鳴、男子からは僻みの声が沸きあがる。

(………これでオレの目立たたない平穏な学生生活は終わったな)

唇を放して冷めた目で状況を把握している綾小路だが心臓は感じたことないテンポで早まっており、腕の中の坂柳は凄まじく幸せそうな顔で呆けていたのだった。

おお、なんとも盛り上がったな。

遙か上空、一万メートルで俺は眼下での騒ぎに困惑していた。

椅子代わりに座っているボトルには『申』の仙術で精製した液体水素が入っており、『辰』の『天の抑留』を使い鳥も上がってこない空の上で月を見ながら酒を飲んでいた………未成年だって、そもそも俺は人でないし——。

何より酒好きの『寅』への供え物と言えば酒の購入は言い訳が立つし泥酔するほど飲むつもりもないし、『魚』に習ってその前に止めるラインは弁えている………よって問題はなし………ダメだったら、綾小路に貸しても作るか。

とか思っていたら何やら綾小路があつちこつちを右往左往していた。目で追っていたら、なんと坂柳と一緒に飯を食っているではないか。

鷹の目ならぬドラゴンアイも本家の『辰』ほどの制度ではないため少々ぼやけてしまい、それでも何を話しているのか気になって、つい身を乗り出したらボトルから液化水素が僅かに漏れてしまった。

やはり、安物の入れ物なんかに入れるべきじゃなかった。この距離からの落下なら人体が氷漬けになることないだろうが、奇しくも坂柳の真上に落ちてしまい綾小路とバタバタして熱いキスを交わした。

アクシデントであるが俺が原因なのは100%明らかであり、今後の二人の学生生活への影響を考えるとかなりの後ろめたさがあった。

坂柳は兎も角、綾小路にはお詫びとして二つほど能力を開示しようか？ いや、アイツのことだから調子に乗って踏み込んできそうだし………ああ、ホントにどうしたのもか？

ん？

途方に暮れてたらキス騒動とは別の場所でひとり自撮りをしている女子がいた——確か同じDクラスの佐倉だったか？

自撮り自体は別にいいが佐倉の見えないところからジツと見ている男がひとり………恰好からして教師じゃなくて職員かな。表情まではハッキリ分からないが、まず間違いなくストーカーの類に見える。

佐倉本人は気付いてないようだし、まだ実害はなさそうだが——さて、どうしたものかな？

上から見ていたから。

一夜明けて、俺が教室のドアを開けて入っていくと、

「あ、おはよー……って嬰兒くんか」

「なーんだ」

っと残念そうな声が浴びせられた。

言った奴らをはじめDクラス中がザワザワ、ソワソワしながらドアに注目し「誰か」を待っている。

ああ、なんとも分かり易いなど思いながら俺は自分の席に着き耳を澄ませる。

「それで昨日さ——」

「——ああ、俺も見たかったな。その場面」

「ぼんやりした顔して隅に置けないよね——」

下世話な好奇心丸出しの会話があちこちから聞こえる……ま、あれだけ派手に騒がれたら噂が広まるのも早いわな——これで俺が無関係なら放って置くんだが、アイツが来たら何を言えばいいのか……。

「いつにも増して不景気な顔ね」

おやおや——珍しく堀北が話しかけてきたではないか。

やっぱり女の子、恋バナには興味があるのか？

それとも数少ない話し相手である男子に彼女がいると知ってショックだったりとか？

「……………あなた今、物凄く失礼なこと考えてない？」

「いや……………別に……………それで何か話でも？」

「凄く追及したいけど、精神衛生的にやめた方がよさそうね」

ああ、是非そうしてくれ。

それで一体何の用なんだ——そう思い話の続きを待つと堀北は眉をひそめながら言ってきた。

「単刀直入に言うわ。牛井くんはAクラスを目指すのに協力してくれる気がある？」

ああ、なるほど……手駒に使うかと思っていた綾小路が使えないか

も知れないから俺に新たな白羽の矢が立った訳だ。

しかし見る目がないというか視野が狭いというか——堀北が使いやすいそんな駒の候補なら分かり易いのが居るだろうに。

「苗字で呼ばないでくれ」

「返答になってないわ。それともアナタの希望通りにすればいい返事が貰えるのかしら？」

「どんな論理の飛躍だよ。」

「っていうか昨日、廊下で綾小路はAクラスになるように尽力するみたいなこと言っただけだったか？」

「まあ、綾小路の欲しいものなんて想像に難くないから傍迷惑なだけだけど……。」

「何故、俺なんだ？」

「牛井くんには珍しい特技がある——それを有していると示すだけで色々と便利でやり易いでしょ」

とどのつまり、力こそ正義で行く訳か。

勉強会で三バカを黙らせていたので味を占めたか。

「あいつ等をはじめ聞き分けのないバカに俺の特技をチラつかせて言うこと聞かせるか、最低でも邪魔する奴を静かにさせて堀北の主導で事を進めたいと。」

「須藤を救おうとしていたし、もっと思いやりのあるやり方を模索すると思っただけだな」

「変な勘違いはやめて。あれはあくまでマイナスが生じるリスクを避けるため……そうじゃなきゃ、あんなに甘い対応はしない——もとより私は甘いやり方なんてするつもりはないわ」

「ま、その手の飴を与える役割は平田や櫛田がいるからな——俺をバックに就けて堀北が鞭を振るう役割にでもなるつもりか……俺と言う鞭を振るうDクラスの女王、堀北か。」

「バタフライマスクにボンテージを着込み台座に網タイツの足をかけて——。」

「……なんか、さつきよりも私に対して、より失礼なことを考えてないかしら？」

おっと、堀北が険しい目つきで睨んできた。

ついつい個人的な妄想が入り混じった解釈をしてしまったが、こちらでお開きにしよう。

「それで私に協力してくれるわね」

おいおい要請から命令になってるぞ。

それが人をお願いする態度かと突っぱねてキツパリと断つたとしても俺の言葉なんかお構いなしに勝手に協力者にするとか言いそうだな。

何より、ただ断るだけでは俺が面白くない。

「Aクラスを目指すとしても——堀北、お前の力など要らん」

「!?!」

完全に予想外って顔だな。

そんな面食らった堀北に俺は続けた。

「俺に言わせればお前は須藤と同レベルだ。似た者同士、自分の思い通りにいかないとか喚き散らしてる方がお似合いだぞ」

「……………よりもよって私が須藤くんと同じとか……………言っている冗談と悪い冗談の区別もつかないのかしら?」

段々と屈辱に目を険しくしている堀北に俺は指さすが全く動じない。

以前、俺が須藤を三秒で眠せると言ったから、やれるものならやってみると言うのか——その根性はまあまあだが、ただのガキの怖いもの知らずに過ぎん。

「本心だ。今の堀北は俺が組むに値しない」

「随分と大きく出たわね。まずは優しくと思ったけど気が変わったわ」

今まで会話に何処か優しい部分ってあったか?

「今日の昼休みか放課後にでも私と勝負して——それで負けたら私の指示に従ってちょうだい。私が負けたら牛井くんの方針に従ってAクラスを目指すわ」

「俺がお前に望むことは何ひとつない。その申し出を受けるメリットは感じんな」

「そう言えばあなたはBクラスの一之瀬さんが好みだったわね……綾小路くんと言いつつ、どうして他クラスに目が行っちゃうのかしら？」

「やっぱり綾小路を坂柳に取り替えて寂しいのか？」

話が教室……いや学年中の話題と重なってドアを見てみるが開く気配はない——そうそうドラマみたいな展開はないか。

そんな展開になれば話を打ち切れたのに……。

「……これ以上話してもお互いの精神衛生上良くなさそうだから、今はここまですておくけど——色香に迷って裏切るような真似をしたら絶対に許さないわ。それだけは憶えておいて」

席に戻っていく堀北を見ながら、そんなことは無いからと心の中で答える。

ホームルームまで一分を切った時——ガラツ——と教室のドアが開き、皆が待ちわびていた綾小路清隆が入ってきた。

「おー、綾小路。随分と遅かったな——彼女と何かしてたのか？」

「ビュー、ビュー。羨ましいぞ、この色ボケ野郎——」

山内と池が囁し立てて大半の生徒が続きたかったがチャイムが鳴り、一旦は大人しくなる。

もしこれが四月だったなら、ホームルームなど関係なく綾小路に詰め寄って質問の嵐が訪れていただろう。

しかし、これも一時しのぎに過ぎずホームルームから一時間目までの空き時間に昨夜の坂柳有栖とのキスの詳細を聞きに来る生徒が押し寄せた。

「いやあ、憎いね。あんな可愛い彼女がいるなんてさ」

「って言うかさ、綾小路くんって軽井沢さんに気があったんじゃないのか？」

「そうそう、あの時は三角関係勃発かと冷や冷やしたのに」

「だけど他クラスの女子って……騙されてスパイにされてんじや」

「おお、それは一大事だ」

「もしそうなら相談乗るぞ、どんな感じでそうなったんだ？」

当人に構わず言いたいこと言いまくるのに内心で辟易しながら、ゴホンと咳を鳴らして綾小路清隆は言った。

「結論から言うと昨日の『アレ』はただの事故だ。

転びそうになった有栖を支えてたらオレも足を滑らして『ああ』
なっただけだ」

偽りなく淡々と事実を口にしたのだが、そんなので満足などするわけもなく、

「えー、相手の娘は身体が不自由みたいだから分かるけど……」

「あんな何もない所で足を滑らせるって」

「私たち、あの場に居たけど坂柳さん——すごく幸せそうな顔してたよねえ。それに有栖って？」

篠原、佐藤、松下の三人が息を合わせて真っ向から否定的意見を示し、特に最後の松下の指摘に集まった者もそうでないのも含めたクラスメイト全員が綾小路に納得のいく答えを求めていた。

「はあ〜」

綾小路は仕方ないと言うような溜息を吐き出し、目を泳がせながら答えた。

「実は有栖とはこの学校であったのが初めてじゃない……八年ぶりに再会した幼馴染なんだ」

「『えー!!!』」

「なんだよ、そのラブコメみたいな展開」

「現実にそんなことあるの？」

「確率、物凄く小さそうよね」

再び言いたい放題であったが内容的には妥当なものである。

「もしかして綾小路くんが春先に悩んでたのって……」

平田が遠慮がちに聞くと綾小路が頷いた。

「ああ、有栖と再会したんだが久しぶりすぎて、どんな奴だったか覚えて無くてな……なんて顔して会ったらしいのとか、ちよつとな」

「うわ〜、純情だね〜。綾小路くん」

佐藤の感想に女子たちは同意するように笑いを忍ばせ、男子からは嫉妬と羨望が混じった視線を向けられた。

「それ、櫛田にも言われたな」

「え、櫛田さん？」

「ああ、クラス内であと知っているのは嬰兒ぐらいだ」

クラスの目が櫛田と嬰兒に向くと櫛田は困ったような顔で、

「あははは……いや、実は綾小路くんにごつそり相談されて——」

「俺はその櫛田から聞いた」

嬰兒は何も気負わずにあつさりと言った。

櫛田のバツの悪そうな顔と綾小路を交互に見た松下が、

「もしかして櫛田さんと喧嘩したのって？」

「ああ、ここだけの話としたのを漏らしたからだ。それにこんな再会、神の思し召しかと思っていたのを否定されて……オレも思わず腹が立ってな」

「だから悪かったって！」

泣きそうな顔で叫ぶ櫛田に自然と同情の念が沸き起こり、櫛田と仲が良かった王が近づいて肩に手を置き、冷めた目の綾小路に向き直る。

「綾小路くん。不快なのは分かるけど、櫛田さんだつて人間なんだし、ついうっかりとかもあるよ。謝ってるし反省もしてるし許してやってくれないかな？」

櫛田をかばう王の姿はまさに友情に熱い親友であった。

「……いや、とつくに許したよ」

このまま悪者になつてしまう空気に言わされたのかと邪推する者もいたが、櫛田は涙目で感謝し寄り添っていた王も同じく涙目で喜んでた。

ほのぼのとした空気にほだされ、和やかな雰囲気に一石が投げられた。

「それで、まさか幼馴染がいるからAクラスを諦めるなんて言わないわよね」

堀北は刺すような視線を綾小路に向け、クラス中が一気に緊張の渦

に呑まれた。

「ああ、出来るなら有栖とは戦いたくないしクラス争いからも手を引きたい」

そんな中で綾小路は何でも無いように答えるが内容は流せるようなものでなく堀北の目の険しさが増す。

「だが、最近思い出したんだが有栖は好戦的な娘でな——オレにその気がなくても仕掛けてくる、正々堂々とな。それにはちゃんと応えるさ。」

勿論、ワザと足を引つ張ったり、Dクラスを裏切るような真似は絶対にしないと約束する」

「当り前よ。そんなふざけた真似したら絶対に許さないわ」

堀北は無然としながら席に戻り、クラスの緊張も抜けていき安堵の息をつく者も少なくはなかった。

その時、ちようど一時間目が始まる時間となり皆が自分の席に戻っていった。

「綾小路、ちよつといいか?」

「ああ、別にいいぞ。嬰兒」

俺から声を掛けられ綾小路は待つてましたと言わんばかりに即答してきた。

大方、坂柳と話をする段取りを取りに来たとでも思ってるんだろうな。

俺たちは一緒に食堂に向かい安い定食を頼んでテーブルに向かい合った。

食堂に向かうまで道から定食を取りに並び、席についても綾小路に好奇の視線が集まっている。

本人は平然としているようだが内心はどう思っているのか?

こんなはずじゃなかったと嘆いているのか、もう完全に開き直って新たな道を探しているのか——その新たな道に俺が含まれてなけれ

ばいいんだが、こいつ、俺の異能に興味津々だし無い物ねだりに近いかな。

何より、こんなことになってしまった責任は俺にもあるので邪険にも出来ない……困ったものだ。

「実は折り入って綾小路に頼みたいことがあるんだが」

「ああ」

ポーカーフェイスは相変わらずだが、来たかとか心では思っただ。だ。

「同じクラスに佐倉愛里って娘いるだろ？」

「……………ああ、居たような気がするな……………すまん、名前と顔を思い出すのに時間がかかった」

嘘ではないだろうがホントは坂柳に関する話をすると思っただのに肩透かしを食らったってとこかな。

「実は昨日の夜、彼女が自撮りしてるのを隠れて見てる男がいてな」

「嬰兒がそれか、犯罪紛いなことはやめろと堀北に——」

「そう、正にそれだ。佐倉はひよつとしたらストーカーにあってるかも知れない」

綾小路の言葉にかぶせて一気に本題に入った。

「——それをオレと一緒に捜査しろと？」

「いいや、変なレッテルを張られた俺が出ても悪い方向に行きそうだから、綾小路の方で解決して欲しい」

綾小路は目を細めて強い口調で言った。

「意趣返しか？」

うん、当然の帰結だ。

美少女を視姦したなんて不愉快なレッテルを嵌めてくれたのだから、そんな気持ちも全くないと言えば嘘になる。

だが本心でもない。

「佐倉ってさ地味で目立たないけど、スタイル抜群でクラスでも1、2を争うぐらい可愛い娘なんだよ。そんな娘が危ない目にあってるかも知れないなら助けてやりたいじゃん」

「お前の言ってることの方が、よっぽど危ないと思うぞ」

仰る通り、何も知らないやつが訊いたら典型的なストーリーカーの理屈だ。

見守っているとか言いながら本人が迷惑そのものになっている。佐倉のような娘からしたら迷惑を通り越して恐ろしいだろう。

だからこそ確証もなく動く訳にはいかない。俺としても遠くから見ただけで確証がある訳じゃない。そんな「かも知れない」で事を起こして実は違いましたじゃ洒落にならないからな。

「第一にこの手のことは警察の領分だ。学校の試験やいざごぎとは訳が違う——オレじゃなくて然るべきところに話を持って行くのが筋だろう」

「それを簡単に出来ないからお前に頼んでるんだ。どうやって知ったかを追及されて誤魔化してもそれで終わりにはならないからな、俺の場合」

「つまり公に出来ない方法で知ったと」

その言い方だと違法な手段みたいで、ちょっと気に食わないな。

でも綾小路が食い付くには妥当であろう——ただし今回は絶対に後払いだ、更に。

「この依頼を達成したらその情報の開示ともうひとつ……綾小路の願いをひとつだけ叶えてやる」

「オレの願い……」

綾小路の声に僅かな揺らぎが混じった。

「ああ、流石に俺では『どんな願い』でもは、無理だが能力を駆使して叶えられる範囲なら最大限応じるのは誓おう」

「俺では……か？」

「その情報の開示には友情が足りないから、今は無理だな」

今回の成功報酬として希望するなら、それもよしだし安いものだが。

尤も折角のチャンスをそんな小さなことに使うような玉じゃないだろうし、個人の口約束程度の報酬に願いを百個に増やせとか、家来になれとか常識やモラルを弁えない願いをするほど節操無しじゃないだろう。

俺は答えを急かさずに箸を動かしていき、綾小路も昼食を静かに食べ始める。

尤も互いに味なんて楽しむ気分じゃないが。

さてはて今、綾小路の頭の中ではどんな思考が展開されているのかな？

何故、俺が赤の他人である佐倉の問題に関わろうとしたのか。

引き受けるメリットは足るかどうか。

自分を試そうとしていてどうか何かしらの思惑があるのか。

色々考えられるが……まさか昨夜の騒動を引き起こしたお詫びの印だなんて解にはたどり着かないだろう——たどり着くとしたら『辰』の能力を開示したとき、事が終わった後だ。

正直に全てを話してこの場で謝るのが誠実だが、付け込まれて面倒くさいのを吹っ掛けられるのも嫌だし、更に調子に乗って綾小路のペースに引き込まれようと仕掛けられるのはもっと嫌だ。

佐倉を引き合いに出したことぐらいなら話してもいいが、その相手はもうひとり居るから二度手間になるし、やっぱり全部終わってからだな。

そんなこんなでお互いに食べ終わり箸を置くと綾小路はいつものぼんやりとした表情のまま、いつもの覇気のない声で応えた。

「分かった。引き受けた」

ま、予想通りのだな……勘繰りすぎて受けない可能性も無きにしても非ずだったが、その場合は匿名で告発とか考えていたが、必要はなくなっただな。

「それで佐倉を付け回している男の素性は？」

「格好からして教師じゃなくてケヤキモールの職員だった。顔をハッキリと見えなかったが冴えない中年のおっさんだったのは間違いない。佐倉が自撮りしてのを考慮するとカメラ屋の店員じゃないか」

「そこまで分かっているなら、確かめるのは容易だな……と言うか佐倉に確認を取って被害届を出させるか警告すればお終いだろ？」

綾小路である必然性がなく、同性である櫛田に頼んだ方がもつとスムーズに話が済みそうだ——何かしらの思惑があるのかと深読みで

も始めるのか？

「理屈はそうだが、言うほど簡単じゃないと思うぞ。」

佐倉は引つ込み思案の娘だったし、既に被害を受けていたとしても相手にされなかったり、相手が逆上したらどうしようとか考えてブレーキがかかっているだろうからな。

素直に話してくれるのは例え櫛田でも手こずるだろうし、相手のおっさんにしても現時点ではどこまで気が違っちゃっているのか分からない——最悪、刃傷沙汰にでも発展したら被害が拡大する」

そうならない、事が穏便に収まる、一番いいのは俺の取り越し苦労であるのが、危険はこちらの都合に合わせてくれない。

綾小路なら己も相手の身も守れるだけの戦闘能力を有しているのは確認している。

「櫛田でも手こずるならオレには高すぎるハードルだが……それを差し引いてもオレが適役であることは理解した。その最悪を念頭に置いて動くでしょう……それにしても随分と見ているんだな佐倉のこと」

「色々と警戒しなきゃいけない身分なんでね——最初の方はずっと目を光らせていた。」

目立つ奴、目立たない奴、他人を前に立てて後ろでほくそ笑みでる奴と、まあ個性豊かではあったが、少なくともクラス内ではその必要はないと四月の段階では結論付けた」

綾小路の望む答えじゃないだろうが、少なからず腹は見せた。結果としてはそこまで悪いものではないだろう……と言うか、ここで適当なことと言うと俺から佐倉に好意を伝えてくれることを頼まれたとか言っただけと情報開示を進めようとしかねんからな。

そうなってしまうえば俺は節操無しか、最悪は女の敵に貶められてしまふ……この心境を見越して一之瀬のことを堀北に伝えたのなら、やっぱり侮れない奴だ——だからこそ信じて任せられる。

「だからこそ綾小路のことも少なからず信用している」

ダメ押しにもならないと思ったが、言うだけ言うしておく。

綾小路の表情は変わらないままだが、何か言おうと口を開こうとし

た時——

「あ、お前、坂柳の彼氏か？」

突然、見ず知らずの男子が割って入ってきた。すぐ横にはガタイのいいスキンヘッドの男子が居て同じく綾小路を見ていた。

「知り合いか？」

「いや、初対面だ」

だろうな……それにしても無礼な奴だな。と思いつつ俺はテーブルにテンポよく指を叩く。

「はっ、坂柳の男っていうからどんな奴かと思えば、こんな無気力な野郎とは。やっぱり不良品のDクラス、そんなのにうつつを抜かしてるんじゃないや坂柳も高が知れてますね、葛城さん」

「よせ、弥彦。他人の交友関係にケチをつけるなどAクラスの生徒にあるまじき行為だぞ」

「す、すみません」

弥彦とやらは葛城と呼んだ奴に謝ったが、相手が違うだろう。

「君たちも突然済まなかった。俺はAクラスの葛城康平、こっちは戸塚弥彦……坂柳とは少々ギクシャクしててな、つい感情的になってしまった許してほしい」

「葛城——お前が」

「俺のことは知っているのか？」

「有栖から聞いた………なんか馬が合わないらしいな」

こいつが『午』………どことなく似てくはないかなあ——ともう時間はいいかな。

「はん、あんな女！ただの高慢ちきだ！葛城さんの敵じゃ——」

戸塚は突然席に座り込んでテーブルに突っ伏し、俺は指を叩くのを止める。

「弥彦、どうした?！」

「すかー……」

葛城が慌てるが寝てるだけで取りあえず安心し、今度は俺に目を向けてきた。

「Dクラスには変わった特技を持つ男がいると噂になっていたが、お前がそうか？」

若干の怒りが込められているが、どうにも物足りんと言うか慣れないというか。

「牛井嬰兒だ。初対面で悪いが俺のことは——」

「苗字で呼ばれたくないのも話に聞いている。が、こつちも非があるとは言え名前で呼ぶ気にもなれんな。悪いが牛井で通させて貰うぞ」

ま、仕方ないかな。

「それで、オレに何か用か？」

絶妙なタイミングで綾小路が割って入る。

そもそも何し来たのかは俺も気になるところ……仲の悪い坂柳を大人しくさせるために綾小路を買収でもするのかな？

「いや、偶々見かけただけで特に用はない」

葛城は綾小路に目を戻し答え、その後で少しだけ思案するポーズをして訊いてきた。

「しかし、この際だから聞きたい——坂柳と幼馴染だそうだがアイツは昔から、あんな感じだったのか？」

出たとしても不思議じゃない質問だよな。

だが実際は坂柳が一方的に知っているだけで綾小路は彼女の昔を知らないはず。幼馴染で通したのは単なる辻褄合わせ……さてどう答える。

責任の一端がある身としては冷や汗が浮かんでくる。

「ああ、昔はよくチェスの相手をせがまれた。やたら攻撃的な手を好む傾向だったな」

「お前もチェスを」

「ああ、今はお互いプロ級だと自負している……なんなら手解きしようか？」

「いや遠慮しておく。邪魔して悪かったな、そろそろ弥彦を起こしてほしいんだが」

また目を向けられたので俺は無言でうなずき——パンツ——と手

を叩く。

戸塚は起き上がりこぼしの如く立ち上がり、何があつたのか分らないとばかりに当たりを見回す。

「えっと……葛城さん、俺は一体？」

「後で説明してやる、行くぞ」

葛城が歩いていくと怪訝顔のまま戸塚も続いていった。

俺たちも食い終わってるし、いい加減戻ろうと席を立った。

「さっきのチエスの話、坂柳と打ち合わせでもしてたのか？」

クラスに戻る途中、なんとなく訊いてみた。

「ああ、昨日の帰り道に色々話してな。機会があれば一局指そうと約束した」

如才なく答えるか……綾小路が人を道具としてしか見れず、関りや繋がりを造れないのは接していて分かったが、坂柳に関してはちよつと違う感情があるのかも知れないな。

無自覚なのかもしれない俺の思い過ごしかも知れないが、そうであつたなら俺にも少なからず変化が……なんて、益体のないことはやめよう。俺はただ与えられた役割を果たすだけの存在なのだから――。

狙い澄まして〇〇

放課後になり、綾小路は行動を開始していた。

「随分と印象が違うもんだな」

「え？……え、え………？」

声を掛けた先には狼狽えている佐倉の姿があり、堂々と正面から近づいていく。

「あ、綾小路くん……な、なんでここに？」

いつも通りに人気のない場所で回りに誰もいないのを確認しながら撮影していたのに然も当然のように現れた綾小路に佐倉の脳裏に異様な可能性がよぎり、困惑から恐怖に感情が塗り替えられていた。(予備知識があつた為か、これは嬰兒の読み通りにもう被害にあつていそうだな)

近づいてくる自分を見る佐倉を見ながら状況はかなり危険だと思つたほうがいいと結論付ける。

もし何も知らないままであつたなら、秘密を知られたこと、それをバラされたならどうしようかと言う恐怖を抱いているのかと思考がいっただろう。

もつとも先入観でそう見えてしまっているかも知れないので、これも念頭に置いておこうとも。

「ちよつと静かな場所で考えたいことがあつてな……学校中どこ行つても冷やかされそうで寮の部屋に戻つても誰かが押しかけてきそうな気もして落ち着かなくな。」

「あ〜」

坂柳との衝撃のキスシーンから昨日の今日だ。

噂が静まつて、ほとぼりが冷めるまでは、まだまだ時間が掛かるだろうと取りあえずは納得できる理由を聞いて佐倉は警戒心を少し下げた。

「佐倉の方はずっとこんなことしてるのか、随分と手馴れてるように見えたが？」

「え、あの……その………」

綾小路からの質問に佐倉は再び狼狽えてしまう。

この質問が何も答えないうままにされたなら『ごめんなさい!』と謝って誤魔化して一目散に逃げて行くこともできただろうが、綾小路は律義に自分の問いに答えており、ならば自分も答えなければならぬと言ふ心理が無意識に働いて佐倉の足を止めていた。

しかし、自撮りの話題で会話が膨らんで盛り上がることは佐倉の望むこととはかけ離れており、嫌な可能性への警戒も完全に解いた訳でもないことから何と答えればいいのか浮かばず焦りが増していくばかりであった。

「あー、別に言いたくないなら無理しなくていいぞ」

綾小路は話し合いが出来る距離で足を止めて佐倉に気遣いの言葉を掛けた。

「う~~~~~……………」

情けない同情だと感じたのか佐倉はどんどん委縮してしまう。

そんな様子を見ながら改めて佐倉を観察する綾小路。

(確かに地味な印象だが、改めて見ると堀北や櫛田にも負けない娘だ。スタイルも一之瀬に引きを取らない——やっぱり嬰兒あいつはこう言うのがタイプなのか?)

と思考があらぬ方向に行ってしまうそうになり、再び嬰兒をダシにしてしまいたくなる衝動に駆られるが、二度も同じようなこととして機嫌を損ねられるのは止めておいた方がいいと別の方向から話を切り出すことにした。

「その代わりと言っちゃなんだが、少し相談に乗ってもらいたいことが有るんだが」

「え、相談……………私に?」

「ああ、知ってるの通り今のオレはあちこちから面白がられてるんだが、それは有栖の方も同じ——いや、ある意味でオレ以上のようだな」

綾小路は昼休みのことを思い出すことで言葉に込める感情を強くする。

それを感じ取った佐倉も息を呑んで続きを聞いた。

「Aクラスじゃ、有栖と馬の合わない生徒——葛城って言う奴なんだ

が、そいつとでクラス内が真つ二つに割れているような状態らしくてな、オレも昼にそいつと部下みたいな奴に絡まれた」

「は、はあ」

正直、クラス争いなど自分のようなものには大して関わりないと思っていたので気の抜けた返答しかできない。

もしかして上位クラスになるための協力要請かと脳裏によぎり――思いつきり遠慮したく、迷惑な申し出に対してどうにかして断りたいと頭を悩ませる。

「昨日のはただの事故だがオレ自身、どうにも心に引つ掛かるものがあったてな……様子も見に行きたいが手ぶらじゃ、どうにも足が重くな」

綾小路は頬をかきながら恥ずかしいような仕草で、

「何か手土産と言うか贈り物と思ってるんだが、何にしようか分からなくてな」

ここまでくれば佐倉にも綾小路が何を言いたいのかが理解できた。

考えていた可能性じゃなくて安心したが、これはこれで難題でありどうにも困ってしまう。

「見た感じ、佐倉はセンスが良さそうだし――手ごろなアクセサリーとか縫いぐるみとか見繕うのを手伝ってくれないか。

勿論、最終的にはオレが決めるから不評だったとしても佐倉の所為にしたりしない」

「あはは……そう言うのは榎田さんに――」

センスがいいと褒められたのは素直に嬉しいが、他人からの恋愛相談など初めてである自分には荷が重いとどうにも乗り気になれない

――寧ろ、こう言うことに打って付けなのがDクラスには居ると話を持って行くこうとするが、

「こと有栖に関することは……金輪際、榎田には話したくない」ときっぱりと否定された。

朝は許すと言っていたのに、なんだかんだで根に持っているなど思いつつも坂柳とのことをとても大事にしているように感じ――それは羨ましくも嫌な気分には程遠くて心地良い気分であり、最初に抱い

ていた警戒心を解いて苦笑しながら答えた。

「うん、わかった——どこまで役に立てるかは分からないけど協力する」

「済まない。恩に着る」

「ううん。どういたしまして」

「じゃあ、早速ケヤキモールにと言いたいが——予算の捻出もしたいから明日にでも頼みたいんだが」

「あ、うん。全然大丈夫だよ。その方が私も助かるし」

「じゃあ、明日はよろしく頼む。ああ、佐倉の趣味のことは言いふらしたりしないから安心してくれ」

そう言って、その場はお開きになった。

（そこは信用してるよ——でも、あんな風な想われ方ならどうだったかなあ）

去っていく綾小路の背中を見ながら佐倉は自分が抱えている問題と比較してしまい、どうにも坂柳が羨ましい、幸せそうだなあと心の中で溜息をつきながら自分も寮に戻っていった。

綾小路は去ったと見せかけ物陰に身を隠しながら佐倉が行くのを確認し、その周囲に誰かいないかも警戒するが目ぼしい人物は見当たらず、今日のところは大丈夫そうだと判断する。

（それにしても来月もポイントは入らないだろうし……また櫛田、いや嬰兒からの依頼だし必要経費とか言ってせびてみるか）

端末を取り出し、須藤の退学回避で大きく減ったポイントに辟易しながらも今後を考える。

坂柳を引き合いに出したことで佐倉の中で綾小路がストーカーであるという疑惑は大きく払拭されたはずだ。

坂柳と佐倉じゃ色々な意味でタイプが違うし、まさか自分に粘着しているストーカーが他の女との恋愛相談をするなんて思わないだろうし、裏をかいて自分を騙そうとしていると考えるほど疑り深そうないタイプにも見えなかった……だからこそ付け込まれて有効な対応も出来ないのかも知れないが、それを今言っても仕方がない。

明日の買い物はストーカーから見ればデートに映り、綾小路に嫉妬と狂気を向けてくる可能性はある——そうなつて自分に向かつて凶行に來られれば、ある意味で問題は解決なのだが、そうそう思い通りに事が運ぶとは思ってはいない。

(それでも佐倉から被害相談をされるか、現状を聞き出す足掛かりにはなるだろう)

その代償としてストーカーの敵意の他に二股だの邪推が出回りかねがいらろうが、そこは佐倉を誘う口実を本当にしてしまえばマシにはなるだろう。

冷やかし具合は増すが不愉快な陰口よりかはよっぽどいいし、そうやってブームが加速してさっさと飽きてくれれば後々に余計な気苦労を気にしなくて済む。

(兎も角、明日だ)

消極的打算で自分を納得させながら綾小路は今度こそ帰路に就いた。

何事もなく明日が今日になり、俺は校内を適当に歩いていた。

さて綾小路に佐倉のことを頼んだのはいいが、何か進展があったかな？

まあ、任せると言った手前、俺の方から何かしたり訊いたりするのもどうなので異能による監視もしていない。

ぶっちゃけ手駒になる様なのがないだけなんだが……。

鳥を使役するにしても餌代はバカにならないし、この前のネズミの死骸もとつくに腐ってしまい使い物にならないし『死体作り』で死後硬直は遅らせてられても腐敗はどうにも出来ないから、そうホイホイ使う訳にもいかない。

ああ、つくづく平和な場所では使いづらいな。

「あら誰かと思えば、いつぞやの」

と声を掛けられ振り向くと白髪ロングの女子が居た。

「……ああ、確か椎名だったか、入学式の日以来だから随分と久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです。嬰兒くん」

挨拶して近づいてくる椎名。

特に目的もなく歩いていただけ、ここは図書室の近くじゃないしCクラスの近くでもない。

見た所、帰るようでもないし部活かなにかか？

それにしてもたった一回会っただけの俺を覚えていたのはいいとしても苗字で呼んでよくしないまで律義に守ってくれるとは。

「実はこれから茶道部の部室に行くんですけど、良ければご一緒しませんか？

お茶も出しますし前に言っていた『お話』の続きも是非聞きたいのですが」

俺にとってはただのその場しのぎ話題だったが、椎名には違ったようだな。まさか今になって取り上げられるとは。

しかし断るだけの理由もないし、

「それは構わないが」

誘いを了承する。

「はい、ありがとうございます。では早速行きましょう」

椎名は笑顔で応えて、先導するように歩き出す。

文化部の部室棟はすぐそこで椎名の所属する茶道部の部室を開ける。

畳と障子の部屋なんて初めてだな——それに庵に窯が吊るされており如何にもな風情がある。

とやや感動気味にもなったが部室の中には誰もいない……俺たち一番乗りなのか？

「あ、正式な部活再開は明日からなので今日は私たちの貸し切りですよ」

椎名が律義に説明してくれる——しかしそれでは部活動じゃなく完全な私用じゃないか、ただ話をしたいだけならこの場である必要もないのに、どういうつもりだ？

何よりもちよつと残念でもあり内心で落胆してしまう。上級生と
かにもゆつくりと話が訊けると思っていたんだが……………。

『たったひとつの願い』——ここでも聞いてみたかったですか?」

ずばり言い当てられて俺はどうでもよかった感情を少しの興味に
入れ替えて椎名を見た。

「ああ、是非に」

「ただの私の推測で良いならお聞かせしますよ。まあ、立ち話もなん
ですから座りましょう——すぐにお茶もたてますので」

促されるまま俺は庵の側まで行き胡坐をかき、椎名は正座して向か
い合うように座る。

正直、殺風景なイメージも否めなかったが椎名が茶道具を取り出し
て茶碗をしゃしゃやかと茶をたてだすと華やかさとは違う美しさが
醸し出され……………これが生の“わびさび”ってやつか。

「どうぞ」

差し出された茶碗を受け取りゆつくりとすすする。

「ずうー」

うーん——渋みがやや強く温度もちよつと高いな。

「すみません——先輩方から教えて貰っているんですがまだ日が浅い
もので……………」

おつと顔に出てたかな?

「俺みたいになずぶの素人にそこまで畏まらなくても……………それより
も——」

「はい。お話の続きですね。繰り返しますが、これは開くまで私見で
す」

椎名は苦笑したままに先の話の続きにと前置きを置いて言葉を続
ける。

「もしも二年生の先輩が願うとしたなら——入学からやり直したいと
願うんじゃないでしょうか」

「なんでも叶うのに随分と慎ましいね」

それならAクラスに今直ぐなりたい、の方がまだ分かり易いが
……………と云うのを考えていると、どうにも笑えない事情が

浮かんできてしまうな。

「はい。なんでも二年の先輩たちは皆、現Aクラスにして生徒会副会長の南雲と言う方の独壇場に置かれているとか。

なので、やり直しの機会を持つてそうならないように——もしくは取り入れるようになさろうとするんじゃないかと」

「なんとも漠然とだがシユールな事だ。それでその副会長とやらは最初はAじゃなかったと?」

「当初はBクラスで逆転し、今ではもう他クラスの追隨を許さないとか」

「そこだけ聞けば、今の俺たちにも希望が見られるな」

「三年の先輩によるとそこまでに退学者の数が更新されてしまったと」

話が進む度にどんどん重い雰囲気になってくる。

椎名自身が威圧感を発している訳も無く淡々と聞いたことを言っているだけなのに——この誰もいない茶室と言う空間が凄まじく圧を押し上げてくる。

静かきなら図書室もそうだし本好きだと言っていた椎名にも合っているイメージがあるが、お互いに面を突き合わせることを自然とする茶室では向き合うことを拒否できない。

「……………Cクラスにもそんなことをしそうな奴が居たりするの?」

息苦しさか心苦しきさなのか分からない感覚の中でそんな言葉を絞り出すと椎名は頷き話を続けた。

「龍園くんと言う人なんです、Cクラスの中では誰よりもA——上上がることに執着しています。恐ろしいほど貪欲に……………そこそ退学者が出ても構わないとも」

それはまた随分と過激だな。

「その為に今はクラスを纏め上げてリーダーになろうとしています」

椎名の声には在り在りと諦めのニュアンスがあった——そいつがリーダーになるのが余程不快なのか?」

「敵対関係である俺にそんな事を教えてくれるのは、龍園と言う奴が

リーダーになるのを阻止したいから協力しろと言う意図か？」

「いいえ」

即答かよ。ならば何が言いたいんだよ？

「龍園くんは褒められたやり方をするような人ではありませんが、上のクラスに上がろうという意思は誰よりも高く、その為に誰よりも考えて行動できる——Aクラスになるには欠かせないと私は思っています」

「個人の好き嫌いじゃなくて、クラスとしての損得で判断を下せる当たり、椎名も十分リーダーになれると思うぞ」

偽りなき本心を語ると嬉しそうにしながらも首を横に振る。

「そう言っていただけるのは嬉しいですが、Aクラスになると私ではやはり力不足です」

Aクラスもくてきを定め、何が最も必要なかを明確にして決断する……どっかの誰かさんに爪の垢を煎じて飲ませないな。

そんな椎名が消極的ながらも認めているあたり、龍園とやらも「聞く耳」か「見る目」は持っているのだろう——どんな風に活かそうとして来るかは話を聞く限り良いイメージが湧かないけど。

そう考えてみてさっきの椎名の『退学者が出て構わない』を思い出す。

何処まで本気かは知らないがその結果、どんなマイナスがクラスに降りかかるか分からない現状において、自クラスから退学者を出すのは論外だ。

それでいてこんな誰もいない部屋に男女が二人きり、それも男の方は部外者であり、そうでなくても椎名はレベルの高い少女であることは間違いない。

以上のことからさっき言ったことを実行しようとするなら必然的に——

「ひよっとして俺って罾に掛けられてる？」

誰もいない二人きりの部屋で俺がムラっとして椎名を襲ったとかでっち上げを訴えるとか？

「あ、そんなことは考えてませんでした………現状、そう思われ

ても仕方ないですし——もしもそうだとして嬰兒くんならどうしますか？」

弁明しようとしたのも束の間、興味津々で訊いて来る姿は判断を鈍らせる……なんだかんだで喰えない娘だ——ので俺も相応の答えで返すことにする。

「次の朝には椎名の遺書が発見されてる筈だ。

「嘘をついて陥れようとしたことを後悔しています。死んでお詫びします」と書かれた内容のが——そして寮の自室には服毒自殺した椎名がベッドに横たわっている」

「……………」

あまりの答えに絶句している椎名——予想の斜め上を行くなんてレベルじゃないからな。

「……………」殺人も厭わないと？」

長い沈黙の後でやっと返答が来た。

「バレなければ——立証できなければ問題ないんだろ？」

「いや、リアルかつシニールに警察沙汰ですよ」

「だから？」

「……………」

心の中ではイカレていると強く口調で言っているかな？

まあ、本当にそうだったなら警察程度は誤魔化せるかもしれないが俺が関わっていたことが分かればドウデキヤプルが出張って徹底検証の元に処断されてしまいうだろうな。

そうなったら「お友達」にした椎名に派手な終わりの始まりを任せてみるのもいいかも知れない。

「——安心してください。龍園くんがリーダーになるのはまだ少し先ですので、今回は本当に私がお話ししたかっただけです。

のでズバリ伺いますが、嬰兒くんなら『たったひとつの願い』で何を願いますか？」

おいおい『お話』の人じゃなくて俺かよ。

だが、そうだな。俺が願うとしたなら——

「英雄にして聖人にして平和主義者の彼女を生き返らせる……かな」

「平和主義者さん……ですか？」

「そうだな——Bクラスの一之瀬は知ってるか？」

「はい。Bクラスの学級委員リダーを務めている方ですよ、少しお話ししたことがあります」

なら話は早そうだな。

「その一之瀬を滅茶苦茶に強くして、強さと同じくらい強したたかにして、彼女の比じゃないくらいに綺麗事を貫く正しさを持った女だ」

「はあく……そんな人が……」

半信半疑つて顔だが、それ位はいいだろう。

「……嬰兒くんの大切な人と言う訳ではないですよね？」

「ああ、全く違う——それでここから先を話すには今の椎名じゃ足りないぞ」

椎名だろうと綾小路だろうと誰であろうと……いや坂柳と話をした時の手札として使えるならありかも知れないかな。俺の期待通りの答えを持っていたのだとしたら十二分に話せるだけの資格は持ち合わせているとも言えるし。

「そうですね。残念ですけど仕方ないですね、ではそれはまたの機会に」

期待していた訳じゃないがあっさりと引き下がる椎名に肩透かしを食らった気分だ。

「それで……もうここでは無理でしょうが——また私とお話をしてくれませんか？」

ん？なんだ、ちよつと意味が分からないぞ——何をそんなに大袈裟に？

「まず間違いなく、これからのCクラスは良くない……いえ悪く言われるようになるでしょう。ですがだからと言って全員がそうではな
いんです——頭の片隅でもいいんで留めておいて貰えませんか？」

おやおや、一人でいることが苦になるタイプには見えなかったが本当は寂しがり屋さんなのかな？

「自クラスで言えないことなのは分かるが、敵対クラスの俺に言うのもどうかと思うぞ」

「伝え聞く限りのDクラスは現状、敵と呼ぶには程遠いと思いますが」
これはまた耳の痛い話だが、確かにその通りだ。

今の椎名の話ではCどころかBも早急に一丸になろうと動き出しており、Aにしても内部対立はあるようだが、それでも纏まろうとしているのは共通している。

ただでさえ出遅れているのにDクラスでは誰もクラスを纏めようとする気概のある奴が立たず、その必要性を理解している奴もいないに等しい……………理解しててもその気のない奴じゃ話にならないし、正に不良品のクラスだな。

しかし伝え聞いたね——大人しそうな顔して何かと耳のいいお嬢さんだ。

ならば今この場を設けたのは——
「平和主義者の話を聞かせるにしても椎名が気に入るかどうかは保証できないぞ」

話題を戻して椎名の様子を窺うがそこには何ひとつ気負うことない自然体で俺を見ている。

「構いません。Cクラスにはお話や小説を好む人が居なくて話し相手が居ないので」

嘘ではないだろうが本心とも思えないな。

「俺も椎名の目に入るような本好きじゃないぞ」

「そうだとっても——とても興味深い特技を持っていると聞きましました。」

それにDクラスにはAクラスの生徒と仲睦まじくしているとも……………それなら話し相手になって貰うくらいは」

聞きようによってはスパイに勧誘されているようだが、ジツと観察するのを隠さなくなっていく仕草はそうでない物語っている。

「……………俺がどういう奴なのか、クラスとして害になるか或いは益になるかを秤に掛けてるのか」

「そうストレートに来られると返って困ってしまいますね。実は昨日のお昼、食堂には私も居まして」

椎名は苦笑しながらも隠そうとはせず決定的な情報ことばを出す。

俺がAの戸塚に催眠を掛けたのを見ていた訳だ。

初めて教室で催眠を使った後で山内の奴が被害者面して言いふらしていたから、椎名の耳にも入っていても不思議じゃない。

俺が気まぐれや好き嫌いで使うかどうかを『お話』にかこつけて確かめようとしていた訳か。

今までの話も嘘ではないだろうがクラスにマイナスになるような物は話してはいなさそうだし、その上で個人でとなれば——これは椎名にとっての正しいことをしようとしているのか？

一対一の茶室なのもクラスのことを話したのも何が引き金になるかを探るため……おっとりした風貌とは裏腹に中々、喰えない女で面白い。

「俺は愉しそうな手拍子に乗るつもりはない」

「……………それはまた……楽しい手拍子、つまりはそれが嬰兒くんですか？」

「どうやら理解したようだ。ならばもう話すこともない、さっさとお暇しよう。」

「お茶、ご馳走様。話が出来てよかったよ——それじゃあ、また」
「……………はい、また」

退室していく俺の返事に椎名は気持ちよく応じた。

やはり綾小路同様に見込みはありそうだ——龍園とやらに伝えるかどうかは未知数だが黙って待つのも面白くないし、さてどうしかな。

自分が・・・

ケヤキモールを歩く綾小路と佐倉は周囲からの視線にさらされながら目的地に向かっていた。

見られている原因は間違いなく綾小路にあるものの一緒居る佐倉にも少なくない好奇心はあった。

綾小路は全く気にしない振りをしながらも周囲への警戒を怠らず自分を見ている野次馬の中に嫉妬や殺意を持つ者がいないかを見定めていた。

しかし下世話な好奇や僻みを向けてくるが殺意と呼ぶほどの嫉妬心はどうにも感じない。

(嬰兒の言っていた最悪を念頭に見てみたがどうにもしつくり来ないな……一番いいのが考えすぎだが)

楽観的思考に流れてしまいそうになるが、そう言う訳にもいかない。

何故なら隣にいる佐倉もそんな視線にさらされ、いつも以上に縮こまっているがそれには恥ずかしさだけじゃなく、どうにも何かを誰かを恐れている様子が見て取れる。

元来、気が小さくて引つ込み思案であり人目のあるところが苦手だとしてもただ歩いているだけでここまで怯えるのは普通ではありえない。

(明らかに昨日以上に怖がっている。思い過ごしである線は消えたか)

ならば問題がどの程度のものなのか、深刻具合を確かめる段階に移そうと考えていたら目的地であるアクセサリーショップに着いた。

見るからにファンシーな外見と店外にも商品が並んでおり、男——とくに綾小路一人では敷居が高くて二の足を踏んでいただろう。

(ま、一番の問題は予算なんだが……)

ポイントが入るのは七月であり今の手持ちは出来る限り節約したいから余り高い買い物はしたくないが、より佐倉を安心させて被害状況を聞き出すためにはケチな所を見せるのは得策ではない。

こうなるとやはり嬰兒に必要な経費だとせびるのも有りだつたと思うが、櫛田同様に能力でポイントを補充されるのも先々を考えるとリスクが高い。

よつて一番無難な方法を取るしかなかった。

「佐倉……言い出しといてなんだが、あんまり高い物は無理だから――」

「あ、うん――その辺りは私もよく分かるから大丈夫」

同じDクラスであり懐事情はある程度は共通している。

実際問題、佐倉もかなりの儉約を余儀なくされているのだ。

いくら大事な娘へのプレゼントだからと言って、そこまで見栄を張つて更なる極貧生活なんて送りたくない世知辛い事情も十二分に理解できた。

佐倉にフオローされるもどうにも格好がつかない事情に綾小路も恥による照れが表層に出てしまい頬をかく。

そんな仕草に苦笑しながら二人は店に入つて行つた。

外観同様にファンシーな店の模様には佐倉は若干目を輝かせ、綾小路は物珍しそうにあちこちを見渡した。

オシャレなカバンやリボン、傘などが並びカップや文房具と言つた物も可愛らしくアレنجジされており、学生向けの安物ではあるがネックレスや指輪の類も豊富にあつた。

(マジな話、オレじゃホントにどれを選んでいいか分からないな………)

色々目移りしながら素直にそう思っていると佐倉はかつら付きのマネキンに飾られているリボン付きのカチューシャに目が行つていた。

「佐倉はこういうのを貰つたら嬉しいか？」

「え……あ……ごめんさい。私じゃなくて坂柳さんだったのに」「いや、まずは佐倉が良いと思うものを選んでくれたなら、オレも楽だから遠慮しないでいいぞ」

店に來た目的を忘れてしまい佐倉は申し訳なさそうに謝つてくるが、綾小路は氣にした風でもなく今度は自分ごとフオローを入れる。

「ポイントが入ったらお礼もかねて佐倉にも——」

「綾小路くん！それは流石に不味いから絶対に遠慮する！」

だが話があらぬ方向に行きそうになって珍しく大きな声で綾小路の申し出を拒絶した。

「あ、ごめんなさい」

直ぐに我に振り返り目を丸くしている綾小路や他の客や店員の注目を受けて、いつも通りに戻った。

「いや、オレの方こそ配慮したつもりだったが考えが足りなかった」

（この気迫をストーカーにもと思つたが——それで逆上でもされた日には取返しなつかない事態もありえるし……）

そう単純に事態が解決できない要因にドツボに嵌りそうになってしまう。

そんな思考を切り替えようと綾小路は陳列している商品を見回すと大きめのツバの白いリボンハットが目に入った。

（有栖の髪の色とも合いそうだな）

容姿は清純な色がどこまでも似合う娘であり、特に白がよく似合いそうでした。くりくるイメージに帽子と合わせて白いワンピースもセツトだと更に良い感じになりそうだと思つたがどんどん深まってく。

しかし綾小路自身がそう思つていても坂柳有栖自身の好みなど全く知らないのでは有難迷惑になりかねない——これでは佐倉を怖がらせているストーカーと変わらないと思つたを止める。

そもそもこの買い物は佐倉に被害状況を確かめるための建前であり、そこまで力を入れる必要性は全くない。

だからと言つて手を抜いて怪しまれるかも知れないが、目的と手段を間違えては元も子もない。

（建前に固執してどうする。目的は佐倉のストーカー問題の解決とそれにより嬰兒の機嫌を取ること……そしてオレの願いを叶えて貰うことだ）

既に嬰兒への要求は決まっております、出来るかどうかは別にしても嬰兒の異能を測るいい機会でもある。

その為にも依頼は完璧にこなす。

どうにも定まらない思考に改めて目的をハッキリさせる。

「佐倉、この帽子どう思う？」

白のリボンハットを手に取って話を振ると佐倉は遠慮がちながらもじつくりと見定めて口を開く。

「うん。いいんじゃないかな」

「本当か？オレに気を使つてないか？」

「ううん。そんなことないよ——私も坂柳さんに似合うと思う」

佐倉のニュアンスは自然な物であり、ひとまず安心を得る。

「そうか。なんとなくだからオレの独りよがりだったり、有栖の趣味に合わなくて邪魔になったりしないかと不安があったりしたが、佐倉みたいなセンスのいい娘のお墨付きが得られたなら大丈夫そうだな」
綾小路は本心でありながらも佐倉への過度の期待感を演出して自分のペースに持つていこうとする。

「そこまで信頼されても……」

と返されると綾小路は予想しており、そんな佐倉に“自信を持って”とフォロワーする形で繋げて話を弾ませる算段だった——しかし佐倉に満面の笑みで迷うことなく言った。

「あはは——綾小路くんがそこまで悩んで選んだんなら坂柳さんもきつと喜んでくれると思うよ」

完全に予想が外れて困惑する綾小路——やはり対人関係、特に女心についてはまだまだだったな——と心の中で自嘲する。

「お、おう……そうか。じゃあ、買って来るから待つてくれ」

ペースをつかみ損ねてしまい、帽子を持ってレジに向う。

そんな綾小路の背中を見ながら佐倉の心中では改めて坂柳への羨ましさと憧れが込み上げてくる。

綾小路は坂柳が本当に喜んでくれるかを真剣に考えており、自分がそう思うだけでなく彼女が困らないかの配慮もしっかりしているように見えた。

(私にもあんな風に想ってくれる人が居たらなあ)

グラビアアイドル『雫』として人気を獲得し多くのファンを持つも

その中には歓迎できない輩も混じっており、正に今の佐倉を悩ませている。

自分にも頼りたい友達や恋人がいたら——また彼女自身もそんな人に頼られ必要だと言われたら、どんなに嬉しいだろうと綾小路と坂柳の関係を思い描きながら憧れが膨らんでいく。

そして、そんな二人を巻き込んではいけないと佐倉は心の中で決意した。

完全に目的とは真逆に進んでいるとも気付かないまままで綾小路はレジでの精算を済ませ丁寧に梱包された帽子を持って戻ってきた。

「済まない、待たせたな」

二人は店を出て道を歩いていくも用件が済み、このままサヨナラでは何も収穫が得られないので当たり障りのなく話しかける。

「ありがとな。買い物付き合ってくれて」

「私も役に立てて嬉しいよ。坂柳さんはもっと喜んでくれると思うよ」

「ああ——そうだな。」

それじゃあ、お礼に今度は佐倉の方に付き合うが何かあるか？」

「そんなこと気にしなくていいから早く行ってあげて」

(この僅かな時間に何があったんだ?)

当初の怖がっていたのから一転して嬉しそうな声で返してくる佐倉の姿に綾小路の理解が追い付かない。

そもそも引っ込み思案で目立つことを好まない佐倉愛里。

進学による外部との接触禁止によって活動休止しているが、グラビアアイドル『雫』としての活躍はそんな彼女の唯一の自尊心プライドと言えた。フアンの応援や復帰の要望は励みだったのが、それが今や日常生活を脅かすものになってしまった。

そんな中で初めて美しく綺麗な場面を目に出来たことは佐倉の心にとつて堪らなく救いだった。

『運命って言葉を信じる？僕は信じるよ。これからはずっと一緒だね』

『いつも一緒にいるよ』

恐怖が始まったブログへの書き込みを思い出す。

『今日は一団と可愛かったね』

『目が合ったことに気づいた？僕は気づいたよ』

運命と言う言葉を初めて呪いたくなくなった。

『ほら、やっぱり神様はいたよ』

こんな出会いを組んだ神に文句を言いたかった——しかし、たった今の出来事で気持ちが変わった。

『実は有栖とは八年振りに再会した幼馴染なんだ』

教室で聞いた綾小路の台詞を思い出す。

その再会から見るこの出来た一幕と巡り合わせてくれた運命と言う言葉の美しい一面に感動を覚えた。

この美しくも甘美と感じる心は佐倉が運命のおぞましくも苦い一面を知ったからこそ得られた代物だった。

『こんな再会、神の思し召しかと思った——』

何も知らないままであったなら、古典的なラブコメのような展開だと流したままであったろうし、そもそも綾小路の頼みを引き受けたかも分からない。

この気持ちを知識としてだけでなく確かな実感として知るための道筋であったなら神の意地悪な意思もそこまで悪いものではないと思えた。

(だから私の問題に巻き込んじゃダメ——あんな人に関わ^けら^{され}るなんてイヤ)

美しいと感じた気持ちを守りたい、譲りたくない。

佐倉の中で憧れが使命感へと置き換わり、根拠のない強気と樂觀が無自覚なまま増長されていった。

「いや……しかし……」

「大丈夫、きつと喜んでくれるって。さあ、早く」

(まずいな……しくじった)

綾小路に焦りが浮かぶ。

ストーカーへの恐怖をゆつくりと緩和させて被害状況を話してもらい、大義名分を片手により堂々と捜査して被害報告を学校に提出し

て佐倉の安全を確実に確保した上で厳正な処罰を回すように手を回すか、或いは影ながら自らが脅しをかけるかを考えていた。

しかし綾小路の建前に感化された佐倉は自分で決着をつける決意を固めてしまい話を切り込む隙が見当たらない。

(このままでは依頼が達成できない……いつそのこと、さつきまでの態度から何か困っていることがと訊いてみるか)

よりストレートにストーカーにあつてないかと聞ければいいが、そうなる何故そう思ったのか知っているのかを説明せねばならず、嬰兒の異能を口外することもできないし綾小路自身もその理由を全く知らないから結局何も言えない。

言ったところで綾小路の頭が可笑しくなったと思われるのが関の山だろう。

(さて……どうするか)

「あれー、綾小路くんじゃん」

突然の呼び声に振り向くと緑色の長髪を腰まで伸ばしたスタイル抜群で美人と評判のクラスメイト長谷部波留加がいた。

「なになに、幼馴染を差し置いて別の娘とデート?」

「ううん、坂柳さんへのプレゼントの買い物だよ。私はただ付き添い」

綾小路が答える前に佐倉が答えた。

「へえ、そうなんだ——プレゼントってことは誕生日とか?」

好奇心丸出しで質問を続ける長谷部に普段の綾小路なら「違う」と短く否定して終わらせるのだが——佐倉が食い付き具合からして利用できると感じ丁寧に応じることにした。

「いや再会を祝してと、Aクラスのリーダーになろうとしてるようだから激励も兼ねてな」

言いながら佐倉に目配せすると笑顔で小さく肯いた。

何処も彼処も噂になっていて何もなしの手ぶらじや足が重いから——と言う佐倉を誘う口実を鵜呑みにしているのは間違いなさそうなので、この際だからこのまま話題を広げて目的と切り替えようとしたが——

「それはちよっと聞き捨てならないぞ」

新たな声に顔を向けると同じクラスの幸村輝彦がいつも以上に目を鋭くさせて近づいて来た。

「いつから居たんだ？」

「偶々通りかかっただけだ——いや、そんなことはない」

不本意な形で目論見を阻害された綾小路が煩わしそうに尋ねて歓迎できないと言外にアピールしているのも構わずに幸村は疑惑と憤怒の目を向けてくる。

「幼馴染は別にいいが、倒さなきゃならない最大の敵のリーダーへの激励とはどういう見だ？」

堀北とも裏切らないと誓ったのをいきなり反故にするつもりか？「有栖とはちゃんと戦う——堀北以前に有栖自身とそう約束したからな。」

だからと言ってそこまで邪険にするつもりはない。

何よりこの程度のことでは何が変わると言うんだ？

「個人の交流に口出しなんかしたくないが、その果てにお前が彼女の為にDクラスを裏切らないと言い切れるか？裏切らないと言ってすぐに敵に激励を送るんじゃない、お前の言うことなんて何も信じられない」

幸村も堀北に劣らずAクラスへ上がることへの拘りが分かり易いほどに示している。

敵に付入れられる隙が僅かでもあることは許容できないのだろう。

(この頭の固さがDクラスの由縁か？)

漠然とした感想を抱きながら——その前にもっと目を向けるべきことがあるだろう——と正論を返そうとする——それが火に油を注ぐ結果になっても話が発展していけば求めている情報わだいに繋げる目論見はまだ有効だと。

「幸村くん。綾小路くんはやって良い事と悪い事が分からない人じゃないよ」

だがその前に佐倉が庇うように言って、またしてもペースを掴み損ねた。

「え、なにになに——綾小路くんって堀北さんや嬰兒くんと一緒ってイ

「メーজだけでも佐倉さんとも仲いいの?」

長谷部も便乗して面白そうな目と声で話に入ってくる。

「さつきも言ったが俺は個人の交流に口を出す気はない。でも自クラスじゃないのは——」

「そんなにオレと有栖の交友が気になるならお前らも一緒に来ればいいじゃないか」

言い募ろうとする幸村だが、綾小路の提案に今度は皆が揃って顔を向けてきた。

「オレは別にやましいことをしようしてる訳じゃない。」

「ここであれこれ言い合いするよりも直接見て聞いた方が手っ取り早いだろう」

益体のない会話を続けるのは目的のあるなしに関係なく不本意であり、打ち切る意味でもまた本来の目的が流れそうになったのを再び手繰り寄せる意味を込めて言った。

「百聞は一見に如かずか……いいだろう、確かにその方が建設的だ」
綾小路の言に納得した幸村は了承する。

「えー、私たちも行つていいの——ならお言葉に甘えようかな」

長谷部も面白そうに話を受けた。

「けど……折角のプレゼントなのに私たちが居ちゃ……」

佐倉は歯切れが悪く、いつも通りに縮こまってしまおうが——

「いいじゃん。本人が良いって言ってるんだし——それに佐倉さんだって買い物に付き合った手前、気にはなるでしょ」

「えー、あー、うん」

長谷部が押し切るような形で頷いた。

「よし決まり! あ、それでもう一人誘いんだけど、いいかな?」

「ああ、別に構わないがあんまり大人数はよしてくれよ」

「問題無し。一人だけだし同じクラスだから幸村くんの心配するようなことも無し」

了承を得た長谷部は端末を取り出してメールを送る。

「よし——部活が終わったら来るって。それまで待ってて欲しいんだけど」

「急ぐ訳じゃないから構わないぞ」

「ふん。注文の多い女だ」

「それじゃ、来るまでどっかで時間潰そっか」

終始楽しそうな長谷部はどこか適当なカフェでもないかと足を進める。

幸村は悪態をつきながらも佐倉は無言なれども決して嫌そうでもなく続いていった。

一緒に歩きながら綾小路はひとまず安堵し、どうにか目的を果たせそうだと心の中で気を引き締めた。

晴れ渡る青空を眺めながら俺は何をするでもなく道端のベンチに座っていた。

昨日訊いた龍園とやらのことをどうしようか——ひと晩ずっと考えたことがまだ脳内でぐるぐると回っている。

堀北や綾小路に伝えて出方を見るのも一興ではあるが、それは今でなくてもいい気もする。

だからと言ってちよっかいを掛けて来るまで放って置くことはしたくない。

いつそのこと俺自身が正面から挨拶に行くかとも思ったが、クラス争いなんてどうでもいいのに一時の感情で動き、目を付けられるのはやっぱり嫌だ。

さてそうなる伝えるべき相手は絞られる——Cクラスの位置関係からしてDクラスと同じく共通の敵と言えるBクラスのリーダー格である一之瀬帆波だ。

だが綾小路のお陰で堂々と会いに行くのは邪推を助長させかねない。

この原因である綾小路に責任を取らせようにも今は別の依頼の最中であり、比べるまでもなくそっちの方がより重くて急を要すから詰まらない茶々は入れられない。

ああ、なんでこんなタイミングで、せめて事が解決した後かもつと

早くに聴いていれば……………いや椎名が俺に話をしようと思ったのが今の依頼をした際の騒動なのだから無理な相談か。

お、あれこれ考えてる間に一之瀬が来たか。

『鵜の目鷹の目』は餌代も切り詰めないといけないし『天の抑留』で視認した方が確実だったが、この晴天じゃ出来ないから『地の善導』で一之瀬の歩くテンポを探し出して出来るだけ自然な接触を装うように先回りした……………図書館での僅かな時間での記憶は臆気だったので本当に苦労したな。

「おやおや、なんとも不景気な顔してるねえ」

ああ、ついこの前も同じことを言われたな……………俺って他に言われようがないような顔してんのか？

「実際に不景気なことを考えてたからな——出来るなら話を聞いて欲しいんだが？」

「うん、いいよ」

嫌な顔ひとつせず即答か……………予想通りだな。

笑顔のままに俺の隣に腰を下ろして優しい顔としか表せない表情で訊いてきた。

「それで何があったの？」

それに俺は少し真剣さを添えて目を合わせる。

「……………」

瞬間に一之瀬は一気に緊張した顔になり息を呑んだ。

ああ、それでいい。これからするのはBクラスのリーダーとの会話だからな。

「結論を先に言う——Cクラスが遠くない内に仕掛けて来る。狙うのがDクラスかBクラスは分からないが」

「へえ——それはわざわざありがとう。」

それで、動き出す前に一緒に倒しちやおうってこと？」

一之瀬の纏う空気がより一層重くなり、こちらの真意を見定めようとしてきた。

そして出てきた推測は順当ではあるが本人はどうにも乗り気じゃないニュアンスだった。

自分たちから手を出すようなことはしたくないか——これが『申』並みの実力を有しているなら実に正しいが、そうでないのなら甘いと言わざるえない。

さて一之瀬帆波の場合はどっちかな？

「いいや、逆だ。Dクラスが何かされても手を差し伸べず、協力を求められても拒否して欲しい」

「にやはははは——それはまた随分とドライだね。余計なことはするなつてこと？」

まあ半分はその通りだ。近い内に綾小路と堀北あたりにも話してどう対応するかを見るためには外側からの干渉は邪魔だ。

そしてもう半分は——

「——仕掛けて来るつて言っても小手調べか挨拶程度だろうからな。それしきの事態、自分たちで乗り越えられなきや先行きが悪すぎる」

「うくん。正しいかも知れないけど……今のDクラスじゃ、それかなりの難題じゃないの？」

おお、ズバリと言ってくれる。

底辺の不良品クラスってレッテルを鵜呑みにする差別的思想とは無縁に見えるが、それを差し引いても敵と呼べない……寧ろ助けなきやいけないとか同情から来てそうだな。

「それに何だか同じDクラスよりも敵であるCクラスの方を信じてる風に見えるけど」

さらにはクラスを裏切るのかと糾弾するような目で見てきた……中らずと雖も遠からずではあるからここは丁寧にかかないとな。

「実は昨日、Cクラスの親切な知り合いに教えて貰つてな。

龍園つて中々のやり手がリーダーに名乗りを上げてるんだと、方法は強引で褒められたものじゃないらしいから、お前と対極な奴のこ
とだ」

「人から聞いただけなのに随分と確信めいて言うね」

「そこそこの才気を感じさせる娘だったからね——そいつが認めてる

ならとりあえずは信じてみようかなってな」

「へえー、とりあえずね……その知り合いのことも信じてるって訳じゃないんだ」

「信じたいとは思ってるよ」

偽りなく本心を言ったが、それでも一之瀬にはお気に召さないみたいで表情から笑みが完全に消えてしまった。

「教えてくれることを確かめる為だけにクラスメイトを見捨てるのも有りだって言うんなら、あまり好きになれないな」

ジト目で俺を見て来るが軽蔑や怒りは感じられない。

平田同様に人間をモルモット扱いするのは間違っていると訴えているのは伝わってくるが……

「……別に俺が言ったからどうしろとは言わん。ただ自分の為に俺を利用してくれればいい」

「へえー、Bクラスの為じゃなくて私の為だけに、もしかして私、挑発……ううん、試させてるのかな？」

「さてね。どう解釈するかは一之瀬の自由だ」

実際の所、俺の頼みなんか無視してDクラスを助けるのも先んじて一緒にCクラスを攻めようと話を持っていても全然構わない。

それでも仕掛けるのが気乗りしないなら何らかの備えをしておくだけでも別にいいさ。

何も知らないままCクラスに良いようにされたりせず、その過程で俺を使おうとしてくれれば綾小路の気も多少はそれてくれるだろう。

「そう。ならひとまず話は持ち帰ることにする。どうするかは私たちで決めるから、じゃ」

立ち上がり去っていく一之瀬——どうせだったら情報の対価に誕生日でも訊いとけばよかったかな。

まあ、なにせよお膳立てすべき相手はまだ居る、伝えるべき時が来るまで待つか。

助けが・・・

（——なんでもこうなったんだ？）

綾小路は日暮れ前の空を眺めながら思った。

放課後のカフェ、外のテラスでクラスメイト達とお茶を飲みながら呑気に会話する——綾小路が当初求めた普通の学生生活の中でも上位にあるのに余り楽しいとは感じられない。

はつきり言って晒し物にされている気分だった。

「それで、綾小路さんと坂柳さんって、いつ再会したの？」

向かいに座っている長谷部が興味津々で問いかけて来る。

長谷部の隣にいる佐倉も遠慮がちに綾小路の隣の幸村も興味ないと言う態度を取りながらも気になるようでチラチラと視線を向けて来る。

「入学したその日の夕方だ……ちょうど今ぐらいの時間かな」

「うわ、正に運命って感じ！」

「うん。私もそう思う——神様っているんだなあ」

長谷部に同調するように乙女心全開で佐倉も会話に入ってくる。

普段や最初に話した時とは打って変わった姿は何もなかったなら良い傾向だろうが、現時点では無視できない問題があるため素直にそう思えない。

「あー、神だの信仰だのを否定しないが、物事をあまり美化して考えるのはどうかと思うぞ」

そこに幸村が如何にもな調子で茶々を入れる。

「幸村くん——それで幸せ？」

「神様を信じないの？」

「嬰兒の真似つもりか……全然似てないし、似合わないぞ」

女子二人は嫌な顔ひとつせずに戻し、呆れたように指摘するも幸村は幸村で今の会話は不快ではないようだ。

それは皆の共通認識になったようで長谷部を進行役にして話は和やかに進んでいく。

「ハハハハハ——意外に乗り良いよねえ。」

でもキョーちゃんがこの手のことに否定的なのも意外だったよね」
「キョーちゃん？」

「桔梗ちゃん——櫛田ちゃんのこと。
綾小路くん、そのことで喧嘩したんでしょ？ハッキリ言って、そんなのとは無縁なイメージだったから」

長谷部に話題を振られ綾小路も話に混ざっていく。

「櫛田は神を信じるよりも友達みんなで手を取り合っててなんとかする方が有意義だと考えてるタイプみたいだな」

この手の質問もいつされてもいいように答えを練っておいたので淀みなく言った。

実際には櫛田が神に対してどんなイメージを持っているかなど全く知らないが、いつかの夜に吐き出していた愚痴の数々から神を信じるよりも取って代わって自らが信仰されたいとか考えていても不思議ではない。

なんであれ命が掛かっていた極限状態とはいえ、あっさりと綾じぶん小路を売ったのだ——後の謝罪が本心であろうがなかりうがあまり良い印象は持てないし関りたくはない。

「はあ、それはキョーちゃんらしいね。けどそんな意見も有りだろうし、喧嘩するほどのなの？やっぱり坂柳さんのことバラされたのがそんなに嫌だったの？」

長谷部は納得できないと踏み込んでくる。

普段は物静かで誰かと絡むことが殆ど見受けられないが、やはり女子だけに色恋には普遍的に強い興味を持っているようだ。

「まあな。有栖とのこと当時は本当に覚えてなくてな——もつと時間を掛けて思い出していきかけたのに、それを……………」

言いながら不機嫌を演出するが、透かさず軌道修正が入る。

「いや、でもキョーちゃんって、そんなにホイホイと他人との内緒話を漏らすようには見えなかったんだけどな」

「ああ、オレもそう思ったから話したんだ。

後から聴いたら気付いた時には嬰兒に言わされたそうだが——それでその際に神じゃなくてみんなですって話に持つて行って強引に話

題をそらそうとしてな——開きなるなどオレも頭に血が上つちまつたんだ」

考えていた作り話を終えて思案する。

(嬰兒なら神なんて存在が本当にいるかどうかも知っているかな?)

そもそも単に嬰兒に合わせただけで綾小路は神が居ても居なくてもどうでもいい。

だが嬰兒自身が言った言葉であるなら喰い付いて話が弾むかも知れないと脳内に会話のストックをひとつ追加した。

「へえ〜。キョーちゃんもやつぱり人間なんだね〜」

「ああ、嬰兒も言ってた通り、偶には息抜きや気晴らしをしてやった方が絶対に良いだろうな」

いつかのストレスをぶちまけている姿を思い出し、それが櫛田にも周りにとつても最良であり、その果てに表の顔が本心になってくれたなら………それでもやはり心の中のしこりが取れる気がしないと内心で自嘲する。

「で、綾小路くんにとってのそれは坂柳さんって訳ね」

「そうだな——最初は戸惑ったが今は有栖と会ったり話したりするは少し楽しい」

絶妙に話を元に戻しつつ更に踏み込んでくる長谷部だが、綾小路は慌てることもなく如才なく答えた。

「……………」

綾小路の惚気にしか聞こえない台詞に——その似合わないギャップに三者三様に胸が詰まってしまい何も言えない。

そんな中で綾小路は目を閉じながらお冷を口に運んでゆつくりと飲む。

(嬰兒に習ってみたが、下手に否定するよりかは効果的だな)

しかし綾小路の目的は冷やかしをかわすことでなく佐倉のストーリーの被害を聞き出して対応することだ。

幸村が何か言いたそうにしているが、その前に主導権を取って今度こそと思ったのだが——

「お〜い！待たせたな」

「ああ、来たね。みやっち」

またしても第三者による横槍で流れがあらぬ方向に行ってしまった。

近づいてくるのは細長い弓袋を肩に担いだクラスメイト、三宅明人だった。長谷部が振り返り手を振る。

彼女が招いたもう一人に間違いないようだが、相手が男子だったのは少し意外だった——しかし思い返せば長谷部も三宅も物静かで誰かと絡むような様子はなかったので知らない所で繋がりを持ったのか。

「それじゃ、面子は揃ったしそろそろ行こっか」

「えー、俺にも何か注文させろよ」

息こそ切らしていないが、そこそこ急いできたようで、立ち上がる長谷部に三宅から文句が出る。

「もう直ぐ日が暮れる。暗くなる前に帰りたいんだが」

幸村も文句を切るように立ち上がり、三宅は不満顔になるが直ぐに諦めたように溜息をついた。

「うあー、冷たいな、つとに……………」

「アハハ」

佐倉も苦笑しながら同じく綾小路も席を立ち、一同はカフェを出た。

一之瀬と別れ俺は寮の自室に戻った。

窓から空を見上げるが日が沈むにはもう少し掛かりそうで『天の抑留』で空に繰り出すのも出来ない。

ああ、しかし何もやることがないと綾小路に任せた案件が気になるな——上手くやっているとは思いがアクションが起こって苦戦しているかもしれない。

仕返し半分な気持ちで手伝わないと言ったが、やっぱり俺も何かしら捜査に加わったほうがよかったかな？

しかし、こんなことを今更思っても仕方ない。
窓の外を見るのも飽きたし適当に栄養補給して綾小路からの朗報を待とう。

ああ、それと綾小路に支払うと約束した報酬ねがいもあるから、余り無意味にエネルギーは使わないようにしないと——自分で言っておいて直ぐに実行できないじゃ格好が付かないからな。

風に揺られる木々を背景にして綾小路と坂柳は向かい合っていた。場所も時間帯も入学初日と同じなれども月日が進んで昼の時間が長くなってきている為に当時よりもまだ明るく、更には二人の背後にはそれぞれの連れが待機しており二人の様子を各々の興味でしっかりと見ていた。

「すまないな。突然呼び出して」

「いいえ、私としては寧ろ嬉しいぐらいです」

少なからず照れている綾小路に対して坂柳は淀みなく即答。言っていることが紛れもない本心であると確信を抱かせ照れが増して綾小路は頬を少し掻いた。

綾小路の後ろにいた佐倉と長谷部は乙女心満載に目を煌めかせており、直ぐそばにいる幸村と三宅は呆れ半分とリア充ぶりへの嫉妬が混じった目で見ていた。

一方、坂柳の後ろにいた神室をはじめ両サイドを借り上げた金髪を後ろ髪で結んだ男子と肩まで伸ばした長髪に強面の男子が一堂に滅多に見られない坂柳の乙女な姿を珍しそうに見ていた。

「この前、葛城と会ったんだが、思っていた以上にこじれてるみたいだな」

「おや、何か清隆くんにご迷惑を？」

「別に取り立てて言うようなことじゃない」

実際には葛城に引っ付いた戸塚が無礼を働いたのだが、少なくとも坂柳が気にしたり、ましてや謝ったりする様なことでは無い。

「オレよりも有栖の方が面倒になってるんじゃないか？」

「心配してくれているんですか——だとしたら、ちよつと複雑ですね」
もとより葛城など敵ではないし、綾小路との関係が知れた程度でマイナスになるようなことなど一切ない。

もつと自分の力を信じて欲しいが綾小路は坂柳の実力を全く知らないのだから仕方ないとも言えるが、それでも感情が不服を訴えている。

寧ろその手のマイナスは綾小路の方が被っているのではと思つていたし、ほとぼりが冷めるまでは会えないかと思つていた矢先での呼び出しに心が躍りもしたが、その動機が先のような心配によるものだったら素直に喜べない。

「いいや、そんな心配はしていない。ただ再会とお前の目的への激励にと思つてな」

綾小路は手にしていた包みを開いてと白いリボンハットを差し出す。

「あつ」

坂柳は目を小さく開きながら受け取ると何とも言えない表情を造る。

「気に入らないか？ やっぱり他の物が良かったか？」

「いいえ。これがいいです——凄く嬉しい。ありがとうございます、清隆くん」

「そうか」

いつぞやの——二人が初めてを交わした時と同様に幸せそうにしながらベレー帽を取つてリボンハットをかぶる。

「ああ、佐倉にもお墨付きを貰っただけあつてよく似合う」

綾小路のストレートな褒め言葉の前に出た名前に更なる笑みを浮かべそうだった坂柳の顔が凍り付いたようになった。

「ちよつと、綾小路くん！ 私のことはいいから」

引き合いに出された佐倉は狼狽えて、その周りや坂柳の取り巻きたちも綾小路のデリカシーのない言葉に何をしているんだと言う視線を向けていた。

そんな周りに構うことなく坂柳は佐倉に近づいて行き凍り付いた笑みのまま言った。

「佐倉さんですか——はじめまして、1—Aの坂柳有栖です」

「あああ……え、えっと、佐倉愛里って言います。は、はじめまして」
挨拶を交わしたただけなのにやたらと重苦しい空気が蔓延し異常な緊張感を皆が感じていた。

「よろしければ、一緒にお茶でもしませんか？」

「い、いえ……それは、さっ、さつき済ませてて」

坂柳の申し出を必死に断る佐倉だが、それで終わりになる筈もなく更に続く。

「では一緒にお食事でも——」

「ご、ごめんなさい！私、この後……人と会う予定なんです」

申し出を遮りながら断りを入れるが、出てきた理由はその場しのぎにしか聞こえず、聞いていた面々はただ一人の例外を除いて坂柳は佐倉の嘘を追及すると予想した。

「でしたら、その方も一緒に——」

「駄目!!」

それまでの気弱な拒絶から一転して攻撃的に拒絶する佐倉に坂柳の目は鋭く細めた。

綾小路が佐倉を引き合いに出した時点で目当ては彼女であることは察せられた。しかもあれだけ無理矢理な形をとった事と、今の佐倉の返答からも考慮するとかかなり急を要する事態であること導き出す。

「佐倉さん——ひよっとしてですが、何か危ないことをしようとしてませんか？」

「!？」

問われた佐倉は何故と言う顔になって固まった。

「——」

全くの予想外の展開に皆、訳が分からないと顔に書いてあった。

そして、やっと望んでいた展開にこぎ着けた綾小路は佐倉に近づきながら坂柳に横目を向けて心の中で礼を言う。

(すまない。恩に着る)

(ひとつ貸しですよ)

綾小路の視線を受けて坂柳は目を閉じて一歩引きながら無言で返した。

「そうなのか、佐倉？」

「え、えつと……そう言う訳じゃ。」

坂柳さんが大袈裟に解釈しただけで——」

再び弱気になり目を逸らしながら否定する。

普通ならそれを肯定して話は終わるが、確信を抱いている綾小路は構わずに踏み込む。

「本当にそうなのか？」

「事と次第によつては私も手を貸しますが」

「だ、だから大丈夫だよ！」

綾小路を援護するように坂柳も続くが、それは佐倉の決意に反する事であり更に必死に拒絶するが、その姿は他の面子にも思い過ぎかとも思っていた気持ちを払拭させた。

「ねえ、佐倉さん。困ってるなら私も力になるよ」

「俺もだ」

「ああ、一人で抱え込むな」

長谷部、三宅、幸村が申し出て、

「ま、アイツがそう言うなら」

「俺も異存はない」

「ああ」

Aクラスの面々も続いた。

「う~~~~」

ある意味で多勢に無勢の状況になってしまい、佐倉は観念して自らの置かれていたストーリーカー被害について話し出した。

平和裏に〇〇

「酷い話ね！何よソイツ!!」

「今まで辛かったですね。佐倉さん」

「ホント、許せない！女の敵だわ」

話を聞き終えた長谷部は憤り、坂柳と神室も強い怒りを示す。

男子たちも同様の気持ちを抱きつつ、一人で耐えていた佐倉に同情する。

「学校に直ぐにでも訴えよう」

「しかし体面を気にして大事にしないようにするとかもありえそうだぞ」

「けど揉み消すってことはないだろう。騒ぎ立てないも懲戒解雇になつて追い出されて終わりなんじゃ」

三宅、幸村にAクラスの男子——金髪の橋本も同調し、強面の鬼頭も無言で肯定する。

「しかし佐倉の話からして、そんな対処じゃ自棄を起こしたり、逆恨みしたりしてキチガイな行動に出るかもしれん。ここはもうちよつと、念入りにした方がいいと思うんだが」

綾小路は危険を煽るように言い放つ。

禍根を残すような事態になつて、嬰兒に自分の能力にマイナスの心証を持たれることを避けるためだ。

しかし事情を知らない者たちから見れば、佐倉を心配しているとか取れない。

「あら、随分と佐倉さんのことを気にかけるのですね」

それを看過できない坂柳は凍った笑みを浮かべながら近づいて来る。

その様子に周りは再び余計な事を言った綾小路を辟易した目で見て、なし崩しに巻き込まれた佐倉はオロオロと狼狽えてしまう。

「それだけ危険があるかも知れないんだ。用心に越したことはないと思うが」

「……おっしゃる通りですが」

言っていることが尤もなだけに続く言葉が見つからないが、どうにも面白くない感情が坂柳の心を駆け巡る。

そして思案する。

(クラスメイトだから、ここまで気遣うなんて思想はまだ育ってないはず)

綾小路の過去を思い浮かべ——情が育まれる余地がないこと、まだ二か月しか学園生活をしていなことを考慮しても佐倉に特別な感情を持っていない限り、今の積極的な行動は説明が付かない。

ならば特別な感情を伝えて、あくまで坂柳とは友達と言った関係にしようと言っているのか——いや特別な感情と言えば、あの微笑ましい事故の時に何かしらの「欲」が出てきて、動こうと言っていたのを思い出す。

(清隆くんが積極的行動を起こす動機としては、その為に実力を示そうとしているのがベターですね)

自分好みに合わせた結論だと自覚してはいるが、そうであるとして綾小路の希望に沿った展開を考える。

一方、綾小路としては佐倉から被害を聞き出して対処するように介入する状況が出来た段階で大凡の目的は達成されており、他の面々を——ましてや坂柳を危険に巻き込むのは好ましくなかった。

(だから後はオレに任せてくれれば……)

お互い正反対な方向に話を持って行きたく会話を進めようとするが、

「あの……心配してくれるのは嬉しいんだけど、私の為に喧嘩はしないで欲しいなあ」

当事者である佐倉が遠慮がちに仲裁に入ってくる。

佐倉からすれば、元々は自分一人で何とかするつもりであったし、助けを申し出てくれるのは嬉しいが最も巻き込みたくない二人が険悪になるのは見たくなかった。

ただ綾小路には後で、もっと大事な娘の乙女心を考えるよう苦言を呈するべきだと深く心に決めた。

「ふふ——お気遣い痛み入ります。佐倉さん」

最も気遣わなければならぬ被害者からの言葉に坂柳は僅かに反省し、真意が何であれ綾小路が佐倉を助けようとしていることには協力しようとする方策を提示することにした。

「でも、そうですね。清隆くんの言っていることも決して無視できない可能性ですので、こうしてはどうでしょう」

坂柳は考えていたのは、佐倉にストーカーを人目のつかない場所に呼び出して挑発を込めた拒否を伝えて、わざと逆上させる。

危なくなる前に綾小路達が割って入り拘束、その一部始終を録画した映像を警察に提出して逮捕させるといふものだった。

坂柳の話す内容に佐倉は冷や汗を浮かべて首を横に振る。

「駄目だよ。そんなの！」

「いや、オレは全然いいと思うぞ」

「はい。これならばほぼ確実に禍根は残らないでしょう」

険悪だったのが一転して息の合う綾小路と坂柳。

「でも……」

しかし佐倉自身はどうにも乗り気になれない。

ストーカーが何をしでかすか分からない。

綾小路の言からして、当初考えていたハッキリと迷惑だと伝えることで事態の収束させるのは甘いと思いついたが、態々危険に飛び込んで騒動をより大きくするやり方は彼女の性格上とても躊躇つてしまふ。

それで万が一にも綾小路が取り返しのつかない怪我でもしてしまつたならと言う不安もまた拭い切れない。

出来るなら平和的に——それが無理ならせめて自分の為に誰かが傷つくかも知れない事態はなつて欲しくなかった。

「リスクが高すぎるって点では俺も同感だ。やっぱり正攻法でいいんじゃないか」

幸村も佐倉に同調するように言う。

長谷部や三宅も肯いており、神室や鬼頭は無言のまま否定も肯定もせず坂柳を見ていた。

「だけどそれじゃあ、嚴重注意で終わる可能性も否めないぞ。警察は

大抵、事が起きてからでしか動いてくれないんだから」

橋本の異を唱えるような台詞に幸村が向き直り問い質す。

「つまり橋本は坂柳の提案に賛成と言うことか？」

それに対して橋本はゆっくりと首を横に振る。

「いや、リスクが高すぎるって言うは同意する。ただそれで本当に問題に蹴りを付くかどうかは、もう少し考えてみるべきじゃないか？」

つまりは結論を急ぐべきではない。

幸村の言っていることは正論だが、綾小路の示唆した可能性も無視できない。坂柳が提示した解決策は確かに過激ではあるが、それを却下して終わりにしてしまうのは浅はかだ。

(Aクラスは伊達じゃないか)

綾小路は橋本の言いたいことを理解して素直にそう思った……しかし直接返された幸村は素直には思えなかったようだ。

？クラスである自分との差を見せつけられたと感じているのか元々鋭い目がさらに険しくなった。

このままでは不味い——そう思い綾小路が発言する。

「ああ——この問題は最終的には警察に行き着くべきだ。それは皆もいいか？」

それに皆が肯き、綾小路は続ける。

「だが現状では色々と不十分でオレ達が納得いく——もとい佐倉が安心できる結果になれるかが分からない。

かといって有栖の言ったやり方でわざと被害を拡大させたり、話せば分かるみたいな甘い姿勢は賛同できない」

結論に至る問題点が明瞭にすることで全員の心に冷静さと余裕を取り戻していく。

同時に綾小路は考える——いや橋本が話したときに既に考えていた方策を提示するタイミングを見定める。

「その不十分を減らすために佐倉に訊きたい。被害が始まったのは具体的にいつ頃で切っ掛けになるようなこと、どんな些細なことでもいい心当たりは？」

「……えっと、確か前の週にデジカメを修理したことくらいかな」

嬰兒の証言に裏付けが補強され、より確信をもって動ける——方策を言うのは今である。

しかしその前に、

「それだけ分かれればいけるな。だから改めて皆に頼みたい——オレの方法は一人じゃどうにもならない皆の協力が必要だ。

リスクが完全にゼロじゃないし、不足が起きても謝るしかでき——

「ここまで来て水臭いですよ。清隆くん」

坂柳が笑いながら遮り、同じ女子である長谷部と神室は協力する気であり、

「言うだけ言ってみな」

「少なくとも、このまま知らん振りはしない」

橋本、幸村も話を聞く気はあるようで、三宅と鬼頭も同じ思いであるようだった。

綾小路は無用な気遣いだったなど内心で思いながら方策を説明する。

説明を聞き終えた面々はそれぞれが思うことを言った。

「確かにいつ不足が起きてもおかしくないな……でもさっきの案より危険性は減るな。それでも万が一になったなら問題解消への確実性が増しはするな」

「ああ、それに俺も腕っぷしに自信があるほうだ。早々に遅れは取らない」

「おお、頼もしい。じゃあ、ちゃんと守ってね、みやつち」

幸村の分析に三宅が乗り長谷部も肯定する。

「じゃあ、私は危ないかどうかを見定める係かな……鬼頭もいい？」

「問題ない」

「坂柳の幼馴染ってだけあるな。俺もいいぜ」

神室、鬼頭、橋本も了承する。

「ありがとう、みなさん。私の為に」

そこに佐倉は涙目で頭を下げる。

「手を貸すと言ったじゃないですか」

「心配するなどは言えないが、最善は尽くす」

最後に坂柳と綾小路が締めて、佐倉は涙を拭いてデジカメを取り出してタイマーをセットする。

そして全員で集まって写真を撮った。

ただ只管待っていると、どうにも時間が経つのが長いな。

食事を済ませ、ベッドに寝転んで日が沈んでいくのを見ていると端末が震えたので手に取る。

画面には綾小路からのメール着信とあり、内容は俺が見た佐倉のストーリーカーの詳細を送れとあった。

ので俺は記憶を辿る——人相はやっぱり分からないが身長や体格、着ていた服などの外見と周囲を気にして隠れはしていたが、それ以上の行動を取るような様子がなかったと言った俺の印象、最後に事の進展具合がどうなっているかを綴った。

程なくして返信が来て、「これから直ぐに動く。上手くいけば明朝には結果がでる」とあった。

そうか——じゃあ、俺も報酬を渡せるように英気を養って置くとしてしよう。

かなり早い俺は目を閉じる——待とう、あと少しだけ。

ケヤキモールの家電量販店、利用者が学生と言うこともあって店内はそこまで広くないが全国的な有名店であり品揃えは申し分ないようだ。

店のカウンターに目当ての店員がいるのを見て佐倉と長谷部が一緒に向かっていき少し離れて三宅が、カウンターの近くの商品棚に鬼頭と神室が商品を見る振りをしながら佐倉達に気を配っていた。

佐倉はカウンターにいる男店員に嫌悪感を抱きつつもSDカード

を差し出してプリントを依頼する。

男は美人が揃ってきたことによりハイテンションで話しかけてきており肝心な作業を一向に進めない。

「あのさー、私たち急いでるから最速でお願いしたいんですけど」

長谷部が嫌悪感丸出しで話を切り、男は営業スマイルを張り付けて謝罪し用紙を出して必要事項の記入を進めてくる。

「店内で待ちますけど、時間はどの位で？」

「はい、15分ほどお待ちいただけますでしょうか」

「うん、それくらいなら。」

この後にゴミ出しの整理しないといけないしね」

「……ゴミですか？」

突然、話題が飛んだために男が狼狽する。

「そ、どうもさ——佐倉さんの部屋にしよつちゆうゴミを送りつけてくる迷惑な男がいるみたいでさ」

佐倉に視線を移しながら長谷部が話す。

「ええ、運命だとか訳の分からない事ばかりで——本当に迷惑で気持ち悪いから処分しようって決めたんです」

呼応して佐倉はハッキリと言い放つ。

「……っ……け、けど……送った人はその娘のことが——」

「みやつち、どう思う？」

男はより狼狽し、汗をにじませながら反論を返そうとするが、すぐ後ろにいた三宅に意見を求められて言葉が切られた。

「そうだな。可愛い娘に好意を持ったりチャホヤするまでは兎も角——相手を困らせたり、ましてや怖がらせるのは犯罪同然。一度、逮捕されるべきだな」

「……っ……っ……っ……っ……」

三宅は毅然とした態度で宣言し、男は出てきた逮捕という言葉に更に恐れおののいた。

「うん。私もそう思う」

「わ……私も」

長谷部が即肯定し、佐倉も弱弱しくも賛成を示す。

男の心臓は激しく鼓動し、汗の量も格段に増えた。

最早、営御スマイルも崩れ好き勝手なことを言う学生たちへの怒りが沸き上がる……しかし、学生を主な客としている店には放課後の時間帯には少なくない入りがあり、実際に佐倉達の次を待っている様子の客や店内を散策している客の目があつて何もできなかつた。

男は用紙とカードを持って店の奥へと下がり、佐倉を庇うようにして長谷部と三宅がいつでも助けられる立ち位置に神室と鬼頭が陣取りながら適当に待っていた。

もう直ぐ告げられた時間になりそうかとカウンターに再び向かうと丁度よく呼び出しがかかり、さつきと違う若い店員が笑顔でプリントされた商品を差し出した。

清算を済ませて中身を確認すると店を出て長谷部がメールを打つた。

その様子を店の裏口の影からジッと見ている男がいた。

さつきの男である——体調不良を理由に早退を申し出て、実際に顔色が悪かつた為にあつさりとした承されたが、帰宅する気はないようでゾツとするような不気味な目で成り行きを見て聞き耳を立てていた。

「返信来たよ。幸村くん、警備のあるエリアにいるって準備も万端だつて」

「そつか。それは良かった」

佐倉の嬉しそうな——安心したようなニュアンスは男の神経を逆なでしたが通りの人通りは増してきており今度も何もできない。

佐倉たちはそのまま歩いていき、男も後をつける——それを気付かれないように神室と鬼頭が更に後を付けた。

日が暮れて街灯が付き始める中で佐倉たちを付けながら男の脳裏には不条理な怒りと不安が込みあがっていた。

何故こんなことになるのか、何故自分がこんな思いをしなければならぬのか、何故彼女は自分の想いを分かってくれないのか——そんな中で実は思い過ぎして本当は分かってくれていて実は自分に助けを求めに来てくれたのではと都合の良い樂觀論が混じっても来た。

そうこうしている間に佐倉たちは言った通りのエリアについて警

備部の駐屯所に迷うことなく向かい入っていった。

(何故だ……………)

楽観論は脆くも崩れ去り、このままでは人生が終わる——そう頭によぎった瞬間に恐怖が盛大に爆発した。

足が震え、冷や汗の量もより増していき歯もガタガタと震えだす。

(イヤダ!!イヤダ!!絶対にイヤダ!!)

そのまま恐怖が頂点に達しきると今度は怒りに沸き上がってきた。自分は愛を伝えよう頑張ったのに、何故こんな仕打ちを彼女しずくはするのか——愛を踏み躪り裏切られた。

(許せない…………許さないぞ、雫!!……………)

「絶対に許さない——そんな顔してますね」

「!!?」

突然、心の叫びを代弁されて男は声の方向を向くと坂柳が綾小路に端末を見せていた。

「清隆くんはこのドラマの犯人、どう思います?」

どうやら動画を見ているか、ドラマのレビューを見ているようだ。

そして、綾小路は冷めた口調のまま遠慮なく感想を言った。

「どうもこうも犯罪紛いをしてにおいて被害妄想も甚だしい。全て自業自得の逆ギレだ」

これがもう少し頭が冷えた状態なら自分ことではない、ましてや暗くなったとは言え人通りのそれも駐在所のすぐ側であると気持ちを抑え込めたかも知れない。

だがストレスに晒され続けて既に我慢が限界を超える寸前であった状態で、意図せず耳に入ってきた台詞は男の怒りを爆発させた。

「あああああああーふざけるな!ふざけるな!!ふざけるな!!」

絶叫を上げ綾小路たちに近づいて来る男の顔は誰が見てもゾツとするほどに怒り狂っていた。

「なんだ、突然?」

普通ならドン引きしてしまうような場面でも綾小路はいつも通りの感情のこもらない声で応じ、それが怒りと被害妄想にくるっている

男には馬鹿にされていると受け取って益々、歪んだ形相となつていく。

「僕の気持ちを……愛を踏み躪りやがって、一体何様のつもりだ!!」
「全くもって訳が分からないし説明も求める気にもなれないが、それ以上はオレ——有栖に近づくな」

ここで綾小路は言葉に明確な拒絶と強気を込めた。
坂柳を庇うように前に出てくる冴えない男子高生に男は掴みかかろうと両手を上げ足に力を込めたところで、

「こらっ、何をやってるんだ!」

制服の駐在員が近づいてきて男の興奮が急速に冷めていく。

通りで叫び声を上げ、今にも暴行を働こうと見えた明らかな挙動不審者。

駐在員が事情を聴こうと近づいたとき何かに気づいたように目を向けてきた。

「君は?」

その仕草は男の中の恐怖を再燃させ、さらに駐在員の後ろに居る佐倉たちが視界に入った瞬間に——捕まる、人生が終わると言う絶望が脳内を巡った。

「うわあっあああ——!!!」

再び絶叫を上げ一目散に逃げていく男——展開が唐突過ぎて誰も付いていけず呆けてしまったが、それも一瞬。

駐在員は綾小路に近づいて佐倉たちを指しながら言う。

「あの娘たちが君を探していたよ」

「あ、うん。綾小路君たちに早く渡そうと思って」

佐倉は鞆から封筒を取り出し差し出す。

中身は先ほど撮った綾小路と坂柳を真ん中にして佐倉たち?クラスと神室たちAクラスの面子が集まった写真だった。

「いや、幸村くんからこの辺にいるって聞いたけど見当たらないし、流石に暗くなってきたし聞いてみてダメだったら無駄足になったけど、ほんと良かったよ」

長谷部が律義に説明すると三宅が続くように口を開く。

「それにしても、さっきのつて写真のプリント頼んだカメラ屋の店員だったよな。どうしてここに居たんだ？」

先の出来事が持ち上がり綾小路は坂柳に顔を向けて問う。

「愛だのなんだのと訳の分からんことを叫んでいたが、心当たりはあるか坂柳」

「いいえ、まったく」

即答する坂柳だったが成り行きを見ていた駐在員は出てきた名前に僅かに目を見開き、彼女はそれを見逃さずワザとらしくクスリと笑い言った。

「ええ、あなたが思っている通りですよ。」

しかし、あのような輩を雇いこの学校の敷居を跨がせているのはどうにも見過ごせませんね。ここは父に理事長としてシツカリと――

「ああ、それには及びません、それは私たちの仕事です。こっちでちゃんと対応しますから幸い未遂ですし貴女に特に何か聞くこともなさそうなので、どうかこのまま安心して帰ってください」

駐在員はたどたどしく言いながら帰宅を促す。

何もなかったとは言え不振にして異常な行動をその目で見て聞いてもいるのだ。職務質問するには十分であり、問題を起こす気があるなら元より放置出来ず、そうでなかったとしても学生が生活する場であのようなことをする輩をそのままにできない。

その上、理事長の娘に危害が及びそうなのを見て知らん振りなど出来るはずもなかった。

幸いにも相手の身元に関する情報もあつさりと手に入った。上に報告し確認を取るのは容易だ。

早々に職務を全うしようとしているのを見ながら坂柳は橋本に連絡を入れる。

「事は予定通りに進みました」

『了解。相手は今、職員宿舎の方に走ってる。予想通り夜逃げの準備かな、こりゃ』

「父の名前で発破も掛けて起きましたから、直ぐに警備の人たちも行くと思います。鉢合わせにならないように気を付けて下さい」

『分かってるよ。任せておけて』

通話が終わると綾小路たち？クラスと少し離れて所で出方を見ていた神室と鬼頭が揃っていた。

「追いかけている橋本君から順調に進んでいると、あとは明日になってみてからですね。」

まあ、先の態度から無難なごまかしができるタイプにも見えませんでしたし、これで大丈夫でしょう」

その言葉に一同は息を吐いて安堵した。

「本当にありがとう。坂柳さん、綾小路くん、それに皆」

佐倉は完全に緊張の糸が切れたのか目に涙を浮かべて皆に頭を下げる。

「力になるって言ったじゃないですか」

「それに完全に終わったわけじゃない。礼を言うのはまだ早いだろう」

綾小路の言うことに再び緊張が走る。

「ま、その時は今度こそ容赦なくいかないと」

「私もできる限り力になるよ」

「俺も荒事は苦手だが証言とかなら」

三宅が拳を握り、長谷部も安心させるように、幸村は自信なさげだがそれでも助力は惜しまないと示す。

「みんな——」

佐倉は感嘆極まって更に涙を浮かべる。

そこに坂柳が安心させようと言葉を掛ける。

「もしこれで解決しなかったら本当に父に直訴します。だから——」

そこに端末が震え見ると橋本からであり、スピーカーにして出た。『もしもし例の男、路上で職質されて今さっき捕まった。悪いのは、あの女』だの『愛を踏み躪られた』だの気持ちの悪いこと喚き散らしてたら犯罪行為をべらべら喋り始めた。少なくとも懲戒解雇は間

『違う。これでもう安心だ』

『今度こそ一件落着の報告にさつき以上の安堵に皆、胸がすいて晴れやかな気持ちとなった。』

ただ、その中で綾小路だけは、

(どうにも上手く行き過ぎてないか?)

と釈然としない何かを胸に抱えていた。

しかし、今の雰囲気の水を差すような真似は本意でないため、またその内に集まろうとなって長かった放課後は解散となった。

事件は起きないほうがいい。

ああ、ようやく完全に日が暮れたか。

梅雨が近づいているからか僅かに湿気のコもった夜風を感じながら俺は暗い夜道を歩いていた。

綾小路から明朝にはと言う明確な時間を提示されたから、こっちも約束に備えて寝ようと思っていたが寝るには流石に早すぎた。

と言うか俺も俺で張り切りすぎて返って目が冴えてしまった。

気晴らしに歩いているが、どこに向かう訳でもない——そのつもりだったが、いつも以上に気が張っている警備員たちを見たら、どうにも気になって後をつけてしまった。

学生が殆ど近づかないと言うか用のないエリアに向かって行く中で警備員たちは無線連絡を取りながら待ち伏せするように道に陣取っていた。

俺は周囲に気を配りながら気付かれないように様子を窺うと何処となく見覚えのある男が真っ青な顔して全力で走ってきた。

やや離れて見ている俺からも明らかに普通でなく、ついさっき思い出したストーカーと合致するため綾小路の仕事が上手くいったと悟った。

それから金髪の男子生徒もやってきて俺と同じように身を潜めた——綾小路の協力者だろうか？クラスの生徒じゃない、なぜ他クラスの生徒を？

警備員たちはゆっくりと近づいていき、男の冷や汗は増え背を向けて逃げようとしたが肩を掴まれて取り押さえられた。

これはもう解決も同然だな……しかし俺のいる位置は都合よく風下であり、同じく見ている金髪も巻き込まれる心配のない位置にいるから俺はダメ押しの一手を放つ。

毒殺師である『戌』の裏技『破傷風』——毒を『申』の仙術による気体操作を用いてターゲットを狙う。尤も今回使うのは毒ではなく自白剤、それもかなり弱目の物だ。

「悪いのは、僕の愛を踏み躪ったあの女だ！」

予想通り、相当追い込まれていたのか——それとも自ら追い込むように仕向けられたのか、少ない量でも十分だったな。

金髪も端末を取り出し律義に報告しているみたいだし何はともあれ、これで完全に決着だな。

さて、学生が出歩くのもそろそろ厳しい時間だし帰るとするか。

翌日、教室に入った綾小路は佐倉の姿を探すが見当たらず事情を知っている可能性のある長谷部の席に向かって行った。

そこには三宅と幸村もおり用件を言うまでもないようで、綾小路が揃ったことで話を始める。

「佐倉さん。今朝、先生たちに呼び出された。授業に遅れるかは分かんないけど、心配するようなことじゃないって確かに聞いた」

「まあ、事実確認か証拠の手紙の提出ってところだろうな」

幸村の見解に皆が肯く中で綾小路は、もう一人の目当ての人物に目を向ける。

「嬰兒はいつもと変わらずにいて依頼の結果を聞きに来る気配はない。い。」

「ここに居るのは関係者だし話題的には問題ないんだが……流石に知る由もないか」

もしかしたら全てお見通しで成果を聞きに会話に割り込んで来るとかと思っていたが、嬰兒の異能も万能ではないのか——はたまた本当に全部任せてくれるほど信じてくれたのか。

色々と考えているうちに佐倉愛理が教室に入って来た。

「佐倉さん、どうだった？」

皆が佐倉に近づいて行き長谷部が訊くと、佐倉は満ち足りた顔で肯いた。

「あの男の人、昨日の内に逮捕されて数日以内には裁判所から接近禁止命令がでるから安心していいって」

完全決着になったことで一同は安堵と歡喜の表情を浮かべ、その中

で綾小路は端末を取り出して、この結果を依頼者である嬰兒に手早くメールした。

会話に入ってきてくれたなら直に伝えられるが、事情を話せない以上はこの方法しかない。

そして事情を知らない面々からすれば綾小路がメールを送る相手は一人しか思いつかず、その仕草に微笑ましさを隠そうせずに佐倉が言う。

「あ、綾小路くん。私からも坂柳さんに改めてありがとうって、伝えてくれないかなあ」

「悪いがもう送信した。有栖にはオレが直接伝えておく」

綾小路としてはこれで話を打ち切って、本当に終わりにしたかったが、

「あー。それなら私が直接、お礼を言うから……それとお昼一緒にどうかな？綾小路くんにも言いたいことがあるんだ」

「ああ、それなら私たちもいいかな。私も皆に提案があるんだ」

佐倉が喰い付いてきて、それに長谷部が続いてくる。

「俺は全然いいよ」

「別に断る理由もないし、俺も構わない」

三宅と幸村が快諾してどうにも断り辛い空気になってしまった。

綾小路としては非常事態の対応に集まっただけ、だからこの場を持って解散として依頼者である嬰兒と報酬の話に切り替えるつもりであったから、

（都合が悪いから、また今度——にするのが良いんだが）

どうにも頭で考える打算的部分とは別にこの誘いを受けたいと言っていた。

ただ空気に飲まれているだけなのか……それとも嬰兒が約束した報酬とは別に自分が何かを求めているのか？

どうにも答えの出ない自問自答が心中を巡り、程なくして結論を出す。

「分かった。オレもいいぞ」

申し出を承諾した。

その時、見計らったように端末からメール着信がされ、約束は放課後に――楽しんできな」との内容が届いた。

綾小路はさり気なく嬰兒を見たが特に隠す気もないのか堂々と端末をいじっており、再度の着信でサムズアップの記号が届いて何とも言えない気持ちのままホームルームを終えた。

滞りなく授業は進んでいき昼休みになった。

綾小路は今朝集まっていたグループと一緒に教室を出ていく中で俺にも視線を寄こしたが元よりあの輪に入るつもりなどないし、話をしておきたい相手は別にいるので流して見送る。

あいつの隣の席の堀北なんかは相変わらず澄まし顔だが内心はどんなものなのか？

別にそれが訊きたい訳じゃないが、今後の為に俺は堀北に近づいて問いかける。

「なあ、堀北。ひとつ訊きたいんだが」

「なにかしら？」

「生徒会長さん、お前と同じ苗字だが親戚なのか？」

俺の問いが意外だったのか、堀北は一瞬固まり棘のある口調で聞き返してきた。

「……………なんでそんなことを？それは答えなければいけない質問なのかしら？」

「いや、知り合いに似てたもんだから気になっただけ。別に無理して答えなくてもいい」

俺がそう言うと堀北が顔をそらす。

「そう…………」

そこから黙り込んでしまいが俺としても長々と話したい訳じゃないし、本当に何となく聞きたかったただだから、さっさと退散するとうしようか。

「邪魔したな」

俺は踵を返して立ち去ろうとしたが、

「……兄さんよ」

背後からの堀北の小さな声に振り向く。

「その人は私の兄さん——これで満足かしら」

言葉の棘は些か収まつてるが、それでも触れられたくない事なのか不機嫌さはなくならない。

「おお、そうか。ありがとう」

それだけ言って俺は歩を進める。

「——ちよつと、ホントにそれだけなの？」

堀北の不満そうな声を発すが足を止めることなくドアに向かう。

背後から睨みつけるような視線も感じる。

ま、大体、予想通りの展開だな。

堀北が望む内容としては先日のAクラスへ上がることの協力とその主導権をどっちが取るかだろうから、これからその話になると期待したんだろうが今そんな話をする気はない。

「悪いけど俺と組みたいのはお前だけじゃない。実際についてこの前にあいつは俺の期待に応えてくれた——だから、まずはそっちに報いてやらないとな」

「なに、それ？」

事情を全く知らない堀北からすれば、さっぱり訳が分からないところだろう。

もっと分かるように説明しろと言ってきそうな感じがしたが、その前に俺は教室を出てドアを閉めて無理矢理に話を終わらせた。

「だからさ大事にしてるなら、もっと坂柳さんの気持ちも考えてあげなきゃ」

「そうそう。デリカシーに欠けるよ」

昼の食堂、五人で囲ったテーブルで綾小路は女子二人に昨日の坂柳を前にしての言動について駄目だしされていた。

あと二人の男子は安い定食を食べながら無言ながらも同意見だと
言うように肯いており助けは期待できない。

無論、客観的に見てあの時の言動が駄目に映ったのが解らないほど
綾小路は鈍感ではない。

（だがそう思われてるなら、いつそ——）

「オレはそんなに不味いことをしたのか？」

あえてそのまま進めることにした。

まだ分らない女心——恋心について少しでも学ぶことが出来る
機会、非難は甘んじて受けてでも知りたいと。

「うわー、ホントに駄目だね……」

長谷部は額に手を当て、

「はあ………助けてくれたことは今でもすごく感謝してるけど……
その為に幼馴染の娘と喧嘩になっちゃ、やっぱり参っちゃうよ」

佐倉も残念な顔をしながら小さく溜息をつく。

そこから先はやれ帽子を渡すときに自分の名前を出すのは論外。

（あれがなきや、佐倉おまえの被害を聞き出せなかつたんだがな）

危険性を示唆するのはいいが、その前でも後でもクラスメイトだか
ら等のフォロワーを付け加えるべきだななど。

（寧ろ、危険もんだいから遠ざけたかつたんだけどな）

黙って聞きながら内心で反論しつつ、どうにも期待したような話は
聞けない。

綾小路としては表面的な礼節や配慮ではなく、もっと内面的なこと
を聞きたかつたのだが話を聞いていく中で目の前にいる二人も自身
が恋をした経験がある訳でなく、恋に対する憧れや綺麗な上澄みしか
知らない——ある意味で自分と同じなのかと親近感のようなものが
湧いてくる気がした。

「おーい。綾小路への愚痴を言うだけなら俺たちもう行っていいか
？」

「同感だ。いい加減に飽きてきたぞ」

同席していた三宅と幸村がここでようやくやく会話に入ってくる。

「えー、連れれないなあ。つい昨日、力を合わせて犯罪に立ち向かった仲

なのに」

長谷部が茶目つ気ながらの返しに二人は冷ややかな目を向ける。

「ああ、俺もそう思ったから誘いを受けたんだが、それでも実りがなさすぎるぞ」

「俺も年がら年中、真面目な話をしろと言う訳じゃないが——他人の恋路じしやうをあれこれ弄るのはやっぱり趣味が良いとは言えない」

三宅と幸村の不満を隠さずに行ってくる態度に長谷部はニヤニヤしながら言った。

「うん。やっぱ、いいよね。こんな風に言いたいこと言える関係つての」

話の流れが変わり二人の溜飲が下がり続きを待つ。

「私やみやつちもそうだけど、ここに居る全員クラス内じゃ一人でやって来た系じゃない。昨日の一件もそうだけど、その前にカフェで話したときもさ。話しててどうにも居心地よくて良い感じだなんて思ったんだ。だからこの機にさ、私たちのグループ作れないかなつて」

漸くの本題、長谷部からの提案に綾小路と幸村は答えに詰まったが、佐倉は笑顔で言った。

「うん。私もここに居るみんなとなら」

「そうだな。ちよつと強引な気もするがそれも込みでこの集まりは悪くないし、馴染んでる気がする」

この意見に三宅も続いた。さつき出た不満、それを隠すことなく言える気安さや何より今自分が感じている気持ち語る。

「この集まりはあの時と今この場限り——俺はそう思っていた。

Aクラスに上がるためにはもつと勉強に精を出して他のことにかまけてる暇なんてない」

肯定的な流れになったが幸村は目を険しくして流されないと云った態度で言った。

その否定的な言葉に残念な結論が皆の頭に浮かぶ。

「だが昨日の一件は俺が一番の役立たずだった。そして事態を解決したのは殆ど綾小路の力だ。勉強が出来るだけじゃ、あんな発想はでき

ない。学ぶべきものがここにあるなら認めても構わない」

「なにそれ、すごく屈折してる——でも、ありがと。それで綾小路くんはどうなの？」

長谷部の問いに対して綾小路は成り行きを見ながら整理した己の気持ちの口にする。

「オレもこのメンバーでいるのは思いのほか楽でいい」

綾小路にとって最も籠絡したいのは牛井嬰児で、その為の最有力の駒として並びに自分の過去を知り本音を隠さずに済む坂柳有栖がこれまでの関心の全てだった。

だが、そのことを考え続けるのは疲れもする。その点でいえばこのグループは気負わず、無理せずで休息の場と時間としてあるのは悪くはなかったので本心ではある。

更に幸村とは違うが思わぬことで何かを学ぶことが出来るかもしれないという小さな期待感もあった。

「じゃ、決まりね。それじゃ私たちはこれから綾小路グループってことでヨロシク」

「おい、オレ中心なのか？言い出しっぺである長谷部が——」

「それを言うなら、そもそも切っ掛けは綾小路だろ」

「私も大賛成だよ」

「異議なし」

長谷部の音頭に異を唱えようとした綾小路だが、他の面々に押し切られた。

「それで早速なんだけど、これからは皆、名前かあだ名で呼ぶつてのどうかな？ちなみに私は波瑠加、好きに呼んでくれていいよ」

「わ、私のことは愛里で……」

佐倉は若干照れながら言う姿に男子たちは一瞬、見惚れて頭が真っ白になった。

その中でいち早く持ち直した綾小路は考察した。

当初、買い物に誘ったときに感じた引っ込み思案な娘と言う印象——ストーリーカー男への恐怖心もあっただろうが、あの姿が佐倉愛理の素であった筈。

問題解決に尽力し守ってくれた感謝と信頼感もあるだろうが、同じ女性として怒り気さくに接してくれた長谷部の存在、更には坂柳有栖の為と言う大義により言いたいことが言える状況が前向きに自信をつけることが出来たのだろう。

そんな綾小路にお構いなく長谷部が話を進めていく。

「綾小路くんは清隆で——みやっちって下の名前は何だっけ？」

「明人だ」

しかし、このやり取りに幸村は浮かない表情であり、綾小路は嬰兒関連の記憶から原因に当たりを付ける。

「そう言えば、幸村は名前で呼ばれるのが嫌なんだったか」

「……覚えてたのか。まあ、その通りだ。ちなみに俺の名前は輝彦だが、俺はこの名前が心底嫌いだ」

「理由は聞かないほうが？」

再び幸村により話の流れが曇っていきそうになり、意を決したように続けた。

「色々と勘繰られたくないから白状すると、この名前は俺たち家族を捨てた母親が付けた——だからと言って謝ったりはいい。俺だつてこの場を壊したくはない。だから名前で呼ぶなら俺のことは啓誠と呼んでほしい」

「なんだ、幸村には名前が二つあるのか？」

「啓誠は父が付けようと考えていた名前だ。違和感があるなら幸村で通してほしい」

「そつかあ——じゃあ、私はゆきむーかな」

幸村の締めの間髪入れず長谷部が彼女らしいあだ名を提示して曇りが晴れていく。

「俺はあだ名とかは無理だな——だから改めてよろしくな啓誠」

三宅も気にせずに希望の名前を呼ぶ。

「明人に啓誠、波瑠加と愛里だな。オレも覚えた」

坂柳を名前で呼んでる為か彼女たちの名前も淀みなく、改めて異性に名を呼ばれて最後に佐倉が緊張しながらも名前を呼ぶ。

「ええつと、啓誠くん、明人くん、波瑠加さん………それに清隆、く

ん」

綾小路の名だけにある間と遠慮が混じった声に長谷部がフオロ―
するように、

「清隆くんは——きよぼんが私にはしつくり来るなあ。愛里もどう
？」

「は、はひゅっ！」

佐倉から漏れた謎の擬音に全員が注目し顔を赤くなっていく。

その姿はある種の目の保養になりそうだが、放っておくのもなんな
ので、この場では綾小路が折れることにした。

「あー、あだ名は好きにしていいいし、抵抗があるなら清隆でいい。もし
それで有栖が何か言うならオレが有栖を怒る」

「……」

最後のダメ押しとも惚気とも取れる台詞に昨日以上に胸が一杯に
なる一同。そして――

「うん——よろしくお願いいたします。清隆くん」

佐倉は優しい笑みを受け場ながらしつかりと綾小路の目を見て
言った。

「実りがないうってのは撤回だな……ちよつと面白くないけど」

「ただこれ以上のメンバーはよしてくれよ。騒がしいのは勘弁だ」

三宅と幸村は辟易交じりがあるものの、満更でもない様子で、

「じゃ、この五人は『きよぼんグループ』ってことで、ヨロシク」

最後に長谷部が元気よく新グループ結成を宣言した。

放課後になり堀北が詰め寄ってくる前に早々に教室を出て、綾小路
に報酬を渡す場所をメールする。

あえて時間を掛けて目的地である屋上まで遠回りしながら行って
みると綾小路は待機しており、表情はいつも通りのポーカーフェイス
で読み取れないが、待たされた不満か報酬への期待のどちらが上かな
？

「昼間の集まりに行くかも思ってたが」

「好きな時に集まり無理強い無し——そんな堅苦しいグループじゃない」

「おお、即答か——しかし予想よりも馴染んでるみたいだな。良き哉、良き哉。」

「……既に結果は伝えたが、お前の依頼は完璧に果たしたつもりだがどうだろうか？」

「おやおや、ひよつとして俺が犯人を殺すことを望んでると……思われても不思議じゃないな。」

「ああ、十分な結果だ」

「それじゃあ、約束通り——」

俺は口の人差し指を当てて目線で右背後を促すと綾小路も気付いたようだ。

そこには物陰に隠れて俺たちを窺う堀北がいる。

無論、偶然ではない。

昼間の会話はこの場面を整える為の布石、彼女の欲を刺激して喰い付かせるまで話を続けるつもりだったが、いきなり地雷を踏んだのは幸か不幸か……。

俺からは完全に見えないが『地の善導』によって位置は常に把握しており、遠回りしたのも追いかけてくる堀北をここに連れてくる為。

綾小路には偶然に映るか、はたまた何かを察するか？どっちにしろ異能に関する話題は不味いと話を切り替える筈だ。

「何故、こんな依頼をしたのか教えてくれないか、やっぱり一之瀬同様に佐倉みたいな娘が好みだからか？」

「うん、俺の期待した展開ではないが……まあ、いいか。」

「簡単な話だ。見て見ぬ振りしたら顔向けできない相手がいるだけ」

「顔向けできない相手………嬰兒の親か何かか？」

「そうだな——名付け親のようなものだ」

「実際には恐れ多くも不相応に名前を貸して貰っている——正直、今この時でも重すぎる名だ。」

「名付け親——嬰兒がそこまで肩入れするなら相当な人物なんだな」

開き直ってるのか、調子に乗っているのかグイグイと来るな。

「ああ、彼は天才と呼ばれ恐れられ尊敬に値する………強者だつた」
本当は戦士と言いたかつたが、ややこしくなりそうだからこの辺が妥当かな。

「えらく間を使つて出した言葉が強者か？」

「まず①に正しいことしようど決める。②に正しいことをする。を信条とし実行する心身ともに強い男だつたからな」

「それは確かに典型的な強者の理屈だな」

「別に理解しなくてもいい。」

ただ、意思がなくては正しさはない。正しい行動はしようと思わな
きや出来ない。正しいことをしていない人間は出来ないではなく、し
ないだけだ——なんて台詞を普通な顔している人だ。

名前を貰つた手前、犯罪を見過ごすなんて正に泥を塗るようなもの。
けど俺には綺麗に解決する手段が思いつかない。だから出来そ
うな奴を頼つた——それだけのことだよ」

名前に対する本心に付け加えて少し持ち上げてみたが綾小路はど
うでもいい顔のまま、俺を見る振りをしながら後ろの堀北を見てい
た。

そう言えば似たような心証の男が兄貴だつたな——なら何かしら
感じるものがあるのか——表情を見る手段が今ないので残念だ。

しかし、それは今の本題ではないから話を続けるとしよう。

「無論、俺とて遊んでた訳じゃない。他クラスの情報はちゃんと集め
て来た」

お、ここに来て綾小路の目の色が変わつた。全く考えなかつた訳
じゃないだろうが、堀北のいる状況が俺の企図したものと確信を
持つたようだ——そして堀北には出し抜かれて不覚を取つたとか
思つてるといいな。

「Cクラスでは龍園つて男がリーダーに名乗りを上げ、近いうちにク
ラスを纏め上げるそうさ。しかし、そのやり方は褒められたものじゃ
なく、飾らずに言えば下劣で野蛮なものらしい」

「その龍園とやらが何かしら仕掛けてくるってことか？」

「話が早いね。聞いた話では退学による影響に目下の興味があるようだが、自クラスでやるリスクを考慮すれば他クラスを罫に掛けるって方策が妥当だろうな」

「嬰兒ならどうする？」

「俺だったなら、分かり易い弱点を徹底的につくな。弱点が目に見えてあるなら尚更にな」

「……………言い方が悪かったな。龍園の立場じゃなく、攻撃を受けたらどう対応する？」

「今の？クラスにまともな対応ができると本気で思ってるのか？」

この切り返しに綾小路は何も言えない。現状を理解できてるな、？クラスに力を合わせるなんて無理強いしなけりや成立しない。

少数のグループを作ったみたいだが、やはり割合としては綾小路一人の力が大半だろう。

そしてこの状況は一朝一夕で覆らない——それくらいに？クラスは出遅れている。

と、ここでもうひとつダメ押しも追加しとくか。

「ちなみに協力してくれそうなのは丁重にお断りしておいた。外に援軍を求めるのは諦めた方がいいぞ」

「これからは嬰兒が協力してくれるって訳じゃないよな」

「ああ、いずれは戦わなきゃいけないんだ。戦えるレベルにならなきゃ組むに値しないだろう」

？？クラスがな。

「戦わなきゃ、か——なるほど確かに今はそれが最適だな」

うん。綾小路は結論を得たようだ。

それは堀北も同じよう離れて行く——どんな顔してどんな結論を得たのかは教えてほしいな。

と、完全に行ったみたいで綾小路がひと息ついて改めて言った。

「こんな面倒なことしないで堀北に直接、伝えてやればいいんじゃないのか？」

ダシにされたからか言葉に恨み節が籠っている。

「それで際限なく甘えてこられたら堪らん。誰かの影響を経て自ら悟るのと、誰かに言われるがまま流されるのは違うぞ」

納得した顔をしてこの件の追及する気はなくなったようだ。同じような考えが綾小路もあるのか。

「なにはともあれ、依頼を果たした以上は約束のものを貰いたい」

「元よりそのつもりだ。だけど前にも言ったが、どんな願いでも叶えられる訳じゃないからな」

「嬰兒は、だろ？」

「それを聞きたいなら構わないが」

「又の機会がいい。今のオレの願いは、ある男がこの学校に接触して来るからそれを知る方法が欲しい。できるか？」

来ると言い切るあたり、ちよつと気になるがこの場では触れないでおこう。

「端末を」

綾小路は素直に渡して興味を極限まで込めて俺を凝視する。

俺はそんな視線を意識から外して異能を選定する。

まずは『亥』の『湯水のごとく』ノンリロードで限定介入させて大本のシステムを僅かに不安定化、続いて『双子』の特異体質である精神の大部分の共有を応用して適合させた。

処置が完了すると綾小路の端末に新たなならアプリが表示された。

「終わったぞ。あとはその男の名前や身体的特徴を入力すれば知らせてくれる」

「そうか」

綾小路はそれだけ言って端末を受け取る。

疑うそぶりを見せないのは信頼してるのか、信頼しているというポーズをとっているのか？

「じゃあ、もうひとつの報酬の方も」

おおっと、寧ろこっちがメインだったか。

当てにならない願いごとよりも確実な情報を——その使い方も自分で模索するほうがってところか。

ま、約束は約束だし、

辺りに人がいない事、誰も空を見てないことを確認して隠していたスチールのお盆を出して座り『乙女』の能力を用いてゆつくりと宙に浮いて見せた。

「へえ、空も飛べるのか——佐倉のこともこれで」

「ま、そう言うことさ」

「……………」

綾小路は何かを考え込むと言うか疑う目で俺を見てくる。

学校中から注目された一件、その輪郭が見えてきたのか……糾弾されたなら素直に謝るしかないか。

「嬰兒——また何かあれば言ってくれ、条件次第で力を貸す」

そのまま屋上から去っていく。

うくん。ちよつと不気味と言うか不吉だな。

そのまま六月に入ったが別段、何かある訳ではない。

期末テストは七月だし、体育祭なんかも秋……祝日も連休もなく変わり映えしない日が続き、一か月が終わると思ってたんだがな。

蒸し暑い日の夕方、上空で涼んでいたら須藤が他クラスの生徒数人と一緒に人気のない——防犯カメラもない場所に向かっている。

須藤は元よりだが相手の男たちもガラが悪そうでこの後の展開が容易に想像つくな。

綾小路はグループで集まりカフェで談笑してる——佐倉もいい笑顔をするようになったな、隣のテーブルには白のリボンハットの坂柳が優雅に紅茶を飲んで取り巻きたちも満更でない様子だ。

一方、堀北は一人で散歩してる。

こりや駄目だな——と思ったがよく見ると向かったのは防犯カメラのない死角と呼ぶべき場所、少し見回ったら歩き出しその方向の先にはまた死角がある。

ほほう。一応、危機感を持つてるみたいだな。

しかし、肝心な須藤たちとはこのままではすれ違ってしまう。

仕方ない。明日には入るはずのポイントがなくなるのも困るしな。

『申』の仙術を持って気流を操作、タイミングを見て堀北の近くに強めの風を送り須藤たちを視界に居れる。

お膳立てはここままでだよ。

全ては順調だった。

バスケ部の練習後、ターゲットの？クラスの不良生徒すどを呼び出し挑発、殴り合いの流れを作り出して仕掛け敢えて一方的にやられる。

全ては自分たちのボスのシナリオ通り——になる筈だった。

「何をしてるの！」

想定外の乱入者による一喝。

「あ、なんだよ。邪魔すんな堀北、これは俺の問題だ！」

興奮している須藤が叫び返すが堀北の目は別に移っていて更なる苛立ちを募らせる。

「あなたたちCクラスの生徒かしら？」

「だ、だったら何だっつてんだ」

混乱してるのか一人が答えると残りの二人が責めるような目を向け委縮してしまった。

堀北はその様子を見てある種の確信を得る。

「……ホント、嫌になるくらい分かり易い画ね」

「訳分かんねえこと言ってねえで、どっか行けよ！」

蚊帳の外に置かれた須藤が怒鳴り散らすと射殺するような眼で堀北が睨み返した。

「行くのはあなたの方よ。その手を引っ込めてさっさと帰りなさい」

その上から目線の言葉に須藤の目が血走る。

「ふざけんな！ 一体何様のつもりだ!! 突然割ってきて好き勝手——」

「その手を出したら最悪退学よ。いえ、それどころかクラス全体にどんなペナルティがあるかもしれないのよ」

「はあ、なんでだよ。言いがかり付けてきたのも仕掛けてきたのもこ

いつらだ。なるなら向うの方だろうが」

「私が来なければ誰がそれを証明したと言うのかしら？寧ろ同じクラス私の証言じゃ、採用されない可能性だってあるわ」

「じゃあ、このまま黙って俺に引き下がれと——」

「これが毘だつてまだ分からないの！」

このシンプルな説明に初めて須藤が瞠目した。

「は、女に言われて大人しくなるなんて無様だな」

「見え見えの挑発……律義ね。そんなに龍園君が怖いのかしら？」

「!!？」

Cクラスの策に堀北が乗る訳もなく出てきた名前に驚き、続く言葉に戦慄する。

「丁度いいから伝えてくれないかしら、こんな幼稚な作戦しか思いつけないなら、敵と呼ぶ価値もない——そんな雑魚の相手なんてするつもりはないわ」

「ぞ、雑魚って……」

「龍園さんに向かって……」

凛としている二人を押しつける形で尤もガタイの良い男が前に出る

「言うじゃねえか。龍園さんが聞いたら大笑いしそうだ……俺は石

崎、お前の名は？」

「堀北よ」

「確かに覚えた。だが調子に乗るなよ、こんなのは小手調べ。龍園さんはスゲエ男

——最後に勝つのは俺たちだ」

無駄を悟った石崎に続き去っていくCクラスを見ながら、須藤は冷静さを取り戻し堀北に礼を言おうとしたが、

「須藤くん、あなたはバスケのプロになりたいのよね？それがどれだけ大変か分かったうえで、茨の道を行く覚悟で」

「あ、ああ。そうだ……周りにどれだけバカにされようが、バイト以上の極貧生活になろうが俺はやり遂げて見せる」

「だったら、その情熱を正しい方向に向けてくれないかしら。ここで退学になったら元も子もないでしょ」

それだけ言って去っていく堀北の背を見送りながら、須藤は一人呟いた。

「やべえ……俺、惚れちまったよ」

おお危うい賭けだったが、どうにかなったな。

出てきた堀北を目で追っていくと再び死角となるエリアに足を運んでいる。

ただの散歩かと思ってたが、ちよつとした見回りだったのか。迷いなく歩いている姿は昨日今日でない日課だと語っている。

情報を流しても何もしない可能性もチラついたが、やはり根本は自分だけが良ければってタイプじゃないみたいだな。

しかし、それを素直に認めるほど心の硬さは取れてない——さて、一体何があつて自分に合わない枠をはめようとしてるんだか？

それにしても今回は戦いを回避できたがいつまでもと言う訳にも行くまい。

クラス全体で戦うことの出来る何か——あつたりせんもんかね。

知る必要のないこと。

七月に入り、どうにかポイントは支給された。

その額は86と微々たるもの。茶柱先生曰くこれは中間テストを乗り切ったご褒美のようなもので全クラスに最低100が支給されるとのこと。

これに堀北はどうにも不満かと思いきやマイナスが無かったことが分かったと実に前向きだったな。

そのまま何事も起こらずに期末テストも乗り切り夏休みに入った。そして今現在、学校が手配した豪華客船に乗っての優雅な船旅が始まった。

予定では最初の一週間は無人島のペンションで後の一週間を船旅でとのことだが……個人的に無人島に良い思い入れのない俺は、通知が来たその日に職員室に行ってどうにか旅行を辞退できないかと申し出たが却下されてしまった。

ただその際に茶柱先生だけじゃなく、室内全員から奇異な目で見られたのは、色んな意味で嫌な感じだったなあ。

確かにこの客船の設備や全てが無料であるサービスの謳い文句から始まる旅の内容は素晴らしく一介の学生が断りに来るなんて、普通はありえないことなんだろう——そうであって欲しかった。

狭くて殺風景な機関室の中で、ただ時間だけが過ぎていくのを待ちながら顔を上げると扉が開き——軽食を乗せたお盆を持ったドウデキヤプルの姿に辟易する。

「ご夕食の時間です——ご機嫌は良くないようですね」
何を当たり前なことを。

表向きには酷い船酔いの療養の為の自粛措置、教師側には余計な情報を『大多数』の生徒に広めないためとのことだが、実際は逃亡の可能性を0にするため——いくら劣化コピーの分際とはいえ、俺が外に出て何かすれば火消しが超絶に面倒くさいからな。

「そんなことはないぞ。待つのが苦になるような軟な構造はしてないからな」

「それは重畳——ちなみに目的地には明後日の朝になりますので、それまではどうぞお休みください」

いつ事が起きても万全だ——みたいな皮肉を込めて言ってみたが相変わらずに不敵な笑みをしてお盆を差し出して去っていく。

明後日の朝か——裏が読めない奴らにとっては、さぞかし至福の時だろうからしつかりと噛みしめておけよ。

同じ頃、船内の劇場で『イカロスの翼』が上演されており、客席で舞台を観ている茶柱の横に綾小路清隆がやって来てひとつ間の開いた席に座った。

「こんな時間に呼び出して、何の用ですか？」

綾小路の問われても茶柱は舞台を観ており、いつも通りの口調で用件を言う。

「先日、ある男が学校に接触してきた。綾小路清隆を退学にさせろ、とな」

綾小路は端末が入ったポケットに手を当てて無言のまま話を聞く。

「無論、この学校の生徒であるならお前はルールに守られる——ルールを破れば話は別だがな」

「そうですか——それで？」

綾小路の態度はルール違反など侵さないと取れ、ここまでは茶柱も想定内であった。

「だがお前の意思に関係なく、私がそうだと判断すれば——それは現実になる」

明らかな脅迫……だが綾小路は何も言わない一切動じない。

この態度を測りかねながらも茶柱は本題ようぎを口にする。

「これは取引だ。私の為に本腰を入れてAクラスを目指せ、そうすればお前を守るために全面的にフォローしてやる」

不遜な態度で如何にも良い話を持って来てやった——見栄なのか

意地なのか分からないながらも綾小路は小さく息をついた。

「先生、嘘は良くない」

問答の余地なく一蹴——出た言葉のニュアンスには絶対的な確信があった。

だがブラフの可能性も大いにあり、この程度で動じるほど茶柱の顔の面は薄くない。

ならばと内心で思いながら、ブラフにはブラフで返そうと不敵な笑みを造りながら言った。

「そうか、残念だ。綾小路、お前は退学——Aクラスへの道は他をあたることとするか」

茶柱の態度は毅然としたものだが、そこに余裕は全くなく本気であることを窺わせる。

Aクラスを目指すか退学か。

実際問題、今動かなければ逆転など夢のまた夢である状況なのは事実。

その欲の深さから見えるのは昨日今日でない長い年月が積み重なったもの——茶柱紗枝にとってAクラスは夢を遥かに超えた悲願なのだろう。

だが茶柱の悲願など綾小路清隆には一切関わりのないし興味の無いこと——心の中で目の前の女を教師とすること呼ぶことを否定する気持ちが湧き上がる。

「あんたもあんたで随分と貪欲だ。そんなにAクラスを欲する姿はコンプレックスを通り越してある種の病だ」

この皮肉めいた返しに侮蔑を含んだ呼称、だが茶柱は手応えを感じていた。

「理由を聞いてやる気が出るなら、聞かせてやるが？」

「結構。全く聞きたくありません」

そこに至るまでの過去など更にもまして興味はなく、会話の主導権は綾小路に移った。

「前にも言ったがオレにも欲しいものがある——だからオレはオレの欲するものの為にしか動く気はありません。

あんたが提示したのはオレを動かす対価にならない——何故ならあの男がこの学校に接触したらオレはそれを知ることが出来る手筈になっているからな」

綾小路の動じない強気な態度の根拠を提示されて、茶柱は漸くと顔を向けた。

「信じられませんか？それでもオレを退学にさせようとするなら理事長に直訴するまでです。あの人はオレの話を聞いてくれる——そして誰かさんと違って公正さもある。

どちらの主張が正しいか、キチンと調べてくれる。正当性のないどころか捏造で生徒を陥れる教師の風上にも置けない輩なんて、解雇されるのが関の山だ」

勿論、茶柱が証言だけでなく証拠も捏造する可能性もあるが、その時は嬰兒を使うまで——その為に屋上で問い質すのを止めたのだから。

「何よりあんたはあの男を舐めすぎだ。圧力をかけるにしても一介の教師を使うほど落ちぶてちゃいない。

これまで通りオレはオレの為に動く、それが結果としてクラスの利になることもあるだろうから、それで満足しろ」

しかし切り札を早々に使うのは不本意——だから茶柱にも逃げ道を与え、今回の話は無かったことで手打ちにする。

この綾小路なりの譲歩は、理事長の権威を借りた傲慢に映るも茶柱の知っている事情と照らし合わせておかしなところはなく、この賭けは負けだと悟った。

しかし背水の陣で臨んでいた彼女は今の会話で見出した可能性に最後の悪足掻きを敢行する。

「オレの為に、か——それはつまりメリットを提示すればお前は要求を呑むと言うことか？」

茶柱は深く座り直しながら腕を組むと僅かにその豊満な胸が持ち上がり、同じく大人の色気を体現したような黒ストッキングの足を組み替える。

「体をとか言う品の無いのはいりませんよ。有栖を怒らせるようなこ

とするなつて、こないだ釘刺されましたし」

再び出てきた坂柳の名前に恰好を解く。

心情としては残念な溜息を付きたかったが、同じ坂柳でも今度の方は流していいものでなく疑うような攻撃的な目を向ける。

「幼馴染か。守られてばかりだな——確かに私は相手を間違えたようだ」

この切り返し、返答を誤れば茶柱紗枝は綾小路清隆を明確な敵と見なすだろう。

そうなれば退学とはいかないだろうが、少なくともクラス内での綾小路の居場所を潰すように動きかねない。

「全力で真剣勝負に臨む——あんたや堀北、誰よりも先にオレは有栖と約束しました」

求めているものに対する聞こえの良い言葉も嘘が混じっているとされれば終わり、ゆえに取れる選択肢は腹を見せることしかなかった。

「何より有栖にとってオレが？クラスであるのは嬉しいことだそうですよ。」

これ以上ない明確な敵であると同時に勝負できるようになるまで、それなりの時間が要するからから長く一緒に居られる。

だから有栖が求めているその時を目指し、その時が来たら本気で戦います——そうじゃなきゃ色々と報えないし、有栖に率先して嫌われて喜ぶような性癖は持ってませんから」

少し変わっているが高校生のベタな青春——その1ページを見せつけられて拍子抜けしたような気分になりつつも目指すべき先は一致しなくもない。

純粹にAクラスを欲する身としては、動機が他クラスの幼馴染の為なのが些か気に入らないが、別に否定しなければならぬ程には掛け離れてはいない。

何より綾小路を動かすのが空振りに終わった今、信じるに値する解答に納得するしかない。

「分かった。今はその言葉を信じよう——信じたことを後悔させるな

よ」

綾小路は何も答えることなく席を立つ。否定も肯定もしない姿に藁にも縫りたい気分がこみ上げ、思わず言葉が漏れた。

「そんな日が来ないよう祈ることにするか」

「おや、神を信じてるんですか。それはそれは初めて好感が持てましたよ——先生」

綾小路は少しだけ意外な顔をしながら呼称を戻す。

茶柱としては単なる言葉の綾だったが、一々訂正するのも面倒なので何も答えないで再び舞台に目を向ける。

綾小路も話は終わったと去って行った。

朝日が差し込み目を開けるが何が変わる訳でもないので、また目を閉じる。

飯が来るのはまだ早い。

その間に何かしら余計な動きをしたり外に出ようとしたりする素振りを見せたら、逃亡の可能性を無くす名目で、良くて手錠か悪ければ鎖付きの首輪で更に行動を制限されかねない。

ああ、退屈だ。

鼠でも出てくればまた『死体作り』に、窓があつて海鳥でも見えたら『鵜の目鷹の目』が使えて外の様子が見れるのに——。

明日の朝か……外に出たら何をするだろうか？

出来るなら単独行動が出来るかと有難いんだがな。綾小路とは屋上での不吉さが尾を引いて話しかけ辛いし、堀北が張り切つて俺を使おうとしてくるのは……やはりまだ嫌だなあ。

別に誰かに使われるのは構わないが、それでも相手は選ばせて貰う。

ただ綾小路は学生生活に留まらないことまで求めてきそうだし、堀北はまだ俺を使うようには程遠い。せめてAクラスもくてきに対して最も必要なものが分からなければ力を貸す気にはなれない。

折角その資質を持っていそうなのに、一体何を履き違えて同じ場所で足踏みしてるんだかな。

考えてる内に目が覚めてきた。

寝袋を開いて起き上がり大きく背を伸ばす。

端末で時間を確認してみると平日なら遅刻だな。

持ち込まれていた簡易トイレで用を足して少し待つ。

あまり見たくない顔、ドウデキヤプルが朝飯を持って来た。

しかも、今回はお盆を置いて立ち去らず大きいタライも一緒だ。

「お水と石鹸は後のお食事と一緒に持ってまいります」と言っていて……。
それだけかよ。

澄み切った快晴の空の下、しかし綾小路の心は正反対であった。

絶景の海を見ながらもその心情は顔に出ており、やや近寄りが見たい
雰囲気周囲に広がっていた。

「ねえ、清隆くん……不機嫌なのは分かるけど楽しもうよ、折角の旅行
なんだし」

「そうそう。あ、そうだ私たちお昼にプール行こうと思うんだけど、き
よぼんも行こうよ」

綾小路グループの女子二人の誘い——双方とも高レベルの美人の
水着姿は普通の男子なら二つ返事だろうが、

「悪いがそんな気分じゃないんだ。誘ってくれたのに済まない」
完全に心が別のことに固定されていて成果は上がらない。

「やれやれ、ここまで分かり易いと嫉妬する気も起きないな」

「仕方がないなんて一々言わなくても解ってる——解ってるからこそ
歯痒いんだろうな」

ワザとらしく言ってくる三宅と幸村だが綾小路の耳には入って
いないようだった。

それをすぐ横で見っていた他のクラスメイト達は興味と呆れの半々

で見ている。

「あー……この景色に最高だーって叫びたかったあ」

池が湿気た声で愚痴るのを皮切りに話が広がっていく。

「ホント、超感動的なんだけどねえ〜」

軽井沢の言葉に同意するかのよう率いている女子グループが肯いていく。その中で櫛田は困った顔でフォローを入れる。

「ハハハハ……仕方ないよ、一番一緒に楽しみたい娘が居ないんだから」

その言葉通り、傍から見て綾小路の不機嫌の理由は凄まじい程に分かり易い。

坂柳有栖の不参加——先天的に体にハンディキャップを持つ彼女は旅そのものが危険であり、参加するには複数の介助人が必要とのことで一人、学校に残った。

二人の関係を知らない者はもはや存在せず、本来なら最もこの旅行を楽しみ青春の思い出を綴っていた筈が……全て泡沫の夢となつてしまったのだ。

「だからって……こつちにまで飛び火させなくても」

「そうだけ。普段リア充してんだから、ちよつと会えないくらい我慢しろってん——な、なんだよ?」

山内の文句に綾小路は振り向き、奇妙な緊張感が走る。

ある者は唾を飲みこみ、ある者は喧嘩になるのではとハラハラし、またある者は何も起きないことを切実に願う。

「飯時だし、レストランでも行こう」

いつも通りの口調でそう言うグループのメンバーは肯いて歩き出し、デツキから去って行った。

緊張感が解けてホツとひと息ついたが、景色を楽しむ気分になれる筈もなく程なくして人はいなくなつた——ただレストランには行かないか時間を置くようしよう共通認識を持った。

幸いのことこの船には、他の食事処も娯楽施設も充実しており先の会話から殆どは綾小路が来ないだろうプールに行った。

種類豊富な水着レンタルからプールの広さなどサービス満点であ

り、女子たち——特に櫛田には男子たちの視線は持っていかれた。その中の一人、池寛治は意を決したように立ち上がり須藤、山内の両雄に宣言する。

「決めた。俺、櫛田ちゃんに告白する！」

「ま、まじかよ。振られても綾小路みたいに俺に当たるなよ」

さっきの一件がぶり返したのだろうか、受けた被害が拡大している。

「そう、それだよ。綾小路みたいな幼馴染ってアドバンテージがあるとは言え、あいつ以外でリア充なのは平田ぐらいだ——やっぱり俺もそっち側になりたいんだ」

池の覚悟を決めた目に触発され、

「そうだよな。幼馴染ってアドバンテージがあれば俺だって今頃は……よし、俺も決めた。俺も佐倉に告白する！」

山内も宣言した。友達二人の覚悟を見せられ、

「お……お前ら、そうだよな………ないもの僻んだって仕方ねえ。俺も………」

須藤も何かしらの決意を固めたようだ。

三人の思いがひとつになり、まずは言い出しっぺである池が櫛田に近づいていき、ぎこちないやり取りの末に、

「よっしゃー!!桔梗ちやーん!!」

まずは名前で呼ぶことを了承して貰い雄叫びを上げた。

櫛田はクスクスと笑い——その光景に須藤と山内は勇気を貰った。

「下の名前か……堀北の………なんつったけな」

「よし、俺だって負けてられねえ」

そんな陽気な場面とは裏腹に陰惨な空気が流れる場面があった。

綾小路グループが入ったレストラン。その洋装も一流であるのは疑う余地がなく、席に座ってもやや落ち着かない。

「綾小路と一緒にすることは、お前ら?クラスだな?」

隣のテーブルからの声に顔を向けると葛城と戸塚が悠々と食事をしている。

綾小路以外は初対面だが、葛城の特徴から以前に突つかかっていたと話に出たAクラスの生徒であることを直感しメンバー全員が不快を覚える。

「そうだけど、何か用か？」

その所為か、戸塚の威圧的な声に答えた幸村の声も攻撃的だった。「いや、マナーを知らないみたいだから手解きしてやろうかと思っただけな」

この言葉を額面通りに受け取るほど能天気なメンバーはおらず、たちまち不快と共に嫌悪感が全員に湧き上がった。

「へえ、同じAクラスでも坂柳さんたちとは随分と違うんだね」

長谷部の不快感を抱いた素直な感想に逆上し、戸塚が立ち上がりそうになるのを葛城が目で制する。

「安い挑発は止める弥彦。生活態度で減点される可能性もあるんだぞ」

しかし級友を止めるだけで無礼に対しての言及はない。

それを冷ややかな目で見ていた綾小路は言った。

「お前たち有栖が居ないからって、はしやぎ過ぎだぞ。」

特に葛城、冷静を装って見せてるが興奮が抑えきれないのが丸わかりだ。

少し………かなり頭を冷やした方がいいんじゃないか？」

葛城の目が綾小路を向き、双方の間で火花が散りかない。

「ハハハ——言うねえ綾小路」

そこに第三者の登場で一気に空気が軽くなる。

「橋本……」

会話を邪魔された葛城が睨むが、一切意に介さずに綾小路の肩に腕を回す。

「正直、こんな辛気臭い奴に仕切られて辟易してたんだ。俺も一緒にいいか？」

「オツケーだよ」

長谷部が認め皆も肯く。

他クラスの生徒と堂々と食事をするのを戸塚は文句を言おうとするが、葛城の手が肩に置かれて断念する。

「お邪魔のようだな。丁度、食事も終わったし退散するでしょう」

内心は測れないが外面は堂々としながら席を立つ葛城に不本意を隠そうともしない戸塚が続いた。

「何あれ？」

「何処のクラスにも無礼なのは居るもんだな」

長谷部のシンプルな言葉に三宅が調子を合わせる。

「今の内だけさ——今の内」

橋本の含むような言葉に疑問が生じるもこれ以上は食事が不味くなりそうなので追及は無しにした。

一方、船内の高級エステサロンでは一之瀬がBクラスの担任、星之宮知恵が質問していた。

「それで嬰兒……牛井くん、どんな感じなんですか？船に乗ってから一切見ないし大丈夫なんですか？」

星乃宮はこの返答に難儀する。

嬰兒の職員室の一件には当然、星乃宮も居り表向きの理由である船酔いが方便であることもそうしなげなければならない事情も承知しているため、自クラスの生徒とはいえ本当のことは言えない。

だが嘘を付こうにも保険医も兼ねている自分をしょっちゅう船内で見かけられて、あまつさえ共にのんびりとエステに耽っているのだ——出歩けないほどの重症の生徒を放って置いていると答えるのは

体面が悪い。

「彼なら明日の朝には元気になってるから心配はしなくても大丈夫」

故にギリギリのラインで本当のことを答えた。

「それよりも彼以外でも注意しなけないのが居るんじゃない？」

「先生……今、強引に話を逸らそうとしましたよね」

「あゝ、いい気持ちね」

一之瀬がジト目で抗議するが星乃宮は惚けて何も答えなかった。

一之瀬の他にも嬰兒を気に掛けている生徒はいた。尤も動機は純粹に心配している一之瀬と違い打算的なものであったが。

食事を終えて自室のベッドの上で綾小路は思案する。

(出来る限り船内を練り歩き、教師や船内クルーに訊いても何も得られない。オレの行動が阻害されている……………いや逆だな、嬰兒のセキユリテイが硬すぎるんだ)

旅行の話が出た当初から嬰兒が乗り気でなく、上手いこと漬け込んでもまた何かを引き出せないかと色々と考えていたのだが、乗船と同時に姿を消し見舞いに行つても門前払い。

絶対に何かある——そう思ったが綾小路は嬰兒のような異能はなく立場的には学生でしかない。

出来ることは限界があり、グループに協力を頼もうかとも考えたが異能の情報が広がるのは本意でなく、折角の旅行気分にも水を刺すのも気が引け何も言えなかった。

結果的には分からないままの問題に対して打つ手が無い不機嫌を坂柳の不在が原因だと誤解されて色々と迷惑をかけてしまったが……………

待つしかない——既に出た結論に歯痒さを感じているとチャイムが鳴りドアを開ける。

「ごめん、寝てた？」

そこには？クラスのリーダー格である平田が居た。

「いや別に」

「よかった——これから軽井沢さんたちと一緒に遊ぶ予定なんだけど、綾小路くんもどうか？グループのメンバーも一緒に人数が多い方が楽しいし」

綾小路の機嫌が悪い話は平田の耳に入っても不思議じゃない。もしくはグループのメンバーが気晴らしの相談でもしたのかもしれない……………何故かそれだけとは思えなかった。

「軽井沢、か。お前たちはまだ苗字なんだな」

「僕たちには僕たちのペースがあるかね。出来るなら彼氏の心得とかも教えてくれると嬉しいなあ」

「なんだ、それが訊きたかったのか？」

「あ、いや……ごめん、そうじゃないんだ」

間髪入れない切り返しに平田は逡巡した後には切り出した。

「綾小路くん、僕は君や嬰兒くんと違ってどうしても神を信じる事が出来ない。」

でも信じるものが違ってても目的が一緒なら団結できると思うんだ」
「道理だな。オレの居るグループも別に神を信じての集まりじゃない」
「い」

「そうなんだ。だったら尚更頼み易い、綾小路くんは坂柳さんと戦うためにAクラスを目指すって言ってたよね——それを？クラス全体の方針にさせて欲しんだ。僕も全力でサポートするよう働きかけるのを約束する」

ストレートにAクラスを目指すでは大半は付いてこない。故にもっと身近でAクラスに届かなくても達成できる目標を据える。

すでに広まっている幼馴染の関係、クラスでした堂々とした宣言からして既に晒し物にされると言った段階は過ぎていく。

何より誰かの色恋の行く末を見られるのは、真つ当な青春を過ごし辛いこの学校では男女関係なく興味を引くだろう。

手段としては合理的だがクラスメイトの個人的事情をダシに使うのは平和主義の平田にしては大胆な提案だ。

「オレはクラスを中心だの先頭だのガラじゃないだが」

「言い方はどうかと思うけど、まずは飾りでも構わないんだ。みんながひとつの目標に向かって行けば、それは自然と絆を——」

平田の説得に熱が入りそうなタイミングで端末が鳴り言葉が切れる。画面には彼女である軽井沢恵の表示があった。

「出なくていいのか？」

平田は困った顔のまま優先すべきことを決断する。

「ごめん、そろそろ行かないと……さっきの話、ちよつともいいから考えてみてくれないかな？」

そう言って早足で行く平田——聞こえてくる軽井沢への弱弱しい返答からに何か引つかかりを感じさせた。

時間は過ぎ日が暮れていく、デッキにあるバーのカウンターには一人座って本を読んで居る堀北が居た。

周りがはしゃいでいる中で静かに本を閉じて端末を操作、嬰兒に送ったメールは未読とあった。

(この大事な時に何をやっているのよ、一体?)

堀北には確信があった——この旅行で何も無い訳がないと。

先の一件ではCクラスの企みを未遂に終わらせたが、それで綾小路に先を越された分を取り返せたと思うほど堀北のプライドは安くない。

船の目的地とされる学校所有の無人島にあるペンション——そこで行われるだろう事に結果を出すためには嬰兒が持っている情報は全て欲しいところだ。

あわよくば今度こそ協力関係を取り付けて自分主導で行きたいという思いもあった。

クラス全体として綾小路個人にも出遅れた分を一気に取り戻したい——それとは別にあるもうひとつの要因に堀北は焦りがあった。無論それを表に出すような真似はしていないが、不利な条件を抱えているのは事実であり軽減できる要因は確保しておきたかった。

「お、こんな所に居たのか」

この方向に目を向けるとハーフであろう黒人の大男を従えた長髪の男子が近づいて堀北の隣に座った。

「この前は随分と言いたい放題だったらしいじゃねえか。この俺を雑魚だの幼稚だのと」

回りくどいのか分かり易いのか判断の迷う自己紹介に男子の素性を理解する。

「事実を言ったままでよ——あんな程度の作戦でどうこうなるなんて思ってる時点で戦う価値もないわ。龍園君」

「ククク——お前みたいな強気な女は嫌いじゃないぜ。鈴音」

こちらの素性もお見通し、やはり油断は出来なそうもない——と

思った矢先、端末で写真を撮られた。

「ちよつと勝手に——」

「俺はお前のファンなんだ。だから今度は俺が相手をしてやる」

話も聞かないままに立ち去ろうとした時、緑色の短髪をしたボーイ
フィッシュユな女子が近づいて来た。

「龍園！話がある！」

「なんだ伊吹か。話なら俺の部屋で二人つきりで聞いてやるよ」

安くて下劣な挑発に伊吹は簡単に切れた。

「!!……もうあんたのやり方は我慢ならない！」

龍園に向かつて手を上げるが黒人の大男に止められる。

「アルベルト、あんたそれでいいの?!」

アルベルトと呼ばれた男子は何も答えずに突き飛ばし龍園に続いて去って行く。

堀北が駆け寄ろうとしたが伊吹がキツと睨みつけ足を止めると立ち上がり行ってしまった。

ここに嬰兒か綾小路が居るか、もうひとつの要因が無ければあまりのタイミングよさに胡散臭さを感じただろうが余裕がない堀北は、Cクラスの崩壊が近いと短絡的答えでまとめるだけだった。

日は完全に暮れ吹き抜けのあるテラスでは綾小路グループが夕食を食べていた。

「うわゝ、星がきれいだねえゝ」

佐倉が感動の籠った言葉にグループの空気は和やかであり、綾小路もかなり気分が落ち着いたのか普段と変わらない様子で星空を見上げる。

「やっぱり坂柳さんにも見せてあげたかった、きよぼん？」

長谷部に問いに飲み物を含んでいた三宅と食べていた幸村も注目する。

「ああ、そうだな」

ただそれだけ言って星を見続ける——何を思っているのか想像力を掻き立て、それぞれの食が進んでいった。

「うちそうさま」

食事が終わり解散となる前に佐倉が意を決したように言った。

「清隆くん、やっぱり楽しもうよ。で、その思い出を坂柳さんにも分け
てあげよう……自分の所為で折角旅行が台無しになっちゃ私だった
ら嫌だよ」

こと坂柳の（恋の）ためとなると佐倉の引っ込み思案はなくなる。

これが普段にも適応されればと思いつつも……。

（……それが出来たら良いんだが）

論点の違う回答を浮かべつつも現時点では推測でしかなく、本来の
悩みに触れられたくないのも重なって、

「じゃあ、愛里たちも協力してくれるか？」

「勿論」

「いいよ」

「いいぜ」

「ま、吝かじやないな」

気持ちよく了承され、やはりこのグループは悪くないと改めて心に
染み渡った。

そんな気持ちで揚々と部屋に戻る途中、櫛田と鉢合わせてしまっ
た。

「すまない啓誠、先に戻って貰えるか」

「あ、ああ」

同室である幸村を先にやり、櫛田と再び外に出る。

「ごめん、迷惑だった？」

「前置きはいい。聞きたいのは嬰兒のことだろう」

綾小路の突き放した言い回しに櫛田は戸惑いながらも肯いた。

思い返せば櫛田が裏の顔を晒し、嬰兒を脅迫しようとして返り討ち
にあつたのもこんな夜の海を見ている時、恐怖がぶり返したのか名前
を出したら若干の震えが見えた。

「結論を言うにあいつが今どこで何をしてるか、どんな状態になっ
てるかは分からない」

「綾小路くんは、あの化け物のこと何処まで知ってるの？なんでそん

なに平然と接することが出来るの？」

ずっと聞きたかったのだろう、言葉が勢いよく出る。

「少なくともお前よりは知っているが全部じゃない——いつかは全部暴き出して見せるつもりだがな」

「それであの化け物を倒すなら……私、何でもするよ」

櫛田からすれば妥当な結論だが、綾小路には違う。

「悪いがその話には乗れないな」

背を向ける綾小路に櫛田が飛び込んで来た。

「利用するつもりなの、牛井嬰兒を？」

綾小路は何も答えない。

「そのつもりなら——それならそれで、なんでもするけど」

「じゃ、尚更だな」

「そっか。独り占めしたいんだ——私、分かるんだ。そういうの」

この時、綾小路には見えないが櫛田は笑みを浮かべていた。

「じゃあ、応援するよ。頑張ってね、綾小路くん」

そして何かを期待するような視線を向ける。

「おやすみ、櫛田」

「うん。また明日」

綾小路は振り返ることなく歩いていき、櫛田は暫らくしてから部屋に戻って行った。

おお、やっと朝が来たか。

しかしこのご時世にタライで行水することになるとはな。

着替えの代わりに置いてあったジャージを着こんで俺は久しぶりに外に出た。

『おはようございます。間もなく島が見えて参ります。暫らくの間、非常に意義ある景色をご覧いただけます。』

まるでタイミングを見計らったような意味深なアナウンス——バカンスは終わり、だから出されたか。

それは良いとして問題は俺の希望通りになるかどうか——正に神のみぞ知るだな。

住所が・・・

久しぶりに浴びる陽光、潮を含んだ風、そしてあれが学校の所有する無人島かあ——公式の予定ではペンションに泊まるとのことだが何処にもそれらしき物なんて見えない。

分かり切っていたことだが、これからやらされる事の内容が少し見えてきたな。

船がゆつくりと島全体を回る不自然な航路を行き、デッキにはまだバカンスがと勘違いしている輩——その全員が制服か洒落た服を着ていて一人ジャージの俺はどうにも悪目立ちしてしまう。

しかしそれも束の間——再度のアナウンスでジャージ指定、端末と所定の荷物以外は一切の私物の持ち込み禁止、トイレも済ませよと指示されると既に準備万端の俺は別の意味で浮いて注目されてしまった。

必然的に一番乗りになってしまい生徒全員が着替えてデッキに戻ってくるまでの間、一年の全担任たちと一緒に戻ってしまった——まあ辞退の申し出を却下された時からこんなことになるのは予想していたし、担任たちもそれは同じであろうから予定通りの展開かな。

全員が揃うには時間が掛かるから柵に背を預けて座っていると陽気な感じの女先生が近づいて来る。

「やっほ、調子はどうかな——牛井嬰兒くん？」

見かけ通りのフレンドリーに來られたな——さてポーズなのか本心で心配してくれてるのか？

どちらにせよ後ろで目を険しくさせてる茶柱先生の様子からして何と答えても結果は同じだろうから、ここはひとつ——。

「最悪の気分だって言ったら、帰して貰えますか？」

「ハハハ……ごめんねえ。私も流石にやり過ぎだとは思ったんだけど

——」
「星乃宮先生、私のクラスの生徒にちよっかいを掛けないで貰いたいだが」

思っていた以上に早く割り込んで來たなあ……そんなに俺とこの

人が話すのが嫌なのか？

「え、ひどいなサエちゃん。私、これでも歴とした保険医なんだから生徒の体調を気遣うぐらい当然でしょ」

至極真つ当な言い分だ。

だが星乃宮先生よ……俺をほったらかして茶柱先生とじゃれついでちや、結局台無しだよ。

尤もそもそも体調なんかどこも悪くないし、無駄な時間を取らされるたくもないから別にいいけど。

俺は目の前のじゃれあいを意識から消して『地の善導』を発動させる。

一人また一人と戻ってくる気配が増えて、うじゃうじゃとまたデッキに人が湧いてくる。

葛城を始め真つ先に来た連中は俺を一瞥だが、それなりの人数になつたらそれもなくなってきたが、完全ではなかった。一之瀬や椎名と言った何人かの他クラスの生徒は俺の様子を気に掛けて何かしら聞きたそうだが近づかずに分身のクラスの方に行つた。

ま、余計な事をするなつて、すぐそこに居る担任連中から目があるんだから当然と言えば当然だな。

そして？クラスの連中は表向き理由を鵜呑みにして、

「凄いい酔酔いって聞いたけど、大丈夫？」

「折角の旅行に何やってんだよ」

「いっぱい遊べたのに勿体ないことしたなあ」

と気遣いや冷やかしばかりで………ホント、どうしようもないな。

しかし最近の傾向から綾小路が一瞥だけなのは分かるが、堀北の奴は随分と遅いな。

制限が解除された端末には昨日の日付で呼び出しのメールがあり、真つ先に来て色々と言われるかと思つてたんだが——そう言えば船が島を回っている時も見かけなかったし、まさか呑気に寝てたりとか？それから暫らく待ってやっと来たが、遅かった理由が完全に予想外で考えるよりも早く立ち上がり、念のために目を『魚』に切り替えて

確証を得た——何やってんだよ、一体。

俺は早足で堀北に近づいていき問答無用に腕を取った。

「ちよ、ちよつと……いきなり何よ？」

当然のように困惑しながらも抗議してくるが問答してる時間も惜しく、無言のまま無理矢理に腕を引つ張って歩き出す。

「痛い、離して！ホントになんなのよ、説明してよ！」

流星に周囲からも注目され始めたが、今はそんなことはどうでもいい。

「おい、嫌がつてるだろうが！」

須藤が正義面して前に立ってきたが、空いている手を肩に置いて下げると簡単に尻もちをついた。

「……………」

間抜け面のまま何が起きたか一瞬分からないようだが、何をされたかを理解すると顔を真っ赤にして俺に何か叫ぼうとしたが、構ってはやれないから先に行く。

「ハッ、無様だな」

目つきの悪い長髪の男子が言うのと側に居た取り巻きたちがクスクスと笑いだし、それは周りに伝播していった。

「て、てめええ……………」

須藤はさらに顔を赤くしたが、それ以上は言わずに我慢する——今、喚き散らしても恥の上塗りだし、これくらいの自制心はついたか。

と、そんな益体の無いことは良い。俺は堀北を星乃宮保険医の前に連れていく。

「体調不良——かなりの熱があるから今すぐに医務室に連れて行ってください」

「ちよつと、何を勝手に!?!私なら——」

「この状態で無人島にほっぽり出されたら、最悪命に関わります——それともこれからやるのは生徒の命よりも重いものなんですか？」

堀北を無視して話を進めると担任たちは顔を見合わせ、星乃宮先生が堀北の額に手を当てて熱を測り首を横に振る。

茶柱先生も無念そうにしながらも目をつぶり、プロレスラー並みの体格の教師——Aクラスの担任にして学年主任の真嶋先生が指示を出す。

「スタッフに連絡してすぐに医務室に——残念だが今回の特別試験は棄権とする」

隠し通せないと見たのかもう必要がないと判断したのか、その宣言と展開の唐突さに殆どの生徒は啞然としていた。

「ま、待ってください。確かに体調は思わしくありませんが、私はやれます！やらせて下さい!!」

堀北は懇願するが正式なドクターストップが出た以上は覆る訳もない——恨みがましく俺を睨んでも何も変わらないぞ。

でも今のままじゃ大人しく行きそうもないし——仕方ない。

「心配するな。お前が居ない分はちゃんと俺がフォローしてやる——お前が居なくても全然大丈夫だから」

「なあ!!」

始めの方にはキョトンとしそうだったが、最後まで聞くと屈辱的な顔に変貌した。

そのまま文句が来そうだが、その前に指を鳴らすとあっさりと崩れ落ち直ぐ近くに居る星乃宮先生が慌てて支えた。

突然の事態に再び熱と呼吸を確かめてるが、寝てるだけだと分かる。と珍しいものを見る目で見られた。

「話には聞いてたけど、本当に凄^{ほりきた}い特技を持つてるんだあゝ」

いや今は俺のことより患者の方だろ——とか思ってたが同じ目があちこちと言うかデツキに居る全員から浴びせられ、それは堀北を運ぶ担架が来るまで収まることはなかった。

「ではこれよりAクラスの生徒から順に下船、その際に携帯を担当に預けること」

真嶋先生が拡声器越しに指示すると生徒たちは素直に降りていき、その際の荷物検査もスムーズに自然と整列していった——流石にあそこまで見せられて夏のバカンスが始まるなんて思う奴はいないよ

な。

呑気だった？クラスの連中もこれから何が始まるのかと不安と緊張感に点呼も整列も驚くほど従順だった。

全クラスの準備が終わり、真嶋先生が前に出ると全員の気がより一層に引き締まる空気を感じる——そして原因を作った俺に対して船での措置はやはり正解だったと言うような目を向けられた。

「まずは今日、この場に無事に到着できたのを嬉しく思う。病欠で参加できなかった一名と新たに病欠で参加できない一名についても残念に思う」

前置きは良いから早く本題に入ってよ——普段はちゃらけてる三バカどもでさえ真面目な顔して聞いているんだから。

そんな生徒全員の様子から改めて気を取り直して宣言が出された。

「すでに察しているだろうが、今回の旅の目的——本年度最初の特別試験を開始する」

驚く生徒など一人としていない。目下の注目は試験内容、俺にとってもそれこそがメインだ。

「期間は一週間、この無人島で集団生活して過ごすことが試験となる」
いきなり希望を打ち砕かれた……折角、堀北を退場させたのに……。

若干のショックを受けつつも説明は続いていく。

「寝泊りも島で行ってもらい、正当な理由なく船に戻ることは出来ない。」

スタート時点でテントと懐中電灯が二つにマッチがひとつ箱、各自に歯ブラシがひとつを支給。日焼け止めと女子用の生理用品は無制限に許可している。以上だ」

「はああ!?ガチの無人島サバイバルって——」

池よ、文句は話が終わってからにしてくれ。

「今回の特別試験のテーマは『自由』だ。花火、海水浴、バーベキュー、キャンプファイヤー、あらゆる夏の楽しみを謳歌するのも構わない。

その為に300の試験専用ポイントが支給される——日用品から娯楽品まで使用範囲は広く、計画的に使用すれば無理なく一週間で過

ごせるようになってる」

難易度が一段下がったが、安心できるものじゃないな。それにこれだけじゃ試験になってないし——兎に角まだ話は終わっていない、考えるのはそれからだ。

「この特別試験終了時には、各クラスに残っているポイント、その全てをクラスポイントに加算した上で夏休み明けに反映する」

間違いなく生徒全員に衝撃が走った一言だ……もしこの場に堀北が居たら這ってでも試験に参加しようとしただろう………早めに降ろさせて、いや降ろさせないでよかった。

「後の詳しいルール、ポイントで買える物は、配布するマニュアルに記載されている。再発行にはポイントを使うので注意するように。」

今回の特別試験では体調不良などでリタイアした者は30ポイントのペナルティとなる。よって旅行を欠席したAクラスと開始前にリタイアした？クラスは共に270ポイントからのスタートとする」

真嶋先生の話は終わり解散となり各クラスの担任による補足説明へと移るため移動する。

その間にも男女問わず3万近いポイントが手に入るとはしゃいでいた——俺としてはもう少しいいから上乘せが欲しい。

「これより全員に腕時計を配布する。一週間後まで身に付けておくように、許可なく外した時はペナルティが課せられる。防水使用だが万が一故障した場合は直ちに交換となる。」

この時計は把握するための体温・脈拍に人の動きを計測するセンサーにGPS、非常時を知らせるボタンを搭載している。もしものは迷わず押せ」

安全に関する説明に不備はない——船で待機しているヘリもその一環か、結構なことだ。

しかし後は自分たちで何とかしろ、自給自足かポイントで賄うか。尤も前者の場合はマイナス査定があり、とことんまで我慢するのは逆効果だ。

具体的には大きく体調を崩したり、大怪我をしたりして続行不可能と判断された場合はマイナス30ポイント、そしてリタイア——堀北

と坂柳がこれだな。

環境を汚染する行為を発見したら、マイナス20ポイント。

午前午後8時の1日2回ある点呼に遅れた場合、1人につきマイナス5ポイント。

最後に他クラスへの暴力、略奪行為、器物破損を行なった場合、そのクラスは即失格、対象者のプライベートポイントを全て没収か。

A、？クラスだと9人リタイアすれば、もう終わりか。

「つまりさ、ある程度のポイント使用は仕方ないってことじゃない？」
うん、篠原の意見は至極もつともだ。

「最初から妥協する戦い方は反対だぜ。やれるところまで我慢すべきだろ」

池の態度からしてサバイバルを乗り切る確かな自信があるようだから、経験があるんだろうが……。

何を聞いてたんだよ。支給された装備と課せられた制約、それを素人以下の集団で一週間乗り切れると？

ああ、逃げ出したいくなってきた——だから訊いておこう。

「先生、ポイントを使い切った後でリタイアした場合はどうなります？」

「ポイントが0ならそこからの変動はない」

「つまりこの試験にマイナスはないと」

先生は肯定し時間を観ながら説明を続ける。

「支給されるテントは8人用で重さは約15キロ、紛失や破損した場合の保証はない。新たなテントはポイントで購入するしかないので注意するように。ほかの支給品も同様だ」

「先生、僕からもひとつ。点呼は何処で行うのですか？」

「担任は各クラスと行動を共にする。ベースキャンプが決まったら報告しろ、私はそこに拠点を置き点呼を行う。そして全クラスは一度ベースキャンプを決めたら正当な理由なく変更はできない。例外は認めないからよく考えるように」

次に先生は段ボール……俺が機関室で使ってた簡易トイレを取り出した。

組み立てた段ボールに青いビニールをセットし吸水ポリマーシートという白いシートをいれる。これは汚物を保護し固めるもので包んで汚物を隠すとともに、消臭する。その上にシートを重ねれば、1つのビニールにつき5回ほど使用可能。という説明書の内容を思い出しながら、またかという気分になる。

それは俺だけじゃなく——いや特に女子たちは俺以上のように説明を聞き終わり、

「絶対無理！」

篠原の叫び声に他の女子たちも同調する。

「トイレくらいそれで我慢しようぜ」

池のまたもやの反論に篠原をはじめとした女子たちは断固拒否の構えに……これは長引きそうだ。

それも自分たちで決めろと先生は淡々と説明を続ける。

「これより追加ルールの説明に入る」

「まだあるんですか」

「まもなくお前らにはこの島を自由に移動する時間が与えられる。

島の各所にはスポットという場所が設けられている。そこには占有権が存在し、占有したクラスにのみ使用权が与えられ自由にできる。

ただし占有権の効力は8時間、それが過ぎると自動的に権利は取り消され。他クラスにも占有の権利が復活する。

一度占有することによりポイントのボーナスポイントが与えられる。ただしこのポイントは前提的なもので試験中に使用できず、試験終了時にそのボーナスポイントは加算される。

学校側は常に監視しているので不正の余地がないので注意するよ
うに。」

「おお、スゲエ美味しいじゃん、それ。よし、俺たちで全部取ってやろうぜ」

池が目を輝かせ山内たちに声を掛けるが待ったがかかる。

「焦るな、これにはリスクがある。詳細はマニュアルにあるからよく考慮してからにしろ」

茶柱先生の言う通り箇条書きでしつかりと書いてある。

- ・ スポットを占有するには専用のキーカードが必要である
- ・ 1度の占有につき1ポイントを得る。占有したスポットは自由に使用することができる

- ・ 他クラスが占有しているスポットを許可なく使用した場合、50ポイントのペナルティを受ける

- ・ キーカードを使用することが出来るのはリーダーとなった人物に限定される

- ・ 正当な理由なくリーダーを変更することは出来ない

以上が大まかなルールで、8時間おきのリセットや複数同時で同じクラスが抑えられるなど先生の説明とここまでは一致する。

重要なのは最後の7日目にあるリーダーを言い当てる権利。

的中させた場合はクラスひとつにつき50ポイントを獲得し、逆に的中させられた場合は50ポイントを支払う。更にリーダーを外した場合は50ポイントの喪失だけでなく稼いだボーナスポイントがすべて無効。

「リーダーは一人必ず決めて貰う。参加するかは自由だ——欲を出さなければ見破られることもないだろう。」

今日の点呼までに私に報告しろ、名前を刻印したキーカードを支給する。決まらない場合はこちらで決めることになる。以上で説明を終了する」

名前の刻印——つまり見ることが出来れば間違う可能性は無い訳だな。

「リーダーをどうするかは時間もあるし後で考えよう。まずはベースキャンプをどこにするかだね」

平田がマニュアルをめぐり島の形が大きさだけ記された白紙同然の地図の載ったページを開く。

必要な情報は足で集めろってか。

「それよりもトイレ……流石にあんなのじゃ絶対無理」

「つつつても我慢するしかねえじゃん」

篠原の再度の訴えを池はあっさりとは否定したが、マニュアルを読み

進めている平田が言った。

「いや方法はあるよ。マニュアルにはポイントで購入できる物の中に仮設トイレが設置可能って書いてある」

篠原たちはこぞってマニュアルを覗き込む。

機能的には家庭用トイレと変わらずだが、問題は設置に20ポイント必要なことか。

「絶対いるって！っていうか、それじゃないと無理！」

「まてよ！20ポイントだぜ!？」

篠原の意見に女子たちが賛同するが池が異を唱え、それには少なからず賛同者が居るようだ——男子だけでなく女子の中にも。

仕切っていた平田も仲裁に入るが、やっぱり長引くかな、こりゃ。

俺は空を見上げ陽光を手の影で遮りながら、呑気に飛んでいる鳥たちが視界に入る——こつちと違いなんとも平和そうだ。

「嬰兒はどう思う——さつき、あれだけ啖呵切ったんだ。是非に意見が聞きたい」

綾小路よ、さつきのあれは堀北を大人しくさせるのと変な誤解が生じないようにと出た出任せ同然のものだったんだが………口にしたのは事実であり一同の注目が集まってしまった………仕方ない。

「取り合えず、ここは暑くて嫌だから涼しい所に行かないか」

問題を最初の方に戻す——誤魔化すなどか言われる前に、

「水場があることは絶対だ。可能ならスポットも含めて、どういう風に活かせる拠点かで何が必要かも見えてくるだろう。」

トイレもそうだが、ここにずっと居たって結論は出ないだろ——もう他のクラスは行っちゃってるし」

最後の指摘で皆が一斉に振り返ると浜辺に居るのは？クラスだけなのにやっと気付いた。

文字通りにスタートに出遅れた——新たな事実が遅い焦りが浮かび、その中でも特に池が先陣を切る。

「ああ、くそ！悠長にトイレの話なんてしてられない！俺はスポット

とキャンプ地を探しに行く！」

須藤と山内も一緒に行くつもりのような——大層な自信からして止めても無駄だろうな。

「おい、ポイントを手元に使うんじゃないぞ」

「言われるまでもない」

森に入っていく三人を見送りながら、テントを始め支給品を確認し移動の準備を始めた。

青々と生い茂った森の中をあるく？クラス——前を歩いている中でテントを苦も無く運んでいる嬰兒の背を綾小路はさり気なく見ていた。

（乗り気でなかったから何かしら苦手なのかと思ったが実情は逆のようだな）

屋上での問答曰く——堀北を棄権させたのは「正しいこと」で、出た台詞はその場での方便。

（だが確かに口にした——それは最大限利用させて貰う）

綾小路は歩きながらも脳内ではクラスをいかに煽って、嬰兒を動かそうかの算段を練っていた。

そして使えそうなカードに目を向けると、少々辛そうであり声を掛ける。

「大丈夫か、愛里？」

「あ、うん。ありがと——?!」

佐倉は空元気をみせてくるが慣れない道に足を取られ躓きそうなるのを何とか踏みとどまる。

「無理はしないほうがいい。なんならオレが前に行ってもう少しゆっくり——」

「大丈夫だから。頑張っついていくよっ」

健気な姿に本当なら「偉いな」と感心するだろうが、前回のことから佐倉をダシにすればと言う目論見は駄目になった。

「きよぽくん——しんどそうな女子は他にも居るんだけどなく」

「愛里が頑張るって言ってるのに、お前がへばってちゃ台無しだぞ」

「お、みやっち流石！いいツツコミ」

されどグループの空気は格段に良くなった。

幸村にしてもやれやれと言いたげに首を振るも表情は悪いものはなかった。

故にそれに便乗することに決めた。

「啓誠はどう思う？さっきは嬰兒が上手く話を逸らしたが問題はすぐぶり返すぞ」

「単純に考えればポイントの無駄使いはするべきじゃない。女子が欲しいのも分かるが男子のものでもある、我慢すべきところはすべきと考えてたら——あのストーカー同様、独りよがりの押し付けのような気がしてな。正直、何が正解なのか分からない」

「じゃあ、落ち着いたら一緒に嬰兒たちと話してみないか？言ったからには責任はとことんやって貰うべきだ」

「ああ、別にいいが……何かされたのか？」

「ちよつとしたアクシデントで有栖を——」

「分かった、もういい。あとで一緒に行こう」

それだけでもう十分だと言わんばかりに幸村は話を切って僅かにペースを上げる——他のメンバーも同様に。

(嘘はついてないよな)

心の中で呟きながら綾小路も歩調を合わせた。

程よい日陰と開けた場所で皆はいったん腰を下し、周りの気配を探るが問題はない。ひと息つこうとなってるが悠長なことは言っていないらしい。

綾小路と幸村が近づいて来るが相手にしてはいられん。

「平田、トイレ込みで無理なく一週間乗り越えるポイントの見積もりを出してくれ。正確な数字が出れば話もし易いだろう」

「そうだね、分かった。早速始めるよ」

「それ、俺も手伝う」

平田がマニュアルを出したタイミングで幸村の声がかかった。協力的なのは結構なことだ。

綾小路は俺の方を見て更に何か言っけきそうだが、今は本当に時間が惜しい。

「俺は周りを探索してくる。池たちだけじゃ効率的じゃないからな」

「ならオレも一緒に行こう。一人じゃ危険だろう」

「整備された森でしくじったりはしない。ましてや素人なんて足手纏いだ」

申し出を拒否して俺は森に入る——文句は後で聞いてやるから、これ以上は引き留めるのはよしてくれよ。

俺は早足で森を進んでいくと綾小路が追いかけてきたが待つてはやれん。

クラスから完全に見えなくなる距離に来たと同時に走り出す——急がないと先を越されかねない。

ああ、くそ。環境への配慮なんて項目がなきや『午』モードにして一直線に進めるのに。

木をなぎ倒したくなるのを我慢しながらもどうにか森を抜けて人が切り開いた道に出た。

道の先にはぼっかりと空いた洞窟が見えた——どうにか間に合ったか。『蠍』モードとなり暗殺者の気配立ちと周囲への同化を行い近づいていくと洞窟内から二人の人影。

目を細めてみるとAクラスの葛城と戸塚だ——何とも不用心なことに葛城の手にはカードキーが。

二人の視界に入らないように隠れて様子を窺う。

「運も俺たちの味方ですね、この大きさならテント二つでいけますよ葛城さん。しかもスポットでもあるなんて」

「運？お前は何を見ていた。ここに洞窟があるのは上陸前から分かっていたことだ」

「上陸前から？」

「そうだ。奇妙なアナウンスから始まり不自然な旋回速度で島を一周、全ては学校がからのヒントだ。ならば最短ルートで確保するのは必定——この他にも見えた道にも何かしらあるはずだ」

「流石です！学校側の意図を全部見抜いてたなんて、これで坂柳も——」

「お喋りはそこまでだ。誰が聞き耳を立てているのか分からないんだ——俺にはリーダーとしての監督責任がある。あまり手を掛けさせるな」

カードを見せつけながら注意してる——うん、おっしやる通りだよ葛城。

俺はその手からカードを摘まんで取り読み上げる。

「トツカヤヒコ——葛城つてのは偽名だったのか？」

「!?!?」

驚いてる間に距離を取って向き直ると冷や汗を浮かべた葛城が訊いてきた。

「いつから居た？」

「運も俺たちの味方つてところから」

つまりは最初からだと分かると葛城の冷や汗は増え、失態を犯した戸塚の顔は真っ青になった。

男と見つめ合う趣味は無いからとつとと行こうかな。

「待て！他クラスへの略奪は即失格だぞ……分かってるのか!？」

「そ、そうだ！俺たちが訴え出れば——」

苦し紛れにしては中々いい所を突いてきたが全然駄目だね。

「俺はただ落とし物を拾っただけだ。だから落とし主を確認しなきゃ返すわけにはいかないね」

「何言つてやがる。俺の名前があるだろうが」

「俺、お前のこと葛城の手下その1としか覚えて無くてな。この名前がそうだと言われてもちよつとね。ひよつとしたら？のかも知れないし、BCの可能性もあるから聞いてみないと」

「何をぬけぬけと！」

「よせ、弥彦」

怒り形相で俺に向かってきそうなのを葛城が止める——こいつは逆に頭が冷えたか。

「こいつの名前は戸塚弥彦だと俺が言っても通じないな？」

「当たり前でしょ。ひよつとしたら洞窟の中に潜んでるのが居たりとか、確かめようとして背後から襲われちゃ堪らないし」

「ふざけるな！お前みたいのが早々居るわけねえだろ！」

「いい加減、黙れ弥彦」

葛城のドスの利いた声に悔しそうに引つ込む。

改めて俺に向き直った葛城からは冷や汗もなく落ち着いた声で言った。

「屁理屈の応酬は止めにして提案がある。口止め料として100万p rポイント支払うと約束するから、見聞きしたことは忘れて欲しい」
金で解決を図るか——妥当だがちよつと違うよ。

「120だ」

「120万ポイントだな。分かった口約束ではお互いに心持たないだろから正式な書面を——」

「違う。試験ポイントを120寄こせて言ってるんだ」

交渉が成立したと思っただらうが一転して違う方向となり、かつ吹っ掛けられた金額に再び二人は固まってしまった。

復活するまで待つのもなんだしストレートな交渉をお望みとのことだから、

「嫌ならいいよ。BとCにそれぞれ40で交渉するから」

「……………俺たちの三分の一だと足元見るのも大概に——」

「さつき黙れと言ったぞ」

暴走しそうな戸塚を再び止める葛城……随分と苦勞してそうだ。

頭の中でそろばんを弾いてみればどっちがマシかは明らかなのに。俺がこの情報をAでなくBとCに売れば、120は支払わなくても3クラスのリーダー当てにより150の損失、しかもボーナスポイントは無効だからスポットをいくつ占有したって無意味。

更に生活に必要なポイントを引けばひと桁もいけばいい方だろう。

それでもすぐにウンとは言わないあたり何かしらの打開策を見いだせないかと藻掻いてるのか？それなら――

「受けるならリーダーは俺の胸にしまっておくし、スポットも？はひとつだけしか占有しないことを約束させる。他のスポットは手を出さないから頑張れば巻き返せるかもよ」

俺の提案に葛城の目尻が少し動いた――ま、よく考えてくれや。

「その条件でいいなら正式な書面を用意してくれ、2時間後にまた来るから」

じゃあ、と俺はその場を後にしてクラスに合流することにするがルートは来たのとは違いやや遠回りする。

すぐさまに視界には須藤を笑った他クラスの生徒が入った。

こつちに気付かれる前に隠れたようだが最初から居るのを知っていた分、見つけるのは容易だった――あれが龍園か。

その手には一枚の書面――『鵜の目鷹の目』で鳥に覗き見させた内容を大雑把にすると、Aクラスに全面協力する代わりに坂柳を除くクラス全員が毎月2万ポイントを卒業まで龍園に支払い続けると言う契約書。

尤も額面通りにするとは思えないからプラスアルファ何かしそうな気もするけど流石に情報不足で見当は付かない。

それでもこの契約が結ばれたら葛城も流石に自棄を起こしてたかも知れない……間に合ってよかった。

見るものを見て用件を終わらせて元の場所に戻るとそこには綾小路しか居らず直ぐに説明を受けた。

「池が水源のスポットを発見したそうだ。依頼してた見積もりも出来たから直ぐに合流してくれとのことだ」

無言のまま肯き案内されると綺麗な川が静かに流れる場所に着いた。

機械が埋め込まれた大岩があり、周囲は深い森と砂利道に囲まれているが、どう見ても人の手が入っているな。

「お、やっと来たか嬰兒。どうだよ、リクエスト通りの場所見つけたぞ」

池が胸を張って自慢してくるが、ここは素直に関心だな。

良質な水源、暑さを遮る日陰、地面も地ならしされて申し分ない。スポットも兼ねていて拠点としては最適だ——池も予想通りに使えそうだ。

「それで嬰兒は何か見つけたのか？」

嫌味でなく単純に聞いただけみたいだから何もなしでも流されて終わり——そもそもニュアンスからして特に期待もしてなさそうだ。

俺はさつき拝借したカードを差し出す。

「なんだこれ？ トツカヤヒコって誰だ？」

「それキーカードだよ！ そんなバカな！」

平田が慌てて荷物を確認するがカードはちやんとあつて胸を撫で下ろす。だが名前のない状態を見て、状況を正確に把握して驚きの目で俺を見てきた——ちなみにそれは平田だけじゃなく他にも数人いたりした。

「Aクラスが落としたのを拾ってな」

適当な岩に腰を下ろしながら周囲を見渡すと驚きはクラス中に広がった。

「拾ったって……マ、マジかよ!？」

「けどこれでプラス50ポイント……」

「リタイア分もチャラどころか、お釣りがでるぞ」

突然舞い込んできたさつき以上の朗報に喜びの声が、

「だ、だけどこんな大事なのを落とすなんて」

「……まさか、無理矢理奪って来たとか？」

「ちよつと、それヤバくない……私たちまとめて失格じゃん」

中には冷静な意見も出てきており、平田がぎこちない仕草で尋ねてきた。

「一体どう言うことなのか説明してくれるかな？」

「勿論だ」

紳士的に〇〇

俺はAクラス——正確には葛城と交わしたやり取りを子細隠さず話した。

「リーダー当てしない代わりに120ポイント」

「スポット占有がひとつ……ってことは、要はここだけってこと」

「結局マイナスのままじゃんか」

懐疑的な意見がまずは出た。

「いやそうとも限らない」

そこに平田が待ったを掛けて一枚の用紙を出す。

「幸村さんと一緒に一週間乗り切る見積もりを作ってみた——結果、無理なく過ごすには180必要だと算出された。勿論これは水も食料もポイントで賄う前提だから工夫すればもつと少なくともできる」

川を見ながらの説明に希望が湧き上がるのが感じるな。

「嬰兒くんの取引で120とスポットもひとつとは言え占有することが出来れば結果的にはマイナスは50以下で済む。安易にリーダー当てをしたり、スポット探しに躍起になってリーダーを晒すリスクを得るよりかは——」

平田が上手く纏めようとしているが訂正すべき箇所がひとつあるな。

「平田、それは違うよ。マイナスは50じゃなくて80だ」

「ど、どういうこと？」

事態が呑み込めてない中で軽井沢が訊いて来たので答えを教える。

「言ったままだ。既に一人、居なくなってるぞ」

「あ、高円寺君が居ない！」

「それなら探索に行くって志願していつて」

「……ちよつと遅れてるだけだよね？」

戻ってくるかと本気で思ってるのか？——流石に今までのことを考えてそんな奴はいないか。

幸村が額に手を当てながら俺に問う。

「つまり嬰兒がリーダー当てを選ばなかったのは、やったとしても結

局マイナス10でプラスに転じないと読んだからか？」

当初の様子を見て俺も逃げ出したいと思っただけからな。他に居たとしても不思議じゃない——思っただけで実行するには相当な胆力があるだろうが、それこそ奴には問うだけ無駄だろう。

「そ……それでも、どうにか工夫すれば200超には出来る可能性は十分にある。

僕はAクラスとの取引に応じても——いや応じるべきだと強く思うよ。嬰兒くん」

最後に俺の名を出したのは淀んだ空気を払拭するためか単に俺を立ててくれたのか。

「うん、あたしも賛成。他所のポイントならトイレも気兼ねなく買えるし」

軽井沢が平田の意見に真っ先に賛成すると。

「わ、私も」

王が続ぎ、散々トイレについて言っていた篠原たち軽井沢の取り巻きも続いていき女子たちの意見の大勢は決まった。

「俺も一票入れる——270から200になるのはちよつと思ふ所があるが、リスクを取らないで済むのは大きなメリットだ」

幸村もどうにか持ち直し賛成に回る。

「異議なし」

「右に同じく、オレも嬰兒の取引を受けるべきに一票入れる」

グループを組んでいる三宅と綾小路も続いたが——綾小路よ、俺の手柄だと持ち上げて乗せられはせんぞ。

ともあれ流れは出来上がり黙っていた奴らも次々に賛成していき残るのは三バカだけ。

「俺も別にいいぜ」

と山内が流れに逆らうことなく言うのと、

「ま、反対する理由はねえよな」

池も渋々なながらも賛成する——もつと活躍できるとか思ってるんだろうが埋め合わせはちゃんとするから心配するな。

「言っただ通りに男を見せたんだから、俺もケチをつける気はねえ」

最後に須藤——恥かかされた恨みとかで反発すると思ってたが、結果的に堀北を助けたので借りがあるとか勝手に思ってるのか？

まあ、話は纏まったので約束の時間までに必要な品をリストアップして同時に俺以外にクラスの代表として赴くメンバーとして平田と綾小路が決まった。

「取引の内容はこれでいいとして、僕たちの方も早く決めないといけないことがある」

平田の言葉に櫛田が反応する。

「リーダーをどうするかだよね」

「うん。ここを占有するしないに関わらず絶対に決めなきゃいけないルールだし、誰に任せるか——どこに目があるのか分からないし慎重に行かないと」

前例を見せられただけに皆の表情も硬くなる——その責任の重さに立候補を名乗り出るものは皆無であった。

嬰兒のようなのが早々居るとは思えないが絶対とは言いつれもない。それでなくとも何の拍子でミスを犯すかもしれない不安。

いつそのこと自分たちで決めずに時間切れで学校側のランダムに任せた方が——それなら諦めもつくと平田が考えをまとめたが、

「ねえ、平田くん。それも大事だけど、あたしたちもポイント使わなきゃいけないならトイレ早く設置してほしいんだけど」

軽井沢の声に女子も肯き、結論が少し先に延びた。

「ああ、そうだね。じゃあ申請をすぐに——」

「それとき、節約して浮いた分——ちよつとでいいから使っちゃダメかな」

「何を言ってる！ただでさえ二人もリタイアしてるんだ。必要な物が嬰兒のお陰でうまく切り抜けられるようになったからって、必要のない物に使うなんて——」

「いいんじゃないの」

幸村が捲し立てたのを遮って嬰兒が肯定する。一番の大手柄を上げただけに発言には力があり黙らざるを得ない。

「え、ホントに！」

「ただし、条件がある。」

リーダーをお前のグループから決めること。それがバレない様に責任を持つことだ」

しかし甘い訳もなく嬰兒の意図に幸村も反対だった者たちも納得して成り行きを見守る。

「もしバレて50とボーナスを失うことになったら、相応の責任を取って貰う。それを約束するなら——そうだな、責任の重さを考慮して12までは許す」

「分かった。約束する」

この即答に周りも持ち掛けた嬰兒も面食らう。

「そうか——じゃ、早速決めてくれ」

「じゃあ、松下さん。お願いできる」

「え、私？」

軽井沢に指名された松下千秋は自分を指さし困惑した。

「あたしじゃ、どうしても目立っちゃうし——あたしたちの中じゃ松下さんが一番しっかりしてるから適役だと思ったんだけど、駄目かな？」

「い、いや私なんかじゃ……」

「バレない様にあたしたちもちゃんと守るから、だからお願い！」

ただの勢いで決めた訳ではないようであり、そして嬰兒に任せられた役割を真面目に果たそうとしている姿は見かけと普段の彼女からしてギャップしかなく——そんなに欲しい物があるのかと興味を湧かせた。

「はあく。分かった、引き受けるよ。ちゃんと守ってね——嬰兒くんたちもね」

さり気なく嬰兒を巻き込み共通認識が全員に行き渡った。

「兎に角、これで主だった問題はクリアしたから——あとの日常の問題は臨機応変に、いや起こさないように注意していこう」

平田が締めて解散となり、軽井沢たちは茶柱のもとに松下千秋をリーダーに申請しに行き、Aクラスに赴くメンバーは待機し、それ以外は食料探しや薪拾いに駆り出した。

嬰兒は少し離れた木陰に座って特に何もしてないが文句を言える訳もなく——ただ静かに目を瞑っていた。

そこに近づいて行く綾小路——表情はいつも通りだが内心は不可解が占めていた。

（徐々に焚き付けていくつもりが、いきなりとんでもない成果——これ以上は何も言えないのを狙ったのか？）

無難な推測を立てつつも想像の域をでないため直接訊くつもりなのだが、何処まで答えてくるのか——考えても仕方ないので声を掛ける。

「随分とご活躍だな。嬰兒」

「お前の言った通りの展開だろ。口にした言葉を守ったまでさ」

「それはそうだが——ここまで攻撃的にやるとは思ってたな」

それにしても早すぎるし手際もよすぎることから異能を使ったのだろうが——反則気味と言った後ろめたさは声や態度からは感じ取れない。

（持っているものを使っただけだから、当然と言えば当然か）

実際にそんなことは綾小路にもどうでもよく知りたいのはその経緯——どういった能力を駆使したのかだ。

しかし何処に耳があるかも分からず気に掛けてはいるが、異能の無い常人を自覚している綾小路はストレートに訊く訳にはいかず遠回しでもあるも適切な話題を投げかける。

「Aクラスじゃ今は魔女裁判になっているかな？」

「さあね。もうあつちには興味はないが——綾小路なら俺の攻撃をどう凌ぐ？」

この問い返しに少なくともAクラスの耳は近くに無いと判断しつつ、他に耳があった場合の意図を考察しつつ、綾小路の対応策を語る。「結論から言えばリーダーを入れ替える」

「ほう、どうやって?」

「ルールに明記されている。正当な理由なくリーダーの交代は出来ない」と」

「なるほどね。正当な理由を作り上げるのか」

「そのままリーダーを誤認させて全クラスのリーダー当ては外して50のマイナスに誘導、敗残を装いながら他のリーダーを探れば更に50、ボーナスポイントも無効にできて150ポイントと絶対にバレない自陣のスポットで20弱のポイントを得る——そんな様子はあるのか?」

「ない。吊し上げ食らって正常に頭が回らないんじゃないか——あってもそんな裏技に辿りつく柔軟性はないと思うぞ」

「確かに優秀な男だが頭は固そうだからな」

「正攻法で自らを高めてきた故に誇り高いのだろうが、それ故に背後からの——見えにくい攻撃への想定が甘くて脆弱である——それが綾小路の下した結論だった。」

「嬰兒だったら、そもそもどう試験に挑んでいた?」

「そもそも、か——試験そのものを放棄して坂柳派に丸投げするな」

「有栖が居ないのに丸投げ?」

「今回の葛城の敗因はAクラスの利益とリーダーの座を一緒に欲したことだ」

「別に矛盾はしてないと思うが」

「矛盾してなくとも二つは別物だ——真つ二つに割れてる状態で集団による戦いを挑もうなど愚の骨頂。まずは内部の憂いを断つべきだ」

「だから、ぐうの音でも出ない結果を出そうとしてたんだろ」

「それが甘いんだよ——何よりこれは俺だったらって前提だろ。俺なら分かり易い弱点を徹底的に突く、そして坂柳の弱点は身体にハンデを抱えてることだ。」

「こういう試験もそうだが体を使うかもしれない試験があと何回あるのか?その都度頼ることの出来ないリーダーでいいのかって思いを抱かせる。それで損失を出しても責任は坂柳が取るべきだとすれば彼女に付いてる連中も寝返る可能性は大いにある」

「仮に大丈夫でAクラスが利益を出したなら？」

「Aクラスの為を思うなら負けを認め、結果を出すうちは従うと発破を掛けて働かせる。」

クラスの利益よりリーダーの座を求めるなら——直接的な妨害を好まないとしても手下どもにプレッシャーをがんがんと与えて失敗を誘発させるな」

二兎追う者は一兎も得ず——今回の件も嬰兒でなく坂柳派の裏切りで目論見が大いに崩れていた可能背は高い。彼女なら例えクラスの不利益になったとしても女王の座^{トツプ}を欲して許容し、しかる後に盤石の態勢を持つて事に当たることを選んだだろう。

同じクラスだから裏切りはないという甘い考え——否、坂柳不在でトップに立てる状況に目がくらみ目的^{よく}をひとつに絞らなかつた。

つまりは最初から間違えており、そのまま突き進んだ必然的な敗北。

綾小路は嬰兒の考えを聞きながら、その心を垣間見られたことに今はこれで十分だとした。

「さて、そろそろ時間だ。行こうか」

嬰兒が立ち上がると近くに平田が来ており綾小路も立ち上がった。

「よう綾小路。待ってたぜ」

Aクラスの洞窟に行くとは葛城でなく、見覚えのある金髪が出迎えてくれた——佐倉の一件で見届け人を務めた坂柳の取り巻きの一人だったな。両隣に強面とサイドテールの女子、確か神室とかいったか。

「橋本、すまんが挨拶は抜きにしてくれ」

律義に教えてくれてありがとうよ。

「おお、そうか。それじゃ」

橋本も嫌な顔せずには用紙を差し出してきた。

内容は俺の提示した条件をそのままであり、脚色や拡大解釈できる

表現は見当たらない。

葛城が後ろの隅に立たされ戸塚が悔しそうに俯いているところを見るに坂柳派が完全に主導権を取り彼女の代行としてこの三人が取り仕切ってるようだ。

「確認した。それじゃこちらも」

綾小路に促されカードキーを返すと橋本は笑みを浮かべなら戸塚に投げ渡す。

「ほらよ。今度はなくすんじゃないぞ——これからは大変なんだから」

愉快的なニュアンス——スポット確保に手を貸す気はないみたいだな。

その様子に平田は複雑そうな顔するがこれも勝負の結果だ。無用な情けは掛けようものなら即座に引込めろぞ。

「？クラスの要求するものはリストアップしておいた。今日中に頼むよ」

「直ぐに手配する——それとそんな顔をするな。同情なんてして貰いたくねえし、これは相手を舐めてた馬鹿な奴の不始末だ」

通りの良い声に黙っていた葛城も若干肩を震わせるが我慢している。

「それに俺としては？クラスが戦うに値するって証明されたのはある意味で行幸だ。いくらボスの幼馴染が居るって言っても——やっばりどっか懐疑的だったからな」

橋本の声が嬉しそうなものから挑戦的なものに変わり綾小路を見据える——同時に何故か平田の目にも光が宿ったが、どうしたっていうんだ？

「次はこうは行かないぜ。二学期からは完全な一党体制、もう死角なんてねえ」

「知ってるよ。有栖は王^{キング}を取るためなら女王^{クイーン}も躊躇なく棄てる指し手だからな」

さっきの俺の見解も入ってないか——それとも皮肉でも込められ

てるのか？

「こっちも望むところだよ。？ほくたちクラスも全力でサポートする」

平田のニュアンスにも熱がある——お前らいつ共闘関係を結んだんだよ？

俺が主導したのに置いてけぼりを食らったみたいで話は進んでいき、聞きたいけど聞きたくない気持ちで俺はベースキャンプに戻った。

「高円寺は体調不良でリタイヤした。現在は船内で療養と待機を義務付けられている」

既に分かり切っていたとは言え、クラスは怒り心頭であった。

「クソつたれ……ちよつとでも期待したのに」

幸村が吐き捨てるが、届いた物資に怒りを収めつつ確認作業に入った。

他のメンバーも焚火を熾そうと苦慮していたり、集めた果物を並べ検討したりとしていたが俄然、経験者が居らず正しい判断を下すことが出来ない。

こんな時に頼りになる平田も物資の確認で空いておらず、嬰兒に白羽の矢が立ちそうなるが、

「お前ら何やってんの？」

池が戻ってきて手際よく焚火を熾し、果物の説明をしながら子供のようにはしゃいだ。

ひと通りのレクチャーが済んだ後、篠原に向かい真面目な顔で言った。

「篠原、さつきは悪かった」

「え、なによ突然……」

「初めてキャンプした日を思い出してさ——汚れ放題の酷いトイレで使うのが嫌でスゲエ帰りがかった。

………やったこともないのにいきなりサバイバルなんて嫌なの

が普通だ。ましてや女子だもんな、独り善がり過ぎた。悪かった」
冷静に客観的に反省し謝罪する——口にするのは容易いが実行するには勇気が要る。

池の出来た姿に篠原も矛を収めることが出来たようでバツの悪い顔となり返した。

「私も……ごめん。かなり意固地になってた……そうだよ、私だつてポイントを残したく無い訳じゃないし頑張らないとね」

相手の主張も認め譲歩を示す——二人の和解が成立しクラス内の結束はより高まったかに思わせた。

その期を見計らい平田が声を上げる。

「みんな、物資の確認が済んだ。予定通り？クラスは一週間を無理なくいける。」

だけどそれに胡坐をかいてちや駄目だ。1ポイントでも多く残すためには一人ひとりの頑張りが必要だ——でも決して楽しい状態でもない、寧ろ困難を楽しみで補う方法を模索していけば、それは更に良い結果を残すことが出来る」

平田の言う良い結果とは単純なポイント残高だけではないだろう——クラスそのものの結束と絆、言葉に熱の入りようが違う。

「幸い僕たちには可能性を示してくれる知恵袋が二人もいるし、Aクラスの関係も綾小路くんのお陰で思っていたほどに険悪にならずに済みそうだ」

この説明で話の主役の一人に引き出された綾小路も注目される。

「僕たちは戦えない訳じゃない——戦うべきAクラスもくひょうは憎む敵じゃない、その先を良い思い出にできる好敵手と呼べるのを僕はさつき確信した。」

その為にみんなの力を合わせて戦って欲しい——そして、最後には笑って卒業して行きたい」

平田の演説が終わると佐倉が真っ先に拍手した——続いて綾小路グループに榎田、軽井沢のグループ、含みを持たない男子たちも。

「ありがとう」

平田は感嘆極まり、なし崩しに利用された綾小路は頬をかいだ。

皆が寝静まり、空を見上げると綺麗な月が目に入る。

しかし俺が起きたのは詩人を気取るためじゃない——島を大きく移動して山を挟んで船の反対側に向かう。

手には『申』の仙術で作った絶妙な硬度の汚れた氷塊。

ふう——と息を吐いて『酉』と『射手』を併用して目標をロック。力いっぱい空に向かって投擲——山を越えて高度一万を超えていき、放物線を描きながら落下していく。

船上デツキに佇む体調不良でリタイヤしたはずの高円寺。

「フッフ——月が綺麗だ」

不敵な笑みを浮かべながら空の月に向かい仰々しいポーズをとる姿は健康そのもの。

「——?!」

直後に落ちてきた冷たい何か額を直撃して砕け散った——全く予想外で不可解な事態に思考を巡らせない。

混乱しているからではない——砕けたとは言え硬度があり落下速度も加わった一撃は額を割り派手な血を飛び散らせ高円寺の意識を奪ったのだ。

大の字で仰向けに倒れたが直ぐにスタッフが駆けつけて大事には至らなかった。

しかし精密検査と暫らくの静養を余儀なくされ、奇しくも本当の脱落者となったのだった。

よしよし——見事に命中だな。

命に別状はないように調整しといたから、出来るなら少し放置されて欲しかったが仕方ないか。

さて次は『射手』を解かずに適当な小石を数個握り、『水瓶』を使用——海に手を入れて海流を操作し魚を空中に打ち上げる。

即座に狙いを定めて小石を投げると魚は気絶し海面に浮く——頑張った報酬だ、遠慮なく食べてくれ鳥たちよ。

おおっと魚を啄んでいる鳥たちを眺めてばかりはおれんな——誰か、綾小路が追いかけて来たようだ。

夜更かししたくないし、とつとと退散しよう。

俺はそのまま島を一周する形でキャンプに戻り、一時間近くして綾小路戻ってきたが疲れたのかそのまま寝た。

朝が来た。

男子たちの目覚めは悪くはなかったがいいとも言えず目が胡乱なのが殆どだった。

一方、女子の方は許した12ポイントで快適な環境を整えておりストレスは格段に軽かろう——その分の責任を負わせているが軽井沢が取り仕切って見張りを立て周囲の警戒を徹底させており松下リーダーを囲み数人とまぎれさせるのも櫛田グループも混ぜており、働きぶりには文句はない。

従っている女子たちも軽井沢個人でなく女子全体の為の出費であり、昨日の篠原と池のやり取り、平田の演説が上手く機能しているのか真面目にこなしている。

？の方針は決まり、ひとつのスポットを守り通して創意工夫を持って楽しみながら過ごす。

Aとの話は付いたが反撃の可能性はあり、BとCはどうしてくのか？

そう言えば今朝がた誰かが来てたな——行き帰りの方向からするとBクラス、かすかにだが無線の音もしたしまず偵察だろうな。

Cクラスは考える必要はないか——少なくともこの試験では。

点呼が終わり更新時間も大分あることから魚釣りや森の散策を志

願するのが行つたが、俺は待機を選択した。

ただ妙に使命感に燃えている軽井沢が俺の目の前で見せつけるように迂闊な行動をするとか仕切りを發揮しているが何のつもりだ？

つと、それは後にして客が来た。

「な、なんだよお前ら?!」

「あ、てめえ!」

釣りをしていた池の叫び声に注目が集まると二人の男子を引き連れた龍園——須藤はデツキで笑われたのを思い出したのか見た瞬間に顔が陰しくなった。

愉快そうにベースキャンプを軽く見回すと俺に近づいて来る。

「よう。もつと派手にやってると思つたが割と質素だな——牛井」

間違いなくワザとだな——俺は睨みながら返す。

「まずは名乗れ——誰だ。貴様ら?」

「俺のことが分からねえつてか——まあいい。俺はCクラスの龍園だ」

「小宮だ」

「近藤……」

名乗りを終えたので、

「一応は初対面だし、俺は牛井——」

「それだけで十分だ。う・し・い」

名乗りを遮り苗字を強調してくる——喧嘩を売っているようである、試してるな。

「おい!いい加減しろよ!人のクラスに勝手に入つてきやがて!!」

同じく近づいて来た須藤が威嚇するが——人が話してるんだから勝手に割り込んでくるな。

龍園も興味がないようで無視して俺を見たまま話を続ける。

「まさか初日にして葛城を叩き潰すとはな——俺も獲物に定めて作戦考えてたんだが全部。アアだぜ」

「それはぐ愁傷様——それで?」

挑発に対して挑発で返すと愉快そうに言った。

「今日来たのはただの挨拶だ——だが出来れば、どうやって潰したのか教えてくれねえか？」

「こうやってだ」

「!!？」

既に『蠍』は発動済み——気配を殺して立ち上がり龍園の胸に手を添える。

意識を完全に外された不意打ちだったが、龍園は半歩後ずさるだけで踏みとどまった——ちなみに小宮と近藤は大幅に一步下がって驚愕してる。

「大したもんだな。誰かさんはあつさり尻もち付いたのに」

「嬰兒！てめえ!!」

須藤が俺に手を伸ばすが、それより早く顔面の頬ギリギリに俺の拳が届く——頭が冷えたか？

俺は寸止めの状態のまま冷やややかな声で問う。

「問題。俺とお前、粹がってるのはどっち？」

須藤は顔をひきつらせたまま何も答えない。

その様子を見ていた面々は固唾を飲み。

唯一の例外が大笑いしながら手を叩いた。

「ハハハハハッ——いやおもしれえな。気に入っただぜ、暇してるんなら浜辺に來いよ。面白い物見せてやるよ」

愉快的声でそう言うと言園は笑いながら去って行く——さて、あいつの中でどんな思考が展開されたのかな。

手を下ろすと須藤は悔し顔で行き、同情なのか恐怖か誰も声を掛けない。

そんな中で須藤じゃなくて俺を見ている二つの視線——ひとつは綾小路で目に好奇心の光が灯っており、もうひとつは軽井沢だがその目には妙な期待感を感じた。

それが何かは後にして、暇してるのも事実だし俺は浜辺に行くとするか。

「待て、オレも一緒に行く」

「あ、あたしもついていっていいかな？」

綾小路と軽井沢がほぼ同時に言ってきた——顔を合わせた後に二人はそれぞれ言う。

「オレはどうも気になってな。確かめたい」

「あたしも次の更新まで暇だし……ダメかな？」

「別に構わんが」

俺はな——だが彼氏ひらたを差し置いて別の男と行動するとは、しかもそれを堂々と公言してんのに平田は何も言わないし——こいつら、どうなってるんだ？

白い砂浜、青い海、照り付ける陽光の中で嬰兒たちは立ち尽くす。

「うそ……でしょ……」

目の前の光景が信じられないのか軽井沢はありありと戸惑っている——綾小路も信じられないようにで呆然としている。

Cクラスはまさしく南の島のバカンスを満喫していた。

仮設トイレやシャワーが設置されているのはまだ理解するが、それ以外は理解できない。

日光対策のタープにバーベキューセット。

チエアーにパラソル。スナック菓子とドリンクと娯楽に必要なありとあらゆる設備。

肉を焦がす煙と笑い声。

沖合では水上バイクが駆け抜け、海を満喫する生徒が悲鳴をあげながら楽しんでいる。

ざっと見渡すだけでも150ポイントは吐き出していることが伺えた。

「0ポイント作戦か——面白い」

綾小路は全容を把握したようだが軽井沢には理解が出来ず、嬰兒は興味もないようにで龍園のもとにまっすぐ向かう。

「よう、どうだ中々だろう——歓迎するからゆっくりしていきな」

水着でチエアーに寝そべっている龍園が愉快に白い歯を見せる。

「肉を食おうが水上スキーを楽しもうが好きだけしていけ——どうせ俺たちは今日中に船に戻る」

龍園の台詞に綾小路と嬰兒は驚きはないが、軽井沢は付いていけず動揺する。

「え、え……どういうこと？」

その様子を見て笑いながら龍園は続けた。

「使えねえ女連れて来たな——なんだったらもつといい女でもつけてやろうか。おい伊吹！」

「ちよ、ちよつと勝手に決めるな！」

近くに控えていた伊吹が抗議する——スレンダーな体つきだが髪の色に合わせた淡い翠色の水着は誰もがよく似合うと褒めること間違いないだろう。

その姿に触発された軽井沢が大声を上げようとした。

「駄目に決まってるでしょ！」

と、嬰兒の前に出て言おうとした——しかしその前に嬰兒は手を出して言った。

「悪いが遠慮する」

その対応に軽井沢は安堵し、伊吹は複雑な顔だ。

龍園の愉快そうな声はまだ続き、

「はは——振られちまったな。じゃあ別なのでどうだ。ひより、来い！」

「はい。なんででしょう？」

近くのビーチパラソルの影で本を読んでいた椎名が立ちあり近づいて来る。髪を結い白いワンピースの水着姿から覗かせる体つきもまた魅力的だった。

「客が来たからホステス役やれ」

「はあ、ご指名とあらば」

「悪いが遊びたい気分じゃないで、またにしてくれ」

本を閉じて命令を受けたが嬰兒にその気はなく丁重に断った。

「そうですか。残念です」

「待て。まだ少し居ろ」

用は済んだと椎名はパラソルに戻ろうとするが龍園が引き留る——どうやら彼女にも聴かせたいようだ。

意図を察しながら嬰兒は淡々と龍園の判断への感想を言った。

「勝ち目がない戦いはしないか——意外に殊勝だな」

「この戦場フィールドじゃ、テメエの独壇場なのはさつき確かめたからな。

俺たちに限らず全クラスは圧倒的に不利、不本意だが不戦敗とさせて貰うぜ——今回は」

「なにそれ——負け惜しみ？」

「軽井沢、静かにしてろ」

「ご、ごめん」

軽口を叩く軽井沢を嬰兒は強い口調で騙させる。

やや怯えながらあつきり引き下がるのを横目で見て、再び龍園に目を向ける。

完全に飼い馴らされている姿は龍園には受けて声が更に陽気なる。

「そう言えば？は二人もリタイアしてるんだってな。言伝でもあれば引き受けてやるぜ」

「申し出はありがたいが、そう言うのは試験が終わってからするつもりだ」

「そうか——じゃあ精々その時を楽しみしてるぜ。今夜からはまた豪華客船で贅沢三昧だが、後の楽しみが出来たのは嬉しい限りだぜ」

「それはよかったな——じゃあ、他にも行くところがあるんで。六日後に会おう」

嬰兒たちが去って行き見えなくなる——龍園は左手を上げ人差し指を向かった方向に数回振って行き先を推測する。

「ひより、奴ら何処に向かった？」

「あの先にあるのはBクラスのキャンプでは」

自分と同じ答えに満足し立ち上がる。

「テメエら、よく聞け！予定変更だ。夕方まで遊ぶつもりだったが、日が高いうちに船に戻る。余ってるポイントも今使ってる遊び道具も全力で使いきれ！」

「おやおや、撤退を早めるのですか。龍園氏？」

眼鏡をしたおかつぱの男子が訊く。

「そうだ、金田。あの牛野郎、間違はなく素人じゃねえ——それも趣味でキャンプしたとかいうレベルじゃねえほどにな」

「確かに明らかに慣れてる感じはありましたね」

金田と呼ばれた生徒も肯定する。

さっきの話し合いでも龍園を冷静に分析しており、それ以前に堀北をリタイアさせた場面は彼も見ており、学生の域に無い知識と技量、経験を垣間見せた。

門外漢が束になつても勝ち目が薄い——暴力を用いるだけでなく冷静に引くことの出来る度量、改めて龍園リッターの実力に敬意を表す。

何よりも転んでもただで起きるような男でないことはもう十分に知っている。

「納得したようだな——俺は日光浴の場所を変える。戻る準備が出来たら呼びに来い——それまでは存分に楽しみな。俺が許す」

龍園は手ごろな岩場に寝そべり天然のチエアーに背中を焦がしながらどっぷりと陽光を浴びる。

一方、許しを得たCクラスはそれまで以上に大いにはしゃいで遊ぶつくすのだった。

統べて〇〇

Cクラスを後にした俺たちはBクラスのベースキャンプに向かった。

「嬰兒くんってホントに凄いな——Aだけじゃなくて他のクラスの動向も調べてるなんて」

道中やたら軽井沢が俺を持ち上げて来ている——最初は測りかねたが段々と見えてきた。

この反応は庇護者を求めるものだ——『戌』が養女や保育園の園児たちに向けられた感覚によく似ている。

しかしあつちは文字通りの意味での子供と大人だが、軽井沢は反抗期を迎えてもおかしくない高校生——それでも親を求めるようなタイプなら、そもそもこの学校に来たこと自体がおかしい。

求めているのは親じゃなくてもっと——いや無理な考察は控えよう。軽井沢が喋ってばかりだから綾小路も聞きたいことが訊けない状況なのは悪くないんだ。

表情には出していないが何かしら情報を得ようと画策してたのは想像に難くない——アクションメントの後ろめたさとそれを言及しない不吉さはあるが、むやみに話していいものでもなからう。

と見えて来たな。

「うわ〜」

風景の変化に軽井沢が感嘆する。

俺も生で見ることによる情報を実感する。

綾小路は相変わらずの気の抜けた顔だが、生活様式を見渡しながら目を細めた——気付いたのか、それともまだ違和感レベルかな？

Bクラスのテントは支給された8人用よりも大きなものが設置されており、12から15人は使えそうだった——かなりのスペースを取っているが中はどうなってるのか？

井戸の側には？クラスでは購入を見送ったウォーターシャワーとワンタッチ式テント。保存のきく携帯食料も多く見かける。

森に入っていく方の道の近くの木々にはハンモックが10人分設置されてあった。

「あれ、嬰兒ちゃんと綾小路くん？それと確か——軽井沢さんだっけ？平田君の彼女の」

一之瀬が大型テントの中から出てきた——気さくな感じで近づいて来るがテント内は見せないようにし、何よりジャージのポケットから無線機のアンテナが見える。

「何、敵情視察？」

「そつちもやってたろ文句は受け付けないぜ」

「にやははは——バレてたか流石だね。Aクラスを速攻で下しただけはあるね。嬰兒くん」

情報源は聞くまでもないな。

「随分と奮発したんだな——あのテント、作戦本部も兼ねてんだろ」

「うん。本当に高い買い物したよ」

一之瀬の目が遠くなったが直ぐに俺を挑戦的に見据えてくる。

「でもこつちもウカウカしてられないからね——共闘を突っぱねた以上中には入れられないし、長居も許可できない。用件があるなら手短にお願いな」

普段の一之瀬からは考えられない強気でキツイ言葉だ——つまりはそれだけのものを支払ってこの試験を望んでいるんだろう。

ならばこつちも油断なく容赦なくいくまでだな。

「では遠慮なく。俺たちは自陣以外のスポットは占有しない、スポット争いには参戦はしない——そして俺はAクラスのリーダーを知っているが何を積まれても教える気はない。以上だ」

「スポット争いにはね——つまり戦うしかないのか、ちよつと残念だね」

俺の言いたいことが正確に理解したようだ。伊達や酔狂でクラスのリーダーしてるわけじゃないか——そうでなくてはな。

「？クラスに来るなどは言わない。だがそう易々とは隙は見せないぜ。そうだよな」

「も、勿論よ！絶対にリーダーは当てさせたりしないんだから!!」

軽井沢、相槌を求めといてなんだが宣言するにしてももつと小さな声にしろ。

外で作業してる奴らもそうだが中で作戦会議してた連中まで出て来たじゃねえか。

「宣戦布告、確かに受け取ったよ。」

だからこつちも宣言するよ——この試験で私たちはAクラスになる」

一之瀬の宣言と共にBクラス全員の日に闘志が宿ったのを感じる。

「見事な統率だ。だが戦いは終わってみるまでは分からないものぞぞ」

「負けないよ」

見るべきものは見て言うべきことは言ったので俺たちは退散する。

そして、その日の夕方になる前にCクラスが全員リタイアした——船に戻っていくのを見送っていると龍園が不敵な笑みを浮かべながら振り返ったが結局は何も言わないで行ってしまった。

さて何が言いたかったのか？

試験開始から三日目の昼——船のデッキでは双眼鏡を島に向ける堀北の姿があった。

（もどかしいわね——どうしてこんなところに居るのかしら、私は）

適切な薬を処方され安静にしていた甲斐もあり、すっかり回復したが心はそうはいかないようだ。

見える景色は浜辺が一か所だけで島の奥の森の様子など分かる訳がない——それは分かっているがどうにも気になり寝ているばかりではいられなかった。

一日とは言え島に居たクラスメイトは話が出来る状態でなく——起きたとしてもまともな会話が成立するかも怪しいので現状クラスがどうなっているのか一切分からない。

せめて推測ができる取っ掛かりが何でもいいから見つけられない

かと朝からずつと見ているが、教員たちが待機しているテントに偶に女子が支給品を取りに来るぐらいで全く進展はなかった。

「朝からずつと飽きないな。鈴音」

背後からの声に振り向くと龍園が近づいて隣に来た。

他のCクラスも全員、昨日の内にリタイアして戻ってきており、船内では貸し切り状態で試験も終わっていることから来た時以上に満喫していた。

しかし堀北からすれば早々にそれも自分たちから試験を放棄する思考は理解できないし、したくもなかった——ましてはそれを主導したりーダーであり、ただでさえ因縁をつけられた相手など話す気になれる筈もない。

堀北は再び双眼鏡を覗き込んで島を見る。

「はん、無視かよ。まあ、別にいいけどな」

龍園は適当な椅子に腰かけて同じく島に目を向けるが表情には愉悦があった。

堀北と違い短い日数とは言え趨勢を見極め、全クラスの状態を十分に把握した龍園は島で今どんな状況が起こっているのか余裕で想像が付き、最終日になる結果にもいくつもの明確な可能性を導き出せる。

そして試験が終わった後こそ龍園にとつての最大の楽しみがやってくる——出来るなら望む形で来て欲しいと思いつつもそうでない可能性も捨てきれず、その心は躍り狂いそうだった。

「ククククク——」

それは内心に留まらず声としても漏れてしまい、無視していた堀北の耳にも届く。

「なんとも楽しそうね。そんなにポイント棄てたのが嬉しいのかしら——理解に苦しむわ」

ストレスも溜まっていたのか吐き捨てる態度だ——それは返って龍園の愉悦を増すことになった。

「全部終わったら分かるさ——それと今は機嫌が良いからひとつ教えちゃるよ。お前のご主人様はキツチリと仕事してるから、無駄な心配

してねえで戻って休み満喫してた方が得策だぞ。鈴音」

「誰が誰のご主人様よ！それといい加減、人の名前を気安く呼ばないで貰える！」

とうとう我慢が限界に来て振り返り怒鳴り散らすのが龍園は笑っているだけであり、怒るだけ損のような気になりデツキを去って行った。

一人になった龍園は改めて島を見て思った。

(どんな結果になるのか——俺の期待通りか、外れるにせよ、面白いものが見れるのは間違いない)

ああ、のどかだな——軽井沢ももつと気を抜いてもいいのに。

おおっと目をやったら益々気合が入ったのか熱心に見張りに状況を聞きに行った。

昨日の宣戦布告を受け、闘争心に火が付いたのだろうか——ハツキリ言つて完全に術中に嵌ってるぞ。

伝えようかとも考えたが、全くの無駄と言う訳でもなく、やる気の水を差すのも伝えたはいいが癩癩でも起こして予想外の行動に出られるのも嫌なので静かに様子を見るに留めた。

しかし日陰になっていても暑いし喉も渴いたからボトルを手に川で水を汲んでいると釣竿を持った綾小路が近づいて直ぐ側で釣りを始めた。

手際を見ると初心者なのが丸わかり——話しかけてきたが普通でできんのかね？

「趣味って訳じゃないが興味はあつてな——気を休めるにもいいかも知れんし」

おおっと、顔に出たかな。

「軽井沢にももう少し気楽にやれくらい言つてやったらどうだ？Bがリーダー当てに来るのは十中八九ないと見ていいのは嬰兒も分かっ

てるだろう?」

見るべきものは見てるか——流石だね。

「嬰兒のような例外は兎も角、リーダー当ての難度は相当な高さだ。

Bクラス——いや一之瀬の性格からすれば見送って手堅く試験に挑もうとするだろう。」

だが昨日は潤沢な装備を整えてスポット占有にも積極的姿勢を示した」

「採算を捨てる選択なんてそれこそ考えづらい——俺たちの印象が間違っていたか心変わりしたか」

「もしくは採算を気にしない、攻めるべきだと判断に足る要因が出てきたか。」

一之瀬は?を——より正確には嬰兒をここに釘付けにしておきたいんじゃないのか?」

概ね俺も同じ意見だ。

スポット占有は数が増えればリーダーを晒すリスクが比例する。占有の瞬間を見られたなら全ては水の泡——そしてこれはこつちも同じ、?クラスの事情からすればマイナス50もそうだが20以上のポイントだつて絶対に獲得したい。

あの宣言は俺を含めより多くを守りに回らせる為のはつたり——試験だけでなく全体的な視点からくる戦略であり、俺たちはまんまと嵌ってる状態な訳だ。

「でも来ないとは言い切れない——実際に来たのは間違いないしな。決めつけて掛かって隙を突かれたら損害はバカにならない。」

だからこそ纏まっているのも要因のひとつだ——ここは様子見に徹しよう」

不服そうな顔してみてくるが、何に対してなのか——ちゃんと言葉にして欲しいぞ綾小路。

「ただこのままなのも芸がないし、ひとつ手は打っておこう」

喉もそろそろ限界だし冷たい水を飲みますが構うつもりはないよ
うだ。

「おこらう。か——それで合ってるのか？」

完全に話に夢中だが綾小路、よそ見してていいのか——別の所で釣りしてる池がこつちを見てはつとして叫ぶ。

「綾小路！引いてる！引いてる！」

やっと気が付いて慌てて竿を上げるが——完全に手遅れ、餌だけ喰われて魚には逃げられた。

「なくにやっつてんだよ。しょうがねえな」

池がやれやれという態度のまま見事に吊り上げ、のどかな一幕に皆が笑う——のどが潤ったし立ち上がる。

「次は釣れるといいな」

肩に手を添えて歩く俺を見ようとすることもなく、せっせと餌を付けてリベンジに挑む——なんだかんだで楽しんでるな。

試験四日目——島でのスポットの争奪戦を繰り広げているのは一之瀬率いるBクラスとAクラスの葛城派の残党。

単純な数を見ればBクラスの優勢であり事実として12か所を抑え——葛城派は6か所とリードしている。

『神崎君、どう？』

無線から一之瀬の声——無線を手に神崎と呼ばれた高身長の真面目そうな男子が報告する

「すまない。今日も既に占有されてる——思ってた以上に大胆に動いているな」

『うん。葛城派も失点を取り返そうと死に物狂いだろうしね——焦つてミスでもとかも思ったけど、やっぱり期待はできないかな』

「そもそもにおいて葛城はそんなタイプじゃない。スポットも自陣から近いのに絞り、俺たちの姿が見せたら即撤退——半端じゃない警戒心を感じる」

『当然といえば当然だね。でも逆に言えば近場以外には来ない——私たちのスポットも取られる心配はない』

「前向きな意見だ——と言いたいが早々に思い通りにはいかないな」

神崎は移動しながらスポットを見張っている男子と合流するもそこには？クラスの池、山内、須藤が離れたところからただ見ていた。「何の用だ？」

「ん——見てるだけだよ」

池はそれ以外答えない——そしてすぐに歩き出した。

その向かう先にはBが抑えたスポットがあり見張っていた男子が大声で叫ぶ。

「言つとくけどな！そんなんでリーダーが知れると思つたら大間違いだぞ！朝からずつと鬱陶しいだよ——いい加減無駄だつて分かれ!!」

「見てるだ——」

「痛!？」

池は再び繰り返し歩き出そうとするが、山内が振り返りしたり顔で口を開こうとしたので足を踏んで黙らせる。

「見てるだけだ」

最後までそれしか言わないがそれは誰に対してなのか——山内が足を摩りながら小さく肯き須藤は終始無言のまま行ってしまう。

「クソ！せこい嫌がらせしやがって……」

『ホントにね——守りに徹してくれたらって期待したんだけどな』

「実際守りは固めてる。それで尚も攻撃の手を緩めない——侮れない奴だ」

憤るクラスメイトを沈めながら神崎は冷静に状況を分析する。

『そうだね。ここまで攻撃的に来るなんて思わなかった』

一之瀬の声には警戒はあったが戦慄はなかった。

それは嬰兒が初日に葛城を下したことを聞いたときに散々味わった。

続いてCクラスの試験放棄にとセオリーからして考えられない状況の連続だった。

ただ他クラスの情勢が早々にそれも一辺に決まってしまった事はメリットでもあった。

ポイントを稼ぐセオリーとも言えるスポットには手を出しに来る

のが僅か——ならば大量のポイントを支払ってでも取りに行かない手はない。

当初の方針を大きく転換——支払ったコストも背負うリスクも大きいが見合うメリツトはある。

理想を言えばAのリーダーも買い取ってより確実なものにしたいのだが——春に手を組まないと言明され敵同士の状況に共闘を持ちかけるほど甘い考えはなかった。

だからこそリスクを軽減させる意味でも最大の警戒対象である嬰兒を守りに回し、人海戦術でスポット争奪戦を圧勝に持ち込みたかつたのだが——嬰兒は代わりの要因を送り込み揺さぶりを掛けてきた。やっていること自体はただ見るだけで聞いても同じ返ししかしない——深追いや余計な情報を与えないように徹底させながらリーダーを晒すことへの精神的プレッシャーを与える。

実行役の池もサバイバルの経験者であることが窺え、自分たちが苦勞する獣道も悠々と進み先回りされていることもある報告も受けている——人選にも抜かりはない。

しかし逆に言えば妨害それだけで他は狙い通りに自陣に釘付け、大雑把なことしかできない証明でもある。

Bクラスが、昨日今日の即席チームワークに後れを取ることはない自信は大いにある。

何よりこの試験で？クラスが得るポイントではCクラスに届くこととすらない——だからこそ僅かなポイントも死守するのを優先している——積み重ねてきたものが違う。

逆に自分たちはAクラスとなり完全に追われる立場となる——先々を考えれば安泰とは言えず徒党を組まれると寧ろ不利になるだろう。

その時こそが？と同盟を結ぶべきなのだ。

ハッキリ言つて五月に1000ポイントを消失し、Aになる熱意を持つている生徒などごく少数だろう——この試験の結束も目先のポイントによる即席のもの。

だからこそ潤沢なポイントと確かな実力を持った自分たちと手を

取って共に戦うことが可能なただひとつのクラスと言える。

綾小路と坂柳の関係は気がかりだが、A DとB Cの構図に持つていけば説得は可能だろう。

それに万が一、最終的に？が迫りAの座を脅かすなら——その時は正々堂々と雌雄を決するまで、それが出来る信頼があると自負している。

考えをまとめた一之瀬は静かに力を込めて言った。

『ここが正念場だよ神崎くん——この程度の攻撃を凌げないんじや、私たちが組むに値しない』

「分かってる——その為にみんなを身を削ったんだ」

神崎も今試験だけでなく先々を含めて全体を見通した一之瀬の戦略に同意しておりここで勝たなければいけない重要性を誰よりも噛みしめていた。

『無線ももっと増やせれば——』

「これ以上の出費は好ましくない——その分は俺がカバーする」

『うん、分かった——頼んだよ。神崎くん』

積極性は劣るが総合的なスペックでは一之瀬に引けを取らないことを自負し、一之瀬もそれはよく知っているため誰よりも頼りにしている。

どのクラスよりも機能しているナンバー1とナンバー2の連携——これもBクラスの強みのひとつなのだ。

五日目になり、この試験のテーマである『自由』が満喫されている光景が展開されている——のは全然構わないが、なんで態々俺の側で？

横目で綾小路とAクラスの坂柳派の橋本が地面に書いたマスに綺麗な小石とドングリなどの木の実を駒代わりにした陣取りゲームに熱中——側で見ているグループと派閥のメンバーは興味津々だ。

「ああ、綾小路——それは待った!」

「駄目だ。戦場に待ったなし」

「うう~~~~」

橋本が唸り考えこんでるが有効な一手が浮かぶ様子はない。

「うわあ凄い。また清隆くんの勝ちだね」

佐倉が感動してる横では幸村が難しい顔して——あ、今顔上げた。

「清隆! 新しい論理パズル考えたぞ——受けて見ろ!」

迫ってくる幸村に綾小路は肯き——次の瞬間には幸村が撃沈されて何度目か分からない敗北に頭を垂れていた。

よく飽きないね——お、橋本も投了した。

「きよぼん全勝だから気持ちいいよ」

「それにしてもこんだけ強いなら普段でもポイント賭けて勝負すれば結構巻き上げられるんじゃない?」

三宅の指摘に綾小路は少し暗い影をまとった——なんなんだろう?
?

「子供のころ、そんなことしてたら誰も勝負しに来なくなつた——最後に残つたのが有栖とチェスでオレもあいつくらいじゃなきゃ、その気になれん」

「そ、そうか……悪かつた」

地雷を踏んだみたいな雰囲気だが何処まで本当なんだか?

呆れながらも周りを見回すと他にも来ている坂柳派やどつちつかずの奴らが談笑している。

最初来たときはリーダーを探り返しに来たのかと特に軽井沢が警戒しまくつたが、失脚同然の葛城の側に居たくないといひ——直ぐそれが本場で女王さかやなと強い繋がりのある綾小路と側近とのやり取りを経て普通に話してるのは当たり前になつてしまった。

魚釣りや料理を手伝つて一緒に食べることもあり——と言うか空腹に耐えかねて元々の自分たちのご飯を求めてきたのかな。

葛城が節制を強制していて満足に食べられず——プライドがあるから素直に恵んでくれとは言えないだろうから綾小路を口実に使つたのか?

軽井沢なんかは警戒し反対してたが彼氏でありリーダー格の平田が、元々Aクラスの物資であり平和主義であること俺が素振りを見せたならそく出て行ってもらうことを言うとおっさり引き下がった——うくん、遠くない先に平田に殴らせな^きやいけ^{ない}とかは嫌だな。

綾小路たちに視線を戻すと今度は神室が挑戦していたが直ぐに決着がついた。

「マジで強い——ってかレベルが遥か彼方って感じ」

盤面を見て脱帽しながらも納得のニユアンス——それに幸村が反応し疑問を投げた。

「ここまで頭が回って勉強もちゃんとしてるなら、テストの成績ももつと上にいけるんじゃない？」

寧ろそうでなきや変だと言いたい——いや言っているニユアンスだ。

この場のは俺に戦略や思考力を見せつけてるだけで、普段のは単に手を抜いてるだけ——なんか黙ってたら不味い気がするな。

「それはつまりこう言うことだろう」

俺が口を挟むと注目された——綾小路の目には邪魔された不満があったが、思い通りにはさせておけない。

「意味のない問題にやる気が出ない——例えば立方体の展開図をだどそれがどうしたになるが、サイコロの展開図にすれば意欲がわく。

それと同じように学力の問題も超高等数学なんかにある何々を証明しろみたいな挑戦的な問題じゃなきや、その気になれない——この理論からして単純な点数以外で挑戦的な事してるんじゃないのか？」

お、最後の質問で目の色が変わった——適当に言っただけだが存外凶星か。

「へえ、てつきり目立つのが嫌いだからとか思ってたんだけどなく」
第三者の声が入って来た——リーダーを務めている松下が両手を見せて手ぶらをアピールしながら近づいて来る。

「ごめんね——軽井沢さんたちのところ息が詰まっちゃってさ」

そういう問題じゃないとツツコミたいのは俺だけじゃないだろう

が——上着もなくポケットにも何も入ってそうにない。

軽井沢のグループを見ると佐藤と篠原がそれとなく隠れている様子——囿を立てつつリーダーが他クラスに近づいたりはしないという心理的盲点を突いた作戦かな——さて誰の発案かな？

腰かけた松下は続ける。

「今はなし崩しにだけど——綾小路くんって目立ったり誰かに頼られるのが好きってタイプには見えなかったから、テストとかでも足を引っ張らない程度に手抜きしてるのかなって」

アクシデントがなかったらそうなたただろうな——しかし見事な分析だが根拠は何処から出て来たんだ？

「そんな理由なら、ちよつと怒るところだが……実力を出すのにモチベーションが上がらないのはより厄介だな」

幸村の指摘に綾小路と一緒に松下まで目を逸らしそうになった——結局しなかったが。

「しかしそうなると清隆はやる気を引き出せれば——!?」

「綾小路くん!」

幸村が言い終わる前に綾小路が胸ぐらを掴み上げた——様子を見ていた平田も慌てて近づいて来て声が聞こえそうな距離になると口を開いた。

「オレを矯正しようとか言うなら、オレは今すぐにグループを抜ける——これからは啓誠グループとでもしろ」

「分かった、俺が悪かった……無理強いはしないから」

三宅とは比じゃないほどの地雷を爆発させてしまい幸村が謝る——衝撃的な演出で誤魔化してるようだがどうも胡散臭いな。

近くに居た平田もバツの悪そうな顔してるし、共闘関係ってのは早とちりだったか。

綾小路が手を離すものの淀んだ空気は残っている。だが俺にはどうと言うこともない。

「言いたくなきやいいが、理由を聞いても?」

「その手の強制は親から散々受けた……もう沢山だ」

簡潔な説明だ——綾小路がこの学校に来た理由、やる気を出したく

ない理由、？クラスである理由に加えてこれ以上は踏み込んではいけないと暗黙の了解が広がっていく。

中々やるな——事実を持って手玉に取るか。

嘘は付いてないだろうがより深い真実には全く届いている気がしない——これ以上を望むなら俺の方も相応の対価を寄せさせてか。

知ってそうな坂柳から聞くのも多分駄目だろうし、状況に応じては検討するよ。

上手い具合に昼飯時になったから、とりあえずはここまでだな。

同じ頃Aクラスのベースキャンプである洞窟の中では葛城派が僅かな食料を分けていた。

しかし彼らの顔は絶望的でなく、意欲的であり高まった士気がひもじい生活を支えていた。

「更新は順調です——この調子なら最終日まで満遍なく回れそうですね」

リーダーを務めている戸塚が強気に言うが、やはり無理をしているのか相当にやつれており、食事も一番少ない量だった。

「弥彦——その為にはお前に倒れて貰っては困る。失態は俺の責任でもあるんだ。しっかり食べて次に備えろ」

「俺はまだまだ大丈夫です。ここで踏ん張らなきゃ——坂柳たちや？のやつらの鼻を明かしてやりましょう！」

「全く——だがその通りだ。思いがけなくも悪くない展開に転がった。

これをより最良の結果に持つていくための正念場は近い、気を引き締めていくぞ」

「はい。」

戸塚を始め他の面々も気合が入る——それぞれに苦労が垣間見える姿だが文句を言うものは一人もない。

奇しくも初日の失態により坂柳派を始め信用できない者たちと袂

を分かち、残ったのは葛城を支持していた真に信用のおけるメンバーで結束を固めることができた。

数の上では競っているBクラスに劣るが、上陸前に目星をつけていたポイント和管理しやすいと抑えた洞窟による地の利を生かし6か所をフルに占有する状況に持つていけた。

最終日には120前後のボーナスポイントが見込め——さらに最近になって坂柳派やどつちつかずの輩が?に入り浸り、0かよくてひと桁だと予想していた試験ポイントも25から30まで残せるかもしれない目途も付いた。

「坂柳派が?のリーダーを探ってくれば勝てるってのに……全く協力しないなんて」

「弥彦、向うには牛井が居るんだ。そんなミスはしないしないだろうし、全く役に立たない訳でもない」

それとなく聞いた話では?は初日の功績に胡坐をかいてとは言えないまでも積極的行動はなくBに対しての妨害が精々であるということ。

「それよりも今日を向けるのは他にある——牛井のお陰でよりやり易くもなったことだしな」

葛城の浮かべた不敵な笑みに改めて付いてきてよかつたと言う思いが戸塚だけでなく全員に行き渡った。

契約によりリーダーもスポットも?を気にする必要はなくなり、唯一の敵であるBにも目に付く嫌がらせを行っている——Bの目がそつちに向きやすいならリーダーを知れる確率は大いにある。

それを確実に近づけるための揺さぶりを仕掛ける案も作成した——成功すれば1位は?だろうがその差は10以内の僅差に収まり、リーダーを当てられたBはボーナスポイントの無効と50のマイナス、支払った装備の代価を考えても大幅に後退する。

「あとひとつ——スポットを抑えることが出来たら」

逆転し1位を取れた——Aクラスで最も悔しい思いを味わった戸塚の無念の声に葛城は言った。

「意味のない過程など詮無いだけだ——それにそれは坂柳派を糾弾す

る材料にもなる。余計なことは考えず最善を尽くすぞ」

「……葛城さん」

この前を向いた意見に少し気が楽になり改めて気合を入れようとしがたが「ぐうぐ」と腹の虫が鳴り皆の失笑を買い——どうにも格好の付かないと締めとなってしまうた。

特例の安売り。

試験六日目——前の晩に雨が降ったようでも地面にぬかるみや水溜まりが出来ていた。

空模様もどんよりと灰色の雲一色であり、大雨や強風が来ても不思議じゃない。

だが、本当に気にしなければならぬことはそれではなかった。

「スポットを誤使用した!?!」

大型テントの中で一之瀬が目を丸くして困惑する。

「……………ごめんなさい」

目の前にはボーイフィッシュな女子——白波千尋が俯いていた。

Bクラスでリーダーを務めている彼女の横には同じく浮かない顔の神崎が居た。

「いや、これは俺の判断ミスだ——慎重を期したつもりだったがAと？が結んでいるのもつと意識しておくべきだった」

現場指揮官は最高司令官に経緯を報告する。

Bクラスが抑えているスポットを回っている？クラスの妨害要員。

更新するのを見られるようなへまはしなかったが、否が応でも目が行ってしまい自陣から遠いものは更新を遅らせることもあった。

無論、見張りを立て神崎も定期的に回って隙を作らない様に徹底させていた。

しかし一人を四六時中居させるわけにもいかず交代や点呼の時には空白が生じる——その場合には更新時間に余裕を持たせるか、最悪スポットを放棄することも盛り込まれてはいた。

しかし昨日は生憎の天気で？もそれを察知したのか早々に切り上げたという報告もあって空白の時間が増えた。

その空白をA——葛城派に突かれスポットを奪取され、連日の緊張感に？に警戒心が割かれていた分の解放により、それまでと同じように通りに見張りが立ってしまった。

神崎がスポットに行った時にはクラスを示す表示を白く曇らせたカモフラージュが施されており、まんまと一杯食わされた。

「近くに潜んでた奴に気付いて直ぐに追っ払ったが、付けてた腕章はAのものだった。」

大方、俺じゃなくて白波が更新に来るのを待ってたんだな……その際の反応を見てリーダーを探るつもりだったんだろう」

「ごめんなさい……私がちゃんとしてれば」

一之瀬がこの試験に懸けていることを最も応援している彼女は任された大役を全力に取り組んでいた。

だが知られてはいけない——そのことを意識しすぎてクラスにマイナスをもたらしてしまった。

もつとクラスを信じて積極的に取りに行っていれば——そんな後悔が彼女を苛む。

「いや俺がもつとみんなの状態を気に掛けていれば」

直接の失態を犯した男子はショックで死ぬほど謝っていたが、最も遠い所を任せ続けた疲労のピークも相俟って倒れてしまった——そして全員顔には出さないようにしているが疲れている。

「……………私にはみんなを責める資格はないね。」

方針を打ち出したときにこうなることも想定すべきだった——責任は私にある」

一之瀬は責任の所在を明確にして目を瞑る——そして直ぐに目を開いて切り替えた。

「神崎くん、他に取られたスポットは？」

「さきを含めて3カ所、他は対応済みだ」

「次の更新時間には直ぐに取り戻せるようにして、マイナス50は痛いけど致命傷じゃない——ここからが本番だよ」

一之瀬の目はまだ戦っている——この力強い姿勢は失態により低下した士気をそれまで以上に上げた。

そう、まだ試験は終わっていない——勝てるだけの準備を整え臨んで来た。

この試験でAクラスになる——目標を再認識したBクラスは不安も疲労も吹き飛び、これ以上はヤバいと思わせるほどに力がみなぎっていた。

「やっぱり運は俺たちの味方ですね。葛城さん」

戸塚の興奮は果てしなく普段なら抑えようとする葛城も今回は違った。

「ああ——ごく自然なカモフラージュが可能な状況になったのは本当に運がいい。

その上、これでBのリーダーを大幅に絞り込むことが出来た——なんとも怖いくらいだ」

当初では隙をついて奪取するスポットはひとつに留め、砂ぼこりや落ち葉で可能な限り表示を隠すつもりだった——直ぐに見破られるだろうが危機感を煽るには十分であり、より慎重にリーダーを隠そうとしてくるだろう。

スポットの更新時間からの逆算と？の妨害を考慮してBのリーダーが向かうだろう先に潜伏する要因も選定しており、そこから絞り込みを行い詰めていく算段だった。

だが雨に見舞われ表示を自然に隠すことが可能となり奪取するスポットが三つ、更には嵌めることの出来た事実により交代要員を含めた見張り役にリーダーがいる可能性はなくなった。

自分たちもそうだが相手も疲労しており、リーダーのプレッシャーも加えればとつくに倒れていても不思議ではない——司令官の一之瀬の性格から考えて、この人選はありえない。

当然、一之瀬と神崎の二人もこの上なく目立つ上に盲点を突くと言った博打を打つタイプじゃないことから除外できる。

偵察で司令部に一之瀬と詰めているのは二人——残りの十二人は見やり役への補給やパトロールを二班に分けて行動していることは突き止めている。

？の妨害ルートから逆を辿り挟むように回った結果、二つの内ひとつ——六人まで一気に絞り込むことが出来たのだった。

「この情報を？にリークする——ここまで条件が揃えば牛井が動くだろう」

「けどそれだとポイントが余計に……」

戸塚の顔は歪み反対しようとしたが言えなかった。

そもその案は十人はいるだろう中から消去法ひきざんで導き出す不確実で葛城らしくない方法。

そんな案を使わざる得ない失態を犯したのだ——例えそれが失態の原因となった牛井おとこ嬰兒に頼るものだとしても止められる訳がない。情けなさとし訳なさに俯くしか出来なかった。

「弥彦。ポイントは確かに更に50開く——だが？クラスがそれを得てもAわれわれクラスには到底及ばない。

寧ろ坂柳派の糾弾はより一層厳しくなる——俺たちはまだ戦える。俯かずに顔を上げろ」

「——はい！」

感動で目に涙を浮かべながら戸塚は全力で応えた——この場面は葛城派全員の士気を上げたのだった。

AとBがそれぞれの士気を高めて臨もうとしている時、？は一部かの例外いざわを除いてのほほんとしており、雨が降る前に食料集めや荷物の片づけを行っている——ここまで来れば、嬰兒が居れば大丈夫という気の緩んでいるのが大多数であった。

そんな中で一人何もしないで座っている嬰兒は一枚の用紙に目を通していた。

「嬰兒、俺らそろそろ行くけど昨日までと同じでいいよな？」

池たちBのスポット巡回に行くメンバーが尋ねると意外な返事が返ってきた。

「いや、今回は俺が行く。お前たちはここで待機」

状況が動いた——そんな期待感と緊張感が走った。

「葛城からBのリーダー絞しぼり込んだから確かめてくれたと」

嬰兒は用紙を仕舞いながら立ち上がる。

「つてことは更にプラス50か——頑張った甲斐があったぜ！」

自分たちのやって来た嫌がらせによりBに隙を作る——作戦が上

手く運んでいる手応えにガッツポーズする。

出来るならこのまま自分たちが手柄を上げたいが、龍園の件で嬰兒の方が上手くいきそうであり、足手纏いにしかならないのは分かり切っており反論はない——はずだった。

「本当に行くのか？」

いつの間にか来ていた綾小路が疑問を投げてきた。

この行動の結果、Aクラスにもポイントが入るのを危惧してではない——嬰兒ならそんな必要性はないと思っていたからだ。

（ただのポーズである可能性もあるが——何かしつくりこない）

「なんだよ。俺だって他にポイント行くのは嬉しくないけど、十分リードしてんだからいいじゃねえか」

「そうそう、つうか行かなきゃ俺たちの苦勞に合わねえし」

「こんなセコイ役……我慢してやったんだぞ」

誤解した池、山内、須藤が文句を言う。

綾小路が居たから上手く事が運んだ部分があったとは言え、実質何もしていない身としては強く言えず黙るしかない。

「邪魔しないなら、付いてきても構わんぞ」

そこに嬰兒からの許可——しかし初日に追いつけなかったのを思えば遠回しに来るなども取れた。

しかし考える暇もなく嬰兒は行ってしまい違和感を抱えたまま綾小路も後を追った。

（初日と違って歩いてか——オレに合わせてくれている訳ないし、何をするつもりなんだ？）

行くと見せかけて適当に歩き既に調べてあるのを誤魔化す——単純に考えればそうだが、それだけではないと何の根拠もない強いて言えば直感が綾小路の胸に居座っていた。

（折角だし、昨日のこの文句でも言っただろうか）

昨日の嬰兒による綾小路清隆の考察——最後の挑戦的の件で思わず言葉が詰まってしまい確定的になってしまった。

邪魔が入らなければ、小テストは坂柳との再会で中間は嬰兒の敗北が尾を引いて成果を振るえず——期末に関しては嬰兒から得た情報

の精査によってとして、これからはクラス全体で嬰兒を担ぐよう仕向けるつもりだった。

異能が知られないように知恵を貸し、また乗り気でない依頼を肩代わりするなり、かわす算段を提示することで牛井嬰兒という存在を暴いていく——気付いたのかどうかは不明だが侮れない奴だと再認識させられた。

嬰兒は無言のまま歩いていく。

若干ペースを上げて隣に並び話しかける。

「昨日のだが——堀北から何か聞いたのか？」

入試と小テストで全て50点に狙って揃える——堀北にははぐらかしたが嬰兒にはどの程度に思ったのか、大して期待しない問いだつた。

「何も——訊きたいことがあるなら今の内がいいぞ」

返ってきた意味深な台詞に目を細めたが、ならばと遠慮なく質問する。

「今度の試験、どうしてここまで積極的に動いた？堀北やオレが理由だとはどうにもしっくり来ないんだが？」

嬰兒はポケットから紙とペンを取り出して何かを書き、綾小路に渡す——そこに書かれた内容は脈絡が無い訳ではないが、全く納得がいくものではなかった。

「堀北にも渡しといてくれ」

嬰兒はその言葉を最後に口に指をあてて静かにするように促す。

視線の先には複数人が居たが遠すぎてはつきりと見えない——気付かないうちに嬰兒も居なくなってしまった。

綾小路は慎重に集団に近づいていき自分以外にも様子を窺っている者に気付くが嬰兒でない。

（見るべきはBクラスか……）

スポットを見張る男子に食料を渡し、神崎が警戒ながら集団に紛れて更新の瞬間を見えなくする。

遠目には分からず近づけば見つかる——普通ならば、

「警戒しすぎると目について逆効果だぞ」

「なあっ!？」

スポットを更新した白波千尋の肩に嬰兒の手が乗り誰もが驚く——カードを取られまいと抱え込もうとして足がもつれ近くに茂みの中に転んでしまった。

「牛井!？」

「俺を見てていいのか?」

神崎は指摘にハツとしながら白波に目を向ける——Aクラスの腕章を付けた男子が茂みの中に居る白波の手を取りカードの名前を確認、一気に駆け出して行った。

「言つとくけどグルじゃなくて、向うが便乗しただけだぞ」

嬰兒の気の抜けた弁明に再び頭に血が上り判断を下すのが遅れた——更には雨も降りだして視界も地面も一気に悪くなってしまった。

「Aもこうやったんだな。この無人島では俺たちフィールドがどうやったって勝ち目がない……なるほど、龍園が撤退を決め込むわけだ」

神崎の敵意丸出しの問いに嬰兒は答ええない——その視線は他を見ている。

「い、一之瀬さ……ごめんなさい……ごめんな……ガッ
!……ああ……!!」

茂みの中で真っ青になりながら謝り続ける白波——次の瞬間には胸を押さえ目を見開き口からは涎が垂れだし藻掻き苦しむ。

「白波!？」

神崎が駆け寄り茂みから出すと左膝辺りが不自然に破けて血が滲んでいた——白波の容体はどんどん悪くなり発作も起こり始めた。

この緊急事態に誰もが非常ボタンの存在も忘れてパニックが起きそうになった。

「!!？」

その寸前、嬰兒が神崎を押しつけて白波のズボンを破き、傷口に噛みついて血を吸いだしては吐き出すのを数度繰り返す。

続いて辺りを見回して目を付けた草をむしり取り口に含むと租借し始め、Bの補給品の中から水を取り口に入れると白波をそつと抱き起して口移しで飲ませていく。

「カハツ……ハアアア………ハア、ハア——」

口を離すと白波の呼吸は安定し全員に安堵が広がっていく。

「なあ、白波は大丈夫なのか？」

神崎の問いに嬰兒は振り向き人差し指を立て、

「い——てい——もお——」

呂律の回らない言葉と手振りで何かを伝えようとするが要領が得ない。

「多分、一之瀬に連絡しろって言ってるぞ」

背後からの綾小路の声に嬰兒は肯き——白波を抱えて指で方向を示し走り出して行った。

「あの方向は船の止まっている砂浜だな」

綾小路は律義に解説し、呆けていた神崎は無線を取り出して一之瀬に現状を伝える。

『分かった。直ぐに向かうから——神崎くん、あとのことは』

「気にするな。早く行け」

無線を切り綾小路に目を向けるがそこには感謝の念はなかった。

「言っておくが礼は言わないぞ」

「ああ——どう見てもこれは嬰兒が引き起こしたことのようだしな」

綾小路の非を認める態度にもつと行ってやりたい気持ちを抑えて神崎は撤収を指示、恨みの視線を向けられ去って行く。

綾小路は白波が突っ込んだ茂みを慎重に調べた。

（どこにも発作を誘発しそうなものがない。危険生物が居たとも考えられない）

そもそも生徒の安全のために管理は徹底しているはず——強いて思いつくのは白波個人の問題だが、それなら最初の噛みついて吸い出す行動が説明つかない。

薬草を含んで落ち着かせたのも出来過ぎている——百歩譲って薬用のあるものが生えていてそれを見分ける知識と経験を嬰兒が持っていたとしても都合よくその場に生えているのか。

（緊急のボタンを押さないうで背負っていったのも妙だ。そこまで急を要するなら——）

そこまで考えたとき轟音と共に強風が起こり、ヘリが飛び立っていったのが目に入った。

(……穿ち過ぎだったか?)

綾小路とて医療の知識はあるが医者でも救命士でもなく、ましてや経験は皆無——嬰兒にしてもすべてが正しいとは限らない。

(今は情報が少ない——気に掛けるのは別にある)

頭を切り替えて綾小路は行くべき方向に足を動かした。

雨風が本格化し浜辺に設置されたテントは飛ばされないように折り畳まれていた。

代わりに栈橋にタラップが掛かっており、一之瀬と星乃宮は駆け足で渡り船内に入り待機していた教員に止められる。

「千尋ちゃんは?!」

「さつきヘリが飛びましたけど容体は?」

一之瀬と星乃宮の焦った顔に教員は務めて冷静に対応する。

「心配いりません。もう安定してますし、処置も早かったので直ぐに元気になります」

「よかった〜」

一之瀬はその説明に安堵するも直ぐに疑問が湧き改めて訊いた。

「じゃあ、さつきのヘリは?」

「嬰兒がリタイヤした!?!」

池の叫びは?クラス全員の驚愕であった。

「そうじゃない——試験から除外されたんだ」

「どう違うんですか? 一体、何が起こってるんですか?」

平田も訳が分からず言葉には焦りしかなかった。

「あー、学校としても想定外の事態でな」

茶柱は複雑な顔をして経緯を説明する。

発作を起こし倒れた白波千尋——その原因はパニック障害から来

たものであり肉体と精神の著しい疲弊が引き起こしたものだ。た。

しかし、傷を見た嬰兒は別の病氣だと誤認し動悸を沈める薬草を投与——それがいけなかった。

効能は問題ないがこの判断は本来免許を持つ医師にしか許されず医師法違反が適応され、誤診であり適切でない処置でもあったことも重なり事情聴取の為にヘリで出頭することとなった。

「待ってください、嬰兒くんをしたことは間違ってた訳じゃないんですよ。」

何より学生ですよ——緊急事態に正常な判断が下せなくても仕方ないじゃないですか」

平田の直訴に茶柱は落ち着くのを促して説明を続ける。

「平田の言う通り牛井のしたことは適切でないが間違つてはいない——学校としても緊急、それも人助けしたものを処分する訳にもいかない」

「なら——」

「寧ろ罰しないために必要な手続きだ——事情を考慮し特例として牛井は試験から除籍とし、リタイアと点呼不在のマイナスポイントは適応されない。」

ヘリで早急に連れていかれたのも天候悪化で飛行が出来なくなる可能性があったからだ。船内で事情聴取する訳にはいかないから——調書が取り終われば学校に戻る」

説明を聞き終わり安堵の空気が広がる。

「ただ薬草を口に含んだ影響で舌が回らないらしいから少し時間を要する——こちらからの連絡は控えるように」

茶柱は自分のテントに戻っていく。

「まったく——人騒がせな奴だ」

「でも嬰兒でも間違えるんだな——いや本当に間違えてたら過失でもヤバいか」

「ああ、今回は情状酌量だの恩赦が当て嵌まるんだろうが、そうでなかったら」

クラスメイトが逮捕される——そんな事態が過ぎり平田が勢いよ

く立ち上がる。

「みんな、嬰兒くんは人を助けたんだ——正しいとは言い切れないのがもどかしいけど、だからこそ帰る場所が必要だ。

そして嬰兒くんのお陰でこの試験は乗り切れる——だったら最高の結果を持って帰ろう。

それが今僕たちにできるクラスメイトへの一番の励ましになる筈だ」

平田の言葉に乗ってクラスは盛り上がりを見せる。

「ここまで来たんだ。1位を持って帰ってやるか！」

「よっしゃ！戻ったら何か奢ってでもやるか」

「じゃあ、あたしは手料理でも振る舞ってあげようかな」

淀んだ空気が払拭され明るい方向になったが例外もいた。

盛り上がる中で綾小路は空を——嬰兒が去った方向を見ていた。

「ねえ、綾小路くん」

そこに櫛田が近づいて来るが顔が曇っていた。

「今回の件、ちよつと変じゃない？」

「大分変だ——強引な展開ながらスムーズに行き過ぎてる」

茶柱の言っていることは一見筋は通っている。

しかし、それでも迷いなく処置したことからへりが飛び立つまで余りにも早すぎる——嬰兒は口が利けない状態でどれだけ早く事態を説明したのか？

その事態を全く検討することなく生徒を出頭させるなど事態を想定していなければ……………。

(……………「一体どこから?」)

綾小路の中にある情報では結論が導きだせない——櫛田も得体の知れない怖気に身を寄せて囁いた。

「なんなんだろうね、牛井嬰兒って?」

綾小路は嬰兒に渡されたメモを入れたポケットに手を入れながら無言で同意する。

「綾小路……お前え、坂柳ちゃんが居ながら——」

「清隆くん……この前言ったの忘れたの！」

池と佐倉が興奮して近づいてきて——誤解を解くのに随分と苦勞した。

時は巻き戻る——とでも言えればいいのかな？

へりの中でドウデキャプルが向かいに——窓の外を見ながら思い出すのに集中する。

あれは試験二日目にCクラスを見送って直ぐだった。

ベースキャンプに戻ろうとしたら当然のようにドウデキャプルが帽子を取ってお辞儀——今思い出しても不快だ。

「随分とご活躍ですね」

「試験中だぞ——用があるなら手短にしろ」

「では単刀直入に。昨晚、船上にいる生徒に彗星が直撃するという珍しい事態が起こりました」

なんととも仕事が早い。

「それは不運だとしか言いようもないな」

「いえそれが、衛星等の観測の結果、彗星が落ちた形跡も兆候も存在しないと出まして」

小さすぎて見落としたんじゃないとか言わせたいのか？

「それで」

「無関係かも知れませんが可能性のひとつとして我々も調査しない訳にもいかず、是非お話をと」

任意ならお断り——と言ったら遠回しに認めたも同然とされかないか。

「リタイアするのはちよつとな……啖呵切った手前、格好つかないし」「ご心配なく——理由はこちらで用意します。

勿論、この学校の試験には極力迷惑は掛けません」

つまり少しは掛けると——それとも俺が応じないとちよつとではなくなるか。

最初から選択肢は無しか。

そして六日目——葛城からの言伝とは別に一枚の用紙が俺の手元に来た。

内容はBのリーダーが倒れるから指示通りの処置をしろ——俺は最終日にするはずだったことをメモにして綾小路に託すこと決め、指示された時間と場所に向かい白波に接触——他もそうだが、輪をかけて疲弊状態だったな。

食い物かスポットの機械に何か仕込んだのかは知らないが、過度の負担に陥った状態に俺がとどめを刺す形でパニック発作を誘発した。

『戌』モードで歯に麻酔を込めて噛みつき、誤魔化すために無害な雑草を含んで飲ませ、仕上げに急患を運ぶ振りして船に戻ると白波は連れていかれ、人が来る前に俺はへりに乗り込んだ。

「もう喋っても大丈夫ですよ」

飛び立った直後に言われ、うがいはしたが話すことなどないのでずっと無言だ。

それにしても白波はどうなったのか——あの後で綾小路はどうしたのか？

最終の結果を見れないのは残念だ。

試験最終日——無人島生活は終わりを迎え正午の終了のアナウンスで生徒たちは設けられた休憩所に集まっていた。

「最初はどうなるかと思っただけで終わってみれば結構楽しかったなあ」

？クラスは全員元気であり、各々がこれから出される試験結果に胸を躍らせていた。

そこに葛城がやって来る——辺りを見渡して訊いた。

「牛井は本当に居ないのか？」

「ちよつとした行き違いだよ……先に学校に戻っただけさ」

平田が答えると続くように、

「言つとくけど、リタイアしたんじゃないからな」

「?クラスが1位は変わらないぞ」

「嬰兒が居ないからって負け惜しみはやめてくれよな」

ドヤ顔でいきり立つ姿に葛城はひと言だけ返した。

「……やはり?クラスだな」

「あん、どういう意味だ?」

須藤の問いに葛城は答えることなく戻っていく。

「なんだってんだ」

「気にすんな」

「やっぱ負け惜しみだろ」

キインとスイッチ音が響き、スピーカーから真嶋の声が発せられる。

「試験結果の集計が終わった——これより発表なので整列するように」

指示に従い各クラスが担任の前に整列した。

「ではこれより試験結果を発表する——なお結果への質問は受け付けないので、自分たちで分析し次に活かして貰いたい」

ひと呼吸置いて皆が緊張しながら次の言葉を待つ。

「最下位はCクラス——0ポイント」

ここまでは見た通りの周知の結果であり、本番に緊張が高まる。

「3位はAクラス——96ポイント。2位はBクラス——170ポイント」

この結果に各クラスに動揺が走った——真嶋は淡々と続ける。

「そして1位は?クラス——304ポイント、以上だ」

?クラスも結果に驚いていた——内実は正反対であったが。

結果発表を終え、二時間後に出発——それまでは自由時間であることを告げて解散となった。

「どういうことだ!?!……まさか?おまえらクラス契約を反故にして——」

「落ち着け、Aクラスはリーダーを当てられていない」

戸塚が詰め寄ってきたが葛城が抑える。

しかし興奮が収まる訳もない——葛城派の計算では得るポイント

は196であり、桁がひとつ足りないほどのマイナスは？が裏切ったと真つ先に思うのは無理からぬこと。

「当てられたなら俺たちのポイントはもつと低い……導き出されるのは俺たちがBのリーダーを外した」

それ以外は考えられないとBクラスに目を向けるが、Bも状況把握が追い付かず困惑していた。

「け、けど………ぼくは確かに、キーカードに書いてあるの……この目で——」

「んなんも分からねえのか」

船から龍園が降りてきた——口振りからして全てを把握しているように揚々と解説する。

「Bのリーダーは変わったんだよ——そうだよな、一之瀬」

話を振られ一之瀬は困惑が抜けきらないままで肯いた。

「そうだよ——千尋ちゃんが担ぎ込まれて続行が無理になって、私が代わりにリーダーになった」

一之瀬はキーカードを出すとそこには「イチノセホナミ」とあった。

「そんなの反則じゃないか！」

「正当な理由なくリーダー変更は不可——体調不良によるリタイアは正当な理由だ」

ここで綾小路が入って来た——A・B・C・？のそれぞれを代表する形で話は進む。

「……気付いてたんだ、綾小路くん」

「嬰兒とAにやった一手をかわす手段を話してたからな」

「けど私じゃなくて、他の人を立てる可能性もあったんじゃない？」

一之瀬の指摘に綾小路は嬰兒が白波に仕掛けた瞬間を思い出す。

「居なくなつたとは言え、嬰兒の離れ業を見せられてリーダーに名乗り出る勇氣は、少なくともオレにはない——それは神崎も同様だろうし、ナンバー2が無理ならやれるのは一人」

それでも推測の段階——あの後で浜辺に向かい降りてくる姿で確信を得た。

「しかも幾ら雨だからって夏にジャージをしつかり着込んでポケットに手を入れてくる姿を見ればな」

「……ピンチがチャンスにと思つて油断したね。もつと慎重になるべきだったよ」

一之瀬は負けを悟り、龍園は面白そうに葛城も計算が合ったことで一定の納得は見せたが、まだ解せないことがあった。

「Bのリーダーを当てたのは分かったが、それでも？のポイントには届かない——他にもスポットを——」

「とことん頭がかてえな——単純にCクラスおれらのリーダー当てしただけだろ」

「だがCクラスは……」

「全員リタイアならリーダーもなんて書いちゃいない——しかし、やっぱり調べは付いてたか」

龍園が顔を向けると綾小路は一枚の紙を取り出す。

「嬰兒の指示でな。BとCのリーダーが書いてあった——この場で代わつて説明しろとも」

「ほう。直に聞きたかつたがまあいい——それより一之瀬、約束のものさつさと払つて貰うぜ」

「………仕方ないね」

龍園が不敵な笑みで迫り、一之瀬は苦い顔をしながら返却された端末を操作した。

「確かに200万ポイント——じゃ、残り200も来月中にな」

船に戻つていく龍園にBクラス全員悔し顔で見送るしかなかった。

「え、どういうこと？」

「なるほど、あれだけの装備を整えて170も残るなどおかしいと思つたが——Cのポイントを買い取る契約をしたのか」

葛城は最後の合点がいったとばかりに船に戻つていく。

「そうなの、一之瀬さん？」

榎田が訊くと一之瀬は小さく肯く——それを見ながら綾小路は思案する。

（やっぱりか。Aクラスにとか言つてたのは龍園との取引したから）

試験初日に龍園がAに持ちかけようとしたプランは嬰兒に先を越され、取引の対象をBに切り替えた。

先の会話と試験で見た装備からして200近いポイントを400万prで売却——嬰兒と直に対峙して？のリーダー当ては困難でありCのリーダーも知られている可能性も大きいと判断して龍園は撤退を決めた。

一方、一之瀬は0か少量のポイント消費で試験を乗り切り、スポットを積極的に行き行くことで500以上のポイントを得るつもりだったのだろう。

(おそらく龍園は嬰兒がBのリーダーも掴んでいると踏んだ……もしくはそれが出来る奴なのかを測ってもいた………場合によっては警戒しなきゃいけないかもな)

綾小路も船に戻るとそこには堀北が待っていた。

「すっかり元気になったみたいだな」

「お陰様で……その………悪かったわね……肝心な時に」

迷惑をかけたことへの負い目か、しおらしくなるが綾小路は構わず嬰兒から託された紙を差し出した。

「なにこれ？」

堀北が受け取り読み上げると、俺を使いたいなら、これぐらいはやって見せろ”と書いてあり、途端に不機嫌になる。

「あ、堀北さん」

「良かった。よくなったんだ」

「す、鈴音、もう大丈夫なのか」

「勝手に私を名前で呼ばないでくれる」

どさくさ紛れに名前を呼んだ須藤に堀北は怒りの目を向ける。

「わ、分かった」

込められた怒りの念に逆らうことが出来ず、戻ってきた？クラスの面々はドン引きする。

「そ、それより高円寺はどこだ？ひと言、文句言ってやりたいんだが」

幸村が話題を逸らそうとしつつ本音の質問をすると、堀北は怒りから困惑顔になった。

「えーつと、どう説明すれば……」

「な、なんだよ?」

突然の態度の豹変に今度は皆が困惑する。

「まあ、結論から言うとな彼は医務室で寝てるわ」

「はあ?」

「ホントに体調不良だったか?」

「仮病を続けてるんじゃない」

意外な展開に困惑が深まりどよめきが広がる。

「私も未だに信じられないんだけど……」

堀北が歯切れが悪くなるも説明を続ける。

「彼がりタイアしたその夜に……彗星が頭に直撃したらしいの……」

「「「……………」」」

一同の顔には訳が分からない——何の冗談だ、と書いてあった。

「私も直接見たわけじゃないわ——ただ、見回りの人が空から何か落ちてきて……直ぐ後に甲板に氷の破片が散乱してるの……頭から血を流してる高円寺くんが倒れていたって」

嘘をついているようにも聞こえず——堀北はそんな嘘をつくタイプではないのは分かり切っているため、本当に起こったことなのだと認めざるをえなかった。

それでも受け止め切れないようではあるもの——流石に文句を言う気はなくなったようだが、

「こんなことってあるの?」

「因果応報とか?」

「事実は小説より奇なり、じゃない。この場合」

見舞いに行こうという者は居らず、各々ざわめきながら船内に戻っていった。

その中で綾小路はある確信を得た。

(彗星——氷の破片。あれはやっぱり嬰兒の)

平穏な学生生活をぶち壊し、なし崩し的に受け入れるしかない冷やかしかし状態の元凶——ほぼ予想は付いていたが最早疑う余地はなく

なった。

(しかし、それよりも気になるのは連れて行かれたことだ)

胡散臭い流れに学校側の取って付けたような理由でなく、こっちが本当の原因だと考えると色々と言明が付く。

その時、

「櫛田さーん！行こうよ」

「あ、ごめん」

同じく考え事をしていた櫛田が呼ばれ、去って行こうとする際に目が合った。

「じゃ、またね。綾小路くん」

笑顔で言っただけだったが、綾小路は悟った。

(お前も同じことを考えてたんだな——だが最後に勝つのはオレだ)

学校生活だけではない——更にその先においても。

その為の最強の武器——信じる必要などない。

重要なのは綾小路清隆にとって使えるかどうか——どんな犠牲を

払おうとも。

(オレの願いが叶いさえすれば、それでいい)

干支の名になぞらえた。

あれから四日、つまり試験が終わってから三日経った。

マジックミラーがある取調室……ではなく、殺風景な応接室みたいな部屋で事務的で長つたらしい事情聴取もやっと終わった。

俺は今、軽自動車の助手席から外を見ながら学校に向かっている——正直、無人島なんかよりもよっぽどいい。

学生だけじゃない様々な人が行きかう信号や道路、高いビル群によつて狭められた空、特にケヤキモールと決定的に違う自転車やバイク、作業用だけじゃない様々な車種の往来——お、飛行機も飛んでるな。

夏休みだけに洒落た格好してる若者や子供連れの親なんかもよく目に入る。それでいて無関係な社会人たちは暑い日にもせつせと働きに出てる。

これこそが人の営み。

変わりゆく街の景色——もつとゆったり見ていたいから渋滞にでも嵌つて欲しいもんだ。

……しかし結局は無いものねだり、天然石を連結した門が見えてきた……よくよく考えたら正面から学校に入るのつてこれが初めてか。

なんとも妙な気分だが、出来るなら自分の足で歩いていきたいが更に無理だろうな。

門をくぐり直ぐに停車したので運転手を見ると何も言わないまま——ので、とつと降りると帰っていく——乗った時から寝ててもいいよとしつこかったのにな。

ふああ、と欠伸びながら歩き出す——皆が戻ってくるのは五日後、それまでは何をしようか。

『生徒の皆さんにご連絡いたします。』

先ほど全ての生徒宛に学校から連絡事項を記載したメールを送信いたしました。

各自携帯を確認し、その指示に従ってください。

また、メールが届いていない場合には、お手数ですが近くの教員に申し出てください。

非常に重要な内容となっておりますので、確認漏れのないようお願いいたします。

繰り返します——』

サバイバルを終え、再び豪華客船での贅沢を満喫していた生徒たちに無情に流れるアナウンス——そして全員が届いたメールを開いた。『間もなく特別試験を開始いたします。』

各自指定された部屋に、指定された時間に集合してください。

十分以上の遅刻をした者にはペナルティを課す場合があります。

本日18時までに二階204号室に集合してください。

所要時間は二十分ほどですので、お手洗いなどを済ませ、携帯をマナーモードか電源をオフにしてお越してください』

内容を確認した綾小路は特に興味なさげで画面にチャットが送信された。

（一緒なのは啓誠だけか——愛里と波瑠香も別なら男女に分けるわけじゃないのか）

グループチャットで可能な限りの情報を集めてはみたが、流石にこれだけでは見当はつかない。

そこに新たなチャットが入った——送り主は堀北であり、珍しくはあるが予想外でもなかった。

『メールは届いたかしら？届いたなら情報を回してちょうだい』

内容は簡素だが試験への積極性がありありと表れており、先の試験を棄権したこともそうだが嬰兒からの一言が諸に効いているようだ。

綾小路は自分とグループメンバーが、それぞれ違う指定時間であることを返すと直ぐに返信が来た。

『私の方は20時40分よ。時間帯が違うのは気になるわね——あなたの方が早いようだから報告よろしく』

無駄な言葉など一切ない文面——これ以上の返信は無駄そうであり綾小路は端末をしまう。

(嬰兒抜きでの特別試験か。さて、どうしたものか)

堀北は張り切っているようだが、それで良い結果が得られるかどうかは未知数であり、そんなことは綾小路にはどうでもいい。

嬰兒の異能を探ることも出来なければ、籠絡の足掛かりにもならない、モチベーションは全く上がらない。

Aクラスに興味はなく、純粹にクラスの為に何かしたいなどという気持ちなど全く持ち合わせていない身としては、勝手にやってさつさと終わって欲しかった。

二階フロアで幸村と合流し指定された部屋に向かう——フロアには数人の生徒がそれぞれの部屋に入っていく。

「妙なことになってるな。清隆」

「ああ」

他クラスの生徒もいることに緊張感が増している幸村に対し綾小路は気の抜けた返事であった。

それでも五分前に到着して扉をノックする。

「入りなさい」

許可を得て中に入るとAクラス担任の真嶋が座りテーブルの資料に目を落としている。

前には四つの席があり、ひとつに男子生徒が座っていた。

「三つの空席のうち二つは綾小路殿に幸村殿でござったか」

同じ？クラスの外村——やや太り気味で眼鏡をかけ、歴史や機械に詳しく、妙な言動や語尾も多いがそれでいてコミュニケーションが取れるオタクだ。

二人は席に着きながら最後の空席に目を向ける——揃うのを待つしかないようだが、この手の待ち時間は非常に長く、沈黙が支配する部屋には時計の秒針の音がよく聞こえた。

やがて18時を回り、真嶋が時計を見たと同時にノック——間延びした声を発しながら軽井沢が入室してきた。

「失礼しまーす」

「遅刻だぞ。早く席に着きなさい」

「はい」

注意に対し不服そうに答えながら軽井沢が最後の席に着く。

「では全員揃ったので、今回の特別試験の説明を開始する」

「ちよ、ちよつと待ってよ。試験つてもう終わったんじや……それに他の……もしかして嬰兒くんも戻ってくるの？」

この軽井沢の問いに綾小路は僅かに期待して真嶋を見た。

「今の時点で質問は受け付けないが——彼は今回の試験は不参加で、戻ってくることはない」

予想通りの返答であったが、それでも残念は拭えない。

「……………そうですか」

軽井沢は不満顔で黙り込み、真嶋は冷ややかな態度のまま説明を続ける。

「今回の特別試験では、一年全員を干支になぞらえた12のグループに分け、その中で試験を行う。試験の目的はシンキング能力を問うものとなっている」

シンキング——考える力、考え抜く力と言う意味合いだが、それだけでは訳が分からず、説明は続くがシンキングに対する定義と社会人としての必要性など前置きが長く、試験自体の内容が一切分からない。

「今回の12のグループに分かれる試験、当然ながら君たちは同じグループであり別室では他のグループメンバーにも説明が行われている」

「それでしたら全員を一堂に会したほうが効率的では？」

幸村が丁寧に意図を探ろうと訊いた。

外村も当然、疑問であり何かの陰謀かと考えを巡らせ、綾小路と軽井沢は嬰兒が戻ってこないと聞いてからずつと無言であった。

「単純な話——『君たちと同じグループとなる』のは各クラスから三人

から五人ほど集まり作られるからだ。そしてこれは確定事項であり変更はない」

「……………最悪」

軽井沢の声は小さかったが狭い室内にはよく通り——そのシンプルな言葉は全員の心証を代弁するものだった。

敵——良く言っても競い合って来た相手と同じグループを組むなど理解できないし、出来たとしても忌避すべきものだろう。

そんな心情を見透かしたように真嶋は言った。

「お前たちの学校生活は始まったばかりだ。今の段階でこれでは先が思いやられるな」

真嶋はそう言って、はがきサイズの用紙を全員に回す——『兎』と書かれた題名。

Aクラス：竹本茂 町田浩二 森重卓郎

Bクラス：一之瀬帆波 浜口哲也 別府良太

Cクラス：伊吹濤 真鍋志保 藪菜々美 山下沙希

Dクラス：綾小路清隆 軽井沢恵 外村秀雄 幸村輝彦

と記されているグループメンバーのリストだった。

「君たちのグループは『卯』——このリストは退出時に返却させるの
が必要ならこの場で覚えておくように」

綾小路が知っているのは一之瀬と伊吹、Aクラスは知らない名前であり坂柳から話題に上った記憶はないかと——思い出す気にもなれなかつた。

「今回の試験ではAから？のクラス関係を一旦無視することが、試験
クリアの近道だと言って置く。」

今からは兎グループとして行動して貰い——試験結果はグループ
毎に設定されることになる」

新たに四人分の用紙を取り出す。

「試験の結果は四通りで例外はない——詳細は記載されているが、持
ち出しや撮影は禁止なのでこの場でしっかりと確認しておくように」

配られた紙の端はヨレ、くしゃくしゃであり——前に呼ばれた生徒
が居たのが伺える。

書かれてある基本ルールは以下の通りだった。

『夏季グループ別特別試験説明』

本試験では各グループに割り当てられた『優待者』を基点とした課題となる。

定められた方法で学校に回答することで、四つのうちひとつを必ず得ることになる。

・試験開始当日午前8時に一斉メールを送る。『優待者』に選ばれた者には同時にその事実を伝える。

・試験の日程は明日から四日後の午後9時まで（一日の完全自由日を挟む）。

・1日に二度、グループだけで所定の時間と部屋に集まり一時間の話し合いを行うこと。

・話し合いの内容はグループの自主性に全てを委ねるものとする。
・試験の解答は試験終了後、午後9時30分から午後10時までの間のみ優待者が誰であったかの答えを受け付ける。尚、解答は一人一回までとする。

・解答は自分の携帯電話を使って所定のアドレスに送信することでのみ受け付ける。

・『優待者』にはメールにて答えを送る権利はない。

・自身が配属された干支グループ以外への解答は全て無効とする。

・試験結果の詳細は最終日の午後11時に全生徒にメールにて伝える。

以上が基本的なルールとして書かれていた。

そして、ここからが先生の言う四つの定められた『結果』というものだ。

・結果1：グループ内で優待者及び優待者の所属するクラスメイトを除く全員の解答が正解していた場合、グループ全員にプライベート

ポイントを支給する。ポイントの内訳は優待者に100万ポイント、優待者以外の者に50万ポイントである。

・結果2：優待者及び所属するクラスメイトを除く全員の答えで、一人でも未解答や不正解があった場合、優待者には50万プライベートポイントを支給する。

「この試験の肝はひとつ——『優待者』の存在だ。グループには必ず一人優待者が存在する。

その優待者名前が試験の答えであり、例えば、幸村が優待者だとしてよう。この場合、兎グループの答えは『幸村』となる。後はこれをグループ全員で共有すればいい。

三日目の試験終了の後、設けられた解答時間にグループ全員が『幸村』の名前をメールで送れば、グループは合格。結果1が確定し全員に50万ポイント、優待者は結果1に導いた褒賞として100万ポイントを得る」

「ひゃ、ひゃくまん……」

得られる金額の大きさに慄く。

「結果2についてだが、これは優待者が名乗らなかった場合——あるいは嘘の優待者を仕立てるなどして正体を悟らせなかった場合だ。

文面にある通り、この場合は優待者のみが50万ポイントを得る」

「こんなの——選ばれなかったら損じゃん」

軽井沢は優待者が欲しくてたまらないようで当然の反応と言える。

ただこれだけでは優待者にあまりにも美味し過ぎる話だ。

「先生——3と4の結果とは、どのようなものでしょうか？」

幸村が丁寧に訊くと真嶋は裏面をめくる様に指示する。

記載された内容の続きは、

以下の2つの結果に関してのみ、試験中24時間いつでも解答を受け付けるものとする。

また試験終了後30分以内であれば同じく受け付けるが、どちらの時間帯でも間違えばペナルティが発生する。

・結果3：優待者以外の者が、試験終了を待たず答えを学校に告げ正解していた場合。

答えた生徒の所属するクラスはクラスポイントを50ポイント得ると同時に、正解者にプライベートポイントを50万ポイント支給する。

また、優待者を見抜かれたクラスにはマイナス50クラスポイントのペナルティが課せられる。及びこの時点でグループの試験は終了となる。尚、優待者と同じクラスメイトが正解した場合、解答を無効とし試験は続行となる。

・結果4：優待者以外の者が、試験終了を待たず答えを学校に告げ不正解だった場合。

答えを間違えた生徒が所属するクラスはマイナス50クラスポイントのペナルティが課せられる。

またその場合、優待者は50万プライベートポイント得ると同時に、優待者の所属するクラスはクラスポイントを50ポイント得る。答えを間違えた時点でグループの試験は終了となる。

尚、優待者と同じクラスメイトが不正解した場合、解答を無効とし試験は続行となる。

試験の全貌が明らかになった——1と2の結果だけなら優待者は最高であったが「裏切者」が追加されることで内容はひっくり返る。

正体がバレたなら、密告され——そのチャンスは24時間ある以上、我先にポイントをと行動するだろう。

「今回学校側は匿名性についても考慮している。

試験終了時には各グループの結果とクラス単位でのポイント増減のみ発表する。

優待者、解答者共に公表はない。望めばポイントを振り込んだ仮IDを発行して分割して受け取るも可能だ。

つまり本人さえ黙っていれば試験後に発覚する恐れはない。もちろん隠す必要がなければ堂々と受け取っても構わん」

配慮は万全——されど優待者を見つけ出す難度は高く、クラス内に居るか居ないかで有利不利が変わる。

「結果3と4は他の二つと異なるものなので裏面に記載した。禁止事項も記載されているので目を通すように。以上で試験の説明を終わる」

禁止事項は他者の端末を略奪、脅すなどでの情報集めや解答を強制させる、他社の端末を使って勝手に送る。

怪しい行為が発覚した場合は徹底した調査し嘘をついた、試験終了から一定の禁止時間に他クラスとの話し合いをした——以上全て場合で退学とあった。

「君たちは明日から午後1時、午後8時に指示された部屋へ向かえ。当日は部屋の前にそれぞれグループ名の書かれたプレートがかけられている。」

初顔合わせの際には室内で必ず自己紹介を行うように。

室内に入ってから試験時間内の退室は基本的に認められていない。

トイレ等は事前に済ませておくように。万が一我慢できなかったり、体調不良の場合はすぐに担任に連絡して申し出るように」

「部屋を出ちやいけないって、いつまでよっ」

「説明に書いてあっただろう——毎回一時間。初回の自己紹介以外は好きにしている。時間が来れば退室も残るのも自由だ」

「はー、もっと楽しいのが良かったなあ」

「それからグループ内の優待者は学校側が公平性を期し、厳正に調整している。」

優待者選ばれた、もしくは選ばれなかったに関係なく変更は一切受け付けない。

また、学校から送られてくるメールのコピーや削除、転送、改変などの行為は禁止とする。

「しっかりと認識しておくように」

これは裏返せばメールの虚偽は不可能であり、100%の真実証明であること。

解散を命じられ退室していく。

「あーあ、嬰兒くんが居れば今回も楽勝だったのになあ」

「いやいや、いくらなんでも学年全員の携帯を盗み見るなど不可能で

「ござるよ」

軽井沢が未練がましく言うのを外村が茶々を入れる。

(いや嬰兒なら出来たかも知れない)

綾小路は口に出さず思う。

ポイントの操作や新しい機能の追加からシステムそのものを——反則を通り越して犯罪なので可能性は低い。ベターに考えるなら分身かそれに近い能力で全生徒を監視するか、意識を操って優待者かを名乗らせるか。

それともまだ知らない異能を駆使するのか——この課題で活かせる異能を持つていないのか——それならそれで取引にも使えそうであり、つくづくこの場に居ないのは惜しかった。

「今そんなこと言ったって始まらないだろう——不本意だが組むことになった以上はこの四人で話し合って——」

「あ、もしもし平田くん？」

幸村が纏めようとしたが軽井沢はお構いなしに通話に夢中になる。

「幸村殿——申し訳ないが拙者もこれから見なければならぬアニメがあるので、これにて。ドロソツ」

のそのそと歩いていく外村に幸村は額に手を当て、綾小路は嬰兒なら本当に消えたかと思った。

その時、綾小路の端末が鳴り見てみると発信者は嬰兒だった。

(噂をすればか——それともどこかで見てるのか?)

「すまない、啓誠」

断りを入れて出ると数日ぶりの声が聞こえた。

『もしもし、ご無沙汰だな』

『言うほど経ってないだろ』

『ハハッ、それもそうだ——試験結果は聞いた。上手く立ち回ってくれたようだな』

「不本意ながらな——それにたった今、次の試験の説明を受けたところだ」

そのまま試験内容を説明する。

ほう——十二支のグループに分けてか。

俺もいたら何処に回されたかな？

それで綾小路は『卯』か……得体の知れなさで言ったらピッタリかもな。

『それで——嬰兒なら、また簡単にやれたか？』

まあ、出来なくはないな——『鵜の目鷹の目』はそこまで役に立たないだろうが、『死体作り』でまた鼠なんかを駆使して情報を探るのは可能だし、『戌』や『魚』で自白剤を吸わせて聞き出すのも正攻法で『申』や『蟹』の交渉術を披露するもありかな。

「うーん。心を読んだり、嘘を見破ったりする芸当はちよつとな」

適当にはぐらかしてみる。

『そうか——まあ仕方ないな。こっちはこっちで何とかするから、何か案が浮かんだら連絡をくれ』

おやおや、どうにも連れない——電話越しじゃ能力も知れないし用は無いってか？

それとも無駄な雑談じゃなくて、用件があるなら早く言えとか——単に長電話すると不味い状況なのか。

「分かった。じゃ、頑張つてくれ」

通話を切ろうとしたら、

『ちよつと代わって！』

と女の声が出て向う側からバタバタした様子が聞こえて直ぐに相手が出た。

『もしもし嬰兒くん——あたし、軽井沢だけど』

「ああ、どうした？」

『ああ、いや……またちよつと面倒なのがあつて』

「試験に力は貸せんぞ」

『で、でもさ——なにかアドバイスとか、どう動いたらいいかとか——』

頼ってくる気満々だな——ただ俺から引き出したい言葉、言質は試

験に関係無いものだから言ってることがたどたどしい。

「軽井沢、番号とアドレス送るから連絡先教えてくれ——いつまでも綾小路のじゃ、じつくり話せないだろう」

『あ、うん、分かった！』

僅かでも鼻肩されていると思つてか、一気に陽気な声になったな。

聞いた連絡先にアドレスを送ると間を置かずしてメールが届く——
「前の試験1位取れたし、今度のも何でもいいから指示が欲しい」
ね。

指示か……軽井沢おまえへの支持の間違いじゃないのか？

俺は僅かに考えて返信する——ならひとつ、堀北に助力しろ。それ
であいつにまあ、頑張れと伝えてくれ——人によつては何を無責任な
とか言われそうだが、今のあいつにはこれ位でいい。

まず間違はなく前回の分も含めて巻き返しを図ろうとするだろう。

だが試験内容からして堀北に勝てる見込みは僅か——そのことを
自覚してるとも思えんからな。

おおと、今度は直接電話が来たか。

「もしもし」

『メール読んだけど……堀北さんじゃなくて、その………もう
ちよつと』

直接的な指示が欲しいか——俺の威を借りてることをアピールし
たいんだな。

「最初に言つただろう。力は貸せない——クラスの勝率を上げるには
堀北に協力するのが最善なんだ」

『いや、だから……そうじゃなくて………』

クラスじゃなくてお前個人にか——より強い存在に縋ろうしてく
る弱者であり、そのこともしっかりと自覚しているようだが大っぴら
には認められないね。

普段の態度も外敵を威嚇するためのポーズか——それじゃあ。

「強気を通せ——欲するものを最大から譲るな。軽井沢恵」

『!?!』

電話越しにも息を呑むのが伝わってくるな——軽井沢のスタイル

に沿って意味深なこと言ってみたがどう解釈するのかな。

『え……嬰兒くんって——』

「悪いけど、俺はここままだ。続きは戻ってから話そう——二人だけでな」

『——わ、分かった。絶対だよ!』

通話を切ったが——さて戻ってきたら、どんな顔してるのか？

俺の言ったのを意識しすぎて擦り切れてるか——本当に通し切って自慢してくるのか？

なにせよ腹を割って話が出来れば一番いいんだが……その結果次第では平田に殴らせなきやとかは、やっぱり気乗りしないな。

罰が・・・

綾小路たち兎グループから約二時間後、新たなグループが二階フロアに集まっていた。

その内の一人である堀北鈴音。

彼女は綾小路から報告されたメールである程度の試験内容は把握しており、前回の不覚を取り戻すチャンスが早々に来たことにやる気を漲らせていた。

「こんばんは。堀北さんも20時40分組？」

平田もやって来て気さくに話しかけてきた。

「ええ、平田くんもそうみたいね」

簡素に答えて再び集中する姿は傍から見て並々ならぬ気合いであり、僅かに気後れしてしまう。

「ああ……なんだか、やっぱり変わった試験が始まるみたいだね」

その所為か言葉がたどたどしく表情も困惑気味だ。

(綾小路くん——いえ、彼なら他からも相談を受けているでしょうね)感情が先走っている所為か同級生に対しても分析してしまい——話しかけた平田もただならぬ感覚に益々困惑してしまう。

しかし、そうなってしまうのも無理からぬことだとフロアを見て思ってしまう。

現在のフロアにいるメンバーは顔の広い平田には知っている面々が殆どであり、Aクラスの森宮、Cクラスの時任あたりだけなら、こうはならなかっただろうが——両クラスのリーダー各である葛城と龍園に加えてBクラスからもナンバー2である神崎が居り、自分たちも含めてクラスの主力級が集まっていた。

その全員からフロアに足を踏み入れたと同時に強烈な視線を浴びせられた——前の試験の結果に警戒しているのとは少し違うのは想像がつく。

堀北がどれ程前から居るのかは知らないが、この空気の中にいて気を尖らせるなど言うのは無理があった。

「あ、平田くん、堀北さん………なんだか大変な事になってる感

じ？」

櫛田もフロアに入つての洗礼に流石に笑顔が固まってしまふ。

それから程なくして指定時間になりメンバーはそれぞれに部屋に向かう——その中で葛城が呟いた。

「牛井は戻つてこないか」

それに呼応するように龍園も口を開く。

「そうみてえだな——面白くねえ」

「……………」

？のメンバーは何も答えずに部屋に入っていく。それは単に牛井嬰兒不在で侮られている——からだけでない、今試験だけでない先の戦いにおける難題を悟ったからでもあった。

朝になり久しぶりに自分のベッドで寝れたからか、どうにも起きたくない脳が喚いている。

時間はまだ8時前か——あいつらの方はどうなってるかな？

特に期待もせずに端末を見てもメールも着信履歴もない——気付く奴は気付いたのか、俺を頼ることが出来ないって。

さて、今日は何をしようかな。

早朝の船内カフェで綾小路は堀北から渡されたメンバー表を見ていた。

グループ名は『辰』つまりは竜。

Aクラス；葛城康平 西川亮子 的場信二 矢野小春

Bクラス；安藤紗代 神崎隆二 津辺仁美

Cクラス；小田拓海 鈴木英俊 園田正志 龍園翔

Dクラス；櫛田桔梗 平田洋介 堀北鈴音

明らかに偶然ではない組み合わせである。

(嬰兒が居たら組み込まれていたか？オレが兎なのは茶柱と仲違いたから——それは別にいいとして、一之瀬も兎なのは先の負けの責任を取らされたからか？)

やる気なく考察をする綾小路に対し、堀北のモチベーションは高潮で端末を手に優待者の通知時間を待つ。

「この試験、優待者になれるかどうかはとても重要よ。やりようによつては全ての選択肢が可能」

少しでも有利な条件を得たい——その気持ちは分かるが、意志や情熱で得られる類ではない。

(嬰兒なら神にでも祈れとか言うかな？)

考えている間に8時を迎え端末が一斉になった。

『厳正なる調整の結果、あなたは優待者に選ばれませんでした。』

グループの一人として自覚を持って行動し試験に挑んで下さい。

本日午後1時より試験を開始いたします。本試験は本日より三日間行われます。

竜グループの方は二階竜部屋に集合して下さい」

ほぼ同じ文面を互いに見せ合い、大した差異が無いことを確認すると端末を仕舞う。

「厳選なる調整——優待者には何かしらの意図があるってことかしら？」

優待者になれなかったことに文句も言わず、冷静に状況を分析しようとする堀北——しかしその程度のこと、他も気付いているだろう。

綾小路はやる気が空回りしないかと柄にもなく心配になる。

「リーダー格の奴らはもう戦略を練ってるだろうな——こっちも早くどうするか決めないと勝てないぞ」

「言われるまでもないわ——嬰兒くんがいたなら、どうしてたと思う？」

ただ気になるだけなのか、それとも参考にしたいのか——昨夜の嬰兒との会話を思い出しながら綾小路は思索する。

先の一言からして堀北に丸投げして何もしないか、それとも大量の

Prポイントを欲して別行動にて試験に挑もうとするのか？

「人の心が読めるとか、ハツタリかますんじゃないか」

異能を知らない者たちには、読心術の類かと揺さぶりを掛け疑心暗鬼を植え付ける。

そうしてクラス内の連携の阻害と情報の秘匿に慎重を期させ、優待者にもプレッシャーを与える。

嬰兒は出来ないと言っていたし、嘘をつく必要性も思いつかないから本当ではあるだろうが、前の試験での攻撃的行動からして可能性は高そうだ。

「……出来ることの多さは頼もしいわね」

「実際に使うことが出来るならな」

この綾小路の返しを皮肉と取るかと堀北の反応を窺う。

「元々Aクラスは私主導で目指すつもりよ。それが彼の為にもなるなら結構なことじゃない」

この答えは綾小路の意図を汲んでおり、ひとまずは安心した。

「……嬰兒の為になるかは分からないだろう」

「そう？Aクラスを目指すなら私ほど相応しい担い手は居ない。坂柳さんしか見てないあなたじゃ足りないんじゃないかしら」

「その分を補うメリットは用意するさ」

試し返してきた堀北に即答で返す。

負けるつもりはない——と受け取れ堀北の心中は絶対に負けられないとモチベーションは更に上がった。

「結果を楽しみにしておくわ」

「オレもな。どんな結果を導き出すのか期待しておく」

情報確認の話し合いは終わり、デッキに他の生徒も見え始めたので互いの部屋に戻ることにする——その際にデッキに居る生徒をそれとなく見回すが龍園や葛城の姿はなく？クラスの動きなど気にもしていないようで懸念がひとつ減った。

(嬰兒が居たら、こうはいかかなかった——あるいは別の理由で居ないんだったら、面倒になってただろうな)

ABC全ての主要メンバーに嬰兒は実力を示し見事に圧勝して見

せた——試験の特性上、優待者の端末を見られるリスクは真つ先に浮かび、協力体制による四六時中の監視状態を仕掛けて来てもおかしくない。

また指示を受けた代理だれかによる参戦も考えられ、探りを入れに来るぐらいはするだろう。

それもないと言うことは、その必要性が無いと判断したと推測するのが妥当だ。

(あれこれ考えたところで推測の域を出ない——時間が来るまではゆつくり休むか)

綾小路は部屋に着いたと同時に思考を一旦止めて寝ることにした。

折角の夏休みだし、天気も良いので外に出る。

一年が殆どいらないと言っても二、三年や他の教師に職員たちもいるから劇的に閑散としてる風でもなく、普段とあまり変わりはない。

試験で稼いだポイントはまだ手元にはないし昨夜の話からして減る可能性もあるから、どうにか負けないか……損害は小さくなって欲しいものだ。

ともあれ今、金が乏しいのはどうにもならない——嗜好に充てられる分は無いし散歩ぐらいしか——やっぱり見飽きた敷地内じゃなくて外に繰り出したいものだ。

こんな所簡単に抜け出せるんだ——規約違反だの脱走だのお題目で消されかねないが『死体作り』でゾンビを一体残しておけば交渉か延長処置ぐらいは……。

いや大戦の為なら大都市すら滅ぼすぐらいはやってのけるんだ。この程度ではひと捻りもされる前にやられるだけ。

となると『蟹』や『獅子』『天秤』から受け継いだ記憶による情報を対価にでも——俺が『申』並みの実績でもあれば別だが、外に行くことの危険性に見合う対価にはならんだろうな。

やり込められ、値切られて、大人しくしている——とされるのが関

の山か。

正攻法でいくなら何処か外に出る用事のある部活に入るのだが、外出時には常時ドゥデキャプルの監視が常に付くなんてこともありえる——そんなことになるなら今の方が絶対にマシだ。

なんだかどどん気分が悪くなりそうだから部屋に戻ろう——と歩き出した端末に連絡が来た。

綾小路か軽井沢かと思って見てみると生徒会からの呼び出し——はて、なんだろうか？

『ではこれより一回目のグループディスプレイスカッションを開始します』

指定時刻13時丁度に流れる簡潔で短いアナウンス。

部屋には兎グループ全員が座っているもの——昨日まで敵として戦っていたながら、一転して結べと言われた即席の協力関係。

状況も周りのメンバーもよく分からない重苦しく静かな空気の中で、軽井沢恵は立ち上がり強気に言った。

「初対面が殆どだし取り敢えずは自己紹介しよ。あたしは軽井沢恵、？クラス」

「自己紹介なんてする必要があるのか？」

「一応、学校の指示でしょ——勝手にやってろ、って言うなら名無しくんでもいい？」

Aクラスの男子が異を唱えるが軽井沢は譲らず、いきなりの火花が散る展開に緊張が高まる。

「それとも指示に逆らってグループをぶち壊すのがAのやり方なの？」

更に軽井沢は疑念を叩きつける——他クラスだけでなく同じAもキツイ目を向け、形勢を有利に持っていった——そのまま軽井沢は目配せして？のメンバーに続けと促していき全員が名乗っていった。

流れるに軽井沢が司会役になっており、次にどう進めるのか皆が注目する。

「……………で、どうしようか。これから？」

「何も考えてなかったのかよ」

幸村が呆れながら額に手を当てた。

勿論、肩透かしを食らったのはメンバー全員で何とも言えない空気に再び主導権が宙に浮く。

「あー、だったら俺から提案がある」

さっきのAの男子——町田が発言し皆が注目する。

「折角だからこのまま話し合いを放棄しないか」

「なかなかユニークな提案ですね。つまり優待者の勝ち逃げを許すと？」

それではAに優待者が居ると疑われますよ——情報を自分たちのみが独占しているとも」

Bクラスの男子——浜口が言った当然の疑問にA以外のメンバー全員が同じ思いを抱く。

「優待者が誰かはどうでもいい。重要なのは裏切者が出たらこの試験は敗北だつてことだ。」

「だけどそれ以外の結果にはデメリットはない——リスクを負うことなく全員の懐が潤うんだ」

「承諾しかねる」

尤もらしく語る町田に対して綾小路が真つ先に拒絶した。

「お前の方法じゃクラスの利益にならない。この試験が公平であるなら各クラスには三人の優待者がいて、他クラスを全て当てれば450ポイントのプラスにして150のマイナスを与えることが出来る——オレたち？クラスならCを飛び越えて一気にBに昇格だな」

「バカか！そんなこと出来る訳ないだろ！」

「だが理屈では可能だ——やるのがBやCなら今度こそクラスは逆転する。だからその可能性を潰したいんだろ。葛城は」

綾小路の確信めいたニュアンスにAのメンバー全員が冷や汗を浮かべた。

「私も綾小路くん賛成だよ。あと何回あるか分からない特別試験でチャンスを棒に振るなんて、そっちの方が愚行だよ——Aクラスの逃

げ切りこそ最終的なデメリットだよ」

一之瀬も拒否を示しBのメンバーも従う姿勢だ。

「何よりここでAの二連敗なら葛城の息の根は確実に止まる——その方が有栖も喜ぶ」

「そう言うことなら俺も清隆に同意だ。」

Aに塩を送るようになるのは癪だが、坂柳とは知らない仲じゃないし——何より葛城の策に乗るのはどうにも気に入らない」

先日のレストランでの一件がぶり返したのか幸村の声も目も鋭い。

この連続した反対意見に加え出てきたAのさかもう一人のやなリーダーのあ名前もあつて並々ならぬプレッシャーがAに襲い掛かった。

「そうか——だがAの方針は今話した方向で固まって——」

「あー、ちなみに俺は優待者じゃない。これが証拠だ」

町田を遮つて同Aクラスの森重が端末を差し出すと、優待者ではない内容のメールが表示されていた。

これ以上ない証拠の提示にAだけでなくグループ全員が驚いた。

「ど、どういふつもりだ……クラスを裏切る気か？」

「最初は俺も納得してたが気が変わった。葛城の首をつなぐ——ましてや息を吹き返す手伝いなんて真つ平だよ」

どうやら森重は坂柳派のようだ——ここに来てもクラスが割れているのが尾を引く形になり、更なる不和が生まれた。

町田が顔を歪め今にも飛び掛かりそうな様子に一之瀬が止めに入ろうと立ち上がるが、最後のAである竹本も端末出して優待じゃない内容のメールを見せる。

「悪いな。俺もとばっちりなんてゴメンだ」

最早、孤立無援の状態に更に顔を引きつかせるも何も言えない町田の姿はAの内情——坂柳と葛城の形勢を表していた。

(展開を読み切つての芝居の可能性は——流石に無いか)

綾小路は観察し裏を読もうとしたが、協力したぞとアピールしている目を向けてくる様子や端末を交換するなどの工作を葛城が思いつくとは思えない。

更に裏をかいて坂柳が指示してきた可能性もあるが、彼女の性格か

ら考えて今求めているのはクラスでの主導権——女王の地位を盤石にすることだろう。

「にやははは——相変わらず攻撃的だね。何はともあれ無理に話し合いに参加しなくてもいいから」

一之瀬がやんわりと仲裁して話を終わらせる。

綾小路が居る限りAは除外しても構わないと判断したこともあるだろうが、町田を不憫に思ったのかも知れない。

そんな一之瀬の姿にBのメンバーは信頼を寄せているのは今も変わらないようだ。一度の失敗では揺らがない彼女の人望の深さが窺える。

そうして仕切り直しになるが、何を話すべきか——先の綾小路の不可能な仮説からか全員が牽制しあって切っ掛けが掴めない。

「ねえ、軽井沢さんだっけ。ちよつと聞きたいんだけど？」

その中でCクラスの女子、真鍋が口を開いた。

「なに？」

「私の勘違いじゃなかったらなんだけど……もしかして夏休み前にリカと揉めた？」

「リカって誰？」

「私たちと同じクラスの子でメガネかけてるんだけど、お団子頭の。覚ええない？」

「一応聞くけど、その子がどうしたの？」

堂々と強気に聞き返す軽井沢に一瞬怯むも真鍋は続ける。

「私たち聞いたんだけど——Dクラスの軽井沢って子に意地悪されたって。」

カフェで順番待ちしてたら突き飛ばされた割り込まれたって言うってたんだけど。

本当なら謝ってほしいの。リカって全部一人で抱えちゃうタイプだからなんとかしてあげたいから」

「悪いけど覚えてない——ってか、それって今する話なの？」

「じゃあ、話し合いが終わったら付き合ってくれない。リカに確認取れば、はつきりするし」

「嫌よ。なんであたしがそんな子のために」

この言葉に真鍋も苛立ちを覚える。

「私はリカの友達なの——あなたの所為でリカがどんな思いしてるのか分かってるの!？」

双方、まったく引く気配を見せず緊迫した空気の中で第三者が割つて入る。

「そんなに深刻なのか——それなら学校に正式に訴えて白黒つけなければいいんじゃないか」

第三者である綾小路の提案に緊迫度が更に増した。

ただの学生同士の喧嘩をより大事にしようと言うのだから、当然と言えれば当然である。

話が思わぬ方向に向き真鍋の怒りは鳴りを潜めて慄きが湧く。

「訴えるって……私はただ、謝って欲しいだけで——」

「?対Cの一騎打ちなら嬰兒も出てくる——そうなれば龍園も喜ぶと思うぞ。前回は今回もまともに戦えなかったんだからな」

綾小路が出した名前に当事者の二人は息を呑む——そして周りの緊張度も上がり成り行きを見守る。

「ちよ、ちよっと待ってよ……この程度のこと、そんな」

真鍋は冷や汗を浮かべる。

元々において日常の中の些細な出来事の認識であり、問題のリカにしても気に病んではいてもそこまで騒ぎ立てるほど深刻な訳ではない。

しかし指摘されたように自分たちの知る龍園なら有利に戦える機会に喜び、より有利に運ぶために深刻な被害者に仕立てようと自分も含めて何をされるのか分からない——そんな恐怖が心に広がっている。

「あたしは全然いいよ。この程度のことですらでも煩わされちゃ嫌だし——嬰兒くんが負けるなんてある訳ないし」

対して軽井沢は嬰兒を信じ深い関係を匂わすニュアンス——昨夜に掛けられた言葉通りに欲しいものを妥協する気はなく嬰兒に更に取り入りより高い地位を手に入れるつもりだった。

平田と言う彼氏が居ながら、より凄いやつと見るとあつさりと乗り換えようとする尻軽女——そんな心証を抱きながら綾小路は冷静に思考を展開する。

この提案が通れば嬰兒を引つ張り出すのに軽井沢は一層の擦り寄りをさせるだろう。

綾小路の見立てでは真鍋の主張は事実であり、嬰兒の言う「正しいこと」からすれば非があるなら謝るべき——などと言う決着を主張するとは思えない。

真鍋の行動は一見すれば友達を思つてだが、権威や大きな後ろ盾を見せられた途端に態度が一変した。

根は小心者なのだろう——しかも自クラスのリーダーに頼ることが出来ないことから然して重宝されていない。この機に自分を売り込んで見せようという気概も見えない——鼻屑目に見てただの一生徒でしかない。

加えてさつきまでの横暴な態度からして弱みを見せれば、際限なくたかつてくるタイプでもありそうだ。

謝れば済むこと——そんな安易な結論を嬰兒が良しとするとは思えない。

(オレとしては見えないところで異能を使おうって展開が理想だな)

遺恨を無くして完全に蹴りを付けるには真鍋たちの納得ではなく——この一件に拘ること、関わることに不利益にしかならないと悟らせるのが妥当だ。

単純に本人たちに脅しでも掛けるか、追及するには割に合わない費用が掛かると龍園に思わせるなりして終わらせるように仕向けるか——それともまだ見ぬ異能によって事態を收拾させるのか。

同時に軽井沢にも反省を促し行動を改めさせる。

(兎に角、チャンスはどれだけあるのか分からないんだ——使えそうなものがあるなら何でも使わないとな)

完全に試験から外れた方向だが綾小路にとってはこっちのほうが重要であり、クラスが勝とうが負けようが二の次ではない。

「うくん。それとも関係ない話で煙に巻いて、優待者から目を逸らそ

うとか?」

そこに一之瀬がやんわりとした口調で話に入り真鍋に疑いの目を向ける。

「ちよ、ちよつと……私は優待者じゃないわよ!」

「本当ですか?ならば証拠の提示をお願いしたいのですが」

浜口が一之瀬に続くように畳みかける。

Aに続きCが尋問される形になり、必然的にCの他の女子たちも疑いの目を向けられる。

真鍋は勿論だが他の二人の女子たちもオロオロし始めたが、残る一人である伊吹は違った。

「バカらしい——そっちこそ疑うふりして誤魔化そうとしてんじやないの?」

「あく、確かにそれも考えられるよね。そうなると軽井沢さんや綾小路くんも怪しいよね?」

伊吹の反撃に対して?を巻き込む形で矛先を分散し、且つ話を元に戻す一之瀬。

一之瀬の手腕によって再び誰が優待者か分からない牽制状態に戻ったが、軽井沢と真鍋のクラスを巻き込みかねない喧嘩はうやむやになった。

そのまま纏まりもなく一時間が経過、自由にしてよいというアナウンスに解散可能となりクラスはそれぞれに戻っていった。

適当に昼飯を済ませて呼び出しの時間も近づいたので俺は進路指導室まで来た。

さて何が起ころのやら——そう思いながらノックする。

「失礼します」

扉を開けて中に入ると生徒会長殿とお団子ヘアの小柄な女子がおり、注意深く部屋の気配を探るが他に人は見当たらない。

役職があるとは言え一生徒。俺のことはもとい十二大戦を知っているとは思えないし、どこからの差し金による呼び出しかね。

「そう警戒するな——別に取って食いはしない」

態度や口調は妹と似てるが明らかにこっちの方が様になってるな。俺は警戒を解くことなく話せる距離まで近づく——横に控えているお団子女子からはジツと怪訝な目を向けられてるが、何が始まるんだかな。

取り敢えず初対面ではあるし名乗っておくか。

「一年？クラス、牛井嬰兒——出頭しました」

「三年Aクラス——生徒会長の堀北学だ」

「同じく生徒会書記の橘茜です」

名乗りを終え無言の直立不動で用件を待つ姿勢を取る。

「本当なら生徒会室で話したかったが今は改装中だな——この場所には特に意味などない」

会長殿は溜息を付いて切り出してきた——少しでも警戒を解こうとしてくれてるんだろうがとつとと用件に入って欲しいですけど。

「今日呼んだのは連絡事項があっただけだ」

そう続けて一枚の用紙を差し出してきた。

内容は今期の夏を含めた長期休みに学外での社会奉仕活動を命じるとあった——はて、これは何かの罰則ってことか？

「今回の件はお咎めなしたが、お前が本来得る筈だった貴重な外出の機会が削られた——これはその穴埋めとのことだ。」

無論、学校のルールとしては学外への接触は原則禁止だ。故に社会奉仕の一環と言う特例を持って対応することになった。

実際、この時期には納入業者は忙しくその手伝いもして貰うが二時間の休憩時間はある。更には生徒会われわれと教師三名、お前のチェックを済ませれば何処かに物品を送ることも許可される」

すました顔での淡々と事務的な説明だ……隣の橘書記が目だけでなく顔にまで不可解であると言っている——会長殿も内心は同じだろうな。

外に出られるのは嬉しいが額面通りじゃないだろうな。特に最後

の物品の送付は広まれば間違いなく群がってくる連中が出てくる——衆人環視による行動の制限、並びに情報が漏れた際の責任もついて来るか……面倒な。

「学校の定めたルールの逸脱——そちらは文句を言わなかったんですか？」

「——!!」

挑発的なニュアンスで言うのと橘書記は怒りで顔が赤くなるが、その前に会長殿が威厳ある声で言った。

「訊きはしたさ——だが学校が設立された当初は荷物の配送は認められていた。この特例はその時のことを適応させているに過ぎず、当時のような問題が起きた場合の責任もちゃんと対応する手筈は整えているとのことだ」

淀みなく答えるか、ここまで説明することは予定の内ってことか。

実際に会長殿の目は「お前は一体何者なんだ」と言いたげだ——まあ、口止めされる訳じゃないし知ったところでどうなるものでもないから、

「俺のことを知りたければ、もつと偉く——国を所有出来るぐらいになれば分かりますよ」

「皮肉のつもりか」

「いいえ、期待の表れですよ。あなたなら本当に国を二つ三つは所有できる有力者になれると思いますよ」

本当のことをあえて分からない様にと言ったニュアンスで言う。

「……………あなた、会長に向かつて」

ずっと黙っていた橘書記がバカにされたと思ったか怒りに声を震えさせている。

一年それも？クラスの俺が言ったんじゃ、さぞかし気に入らないか。

それで肝心の会長殿の方は険しくさせていた眼を瞑り、ひとつ息をつく。

「今年の一年は本当に面白い奴が多いな——牛井嬰兒、特質的な背景が無ければ俺の後を継いで貰いたいぐらいだ」

「会長!？」

単なる冗談だろう——真面目に反応しすぎだ。だがこれで場の空気は格段に軽くなったな。

俺もただのメッセンジャーだと確信したし警戒を続ける必要もこれ以上の用も無さそうなのでとつととお暇しようか。

「今回の用件はこれで終わりだ——それでここからは個人的な話になるが急ぐ用がないならまだ少し付き合って欲しい」

「出来れば手短にお願ひします」

先手を打たれた感はあるが、何を聞いて来るのかはちよつと興味もある——さてどうなるか。

「無人島試験が始まる直前に鈴音——病気の妹を止めてくれたそうだな。不出来でしょうがない奴だがそれでも身内だ——兄として礼を言う。ありがとう」

なんだよ。そんなことか——しかしそう言うことなら、こっちもひとつ言っておくか。

「そう思うなら言つてやればどうだ。あんたの——兄の真似はよせと」

おつと悪くない雰囲気が一転してしまったな——また目が陰しくなつてしまった。橘書記はただならぬ展開に付いていけずに狼狽している。

「あれは誰かになろうと躍起になり過ぎてて周りはおろか自分のことも見えなくなっている——今はまだ問題ないがこのままでいけば遅かれ早かれすり切れちまうぞ」

「よく見ているのだな——鈴音のことを」
「似たようなの知ってるだけさ」

そう。戦士『寅』——現実には打ちのめされ一度は戦士としての道を見失い酒に溺れるも『丑』と出会い彼の信条に触れ心の師と仰ぎ、彼と戦う為に十二大戦に臨んだ戦士。

しかし『寅』あくまでも戦士としての自分を認めさせようと己を鍛え磨き上げた——決してそれまでを否定することも捨てることもしなかつた、そこが堀北とは決定的に違う。

「兄妹であろうとあんたとあいつは違う——自分に合わせようとするならまだしも己を殺そうとするんじゃないや無理が生じるだけだ。止めさせた方がいい」

「……………言って分かるなら苦労はしない」

おやおや、余計なお世話だったか。しかし言葉での段階が過ぎてるならもしかして——それとなく会長殿の手に目をやる。

「他所の家の事情に深入りするのは感心しないな」

ドスの利いた声に目を逸らす——でも俺の知ってる堀北からして、それでも効果はないみたいだな。

それだけ兄への思いが歪な方向に行ってるのか。

ああ、やだやだ。益々持つて期待できないな——これからの学校生活、窮屈な思いをし続けるくらいなら、いつそ……………。

「失礼しました」

短く断りを入れて俺は部屋を後にする。最終手段の行使——本格的に考えた方がいいかも知れん。

騙して〇〇

「とりあえず……集まるのも二回目だし打ち解けあっていく必要があるんじゃないかな？回数も限られてるし」

兎グループの二回目の集まり。一向に進みそうにない状態に一之瀬が切り出した。

しかし前回の空気を見事なまでに引きずっており、AもCも話し合いいには一向に参加する気配はない。

Cはまた何の拍子で大事に巻き込まれないかと怯え、Aも町田は勿論だが森重や小宮も自分たちにはもう関係ないとばかりに何もするつもりもないようだ。

彼らとて葛城が完全失脚して坂柳が立つことを望んでいても必要以上に損失を拡大してAクラスから転がり落ちることは望んではいないのだろう。

「つて言うかさ。あたしとしてはさっさと終わらせて欲しいんだけどな。話し合いしても優待者が分かるなんて思えないし」

普段の軽井沢なら場を強引に引っ張り上げていきそうだが、余程気分が乗らないのか随分と投げやりだ。

その辟易とした声には同感だと言わんばかりに肯く者も少なくな

い。「だったら早く優待者が名乗り出てくれればいい——それで報酬を山分けするだけでも言った契約を交わせば試験終了で話し合いも今回限りだ」

幸村が提案し各クラスを見渡すが名乗り出る気配はない。

是が非でも優待者を当ててクラスポイントを得るか有利に持っていきたいと捻り出したのだろうか、損すると分かかっていて乗る者などいない——または本当に名乗り出ることが出来ないのか。

「あはははは……じゃあさ、ちよつと趣向を凝らしてゲームでもしない。自己紹介したなら基本何しても自由だし」

一之瀬の提案は一見重い空気を払拭させようとしているに見えた。しかし彼女はBクラスのリーダー。

最優先すべきはBの勝利であり、しつかりと周りを見定めて心を掴もうとしている——と冷静に見ている人物に話を振る。

「綾小路くんはどう思う？きつくない？」

気さくに話かけてくる姿は魅力しかなく、普通の男子なら間違いなく放っておかない美少女——しかし誰もかれもと言う訳ではない。

「有栖ぐらいとじゃなきや気が乗らないんだが、一之瀬はどの位強いんだ？」

Aクラスのリーダーを引き合いに出し——加えて一之瀬帆波がどれ程魅力的であろうとも自分には通用しないと一切の隙を見せない。

「いや、私としてはただ楽しく出来ればいいんだけど……なんか返って泥沼になりそうだね。言い出しといてなんだけど、今の無しにして欲しいかな」

「それが賢明だな。俺もこの前、挑んで惨敗した口だし——マジで強いぞ、清隆は」

同じ綾小路グループとして幸村は誇らしげに言う——裏の無い本心であるがゆえに最高のフオロードだ。

「そっかあ——しかし参ったねえ。この調子じゃ優待者の逃げ切り、Aクラスの思惑通りに終わっちゃうかなあ」

その言葉とは裏腹に一之瀬の目は全く死んでいない。どう戦うべきかを望みうる結果に至る道を見据えて実行している——そんな予感を抱かせた。

しかしその正体を突き止めることは出来ずに一時間が経過し二回目は終了した。

自室に戻った綾小路と幸村は同室の平田と高円寺が戻るのを待つて試験経過を話し合うつもりだった。

「すまないね。私はこれから肉体美の追及に励まなくてはならない——思わね形で疎かになった分を取り戻さねばならないのだよ」

頭に包帯を巻いている高円寺は上着を脱ぎ棄て逆立ち状態での腕立て伏せを始めてしまう——大量の汗が出ているが血が滲み出る様

子はなく鼻歌交じりで余裕があり、すっかり回復した様子だ。

言ったところで聞く訳がない——解り切った感想を抱きながら作戦会議が始まった。

「平田。今解っている情報を全部開示して欲しいんだが」

「うん。実は優待者になったって連絡が二人来てる」

綾小路の要請に平田は端末に名前を打って差し出す——「竜グループは榎田さん。馬グループは南君」——内容を確認して相槌を打つと平田は画面を消して端末を引っ込める。

試験が公平である前提ならば？にはもう一人、優待者が居る筈だったがクラスを中心人物であり人望もある平田にも報告を入れないとなると特定は難しい——と普通なら思う所だろう。

綾小路と幸村は戻るまでの打ち合わせで、ある仮説を打ち立てており平田に話したかったが、その場にそぐわない雑音にどうにも言い出せない。

「……………高円寺、参加しないんならせめて静かにしてくれないか」

幸村の声にはかなりの棘がある。

真面目な話をしている中、愉快的鼻歌がよほど癩に障ったのだから。

「そうは言われてもね。聞いていて退屈なのだよ——嘘つきを見つかる簡単なクイズの攻略法など」

「へえ、そうか——ならお前にはもう優待者が分かってるって言うんだな？」

「愚問だね、幸村ボーイ。寧ろ私にとってはこの退屈な試験にあと二日も付きあわなければいけないのが悩みの種なのだよ」

高円寺は腕立て伏せを止めて優雅に足を下ろした。

タオルを首に掛けベッドまで行くと端末を手に取り何かしらの操作をする。

直後に室内に居た全員の端末に通知が届いた。

『猿グループの試験が終了いたしました。』

猿グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。

他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

唾然といっている面子に高円寺は不敵に宣言する。

「これで晴れて自由の身になった——アデュー」

「ふ、ふざける——」

「さて高円寺——ひとつだけ訊かせろ。猿の優待者はどのクラスだ？」

幸村の文句を遮って綾小路が肩に手をかけて高円寺を引き留めた。それでも気にせずに行こうとするので力を込めて強く踏みとどまる。

「フフフ。なんとも深い愛じゃないか、綾小路ボーイ」

振り返る高円寺の愉快そうな顔に坂柳との冷やかしても始まるのかと微妙な空気が流れる。

「今、有栖は関係ない——質問に答えろ」

「フフ。安心したまえ、プライベートを詮索する無粋な真似はしない」
この台詞に安堵する平田と幸村——だが当の綾小路はどうにも違う内容に聞こえてしまい語気を強める。

「高円寺」

「Bクラスだよ。分かっただら放してくれないか、早くシャワーを浴びたいのだよ」

解放された高円寺はバスルームに——入り切る寸前にもうひとつだけ言った。

「ちなみにリトルガールは私のタイプではない。そこも安心したまえ」

何故同じことを二度も言うのか。

訳が分からないし、そもそも理解できるとも思えない変人の思考——特に気にすることもなく流された。

(何かを察したのかも知れないが感覚的なものだろうし、詳細までは) 綾小路も心の隅に置くぐらいはしておこうと思いつつ、改めて話し合いを再開しようとした。

しかし高円寺の突発的行動に何が起きたのかと言う趣旨のチャットが飛び回り、平田の端末も鳴りっぱなしでそれどころではなくな

た。
「ごめん、少し電話させて貰うよ」

平田が対応しようと断りを入れる——綾小路にも堀北から着信が入り状況の説明を求められた。

『……冗談でしょう?』

詳細を聞き終え責めるような口調——それは更に続く。

『どうして止めなかったの。一緒に居て何をやってたのよ!』

「今更そんなことを言ったってどうにもならんだろう——それよりもこの状況からどうするかだ」

綾小路は電話の向こうで堀北が髪を逆立てている姿が浮かび、これ以上の追及を避けて話を前向きに持つていこうと誘導を試みる。

「それで聞きたいんだが軽井沢から何か報告は受けてないか?」

『……なんで私に?確か平田くんも同室よね。彼に訊けばいいじゃない?』

「どうやら嬰兒からの言を全て守っている訳ではないようだ。その確認が出来れば今は十分だった。」

平田の彼女として櫛田と並んで女子のトップに立っている軽井沢恵——彼女の働きかけがあれば多くの情報が集まり戦略も建て易くなりクラスの勝率も上がる。

だから協力しろと言う指示を嬰兒は出した。にも関わらずそれに逆らうと言うことは軽井沢にとってクラス以上に重要なものがあると言うこと。

(おそらくオレと同じか、限りなく近いもの——使えるな)

綾小路の脳内で戦略が固まっていくな。

「堀北は優待者の情報をどこまで把握してる?」

『櫛田さんから聞いたわ。もう一人の南くんも平田くんから報告を受け——最後の一人が軽井沢さんだと?』

「確証はない——だから確かめたいんだがガードが固くてな」

『生憎だけど私も力になれないわ——だけど仮に優待者なら全力で守りなさい。また転落するなんて勘弁願いたいわ』

返事を待たずして通話は切れた。

(目や耳はおろか、自由に動かせる手足もないのにどうするつもりなんだ?)

先の試験では嬰兒は異能と経験を基にしたとしか思えない戦略によつて結果を出し、その成果を持つてクラスを主導し？を勝利に導いた。

その代償も大きく——だからこそ堀北は今度こそは自分の番だと張り切っている。

しかし結果が振るうにはクラス全体を見渡すことの出来る繋がりなり威光なりが必要だが、どちらも現時点の堀北にはない。

綾小路もその点は不十分としか言えず——だからこそそれを補つて余りある異能を持つ嬰兒を手に入れたい。

(その為なら例え不本意でも力を示さないとな——使えるものは何でも使つて)

綾小路は戦略を実行に移すべく、まずはクラスの対応に追われている平田に目を向ける。

平田は次から次へと来るクラスメイトからの連絡に四苦八苦しており、やや同情してしまふ——落ち着くまで待った方がいいかとも思ったが、その気配が全く見えないことから話しかけることにした。

「平田。最後の？の優待者だが、本当に知らないのか？」

「……………ごめん。その話は後にして貰つても——」

「軽井沢がそうなんじゃないか？」

対応にかまけて誤魔化そうとしている——そう見えた綾小路は再度、語気を強くして訊く。幸村も同調しており無言のまま答えを求めている。

「どうして、そうだと？」

綾小路は根拠として二回目話し合いで幸村の提案に優待者が名乗り出なかつたことを上げる。

単純に考えれば自クラスのマイナスを防ぐためだが、本当に名乗り出ることが出来なかつたとしたら——兎の優待者は？であり、綾小路と幸村は違うことを確かめており外村にも確認は取つた。

残るのは軽井沢のみ——根拠としては脆弱だが可能性としては一考に値する。

「もしそうなら負けない策がある——本当に知らないんなら確かめて

くれないか、早急にな」

綾小路はそれなりの誠意を込めたつもりだ——だが平田の口はまだ堅そうであり、もうひと押し必要かと判断する。

「軽井沢は嬰兒からクラスのために指示を受けてるが放棄している。我が身が可愛いさでそうしてるとしても別に構わない。」

だが今の軽井沢のスタンスじゃ嬰兒を困らせるだけだ——お前だつて分かつてるだろう?」

「……………中々にズルい言い方だね」

自分の彼女がクラスメイトに迷惑をかけている——などと言った単純な事ではなく、嬰兒の状況をより悪くしてしまいかねない。

平田の性格と普段の行動からして極めて痛いところを突かれた。

「嬰兒の力は強力だし、あいつが居ればAに上がることは十二分に現実性がある——けどあいつが先頭に立てない以上はクラスを纏められるお前や軽井沢の力は必要不可欠だ」

「それなら綾小路くんがリーダーになれば万事解決じゃないか」

平田なりの勝負に出たのか期待の籠った強いニュアンスだ——ここでイエスと言えば平田は綾小路の望む情報も開示するだろうし、これから先も補佐役としてクラスにも綾小路個人にも貢献してくれるだろう。

「前にも言ったろ、柄じゃない。それにもしそんなことになるものなら、Aクラス同様にクラスが二分されるのが関の山だ——堀北や榎田が結託でもした日には今度こそ?は終わりだ」

綾小路の望む展開ではない——故に起こつても可笑しくない可能性をチラつかせて遠回しに断る。

「だったらまずは堀北さんたちと話し合うのは、榎田さんとも今度こそ仲直りして——その上で嬰兒くんの力が加われば今度こそ?クラスは結束できるし上も狙つていける」

「お互いに譲らないな——この話は平行線になりそうだから話を戻そう。」

さっきの高円寺の独断専行だが、オレは十中八九で信じていいと思っている。そして?の優待者が兎に居るなら、より絞り込める仮説

がある——軽井沢を守るためにも協力を頼みたい」

「綾小路くん——君は？」

「より絞り込めるって——打ち合わせと違うぞ。清隆」

「今、思い浮かんだんだよ。もしこの仮説が当たっていたら少なくとも負ける確率は格段に低くできる」

現実的なメリットを提示しつつ、優待者を守ると言うカムフラージュを持って情報を引き出す——個人的に抱えている問題も然ることなら、今現在ひっきりなしに鳴る端末を静かにできる。

平田には途方もなく魅力的な提案であり、今までにない頼りたいと思える存在に心が揺らいだ。

「ひとつだけ条件がある——例え良い結果になったとしても僕は彼女の信頼を裏切る形になってしまう……だから謝罪には綾小路くんも同行して貰いたい」

「いいだろう。と言うかももう訊きたい事には答えてるし、断れないしな——お前もいい性格してるよ」

「誉め言葉と受け取るよ——僕だって出来ることには自信はあるし」

普段の平田からは凡そ想像つかない自らが優秀であるアピール——のように見せかけて出来ないことに対して頼りたいという弱みを裏に潜ませている。

重荷を誰かに分けて軽くしようと言う強したたかな含みを理解できるのか——試された綾小路は寧ろ感心してしまった。

（見くびっていた——想像以上に優秀な男だ。Aとも遜色がない能力を持つている……にも関わらず？ってことは、やっぱり訳アリなのか？）

平田の事情に興味が………全く湧くこともなく、どうでもいいので話を先に進めることにした。

綾小路は紙とペンと取り出し、

子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

Ⅰ Ⅰ Ⅰ D D Ⅰ D Ⅰ B Ⅰ Ⅰ Ⅰ と書き込んで行く。

「今回の試験、優待者は厳選なる調整によって選ばれた。つまりは規

則性があると言うこと、ならばクラスに振り分けるにしてもランダムじゃなく法則性みたいなものがある可能性はある。

そして卯、四番目が？であるなら前の三つは——そして折り返しになることなく、？はひとつ跳び、ならBも」

子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

A B C D D 1 D 1 B 1 B 1

「午が？で申がBなら、未がCで酉がA——ひとつ跳びの法則を当てはめると」

子 丑 寅 卯 辰 巳 午 未 申 酉 戌 亥

A B C D D C D C B A B A

「と、こんな感じの仮説が浮かぶわけだ——合ってるなら優待者の確率は三分の一から四分の一に絞り込める」

「けどこれって、作り手が法則性に引かれたらだろ——清隆には悪いが、この学校なら捻くれたランダムを組み合わせてして来る可能性もあるんじゃないか？」

「幸村くんの言うことにも一理あるけど、この試験でまず目が行くのは優待者の法則だ。学校の試験は確かにエキセントリックだけどフェアではある。」

フェアであることを念頭に置いて且つ余り注目がいかないなら、綾小路くんの仮説もありえなくはない——取っ掛かりとしては悪くないと思うよ」

仮説の欠点を指摘しつつも頭から否定する愚は犯さない——会議に熱が入り始めて議論がどんどん展開されていく。

そうして試験での？クラスの方針が決まり、実行すべく平田はまず軽井沢に連絡を取った。

進路指導室を出てから常に複数の視線を感じる——本人たちはさり気なくしてるつもりかもしれないがバレバレだよ。

理由はさつき貰ったこの通知しか無いだろうな。

……噂が回るにしては早すぎる。見てる奴らは話しかけ……もとい俺に頼み込むタイミングを見計らっていて、切っ掛けがあればどんどん流れ込んできそうだな。

つと今度は端末が震え始めた。画面には軽井沢の表示か——好都合と言うか別なのが来そうだと言うべきか。

おつと、躊躇してたら野次馬の一人が歩いてきた。早急に出ないと面倒になりそうだな。

「もしもし」

立ち止まることなく歩き続けて寮を目指す——頼むから部屋に付くまで持ってくれよ。

『あ、よかった。あたしだけど、ちよつといいかな？』

実は端末見せろつて、しつこい連絡が来て困っちゃっててさ』

ざっくりし過ぎだよ、相手は誰だ？

「俺じゃなくて、堀北に相談しろ。試験で勝つにはそれが最善だつて言っておいたろ」

『……いや……その……えつと……』

言っていないのが丸わかりだな——軽井沢から堀北、そして綾小路にも情報が回る様になったらとか思つて、綾小路にも言い含めておいたんだがな。

「軽井沢——前の試験においてお前はよく働いてくれた。女子だけは言え纏まりに欠ける？クラスを率先して取り仕切り、最後まで問題なく行けたのもお前の務めがあればこそだ」

『いや——』

電話越しでも照れているのが伝わってくるが、今のは前置き。

「しかしな——俺はそこには居ないし、これからもお前が期待するような活躍は出来ない。

それでも俺の力を欲するなら、クラスが団結していく必要がある——その為には資質ある奴が立たなきゃいけないんだ」

『な、なんで？ 嬰兒くんより凄いのなんて居る訳ないじゃん』

まあ、この学校ではそうだろうな——されど戦場もとい世界にはもつとヤバい奴らなんかいっぱい居る——俺なんてひと捻りされて

しまうほどの奴らが。

「月並みな言い方だが、俺にだって事情がある——それは苦になるのがな。」

お前も欲っしてるのか苦を減らしたいのかは知らんが、欲張るつもりなら然るべきことをしろ」

ちようど部屋に付いたし、そのまま通話を切る——これで軽井沢の中で俺を見限るとかになるならそれも良し。そうでなかつたなら……さて、どうなるかな。

試験二日目の午後——兎グループは集まって早々に張り詰めていた。

「昨日ずっと考えたんだけどさ。やっぱりこの集まり馴染めないし、結果1もだせるとは思えない。探り合いし続けるのも性に合わないし、あたしも話し合いを降りることにした」

開始時間と同時に軽井沢が切り出して端末を取り出しパスワードを解除、優待者ではない旨のメールが表示された画面を見せた。

この唐突な行動に啞然としている一同——それに構うことなく軽井沢は告げた。

「ちなみに？に優待者はいないよ。平田くんに訊いて確かめたから」

「おい、軽井沢！」

「い、いくらなんでも勝手が過ぎるのでは……」

憤る幸村と弱弱しくも抗議する外村——この高円寺に続いているの独断専行に綾小路も流石に参ってしまい、どうしたものかと言った目で天井を見ていた。

「あと残るのはBとC、最後に確か……町田君だっけ？」

軽井沢は構うことなく残る容疑者に目を向けていく。

「お、俺じゃないー！」

前回から追い詰められていた町田はいち早く声を荒げた。

「私だって違うわよー！」

「そ、そうだよ」

「龍園君に見せられた時に確かめたんだから」

「くらー」

Cの女子たちも必死に拒絶し……迂闊にも口を滑らせたのを伊吹が抗議するように声を荒げる。

その反応を見ていた綾小路は気を取り直して自分の端末を出して同じく受け取ったメールを見せながら最後の容疑者たちに言った。

「軽井沢の言う通り、オレも優待者じゃない。

今のやり取り演技には見えなかったし、あとはBになり確率は三分の一になる——異議が有るなら言ってくれ」

?だけでなく他のクラス全員が疑いの目を向けられ、完全に吊し上げ状態になり浜口と別府は一之瀬を見て助けを求める。

「にやはははは——ホントにグイグイ来るね。ここまで明確に迫られちゃ流石に参っちゃうよ」

言葉とは裏腹に一之瀬のニュアンスには余裕を感じさせる。

一之瀬はより強く視線を向けてくる相手——綾小路を一瞥し、何かを悟ったように溜息を付いた。

「ハア……降参だよ」

スカートの中の左ポケットから端末を取り出してテーブルに置く。そのまま皆の目の前でパスワードを打ち込み、学校からのメールを表示した。

そこには優待者に選ばれた文言が書いており、浜口と別府も呆然としてしまう——どうやら一之瀬からは何も聞かされていなかったか、偽の説明を受けたようだ。

「ゴメンね——敵を騙すにはまず味方から。最後まで隠し通すつもりだったんだけどなあ」

一之瀬は遠い目をしながら言った——そして気を取り直して続ける。

「でもバレちゃったんなら、もういいよね——本当は最終日に提案するつもりだったんだけどな。」

改めて提案なんだけど、このグループでは結果1を狙わない?ぶっ

ちやけ200万の負債があるから、どうしても大量のポイントがいるの」

龍園に支払わなければならないポイントの残高——確かに結果1でBが得られるポイントと相殺でき、Bのリーダーとして手早く片づけたいだろう。

「ハッ、どうしてあんたを助けなきゃならないのよ」

伊吹が否定的なニュアンスで言い、Cの面々も肯いている。

「事情は解るが、それじゃクラスの利益にならない——そんなんじや交渉にならないぞ」

幸村も続くように言った。

最早、グループ内では誰が早く裏切者になるかに思考が切り替わっているようだ。

そんな面々を観察している一之瀬——そこに軽井沢が再び主導権を取る形で問う。

「一之瀬さん——何考えてるの?」

こうして改めて優待者であることを暴かれたにも関わらず不自然な態度に違和感を覚える。

一之瀬はニヤニヤしながら上着のポケットからトランプを取り出してテーブルに置いた。

「みんな、部屋を出たらどれだけ早く私が優待者だって送ろうって考えてるでしょ。」

で、私達は大量のPrポイントが欲しい。だから誰が裏切者になるか——ゲームで決めない?」

この第二案に一同は面食らった。

「ディールは私がやって、浜口君と別府君はズルが無いかどうかを監視してもらおう。」

負けたら恨みつこなしで——そして勝った人は同元である私たちに一人10万、つまり30万Prポイントを支払って貰う」

「結果3において裏切者は50万貰える——その内の30とは随分な吹っ掛けだな」

「ふざけんじやないわよ——なんであんたに」

「そーよ、訳分かんないわよ」

否定的な声にも一之瀬は動じることなく淡々と返す。

「でも単純に考えて抜け駆け出来る確率は三分の一だよ。裏返せば三分の二の確率で負ける——ううん、人数の多い？クラスが有利に持つていける。」

私たち抜きじやイカサマもあり得るし、残り時間の話し合いで決めたとして——それこそ信じられる？」

「なるほど、ズルしない監視つてのはゲームだけじゃない。終わった後に裏切者になろうとする奴に対してか」

綾小路が補強するように言うで一之瀬は肯いた。

「そう言うこと——今だつて牽制しあつて動けないし100%邪魔されないなら30万だつて高くないでしょ。寧ろクラスポイント50が得られるなら安いものだと思うんだけどな」

「あたし、賛成！話し合いがこれで終わるなら別に惜しくないし」
「せつ、拙者も」

軽井沢が真つ先に賛成に回り外村も引つ張られるように続いた。

「ありがとう。でも公平を期すために？からは一人抜けて貰う——昨日の話からして綾小路くんが居るとハンデありまくりみたいだし」

「そう言うことなら俺もいいぜ」

「おい、森重！」

「嫌なら町田は参加しなけりゃいいじゃん」

Aも大勢は決まったようだ。

「ま、私も別にいいけど。あんたらは？」

伊吹に問われるも既に流れは出来上がっており、先のような否定的な意見が出せる状態でなく消極的に賛成に回った。

残る幸村と勝手に外されてしまった綾小路も肯くしかなかった。

「決まりだね。それじゃCからも一人抜けて貰つて——まずは種目を決めよう。どうせだから時間一杯まで遊べる奴がいいな」

これには真鍋が抜けることになった。

奇しくもこうして結果3——裏切者を公平に決める為のゲームが開始されAクラスの森重が勝ち残った。

そして協定通りに皆が見ている前で堂々と優待者が一之瀬帆波であると綴り送信したのだった。

『兎グループの試験が終了いたしました。』

兎グループの方は以後試験へ参加する必要はありません。

他の生徒の邪魔をしないよう気をつけて行動してください』

試験終了の通知を確認し兎グループは完全解散となつて各々が部屋を出ていく中で最後になつた一之瀬はスカートの右ポケットから端末を取り出した——送信者に綾小路と表示され「話がしたい」とシンプルなメッセージと場所と時間が記されていた。

「話なら別に今どこでもいいでしょ——綾小路くん」

一之瀬は半開きのドアに向かって言うのとドアは静かに開いていき綾小路が現れた。

「バレてたか」

「それ、ホントは私の台詞でしょ。んー、でもやっぱり？^{そっ}クラスの台詞かな？」

「まあ、そうかもな」

得意げに笑みを浮かべる一之瀬に綾小路は嘆息しながらも感心した様子で肯定する。

「それじゃ、答え合わせってことでいい」

「ああ、それとやっぱり出来るなら場所を変えないか——余り聞かれたくない話もある」

「ふくん、それは楽しみだね。」

「うん、いいよ。でもあんまり一緒だと坂柳さんに悪いから——」

「それについても大丈夫だ——寧ろオレにとってはそつちがメインだ」

「へえ、それは益々楽しみだね」

一之瀬なりに気を使つたつもりだったが、それを大丈夫と言うのに予想外の興味を感じて一層笑みを深くする。

綾小路をして魅入られそうなほど——その姿は途方もなく魅力的だった。

名前が・・・

一之瀬と綾小路は船内の廊下を歩きながら会話を始める。

「これで兎は結果4、Aクラスは50のマイナスが確定だね。で本当の優待者は？クラス——オツケーでいいかな？」

「その通りだ——そっちも優待者の端末は猿の奴の物か？」

昨夜の早すぎる試験終了の顛末——予想は付いていただろうが裏切者は？、答えがイエスならばBは優待者を当てられたことになる。

情報確認の段階から既に火花が散りかねない言葉の応酬——どちらも終了したグループであるが、客観的にはBも50のマイナスを受け、？は計100のポイントを取得したことになる。

一之瀬は顔には出さなかったがその可能性の高さを悟ったようで、綾小路が先手を取った形になった。

「いや、この学校のルールってホント独特だよね——抜け穴有りが前提なんだから」

一之瀬は左ポケットから端末を出してメールを再び表示する。

「優待者選ばれた——その文言はあるけど、どのグループかは載ってない。メールの偽造や転送は駄目なのに肝心な所が抜けてる——星乃宮先生から端末の紛失した時のことか訊いたらあっさりと教えてくれたし、明らかに意図的だよね」

SIMカードのロックもポイントを支払えば可能——すなわち端末の入れ替えも出来る。

端末の交換は学校生活に限らず普段の生活でも行えるが、試験中と言う状況下で気付けるのか。

学校が謳う実力は本当に奥深く——逆に言えば意地が悪い。

「人に言えないようなことするのも黙認されている。尤も気付かれるような間抜けじゃ、そもそも話にならないだろうかな」

「私や葛城くんみたいなのタイプじゃ不利だよ。それをどうにか出来ないようなら実力が足りない……世知辛い現実の縮図か」

前置きはこれぐらいでいいとかと一之瀬は本題に入る。

「ちなみに？がゲームに勝ち残った場合はどうしてたの？」

「掛け金を釣り上げてもうひと勝負——ポーカーとかでワザと役を揃わない様に組んで確実に負けるようにするな」

「もし私が自分の端末を見せて違うって言ったら？」

「それに関しては信じてた——お前は絶対に何か考えている。信頼に見事に答えてくれた」

「心の籠ってない誉め言葉は要らない——それとも駄目だった可能性を考えられないほど愚かだつて私を失望させたいの？」

一之瀬は辛い言葉とは裏腹な温和なニュアンスと表情で綾小路を見る。

「お前と同じだ。実は軽井沢は嘘を付いていたと別の奴を優待者にしたてミスリード……お前なら気付いてると思うから言うが、その際には二重の保険を掛けていた」

「そのまま信じれば良し——誰かが出された端末に連絡入れたりして嘘が炙りされた瞬間に別の変わり身が暴かれれば誰もが真実だと思つて疑わない。ざつとこんな所かな？」

「大正解だ。やつぱり優秀だよ、一之瀬は——ちなみに前のも含めて一切偽りなく、これは本心だ」

「にやはははは、それは素直にありがとう。」

でも前回は全く歯が立たなかつた——これって？クラスには凄く不味いんじゃないの？」

負け惜しみとも悔しさとも違う——純然たる事実を把握したと確信させるひと言だつた。

綾小路は天井を仰ぎながら思った——その通りだ、そして一之瀬を選んだのは間違いじゃなかつたと。

「耳が痛いな——確かに？クラスは嬰兒の力を自分たちの力だと誤認している。しかもそれがもう易々と使えないことに気付いてるのは僅か、早く夢から醒めないと永久に？のままだろうな」

「でも綾小路くん、クラスの為に身を削る気なんてないでしょ。心配してるのは嬰兒くんの方かな？」

だったらさ、嬰兒くん私たちに頂戴——前にも使つてくれるなら歓迎したいなと言われたし——その時はそこまで深く考えなかつた

けど、今は違う」

「お前達なら仲間が不自由を強いられてるなら一緒に戦うか——嬰兒はそんなこと望んで無いつて言うと思うぞ」

「それでも——私はそう聴こえた。ううん、嬰兒くんの言葉を借りるなら聴きたいと思つたの」

綾小路の知らない所であつた遣り取り——他にもあつたり目を付けているのが居るかもしれない。

確かめる術はストレートに訊くぐらしかない……願いの為のハドルが上がつてしまい面倒臭いと思いつつも同時に面白いとも思い、未知なる予感に心がくすぐられる。

「残念ながらお前の願いに沿うことは出来ない——嬰兒の問題はオレが丸ごと片づける」

「……綾小路くんつて、嬰兒くんの何なの？」

余りにも自信満々に語る姿に一之瀬は訊いた——クラスよりも嬰兒に固執する理由に興味が出たのもあるが、自信の源が何処から来るのか単純に知りたかつた。

「相棒志願者かな——あいつの力があればオレの欲しいものが手に入る。ただそれを果たすには時間が掛かるし——その間に嬰兒にもメリットを用意して置きたいな。」

有栖と戦う時には全力で行かないと勝てないだろうし、あいつもそうなるのを望んでるから無碍する真似はしたくない」

「あー、結局坂柳さんか——御馳走様」

坂柳有栖が好戦的で、それ故に穩健派の葛城とは対立してAクラスが二つに割れているのは一之瀬も知つている。その状態を解消するために綾小路もそれとなく手を貸しているのは見たばかりだ。

先の結果からすると矛盾したように見えるが、坂柳が手心を加えられるのを良しとしないなら寧ろ本当に想い合つてるとすら言えよう。

？とAが戦えるようになるのはどんなに鼻屑目に見てもずっと先であり、その為に牛井嬰兒^{さいだいせいりよく}を手中にしたいのも理解できる。

(自信満々に見えてのも坂柳さんの為なら弱いところなんて欠片だつ

て見せたくないってことか)

一之瀬の中で納得のいく結論が出て、改めて自分に何を求めて来たのか——余り時間も掛けたくもないので次に進むことにした。

「それで——綾小路くんのメインって何なの？」

綾小路は制服から一枚の紙を取り出し、真剣な顔と声で切り出した。

「ここに？の残りの優待者と昨晚オレが建てた仮説——どのクラスの優待者がどのグループに居るかが書いてある」

「B^{こっ}クラスと合わせれば現実性が増す——まさか仲良く山分けしようとか言わないよね？」

ミスリードにおいて足並みをそろえたと言っても所詮はアドリブ——事前にしし合わせた訳でもなく信頼関係など全くない。その上、Bクラスは既に？クラスに優待者を当てられており現状はマイナスを食らっているのだ。

仮説を上乗せした程度では信じることなど出来ようはずもなく——増してや話を持って来た綾小路はこれ以上ないほど坂柳と繋がっている。自クラスを裏切ることではなくても他を罠に掛けるくらいはしても不思議ではない。

無論、綾小路とてそこまで虫のいい話を一之瀬が受けるとは思っていない——何よりメインには程遠い。

「いいや、これを渡すだけだ。勿論条件はある——まず、最初に約束して欲しい。？の優待者は当てにいかないよ——それとこれはこっちも同じ、今回の試験で？クラスは優待者の回答はしないことにした」

「試験を放棄するって訳じゃないよね？」

「ある意味それに近い——確率をどれだけ絞っても外したりリスクは計り知れないからな」

自虐的なニュアンスに綾小路が嬰兒にこだわる理由がまたひとつ見えた気がした。

「綾小路くん——よく何人かで一緒にいるよね。その人たちに協力はしないの」

「グループのみんなは信用してるが、嬰兒以外を頼りたいと思えない

な——今はまだ」

綾小路にとってグループは協力して戦おうとはなく、心を落ち着ける休息の場——各々は決して頼れないではないが、嬰兒と比較すると見劣りしてしまう……その力を独占したい身としてはクラスの体制が明確な形に定まるまでは関係を壊しかけないようなことを求める気にはなれなかった。

「ふうん。けどこれで優待者の法則を暴いて圧勝しちゃったら、今度こそ私たちがAクラス——坂柳さんだつて黙ってないんじゃない……いや、」

今回の試験は優待者も裏切者も匿名であり学校から確かめる術はない——先のように他クラスの目の前で裏切りをするなんて行爲をする事象など普通はありえない。

最終的な結果だけ見据えれば全ては一之瀬の仕業とされ綾小路に疑いの目は向かず、Cクラスは後退して?となり全クラス的位置が変わる。

「協力したのを黙ってるのが条件かな?こつちに火中の栗を拾わせて利益だけ得ようとするはちよつと虫が良すぎない?」

遠回しにもつと何かを寄こせと吹っ掛ける。

「?は優待者当てしないが揺さぶりや疑いをかけて、より確実にするようにサポートするよう手を回す準備は出来ている。

何より口止めなんて要求するつもりはない——ここからがメインだ」

綾小路は一度言葉を切り、一之瀬も息を吞んで要求を待つ。

「この旅行が終わつて学校に戻つたら嬰兒とデートして貰いたい」
「……………へ?」

内容が内容だけに理解するのに時間が掛かるが、構わず綾小路は続ける。

「ちなみにこれにはオレと有栖も一緒——つまりはダブルデートだな。

受けてくれるならこれは渡すし、日取りも含めて後日また話を——

「ちよ、ちよ、ちよ、ちよと待つて！勝手に話進めないで……そもそもどうしてそんな条件に——クラスとは全然関係ないじゃん………これって綾小路くん個人のもでしょ、そんなんでこんな大事なこと進めちゃっていいの？」

「なんだ、嫌なのか？」

綾小路は心底残念な顔で言った——対して一之瀬は力一杯に突っ込んだ。

「そうじゃないでしょ！」

勢いで大声を出した為に流石に周りから注目が集まり、笑って誤魔化しながら改めて声を小さくして訊いた。

「何処をどうしてそう言う話に行き着くのかな——是非に聞かせてくれない」

「嬰兒はこれから更なる不自由を強いられる——いやもう強いられてるかも知れないか。兎に角、気晴らしに何かしてやりたくてな」

嬰兒が一之瀬に好意があると言うのは綾小路の意趣返しでクラスには知られており、その辺りは納得されたものの——Bの利益の為に全面協力するのは消極的な意見も出た。

しかし平田や幸村も今の？クラスでは例え三分の一でも優待者の中させるとは困難——リスクを取らずにCに上がり、先々のことを見据えて嬰兒のモチベーションを上げる為には必要だと説得してどうにか承諾を得た。

「それが私とデート……軽井沢さんが怒るんじゃない？」

「あいつは平田の彼女だ。文句を言う筋合いなんてないだろう」

ど真ん中の正論——流石に冗談でないで一之瀬もあたふたし始める。

「意外だな——この手の申し込みや経験は一之瀬なら引く手数多だと思ってたんだが」

「いや、申し込みとかはあったけど……困ったやつとか……」

綾小路の素直な感想に歯切れの悪い返答——その姿と言葉から全て断ってきたか、或いは高根の花すぎて逆に声がかからず、あつても一之瀬を困らせる——佐倉に付き纏っていたストーリーカーみたいなの

かとか——浅はかな発言だったと反省する。

「済まない——有栖や嬰兒が喜んでくれるかばかりで一之瀬の気持ちに配慮が足りなかった」

「ああ、別にそこところは気にしなくていいから——それに別にそこまで嫌って訳でも……」

一之瀬はもじもじとしながらも深呼吸して、やがていつも通りの笑顔で言った。

「うん、分かった。ダブルデート、受けるよ——でもその際に嬰兒くん取っちやつても文句なしだよ」

「決まりだな——諸々の話はオレから通しておく。日にちに関しては最終日に話そう」

話が纏まったことで綾小路は用紙を渡す。

「了解。それじゃ私も戻るから——神崎くんたちと打ち合わせしないといけないし」

「期待してる」

一之瀬が手を振って去って行き、綾小路はデッキに出て電話を掛けた。

『そういう訳で一之瀬とデートして貰うことになった』

何がそういう訳なんだ。なんで本人に相談もなくそんなことを決めてんだよ——今日は中々にいい気分だったのに突然の通達で一辺に吹き飛んだぞ。

『ああ、これにはオレと有栖も一緒だからお前の望み通りになるようにフオローも考えてある——クラスが負けない為にもここはひとつ頼んだ』

クラスの協力にかこつけて坂柳と話したいと言う俺の望みを叶えるのに繋げる——相変わらず抜け目ないと言いたいが、ちよつと遅かったな。

「と言つとるが、お前は どうする——坂柳？」

俺は向かいに座っている坂柳に話を振る——ちなみに今俺たちが居るのはケヤキモールにあるカフェで端末はテーブルにはスピーカーモードにして置いていたので会話は全て彼女も聞いていた。

「勿論構いませんよ。清隆くんとのデート、とても楽しみです。一之瀬さんとも一度じっくりとお話してみたかったですし」

笑顔で了承してくれる姿は一見天使のようだが——何故か俺には全く別なものに見えた。

『……………なんで有栖が？』

「偶々だよ——なんて訳じゃなく、今面倒臭い状況でな。虫よけになつて貰つてるんだ」

ざっくりと説明したが納得はしないだろうな——ここで「オレの女に手を出すな！」とか怒鳴ったら彼女持ちの奴とかからは接触はなくなるかな。

『困つてることがあるならオレが力になるぞ』

いつもと同じ淡々としたニュアンスだが——電話の向こうではどんな顔してるのか？

本当ならこの状況——坂柳との話し合いの機会は綾小路の手によつて成される筈でそれを焦らしながら値を釣り上げてたのに一気にペアになつちまった。

さぞかし心がかき乱されるだろう——少しでも取り返そうとしてくる辺りは健気だとも思つてやればいいのか……。

「詳しいことは帰ってから話そう。それとデートの件は了承した——ただ予定に関しては少し待つて貰うことになる」

『——分かった。じゃあ、また』

通話が切れた。

しつこく聞くのは俺に悪い印象しか与えないと判断したか。なんとも冷静だな——向かいに座つてニコニコしている幼馴染共々に。

「安心して下さい。清隆くんには私からもよく訳を話しておきますから」

それは助かるが、俺に言いたいのはそんなことじゃないだろうに——綾小路から電話を受けてから、言葉や態度とは裏腹なプレッシャー

を感じるぞ。

しかし、この言ってることと思ってることがチグハグなところ——誰かさんによく似てるな。

「含むところも主観もなく、字義通りに頼むよ——余計な騒動は沢山だからな」

「……どの口が言うんですか?」

おお、一気に笑みが消えて呆れ顔になった。

「そもそもあなたがここに居るのだから余計なことをしたからでは?」

と、こう言っただけだったのでしよう——何が訊きたかったんですか?」

「へえ、なんとも話が早いね——何も答えてくれないんじゃないか、まずは知るところからとか思ってたんだがな」

しかしそれを鵜呑みにすることは出来ない——相手は理事長の娘、俺を監視するとは言わないまでも不利に仕向けるぐらいのことはしても不思議じゃない。

「常に何かを警戒されている——噂になっている特例の件と言い、本当に奇妙なお方ですね」

話を切り出さない俺に対して和やかに接しようとしてくれるが、味方であることは100%ありえない。

さて、どうするか……最初から綾小路を引き合いに出すと何処で地雷や逆鱗を踏むか分からないし、当たり障りのない世間話や身の上話も出だしから潰されてしまった。

単刀直入に訊いてくるのをお望みだが、話していい線引きが掴めない——下手に言質を与えてしまったら取り返しがつかないからな。

ならば——

「もしもひとつだけ願いが叶おうとしたら何を願う?」

色々な意味を含めて問うてみたが、言ったと同時にキョトンとした顔になって思案し始めた——なんとも予想外で、どうかしたのか?と更に訊きたくなってしまった。

時間に見れば五秒も経ってないのに偉く長く感じる間にやっぱり訊いてみようかと迷っていると、凄く嬉しそうな顔を向けてきた

——うくん、訳が分からない。

「その願いなら既に叶いました——そして改めてお久しぶりです。入学式の日以来ですね、牛井嬰兒くん」

「覚えていた……いや、俺のこと気付いていたのか」

なんだ。記憶を想起してただけか——しかし坂柳の願いつて結局なんなんだろうな。

「ええ、今思い出しました——そして、ありがとうございます。貴方のその言葉が無ければ、私の願いがこうも早く叶うことはなかったでしょう」

「話がさっぱり分からないが——なんであれ、どういたしまして。

それで今のフレーズを聞いて思い当たるのは無いかな？」

「貴方の言葉をそのまま返します——さっぱり分かりません」

あ、坂柳から笑みが消えた。

「貴方が何かしら特異な方であるのは解り切ってます——今日、話しかけたのもそれが何なのかを知りたかったからです。

どうやら貴方は私の父のことも御存知で、その警戒心も娘だから来てるようですが、お父様はそのようなエゴ最頂をする人ではありませんん。

だからこそ改めて訊きます——貴方は何を訊きたいんですか？
ちやんと言つて貰わないと答えようがありませんよ」

誤解を解く為か自分の立場を明確に一気に説明——そして真面目な顔で問い返してきた。

——ここまで誠意を見せたならば、こつちもこれ以上は失礼にあたるか
——もしこれが計算ずくだったとしてもな。

「君は救国の英雄を知っているか？」

「現代の英雄と謳われる女性ですよね——数々の戦争を和平に導き、この時代において彼女よりも多くの人間を救っている者はいないとされる平和主義者の戦士」

「ああ、隔絶した力を持ちながらもそれを使わず言葉の力で争いを止めたい——みんなが仲良くしたいって言う綺麗事を貫き通す——正に聖人だ」

「なるほど。あなたもそちら側の——でも解せませんね。

特例による外出許可——社会奉仕がそう言うことだとしてもこの学校とは相性が最悪のはず、何か悪いことでもしたんですか?」

長期休みが戦場に送られると解釈したか。

「俺じゃなくて生みの親と呼ぶべき奴らがな。俺はその後始末の一環——体裁を整える為にいるだけさ」

「やっぱり、よく解りませんね——彼女と連絡を取る手段を探しているのですか?」

そして『申』が死んだことも知らない——どうやら本当に知らないと見ていいようだな。

「残念ながら既に落命してるよ——最近行われた大きな戦争でな」

「大きな戦争——それも最近に——全くもって聞いたことがありませんね」

思案しながらも確信的なニュアンス——国に関わってる一家の娘だ。その自分が知らないのが答え——つて結論に達すれば俺の言いたいことも見えてくるはず。

……ただ、これも知らないなら期待外れ。

パツと思いつく次の手段は彼女の父である理事長に訊いてみるしかない——このことで綾小路に借りを作ることになるのは些か本意とは言えないから外れて欲しくないものだ。

「あの——そんな風に見つめられてしまうと、物凄く困ってしまうんですが」

それはすまん——しかし俺はお前の答えを待つしかないんだ。

そんな気持ちを込めてジツと待つ俺——傍から見てるは勿論、直接向けられた坂柳にはさぞ気分の良いものじゃないのは理解できる。

「はあ」

溜息を付いた坂柳は呆れた目のままで待つていた答えを言った。

「噂——と言うか名前だけしか聞いたことがありませんが、十二年に一度——大きな催しがあると——確か、その名の通り『十二大戦』と」

それは正に俺の望んだ答えだった——やつとまともに話が出るな。

「それだけ聴ければ十分だ——ちなみにさっきの質問は優勝賞品だったりもする」

「……その様なことを私に教えても？」

「興味を覚えて参加資格を得ようとするなら、それはそれで面白そうだしな」

一般人だろうが大統領だろうが王様だろうが、知ったところでどうなるものでもない——本来はそうなる筈なんだがなあ。

それにどうにかなることの出来る立場にあるなら——寧ろそれが本当に訊きたい事だったりもするしな。

「残念ながら、そのご期待には沿えませんね。」

私ごときの家柄——ましてやこんなひ弱な小娘には生涯縁のない世界での出来事ではありません」

「謙遜することはなからう。国家運営の施設を任せれるんだ——何より俺がここに通うことになったのだから、ここなら大丈夫って信用があるからじゃないか」

「だとしてもそれはお父様——ひいてはお爺様たちが築いてきた実績です」

少なくともこの学校は二世代前ぐらいからか——時期的には十回目ぐらいの願いかな？

「それでもこの学校の設備やシステム——認可を取るのは物凄く大変だったんじゃないか？」

「そうでしょうけど、私のような若輩の小娘では詳しくは——父の跡を継ぐかどうかもまだ決めてませんですし」

おいおい、いきなり話を切ろうとしないでくれよ——そっちはもう訊きたいこと聴けていいかも知れないけど、こっちはまだ全然なんだから。

「そうか。なら君のお父さんに話ができるように綾小路に手を貸して貰おうかな」

「ホント、分かり易いほどに一瞬で余裕がなくなったな——どこまで大好きなんだかね。」

「そうですか——清隆くんが執着してるのは貴方ですか。確かに色々謎が解けますね——清隆くんほど凄い方が負けるなんて、かの大戦に連なる方なら肯けます」

それでいながら明確な敵意を感じる——こうしていると、やはり平和主義者の大親友みたいだな。

「……なにか可笑しなこと言いましたか？」

指摘されて初めて笑みを浮かべてたのに気付いた——なんかもう、これだけで俺の目的も果たされたとも言ってもいいかな。

「いやいや、すまん。彼女の大親友——いや戦友みたいだなんて思ってたな」

「彼女の戦友——平和主義者であつても戦士、敵かたきならまだ分かりますが」

「それも間違つてはない——出逢う戦場が違えば殺し合いになるのが普通だからな」

陽気な声で言う俺に坂柳は何とも言えない顔だ——平和な日本ではなら比喻表現による遣り取りだろうが、俺が言ってるのは比喻でも何でもない字義通りの意味だからな——事情を知ってる奴からすれば、こんな風に話す俺はさぞかし奇妙に見えることだろう。

ただどんなに奇妙でも坂柳は俺の言うことを正しく理解してくれている——相手にちゃんと話が通じてると分かるのは、とても胸がすく。

「昨日の敵は今日の友なんていいいますが、そんなに簡単に折り合いが付くものなのですか？」

「そこら辺はケースバイケースとしか言えないな。」

ただ、あの二人に関して言えば最早ぶっ飛んでるとしか言えないな——何せお互いに二十回以上、相手を裏切っておきながらも戦場でなければ平然とカフェで寛ぐような間柄だからな

「……………」

あー、完全に言葉が出ないか。まあ、それはいい——俺が本当に訊いて欲しい話はここからだし。

「ちなみにその戦友さんは、連綿と続く戦士の一族でありながら由緒

正しきお嬢様でもあつてな。

願いが叶うなら「歴史ある名家の淑女として——」

坂柳の目に期待した風になったので一度言葉を切る——余り焦らし過ぎると怒られそうだから、少し力を籠めるように振る舞う。う。

「三十五億人のイケメンと愛し愛され暮らす」そんなハーレムが欲しいそうだ」

おお、どうやら見事に期待を超えたようだ——比喻ではなく開いた口が塞がらなくなつてる。

「……………一体どのあたりが私に似ているのですか？説明していただけませんか？」

「大好きな戦友の為なら——彼女が生きていてくれるなら、そんな我欲なんて躊躇なく捨てられるところとかかな。

そういう意味では本当の願いは「彼女は自分だけを見ていればいい」って風な感じかな」

結局のところ『亥』どんな愛が欲しかったのかねえ——口で何と言おうが『申』が大好きなのは今更だし、『申』からすればそんな重たい愛はちよつと困つてただらうな——それでも平和もくてきの為なら利用するんだから強かだよな。

なんとなくだが、やつぱり似てるわ。目の前に座つて顔を赤くしてゐる彼女とその幼馴染君は。

「私は別に……………そこまでは……………」

照れてる姿は何とも——と言うか初めて可愛らしいと思える姿だ。しかし目の保養がしたくてこんな話をしてるんじゃない。

彼女に訊くことはもうないから、言うべきことはここで全部言っておきたい。

「詳しい経緯は知らないが、あいつ……………綾小路は何かに怯えてる——君は知ってるんじゃないか？」

「ええ——ですがそれは私の口からお話しすることは出来ません」

無理もないって顔だな——彼女だけが一方的に知ってるだけの関係つて言つてたが、どんな過去なのやら。

「構わない。俺がどうこう出来る問題じゃないし、力を貸す気もないからな」

「筋違いじゃないとは言え冷たいですね——なんだかいつぞやの季節外れの雪を思い出します」

「済まんな——故意じゃなかったとは言え、迷惑をかけた」

ようやく言えた。

言うと同時に頭を下げた俺に坂柳はまた言葉に詰まったようだ——十二大戦も名前だけだっけって言ってたし異能に付いても噂レベルでカマかけたのか？

ともあれ俺が認めたことで、相応の得心はあっただろう——それになんだか怒ってもないようだし……。

「……それは私ではなく清隆くんに言うべきでは？彼は間違いなく注目など求めてなかった筈ですから」

俺は頭を上げて坂柳の言葉に首を横に振る。

「それで話が終わるなら俺もそうするが——そうもいかなくてな。

迷惑料だの慰謝料だので、何を要求されるか分からんからな——俺自身は責任取る分には構わないんだが」

「それを許して貰えない——その事情も話せない。

清隆くんが求めていることはそう言うことですか——厄介ですね」
そうなんだよなあ——だから何とか諦めて貰いたい——その為にも、

「だからさ、綾小路と結婚してくれないか」

「……………ど、どうすれば、そんな話に行き着くのですか？」
妙に間があつたな——つつかえてたし——どうにもからかいたくなってしまうがここは我慢だ。

「いや、綾小路の心が完全に君に行けば、俺のことなんか入る余地もないと思つてな」

「そんなふざけた理由で人の一生を勝手に決めないでくれますか」

尤もな言い分だけにキツイね——でも怒つてるとも違うニュアンスに聞こえる。

つまりは、ふざけてなきやいいとも取れちゃうな。

「生側ずつとにいてくれる娘が居れば、あいつはもつと強くなれる——なにより坂柳なら一緒に戦える実力も覚悟も申し分ないんじゃないか」

「……………」
結構真面目に言ってみたら、さつき以上に顔を赤くして再び何も言えない様子——出来るならもつと見ていたいが、それは流石に悪いだろうな。

俺は伝票を取って立ち上がり——赤い顔したままの坂柳に繰り返す。

「今の君を見たら、綾小路はもつと強くなれる——じゃなきや格好悪い、そんな男じゃあるまい」

「な、なにを——」

やっと口を開いた坂柳だが、俺の言いたい事は済んだのでとつと退散しよう。

「愚痴はダブルデートの時にでも聴くから、また今度な」

もう何度目か——坂柳の口を塞ぎ、オレは会計を済ませ寮に帰った。

ご主人様が・・・

試験のインターバルを迎える日、約束通り綾小路は平田と一緒に軽井沢に謝りに行くつもりだった——そして迎えた朝になって船旅初日以上の不機嫌に延期を提案され、それを無用と突っぱねていた。「あのさ……やっぱりもう少し気持ちを落ち着けからの方が……はつきり言って今の綾小路くん怖いよ」

「オレは十分冷静だ——軽井沢には早く話を通すべきだろう」

まさに取り付く島もない状態——普段は気の抜けたような目をして感情の起伏が乏しい綾小路清隆がここまで機嫌が悪くなる理由はひとつ——坂柳有栖と何か（それも悪い意味であった）しか考えられない。

平田は少し離れて見ている幸村に事情説明を求めると「昨日、電話したら何故だか、嬰兒と一緒にお茶してたそうだ」と既に撃ち込まれていた端末を見せられ——余りの用意のよさにフオロ―は期待できないと悟った。

「やっぱり帰ってからにしないかな——軽井沢さん、完全に守られてもう心配ないし、結果的には50万も手に入るんだから、そこまで急がなくても——」

「平田。機嫌が悪くないなら、尚更今の内に済ませてた方がいいに決まってるだろう」

正論を返されてしまい流石に何も言えなくなってしまう——確かに学校に戻っても綾小路の機嫌がすぐに直るとは限らない。

寧ろ軽井沢の機嫌まで悪化してしまう可能性も大いにあり、そんな状態で対面ともなったなら………考えたくない展開が容易に頭に浮かんでしまい平田の顔も渋くなる。

あの人当たりの良い櫛田とも喧嘩した綾小路——聞く限りは櫛田に非があるようだが、未だに仲直りが出来てないあたり、坂柳とのことはそれだけ弄られたくないと言うこと。

時間が立てば頭も冷えるだろうが、それで解決かは話が別だ——ならばいっそ軽井沢かたほうの気が良い時に全て済ませた方が結果的には面倒

は少なくなる。

ならばそのまま流れに任せ、好機を見出したなら……。

「はあく……そうだね。それじゃ、今から連絡するから少しだけ待ってて」

平田は考えを纏めて消極的仕草で端末を取り出して軽井沢に連絡——すぐに通話は終わり向き直り言った。

「オツケーだって。待ってるそうだから、行こうか」

「ああ」

綾小路は肯いて立ち上がり、二人は部屋を出た——部屋に残って見送った者たちは何もなことを祈るばかりだった。

待ち合わせ場所である地下二階の休憩コーナーの自販機の前では既に軽井沢が待っており、ソファで端末をいじっていたが平田と綾小路が来たのを見て立ち上がり手を振ってきた。

「ごめん、待たせちゃったかな？」

「ううん、全然——って言うか、もう試験も終わって暇だったし」

二人の様子は待たせてしまった格好が付かない彼氏の弁明と気遣いを無駄にしない様にする彼女のたわい無いやり取り——とは何故だか綾小路には映らなかつた。

（いつまで経っても他人行儀にしか見えない——ピュアな関係を平田が求めているのか。それとも軽井沢が遊び感覚なのか？）

お互いに本気でないなら、軽井沢が嬰兒の気を引こうとするのを平田が気に留めないのも肯ける——そんなお義理で付き合うことを平田洋介と言う男が了承するのか？

平和主義者でお人好しの印象だが、基本は真面目で自分の意見もしっかりと持っている——女子の見栄を張るのに協力するのはどうにもしつくりこない。

（でも好き合ってるようには見えないんだよな）

綾小路が冷めた目で観察してるのに構わず平田は話を続ける。

「軽井沢さんが優待者だって教えて、信頼を裏切ってしまった。これ

には誠心誠意、謝罪します」

「……それはもう別にいいって、あたしだって考えて納得した上でのことだし」

頭を下げる平田に対して軽井沢は目を逸らしながら素っ気なく返す——これに綾小路は思ったままの感想を言った。

「お前ら本当に付き合ってるのか？」

「ああ、やっぱり本当に好きな人がいると分かっちゃうかな」

「ちよつと、平田くん!？」

綾小路の疑問に平田はあつさり肯定——取り乱す軽井沢に目を向けながらさらに続ける。

「これ以上、隠すのは無理だよ。軽井沢さんの気持ちに幼児くんに向いてるのは見る人が見れば分かる——当然、綾小路くんにもね。偽ることはデメリットでしかない——少なくとも幼児くんには誠意を見せないの良い結果にならないよ」

「な、なんでそんなこと分かるのよ!？」

軽井沢は誠意を見せる部分に強く反応したのを綾小路は見逃さなかった——平田が言う誠意を見せるは包み隠さずに全てを話すことなのは間違いない。

軽井沢も幼児の信用を得たいなら当然の帰結である筈——にも関わらず強い忌避のような反応を見せたのは、それだけ知られたくないことだと言うのは想像が付いた。

(一体、何を隠してるって言うんだ?)

綾小路は思案する——当初は男をアクセサリーとしか見ておらず、クラスの中で一番と言える優良株でありリーダー格である平田を強引に押し切って彼氏にしたと思っていた。

だが今のやり取りからして平田もある程度でない納得した形で軽井沢に合わせている——平和主義者たる平田が時に傲慢を見せ加害者の如き振る舞う軽井沢を受け入れる訳、そして平田以上の凄さを見せた幼児に擦り寄ろうとしている。

(導き出されるのはより強い存在への依存——我が身を守る後ろ盾が欲しいのか)

しかし、これだけでは軽井沢だけで平田のメリットが見当たらない。

疑問に対する答えが見つからず、無言のまま事の成り行きを見てみると軽井沢の相手をしながらも綾小路に気を配っていた平田は何かを悟ったように語り始めた。

「嬰兒くんはただ凄い生徒じゃない——異常な背景を持つヤバイ生徒だよ。」

強引に学校に戻されたのは、前の試験で誰もが目に留まる行動を取ったから」

「え……いや、だって……大きにしない為だって先生が言ってたじゃん」

「そんなの建前だよ。もしそれが本当だとしたら話が早く済み過ぎて——まず間違いなく、騒ぎが起きなくても嬰兒くんは連れ戻された——来た時同様、いやそれ以上の船酔いを患った。この辺が無難かになってのが、竜グループで初日に上がった話題だった」

平田は思い出す——試験初日、竜グループ一回目の話し合い。

試験開始のアナウンスの後、スムーズでないも各々の自己紹介を済ませて直ぐに龍園が切り出した。

「もし牛野郎が試験に参加してたなら、？は誰が他所に行ってたか」
面白そうに？のメンバーを値踏みしていく姿に堀北が透かさずに言い返した。

「それは嬰兒くんが居たなら、前同様に尻尾を巻いて逃げ出さなきゃいけないからかしら？」

龍園の挑発を更なる挑発で返す。

「ほ、堀北さん——」

平田が冷や汗を浮かべながら仲裁に入ろうとするが、
「うくん、やっぱり私かな。実力的に考えると一番下だろうし」

榎田が柔らかな口調でお茶を濁して一触即発は回避された——に見えた。

「本当にそう思っているなら、おめでたい限りだな」

「同感だな——これじゃ宝の持ち腐れにしかない」

葛城が偉そうに言い、神崎も続いてぶり返した——双方ともに前回、嬰兒に痛い目にあわされた者同士であるからか息が合い、まただからこそ実力が十分に発揮できない環境を惜しく思ってもいた。

「ハッ、テメエら如きに使いこなせるタマとも思えねえがな——なんなら俺が買ってやろうか？」

龍園がより傲慢に言い放ち、火に油が注がれる状態になった。

「初っ端から言いたい放題ね——でも残念だけど嬰兒くんがあなたに従うなんて思えないわね。」

犯罪紛いなことをするのも黙認するのも彼の親御さんの言葉に反するわ——寧ろ、その腐った根性を矯正しようと呼きのめされるのがオチじゃないかしら」

「……堀北さん、嬰兒くんの親知ってるの？」

櫛田が興味津々に訊いてくる——それは集まっている全員でもあり注目が集まる。

「ちよつと小耳に挟んだだけよ……典型的な強者の理屈だったけど、嬰兒くんには丁度いいとも思ったわ」

実際はただ立ち聞きした話であるが、嘘はついておらず己の見解を交えることで話を切った。

「そっかあ。でも嬰兒くんだって追い詰められたらタガが外れちゃうかもしれない——そつとしいて上げるのが一番じゃないかなあ」

「櫛田さん、それはちよつと……本人が望んでるならまだしも」

「平田の言う通りだな——牛井は望んで大人しくしたい訳じゃない。何かしらの圧力で我慢しなければならぬだけだろう」

「無人島では病欠になったクラスメイトの為って言い訳が出来た。だから積極的な行動も出来た——それでも調子に乗ったと判断されたから連れ戻されたと考えるのが自然だ」

再び葛城と神崎が息を合わせるように嬰兒に対する考察を披露した。

それは嬰兒の無人島での振る舞いからして正しく、披露した実力は学生レベルではない。

そして、間もなくして強制連行と特例的処置……もはや能力的だけでなく背景的事情も普通の学生などでは断じてない。

「要するに嬰兒くんには責任を取ってくれる者が必要ってことでしょ——なら結構な事、訳の分からないのに好き勝手振り回される心配がなく、本人も実力を発揮するのに誰かに従ったってお題目が必要なら正に理想的な関係だわ」

堀北の既に自分の物を自慢するような物言いに平田と櫛田は不安顔——他クラスは疑念をそして唯一、龍園が笑いながら言った。

「野郎を活かせればだがな——立てるべき主役が単なるお飾りで満足するタマじゃねえだろ。逆に見る目がねえって責められるだけじゃねえのか——牛野郎の飼い主に」

「そう考えるとあれ程の実力を以て？クラスなのも〃余計なことをせずに大人しくしている〃」と言うことなのかも知れんな」

龍園の言葉を切っ掛けに葛城が嬰兒の背景に付いて考察し始め話し合いに熱が入っていく。試験とは全く関係は無いが……。

「だからこそ主役を立てる脇役に徹するか——B^{うちの}クラスにこそ欲しい逸材だ」

「なんだ、一之瀬に色仕掛けでもさせるのか——まあ、あいつじゃその辺がお似合いだがな」

神崎が睨むがそれ以上は言えない——前回では攻勢に出るも成果はまんまと水泡に帰し、リーダー格が集まるこのグループに参加していない。

責任を取らされたと見られるのが妥当であり、詳細は神崎も知らず反論しても無意味どころか逆に恥の上塗りになりかねない。

龍園はその姿を見ながら愉しそうに今度は葛城に言った。

「おめえの場合は正攻法で雇おうってところだろうが、役不足もいないだろうから、やっぱりこの俺が使ってやるのが牛野郎の為だと思っとうがどうよ？」

最後に？クラスの面々に顔を向けると反論が来る。

「嬰兒くんの為なのかは甚だ疑問だよ。目に余るやり方をして、それ

がバレたら彼は何をされるのか分からない——そのリスクを考えられないような男じゃない」

「平田くんの言う通りね——それとも過激な方法に見合うメリットでも用意できるのかしら？」

堀北の更なる挑発に龍園はせせら笑いながら言った。

「分かってねえのはお前らだよ。少し前の話になるが、俺の手下が罠にかかったらどうするって問答したら——牛野郎は殺人も厭わないうって答えたんだと」

これには堀北と平田も流石に絶句したが、榎田だけは神妙な顔で手を胸に当て何かを考えていた。

「くくく——どうやら心当たりがあるみてえだな。榎田」

「ありえないわ——言ったとしても単なる脅しでしょう」

堀北が透かさず否定するが榎田は重い雰囲気醸し出して口を開く。

「堀北さん、これで二度目だけど嬰兒くんも追い詰められたら何するかは分からない。

龍園くんも嬰兒くんが踊りたいと思う手拍子じゃなきゃ、返り討ちだよ——その覚悟あるの？」

言い切った榎田に巻き込まれるように部屋全体が重い空気に包まれた。

そんな中で榎田は思案する。

(でも逆に言えば追い詰めなきゃ、そんな手段はとらない。バレないようにするにしてもリスクは半端ないし——何よりさっきの親の言葉が嬰兒には心地いい手拍子なら)

犯罪——それも殺人を実行する可能性は皆無と言えるかも知れない。

春先での向けられた渴いた殺意と恐怖は本物だった。

だがそれは嬰兒にとって面白く無い手拍子で追い詰めようとしたから——つまりは嬰兒に課せられた制約、それを破った際の罰則は犯罪を実行させてしまうほどのもの。

(具体的に思いつく条件は退学すること——つまりそれに結びつくこ

とが無ければ……)

「来る時も船酔いって名目でどっかに行つちやっただけど素直に従つてたみたいだし、帰りも多分、それっぽいことで戻されちゃう予定だったんじゃない……やっぱり、そつとしておいた方が一番良いと思うな」

無難な結論を口にして見たが、納得する者など居なかった。

「余計酷い船酔いになったから、もう外には出さねえって持つてかれるってか。」

だとしたら尚更、反骨精神満々になるんじゃないやねえか——益々、おめえら？クラスには勿体ねえぜ」

龍園が下品な笑いと共に言うと言つた。龍園は溜息をひとつ付いた。

「そっか——でも嬰兒くんの威力、侮ると火傷じゃすまないから気を付けてね」

この忠告は龍園一人に向けた物のようには感じず、奇妙な説得力がありありと伝わって来た。

しかし龍園はそれ以上を話すつもりはないと口を閉ざし、決定的な情報が得られない議論に実りはないと牛井嬰兒の話は終わった。

話を終えて平田は呆けている軽井沢と、いつも通りの冷めた目でありながらもしつかりと聴いている綾小路の反応を窺う。

「平田——その嬰兒と話したって言うCの生徒って誰だか分かるか？」

「ごめん。そこまでは聞き出せなかった——龍園くんも隠す気は無いと思うから、次にそれとなく聞いてみるよ」

綾小路と平田が話を進めていき、軽井沢もハツとしながら口を挟んでくる。

「ちよ、ちよつとみんなして嬰兒くんを盗つちやう相談してんでしょ？なのにそんな呑気でいいの、大ピンチじゃん！」

「軽井沢——決めるのは嬰兒だ。」

「もしも他クラスに行くにしても本人の承諾が必要なんだ——嬰兒が他に魅力を感じてしまつたら引き留める術なんて無いんだよ」

理路整然と語る綾小路の姿は無性に腹が立ち、軽井沢の顔に不満が現れる——それを見て平田は優しく言った。

「軽井沢さん。僕たちはそうならない為にはクラスが向上していくしかない」と結論になったんだ。

これは僕たちの関係を正常にする意味でもそうだし、お互いに願うものにも利になると判断した——だから改めて協力してくれないかな」

「……ごめん。もうちよつと分かるように言ってくれない」

軽井沢としては例え嬰兒が？の主役になれなくても他に盗られるなど論外だ。

繋ぎ止める為ならなんでもする覚悟もある——しかしそれが平田との「本当の」関係を暴露することと今ひとつ繋がらない。

無論、誠意を見せるのに自身の本心を伝えるのは常道であるが、それを差し引いてもおいそれと話したくないのは平田も知っているはず。

それを踏まえれば秘密は秘密のままにして、嬰兒に近い関係を持つようにするのが上策——普段の平田らしくない態度に困惑してしまふ。

一方で綾小路は平田の狙いを見透かしていた。

（軽井沢の隠し事を共有させることで重荷を減らす——それを利用して平田の目的の為にオレと嬰兒を利用するつもりか）

軽井沢恵、牛井嬰兒、綾小路清隆の問題を一遍にまとめ、更に同じ方向に向かせることで、クラスに要を造り、皆を巻き込みながらの結束をとれば櫛田も賛同が見込める。

堀北にしてもAクラスを目指しているのなら、納得はしきれないまでも妥協を引き出せる可能性もある。

旅行初めに持ちかけられた相談、無人島での演説からして平田とて只の平和主義者でなく確固たる欲を持っている。

全てはクラスのために——更にそれをより良くしていくことが平田洋介の叶えたい願いのだろう。

（この通常ならありえない執着に起因する何かが、？クラスである理

由か)

綾小路は平田の動機を導き出すもどうにもまだしつくりこず、逆説的な考察を以て推測を展開する。

平和主義者でクラスの為に尽力する姿は好青年であるが、そこそが本来ならAクラスであろう生徒が最底辺の？クラスに配属された理由なのだとしたら……………。

(中学でクラスが学級崩壊でも起こしたのか？それに平田が深く関わっているのだとしたら——榎田と同様に猫を被っているだけで、昔は不良生徒だったとかか……………ダメだ、これもしつくりこない)

しかし現状ある情報ではここまでが限界であり、納得が出来る結論が出ない——かと言って直接聞くようなことすれば自分の過去を話す流れに持つていかれかねない。

完全に主導権を握られ平田の出方を見るしか選択肢がなかった。

「軽井沢さんには前にも話したよね——僕は中学二年までは目立たない何処にでもいる普通の生徒だった」

綾小路が知っている平田からいきなり掛け離れたイメージが語られ驚き、軽井沢は意図を測りかねて何も言えない。

「そんな僕には仲の良かった幼馴染の男の子がいた——だけど中学でクラスが分かれば付き合いが減っていつてしまった。

だからこそ何年も別れて再会して、別のクラスになっても互いを大事にしている綾小路くんと坂柳さんが僕にはとても眩しくて——羨ましかった」

別段、珍しくもない身の上話だが、綾小路と坂柳を眩しいと表現する部分に引つ掛かりを感じさせた。

「僕は幼馴染——杉村くんを見殺しにしてしまった。陰で虐められて……………助けを求められたのに、都合のいい言い訳を並べて……………」

平田が拳を強く握りしめ——軽井沢はそれを冷めた目で見ており、綾小路は二人の関係の核心に迫っていると感じ取った。

「その杉村って奴は……………もしかしてお前の前で？」

「それに近いかな——あの日の朝、最後に会って、でも関わりたくないつてよぎったのを見透かされて……………何も言わないまま、訴えか

けるように授業中に飛び降りた」

「飛び降りた……死んだのか？」

「脳死状態——御両親は今でも快復するのを信じてる。そしてこの時初めて気が付いた——我が身可愛さで友達を死に追いやってしまったって」

平田の献身の根幹——決して話したくは無いだろう過去を聞かされ、この閉鎖的な学校に来た理由と軽井沢の強者に対する依存の理由も見えてきた。

「だから目に留まる全員を救いたいか——それでいながら軽井沢を鼻負してるのは、その幼馴染と同じだからってことでもいいのか？」

「ちよ、ちよつとーなんでそうなるのよ!？」

軽井沢が否定的ニュアンスで声を上げるが……寧ろ逆効果であり、綾小路は確信を得た。

「論理的帰結だ。嬰兒の強さに擦り寄ろうとするのと今の平田の話とを合わせれば——猫被ってるだけの虐められっ子しか考えられない」「ち、違う！そんなんじゃない！あたしはただ嬰兒くんが、凄くてカッコいいから——」

「好きになつたとしても？それなら残念な知らせがある——嬰兒は夏休みに一之瀬とデートする予定だ」

「な、なんで……そのままBに行っちゃつたらどうするのよ!？」

（呆れるほど予想通りの反応だな——これなら堀北の方も期待を裏切らない、いい刺激になるか）

綾小路は内心を悟らせないまま冷たく言う。

「堀北は嬰兒だけを従わせればいいと思ってるからな——その考えを改めさせるためだ」

（まあ、それだけでも足りないだろうがな）

綾小路の中では更なる荒療治が必要だと思ってるが、現状で具体案はない——その為に嬰兒に固執している軽井沢は手元に置いておきたい駒だ。

「嬰兒が居なくなるかもしれない、見限られるかも知れない——そうなつたら」

危機感を煽ってくるニュアンスに軽井沢だけでなく、平田まで冷や汗が出て息を呑む。

「嬰兒だけじゃ駄目なんだ——まずはそれを分からせなきゃ始まらない。い。

これは嬰兒も考えていることだ。お前もその為に何か言われてる——そうだろうか？」

しかし嬰兒を引き合いに出されて瞬く間に霧散し、試験の助言を求めた電話で何度も言われた指示を思い出す。

「堀北さんをクラスのリーダーにつてこと？……なんか上手くいくイメージ湧かないんだけど」

堀北に協力しろと何度も指示された——堀北が自分よりも臍履されるのに忌避したのもあるが……軽井沢の知る堀北は個人としては優秀だが見下し精神満載で人を上手に使えるようには思えないのも指示に従えなかった理由のひとつでもあった。

この疑念に平田が軽井沢だけでなく綾小路も巻き込み、考えを述べた。

「今の堀北さんのままなら、そうだろうね。でも僕や君じやAクラスには積極的になれないし、それは綾小路くんも同様——クラスで最もAクラスになることを望んで、その才覚もある堀北さんが立つのが嬰兒くんにとって最も都合がいい体制なんだよ」

牛井嬰兒自らが先頭に立つことは不利益しかなく、誰か個人の願いに肩入れするのも学校側に良くない印象を持たれやはり何をされるか分からない——あくまで誰かの率いる下で学校の方針に従っているポーズがあれば言い訳が立ち、少なくとも罰せられることはなくなる。

「だからこの方針に沿って動くようにして貰えないかな——そうすれば無理に強気を張るのも少なくなる。誰にとつてもいい話なんだ」

平田の具体的な提案は綾小路と軽井沢に嬰兒メリットの力を強調しながら、彼自身が最も欲しがっている理想のクラスを売り込んでいる——そして、返答を待つことで手放した場の主導権をどう握るかを試している。

(出来ることには自信があると言い切っただけのことはあるな)

綾小路は評価をひとつ上げながら主導権を引き継ぐことにした。

「オレは有栖が喜んでくれるならそれでいい——そのついでにお前を虐めから守るよう嬰兒に口添えしてやる」

「だから、あたしはそんなじゃないっての！」

「深く詮索する気は無い——お前が腹に何を抱えてようがどうでもいいことだからな。」

ただ嬰兒の力を発揮させる意味において、お前のスタンスは決して悪くない。

アプローチの仕方は変えるべきだが、上手く嵌れば有栖と戦うのもずっと前倒せる」

「……………やっぱり分かんないよ。どうして好きな娘と戦うのが楽しいの？」

「全力を出そうとする時のあいつが一番可愛いからだ」

「……………」

綾小路の答えに言葉が出ない平田と軽井沢——それに構わず言葉は続く。

「全て出し切れば、今まで見たことない笑顔が見れる——そんな期待もあるな」

どこまでも坂柳有栖——言いようのない羨ましが軽井沢の胸を締めめる。

(あたしにもこんな風に想ってくれる人が居たら)

明後日の朝にはクラスの奴らも戻って来る——いやクラスだけじゃなく、一年全てにも外出特例はすぐに知れ渡ると見た方がいいか。

担任たちにはもう知られて……………つと言ってもこっちは今更か、奇異な事情がひとつ増えたところで雇われの身で何かして来るなら、

俺じゃなくて運営が始末する。

しようもないことを考えても仕方ない。それよりも今日はどうしようか？

下手に外に出たら、何処で誰に捕まるか分からん——匿って貰う所もないし、居留守でやり過ぎすべきか。

でも腹も減って来たし、昼飯は買い置きでかな。

あ、綾小路からメールだ——軽井沢と平田に協力を取り付けて、堀北をリーダーに立てることを了承させたね。

坂柳との対話が空振りになったから、早くも巻き返しを図ってきたか。

堀北をリーダーに平田と軽井沢が脇を固めて、取りこぼしや手の届き辛いのを俺と綾小路で埋めるのが理想的な在り方だ——綾小路にとつてな。

Aクラスを目指す学校のセオリーからすると立つべきは堀北が最適——と表向きの理屈はそうだが、最終的な責任の行き先を定めつつ、俺と近しいポジションを確保するか。

軽井沢に関してもやたら俺にアピールしてきてるし、今度の一之瀬とのデートの様子をあいっ好みに吹き込めば、吉にも凶にも出来る——軽井沢恵を俺の首輪にするつもりか？

おや、まだ続きがあるな。今やつてる試験で上手くいけば、新学期からCクラスに上がれるね——また堀北にリードする形になるが矛盾してるとは言えないのがもどかしいな。

一之瀬や軽井沢にしてもそうだが、綾小路の奴——堀北を叩きのめして、這い上がって来させることで、成長を促そうとしている。

俺の意を汲んだと見せながら冷酷に合理的に外堀を埋める——中々どうして流石だと言ってやればいいのか。

ただなあ——全くの勘なんだが、綾小路の思惑通りにならないんじゃないか。

根拠がある訳ではない——でも何か、見落としてるんじゃないか？
そう心の底で小さくすぶりがある。

綾小路はオープンになった俺の制約を早くも利用してきた……他

にも気付いた連中が様々な形で利用してくるはずだ。

俺を利用するなり、逆に封じ込めるの前提にして……もしこの前提を崩すなり、思いもよらない方向から仕掛けてくるようなのが居たら？

先に進める為に。

試験三日目、最終日の早朝——開始時刻どころかまだ日が出てない時間帯に一之瀬と神崎はテーブルに並べたBクラスの優待者の情報と綾小路から提供された？クラスの優待者、どのグループにどのクラスが振り分けられたかの仮説を記した用紙を照らし合わせていた。

「綾小路くんの仮説、見事に一致するねえ」

「ああ——牛井だけに目が行きそうだが、同じくらいに侮れない奴だ」
仮説ではBの優待者は牛、猿、犬であり、それぞれに『小林夢』『南方こずえ』『米須春斗』がそうであった。

？は軽井沢、櫛田、南が兎、竜、馬であり、全グループの半数が判明——仮説が補強されAとCの優待者を絞り込める条件が一気に整った。

「まずAは鼠、鳥、猪とあるが参加してる奴らに、それと関連付けられそうなのは見当たらないな」

神崎は名前やクラスメイトに聞いた話から、それぞれの動物に合うものはないと判断する。

「うん。でもメールには厳選な抽選って書いてたからランダムじゃない——必ず何か意図がある筈だよ」

一之瀬も肯定するも干支であることには必ず意味があると改めて資料を見直す。

しかし、どのクラスも干支から連想できる要素は皆無——三分の一、四分の一に絞り込めても逆に三分の二、四分の三の確率で外れることから部の悪い賭けを実行することは出来ない。

「アップローチの仕方が間違ってる——何か他に見落としてるかも知れないね」

一之瀬は試験開始のメールの他に試験説明を受けた時のことを思い返し、クラスの関係性を一旦無視すること“が浮かぶが優待者に繋がる糸口を見いだせない。

神崎は下壺に嵌る姿に落ち着けと声を掛けようとも思ったが、考え

込んでいる一之瀬の手が用紙の一部を隠し——子丑寅卯のA B C Dだけの部分を見て、ひとつの可能性が浮かび上がった。

「一之瀬、これってもしかして順番なんじゃないのか？」

「順番？」

「ああ」

神崎は優待者が判明している牛グループメンバーを新たに書き出して説明していく。

丑グループ

A：沢田恭美 清水直樹 西春香 吉田健太

B：小橋夢 二宮唯 渡辺紀仁

C：時任浩也 野村雄二 矢島麻里子

D：池寛治 佐倉愛理 須藤建 松下千秋

「アルファベット順は合わなそうだから、あいいうえお順にしていくと

——池、小橋、佐倉となって」

「丑は干支で二番目だから夢ちゃんになる訳だ！

それなら確かに兎も綾小路くん、私、伊吹さん、そして軽井沢さんになるね」

一之瀬は思い至ったことへの糸口と合致し、すつきりと通る答えに目を輝かせた。

「俺たちのグループも五番目に来るのは櫛田となって優待者——いぎ分かってみると呆れるほど簡単だ」

神崎は法則を解いたものの素直には喜べなかった。

綾小路の仮説を見て思い付きはしたが、その仮説に引きずられクラスに注目が行ってしまい、全く見当違いの方向に時間を割いてしまった——これならば優待者の情報だけの方が、まだ良かったかもしれない。

複雑な心情と眠気も相俟って、残る優待者の確認作業で手応えを得るものの顔色は暗かった。

「にゃははは——元気出しなよ。時間内に割りだせたんだから、それで良しでいいじゃない」

「そうっちゃ、そうだな——情報提供の見返りとして？は当てない。こっちは既にひとつ当てられてるみたいだが、残りを全て貰えばお釣りがくる」

「これで私たちはAクラス、あつちはリスクを取らずしてCクラスかあ……やっぱり今度のデートで嬰兒くん、誘惑しちやおうかなあ」
これに付いて神崎は否定も肯定もしない。

嬰兒がクラスの主役になれないのは当然、一之瀬も察していることであり強力な戦力を欲するのはリーダーとして当然のこと。

初日の集まりで櫛田が匂わした危険性については報告しており一抹の不安があるが、自分の中では明確な答えが出ていない。

「それよりも試験を終わらせることが先だ。もう少し明るくなったら、各グループメンバーを集めよう」

「そうだね。私たちも少し仮眠を——」

一之瀬が言い終わる前に端末が一斉に独自の音を奏でた——その音は途切れて直ぐ、次が鳴り六回目にして鳴りやんだ。

「これって、どういうこと？」

通知された内容に動揺を隠せず、画面をただ凝視する。

まだ薄暗い時間帯にも関わらず叩き起こされた生徒たちは、送信された内容に一気に目が覚めたようで、あちこちで大騒ぎだった。

それは当然、？クラスでも同様であり綾小路は——鼠、牛、馬、鳥、犬、猪——の終了通知の速さとCが含まれていないことから目論見が外れたことを悟った。

(嬰兒に言ったのに、これじゃ格好付かないな……)

寝起きの頭で思いながら居ると、忙しく電話している平田が落ち着いたのか、現状を報告して来る。

「男子の方は裏切りのメールは送ってない——今日の話し合いでのことは了承して貰ってたから信用できると思うよ」

優待者のクラスに疑いやカマかけで揺さぶりを掛けて反応を確かめる——それだけに留めて後はBに任せる。

外した際のリスクを念押しすることで不用意な行動を抑えるつも

りだったが、欲に釣られ調子に乗った奴が居ないとも限らない……その可能性が高い奴らが居るグループも入っていた、

「須藤や池の牛——山内の鳥は、本当に大丈夫だったのか？」

「あ、うん——山内くんは送ろうか迷ってたみたいだけど、その間に試験が終わっちゃったって。」

須藤くんたちの方は堀北さんに相談してたみたいだけど、不用意なことがするなって逆に釘を刺されたって……これとは別に堀北さんが何か言ってくるかもだけど」

「そんなのは、どうでもいい——女子の方は？」

『そっちはあたしが確認した。誰も送ってないって』

軽井沢の声が平田の端末から発せられ、やや驚くもそのハッキリした声は疑う余地がなさそうであり、女子を統括する彼女を引き込んだのは正解だったようだ。

必要な情報が早く集まるのは重畳であった。

(あとはこの体制を活かせる司令塔がどうなるかだな?)

「……平田、繋がってるならひと言、言ってくれ」

「ハハハ、ごめんごめん。それにしてもこの一斉のタイミング——力を誇示したいって意図が透けて見えるね」

「ああ、それと? クラスへの当てつけみたいなのもあるかも知れないな」

『嬰兒くんには、Cクラスがいいって?』

「それもあるが、前回は不戦敗——それも嬰兒に負けたんであって、あいつが居なければ敵じゃない。そんなメッセージでも受けて取るのも居るだろうな」

綾小路は話している最中も気に掛けていた相手——堀北からに着信が入った。

「もしもし、妙なことになったな」

『……今回ののは、あなたの仕業じゃないの?』

「残念ながらも——用意してた計画は間に合わなかった」

『そう……さっきの通知、馬が入ってたわね。見破られたかどうかは未知数として……他の通知、? クラスの誰かの可能性は無いでいいの

？』

「今、平田と軽井沢に確認を取ったところだ。ある程度は信用していいだろう」

クラスの情報も把握し現状確認は既に終わらせている——綾小路の脳裏には憮然としている堀北が浮かび、丁度いいので更に一石を投じることにした。

「折角、嬰兒にやる気になって貰おうと思って、一之瀬とのデートも取り付けたんがな」

『……………ちよつと、それどういうこと？なんでそんなことを勝手に——』

抑えているがかなりの怒気が通話越しにも伝わってくる——堀北にとつて一番手に入れたい駒にちよつかいを出されたのだからと、予想通りの反応に淡々と語る。

「既に嬰兒は不自由を強いられるのは想像に難くない——気分転換なりモチベーションアップのご褒美には最適だろ——それともお前が付き合つて、あいつを楽しませる自信があるのか？」

『論点をすり替えないで！Aクラスになるのに嬰兒くんの力がどれだけ重要か、分からない訳じゃないでしょ!!彼が敵に回ったらどうなるか……私への嫌がらせにしても性質が悪すぎるわよ』

そんな気持ちがあくまで無い訳でもないが、それはあくまで「ついで」であり本筋とは程遠い。

「そこまで分かっているなら、Aクラスに上がるのに何が必要なのか自覚しないと——今のままじゃ、見限られるなんて時間の問題だ」

『何を偉そうに——』

一方的に通話を切る——そのやり取りに平田を始め起きていた面々は何とも言えない顔だった。

綾小路も何も言わない——そして日が昇り明るくなり更なる通知が届いた。

(今度は三回——虎、蛇、羊か。一之瀬の奴、もう少し早かったら)

再度の連続終了にまた騒がしくなるが、室内ではCが狙い打たれたと悟り、先ほどよりは静かであった。

「清隆——これって」

また鳴り始めた端末の対応に追われる平田に代わって幸村が声を掛ける。

「ああ、一之瀬だろうな——問題はこれが龍園の予想範囲かどうか」
一回目の連続通知が示す可能性——それが当たっていた場合の深刻さは計り知れず、

（この絶望的状況を覆すこと——嬰兒の異能を引き出すのに使えるかも知れないな）

巡ってきた危機をどう使おうか——その時、一体何が出てくのか興味が湧いてくるのを止められなかった。

ただひとつ残っている竜グループ——最終日、一回目の話し合いが終わり堀北はカフェに居た綾小路を強引にデツキに連れ出した。

「あなた、私の知らない所で何をしたの？」

「開口一番からキツイな——Bクラスから何かフォローでもされたか」

「ええ、詳細は伏せるけど同調して話を合わせてくれたり——いつの間にも協力を取り付けたのかしら？」

優待者である櫛田を守り切ること、何度となく来る探りを乗り切り手堅く勝利を得る。

上手く行っている自負があったのか——余計な事をして勝手に助けを回されることが腹立たしいようだ。

例えそれが既に徒労になってしまったとしても……。

「今回限りだ——さつき一之瀬からも暫らくは組めないと言われた。ただ嬰兒とのデートは楽しみしてると」

一之瀬も今朝の一件について何かしらの見解があるようで、その要因が払拭されない限りは一緒に戦えないと割と真面目な顔で言われた。

尤もなだけに何も言えなかった——その事には安堵されたが、それを向けられるべき相手が違ってなければならぬことに少々複雑で

もあつた。

「そのことよ、一体何を考へてるの？一之瀬さんはあなたの幼馴染と違つて競い合うことを楽しむタイプじゃないでしょ——もしも彼がその気になつちやったら、損失は計り知れないわ」

「繋ぎ止めたいなら、その気とやらを上回るものを嬰兒に示すしかない。平田と軽井沢もその為に協力することは取り付けた——あとは堀北、お前次第だ」

お膳立てはした、だから結果を出して見せろ——と普通に考えればそう言うことだろうが、堀北が望んでいたことは全くかけ離れた道を勝手に用意され、素直に受け取れるはずもなかった。

「私を担ぎ上げて陰で実権でも握るつもり？」

「勘違いするな——嬰兒が望んでるからやつてるんだ。」

クラスの一員としてAクラスを目指してじやなきや、あいつは進んで協力できない。

そして嬰兒の力を欲してるのはオレやお前だけじゃない——悠長なことはしてられない」

「面白くもない説法で煙に巻きたいんでしようけど、私だってそこまでするバカじゃないわ。面倒を押し付けて自由に動きたいだけでしょ——嬰兒くんと一緒にね。」

坂柳さんも誘つてのダブルデートらしいけど、他クラスの勧誘をかゝわす手立てはあるのよね」

既に裏取りを済ませていたことに驚きつつも感心し、さつきまでの問答も綾小路から本当のことを言うかを待っていただけ——信用されてないのと綾小路のメリットを測り、堀北の方も信用できないと返してきた。

既に業を煮やしている状態であり、綾小路は率直に言う。

「堀北、お前一人でAクラスになることは不可能だ。一人でやれることには限界がある」

「言われるまでもないわ。だからこそ、この試験で結果を出して嬰兒くんは協力を値すると思わせるだけの実力を示すつもりだったわ——その結果が分からない段階で勝手に動くのは気に入らないわね」

(基本的にはオレと同じ考えか——だが嬰兒の激が見事に空回りして
るな)

しかしそれを言っても聞き入れるとは思えず黙っていると、堀北は
更に捲し立てる。

「あなたは坂柳さんと戦いたいんでしょ——それを否定する気は無い
けど、私には私の目標がある。邪魔してるつもりは無いんでしょうけ
ど、余計なお世話はしないで——これ以上、私にも関わることを私抜
きで勝手に進めないでちょうだい」

「それは然りだな、すまなかった。なら試験が終わったら、みんなで話
をしよう——学校に戻ったら嬰兒ともな」

元よりそのつもりだったのか、スムーズに出る台詞にやはり気に入
らない堀北だったが、これ以上は精神衛生上良くないと思ひ話は一旦
終わらせることにした。

六回目の最後の話し合い——されど竜以外の全グループで裏切者
が出て、一足早く試験終了となり船内最後の日はバカンスを満喫する
者たちばかりだった。

それは綾小路グループも例外ではなく思わぬ一日の休みを過ごし、
今は空が見れるカフェテラスにいた。

「堀北さん達、どうしてるかな——きよぼん、何か聞いてる?」

しかし流石に試験終了時間近になると結果が気になるようで、他の
面々も昼に堀北に連れ出され不発になったとは言え、試験攻略の発案
者に注目が集まる。

(こう言うのは遠慮したかったんだがな……この分もしっかりと取り
戻させて貰うぞ。嬰兒)

綾小路の心の中で何度となく思った愚痴を浮かべながら答える。

「優待者への追及は上手くかわしてるみたいだから、それなりに信用
してもいいと思うぞ」

「それなりに……清隆くんには何か不安があるの?」

「やっぱり今朝の一回目か」

「仮説通りなら十中八九、やったのはCクラス——既に知られてる可能性があるなら堀北たちが頑張ったって……」

兎での優待者外しと高円寺の独断専行が相殺され得られるポイントは0……高円寺が外れていた場合は50のマイナスとなる。

最悪を想定するとどうしても気分が沈む——そうしている間にも時は過ぎ、午後九時を回った。

解答時間は三十分後、結果発表は二時間後——ただ待つだけでは途方もなく長く、と言って気晴らしに何かをしようにもカフェには人が集まってきており、一見すると大盛況だが皆が試験結果を待ち何とも言えない空気だった。

待ち合わせもあり、男女に分かれてテーブルを二つ確保する。

「すみません。相席良いですか?」

そこに椎名ひよりがやって来た——女子の方でなく面識がある綾小路の居るテーブルに。

綾小路は記憶を辿り、無人島の浜辺で龍園にホステス役を命じられ同席させた女子だと思い出す。

「確か、ひよりだったか——すまんが他が来る予定なんだ」

「そうですか、残念です——龍園くんから嬰兒くんの話が聞きたがっていると訊いたものですから」

平田に頼んだ一件——今朝の件でそれどころではなくなると思っていたが、ちゃんと果たしていたようだ。

向うからやって来たのは龍園の差し金か、椎名自身が気を使ってくれたのか。

「それを最初に言ってくれ、それならOKだ」

「おい、いいのかよ。清隆」

「Cクラスだろ、堀北が来たらまたうるさいぞ」

幸村と三宅は歓迎できないようで、椎名は座るか迷いを見せる。

「その堀北も聞きたいことを今から聞く——まだ時間はあるから、それまでなら」

「はい、ありがとうございます」

椎名が座ると朗らかな笑顔で綾小路と向かい合う。

「注文してもいいでしょうか？」

「どうぞ」

暖かい紅茶を注文し口を付けると話始める。

「ふう。嬰兒くんと話した時もこんな感じでしたね」

「いきなりだな」

「長々と話すのはお好みじゃなさそうなので——改めましてCクラスの椎名ひよりです」

綾小路達も名乗り、漸くと会話が始まる。

「龍園が嬰兒とただならぬ問答をしたと言っていたと平田から聞いたんだが？」

「はい。冤罪を掛けてこようものなら私を殺すと仰ってました——それもバレない様に服毒自殺に見せかけて」

「ちよ、ちよつとなんの話よ、これ？」

余りにも物騒で長谷部を始め皆がドン引きする——しかし嬰兒ならやっても不思議じゃないと知っている綾小路は淡々と他にも情報が無いかと話を続ける。

「椎名はどう思った——ハツタリや脅しの類か、それとも実際に何かされたのか？」

「いいえ、何も——そうなったら、どうなるかを話してただけなので私の方でも何もしてはいません。」

ただお茶を飲んで「願いがひとつだけ叶うなら」どうするかで話が弾みましたね」

「それって思考ゲームの話か？」

幸村が眉を潜めながら問う——物騒なことから話を逸らしたいのか殺人の話はよしてくれと顔に書いてあった。

それは皆も同じで特に佐倉は冷や汗をかき狼狽えており、椎名も話すべき場ではなかったと反省しそれに乗った。

「それは嬰兒くんに訊いて貰うしかありません——ちなみに嬰兒くんは一之瀬さんによく似た人を生き返らせたそうですよ」

「……啓誠、訊くのはよしといたほうが」

「明人、俺だってそこまで無神経じゃない」

三宅も意を酌み遠慮がちに言い、幸村も肯くことでこの話は終わらだと言うのが広がった。

「ハハハハ——だから嬰兒くん、一之瀬さんのことを……清隆くんは知ってた？」

佐倉の問いに綾小路は小さく肯く。

「ああ、一度だけと言うか初めて一之瀬にあって時、平和主義者の知り合いに似てるって言ってたが——すでに故人だったのは初耳だな」

（しかも生き返らせたなんて——前に「どんな願いでも」は無理だと言ってたが、あれは自分にも言い聞かせたのか？）

異能を持っていても出来ないことは当然ある——傲慢や慢心とは縁遠い男だとは思っていたが、思っていた以上に過酷な挫折や無力感を味わっていたのか……。

（……いや、嬰兒にはと言っていたな。つまりそれが出来る輩が居ると言うことか？）

それこそが嬰兒を縛っているなら……「あの男」を上回る権力との繋がりが想像でき、取り入るにしても反逆を唆すにしても対抗策としては申し分なく、それ以上に心がくすぐられた予感の実現に改めて『面白い』と思った。

そこから先は取り留めのない世間話や趣味に関する話で、椎名の趣味である読書——ミステリーの話に綾小路は盛り上がった。

「浜辺でも『さらば愛しき女よ』を読んだし、本当に本好きなんだな」
「綾小路くんも興味が？」

「オレも結構ミステリーは好きだ」

「そうなんですか——実は私物で往年の傑作を持ってるんですが、今度どうですか？」

「いいのか」

綾小路の喰い付きの良さに椎名は嬉しそうに笑って手を合わせる。「はい。クラスには小説を好む人が居なくて、いつか同じ趣味の人に会えたら貸したいと思っていました」

屈託なく話す姿に最初に抱いた警戒が解けていく綾小路を始めとした面々だが、唯一佐倉だけがジト目で二人のやり取りを見ていた。

「清隆くん——趣味もいいけど乙女心も大切にね」

このひと言で全員の脳裏に凍り付いた笑みの坂柳有栖が浮かび——夏にも関わらず背筋が凍り付く。

「あ、いたいた」

その時、平田と軽井沢がやって来た——時間を見てみると結果発表まで五分を切っており、随分と長居していたようだった。

「君はCクラスの——座っていいかな？」

平田は状況を大凡察したようだが、直ぐに気を取り直して断りを入れて席に着く。

「あ、堀北さんも来たよ」

軽井沢の声に顔を向けると堀北と何故か、その後ろに付いて須藤と一緒にやって来た。

堀北の邪険にしている表情からして無理に付いてきたようだ。

「いい加減、邪魔だから消えて」

「そりゃないぜ——俺だって試験には全力で挑んで結果だってだすつもりだったんだから」

堀北の辛辣な言い様に須藤は平田を見ながら言い訳する——またひとつ、与り知らない動きがあったことを悟り、綾小路しゅほうしやを睨む。

尤も須藤の牛グループはBの優待者を守る為、外した際のリスクを強調して回答は絶対にしなないように言い含めただけが……具体的な指示は軽井沢を通して松下にしており、佐倉も同調するように言っておいたが遅かった。

堀北が女子の方の席に着くが、須藤は男子の方に空いている席がなく立ちつくし、

「どうやら、これ以上はお邪魔みたいですな」

「待てよ、ひより。折角だからまだ居ろ」

椎名が気を利かせたのか立ち去ろうとしたが、新たな人物が引き留めた。

「龍園——」

須藤が威嚇するように声を上げるが、元より誘い出すためにカフェに陣取っていたので他は予定通りであり、開けていた席——堀北の隣

に座り込んだ。

「あ、テメエ！」

「もう直ぐ結果発表だな——手応えはどうだ。鈴音」

「テメエ……堀北に馴れ馴れしくしてんじゃ——」

「須藤くん、煩いわよ——話の邪魔はしないでくれる」

「……おう……」

堀北に止められ、須藤は近くのテーブルの空席を探し座る。

「ハハッ——話すのは二度目だな。オメエが坂柳の男か、今朝の二回目はやつ——仕組んだのはオメエだな」

龍園はその様子をせせら笑いながら、綾小路に顔を向けた——そして確信めいたニュアンスに誤魔化すのは無意味だと悟る。

「実行したのは一之瀬だがな——ちなみにそっちはいつ法則性に気付いたんだ？」

「昨日の晩だな——全くギリギリだったぜ。伊吹から一之瀬と組んでる報告を受けてCクラスこっちの頭脳班と休みを削る羽目になったんだからな——だがその甲斐はあった。なあ、ひより」

「はい。詳細は伏せますが金田くんと三人で、厳選なる調整——その根幹に辿り着くのは本当に大変でした」

「ハツタリだわ——現に竜には裏切者は出なかった」

「気付いていたなら、なんでメールを送らなかつたんだい？」

堀北は守り通した自信があるのだろう声も態度も毅然としたもので、平田もミスは無いと自負しているようだが、今朝の一件が気がかりで訊いた。

「そこは俺の慈悲だな——と、丁度時間だな」

午後11時となり、一斉に届くメール——結果を知るべく全員が視線を落とし、そして驚愕する。

子（鼠）——裏切り者の正解により結果3とする

丑（牛）——裏切り者の正解により結果3とする

寅（虎）——裏切り者の正解により結果3とする

卯（兔）——裏切り者の回答ミスにより結果4とする

辰(竜)——試験終了後の全員の正解により結果1とする
巳(蛇)——裏切り者の正解により結果3とする
午(馬)——裏切り者の正解により結果3とする
未(羊)——裏切り者の正解により結果3とする
申(猿)——裏切り者の正解により結果3とする
酉(鳥)——裏切り者の正解により結果3とする
戌(犬)——裏切り者の正解により結果3とする
亥(猪)——裏切り者の正解により結果3とする

以上の結果から本試験におけるクラス及びプライベートポイントの増減は以下とする。

Aクラス……マイナス200c1　プラス200万pr
Bクラス……変動なし　　プラス300万pr
Cクラス……プラス　150c1　　プラス500万pr
Dクラス……プラス　　50c1　　プラス300万pr

「Cクラスがトップ……」

愕然とする堀北たち——優待者である櫛田を見破られたのが余程信じられないようだ。

「ククク——これで全クラスに大金が入った。本当はまだ稼ぎたかったが、別の楽しみが出来たから良しにしとくぜ」

龍園は綾小路を見ながら続ける。

「竜は櫛田桔梗で、兎は軽井沢恵——だが実際には一之瀬が優待者に偽装されてAクラスを嵌めた。」

いや、運が悪ければマイナスを食らってたのはCクラスおれたちだったかも知れない」

「訊いたときは流石に焦りましたね——ニクラスの情報があれば法則に気が付くのも時間の問題です」

無茶をしたのか、椎名の声は少し疲れているようだった。

「だが結果として俺たちが勝った——牛井にも伝えな、こつちに来る

ならいつでも歓迎するってな」

龍園は満足げに立ち上がると椎名も続き、一緒に去って行った。

夜が明けて皆が戻ってきた。

やっと本当の意味での夏休みに入って浮かれているのが大半で、バスから降りて寮の自室じゃなくて俺の部屋に押しかけてくるのも居た。

「空いてるから入れ」

ドアが開き、綾小路がいつもの気の抜けた顔で現れた——内心は驚いてるって訳でもなさそうに見えるし慣れて来たのかな。

「久しぶりだな。嬰兒」

「挨拶はいい——試験結果はどうなったんだ？」

「……ダメだった。Cクラス——龍園と椎名に先を越された。二学期からも？のままだ」

「そうか」

ここで椎名の名前を出てくるか——俺のことは何でも知っているとか気色の悪いのはよしてくれよな。

「奴らは優待者の法則を見破り——龍園に関しては不可能だと思われた結果1をやったのけた。一之瀬に確認を取ったら、試験終了して直ぐに榎田が優待者だとメールが回って来て、外してもリスクがないなら試してみたくなる内容だったそうだ。どうも気に入らない予感があるんだが」

リスクが無い賭けなら、物は試しにやってみたくなくなるのが人の性。

それなら葛城もやるだろうな——しかし賭けじゃなく、絶対の根拠がもしもあつたとしたら……。

「早急な対策が必要だな——綾小路」

「言うべき相手はオレじゃないだろ」

「俺的にはそうは思わない。黙ってる方がいいな」

「堀北が自分で気付くのを待つのか——手遅れになるかも知れない

ぞ」

前みたいに回りくどくても俺から堀北に伝えろって——違うよな、言ってるのとは裏腹な期待感を感じるぞ。

既に具体案はある。それも異能を使って——そう言わせて、更にそれを発展させる話に持って行きたいんだよな。

だが物事は早々お前の思う通りには行かないのは、もう分かってるだろ。

「ならその忠告はお前がしといてくれ——知っての通り俺は余り動けないんでな」

「そうだな。朝っぱらから邪魔したな——動けないなら今後はオレから足を運ぶことにする」

実りが無いと判断すれば潔く引く——のはいいとして、溜まり場にされるのもちよつと困るぞ。

そうしてまた誰が来るのかと思いつながら漫然と時間が過ぎていき、誰も来ないまま昼に——なった途端にインターンが鳴って開けてみると………仕組んだのかどうかは知らんが、そうだとすると何のつもりだ？

「久しぶりだな——軽井沢」

「うん。あ、これお土産——船のお店のだけど」

行きも帰りも豪華客船を楽しめなかったから、せめてものってか。

「気が利くな——ありがとよ」

素直に受け取って適当な所に置く——中身は後にして、先に確かめなきゃいけないのは、

「綾小路に何か言われたのか？」

「ち、違うよ。これはあたしが……綾小路くん、またの話は日を改めなくて」

メールでも済むことを伝書鳩替わりにされたか——従ってる辺り軽井沢も何かしらのメリットを説かれたか？

黙って続きを待つとソワソワしながら何か言おうとしてるが中々出てこない。

聞き耳立ててる奴が居ないか『地の善導』で確かめるが誰も居ない
——頃合いを見計らってる訳じゃないか。

「そ、その——嬰兒くん、ご飯食べた？」
やっと出てきた言葉がそれか。

「昼を一緒につてなら遠慮する——今、外に出ると面倒なんでな」
「じゃあさ、あたしが何か作るから——何がいい？」

おいおい、押しかけ女房になる気か？

綾小路いや、平田が来て修羅場でも演出するつもりとか………
うだとする証人たる目撃者は誰になるのか？

堀北か綾小路のグループの誰か——いや、この手の色恋沙汰なら軽
井沢の連れの佐藤あたりが喰い付きそうだな。

そうなるここは、

「かつ井かな——事情聴取には出なかつたし、この場合はやはり」

「……………取り調べにかつ井って、いつの時代のドラマよ」

「さあね——で作れるのか？」

「お安い御用だけど——材料あるの？無いから買ってこないと」

ポイントの節約しなきゃだから、やっぱいいや——と繋いで断わろ
う。

「ちようど、一杯ポイント入ったから御馳走する——ちよつと待つて
てね」

忙しなく行ってしまふ。あ、どうせなら味噌汁も一緒に作ってくれ
るとありがたいんだが……………。

不自由な夏休み

修羅場になるかと思っていた——しかし軽井沢は昼飯だけ作るとさっさと帰ってしまい、本当に一体何しに来たのか？

しかし、その答えはすぐに分かった。

今、俺の部屋に来ている一之瀬帆波によって……何とも味な真似をしてくれるな、綾小路。

「へえ、結構片付いてるんだね。嬰兒くんって綺麗好き？」

気さくに話しかける仕草は、白の半袖シャツに淡い青色のオーバーオールタイプのスカートとの私服姿と相まって何とも新鮮な感じだ。

「元よりあまり弄ってないからな」

ちなみに今弄ってるのは端末で、学校掲示板の「特例の男子に会いに行ったけど速攻で追い返された」と題された書き込みを見ている。

内容をざっくり言うとうと土産を持って俺の所に来てご飯もご馳走したけど、面倒だと冷たくあしらわれたとあった。

アップされてまださほど時間も経ってないのに随分と盛況のようで、コメントには「ガードが堅い」とか無難なものから始まり「一之瀬じゃなきやダメなのか」など——何とも作為的臭いがする書き込みを皮切りに今まで？クラスしか知らなかった内容が次々にアップされ盛り上がっていた。

特例のことは既に一年にも伝わっているのは想定内だが、必要なことまで広めやがって……一之瀬から話を聞いた時には流石に焦ったぞ。

「にやははは——ちよつと小耳に挟んだけど、坂柳さんとお茶してたんだって？」

「群がってくるだろう奴らへの虫よけにな」

「あー、そりゃ、綾小路くんもさぞ面白くないよね」

しっかりと尤もらしい口実も用意してるか……しかも殊更に坂柳を絡めてこられては俺も強くは出にくい。元より疑われているのは分かっていたが、ここまで大胆に来るってことは確信を持ったか。直接文句を言いに来ず、綾小路好みの印象操作で雁字搦めにしてこようと

は、しかも俺が反撃に出れない様にしながら——では新学期にはお前の望み通りにしてやろうじゃねえか。

「で、その腹いせが曲解を更に拡大解釈しての言葉狩りと——これからは一之瀬が大変になるじゃないか？」

軽井沢がとつとと帰つたのは既成事実だと思わせる為——あれで見た目はいいから、それを追い返したとなった後で特定の女いちのせと一緒にとなれば、ダシに使われるのは想像に難くない。

「えー、心配してくれてるんだあ」

それを利用しようとしてくる気満々のとびっきりの笑顔だ——面の皮が厚いと言うか肝が据わってるな。

「既にお前じゃなきゃって流れが出来上がってる——取り入ろうとしてくる輩も居れば、逆に嫉妬してくるのも出てきても不思議じゃない。それで事態が悪化したら笑い事じゃ済まないぞ」

「うん、そうだね。だからさ、色々と守ってくれと嬉しいんだけどなあ」

笑顔のまま、甘えるような声で遠回しにBクラスに来ないかと誘ってやがる——もしここで、ウンと言っても直ぐにそうなることじゃない。

クラス移動が可能になるまでの間に提案を拒否する方法——手っ取り早いのはBを叩き潰すこと。

堀北を唆してクラスを纏め上げるように持って行くか、それとも他に算段でも付いているのか？

綾小路の出方は読めねえ——分からんものを気にしても仕方ないから、取り敢えずは目の前のことだな。

「ならお前がこつちに来るのはどうだ？」

「……………私にみんなを裏切れって言うの」

笑顔が消えてジト目になったが……それでも百人中百人が可愛いと思ってしまうこと間違いなしに魅力的だ。

「前の試験において負けはしなかったが、勝ったとは言えない結果だった——Aクラスになるんじゃないのか？」

「確かにAクラスにはなれなかったけど、差額は7ポイントのひと桁

——二学期中にだって逆転できる可能性は十分だよ」

負け惜しみにししか聞こえないが別に喧嘩をしたい訳じゃないから、そこには触れないでおこう。

「勝てるのか？これからのAクラスは手強いぞ」

「Bクラスわたしたちの結束はどのクラスよりも固い——坂柳さんだって今まで敵対していた人達をそんな直ぐに掌握できるとは思えないし、チームでの戦いに遅れは取らないよ」

「それはそうだろうが……」

……それで満足してちゃ、勝ち上がるどころか生き残るのも難しいと思うぞ。もっとも敵に塩を送る気は無いからこれも黙っておこう。必要になるのは一之瀬が負けたか、それに準ずるときかな。

「何より？クラスに行つたつて……言葉は悪いけど、沈む船に乗りたくはないよ」

確かに一之瀬にしては珍しい例えだ——要するにそれだけ？の現状がヤバいと見えているつてこと。

船上試験での結果から導き出される可能性からすると、その見解は正しい。下手したら？クラスはもう一勝も出来ずに負け続ける——普通ならな。

「じゃあ、その前に他の船を沈めるのはどうだ？そうなれば穴も塞げるだろうし」

「……………いつになく過激だね。そんなことして大丈夫なの？」

「かなり際どいが、打てる手はまだ残してる——ただそれでも駄目だったら、もうお手上げかな」

「それは……流石と言えいいのか……………それともご愁傷様と言つてあげた方がいい？」

「おいおい、自分たちがターゲットかも知れないんだぜ——そんな呑気でいいのか？」

「私たちを倒して？も潰れちゃ、Cクラス——ううん、龍園くんが喜ぶだけでしょ。そんなことを良しに出来るなら、春先に情報を回すわけないじゃない。」

正直、あれが無かったら一体いくらかのポイントが引かれてたか」

ほう、堀北同様に予備知識を上手く活用してくれたようだな。

六月終わりに須藤を嵌めようとしたのと同様、それまではBクラスに何かしら攻撃を仕掛けてたが不発に終わった——だからこそ？に對して大胆な手に出ようとした訳か。

尤も一之瀬なら俺がお膳立てしなくても上手く流せたとも思うが、それでも50以上のマイナスはあったかもしれない——Cに関しちゃ、あちこちにちよっかいを出してなら、その倍近くはマイナスを喰らってたかな。

「休日も査定されてるかも知れないか——いつ休めばいいのやら」

「にやははは——学生の本分さえ忘れなきや、そこまでにはならないと思うけど」

学生の本分と言うと勉強——休みも机にかじり付いてろってか、それとも部活に精を出すか、はたまた贅沢しないで清貧に励めば寧ろプラスになったりするのか……。

ああ、辛気臭い話はこのままでしよう——元よりデートの日取りを決めようって来てくれたんだ。

「それじゃ、学生の本分を肝に銘じて社会奉仕に尽力する——日取りはそれが終わってからでいいか？」

「うん、全然オツケーだよ。坂柳さんには私から伝えておく？」

「いや、俺から綾小路に言うからあいつからにした方がいいだろう——この前のこともきちんと説明するように頼んどいたからな」

「……いや、そんなことしなくても綾小路くんも分かっていると受けど」

俺としては、それでこの件は終わりとしたい……そう言うメッセージなんだが、既に一之瀬を送り込んでくる辺り、また次が来るだろうな。

そのまま一之瀬とは他愛無いやり取りを続けたが大して盛り上がることもなく程なくして帰っていった。

そこから先は当初想定したよりは静かに過ごせた——軽井沢を袖

にして一之瀬を向かい入れた——その事実を（穿った形で）持って？の連中も平田と軽井沢が上手く抑えて、それを広めることでその他の輩も俺への接触は簡単じゃないと言う認識が定着していった。

……逆に一之瀬の方が俺に対してどうすれば機嫌を取ることが出来るのかとか、代わりに頼まれて欲しいと言ったのが増えているように、会ってみるだけでもとか言うのも偶にされる。

そして、その情報が更に堀北にも流れ——綾小路たちと一緒に対策会議を開いているから参加して欲しいと言うのが最近よく来る。

曲がりなりにも俺を守ってくれようと言う気持ちは有り難いが、応えたくもない下心が見え見えだぞ——せめてほんの少しだけでいいから、他にも目を向けてくれんかね。

「嬰兒くん、やっぱり来る気は無いみたいね」

堀北のひと言に集まった綾小路、平田、軽井沢が然もあらんと顔になる。

ケヤキモールのカフェ『パレット』の一番奥の比較的目立たない席——日中、それも夏休みとあって混雑しており、人が見たら違和感を覚えるようなメンバーでも何でもない場面として溶け込んでいる。

「あたしたちが居れば変なのも寄ってこないってのに」

軽井沢は少々不満そうに愚痴る。

しかし嬰兒からすれば不用意に外に出たくない気持ちも分からない訳でもない為、それ以上のものは湧いてこない。

「誰かさんが嫉妬で軽率な企みをしなければ、違っていたかもしれないわね」

堀北が綾小路に呆れの籠った視線を向ける——怒りが無いのは、それなりに理解を示していることなのかもしれない。

「僕としてはその事も含めて話し合いの場が持てて嬉しく思うよ」

「長くても十分で頼むぞ。この後で有栖と買い物に行く予定なんだ」

平田の絶妙な仲裁に対して間髪入れずに綾小路は和を乱すことを

言う。

「…………綾小路くんさ、ホントに嬰兒くんの力になる気あるの？」

「勿論だ、軽井沢。今更聞くまでもないだろう」

その発言に対して本当なのかと一同は思うが、綾小路が坂柳有栖と牛井嬰兒のどちらが大切かなどそれこそ聞くまでもない。

全くもってブレない姿勢は分かり易くて、追及する気も失せてくる——そんな心情に駆られて堀北が溜息を付く。

「ハア、時間が惜しいから兎に角話を進めましょう。今は一之瀬さんに注意を逸らしてるから、幾分かはマシになってるけど——いつまでもこの状態に甘んじてる訳にはいかないわ」

「だね。クラス全体で嬰兒くんをフォロワーしていける状態がベストだけど、ひとつ間違えると我慢の枷が余計に増えることになりかねない」

平田の指摘に軽井沢は船上試験中にした電話で言われた言葉を思い出す。

「嬰兒くんの力を欲するなら、クラスが団結していく必要がある」って言うってたし、当てにすること自体がダメってことだよな」

「ええ、Aクラスを目指すセオリーの範囲内——それを嬰兒くんがフォロワーする形でならと思ってたけど、甘かったわね」

「本当ならもつと自由にやりたいだろうにな」

堀北に同調するように綾小路も言葉を漏らす——これに誰よりも嬰兒の力に魅入られていた軽井沢が不満をぶちまけた。

「それにしたってさ、たった一回活躍しただけでここまでする？たかが学校の試験でしょ……多少、ぶっ飛んでるけどさ」

「それだけ嬰兒を取り巻いてる事情が重いつてことだろ——訊いたっどうせ言わないだろうが」

「ねえ、坂柳さんって理事長の娘さんなんですよ。綾小路くん頼んで直訴とか出来ないの？」

「無理だ——あくまで学校のルールに則ってじゃないと困らせることになりかねん。そんな真似は出来ん」

「ホントに好き嫌いがハッキリしてるね」

「誉め言葉と受け取っておこう」

直接話した訳ではないが、綾小路がこの学校に入学できたもの理事長の力添えがあつてのこと迷惑は掛けられない——それを知らない者から見れば、想い人の父親だからとしか聞こえない。

「ちよつと話がそれてるわ——ついでに言えば言い分が詰まらないわよ。嬰兒くんの事情がその程度で覆せる訳がないなんて、分かり切つてることでしょう」

二人のやり取りをバツサリと切る堀北——綾小路はいつものポーカーフェイスで軽井沢は不満顔のまま黙らされる。

「かと言つて一気に状況を打開できる手立てがある訳でもない——少なくとも嬰兒くん自信が協力してくれないと」

平田が上手く軌道修正して険悪になりそうなのを避ける。

「だからこそ提案なんだけど、この集まりに榎田さんも入れたいんだ。僕ら補いきれない部分——男子の意見を纏めるのにも適してるし、嬰兒くんの為にも選択肢は多いに越したことは無いと思うんだ」

平田は綾小路を見ながら言う姿は、いい加減に仲直りしろと語つている。

船上試験からのリーダー擁立から粘り強く和解を求めてくる姿には根負け……

「榎田は嬰兒の為には何もしない——あいつは嬰兒の敵に回るようなバカじゃないが、味方になることは絶対じゃない」

する訳もなく、寧ろきつぱりこの話し合いには合わないと言断言した。

「だったら尚更、一之瀬さんに嬰兒くんを持って行かれかねないこの状況は不味いんじゃないかしら」

堀北がどう責任を取るつもりだと言いたげに責め立てる。

「嬰兒が力を遺憾なく発揮には、あいつが望んでるものを提示するのがベストだ——今度の有栖と一緒にデートでその辺りには切り込むつもりだ」

具体的な考えを訊かされ沈黙が訪れる。

「それ以降のこともオレに任せて貰う——だからお前たちはクラスを

どう持つて行くかに集中しろ。じやなきや本当に嬰兒は他所に持つていかれるぞ」

そのまま立ち上がる綾小路——どうやら本意でこの場に來た訳ではないようで端末を操作して平田に注文分のポイントを送り去って行く。

目で追つていく堀北達は店の入り口で坂柳と合流するのを見て、何とも言えない気分になり程なくして解散した。

ケヤキモールの街道を並んで歩く綾小路と坂柳——足が不自由な彼女に合わせて、ゆっくりと段差のあるところでは自然と手を貸して。

「気を付けろよ」

「畏れ入ります」

過保護にも見える遣り取りだが、二人の仲睦まじい姿は互いを大事にしているのがありありと伝わってくる。

「今しがた嬰兒から連絡が來た。デートは外出が済んでからにして欲しいそうだ」

「そうですね——他にも何かありませんでしたか？」

誤解を解くように頼まれたのをしっかりと覚えていながらも愉しそうに訊く。

「特に何も」

綾小路もそのわざとらしさに内心引つ掛かるものがあるが呑み込んで答える。

「そう言えば葛城君からある相談されました、船上試験では一之瀬さんと組んで愉快なことをしてくれたとか。」

ああ、別に手心をとか言うつもりじゃありません。ただそのことでちよつとした提案を受けまして——」

そこから綾小路が目を細めるような内容が話されるが、特に気にする必要は無いと思ったのか、

「そうか」

と短く言うだけだった。

この前の嬰兒との会合も含め喰い付いてくるかもと思っていた坂柳だが、見事に空振りとなった。

「やはりこの前に言っていた通り私とはもうお話しすることは無いようですね」

自分を嬰兒に会わせたがっていたことはもう分かり切っており、勝負を受ける対価はもう果たされている。それはもう坂柳は用済みという意味する……ことにはならないと確信の籠ったニュアンスだった。

「嬰兒と接触したことは今更どうでもいいし、お前との勝負も反故にするつもりない——だがその為にもオレが動き易いよう改めて協力して貰いたい」

綾小路が執着している相手——その取り巻く不自由は本人が望んでいるものではない。破棄させることは不可能だとしても可能な限り緩和させることは可能——学校のルールに則りクラスで競い合うのであれば、坂柳と戦う為にとの認知は打ってつけのカムフラージュである。

嬰兒が動いても文句を言われないうにするには、Aクラスは高い壁であることが望ましく、強大な敵は団結を生み出し、嬰兒の力を否応なしに必要なだと思わせる——しかし事情を考慮すると調整役が必要だ。

「Aクラスの為とすると齟齬が生じてしまいますか」

「ああ、オレはAクラスには興味が無いのは本心だ。あくまで個人的なことと動いてるとする方がやり易い」

「ふふ、約束さえ果たしてくれば構いませんよ」

建前上とは言え坂柳の為にと言うのは非常に嬉しくて、今こうしても歩いているのも含めてこれから先も堂々と一緒に居られることは至福の喜びだった。

坂柳有栖の声も表情も仕草も嬉々としており、何処から見ても恋する乙女の姿は元から良い容姿も相俟って魅力だらけであった。

その魅力は普通のクールな姿を知っている身にはギャップが凄くあり、とても破壊的で綾小路の目を一瞬奪った。

「どうされました？」

「……なんでもない。気にするな」

微笑みながら尋ねてくる姿に一瞬声を出すのが遅れ、顔を見上げて空を見る——夏の真つただ中で照り付ける陽光は暑いひと言であり、丁度良く日陰になっているベンチを見つけたので言う。

「みんなと合流するまで少し時間があるし休まないか？」

「ではエスコートをお願いできますでしょうか」

笑顔のまま嬉しそうに甘えてくる姿は反応に困る綾小路だが、手を差し伸べると坂柳は空いている左手を乗せてベンチまで歩いていく。

「ゆつくりとな」

「はい。ありがとうございます」

坂柳の身体を支えながら、そつと座らせ綾小路も隣に座る。

その光景は彼女を大事にしている彼氏——ラブラブのカップルそのもの。

また夏休みで人通りがそれなりあるにも関わらず注目するものは一人も居ない。

既にこの光景は当たり前のものとしており、しかし本人たちに自覚は無く日陰で涼む。

そしていつも通りに取り留めない会話を始める——ありふれた日常の話を取り留めのない普段の生活を飽きることなく。

ああ、くそ。暑いしまった『天の抑留』で上空に涼みに行きたいが、少し外に出るとあちこちから注目を受けて、それもままならない。

有力者かドウデキヤプルかの狙いは見事に嵌っている——なんとも動き辛い限りだ。

端末でポイントの残高を確認すると五千は切っており、餌代もバカにならないから『鵜の目鷹の目』による穴場探しも出来ない。

もうこの際、開き直って一之瀬に同伴して貰おうか……堀北が癩癩起こすかも知れないが背に腹は代えられないとのこと。

連絡を入れようか、どうしようかと思つてたら通知が届いた——開

くと外出日は二十日で、仕事内容はケヤキモールに配送する商品の検品で午前八時から午後八時までの十二時間ね。

三日後か、これが過ぎれば冬休みまでは落ち着くかな？

それともその間にも媚び売ってくるのは出てくるか……いや、適当な理由をでっち上げるなりして戻って来れないようにするのも考えられるか。

まあ、これは考えてもしょうがない——問題はこの情報がどの程度の早さで広がっているかだ。

一之瀬もそうだが俺の所に直接来るのも居ると考えた方がいいだろうし、何処かに隠れるか？

何処にだ……匿って貰うにしても綾小路や堀北は論外だし、平田も軽井沢のことがあるから頼みたくない。

つと、一之瀬から電話だ。

「もしもし」

『もしもし嬰兒くん。話があるから明日、そっちに行きたいんだけど』
「ちなみに誰と一緒になんだ？」

『ニヤハハハ、何とも察しが良いね』

予想の中でも最悪——いや、ひよつとしたら俺への通知が後で情報が回った方が先だったりするのかな。

「ちなみにお涙ちようだいの理由で受ける気は更々ないぞ」

そんなんで引き受けた日には際限なく押し寄せてきそうだ——中には作り話を盛って内緒で手紙もとか言ってくるのものな。

当然、すぐバレルだろうし俺の責任問題として退学になる……そんなショボい終わりなんて真っ平だ。

『それは相手も分かっているよ。私もそうじゃなきゃ、こんなことしないし』

相応の報酬を払う気はあるか。だがその条件も直ぐに広がるだろうし、他が出来ない条件だとも考えられないから、どのみち同じだ。

「悪いけど——」

『それにこの話断ったって、次々来るよ。私がそっちに行けば色々トシャツトアウト出来るし、提示してる報酬にはそのことも含まれて

る』

「俺の悩みを解決してくれる案がある？」

『流石に頼みごとを0にするのは無理だけど、大幅に少なくする方法があるんだ。どう？無理強いは絶対しないし、ちゃんと現物の報酬も払うって約束してる』

一之瀬がここまで食い下がるからには余程の事情か、或いは人情に訴えるようなのか、どちらにしても興味はない。

しかし、ここで断って一之瀬でも駄目だったなんて話が広がったら、それこそチャイムや電話、メールは鳴りっぱなしになる——なんだよ、結局は選択の余地が無いじゃねえか。

「……………割り込まれても面倒だから今日中で頼む。明日じゃ遅すぎる、明日出なきやだめならその方法を今提示して貰いたい」

『うん、分かった！じゃあ、そう伝えておくね』

せめてもと思って、きつめの条件を提示してみたが即答で快諾した——それも相手に確認も取らず、つまりはそれだけ相手にとって真剣であるってことか。

「ああ、それで相手は誰だ？」

少なくとも綾小路では無い。

あいつなら俺が引つ張りダコになるのを待ってから話を持ち掛けてください……報酬を高く吊り上げる為に。

『ああ、ごめんごめん。Aクラスの葛城くんだよ』

おやBクラスの誰かと思ってたが、それにしても意外な名前が出たな。

『詳しいことは本人が話すから——それじゃ、直ぐに行くから』

通話が切れた……うくん、思いもよらぬ客が来るか。

部屋を片付けなきゃいけないこともないし、取り敢えずお茶の用意か……こんなことなら菓子も買っとけばよかったな。
？

相応の値段を

さて、今日の一之瀬は白のシャツブラウスに藍色のロングスカートとシンプルな格好だが元が文句をつけようのないほど良いから見栄えは冴えわたる。

一緒に来た葛城は俺と同じでポロシャツにジーンズで違いは、葛城が無地のベージュで俺が水色のストライプとシャツの柄だけ——それよりも持って来た手提げ鞆には何が入ってるのか気になるところだ。

二人は俺の部屋のテーブルに座っており、さっき沸かしたお湯を急須に居れて煎茶を入れて持って行く。

「夏なのにすまん。客に出せるのはこれしかなくてな」

湯気の立つ湯呑茶碗をそれぞれに出すが二人は嫌な顔ひとつせず口を付ける。

「突然来たのはこつちだ。寧ろ俺の方こそ申し出を受けてくれて礼を言う」

「そうそう、それに嬰兒くんにこんな風に御もてなしされるのは新鮮で楽しいし」

この前みたいいきなり来るんじゃないなら、腹がタプタプになるまで飲ませてやるぞ——と挨拶はこれくらいでいいだろうから、俺も座ると葛城が鞆の中からラツピングされた箱を取り出した。

「なんだお前も俺へのお土産か？」

「単刀直入に言う。外出の際にこれを俺の妹に送って貰いたい」
「堂々と正面から来たのはお前が初めてだな」

素直な感想を言うと葛城は頭を下げて来た。

「こう言う話を受けたくないのは重々承知している——だがこの学校のルールではお前に頼むしか方法が無い。勿論、報酬は別に10万ポイントを支払う用意がある——引き受けて貰えないだろうか」

「私からもお願い——葛城くん、病弱な妹さんが居て祝ってあげられるの葛城くんしか居ないんだ」

いかにも一之瀬好みの話だな——葛城の性格からして嘘つくとも

思えないし間違いないで本當のことだろう。

しかし、

「安いぞ。報酬も何もかも——それだけなら話は終わりだ。頭上げて帰ってくれ」

そう如何にも情に訴える……いやホントにそうだとしても、それで流されるお人好しじゃない。

当然、これが不測の事態だと言うようなタマじやあるまい——頭を上げた顔には一切動じてない。

鞆から紙きれを一枚取り出して言う。

「これは牛井嬰兒に対しAクラスは、これ以降の物品送付は頼まないと言う誓約書だ」

差し出された内容はAクラスが頼むのは今回が最初で最後で、罰則として違反者は退学するとあり、葛城は勿論のこと坂柳も含めたAクラス全員の署名があった——確かにこれでAクラスに関しては気にすることはなくなるな。

「よく認めさせたな——坂柳派の反発もあつたんじやないのか？」

「その坂柳派が試験でミスを犯してな——30万ポイントを一之瀬に支払わなければならぬのを俺個人が肩代わりすることで了承した」
葛城は目を一之瀬に向けるとシレっとした声で言った。

「そう言うこと、私も分割にして欲しいって持ち掛けられて色々聞かせれた。」

尤も坂柳さんは葛城くんの提案は単なる口実で嬰兒くんには元より何もしないようにするつもりだったみたいだけど」

「ああ、俺も罰則に退学まで盛り込まれるとは思ってなかった——関わりたくないのか、お前に同情してるのか、至極あっさりとしたものだった」

淡々と言ってるがその目には何があるのかと、ありありとした興味が見えるぞ——それは一之瀬も同様で坂柳が知ってるなら自分にも教えると言ってるように見えてしまう。

………本當に思ってたとしても言うつもりはないがな。

「Bクラスこっちでも嬰兒くんの特例に関しては一切頼まないし詮索もしな

いつて取り決めた——これ、掲示板に載せる用意があるから話を受けてくれるなら直ぐにでも」

おお、有り難いことだ。

特例を利用するためにご機嫌取りするんじゃないやなくて、俺の機嫌を取るために特例による不自由を外すとするなら、Cクラスも待ったが掛かるだろうし、？も俺が出ていくことを恐れて自重が期待できると、こんな感じかな。

そして依頼料として10万ポイントなら上の学年のC、？クラスにはおいそれと頼んだりは出来ない。

「既に特異な存在として注目されているが、少なくともこの件に関する影響は小さくなるだろう」

ひと通り語ったかな——と思ったんだが、なんだ改まった顔して？「それとも逆にポイントを稼ぐ手段として利用したいなら、上手く捌ける方法もある——ただその場合、必要ポイントが集まった際には、その時のAクラスに移動し俺が一之瀬と一緒に戦うことを約束して貰う」

「ちなみにこれは今すぐに返事して欲しい——直ぐに始めないと間に合わないから」

本題はこつちか、一之瀬の方も情だけで協力した訳じゃないのは少し驚いたが意外でもない。

「ああ、坂柳は受けるとは思えないと言っていたが、周りの連中もお前を味方に出来るのは魅力的に映ったようであんなにかかった」

「Bクラスの方でもね——こつちも一部では歓迎できない娘が居るけど、そこは頑張っていこう」

十中八九、白波のことだろうな。

名目的には助けたからイーブンだが、実質は俺の都合での芝居同然だから嫌われたとしても文句が言えない……気不味くなるのは目に見えてる。

のは差し引いても、と言うか答えはとっくに決まっている。

「断る」

俺がそう言う短い間の後、葛城も一之瀬も仕方ないと言うような

表情になり言った。

「そうか、分かった」

「うん、嬰兒くんはその気が無いんじゃないね」

面倒は御免だからな——大方、依頼料を吊り上げて、分割でもいいからと大々的に宣伝して、この夏と冬の二回に分けて百人近い依頼を受ける。普通なら捌き切れないから、効率よく送れるようこれからの三日間——更には冬休みに掛けて計画を練りにこの部屋に来るぞとなる。

上手く行けば夏と冬——駄目でも春があるから遅くとも来年には俺はAクラス行きに。

それを察した綾小路や堀北、Cの龍園も黙ってないだろうから誰かしら送ってきて妨害なりしてきて余計窮屈になりかねない。

「それじゃあ、荷物の送付先だが——」

「おい、そっちも受けるとは言っていないぞ」

勝手に話を進めようとするな——葛城、一之瀬ともに難しい顔になって見て俺に駄目な理由を求めているな。

確かに嫌な注目を少なくするには十分な条件だが、どうせならまだ搾り取りたいんでな。

「話を聞く限りお前たちの提示した案は中々だ——だが、それでも反動で二、三年のA Bクラスが押し寄せてもやっぱり迷惑だ」

「牽制状態が好ましいと？ひとたび崩れると怒涛の如く流れ込みかねんぞ」

「そうだよ。確実に流れを断ち切る方策じゃないと結局、雁字搦めだよ」

建前に対しても真面目に答えてくるのは性分か？いや、それはいいとして。

「だからさ——もうひと押し欲しい」

俺は追加条件を話すと葛城は困惑し、一之瀬は目をキラキラさせて物凄い興奮した。

「うん、いいねえ。全然いい！私、協力するよ！」

「お前達、いい趣味をしてるな。色んな意味で……」

ノリノリだな一之瀬——それで葛城はそれを横目で見ながら呆れ声だ。

「こう言うのは乗り気になれないか、やっぱり」

「俺には縁のないことだと思つてた……が、妹の為だ。それで引き受けてくれるなら、その条件受けよう」

「よし、決まりだな——なら早速、生徒会の方に話を通しに行くか」

物品送付についての連絡を入れると予想通りに直ぐに返信が来て、今から来いとあつた。

検分する教師の手配もあるから少しは——とか思つたが万全過ぎでと何とも言えない気分だな。

「制服に着替えて直ぐに来いだそうだ。お前たちも着替えて来い——ロビーは面倒になるかも知れないから、準備が出来たらまた来てくれ」

「うん、分かつた——それにしても随分と早いね」

「全くだ。これなら最初から制服で来るべきだつたな」

そう言う二人は肯いて立ち上がり部屋を出て行つた。

さてとお茶を片付けて、俺も準備しないとな。

数分後、依頼品を持つて外に出る——相変わらず遠巻きに見られてくるが、いい壁があるから目的地まではスムーズに行けた。

生徒会室の改装工事はまだ少しかかるようで、前回同様に進路指導室だ——ドアの前まで来たところで葛城が遠慮がちに言つた。

「いやはや全く知らなかつたな——牛井が居なければ無駄足を運んでいたかも知れなかつたな」

夏休みに制服着て学校を行つたり来たりか——それなりに目立つだろうし、変な誤解やからかいのネタになつてたかな？

聞き流しながら俺はドアをノック、入れの声にドアを開くと堀北生徒会長と橘書記、それに初めて見る金髪の長身の男が居た。

他には真嶋先生と60代ほどの男性——確か校長先生だつたな、あと一人は茶柱先生か。規定では三名の教師の立ち合いが必要とある

が理事長らしき人が居るかと思つたが居ないようだ。

ドウデキャプルが何処かに潜んで無いかと室内に気を配るがその心配もない——もつともあいつがその気になれば分かるかも怪しいがな。

「牛井嬰兒——物品送付申請の為、出頭しました」

用件を言つて手にしてる箱を差し出すと会長殿が受け取り中身を改める。

「これを何処に送るつもりだ？」

この質問に葛城が俺の横に来て話す。

「私の双子の妹にです——妹は病弱で両親も居らず、祝つてあげられるのは私しかいません。外への物品送付は牛井氏の特例を持つてでしか対応できない為、お願いした所存です」

俺に注目が集まる——受けるとは思つてなかつたんだろうが、与えられた権限だ。使つたところでどうこう言われる筋合いはない。

あとは立会人達がどうするか——それは葛城も分かっているのか深々と頭を下げた。

「何卒よろしくお願い申し上げます」

生徒会メンバーだけでなく教師連中も確かめてるが品物であるチョコレートも箱もメッセージカードも何も問題はないのは既に確かめてあるから、物そのものには問題ないだろう。

「これを送ることで君の外での自由時間は削られるが本当にいいのかな？」

「構いません」

校長が暗に断れと言つてるようなので即行で返す——そこに堀北会長の横に居た金髪男が俺を見て言った。

「ちなみに幾らで引き受けたんだ？倍だすから、こつちのも頼まれてくれねえか」

「丁重にお断りさせていただきます。ええつと……」

「二年Aクラスの南雲雅——生徒会副会長だ。倍じゃ足りなら三倍だすぜ」

やたらしつこいな——それでいて申し出にそこまでの拘りがある

ようにも感じない。ついでに言えば俺を見てるようでいて、直ぐ側の一之瀬にもチラチラと視線を向けている。

「どれだけポイントを積み重ねようと引き受けるつもりはありません。一応、言っときますが葛城の事情に同情したからでもありませんから」

横目で葛城を見ると僅かに目尻を引きつらせた——可愛い妹の為だ、しっかりと頼むぞ、お兄ちゃん。

「そうなのか——ではなんで引き受けた？」

この場に居るもう一人のお兄ちゃん——堀北学生徒会長が訊いてきて南雲副会長が不服そうに引き下がった。

どうにも良好とは言えない仲のようだな、どうでもいいけど。

「その事ですが——出来れば他言無用でお願いします」

そう前置きして俺は引き受けた条件を話した——最初は緊張した不穏な空気だったが、話し終えたら一気に気が抜けてしまう表情に誰もがなっていた。

「と言う訳で少しばかり騒ぎになるかも知れないので、何卒ご了承ください」

一方で俺は至極真面目に言うと、微妙な顔したままの葛城とニコニコしながら一之瀬も一緒に頭を下げる。

あつけらかなとした間が流れ、その中で南雲副会長が口に手を当てると、

「ブツ、ハハハハハ——」

大笑いしだして腹を抱え部屋中に笑い声が響いた。

うん、結構な手応えだ——これなら大丈夫だろう。

「いやはや、面白れえなお前——どうだ生徒会に入る気ねえか？」

何やら勧誘された。

「特に牛井。俺は来年、生徒会長になる——副会長として俺の右腕になるつもりはないか？俺の今までのノウハウとお前の特権とが合わされば、結構面白いことが出来る」

「それはいいな。何なら今からでも入る気は無いか——もうひとつの副会長の席も空いているしな」

堀北会長の台詞に南雲だけでなく全員が驚き、特に橘書記の驚愕具合は相当なものだ。

いや会長殿よ、そんなこと出来る訳がないのは分かってるだろう……一体なんのつもりだ？

「い、いや、ちよつと待つてください……彼は、その………何分前例のないことですし」

校長がオドオドしながら駄目だと遠回しに言ってるが、仮にもアンタこの場で一番偉いんだろうに、もつと威厳を以て却下して貰わないと俺が困るんだが。

「えー、でも制度上は問題ないですよね——私も嬰兒くんと一緒なら色々心強いし、大歓迎ですよ」

一之瀬がノリノリで話に混ざってきたが、はて春先に葛城共々生徒会入りを断られたって話じゃなかったか？

「と冗談はこのくらいにして」

言い出しつぺである南雲が強引に話を終わらせてきた——成程ね、こいつが一之瀬を採用した訳か。

「いや、この提案は一考に値すると思うぞ」

「堀北君！そう言うことは別の機会にするべきだよ」

「ですが校長。何分前例のないことですから、そのまま流されてしまいかもありません。牛井が入るのが無理なら同じクラスの綾小路を副会長枠で入れたいのですが？」

ここで綾小路か——思わぬ流れに再び驚きの間が訪れた。

特に茶柱先生なんか余程発言の真意が気になるのか、会長を見つめる目の熱量が半端ない。

「堀北先輩、知り合いなんですか？」

南雲も今更誰だとは言わないあたり、この学校で知らない奴はもう居ないか——覚え方は色々アレだけど。

「一度だけ会ったことがある——中々に面白い奴だった。

その後もなんとなく気になっていたんだが、試験の時も牛井が居ない後の代理として上手く立ち回ってたそうだ」

実際に無人島では坂柳派との調整を担い、船上ではあいつのグルー

プは逃げ切つてAに打撃を与えたからな。

でも綾小路を買っているのは、それだけじゃない——勘なのかは分からないが、並々ならぬ確信の籠ったニユアンスだ。

そう言えば前に「堀北から何か聞いたのか？」と訊かれたし、やっぱり見えづらい所で何かしら面白いことでもしてたのかな。

会長自身や周りからの態度から相当に実力があり信頼されているのは疑いようがないし、学校の運営に関することも少しは知れてもあまり不思議じゃなさそうだ。

そうなるかと佐倉のストーカーの件も綾小路が関わってるのに気付いてたりとか——こつちもあまり騒ぎになってないから、もしそうだとしたら本当に大した男だな。

「へえ、先輩にそこまで言わせるなんてね。俺も一度、会ってみたいものですな」

「南雲、それに堀北。そう言うことは本人を交えてやることだ」

ここで真嶋先生が出て大人の対応を以て話を収めた——正直、校長なんかよりもよっぽど頼りになるな。

「話を戻そう。今回の特例による物品送付だが、荷を確認して規約違反は見当たらない。よって承認で問題ないと思われませんが」

「私も異議はありません」

「生徒会としても承認します」

「では荷物は当日までこちらで預かります。外出日に牛井くんに渡しまするので、それまでに必要な手続きを済ませておくように」

教師と生徒会の許可も得たことで、あとはつつがなくいった。問題は当日に何かしらやれる隙を作っていること——捏造で陥れようものなら俺も容赦しないからな。

「本日は私の我儘の為にご足労頂き、本当にありがとうございます」
最後に葛城は頭を下げ、俺たちは退室を言い渡された——そして部屋を出て直ぐに俺にも頭を下げた。

「牛井にも感謝する。この恩は決して忘れない」

「約束さえ守ってくれば俺は構わんよ——寧ろそつちをしつかりと頼むよ」

そう、俺にとって重要なのはそつちだ。

だからこそ先払いの形を取ったんだ——有力者が俺を嵌めようとしても絶対に戻って来なければ。

決意を新たに俺たちは校舎を出て行った。

「随分と珍しい組み合わせ——それに格好ですね」

「ああ、夏休みに制服とはな」

学生寮に戻る途中、坂柳と綾小路は人だかりに出くわし見てみると、嬰兒と一緒に一之瀬と葛城が居た。

二人は嬰兒たちが歩いてきた方向から逆算して何処に言っていたのか、少し前に話っていた情報と制服姿から何をしていたのかを類推した。

そして直ぐに端末を操作して学校掲示板を確認、〃特例的処置が許可された〃と題されたスレッドが立ち上がっていた——相変わらず情報が回るのが早すぎる。

「葛城の依頼の話が出たのは昨日だよな——行動力があつたにしてもやっぱり早すぎやしないか」

「彼の問題は最優先で処理しないといけないでしょうから——学校側も大変です」

綾小路も今更驚きはしないが、それ以上に当然であると言う坂柳の態度にあからさまな意図を感じさせて目を細めて見つめる。

「フッフ、申し訳ありませんが私の口からは何も言えません——でも先を見据えて彼を味方に付けたいと言うのは、ひよっとしたら清隆くんの意に沿わないかもしれませんよ」

表情も口調も笑っていないながらも内容には何ひとつ愉快な要素が無い。

しかし綾小路は何も気にしない。

嬰兒が大きな力に縛れているのは自明、それを本人が不服としているなら目的が重なり返ってやり易いと打算を働かせる。

「別に構わない——なるように調整すればいいだけの話だ」

「その身に付けた凄さに裏打ちされた自信、早く壊してしまいたいものです」

坂柳は変わらず笑顔のまま、いつも通りの好戦的な台詞——もはや完全に慣れてしまい綾小路の心には何の感情も湧かない。

「悪いが嬰兒以外に負ける気はしない——嬰兒にも二度と負けないがな」

何故なら戦わないから——そんな意図を悟ったのか笑顔から一転して不機嫌になる坂柳。

「次は勝って見せるぐらい言っただけですわね」

「今のオレじゃ、どうやったって嬰兒に勝てない——どうすれば、どう強くなれば勝てるのかも皆目見当が付かん」

「……………」

対して坂柳は綾小路から出た「強く」の言葉に最近の嬰兒とのやり取りを思い出してしまい思考が固まってしまった。

「どうした？」

「な、なんでもありません……………ホントになんでも……………」

「そうは見えない——顔も赤いし、熱でもあるのか？」

怪訝そうな目で顔を近づけてくる綾小路に頬の赤みが増していくのを自覚していく坂柳だが、ただ黙って見ているしか出来なかった。

「おお、相変わらず仲がいいねえ」

そこに陽気な声がして二人が目を向けると嬰兒が一之瀬と葛城と一緒に近づいて来た。

「牛井——邪魔しないほうが良かったんじゃ」

「にやははは、私もそう思うよ。嬰兒くん」

「別に構わない——オレ達も話がしたいと思ってたし」

「ええ、清隆くんの言う通りお気になさらずに……………本当に」

それぞれが言葉を交わす中で、坂柳が安堵している姿は愛らしさが際立っていた。

「葛城の頼み、引き受けたんだな。ちよつと意外だったぞ、嬰兒」

そんな姿を見せたくないと取れるように綾小路は話を進めてく

る——その意を酌むように嬰兒は応じる。

「ああ、ついさつき受理された」

話が回るのが早すぎると言うのも今更であり、

「有栖から聞いたが10万と一回きりで手を打ったのか？」

「いいや、もうひとつ条件を付けた——値段に釣り合うようにな」

同じ頼みごとをしたいたい衆人たちに聞かせるように話を進めていく。

「どういったものかお伺いしても？」

「言う訳ないだろう」

「そうですか」

坂柳も残念な顔になり見ていた面々も散っていったが、また直ぐに条件のことも広まってしまふのは予想が付く。

彼女からしてもイレギュラーな事態など歓迎できる物でなく早くどうにかしてほしかった。

そうでなければ運営側^{ちちたち}だけでなく自分にまで何かしら回って来かねない。

そんな心情などお構いなく嬰兒は本題を伝える。

「ああ、約束のデートの日取りだが外出日に翌日——21日にしたいんだが、二人はどうだろうか？」

「オレも有栖も予定は要れてないから大丈夫だ。ただ——」

「ええ、随分と忙しいですね。もう少し余裕を持ってからでも私たちは全然構いませんよ」

二人の息のあった気遣いに嬰兒ばかりか一之瀬や葛城までも苦笑してしまう。

「ハハハ、配慮は有り難いが俺としては、楽しみは早く来て欲しいいな」

「うん、私もすつごく楽しみだし」

こちらもちちらで意気投合しており、それとなく葛城に視線を送ると呆れたような困ったような顔をしており、水を差すのもどうかと言うような雰囲気であった。

「ま、そう言うことなら別にいいが」

「では21日と言うことで」

「よし決まりだな——待ち合わせ場所は寮のロビーでいいよな」

綾小路が勝手に決めたにも関わらずのノリノリ嬰兒——違和感を覚える展開だが異論はなく、ダブルデートは21日の九時に待ち合わせが決まった。

半日だけのアルバイト

外出日の朝——予定の時間までには間があるが、これと言ってすることもないので俺は指定された作業着で正門前に待機していた。

正直、部屋に居るままだとギリギリになってやつぱり頼むとか言うような輩が出てきかねない、とそんな不安もあった。

不可能だと言っても諦めずに時間を食って遅れたなんてことになれば何を言われるか——と言う口実で俺は誰からも見られることなく行つて戻つてくるつもりだったんだけどなあ。

「無人島とは違い随分な張り切りようだな」

なんでお前がここに居るんだ、綾小路。

「まさか徹夜で待つてたなんて言わないよな？」

「かなり早起きしたな——お前より早くじゃないと戻つて来るまで見つけられないだろうからな」

無人島でまいてやったみたいにならない間に隠れられると読んだか——当たつてるから何も言えないが……。

「見た限りオレ以外に見送りはいないし、ここに来るまで誰の目にも映らせなかったか」

「直ぐに戻つて来るし、それでなくても余計ないざこざなんてご免だからな」

「そうだな。普通に考えれば葛城と一之瀬が来るのが当然だろうが昨日訊いたら、明日のデートの方を気にしろと来た——どんな条件を飲ませたのか、どうにも気になるんだよな」

おいおい、それを今言っちゃ面白く無いじゃないか——だから教えてあげない。

ここで見失つても時間一杯まで粘る気なんだろうが、待ち伏せする輩が居ることだって想定範囲内だ——これを認めさせるのは骨だったな。

俺は綾小路に構わずに歩き出して正門の前で足を止めることなく、

そのまま進む。

「おい、まだ時間外だぞ。それに話はまだ——」

俺の肩を掴んで止めようとしてきたが、半歩横にずれてその手はすかされて綾小路はそのまま敷地外に出そうになって………全く世話が焼ける。

綾小路の胸を押してどうにか敷地を越えないように押す——普通なら尻餅でも付きそうだがどうにか踏みとどまって無様を晒さないあたりは、やっぱり男の子だな。

「危なかったな、そのまま出たら重大な校則違反だったぞ」

「特例はもう発令済みか——見送りの話すのも駄目とは寂しい限りだな」

正門を挟んでの俺の声に綾小路もすぐさまに状況を悟ったようだ——
——淡々とした声で返した来た。

俺は塀に沿って歩きながら言った。

「悪いが余計なことを喋ると不味いんでな——それじゃ、また夜に」

そう本来なら時間までは敷地内で待機して業者の車に乗って外に出るのがセオリーだが、当日に生徒が群がってしまったては業者にまで迷惑が掛かる——と言う口実を以て塀や通りの防犯カメラから絶対に外れないことを条件に俺は正門より外側、業者が通る道路の途中までの誰も来ることが出来ない辺りで待つことになった。

あちらさんも途中で拾うのは手間だろうが、面倒を回避する為なら大したこともないとすんなりと了承された。

しかし明朝とは言え夏に外で待つのは少々きつい——荷物から水筒を取り出して口に付ける。

さて一体どの辺まで行けるかな？

この事態も考えなかった訳じゃない——しかし真夏にコートを着込んで暑くないのかねえ、ドウデキヤプルは。

「本日はお日柄もよく、絶好の外出日和で何よりです」

「蝉の鳴き声が響いてよく聞こえないな」

厭味つたらしく言ってみるが何も気にした風でもなく俺の側に立ち続ける——対して時間も経つてないはずなのにやたら長く感じる。待つのは犬の本懐——『戌』に倣ってみようと思ったがそれでも全然気が晴れない。

無理を通した以上、それに対して何かして来るのは仕方ない——だけれど他に誰か居ないもんかね。

取り立てて会話するようなこともなく長つたらしく時間が過ぎていき、漸くと俺を向かいに車が来た。

それと同時に煙のように消えるドウデキヤプル——位置と角度からして車に乗ってる奴らからも見えてるはずなのに何事もないようにドアを開けて向かい入れられた。

全く持つて訳が分からない存在だ。

しかし、いつまでも奴のことなど考えてる訳にもいかない。

今日の仕事の説明を受け、それからは無言のまま窓の外の景色を見る——前とは違う道なので新たな街並みに少しばかり心が湧く。

運転手や同乗者たちはそんな俺を見ながら何か言いたそうにしてるが、事務的な説明の後は一切の世間話もなく静かなものだ。

俺に関わりたくないのか、何もするなと指示されているのか——有力者うんえい関係者じゃなさそうだが絶対にそうだとも言い切れるわけでもないし、このままが無難だな。

三十分ほどで今日の職場である倉庫に着き、直ぐに指定された場所に向かう。

ケヤキモールの量販店に納品される品物が収まっている段ボールがズラリと並んでると思っていたが、僅か十二箱か。

中が詰まってるのかと思いい箱を開けてみると大きめの雑貨がひとつだけ、こんなの直ぐに終わっちゃうじゃねか。

裏に回ってみるも狩るべき雑草も大してなく——おまけにこれ見よがしに裏口が中途半端に開いていた。

逃げるならご自由になってか——そのまま逃亡したら学校には堂々と規定違反で退学と報告出来て、俺は消されて全ての面倒が片付く。なんてことを俺が考えるのは想定内のはず——つまりは試してる

な。

俺が逃げるのか、留まるのか、それとも……。

振り返り『地の善導』を使ってみるが監視の目はない。倉庫内に戻って、仕事場周辺を見渡しても巡回をやっている様子は見受けられない。

つまりは俺を信用してくれているんだとセンチな気持ちになる訳もなく、誰も見てないときに逃げたと言うことにして、退学の口実作りに使用してるんじゃないかと勘繰ってしまふな。

だとしたらこのまま大人しくしていても意味は無いな———と思いつながら箱を全部開け、目を皿のようにして問題が無いことを確認。

裏の雑草も用具入れから小さな鉈を『丑』の剣捌きで狩り『申』の仙術による気体操作でとっと集めて終わらせる。

どっちにしても同じなら楽しまなきやな———折角の夏休みだし。

予想以上に早い———葛城がその着信を受けたのは、まだまだ午前中だった。

嬰兒からの配達手続きが終わった旨のメール———御丁寧に出入控えの画像も添付されており、送り先の住所や名前もしっかりと明記されており現物は戻ったら渡すとあった。

そして最後に『依頼は果たした。そっちも報酬の準備を』とあり、これには仕方が無いとは言え葛城も苦い顔になる。

そこに今度は一之瀬からの着信が入って来た。

「もしもし」

『あ、おはよう。いきなりだけど嬰兒くんからのメール見た？』

「たった今な。昼過ぎまで待つと思っていたんだが、なんとも仕事が早い」

『にやはははは———それだけ気合が入ってるってことでしょ。』

ああ、ホント楽しみなあ〜。段取りの確認したんだけど、いいかな?』

「断る理由は無い。ただ人目に付く訳にもいかんから、俺の部屋まで来てもらいたいんだが」

『おお、大胆だね』

「どうせ直ぐに解ける誤解だ」

『それもそつか。じゃ、今から行くから』

元気な声のまま通話が切られた。

「さて」

葛城もひと息ついて嬰兒への約束の為に用意した一冊の本を手を取る。

(何の因果でこうなるんだ?)

溜息が付きたくなるのを飲み込みながら立ち上がり、もうひとつ用意したものに目を向け、

「はあ〜」

やはり溜息が出てしまった。

さて葛城の依頼も無事に完了した。

これで本当にやるべきことは終わったので、ちよつくら町を散策する——と言つても金が無いから散歩しかできない。

依頼の為に用意された電子マネーは送料分しかないが『湯水のごとく』を使えば限界までチャージできる……直ぐに足が付くから止めておこう。

幸い行きたい所は徒歩で何とかなるしな。

振り返り百五十はある塔のようなデザインをした高層ビルに目を向ける。

「廃ビルにするには、ちよつと勿体ない気もするな」

誰に聞かせるでもなく口に出してしまう——ああ、やっぱり興奮が抑えきれない。

そんな気持ちを抱えているからか、周りの雑音よりも自分の足音の方が大きく感じてしまう。

コツ、コツと歩を進めながら周りの風景を見る。

カフェでコーヒーを飲みながら談笑している客たちケヤキモールでは学生だけだがこっちでは親子連れやビジネスマンと言ったのも見受けられる。

道路ではスピード違反か、白バイに止められた派手なバイクが切符を切られ、パーキングエリアに停まる車から降りたり乗り込んだり日光景——通りにある店には当たり前前の如き人の賑わいがある。

ただでさえ暑いのに道路を走る車の熱気が空気を歪め、広い筈の道を人が埋め尽くすように流れる。

五十万人も居る都市だ——これが一夜で消される筈だったんだよな、本来なら。

誰もいない町の道路のど真ん中を歩いていく姿をイメージし、その後待っている最高にぶっ飛んだ奴らとの殺し合いを思うと——途端に虚しさが押し寄せてくる。

ビルの前の噴水場に腰かけながら、

「ハハハハハ」

と喝いた笑いが出てしまう——有力者にやり直すつもりがない以上は無意味な妄想に過ぎない。

今ここに俺が居るのが何よりの証明、逃げ場など何処にもない——こんなことを知らしめる為にこんな手の込んだことしたのか？

端末を取り出して時間を確認すると、もう正午を回っており『子』の学校に行くことや『申』の住んでるマンションに居るかもしれない婚約者の男と話す時間は取れない。

昼飯時だし適当にコンビニに入って電子マネーの残高を確認したが0のまま、このまま待機してればいいのか、倉庫に戻ればいいのか、それとも適当に歩いていけば——さて、どれが正解かな。

おそらくどの選択肢でも最後に行き着くのは一緒、この町に来た時から試されてると悟った時から分かっていたことだ。

俺は歩き出す——明確な意図もなく、直感でもなく、ただなんとなく目に入る道を。

「ふ〜ん♪ふ〜ん♪ふ〜ん♪ふ〜ん♪」

冷房の利いた寮の自室の鏡の前で洋服を合わせている坂柳有栖——その鼻歌からして恋をしてルンルンであった。

見る者が見れば恐ろしく、何も知らない者が見れば可愛らしく、特定の者が見ればはしやぎ振りに呆れつつも苦笑することだろう。

一方で彼女のお相手とされている綾小路清隆は何をするでもなく、自室のベッドの上で寝そべっていた。

（明日のことがあるんだ。上の意図がどうであろうとも嬰兒は戻って来る——筈だ）

手っ取り早い理由を付けて嬰兒を退学にしようとしている——と言うことを考えなかった訳ではない。

ただそうなたたとして、どう助ければいいのか。

はつきりとした背景は分からないが、政治・権力的な拘束を受けたなら学生が騒いだところで何もならない。

（かなり……いや相当強引な手段を用いないと太刀打ちできないだろうな）

ただその為に「あの男」に頼るようなことになっては本末転倒——逆にそれを利用して徹底的に叩き潰すことが出来なたらば……。

嬰兒の身を案じているのか、災難が起きるのを期待しているのか——本人でさえ定かでない思考展開がなされていく中で、綾小路の冷めた目にはいつぞやと同じ暗く輝く光が潜め居ていた。

だだっ広い公園に付いた。水筒の水も無くなったから補充して少し休もうかと思っただが、何故か見るとこすべてにベンチのひとつも見つけられない。

町に着いてからざつと三時間——いよいよ事態が動き出すつてとか。

大通りに戻って信号が青の道に向かうが足を向けた途端に点滅して赤に変わる——こつちじゃないつてことか。

端末を確認するが指示はおろか、何も無い状態のまままで全く持つてじれつたい。

赤信号に異常なまでに引つ掛かりながら進路を変えて行き、行き止まりや通り抜けできない私道に出くわして引き返すことも何度あったか。

塀を飛び越えたり、まともの指示を出せと大声で叫んだりしたが、ここまで面倒な手段を取ることはあくまで偶然たどり着いたと言う体裁が必要つてこと——何が待つてるんだよ、一体？

そんなこんなでやつとのこととたどり着いた場所では中年のおっさんに向かつて出刃包丁を持った男が突つ込んでいく場面だった。

間に合わなかつたらどうしてんだ……いや、このギリギリのタイミングを調整したのか。

すかさず水筒を取り出して『射手』モードとなり投擲、

「ガッ!？」

男の手に命中して出刃包丁が宙を舞う。

モードを解いて俺は二人の間に割つて入り、そこに丁度落ちて来た包丁をキャッチして手を抑えている男に向ける。

背後に居るおっさんは訳が分からないと言つた顔で尻もちをついていながらも鞆を後生大事に抱えていた——その中身がここに俺が、いや外に出された理由かな。

とそれは後だ、まずはまだ殺気を収めていない目の前の奴だな。

「大人しく捕まったらどうだ？痛い目にあいたくない無いだろう」

「き、貴様……な、何者だ?!」

「ただの通りすがりの学生だ」

「ふざけてるのか!」

興奮が増して目が血走つて来たな——それに対して俺の後ろのおっさんは恐怖こそあれども驚きはあまり感じないようで鞆を更に

強く抱きしめている。

命を狙われるだけの覚えがあるってことか。俺に対しても何も言わないってことは助けが来るのを知っていたか、もしくは詮索するのは不味いとしてるのか。

さて一体何者なのかな？

なんであれ無防備に逃げようとしてくれないのは有り難い。

どの角度からでも護れる様に足取りを選びながらも周囲を警戒するが狙撃可能なポイントはない。

つまり目の前の男さえ撃退すれば良しってことか。

その男の方は抑えてる手を懐に留めてジツとこつちを見ている——明らかに殺すことを諦めていないな。

こうなつてくると些か俺にも欲が出てくる——出刃包丁を構えるのをそのままに背後に目を向け、それとなく隙を見せる。

「……ッ!!」

上手く釣れたな。予想通りに隠し持っていたデリンジャー小型拳銃を抜いて発砲——バアン!——と発砲音が響き弾は俺の腕に当たったが『午』の防御術『鎧』の前には意味は無い。

それでも不自然に映らないよう包丁を振り切り、弾をはじいた演出を見せる——そして人間相手に使うことの無いと思っていた『丑』モードとなり、皆殺しの天才に倣った剣技を以て暴漢に向かい踏み込んだ。

ああ、なんだろう——瞬きするほどの時間も無い筈なのにスロ—モーションに感じる。

コンマ一秒で刃は男——刺客に届き、一撃か多くても二撃で絶命させられるだろう。

銃を向けられた、撃たれた、正当防衛は成り立つ。

なのに——自分でない他の誰かに染み付いている習性だからか、身体とは別に心が切り離され妙な思考が巡る。

決着は一撃で着いた。

振るった出刃包丁は正確に急所を殴打し、刺客……いや暴漢として置こう。暴漢はあっさりと気絶した。

時の流れが戻っていくとセンチな感傷に僅かに浸りながら振り返ると、おっさんは俺を見て警戒心をむき出しにして後ずさっている——それでも鞆を放そうとしないのが印象的で余程の物が入っているのは明白。

「逃げるなら早くした方がいい」

「……!?!」

そう告げると立ち上がり、大急ぎで車に乗り込みエンジンを吹かせて去って行く。

ひと言も会話は無かったがこれで良かったはず……伸びてる男は警察が来るまで見張ってるのがいいかとも思ったが、

「お見事です」

いつの間にか現れたドウデキャプルの声に持っていた出刃包丁を放り出す。

心なしかさつきまで静かに感じていたのに今は蝉の鳴き声が兎に角うるさくて堪らない。

「後の処理は任せていいってことか?」

「はい。どうぞこのままお戻りになられて結構です」

あっそう。ならとつと行かせて貰う、こんな所に一秒だって居たくない。

「ああ、ですが折角の夏休みですのでじっくりと町を観光されてはいかかでしょう。」

本日の報酬分はもう振り込んでありますので、外に居る間に使い切ってくださいると助かるのですが」

仕事はまだ終わりじゃないってことか——偶々夏休みを謳歌している学生が、偶々通りかかって、偶々通り魔から見ず知らずのおっさんを助ける。

あくまで偶々が重なった偶然の産物であると、そんな体裁が必要ってことか——だったら少しだけ踏み込んでみるか。

「そこまで念入りにアリバイ作りが必要か——あの鞆の中身って相当なものなんだな」

「曰くこれを提出すれば“この国をひっくり返すことが出来る”との

ことですが、お聞きになりたいですか」

「そんなこと俺が知る必要などないだろう」

俺がこう答えるしかないと分かって返しやがって、嫌味な奴だ。

しかし法治国家で暗殺か——どんなに時代が進み文明的になろうとも人間の性は変わらないってことか。

そして、それを防ぐための力が働いていることも公けにはしない——全ては藪の中、権力闘争は常に見えない所で繰り広げられる。

そこにあらゆる倫理も道徳もない——『子』や『寅』程じゃないが、一体何を守るために戦わなきゃならんのかねえ。

あのおっさん、今の話からすると相当に高い地位に居る政治家か官僚——おそらく前者だろうが、命を狙われるほどのこととなれば、より良き世の為ぐらいの期待ぐらいはしたいものだ。

「アルバイトがもう終わつたなら、俺も好きにさせて貰う——制限時間もんげんに迎えに来てくれるのを希望する」

「この町を出ないなら何処でも可能ですので、ごゆるりと」

紳士的にお辞儀をしながら再び煙のように消えた——学校に戻るときも背後からとかは勘弁してくれよ。

なんであれ言質も取つたし、腹も減つたし取り敢えずは飯だな。

コンビニで金額を確認すると入っているのは五千未満、あくまで公式のアルバイト代つて訳ね——さっきのいざごぎは偶々の出来事、不服を申し出たなら今度こそかな。

安売りのおにぎりを二個買って店を出て、歩きながら食べる。

目的地は町の中心部に建つ高層ビルの最上階——要するに元の場所のだが、来た時同様な回り道はしない。

把握した道の中の最短の距離、最短の時間で戻った。

今度は遠慮する必要はない——堂々と正面玄関から入り、人があふれるホールの中で上に行く手段、エレベーターと階段を見比べる。

幾人かは逃げ場のない移動手段なんて使わず百五十階だろうと自分の足で登っていき、また階下なりに仕掛けを施そうしてくる輩も居たりするだろうな。

戦いは既に始まっている——そんな緊張感など全くない今の光景

を目に俺はエレベーターで最上階に行く。

フロアでは何かしらのパーティーが催されてるようだが……こんなこと本当なら出来たかどうか？

会場どころかフロアそのものが吹っ飛んでもおかしくない。いや、数回前の大戦同様に僅かな時間で決着が付いてしまえば——『蟹』と同じような事が出来るとしたら直ぐに思いつくのは皆殺しの天才である『丑』か老獪な『未』あたりが妥当。

可能と言う意味では『申』もだがやるとは思えないし、そうしたとしてもそれは逆の意味でだろうか。

無意味な過程、無意味な感傷ばかりだが今日くらいはどつぷりと浸っていたい。

そしてこうしていると『子』の異能を受け継げなかったのがつくづく惜しく思えてしまう。

そう思いながら外に出るドアを開けて見晴らしのいい所まで移動する。

予想以上に早く片付いたし、ある程度の自由も認められた。

ここからなら『辰』いや『乙女』の飛行能力も持ってそこそこ遠い所にも行ける。

ドウデキヤプルは制限時間にこの町に居ると言ってたから戻ってくる時間も充分だ。

うくん、どうしようか。

「そろそろお時間です」

背後からドウデキヤプル——すっかり日が暮れて暗くなったとは言え、声を掛けられるまでまるで気付かなかった。

こうなることも考えて警戒は怠ってないかったと言うのに……。

「あれからずっと此方に？ なんと物分かりが良くてとても助かります」

「時間的、時期的なことを言うならもつと暗い方が俺的には良かったりするんだがな」

「おやおや、冬に向けてのリクエストですか——お伝えはしますが、ご期待に添えるかどうかは保証しかねますが、それでもよろしいですか？」

「望めるだけは出来るのか——なら、まだまだ一杯あるんだが」

振り返りながらみたドウデキャプルは不敵な笑みがあり、なんとも嫌な感じだ。

「フフフ、いかにも斬りたそうにしてみましたし——やはりあそこで殺さなかったのはストレスでしたか。」

でしたら別に構いませんでしたのに、警告をした上に発砲——100%、正当防衛で通りましたよ」

「普通ならな、俺なら過剰防衛にされても不思議じゃないだろうが」
「ほほう、それは本音ですか？」

ああ勿論、殺すのが怖かったなどとは思ってはおりません。

しかし手を汚したくない理由は他にあるのではありませんか？」

何もかもお見通しってか、腹立たしい。

「これ以上は良し解いた方が精神衛生上よさそうだな」
「そうですか、では迎えが待っていますのでお早く」

紳士的にお辞儀しながら腕を伸ばして帰るの促してくる——乗せられたのは明らかだが、ごねたところで時間の無駄だ。

立ち上がりビルの中に戻る

嬰兒がドアを閉じた際にドウデキャプルは帽子を手を取って再び深々とお辞儀をした。

そのまま待機していた車に乗って嬰兒は何事もなく学校に戻り、翌

日に控えたダブルデートに胸を高鳴らせる——今回の仕事で報酬を受け取ると瞬間を。

ダブルデート

「ああ、予定通りに頼む。それじゃ」

通話を切って待ち合わせ場所に向かう。

「おっはよく、嬰兒くん」

横から一之瀬が来た——ゆったりとしたベージュのブラウスにセータープレスの白パンツと見ようによっては仕事帰りの女性と言った感じだ。

一方、俺は紺のサマーニットに青のスキニージーンズと若干、どなたかを意識してしまった格好だったりする。

「おはよう。時間通りになりそうだな」

「にやははは、もう居たりするのかなあ、あの二人？」

「寮も一緒に出て待ってるはずだ。もう少しゆっくり行くのもいいと思うが」

「さんせ〜」

終始ニコニコしてる一之瀬と一緒にのんびり行くこと十二分——ジャスト時間通りに着いてみると、

「フッフ、ホントですか？」

「ああ、それでな」

楽しそうに談笑している坂柳と綾小路の姿。

綾小路の方が白のリンネシャツにデニムパンツと面白味に欠けるもそこそこの頑張りが見える。

対して坂柳は白のリボンハットに似合う薄いピンク色のワンピースにケープを羽織りスカーフ柄のベルトもお洒落で気合の入りが違う。

「なんかもう既に胸がいっぱいだね」

「おいおい、まだ始まってさえないんだぞ」

いつまでも突っ立ってる訳にも行かないし、手を引いて歩き出すとこっちに気付いた二人も手を振って来た。

「お、来たか——しかし、」

「時間通りですね。ええ、これは早速、見せつけてくれますね」

綾小路と坂柳の視線が握ってる手に向けられるが、

「そっちには負けるよ」

「うん、ホントにね」

一之瀬と一緒に苦笑しながら、

「改めて、おはようさん」

「おはよう、坂柳さん、綾小路くん」

挨拶をかわして、ダブルデートが始まった。

「すみません。歩くのが遅くて」

海沿いの道をゆつくりと歩きながら坂柳は言った。

「全然、構わないよ。でもこうなると日傘も持つてくればよかったね」

潮風に髪をなびかせながら一之瀬は照り付ける日差しに坂柳を心配そうに見る。

「重ね重ね、わがまま言ってすみません……どうしても最初はここに来たかったので」

「何かいい思い出もあるの？」

「はい。ちよつとした冒険をしたことがありまして」

笑顔で答える姿になんとなく一之瀬は察するものがあり綾小路にも視線を向けた。

「前に暑さに参ってる有栖を介抱したことがあってな——もうあんなことは駄目だぞ」

「……………はい、もう帽子を飛ばされないように気を付けます」

この台詞に綾小路も一瞬言葉を詰まらせたような顔になる。

「だったら今気を付けた方がいい」

「あ——」

海を見ていた嬰兒の言葉と同時に強めの風が吹いたが、既に反応していた綾小路が坂柳の後ろに立って頭を押さえる形で事なきを得る。

そして突然の事態に坂柳の足がもつれてそのまま綾小路の懐に倒

れ込み——背後から抱きしめているポーズになった。

「大丈夫か、有栖」

「ええ——それにしても流石ですね。牛井嬰兒くん」

風が来ることを読んだことを当然と言ったニュアンスに嬰兒は肩をすくめた。

「波が荒れてたから適当に言っただけだよ」

偶々だと主張するが、坂柳と綾小路にはあまりの出来過ぎに仕組まれた疑いを持った。

ましてや前科がある相手であるだけに余計に……。

「そっかあ、でもお陰で早速いいものを見せて貰えたね」

一之瀬が遠回しに抱き止めたままを指摘するとももの、当人たちは当たり前のことに今ひとつピンとこないようだった。

これだけで既に胸一杯だったのが溢れかえり、このまま解散となっても肯いてしまう。

「出来ればもう少し潮風に当たっていたいのですがご迷惑になりかねませんし、予定を繰り上げましょう」

「別に構わんが、有栖がまだ物足りならオレは全然構わんぞ」

言いながら綾小路は嬰兒と一之瀬を見て確認を取って来る——しかし雰囲気的に否といえるものでなく、無自覚てんねんなのか確信犯なのかと（割とどうでもいいことを）勘繰ってしまう。

「おう、気遣いは無用だ」

「そうそう。迷惑だなんて思ってないし、みんなで楽しまなきゃ」

しかし満更な訳でもなく、意気揚々と坂柳のリクエストが継続の流れに落ち着いた。

「はい、ありがとうございます」

心底嬉しそうに言いながら坂柳は杖を突いて綾小路の腕から再び歩き出そうとするも、

「……あっ」

転ばないようにそれとなく介助する綾小路に更に嬉しそうになった。

（うわ〜〜）

その滅多に見ることは出来ないであろう顔に一之瀬も満面の笑みを浮かべ、この日の出だしは最高のものとなったのだった。

ひとしきり海岸を歩いた俺たちはケヤキモールでショッピングに洒落こんでいる。

「坂柳さん、これなんか似合うんじゃない——ああでも、こっちのもいかな〜?」

アクセサリーショップでは一之瀬が大いにはしやぎながら坂柳にあれこれ進め、

「いや有栖にはもつと落ち着いた色がいい。だからこつち方にしよう」

綾小路がことごとく却下しながら自分もお勧めするふりしながら、彼女をよせてそれ以上近づけさせないようにしている……文字通りに傍から見ると、独占欲の強いバカツプルだな。

しかしこれって逆効果なんじゃないのか?

「ええ〜、そうかな〜。もつとキラキラしたのもいいと思うんだけどなあ」

ほら一之瀬の奴、益々目をキラキラさせながらグイグイ来てるじゃん……ここは助け舟を出すべきだな。

「どうせならお揃いにした方がいいじゃないか?」

「うんうん、私も嬰兒くんに賛成。だったらこのペアリングとか、どうかな?」

俺の援護を受けて更に調子に乗る一之瀬——綾小路の目にも流石に非難の色が見えるが、今日に備えて借金までしてるんだ、手が届かないこともないだろ。

ポイントを貸した軽井沢なんかもどんな感じになるか訊きたいって言ってたし、色っぽい話が多いに越したことはない。

「おお、いいな。ネットクレスに通すとかすれば、普段でも身に付けられるし」

すぐそばにある棚からシンプルで飾りのないネックレスも指してみると、坂柳の方は食指が動いたようで表情に明らか迷いが見て取れた。

それは綾小路も同様と言うか、寧ろ俺よりも早くてさり気なく値段を見ている。

価格は二千もないし高校生が身に付けても違和感もないデザインだ——余り迷うならもうひと押しか。

「あのすみません——」

どうするのかと思つたが店員に話しかけて飾られてるネックレスを手渡される——坂柳にも同じ物を。

余計なお世話をしなくて済みそうだな。

「あ、こつちもいいですか?」

一之瀬も陽気な声で店員の許可を取り、さっきのペアリングを手にとってそれぞれに翳して……俺にもやらしてくれんかねえ。

「うん、良く似合ってるよ。二人とも」

この誉め言葉に坂柳は満面の笑みを浮かべた——やつぱり俺にもやらして、正面から見たい。

「はい、ありがとうございます。私も清隆くんによくお似合いだと思います」

「そうかな?」

これを受けて綾小路はよく分からないと言つたニユアンスで応じてるが、有り体には照れてるってしか見えない。

うん、この位置も悪くは無いかも知れない——そんな俺の目に気付いてか、指輪とネックレスを持って会計に向かう。

綾小路も甲斐性見せるじゃないか、こうなると俺も何かしら買った方がいいかなと思ひ裝飾品を見て回るが一之瀬あいての質が高すぎるからか似合いそうだと思うのも必然的に値の張る物ばかりになつてしまふ。

そんな中で目を引いたのは、猫をモチーフにしたキーホルダー。

普段の猫語からして嫌いではないと思うが、それでも種類が多いな。

一度、一之瀬に目を向けてどれを買うかを決めた——あまり愚図ついでられないから俺もとつと会計しよう。

なんであれ始まってからここまでデートは順調だ——さて次は服を見に行くんだったか、更に張り切る一之瀬帆波の姿が目には浮かぶな。

「折角ですから秋物も見ておきたいですね」

夏物には目もくれず、坂柳はそう言って出始めたばかりの品々のコーナーに足を向ける。

さしずめ何かを察しているようで、逆に目を輝かせて清純な柄の服の数々と坂柳を見比べていた一之瀬は残念そうにしながらも歩く。

新作のタグが付いている物も多く、お洒落に拘りのある者からすれば選り取り見取りであるものの——それに見合うだけの値も張っていた。

(予算はまだいけるか……)

綾小路は顔には出さないようにしながらも内心では少々焦りが湧いてきた。

「一之瀬、このコートとかどうだ？」

一方で嬰兒はキャラメル色のチェスターコートを進めていた。

彼女のストロベリーブロンドと今の格好からしてキャリアウーマンさが際立たせる。

「おいおい、一之瀬にはもっと明るい色の方がいいと思うが」

突然の第三者の声に振り返ると南雲雅と数人の取り巻きたちが居た。

「これは南雲先輩——奇遇ですね？」

嬰兒が返すと一同は一斉に注目し、セミロングの女子が口を開く。

「この一年、例の特例の生徒よね——雅、知り合いなの？」

「手続きの際にちよつと話したただけだ」

「あー、そうなんだ。あ、私、朝比奈なずな——ねえ、連絡先交換しな

い？色々とお話ししたいんだけど」

「申し訳ありません先輩——今は私が先約なんで」

下心見え見えで迫って来る朝比奈の前に一之瀬が出て牽制する。

嬰兒に頼むには一之瀬を通さなければいけないと暗黙の了解が広がっているのも事実であり、その了解に基づいて話すべき相手を変えようとするも、

「そうだけ、こいつにお願いしたいならそんな方法じゃ無理だ」

南雲がその方法は駄目だと援護してあっさり引き下がった。そして得意げに坂柳と綾小路に目を向ける。

「お前たちとは初めましてになるか——二年、生徒会副会長の南雲雅だ。

ああ、そつちは知ってるから自己紹介はいい。特に綾小路——堀北先輩に目を掛けられてるんだってな？」

「別にそういう訳では——」

「謙遜することないのでは、清隆くんなら何も不思議ではありません。寧ろ、僅かな期間で見抜いた堀北先輩には敬服します」

「その通りだ、堀北先輩が買っているなら間違いないはずだ」

堀北学に対して並々ならぬ執着を垣間見せるが、それも直ぐに抜けて笑みを浮かべる。

「尤も俺たちと絡むことになるのはまだ先の話だ——今日はただ挨拶して置きたかっただけ」

「それで清隆くんは南雲先輩の眼鏡に適いましたか？」

坂柳が前に出て挑戦的な目で訊く。

その大胆な行動に取り巻きたちは若干驚くも肝心の南雲は面白そうにじつくりと値踏みする様に——する前に綾小路が庇うように出てくる。

「用があるのはオレでしょう？」

「ほう。噂通り、そいつの為にしか動かないか」

南雲が愉快そうに言うのと綾小路は不愉快な目になり、少々不味い空気になる。

「そう怖い顔するな——お前の女を取ったりはしない」

あつさりと引き下がる南雲に一同は安堵するもあまり面白くない綾小路は訊く。

「先輩は何しにここに？」

「ちよつと面白いイベントがあるって耳に挟んでな」

「それはよく当たるっていう占い師が来ると言う——でもそれは明日からのはずじゃ？」

坂柳が不思議そうに言うとな雲は嬰兒と一之瀬に目を向けて笑いながら返した。

「俺たち生徒会役員みたいな一部しか知らないことだ——興味があるなら夕方ぐらいまで居るといい、きつと特等席で楽しめるぜ」

訳が分からないと共通の思いが綾小路たちだけでなく取り巻きたちにも湧いた。

そもそも娯楽も含めた生活設備が充実しているとは言え限定的なもの、テーマパークなどのレジャー施設は無いのは勿論のこと規則上からアイドルなどの著名人を招くことも不可能。

もとよりそこまで広い場所ではない、新しいイベントがあるなら噂はすぐに回る。

そんな形跡が無いことからして南雲が冗談を言って、からかっていると疑いの目を向けらる。

しかし当人は涼しい顔のまま、

「じゃ、デートの邪魔して悪かったな——また会おうぜ」

何も答えることなく行ってしまった。

「何だったんだ、一体？」

「さあ？」

綾小路と坂柳が呆けている横で嬰兒と一之瀬は困ったような顔を見合わせていた。

まったく予期せぬ南雲の登場にはヤキモキさせられたが何事もなくてよかった。

新しい服を買うのもまたの機会にしようつてことになりかけたけど、

「ええ、折角来たんだしもつと見て行こうよ。色々試着とかもしたいし」

「いえ、そう言うのはちよつと……」

一之瀬が粘り説得するも生来身体が不自由な坂柳には流石に遠慮したい提案のようだ。

「大丈夫、私も手伝うし。ね、行こ！」

「ああ!？」

押し切られる形で二人の美少女は試着室に消えた——綾小路と残された俺はなんとなく声を掛ける。

「占いか——お前も将来のこととか見て貰いたいとかあったりするの
か?」

「少し前なら非現実的な事なんてとか思ってたが——今はな」

「おやおや興味津々でこつちを見て——何に期待してるんだか?」

「嬰兒は神のお告げでも降りてくる口か?」

「誰かの未来を見るなんて出来ないよ」

「誰か」はか」

言葉の端々も見逃さないってか——どこのクレマーだよ、鬱陶しい。

「無論、俺自身についてもだ——ただ考えなかった訳じゃない、百の未来を見ることが出来たら」と

受け継ぐことが出来なかった『子』の能力、同時に百通りの行動を分岐し実行できる干渉力『ねずみさん』——それがあれば有力者のい
いなりにならないという選択肢も選べた。

例えそれでダメだったとしても元より保証される身分もない紛い物——最も嫌がらせになる終わり方を確定して派手に散るのも悪くは無い。

と、こんな妄想が出来ていたらなんて軽く考えられるのと実際に百通り全てが無駄だと実感するのは天と地の差だろう。

ささやかな使い方で俺が好きに動く選択とこれまでのように動か

ない選択を同時進行すると言うのも考えたが、好きに動いた結果を常に消さなければならぬのは想像を絶するストレスだろうから今頃は爆発してるか、もう居なくなってるかもしれないな。

一縷の望みとしては綾小路が俺以上の結果を出してくれる展開なら諦めもつけられるが、これもまた意味のない仮定でしかない。

「百の未来を、か？」

おや、これまでにないほどに興味津々のようだし、もう少し続けるか。

「綾小路ならどうする？百通りの選択肢中から良いものだけを選出しづけられるなら？」

「それは逆に言う悪い選択を消していくってことか？」

ほう、いきなり本質を突いて来たか——大抵は便利だと飛びつきそうなのにな。

「それが99となると色んな意味でエネルギーが要りそうだな——ちなみにその未来はどの位的中率なんだ？」

100%だ——なんせ実体験なんだからな。

素直にそう答えても良かったが——丁度その時にカーテンが開いて、

「ジャン、どう？」

と一之瀬が着替えさせた坂柳を披露した。

花柄のレース仕立てのワンピースドレスで一之瀬に握って貰っている右手とは別に左手でスカートの端を掴まんで優雅に会釈する。

「どうでしょうか？」

「ああ、綺麗だ。よく似合ってる」

ストレートな感想に満面の笑み……一之瀬の心に火が付いたようだな。

「じゃあ、次はこっちね」

「え、あ……」

再びお着替えが始まった——こっちも再びの間に今度は綾小路から声 came。

「100の未来を選べるなら有栖にこの店のある服を手当たり次第に

着て貰いたいな」

なんとも返答に困るな。

その後も白の無地やらカラフルな柄など兎に角ドレス風のゆつたりとした服を好んで着せていき、最終的にはシンプルな白のワンピースドレスが一番だと本人と幼馴染君の好評もあつて落ち着いた。

そして折角だからとその格好のまま引つ張って行き、一之瀬の調子いい感じで――

「綾小路くんの方もさ――もうちよつとお洒落しようよ」

「私が見繕いましょうか、清隆くん？」

「そうとなれば善は急げだな」

提案し同調した坂柳と俺に背中を押されながら紳士服のコーナーにと――なんだかんだと秋物の黒いテーラードジャケットを買うことになった。

うん、全ては順調だ――ただもう少しゆっくりでも良かったんじゃないか？

買いたい物を買った後、昼食を取り適当にウインドウショッピングをしながら時間を潰す。

「特に目的を定めず、ただ歩く――思ってたほど退屈じゃなかったな」

「はい、お店も商品も一杯あつて、とても楽しかったです」

綾小路と坂柳は終始変わらないまま、一日の殆どにも及ぶデートを満喫したようだ。

それは時間を忘れるほどの楽しい思い出と言えるが、流石に日が傾いてきている時間になり、もうお開きにするべきかと綾小路が言いだそうと思つた。

「ねえ、最後にもうひとつだけ行きたい所があるんだけどいいかな？」

一之瀬の提案、それもそれまでにないとびっきりの笑顔で――とてもではないが断れることができない。

「そうだな、このまま適当に解散じゃ締めも悪いしな」

嬰兒も氣前よく乗って来ており、話は決まった。

嬰兒たちが来たのは噴水広場であった。

美しく幻想的に整備された空間はロマンティックであり、偶々ではあるが時間帯や背景に並んでいる木々は二人の再会した場を思い出し、デートの締めくくりの場には最良と言えた。

「折角ですから近くで夕食にしますか？」

「そうだな、いつそ何かテイクアウトしてここで食べるのも良いと思うんだが？」

気分が高揚している坂柳と綾小路からの提案だったが、

「ご飯もいいけど、その前に写真撮らない？今の時間帯だとすつごく絵になるんだけど」

「ただ綾小路はそのままじゃ素っ気ないから、丁度いいから着飾ろうぜ」

「まあ、別にいいが」

嬰兒は昼間に買ったジャケットを指してせっついて、綾小路も断る理由もないことからなし崩しにジャケットを着て噴水の前に行く。

「さ。坂柳さんも」

一之瀬に手を引かれながら坂柳も困ったような——しかし満更でもない顔で綾小路の隣に並ぶ。

「うくん、なんだかそうしていると結婚式の写真撮るみたいだね」

綾小路のジャケット姿がタキシード、坂柳の白のワンピースはウエディングを連想させる。

そう言われて初めて意識した二人は、やや反応に困ると言った仕草で——有り体に言えば照れている様子だ。

そんな二人をニヤニヤしながら一之瀬は更に調子に乗る。

「うくん、その帽子もいいけど——どうせならやっぱリヴェールとかがいいよねえ」

「一之瀬さん——流石にそんなものが——」

坂柳が窘めようとしたが、

「あ、何故かこんな所にこんな物が」

なんともわざとらしいニユアンスで一之瀬が鞆から、シンプルな花飾りのついたヴェールカチューシャを取り出した。

「おー、なんと準備がいい——こうなると後は花束があれば」

同じく嬰兒がわざとらしく言うのと、

「そう言うことなら、こんなのがあるぞ」

予期せぬところから声が見てみると、取り巻きたちを連れた南雲が小さめの造花の花束を持ってやって来た。

「ここまで来れば綾小路と坂柳も事の次第を把握した。」

「えらく気の利いたサプライズだな」

綾小路が嬰兒を見ながら言うが、このデート自体が嬰兒抜きで勝手に進めただけに強くは出られない。

(味な真似を……)

「南雲先輩まで乗るのは、まあ、分からなくはないですけど——そこまで仲良しでしたか？」

坂柳が花束を受け取りながら綾小路に身を寄せる。

「この学校、ホントに娯楽が乏しいからな——話を聞いた時にはちよつと驚いたが、この先を考えると悪くないイベントだと思っとな」

その姿を面白そうに見ながら南雲は答えた——しかし中途半端な解答に眉を潜める綾小路と坂柳、そこに端末を取り出す。

「寧ろここからがメインなんだよな」

操作してかざすと美しいメロディが流れてくる——曲は結婚式ではポピュラーな『真夏の夜の夢』の結婚行進曲だ。

この益々ベタな演出に乗って、意外な人物が登場して来た。

「葛城くん……」

「……なんだ、その格好は？」

坂柳と綾小路は神父服を着て、手に分厚い本を抱えた葛城の登場に流石に目を丸くした。

「これで役者が揃ったな」

嬰兒の言葉に二人は事情を把握した。

「特例の頼みを引き受けた条件つてのがこれか」

「こんなコスプレ姿をさせられるなんて、どんな羞恥プレイですか？」
「それは、これからだよ」

一之瀬が坂柳の帽子を取ってヴェールカチューシャを乗せて離れると丁度メロデイが終わり葛城は二人の前に立ち言った。

「坂柳有栖、綾小路清隆。」

本日お二人はここに集まった皆様に見守られて 晴れて夫婦となることができました。

この喜びを忘れることなく——力を合わせて明るく幸せな家庭を築くことを誓いますか」

「誓います」

真つ先に坂柳が、とびつきりの笑顔で言う。

心なしか、その目はキラキラと輝いて見える。

そしてもう一人の主役の綾小路は出来上がってしまった流れに逆らえることが出来ない——と内心で思いながらも満更でもない己の心持ちで、

「誓おう」

淡々と言った。

しかし周りの反応は正反対であり、

「よ！憎いね、ご両人」

「このままキスしちやいなよ」

「間違いなく、この学校の歴史に残る瞬間だ」

と大いに盛り上がっていた——主に南雲の取り巻きたちが。

そして南雲は結婚式ごっこから、首謀者えいじに向かつて言う。

「次の冬休みにはもっと盛大なのをやってみようか？それこそ学校のイベントでだ」

「見返りに何を願いますか？」

「俺の部下になれ……は釣り合わないだろうから、次の特例を誰にするかを俺に決めさせろ」

「中々に強かですな」

「だが悪い話じゃないだろ」

特例を行使する際の決定権を他人に譲れば嬰兒自身に群がってくる輩は無くなると言ってもいい。

更にその条件が今回以上の結婚式ごっこのプロデュースとなれば、娯楽的イベントが皆無なこの学校なら大に盛り上がり、手段と目的が逆転して上の目論見をかわすことにもなる。

何より双方の娯楽として利害は一致している。

しかし、ダシにされた綾小路とうじしやからすれば聞き捨てならない会話だ。

(オレを身代わりにする算段に便乗しようって腹か——だがそうはさせないぞ)

眉間にしわを寄せながら話に割って入ろうとしたが、隣の坂柳がギョツと腕を絡めてきて引き留めた。

(心配しなくても大丈夫ですよ)

そんな視線を送り、

(何故そう言い切れる?)

と視線で返す——そんな二人を見ていた一之瀬が不愉快そうに言った。

「もく、綾小路くん——顔が怖いよ」

そして、それは嬰兒と南雲にも及ぶ。

「そつちもムードを壊す辛気臭い話は無しにしてくれないかなあ」

「ごもつとも」

「それもそうだな。悪かった、牛井も今は忘れてくれ」

このダメ出しにより、話は打ち切られ——そのまま一之瀬は流れに乗ってどんどん進めていく。

「さ、いよいよ記念写真だよ——笑って、笑って」

(ほら)

(見事だ)

促されながらも意志を確かめ合い、

「はい、チーズ」

柔らかな笑顔の写真が出来上がった——そして言うまでもなく、この一件は瞬く間に広がり日付が変わる前に学校中で持ちきりになるのだった。

そんな予測をしながら、次は指輪の交換だと一之瀬を筆頭に盛り上がり、もみくちやにされてる綾小路に俺も視線にメツセージを込めた。

もつと強くなれ。

その為に必要なのは本当に俺かな？

季節は移る。

明日で夏休みが明ける——普通なら最後の思い出や新学期への期待もしくは憂鬱などがあつて然るべきだ。

しかし今、この学校ではひとつの話題で学校中が盛り上がっている。

曰く——坂柳と綾小路の結婚式をプロデュースすれば、長期休みの特例に選ばれる——学校の掲示板から個人の噂まで知れ渡り、色んな輩が様々な様式を論じ合い提案してくる。

学校一のバカツプルと公認された坂柳と綾小路の元に……。

お陰で俺の方は静かな日々を過ごしている。

サプライズ方式にして俺には当日までのお楽しみらしい——結構なことだな。

しかし中には、やっぱり青春の思い出をと勤しむ健全な男子も居て、

「俺も青春が欲しい」

と池を始めとした三バカどもから、一之瀬をプールに誘ってくれと頼まれた——目的が露骨に分かり易くて、突っ込む気も失せる。

曰く「結婚式ごっこの件に女子が夢中で誘えないから責任を取れ」……知るかそんなもの。

「綾小路ばかり鼻負するな」

「無人島じゃ、俺たちだつて頑張つただろ」

「俺たちだつてご褒美が欲しい」

ゴチャゴチャ煩いから、自分で何とかしろと突き放した——がそれでも一之瀬や櫛田、それに堀北まで誘えとしつこく食い下がってくる。

なんか善からぬ疑惑が湧いてきたな。

だから、

「誰に頼まれた？」

「な、何のことだよ？」

突然の問いかけに対して不自然さの無い反応——なのは予想通り、

重要なのはここからだ。

「衆人環視を外したから、直接俺を監視しろって言われたんだろ——誰の指示だ、隠し立てするなら容赦せんぞ」

言葉に少々威圧感を込めると、三バカどもに冷や汗が浮かぶ。

訳が分からない——その反応に間違いなさそうだが、裏が無いようには思えない。

もうひと押し必要だな。

「二度も言わすんじゃない——誰に頼まれた？」

「お、俺は池の話に乗っただけで……」

「おい、春樹！」

山内があっさり和白状すると須藤が声を上げるが、時すでに遅し——俺の疑惑に捉えられた池の冷や汗が増していった。

「お……お、俺は……別に……」

勿論、俺だつてこいつらに有力者の睡が付いてるなんて思っちゃいない——しかし、やはり裏が無い訳じゃなさそうだ。

それも相当に疚しい事柄で。

「口を割る気は無いか——つまり死ぬ覚悟は出来てるってことか？」

威圧に殺意を込めるも本気は出さず、自我が残す程度で——なんとも匙加減が難しい。

「じよ、冗談よせよ……こ、このくらいで……さ………殺人なんて」

何も言えない池に代わって、須藤が入って来たのでそつちを向く——ちなみに山内はビビツて声も出ない様子だ。

「そうだな。尤もだ——罪なんて犯したくない」

殺気を収めて落ち着いた声で言う。安堵の空気が流れて、三バカもホッとする——まだ早いぞ。

「だから犯罪なんてさせて欲しくは無いんだがな」

再び殺気を込めて目を向ける。

「すみませんでした!!」

大声で土下座する池——そして涙声でベラベラと語り始めた。

「と、盗撮なんてしません……計画も道具も全部捨てます! だから命だけはご勘弁を!!」

概ね予想範囲内だが、覗きか——ただ一線を越えず未遂に終わった。

「やってもいない罪を問い質しはしない——妄想で終わった幸運に感謝しろ」

完全に殺気を収めて言うのと瞬く間に三バカは行ってしまった。

まったく余計な仕事を増やすんじゃないやねえよ——ましてや犯罪の片棒を担ぐなんて退学でも文句は言えない。

今はどんな些細な事でも目を付けられる訳にはいかん……やっぱり誰かの差し金なのかな。

ただの思い過ごしだといいたが。

そんな悶々とした気持ちを抱えながらも夏休み最終日は何事もなく終わり、新学期が始まった。

午前の始業式が終わり、午後は二時間ホームルームとなっており？の教室では茶柱が淡々と説明する。

「二期は九月から十月初めまでの一か月は、体育祭に向けて体育の授業が増えることになる」

新しい時間割と体育祭の資料が配られていき、一部からは悲鳴が上がる。

「詳細は学校のホームページにも載っているから必要なら参照しろ」

「先生、これも特別試験の一環ですか？」

平田が挙手して質問する——これにクラス全員が内心で「そうだな」と返って来ると思っていた。

「どう捉えるかは自由だ——ただ各クラスに大きな影響を与えるのは間違いない」

ハッキリとしない返答——しかしクラスの命運を左右するとあって苦手意識を持っていた者たちは更なる悲鳴を上げた。

逆に運動に自信のある者たちのテンションは上がる。そんな中で、

「おいおい、これって」

「学校側のお膳立てとか」

「そうじゃなきゃ運命とかかな」

資料に記載されている内容を読んでいた者たちは好奇の目で綾小路を見る。

そこには全学年をAと?による赤組、BとCによる白組の二つに分けて勝負する方法を採用するとあった。

「二学期が始まってすぐに夫婦共同作業って……」

「無人島での続きって感じもするよな」

「いや、あの時よりもスマートにいけるんじゃないか」

「葛城も完全に失脚したって言うしね」

場の空気が一転して色恋に染まっていきそうになる。

「お前ら私語は慎め——今から体育祭の結果を説明するから、しっかりと聞くように」

茶柱が注意して軌道修正——資料に目を通しながらのルールを確認する。

・ 体育祭におけるルール及び組分け

全学年を赤組と白組の2組に分け行われる対戦方式の体育祭。

内訳は赤組がAクラスとDクラス。白組がBクラスとCクラス。

・ 全員参加競技の点数配分

結果に応じて1位15点、2位12点、3位10点、4位8点が組に与えられる。

5位以下は1点ずつ下がっていく。団体戦の場合は勝利した組に500点が与えられる。

・ 推薦参加競技の点数配分

結果に応じて1位50点、2位30点、3位20点、4位10点が組に与えられる。

5位以下は2点ずつ下がっていく(最終競技のリレーは3倍の点数が与えられる)

・ 赤組対白組の結果が与える影響

全学年の総合点で負けた組は全学年等しくクラスポイントが100引かれる。

・学年別順位が与える影響

総合点で1位を取ったクラスにはクラスポイントが50与えられる。

総合点で2位を取ったクラスにはクラスポイントは変動されない。

総合点で3位を取ったクラスにはクラスポイントが50引かれる。

総合点で4位を取ったクラスにはクラスポイントが100引かれる。

「当然ながら全ての競技には全力で望め、負けた時のペナルティは軽くないからな。」

それと先に言っておくが、勝った組はクラスがマイナスにならないだけで、何も無い」

「うげ、マジかよ」

「しかし、だからと言って他を当てしようなどとは考えないことだ。赤組が勝ってもクラスの総合点が最下位なら結局はマイナス——これで赤組が負けたなら」

マイナスは200——意味するところは『全力で戦い、手を抜くことは許さない』を前提に自クラスだけでなく連携も重視しなければならぬ、今まで以上に厳しい試験だ。

それでも無報酬と言う訳でない。

・個人競技報酬（次回中間試験にて使用可能）

各個人競技で1位を取った生徒には5000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で3点に相当する点数を与える（点数を選んだ場合他人への付与は認められない）

各個人競技で2位を取った生徒には3000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で2点に相当する点数を与える（点数を選んだ場合他人への付与は認められない）

各個人競技で3位を取った生徒には1000プライベートポイントの贈与もしくは筆記試験で1点に相当する点数を与える（点数を選

んだ場合他人への付与は認められない)

各個人競技で最下位を取った生徒にはマイナス10000ポイントポイント(所持するプライベートポイントが10000未満になった場合には筆記試験でマイナス1点を受ける)

・反則事項について

各競技のルールを熟読の上遵守すること。違反した者は失格同様の扱いを受ける。

悪質な者については退場処分にする場合有。それまでの獲得点数の剥奪も検討される。

・最優秀生徒報酬

全競技でもっとも高得点を得た生徒には10万プライベートポイントを贈与。

・クラス別最優秀生徒報酬

全競技でもっとも高得点を得た学年別生徒三名には各1万プライベートポイントを贈与。

「先生先生！この入賞者の特典！筆記試験の点数って!？」

「そのままの意味だ、池。競技で上位に入れば次の中間試験での加点を得られる——どの教科に使うのも自由だ」

三バカを初め学力に不安のある者には大きな恩恵であり、そうでない者もプライベートポイントを得られる報酬だが、いいこと尽くめである訳もない。

・体育祭終了後、全競技で獲得した点数を学年別で集計し、下位十名にはペナルティを課す。ペナルティの内容は学年ごとで異なる場合があるため、各自担任に確認すること。

「せ、先生、このペナルティって……」

「一年に課されるペナルティは筆記試験での減点。総合成績下位の十名は10点の減点だ。どのような形で減点されるかについての質問はここでは受け付けない。下位十名の発表も試験説明時に通告する」

仮に池や山内が入れば赤点ラインから10点多く取らなければ退学であり、厳しい試験になる——実際に不安のある者たちからは悲鳴が上がった。

説明は次に移り、競技の確認に入る。

種目は『全員参加』と『推薦参加』の二つに分けられ、前者は文字通りにクラス全員の参加が義務付けられ、後者はクラスから選抜された生徒が参加——自推や複数参加も可能。

「競技種目はプリントに記載されている通りだ」

全員参加競技

- ・ 100m走
- ・ ハードル競争
- ・ 棒倒し（男子）
- ・ 玉入れ（女子）
- ・ 男女別綱引き
- ・ 障害物競走
- ・ 二人三脚
- ・ 騎馬戦
- ・ 200m走

推薦参加競技

- ・ 借り物競走
- ・ 四方綱引き
- ・ 男女混合二人三脚
- ・ 三学年合同1200mリレー

「一日じゃ無理でしょ」

「当然の疑問だな、故に当然の答えで返そう。」

応援合戦やダンス等は一切存在しない——競技のみに終始する」

そして茶柱は一枚の用紙を取り出し、次の説明に入る。

「ここに参加表と言うものがある——これは非常に重要だから、よく聞くように。」

ここには全ての種目の詳細があり、お前たちは自分たちでどの種目にどの順番で参加するかを記入して担任である私に提出して貰う。

これはどの中学校でもないだろうから間違えないよう注意するよ
うに」

「自分たちで記入とはどの範囲までですか？」

平田の問い——茶柱はこれにも当然のように答えた。

「全てだ——競技の全てに誰が何組目になるかも話し合って貰う。締め切りが過ぎれば変更は不可能——これが重要なルールだ。」

期限は体育祭の一週間前から前日の午後五時まで、それを過ぎればランダムに振り分ける」

「先生、質問が当日に欠席者が出た場合はどうなりますか？」

個人で出るものは欠席扱いだとして、団体競技の場合はどのように？」

ここで堀北が挙手した——これまでの事から質問し疑問を解消できるのは今しかないのもそうだが、自身の前例があるだけにどうしてもハッキリさせて置きたいのだろう。

『全員参加』の競技は必要人数に達しなければ失格だ。

『推薦参加』の場合は代役を立てることが許可されている——その際には10万prが必要だ」

「不正防止の為ですね。」

ちなみのそれは本人の意思が優先されるのですか、それとも無理だと判断されればドクターストップがかかりますか？」

堀北は僅かに嬰兒に視線を移しながら続ける。

「基本的には自主性に任せる——止めざるえないのが明らかにされた場合は、言うまでもないな」

茶柱の目も嬰兒を向く——嬰兒の目が誤魔化せると言う者は居らず、もしもの場合は問答無用に止めさせられる。

これは一般論的には正しいが、クラスにとってはメリットとは言い切れない複雑な要因だ。

「他に質問が無いなら終わりだ——次の時間は第一体育館に移動しての顔合わせになる。以上だ」

説明が終わり時間も余っているのでクラス内では体育祭に向けて、それぞれのグループの話し合い……………

「なあ、綾小路。坂柳ちゃんと話すんだろ、俺も一緒に行っていいか

？」

「私も——出来れば司城くんとかと一緒に出られるようにして欲しいんだけど」

「あ、ずるい！」

「なに、どさくさに紛れて——」

とは余り関係ないことで盛り上がりを見せていた。

「あなたたち……勝つつもりはないのかしら？」

隣の席の堀北が溜息を付きながら言う。

「それなら確実な方法があるぜ」

そこに須藤が自信満々に乗り込んで来る。

「俺が全部の推薦競技に出りや、それで勝ちだ」

運動に自信のある須藤ならではの発言——しかし不満が無い訳ではなかった。

「それなら嬰兒くんが出た方がいいじゃないの」

「だよな——つーか、全員参加の方でも嬰兒が決めてくれれば」

「話し合いとかもしないで、練習に回せて有利だよな」

嬰兒が全て決めればいい——との流れになりそうになるが、

「嬰兒くんだけに負担を強いるのは駄目だよ」

「話し合いで全員が納得しなきゃ、面倒になるだけだしね」

平田と軽井沢が出て来て上手く流れを遮った。

「兎に角今は時間が足りないし、次のホームルームに持ち越ししましょう——意見が出そろわなきゃ、埒が明かないわ」

更に堀北が強引に話を締めた。

これに不満を感じる生徒も少なからずいたが、そうでもない生徒もいた。

「だな。？クラスだけじゃなくてAクラスの方針も聞いた方がいいだろうし」

「つてか、坂柳さん。今回も出られないだろうし、こっちがサポートしなきゃかもだし」

「その辺の調整も神室や橋本としななきゃだな」

「清隆くんも頑張らなきゃね」

幸村、長谷部、三宅、佐倉の綾小路グループが最初に同調。

「堀北さんの言う通り、話し合いは必須だしね。今決めちゃうのは早計だよな」

「……私たちもチャンスが欲しくない訳じゃないし」

軽井沢のグループ——松下と篠原も続き、この場での話し合いは完全にお開きとなった。

さつきは平田と軽井沢がフォローしてくれたお陰でやり過ぎせた。理想としては、このままの感じで本番まで向かいえて貰いたいものだ。

二限目のホームルーム——体育館に集まったの顔話合わせ。

「赤組の総指揮を執ることになった。三年Aクラスの藤巻だ。」

一年にはアドバイスをと思っていたが、早めに話し合いに移りたいようなので要点だけ言う。

学年合同は最後の1200メートルリレーのみ、やるからには勝ちに行くのを肝に銘じておけ」

なんとも話の分かる先輩だな——と思っただが、目下の注目は皆同じみたいだな。

話が済んだ途端にAクラスがやってきて坂柳に椅子を出し、？クラスでは綾小路をせっついて隣に立たせる。

すっかり名物になってしまったなあ……しかしそれでも実に絵になるわ。

「先に謝罪します——私は完全な戦力外で全ての競技に不戦敗となり、赤組にはご迷惑をおかけします」

「気にするな。最初から解りきってたことだ」

間髪入れずに坂柳を庇う綾小路——夫婦仲は順調のようだ。

一方でいきなり険悪な空気を出してるな、あつちは……。

「話し合いする気は無いってことかな？」

去ろうとしているCクラスに対しての一之瀬の発言——これに答えるのは当然、一人しかない。

「時間の無駄は省くべきだろ——こっちが何言ったって信じるとは思えねえしな」

龍園は笑いながらもそのニュアンスには絶対的な自信を感じさせる。

それは一之瀬も同様のようだ。

「協力なしで試験に勝てるの？」

「ククツ、さあな」

笑ったままで龍園はクラスを率いて行ってしまった——そうではなくてはな。

疑問を抱えている一之瀬と目が合い、こっちに手を振りそうになるが軽井沢が前に出てシャツトアウトする。

「嬰兒くん、洋介くんたちのところ行く」

心配しなくても明確な敵になったんだ、馴れ合いなんてしないさ。

「既に戦略は出来ていると言うことでしょうか？」

「そうだろうな——勝つために思考を放棄するような男じゃない」

ひそひそと情報確かめつつホントに仲のいい夫婦だ——注意深く耳を澄ませてなきや、俺でも聞こえなかつたぞ。

そして、そこに行き着く辺り大したものだが他に共有できるのはどの程度かな？

「お披露目はそこまでにして実務的な話に移りたいんだが」

葛城が指摘するが、やはり発言力は風前の灯火みたいだな——Aクラスの大半は邪魔するなど言いたげな目で邪険している。

「それもそうだね——折角共闘するんだから協力して勝利を目指そう」

それを見かねたように平田も前に出て来た——俺も軽井沢に促らされる形で合流すると話を進めていく。

「団体競技に限らず、ある程度は気の知れた者同士で白組を抑える形がベストだと思うんだけど、どうかな？」

「それが理想ではあるが、もし情報が洩れれば互いに疑心暗鬼になり

收拾は困難になる——対等に協力し合い対等に戦う、この前提の下でのギブアンドテイク。これが妥当だと思うが」

「つまりはお互いに邪魔しないレベルに留めて、双方メリットを提示しようってことかな？」

「その通りだ——こちらが求めるのは団体競技での、牛井嬰兒によるバックアップだ」

俺を見ながらの名指しでの要求。

それ以外は要らないってか、不快な顔があちこちに出てくる。

特に須藤の奴、絶対に見返してやると顔に書いてある………出来たらいいな。

「じゃあ、こちらからは嬰兒くんが出る競技には、こっちの希望を汲んで貰いたい」

対して平田は何も思う所は無いとばかりにスムーズに言葉が出る——打ち合わせしていたとも思えんから、ここに来ることになった時点でこうなることを想定していたか。

俺への配慮をしつつもクラスにプラスになるように持って行く——あいつも、いやあいつらもちやんと分かってるんだな。

「いいだろう。後日また話し合う機会を設けて煮詰めていこうと思うが」

「うん。その方向でみんなと話し合ってみるよ」

無駄もなく話は纏まって、この場はそのまま解散となった。

授業も終わり帰ろうと思ったが、綾小路から話があると云われ適当に歩きながら話す。

「それで何の用だ？」

「分かっているとは思いますが、今のまま手を打たなければ？クラスは負ける」

いきなりか——つまりは使えそうな異能があるなら話せか、どうにか出来る算段があるのかの確認か。

「堀北は龍園の手札に気付いていない——セオリー通りの方法のみで体育祭に臨む」

「だろうな」

「……今のあいつにはそれも止む無しだが、尻拭いする準備は——」

「必要ない」

そう断言すると綾小路の目に好奇が宿った——まだ見ぬ異能が出てくる期待しかないだろうが、ちゃんと後で応えてやるから安心しろ。だからその為にも、

「他のことは気にしないで、お前は出る競技には全力で望め。そうでなきや戦いにすらならないぞ」

「どういう意味だ？」

「誰が何をどうしようが関係ない。全ては水泡に帰す」

訳が分からないか。まあ、そういう風に言っただしな——それは本番までお預けだよ。

追及が来るかとも思ったが、俺に話す気は無いと悟ったのか何も言っただけはない。

しかしそれも束の間、代わりにホースを水道に繋いでいる茶柱先生が目に入ると話を投げってくる。

「当番かな？大人ってのも大変だな」

慣れた手つきで水撒きを始めようとすると先生もこつちに気付いた。

「久しぶりに見る光景だな——今日は坂柳と一緒にやないのか？」

先生もミーハーか………と言う訳でも無さそうだな？

「今度の体育祭、結果次第でお前たちの約束は遠のくぞ——しっかりやれよ」

激励、のようできて勝利を求めての発破——綾小路は心底不愉快そうだ。

「言われるまでもありません」

「そうか——牛井も好きに動きたいなら、微力ながら力を尽くすぞ」

「有難いお言葉ですが、それで先生の立場を危うくするかも知れないのは本意ではありませんので」

丁重にお断りしてみる。

まず間違いないで既に釘は刺されている筈、余計な横槍は返って面倒になる。

頼むから、これ以上ややこしくはしないでくれ。

「いい心掛けだ。しかし事あるごとに特例を持ち出されては敵わん——何かあつたら直ぐに言え」

面倒になる前にも面倒を引き受けるとも取れる曖昧な言い回し、それがそちらのギリギリですか。

「そうならないように気を付けます」

ならばこちらも無難に返すのみ——僅かとは言え慮ってるんだから、少しは汲んでくれよ。

「そうか、では気を付けて帰るんだぞ」

「嬰兒、行こう」

綾小路もこれ以上は実りが無いとしたようだ——ではとつとと退散しようか。

一か月後に控えた体育祭に向けての週一で設けられた二時間のホームルーム。

平田を進行役とした話し合いが行われる。

「今度の体育祭、嬰兒くんはバックアップを比重において配置、メインは競技ごとに調整していくのがベストだ」

「どうして？ 推薦競技にしる、全員参加でも嬰兒くんが出張ってくれた方が確実じゃん」

「体力だつて無尽蔵じゃないのよ。彼の頭抜けた能力を満遍なく活かすには、この方法が最善だわ」

反対意見を透かさず切る堀北——嬰兒の背景を理解していない輩は不満だが、そうしなければ直前になって再び特例として参加できない可能性もあり、それでは勝率は大幅に下がってしまう。

リスクを可能な限り下げの方策だが、それも大ぴらに言えばどうなるか——歯痒さを覚える状況だ。

それは平田も同様であり、ぶり返さないうちに話を進めていく。

「そう言うこと——それで競技の参加者だけど、挙手なんかの希望と能力別に配置を決めるか？」

「断然、能力で決めるべきだろ」

須藤が言い切る——自分の身体能力に絶対的な自信に裏打ちされて力強い。

「俺が推薦競技に全部参加して勝てば、クラスの勝つ可能性が上がる——悪いが嬰兒の出番はないぜ」

須藤の場合は意図した訳ではないが、都合のいい流れが出来上がった。

「それは結構だけど、補足があるわ」

堀北はそのまま一気に進めていく。

「須藤くんだけじゃなく他にも運動神経のいい人は全員競技でも勝てる配置で臨むべきだわ。勿論、私も多くの競技には参加する」

「ちよつと待ってよ、それって弱者切り捨てってことでしょ。」

納得いかないよ、3位まで特典あるのに可能性を捨てるなんて」

ここで軽井沢が反対意見を出す——これに続く形で篠原も声を上げる。

「そうだよ、クラスの為だからって私たちが泣きを見なきゃいけないなんて……」

「堀北さんの言ってることも分かるけど、チャンスは公平にあるべきだよ」

「運動が出来る人たちだけが得をするってのは、納得できないなあ」

軽井沢一派を皮切りに女子たちが次々と反対する——それを須藤が更に反対する。

「いい加減にしるよ。それで負けたら責任取れんのかよ、あ？」

「これは試験なのよ、効率的に勝つために戦略を立てるのは当然——他クラスに後れを取る訳にはいかないのよ」

堀北の切実な言葉には心に來るものがあり、こちらにも同調する者が出る。

「俺も運動が苦手だから、得意な奴が担ってってくれるなら賛成してもい

い」

「私もみんなの役に立てそうもないし……堀北さんに賛成かな」

幸村と佐倉が堀北に着き、更に同著する者たちも続く。

クラス内では対立する構図が出来上がる。

こうなると仲裁する平田も今回は様子見しており、緊迫した空気の中で軽井沢が言った。

「じゃあ、逆に訊くけどさ——堀北さんの言う通りにして負けちゃったら、責任取れんの？」

「軽井沢……おめえ、俺や鈴音が負けるって言いたいのか？」

須藤が苛立ち交じりの声で迫るが軽井沢は動じることなく言い返す。

「そうだよ。この際、ハッキリ言うけど——堀北さんの言う通りにしてもどうしても勝てる気しないんだよね」

「テメエ！鈴音をバカに——」

「勝手に名前と呼ばないで貰えるからしら」

堀北は須藤を押しつけて軽井沢を睨みつける。

「随分と言ってくれるけど、何か根拠があるのかしら？」

「実際にこれまで何も結果なんて出して無いじゃん」

「そうね——それについてはそう言われても仕方ないわね」

堀北は一定の理解を示したのか、態度が軟化する。

「さっきの答えだけど、他クラスだって戦略は練って来る、勝負である以上は絶対なんて言い切れない。」

それでも私は負けたくないし、勝つための可能性を上げる手立ては全てやって置きたいの」

勝ちたいと言う意思を明確に語る——それ自体は特別でも何でもない、だからこそ心に染み渡るものがあり軽井沢も落ち着いてきた。

「絶対に勝つなんて粹がるんだったら、潰そうと思ってた。」

でも捨て駒にされるだけで泣きを見るのは、どうかと思うけど」

「それについても考えがあるわ。上位が得たポイントと最下位で失ったポイントを相殺すれば」

明確な妥協案が提示されたことで反対派の中にも納得感が生じる。

「ふう、分かった。今回は折れてあげる」
「理解が得られて何よりだわ——改めて協力して勝ちに行きましよう」

二人の意見は合意した——それは必然的に？クラスの方針が確定したこととなり、その後の話し合いもより順調に進んでいくのだった。

須藤は全ての競技に参加を申し入れ、嬰兒は棒倒しや綱引きに騎馬戦など複数参加の競技でバックアップを主に堀北や平田を始め櫛田や小野寺、三宅などの運動神経のいい生徒の割り当ても決まったが全ては埋まらず、この日の話し合いは終わった。

勝ちが・・・

放課後になり、それぞれが帰ろうとしている中で平田は軽井沢に声を掛ける。

「軽井沢さん——少し話したいことがあるから残って貰えないかな」

かなり真剣な様子に軽井沢は一緒に帰ろうとしていた佐藤と篠原に言った。

「……ごめん、先に行つて貰える」

「うん、わかった」

「じゃ、お先に」

素直に従い帰っていく女子二人——先の話し合いで波風を立てたことを注意するつもりだと、巻き込まれたくないとはかりに他の面々も次々に教室から去って行った。

そんな中でゆつくりと帰り支度をしている堀北——最後に出ていく生徒も不安顔であったが、何も言わずに帰る。

「ふう……なんとか上手く行ったね」

平田は緊張の糸が切れたのか、息をついて苦笑いする。

「ええ、これでクラスの方針は固まった——後は成果を出すだけね」

堀北も一段落を終えたことに安堵している様子だ。

「出してくれなきゃ困るって——こんな嫌われ役を引き受けたんだから」

軽井沢も愚痴ってはいるが予想されたような険悪な状況とは程遠く、全ては予定通りだったことを物語っている。

Aクラスを目指すには堀北が立つのが最適である——しかし、実績もない彼女がどれだけクラスに良い提案をしたところで反発する者は出て来るのは目に見えている。

ならばその反発を軽井沢が引き受け、その上で堀北の提案を呑めば不満は最小限に抑えられる。

「大凡のことは夏休み中に決めていたとは言え、殆ど即興で上手に話を持ってきて来れたのは見事だと言っておくれ、軽井沢さん」

「堀北さん……褒めてるんだろうけど、もう少し言い方無いの？」
「今更、私が優しい口調になったって気持ち悪がられるだけでしょ——
——今まで通りの調子でやって、取りこぼしをあなたたちが担ってくれるのが最適よ」

聞きようによつては貧乏くじを引けと言っているようで、流石に不快さが込み上げて文句を言いたくなってくる。

「それがクラスの為になるなら、僕は構わない」

そこに平田が仲裁に入る。

「ちよつと洋介くん——嫌われ役やってんのあたしなんだけどお」

「勿論、無理をさせるつもりはない——と言うか生じる無理を嬰兒くんが引き受けてくれれば」

さり気なく軽井沢の意向を酌む平田——同時のこの場に居ない協力者に期待を寄せる。

「その辺は綾小路くんに頑張つて貰うしかない——Aクラスとの連携も含めてね」

その肝心の綾小路は嬰兒へのアプローチを行う訳でもなく、Aクラスに打ち合わせの打診をすることもなく、グループメンバーと呑気のカフェで寛いでいるのだった。

翌日の体育の時間、体育祭に向けての自由時間が多く割り当てられ本格的な練習と競技種目の選別が行われている。

特に男子は文字通りの力を必要とする協議が少なくなかったので、堀北の提案で能力を測つて優先的に決めようとなった。

「うらあ!!」

須藤が握力測定器を握り、82.4を出した。

「へっ。普段から鍛えてるからな——ほらよ、嬰兒もやってみろよ」

俺は無言のまま受け取り握ると86ジャストになり、途端に悔しそうにする須藤——そんなに俺に勝ちたかったか、ご愁傷様。

次いで綾小路が72.6……もつと行くかと思つてたが、須藤を立

てたのかね？

三位に平田が5・7・9となり団体競技のひとつ、四方綱引きのメンバーが確定し他の競技でも参加者が決まっていくなみに俺は予定通りに全ての団体競技の出場は前提になっており、選別の際には意見を求められもしたが適当に流した。

「平田、陣形や作戦での采配はオレ達が思うように出来るなら色々を試していきたいんだが」

「うん、分かっている。Aクラスとの連携も軽視する訳にもいかない——折角、有利な条件で望めるなら、より優位にいききたいしね」

俺の言ったことを意識してるようだが、傍目には早くAクラスとの話し合いに行きたいってしか見えないよな——平田の奴も真面目に受け答えてるもののニヤニヤが隠しきれないし、盛り上がりは他にも見える。

「清隆、同じグループだし俺と騎馬組もうぜ！」

三宅が名乗りを上げると、どんどん続こうと流れて来る。

「きよぼん、こつちでもチーム組んでみようと思うんだけど」

それは女子も同じで長谷部を始め、一緒に行きたいのがアピールしまくって——ここだけ見るとモテモテなんだよなあ。

そして、そんな様子を面白くないと思う輩も当然いたりもするんだよな——例えば自分が全部仕切るつもりでいただろう須藤とか。

「まったく、どいつもこいつも馴れ合いが上がって……こんなんじゃ、先が思いやられるぜ」

堂々と口にするのは中々だが、誰も聞いてないぞ。

っと思ったがそうでもないか、気配り上手が？クラスには居たんだった。

「Aクラスのごとは綾小路くんに任せておけば大丈夫だね。だったら？クラスのリーダーはやっぱり須藤くんだよな」

「榎田さんに僕も一票入れる——体育祭には強いリーダーが求められる。須藤くんなら十分に資格はある」

「いや平田……俺、リーダーなんて柄じゃ」

おいおい、言ってることは裏腹な期待感が見えるんだが——よろ

しい、ここはひと肌抜いてあげよう。

「いいんじゃないの」

俺も適当に肯定する——思った通りに堀北も出て来る。

「私も反対しないわ。クラスを牽引するには時に強引さも必要だわ」

「……分かった。俺が？クラスを勝たせて見せる」

惚れた女に言われてはか——非常に分かり易いな。

まあ、心意気は結構だが一体どこまで持つだろうかね。

他の連中も俺が認めただからか、異論はないようだ——この辺りはまだいい流れとは言えないな。

次のホームルームからの本格的な練習で早速、須藤はリーダーとして行動していた。

「パワーも重要だけどな。腕だけじゃなくて、こういうのは腰を使うんだよ」

綱引きのコツを始めとして本格的な指導を丁寧にする姿は、思いの外に好感が持てて女子からも教えを請われている——それには須藤も意気揚々だ。

ちなみに俺の方に来る奴は平田が受け持つてくれるから、基本的には何もしないで黙々と自主練しながら偵察に来てる連中にも目を配る。

「BクラスとAクラス、しっかりと見られてるな」

そりゃ、そうだろとでも言つて欲しいのか、綾小路。

それともCクラスが何もしてこないことに話を広げたいのかな？

「関係ないな」

「……策を立ててるのは龍園だけじゃないか。もっともお前の場合は丸で読めないが」

龍園の方は既に見当が付いてるってことか。

だが何かしてる様子は無いのは、俺の邪魔をしないようにつて気配り……な訳ねえよな、ホントに欲望に忠実な奴だ。

でもまだお預けだよ。

それに今見るのは俺でいいのか？

佐倉が走り終え、フラフラしながらこつちを見る。

「あ……綾小路く、ん……………あつち……………手え」

「愛里、ちよつと呼吸を整えろ」

「い、いや……………私よりも、坂柳、さん」

息を切らしながら指させした先には窓から手を振って微笑んでいる坂柳の姿。

「ああ」

冷めた反応のまままで振り返すと周りからはヒューヒュー、キヤーキヤーと冷やかしの祝福なのか、綾小路もすっかり慣れたものだな。

「よし、清隆。この後でAクラスと打ち合わせ行こうぜ」

三宅が肩を回して陽気に言ってくると男女関係なく自分も一緒にと盛り上がって来る。

趣旨が完全にズレてるが、やっぱり良いもんだな。

体育祭まで二週間を切った休日の土曜日。

綾小路はいつも通りに坂柳と一緒に居る——しかし普段と違うのは、どうでもいい世間話でも誰かが聞いていたら何かを思う恋バナでもなく、団体競技での打ち合わせであることだった。

「棒倒しと綱引きの配置はこんな感じが妥当だと思う」

「騎馬戦に関しても回避ルートやフォーメーション、場合によっては捨て駒役の投入——もう少し煮詰める必要がありますね」

二人ともどんな場合になっても負けないよう綿密に練っている。

それは時間を忘れてしまうほど没頭しており、気が付くと日が傾いている時間帯に差し掛かっていた。

「そろそろ、お暇しよう——長々となっちまって済まなかったな」

「いいえ、お気になさらずに……………と言いたいところですが、今日のこれが水泡に帰すかも知れないとなれば、何とも歯痒いですね」

「あらゆる状況を想定して組んでみたが、気がかりが二つもあると……流石にな」

その内のひとつは嬰兒の不可解な言動——嬰兒自身が動くことが出来ないとしても代わりに立てるべき堀北にも何もしないばかりか、綾小路に発破を掛けたのは何かしらの企みがあることは想像に難くない。

それも異能を使った方法で——正に綾小路の理想的な展開だ。

「清隆くん、言っていることと表情が一致してませんよ」

坂柳が不満顔で言う。

「彼が何をして来るのか興味を持つなどは言いません——でも入れ込み過ぎると貴方の欲するものとは真逆の方向に行きかねませんよ」

「嬰兒のこと、知ってる——いや夏休みに知らされたんだな？」

「申し訳ありません。私の口からは何も言うことは出来ません」

「別に構わない。それは、おいおい知っていった方が面白いだろうか
らな」

「フフ、好奇心に素直なのは好きですよ」

屈託ない笑顔で称賛されて綾小路も少し頬を掻く。

「それに懸念すべきは、もうひとつありますよね？」

「ああ、嬰兒のことが無ければ、堀北に忠告するつもりだったんだが」
そうした所で無意味に終わる可能性は高く、そもそもどこまで成果
が得られるかも未知数——それでも知っているのといないのでは大
違いではあるが、結果として嬰兒の妨害になってしまえば（綾小路の
に）元も子もない。

「？クラスが浮上できないとなれば、別の方法も模索した方が？」

心配そうに訊いてくる坂柳——願いが叶わなくなる可能性が出て
のことだと打算的な部分で考えるも、それとは違う心配をされている
と分かってしまう。

（少し前なら戸惑ってたが、そうならない分はオレも変わったのかな
？）

己自身を分析しながら、いつも通りに答える。

「いざとなれば排除する——そこから再起を図っていくさ」

「うーん、なんだか先延ばしにされてしまい、もどかしいですね」
「それなら条件を変えるか——なんなら今、ここでもオレは構わないぞ?。」

「それもちよつと格好が付かないので、ちよつと嫌ですね」

不敵な笑みを浮かべてきつぱりと否定する——のでなく、悩まし気に自然に本音を出してくる姿は決して綾小路以外の前では見れない。

そんな珍妙な優越感を感じていると綾小路の方も自然と笑みがこぼれた。

各々のクラスが練習を積み作戦を練っている——だが一寸先は闇、誰もが予想だにしないことが起こった時はどうするのか？

言い含めていたのは綾小路だけ……と言うか、あいつのリクエストに答える為にやるのも理由のひとつだ。

そして当日になれば、獅子身中の虫も気付くだろう。

己の目論見が完全に狂ってしまったえば、どうするか？

諦めずに次を狙うか、ビビッて暫らくは大人しくするのか——どっちでもいいがな。

その辺のことは俺に直接聞きに来るとも思えんから、あとで綾小路から聞くとしよう。

兎に角、待ち遠しいものだ。

そんなこんなと皆が練習に励み、勝つ為にはどうするかの話し合いも重ねて本番まで一週間——参加選手を決めるところまで来た。

壇上では平田が立って、これまでのデータとAクラスとの協議も含めた組み合わせを発表——の前に俺が手を上げる。

出だしから水を差したが、悪く思うのは後にしてくれ。
?

「100mの一組目に入りたい」

「え、いや……そりゃ、嬰兒くんなら心強いけど……」

ペースを乱された——と普通なら見えるだろうが、俺を余り前に出さないよう調整してたのは解りきってた。

俺の事情を汲んでの配慮なんだろうが、すまないがそれでも我儘を通させて貰う。

「絶対に一位を取る——その最初の結果から流れを作るのがベターだろ」

「ちよつと待てよ！それなら俺でもいいだろ！」

須藤が声を荒げてしゃしゃり出て来た——ま、予想通りだな。

「最初は俺で一位を取る——嬰兒は最後とどがいいに決まってるだろうが」

いつ出て来るか分からないとプレッシャー役になる——成程、理に適っているが、須藤が考えたのとは思えない。

にも関わらずスラスラと出てくる辺り、そう持つて行く段取りだったんだらうな。

「その通りだよ。嬰兒くんは存在そのものが力なんだ——個人的に思うところはあるかも知れないけど、クラスの為にここは……引いてくれないかな」

実際この援護に平田も調子を取り戻して俺に意見してきた。

最後に言い淀んだのは、我慢しろと言いつうなのを直したのかな？

細かい気配りだが、その程度のことですぐキレたりするような短気じゃないぞ。

ただ、その程度で丸め込まれるほど短慮でもない。

「だったら尚更だろう。俺が居ればなんて甘えは、とつとと無くなった方が必死になるだろう——それこそ死に物狂いでやらなきゃ勝ちに行けない」

クラス全体にプレッシャーがかかる様に少し語気を強める。

「負けてもいいってなら、それこそ先に済ませたいんだが」

「バカにしないでよー！」

ほう、ここで軽井沢が声を上げるとは意外だな。

「無人島の時は嬰兒くんが一番成果を出したけど、あたしや綾小路く

んだって果たしたことは小さくない——凄いの認めるけど、一人で勝ったなんて思わないでよね」

更にここで平田じゃなくて、俺に着いたのもな……。

「あたしたちだって、ずっと頑張ってたんだから——そんな志の低いのなんて居る訳ないでしょ！」

「俺たちだって勝ちたいに決まってる！」

「そうだぜ！」

「私も一位取る自信はあるもん！」

堂々と言い切る姿に同調する輩も出て来る。

うん、いい流れだ。

前回と言い、噛みついていている様で反対意見を封殺する——流れを作ると言うか、人の機微を見極めれる資質は大したものだ。

「みんな、落ち着こう」

ここで平田が宥めて仕切り直す。

「クラスの勝率を上げるには最善だと思ったけど、嬰兒くん言う通り先々を考えると良いとは言い難いね」

平田は俺を一瞥して小さく息を付いた——なんか、もう少しうまくやれよとか言われてるみたいで少々面白くないな。

「分かった。嬰兒くんを一番手に——クラスの一員として、みんなで力を合わせて行こう」

どうにか希望は通って話は纏まったな。

ただ、その言葉——もっと深みを持たせないと駄目だよ。

そこから先は順調に埋まっていき、最後の合同リレーのアンカーのみ堀北の個人的要望で揉めそうになったが、どうにか落ち着いた。

のほいいが、今のお前じゃ、あの兄貴の眼鏡に適うとは思えないぞ。

そうして迎えた体育祭当日、入場行進に開会式の挨拶と滞りなく進んでいく中で早速、不愉快なものが目に入った。

閉鎖的な学校だ。だから親族などの応援に来ることなど無く、見物

客も学校関係の施設で働く大人がチラホラみられるだけなのは分かるが……そこに交じってドウデキヤプルが忌々しい不敵な笑顔で手を振って、紳士的にお辞儀をしている。

どうにも異様で目に付きそうでもあるが、大半の奴らは競技に気を取られ、さとい奴らは最初の競技である100m走の判定カメラに目が行って、誰も気に留めない。

なら周りの奴らは？

どうにも浮くような風体だぞ、何かから奇異な目で見るのが一人ぐらい居ても——とか思ってたなら、いつの間にか消えていた。

なんだったんだ、一体？

監視はしつかりとしているぞって意味の警告と勘がるのが妥当だろうが、今日に限っては甘いと言わざるえないぞ。

赤組と白組が設置されているテントはトラックを挟んで向かい合う形になっており、競技中しか接触は出来ない——好都合だ、態々希望を通した甲斐があったな。

100m走——いの一からの出番だ。

俺と同じく一組目の選手がスタートラインに集まって来る。

メンバーの中には見知った者はいない、体格的に見てもスポーツをやってる奴も皆無だ。

「これは牛井殿の楽勝でござるな」

「そうだな」

？クラスで一緒に走るメンバー、外村が言ってくるが軽く流してCクラスの奴らに近づく。

外村と同じく肥満体形——見た通りの捨て駒要員だな。

それでいて気も弱いのか、俺が近づいて行くと目に脅えが生じた。

すう、はあくど小さく深呼吸して、ひと言。

「お互い、頑張ろうな」

「え……」

「あ、ああ」

訳が分からんか——明らかに戸惑ってやがる。

「激励だ——龍園たちにも伝えといてくれ」

それで去ると一応の納得はしたようで、気を取り直してスタート位置に着く。

合図が鳴り一斉に走り出す——そのまま速さを上げることはせず、周りとペースを合わせて先導する形を取り、最後までそのままの状態第一位を取った。

程なくして外村も最下位でゴールした。

直ぐに次が走るから背を押しながら、とつとと退散してテントに戻ると後組の奴らが話しかけてくる。

「なんかギリギリだったな」

「もつと余裕で勝つと思ってた」

「もしかしなくても遊んでるのか？」

実際は余裕だし、そう見えるわな——その通りだし。

「まだ始まったばかりだぞ」

そう答えて白組テントに戻っていくCの奴らに目を向ける——ペースを調整して限界まで引つ張った甲斐もあり、半端にない息の上がり方だ。

そして当初からの通りBとも連携などしておらず、目に見えての区切りが分かる。

龍園は見向きもしないが、椎名なんかは水を差し出して労ってるよ。うだが呼吸が落ち着く様子は無い。

ああ、悪く思うなどは言わない——その代わり容赦はしない。

「お、須藤もやったぜ！」

競技に目を戻すと二組目である須藤がぶつちぎり第一位……こつちを見て、何やらドヤ顔だがいつまで余裕ぶっこいてられるかな？

三組目で出場する高円寺の姿はない——予想通りの展開だがこれで不戦敗だ。

Aクラスでは葛城、Bクラスでは神崎が出ており、奴も真面目に参加してれば中々にいい勝負が見れたんだろうにな。

しかし結局は欠席扱いで競技は進んでいく。結果は神崎が一位で葛城が三位——高円寺が全競技不参加となると坂柳を含めて赤組は大きなハンデ、少しでも取り返して置きたかつたんだろうが一步及ば

なかったか。

それでも着々と次が始まり四組目——今度は綾小路だ。一瞬だけ俺の方を見てきたが、この前に言ったのがよほど気になるのか。

もう直ぐ分かるぞ。

スタートして接戦を繰り広げてるが、俺の見立てでは余裕満々で勝負になるようなのはいない。

最後にダッシュすることもなく、俺と同じように僅差で一位を取った。

この結果に戻ってきて直ぐに、

「お疲れ様です」

特別に椅子に座っている坂柳が労いの言葉を掛ける。

その様子に周りはニヤニヤしながら隣に押しやっていく……ちよつと前なら申し訳なさもあつたが、今は満更でも無いみたいだし、良しとしときたいな。

五組目は龍園、六組目はBクラスの柴田、七組目は平田がそれぞれ一位を取り順調に男子の部は消化された。

出来ればそのまま行つて欲しかったが、須藤がコテージに居る高円寺の元に向かい息を荒げている。

平田と綾小路も向かつて窘めてるようだが止まる様子はない——まったく余計な騒動を起こすなよな。

拳を振り上げる須藤と余裕満々で受け止める気である高円寺の間に入り、両方の手を取り固定する。

「何のつもりだよ！ 放せ、嬰兒！」

「珍しく私も同意見だね——男と手を取り合う趣味は無いので放して貰えないかね」

ぎゃあぎゃあ、煩いから少し力を籠める——いい加減に頭を冷やせ。

「粹がるのも大概にしろ。お前ら二人で掛かっても叩きのめされるのがオチだぞ」

「え、嬰兒くん。暴力は——」

平田が冷や汗きながら言ってくるが、綾小路が肩に手を置いて下が

らせる。

そして数秒の沈黙の後、須藤と高円寺も引く姿勢を見せたので手を緩める。

「なんだよ、悪いのはこいつじゃねえか」

解放された須藤が恨みがましく言った。

「もう何度目かになるが、私は体調不良で辞退しただけさ」

「嘘つきやがれ！ 嬰兒、お前なら分かるんじゃねえのか?!」

仕方ないから高円寺の額に手を当ててやる——と、勢いよく飛び退いた。

「見やがれ、どう見ても健康そのものじゃねえか！」

「……いや、情緒不安定が見て取れる。これは精神的な不調だな」

俺の肯定的意見に意外な顔をする面々——しかし実際に高円寺は異様な警戒心で俺を見ている。

「デカイ図体に似合わず、気が小さくて臆病なんだろう——ここは大目に見てやろう」

「ハッ、そうかそうか。肝っ玉が小さいならしようがねえなあ」

折角だから言いたいこと言ったら、須藤も気をよくして留飲を下げた——単純な奴だ。

平田は釈然としない顔してるがそれ以上は何か言う様子はなく、綾小路はどうか落ち着いたことに安堵してるようだ。

あとはこのまま戻れば良かったんだが……。

「フツ、君子は危うきに近寄らないのだよ」

「なんだよ、負け惜しみかよ」

「そう取って貰っても結構——彼と肩を並べようなど、とんでもない話だ」

ほう。自惚れが強いのは間違いないが、客観的に物を見れるようだな——それでいて負け惜しみを見せてクラスメイトに遠回しな警告か。

ならばこちらも、

「いい判断だ。お前は将来この国を背負って立つそうだが、俺に何か言いたいならその三倍、どうにかしたいなら更に十倍は必要——そう

なれたら相手してやる」

遠回しにアドバイスを送る——ま、それまでには俺はもう消えてなくなってるだろうがな。

異常に〇〇

ややしこりを残してテントに戻ると女子の組も順調に消化されているようで、今の組では最下位争いをしていた二人の女子がゴールした場面だった。

ビデオ判定の結果——？クラスの佐倉が制した。

息を切らしながら戻って来る佐倉に駆け寄るグループメンバー。

「はあ、はあ……やった、私初めてビリじゃなかったよっ」

「よく頑張ったよ、愛里」

「ほら、ちゃんと息を整えろ」

健闘を称える幸村と三宅。

「あんまり無茶は駄目だよ。転んで怪我でもしたら大変なんだから」

そして二人とは違い辛口な長谷部——そんなみんなに佐倉は目をキラキラさせながら笑顔で言った。

「う、うん。ありがとう」

なんとも学生青春的でほのぼのとした光景だ。

と朗らかになってもいる間もなく、女子の最後の組がスタートした。

走っている中で頭抜けているのは堀北と伊吹——かなりの接戦だったが軍配は堀北に上がった。

悔しくて仕方ないのか伊吹は地面を蹴っている——ただ走ることにだけに集中してれば勝てただろうにな。堀北を意識しすぎて集中力を欠いた、格闘技やってるようだし、その弊害が出たのかな。

いずれにせよ、その悔しさは今後の競技には大きなモチベーションに繋がる——そう、本番はここからからだ。

全学年の1000m走が終了し集計に入る。

「予想通りに早かったな、お前の兄貴」

休んでいる堀北に綾小路が声を掛けた。

「当然の結果よ。兄さんは完璧なもの」

傲慢とは違うニュアンス——言葉通り、堀北鈴音にとっては当たり前なのだろう。

「……本当にあれと勝負する気か？」

「ええ、私だって遊んでいた訳じゃない——成長してるのを見せたいの」

そして認めて貰いたい、褒めて貰いたいと言う願望が見て取れる——しかし何かが違うと綾小路は『直感』した。

(もつとも何がどうとは言えないがな)

だからこそ間違っているなど口に出来ず、かつてそれを言っただけで嬰兒の『直観』が気になって仕方なかった。

堀北とも嬰兒ともある程度の時間を過ごし、他にも坂柳を始め色々な面々と接してみてもやはり分からない。

(嬰兒もそうだが、有栖もこう言うことが分かたりするのか?)

寧ろこの手の心理的考察などが大の得意であり、その手腕でAクラスを纏めているのだから訊いてみれば教えてくれるかもしれない。

嬰兒の思考や論理を知る意味でも悪くない方法ではあると理屈では分かっている。

(だけど、それはやりたくない——何故か分からないがやったら負けな気がする)

己自身の不可解な気持ちに唸らせるもそれが不快とは感じない——それもまた不可解で更に唸らされてしまう。

「……あなた、こんな所に居ないで坂柳さんの所に行つた方がいいじゃない?」

「……………」

突然の堀北の切り出しに一瞬、言葉が詰まってしまう。

「なんでそうなる?」

「だって心ここに在らずよ。坂柳さんの事、考えてたんでしょ?」

一切の迷いなく断言された——言葉が詰まったのを凶星と解釈したようだ。

確信の籠った声で堀北はAクラスの方に目を向けて言った。

「私も恋だの愛だのを否定したり、下らないと言ったりする口じゃないわ。」

と言うか、馬に蹴られるのも嫌だし……もう少し女の子の気持ちを考えてあげた方がいいんじゃない?」

「お前からも説教されるとは思わなかったな……」

「からも——つまり少なくとも二回目ってことね。人の心配なんてしてないで自分の事をどうにかすべきじゃない?」

「有栖ならオレが何の話をしてるのか分かってる——だから単刀直入に言う。絶対にCクラスは仕掛けてくる、気を付けろ」

「……もつと分かるように言ってくれないかしら?」

「悪いが何をして来るか、オレにも分からないんでな」

「何それ?」

訳が分からないままだが、それ以上の追及はせずにこの話は終わる。

そこで丁度集計も終わり——赤組2011点、白組1891点と発表された。

二種目目の競技——ハードル走。

この競技にはハードル一個倒すことに0.5秒追加、接触で0.3秒追加の二つのペナルティがあり、ただ速く走るだけでなく確実に飛び越えなければならぬ。

「拙者腹痛でござるよ……欠場しても」

「ハードル全部倒してもいいから完走しろ」

これに練習でも満足に跳べなかった外村が逃げ出そうとするが、須藤が脅迫するように叱咤して、言った通りに全てのハードルを手で倒して最下位で完走した。

「まったく使えねえな——それよりも柴田だな」

須藤は二組目を走るBクラスの柴田に注目する。

元よりサッカー部で活躍しており速さにも定評がある生徒だ——

出場する面子からして一位を取るとは確實であり、目下最大のライバルとして警戒している。

しかし難なく勝つと思われていた展開に異変が生じた。スタートダッシュで前に出たのはCクラスから出ている二人の男子。その勢いは衰えるどころか、どんどん上がっていく。

「どうなつてんだよ、こりゃ?」

結果的には柴田は一位を取った——三つ巴のギリギリで。

「はあ、はあ、はあ……………」

全力以上を出したのか柴田の息は極限まで上がっている。

一方でCの男子二人は息を付くどころか汗ひとつつかいておらず遠目からも余裕が窺えた。

「これが龍園の自信か?」

綾小路が誰に言う訳でもなく呟く。

その横を無言で通過する嬰兒——三組目の選手としてスタート位置に付き、合図と同時に駆け出す。

その様子は先の焼き直しであり、嬰兒とCの二人が三つ巴の接戦を繰り広げ、僅差で嬰兒が一位を獲得した。

先ほどと違うのはCだけでなく、嬰兒も余裕があったこと。戻つて来る嬰兒の足取りは軽く表情を含め意気揚々としている風であった。

(そう言うことか)

綾小路は僅かずつではあるが訳が分かってきた。

「四組目、準備してください」

審判に呼ばれコースに入る綾小路、ひとつ空いたコースには神崎が居た。

「早速当たるとはな」

「お手柔らかなにと言いたいが、余裕を見せてる場合じゃなさそうだぞ」「忠告なんて無用——と無碍にできないのが、もどかしいな」

神崎はやって来るCの選手を見る——調子がいいのが顔色から態度まで見て取れる。

「同じ白組としては頼もしいんだが、素直に歓迎できない」

二人の間のコースにCの一人が入り、それ以上の会話は無くなつ

た。

そしてスタートと同時にCの二人が抜け出たが、綾小路と神崎が食らいつき最後には四人同時に近いゴールでビデオ判定に持ち越された。

結果は一位が綾小路、二位が神崎となり三位はCの二人の同着——しかし内容は学校の体育祭レベルではなく、観戦していた者も後ろを走っていた者も唾然とした様子だ。

（全力で望め——か）

綾小路は嬰兒に言われたことを思い出し、必要性を噛みしめながらも意図を測りかねていた。

（嬰兒が楽しむ為だけにするとはいえ考えにくい——龍園の策略を潰す訳でもなく、塩を送って何がしたいんだ？）

考え事をしながらテントに戻ると、

「お疲れ様です」

坂柳が笑顔で労いの言葉を掛け、その様を見て赤組のテント内では一気に毒気が抜かれた。

「随分と楽しそうですね。羨ましいです」

「ああ、中々にスリルのある大会になりそうだ——本気で行かなきゃ、一気に潰されるな」

この会話は決して意図したものではない——しかし予期せぬ事態に圧倒されていた全員に活を入れるには効果的であり、それぞれが気持ちを新たに競技に臨むことに至った。

それでも特効薬の如き効果がある訳もなく、競技を終えた幸村が俯きながら戻ってきた。

「すまん、清隆——今回も七位だった」

「切り替えろ。啓誠ならテストでも問題ないだろう」

「それでも成績は下がる——それにクラスや組に負担を強くのは」

「それを言うなら私など完全なお荷物です——幸村くんも不得手なら、得意なことで取り返すしかありません」

坂柳からの励ましに僅かに気が軽くなる。

「だからって胡坐をかく訳にもいかない。参加する以上は全力で取り

組まないとな」

しかし幸村もまた誰よりもAクラスに上がることを欲している一人。Aクラスもくひょうに弱みは見せないし、まして甘んじることはいらない。

(中々にいい流れだな)

(そうですね。私もせめて全力で応援します)

これ以上は野暮になると無言になるもアイコンタクトで意志相通を測る綾小路と坂柳は競技に目を向ける。

男子は最終組で？クラスからは須藤が出場しており、当初の予想では余裕で一位を取る筈だったが、この組でもCが競ってきておりギリギリで逃げ切る形となった。

「はあ、はあ、はあ——」

やっと勝ったのが見えて分かる様子であり、異常な事態にさつき抜かれた毒気が再び注入されてしまった。

それでも時間は待つてくれず直ぐに女子の競技に移る。

一番手の堀北と佐倉がスタート位置に着く。

プレッシャーにも似た警戒心と疑惑の目でCに注目する堀北と先の綾小路の言葉を聞き肩の力が抜けている佐倉を見て綾小路は思う。(普段を思えば逆の展開になりそうなものだが、何が起るのか分からないものだ)

そうなった元凶を視界に収めつつ、競技が始まるのを待っていると隣にいる坂柳が組み合わせを見ながら言った。

「堀北さん、相当に嫌われているようですね」

「よくないのか？」

「Cの選手は陸上部の矢島さんと木下さん——クラスの最高戦力と言えるカードです」

「なるほどな」

傍から聞いている分には堀北の対戦相手が悪く、神や運と言った類のことを言っている——特に？クラスでは綾小路が神を信じているのを知っているために余計に。

しかし実態においては全く別のことであり、この一戦において大凡のことを二人は悟った。

注目が集まる中、スタートし堀北が駆け出す——しかしCの二人がその前を走りチャンスが訪れるどころか差が広がるばかりの展開で終わってしまった。

堀北は三位となったが、一位と二位との圧倒的大差による結果に敗北感を通り越して違和感さえも超えた異常性を感じずには入れれない内容だった。

ようやく最初の団体戦である『棒倒し』だ——相手の調子も絶好調で今はエンジンも限界まで温まつてるから、相当に楽しめそうで腕が鳴るよ。

「おまえら絶対勝つぜ。気合い入れろ！」

須藤が前に出て赤組を鼓舞してるが、効果は今ひとつって感じだな。

龍園の率いるCクラス全員が凄まじい覇気を漲らせてるのが伝わり、気持ちの上で既に負けてると言ってもいい。

出来る限り多くぶつかり合いたいものだ。

「楽しそうだな」

綾小路が静かに言ってくる——様子からして事態を把握してるようだな、この短い間に大したものだ。

ただここで話せることは限られてるから返答も無難にするしかない——悪いな。

「この学校のルール内なら遠慮は無用だからな」

「学校のルールか……」

もつと言いたそうだが、事前の打ち合わせによるフォーメーションでは須藤を前にして、綾小路と指示を出す平田は真ん中の位置付けで、俺は二回とも守りに回るから話すのはここまで。

それぞれの配置に付き、試合開始の合図が鳴ると同時に須藤が先陣を切って突っ込んでいく。

「続くぞー」

お、一応の流れは作れたようだな。

ただ相手も然る者——守備に入ったBクラス神崎の指揮のもと気圧されることなく、どっしりと構えて冷静に対処している。

「須藤を止める！」

号令と共に三、四人が須藤を押し返そうと取り囲み、流石に分が悪いか凌がれそうさだ。

須藤に続いた奴らも決め手に欠けるのか突破できない。

対してこっちは中々にピンチなようさだ——攻撃を請け負うCの奴らが信じられないような速さで突っ込んできた。

「蹴散らせーアルベルト!!」

龍園の号令と共に黒人ハーフの大男が突っ込んできて、守りに回ってるAの奴らは全く歯が立たずに突破されていく。

正直、アルベルトつて奴一人いけば事足りそうな勢いだ——このままなら難なく先制を許してしまう、このままならな。

「!？」

手を伸ばしてきたアルベルトを正面から受けた——左手一本だけで止められたことに流石に驚愕してやがる。

持つて生まれた恵まれた体躯に鍛え抜かれた筋肉、普通の学生が敵うとは思えない相手——いいねえ、俺もそれなら「相手に合わせて」でやれる。

頬が緩みそうになる前に受けている左手をいなして懐に入り、投げ飛ばす要領で棒から遠ざける。

その際に攻めて来た数名を巻き浴いになり勢いが削がれた。

……それは全体にも行き渡ったようさで、攻撃に回った奴らも呆けてやがる。

「攻める!!」

向う側にも聞こえるように怒鳴り声を散らすと真つ先に綾小路が反応したのが見えたが、突撃するようなことはせずに相手の陣形を見定めにかかった——どこまでも己を保つか。やはり、よく訓練されてやがるな。

「うらあー行くぜ!!」

一方での野生児はワンテンポ遅れて反応して、本能のままに再突撃していきやがった。

が、神崎もやるな——透かさずに四人がかりで抑えに回らせた。冷静な判断だ、龍園同様にな。

「Aの雑魚どもは放っておけ！数を活かせ、牛野郎を囲め！」

俺さえ封じ込めればやれると判断したか。非常に適切な指揮だ——しかしだ、人海戦術による面包囲なんて、それこそ絵空事だよ。

固まって向かってくる奴らの中から僅かながらにも噛み合っていない奴を見定めて押しつける。

直ぐに空いた穴を埋めようと、うじゃうじゃとやって来るが直ぐ近くの奴に掌底を放った——に見せかけたフェイントで誘導し壁になつて貫つた。

結果、味方同士でもつれ合いながら玉突き事故のように集まつてきた奴らは地面に倒れていく。

「牛井に後れを取るな！」

葛城が持ち直して棒守りに檄を飛ばすが、気合で何とかなるほど甘くないんだよなあ。

Cを押し戻そうとしてあっさりと返り討ち——怪我するから下がつてた方が身の為だぞ。

そのまま棒を倒しにかかるのを手近に居た奴を払いのけながら回り込み、間一髪のタイミングで阻止した。

下がり切った場所を起点に四方八方から来るのを全て撃退——怪我をさせないような力加減も今のCには大して気にしなくていいから、かなり楽だ。

それでも急所には当てないようにはしないと。

嬰兒による絶対防衛線が出来たことを見た綾小路は興奮を抑えるのに必死だった。

傍から見れば闇雲に手を振り回しているだけだが、そのひとつひとつ

つは確実に相手を撃退し時には空振りも見えたが、それもフェイントによって動きを制限するものだった。

明瞭な実力差が見て取れる光景——嬰兒が際立っているようであるが、決して有利とは言えない。

倒された男子生徒たちもすぐさまに立ち上がり向かって行く——その速さ、力強さはやはり普通とは思えないものだった。

このままではジリ貧——誰もがそう思う中、綾小路はある確信を得ていた。

(嬰兒とまともにやりやえるなんてありえない)

かつて一度、嬰兒の一撃を受けたことのある身として並の奴が直ぐに立ち上がれる訳がない。

それでも現実には起きていけると言うことは嬰兒が相当な手加減をしているとするのが妥当——実際に本気など出していないだろうが、楽しそうにしている姿からは面倒臭い労力を割いている風には見えない。

消去法かつ総合的に考えられるのはCの全員の能力が底上げされている——これしか考えられない。

(つとあつちばかり見てもいられないか)

もう少しじっくりと見ていたい気持ちを抑えて、膠着状態にある？の攻撃陣とBの守備陣に目を向ける。

須藤が数人がかり、他の積極組もギリギリの瀬戸際で防がれており決め手に欠ける。

全体的に見てBは平均より上の力を持った生徒が多く、ここに綾小路が入っていても勝機は望めない。

勝つ為には策が必要——それは瞬時に成った。

綾小路は平田が居るところに駆け出し、苦戦している中に割り込んで下がらせる。

「平田、一旦下がれ」

「え？」

突然の指示に思考が追い付かないようだが、綾小路は構わずに続ける。

「味方を集めて須藤を援護しに行ってくれ」

「了解——みんな、バラバラに戦っちゃ駄目だ！須藤くんの壁をどかすんだ!!」

しかし直ぐに持ち直して意図を測り、号令を掛けながら味方を率いて須藤の元に戦力を集中、一点突破を図る——しかしBもとい神崎もそれを易々と許す訳もなく同じく防御陣を集中させる。

双方、陣形を組み替える瞬間に生まれる僅かな隙、手薄になった部分に突撃を掛けるひとつの影、三宅が王手を掛け——もう一つの影、神崎がそれを阻む。

「舐めるな、この程度で出し抜けると思ったか」

神崎に止められる三宅だが全く焦りがなく、寧ろそのまま力で押し込んでいく。

「いけ清隆！」

「しまっ——」

止められたのは神崎の方であり、主戦力が全て無くなった隙を綾小路は全力で駆け抜けて棒を倒しにかかる。

それを見たBの男子たちが虚を突かれ、須藤たちに押し切られる。

その勢いのまま、棒は倒されホイッスルが鳴った。

「っしやーやったな清隆！」

三宅が嬉しそうに綾小路に駆け寄りハイタッチする。

しかしその様子を苦々しく見る目もあり、綾小路は冷めた声で言った。

「まだ終わってない。次に備えるぞ」

「そうだ！次こそは俺がやってやる！」

須藤の更なる気合を込めた叫び——なし崩し的に引き立て役になってしまったことが相当に気に入らないようだ。

一本目を取ったにもかかわらず士気も纏まりもバラバラに近い状態——外側、特に敵側しよから見れば、さぞ呆れる光景だろう。

このような時は平田がフォローに入るのが常だが、直ぐに二本目に入る為に時間が無い。

攻撃側に嬰兒が居れば何かしら変わったかもしれないが、事前の取

り決めで一本目の攻撃が成功した場合、そのままのフォーメーションを継続することになってるので声掛けもない。

最悪とまではいかないまでも、際どい状態で待機に入った。

ちなみに白組は攻守を入れ替えるようにCが守備に就いている。

「へっ、今度は俺が蹴散らしてやるぜ！」

須藤が一人やる気になっているが、大半は不安を覚える——その中で綾小路は次の策を練り三宅と幸村に、クラスの状態を気にしている平田にも近づき小声で伝える。

「じゃ、頼んだぞ」

「待って、そう言うことはちゃんと力を合わせて——」

連携を軽視するやり方に異を唱えようとするが、試合開始の合図が鳴ってしまった。

須藤が先陣を切って突撃し他も続いていく——しかしCの全員は余裕があった。

迫って来る？の先陣達をもともせず、誰一人倒れることなくあっさりと押し返してきた。

アルベルトや石崎のような屈強な武闘派や運動部でもない者達も含めてどう攻めても全く綻ぶことがない。

「ちくしょう——舐めんな！」

須藤も闇雲に突撃するだけではなくフェイントを織り交ぜた動きで突破を図るが、完全に動きを見切られたとしか思えない動作で瞬時に押し倒された。

「——?!」

これには流石に須藤もありえないと言った顔で倒れていく——その陰から綾小路が出てきた。意表を突いたかに見えたが、石崎がカバーする形で掌底を繰り出した。

左腕で防御するも勢いは削がれた——かに見えたが綾小路は相手の勢いを利用して引き?がした。

だが今度はCクラス一の巨漢であるアルベルトが立ちはだかり、襟をつかみ引き倒してきた。

「!!?」

しかし綾小路は地面に背を付きながら蹴り足を放ち、アルベルトの腹を持ち上げるように投げ飛ばした。

おお、柔道の巴投げだ——タイミングも完璧でありアルベルトは密集している棒の周りに飛来して巻き添えを出しながら棒もろとも倒されそうになる。普通ならこのまま決まりだが、そうは上手くはいかならうな。

Cの連中、踏ん張って持ち堪えて見せた。

万事休すに思えたが、三宅を先頭とした第二陣がアルベルトを押し込みにかかった。

スムーズな入り方からすると事前に言っていたな。

「勝機はここしかない、押し倒せ!!」

怒号と共に幸村や外村の非力連中から平田と言った冷静な戦力も加わり、更に流れるように起き上がった綾小路も加わった。

うくん、赤の守備陣ではAとBが入り乱れてじつくりと見れない。流石に今回ののは俺が居なくても大丈夫そうだから、出来れば棒の上にも立って見物したいな。

棒は傾いていき形勢は？が有利、投げ飛ばした衝撃が無くなれば終わりだ。

それが分かっているのか、それぞれが必死なのが背中越しにも伝わる。

その甲斐があつてか、砂塵を巻き上げて棒が倒れ勝敗は決した。やつとので勝って見せたが、？は俺を除いてボロボロみたいで、Cは余裕満々——勝者の姿が完全に逆になつてな。

陣地に戻ってからも殆ど出し切ったみたいで皆が座り肩で息したり、水を一気に飲んだりと先行きは明るく無きような感じだ。

俺以外に余裕があるのは須藤と綾小路くらいだが、須藤は棒が倒れた際にC共々巻き添えになり文句を言いたそうだが我慢しており、綾小路は防御した左にダメージが残ってるっぽい気取られないよう

にしている。

俺じやなきやと思つたが、あの娘も気付いか——流石だね。

「清隆くん——?!」

坂柳が綾小路の左腕に手を伸ばそうとしたら、思いつきり抱きしめた——とことん人目を憚らなくなつたな。

突然のことに周りも一斉に固まつてるし……。

ええい、小声で何をひそひそと話してる？

綾小路は腕の中にいる坂柳の耳元で囁く。

「左腕は大丈夫だ」

「と言うことはワザと？」

結果、普通でない底上げがCにされていることを確信した。

「ああ、だから騒ぎになるから」

「余計な事は言うなと」

「次からは少し力の配分を変えてやる」

「分かりました。でも無理は禁物ですよ」

話が付き、綾小路は坂柳を開放する——瞬間に文句が飛んできた。

「あのね。仲が良いのは結構だけど、時と場所を弁えて貰えるかしら」

苛立つ堀北に綾小路は平然と返す。

「少しふらついたから支えて貰っただけだ」

「つまり……偶々だと？」

「お陰で少し元気が出た」

「少しですか？」

坂柳が声をきつくしながら背中を抓る。

「いや、かなり——思いつきり元気が出た」

このやり取りに大半は毒気を抜かれたが、数割の男子からは嫉妬の眼差しを向けられる。

逆に二人の気に当てられて興奮する女子も出た。

「それにしても清隆くん凄かったね」

「そうそう、あんな大きい人を投げ飛ばすなんて」

佐倉と長谷部が褒め称え、益々嫉妬の目がきつくなる。

「倒れそうになったら足が滑ったんだよ」

「つまりあれも偶々だと？」

謙遜してるかCから文句が来た時の言い訳なのか——どちらにしても信じる者など居らず淀んだ空気が漂う。

「そう思ってたなきゃ、気持ちちが折れる——どんな形であれ、気は緩められん」

ただ続く言葉で一辺に吹き飛んだ。

Cの異常さを肌で実感した男子も観戦していた女子も綾小路の一連の行動が腑に落ち、同時に絶妙な緊張感が行き渡った。

うじやうじや〇〇

続く玉入れでは今度は女子の方がCの異常さを肌で感じていた——もつとも直接ぶつかった訳ではないから消耗の度合いは男子ほどではなかったが、精神的なショックは大きい。

それ程までに結果は圧倒的であった。

「赤組合計54個、白組合計112個。よって白組の勝利です」

これで先の辛勝の分は帳消しとなった——しかし責めようとする者は誰も居ない。

「俺たちで取り返すぞ！」

須藤が元気を振り絞って叫ぶが、士気は全く上がる気配はない。

それでも時間は待ってくれず、綱引きの説明が始まる——内容は棒倒し同様にシンプルであり二本先取した方が勝ち。

純粋な力比べ——今のCクラスほど恐ろしく感じる場面は無い。

弱気になるのも無理はなく須藤の号令や先の綾小路の言でも気休めにしかならない。

「打ち合わせ通りに」

「うん。皆配置について」

葛城と平田が最小限の会話に留めるのもその表れか——始まる前に既に負けているとも言える状態だった。

それでも望みを捨てず作戦通りに身長順に並んで行き、一番後ろに須藤——そのひとつ前に嬰兒が立つ。

「へっ、デカい奴を前に持つてくるとはBも分かってねえな」

軽口を叩く須藤だが、連携を取れないゆえ——綱を引く位置を高くして僅かでも有利に運ぼうとする苦肉の策だろう。

客観的に見れば赤組有利だが、Bの後ろに居るCの自信に満ちた態度は簡単に霞ませる。

「行くぞ、お前ら！」

それでも櫓を飛ばす須藤——同時に試合開始の合図となり互いに綱を引く。

「オーエス！オーエス！」

連携の取れた？A^{あかぐみ}連合が最初の流れを掴んだが、勝てると思った瞬間に引き戻されていく。

手を抜いていたCが参戦したのだと誰もが思った。

「負けるか！お前ら死ぬ気で引け!!」

繰り返し叫ぶ須藤だが、綱は最初の位置まで戻され——そこから一気に持つて行かれた。

「ハッ、楽勝だな」

「まったくもって、ザマアねえな」

「Bはよかったなあ、俺たちと組めて」

各々好き勝手に言うCの男子にBは嬉しくない顔だ——それ以上にここまで圧倒的な勝利に何かしら疑念が芽生えているようだ。

（だからってストレートに訊いて答える訳ないよな——龍園にしても
嬰兒と組んでる訳じゃなさそうだから、答えようもないだろうしな）
綾小路はさり気なく左腕を摩りながら、白組と後ろで嬰兒の胸ぐらを掴んでいる須藤を交互に観察しながら、首謀者の意図を測ろうとする。

「^{てめえ}嬰兒、なんで手え抜きやがった?!

「だってもう諦めてたじゃん、それがクラスの総意みたいだから従っただけだ」

「ふざけんな、こっちは全勝するつもりなんだぞ!」

「ほう、そうなのか——だったら、皆をやる気にさせてみせろよ。リーダー」

まったく感情の籠つてない台詞に須藤の額に青筋が浮かんできたが、正論でもある為に乱暴に腕を放す。

そのまま血走った眼を前に向けて叫ぶ。

「おい、テメエら！今度手え抜いたら死刑だからな!!死に物狂いで引け!!」

ただ怒りをぶついただけ——敵味方問わず、そう聴こえた。

そんな状態で士気が上がる訳もなく、返って逆効果でしかない。

冷静に状況を見ている面々は完全に勝つ目が無くなったと悟った。

その内の一人である綾小路は更に思考する。

(嬰兒が楽しむつもりなら、他なんて放っておいて一人で勝負するはず——もつともあんまり活躍しすぎると無人島の二の舞だから今回は自重した………そんな訳がない、だったらそもそもこんなことはしない)

しかしそれ以上は見えてこない——情報が足りない、何か見落としは無いかももう少し没頭したかったが、二戦目の開始が始まってしまい集中できない。

「いくぞーオーエス!!」

一番後ろで須藤が掛け声を発しているが、びくともしない状況に直ぐに諦めムードが訪れる。

「何やってんだ！死ぬ気で引け!!」

須藤が一人、気合を込めて全力を尽くす——しかし綱は白側にあつさりを持って行かれ、あっけなく幕切れとなった。

「よーし、よくやった、よくやった」

龍園も上々の結果に満足しているのか声が揚々としている。

「この調子でガンガン行くぞ。」

相手はワンマンで他は雑魚だ——ぶっ潰すのにこんなに楽なのはいねえ」

呼応してクラスの士気も上がっていくのが伝わり、龍園の統率力を見せつけて来る。

同時に嬰兒にも視線を向け、無言のまま勧誘している。

これには味方のBにも焦りが生まれる。

「まだ終わってない、最後まで全力を尽くして少しでも結果を上げるぞ」

特に神崎はこのままではいけないと仲間が発破を掛ける。

ただの偶然か見越しての事か——どちらにしてもBとC、それぞれは纏まっておりクラスとして機能している。

組としてもクラスとしても統率されていない差を見せつけられた形に流石に不満の声が上がる。

「葛城くんさあ。このままで本当にいいのかなあ?」

「……橋本、何が言いたい?」

「そのままの意味だよ——何かひとつでもあつちに勝てるものがないきや、不味いと思うんだけど」

橋本はそれとなく綾小路にも目を向ける。

「お前・俺たちには？の下に付けて言うのか?!」

これに戸塚が反応して声を上げる。

ただ橋本は綾小路の様子を見て、直ぐに顔を向け冷めた声で返す。

「誰もそんなこと言ってないだろう——このままじゃ勝てないって言うてるんだよ」

その様子は完全に投げっており、更に士気を下げる。

「ふざけんな！この采配は坂柳派そつちとも協議して決めたことだろうが！」

「それくらいにしておけ弥彦。」

橋本、お前の言いたい事も分かる——分かるが、それは俺たちではどうしようないことだ」

「そうだよな——悪かったよ」

あつさりと引き下がったことでその場は収まり自陣に戻って行く。

？に対して負けたことへの追及が無かったが、それが返って責められていると感じてしまう。

それが須藤には特に入らないようだ。

「チツ、次は障害物競走だ。今度ふがないことしたら、ただじゃおかねえからな」

須藤なりには尻を叩いたつもりなのだろうが、完全に空回りしており、またひとつ不利になったと感じる者も少なくなかった。

さて障害物競走が始まった。

細い平均台、綱くぐり、頭陀袋と、スピードダウンは免れないが決して難易度が高い訳じゃない。

実際に俺も一位を取れた——ただ同じくここまで一位を取ってた綾小路が今回は二位、左腕のダメージが抜けきってないのもあるだろ

うが、相応にセーブもしてる。

逆に同じレースに参加し一位と最後まで競って三位を取ったCの選手は全力でやっても余裕を見せている——それをすぐ近くからじつくりと観察してたって感じた。

何か掴んだのか、ちよつと聞いてみたいな。

まあ、ここまで来ればあいつじゃなくても何かあると思うのが普通——さっきのハードル走以上に調子が上がってるCは悪くても中間順位、四位以下を取る奴は一人もいない。

下位を多くとってる？の男子に我らがリーダーである須藤は豪くご立腹の様子だ。

「くそ……健の奴、四位とかになんねえかな」

おやおや、池の奴からもそんな台詞が出るか。

しかし組み合わせを見るにその可能性は低そうだな——確か野村と鈴木、Cでも運動音痴と称される二人じゃ基本スペックが違い過ぎる、流石に負けるとは思えない。

あるとすればBから出てる柴田か。

Bクラスで一番の俊足称され、これまでもすべて一位——須藤と競って来るのは想像に難くない。

どうなるかと思いつながらスタートしたが、やはり須藤と柴田が一気に駆け出した——その後ろにCの二人が食らい付いていく。

須藤を先頭に柴田とCの二人がほぼ同じの順番だが、最初の障害の平均台において差は開き始めた。

体格に似合わずバランスよく駆け抜け、僅かに柴田をリードする。Cの二人は最初の方はややもたついたが段々と速さを上げていったが、トップの二人とはかなり離された——それでも当人たちからすれば上出来だろう。

続く網くぐりも須藤が最初にクリアしたが、柴田も大差なく抜けて駆け抜ける。

まだリードしてるが、若干詰まって来たな。

最後の頭陀袋でも器用にこなす須藤だが、柴田が徐々に差を詰めていく。

それに気付いたか焦りが生まれ、どうなるかと言った展開だったが、僅かな差で須藤が勝利した。

中々に見応えのある接戦だったな。

肩で息してた須藤もどうにか一位を取りひと安心したようだが、戻ってきて直ぐ池に怒鳴る。

「見てたぞ寛治、てめえ六位だったろ！」

「お、お前だって危なかったじゃん！それに俺だけじゃねえだろうが！」

その言葉に手を伸ばしかけた——姿勢からして羽交い絞めにでもするつもりだな。

届く前に掴んで止めさせる——今日はこんなものばかりだな。

邪魔されて益々不満を募らせたようだが、同じく一位を取ったからか、それとも暴力では勝てないからか、さっきまでみたいに強くは出ない。

「柴田には土を付けた——今度はてめえの上を行ってやるからな」

声は落ち着いたものだが、ニュアンスも目も闘争心がぐつぐつ——競技って土俵でなら俺にも勝てると思っただか。

「そんなにトップが欲しいなら、譲ってやるけど」

「ふざけ——」

流星に怒鳴りそうなのを掴んだ手に力を入れて黙らせる……何回同じことをさせる気だよ。

「お前と戦う気はない。そう言うのは止めろ、迷惑だ」

少々、語気を強くして言っつて、腕を放す。まだ何か言いたそうだが、訊きたくもないので次の準備に行くとするか。

(お前と、か)

そのやり取りは綾小路もしっかりと聞いており、嬰兒の行動や言葉の端々も注意を払っていた。

ただ考えに没頭する訳にもいかない——次の二人三脚の準備、女子

の障害物競走にも目を向ける。

一番手に堀北が出て、Cからは木下と矢島——先の競技と同じ組み合わせだった。

堀北も挽回しようと思った顔をしており、スタートから全力で駆け出す。

結果は予想以上のものだった——堀北の足は遅くない、寧ろ早い部類に入る。

しかし一芸に特化した相手に勝てるほどではない。

そんなレベルでない程の圧倒的大差でCの二人は他を引き離れた。

堀北が平均台さんぼんてを終わるころには既にゴールしており、最早勝負にすらならない。

先のハードル走とは比にならない結果に他の選手たちは呆然自失、消化試合同然の内容となり、どうにも遅いペースで第一走が終了した。

自陣に戻って来ても顔色は酷く、誰一人例外なく掛ける言葉が見つからない。

特に調子を崩した堀北はBの選手——姫野ユキに抜かれ四位となり入賞を逃してしまった。

普通なら誰かしら責める声が上がりそうなものの一切無い——誰もが構っている余裕が無いからだ。

まだ戦意を保っている綾小路は嬰兒に真意を訊きたいからか、遠回しに言った。

「只管に不味い展開だな」

「同感だね。ケアしたいけど……正直、気休めどころか逆効果になるよ、これは」

ただ反応したのは珍しく弱気になった平田だった。

「ああ、下手なことはしない方がいい」

こちらもかなり一杯一杯のようで自分のことに集中しろと言いたいが、平田自身の言葉を借りれば逆効果になりかねず、当たり前障りがない返ししかできない。

綾小路は堀北の元に向かい話しかける。

「随分な様だな」

「……なに、わざわざ笑いに来た訳？」

「同情でもして欲しいのか」

神経を逆なでする言い方に睨みつけられる——まだ折れてはいないことは確認できた、ひと安心する。

「何しに来たのよ？」

「お前の目から見て、Cはどう見える？」

「どうもこうも絶対に不正してるしか考えられないでしょ。いくらなんでも絶対調なんてレベルを遥かに超えてるわ」

（そんなことは分かっている——知りたいのはそれにどんなメリットが含まれるかなんだがな）

Cが得る利益に対して、嬰兒が楽しむだけでは釣り合っているとは言えない。力を提供するには、それなりの利益や思惑がある筈——正にそれこそ綾小路が最も知りたいこと。

（嬰兒の異能を出させるのに何が効果的なのか、その方向性が掴めることが出来れば……）

状況は一気に綾小路に有利になる。そうなるなら？クラスがここで潰されたとしても全く構わない。

何処までもブレない優先事項——牛井嬰兒を制御する。

その取っ掛かりがやつと見えて来たのだ。

どんな些細なことでもいいから情報を得たかった。

Cは明らかに？の参加表を得て都合よく合わせているが、それは嬰兒とは別件のもうひとつの懸念事項の筈——ただどちらも？クラスを蹴落としにかかっているのは共通している。

ならば切り離して考えずみると、裏切者の目的を潰すことか。逆に手を組んでより確実に？を潰しに来ているのか。

（後者だった場合、あいつは何を対価にしたんだ？）

まず思い浮かぶのは自分には出来ない——女であることを使っただが、

（嬰兒が色仕掛けに引っ掛かるタイプとは思えん……いや、あいつだって男だ。そういう欲があるのは不思議じゃない）

だとしても嬰兒ならもつと理知的なやり方をしそうなもの——学校の行事を利用して一個人の願いに肩入れするなど、リスクが全く釣り合っていない。

寧ろ、尤も避けなければならぬことだろう。

（これは前者だった場合にも言える——クラスメイトの暴走を止める為にやったなんて、言い訳が通用するレベルじゃない）

やはり手を組んだなど考えられない。

どうにも解せないとドツボに嵌ってしまいかけた時、堀北から呆れ交じりの声が掛かった。

「あなたが何考えてるか、分かるわ」

綾小路は我に返り、堀北が何かしら感づいたのかと身構えてしまふ。

「これが事実なら反則や退学どころじゃない学校の責任問題だものね……坂柳さんのお父さんにも責任を取らされちゃう」

話を聞き思い過ごしであることに安堵し、そして新たな視点から己の視野狭窄を反省させられた。

（迂闊だったな、嬰兒の異能に固執しすぎて失念していた）

答えを知っているが故に主観的に考えてしまい、客観的に見れていなかった。

そして客観的に見たうえで嬰兒の情報を照らし合わせて見ると、何がしたかったのが漸くと見えて来た——同時に込められたメッセージにも。

「そう思うなら訴えるとかは少し待って貰えないか——事を荒立てないで済むようにオレも最善を尽くす」

「手を抜かないで好成绩を取り続けてくれるなら考えてもいいわ」

上手く話を持って行き、一位を取りに行けと言外に焚き付けられた。

しかし綾小路は乗ることはせずにかわすことにした。

「すまんが、左腕が痛くてな——その要求は難しいから、他で何とかする」

「……這ってでも結果を出すくらいのこととは言って欲しいわね」

「無理はするなとか期待したんだがな」

売り言葉に買い言葉になつてきたが、時間が迫っており綾小路は二人三脚の準備に移る為に平田の元に戻って行く。

「堀北さん、どんな様子だった？」

心配そうに訊いてくる平田に対して綾小路は淡々と答えた。

「まだ大丈夫だ——ただこのままが続いていくと不味いだろうな」

「その不安を減らす為にも頑張るしかないか」

紐を結び終わりスタート位置に向かう。

さて今回の一番手は俺、本堂のペアだ。

「お手柔らかに頼むぜ」

「俺に合わせようとする必要はない。練習通りにお前の全力で行け」

「いや、だから……………」

無駄口はここまで、スタートだ。

出だしだけあつて、そこそこの面子が揃つてるが、やはりCが頭抜けて前に出てる。

全員がそれを追う形になり、それは俺たちも例外ではない。

本堂も言われた通りに全力で走り、俺が合わせる形の序盤——そこから徐々に本堂が自然にスピードアップしていくように呼吸を合わせながらテンポを上げていき、終盤には限界まで力を発揮させるよう持つて行く。

それが実を結び最後には逆転して……とはならず惜しくも二位に終わった。

「はあ、はあ、はあ——」

終わった途端に壮絶な息切れ——文句を言う余裕もないか。

この結果に不満があるのは須藤のようで、待機してる場所から怒気がありありと伝わって来る。

一応はお望み通りの展開だろ——これで最優秀賞にひとつ近づけたんだから。

テントに戻って残りを観戦していくが、Cの独走が兎に角目立つ——Aでは葛城や鬼頭なんかが食らい付き、Bでは神崎や柴田のペアが接戦の末に一位をもぎ取ってるが、それ以外はざるだ。

「どわあああー！」

そして我らが？のエースである須藤と池のペア——池を半ば持ち上げて力任せに爆走、反則ストレスレの戦法で勝利した。

Cの奴らも流石にびっくりしたようで、それなりに差のついての一位だ。

この調子で続く綾小路と平田のペアもとかなれば良いんだろうが、そう簡単に流れは変わらない。

あの二人は相性の良さもあって、かなりいい調子だが……ここでもCのペアが競り合ってきてかなりギリギリの白熱した勝負になった。

「平田くん頑張ってる！」

不安そうにしている女子たちの中で王が一人大声を張り、その甲斐なのか一位を取ってみせた——うくん、役者が違う筈なのにミスマツチにも感じない、何とも不可思議なことだ。

戻って来てからも複数の女子たちからキヤーキヤーと歓声を受けてる直ぐ近くで、たった一人の女の子から労いを掛けられ自然に返してる全く正反対のペア——うくん、どっちが羨ましいのか微妙な光景だな。

その騒がしい女子たちも出番が回ってきて、堀北と櫛田のペアがスタートした。

出だしは好調のようだが、あつという間にCの矢島と木下ペアが前に出て引き離していく。

最早、定番となった展開だけに他は二位争いにシフト——堀北たちとAのペアが接戦に入り、これは最後まで分からなくなりそうだ。

「いけ鈴音ー！」

「山村さん、ファイトです！」

須藤が声を上げてるのを見て、坂柳も同級生にエールを送る。結果、終盤ではAの山村のペアが抜き去って堀北たちは三位に終わった。

まあ、実際に声が届いてたとも思えないから関係ないだろうが、それでも須藤が悔しそうに坂柳に目を向け、綾小路が前に出て……ひよつとしてだが計算済みとか？

十分間の休憩時間に入った。

白組陣地では正々堂々と戦うBクラスは体育祭を楽しんでいる……とは言えず快進撃を続けるCクラスから距離を取っている。

女子たちは一之瀬の周りに集まり次の競技である騎馬戦の打ち合わせ——男子は水分補給やトイレと休めるだけ休もうと兎に角必死なのが窺える。

一方でCクラスは龍園を中心に付き従っている男子たちは余裕を見せつけるように談笑しており、異常なほど高いテンションが離れた赤組陣地まで伝わって来る。

その赤組陣地では少々奇異な光景が出来上がっている。

須藤や堀北と言った勝つつもりで居た？クラスの面々は、全く予想外の展開に苦々しく暗い雰囲気を出しており、それは既に少数したいとも入れるAクラスの葛城派も同様であった。

それ以外の？の殆どとAの坂柳派は集まって陽気な会話や笑顔が絶えない——その中心には綾小路清隆と坂柳有栖が隣り合っており、二人に近いメンバーはしっかりと休憩を満喫しているようだ。

そのどれにも加わらず一人無言でいる牛井嬰兒——その彼の元に近づいて来る女子が一人。

「嬰兒くん、随分と楽しそうだね」

「ん。櫛田にはそう見えるか？」

振り向きもしない嬰兒に対して櫛田はずつと笑顔のまま——顔を合わせないまま会話は続く。

「だって出る競技、本当に伸び伸びしてたよね——特に棒倒しの時なんて一人でCクラスから守りきっちゃって」

「そうだな。今回は加減をあんまり考えなくていいから気が楽だ」

「あんまりって……まあ、意外でも何でもないけど」

「うんうん、やっぱり気兼ねなく話せるのもいいものだ——綾小路相手だどうしても探り合いになっちまうからな」

この台詞に櫛田の笑顔に僅かな歪みが生じた。

「……………嬰兒くんさ、何か嫌な事でもあった？」

やつのことで絞り出した台詞——若干の震えが混じってもいた。

「安心しろ、別に自棄を起こしてる訳じゃない。」

以前に言ったプランを実行する気はない——あくまで学校の流儀に合わせて参加してるだけだ」

「へえ、そっか……それでも一応言っとくけど、私は嬰兒くんに何かしようなんて気はこれっぽっちも無いから」

言い終わると同時に去って行く櫛田——どうやら本当に言いたいのはそれだけだったようだ。

休憩は終わり競技順がここからは一時逆転して女子騎馬戦が始まる。

三分の制限時間内に四人一組の騎馬を各クラス四つ選出（残りは予備扱い）し八対八で戦う。

大将騎は100点、他の三騎は各50点の配分であり、機種のみハチマキを奪って倒せば相手に生き残れば自分たちに点数が入る仕組みとなっている。

？クラスからは堀北、櫛田、軽井沢、森が騎手に選出されおり、大将である森を後ろに下げて守り重視のフォーメーションを組むこととなっていた。

試合開始の合図とともにCクラスから伊吹を騎手とした騎馬が堀北に向かつて行った。

騎手である伊吹の気迫も然ることながら、騎馬になっている女子たちも力強い走りを見せている——それを真正面から浴びせられた堀北の騎馬は意表を突かれた以上に気後れしてしまい僅かに後ずさる。

「早速勝負ありか」

観戦していた綾小路の諦めたような声に間髪入れず、

「ふざけんな！ 鈴音、負けるな!!」

須藤が反応して声を張り上げて声援を送る。

しかし何の効果もなく、伊吹の繰り出した手を堀北は避け切れず体制が崩される——騎馬の面々も逃げようとするもすぐに先回りされ、再度繰り出された攻撃にあっさりとはチマキを奪われ、倒される勢いのまま騎馬も崩れて堀北は落馬した。

リーダー格が倒されたことで戦線が崩壊する——と思いきや伊吹たちの側面から軽井沢の騎馬が突撃、しかしそれも反応され回避された。

「伊吹さん、後ろー!」

Bの大将騎である一之瀬が声を上げる——そこにAの騎馬、神室と山村が待ち構えていた。

軽井沢も追撃して三対一の体制に持つていく。

窮地になった味方をフォロ^{あかくみ}しようとする一之瀬たちBには他のAと?が進路を塞ぐ位置に居り妨害される。

「ここで伊吹さんを獲れば流れはまだ分からないね」

観戦していた平田が期待を込めて言う。

「ああ、軽井沢には頑張^{あかくみ}って貰いたいな」

綾小路が応え、隣に居る坂柳の手を握る。

「しかし頭を狙ってくるのは予想内でしたが、思っていた以上の威力ですね」

二人でフォーメーションを立案した際には膠着状態となり、最低でも五分の乱戦に持つて行くつもりだった。

しかし堀北は早々に討ち取られ、形勢は不利と言わざるを得ない。

そしてそれは更に最悪な方向に転がった。

「嘘だろ……」

それは一体誰の呟きだったのか……その目で見た光景が信じられない、そんなニュアンスであった。

三騎に囲まれ同時に攻められる伊吹——その全てに身体を反らす、払いのける、更にはカウンターを合わせ逆に神室のハチマキを取ると

互角どころか優勢に持つて行った。

そして穴が開いた瞬間に騎馬になっている女子たちは走り抜けて包囲から脱して体制を立て直した。

これによりフォーメーションは一気に崩れてしまい、圧倒的に不利となつてしまった。

観戦している側もそうだが、実際に戦っている女子たちは輪をかけて信じられないと言った表情であり、隙が生じてしまった。

その隙を見逃さず伊吹を筆頭にCが攻めてBも続いていき、軽井沢と山村を残して一気に撃沈されてしまう。

軽井沢は自爆覚悟で突撃してBの一騎と相打ち、山村はそれをフォローしようしたBからハチマキを奪うも直後に伊吹に撃沈させられた。

終了までの時間は一分にも満たず、名実ともに圧倒的大敗であった。

皆が自陣に戻ろうとしていく中で地面に倒れたまま、ぐったりとして起き上がらない。

「おい——鈴音の奴、大丈夫か?」

須藤が人一倍、心配な声を上げる——ただそこには既に嬰兒が行つており、堀北の上半身を起こすとゆっくりと数度揺らし最後に僅かに持ち上げる。

「……………うう……………」

堀北の意識は戻り、僅かに視線を彷徨わせるも直ぐに事態を理解する。

悔しさを噛みしめ立ち上がる堀北に嬰兒が言う。

「大丈夫そうだが、一応念の為に保険医に診て貰え」

「問題ないわ——でも、ありがとう。助けてくれて」

珍しく素直な堀北だが、嬰兒は冷ややかな言葉を返す。

「これで二回目だが、あと何回お前を助ければいい?」

クラスメイトだから、心配だから助けた訳でない——残念も発破も何ひとつ感情の籠つてないニュアンスに堀北が睨みつけるが、返す言

葉が出てこずに自陣に戻って行った。

夢が・・・

さて男子騎馬戦の開始だ。

俺を騎手に前方に牧田、右を本堂、左を南で大将騎を務めることになった。

前に出て攻める役目は平田を騎手とした、須藤、三宅、綾小路たちが務めるとのこと。

「つしや行くぞお前ら！」

気合十分な須藤だが、これまでを見たからかクラス全体の士気は今ひとつだ。

だから俺も特に反応せずに黙ってやり過ごそうかと思つてつたが、「いいか嬰兒！絶対にやられんじやねえぞ、やられたらお前は戦犯——！！？」

一瞬でカチンと来て須藤が言い終わる前に口の中に指を付き入れて黙らせた、しっかりと殺意を込めて——敵味方問わず見てた奴らも絶句だ。

「今度、俺に向かってその言葉を吐いたら一切の容赦はできん——よく覚えとけ」

口を塞がれ固まっている須藤から少しどころじやない冷や汗が出ており、俺はさつと手を引いた。

「すう、はあ」

ひと呼吸ついて殺意を静めて牧田たちの元に行くとおどおどして何も言わない——流石にビビったか、だけどずっとそうしてもいられないから準備に入る様に促して騎馬を組む。

他の連中も騎馬を組んでいき、あとはスタートの合図を待つだけだ。

俺は予定通りに後方に下がり、以降はなるべく動かないでハチマキを取られないことに徹する。

俺じゃなくて騎馬を狙つてきても逃げ切れる足がある奴らだし——まあ、大丈夫だろう。

攻撃陣は集まって何か話してる——大方、練習でやってた体当たり戦法のことだろうが、どうなるかな。

さて、スタート合図だ。俺は動かず残りの？の騎馬はAと合流してBとCに突撃して行く。

「うらあー！狙うは龍園の首ひとつ!!」

相変わらず先頭に立って雄叫びを上げる須藤——これがただの気合いと馬力だけなら放っておくのが、体格で劣るBの二騎を早々に潰した。

ただCはそう上手く行かず止められた——これは平田の見せ場かなとおもったが競り合って来る相手は無駄なくいなして、バランスが乱れた一瞬を狙い押し崩して見せた。

ほう。綾小路は柔道技で須藤はバスケで鍛えたテクニックを使つてか——確かスクリーンアウトつて相手を抑えたりするプレーの応用だよな。

ひとつ間違うと騎馬が崩れちまうが、綾小路も上手く合わせつつ辛うじて付いていつてる三宅をフォロウしてる。

平田も崩れた瞬間を見逃さずにハチマキを奪う——これは中々いい勝負になるかも知れないな。

と思ったのも一瞬——葛城率いるAは三騎失いながらも柴田・神崎率いるBを討ち取るものの直後に龍園に背後を付けられAは全滅、残った？の二騎もCにあっさりハチマキを取られて実質三対一か。

わあ、さっきの女子とは正反対の構図だな。

「え、嬰兒……俺たちも加勢に言った方が？」

「待機するつて取り決めだろ——攻勢に行くなら指示をやり直して貰わないと」

余計なお節介なんてするもんじゃやない——須藤が助けを求めるなら少しは考えるが、ありえないだろうな。

それにセオリーなら三機が囲み確実に息の根を止めに行くが、どうやら面白い方向に転がりそうだな。

龍園は須藤たちの正面に立ち、手招きしながら不敵な笑みを浮かべてやがる。

ベタな挑発だが、須藤には効果的で案の定突っ込んで行きやがった。

ただ龍園の騎馬の中心は黒人ハーフのアルベルト——しかも武道の心得もあるから、さつき崩した素人のようにはいかない、寧ろ押されてる。

平田も龍園のハチマキを取ろうと仕掛けるも龍園は余裕で躲し、全く戦いになってない。

俺同様に残っているCの二騎も手を出しに行く様子はなく、完全に遊ばれてるな——これには流石に平田もムキになるもフェイントを織り交ぜるなどして腕を伸ばすが、向うの方が一枚も二枚も上手のようであらうで全く効果がないばかりか、逆に致命的な隙を見せてしまった。

「不味い、逃げる平田！」

牧田が叫んでいるが間に合う訳なからう——普通ならな。

龍園の奴、攻撃しないで平田が体勢を直すのを待ってやってる。

いつでも倒すことなんて出来るってか——此処まで来ると自信を通り越して驕りだな。

ただ今の奴らには、それが不遜じゃない状態——かなりのハイテンションになってる。

傍観してたCの二騎がこつちに来た——挟み撃ちにでもするつもりかと思つたが、並走して真正面から来る。

「おい、嬰兒どうする……やるのか？」

その重圧をまともに受けてる牧田は冷や汗もの——正直、たった二つ程度、どうにでもなる。

俺はな——それが分からない様子でもないし、

「周り右して逃げた方が賢明だな。狙いはお前らだ」

突っ込んできて騎馬を潰す気だな。

騎手の奴らはハチマキをガードして、戦う気は見られない。

返り討ちにするのもひと手間掛かる——その間に馬が潰されるのが関の山だ。

ターゲットだと分かると一目散に逃げる騎馬たちだが、もう追いつかれそうだ——このままじゃジリ貧だし、仕方ないか。

「俺が合図したら、ばらけて逃げる」

「ど、どうすんだよ？」

「説明してる時間がない——怪我したくないなら言う通りにしろ」

などと悠長な会話をしてたら目前まで迫って来てる——そして減速することなく、左右の二人に向かい体当たりするつもりだ。

プレッシャー

迫力で顔を引きつらせる本堂と南、もう限界みたいだがもう少し我慢しろ。

「行け！」

接触するギリギリで言うのと騎馬が解かれ、本堂は右に南は左に方向転換して全力ダッシュ——完全に意表を突かれて騎手の奴らにも隙が出来た。

悪く思うなよ。

そのまま前に行こうとする牧田の背を蹴って、ちよつとしたバツク飛行を披露——地面に落ちる前に通り過ぎた騎手のハチマキを頂く。

そして着地度同時に終了の合図——タイミング的にはギリギリ感で感じたが、どうなるかな。

判定を待つと——結果は駄目だったか。

俺は失格で減点、Cの二騎もだが残っているのは龍園だけ——平田もハチマキを奪われ騎馬の連中、特に須藤が著しく疲弊しているのが見える。

こっちの全滅で騎馬戦は負けだ。

そしてそれ以上にヤバい状態に持って行かれてる——奪い取った三つのハチマキを揚々と振り回し勝利をアピールする龍園。

なんとも分かり易い挑発だ——誰かさんにはびったりだ。

「くそっ！」

須藤の声の荒さは今まで比じゃない——完全に我慢も限界ってところか。

龍園の奴が全く目もくれずに俺の方に来てるのも拍車をかけている——さて何をやる気なんだか？

「特等席で見せて貰ったが、中々に面白かったぜ」

「そりゃ良かったな。で？」

「おいおい、折角褒めてんに連れねえな」

陽気な態度で肩に腕を回してきて、それでいながら堂々と通りのいい声——明らかに計算付くで文句言う気も失せてくる。

「こんな雑魚の中に居て、オメエもストレス溜まってんじやなえか？ 乗り換えるなら早い方がいいぜ」

龍園は言うだけ言って堂々と？ 連中の横を素通りして行きやがった——これには当然、須藤だけでなく殆どが不快な顔を浮かべてる。

俺からは龍園の顔は見えないが、さぞ愉快的表情してるんだろうな。

須藤なんか今にも殴りかかりそうな雰囲気だ——やったら、退場だけじゃ済まないこともありえる。

それを察してか平田が兎に角テントに戻る様にと促してる。

俺も戻るとするか。

で、そのまま何事無くと行きたかったが、早足で追いついてきた須藤が荒い声で言っ来て来やがった——せめて戻ってからにしてくれよ。

「嬰兒、なんでわざと負けやがった?!」

「ハチマキは取られなかったぞ」

ついでに相手の分も取った——が須藤こいつがそんなんで納得する奴じゃない。

「ふざけんな！ 攻めてりや苦戦しねえで倒せただろうが！ むぎむぎやられやがって!!」

「ああ、分かったからもう少し声を落とせ」

どうにかテントまで戻り落ち着かせようとしてみたが全く効果なし。

「分かったただあ？ だったら本気出しやがれ！ てめえがそんなんだから俺がこんな苦労してんだろうが!!」

「ほう、本当はリーダーなんてやりたくなかつたか」

「つたりめえだ！ そんな面倒なのはお前がやって、俺は競技にだけ集中するほうが良かったんだ！」

なんとも取って付けたような文句だ——ただその意見には同感だと言う目があつちこつちから向けられる。

「須藤くん、落ち着いて。仲間割れしても良いことないよ」

「大体リーダーだってノリノリでやってたじゃん」

「嬰兒くん、気にしなくていいから——あつちで休もう」

これは不味いと思っただのか、平田と軽井沢——それに櫛田がフオローしようとしてくれたが、今回は余計なお世話だ。

背中を押して来る櫛田を透かして須藤を見据える——場面的には一触即発で固唾を飲むのも出て来る。

「軽井沢の言う通り、リーダーを引き受けたのはお前だろ」

ただ静かにそう告げると、なにやら別の興奮が湧き上がったように須藤の息が上がる。

「だったら俺の言うことに従え！分かってんのか、もう後が無えんだぞ！」

「それをどうにかするのはリーダーの仕事——俺の仕事じゃない」

淡々と事実を告げてやる——周りはもうダメだみたいな顔した奴や須藤に失望したみたいなのを向ける奴、そしてごく少数だが俺の言動が意外だと言うような奴もいた。

「俺はクラスを勝たせるために必死になってんだろうが……」

「俺にはそうは見えない——クラスじゃなくて自分が目立ちたいって風にしか見えない」

おや、幸村が入って来るとは意外……でもないかな。

あいつも頑張ってるが結果は振るわない——ある意味で須藤とシンパシーを感じてるのかも知れない。

恐れながらもどうにか軌道修正を試みてるところか。

「リーダーだって言うなら感情任せに煽るだけじゃなくて、冷静な判断のもとでの的確に指揮するのが正しいんじゃないか——少なくとも今はそう言う場面だ」

「ゆきむーの言う通り。嬰兒くんに責任を擦り付けるなんてカツコ悪いでしょ」

「啓誠……幸村の言う通り頭を冷やせよ」

長谷部と三宅が同調して窘めてるが、

「つるせえ……」

完全に逆効果だな——須藤の目が血走ってきた。

このまま正論を説いてもどんどん悪くなりそうだ——つてか、拳を造ってるし既に殴り掛かって来る寸前だ。

止めるのも造作もないが、何の解にもなる気がしない——ならば、いつそのこと。

「須藤よ。お前、バスケのプロ目指してるんだよな？」

「それがどうした、今関係ねえだろ……」

よし、まず殺意はこっちに向いたな——同時に望んでもない注目も集まっちゃったが。

「気に入らないことがあるからって、当たり散らすなんぞスポーツマンシップには程遠い姿だ——バスケの世界つてのはチンピラがやっていけるもんなのか？」

「てめえ……言うに事を欠いて俺の夢までバカにすんのか!!」

「え、嬰兒くん！いくらなんでも言い過ぎだよ」

須藤が完全にブギ切れて胸ぐらを掴んでくる——今回は俺も無抵抗で居ると平田が慌てながら止めようとしてきた。

その気持ちはありがたいんだが、引っ込んで貰えんかね。

「須藤、俺には夢なんてない——だからお前の気持ちなんて全く理解できない」

「ハッ、夢なんて下らねえってか——んな面白くねえ人生、何の価値があんだよ？」

反撃の糸口を掴んで語気が多少は和らいだようだが、俺は須藤の頭を冷やす為にこんな話をしてるんじゃない。

「お前なんかそんなこと言われる筋合いはない」

と普通なら言うだろうな——ただ俺はあらゆる意味で普通じゃない、平和な日本の学生と比べたら特にな。

「俺の生きる価値を決める権利は俺にはない——ただ決められた事に従うだけだ」

「けっ、誰かのいいなりだつてか？立派だな——自分の意志もねえ、お利口さんは」

血走ってた目も声も完全に冷めて手を放した——そして完全にバ

力にしたニュアンスで調子に乗ってやがる。

もう話を聞く気も失せてるようだが、そうはさせない。

「意思はあるさ——従うべき相手は選ぶ。」

それから言うとお前のお前は従うに値しない、その気が無いならとつとと失せろ。

代わりのリーダーと競技交代のポイントをどうするか、何か案のある奴はいるか?」

「ふざけんなーなに勝手に仕切ってやがる、リーダーは俺だぞ!!」

再び怒りがぶり返したようだが、これまでの流れで須藤をリーダーだと認めてる奴なんてどれだけ居るんだろうか——殆どの奴らが距離を取って須藤の声を聞いているのなんか僅かだ。

「待ってよ、嬰兒くん。それは余りにも乱暴だし質が悪いよ」

その僅かである平田が俺に抗議して来た——しかしどうにも物足りない所からすると当人も全否定する気がないと感じさせるぞ、おそらく俺以外にもな。

何より本当に気にしてるのは、そこまで俺の事情を言っても大丈夫なのかって顔に書いてある。

「須藤くんの夢をダシにして乏しめるなんてやり方……許されるものじゃないよ」

平田なりに必死に捻りだした擁護——ここで俺が折れてやれば、? クラスの空中分解は防げるだろう。

だが甘いよ。

「平田、夢や希望なんて無くても人は生きて行ける——いや生きて行かなきゃならない」

ただ静かにそう言うとお全員が息を呑んだ——そして続ける。

「そして今俺たちが生きてる居る場所は高度教育高等学校だ——この学校でそんな甘い主張がどれ程の役に立つんだ?」

龍園の根性は腐ってるが、あいつはしっかりと目を見開いて欲しいものを見る。

お前らはいつまで寝ぼけた目で寝言を抜かしてるつもりだ?」

「随分と買ってらっしゃるんですね。龍園くんのこと」

坂柳よ。意味深な笑みを浮かべて……何の真似だ？

「おい、嬰兒……まさか本気で龍園の誘いに乗るつもりじゃないだらうな？」

と今度は幸村が焦った声を出してきた——上手に乗せられてるな、色んなのが。

「ねえ、綾小路くん——あたしもポイント出すから、選手替えた方がいいなら直ぐに言って」

「軽井沢！てめえ!？」

「あたし、このまま終わりたいくない——嬰兒くんも結果出してる人の指示なら文句ないでしょ」

須藤が怒鳴るが軽井沢はガン無視して、綾小路に判断を仰ぎ俺を繋ぎ止めに来る——半ば本気、いや本当に本音なのか必死さがありありと伝わって来る。

これも計算の内か？殆どの奴らの期待は綾小路に向かった。

もう須藤の事なんて誰も気に留めてない——ここで更に我儘な言い分を喚き散らすかと思いきや、

「ああ、そうかいそうかい……そんなに俺が要らねえって言うなら勝手にやってる。体育祭なんてクソ食らえだ」

自分自身、もう完全に諦めちまったニユアンスでテントから去って行ってしまった……つまりはこんな扱いを受けるのは初めてじゃないってことか。

恐らくだが他人だけじゃなくて肉親からも……。

「何事だ、一体?？」

と今頃になつて茶柱先生の登場——まさか狙つてたりしてねえよな？

「須藤がもうやりたくないとい降の競技を放棄するそうです」

「ち、違います。少し調子が悪いみたいで……下がって休みたいとのことですよ」

俺が簡潔かつストレートに答えたのに——平田よ、その言い訳はちよつと苦しいんじゃないか。

茶柱先生も少し考え込んだが、すぐに判断を下す。

「そうか——だが何かしらのトラブルは見取れる故、上には報告する。二度と同じことを起こすなよ」

形式的な対処で見逃してくれるようだが、本心ではどんな感じなんだろうかね？

そんな？クラスの揉め事など関係なく、二年と三年の騎馬戦は滞りなく進み——全参加最後の種目200m走が始まろうとしていた。

この種目でも一番手は嬰兒であり、待機していると龍園が近づいて来る。

「よう、牛井。須藤はどうした？便所か？」

龍園のニュアンスは全てを把握しているようだ——遠目から見ても推理してみせたのか、他に確実な手段でも要しているかは定かではないが。

「あのままじゃ戦力になりそうもないからな。」

要らん奴は切るだけ、俺はそれでいい——結果、どうなるかは流石に分からないけどな」

「クク、良い答えだ。やっぱりあんな連中には勿体ないぜ」

これには嬰兒は無言であり、一組目が呼ばれコースに向かう——龍園は二組目のようで待機に入る。

最早慣れた展開に他クラスも動じることなく集中しておりスタートする——結果は嬰兒が一位を取ったものの、Cの選手である時任が二位となり三位もCの選手が獲得し、素直に喜べない雰囲気であった。

続く二組目では龍園が問題なく一位、少し遅れて二位もCと止まらない快進撃に赤組のテントでは諦めムードが漂っていた。

戻ってきた嬰兒は無言で座っており何も言わない。

軽井沢が何とか話しかけようとしてもいたが、

「次は平田の出番だな」

彼女として応援しなければと持って行かれてしまい取り付く島も

ない。

その調子のまま200m走も消化されていき、出番になっても須藤が戻って来ることは無かった。

この後の女子と上級生たちの200m走、五十分の昼休み——それが終わり午後からは推薦競技が始まる。

須藤抜きでは大幅な戦力低下は明白——綾小路はダメージが抜けていない左腕を摩りながら嬰兒に話しかける。

「このままじゃ詰むな——これはお前の本意なのか、嬰兒？」

「須藤を連れ戻せって言うなら相手を間違えてるぞ」

「分かってる——さっきの質問は言葉通りの意味だ、裏は無い」

そう言って静かに返答を待つ綾小路——先の一件から自然と耳と注目が集まる中、嬰兒は淡々と事務的に答えた。

「終わっちゃうのは残念だ。でも俺は何も出来ないよ」

「そうか、分かった」

綾小路は会話を切り上げて待機に入り以後は何も言わない。

これには不吉を感じる者も少なくなく、何か考えがあるのかと希望的観測を持つとする者も居たが拭いきれるものではなかった。

軽井沢が意を決して綾小路に話しかける。

「ねえ、大丈夫なの？」

「何がだ？」

「何って……さっき自分で言ってたじゃん。このままじゃ勝てないって」

「ああ、言ったぞ——このままじゃな」

「……………あゝ、もう。勿体ぶってないでさ——」

「悪いが話は後にしてくれ」

綾小路は立ち上がり、競技から戻ってきた堀北の所に向かって行く

——途中、嬰兒にも目を配るが無言のままであり、特に気にすることなく話しかけた。

「今度もまた随分な結果だな。堀北」

「不羨ね——今度こそ笑いに来たの、それともアドバイスでもくれるのかしら？リーダーさん」

皮肉を込めながらも何かしら期待感を滲ませるニュアンス——今回も入賞順位に入れなかった自身に対して綾小路は二位を取った。それで主戦力たちのモチベーションを何とか保ち、ギリギリで？は喰らい付いている状況——その中で結果を出せてない体たらくに焦りを感じているのかも知れない。

そんな推察を浮かべながら、綾小路は冷たく言い放った。

「生憎とオレはリーダーになるつもりなんて無い——Aクラスになりたいのはお前なんじゃないのか？だったらいい加減に腹を括れ」

「訳が分からないわ——須藤くんを連れ戻して来いとも？」

「十二分に分かつてるなら聞き返すな」

「私に出来る訳ないでしょ——誰かを気遣う余裕なんて無いのよ、あなたと同じでね」

堀北は綾小路の左腕を見ながら強く言い返す。

「そこまで分かって何故少ない戦力でいいなんて結論が出る。そっちの方が全く持って訳が分からん」

「不愉快ね……。誰よりも私情に固執してる人が偉そうに説教なんて。そもそも大勢はもう決してるわ。」

後は負けを小さくするか喰い合いになるだけ、あなたが熱を上げている幼馴染さんのクラスだって敵として認識していかなきゃいけない。そっちこそ分かつてるの？」

堀北の不穏な発言に聞き耳を立てていた者たちは背筋が寒くなるのを感じた——引き合いに出された坂柳有栖の満面の笑みによって。

「それは有栖が好物な展開で結構なことだ——それで、お前はもう試験を投げるのか？」

問題のすり替えなどは許さない——動じることのない綾小路から、そんな含みを感じさせる。

「……………そんな訳ないでしょう。私たちは駄目でも……………赤組としての勝利は得られそう、二位に入れば総合的には負けにはならない」

言いながらも俯いていく堀北——自分の力による結果ではないことに不甲斐なさを感じているのが伝わって来る。

（もつとも誰に対してなのか、私情で動いてるのはお互い様だから何

も言えないが)

上の学年——特に兄である堀北学の参加する競技全てに目を奪われていた様子を思い出す。

「その為にするのが、余裕が無いと愚痴って貴重な戦力を見殺しにすることか？」

それじゃ最低限しか嬰兒は動かせない——折角の超強力な戦力を活かすことが出来ないんじゃない、お前は何の為にクラスに居るんだ？」

「私は、私自身の果たしたい目的が、叶えたい願いがあるのよ——クラスの為になんかそれを諦めろとでも言うなら冗談じゃないわ」

「その願いを今、お前自身で潰そうとしてるんだぞ——クラスの為に
お前が居るんだなんて言わないが、願いを……見返りが欲しいなら、
今お前が何をすべきかを自覚しろ」

それは堀北鈴音にしか出来ないこと——それこそが反撃の一手となりうる。

「後半戦、須藤抜きで戦い抜ける楽な展開になるなんてありえない——
——あいつが戻って来なきゃゲームオーバーだ」

ハッキリと言いつつ切った綾小路に堀北は言葉が出てこない。

「どうするかはお前が考えて決めろ——但しそんなに時間は無い、それは念頭に置いておけ」

綾小路は去って行き、その先には笑顔のままの坂柳——そのまま一緒に歩いて行き、二人のグループメンバーも集まって来る。

「お昼休憩は何処でしますか？」

坂柳が言うのを皮切りに会話が始まり広がっていく。

「別にどこだって一緒だし、もうこの辺でいいんじゃない」

長谷部が軽い調子で提案すると幸村が周りを見ながら肯いた。

「確かに」

彼ら九人が集まるのはいつもの事なので珍しくもないが、中心である綾小路と坂柳は夏休みの結婚式の熱が収まっておらず、寧ろクラス共同と言うお膳立てもあって余計に注目の的であった。

人目の無い場所に行こうとしても野次馬が付いてくるのは分かり

切っており、テントから然して離れていないグラウンドの一角を陣取ることにした——結果、その周りは込み合い気軽に話せる直ぐ隣や正面などの取り合いが起こった。

そして右隣りをいち早く取ったグループが話しかけて来る。

「あたしたちもご一緒させて貰うから、平田くんもいいでしょ」

「ええ、構いませんよ。軽井沢さん、それに牛井嬰兒くん」

坂柳が笑顔で許すと軽井沢グループとそれに連れられた平田と嬰兒も集まった、男女十五人のグループが出来上がった。

手早くブルーシートを敷き、主賓である綾小路と坂柳を座らせると学校が用意した仕出し弁当を誰が取りに行くかの話に移る。

「ここはやっぱり男子でしょ、流石にこの人数のをまとめては女の子じゃキツイし」

軽井沢が仕切りながら言う——態度や口調からして反発も生みそうでもあるが、一番のご馳走と言える新婚夫婦に興味が行っているのが見え見えであり、それを同じくする女子たちを早々に味方に付けた。

「だよね」

「ここは男の甲斐性を見せて貰う場面だし」

「あ、でも綾小路くんはいいよ。このままの方が一杯元気になるみたいだし」

「よ、いいこと言うね。松下さん」

「わ、私も賛成かな」

「ま、私もその方が楽だし」

これがこの場限りの集まりなら男子から饗蹙を買いそうであるが、人が増えてもいつも通りだな

「全くだ——じゃ、とつと行ってくるか」

と何とも気の抜けた遣り取りに平田は乾いた笑いを出してしまう。

「ハハハハ、僕も付き合おうよ」

「俺が行くから、お前らはそこに居ろ」

「いや、俺も一緒に行く。ほら早く行こうぜ、牛井」

橋本が嬰兒を押しで行ってしまい、残った面々は雑談に入った。

「なんとも忙しない奴だな」

「フフ、気を利かせてくれたのですから、ここは素直に感謝しましょう。清隆くん」

坂柳にそう言われて無言で肯定する綾小路——特になんでもない遣り取りだが、それこそが恋バナに飢えている者たちの壺にはまり、揚々と喰い付いて来させる。

「そうだよ。折角の体育祭の醍醐味なんだし、しっかりと楽しもうよ」
軽井沢の至極もつともな発言を皮切りに話は進んでいく。

「特に綾小路くんが一番頑張ってるみたいだし、ここらで一息つかなきゃ」

「松下さんの言う通り、私たちに遠慮とかしなくていいから」

「そうそう、しっかりと元気になって貰わないと」

明らかに何かを期待している軽井沢グループの面々——それは綾小路グループの女子二人も同じく目をキラキラとさせており、それ以外も満更でない視線を送っていた。

「あらあら何だか面映ゆいですね」

それに応えてか、それとも自身が期待してからののか坂柳は綾小路に寄りかかって優しく左腕を撫でる。

「有栖」

「いいじゃないですか、こう言う時ぐらい」

若干照れる綾小路に笑顔のままの坂柳——既にこれだけで胸がいっぱいな展開であった。

「そうだよ、綾小路くん——ちゃんと休まないよ」

何かと休めと言ってくる松下。ここで漸くと平田も会話に参加してくる。

「少しでも体力を取り戻さないとね——後半戦は向う側はまだまだ余裕みたいだし」

辺りを見渡しながら絶好調ではしゃいでいるCの様子を見ており、一気に真面目な雰囲気になり替わった。

「あんだけぶっ飛ばしたたのに……何処にあんな力があんのよ？」

軽井沢の不満げな台詞に同感だと無言のまま肯く一同——この体

育祭の結果はもう決まっていると云った堀北の言葉が思い出される。
「堀北さん、見当たらないけど大丈夫かな？」

平田はさり気なく話を切り出して、綾小路の反応を窺う——言外に一人にして大丈夫なのかと。

「オレはあいつがすべきこと——あいつにしか出来ないことをやれと言っただけだ。」

それをあいつ自身がどう受け止めるかは分からん——出来ればいい方向に行つて欲しいがな」

「Aクラス^{うちら}としては何も無い方がいい気もするんだけどね」

神室が会話に入つて来る——これには？の面々は不服顔だ。

言葉そのものもあるが、須藤が頼りだと言うの状況もあるのだから。

更にそれが堀北次第だと言うのにも……。

「今こそが堀北の正念場なんだ——どうなるかは神のぞ知る、だな」

綾小路は顔を上げて空を仰ぐようにしながら、目線は嬰兒が行つた方を見て言つた。

普段を知つていればいつものことだが、些か以上に事情を知っている坂柳にとつては面白くないことであり、撫でるの止めて手に力を込めて握りしめた。

(……ちよつと痛いぞ。有栖)

と今度は坂柳に目を向けると嬉しそうにして撫でるのを再開する——この光景に集まりだけでなく周辺にも和やかさが戻るのであった。

誓って〇〇

「予想通りに混んでるな」

仕出し弁当を取りに向かうも混みあっていて、どの列にするか少し迷うな。

「なに、そこまで掛からんだろう。早く並ぼうぜ」

付いてきた橋本が適当に列に入った——ま、確かに回転も早いみたいだし俺も橋本と一緒に並ぶ。

「今日だけの高級品——どんな豪華なのか今から楽しみだな。牛井」

「あー、悪いけど……………」

「お、すまんすまん。名字は嫌なんだったな、嬰兒」

見掛け通りにチャラく、フレンドリーで砕けた話し方——だが絶妙にこつちと距離を詰めて来た。

伊達にAクラスじゃないってことか——それとも坂柳の目に適った奴と言うべきか。

「向うは今頃、夫婦でイチャイチャしてるのかな——仕掛け人としてはどう思う?」

「やってるだろうな——橋本は見れないのが残念じゃないのか?」

「一緒につるんでる時はしよつちゆうだからな——それでもあのお祭り騒ぎイベントには驚いたがな」

なんだ、新しいプロデュースでもあるのか。しかしそれは必然的に特例にあやかるところに繋がる…………この前のは坂柳も了承済みの筈だが。

「Aクラスはもう頼み事はしないと言うことだった筈だが?」

「勿論、そのつもりはない——ただ葛城の奴、引つ張ろうとして失敗したみたいだしな」

つまりは俺を再度Aクラスに引き抜くとかか、そのまま無言で相手の出方を待つとニヤリとしながら言ってきた。

「クラス移動出来ないのもお前の事情か?」

「言う必要はない——と言えば満足するか」

「いいや全く、ぶっちゃけ詮索するつもりなんて最初からないしな」

「懸命だな」

「けど他はそうだとはい限らないよな。やったところでお前が困るとは思えんが、余計な面倒は望むところじゃないんじやないか？」

本題はそれか。俺の役に立てることがあるってアピール——それでしつかりと見返りも求めてる顔だ。

こういう奴って分かり易くて返って信用出来たりもするよな——お友達にはなりたくないけど。

しかし綾小路より安上がりになりそうでもあるよな。

こいつはそこまで高望みをするタイプにも見えない——あくまでも自分の安全と利益を第一に考えてる。こうして堂々と他クラスに自分を売り込んでくる辺り、坂柳が負けた時の予防線を張ってるのか。

つまりは彼女に付いてるのも勝ち馬に乗ってるだけ……綾小路が訊いたら絶対に良い顔しないな。

当初は唾つける相手が違うんじゃないかと思っただが、誰が？クラスの舵を握るかはまだ分からないからあながち間違ってるとも言えないな。

「ひとまず話は分かった——ただ困ったこともあったら頼るかは気分次第だぞ」

「十分だ——役に立ったなら、そのことを他にも伝えてくれ」

ちようどよく順番が回って来たので人数分の弁当を注文する——殆どの奴らがここでの昼食を希望してるが、そうでないのも居る。

そいつらは何処で何してるかな？

渡り廊下の一角を歩く櫛田、反対側から足取り軽くやって来る龍園。二人はすれ違うことなく、同じ方向に足を向け並びながら渡り廊下を歩く。

「いや、悪い悪い。鈴音の奴があまりにも雑魚だったんで計画が

狂っちまってるな——桔梗」

「別にそれはいいよ——結果的にはあいつの面子は丸つぶれなんだから」

「ほう、意外だな。約束が違うとか、もっとねちっこくやれとか文句が来るかと思ってたんだが」

「あなたとは、もうこれっきりにするつもりだからね——これから先、何があったって私は一切関わらないし、知らぬ存ぜぬだから」

「なんだ、今更になってビビリやがったか——だとしたら期待外れだな」

心底愉快そうにそれでいて下品に笑う姿は大抵の者は嫌悪を抱くだろうが、櫛田は全く意に介すことなく話を続ける。

「どうとでも……あなたのことだから私が裏切った時の保険ぐらい掛けてるんでしようけど、何の役にも立たないから」

「ほう、退学してもいいってか——じゃ、体育祭が終わったら早速試してみるか。最低でもクラスで居場所を失ったお前が、どんなことするのか——ああ、考えると結構面白そうだな」

一見すれば龍園が櫛田を脅迫している——それも龍園が途轍もなく有利な状況で。しかし櫛田は一切動じない。丸で龍園など全く問題にもならないと言うように。

「ご自由にどうぞ——て言うか、そんな悠長なことやってる余裕あるといいけどね」

「……解せねえな。何があった?」

「そんなのこつちが訊きたいわよ。あいつが自棄を起こすなんて当面は無いと思ってたのに……一体どこのバカが」

訳が分からない——櫛田の様子からして分からせるつもりもない。その様子に只事じゃないことが起こったことを龍園は悟った。それを見透かしたように櫛田は言う。

「……………何か面白そうなことが起こりそうだとか期待してるなら、それかなり見当外れだよ」

「もう既に起きてるってか、手切れするって割には親切だな」

「そつちは手遅れみたいだからね——目を付けられたこと、流石に哀

れに思うよ」

「なあ、きつきからオメエは何の話をしてんだよ？」

「生憎と私にも分らない——それをこれから味わうのはあんた達だよ。それこそ嫌って程ね」

「これ以上は時間の無駄だな」

最後まで理解させるつもりはないようで龍園は足を止める——そして構わずに歩いて行く櫛田の後姿を見ながら思索する。

（そんな直ぐに退学にさせるのも面白くねえ。俺を裏切る気が有るようにも見えなかった……と言うか一体何に脅えてやがったんだ？）

どうしても果たしたい目的の為に接触して来た。意地汚い本性を晒して来た時は色々胸が躍り、ひとつ楽しみが増えたと思ったものだが、ここに来て一転して逃げ腰になった。

言動からすると龍園自身も既に巻き込まれている——心当たりはひとつしか思いつかない。

「面白れえ。何が来ようが受けて立ってやるよ」

今まで感じたことのない大きな期待感に絶好調を越えたテンションは更に燃え上がるのだった。

所変わり校内の保健室——堀北は診断を受けていた。

騎馬戦時に伊吹に受けた攻撃と落馬により背中に鈍痛が残っていたからだ。

普通に行っている分には問題なかったが競技には深刻な支障をきたしており、それでも棄権を回避できないかと一縷の望みを懸けた。

「処置が早かったからかしらね——背中を叩きつけられて、よくこの程度で済んだわね」

「それじゃー！」

「いいえ、駄目ね。自分でも分かってるでしょ——これ以上は続けるのは望ましくないわ」

完全な戦力外通知——先の無人島も含めての二度目のドクターズトップを受けて、言いようのない喪失感と悔しさが滲み出てしまう。

（ホント、何やってるのかしらね。私は）

最後の推薦競技で兄と並んで走る夢が断たれたこともそうだが、嬰兒や綾小路に打ちのめされたことが再び脳内に駆け巡り、自嘲を通り越して自らの失望に苛まれる。

「あなた、推薦競技にも出る予定があるの？」

「はい。でも見送ろうと思います」

堀北の回答に胸を撫で下ろす保険医——説得する手間が省けたからかと少々捻くれた感想を抱きつつ、思考を無理矢理に切り替える。船上試験で得た大量のポイントがある為、取り返しは付く。

(代役を誰にするか………考えると頭が痛いわね)

最有力候補が嬰兒なのは言うまでもない——怪我したクラスメイトの代役なら尤もな理由であり、全力かそれに近い形で参加してくれるかも知れない。

クラス全体のことを考えるとそれがベストな選択であり、堀北が参加しないことがプラスに働いていく状況に歯痒さを感じずにはいられない。

しかしそれを悟られない冷静さを装う堀北。

「ありがとうございます」

礼を言つて保健室を後にしてグラウンドに戻る為に玄関に向かう。

背を伸ばして歩こうとするも痛みが居座っており足取りは重い——そこに櫛田が駆け寄つて来た。

しかしその表情はいつもの櫛田ではなくよく言えば真剣、悪く言えば切羽詰まったものだった。

ただならぬ様子に一瞬息を呑むが、お構いなしに櫛田は話しかけた。

「堀北さん、大事な話があるんだけど」

「その様ね——顔に書いてあるわ。出来れば手短にお願いしたいのだけれど」

「須藤くん探してるんでしょ。寮のロビーにいるよ、何なら話が終わったら呼んできてあげてもいいけど？」

「……いいえ、それには及ばないわ」

話を先回りして、欲しかった情報を最初に提示——絶対に逃がさな

いと執念にも近いものを感じて僅かに冷や汗が出て来た。

「それで話って何かしかしら？」

「単刀直入に言うよ——堀北さん、今悔しいとか思ってる？」

「当たり前でしょ！」

何が来るのかと身構えていただけに出てきた問いに語気を荒げてしまう。

「それってさ、何に対してなの——やっぱり結果が思うように振るわない？ クラスに？ それとも異常な程に結果を出してるCクラスに対して？」

「……どちらでもないわ。あくまで不甲斐ない私自身によ」

「じゃあ、もう少し突っ込むけど——それも何に対してなの、須藤くんを頼らなきゃいけないから、それとも……」

櫛田はひと呼吸おいて、意を決したかのように堀北を見据えて言った。

「優秀なお兄さんに顔向けできないってことから？」

「誰に聞いたのよ？」

堀北にとつてあまりにも聞き捨てならないことに目を見開いて聞き返す——その姿に櫛田は確信を抱き、

「ハア」

とひと息ついて呆れ交じりの……それでいながらこれ以上ない真剣な眼差しを向けて来た。

「い、一体何なの？」

堀北が見たことのない櫛田の姿の連続に再度聞き返す——そして出てきた言葉の意外性に度肝を抜かれた。

「変わらないね——中学の時も優秀な兄の妹ってレッテル貼られて、それが嬉しそうだったもんね」

「え、櫛田さん……あなた……」

「話したことなんて一度もないよ——でもお兄さん有名だから、引つ張られて堀北さんのことも耳に入ることだって珍しくなかった」

淡々とした口調は堀北の精神を落ち着かせていく。

そして改めて考えれば意外ではあっても何も不思議な事ではない。

中学、高校と同じになるなどよくある話——知り合いとも言えないなら態々言うようなことでもない。

(なのはどうして今頃になって?)

意図が全く解らないまま榎田の話は続いていく。

「正直、私からしたら全く理解不能だね——普通は比べられるのが嫌で遠ざけたり、噛みついたりしそうなのに。」

堀北さんって、もしかしてお兄さんのお嫁さんになりたいって思ってる口なの?」

「そんな訳ないでしょ。私はただ……」

「お兄さんに認めて欲しい、褒めて欲しい?それともお兄さんみたいに立派になって活躍したいの?なんであれ全然できて無いじゃん」

遠慮なく心を踏み込んで踏み躪って来られ、流石に堀北も苛立ちが湧いてくる。

「っ、さつきから一体何が言いたいのから?」

「最初に言ったでしょ、悔しくないのかって。だったらさ、何とかして見せてよ——この最悪な状況を。出来ないって言うなら、私………明日にでも逃げ出すよ」

「に、逃げ出すって……榎田さん、あなた」

余りの話の跳びように心境が苛立ちから困惑に切り替わる——発破を掛ける為の脅しかとも一瞬考えたが、榎田の顔も目も一切の冗談を含まない本気であることを物語っている。

「私は本気だよって言うまでもないみたいだね——じゃ、確かに言ったから、後はよろしくね」

榎田は堀北を置いて、そのまま行ってしまおう——その後ろ姿を見ながら先の必死さ真剣さを思い浮かべる堀北。

(あんなに必死になる程、Aクラスに上がりたいんだ——見習わなきゃいけないわね)

そして己を省みる——何故Aクラスに上がりたのか。

兄に認めて貰う為だ。

その為に勉強も運動も努力して高めて来た……兄のように。

どんな困難も毅然と堂々としながら立ち向かい、打ち勝って来た兄

——正に見本や目標と言える姿に憧れた。

そんな偉大な兄にふさわしい妹になる様にといつも思っていた。それが間違っていたとは思わない——しかし、かつて嬰兒に言われたことが脳裏を過ぎる。

『それはお前の正しさじゃない。誰か別の奴の正しさ——その真似事だ』

真の意味で強くなれない——それを今、嫌と言うほどに思い知らされてる。

このままでは駄目だ——何も成すことが出来ない。

これから何をすべきかは綾小路に言われた通りだ——ただもう一歩、踏ん切りがつかなかった。

しかし櫛田の必死さを目にして心が決まった。

(もう私には取り繕わなきゃいけないプライドなんてない。また一から出直さないといけないわね)

その為に今できること、唯一残されたことをやろうと寮に向かう——その道中に二人の生徒を見かける。

兄である生徒会長の堀北学と生徒会書記の橘茜だ。

橘は堀北に気付くも堀北の兄は見向きもしない——彼女にとってはいいつも通りに過ぎ去ってしまうと思っていた。

「この体育祭の異常だ——しかし何も起きずに過ぎていくのは理解してるか？」

誰に向かい言った言葉なのか——少なくとも堀北には自分に向けての言葉に聞こえた。

「理解してます——これら全てに置いて私の不徳と致すところです」

素直にそう言った妹に兄は目を細めて言った。

「……何か吹っ切れたか？」

「はい。どうやっても私は兄さんみたいにはなれないと思い知らされましたから」

そうなる様に全てを費やして努力して来た——しかし結局届かなかった。何者にもなることが出来なかった。

何より先の櫛田のような必死さがこれまでの堀北鈴音にあったか

どうか——これでは兄が認めてくれないのも当然か。

そんな自嘲を思いながら兄に向かい宣言した。

「だからこれからは、私は私の道を模索しようと思えます——勿論、兄さんには迷惑は掛けません。それは安心して下さい——失礼します」
頭を下げて寮に向かつて行く妹に向かい、誰にも聞こえないような小さな呟きが堀北学の口から洩れた。

「もつと早くにその結論に辿り着いて欲しかったぞ」

「えつと……会長、何か？」

「何でもない」

訳が分からないと顔に書いてある橘を連れて堀北学は歩き出した。

弁当も食い終わり、漫然と時間が過ぎていく——普通の学校の体育祭ならワイワイとお喋りでもしながら時間があつという間に過ぎていくものだろうが、午後の競技への心配からか心底そうしてる奴はいない。

少なくとも俺の周りでは……イチャイチャしてた夫婦たちも流石に野次馬が鬱陶しいのか片づけたら即解散となり、今はグラウンドで一人となると思ってたんだがな。

「堀北の奴——ちゃんと食ってると思うか、嬰兒？」

綾小路、何を心にもないことを——と思ったが。

「俺が知る訳ないだろう。知りたきや直接聞けばいいだろう」

こつちに来る堀北に目を向けるとあつちも気付いたようだ——全く回りくどい奴だ。

「オレには結構キツそうに見えるが大丈夫か？」

「あいつを止めるなって言うなら、話を聞いてからだな」

「そうか」

如何にもな雰囲気を出しおって——大事な話が始まるって空気に連んでる奴らも気後れしてるじゃねえか。

「あー、私たち席を外そうか？」

「それとも平田でも呼んでこようか？」

長谷部と幸村も気を使ってるんだろうが、実際には乗せられてる……いや、ひよつとしてこれは綾小路なりの配慮だったりとか？

「頼めるか——出来れば軽井沢も一緒にお願ひしたいんだが」

「うん。任せて」

「つてか、すぐそこに居るしな」

行っちゃまったな——入れ替わる様に堀北も来た。ある意味で見事な連携だ。

「須藤だったら見かけてないぞ」

「居る所は分かってるわ——ただ間に合うかどうかは分からないから、ちよつとお願いがあるのよ」

俺に一瞬目を向けながら堀北は端末を取り出した——どうやら無理する気は無いみたいだから、この場では俺の出番はないか。

「ポイントを預けておくから私と、間に合わなかったら須藤くんの代理を用意して」

「かなりに出費になるが、全部自腹でやるつもりか？」

「ええ、欠場による失格だけは何としても避けないと」

事務的な淡々とした遣り取りだが——心なしか、さつきまでとは随分と違つて見えるな。どういう心境の変化だ？

「嬰兒くん——四方綱引きでは全力でお願いできる？」

「別に構わないが……代理の方はパスさせて貰う」

「そう、なら綾小路くん——私の代理をお願いできる？」

喰らい付いて来るかと思つたが、あつさりとした切り替えだ。

「分かった。戻るまではオレが持たせる——その代わり最後の1200までには須藤を連れ戻せ」

「約束するわ。絶対に連れ戻す」

即答した——それもかなりの気迫が籠つたニュアンスで。

そこに平田と軽井沢もやって来た——なんともタイミングがいいな、狙つてたか？

「お願いするよ、堀北さん」

「絶対だよ。あたしもポイント出すから」

平田と軽井沢も堀北の前向きな姿勢に影響受けたか——ま、いい傾向だな。連んでる奴らもいい顔してるし。

「ええ、それじゃ」

堀北はそのまま行っちゃった。

「嬰兒、悪いが推薦競技を再検討しよう——平田と軽井沢もいいか」

「勿論だよ」

「あたしもいいよ」

やれやれ、皆ノリノリだな——こう言うのを反撃の狼煙が上がった、または時代の移り目とか言うのか、何はともあれ新しい鳩まめを買わなきゃかな。

痛みが響いてか、寮までの道のりがやたら長く感じながらも漸く辿り着いた堀北は、ロビーで寛いでいる須藤を見つけた。

「須藤くん」

「……堀北」

穏やかに声を掛けられ振り向いた須藤は驚いていた——同時に二人にはかつて似たような場面があったことを思い出した。

「なんだよ、前みたいになまた説教でもするのか？」

「一応は助けてあげただけど……いざ、こうなって見ると全く変わってないわね」

変わってない——この台詞に須藤は不快な反応を示した。

「悪かったな……どうせ俺は嬰兒の言ってた通りのチンピラだよ」

「嬰兒くんか——あの時のこともある意味で彼のお陰でもあるのよ。少しは聞く耳ぐらい持ったら」

「どういうことだ？」

「当時私たちが漫然と授業や部活をしていた際も彼は他クラスの情報を集めていた——それを回してくれなかったら、あの時に退学させられてたかも知れないわね」

堀北が語った事実須藤は益々持つて不快な顔をする。

曲がりなりにも自分を気に掛け助けてくれた女——そして惚れ込んだ思い出ができごと気に入らない奴のお膳立てによるもの。

結局は自分が格下でしかないと言われている気分だった。

「ケツ、気に入らねえな——だったらあの時の『情熱を正しい方に』とかも嬰兒が言えつて言ったからか?」

「言葉を少し拝借させて貰いはしたけど——あれは間違いなく私の言葉よ」

毅然と言う堀北に一瞬、須藤も目を奪われそうになるも慌てて目を反らす——そんな様子にお構いなしに堀北は再度言った。

「それは今も変わらないわ——この体育祭、あなたが真剣に取り組んでいたのは間違いなく正しいことよ。それをこんな形で放り投げていいと思ってるの?」

「やっぱ説教かよ——マジで勘弁してくんねえか、今スゲエム力ついでんだよ」

無意識的だろうが激しい貧乏ゆすりを始める須藤——自分でも悪いとは思っているのか表情も苛立ちだけでなく苦々しさが混じっている。

「自分でも衝動が抑えられねえんだよ。仕方ねえだろ」

そんな顔を堀北に向ける——大抵の相手は威圧され黙り込むだろう。しかし堀北は動じることもなく目を反らすことなく無言のままだ。

「チツ……何なんだよ?」

須藤が根負けして再び視線を逸らす——それを見て堀北は思ったことをそのまま口にする。

「そう言うのが無ければ、ここには私だけでなくもっと大勢が居たでしょうね——それこそ櫛田さん当たりなら、クラスの殆どの人が戻って欲しいと説得に来てたわね」

須藤は引き合いに出された相手が相手だけに何も言えない——そこには、もう投げ出して諦めてしまった故の後ろめたさもあるかも知れない。

最悪な状況の中で全てを懸けて踏ん張ろうとした櫛田と対照的だ。

否、自分にもあれ程の気迫があつたかと言えば肯定など出来る筈もない——大きな目で見たなら結局は須藤と同じでしかない。

堀北は紡ぎだされた結論に自嘲してしまう。

「……なんだよ。そんなに可笑しいのかよ？」

言われて口元を当てると笑みを作っていたようだ——しかし慌てることなくじつくりと言葉を返す。

「いえ、似てるなと思って——私とあなた」

「はあ、どこがだよ？」

「いつも一人、それでもやれると信じていた……でも誰にも認められなくてもいいなんてことを求めてはいない」

「何言つてやがる——俺は別に他人の事なんて——」

「今ここに居ることが何よりの証拠じゃないの。本当に他人の評価なんて気にしないなら、リーダーだとかそんなことは関係ない筈よ」

本人も意識していなかった凶星を付かれてか、須藤は怯み——やや間をおいて言う。

「……注目や尊敬を集めたいつて気持ちはあつたかもな。今まで俺を見下してた奴らも見返したかつたし……ダセエな」

「その通りね。自分で欲していながら、叶わないと思つたら投げ出す——無様で格好悪いわね。櫛田さんの目にも私はそういう風に映つたのかしらね」

「さっきから櫛田、櫛田となんなんだ？」

「ここに来る前に言われたのよ——この状況を何とかしてくれなきゃ、明日には逃げ出すって」

「………はあ？」

余りの内容に反応に時間が掛かった——否、まだ意味を？み込めていない様子だった。

堀北は話を急かさずに須藤が持ち直すのを待った。

「冗談だろ、逃げ出すって——退学するってのか、体育祭で負けたぐらいで」

「私がそんな冗談をいうタイプに見える？間違いない、あれは本気だったわ」

流石に反論の余地がないのか、啞然としてしまう須藤——堀北もさつきは自分も同じ顔をしていたのかと心中で自嘲しながら本題に入る。

「体育祭だけど、あなたが戻っても？クラスもう勝つことは出来ない——でも戻ってくれば負けないことは可能だわ」

「だろうな——嬰兒も綾小路も基本的にはやる気ねえし、俺が居なきゃ最悪……最下位になるかもな」

「その結果、櫛田さんが去ったら？クラスは完全に終わり……Aクラスへの望みは完全に断たれるわね。私としてはそうなられちゃ困るのよ」

「……説得じゃなくて脅迫かよ。それもオメエの為に櫛田を人質に使うなんて、やり口が汚ねえぞ」

「どうとでも……そうでもしなくちゃ、もう巻き返しは出来ない。Aクラスには上がれずにこんな所で負けていいと思える程、私のプライドは安くないのよ」

とことん自分本位な言い分だが、込められた気持ちにはこれ以上ない本気を感じさせた——同時に負けたくないと言う内容には須藤にも深く共感できてしまい、否応なく耳を傾けさせられた。

堀北は更に畳みかけるように言う。

「須藤健くん——あなたは悔しくないの、このまま負けてもいいの？」

「いい訳ねえだろ……勝ちてえに決まってるだろ！」

「なら選択肢はひとつよ——下らない意地は今すぐに捨ててちようだい」

「下らねえだと……」

「自分でもそう思ってるんでしょ——でも捨てられない、それがあなたの苛立ちの原因じゃないの？」

容赦なく心を刺して来る——須藤が最も見たくない部分を暴いて来る。

しかし苛立ちは湧いてこなかった——堀北はAクラスを目指す為にそれまでの自分を捨てた。

そのことを感じたからかも知れない——櫛田のようになりふり構

わずに自分の全てを懸けて。

「笑い話よね。私もある意味あなたと同類——そんなのがクラスを率いて上を目指そうなんて」

？クラスで最もAクラスになることを望んでいるのは自分だと思っていた——でもそうじゃなかった。丸で命を懸けた如き気迫を目にして堀北鈴音がどれ程、ちっぽけな人間だったかを思い知らされた。

「なんでそこまでAクラスに拘るんだ？お前、勉強もスポーツも出来るし、別に特権なんて無くたってどうにかなるだろ？」

「兄さん——この学校の生徒会長に認めて欲しかった。」

でも駄目ね——ある程度は優秀なつもりだったけど、この学校に来てから一歩も二歩も先を行っている人達に何度劣等感を感じたか……」

「基本的には綾小路と同じかよ……色ボケかブラコンの違いだな」

「その通りね——けどあっちはお互いに認め合ってて、私の方は歯牙にもかけて貰えない。本当に情けない限りだわ」

「俺から見ればお前は十分優秀だし頑張ってると思うが、それでも認めて貰えないのか？」

「兄さんは本当に一人でAクラスを背負って立っているような人よ——だから私もと、周りに目もくれずに走ってきたつもりだったけど届かなかった。いえ、それどころか——その気持ちすら大したものじゃなかった」

「……そこまで言わせるほど、凄かったのか——あの櫛田が？」

「ええ、命懸けの気合いなんて初めて見たわ——そして私たちのような、ちっぽけなのがおかを成すにはあんな思いが必要だって」

堀北のひと言ひと言の重み——その源泉を聴かされ、須藤の心は感じたことのない感情が広がっていった。

クズのような親のようになりたくないと思っていた——でも同じようになっっていく自分が嫌だった。自分はある親の子だと、どうあっても同じになると突きつけられている様な現実に苛立っていた。

だが、穏やかな櫛田の自分が知らない熱い姿を聴かされ——孤高を

気取っていた堀北が多くを曝け出して自分と向き合ってくれた姿を見て、自分も変われるかも知れないと初めて実感できた気がした。

今の堀北の姿は須藤のなりたかった、憧れていた自分——これまでも増して魅力的に映った。

そんな須藤の心中に気付くことなく——堀北は決意を胸に言った。「改めて言うわ——戻ってきて一緒に戦ってちょうだい。」

そしてこの先、もしあなたが道を踏み外しそうになったら、何度でも連れ戻すわ——だから、あなたの力を私に貸して」

真っ直ぐに見つめて来る堀北——その姿に須藤は思った。

(惚れ直した……いや二度も惚れさせるんじゃないよ)

そして惚れた女にここまでされて受けなければ男じゃない——と負けを悟らされた。

「……まったく我儘な女だな——お前の都合ばっか押し付けやがつて」

しかし素直にそんなことを言える訳もなく拳を握り、自分の頭に叩き付けて了承しようとした。

「そう。だったら、時々あなた——私を名前で呼ぶわね。少し不本意だけど、それを認めてもいいわ」

「え、あ、いや……」

「但し、それ以上を求めて来るなら——この場で張り倒して、根性を矯正させるわよ」

「……………そこまで落ちぶれちゃいねえよ。まったく、俺を何だと思ってんだよ」

思わぬ流れになって気後れしてしまうも気を取り直して堀北に一歩近づく。

「協力するぜ、堀北——求められんのは悪い気はしねえし、何よりお前のその気持ちに応えたい。」

午後の競技はどんなことになるかと全力を尽くす——名前に関してはその結果で改めて聞かせてくれ」

「なにそれ、格好付けてるつもり？」

「いいだろう——このぐれえの意地くらい通させろよ」

須藤が照れ臭そうにした時、昼休み終了のチャイムが鳴った——推

薦競技開始には間に合わなかった。

「急ぎましよう——借り物競争は駄目でも四方綱引きには間に合うわ」

問答している暇はなく、言うと同時に堀北と須藤は走り出した——その二人の様子をずっと見ていた鳩が一羽、二人の姿が見えなくなるのと飛び去って行った。

健康が・・・

さて後半戦の開始——今から推薦競技だ。俺の出番はあと一回だから、少しはのんびりできるな。

「結局、堀北は間に合わなかったか」

綾小路、心配は要らなくても言ってみて欲しいのか——目線を送らないようにしても俺を意識してるのが分かるぞ。

「須藤くんの代理どうしようか？」

「最初は借り物競争だ。これは運が左右するから運動が出来るかは重要じゃない、それを踏まえて平田は誰がいいと思う？」

「池くんか山内くんだね——得られるメリットを考えるとこの二人かと思うんだけど」

一位を取ればテストの点数が——須藤が参加するはずだったのもそれが理由だし妥当だな。

しかし、こうして見ると綾小路リーダーと平田ほさが上手に機能していて、周りも邪魔することなくよく聞いている——出来ればこの状態がもっと早くに、それももうちょっと別の形になって欲しかったものだ。

……この場での即興だったらそう思ってたかな。

ギリギリまで堀北を待ちたいと言う綾小路の希望汲んでと言うのと、少しでも士気を上げるとか言って提案した演出を吞ませた——平田も侮れないな、なんで？クラスなんだろ？

「だって、ほら二人ともじゃんけんでもして早く決めて」

軽井沢も調子を合わせるように仕切り、池と山内も無駄な会話もなく従ってる。

「つしやー俺の勝ちだ——悪いな、山内」

「ちえっ……仕方ねえけど……」

「そうがつくりすんなよ——お前や須藤の分まで頑張るからさ」

うん、気合は十分のようだ——その調子で運も引き寄せるといいな。

参加メンバーたちは集まり審判に説明を受けている——顔は少し渋さがあるがお構いなしにスタートした。

他のクラスは運動神経のいいのを揃えたようだが、さつき綾小路が言つてた通り競技内容にはあまり関係ない——最後に物言うのは運だ。

その運をどうやら池は引き当てたようだ——他が右往左往している間に一位を取りやがった。

ちなみに二位がAで三位はBに終わり、Cは最下位——午後の出だしは良いとは言えなかったが十二分にリードしてるからか、どいつも涼しい顔だ。

おっと、間を置かずして二組目——綾小路がスタートした。龍園も同じ組でクジの置いてある箱にはほぼ同時に到着した。

だが問題は何か書いてあるかだ——悩む展開になるかと思つても居たが、予想に反して二人はそれぞれのテントへと駆け出した。

うくん、どうなつて来るのかは流石に分からないから少し楽しみでもあるな。

全力で来た勢いのまま、綾小路は手を差し出して言いやがった。

「有栖、直ぐに来てくれ」

「えつと……杖が必要とかですか？」

「いや、持つて行くのはお前だ」

見せた紙に記されたワードを認識した瞬間——

「「きゃー！！！！」」

と女子から黄色い悲鳴が上がり、

「「オオオオー！！！！」」

と男子からは言い表せない感情による雄叫びが上がった。

対して向うは辿り着くや最前列に居る順から十人を連れて行った

——龍園には『手下を十人』とでも書いてあつたか？

「時間がない。失礼するぞ」

おお、リアルでのお姫様抱っこだ——坂柳もしっかり首に手を回してしがみ付いてるし、全く仲のいい夫婦だ。

白組のテントの奴らもそうだが観戦してる客たちや教師陣——果ては参加選手も開いた口が塞がらない状態になつて固まつてる。

何か言われてもこういう戦略だつたとか言うかな？

流石に龍園は例外みたいだが、連れてる奴らの半数以上が足を止めて、

「突っ立ってんじゃねえ、走れ！」

と怒鳴り散らしてる——それも空しく綾小路は悠然とゴールして文字通りのぶつちぎりの一位を取った。

「「「うおおおおおおお!!!」」」

敵味方、観客も関係なくグラウンド全体からの絶叫と称賛の嵐が巻き起こった——紙吹雪でもあれば地面を真っ白に覆い隠しそうな勢いでまき散らしそうだ。

間違いない、今大会で一番盛り上がった瞬間だろう——きっと伝説として語り継がれるだろう。

杖も置いて行っちゃまったから、お姫様抱っこをしたままでテントに戻って来る間も拍手と喝采が収まらない。

「ヒュー、ヒューー！」

「いいぞー、新婚夫婦」

「いや早くもおしどり夫婦だな」

「次の結婚式には呼んでくれよ」

「あ、わたしもわたしも」

競技はまだ続いているのにその認識が完全に消えてしまっている——注意すべき教師陣たちもまだ持ち直して無いみたいだし刺激が強すぎだな。

これからの借り物競争では『好きな人』と言う項目は削除されてしまいか——いや逆にもっと大胆なのが用意されたりとかするかな。

「よ、お帰り。お二人さん」

「全く憎たらしい奴らだぜ」

戻って来てからも興奮が止む訳もなく、すっかり揉みくちやにされてるが、ずっとそうしてる訳にもいかない——特に綾小路の方は余韻を愉しみたいなんて余裕はないしな。

「はい、坂柳さん。杖」

「ありがとうございます。平田くん」

「どういたしまして、綾小路くん。早く待機場所に」

「ああ……………戻ってたのか、二人とも」

坂柳を下ろして振り返った綾小路と同じ方を見ると堀北と須藤がバツの悪そうな顔しており、他の奴らもやっとな気がいいかな。付いて貰ったと言った方がいいかな。

実際には綾小路が坂柳を連れて行く時には戻ってたんだし——それこそ息を切らして駆けつけたのにこいつらも綾小路にまとめて持って行かれてしまったな。

「……………こっちはいいから早く戻ったら、綾小路くん」

「そうだぜ——折角一位取ったんだし」

ただ綾小路は無言のまま足を止めて行こうとはせず、微妙な空気の中で改めて須藤が言った。

「遅れて悪かった——便所が長引いちまってな」

多くの白い目が向けられる中で、まず俺に向かつて頭を下げた。

「悪かったな、嬰兒。責任押し付けるようなこと言って、リーダーだって浮かれちまって調子に乗ってた」

「別に乗っても構わん——役割を全うしてくれるならな」

「なら尚更だ——俺が引つ張らなきゃいけなかったのに逆に士気も下げちまった。？が勝てなかったのは俺の責任だ」

間違いを素直に認めるか——さっきまでの須藤じゃ考えられないな。

堀北、一体どうやったんだ——みたいな目を向けるとクラスもつられて注目が集まった。

堀北も呼応するように言った——それもさっきまでとは違い、晴れやかなそれでいて力強い声で。

「まだ負けてないわ——挽回は次の試験でするしかない。だからこそ、ここは踏ん張るべき場面よ」

籠められた気持ちが違うからかニューアンスが全然違い自然と皆も耳を傾けていた——榎田なんかは特に真剣に。

それは堀北も意識してか、より力強く続ける。

「次の四方綱引きだけど、嬰兒くん——さっき言った通り本気でやって貰えるかしら。それと綾小路くんは交代して貰える、左腕痛いんで

よ——最後の1200リレーまで冷やして休んでちょうだい」

ほう、堀北の口からそんな台詞が出るとはな——流石に綾小路も面喰らってるよ。

「いいのか？」

「ええ、それが勝てる確率を上げる最善手だわ——同様に櫛田さん、私の代わりに二人三脚とリレーの代わりをお願いしたいのだけど」

「分かった。全力でやるよ」

即答した櫛田も今までとは違う気迫が伝わって来るニュアンスだ——もつとも動機を解ってるのは俺ともう一人ぐらいだろうけど。

「みんな——無人島に続いて最後まで役に立てなくて、ごめんなさい。

それでも私は、上を目指すのを諦めたくない——だから力を貸して貰えないかしら」

「俺からも頼む」

言葉だけでなく深々と頭を下げ、誠意を見せてる。性根の曲がった奴なら反発しそうだが——平田が肯き、軽井沢も仕方ないみたい。顔してちや言える訳もない。

「分かってるよ——僕だってAクラスになりたくない訳じゃない。ここで引いちゃ、ホントに不良品だ」

「あたしも今回ポイント増えないのは残念だけど、減っちゃうのはもつと嫌だしね」

そう——これでこそ、このクラスは強くなれる。

坂柳は才能、一之瀬は友情、龍園は恐怖で纏めていても目指すべきゴールは同じ——Aクラスでの卒業による見返りだ。

？クラスの殆どはとづくに諦めてる——この意識を変えるには確固たる指針が必要だ。

何が何でもAクラスになると言う信念——それが一人一人の見返りに繋がる。

それを抽象的なスローガンじゃなく、明確に体現している存在があつてこそ、その気になれる——つまりはそいつを信じるに足る見返りがあるか。

それがどんなに小さくても欲が刺激されるのとされないのでは

大違いだ——それが俺に合ってなくちや、それも困るがな。

だけどいい流れは出来上がった——俺の意図を汲んでくれた綾小路にも感謝だな。

「平田、そう言うことなら代わってもいいか？」

「うん、分かった——その代わりと言っちゃやなんだけど、最後は任せだよ」

「あたし、タオル冷やして来る——綾小路くんは少し待ってて」

流れるが如きスムーズな遣り取り——さっきまで仕切ってた奴らが堀北の主導に対して見事な連携を見せたことで自然にチームワークを作り出した。

「丁度私を持つてるから、使って」

早速、松下がタオルを差し出したのを皮切りに他の面々も続いている。

「よし、四方綱引きの清隆の代わりは俺が出よう」

「わ、私、氷取って来る——清隆くんが直ぐに休めるように」

綾小路グループの友情が一気に開花したか——みたいな演出も見事に嵌ってる。休憩時間を削ってまで検討を重ねた甲斐もあったか。

これで尚も異を唱える様なのが要れば、俺が黙らせることになっているが出番はなさそうだ。いや、良き哉、良き哉。

「綾小路くん、早く戻って——それで今競技に出てる人たちにもここでこのことを伝えてくれない」

「分かった」

左手に冷えタオルを当てながら戻って行く綾小路——じゃ、俺も最後の出番に備えて力を温存でもしておくか。

どうやら敵にも活が入ったみたいだしな。

「お前たち手順の最終確認をするぞ」

「はい、葛城さん」

「まったく仕切るなつての——なんて言ってもらえなねえか」

「……ああ」

元より葛城に従順だった戸塚だけでなく、坂柳派の側近の橋本と鬼頭も今度ばかりは従う姿勢——ここに来て漸く体育祭らしくなつて

きたな。

「みんな活き活きしてますね——羨ましいです」

「坂柳よ——つい今しがたまで最高に幸せそうだった、お前が言うか？」

「仕方ないじゃありませんか——こればかりは生まれてから積もったものなんですから」

「少しだけ切なそうな顔なんぞ見せおつてからに——俺に弱みを見せる意味もないだろうから本当にただの愚痴なんだろうが、そう言うのは亭主にでも言え。」

(……なんだ、この妙な感覚は?)

待機場所に戻る綾小路は首筋に怖気とも悪寒とも違う感覚が走り困惑していた。

「よう。色ボケ野郎」

先に戻っていた龍園に声を掛けられて立ち止まる。

「鈴音共々あの筋肉バカも戻ったようだな——だが今更何したつて後の祭りだぜ」

「そうだな——今回は誰が何をどうやったつて、どうにもならなかつただろう。ただ、いい汗なんてものを始めて流させて貰ったことはオレ的にはいい収穫だったぞ」

「お前もまた訳が分からねえな——？クラスつてのは、どいつもこいつもそんな感じなのか？」

龍園の表情やニュアンスからして本当にただの問いかけだと判断し、綾小路は答えていいラインのギリギリで返す。

「訳が分からないのは一人だけだ——それに振り回されるのも少しはマシになりそうだ。それでも難儀なのが多いのは変わらないがな」
「やっぱ話すだけ時間の無駄だったな」

龍園は会話を切り上げる——綾小路も無言のまま座り競技が終わるのを待つ。

借り物競争も着々と進んでいきう？の他のメンバーも池や綾小路に続こうと張り切るが、幸運がそう何度も続く訳もなく、一位を取ることはなく幸村に至っては最下位になってしまった。

しかし結果的には一位が二つ悪くない成績であった。

「すまん、清隆——折角の勢いを殺しちゃって」

「気にするな。俺も次の競技は交代することになった——啓誠も次の試験で取り返せばいい」

テントに戻りながら堀北と須藤が戻ってからのことを説明——幸村だけでなく聞いていたメンバー皆は息が吹き返したような表情となる。

「前は俺だったが、今回は明人が清隆の相棒枠だな」

「幸村くん、すねないすねない。堀北さんの言う通り次で頑張ればいいじゃん。ね、森さん」

「そうそう、前園さんの言う通り。もう私たちの出番は終わりなんだし、切り替えないとね」

「そうでござるよ。拙者たちはお役御免——後のことは信じて応援でござる」

「……外村、最下位になったフォロワー期待してるんだったら、力にならないぞ」

「いや……成果を出せなかったのは運に見放されたからで」

そんな会話をしている内にテントに辿り着くと須藤が待つており、外村は委縮してしまう。

また怒鳴り声が来る——その予感は見事に外れた。

「お前らも済まなかったな——特に池、面倒を掛けた」

勢いよく頭を下げられ困惑する一同——綾小路から話は聞いていても半信半疑だったが、今の須藤を見ると本当に反省したのは疑いようがない。

「頭を上げろよ、健。結果的には一位取れたんだし」

池も友達が誠意を見せた以上は邪険にできないようだ。

「クラスが勝てなかったのはお前の責任じゃない——俺たちだって反省しなきゃいけない点はある」

幸村も勝手に出て行ったことに思うところはあがあるが、須藤が体育祭で貢献してたのも十分理解しており、全く役に立てなかった自分を棚に上げるようなことはしない。

わだかまりが消えていき、輪が広がっていく。

「お前らにも約束する残りの競技、俺は全力でやる——例え、どんな結果になってもな」

「全力で応援するでござるよ」

「うん」

「頑張つてね」

須藤は頭を上げ、闘争心を宿した目を向けて力強く言った。

「任せとけ！」

一連の流れを全て見ていた綾小路はポーカーフェイスを保ったまま、内心で笑みを浮かべる。

（予想以上に良い方向だ——ならオレもひと肌脱がなきゃ、格好悪いな）

初めて体育祭を楽しいと思え、左腕の痛みも忘れてしまう。

そして須藤に平田、自分の代わりに出る三宅と嬰兒が行くのを見送りながら、最後の出番に備えることに専念するのだった。

さて、四方綱引きの始まりだ——クラスもいい感じだし、やっとまともにやれるか。

内外の二つの円を四分割する十字線を引き、十文字の綱が用意され準備が完了——各クラスの代表がクジで自陣の位置を決める為に集まっている。

ちなみに俺たち？からは平田の勧めで須藤——各クラスは葛城、神崎、龍園が俺を見ながら無言のまま肅々と行っていた。

「おう、位置が決まったぜ——？おれたちクラスは北側だ」

つまり校舎を背にしてだな——その俺たちから見て正面の南にC、東がA、西がBの位置取りが決まった。

それにしても須藤の奴、本当にちよつと前ならカツかしながら言いそうなのに、堀北のことが余程嬉しいのか——単純だが、前向きになつて結構なことだ。

指定位置について須藤を先頭に平田、三宅、俺の順に並んで綱を持つ——聴くところによるとこの四方綱引きは出雲発祥で、力だけでなく頭脳も勝負となる特徴とのふれこみだとか。

綱を結んだ中心近くにある白い印(ホワイトマーク)、が外円に到達し審判の旗が上がったら勝ち、先頭はホワイトマークより少し離れた青い印(ブルーマーク)の近くを握り、チームは円を四分割した自陣から出てはいけない。

逆に言えば自陣ないなら移動可能であり、隣によつて二チームが同じ方向を引つ張るとかも可能——逆にそう見せて相手が油断した隙を付くみたいな駆け引きも必要とするらしい——つくづく綾小路が居ないのが残念だ。

目下の注目はCクラス——アルベルトは勿論だが、石崎や小宮と言つたガタイのいいを引きつれ、龍園が指示を出すなら圧倒的有利と言える——葛城や神崎も引けは取らないだろうが、今日のCは普通じゃないからな。

位置的に見てもある意味不利だな——両隣のAとBがCの側によつてとかも大いにあり得る。奴らとて大勢が決してる以上はマイナスを減らそうとしてくるのは自明——そうなつたらどれくらい力を出せるかな。

色々と考えられるから始まるまでがやたら長く感じる。通常は三回だが時間の都合で一回勝負——これもまた残念だが、俺的には最後までなんだし出来るなら全力でやりたいものだ。

地面に置いた綱をしゃがみこんで握つて合図を待つ——主審が四方に居る副審に確認を取ると笛を鳴らしスタートだ。

全員が一齐に立ち上がり綱を引く——瞬時にピンと張り、拮抗状態になつたが問題と言うか醍醐味はここからどう動くかだ。

「どうした葛城、こつちに来ないのか?」

Cの先頭に居る龍園が高々とそれでいて卑しく言ってくる——愉

しむだけの挑発か、葛城を試してるのか。兎に角、どう判断を下すか——ここまで来たら直感に任せるのもありだ。

しかし葛城はそんなタイプじゃない——でも現状を見れば悪い手でもない。龍園に言われたことで板挟みになり思考が鈍る瞬間に陥る。

それを見て、いや引きずられて神崎や平田なんかも即断できない状態になった——須藤も全力は尽くすと言っててもそれまでのプライドをすべて捨てられる訳じゃないしな。

たったひとりで全てに致命的な隙を作ってみせた——その隙を見逃すような男じゃない龍園はBの方にギリギリまで寄って二対一對一の構図を作り上げた。

「おら、どうした！しっかり引つ張れ！一気に決めるぞ!!」

後は気合の勝負と言わんばかりだ——白組としての勝利を優先したようでも三対一になるのを回避して見せたか。

面白い——これなら俺も遠慮無用だ。感謝するぞ、龍園。

「お前ら合わせろ、葛城来い！」

そう言っただけで俺はAに舵を切る様に移動し、今度は俺に声に掛けられた葛城は苦い顔しながらもこっちに来た——これで実質ただの綱引きになり、俺が言うまでもなく闘争心に火が付くの一人。

「よっしゃ、さっきのリベンジだ！全員しっかり引け!!」

須藤の龍園にも勝る叫び声は皆を鼓舞するのは十分だ——向うはCが合わせただけでBと距離があり力を集中できるこっちが有利だ。

Bも黙ってやられずに踏ん張りながら合流しようするだろうが、流石に俺もそこまでお人好しじゃない——勝負に情けは無用だから、一気に決めさせて貰う。

「おらーいぐぞー!!」

須藤の再びの通りのいい掛け声に合わせて全力で引き、ホワイトマークは外円に到達、主審と副審の旗が上がり決着はついた——問題はAと？どっちが先か、もしくは同時なのかだな。

主審の判断を待つこと数秒——判定は俺たち？の勝利。

「よっしゃー」

須藤のガッツポーズに平田と三宅も駆け寄って喜んでいる。

僅かに及ばなかったAと判定により最下位になったBは悔し顔――

――Cは全く気にすることなくテントに戻って行く。

今回は何も無しか、それとも……。

四方綱引きのメンバーが戻ると直ぐに次の競技、男女混合二人三脚の準備に入る。

櫛田は既にウォームアップをしており、本来の出場予定の堀北は代わりに出ることへの謝意と激励を込めて声を掛けようとして止めた。

（頑張つてとか、申し訳ないとかは余計ね。これは）

一人、精神を研ぎ澄ましている櫛田の顔に言葉は不要――既にしつかりと引き受けて貰えた以上は信じるのみと思直した。

（私もこれぐらいのを身に付けなきゃね――そして絶対にAクラスに）

堀北は決意を新たにして、体育祭が終わったら櫛田と話をしようと思決めた。

一方の櫛田は何も話さないで言ってしまう堀北を視界に収めながら、恐怖で思考がフル回転していた。

（堀北の奴、いい感じに皆を纏めてる……あいつもさっきの競技は本当に清々してたし、これが私のお陰だって知れば………いやもう知ってるかな……ううん、そんなの関係なくアピールすべきか）

出番を終えて座っている嬰兒にそれとなく見てみるも直視し続けることは出来ない――必然的に思いを解ってくれるだろう綾小路と話したいが、隣には坂柳がすっかり陣取り周りにも余計なのが居るから話すに話せない。

（あああ……どうしてこうなるのよ?!）

頭を掻きむしり叫びたくなる衝動を必死で抑え込み、表情には一ミリも出さないよう保つ――ストレスは既に限界に迫っているが鍛え上げた自制心で何とか我慢する。

(大体、堀北もなんでこんなに早く戻って来るのよ?)

櫛田の予想では堀北が説得しても須藤は聞く耳を持たず、折れるには最低でも午後の競技の半分を過ぎてから——必然的に男女二人三脚は丸ごと代役であり、そこで綾小路とのペアになるように持って行って、この最悪な状況について話をするつもりだった。

だが予想に反して早すぎる手際に一体どんな手を使ったのか、何を持って須藤の心を掴んで見せたのか全く想像が付かない。

(須藤が惚れてるのに気づいて色仕掛けでも……いや、堀北が気付いてるようには見えない)

まさか今の自分に触発されてなど——須藤の惚れた堀北おんなの為にうに堀北も(人として)櫛田に惚れたからなど夢にも思っていない。

本来なら体育祭を利用して徹底的に痛めつけ心身ボロボロにして退学に追い込むつもりだった——しかし蓋を開けてみれば活を入れ自分も指揮下に入る形で必死にならざるえない状況。

(それもこれも全部アイツが居るから……)

殺してやりたいほどの憎しみが湧くも殺されるかも知れない恐怖が勝利視線を向けることすら出来ない。

全く動くことの出来ない状況にストレスが増す——それを抑え込むために更にエネルギーが使われ思考が上手く回らない。

完全に悪循環に陥ってしまい、いつそ何もかもぶちまけて本当に逃げてしまおうかとも思っていく。

「ちよつと根を詰めすぎじゃないか、櫛田」

「……………綾小路くん?」

今どうしても話したい相手から声を掛けられ、されど話しかけることが出来なかった——相手の方から来るとは全く思っていなかっただけに完全に意表を突かれてしまった。

「え、えつと……いいの、私と話してて?」

「大事な話があると——今のこの機に話を付けたいって、言ったら納得してくれよ」

大方、仲直りする話を付けに言ったと思われたのだと——急速に冷めた思考が回っていく。

ともあれ望んでいた展開に漸くと心を落ち着けることが出来た為、いつも通りの笑顔で言った。

「それでどうしたの？」

「なに、お前もいい加減に話がしたいんじゃないかと思ってな」

無用な前置きは置かなくていいようで、単刀直入にそれでいて周りに人がいる事も踏まえて訊いた。

「綾小路くん、こうなったことに何か思い当たることあるの？」

「ああ——こうなったのは、幾分かはオレの責任だ。」

オレが何かと焚き付けたから、それに対しての返事つてとこだ」

周りが聴けば全く訳が分からない問答——しかし、前提となる情報を共有している二人には何に対しての事かは言うまでもない。と言うよりも言える訳もない、特に櫛田に関しては命が懸かっている状況だ——何がきっかけで引き金になるのかが分からない以上は下手なことは口に出さない。

そんな内心で戦々恐々している櫛田を冷ややかな目で見ながら、ちようど嬰兒から櫛田を見えなくなるように立って綾小路は断言した。

「だから心配するな——お前が恐れていることは起きない。オレが全力でフオローしてやる。嬰兒と一緒にな」

新しい風の吹き始め。

「え、えつと……つまりどういうこと？」

「これからを戦っていくには途轍もなくデカい覚悟が必要になって来る——オレにその覚悟があるかって嬰兒はそう言いたかったんだ。あいつは何ひとつ自棄を起こしちやいななし、この学校に対して含むところなんてない」

今ひとつ解り辛い説明だが、それも仕方がないと櫛田は心を無理矢理に落ち着かせて思案を展開しようとした。

「あー、お前らすまねえが話はまたあとでいいか？」

しかし須藤が遠慮がちに入ってきた——手には足を結ぶ紐があり準備に入りたいようだ。

（ああ、もう——考える時間もないか。こんなことなら代役なんて引き受けるんじゃないかった）

「いや、こちらこそ悪かった——櫛田、また後で」

綾小路は涼しい顔で応じて行ってしまう——それを見て櫛田の内心はまた穏やかではなくなってしまう。

「なあ、余計なことかも知れねえがよ……オメエらまだ喧嘩したままなのか？」

須藤が心配そうに訊いてくる——悪意など全くないと分かつてはいても苛立ちが増してしまうが、どうにか抑え込んだ。

「……ごめん。今は競技に集中しよう」

「お、おう」

冷静に応じて見せたが、いつものような爽やかな笑顔を出すことは出来なかった。

うん、須藤と櫛田ペアの二人三脚は二位か——即席にしてはよくやったと言うべきだな。

櫛田も心が荒れててもメンタルコントロールは慣れてるようだし、

須藤も相手に合わせる事が出来ない訳じゃない——と言うのもあるが、Bもまた土壇場で選手が交代した即席ペアつてのも大きかったな。

柴田と組んだ一之瀬——運動神経は悪くないが良いとも言いつれない。明らかに慣れてない感じだった——本来出る筈だった奴だったらどうなっていたか。

そして、いよいよ最後の競技——三学年合同1200mリレーだが、最早消化試合のような有様だ。

本当なら最高に盛り上げての締めくくりになる筈が午後一番の競技で全て持つて行かれて……これで夫婦が一緒に走るとかなら、まだ良かったが無理だしな。

その件の夫婦の方を見て見ると旦那の方が居ない——ただ探す必要は無いが、さつきは櫛田の所に言つてたのに忙しい奴だ。

「ここでもやっぱRCが一番の敵になるのか？」
完全に確信してらつてニュアンスだな——それこそ覚悟はとつくに済ませているみたいだ。

まあ、どこまで本心かは定かじやないが——少なくともここでは誠意をもつて答えるか。

「さて、どうだろうな——限界が来ててもおかしくは無いな、個人差はあるだろうけど」
「そうか」

俺は答えたから今度はこっちからかな——綾小路がどういう心積もりなのかもハッキリさせたいと切り出した。

「櫛田の不安は結局取り除けなかつたか？」
「生憎と時間が足りなくてな——本来の目的とは正反対のことさせた分、ストレスを少しは軽くしてやりたがつたが」

「堀北に活入れて背中を押すなんてやりたくなかつただろうにな」
「それだけ櫛田の心が切羽詰まつてらつてことだろ——全ては命あつての物種だ。ましてや死んでもこき使われるなんてことになったらと思えば、どんなに不本意でも目的を捨てざるえないだろう」

些か責めるようなのが気に入らないな——もつとスマートなやり

方は無かったのかとでも言いたいのか？

「別にこんな事にならなくても結果は変わらなかつたんじゃないか——いや、？クラスを基準に置けばもつと悪くなつてたと思うぞ」

「だろいな——獅子身中の虫なんて放つておいたら害悪にしかならぬ。オレやお前が踏ん張つたのもそうだが、どんなに異常でもフェアな大会進行が行われなきや確実に最下位になつてただろう」

所詮は学生の大会だ——普段から練習を積んで精神を鍛えてるのはとは違い、この時だけの即席だからな。士気やメンタルが崩れ去れば一気に持つて行かれる——それを統率する奴がやられたら今頃はとつくに終わつても不思議じゃない。

「異常さを抜いて想定すれば堀北には強敵をぶつけつつ、確実に勝てるようにCは調整されてた——須藤にしても龍園の手法を考えればお前以上にイラつかせる方法で潰されたのは想像に難くない」

「なんとも饒舌だな——そうなつてもお前が穴^{ケツ}を持ったんじゃないか？」

堀北の尻拭いをとか言つてたし——第一に素直に警告してもあの時の堀北が聴く耳を持つたとは思えん。

裏切者が居るのを逆に利用して最後には勝つ——その為なら今は負けてもいい、そんな意図を昼間のやり取りからは感じたぞ。

「堀北が退学になるのはどう考えても損失だからな……ついでに言えば何故そこまでするのも聞き出せればと思つてたよ」

後半は兎も角、前半は何処まで本心何だか……。

いや動機についての俺の考察を聴きたいのか——今後の戦略を立てる上で重要なのもそうだが、単純に個人的な好奇心も透けて見える。

こいつもこいつで欲望に正直な奴だ——と一言で少し考えてみようかね。

「そうだな——あの時の姿見られて我が身を使い脅してきた。それだけ知られたくないってことは間違いない——つまりあれを堀北も知ってるんじゃないか？」

「……………」

固まってしまったよ——そんなこと考えてもみなかったか。少し待ってやり漸くと口を開いた。

「あの姿は衝撃的だった——あれだけのインパクトを受けたら一回見たら忘れないんじゃないのか？」

「妥当だな。ただ堀北あいつの興味は凄まじく狭いし、関係ないことなんてスルーして記憶に留めようとしてもしないだろう」

「そんなレベルだったか——いくら何でもあり得ないだろう」

「お前の方こそ衝撃が強かったみたいだな——色々。珍しく頭が固いじゃないか——別に直接見なくても知ることはある、本人の意思とは無関係にな」

「そうか、噂とかか」

理解が早くて助かる——あとは勝手に進んでいってくれ、一々説明するのも手間だしな。

「確かにそれなら堀北が聞き流したとしてもおかしくない——しかしそんな事になるようなへマをするような奴か？」

それでも俺との話を止めないか。もつと他に知りたいことが……あるんだろうな。ただそれに答えるかはこっちの任意だよ。

「現状ある情報じゃ、ここまでが限界なの——って言うかもうある程度は分かかってんじゃないのか？」

「話の順番が違う——そのへマを犯したから、より慎重になつて用心深くなったか。だからこそ堀北を邪魔に思い潰すのも一切の容赦はしない」

そのくらいのトラウマだったって事だな——今回はそれを塗り潰すだけの恐怖を持って、その決意を捨てさせたが、心配がなくなるか又は開き直ったならどうするか？

俺としてはそんな風に綾小路の興味が逸れてくれると助かるな——しかし希望通りの展開にはなる様子は無いな。

「ここまで来ると内容にも興味が湧いて来たな——だから嬰兒にも協力を頼みたいんだが。」

勿論、全てはオレの我儘だから責任を負う必要はないし、今後とも問題が起きれば全力を尽くすのを約束する」

「内容なんて別にどうでもいいとか言うと思ってたが——と言うか、俺じゃなくて堀北に頼んだ方が手っ取り早いんじゃない」

「お前への恐怖を無くさなきゃ、あいつは間違いなく進んで退学するだろう——実際にさつきは一緒に逃げて欲しいみたいな感じだったしな」

話を盛ってないか——それに自主退学するっていうなら、それはそれで全然構わないと思うんだが。

そんなことを思っていると綾小路の奴、また面倒な所を突いてきやがった。

「詳しい経緯は与り知らないが、堀北は櫛田に相当以上——いや絶大な信頼を置いたようだ。みすみす櫛田が去ってしまったえば折角の団結も水の泡——いやそれ以上に？クラスは再起不能になるぞ、それはお前の望むところじゃあるまい」

おのれ小癩な——流石に少しムツと来たので言い返してやろう思ったが、生憎と時間切れだ。

「続きは体育祭が終わってから話そう——櫛田も交えてな」

立ち上がり言っちゃった——こんな事ならオレも参加するって言えばよかった。

須藤を先頭に平田、綾小路、前園、小野寺に堀北の代行として櫛田がグラウンドの中央に集まっていく。

「綾小路くん、腕は大丈夫？」

歩きながら平田が気に掛けて来る。

「問題ない訳じゃないが、大分良くなってる——競技には支障はない」
自信満々に断言する姿にそれ以上は言わずに話を切り替える。

「その、櫛田さんとは……」

「あまり気負い過ぎるなどは言っておいた——気休めにはなるだろう。ただ、重要な位置は酷だろうから四番手辺りがいいと思う」

「元々の綾小路くんの位置だね——じゃ、アンカーは？」

「オレが務めよう——戦力が削られてるのは如何せん痛い。」

須藤から平田、小野寺の順で逃げ切るのが勝算は高い——オレも多少の無理はするが、最初の位置取りまではキツイ」

全学年による十二人のリレー。人数分のレーンを用意することは出来ない為、横一線でスタートして抜け出した者からインコースを取っていく方式——最初の位置取りこそが重要になる。

「だからこそ須藤くん任せたいと——と言うことだけど頼めるかな、須藤くん？」

「……どうもこうも、それしかねえじゃなねえか。全くいい性格してるぜ、オメエら」

最早、割り込む余地のない議論を聴かされ須藤は肯き——女子たちも綾小路の提案した順番に異存はないと肯いた。

方針が決まり集まった待機場所から須藤がコースに入って行く——そして最も内側の有利な位置に配置された。

他の一年生も近い位置であり、一番外側を三年のAクラスが配置される。

更に三年のスタートは全員女子であり更に優位性が上がった。

スタートまでもう少しの時、綾小路に声が掛かった。

「よう。熱々夫婦、話すのも久しぶりだな」

「そうですね。南雲先輩」

「全く、本当なら今が一番の盛り上がりなのに——やってくれるよな」
気さくにしているも直ぐにワザとらしい白けた声でからかって来る。

「別に意図した訳じゃないですよ」

流石に鬱陶しいのか綾小路の対応も投げやりだ——しかしそれは返って逆効果で南雲は益々面白いがる。

「普通にやってアレか——なら感謝だな。この学校に入ってあそこまで面白いは見えたことなかった——来年からの改革にも身が入るってもんだ」

「南雲、繰り返しになるが本気なのか？」

その時、堀北学が唐突に入ってきて来た——綾小路は少し驚いたが、南

雲はより面白そうだった。

(つまりは最初から堀北兄に聴かせる——いや、割り込ませるつもりだったか)

ダシに使われたことには思うところはないが、そうまでしても絡みたいのは何かしらの執念を感じさせる。

「別に伝統を守ることが悪いとは言わないですよ——ただ俺は作りたんですよ、究極の実力主義の学校をネ。その為にもここで一発、勝たせて貰いますよ、堀北会長——でも出来れば接戦で戦いますから一応、会長のクラスも応援しますよ」

そう言って歩いて行く南雲——同時にスタート合図が鳴り、堀北兄と綾小路も無言のまま歩く。

(紛れもなく本心だったな——堀北兄に勝つことが今の一番の証明だからってところだろうが)

綾小路はさり気なく横目で堀北学を見る——三年生である彼は生徒会も引退して来春に卒業する。

それは南雲にとつての楽しみがひとつ無くなること——新しい楽しみを求めているも不思議じゃない。

(しかし、なんでオレなんだ?)

綾小路が覚えている限り会ったのは結婚式ごっこ一回だけ——面白いだろうが目を付けられるには弱い。自分の与り知らない要因があるのか、訊いてみたくもあつた。

ただ今は最後の競技に集中すべき時だ——余計なことを考えて結果が振るわなければ、いくらどうでもいいことでも格好が付かない。

無理矢理に思考を打ち切つて状況を見る。

須藤は今体育祭でベストなダッシュで他の十一人を出し抜く勢いを見せた。正に圧倒的な展開であり、混戦により位置取りに苦勞する他の全ての選手の隙を付いて15m以上のリードを得て次に繋いだ。

「平田！任せたぞ!!」

優勢に湧く? クラスを更に推し上げるような激励——平田のテンションも自然と上がった。

(これは負ける訳にはいかないね!)

普段でも全てを卒なくこなす平田——この場でも華麗にこなしてリードを維持する、と予測していた。

「きやく!!格好いい!!平田くん!」

高まったテンションに比例して平田の能力を引き出し、更なるリードを以て三番手の小野寺にバトンを渡した。

「頼んだよ、小野寺さん!」

その思いは確実に伝染して、小野寺もまたベストの走りを見せた——ただ他クラスとて黙っている訳ではない。

特に追って来る三番手たちは殆どが男子——リードは確実に詰まっっていく。

それでも四番手の櫛田にバトンが渡った時にはまだアドバンテージがあつた——それを必死で死守しようと思命に走るが、二年Aクラス男子に逆転される。更に五番手の前園に回る時には三年Aクラスに抜かれ、二年と三年のAクラスによる一騎打ちの様相を呈して来た。

これは周囲の予想通りの展開であつたが、ひとつ不可解な展開も起こっていた。

(トップと競り合うのはCクラスだと思つてたんだが——如何せん苦しそうだな)

文字通りの意味で必死の形相で走っているものの、これまでの様な圧倒的な姿は見えない——寧ろ、もう限界のようできえあつた。

代わりに追い上げて来ているのはBクラスであり、とうとう抜き去られて?クラスは四番手になつてしまった。

「前園さん、まだ終わってないわよ!」

「綾小路くん繋ぐまで頑張つて!!」

前園の気持ち折れて失速しかけたのを見て櫛田が叫んだ——堀北もその通りだと同調して続いた。

これを声援と取るか叱責と取つたか——前園の表情も変わり、ペースは崩さずに済んだ。

ただあくまでも失速を免れただけで、Bを抜き返すなりの接戦などはなく、差が広がるのを小さくするだけ——他の選手とて必死なのは

同じで後半戦に主力を置いたクラスは追い上げを見せておりアンカー到達までは五番手になってもおかしくない。

しかし何が起るのか分からないもの——トップを競っていた三年Aクラスが躓いて転び、直ぐに立て直したが、一気に二年Aクラスが単独トップに躍り出た。

一方で生まれたタイムラグは大きく三番手の一年Bクラスとの差は縮まり、まだ四番手であった？クラス前園も息を吹き返したか最高に近いラストスパートを見せた。

「ありやー、二人はこうなると一緒に走りそうですね、羨ましい——折角一位が確実にになったのに素直に喜べないですね」

南雲の言葉に嘘はなく、本当に複雑な顔でバトンを受け取りに助走に入っていた——程なくして二位に躍り出た一年Bクラスもアンカーの柴田にバトンを渡す。

「っしや！後は任せてちょー！」

目を輝かせて南雲を追いかける柴田——続いて堀北学と綾小路もコースに入っていく。

「アンカーがお前とはな」

「オレじゃ不満か？本当ならあんたの妹が入る予定だったが」

「はぐらかすな——分かっているだろう、俺が誰のことを言っているのかぐらい」

「そっちこそ、嬰兒に自由が無いことぐらい分かってるだろ——力不足は承知してるが、我慢してくれ」

綾小路の言い回しに堀北学は目を細めて瞬時に理解した。

「ほう、既に敗れたのか——それがお前のその気の源と言う訳か」

「有栖との約束の為だ。変な勘繰りはよせ——ただ嬰兒に負けたのは事実だ。それこそ手も足も出ない程の実力差を持つてな。世界の広さつてのを初めて実感した瞬間だったよ」

「やはり残念だな——俺が戦う機会は恐らくない、一体どれほどの強さなのか」

その目に灯される闘争心に綾小路は奇妙な共感——同時に心の底からの嫌悪感を抱いた。

「だったらまずオレと戦ってみるか？ さつきも言ったが嬰兒はオレよりもずつと強い——オレに勝てないようじゃ、話にならないぞ」

「……意外だな。そんな挑発をしてくるタイプには見えなかったが——それがお前の本性か？」

「何がオレの本性かはオレにもまだ分からない——ただ予感はある、嬰兒がオレに更なる高みを見せてくれると」

「ほう、そこまで言うか——ならば余計に興味湧いて来るな、牛井嬰兒と言う男に」

面白い——堀北学の顔にそんな笑みが浮かんだ。

対して綾小路は闘争心を隠すのを止めて、勝負を受けたことを確信した。

間もなく三年Aクラスが来る——どうにか食らい付いてる前園も程なく来る。

おあつらえ向きに舞台は整っている——この二人じゃなくても熱くなる展開だ。

「俺は過程の未来になど興味はないが、今この時だけは乗せられてやろう——だから全力を出せ、綾小路」

「言われるまでもない、最初からそのつもりだ」

最早これ以上の問答は無用——時間もなく、堀北学の手にバトンが渡った。

「え、あ……」

「ご苦労だった」

立ち止まったままの同級生に驚きながら何も言わずに引き上げていく——前代未聞の事態に殆どの観客が注目する。

「綾小路くん！」

前園からバトンを受け取ったと同時に走り出す二人——宣言通りに全力で最速の走りを見せる。

(体育祭なんて関係ない、この男と勝負することが全てだ)

その思いで走りに綾小路は歓声も他のランナーの姿も消えて加速していく。

ほう、これはまた珍しい光景だな——正に風を切るような走りだ。綾小路の奴、全力を出せる相手に闘志を抑えきれなかったな——なんだかんだと言いながらもまだまだ青いな。

「マジかよ」

「うそだろ……」

今までも好成績を出してたから早いのは分かっていた——それでも信じられないって顔だ。

ただそれでも例外は要る——それは嬉しそうにしながらも肯いている娘が。

「当然です——やつと清隆くんの本当の実力を見れました」

最早、何も言うまい——そんな雰囲気で堀北会長との一騎打ちに注目が集まる。

前を走っている柴田と南雲も余裕のない——必死を通り越して決死の走りになってるが、やっぱり物足りないな、後の二人に比べると。とか思ってたら柴田を抜いた——先頭の南雲との差もぐいぐいと縮んでる。

この劇的な展開に怒号のような歓声が響き、沈んでた興奮が盛り返して来た——それを南雲も肌で感じてるのか、焦りが溢れて明らかにオーバーペースに入った。

おいおい、大丈夫か？

この見立ては直ぐ様に的中した——二人が迫り抜き去ろうとした瞬間、南雲の足取りが乱れ躓いた。どうにか転ぶのは避けたが、綾小路の進路を妨害する形になり軍配は堀北会長に上がった——ちよつと締まらない結末だが、運悪くに負けてしまった綾小路の方が不満だろうし、こつちが何か言うのは止しておこう。

それでも二位には入った——？クラスとしては入賞できればだから、寧ろ上出来だ。

戻って来る綾小路だが、流石に息が上がってる——それと腕の痛みがぶり返したようで強めに抑えている。

これは少し放つて置く訳にはいかんな——観戦の合間に用意した冷却スプレーを持って近づいて行き、少し強引に腕を取った。

「全く無茶……じゃないようだが、もうちよつと身体を労われよな」
右手でスプレーを掛ける——それと綾小路の腕を掴む左手では『申』と『水瓶』を併用して血行を良くしながら炎症抑えて回復を促進させる。本当は自然回復がいいが、俺にも責任は無い訳でもないしな。

「よし、念の為に湿布も貼っとけ——少しの間は余り動かすなよ」

「……それはそれは不便なことだ」

うん、言いたいことは伝わったようだ。

「清隆くん、お疲れ様です」

いつもながら、いいタイミングで出て来る。ホント、よく見てる娘だな……恐ろしいぐらいに。

その顔は明らかに何かを求めている——それは周囲の奴らも同じで、神妙かつ分かり易い期待感がありありと溢れている。

「ああ、少し疲れたな」

綾小路もその空気に絆され……いや逆らえずにか、坂柳に近づいてギョツと抱きしめた。

この場に端末を持ってないのが惜しい——そんなのがあちこちからある。

「飽きないよな、こいつら」

「いいじゃん、この為に頑張ってたんだし」

「そうそう、こつちも入賞出来てウィンウィンだし」

代わりに聞こえてくる面白おかしい感想の数々——これには面子を傷つけられた南雲も呆れ顔だ。

ただいつまでもそうしてる訳にもいかない——もう結果発表と閉会式だしな。名残惜しそうに離れたはやほや夫婦と一緒に皆が整列に向かう。

「それでは本年度体育祭における勝敗の結果を伝える——」

全生徒が電光掲示板に注目——まずは組による結果は、予想通り『赤組勝利』だ。

ただ重要なのはここから、クラス別の得点だ——決して手は抜かなかつたし、皆も健闘したし、思わぬ事態も綾小路が埋めたし、何より形式的には最後までフェアに進行した。

それでも一位以外は接戦——さて？クラスはどうなるか？

「続いて、クラス別総合得点を発表する」

表示された結果は——

1位 一年Cクラス

2位 一年？クラス

3位 一年Bクラス

4位 一年Aクラス

「よっしゃ！勝ったぞ!!」

「負けなかったただけだ——けど、悪くはないな」

総合的に？クラスはマイナスを回避した——Cクラスも一位を取ったが白組せんたいの敗北により50のマイナス、Bは150のマイナスで僅差だったAとの差が広がり、そのAも100のマイナスだ。

こう見ると？だけが得をしたにも見えるが、それでもCとの差は200以上でABに関しては300以上——まだまだ先は長い、しかし決して届かなくもない。

これからが楽しみだ。

「最後に学年別最優秀選手を発表する」

須藤が固唾を飲んで期待してる——綾小路や俺も候補ではあるが、この中に居るとは思えない。

出た競技全てに一位を取り続けた須藤も欠場があり、綾小路も推薦競技には半分、俺はひとつしか出ていない——いや綾小路は高得点の最後のリレーで二位、もしかしたら可能性はあるか。

そして表示されたのは『一年最優秀賞——B組・柴田颯』だった。

「ま、順当だな」

ただ当のB達は喜んでる風に見えない——Cの異常ぶりに赤組こくち以上にペース乱されっぱなしだったからなあ。

神崎や柴田なんかは健闘したが、他は異常さに引つ張られて、さっきの南雲以上のオーバーペースの連続——完全に空回りと悪循環で

中盤からの結果は散々なものだった。

もつと冷静に戦えていればクラス二位どころか、一位を取れても不思議じゃなかった——もしそうならマイナスが100減ってAクラスになれた。

そう思うと寧ろ無念が勝るだろうな——神崎なんか特にそんな顔してるし……。

一方の大大健闘したCの奴らも喜んでる様子はない。

総合的には勝ったとは言えないから、こちらも無理もない——それだけじゃ無いんだよな。

全員が顔に出さないようにしてるが、我慢を通り越して必死に耐えている——閉会式が終わった瞬間にどこよりも早く戻って行っただし、さぞや早く休みみたいだろう。

終わったなら戻りたいのは俺たちも一緒だが、まだ少しここに居なきゃ駄目みたいだな。

「有栖、分かっているとと思うが」

「はい、この結果は真摯に受け止めます——相まみえるのはまだ先になりそうですが、その時の楽しみがちよっぴり上がったのは嬉しい限りです」

これでAクラスとの話は付いた——そんなポーズか。

そしてBも問題ないだろう。団体競技で得た500はあくまで組としてだし、知らぬ存ぜぬが無難——実際にそうだしな。後は……

「須藤くん、約束は覚えてるわよね？」

「ああ、俺は一位を取れなかった——これから堀北って呼ぶ」

悔しそうにしてるな——対して堀北は意地悪そうな顔だ。

「いい心掛けだわ——でもその約束は途中で変更した、私が」

そう言っただけ振り返りCが居た場所を見ながら続けていく。

「ここから先、半分以上は独り言よ。今回の結果は異常だわ——でもケチを付けたら騒ぎ立てることをしたら、私たちが手に負えない事態に発展する可能性は大いにある」

Cの当人たちだって訳が分からないから、そうなら学校存続の危機——そうなら面白くなりそうだが。

「そうだったら雪辱の機会も無くなる——それは望めない、今回の借りは絶対に返さないと収まりが付かないのは私だけじゃないでしょ」「当たり前だ!」

「ならその時の為にモチベーションを上げるのは必須——その助けになるなら名前で呼ぶのも許すわ」

「え、お、おい?」

「おやおや早速須藤の操縦法を覚えたか——そして須藤をダシにしてクラスメイト全員に話を聞かせてるし、強^{した}かがここに来て際立つて来たな。」

「嬰兒くんもこういう展開になって欲しかったんでしょ」

「ここで振り返って俺を巻き込んできた——ここまで小細工抜きで正面から来るとは流石に想定外だな。」

俺の方にゆっくり近づいて毅然とした態度で続けて来る。

「貴方が全力を出せる舞台を整えるのに私も全力を尽くす——私が取れる責任なら全て取ることを約束するわ。だからクラスを強くするのに——上に行く為に貴方の力を貸して貰えないかしら」

「なんとも格好いい事だ——更にそれを見せつけることで期待感のある雰囲気を出した。」

「ここで俺が肯けば堀北はポイント以上の成果を出したとなる——なんて程度の考えじゃ、まだまだ及第点にもならないぞ。」

「お前が取れる程度の責任じゃな……」

「てめえ、鈴音がここまでしてるってのに!」

「須藤の怒りも今度ばかりは尤もだな——周りの目も、それはどうなんだ」と言ってるし、これなら襟首掴まれても文句ないな。

「ただやるだけ無駄だと分かっているのか、少しは自制心を身に付けたのか、須藤も言う以上はしない。」

「だったら足りない分はオレが補ってやる」

「ここで綾小路も入って来た——そう、そうでなきゃな。」

「嬰兒、お前がどんなものに縛られてるのかは知らん——でもお前の意に沿ってる訳じゃないのは分かる。だからオレも一緒に戦う——せめてその分だけでいい、その力見せてくれないか?」

含みを持たせおつてからに……お前の願望も上手に隠して。

ただ予想通りの発言でもあるな——俺と戦うつてことは、この学校を飛び越えた大きな力たちを敵に回すことに繋がる。

その覚悟があるのか——この問いを込めて、と言うかこっちがメインでもあつた。それを見抜けない程度じゃ、関わることなど出来ない——その意図を見抜いた上でそれでもと言って来るなら、期待してもいいかも知れないな。

「僕も微力ながら力を尽くすよ——嬰兒くんにはばかり負担は掛けない」

平田もいつも通りの爽やかに決めると、その彼女だつて出張つて来る——しかし、ただ合わせるつて感じじゃない、切実さを見せて来た。

「あたしもやつぱり悔しいし——Aクラスじゃくても、もつと気持ちよく卒業したい」

「……結果を出さなきゃ認めないとか言つてたのに——いいのか、軽井沢?」

「勝てなかつたけど、負けて無いじゃん——リベンジしたいのは堀北さんだけじゃないよ」

うん、言つてゐることは尤もだ。予めみたいな作為は感じない——それでも出来過ぎてて不可解ではあるな。

ただ軽井沢が堀北支持に回つたことで女子たちの意見は自然と決まつたようだ——男子の方も愚図ついているのも居るが、共感したのも多い。

「そうだよな、まだ負けてない」

「まだ二年以上あるんだ——終わりには早すぎる」

「よく分かんないけど……嬰兒がまたやる気出してくれるつてなら」

とか言つてゐるが、ただ流されてるだけ……流れが変わればどうなるか——だからこそ、ここはキツチリ締めないとな。

軽井沢から堀北に顔を向けて見据え言う。

「堀北、その言葉忘れるなよ——みたいな事を言つて欲しいんだろうが、俺はお前の欲しい言葉をやることは出来ない」

「てめえ!」

須藤が憤るのを堀北が止めた——だから気にしないで続ける。

「お前が本当に……いや一番に信頼したい相手は別だろう。そいつを口説いて、お前の欲しい言葉を引き出せたなら——クラスメイトのよしみで少しは贖罪してやる」

今、俺が言えるのはこれが限界だ——それは堀北にも分かったようで、いい顔で肯定してる。

「そう、分かったわ——その時に改めて申し出ることにするわ」

「楽しみにしてるよ——じゃ、戻ろうか」

「ええ」

長かった体育祭も漸く終わる——ロッカーで着替えて教室に戻り、閉会式と同時に各自解散となっているので各々帰路についた。

俺も寮の自室に戻ろうとしたが廊下に待ち人が一人。

「なんとも切羽詰まった顔だな。櫛田」

「単刀直入に言うよ。さっきの話、嘘はないわよね？」

戻った後でゾンビパニックが起こるのが拭えないか——自棄なんて起こす気は無いって言ったのに……ま、信じられないのも仕方ないか。

「なんだ、堀北に代わってお前が取って代わるつもりか？それはそれで面白そうだが」

「……………?!……………い、いや……………別に……………」

「不安を拭い切れないなら、綾小路に訊きな——それが一番だ、話す機会を作るようにも言っというてやる」

「……………目当ては堀北じゃなかった？綾小路くんが発端なの？」

「それで合ってるかな——お前が原因じゃないのは確かだ。そこは断言する——神に誓ってな」

それじゃ——と話を切り上げて帰る。

顔は見えないが櫛田の精神はまだまだ不安定なのは分かるが、食い下がって来ることはなかった。

一応の納得はしたか——ただ漠然とした予感があった。次の主役になるのは間違いなく櫛田、お前だったな。

その結果次第でその次、更にその次がどうなるか？

ああ、想像しただけでゾクゾクしてくる——勿論、思った通りにならないかも知れない——それでも期待せずにはいられない、そんな相反する気持ちのせめぎ合いが今ばかりは心地いい。

兆しはひとつに非ず。

体育祭も終わり、十月の中旬——寒くなってきた本格的な季節の変わり目を感じさせる中で学校内でも新しい時代の移り変わりを向かえた。

と言ってもまだ一年である俺たちにはどうでもいい事であり、退屈な気分のまま体育館の壇上に立つ生徒を見ていた。

「約二年間、生徒会を率いて来られたことを誇りに思うと同時に感謝します——ありがとうございます」

これで堀北『前』会長殿か。そして新しい生徒会長の登場——引き継がれる次の生徒会メンバーには一之瀬の姿も。

「二年Aクラスの南雲です——堀北生徒会長、歴代屈指とも言えるリーダーシップを発揮した最高の生徒会長と共に出来たこと、また温かくも厳しい指導に敬意を表します——誠にありがとうございます——」

うん、これは社交辞令などでなく本心っぽいな——深々と頭を下げた後、再び全校生徒に向き直る。

「改めまして、高度教育高等学校の生徒会長に就任いたしました、南雲です——よろしくお願いたします」

礼儀正しい挨拶だ——こっちが社交辞令だな、さて何を言い出して来るかな。

「早速ではありませんが、私は生徒会任期と任命、総選挙のあり方を変更することを公約します」

そこからの独演はさっきの言葉とは打って変わり、前生徒会の功績を否定するかのようなものだった。

生徒会在任期間及び人数制限の撤廃——メンバーが不適切な場合による多数決での除名制度を作る。

実力のある生徒を引き上げ、実力の無い生徒はとことん落ちる——真の実力主義の制度だと謳っているが、その判断を生徒会ひいては生徒会長がするなら、南雲の独裁を際限なくやるとも取れる。

「本来なら今すぐにでも私の考える新体制で動き出したいですが、新

米会長にはしがらみも多く残念ながらそうもいきません。ですが約束します——近い内に大革命を起こすと」

この宣言に全二年生たちは歓喜、三年生たちは浮かない顔だ——俺たち一年が知らない戦いでもあったのか？

そんな感想を抱いてたら、最後に南雲は俺に視線を送って宣言した。

「これから先、前代未聞に特例が多発するでしょう——そのような事態に対応していくためにも我々は力を付けなければなりません。

何故ならこの学校の理念は、この国の未来を担う者を育てること——その為の転換期がやって来たのだと私は思っています。

このような時に巡り合えたこと、私は心から歓喜しています——この学校だけじゃない、この国、いや世界の歴史に名を刻める。

そんな予感に私は打ち震えています——皆さんと切磋琢磨し偉大な一步を歩めるよう、改めてよろしくお願いします」

なにこれ、宣戦布告か？

単純に俺をダシにして盛り上げたかっただけ？

それとも俺を取り込んで、本当に歴史に名を残そうとか？

意図が今ひとつ分からないが、お陰で余計な注目が集まった——どうしろと言うんだ？

壇上にも登って行って何か言うべきか、もうとつくに奇異な奴と認知されてるんだし……駄目だ、教員の中にドウデキャプルが。

いつの間に交じりやがったんだ？

周りも気付いている様子ねえし……ともあれ選択肢は無言のまま、やり過ぎすしかないか……。

そのまま沈黙が三十秒——やたら長く感じるのに痺れを切らして南雲も諦めたように残念な溜息を付いた。

「長々とした話にご清聴ありがとうございました」

短く締めて壇上から下がる。

その後もセオリー通りに校長が当たり障りのない文言で絞めて解散となった——その時にはドウデキャプルは消えていた、目を放してはいても意識は向けていたのに、ホントに不可解な奴だ。

翌日からは俺が生徒会に入るのかどうか——そんな探りを入れてくる連中が後を絶たなかった。

？だけでなくAやBからも……ただ上の学年からは全く来ない、Cに關してもな。

体育祭が終わった直後から授業には出てるが、ただそれだけで済まし直帰——部活に關しても休みがちが多いと最近噂が絶えない。

体育祭での大躍進で注目が集まっただけに色が付きやすい——悪い意味でな。尤もこれは奴らの日頃の行いもあるがな。

まあ、そんなことを気にしないで学生生活を楽しもうとしてる輩も居るが。

「ねえ、嬰兒くん。一緒にお昼行かない？」

佐藤が軽い感じで誘って来るみたいにな——体育祭での昼飯の時からよく俺の所に来るようになった。

最初は軽井沢の差し金かとも思ったが、それとなく話してると本人の意志であるのは間違いない——ただ、その意思が何処から発生したかについては未だに疑問が残る。

見た目通りにチャラそうだし、誰かに乗せられてる——そうだとしても悪意が無いのは間違いないから無碍にするのも気が引けるな。

「構わないぞ」

「そう。じゃあ、軽井沢さんたちも呼んでくるね」

そこには当然平田も付いて……となる時とならない時があるから、ちよつと不思議でもあるんだよな。

傍から見ればクラスの可愛い娘をはべらせてる様だが、上手いこと防波堤になってくれて余計なのを遮断できる——しかも佐藤には裏が無いから隙も生じにくい、本当に誰の差し金なのかね。

学食で手ごろな定食を取りながら談笑する——学生青春的な風景だが、気を緩める訳にもいかんから素直に楽しめない。

本当に難儀なものだ。

「なんかさ、最近Cクラスの人たち全然見かけないね？」

それは計算か、松下よ？

「いいじゃん、平和で」

「そうそう。あんな連中が居たってご飯が不味くなるだけだよ」

当人たちが居ないのをいいことに言いたい放題だな——ただそれでも話は上手く流れそうにもないけど。

「そうだけど——嬰兒くんは気にならないの？」

やはり計算か——俺のことを暴きたい好奇心もそうだが、先の堀北の演説に松下も来るものがあつたのか、闘争心が揺らめいてるのが隠れ見える。

つられたのか、何処かで気になつてたのか——佐藤と篠原も好奇の目で見て来る。軽井沢も同様に流れに逆らえないか。

ちゃんと答えなきやつて状況に持つて行つた——が、この程度の事は想定内、出し抜こうなんて甘いよ。

「全くないな——遅かれ早かれ、また騒がしくするんじゃないか」

あの時は全員が限界以上を出し尽くしたからな。ちゃんと休めば、直ぐに元の日常に戻つて来る。

その時はより疑念は深まるだろうがな。だから、

「今の内に静かな時間を満喫してた方がいいぞ——本格的に遣り合うことになつたら、飯どころじゃないからな」

少し脅すように言うとう女子たちが緊張で息を呑む——それでも終わりそうにないか、松下が緊張した顔のまま口を開いた。

「やっぱり嬰兒くんも本気で戦いたい？」

それが一番訊きたかつた事か——Cのことは単なるダシ、上を目指したいって気持ち芽生えて来たなら良いことだよな。

「松下さん、その辺にしようよ——重苦しきなつてきて、あたし息が詰まっちゃうよ」

口調は軽いが絶妙なフォローだ——軽井沢がそう言ったから他の二人も続く。

「そうだよ」

「どうせするならもつと楽しい話しようよ」

「そうだね、お昼時にする話じゃなかったね——嬰兒くんも忘れて」

輪を乱すことなく引き下がるか——陰のリーダーでも気取ってるかと思つたが、そう言う訳でもないのか。

「元より気にちやいない」

そう短く答えて程なく食べ終わった——そのまま何事もなく教室まで行ければ良かったが、葛城と戸塚に出くわした。

まったく次から次へと……。

「済まないが話をしてもいいか？」

「ちよつと何を急に」

「そつちこそ何だ！普通に声かけたただけだろう」

軽井沢が前に出て威嚇すると戸塚が負けじと噛みついて来る——驚くほどに忠実な子分振りだな。

葛城が完全に落ち目になったにも関わらず、それでもこの忠誠心の高さ——それを持ってAクラスにつてとこか……と言うか、それ以外で見所が見えてこない。

もし葛城がリーダーの座を勝ち取ってたら、さぞや良き片腕になったかも知れないが現実は無常——仕える主を間違えたとは言わんが、最早完全に困らせるだけの奴だぞ。

事実、葛城も微妙な顔してる——そして俺としてもこんな無駄な諍いは望ましくない。

「葛城、話があるなら少し場所を変えないか」

「そうだな、その方がよさそうだ。弥彦、済まないが先に行つてくれ」

戸塚も軽井沢も不服そうな顔だが、当人たちの意向だからか黙つて見送つた。

特に目的地もなく廊下を歩きながら葛城が切り出して来た。

「噂では一之瀬にとのことだったが、それはデマか？」

「少し意地悪なね——俺も余り人のことは言えないけど」

「外側だけでなく内部からも好奇な目がある訳か、大変だな」

本心からの気遣いを感じさせるニュアンスだ——ここは素直にありがたいと思つておこう。

ここまではな。

「大変と言えばCクラスもそうだな——体育祭以来、どうにも静かだが……そうしているのもやっと、そんな顔をしているのが見て取れた」

「そうだな、気付く奴は気付く——異能のことを知らなくても、いや知らないからこそ俺に訊きたいのも道理だ。」

「龍園のことだから何か物騒なことに手を出したのかと当初は考えたが、ハッキリ言っただけを差し引いても異様な光景だった。何が起きてるんだらうな？」

「絶好調に超が三つは付く活躍してたからな——限界を越えれば反動もでかいさ、キチンと休めば何も問題ない。心配しなくても大丈夫だよ」

「言い切るところは流石だな——実に頼もしいと感じる、反面に恐ろしくもな」

「その気持ちは大切だよ。特に穏やかに過ごしたいならな」

「……本当に恐ろしいな。どうすればそんな洞察が得られるんだ？」
「相当にぶっ飛んだ比較対象を知っててな——この学校の連中もそこそこぶっ飛んでる奴らが多いから考察はかなり楽だな。」

「そんな中で足掻こうとするまともな思考形態の持ち主も居たが——お前も結構無理してんじゃないのか？」

「訊かれてばかりも癪だから、訊き返してみると葛城も肩をすくめた——凶星か、漸く本音を話せるか、俺の好みかは分からないけど。」
「正直に言えば、この理解に苦しむ不可思議な学校の仕組み——特にクラスポイントの構造を未だに把握できないのはキツイな。その中でも特に異質だと実感するのはお前だがな。今の会話で改めてそう感じた」

「正常な感覚だな。大事にした方がいい」

「……もとより隠すつもりもないか。かと言って深く知ろうとすれば、取り返しのつかないことになるのか？」

「好きなように取ればいい——ただその結果どうなったって責任は取れない」

「それがギリギリできる忠告か——敵対しあう仕組みがなくとも上手

くやっついていける気はしないな」

その割には言ってることと表情が合致してないが。

「仕組みもそうだが、この学校の設備や待遇には入学当初から戸惑っていた。とても学生が受けられるような代物じゃなかったからな——ただお前の特例などを目にするると普通に当てはめようすることが間違いだと嫌でも分からせられる。」

それを思えばCクラスのことともそうだが、俺が躓いたことも些細なことだ——坂柳にしても突き進んでいけるかどうか」

まだ再起は諦めてないってか——まだ一年の半分くらいだしな、坂柳が負けることだってあり得る。

それとも俺に坂柳を潰せとでも言いたいのか？

「仮にもクラスメイトを後ろから刺すようなことは言わないさ——お前もそうだが綾小路もフェアに挑んでくる男だと信じている」

「その信用がハズレだとしてお前に損はないもんな」

「それはお前の好きに取ればいい——ただやるなら龍園が静かなうちがベストだ。綾小路や堀北にもそう伝えといてくれ」

「ま、それくらいならな」

取り敢えず了承すると葛城は行った——しかしよ、伝えたからってお前の望む通りになるとは限らないぞ、なんてことも言う必要はないか。

その程度、葛城だって十二分に分かってるはず、それでも僅かでも再起の可能性を上げる為に——変わっていくのは何処も同じか。

そのまま放課後になり約束通りに昼休みのことを伝えたが、

「?めるわけないでしょ、そんな話」

「オレも堀北に同意見だ——今はまだ有栖と戦いたくはない」

見事に一蹴された——ま、予想通りの展開だけど。

「まずはCクラスへの雪辱が優先か——なら不気味な沈黙をしている今、何か変だと言って学校に訴えるのもありなんじゃないか？」

検査を受けさせれば一発でアウトだ——場合によってはクラスが

ひとつ丸々消える。下手を打てばそれ以上の結果も……。

「それはしないわ」

それも一蹴か……堀北は俺を見据えて続けた。

「確かにあの異常な奮闘と結果は気になるけど、それでもどうにも龍園くんらしくない……今の状況で益々そう思えて来るわ」

「ああ、あいつならもつと上手く切り抜けられるようにしただろう——全体的に見ると明らかにリスクが釣り合っていない」

綾小路め、もう解かつてるくせに白々しい——そのまま尤もらしいこと言つて堀北を焚き付けて来た。

「下手に事を荒立てれば、学生の諍いでは済まない——寧ろ、Cクラスに仕掛けるなら今が絶好のタイミングだ。借りを返すなら正式な場でやるべきだ」

「私も同意見よ——訴え出るのが正しいことかも知れないけど、望まない方向に行く気がしてならない。それに個人的なことにもなるけど正式な勝負で決着を付けたいのよ」

立派なことだ——そして俺にも訴えるなど言つて来るか。

いや綾小路に関しては訴える気は無いつてアピールか——ちよつとは怖気づくじやないかとも思ったんだがな。

そんな素振りもなく、より覚悟を決めたか——どこまでのものかは分からいけど。

と言うか返つて好奇心が刺激されちまったかな。

一種目の100m走の際にCの選手二人に『戌』の『殺さな^い毒』いわゆる増強剤である秘薬『ワンマンアミー』の劣化版——本来は潜在能力を極限まで引き出すのを八割未満に抑え、風に乗せてターゲットを狙う『破傷風』で投与した。

異常なハイペースを難なくこなせたことの興奮もあつて二人の息はいい感じに上がつていた——それを『申』の仙術による気体操作で他に行かないようにテントに戻ったCのみに感染させるのは本当に手間がかかった。

そしてこのドーピングによってCは大躍進だったが当然副作用もある。

劇薬でもある為に終わり際——1200mリレーの時には全身の筋肉が歪み、骨が歪むような激痛が襲う。

これは一朝一夕で収まるような代物じゃないが、適切にしつかりと安静にして寝てれば何も問題ない。

尤もそれをすれば自分から不正をしたと告白するようなもの——失格どころの騒ぎじゃ済まないだろう。

だから龍園は日常生活を送らせるように強制している——ま、それでも多少長引くだけで何も問題も心配もないけどな。

繰り返すが『ワンマンアミー』は『殺さない毒』——基礎疾患などのヤバそうなものには『魚』モードで常時観察して上手く調整した、そもそも死ぬことなどない。

それでも杓子定規な対応すれば、この学校の信用が根幹から揺らぐ騒動にも発展する——そうなれば元も子もないから龍園も予想外の攻撃を受けたなんて口が裂けても言わないだろう。

ともあれ俺の学校生活もまだ続くか——騒動が大きくなって、俺にしがらみを課して来るあいつらにこの程度じゃない、もつと劇的な反撃が出来るかもとも思ってたんだがな。

そこまでいかなくとも俺と一緒にすることは学校のバックに居る政府やもつと大きな物と戦うことになりかねないと——綾小路がビビって干渉してくるのも無くなるぐらいはなる可能性も想定してたりもな……どうであれ今更だが。

「お前がそのつもりなら俺が言うことは何も無い——ただ俺のしがらみはこの先ももつと増えるだろうから、それもしつかりと覚えといってくれ」

「……ええ、分かったわ」

一応は肯いたが堀北はまだ納得できない顔で俺に言った。

「何か、私たちに出来ることはないの？寧ろ訴えるなら——」
「その気持ちは有り難いが、それ以上踏み込んでくるなら——命じゃ済まないぞ」

最低限の忠告を持って黙らせる——もうこれ以上は話すことないから、俺もそろそろおいとまするとしようか。

「じゃ、またな」

嬰兒が帰って二人きりになった堀北と綾小路——それぞれの思惑が脳内を巡り、同時に口を開こうとして綾小路が堀北に譲った。

「綾小路くん——あなた、榊田さんとのわだかまりはまだ残ってるのよね？」

「お互いに心に引つ掛かるものが取れなくてな——しかし、それ言うなら堀北こそ何かしら因縁があるじゃないのか？それも悪い方だな」

「……どうしてそれを？」

「お前が言ってたんじゃないか、自分のことを嫌いな奴を好きになれるのか」って。その少し前から榊田からお前との取り持ちを頼まれてな——後から考えて何かしら探る為のアプローチだったと思つてな、少なくとも顔見知りじゃないかと」

「私の知らない所で、そんな事が……」

「対してお前は榊田のことを気にも留めてる様子もなかった——思い過ぎしかとも考えたが、榊田の性格からしてそのことがあいつのプライドを傷つけたのかとも……ただそれでもどうにも弱い気がしてしつくりこなかった」

綾小路の推論を聴いて感心したような顔になる堀北——ここまで素直に顔に出すなど少し前までの彼女では考えられず、綾小路の方も感心するが求めているのはそんな事ではない。

「嬰兒くんもそうだけど、あなたもやっぱり侮れないわね」

「おい」

欲しいのは賞賛の言葉ではない——と話を先に進めるように促す。

「あなたの言う通り、私も榊田さんのことは完全に忘れていたわ——今にして思えば思い出す切っ掛けなんていくつもあつたのに掻き回されて、それどころじゃなかったのよね」

「なんかオレにも責任があるって言い方だな？」

「そう聴こえたってことは、心当たりでもあるのかしら」

批判をサラツとかわされるが、話が逸れるのは好ましくないので

黙って続きを待つ。

「櫛田さんの方から同じ中学だって言われた時には私も驚いたわ」
「櫛田の方から？」

余りにも意外——とも言えない話に驚きは直ぐに消えた。それだけ櫛田が切羽詰まっていたと言うこと——そしてそれは今も続いている。過去の因縁を持ち出してまで殺されるのを回避しよう……。
「ええ——今まで見たこともない顔で叱責されたわ。比喻でもなく命懸けの気迫っていうのを始めて見せられた——お陰で本当に目が覚めたわ」

（実際に命が懸かっていると思ってるんだからな）

何より本当に殺されかけたのだ——あれからまだ半年も経ってないのに消える訳がない。

「そして思い出した——確かに私の中学に彼女が居たって」

「中学の時の櫛田はどんな感じだったんだ？」

「人気者だったのは確かだね——様々な行事の中心に居て求心力は相当高かったはずよ」

「一々過去形なのは、そうでない何かが起こったってことでいいのかね？」

「せっかちなね——ただその通りではあるわ。でもこれは噂で聞いただけで本当のところは私も知らない」

前置きが漸く終わり、堀北は改めて粛々と語る。

「中学も終わりがけの二月にあるクラスが集団で欠席する事態が起こったの。それこそ卒業するまでね——ある女子が引き金でクラスが崩壊する事件が起きた、と。それ以上の情報はないわ——でも生徒間では様々な憶測が混じった噂が広がった、私の耳にも届くほどにね」

「その噂とやら——今のお前はどうか考えてる？」

「憶測を話すのは好きじゃないけど——何か櫛田さんが我慢できないことが起こったんじゃないかって」

「あくまで櫛田が被害者だと？」

「綾小路くんは逆だと？ある種、仕方ないけど……ちよつと根に持ち

過ぎじやない」

「内緒話を漏らされたただけならな」

「私の知らないことがまだある訳ね——兎に角、私が櫛田さんについて知っているのはこれで全部よ。」

この過去を自分から暴露したつてことは、より全力でAクラスを目指さないと同じ事を起こすと彼女なりの覚悟を見せた——ならば私も報いなきやならないわ、例えどんな困難であっても」

恐ろしい程に前向きな捉え方——それだけ堀北鈴音がその時の櫛田桔梗に好意的な印象を抱き影響を受けたと言う何よりの証明だ。

しかし綾小路は真逆の印象を強く受けた上——櫛田が今、死の恐怖を抱えていることを知っているのです、この齟齬をどうすべきか答えの出ない問題に頭を抱えたかった。

「……仮にだ。櫛田の望む展開にならず同じことを起こすとして、どんな手を使うと思う？」

「それは皆目見当が付かないわね——そもそもクラスひとつが崩壊したつて聴いた時も耳を疑ったくらいだったもの」

「嬰兒なら暴力や権力を行使して可能だろうが、櫛田に同じことが出来たとは考え辛い——消去法で言えば嘘を駆使したぐらいだが……」

「その辺りにしときましよう——ここで仮説を並べたつて分かるものじゃないわ。何よりそんなことに私は興味もないし」

「……ハッキリさせておかなきゃ、いつ何時牙を向いて来るかもしれないのか？」

「それでもよ——私は、櫛田さんと一緒にAクラスになって卒業したい」

「ここまで櫛田に惚れ込んでいるのは綾小路も想定外であり半ば感心し、もう半分には困惑が生まれた。

「だからこそ、その邪魔はしないで貰いたいわね」

それを見越してか、堀北からやや辛辣な言葉が投げられた。

「別にそんな気は更々無いんだが」

「どうかしら、あなたと私たちの目的は完全には合致していない——」

もしクラスと坂柳さんのどっちかを選ばなきゃいけない状況になったら、坂柳さんを取るなんて訊くまでもないでしょ」

流れるように至極当然の如く言われ、綾小路の目にも動揺が浮かぶ——それも一瞬で直ぐに冷静に返そうとするが、その前に堀北がより強いニュアンスで言い切った。

「それが例え坂柳さんが望んで無かったとしても」

正に挑みかかるように……飾らずに言えば喧嘩を吹っ掛けるように。

それは綾小路清隆の未だ理解できぬ感情に諸に突き刺さり、無意識に想像してしまう。

(もしも有栖が窮地に陥ってしまったら………)

彼女ならそこまでの実力だったと潔く認めるだろう——その上で足掻くのか、諦めるのか、どちらになろうと自分は尊重することが出来るだろうか。

この学校に入る前——否、入学した日の夕方までなら躊躇うことなく切り捨てた。

しかし出逢ってしまった——そして予期せぬ形とは言え一緒に過ごした。

それは心地良い時だった——想像できなかつた分、より深く。

「……………」

何も言えなくなった綾小路に小さく息をつき、堀北は口調を和らげて言った。

「別にそれが悪いとは言わないわ——それと誤解しないで貰いたいけど、私も二人の仲を否定するつもりはないし、寧ろ未永く幸せになつて欲しいとも思ってるわ」

これもまた流れるように出て来た——紛れもなく堀北鈴音の本心からの言葉と思わされる。

実際に綾小路と坂柳が一緒に居るのはよくあり、堀北も当然見掛けることはある——中でも堀北にとって決定的だったのは体育祭での借り物競争のひと幕だった。

本当に幸せそうに、それでいて二人にとっては当たり前のような姿

は恋愛を知識としてしか知らなかった彼女をして衝撃的だった——
果てしなく良い意味で。

「だからそんな時が来ないことが一番だけど、それに依存して考えない訳にはいかない——もしも敵対したとしても責める気もなれないでしょうし」

「……何が言いたい？」

「ひとつだけ約束して欲しいの——もしもその時が来ても騙し討ちはしないで欲しい」

「この場で約束しても破るかも知れんぞ？」

「ええ、そうね。口約束でどうにか出来るほど軽い訳がない——それでもその時が来ないなら……少なくとも今現在は？ クラスの一員であり、味方であることを信じさせてくれないかしら、綾小路くん」

誠意を込めた——例えポーズだとしても正々堂々と来た申し出に驚きを隠せない。

「そんな強い意志を込めた目で見られたら応えない訳にはいかない——須藤もそうやって口説いた訳だ」

「はぐらかさないでくれる」

いつぞやと逆の展開に綾小路も改めて向き直る——そして同じく腹を見せることで堀北の誠意に呑まれないように対する。

「オレと有栖は敵同士だ。これは有栖が望んでることだし、オレも有栖が望む最高の時に応えたい——それに沿って行動してる、今もこの先もな」

この前置きに堀北は二人の想いの強さを再認識させられ、決めた覚悟を揺さぶられたと同時に若干の気恥ずかしさを感じさせられた——冷や汗と同時に僅かに頬に赤みがさす。

「堀北の言ってること、目指す先も同じところにある——利害が一致してる以上は敵対する理由はない」

つまりは堀北の求めていることには応じるし力も貸す——ただ、どうにも回りくどい言い回しに堀北は頬を赤くしたまま返す。

「そう……ただ前半の惚気話が必要だったのかしら？」

「そつちが誠意を尽くしたんだから、オレもそれなりに応じなきゃと

思ったんだが」

シレつと返されてしまい今度は堀北が何も言えなくなってしまう——それに何よりまだ話は終わっておらず、綾小路は揺らいでる彼女に更に続ける。

「それとこの際だから言うが、オレはお前たちのことを仲間だと思つたことはない——オレはオレの欲しい物、叶えたい願いの為に動いてるだけだ。お前たちと同じくな」

「……………ええ、そこに關しては私が言うことは何も無いわ」

やつとのことで出て来た言葉——少し前に同じことを言つたのもそうだが、綾小路の一番大事なものを思えば致し方ない。

だからこそ、これ以上の惚気話は勘弁して欲しい——もうこれで終わりにして早く帰りたいかった。

「言葉通りならありがたいが——本当に終わりにになるとは思えないから、もうひとつだけ言わせてくれ」

しかし全く帰してくれる気配はなく、自分で話を振つただけに無理に終わらせることも出来ず……堀北はどうしようもない状況にこれまでの人生で一番強く助けが欲しかった。

(嬰兒くんや綾小路くんじゃないけど……今ばかりは本当に何かに祈りたいわね)

「オレと有栖の目指す先、着地点は一致している——互いに意思の確認は取ったからな」

やはり惚気話が続くのか——どうしてこうなったのか、誰でもいいから教えて欲しい、と堀北の脳内で果てしない愚痴が湧く。

「だけとお前と櫛田もそうだとはいにも思えない——櫛田の意志を都合よく解釈しすぎてないか?」

「自慢話でマウントでも取りたいのかしら?」

「そんな訳ないだろう——ただ肝心な所をハッキリさせておかない、取り返しのつかないことになりかねんぞ」

辟易しそうだった気分が一転して不愉快が込み上げて来る——綾小路も決して的外れなことを言っている訳ではないのが余計に面白くない。

そんな不機嫌は言葉にも表れる。

「今後のことも含めて櫛田さんとはじっくりと話をしたいと思ってるわ。でも何だか最近の彼女、妙にビクビクしてて……とても話なんて出来る状況じゃないのよ。何か心当たりはないかしら？」

「そこはオレに任せろ——その後でお前と話をする場も設けるのも約束する。ただその際にはお前が理想としている展開になるかは保証しない」

やはり上から目線で気に入らない——ただ、もうこの場ではお開きにしたいい気持ちが上回っているので反論したいのは飲み込んだ。

「そう。出来ればなるべく早くにして欲しいから、色々とせつづくと思うけど——クラスメイトとして信じることにするわ」

それでも言われっぱなしは気に入らないので堀北なりの発破（要求）を伝える——今ひとつ分かり合える気がしない。

お互いにそんな認識を持ちながらも叶えたい願いの為、それでも今は手を取り合わなければならぬ。

されど願いが完全に分かれてしまったなら——その先の戦いも過ぎり、堀北は不安を綾小路は妙な期待感を感じたのだった。

モルモツトが・・・

なんとも程よい緊張感だ——クラスの皆が真剣に今日と言う日を待ちわび、茶柱先生が来るのを今か今かと待ちかねている。

とても赤ちゃん状態だった？クラスとは思えない——これが本来の高校生としてのあるべき姿だ——こういうのを見ると学生生活が続いたのも無意味じゃなかったと思えるな。

おっと、お待ちかねの時だな。

「席に着け——これから中間テストの結果を貼り出す。赤点を取ったものは覚悟を決めて貰うぞ」

そう。この中間テストで赤点を取ったものは即退学——特に今回は体育祭での下位十名はペナルティ、マイナス10点があるから外村なんかは気が気じゃないだろうな。

一方、須藤は入賞による加点があるとは言え、常に最下位だから同じく気を休めることも出来ない——しかし見方を変えれば、今回の最下位は回避できる可能性はある。

その場合、同じ三バカである池か山内が候補筆頭だから、いつも以上に緊張が増しているのが分かる。

ゆっくりと貼り出されていく試験結果に固唾を飲む生徒たち——ホントにこの先生は嫌味な演出が好きだな。

結果は悪かった者から順番に記載されている——今回の最初に出て来たのは『山内春樹』で、次に『池寛治』、そこから井の頭、佐藤、外村と続いた。

「う、嘘だろ!?!」

山内よ、それは何に対してだ？

自分が最下位なこと、それとも須藤が下から十二番目と言う大躍進を遂げたことか？

「よっしや！見たか!!一気に自己記録大幅更新!!!——平均60までもうひと息だ!」

立ち上がり小躍りしそうな須藤——嬉しいのは分かるが後にしろ

よ。

「その程度で騒がない、みつともないわよ」

「お、おう……」

堀北に窘められ座り直した——穿った見方すれば主従関係が成立してるな。

ただ悪いものには見えない——それだけの信頼関係も感じる。

双方の成長も見て取れる——茶柱先生もそう見えたかな。

「今回の結果は見ての通り退学者は無しに終わった——この三年間でこの時期まで退学者を出さなかったのは初めてだ。良くやった」

などと珍しく褒めてるが山内などはギリギリの点数でもあり、それでいいのかとも思ってしまうな。

何より今回の中間はこれまでに比べると難易度は低かった——須藤の点数が伸びたのは堀北主催の勉強会もあるだろうが、それが一番の要因なのは間違いない。

このクラスはまだまだ成長途中——いや高校なんて卒業するまで成長過程なんだから、少しはご褒美があってもいいのかな。

ちなみに綾小路の奴、60から5点ずつ80までにずらして平均70なんてことをやってのけた……ホントに癖になってんのかね？

「今度もまた面白いことをしてるみたいね——もつと真面目に取り組んで欲しいわ」

堀北も気付いた——いや、ニュアンスからして知ってたのかな。尤もそれも今更だから反応するのも居たりする。

「堀北さん。言いたいことも分かるけど、清隆くんはこういうのじやないとやる気が削がれちゃうから……その、大目に見て貰えないかな」

佐倉が遠慮がちにフォローすると長谷部も直ぐに援護に回ってきた。

「そうそう、あんまり点数上げ過ぎて切られるのが出ても嫌だし」

おいおい、そんな言い方だとフォローが台無しだぞ——そう感じたのか三宅と幸村が慌てて軌道修正に入った。

「いざって時になれば清隆だって本気を出すだろ」

「無理強いすると返って面倒が起ころぞ」

特に幸村の言は実感がこもっている分、説得力がある——麗しい友情に堀北も押されたのもあるが、既に周知なのも驚いたようだ。

「そんなことまで話してたの？」

「……もう皆知ってるよ——オレの本意って訳じゃなかったけどな」

綾小路、一々俺を見ながら拗ねたポーズなんて取るな——堀北も妙に納得してる顔を向けても何も出はせんぞ。

「はは——なんか、春先の勉強会を思い出すな」

山内が茶々を入れて来たら、池の奴も面白そうにしながら話に入る。

「確かにあの時とよく似てるな——な、桔梗ちゃん」

「え、あ……うん。そうだね……」

しかし話を振られた櫛田の歯切れは悪い——何の話か知らんが、つまり話の中に俺が居るからか。心配しなくても何もしないの——と言ったところで信じる訳もないか。

そこにパンパンと手を叩く音が鳴り、音源である茶柱先生に注目が集まる。

「そこまでだ——続きは休み時間にやれ」

ホントに今日の先生は教師っぽくて珍しい——でも愉快さが混じるニュアンスは微妙だな、良くも悪くも。

騒ぐのが収まって全員静かに席に着くと、茶柱先生は意味深な顔のまま教室内を歩き出す。

どうやらここからが本番のようだ——そんな空気を教室中に巻いていき、途中で池の席の横で止まり言った。

「改めて訊くがこの学校はどうだ——忌憚のない意見を聴きたい」

「そりゃ……いい学校ですよ。上手く行けば沢山お小遣い貰えるし、何処の施設も文句もなく至れり尽くせりだし……何よりリアルで学生恋愛ドラマなんて見れるし、マジで最高の年に入学できたなって……」

最後には当人を除いて皆が目を丸くした——そして直ぐにニヤニヤしながら、同感だと肯いている。

その中には堀北も愉しそうな笑みを浮かべてるし——高円寺にしても笑みが増したのが分かる。

このクラスメイト全員の祝福を受けた綾小路は——もう随分と慣れたものだな、すまし顔のままだ。

このまま、ほんわかしたままで行つて欲しいが、そう言う訳にもいかんか——茶柱先生は綾小路から俺に視線を移してきた。

「そうだな。今年は本当に面白い年になった——赴任してからもそうだが、在学中であつても見たことの無いことのオンパレードだ」

身の上話を混ぜながら俺の席を素通りして、今度は平田の席に——俺にも訊きたくてウズウズしてるのを我慢してるって風に見えちゃうな。

「平田はどうだ、もう慣れたか？」

「はい。充実した学生生活を送れています——僕も最高の年に入学できた運命に感謝してます」

迷いなく即答か——でも神でなく運命と言う辺りは何かしらの意地か？

「運命か。一度のミスで退学しても同じことが言えるか？」

「そのリスクをクラスの力を合わせて乗り越えます」

文句の無い答えだが、ちよつと趣旨がずれてる気がしなくもないな。

でも茶柱先生、満足そうに教壇に戻つた——平田の言ったことがこれからの事に関わつて来るのか？

さて、どんなのが飛び出して来るのか。

「分かっていると思うが——来週、期末テストに向けて八科目の問題が出される小テストが実施される」

「げえっ！」

「ちなみに聴いてないは通用せん——私も含め各教科の担当がしっかりと伝えた」

叫ぶ池を黙らせる——漸くいつもの茶柱先生になって来た、と思つたが浮かべてる笑みからするとそうでもないようだ。

「安心しろ。出題されるのは中学三年レベルが100問——基礎を再

確認するもので、成績には一切影響しない。ただ結果は無意味なものではない——次の期末試験に大きく影響すると先に言っておく」

「先生よお……もつと分かり易く言ってくれねえか」

「そうだな、須藤にも分かり易く言えると良いのだが——次回の小テストの結果を基に『二人ひと組』のペアを作る。このペアはそうだな——運命共同体とでも言おうか、双方の合計点で試験に挑むことになる。」

ペアね——成程、それがさっきの平田が言っていた協力に繋がる訳か。あとは具体的にどう機能するかだな。

「試験は八科目100点、各科目50問の400問——赤点も二種類あり、全科目60点のボーダーが定められ、ペアの総合が各科目60点を下回れば二人とも退学。もうひとつはペアの総合点が定められた赤点に届かなかった場合だ——こちらに関しては正確な数字はまじだが、例年では700点前後となっている」

「先生、体調不良で当日欠席してしまった場合は？」

堀北が勢いよく質問した——流石に二回も特別試験を全うできなかったんだから神経質にもなるか。

「その場合、欠席の正当性を確認し、やむを得ない事情が認められれば過去の試験から概算された見込み点が与えられる——認められなければ全教科0点だ。順番が前後したが試験は四科目ずつ二日間で行われる」

内容を把握した堀北は深く肯いている——あとはペアの選定方法がどういったものかだな。

「ペアの決定方法は小テストの結果が出た後に伝える——例年この特別試験、通称『ペーパーシャツフル』ではひと組か二組の退学者が出る。その大半は？クラスだ」

「最後に脅しですか？」

堀北が挑むように言うのと茶柱先生は不敵な顔で返してきた。

「単なる事実だ。疑うなら上級生にでも聞いてみる——コネのある者ぐらい居るだろう」

それはそれは、何とも回りくどいヒントだ——ストレートに言えな

いにしてももう少しソフトに出来んのかね、

組み合わせ次第によっては大量の退学者が出てもおかしくないのにその程度の数で済んでいる。しかも上級生に確認を取っても良しなら……。

含みに気付いたのは目に付く限り綾小路と堀北、高円寺や平田あたりもか——櫛田もどうかと思っただが、まだ引きずってるみたいだな。

「最後にもうひとつ——お前たちには別の形で試験に挑んで貰う」「別の形ですか？」

僅かに動揺するクラスを平田が絶妙にフォローする。

「そうだ。まず期末試験の問題はお前たちに作って貰う——その問題は他の三クラスの内ひとつに割り当てられる、言わば『攻撃』する訳だ。割り当てられたクラスは『防御』する形となり、自クラスと相手クラスとの総合点を比べ、負けたクラスから勝ったクラスへ50のポイントが移動する」

「組み合わせによってはフェアになりえないんじゃない」

平田の指摘通りだ。

AがB、？がAを攻撃して、Aの総合点が攻撃した側と防御された側を上回ったら得られるのは100、Aと？がお互いを攻撃しあったら、どっちが勝っても50——それも考慮しなきゃとかなら流石に難易度が高すぎる。

「心配するな。直接対決になったら一度に100ポイント変動する——滅多にないが引き分けの場合は当然変動することはない」

「最後にひとつ訊かせて下さい——自分たちでの問題作成と言いましたが、難易度は何処までが許されるのですか？」

「問題内容に関しては私たち教師が公正にチェックする——指導要領を超えていたり、明らかに答えられない問題は修正して貰う。そして間に合わなかったら学校側の用意した問題を使用して貰う——但し、この問題の難易度は低めだと思っておけ」

それは実質、不戦敗つてことか。

戦いは既に始まっている、今この瞬間から——そんな気概を発する

のも何人が居る。

「問題作成に関しては方法に制限はなく自由だ——他クラスと相談しながらでも構わない。学校側が認められる内容なら難易度の高い低いも問わない。」

そして何処のクラスと戦うかは、小テストの前日に私に報告しろ。希望する相手が被った場合は代表者によるクジで決める」

説明を終えて今日の授業は終わった——ただ早速の新しい本番の始まりだ、ずっと待ってたチャンスに堀北は意欲満々に立ち上がった。

「これから作戦会議を始めるわ——嬰兒くんも出て貰えるかしら？」

「居るだけでいいならな。俺は何も意見は言わないし、言ったとしても余り実のあるのは無いぞ」

「説明の手間が省けるだけでも十分よ」

おお、如才ない——ならお手並み拝見と行こうかな。

ケヤキモールにあるカフェのひとつ『パレット』——女子を中心に活気があふれる中で？クラスの主要メンバーが集まる。

「榎田さんは……やっぱり来ないみたいね」

堀北が心底残念そうに言うのと平田が謝ってきた。

「ごめん。本当に調子が悪そうで……とても声が掛けられなくて……」

「よっぽどここに来たくないんでしょ。ってかき、いつまでこんなことしてる訳？」

軽井沢が平田をフォローするように綾小路に辟易した問いを投げける——この一件の原因だと決め付け、責めるように。

「断っておくが、オレが榎田に何かした訳じゃない——そうだろ、嬰兒」

「その通りだ。それは俺が証人になる——綾小路に落ち度はない、あ

くまで櫛田の過失だ」

「……………いや……………でも、だからって……………櫛田さんだつて、うつかりくらいするでしょ。このままにしても良いことないじゃん」

嬰兒に断言されてしまい、僅かに怯む軽井沢だがそれでもいい加減に許せと言外に抗議してくる——何かしら彼女の中にも思うところがあるようだ。

そんな軽井沢に綾小路は更に続ける。

「確かに含むところはあるが、オレはそこまで気にしてない——気にしてるのは櫛田自身だ。話をしようとは言ってるが、あいつの気持ちの整理がまだついてないみたいでな——もう少しだけ時間が欲しい」
ほったらかしにするつもりはない——問題への取り組みは行おうと示されて軽井沢も引いた。

しかし、そのまままで終わらせられないのも居た——堀北は嫌味な目を向けて、綾小路に言う。

「時間は有限よ——出来ればこの試験が終わるまでには何とかして欲しいのだけれど」

「堀北さん、言いたいことは分かるけど——これかなりデリケートなことだし焦っても——」

「平田、フォローは有り難いが大丈夫だ。櫛田の不安は必ず取り除くから、そうだよな——嬰兒」

「ああ、何も心配することはない」

説得には嬰兒も付き合う——既に相棒のような遣り取りに綾小路が夏休みに言っていた仕事をきつちりとこなしているのが分かる。

嬰兒の問題がどうなったかは分からないが、少なからずの信頼は得たようだ——ならば櫛田にしてもまだ様子を見るべきだと話は終わる。

そこから注文した飲み物に口を付けたら、端末をいじるなどしながら少しの時間が過ぎると最後のメンバーである須藤がやって来た。

「おーい、待たせたな。わりい、わりい」

須藤が席付いたところで準備は整い、本題が切り出される。

「それじゃ、次回行われる小テストについてから始めましょうか」

「ペアの選定の法則を見つけ出すんだな」

堀北が仕切りだした瞬間に綾小路が一気に確信を言い出す——ただ結論をいきなり出されても理解できない者もあり、透かさず平田が補足する。

「小テストは期末試験のペアを決める為にやるのが目的って訳だね」
「その通りよ——その法則性を見つけ出すことが勝つ為の必須条件よ」

早速、話し合いに熱が入り始めた——これにまず軽井沢と須藤もあてられ意見を言う。

「点数が近い者同士が組むとか？」

「正解や不正解が似てるとかもあるんじゃないの？」

「否定はできないけど——それだと茶柱先生の言っていたことと矛盾するわ」

「え、どういうこと、洋介くん分かる？」

「茶柱先生はこの試験での例年の退学者は多くて二組って言ったよね——二人の言った通りなら少な過ぎないかな」

ついさつき発表された成績下位のメンバー同士や須藤が組めば退学は間違いない状態だ——例年の？クラスとそこまでの差があるとも思えない。にも関わらず退学者が二組程度——須藤も軽井沢も事のおかしさに気付き始める。

しかし既に気付いており、丁寧に説明する時間を惜しむ者も居た。

「つまり見抜けなくても大して問題ない法則ってことだな——この前提で考えて自然なのは『高得点と低得点でのペア』だな」

ここで嬰兒も話に加わった——些か驚きながら堀北が肯き、嬰兒の意図を考察し直ぐに結論を出した。

「ええ、100点と0点を取ったペアになるなら、先生の言っていたことにも腑に落ちるわ——そこで嬰兒くんを確認したいのだけど、テストの点数まで気にしなくちゃいけないってことはないかしら？勿論、答えられないならいいけど」

「俺のことは気にしなくていいぞ」

「そう——なら、そうさせて貰うわ。」

そうなると思掛かりは平均点に近い同士のペアね——あとは何処のクラスを狙うかね」

「そりゃ、当然Cクラスだろ！借りを返す時じゃねえか」

須藤が気合の籠った声で言う——ただ感情論を抜きにしても学力の面において有利に持っていていける。クラスポイントから見ても差を一気に縮められる点からして理に適っていてもいる。

「僕もそれが最適だと思うけど、考えてるのはAやBも同じじゃないかな？指名が被ってクジになったら、Aクラスと対決することもあるんじゃない」

「有栖の性格なら今回はBを攻撃した方が面白そうだと思うがな——BもAとのポイント差から考えて直接対決による100で今度こそ逆転したいって思うんじゃないか」

綾小路の指摘は説得力があり、？クラスの狙いが上手くいく可能性が上がった——そんな期待感が行き渡る。

「と言っても断言はできないがな——私情や目先の利益より現実性を取ることでって考えられる」

それを綾小路本人が軌道修正する——最悪のケースであるAクラスとの対決を外されて話が進むのは望ましくないからだ。

（オレが有栖にそうするように頼めとか……他の連中が言い出されたら堪らん）

それとなく須藤を視界に入れながら、この場での話が池や山内に伝わり楽観論が流れたなら相手がCクラスであつても敗ける可能性が上がってしまう。

「つってもよ。クジになったら何処と当たるなんて運任せだろ——バスケの試合でも強豪といきなり当たることだつてあるんだぜ」

須藤の意見——その余りの尤もさに皆が衝撃を受けて無言になる。中でも堀北が最も衝撃を受けたようで、嬉しそうに言った。

「思いがけなくも良いこと言うわね——確かにそうならなつたで戦うしかないわ。そうなるならCクラスを指名するのはそうだけど、想定はAクラスにして対策を練るべきね」

「だね。僕らの狙い通りになつてもその方が勝率も上がる——他がC

の相手になる場合もポイントを減らしてくれるなら文句はないよ」

「いつそのとき。Aと一緒に狙って、もし直接対決になったら問題見せ合って引き分けにするとかは？」

「軽井沢、それは流石に凶々しいぞ。もしそんな提案した日には有栖なら笑いながら、後ろから刺してくるぞ」

「ちよ、ちよっとした冗談じゃない……あたしだってそこまでお花畑じゃないし」

綾小路の脅しめいた表現に平田でなく、嬰兒に助けを求めるように目を向かわせる軽井沢——そんな視線を受けて嬰兒が仕方ないと言わんばかりに言う。

「クラスの方針は確定でいいな——それで他の奴らにはどう伝えるんだ、ここでのをそのままか、それともギリギリまではAと戦うことにするのか？」

「本当にあなたが居ると、さっさと話が進むわね」

堀北が呆れたような声で言い、少し考えて改めて仕切り直す。

「緊張感を持たせる意味でも後者は有効かもしれないけど、良い方向に転がるかは未知数——逆にモチベーションが下がる人も出て来るかもしれないわ。小テストまで日取りもないし、ここは正直に伝えましょう——ただし少し含みを持たせてね」

「Aと戦う可能性はあるのを強調するんだね——Cを狙うからって気が緩むのを無くす為に」

平田が言いたいことを直ぐにかみ砕いた為、須藤と軽井沢にもすんなりと伝わった。

これで方針は纏まり、時間も頃合いを向かえそうなので解散し須藤と平田は部活に向かおうとする。

「それじゃ、先輩に試験の話聞いたら報告するぜ。鈴音」

「僕も他に何か情報が無いか、それとなく聞いてみるよ」

「洋介くん、早くしないと遅れるよ」

軽井沢が平田を急かしながら一緒にグラウンドに行った——残った堀北、綾小路、嬰兒はまだ帰る気配はない。

「それで櫛田さんだけど、出来れば私が直接伝えたいから、今直ぐに連

れて来て欲しいのだけだ」

先日と言っていた通り、遠慮なく急かして来る——ただ今回の試験に関しての方針については櫛田が絶対に必要と言う訳ではない。

100パーセントで堀北鈴音の私情から来ているものだ——これについては綾小路も人のことなど断じて言えないので文句を言う訳にもいかない。

「試験の終わりまでは待つてくれるんじゃないのか？」

こう言うのが精一杯であった——ただそれで引き下がる訳もなく、強烈な釘を刺される。

「そう言つて、ギリギリまで何もしないんじゃないや本当に手遅れになるかも知れない——もしもそうなつて櫛田さんが退学したら、どう責任を取るのかしら？」

「分かつた——猶予があるからつて胡坐はかかない。試験の調整だけじゃなくて、櫛田の件もちゃんと取り組む」

「明日からじゃ駄目よ、今日からよ」
「ああ」

最後まで妥協を許さずに約束させられた——してやられた形になり解散となつたが綾小路の心にはある種の納得感があつた。

(あれが堀北の本来のモチベーションか？ 嬰兒の言う所の本当に強くなつたのをまざまざと感じたな)

その嬰兒も「それでいい」と言つた目を向けていたのにも流石だと再認識させられた。

しかし櫛田を説得するプランは煮詰まつておらず、嬰兒を今連れて行つても逆効果になりかねないので、まずは綾小路一人で試みるしかない——嬰兒もそれが分かつていて無言のまま、任せたと行つてしまひ今更になつて溜息を付きたかつた。

同じ頃、？クラスに標的にされたCクラスでは一人の例外もなく絶不調であり、とてもじゃないが特別試験どころではなかつた。

それでもCクラスの独裁者である龍園は最低限の日常生活——授

業を受けて帰る、を徹底させていた。

「あ……あの、龍園さん……一日だけでいいから休んじや駄目ですか？」

「却下だ」

弱音を吐く者を威圧して黙らせる——その龍園自身も無理が表れているが、眼光の鋭さは全く衰えていない。

不屈の精神力などの安っぽいものでない反撃への決意を持って、モチベーションを維持どころか、逆に高めている——ただそれでも今回の特別試験は捨てざるえないと屈辱に更に怒りを燃やしていた。

「そんなに休みてえなら、とつとと帰れ——部活もいくな、土日も外に出るな。何もしないで寝てろ」

有無を言わずに帰らせる——無意味な問答に時間を割くのも勿体なかった。

ひと通りが出払った後、龍園の側近とCの頭脳班による打ち合わせが始まる——その全員の顔色も悪く、自分たちも早く帰りたい気持ちから、とんとん拍子に進む。

「金田、ひより。試験の法則性の見当は？」

「成績上位と下位からペアを組んでいくのではと、龍園氏」

「私も同意見です。試験の説明からしてまず間違いないかと」

「よし、アルベルトと石崎。直ぐに上級生に確認を取れ。結果はメールして終わったら帰れ」

「オーケー、ボス」

「はい。龍園さん」

「で、もう終わりなら帰ってもいい？」

仕事が割り当てられなかった伊吹が、調子が悪いながらもいつも通りの棘のある口調で訊く。

「おめえはこいつをある奴に渡しに行け、直接でも寮のポストでもいい——済んだら、そのまま帰って寝ろ。余計なことは済んなよ」

「誰が、こっちだって早く休みたんだよ」

龍園は封筒を渡すと悪態をつきながらも伊吹は教室を去って行く——その足取りは重そうであり、言うまでもなく他の事などすること

は無さそうだった。

「金田、率直に言え。問題作成するのはお前以外居ない、やれそうか？」

「出来なくはありません——申し訳ないですが、これが精一杯です」
「なら出来る可能性を上げろ。もう帰れ」

「はい」

金田も素直に帰宅していく——彼には言うまでもなく、何もしないで回復に努めると残った龍園と椎名は無言で見送る。

そして二人だけになったことで龍園は本題を切り出した。

「ひより、お前にも単刀直入に訊く。今回……いや体育祭でのことからは牛野郎の仕業だと思うか？」

「十中八九、そうかと——ただ確信とは言えません。嬰兒くんは恐ろしい人だと知ってましたが……ここまでするのか」

「過小評価だったな——俺も常識が通じない奴と思ってたが、想像を遥かに超えてやがった」

「龍園くん」

「皆まで言うな——分かっている。牛野郎の標的は俺らじゃない」

この返答に椎名は安心し、それに構わずに龍園は推理を続ける。

「俺たちは体育祭で計画を立てた——勿論、クラス的能力を前提においてだ。ただ当日になってその数値が超絶に跳ね上がった——何かそうなるようなのを盛られたのが妥当だな、その副作用が今も続いている状態って訳だ」

「はい。しかし私たちには全く身に覚えがありません——誰一人、気付かれないうちにこれを完遂するなんて普通では考えられません」

「それこそが正に答えだ——やりかねないのも含めてな」

「でも龍園くんの計画を潰すだけにしてはやり過ぎです——公けになれば学生の誹いじゃ済まされないレベルになるなんて想像に難くありません——それが彼の動機なのでしょう」

「特例って優遇処置に見せかけ、その実に我慢ばっか強いて来る学校のバックへの攻撃——俺らはその為の捨て駒に使われた訳だ」

龍園は忌々しいと怒りが表れるが、椎名はそのままに落ち着くのを

待つ——この肝の座りようが認められ重宝されてもいるだろう。

龍園は落ち着きを取り戻して話を先に進める。

「それは見方を変えれば、野郎は俺らに含むものはないってことだ——なら付け入る隙はある」

「毒を以て毒を治めると——この件で騒ぐと脅しても効果などないでしょうし、やるならAクラスの方とするのが妥当では？」

「坂柳の親父の進退に関わるならとそれも最初は考えたが、どうにもリスクとメリットが釣り合わねえ、逆に丸ごと潰しに来る可能性も低くねえからな」

「と言うと何か別の思惑、いえ切り口がある？」

「ホントに話が早いな——奴が欲しがってるものをくれてやるのさ、この件の要求を受けなきゃ成立しないようなのをな」

「嬰兒くんの欲しいものですか、しかも私たちに手を貸さなくてはいけないような？」

椎名の興味が刺激されて思案を始める——ただそれは直ぐに終わらせられた。

「詳しくは牛野郎との交渉の際に聴かせてやる——ここで無為にエネルギーを使うな。最短なら今夜には分かる」

「私も同席しろと——あまり意味があるようには？」

「オメエを殺すと言ったんだろ——俺が知ってるのも耳に入ってるかも知れねえが、実際に訊いた本人がいるだけでも心証は段違いだ。失敗できねえ以上は打てる手は打つ」

「そうですか、承知しました」

話は纏まり二人も帰宅する——そして日が完全に暮れた時間となった頃、龍園の予想通りに色よい返事のメールが届くのだった。

名誉が・・・

さて、いよいよ明日は小テスト——六時間目のホームルームは始まって直ぐに茶柱先生は教室を出てしまい、代わりに平田と堀北が教壇に立った。

クラスも遊び気分の奴は居らず、様になってきたな——素直に気持ちよく感じる。

それは教団の二人も同じよう良い顔しながら話し出した。

「これから小テストに向けての作戦会議を行おうと思う——堀北さん、いいかな」

「ええ。ただその前に改めて謝罪させて——体育祭において私は成果と呼べるものは何ひとつ残せなかった。威勢のいいことを言っておいて、あの結果——本当に申し訳ないわ。

特に軽井沢さん、あなたの言う通り私は満足な結果を出せなかった——あなたの方が余程評価されて然るべきね」

頭を下げる姿に本気でドン引きしてる軽井沢——この前みたいな作為的なのは感じないから、これは本当にアドリブだな。

「あ、あたしは別に……って言うか、そのリベンジする為の話し合いでしょ。今度こそは勝つ為の」

「その通りよ——次の特別試験、私はクラス一丸にならなきや乗り越えられないと思ってるわ。そして全力を持って勝ちに行きたい」

「言いたいことは分かるけど、ペアの決め方も分かんないのにどうするの?」

「それについては既に見当が付いてるわ。平田くん」

打ち合わせ通りにスムーズな進行だ——平田も活き活きとしながら法則を書き出していく。

ペアの法則——小テストの成績トップと最下位が組む。続いて成績上位と下位から二番目、三番目同士が組む。

例——100点と0点、99点と1点がペアになる。

「こんな感じのシンプルな仕組みよ。これは他クラスも当然気付いても想定していかなければならないわ。それにイレギュラーな事態だって起こりえる、その可能性も下げて行かないと」

少し難しい話になっていく雰囲気には不安顔も出て来てやがる——これまでの堀北なら構わずに進めるだろうからな。

それを助長するみたいに中間の成績下位の十名の名前を黒板に書いていく——書かれた連中の顔色の青さは僅かずつ増していく。

一体何を言われるのか——まず悪いイメージが浮かんでるのは間違いないな。例えば、よりハードな勉強会をするから強制参加させられるとかかな？

と言ってもそこまで心配は無い。

「この十人は次の小テストで名前を書くだけでいいわ」

堀北の言ったことに完全に肩透かしを受けてか、当人たちだけでない多くが面食らってるな——そいつらにも分かるようにかみ砕いた戦略が説明されていく。

「0点でも成績に反映されないなら問題はないわ——逆に上位十人には85点以上は取って貰う。あとの二十人も同じように1点を取ると80点を目指すのに振り分けることで、期末テストで理想的な組み合わせが成るわ——ただ詳細は煮詰めていくわ、もしもの可能性は無くしたい」

もしも、ね——成績下位同士がペアになったらか。いや、それだけじゃなさそうだな。

「綾小路くんも今回は真面目に受けて貰うわ、異論は一切認めない」

「分かってるよ——そんなに突つかかるな」

「高円寺くん、あなたはどうかしら？」

「ナンセンスな質問だよ。私に高得点を期待してるようだが、それは内容次第だろう？」

「意図的に0点を取るような事になったらどうなるか、想像出来るわよね？」

半ば脅しを含んだいい返しだ——クラスの戦略が成立しないことを指しているようにも聴こえるし、態と足を引っ張たなら容赦ない報復

をととも取れる。

そして高円寺が含みを理解できることも見越してる——無駄な反論はないだろうとも。実際にその通りのようだしな。

「じっくりと検討しておくよ。ガール」

なんとも曖昧なことだが、恐らく心配は無いだろう——味方とも言えない奴だが、一年も終わってない時期に明確なクラスの敵になっても構わないなんて愚かな男でもあるまい。

翌日の小テスト、始める前に茶柱先生からある報告が上がった。

「お前たちの希望したCクラスだが、Aクラスと被ることになった。よって代表者によるクジ引きを行う。小テスト終了後、代表者は私と一緒に来て貰う」

綾小路の予測は外れたか——いやそれとも坂柳が逢いたいから被らせてきたのか、それとも……………。

「そして？クラスに問題を出すのはCクラスに決定した。こちらは指名が被らなかつた結果だ」

つまりBはAを指名したのか、ここは綾小路の予測通りだな。そしてクジに勝てばAとB、Cと？の一騎打ち——負ければ上手くばらけるが、俺たちが戦うのはBになり勝率は厳しいと言わざるえないな。

「私たちが勝って、Aも勝てばCは100のマイナスよ——決して悪くないわ」

本当に前向きになったな——堀北は。

クラス内の空気が格段に軽くなるのが分かる——ただ、そのままって訳にはいかないようだな。

茶柱先生、いつもの意味深な顔で水を差してきた。

「後で後悔だけはしないようにな」

「こ、後悔って……成績には影響しないんじや？」

「その通りだ——何か秘策があるようだが、自信はあるのか？」

池や山内たちの成績下位組があっさりと吞まれた——が、それも問題は無いか。

「はい。私たちの計画に間違いはないと確信しています」

言い切ったな、堀北——そして、それは不安を抱いて奴らに伝播していった。

「そうだぜ。鈴音を信じるぜ」

須藤も冷静さを取り戻し、不安は完全に払拭されたか——以降は無駄な遣り取りもなくテストが開始された。

ただ内容には驚いた——本当にレベルが低い。

？クラスで退学者が出るってのも納得だな。何も知らないままなら、池たちでもかなりの点数を取れる、性質の悪い罫だ。

結果として小テストは問題なく終わった——次はクジ引きだな。

代表者には当然、綾小路になり、付く沿いに二人までが許されて俺と堀北が行くことになった。

「やっぱり坂柳さんが待つてるかしらね？」

「有栖が来るならオレたちの方が早いだろう」

進路指導室までの道中に堀北が言い、綾小路は素っ気なく返す。そして言った通りに俺たちの方が先に着き、少し待つことになった。

「綾小路くんの予想は外れたけど、Aはどういった思惑なのかしらね？」

「この場を設けてオレに逢う為だとしても言わせたいのか？」

全くギスギスしてるな——何があつたてんだ？

「無いとも言い切れないんじゃない——嬰兒くんはどう思うの？忌憚のない意見を聴かせて欲しいわ」

俺まで巻き沿いにされた——ぶちやけるなら堀北の言ってたことは俺も考えてたが、それだけで動くような娘だとは思えず、少し考えでも見た。

他も聞きたがつてそうだし、相手もまだ来そうにないから、そのまま話すことにするか。

「利益を念頭に置けば、究極的にはポイントの独占かな。一騎討ち同士だと他にも100のプラスがあるが、バラけた上でAの総合が一番ならポイントを得られるのはAだけの場合はある」

「クジの結果、オレたちがBと戦い総合点で負けたならCの方で勝つたとしてもプラマイゼロ、攻撃したBに勝利すれば得をするのはAだけ——自信家の有栖らしいな、確かに」

「逆に私たちがBに勝つか、クジでAとB、Cと？の一騎打ちのパターンでも勝てば得られるのは100ポイント。Aには損はないって訳ね」

理解が早くて助かるな——堀北のCへの雪辱は坂柳も当然聴いたし、それが無くても勝算の高いCを指名するのは自然な流れ、意図的に被せたのは間違いない。

俺も動機としても尤もらしいのと言ってみたが、本当にそうなのかはちよつと引つ掛かる——と言つてもまったくの勘なんだが。

この場で綾小路とちよつとしたお遊びを、とかじやない個人的な動機があるとして——もしかしたら見えない力が働いたかな？

と、どうやらお出ましのようだ——考えるのはまた後でだな。

「お待たせしました」

扉が開いて坂柳と神室と橋本、それにAクラス担任の真嶋先生が来た。

「申し訳ありません、どうしても移動には時間が掛かってしまうもので」

頭を下げる坂柳の横に居る神室の顔には「だつたら来なきやいいのに」とありありと書いてある——橋本はどうでもよさそうだが、真嶋先生は少々辟易した顔でこつちを見たが、それ以上はなく前に出て始めていく。

「これよりペーパーシャツフルの組み合わせを決めるクジ引きを行う。代表者は前に」

Aからはすぐ横の坂柳が、これにより必然的に？の代表は決まった。

「綾小路くん、あなたに賭けるからお願いね」

「ただの運にどうしろって言うんだ」

堀北の皮肉に悪態をつきながら綾小路も前に出る——そして用意された箱の中の紙をそれぞれが取り開いていく。

結果はAの指名通りとなった——これでこちらはBに攻撃か、勝つハードルが上がってしまったな。

「ではこれにて終了とする——各自、健闘を祈る」

真嶋先生があっさりと締めくくり、俺たちは教室に戻る——坂柳の方もとつと行つてしまい、どうやらお遊び気分じゃなそう。さっきの仮説の可能性が上がったかな。

「坂柳さん——いえ、Aの理想的な組み合わせになったわ」

堀北がクジの結果を伝えると残念な雰囲気広がった——これは平田も例外じゃなくな。

「でも、やることは変わらないわ。この試験は学力を高めて行くしか方法はない——最悪、Aクラスと戦うことも想定しなきゃとも思つていたけど、こうなった以上はその方針のままで行くわ」

しかし直ぐに切り替えて前向きな発言——Aと戦うことよりはマシだと、何人かは樂觀が入り、僅かに気が軽くなったのも居るな。

「問題作成及び勉強会に関しては、明日の結果でペアが確定した時に話すわ。力を合わせて乗り越えていきましよう」

これを以て解散となり、あとは明日の結果待ち——さて俺は誰とペアになるのかね、出来れば面倒の無い奴がいいんだが。

翌日、小テストの返却とペアの発表が貼りだされた。

堀北と須藤、平田と山内、櫛田と池、幸村と井の頭——と理想的なペアが出来上がった。高円寺も今回は合わせたと言うより、いつも通りにやってか沖谷とペアになった。

ちなみに綾小路は軽井沢——俺は外村と組むことになった。

「よろしくでござる、嬰兒殿」

「言つとくけど俺が全部100点取つてもお前が全部0点なら意味ないからな——ふざけた点数取つたら、ただじゃ済まさんぞ」

「ひえ〜……い、命ばかりはご容赦を！」

大仰なりアクションを取りおってからに皆も呆れてるぞ、一部の例外を除いてな。

「全くペアの法則を見抜いたと思ひ珍しく感心したら、先が思いやられるぞ」

茶柱先生、いつも通りに振る舞ってるが何やら愉快そうなニユアンスが混じってるのが見て取れるぞ。

「先生の言う通り、はしゃいでばかりも居られないわ——私たちが攻撃するのはBクラス。総合点で負けたなら、例えばCに勝つてもまたポイントが増えないままよ。しっかりと気を引き締めて行かないと」

堀北の指摘に浮かれ気分は一気に吹き飛んだか——許可を取り、先日同様に平田と一緒に教壇に立ち、これからの方針を発表する。

色んな意味で活き活きして見える——思った通り、これが堀北鈴音の本来のモチベーションなんだろう。最初からこの姿を見れたなら入学時の配属はAクラスだったろう——ただそうなったら、第三の派閥を立ち上げるも葛城共々潰されてたか。

となると無難なのはBクラスで一之瀬に代わるリーダーとして立ち——両腕に一之瀬と神崎を揃えて上を目指していくのが最高だったかもな。そうなると今の試験で戦っていたり、とか——それもそれで面白そうな気もする。

ま、意味のない仮定だ——堀北がクラスを離れるとは思えんし、戦うことは無いだろう。もし、なんて場合があるとしたら……。

「嬰兒くん、心ここに在らず見たいんだけど、ちゃんと聴いてたかしら？」

「聴いたてよ。勉強会開くんだろ」

「時間帯は？」

「放課後直ぐの午後四時からの一部と、部活組の午後八時からの二部で両方とも二時間——堀北が一部を担当して平田が二部を担当する」
「……ええ、聴いてたなら問題ないわ。それで嬰兒くんは指導役として両方に参加して欲しいのだけれど？」

「辞退する——言っただろ、俺のことは大丈夫だから気にしなくてい

い。存分にクラスを高めてくれればいい」

「あなたもクラスの一員でしょ、試験に向けての——」

「堀北、俺だって意志が無い訳じゃないんだが」

「だったら尚更、クラスの為に」

しつこく食い下がって来るな——好き嫌いでやりたくないと言っているようなもんだから、当然と言えばそうだが、先約がある以上は受ける訳にはいかない——しかも今回はそれを言う訳にはいかないから、さてどうするか……。

「堀北、オレからもひとついいか？」

綾小路が入って来た——助け舟を出したつもりか？

「なにかしら？」

「勉強会だがオレのグループと軽井沢のグループを一括にして集中的に取り組みたい。指導役は啓誠——幸村とオレがする。これだけでもそっちの負担をかなり減らすことが出来ると思うがどうだ？」

綾小路と軽井沢のグループでか——合わせたら九人、クラスの四分の一を受け持つことになる。

俺と高円寺が自分で何とかするなら、勉強会は二十九人で指導役の堀北と平田の受け持ちは上手く分散され、成績下位の連中にも集中できる。

単純に効率を考えるなら最適とも言えるが、言い出すタイミングが丸で堀北への反抗にも思えてしまう……こんなつもりはなかったんだがな。

「それは悪くない提案だね——それぞれの適した方法で成績を上げて行けるなら、それに越したことはないし、堀北さんも問題作成の為に余裕が出来るし」

平田もそれを感じ取ってか、直ぐに話に入り仲裁を取りに来た——漸くって感じだったのに苦労が絶えないな。

「……確かにメリットのある提案ね。無理強いしたって良い結果になるとも思えないし、その案は採用でいいわ」

冷静さを保ち、ムキになるのを踏みとどまったか——喧嘩になるのはどうにか回避されて、皆もホツとした。

「それじゃ、代わりと言っては何だけど——榎田さんも私たちの勉強会に指導役として参加して貰えないかしら？」

「なんか俺の時とは違い、豪く意欲的で積極的に好意的だな——別にいいけど。」

「え……あ、なに……ごめん、聞いてなかった」

「だから勉強会の指導役になって欲しいのだけど……ここのところ変よ、大丈夫？」

「更に榎田は全く聴いてなかったのに心配までするとは……これ飴と鞭つてやつか？」

「それとも予め仕組んでたのか——綾小路も素早く話に混ぜてきた。」

「榎田——指導役がキツイならお前もこつちに来るか？個人で集中したいなら、そうなる様に調整するが」

「ハハハ……ごめんね、可笑しな気遣いさせちゃって……でも大丈夫、クラスの為だもん、私だって——」

「クラスの為なら、いい加減に話も付けたいと思ってる——せめて一回だけでいいから、こつちに来て貰いたいんだが」

「そうだよ、榎田さん。いつまでもズルズル引きずってないで本当に仲直りしなよ、クラスだつていい感じになって来てるんだし」

「軽井沢もスラスラとよく出るな——これが初見だったら疑いが濃くなつたが、まんまこの前言ってたのと同じだ。」

「これで確信した——仕組んだんじゃないやなくてチャンスを窺ってたんだな。」

「そうなるって俺も同席した方が決着をつける上では最良だが、時間作れるかな？」

「あー、邪魔になるなら初回は俺が一人で受け持つから、二人で話しても構わないぞ」

「私も幸村くんの負担にならないようにするから、とことんやつちやいなよ」

「幸村の援護に松下も加わり、クラス中が綾小路と榎田の和解を望んでいる雰囲気にも含まれた。」

「クラスの為——Aクラスを目指すのを思うなら、わだかまりなんて無くすべきだわ」

堀北も流れに逆らうことなく、寧ろ積極的に話を進めて来る——この件が片付けば、次は自分だとか期待してるのかな？

なんにせよ、もう結論は固められてる——櫛田に選択肢などある訳なく、困った顔のまま肯いた。

「そ、そうだよね……いつまでも今のままじゃ駄目だよね。

うん、分かった。ちゃんと話をしよう、綾小路くん——二人だけだね」

最後に真剣さを装いながら俺の同席を拒んだ——心配ないとは言ったのに、やっぱり信用無しか。

「決まりだな——早速、放課後にでも始めるか。くれぐれも言うが、誰も来ないでくれよ」

「きよぼん。坂柳さんの手前、女子の一人くらいは同席した方がいいんじゃない？」

「波増加ちゃん、ここは信用しようよ」

堂々と水を差して来る長谷部に佐倉が遠慮がちに苦言を呈してる——こっちはこっちで固い友情が育まれてるんだねえ。

しかしお陰で教室の空気が格段に軽くなった——もう他に余計な茶々も入りそうもない。

案外狙ってやったのか——もしそうなら誰の影響なのかね。

放課後、綾小路は櫛田を連れて寮の自室に戻った——櫛田も流石に遠慮がちになったが、誰にも聞かれない話である為、重い足取りを動かし部屋に入った。

「女の子を部屋に連れ込んで一対一……あとのフォローは自分で何とかしてね」

「開口一番にそれか」

「当たり前でしょ——痛くもない腹を探られるなんてゴメンだよ」

「……有栖も嬰兒の事は把握してるから、説明は容易い。誤解される心配は無用だ、なんなら有栖も呼んで一緒に話すか？」

「いや、そこまで言うなら問題ないよね」

櫛田はあっさりと言いつつ引いた——この様子をつぶさに観察しながら綾小路は思考を展開する。

（学校側が知ってるなら有栖も知っていると繋げるのは容易だ——表向きの問題には有栖も関わってるなら同席しても何も問題ない。寧ろ、助けを求めるならオレよりも理事長の娘である有栖の方がいい筈——どうやら気にしてるのは命だけじゃないみたいだな）

「あー、駄目だよ。坂柳さんを差し置いて私の事なんて考えちゃ」

「オレが何を考えてるのか、分かるのか？」

「まさか、そんな芸当なんて持ってないし——何より私は超能力者でもない普通の女の子なんだから」

櫛田は笑いながら言った——ただその目には愉快さなど微塵もなく、そのまま続ける。

「嬰兒くんが何かするつもりがないのは、私だってもう分かってるよ——と言うか、私たちのことなんて二の次でしかないのよね」

「予想以上に正気は保っていたようだな——その通りだ。あれは嬰兒がオレにこの学校を潰すぐらいの大きなものと戦うことになりかねないと忠告……いや牽制を出しに来たんだ、Cクラスを生贄にしてな」

「向うの様子、それとなく探ってみたけど——どいつもこいつもガタガタで今度の試験もまともに受けるのも駄目なんじゃない。終わったら半分くらいは退学かもね」

櫛田としてはそれで龍園も消えてくれれば、不都合な証拠もなくなるのだが……あの時はこんな事になるなど知る由もなかった為に自ら墓穴を掘る失態を犯してしまった。

「まず最初に確認したい——Cと組んでまで堀北を退学させたいのは、中学の一件が原因だからか？」

「……そうだよ、もう知っててもおかしくないよね。あいつさえ居なければ今頃は」

櫛田の口調に苛立ちが表れ、無意識からの怒りで身体も震えていた。

「いつ堀北の口から暴露されるか、それがお前の最近の悩みの種か」「ちなみに訊くけど、綾小路くんは何処まで聞いたの？」

「堀北が知っていると聞いた事だけだ——あいつも噂だけと言ってたがお前のクラスが中学卒業間近に学級崩壊した。その原因がお前だと……堀北自身、聞いた時は半信半疑だったとも」

「へえ……」

櫛田の目は完全に座っており、話の核心であることを隠しもしない——綾小路はゆっくり話するのは逆効果だと判断して伝えるべきことを言うことにした。

「ちなみに堀北はその事の発端はクラスの方にあつて、お前は被害者だと思ってる——何をしたのかは知らんが随分と惚れ込まれてるな」「全然嬉しくもないね。自分で自分の首を絞めるどころか、喉元に突き付けられたナイフを皮一枚まで押し付けた気分だよ」

「と言うことは堀北の見立ては間違ってるのか？」

「……ううん、ある意味ではその通りだよ。原因は私だけど発端——切っ掛けは向うから来た」

余程忌しい過去なのは一目瞭然であるが、櫛田の中ではすでに整理が付いてるようで淡々とした口調だ——それが返って不気味であり、綾小路の警戒心を上げさせる。

「安心しなよ。襲われたとか騒ぐ気なんて無いから——そんなことした日には今度は泥棒猫のレットル貼られちゃうしね」

「……随分と信用されてる様だな——逆にそれを利用するとかは思わないのか？」

「全く」

瞬く間の即答——確信をも通り越したニユアンスに綾小路は言葉が詰まってしまった——そんな様子を呆れながらもニヤニヤしながら見ながら櫛田は続ける。

「仮に女の子を押し倒すとかするなら綾小路くん、坂柳さんにしかないでしょ——もしくは完全に骨抜きにした娘とかかな。」

どちらにしても無理矢理なんて坂柳さんしかしない——そうしてでも頼りたい人なんて他にいないんだから」

「榎田……それは——」

「ちなみに嬰兒くんが、つてのは通じないよ——それは興味でしょ、そして自分の思うように使いたいって好奇心」

榎田は笑みを消して、暗い輝きを宿した目を向ける。

「あの化け物を飼い馴らして何したいの？」

「オレの邪魔になるのを排除したいだけだ」

「なら私が邪魔になるなら今直ぐに排除するの？」

「邪魔になるならな」

「つてことは、今は邪魔じゃないってことだよな——ねえ、改めて協力しない。私が堀北の代わりに立ってAクラスを目指す。その上で綾小路くんの意向に沿って動くから——そっちの方が願ったりじゃない？」

「オレがお前を裏切るとは思わないのか？」

「その時は速攻で逃げるよ——但し、色々な置き土産もつけてね」

「中学でやったことを再演すると——オレは兎も角、嬰兒なら上手く抑え込むことが出来るかもだぞ」

「出来ないよ」

即答で言い切った榎田に綾小路の好奇心が刺激された——そして、このことを見越した上で持ちかけたことも悟った。

「これから話すのは何割か贖罪も含んでる——綾小路くんを売ったことへのね」

「オレ的には今更どうでもいいがな」

「けど知りたいでしょ——牛井嬰兒でもどうにも出来ない『真実』を」
榎田の顔から完全に普段の優しさや柔らかさが消えた——いつかの夜に見た、あの時の顔だ。

「それが本当の榎田か——自分から見せたつてことは相当の覚悟を決めたか」

「決めさせたのは綾小路くんですよ。もう私たちには仲直りしたつて結果しか認められない——それに私だつてズルズルと怯えて暮らす

なんて嫌だよ」

結局のところ、櫛田も既に限界を向かえていたのだろう——退学するのか、安心して卒業できる保証を得るのか、自分の中で解を出したいとそんな意図を感じさせた。

「オレは堀北の退学は望んでいない——お前が上に立つ資質があったとしても、有効な武器を手放すメリットなんてない。」

そして今の堀北を更に高めるには櫛田桔梗の存在が不可欠だと思ってる——オレじゃなくて堀北と手を組む選択肢は無いか？」

「それが綾小路くんの要求なんだね——あいつが居なきや、突っぱねて消えて欲しいって思ったけど……私に十分なメリットを提示してくれるなら考えるよ。勿論、身の安全は保障して貰った上でね」

綾小路の中でメリットになるかは分からない——しかし櫛田には絶対の自信があった、嬰兒に対するカードになるかもしれないと己の中で納得させながら、自分の知らない未知への好奇心を抑えきれず迷いなく乗った。

「オレに出来る範囲でならって条件なら考える——事実として嬰兒に力で来られたら、どうしようもない」

「だから、そうならないように頑張ってるの——それでダメなら、まず私が逃げ延びるまでの時間稼ぎはして貰う、否が応でもね」
徹底掉尾に我が身が大事——普段の天使のような櫛田から全くかけ離れた姿に初めて人間らしさを見せた。

優しさなど微塵もない我欲にまみれた姿、あらゆる偽善を取っ払い本心を明かそうとしている。

「なんか、初めてお前って人間が理解できた気がするな——なんで普段は真逆の自分を演じてるのは益々解らなくなったがな。」

誰一人、本心を打ち明けることも出来なくて苦痛じゃないのか？愚痴を言うのだからって容易じゃないだろ？」

「そうだよね……綾小路くんみたいに大好きな娘さえ居ればいいってタイプには解らない気持ちだよな」

この発言には一切の含みを感じない——言葉通りにそう思ってい

るのが伝わって来る。

あの事故から何度となく味わって来たことだが、どうしても慣れることがなく綾小路は言葉を詰まらせてしまう——それでもやっこのことで絞り出す。

「……どうでもいい他人なんか認められて何が得られるんだ？」

「そんなの気持ちよさに決まってるじゃない。誰もかれもから求められて、頼りにされて、褒められて、チャホヤされて——堪らなく甘美で最高の瞬間じゃない。

特に私はその欲求が強くてね——誰にも真似できない、自分だけの一番でなきや満足できないの」

「それが優しい榎田ってキャラによるブランドか」

「他にも方法はって顔だね。そりや、私だって最初の内は頑張ったよ——でも直ぐに限界を知った、勉強でもスポーツでも上が居たし、可愛さに関してもそう。

誰かの『信頼』を数多く得るのが、大勢に好きになつて貰うのが辿り着いた結論——その果てにその人が抱える『秘密』を打ち明けた時なんか、ただの羨望なんかよりも代えがたい美酒なの」

榎田の顔は語っていくにつれ歓喜が表れ、うっとりしたものになつていく——ただそれも一瞬だった。

「でもそれも嘘の上に成り立ってたものだった——崩れるのは本当に一瞬だったよ」

「中学の事件に繋がる訳だ——ミスして本性がバレたか？」

「まあね。綾小路くんの言う通り、私には本心を打ち明けられる人が居ない——だからブログでストレスぶちまけてた。

私だって分からないよう注意してたつもりだったけど、偶然クラスメイトが見つけちゃってね——内容から私だって気付かれて、あとはもうぐちゃぐちゃ」

「クラス全員を敵に回したって訳か」

「勝手だよな。こっちは散々我慢して付き合ってた助けをあげてたのに、あっさり手のひら返して——生涯で三番目に身の危険を感じた瞬間だったよ」

更に上の二つの恐怖は言うまでもない——ただその二つは元凶である嬰兒の気まぐれで事なきを得たが、三番目に関してはどう凌いだのか。

五体満足の身体、極限状態でも正気を保っていられる精神性——榊田自身に何かされたとは見受けられない。

何より崩壊したのはクラスであり、何処まで行っても普通の女子である榊田がどうやったのか。

(皆目見当が付かない——それが嬰兒でもどうにも出来ないと言いつ切るなら、どんな手段が?)

いよいよ話の核心がと綾小路の目に好奇が宿る——それを見た榊田は勝ち誇ったような余裕を浮かべる。

「話を続けてもいいけど、それでもタダで言うのは良くないんじゃないかな?」

「口約束でいいなら結んでもいいが、それじゃ駄目だよな。何をしたい?」

「そんなに身構えなくてもいいよ——牛井嬰兒について何処まで調べたのか、ひとつだけ教えて。具体的には私を殺そうとした能力以外に危険なのがあるのかどうか——何かまでは綾小路くんの任意でいいよ」

嬰兒の異能が複数あること、更に綾小路が調べ上げていることが前提の問い——確実に試されている。はぐらかすか、適当に答えるか、はたまた嘘だと判断されれば、手を組む価値は無いと榊田は話を切り上げる。

そして綾小路とはどうしても仲直り出来ないと、誠意を見せたのに嘘で返されたと「端的な事実」を以て悪者に仕立て上げて綾小路の居場所を無くしにかかるだろう。

綾小路は選択肢が無いことを悟り、榊田の要求する内容に沿ったものを思い浮かべ、その中で自分が一番驚いた異能を話すことにした。

酔った勢いで〇〇

「地面が塵になった……例えじゃないよね？」

「文字通りの意味でだ」

綾小路は拳を出し身振り手振りを以て説明する。

「こう、嬰兒の拳が地面に当たった瞬間にその部分から数センチ四方が塵になって宙を舞った——あれを我が身に受けてたらと思うと今でもゾツとするな」

「それは……本当にごめん。………私の所為だよ、改めて謝るよ」
より鮮明に想像できたのか、櫛田の顔は真っ青にして深々と頭を下げた。

「謝罪はもう要らん——今となつては嬉しい誤算だ、それよりも」
「その嬰兒くんでも対応できない私の武器だよ。分かってる、ちゃんと話すよ」

頭を上げた櫛田からは顔色の青さは残っている——少し落ち着くまで待った方がと綾小路は気を遣おうとも思ったが、

（余裕を取り戻して更に先延ばしにされたら面倒だし——今の状態の方がいいか）

とより鮮度の高い情報を求めて無言で待つ。

「結論から言うると私は『真実』を使った——クラスメイト全員の秘密をぶちまけたんだよ。」

誰が誰を嫌いか、心の底ではどう思ってたのか。信頼を積み重ねて得た究極の武器しんじつをね」

「確かにそれも想像を超えた強力な武器だな——櫛田の自信も納得だ」

「効果も折り紙付きだよ——なにせ、私に向けられた敵意はそっくり憎い相手同士に向かった。私が今こうして普通にされてるのが何よりの証拠でしょ」

自慢する訳でもなく淡々と語っているが、ひと言ひと言に言いよう

のない重みがあった——その裏にあるのは？クラスを崩壊させてでも生き延びて見せるという執念にも似たものを感じさせる。

「まだ半年程度なのに既にクラスを壊せるだけの『真実』を握ってるのか？」

「まさか、精々数人だよ。いざって時は目くらましにもならない——それでも私が持つてる武器はいくら嬰兒くんでもどうにもできないでしょ」

本人のみの『真実』——確かにそれは何者であろうとも手を付けられない。

常識的に考えれば……。

綾小路の脳裏には嬰兒の言っていた台詞と船上試験最終日に椎名と話した内容が思い出されていた。

「……え、なに？……そんなことにまで手が出せるって言うの？そんなのホントに神様じゃん……いくら非常識な化け物だからって……マジ？」

綾小路の様子から絶対だと思っていた自信が揺らぎ、櫛田は恐る恐る訊く——綾小路は重苦しく口を開いて言った。

「嬰兒は以前『俺ではどんな願いでもは無理だ』と、オレに言った。

そしてこれは又聞きしたことだが『どんな願いでも叶うなら、嬰兒は一之瀬に似てる知り合いを生き返らせたい』そうだ」

「ってことは出来るのが居るってこと？まさか普段から神様がとか言ってるけど……ホントに居るってこと？」

「流石にそこまでは嬰兒に訊くしかないな——機嫌が良ければ、あつさり教えてくれるかも知れんぞ」

「ハハハハ……心の準備が出来たらね。今はとてもそんな気分にはなれないよ」

櫛田は予想外を二回りは上回る結論にドン引きを通り越して唾然としてしまう。

「……私、やつぱり逃げようかな。ねえ、綾小路くんもそうしない？坂柳さんも掻っ攫うなりしてさ——協力するから。あいつの側に居たらホントに命が無いかも知れないよっ」

冷や汗を浮かべながらの提案に綾小路も直ぐには返答できなかった。

この学校を出たところで行き場などないから論外である——と自分一人なら何も迷うことなどなかったが、櫛田の指摘した彼女にまで危険が及ぶ可能性とそれに対して守ることなど出来ない現実を考え込んでしまう。

(……ってなんでオレは有栖の心配なんかしてるんだ？あいつは嬰兒を暴く為の道具でしかないだろ)

と思考を強制的に中断する。

「櫛田。懸念は尤もだが、それは出来ない相談だ——オレにはどうしても叶えたい願いがあつた。命を懸けることになるのは嫌と言うほど分からされたし、その覚悟もとつくに出来てる」

「大好きな娘よりも大事ななの？滅茶苦茶な葛藤に無理してない？」

櫛田は見たまま指摘し、綾小路の心を揺さぶろうと言う意図もなく、純粹に怪訝な顔をする。

「普通なら見損なうとかだけど——なんとなく、そんなのとも違う気もするんだよね。」

叶えたい願いつつのに坂柳さんも入ってるの？いつも言ってるのは、ただのカムフラージュだつて思つてたけど、マジで彼女の——
——!?!

好奇心に刺激されて踏み込んで来たが、言い終わる前に腕を掴まれ引き寄せられた——そして櫛田の眼前には自分以上に暗い輝きを宿した目の綾小路の顔があつた。

「それ以上の詮索は本気で怒るぞ」

そこから三秒もない沈黙があつたが、その経過は時間の流れが狂つたと思うほどに長かつた。

「ごめん」

櫛田が素直にそう言うのと、あつさりど解放される——そこからの間は普通に短く過ぎ、気を取り直した櫛田が口を開く。

「なんだか喧嘩したつてのが、ホントになつちやつたね」

それも坂柳有栖のことを弄つて……この思いもよらない展開は綾

小路も同様であり無言のままだ。

ただ櫛田の中では何かがストンと落ちた。

「綾小路くん、改めてごめん——そして約束する、もう坂柳さんのことは一切何も言わない。これで名目上の事は決着つてことで駄目かな？」

「構わない——ただ本題の方はどうするつもりだ？」

「堀北に関してはちよつと保留かな——嬰兒くんとの問題を先に片付けなきやでしょ」

「あいつ自身は問題だとも思っていないと思うがな——仮にあいつが命を保証するって言っても上から圧力でも掛ければ、どうなるかも分からないぞ」

「そんなことは分かっているよ——寧ろ今はその上について興味が出てきちゃった」

「命が大事じゃなかったのか？」

「そうだけど——それを掛けるに値するのは、他ならぬ綾小路くんが教えてくれたじゃん」

「どうやら櫛田にも綾小路と似たような欲が芽生えたようだ——怯えていた態度が完全に一変した。」

「私は私が一番じゃなきゃ気が済まない。都合の悪いことは許せない。」

その考えは変わらない——中でも一番目障りだったのが嬰兒くんだったけど、凄さは認めてた、異常さも含めてね。

あんなに凄くてももつと上があるなんて、気になるに決まってるじゃん——増してや本当に何でも願いが叶うなら」

「ついさつき、そんな気分じゃないと言わなかったか？」

「繰り返すけど、綾小路くんが心を決めさせてくれたんだよ——これに関してはありがとうって言うよ」

満面の笑みでの台詞は可愛らしいの一言であり、普通の男子なら顔を赤くして見惚れること間違いなさだろう——勿論、例外はある。

そのことは櫛田も十二分に分かっている——変わらない態度のままの綾小路に益々笑みを深める。

その仕草の不可解さに綾小路は訊く。

「なんだ？」

「別に——まれに出会えるパターンに酔ってるだけ」

優しい自分を演じる為にどんな相手でも悩みを共有して来た櫛田——大半は聞きたくもなく、時には反吐の出るようなものまで打ち明けられてストレスにさらされる日々だったが、良い結果が全くなかった訳ではない。

中には恋心を成就させるなど報われたと思えることも少なからずあった。

綾小路と坂柳は更に輪を掛けて甘い結果になりそうだと、思春期の女子高生らしく愉快な心地だった。

「酔ったついでさ、嬰兒くんも混じって話さない？ 勿論、綾小路くんが壁になって貰うのが前提で」

「少し分かって来たからって調子に乗ってないか——気がおかしくなってるようにも見えるぞ」

「だから、今は酔っぱらっちゃってんだよ——そして私だって幸せになりたいの。その欲が更に深くなっちゃったんだよ——綾小路くんの所為でね、責任取ってよね」

「……………」

誰かが聴いていたら間違いなく誤解される台詞——綾小路は今ほど二人きりの状況で良かったと噛みしめる。

そして結果的には自分の考えていた方向に流れて行ったが、何処か釈然としない気持ちに心が引つ掛かりを覚えてもいた。

「……………さっきの教室の様子からして今直ぐは無理だろうから、嬰兒にはそれとなく時間が作れないか訊いてみる」

「うん。それでいいよ——勉強会に関してはどうするか、もう少し考えさせて。結果は自分で言うから」

この場での話はここまでと、櫛田はスッキリした顔をして帰っていく——それを見送りながら、綾小路は何か分からない奇妙な予感を感じるのだった。

ペーパーシャツフルに向けて全ては順調にいつている。

今日も今日とて敵情視察として一之瀬と話すのもその一環だ——
断じて下心などない、断じてな。

「やつほー、ゆっくり話すのも久しぶりだね」

「俺が言うのもなんだが、そこまでフレンドリーでいいのか？一応、敵
同士だろ今回は」

「安心しなよ。取引とか引き抜きとかの話はするつもりはないから」

「じゃ、何しに来たんだ——態々待ち構えて偶然鉢合わせたなんて面
白くもない冗談は言わないよな」

「もう連れなないなあ——ただ友達と話したいのに理由なんて居る？」

「少なくとも今この時は」

ついさつきお前が口にしたスパイやスカウトだと勘繰られるだろ
うが……ただでさえ、可笑しな噂がたってたんだ。またぶり返したら
………まあ、俺が困る事は無いか。

「それとも急がなきゃいけない予定があるの？」

そんな心情を目敏く見切ったのか、突っ込んだことを訊いてきた——
それが正解だったりするから、また性質が悪い。

誰にも知られる訳にはいかないからな。

言い淀んでると一之瀬は怪訝と言うか意外だとも言うような顔
を向けて来た。

「え、なに——本当に予定があるの？聴いてたのとは違うな」

「聞いてた？」

「そう。クラスの勉強会にも出ないで授業が終わったら、さっさと
帰っちゃうって」

一体どこから聞きつけたんだか、いやそれは重要じゃない。問題は
それがどう一之瀬が会いに来た理由と繋がるかだ。

まさか、一之瀬にも見えない力が働いたか？

いや、こいつの性格からすれば寧ろ突っぱねて真っ先に俺に言い
来そうなもの——とそんな甘い期待が持てるような輩でもない。

やはり色々としやばり過ぎたか——こいつを警戒対象に入れなきゃいけないのは個人的には嫌なんだがなあ。

「もしかしてだけど、また何かしら我慢しなきゃいけないのが増えたの？」

どうやら杞憂だったようだ敵情視察だと思いを引き締めたのがバカいみたいだ——本当にお人好しだな、『申』には及ばないけど。

「ちよつと、折角心配してるのに何か失礼なこと考えてない？」

目敏いな——しかし質問攻めばかりは、ちよつと困るからここは誠実に。

「それは素直に感謝するけど、なんとも大変そうな生き方だなと思つてな」

「友達が困ってるなら助けるのは当たり前だよ——私に出来ることなら全部やるつもり」

即答するか——立派だとは思うが、同時に危うさも感じるな。

「一之瀬、話を戻すが今は試験前で俺たちは戦う者同士だ。敵に対して情けなど掛けてる余裕なんてあるのか？」

「それとこれとは話が別だよ——試験においては正々堂々と勝つつもりだよ、？クラスには勿論のこと、Aクラスにもね」

「それは失礼した。そこまで綺麗事を貫けるとは正直思ってた——称賛に値する姿勢だ」

「にやははは……それはちよつと言い過ぎだよ。私はそんな大それた人間じゃないし」

ここに来て初めて一之瀬が揺らいだ——当然、俺はもつと凄い奴を知っていると続けるつもりだったのに。

いや寧ろそれを先に言うべきだったか？

落ち着くどころか、どんどん不安定になって来てる一之瀬を見るにその思いが強くなる——全く変な所で後悔してしまう、痛恨の不覚だ。

「一之瀬、予定を開けてあるなら少しだけ待って貰えないか？俺の方は都合をつけるから話をしよう。と言うかお前も聞きたいって言ったのをすっかり忘れてたし、俺としても——」

「ああ、そんな風な気遣いは大丈夫だよ。それに私もこの後で千尋ちゃんたちと勉強会の予定だから——話は試験が終わったあとにしよう、じゃあね」

言い終わる前に逃げるように行ってしまった——想像以上に深い心の傷に障つちまったかな、こりや。

うくん、『申』の話以外にも埋め合わせを考えておかなきゃだな。

日にちは過ぎていき、それぞれが試験日に向けて勤しんでいる——そのひとつ、綾小路グループと軽井沢グループの合同勉強会も回数を重ね、ケヤキモールのカフェの一角に集まっていた。

男女の比率が合っておらず、必然的に多い方の要望がくみ取られた結果だった。

「なあ、やっぱりもつと静かな所にしないか？」

幸村が落ち着かない様子で提案して来た——ただこれは更に自身の首を絞めることになった。

「えー、賑やかな方が楽しくやれるじゃん」

軽井沢が軽薄に否定すると長谷部も同感だと言わんばかりに肯いた。

「そうそう、こっちの方がやり易いって——みやっちもそう思うでしょ」

「そうだな——静かで張り詰めた空気は弓道だけで十分だ」

「オレも特に依存は無いが、どうしても嫌か？」

同グループにして同じ男子からもの意見にやむなく折れるしかない幸村——佐倉だけが唯一同情の目を向けてこられ、益々みじめな思いを重ねていく。

「なら今日から追い込みに入るから、しつかりやれよ」

意地なのか、用意したノートにはびっしりと気合の入った課題が並んでいた。

「うわー、ゆきむー、厳しー」

「マジで容赦ねえなあ、啓誠」

「いつも言ってるだろ、まず出来ると思ってるやってみろ」

長谷部の完全に棒読みな感想に三宅も苦々しい顔だ——しかし幸村も慣れたものなのか、淡々と返す。

伊達にグループを作っていない——テスト勉強などは集まってやるし、その際に苦手科目などは把握している。

中でも長谷部と三宅は揃って文系が苦手であり、同じような傾向でもある為に改善に対する熱が違う。

一方で軽井沢グループの勉強を見てる綾小路は、より淡々としたものだった。

「いや、綾小路くんって思ってた以上に指導役が板についてるね」

「そうだね。どう聞いていいのかがさつと入って来るって言うか」

松下と篠原が賞賛を送る。

「そこはオレじゃなくて啓誠のお陰だな——あいつが作ってくれたチェック問題のお陰で何が苦手なのかが把握できた」

幸村を功労者として建て、踏み込んでくるのをかわす——すると今度は別の角度からの踏み込みが来た。

「でもさ、今回もAクラスとは戦わないんだから一緒に勉強したかったなあ。綾小路くんもそう思わない？」

訊いてきた佐藤の目は明らかに別のことを期待しており、その見え見えの好奇心には辟易してしまう。

「有栖は一人で問題作りするから忙しいそうだ——すまんが期待には応えられない」

ただこの手のも何度となくあったので、間髪入れずにばつさり切ってしまう——恋バナをまだ発展させたかったと不満を募らせようが構わない。

他人の着になどされて喜ぶ趣味は持ち合わせていない——この点に関しては嬰兒への恨みが晴れることがない。

そんな不穏な空気を醸し出しそうなのを宥めるのも決まっていたりもした。

「でも試験が終わったら、いつも通りだよね——冬休みに向けて新し

い衣装合わせとかもしたいって話してたもんね」

佐倉が目をキラキラさせながら言うとう当然のように喰い付く女子高生たち。

「へえ、そうなんだ——私も一緒に行っちゃ駄目かな？」

「て言うかさ、綾小路くんの方もね」

「ああ、ちゃんとしたタキシードとか」

「その手の提案とかもやっぱり沢山あるよね」

「こら、そこまでにしとけ——凄く目立ってるぞ」

幸村の指摘通りに店中の客や店員までもがニヤニヤしながら聞き耳を立てており、必然的に話題の中心である綾小路に注目が集まってしまう。

「……勉強の邪魔になりそうだし、啓誠の言う通り場所を移すか」

「うくん、どこ行っても同じだと思っけどね」

長谷部の言う通りだと皆が思うが、綾小路が席を離れたいと言うのも分からない訳ではなく、そこに軽井沢が提案した。

「じゃあさ、カラオケに行かない——あそこだったら騒いだって問題ないし」

「お、ナイスアイデア」

「私も賛成」

賛同の声に皆も同意し、席を立つて行く——その様子を残念そうに見る目もあったが、自分たちもまた試験前と言うことを解っており、それ以上のものは無かった。

あくまで周りからは……。

「ねえ、今度さ気分転換に買い物でも行かない？本格的に冬物だつて要るし」

佐藤の全員へのように見えて、しっかりと綾小路を狙う仕草は——中々に好意的に受け取られた。

「リフレッシュ目的なら悪くないな——と言っても俺はお洒落とか分からないから役に立てそうもないが」

さっきの意趣返しなのか幸村も不敵な顔で賛同しており、

「買い物か——なんだかちよつと懐かしいね。清隆くん」

一方で佐倉は裏表なく懐かしみ、屈託のない笑みを浮かべて来る。

「あー、確かに。あれからもう随分と経つよね」

「まだ半年も経ってないだろ」

長谷部の含みがありまくる発言に三宅が調子よく突っ込んでくる

——更にそのまま話が広がっていく。

「なになに、興味あるな」

「うん、私も」

「出来れば聞かせて貰いたいなあ」

「坂柳さんのことだよ、この際だから話しちやいなよ」

取り巻きの女子たちが目を輝かせており、軽井沢が上から目線で言った。

「……大した話じゃない。有栖にプレゼント買うのにアドバイスが欲しかったから佐倉に頼んだだけだ」

「へえ、坂柳さんってもう誕生日過ぎたんだ——少し残念な気もするね」

「ううん。そうじゃないよ、松下さん——坂柳さんの誕生日は三月だよ。」

あの時の再会を祝して……当時はまだ会いに行くのもゴキチなくてさ」

佐倉のウキウキと語る姿は余程いい思い出だと物語っており、長谷部を始めグループメンバーも笑顔だ。綾小路を除いて……そのことがより女子たちを刺激する。

「確かに思い返せば、あの時は純情って感じだったよね」

「池くんじゃないけど、リアルでこんなの観れるなんてラッキーだよね」

「篠原さん——もしかして池くんのことを？」

「何言いだすのよ！そういう松下さんはどうな訳?！」

より自然かついい感じで話題が綾小路から逸れた——そして追及を受けた松下は意味深な顔を今度は軽井沢に向けてる。

「私はもっと頼りがいのある大人なのがいいかな——そういう意味じゃ、やっぱり嬰兒くんだけだ。」

平田くんみたいな頼れる爽やかなのも捨てがたいよね——瞬く間にゲットした軽井沢さんにはホント恐れ入るよ」

「あー、確かに」

「クラスで一番最初に誕生したカップルだもんね」

「いやー、それほどもあるかな」

軽井沢は照れるような仕草ながらも自慢気であり、そのまま調子に乗る様に言う。

「やっぱ、こういうのは積極的に行かないとね——もたもたしてたら他に持って行かれちゃうし」

「そうだよ。気になる人が居るならガンガン行かなきゃだよ」

佐藤はあっさりとそれに感化されてしまう。

「確かにそれは見習わなきゃいけないかな。ね、愛里」

「うう……」

綾小路グループの女子たちにも広がっていった——なし崩しに蚊帳の外に置かれてしまった男子たち、その一人である綾小路は内心で安堵していた。

（上手いこと注目が軽井沢に移ってくれたな——しかしこれは狙ってやったのか？）

さり気なく松下にも目を向けるが、恋バナで盛り上がる女子たちと自然に接している姿からは、どうにも判断が付かない。

そんな疑念を持ちながらも目的地に着き——試験勉強もそこそこに折角だから歌おうとカラオケを満喫していったのだった。

今日は久々に予定が無いから何をしようか——長々と続いた依頼もひと区切りついた。

まだ少し根気が居るし休める時は休むべきだ……いや念の為にひと言、伝えた方がいい奴が居たな。

空を見上げると数羽のカラスが飛んでいた——雑食だし、丁度いい

か。『鵜の目鷹の目』を使うのも久しぶりだ。

手分けさせれば結構すんなりと見つかると思ったが、中々に手こずる——寮の方にでもいるのか？

視覚共有を切ろうと思ったが見つけた——しかし何だってあんな所に一人で？

連れが居るなら先回りして待つてようかとも思ったが、一人ならこっちから行くか。歩くこと十数分——普通なら別の所に行つているだろうが、相手が相手だからのんびり行つても行き違いになることもない。

「あら珍しいところで会いますね」

相変わらぬ上品な笑みなことだな——坂柳よ。

「それを言うなら、そつちこそ一人で来るような所か？」

俺たちが今いるのは紳士服店の前——女子である坂柳が一人でいる方が変であろうに。

「最近直帰して誰にも会わないようにしていたようすし……用事はもう済んだのですか？」

情報は筒抜けか——それともブラフか？どつちにしてもあまり機嫌がいいとは言えないようだ。

やっぱ迷惑かけたかな？

「ちようどその話がしたくてな——もし杞憂なら独り言でも思つてくれ」

「なるべく手短にお願いします」

「じゃ、結論から。次の試験にCを狙ったようだが、簡単に潰せると高を括つたんなら改めた方がいい」

「……………忠告どうも。それでは」

若干目を細めて、そのまま行つてしまう——何だか、らしくないこととしてみたいだし、少し気になったんだが、無駄な会話なく切り上げる辺り確率は上がったか。

もつともそう思わせるだけつてのも考えられるが、そこは重要じゃない——ペーパーシャッフルにおいて坂柳がどういうつもりなのかは定かじやないが、Cを潰すのかそれ以外があるにしても現状を正

確に認識させる必要性がある。

普通に考えれば前者だが……そうでない場合は可笑しなことになりかねんからな。

ともあれ伝えるべきは伝えた——あとは内側だな。

ずっと来ていた綾小路からの話し合いの誘い——端末を取り出して「時間の都合が付いたから、いつでもOKだ」と綴り送信する。

直ぐに返事が来るかと思っただが、生憎とそうはならない。仕方ない部屋に戻るとするか。

しかしそれからいくら待っても返信は無い。勉強会が長引いたのかと思っただが、いくら何でも遅すぎる——他に用事でもあるのか？

思いつく心当たりと言えば、さっきの坂柳がまず浮かぶ——紳士服店に一人でいるなんて普通に考えてプレゼントでも見繕ったか。

端末を取り出してチャットアプリから綾小路の欄を見ると誕生日が10月20日とあった——つまり今日か。じゃ、今頃は二人きりでケーキを食べてるとかかな？

それは邪魔しちや悪いな。なら今日もう寝るとするか。

事態は斜め上をいくもの。

朝になると漸く返信が来た——送った時刻はついさつき、やっぱり昨夜はお楽しみだったか？

そこは今日の放課後にと指定して来たからおいおい聞き出すとしよう。

了承すると送り、朝の準備を整えて教室に向かう——ただいつも通りとは違うことが起こった。

「おはよう、嬰兒くん」

櫛田が元気いっぱい笑顔で挨拶して来た——あの日以来、俺のことは極力避けてたのに。

一体、どういう風の吹き回しだ？

しかも事はそれだけじゃ終わらなかった。

「あのさ、よかつたら一緒に行かない？」

「え、いいのか？」

こんなことは初めてだから思わず訊き返してしまった。

「うん。勿論だよ」

対して櫛田は満面の笑みのままで肯いた。

まあ、断る理由もないからとそのまま一緒に教室まで行く——道中に何かしらあるかとも思ったが何もなく普通に歩いてただけ。

本当に訳が分からないな。

その日の授業も滞りなく終わり放課後となった。各々が勉強会に赴く中で違う行動を取るのが数人——人通りの無い海沿いの道に集まった。

「さながら吊し上げでも喰らうシチュエーションだな」

「嬰兒くんさ、せめて告白とかロマンチックなのとかはないの？」

「ちなみにその場合ならオレは櫛田と嬰兒のどっちの仲介役だろうな」

他愛のない会話を始めるが、日が沈み暗くなってくるにつれてあの日と同じ雰囲気になっていくのを感じていた。

「また妙な場所を指定するな——誰にも聞かれないなら心配などせんでいいのに」

嬰兒の言に櫛田は若干肩を震わせ、綾小路は冷ややかな目で周囲を見て言う。

「ここで始まった以上は、ここで蹴りを付けるのがいいと櫛田のリクエストでな——オレも意外といえば意外だったよ」

「なんと、そうなのか？」

「うん。ケジメをつけるならこの場所かなって」

そう言いながらも櫛田には冷や汗が見て取れ、まだ無理があるようだ——それでも嬰兒からは目を逸らさずに続ける。

「今日の話の結果次第で私は退学することも考えてる——だから命は勘弁して欲しい。まずそれを約束してくれない」

「そうしないと話が進まないなら別にいいぞ——この場限りならな」
「十分だよ」

櫛田は綾小路を視界に居れると肯き、逃げる為の協定が結ばれてることを察せさせる。

「なるほど、どうやら相当な覚悟を持って来たようだな。で、あの日見たことを口止めするのが望みだろうが、その為俺に退学しろとか言うなら——」

「言う訳ないでしょー!」

ぶり返した恐怖が限界を超えたか興奮して叫ぶ櫛田——それも直ぐに収まり呼吸を整えて改めて嬰兒を見る。

その目はあらゆるものを取り払った暗く濁ったものだった。

「その事に関しては正直、もうどうでもよくなってきてる——嬰兒くんが居る限り、気持ち良さなんかに酔えないからね」

自らが最も求めていた承認欲求も命の危機を前にしてはそれどころではない——全ては安心の上にごそ成り立つもの。

それ故に欲するものを根底から破壊する過去を知る堀北も退学にしたかった——嬰兒が異常なれども多くに縛られ、そう易々と動くことが出来ない存在だと知った時は障らずに放置しておけば問題ないと希望に心が躍りもした。

だが甘かった——牛井嬰兒には反骨精神があり、自分の命を粗末に扱うことにもそこまで躊躇いがないと体育祭にCの異常さを見て再び恐怖に襲われた。

否、当時はより大きな恐怖が起きると精神が生涯で極限まで追い詰められた——異常に能力が上がったCの相手をしていた時の愉しそうな顔にそう思わせる論拠を見た気がした。

「嬰兒くんさ。無人島の時みたい自由にやりたいたいんだよね？でもやったら思わぬ特例がわんさか出た——もう何もするなって言うみたい。それが嫌なんですよ？」

櫛田が出した結論——これは綾小路も同様であり、牛井嬰兒に対して考察している者たちも二人ほど明確でないが辿り着いているものだ。

どう答えるのか——櫛田と綾小路は息を呑み緊張しながら待つ。

「お前ら、それ本気で言ってるのか？」

失望交じりのニュアンスに櫛田は慌てることなく冷静に返す。

「ははは。じゃ、やっぱり高円寺くんのも嬰兒くんの仕業だったんだ」「いいのか、そんなことオレたちに喋っても」

無人島で連れ戻された原因は大凡の察しがついていたが、そこには触れないでおこうと言う二人なりの配慮だった——これはひよつとしたら異能を知る者だからこそその信用かとも思ったが、

「そんな疑いが掛けられての処置だ——これがどういう意味かまで解説せにやならんか？」

「大ぴらに被害が出たら、関係なくともしよつ引かれる——下手すりゃ、こつちも巻き添えにされるか」

「でもそれって表向きには被害が無きや——疑いを掛けることが出来なきやってことでもあるんじゃない？」

嬰兒の言いたいことを瞬時に理解し且つ、興味が出る方向へと誘つ

て来る——ここで漸くと嬰兒の顔にも面白さが出て来た。

「櫛田からそんな台詞が出るとはな——どういう心境の変化だ？」

「どんな約束したって嬰兒くん自身に決定権が無いんじゃないや無駄でしょ」

異常さに怯えながらも見えて来た背景——そして、先の綾小路との会話から見出した新たな希望を思い出しながら櫛田は意を決した。

「それを持つてる人たちは嬰兒くんよりも凄いことが出来るんだよね？」

「だとしてお前らには縁のない話だぞ」

「だったら、その縁を作って欲しい」

思わぬ申し出に一瞬、言葉に詰まる嬰兒——そして横で見っていた綾小路は正面から申し出たことに感心しながらも出遅れたとも言おうような複雑な気分だった。

（あの時から考えなかった訳じゃない——ただ命を懸けることを本気で決意するとはな）

「……そうまでして何を願う？」

持ち直した嬰兒が問う——この手の会話は初めてではない為、余裕があったが直ぐに斜め上の事態になった。

「そんなの叶えられる権利を得てから考えるよ。本当に何でも叶うんでしょ？」

聞き返された内容に含みが透けて見えた——ただその程度で動じるような男ではなく、あっさりとした口調で易々と返す。

「そうだよ。ただ繰り返し返すがお前には無理だ——何故ならそれを得るには俺よりもずっと強い戦士やっちを倒さなきゃいけないからな」

「随分とあっさりと白状するんだな」

綾小路の指摘——そのニュアンスは疑問よりも共感のようなものがあった。

言ったところで意味のない荒唐無稽な事情を抱えている者同士——されどお互いを知る由がない。だからこそ全てを暴き優位に立ちたいと好奇心が刺激させられる——この場に居るもう一人もまた。

「フフフフ。そっか、そっか——嬰兒くんよりも凄いのがそんなに

沢山居るんだあ。世の中って広いね。ね、綾小路くん」

「ああ、そのようだな」

心底愉快そうに言う櫛田に理解が追い付かないまでも綾小路は主張には同意であり、ぎこちなく肯いた。

「うん、分かった——嬰兒くんが何も決められないんじゃない、これ以上言ったって困らせちゃうよね。だからその話はもう言わない」

「ほう。なんとも聞き分けがいいな」

嬰兒はそう言ったがそれで話が終わるとは思ってもおらず。案の定、櫛田は心底愉快そうな顔で続けた。

「でも私は命が大事だし、欲しいものに妥協するのも嫌——だから、これからどうして行くかを決めたいよ」

「退学する気は無さそうだし、俺に絡むのを止めるって訳でも無さそうだな」

「せっかちだね——その前に確認させて、嬰兒くん。期末試験に関しては何かするつもりはないんだよね？」

「今回は学力向上の為に勉強するしかないからな」

「そう。何もクラスに協力する気もないみたいだけど、裏で何か助けになるようになってのものないの？あ、答えたくないなら別にいいよ」

「個人的な用件があるだけだと言っておく——クラスの有利にも不利にもなるようなことはしていない」

「じゃ、試験は形式通りに行って終わると見ていいんだよね？」

「他に動いてるのが居ないなら、そうなるな」

「そっか——じゃ、話すのは試験が終わるまで待つて貰えないかな？一緒に言いたい人が居るんだ。それには試験が終わるタイミングがベストなの——駄目かな？」

「いいよ。別に急ぐ訳じゃないし」

「ありがとう」

嬰兒の了承を得た櫛田は満足そうな顔で綾小路に向き直る。

「綾小路くん、堀北さん達の勉強会だけど、明日から積極的に参加するよ。勿論、要望通り指導役だね——ただ話をするのは同じく試験が終わるまで待つて貰うから、これでお役御免。今まで面倒掛けてゴメン

ね」

「そうか、それは何よりだが……ここでの事は結局どうするんだ？ 勿論、オレは言いふらす気は無いが」

「右に同じくな」

櫛田は二人に向かい、いつもクラスで見せている笑顔で言った。

「うん、信じるよ。二人のこと——それも含めてどうするかも今決めたから、気にしないでいいよ」

「じゃ、楽しみは後に取っておくってことでいいか？」

「そうして下さい——じゃ、また明日」

揚々と去って行く櫛田の背を見送りながら、嬰兒は釈然としないままに言う。

「これって仲直りしたでいいのか、それとも保留か、どっちなんだ？」「オレにも分からん——ただクラスにとっては良い方向に行ったんじゃないのか」

「うーん……そう思うことにすれば悪くない会合だったかな」

やはり釈然としないのが抜けきらず、綾小路としても何を言うべきかが分からないので、それ以上の会話もなく寮に戻った。

何事もなく日々が過ぎていく——何よりも結構なことだが、少々気味が悪くも感じるな。

あれから櫛田は以前の明るさ……いや前以上に明るくなって勉強会にも積極的になつてると聞いた。

「ねえ、櫛田さん。今度さ新作の映画が公開されるんだけど気晴らしに行かない？」

「いいよ。でもその前に今日、仮の試験問題作ったから、ちゃんとやってからね」

櫛田と仲良しの王が誘うと笑顔で肯いてる——その笑顔のまま続いた言葉に聴いてた殆どの奴らから冷や汗が出たな。

「う、うん。それは勿論だけど……なんだか、かなり厳し……張り切っ

てるね」

「厳しいでいいよ——でもそれも当然でしょ。本当に倒さなきゃいけないのはBクラスなんだから、そこに勝たなきゃCに勝ったって意味がない。ちなみに仮問題は堀北さんたちと一緒に作ったやつだから、しつかりとやってね」

堀北の奴も無言のまま意味深な、それでいて凄く嬉しそうな笑みで肯いてやがる——そして二人して俺にさり気なく視線を向けて来る。

何かしらのご褒美……じゃない好条件を引き出す気なのは分かるが、どうにもまだ認識がそれぞれズレてそうな気がするんだよな。

「ホントに凄い気合いの入りようだよね——櫛田さんってあんなキアラだっけ？」

軽井沢がさり気なく俺に話しかけて来た——普通のように見せてるが若干の焦りが垣間見える。

「クラスの中心があのだ二人にシフトしていくのがそんなに不満か」

「そ、そう言う訳じゃないし——た、ただあたしは付いていけないのも出て来るんじゃないかって——」

ズバリ言っただけなら目に見えて慌てて取って付けたようなのを並べる——なんか胡散臭いな。

ただ丸つきり嘘だとも思えず、それなりの本心も混じってるようにも感じる——何がしたいのかは分からんが、兎に角目立つから他所でやって貰えんか。

「あはは、軽井沢さんの言いたいことも分かるけど、こればかりは勉強するしか——頑張るしかないから。厳しくても心を鬼にするのも必要だと思おうの」

「その通りよ——増してや戦うべき相手がBクラスなら尚更正々堂々とやるしかないわ」

櫛田と堀北の物凄く息の合った連携に軽井沢だけでなくクラス中が圧倒されるのが分かる——もうちょっと陽気な感じのことなら拍手でもありそうだ。

「わ、分かっているけど……一応の目標はCとの差を縮めることですよ？」

「それで満足しちゃ駄目だよ。本当に倒さなきゃいけないのはAクラス——軽井沢さんだつて早く見たくないの、あの二人が戦うのを？」

「た、確かに……」

「ずっと言ってるもんな」

「イチヤイチャもいいけど……やっぱ見たいよな」

勢いを殺すことなく櫛田が更に巻き込んだ——この場に綾小路が居ないのが残念だな。

「あたしは櫛田さんがなんだかわ変わったみたいだなんて——嬰兒くんはどう思う？」

「変わったのかどうかは分からんが、少なくとも上を目指す気概が強くなったのは間違いないな」

問題は俺の迷惑な方向にあるかどうかだが……。

「当然よ」

釈然としない俺と違い、堀北は力強く肯いている——さながら生涯のパートナーとでも言うような様だ。

どうせなら、それがそのまま本当になって欲しいものだ——お前もそう思わないか、綾小路？

「……………」

「どうしたの、清隆くん？」

「いや、なんか——妙な感覚がな」

「清隆くん——ひよつとして坂柳さんに何かあったとか？」

「いや怖気とか悪寒とかの類じゃないぞ。愛理」

速攻で否定する綾小路に佐倉は困った顔になり、長谷部がやれやれと言うように話に加わって来る。

「いや、きよぽん——愛理は寂しいんじゃないかってことをね」

「それも違うだろ。これは何かしらの中毒が起こってるんじゃない」

「あり得るな。こんだけ疎遠になるのなんて夏の旅行以来だもんな」

幸村と三宅も面白おかしく分析され、綾小路としては面白くなかつ

たが……。

(……言い返したいと思えない。何故だ?)

と自身の不可解な感情が先走り無言になってしまう。

そして誕生日に届いた上等なニットセーターを思い出す——プレゼントを貰ったこともさることながら、服のブランドもセンスも分からないからか、シンプルなデザインでこれからの季節に合わせての暖かかそうでもあり、その時もまた不可解な感情に心が戸惑った。

「あー、きよぽん。やっぱり凶星?」

無言のままにいる事に長谷部がニヤニヤしながら訊いて来る——
他も同様の顔であり、心底面白そうだった。

「……有栖は心配するような事は何も無い——オレが気にしてるのは試験がどんな決着になるかだ」

「ゆきむー、どう思う?」

「前半は兎も角、後半は取って付けた言い訳だな」

これに負けじと三宅と佐倉も参戦してくる。

「けど坂柳のことを言い切るあたり、俺らの知らない所でこつそり会ってたりとか?」

「だったら水臭いよね——冬休みに二人きりになり辛いのは分かるけど」

面白そうに語りながらも冷静に要点を抑えてくる辺り性質が悪い——特に佐倉が指摘した二人きりになれないは、綾小路としては余り歓迎できない話題だ。

「そんな先のことなんか考えてない。第一にオレが考えても仕方ないことだ——なるようになるしかないだろう」

「もうダメだよ——坂柳さんは物凄く楽しみにしてるんだから」

半ば本気で諦めてるかのニュアンスに佐倉がいち早く反応する——恋する乙女を応援する乙女、そんなキャラが固まってきている。

次のごっこを最も楽しみにしているのは佐倉で間違いなく、この話題になると肯定的でも否定的でも積極的になる——これも嬰兒が巡り巡ってやったことなので、こういう点においては綾小路の心中で文句が込み上げてくる。

(どうしてこんな事になるんだ？なあ、嬰兒——あの時オレはそこま
で何かしたか？)

全ての元凶であったアクシデントを思い出し……不快さと同時に
胸の高鳴りが襲う。

最近は後者が勝ってきており——益々持つての不可解さに更に戸
惑う。

「もう清隆くん。照れちゃって——そう言うのは坂柳さんと一緒の時
でなきや」

その戸惑いを自分好みに解釈した佐倉が笑顔のまま言う——周り
も同じ顔で肯いている。

そんな佐倉たちを見ながら綾小路は思った。

(やはり人は見たいように見る生き物なんだな——こっちはまだいい
として、あっちの方はどうなることか？)

流石に慣れたのか持ち直しも早く、直ぐに肝心なことに思考を切り
替える——全ては試験が終わってから、良くも悪くも早くなって欲し
いと思う今日この頃だった。

長いようで短い日々が過ぎて今日から十二月、試験まであと三日
だ。

そして今日は問題提出の日——今回、試験には全く手を貸さなかつ
た俺が何故こんな場面に居るんだろうか？

「よう鈴音——こうして話すのも久しぶりだな」

不敵にそれでいて元気よく嗤う龍園——手にある茶封筒からする
と用件は同じか。

「偶々なのか、そうでないのか——どっちにしても嬰兒くんに来て
貰って正解だったわね」

言いながら俺を壁にするような位置に移動してくる——警戒する
のは尤もだが、これだけでいいんだよな？

「ククク——なんだ牛野郎に盗らせる気か？そんなことしても結果は変わらないと思うぜ」

その通りだが、胸張って言うことか？今回のような場合に。

「ええ、そうね。碌に勉強した様子の無い貴方たちなんて敵じゃないわ——私たちが倒さなきゃいけないのは、あくまで一之瀬さんたちだもの」

知りえた事実を基に強気に言う堀北——例えハツタリでも一切の油断はしないか、良い傾向だ。

これ以上の問答は無用と職員室まで足を進めていき、その横を龍園も歩く——傍から見ても仲良しとは映らず、戦いの場に赴く戦士の様だ。

これで本当にフェアが成り立ってたら盛り上がるんだがな……。

職員室前に着くと双方の担任を呼び、まず坂上先生がやって来たので龍園が封筒を渡す。

「それじゃ、後は頼むぜ」

「確かに受理した」

無駄のない遣り取りの後で入れ替わる様に茶柱先生が。

「持って来たようだな」

同じく手早く封筒を渡す堀北——龍園を警戒してても全く何も起きない。要するにこの場で鉢合わせたのも偶然だつてことかな。

「確かに受理した」

そう言って戻って行く茶柱先生と同時に堀北が言う。

「用件は済んだわ。帰りましょう」

「ところで鈴音。桔梗の奴は元気にしてるか？」

「なんであなたがそんなことを？それに馴れ馴れしいわよ」

そこに龍園が笑いながら訊いてきた——対して堀北は即答で返した、かなりの苛立ちを籠めて。

「おお、怖——そんなんじや嫌われてても無理ねえよな」

「質問の答えになってないわよ……ちなみにあの問題は櫛田さんも一緒に作成した物よ。私たちの間に問題なんてないわ」

「くっはははは——こりや傑作だ。何も知らねえんだな」

ああ、そう言うことか——龍園の意図が見えて来たな、それは綾小路も同様のようだ。

このまま聞かせていいのかと迷ってるのが分かる——ま、いいんじゃないかね。

俺は成り行きを見守ることにして、そんな俺の態度から綾小路も龍園と堀北の会話には無言のままにいる。

それとなく『地の善導』で辺りを探るが誰も聞き耳を立ててはいない——茶柱先生なら聞いているかなと思っただがな。

「なら教えてやる。船上試験の時に、桔梗からオメエを退学させたって相談されてな。色々と連んでやったのは楽しかったぜ——今はもう力不足で振られちゃったんだが、それでも気が変わったんなら一緒にやりてえもんだ」

この場に来て船上試験圧勝のからくりを暴露か。しかもそれが今でも続いているかも知れないというニュアンス——体育祭は兎も角、このパーパーシャツフルはって揺さぶりにはなるか。

「その話、何か信じるに足る証拠でもあるのかしら？」

「俺が一方的に言うのはフェアじゃねえから桔梗に直接聞いてみるよ——しらばっくれるなら、俺が後で証拠を届けてやる。そう言えば喋るんじゃないかねえか」

ああ、こりや確実にあるな——ここまで自信満々だと疑う余地が無い。

言いたいことを言って行ってしまおう龍園を見ながら堀北はジツと考えてる——さて何か飛び出して来るか、来ないままになるのか。

「……試験が終わったら榎田さんと話す場を設けるって約束、忘れてないわよね？」

「ああ」

「なら何も問題ないわね。行きましょう」

振り向きもしないで言う堀北に綾小路は肯定したが、どうにも嫌な感じが漂いなんとも不気味だ。

ただ反面、どんな思考展開がされてのか興味もあるな——この前の榎田も何だか想像の付かない結論を得たようだし、ホントどうなるも

んかな？

そうして迎えた期末テスト初日——教室に着くとこれまでは違う場面が見れた。

慌てながら問題を暗記したりする三バカも肅々と最後の確認に勤しんでる——この学校ならではのとも言えるな。

四月では考えられない……あの苛立ちが過去になった瞬間でもある。

と言うか、あの頃と比べたら俺も変わったかな。

「おはよ、嬰兒くん。いよいよ始まるね」

そうだが、声を掛けるべきは俺じゃないだろ——軽井沢。

「今回はかなり自信がありそうだな？」

ただ俺を気に掛けるのは分からないでもない——接触がかなり減ったから忘れがちだったが、擦り寄りたいつてのは健在のようだ。

「うん。問題傾向も幸村くんが予想してたし、合わせて綾小路くんにも鍛えられたからね」

ほう。今回は関わらないでいたが、漫然と勉強を積み重ねて来ただけじゃない——律義に教えてくれるのもそうだが、クラス全体が成長してると。

それは比例して俺もそれなりにやれることに繋がる——こいつの期待も高まつてる訳か。

「なら俺も頑張りに応えないとな——クラスメイトとして」

「期待してもいいよ——きつと嬰兒くんが望んでるようなことになるから」

少し欲しそうな言葉をやると満足したようで揚々と席に戻って行く——アピール成功とか思ったかな。

自信の程についても積み重ねた物の裏打ちがあるのは間違いない——だがそれは本来倒さなきやいけない相手も同じ、油断は出来ないぞ。

それに事と次第によつては波乱が起きる可能性も捨てきれない。パートナーである外村にも最後の一喝しとくかとも思ったが、あい

つにしても今回は余計なことか——いつになく真面目に真面目に取り組んでるし、あの調子なら大丈夫か。

俺も静かに待ち、予鈴が成った。

茶柱先生が入ってきて机上には筆記用具だけを残してあとはロツカーに——全員の準備が済み茶柱先生が口を開いた。

「これより期末テストを行う。一時限目は現代文だ」

そのまま一人一人の机に問題用紙を置いていく——配り終わると注意事項の伝達が始まる。

「試験時間は五十分。トイレや体調不良等どうしても我慢できない場合は挙手して申請しろ——それ以外は一切認めない」

伝え終わるとまた少し静かになったが直ぐにチャイムが鳴り、

「始め」

同時に茶柱先生の合図で一斉に問題用紙をひつ切り返す——難度は絶妙と言っている内容だな。

あの短期間でよくこれだけの物を作り出したものだ——本腰を入れて取り組めれば、ひっかけ問題なんかも検討して入れてくることも出来たかも知れない。

しかし今回その形跡は全くなさく、授業範囲内で難易度の高そうなのを片っ端から並べたって感じだ——Cクラスにも勉強の出来る奴はいるのは分かったが、その適正を十二分に発揮している。

これは何を褒めるべきか判断に迷うものだ。

されど現状では？クラスもそれは同じだ——Cの問題担当が金田だと予想して、作成すると予測した仮問題も回ってきた。

成果は上々と言える——ピンポイントでかなりの問題が出ていた。落ち着いてやれば勝てるかと確信した——何故ならクラスでは誰一人例外なくそうしてるから。

この一か月弱でどれだけの物を積み重ねてきたのかが窺い知れる——皆が頑張った結果を出そうとしてるなら、俺も応えなきや失礼だよな。

「よっしゃー！やっとな終わったー」

二日間に渡る期末テスト——特別試験ペーパーシャツフルが終わった。

多くがやり切った顔をしており、かなりの手応えを覚えたようだが全員とは言い難かったようだ。

「すまねえ、鈴音。前より点数取るつもりだったのに……確実に下がっちゃった」

心底申し訳なきそうにする須藤——ただ中間試験よりも平均点が下がったのは彼一人と言う訳でもなかった。

「俺も大丈夫かな？」

「結構難しいのもあったよね」

次々と不安を口にするのが表れるが、

「心配ない——お前たちの分もこっちがフォロー出来たと確信してる」

「そうだね。Cの作った問題も簡単じゃなかったけど、それでも自信がある——？クラスで退学者は出ない」

幸村と平田の成績優秀者が揃って宣言し、淀みを一気に払拭する。

「その通りよ——ペアで取るべき692点をあのテスト内容で大幅に上回ったなら上出来な部類よ」

最後に堀北が余裕を持ったニュアンスで言い切って締めた——ただ心なしか、彼女が上機嫌なのはそれだけではないようだ。

「櫛田さん。今後のことも含めて話したいと思うのだけれど、いいかしらっ。」

それは堀北鈴音にとって待ちに待った時だった——提示された条件を呑み、試験においても自信を含めて最善を尽くしたと言える状態であり、堀北の人生で最もテンションが上がっている。

（初めて目的を共にできる人が出来る——それがこんなに嬉しいものだなんてね）

僅かではあるが綾小路と坂柳の気持ちが分かったような——そん

な感想まで湧いてくるほどに嬉しさに満ちていた。

「うん、いいけど。ただ場所を移さない、嬰兒くんもその方がいいよね？」

「ああ、まあ……」

嬰兒にしては珍しく歯切れの悪い返事だ。

「なら早く行きましょう——ちょうど私も言いたいことがあるの」

連れだって教室を出る三人——ペーパーシャツフルを牽引して来た堀北と櫛田、今回は手を貸さなかった嬰兒。

普通に考えればひと悶着ありそうだが、嬰兒の特異性と体育祭終わりでのやり取りを考えれば、この後の展開——そしてこれからの展望には大いなる期待感が湧き上がる。

「嬰兒くんが言ってた堀北さんの信頼したい相手って」

「もう間違いなく櫛田ちゃんだろう——さっきの様子だと」

「ああ、今から握手してAクラスを、ってことだよな」

「ちえっ、水くせえな……そんなのここでやりやいいのに」

「ホント、ホント」

皆の前でやらないことに愚痴も出てきたが不満はなく、寧ろ楽しみが増えたと言った感じが蔓延する。

「みんな、浮かれてばかりはいられないよ——堀北さんも本気でAクラスを目指す為に腹を括って櫛田さんも認めた。嬰兒くんも力を出せるようになるなら、本番はこれからなんだから」

それを感じ取った平田は厳しい現実を突きつけることを言った——ただ、その声も表情も嬉しそうであり、クラスの中で一番期待しているのが分かる。

「なんだよ、平田——見せ場が少なくなるのがそんなにいいのか？」

「正直、肩の荷が下りたって気分かな——それに僕の出番は寧ろ増えると思うしね」

その最後の台詞に浮かれ気分の半分は飛び、全てはこれからである——そんな緊張感が湧き上がった。

ただクラスの空気に一切酔うことのない例外も居た。

(本当にそうだと良いんだがな……)

綾小路は盛り上がり、水を差すそうなので何も言わなかったが、どうにも奇妙な胸騒ぎがして仕方がなかった。

しかし直ぐにそんな気分は吹き飛んだ——端末が震え、あのアプリが起動していたからだ。

(ついに来たか……)

もつと人気のない所に行くと思っただけがな。

俺たちが今居るのは人通りの激しいケヤキモールのカフェ——テストが終わった打ち上げとあちらこちら盛り上がって、とても落ち着いて話をするような場所じゃない。何よりこの店は……。

「榊田さん、打ち上げも兼ねてならカラオケとかに——」

「そんなじゃない、こういう場所じゃなきゃダメなの」

他に行きたい堀北の提案をばっさり切りながら、しきりに時間と入り口を見ているのは他の『誰か』を待っているのが妥当だろうが、さて誰が来る？

「嬰兒くん。テストはどんな感じだった？ちなみに私は、平均80点はいけたと思ってるんだけど」

いつもの榊田らしくない肅々とした……いや、ぶっきらぼうな言い方……いかにも適当な話題をつて感じた。

「書き間違いとかがなきゃ問題ないかな。外村も大丈夫そうだし」

俺と組むことに胡坐をかかないよう最初に尻を叩いた甲斐もあつたな——テスト中の様子を窺う限り平均点はクリアしてるだろ。

「それは重畳ね——あの難度でそう言い切れるなら確実に勝てるわ」

堀北がしっかりと話に混ぜて来た——いい加減に自分の話を進めたくて仕方ないって感じか……。

気持ちは察するが、とつと進めていいものか判断に迷うんだよね

——今回は。

「Cクラス、勉強してる様子あんまりなかったもんね。精々、一夜漬けレベルかな——そうなるやっぱり退学するのも居たりするかな？」

「それは終わってみるまでは分からんדרו」

「あはは、先の事は神様でもなきや分からないよね」

櫛田と目の色と声のニュアンスが分かり易く変わった——この話題を振るのが最初から決めたか。

で、何がしたいのか、やつと教えてくれるか。

「これは独り言なんだけど、嬰兒くんが神様を信じてるのってき——
嬰兒くんの特例を出す偉い人たちより上が居ないから、つまり嬰兒くんの上に居るのって文字通り本当の世界のてっ辺に居る人たちって
ことでいいかな？」

「櫛田さん、あんまり詮索するのは——」

「ただの独り言だよ——何も答えなくていい」

そう言った櫛田の目には好奇心……いや欲望を隠そうともしていない——そこに丁度待つてのが来たみたいで視線を追うと、

「……ああ、なんだか間の悪い時に来ちゃったかな？」

一之瀬がバツの悪そうに居た。

「テストの結果の事で呼ばれたと思ってたけど……思いつきり違うみたいだね」

「そうだよ——どうせだから帆波ちゃんにも一緒に聴いてもらいたくてね」

櫛田の態度は揚々としたものだが、反対に堀北と一之瀬はただならぬ雰囲気や冷や汗が出てる——かく言う俺も何が起こるのか、どうにも嫌や予感がするんだよな。

「まず堀北さん、Aクラスに上がる為に力を貸すのに私も異存はないよ——ただ手を取り合って訳にはいかない。何故なら私の願いはAクラスになったって叶うとは思えないから」

「Aの特権じゃ足りない……櫛田さん、貴女まさか」

おや、堀北も櫛田の言いたいことを察したか——ま、ずっと俺を見据えて言ってるし、さっきの独り言を加味すれば不思議じゃないよな。

「私は嬰兒くんのバックと同じ所に立ちたい——Aクラスはその為の踏み台にしかならないでしょう。私の目的の為に貴女を利用させて

貰う——それが私の出来る最大の譲歩だよ」

「あの、櫛田さん……なんかキヤラ変わってない？」

一之瀬が慄きながらも仲裁に入って来たが、完全に圧倒されててタジタジだ——それでも何とか言葉を捻りだして来たのは褒めてやるべきか。

「つてかき、そもそもなんで私も呼ばれたのかな?? クラスの中の話でしよ、これって」

「嬰兒くんと一番近いのつて帆波ちゃんつて認識でしよ——それも今ここで終わりにしたくてね」

そう言いながら櫛田は一之瀬を見据えた——その目に込められた感情は闘争心がしつかりと込められており……同時に俺には濁った我欲が込められてるようにも見えた。

ああ、本当に世の中は何が起るのか分からないもんだねえ……。「嬰兒くんの隣に立つのは貴方じゃない——この私よ。」

そして私は手に入れて見せる——Aクラスも更に先にある栄光も全部！」

言いながらの櫛田の顔が普段の天使から、どンドン「あの時」のものへと変わっていく——最早開き直ったを通り越してるな。

面と向かって言われた一之瀬もそうだが側で見ていた堀北——それどころか店中の奴らが見てドン引きしてるぞ。

「だから嬰兒くんは渡さないよ——堀北さんも不甲斐ないのを見せたら遠慮なく刺すから、その覚悟を持ってよね」

やれやれ、これまた強烈な宣言……いや宣戦布告でいいのかな？

しかもテストの終わりにこの店を選んだのも強したたかなもんだ——ドン引きしてた輩も直ぐに納得したような感じになってる。

ま、二度目だもんな。

「また? クラスか」

「この店で派手なことするのが好きなのかな?」

「でもあの時程じゃないよね」

「いやいや男を巡つての四角関係とか、修羅場感あるじゃん」

「でもあいつ、特例の奴でしよ——なんか今更じゃない」

「そうそう、熱烈なラブシーンの方が上だよ」

「今じゃもうラブラブの夫婦だもんな」

そう。この店は坂柳と綾小路との熱烈キスシーン^{アケッシデント}があった、あの店——まったく仕掛けてくるのは分かり切っていたが、もうちよつと穏やかな演出にして欲しかったな。

幸いなのは前の方が断然インパクトが高かったことだが……それでもやはり複雑な気分だ。

忘れた頃に来るもの。

さて結局のところ、ペーパーシャッフルではどのクラスも退学者は出なかった——それも気になるが、それ以上に珍しい事態になり話題が持ち切りだ。

「Bクラスと引き分けか——総合点が同じなんて偶然が起こるなんてな」

「ホント、ホント——偶然って恐ろしいよな」

そう俺たち？クラスとBクラスは引き分けたのだ——これにより両クラスのポイントの変動はなくなった。

「でもいいんじゃないの。結果的に俺ら50のプラスになったんだし」

「そうそう、逆にBはAに負けてマイナス50だもんな。一步前進だぜ」

なんとも樂觀……いや前向きな意見だ。出来ればそのまま過ぎて欲しいが、そうもいかんだろうな。

「一步じゃなくて半歩だよ——ああ、あと一点取れたら」

「その通りね。Cへの昇格も微妙だし、歯痒いわね」

櫛田と堀北——？クラスの主力の二人が出て来て、教室内に張り詰めた感覚が広がっていくのが分かる。

あの妙な宣言は当然の如く学校中を駆け巡った……曰く、今度は？クラスの女子が男を巡って宣戦布告したと。

これが普通の拗れた色恋とかなら二番煎じで印象も薄いんだろうが、櫛田が欲しいのは俺とセットになってる特例の出所——要するに欲得ずく、それもこれ以上ない程の明確な我欲だ。

その余りの清々しさは新しいネタとしては十分であり、面白おかしく噂が回った……勿論、？クラスだって例外じゃない。

「く、櫛田さん……言いたいことは分かるけど、皆頑張ったんだし——」

「みーちゃん。そう言うのは、これからは平田くんに言ってもらえな

いかなあ——その方がいいでしょ」

「え……あ……その……」

「なんだか櫛田の妙なニュアンスに王が狼狽えだした——さて一体何だっつてんだ？」

「なんなら私が見繕つてもいいよ——スッキリしたらモチベーションも上がるんじゃない」

「そそそそ、それはいいって!」

「思いつき拒否した王の目には酷いと訴えが見える——相当弄られたくないようだが、既に手遅れだな。」

「なら、いいけどさ。その気になつたらいつでも言つてね——溜め込むのは良くないと思うからさ」

「言つてることは概ねまともなんだが、ニュアンスが何とも意地悪と言うか全く善意などなくも感じる——端的に言えば卑しい感じた。」

「完全にぶりっ子やめたか。」

「ねえ、櫛田さん……いくらんでもらしく無さすぎるよ、どうしちやつたの?」

「ゴメンね。私にも綾小路くん同様にどうしても欲しいものが出来ちゃったの——その為には、それにはまだまだ色んなのが足りなくて今までのままじゃ駄目だつて悟つたの。だよね、嬰兒くん」

「そしてそれをさり気なく俺の所為にしてきやがった——更に周りからも櫛田を変えたのは俺なんだと責めるように居ながら妙に納得感がある目で見られた。」

「その通りよ——Aクラスで卒業出来るのは、ひとクラスだけ。」

「幸いなことに向うのリーダーも私たちと戦うことを望んでる——その為にももつと向上していかなきゃいけないわ」

「俺の代わりに堀北が力強く答えやがった——それもさつき櫛田が触れた綾小路の事も絡めて……ええい、この前と言いつつ、なんでこんな時に肝心の奴が居ないんだよ。」

「おかけでクラス中の注目が俺に集まっちゃったじゃねえか。」

「でも、どうせなら一緒に笑いながら卒業したいよね」

「そこに軽井沢が入つて来た——この絶妙な感じは助け舟のつもり」

か？

なんであれこいつも主要メンバーだけに注目が逸れた。

「三年の終わりにクラスポイントが並ぶとかしてさ——それなら、みんなハッピーじゃない」

「残念ながらそれは無いみたいだよ」

更に平田も入って来たか——もうさながら談笑じゃなくて非公式なクラス会議だな。

「部活の先輩が話してたけど、最後の試験で同率になったら順位決定の追加試験があるらしい」

「マジで？」

「あくまで噂だけどね。何分、前例がないことらしいけど……今回の件みたいになっても不思議じゃないと思うよ」

言ってる平田の顔は愉快とは程遠いものだ——こいつの性格を思えばさっきの軽井沢が言った可能性が一番いいから、可能ならそっちを目指したいと思つてたのが妥当、本当に残念で仕方ないんだろう。

しかしどうあつても勝つのは一人——いやこの場合は席がひとつだけと言うべきか。

やはり大戦に通じるものがある。入学した時からずっと気になつてたし、そろそろ学校の上の方にも訊いてみたいものだ。

騒ぎにならないように龍園が普段通り且つ大人しくしてたから、ペーパーシャツフルは無難に過ぎたが、二学期も終わりに近づいている今日この頃なら何らかのアクションが起きても不思議じゃないはずだ。

実際に当初は少なからずの退学者が出ると思っていたCに関しても0人と意外な結果に落ち着いた。

Aクラス、それも坂柳が問題作成に関わったなら、まず考え辛い結果だ——あいつが学校関係者の身内でなければな。

そもそもにおいてCを攻撃に指名してきたことも彼女らしくはない——加えて直接出向いて引き当てたのもこうなった今思えば出来過ぎだと穿ちたくなる。

見えない所で力が働いている——今回の場合はCから退学者を出

さないよう手心……じゃなくて調整しろとでもされたか？

そうだとするなら近々何かが起こるか、来るかする筈だ——望めるなら俺も直接関わることになって欲しいものだ。

「なんか凄く嬉しそうだね。嬰兒くんもそうなたら遠慮なくやれるのかな？」

櫛田の期待感満載の問いにまたもやクラス中の目が集まった——どうあっても俺も絡めたいみたいだな。

「それはそうなって見なきゃ分かんたら」

「無難ね。それは本心からかしら？もういい加減、色々とバレてるんだし本音を言えるラインぐらいは教えてくれてもいいんじゃない」

「僕も堀北さんの言う通り、その方がお互いの為になると思うよ」

「あたしも賛成。また居なくなられちゃ嫌だよ」

「この国の法とこの学校のセオリの範囲内ならだな」

要望通り答えてやったぞ——これ以上は無しだからな。

「つまり疑わしきが無ければってことだね——じゃ、やっぱりサポートとかバックアップしか無理か」

「そうね。あくまで主体的に動くのは私たちじゃなきゃ」

櫛田と堀北が上手いことまとめたか——実に良い感じなはずなんだが、やっぱりなんかズレてる気がするな。

「堀北さん。意気込むのは結構だけど、また空回りしちゃってない？」

「櫛田さんこそ、欲に目が眩んで酔っぱらってないかしら？」

気がするじゃなくて、確実に主導権争いが勃発してる——それも俺を基点にして、すげえ迷惑だな。

「ふ、二人とも……喧嘩はよそうよ」

「大丈夫だよ、平田くん。Aクラスみたいな足の引つ張り合いはするつもりはないから——ね、堀北さん」

「そうね。目的に差異はあっても目指すべき場所は同じ——それぞれが信念を持ってやっていくのがベストだわ」

この回答に平田も安堵したが、どうにも望んでる形ではない為か複雑な顔してる——隣に居る軽井沢もな。

しかし、そんな心配は直ぐして場合じゃなくなるぞ。

翌日のホームルーム——？クラスの面々は啞然としていた。

茶柱は冷めた目でそれを見ながら淡々と説明している。

「Cクラスから訴えが出た。女子生徒が精神的不調で出席できない状態になり……その原因は？クラスの女子にあるそうだ」

「な、なんだよ、それ……どうせ言い掛かりだろ」

「試験で負けた龍園が仕掛けて来たんだろうけど……流石にぶっ飛び過ぎだよな」

「私語は慎め——事実確認を今行っているところだ。詳細は追って知らせる」

事務的に言って教室を出た直後、教室には当惑が広がったが直ぐに堀北が壇上に立った。

「落ち着いて、これはCクラスからの攻撃——言ってみれば場外乱闘のような物よ。冷静さを失ったら相手の思う壺よ」

堀北の堂々とした態度に直ぐにクラスは落ち着いていく。

それを見計らたって堀北は話を続ける。

「まずは確認するわ——先生が言っていたことに心当たりのある人は？」

当然、誰も居ない……などと言うようなことにはならなかった。

堀北は教室全体を見渡し、大半が知らないと言った態度の中で目を泳がせるか、当初とは違う困惑を示した生徒たちを見定め、ゆっくりと言う。

「佐藤さん、篠原さん——貴女たちがそうなの？」

「ち、違うよ！」

「私たちはそんなことしてない！」

「私たちは、ね」

しっかりと肝心なことを聞き逃さなかった堀北——それを敢えて口に出したことで大凡の共通認識が教室に広がった。

「改めて訊くわ——心当たりはあるの？」

再びゆつくりとした、ニユアンスも怒りや憤りも含まない淡々としたものだ——それ故に平田や彼女たちに近い者たちも何も言えず、クラス全体からプレッシャーがかかった。

ただそれでも彼女たちの口は重く、何かしらの葛藤が見て取れた。それを察した者が小さく息をついて声を出す。

「言いにくいようなら俺が言おう——軽井沢がCの女子を突き飛ばした話だろ」

「え、ゆ、幸村くん、なんでそれを？」

「佐藤さん、ちよつと！」

二人の反応は凶星だと白状したも同然であり、幸村は構わずに経緯を説明する。

「船上試験の時に話題に上ってな——その時は清隆が有耶無耶にしたんだが、まさか今になって来るとはな」

この発言に軽井沢——そして綾小路にも注目が行ったが、

「ああ、確かに言ってるな」

綾小路は興味がなさげ肯定するだけであり、そちらの目も軽井沢に向いた。

「それで軽井沢さん。本当なのかしら？」

「そんなずっと前の事なんか覚えてないわよ」

軽井沢はいつも通りの強気に即答——のようできて若干の焦りが混じっており事実が確定したと堀北は確信する。

同時に綾小路の態度にも解せない者を感じたが、今考えるべきことでないので心の中に留めておこうとも。

「そう。でも佐藤さんたちは覚えてる様だから訊くわ——詳しい経緯を話してくれないかしら」

「そ、その春先にカフェで順番待ちしてたらCの娘と揉めちゃって、それだ」

「で、でもさ——別に大げがさせたとかじゃないよ」

「でも突き飛ばされたことでずっと気落ちしてたって話だったぞ」

歯切れが悪く言い淀んでる佐藤と篠原に代わり幸村が要点を説明

し、事態の全体像は把握できた。

「聞いている限りだと丸つきり軽井沢さんに非があるようだけど——今になってが、ちよつと解せないわね」

「堀北さん。時間がたてば冷めるのも有れば、逆に溜まっていくのもあるんだよ——嬰兒くんはどう思う」

櫛田の明らかに意図的な振り——嬰兒はただ言う。

「俺は精神だのその手の事に専門的知識はないぞ。よつて分からん」

「え、だけどこの前、高円寺のことをじようちゆう……えつと……」

「須藤くん、情緒不安定だよ」

「わりい、平田。そう言つてたじやなえか」

この否定的証言にクラス内からは、今度こそはと言う様な期待感が湧く。

「それだけ分かり易かつたつてことだ」

それでも返答は素っ気なく、肩透かしな気分相場が白けてしまう——この消極的態度は関わる気は無いと言わんばかりであり、軽井沢にも冷や汗が出た。

もつと穿つた見方をすれば「軽井沢恵を切れ」とも言っているようにも取れ、少なくとも助ける気は無いと見えた。

軽井沢はそれとなく綾小路を視界に居れたが、こちらも消極的で何もする気配はない。

(ちよつと、話が違うじやない！)

船上試験の際には助けるように動き、嬰兒にも口添えすると言つていたにも関わらず、全くそうならない——この調子でいけばクラス中から吊し上げをくらうと、悪い方向に想像が膨らんでいき、内心の焦りが加速していく。

一方で嬰兒の態度に一部納得している者も居た——壇上に立つ堀北である。

(……)までの話からすれば彼女を断罪すべきつて言うのが「正しいこと」なんでしょうね)

以前、立ち聞きした嬰兒の親らしき者からの言葉——それを真摯に

成しているのと取るのが自然な見方であり、相手の女子に無礼を働き傷つけたなら謝罪すべきだとするのが普通だ。

しかし納得しきれない部分もある。

これは個人間での遣り取りでなくクラスを巻き込んだの話——Cクラスもとい龍園からの攻撃であり、女子の一件は口実に過ぎないことは明白だ。

安易に引く姿勢を見せたら付け込まれて際限なく追及してくる可能性は低くない——その事に考えが及ばない男でないことも知っている。

(つまりこの件は私になんとかして見せろってことね)

あくまで動くべきはクラスであり、嬰兒はその中の要因のひとつ、そしてクラスを率いていくべきはリーダーの仕事——現在、龍園がそうして攻めて来た様に受けて立つべきは堀北でなければならぬ。

考えを整理し結論付けた堀北は小さく深呼吸して改めて仕切り直すことにする。

「相手の娘の状態をここで議論したところで分かる訳ではないわ——本当にしろ、そうでないにしろ龍園くんのことだから深刻な状態に仕立ててると想定しなくちゃいけないわ」

「そうだよ。これは個人的な喧嘩じゃなくてクラスでの戦いなんだから——これでクラスポイントが減っちゃったら、更に調子付けさせることになるよ」

堀北の言を榎田が補足して問題の要点が明文化させる。

上上がり始める兆しが見えて来たのが後退し、逆にCクラスが上上がる——危機感と対抗心を煽るには十分だった。

「負ける訳にはいかないな」

「けどさ、具体的にどうすんだ？」

「そうだよね。聞いている限り圧倒的に不利じゃん」

「俺らが聴いても軽井沢が一方的に悪いって感じだしな」

「ちよ、ちよっとー！」

慌てる軽井沢を尻目に堀北は要点がブレないよう修正する。

「今出てる事実だけを見ればそうね——でも気を病んだ原因かどうか

は話が別よ」

「原因は軽井沢さんじゃないってこと？」

「そうだとっても不思議じゃないのがCクラスでしょ」

堀北の指摘により反撃の糸口が見えた。

「つまり今回の事は龍園くんの独裁体制が招いた結果だと？でもそれだって証明が難しいんじゃない？」

「ええ、その事をピンポイントではね——でも事の発端から今までかなりの時間が経ってるわ。問題の女子がどういう状態だったのかは調べられるわ」

本当に軽井沢とのトラブルが原因で気を病んだのか、それ以降の様子を提示することで信憑性を薄くする——勿論、先の櫛田の指摘のように気丈に振る舞っていただけだと言われるのは想像が付く。されどそれを証明することも困難であり、水掛け論に持って行くことは可能だ。

「それと並行して龍園くんがどんな風にクラスを纏めて来たかも出来る限り詳しく調べていかなきゃならないわ」

その上でどちらの言い分が信用に値するか——正式に学校に持ち上がった以上は公正な判断をする者が出て来る。その者たちが白黒つけることが出来ないなら、この件での処分は成立しない。

堀北が戦うべき方針を明確にしたことによりクラス内で盛り上がりを見せる。

「よっしゃ。じゃ、まずは聞き込みだな」

「俺、部活の知り合いとかに訊いてみるぜ」

「私もSNSとかしてないか調べてみるよ」

「ええ、よろしく願いますわ——情報はどんな些細なことでも私に上げてちょうだい」

堀北は言いながらクラス内を見て頼もしいを思う反面に危うさも感じ、敢えて水を差すことを決める。

「でも今回の事はこちら側に非が無い訳じゃない——軽井沢さん、これはあなたが軽率な行動の結果だと言うのも忘れないで」

「な、なによ……そんなの只の口実でしょ！」

「その口実を与えることが問題なのよ——それ以前にその身勝手な言動は改めるべきことだわ。万が一、向う側の言い分が全て本当だったとしたら私は庇うことは出来ないわ」

決して甘い訳ではない——今回の件はクラス全体での戦いを要している故に力を貸すことになっただけ。

軽井沢恵が女子を纏めクラスに益をもたらす存在であることも手伝っている。

しかしそれがなければ、或いは不利益が上回るような事態になったなら、容赦なく切る——堀北の態度からはそんな含みを感じさせる。「……もうそんなことはしないって約束する。悪い所があるなら直すようにする」

慄きながら反省の意を示す軽井沢——それは彼女だけでなく上がり調子で気が緩んでいた者たちにも引き締める効果を生んだ。

このひと幕により堀北が完全に？クラスのリーダーとして確立した……とはならなかった。

「でもあとであたし一人が謝りに行くつてのは嫌だよ——あいつら一回引けばどこまでもつけ上がるタイプだもん。謝るとしても絶対に終わりつて形でなきや、あたしは行かないよ」

「……勿論、ケジメを付けることは大事だわ。既に公になっている以上、その機会もあるでしょうから、そこを最終的な着地点としましう」

軽井沢の要望を汲む形で堀北が話を纏める——決して独裁体制ではないと、ある意味で理想的な形だが、どうにも心に引つ掛かりを感じる堀北であった。

さて昨日の話し合いから？クラスはあちらこちらで聞き込み——問題の女子に関して『諸藤リカ』と名前が判明し、そいつの様子について情報を集めている。

これがより詳細である必要があるなら時間がたち過ぎてる分、苦勞

するだろうが如何せん日常生活が遅れていたかどうかで何も無かつたことを確認するだけだから、手間は掛かるが困難でもない。

並行して龍園の日頃の行いについての詳細も集めており、堀北の示した対抗策は順調にいつている。

ただそれでも安心できないのか面倒なのにも遭遇する。

「ねえ、嬰兒くん。少し時間あるかな？」

「一人とは珍しいな、軽井沢」

とは言ったものの、そこまで意外って訳でもないがな。

気丈に振る舞ってるようだが、どうにも焦りが隠しきれてない——簡単に言えば怯えている。

「あのさ……綾小路くんから何か来たりしてないかな、あたしのこと？」

「堀北の補佐役に平田と一緒にになったことか？」

「ああ、いや、そうじゃなくて……でもないかな、まあそれでもいいや——それでさ、今って中々にいい感じじゃん。でもこのままの状態でズルズルいくのは不味いと思うんだけど」

「だから皆で一緒に戦おうとしてるんだろ——そもそもこれはお前が蒔いた種だろ」

「だからそれは……あたしだって別に……」

「悪意があつた訳じゃないと、なら尚更謝るのが普通だが——それだけじゃ済まないよ、そんなタイプだったのか、諸藤って奴は？それだとなんだか、この件とは矛盾するように思えるが」

「そういう奴だったのは真鍋って奴——その娘の他にも取り巻き連れててさ、一度舐められたら調子に乗ってくるよ、絶対に」

言い切った——それも偉く実感がこもってるな。

「それなら徹底的に遣り合えばいいじゃねえか。屈服させるには割に合わないってなれば、関わらないのが道理だろ」

「直ぐにその結論がでるのは、やっぱり凄いね。同時にちよつと怖いくらい……」

「おやおや、更になびいて来るかと思つたが若干引き気味——これはちよつと予想外の反応だな。」

「あくまで一方的じゃなきや駄目ってことか？ 相手が逆らう気も起きないような絶対的な強者なのを見せつけなきや安心できないと？」

「うん、そう。ちよっかい出したら退学になる——」

「それどころか本人はおろか関係者諸共に命がないぐらい徹底的にして欲しい訳か」

「だ、誰もそこまで言っただけじゃあない！」

俺の出した結論にドン引きしてるあたり、軽井沢もまだ思考はぶっ飛んでないか。

「お前の方こそ聴いてないのか、俺がどういう奴だっただけを？」

「……自分が畏にかかったら殺人も厭わないんだっけ……話には聞いてたけどマジなんだ」

「俺は最初からギリギリの状態で生かされてるからな。あくまで最後の手段だ——だからこそ、あんまり下手なことは出来ん」

「それならさ、この際もっとオープンにしちゃわれない。そしたら大抵はビビッて近づいてこないし、あたしも綾小路くんみたいに幼児くん力になれるように周りとのこと取り持つとかするから」

中々に大胆な提案だな——俺にもメリツトがある様に見せかけながら、しっかりと自分の強みを売り込んでくる。

恐らくだが無人島でのような活躍が出来ないと分かった時からずっと考えていたな。

俺の力と背後にある見えない威光を得る為に。

「命の危険だつて減るし、もっと気軽に動けるのが居た方が幼児くんもやり易いでしょ。あたしのことだつて、それなりに役に立てるってもう知ってるし」

「そんなに堀北の補佐では満足できないのか？」

「いいリーダーになったとは思うよ。でも幼児くんだつて満足のいくって訳じゃないでしょ」

なんとも尤もらしく語るからそのまま聞くことにする。

「Aクラスを目指すってのは結構だけど、どうしてもクラスが纏まり切れてる気がしないし——この前だつてポイントは増えたけどまた引き分けでしょ。やっぱり幼児くんが力を発揮できるようにするの

が一番だと思っただよね」

「要するにお前も櫛田と同じく、俺の飼主と同じになりたいと？」
「い、いや、そこまで大それたことは……って言うか、櫛田さんのそれだつて嬰兒くんには迷惑なんじゃないの？ どうせもう普通じゃないつての分かつてるんだし、開き直っちゃえばいいかなつて——」

調子よく語ってるが、どうにも言ってること程に余裕があるようには感じられない——正に命懸けとも言える必死さが見え隠れしている。

ただ櫛田の場合はたつぷりと恐怖を味合わせてやったが、軽井沢に關しては何かした覚えはない。知っている限り、死にそうな目にあつたなんてこともない——知ってる限りではな。

無人島の時も露骨な擦り寄りを見せだし、その後の試験でも俺が居ないにもかかわらず何かにつけて絡もうとしてきた。戻つて来たからは少し落ち着いてたのにここに来てまた振り返して——いや、あの時以上に俺の力を求めている。

「軽井沢、ひとつ訊きたい」

「なに？ なんでも聞いて」

「じゃ、遠慮なく。お前、死にそうな目にあつたことがあるのか、比喻的な意味じゃなくて文字通りの意味で生死をさまようみたいの事が？」

「ちよ、ある訳ないじゃん！ なんでそんな話になる訳!？」

「俺が知っている知識と照らし合わせた結果だな——お前のなりふり構わないに近い様子は命が懸かつてる輩のそれに通じるものが見えた」

まどろっこしいのは好ましくないのでストレートに言ってみたら絶句してしまった——さてどう出るか、観念して本当の事を話し始めるなら場所を変える必要があるかな。

「……ほ、ホント、普通じゃないのを通り越して異常だよな。死ぬかもしれないつてのを見ただけで分かるなんて………どんな人生送ってきたらそうなる訳？」

ほう、まだ粘るか——この往生際が悪さは根っからなのか、それともそれだけ知られたくないのか、おそらく両方かな。

「ご想像に任せる——そして俺と関わるってことはそんな異常じゃないことを抱え込むリスクが生じるってことだ。その覚悟がお前にはあるのか？」

「な、なによ……脅し？」

「警告だ——ちなみに綾小路と櫛田はその事を十二分に分からせた上で俺と関わりを持つようしている。最悪の場合、この学校どころじゃないものを敵に回すかも知れない——それでも俺と一緒に戦えるか？」
ここまで言えば普通はビビッて逃げ出すんだが——軽井沢はドン引きしながらもまだ完全には逃げ出そうとはしていない。

これはいよいよ持つて命が懸かっているのが本当かも知れないな——勿論、軽井沢の中限定だが。

「ホントに殺されるかもってこと……嬰兒くんは死ぬのが怖くないの？」

「元より無くして惜しい命じゃない——だからこそ生に未練を残すよ
うなことはしたくないな」

「……あんたも諦めてるんだね……それでも自分の足で立つてられる強さがあるのは羨ましいよ」

目に暗い輝きが宿り始めた——軽井沢の中で俺に対する心証がブレ始めたか。いや、

「あんたもって、お前も諦めたのか己と言う存在を？」

ふと思つたことをそのまま言ってみる。すると顔をそむけた……予想以上に琴線に触れちまったかな。

「そんな訳ないじゃん——あんたとあたしは違う、何もかもね。ごめんね、あたしから話しかけといてなんだけど、今の話は忘れて」

そのまま顔を合わせることなく行つちまった——うくん、予想してた中で最も可能性の低い展開になったか。

クラスを味方に付けた今なら積極的にそれこそ皆を煽って行くこ
うってことになるかとも思ってたが……。

まあ、それはそれでいいか——折角、俺と関係ない所で起きた戦い

だ。概ね全容が把握できたからには、クラスメイトとしてしっかりと力を貸して行かなきゃな。

ただどの辺りから出番となるかは未知数——その調整を期待してた奴も予想外の消極的態度だ。

本当に世の中はままならないものだ。

数えて〇〇

翌日の朝、ホームルーム後の時間——？クラスでは事件についての中間報告が行われていた。

「どうも諸藤さんが暫らく塞ぎ込んだのは本当みたいだね」

「うん。真鍋さんが率先してあつちこつち連れて行ったり元気づけたりしてたって」

不利な報告に淀んだ空気が漂って来る。

「でも証言としては曖昧だよ——それにCクラス全体はここ最近、期末試験前の不自然な行動が印象深く、ハッキリとしたものは皆無つて言えるよ」

その新たな報告に光明が差すのを感じ、発言者である櫛田に賞賛の目が集まり、それにこたえるように更に続ける。

「加えて龍園くんがリーダーに名乗り出てからの評判の悪さは折り紙付き——クラスを掌握してるって言っても仕方なく賛同してるって人もいるみたい、時任って男子がよく愚痴ってたってのも聞いたよ」
「スゲエな、櫛田。俺なんか最初の話聞きただけでも苦労知つたってのに」

「俺も須藤と同様だな——弓道部の知り合いに訊いても時間がたち過ぎてるわ、面倒臭そうだわで碌に話も出来なかった」

「それってみやつちの人望の無さが原因じゃないの」

「は、波瑠加ちゃん……それは言い過ぎ」

「愛里はホントに良い子だね」

和やかになっていく遣り取り——そこにパン、パンと手を叩く音が鳴る。

「そこまでよ。話が逸れて来てるわ」

壇上に立っている堀北が仕切り直して再び緊張感が出る。

「正直、櫛田さんの情報だけでも十分に戦えそうだけど——この程度を龍園くんが想定してないなんて思えない。他に何か情報はないか

しら？」

これに何人かが発言するが櫛田以上のものは出て来ず、またその内容も曖昧なものばかりだった。

「やっぱり流石に時間がたち過ぎてるわね——それでも決して順調じゃないと言えないのが返って不気味だわ」

「ちよつと堀北さん、不吉なこと言わないでよ」

佐藤が声を上げ、それに共感して不安な顔を浮かべる者も少なくなかった。

「ごめんなさい。不安にさせるつもりはないの——ただ、この調子でいけば思わぬ反撃を喰らう予感もあるのよ」

「やっぱり不吉を煽ってるじゃん！」

「何が起るか——いいえ、何をして来るか分からない相手だって言いたいだよ。みんなもそれを忘れないで引き続き情報を集めてちようだい。審議の時までに私も出来る限り反撃の方法を用意するわ」

堀北が話し合いを終わらせ、丁度良く授業時間になった。

少なからず心にしこりがある者も普段通りに授業を受けている中で全く別の事に捉えられている例外も居た。

綾小路は脳内で自らの有事に対する対策を模索する。

（あの男が来るとしたら最短で今日——どんなに遅くとも明後日にはとした方がいいか）

いつかは来ると確信していた者の来訪——嬰兒により十分に心の準備が出来たことにより、かなりの余裕を持つことが出来た。

だからこそホームルーム時に茶柱から向けた視線にも冷静に分析することが出来た。

何も問題はなかった。

（この際だから嬰兒にも情報を回してみるか？）

嬰兒の背後には確実に“あの男”を超える権力がある——その繋がりをおぼせればハツタリととしては悪くない。

（仮に空振りだとしても逆に嬰兒に対する何か分かる可能性はあるな）

寧ろその方が好都合でもある。

だとすると嬰兒が積極的に行きたいと思わせる餌が必要——綾小路は対面するとしてどんな形式になるかを想像し、どんな展開になっていくのかを予想する。

生徒の身内とは言え、接触禁止のルールを破ってくる相手——特例が通ったとしても相手の完全な思い通りになるとは考え辛い。

もしこれに嬰兒が絡みであることを口実にして来たなら、責任者の立ち合いがある可能性は高い。

であれば、最低でも校長——更にも上の理事長が出て来たならば。

(嬰兒が有栖に興味を持ったのは理事長の娘だから——ここは思い切るべきか?)

嬰兒がいくら特異な存在だとしても一生徒であることには変わらない——いや寧ろ特異だからこそ易々と接触できず右往左往しているのだろう。

直接対面できる機会があるなら大いに欲するはず——リスクが勝り見送ったとしても綾小路が仲介役になることでメリットを提示すれば、それはそれで大きな貸しに出来る。

じっくりと考えを纏め、次に交渉する場所を何処にするかを考える。

(出来れば一対一での人気のない所がベストだが、悠長な事を言っている間に時間切れになったら話にならないな)

今日来るとするなら時間的には放課後——話すとしたら昼休みが望ましく、その時間に余り人が居ない所。

時間帯から屋上なども人が居る——人気のない目立たない所もありはするが、今のクラスの状況下で密会の形を取ればあらぬ期待を抱かせて望ましくない方向に行く可能性もある。

(諸々を考慮するとあそこがいいか——嬰兒の欲しいものが手に入るかもとすれば断らないだろう)

綾小路は授業が終わり直ぐにメールを送信し、予想通りに了承の返事を貰った。

昼休みになり、俺は綾小路との待ち合わせ場所である図書室に向かう。

生意気にも俺の欲しいものとか綴ってたが、どんなカードが手に入ったのやら？

ここ最近はずつ気なく軽井沢の件にしても偉く消極的だったのに、それでもしつかりと何か考えてたのかな？

ま、行ってみれば分かるか。

図書室に入ると昼飯時もあったか、今は数人程度しか居ない——じつくり話をするには問題ないが、聞かれたくない話をする場には適切とは言えないな。

そこまで重要って訳じゃないのか、それとも余程急いでるのか。

待っていた綾小路の元に行き隣に座る——振りかと思っただがしつかりと本を読んでる。

「それアガサクリステイーか？」

「以前、椎名に進められてな——この時間なら返すのも借りるも楽しいんだ」

なんとも回りくどいやり方をする——あくまで偶々かち合って本の話をしたって体裁、もといアリバイを作るとは。

「しかしあんまりのめり込み過ぎると昼めし食う時間が無くなるぞ」

「そうだな——ただ折角だからキリのいい所までは行きたい」

念には念をとってことなのか、それともただ焦らしてるだけなのか——兎に角、俺としてはとつとと本題に入って貰いたいんだが。

「嬰兒はミステリーとか謎解きとかには興味はない方か？」

引つ張るな——これは俺を焦らして会話の主導権を取ろうとかって目論見か？

いや、そうじゃないな。

視界の端に椎名の姿——綾小路も最初から気付いてたな。

事を急いたのが仇になった——いや、最初から最後までこの場でのことは偶然で済ませたいのか。

椎名はその為の証人ってことか——ちようどCとのいざこざの最

中だし、当たり前障りのない会話しか出来ないって言い訳にもなる。

そうするとここからは気を付けて会話しなきゃか……やっぱり面倒くさいし、行っちゃまおうかな。

「世の中には下手に深入りすると取り返しの付かないことになることも多いぞ」

「その通りだ——ただそれと知りたいたとかの好奇心が湧くかは別だろ？」

つまり俺の知りたいたいことが知るチャンスがやって来たど？

一体何があつてそんなことになる——その不自然に置いてある端末が関係あるのか？

しかもこれ見よがしに俺が居れたアプリが起動中と来たものだ。

しかしそれと俺の望みがどう繋がる？

俺が知りたいことを訊きたい相手はこの学校の理事長。

もしかして「接触してくる誰か」を条件に坂柳を通して話を付けたのか——それは無いな。娘である彼女自身がその手の依怙贖とは無縁だとハッキリと言っていた。

いくら娘の恋人だからって融通を利かすとは思えん。

「坂柳なんか諸にそう言うタイプっぽいな——子供のころからそんな感じだったのか？」

それでも一応、話を振ってみる。

「ああ。ただ有栖の場合は身体がな——好奇心旺盛でも危ないことはさせられないから、親御さんも苦労してたな」

ほう、坂柳の親が関わってるのは間違いないか。

そして俺に会わせてくれる……いや、この場合は勝手に会いに来ていつてことか？

「お前らつてやっぱ親同士からの付き合いなのか？」

「その縁で会えたのは間違いないな——ひよつとしたら嬰兒の親とも知り合いなのかも知れんぞ」

よくもまあ、そんな尤もらしいデマがスラスラと出て来るものだ——これが意味するのはやはり親が国家権力に関わっていることぐらいだが、それが俺の望みとどう繋がると？

ん？

綾小路の親もかなりの権威を持っていて俺の事を知っている——
なら俺の知りたいたいことも知っている可能性は高い。

そして敢えてこのタイミングで言ったってことは、ひよつとして。

「俺とお前が会うことも少なからず必然があつたつてか。坂柳と同じ
——いや、あつちの場合は運命って言った方がロマンチックかな」

「運命か——そんなものが本当にあるんだとして、一体誰が仕組んで
るんだろうな」

「そりゃ、神様なんじゃねえの」

「そうだな。短い間に二つも大きな転機が訪れた——こんな偶然は神
の思し召しとしか考えられないよな」

何をしじみと語ってやがる——臭すぎて突っ込む気も失せるぞ。

「だからこそ大事にしたいよな——余計な茶々なんて無いに越したこ
とはない。そうだよな、嬰兒」

「その通りとしか言えないが、災難がこつちに合わせてくれる訳もな
かろう——どうにかして欲しいにしても、もつとストレートに言つて
くれ」

「出来ないからこんな風に話してるんだろ——分かり切ったことを
一々言わせないでくれ」

ハハハ、回りくどいのを椎名の所為にしやがった——お陰でちよつ
と委縮してるぞ。

「詳しくはまた話そう——放課後にでもオレの所にでも来てくれ」

お前の所か、態々探しに来てつてか……な訳ないよな、あくまで俺
が勝手に来たつてことにしたい訳か。

そんな体裁が必要な事態が綾小路個人に差し迫ってる——それは
俺にとつて有益なものであると。

互いのメリツトを提示した上での取引——とそんなつもりか？

「気が向いたらな」

「……そうか。じゃ」

綾小路は本に葉を挟んで閉じ、行ってしまふ——提示はしても強制
はしない、引き際や踏み込んでいいラインはしっかりと心得てる訳

だ。

仮に行かなかつたとしてもまた次が来るな——しかも行かなかつたことを後悔させるようなのを引つ提げて。

さて、どうしようかね。

「すみません。お邪魔だったですか」

「ここは皆の図書室なんだ——椎名が謝る必要なんてないさ」

「それもそうですね。ところで嬰兒くんはお昼に行かないのですか？」

「なんだ、そつちもそつちで敵情視察か？」

「いいえ、私はそもそも争いごとには興味はありません。ただ単に気になっただけです」

主語を省いてくる辺りは決してお花畑じゃないか——相変わらずよく見てる娘だ。

「そんなに気になるなら綾小路を追いかけたらどうだ？多分、学食に居るぞ」

「それなら嬰兒くんも一緒にどうですか？行きなれてないのでどうも足が重くて。出来ればお勧めとかも教えてくれれば嬉しいです」

「なんだ、向うで食べたことがないのか？」

俺の記憶が確かなら学食には言ったことがあると言つてたはずだが。

「はい。以前に足を運んだこともあつたのですが……その後で色々ありまして」

ああ、そう言うことか——無礼者とっかを黙らせた場面を見て食う気が失せた。そしてそのまま足が遠のいてしまったと。

要するに俺の所為だから責任を取れと？

「何やら穿つたことを考えてるようですが、この事は私個人の問題ですから気にする必要はないですよ。ただもう少しお話がしたいと」

誓つて裏はないってニュアンスだな——ま、実際にその通りなんだろう。

椎名に限らずCが俺から何かを引き出すなんて考えてるのは居ない——この申し出は綾小路の不可解な行動を心配してのもの。

Cクラスのイメージに似合わずお人好しな娘だな。

俺は、ふうと息をついた。

「分かった、分かった——綾小路の事は気に掛けとく。あいつの言う通り今の情勢下で余計な問題が入って来るのは好ましくないからな」
「それは良かったです——本好きの知り合いが困っているのは、どうにも見過ごせません。事が済んだなら、またお話ししたいですし」
俺の返事に満足したのか、椎名も笑顔で言ってしまう——もしかして、これもあいつの狙いか？

いや椎名のことをそこまで読み切れるほどの関係とも思えん——これは本当に運が綾小路の味方をしたってことか。

もしくはこのタイミングで来る誰か——比喻でもなく俺の所為だったりもするかも知れんな。

学食に移動した綾小路は発券機の前に立ちメニューを選びながら考える。

(嬰兒がオレの狙いに乗るかは五分五分ってところだが、もし乗ってきた場合なら今日ある方が都合はいい……………あの男が来ることを望むなんてな)

嬰兒と知り合う前なら考えもしなかった展開に自嘲しながら、日替わり定食のボタンを押そうとする。

「すみません。まだ掛かったりしますか？」

その時、背後から声が掛かる——昼休みが始まって二十分、並んでいる生徒は居ないと思っていたので気が緩んでしまった。

と赤の他人なら素直に謝るのが普通だが、声を掛けた相手が相手だけに内心で小さく息を吐き振り返り言う。

「なんならお前の分も一緒にやろうか——有栖」

対して坂柳は笑みを浮かべながら答える。

「では同じものをお願いします」

「分かった。一緒に持つて行くから適当な所に座つてくれ」「すみません」

坂柳は近くを見るとお誂え向きに数人分が開いている——もとい、たった今空いた席があり、周囲の配慮（好奇心）がありありと見えた。やや苦笑しながら席に座り、直ぐに両手にお盆を乗せた綾小路が来て隣に座る。

「ありがとうございます」

「どういたしまして。じゃ、食べようか」

「はい。いただきます」

坂柳は箸を取り行儀よく綺麗に食事する——それを横目で見ていた綾小路に微笑みながら坂柳が言う。

「何か？」

「いや、よく考えたら箸で食事するのを初めて見たなと思って——なんとも上品なものだと」

「そうですね——私はただ見られてるだけなのだと思っていたのですが」

その台詞に周囲からはクスクスと小さな笑い声が出たが、当の二人は気にした風でもなく食事を続け、それがまた壺にはまった者（主に女子）たちはニヤニヤしたり、うっとりした表情を浮かべており、あつと言う間に学食をピンク色に染めた。

「こうしてゆっくりお食事するのも久し振りです」

坂柳の何気ないひと言——綾小路の心に妙に引っ掛かるが表には出さず自然な会話を心掛ける。

「なんだかずっと忙しそうだったが何かあったのか？」

「いえ、少々面倒臭い小言を聞かせられました——全く持つて迷惑な事です」

「それってもしかしてアイツの所為か？それともオレとのことですか？」

期末テストも終わり冬休みが近づくとつれ、二回目の大イベントに向けて学校中が騒ぎ出している……などと言う様な事でなく、綾小路自身に面倒が近づいていることを解っているから来る問い。

それを直ぐに察してか坂柳も内心で気を引き締めて慎重に言葉を返す。

「断じて清隆くんの所為ではありません——“あの方”が余計なちよつかいを招き入れに来たの………いいえ、大した話ではありません。忘れてください」

そう言つて箸を動かすのを再開するも明らかに不自然な言い回しは綾小路として察するものがあつた。

（“あの男”が何かしてきてるのは間違いないか——嬰兒の異能はやつぱり本物だな）

本来なら知りえる筈の無いことも易々とやつてのける——その凄さを再認識しつつも今はそれだけにかまける訳にはいかない。

綾小路はどうしても確かめて置かなければならないことを遠回しに訊く。

「有栖。今日の放課後なんだが——」

「申し訳ありません。どうしても外せない重要な用事が来てまして」

「そうか。それは残念だな」

お互いに言いたい事を察し、それ以上の問答はなく食事を進めながら他愛無い話をする。

「そう言えば——」

いつも通りに当たり前になつた事柄——食べ終わり学食を後にした後も昼休みの終わりまで、ずっと。

ああ、待つてると時間が長い——やつと放課後になつた。

綾小路曰く、この後で何かあるかも知れないとのことだが——どうやら当たりみたいだな。

授業中もだが終わつてからも茶柱先生がそれとなく綾小路を気にした素振りが多い——今もそうで何か言いたそうだが踏み出せないでいるって感じだ。

「ふう」

一方の綾小路も気付いているのか、なんとも重い溜息を付いてる——それって誰に向けてのものだ？

「どうしたの、きよぼん。元氣ないね？」

「有栖が最近忙しそうなんぞな」

「ははあ、誘ったけど振られちゃったんだ」

「は、波瑠加ちゃん、そんな言い方は……」

「愛里、氣遣いは無用だ——實際その通りだしな」

「ハハハハハ」

佐倉も最早笑うしかないか——傍から見ただけレベルの高い美少女二人に気に掛けて貰いながら、なんとも贅沢なこと言ってる。それだけ仲睦まじい夫婦ってことだが流石に新鮮味に欠ける為か、辟易したり面白くない視線を向けてる奴も居たりする。

「あーあ、リア充の気持ちはさっぱり解らないから寂しいもんだな」

「ホント、こつちにもその幸せちよつとでいいから分けて貰いたぜ」

なんとも分かり易い僻みだこと……それ故か女子から反応したのが出て来やがる。

「そんなんじや一生縁がないんじやない」

「そうそう。幼馴染だったとしても恋人には無理よね」

おやおや、ちよつとばかり気まずい空気になってきた——いつもなら平田が宥めるが、動きたくとも動けないようだ。

ま、そうだよな、綾小路に次ぐクラスでのリア充だけに出て来たら火に油だ。

何よりその彼女が現在進行形でクラスに迷惑かけてるからな——色々と板挟みで表情が硬い。

そんな中でこの事態を引き起こした張本人が立ち上がった。

「どしたの、きよぼん？」

「今日はもう帰る。騒がせて悪かったな」

でそのまま行ってしまふ——必然的に注目が行ってしまうが、その中でも一番だったのが茶柱先生だ。

これはいよいよ持って何かあるかな。

取り敢えずはギリギリまで『地の善導』で位置を把握しておくか。

「ねえ、嬰兒くん。今日って暇？」

佐藤が遠慮がちに来たがニユアンスからして色っぽい話じゃ無さそうだ——となると誰の差し金かな？

「すまんが用事がある——聞き込みとかなら他をあたってくれ」

「え、そ、そう——うん、分かった。ゴメンね」

すっかり見て……いや聞いていた軽井沢が目に見えて落胆し、一緒に居た松下も態度には出さないようにしてるもがっかりしている。

ただそれは後回し——今は綾小路を追いかけて行った茶柱先生の方が重要だ。

感知出来るギリギリまでだと不味そうだし、ある程度行った所で俺も教室を出て二人の後を追う。

態々遠回りして人気のない場所に……事前情報がなきや密会、それも教師と生徒の禁断のなんて連想してしまうぞ。

まあ、その可能性もなくは無いか——近頃は坂柳に構って貰えないのは本当のようだし。

それも考慮して会話を訊くのは止しておこう。

二人からは完全に気取られない位置で様子を窺おうと思ったが、思った以上に短い話のようで揃って直ぐに移動する。

向かった先に辿り着いたのは応接室——茶柱先生と校長先生は直ぐに出て来た。

なんだか逃げるよう仕草——その後も二人は少し話して茶柱先生は少し離れた所で待機した。

さて中の様子は流石に窺い知れない——綾小路に用のある誰かが居るのは間違いなさそうだが、それが俺の会いたい人かどうかは分からない。

曖昧な話で俺を釣って綾小路の優位を確保って算段も考えなかった訳じゃない——と言うか寧ろその可能性も高くなってきた気がする。

椎名は後で何か言いそうだが、どうにも綾小路個人の問題って感じだしな。少なくとも文句を言われる筋合いではない。

このまま帰ろうか、それとも茶柱先生と話してみるか……妙な借り

を作るようで気が進まない。

ただこうしてもドウデキヤプルが来る気配はない——と言うことは、これは首を突っ込んで行っても問題はないってことかな？

少なくとも学校や他の奴らには。

そんな事を考えていたら、また誰かがやって来た——茶柱先生と少し話してそのまま応接室に入った。

茶柱先生の態度からするとかなりのお偉いさんだな——俺の直感が何やら喚きだす。

よし、どうするか決めた。

時は少しだけ戻り、綾小路清隆が茶柱佐枝に連れられて応接室まで来た。

ここに来るまで二人は終始無言であり、茶柱は淡々としながら扉をノックする。

(いよいよか——来るのは分かったが、問題は嬰兒が釣れたかどうか?)

そしてもうひとつ、目当ての人物が現れるかどうか——もしかした既に部屋のいるのではと期待が掛かり僅かに緊張する。

「校長先生。綾小路清隆くんをお連れしました」

「入ってください」

何度か集会で聞いたことのある声だが、焦りや余裕の無さが混じるニュアンスだった。

ただその原因は直ぐに分かった——校長の向かいに座る四十代の男。

「ではあとはお二人でお話されると言うことで」

「無論です」

二人が部屋を後にする——その時に外の様子を見たが目当てのものではなかった。

「単刀直入に訊く——お前と同じクラスに居る牛井嬰兒だが、今現在

に何かを起こす気はあるのか？」

「……………いや、今は大人しいものだが」

最初に出て来た言葉が意外過ぎて綾小路の反応も一瞬遅れてしまった。

「では次の問いだ——確か体育祭だったか、その時の様子は？何かそいつに影響する何かはあったか？善し悪しは問わん」

「嬰兒が何を思ったかなんてオレに分かる訳がないだろう——アイツはそれだけ規格外だ」

「そんなことは分かっている。俺が聴きたいのは周囲に関することだ」

「さつきと同じだ——オレに分かる訳がない」

「ふん。嘘だな——アレの側について状況の観察を怠るなどあり得る訳なからう」

完全に確信しきっている男の様子だが、淡々と事務的に訊いて来ることに綾小路は直ぐに意図を測った。

「嬰兒の様子を見てくるように命令されたのか？」

「俺の方から買って出た——この学校に縁がある分、あっさりとしたものだったよ」

この即答も綾小路からすれば意外なものだった。

「どうした。半年以上も側にいてこの程度の事も解らない程に錆びついたか？」

「いや、嬰兒がアンタよりも上の権力の息が掛かっていることは予想していた——それをプライドの高いアンタがあっさり認めるとしては、俺の予想を遥かに超えているようだな。いい収穫だ」

「負け惜しみは止め——アレは今のお前如きがどうこう出来るものじゃない。関わりたいなら、退学して戻ってこい——そうすれば1%ぐらいの可能性は見えて来るかも知れんぞ」

「アンタにそこまで言わせるなら尚更退学する訳にはいかないな——まだオレは嬰兒の全てを暴いていない。この貴重な体験を棒に振ることなど出来ん」

「ふん、何も解っていないな。どんなに関わり知ったところで全ては

無駄だ——アレはそう言うものだ」

男の口調に忌々しさが混じって来る——それを見逃さなかった綾小路は兼ねてからの疑問を口にすることにした。

「やっぱり嬰兒なのか——ホワイトルームが停止することになった要因は？」

「お前が知る必要など無いし知る資格もない——繰り返すが知りたいというなら戻ってこい」

「いつまでも平行線だな」

男は無言であったが、この話題での話は実りが無いことを認識したのは間違いない、用意されたお茶に口を付け仕切り直しを図る。

「松尾も余計なことを吹き込んでくれたな——やはり徹底的に叩き潰して正解だった」

「殺したのか？」

「そんなことはしないさ。ただ雇い主に逆らったのだ、報いを受けさせた——自慢の息子共々な」

綾小路は想像することもおぞましい事になった事を悟った。

「そしてアレも飼い主に噛みつく傾向が出始めた——今戻れば巻き添えにならずに済むぞ」

「救いの手を差し伸べてるつもりか？アンタらしくもない——そんなにオレに固執するならご自慢の力で圧力でも掛けたらどうだ」

この綾小路の言葉に男は小さく鼻を鳴らした。

「成程、予想通りに毒されてるようだな——それでいながらアレからは何も聞いていないか。ならば悪い報告をしなくてもよさそうだな」

心底安心したようなニュアンスに綾小路は驚きを隠せなかった。

（こいつにここまで言わせるほどの大物なのか、嬰兒のバックに居るのは？）

この国を動かす存在となれ——そう言われ続けて来た。

その為のホワイトルームであり、男自身の野心を叶える人材を生み出す為に厳しくも最高の教育を課され続けて来た……そのやり方が世の明るみに出せないものでも長い期間、やり続けられるだけの力は嫌と言うほどに分からされている。

だからこそ当初は、学校を去ることになれば逃げることは出来ないと諦めてもいた。

しかし今、男とのやり取りと反応からしてそれを遥かに超える力が存在し動いているのは疑いようがない。

(考えなかつた訳じゃない——だが再認識させられるな。一体何があるんだ、嬰兒には?)

かつてこの国を背負って立つ程度では足りない、その三倍——更に十倍は必要と言っていた。

ハツタリだとは思っていた訳ではないが、いよいよ持って実感が湧いてきた。

それがどの程度の沈黙の時間だったか、長いのか短いのかも分からない中でノックの音が響いた。

「失礼します」

ゆっくりと扉が開く坂柳理事長が姿を現す。

「久しぶりだな。待っていたぞ、坂柳」

「お待ちせして申し訳ありません。綾小路先生」

頭を下げようとする理事長を男が手で制す。

「そう言うのはいい——余り時間も掛けたくないから、早速本題に入ろう」

「はい」

(どうやらオレの事はついでみたいだな……もつともコイツにとってはどうだか知らんが)

綾小路は予想していた展開でもある為、冷静に物事を見ることが出来た。

そして、この場にもう一人が来る——もしくは既に居ないか部屋の中をそれとなく見て回る。

「君とは初めましてだね——綾小路清隆くん」

「はい。ずっとお会いしたいと思ってました」

丁寧に接する綾小路——ただその言葉には額面通りではない意味も含まれており、再度部屋の中を探る。

「ふん。居るなら出て来てても構わんど、牛井嬰兒」

それは男も同様だったようで堂々と声を上げた——理事長も意外
と言う様子はなく、全員の共通認識のようだ。
「ではお言葉に甘えて」

金が・・・

ドアから嬰兒の声がしたと同時に開いていく——そして嬰兒の顔を見た瞬間に男の顔は、目に見えて険しく敵視したものになる。

「失礼します」

堂々と入って来る嬰兒——近づいて来る事は無く、以後は口を挟まないで扉の近くで待機した。

分は弁えていると言うことか——男の敵意は若干薄れ、理事長も僅かだが安堵する。

「では役者も揃ったので本題に入ろう——俺が今日この学校に来たのは、管理体制に不備が生じた可能性が出て来たので、その確認と今後の対応についてどうして行くかを確かめる為だ」

と言うのが表向きの口実だろうと部屋に居た全員が思う——尤もそこから先はそれぞれで違ったが。

「この度は私の不徳と致すところ——本当に申し訳ございません」

理事長は何ひとつ言い訳することなく頭を下げようとする。

「いいや、これはお前の責任ではない——特例を通させた側が負わなければならぬことだ。お前が出しゃばること自体がおこがましい——分かっているだろう」

「……………」

「勿論、可能性の段階で処分を下すことはしない——ただ、これまで通りと言う訳にはいかん。そこで牛井嬰兒には新たな特例を与えることになった」

新たな特例——今までと違い、外部から直接来る形を取ることに意味合いの重さが段違いであることを示唆しており全員が身構えた。

そして持ち込んだファイルから書面を差し出し説明する。

「今度からの長期休みは貴様には重要任務について貰うことになっている」——その分の報酬を前払いとし、この学校に組まれている予算とは別枠で限定的にだが使用できるようにする。無論、使用時には厳重な審査があり、好き勝手に使えるものではない——詳細は記して

あるから目を通して置け」

学校の指定しているポイントとは別の資金使用——これ以上ない程の特別扱いの様を呈しており、理事長を始め驚愕を隠せない。

「それはまた随分と大胆なものを課してくれませぬ」

「ふん。ただの生徒でないのはとづくにバレてるのだろう——今更この程度のもが増えたところで意外に思う者など居まい」

「内情も随分と把握されてるようですね」

「俺を誰だと思ってる——本来なら清隆に関しても入学されることもないことも把握済みだ」

「流石は綾小路先生です」

あつさりと肯定する理事長——ただ男の持つ権力に敬意はあっても畏怖はないニュアンスは頼もしさすら感じさせる。

先生と呼び格上として接している男に対しても一切物怖じせずに毅然とした態度で話を続ける。

「おっしゃる通り、この学校では独自の教育方針により『当校に所属するに値する』と判断した生徒のみに入学を認めています。入試も面接も形式上のものでしかありません——されど今年に限ってはこちらとしても本意とは言えない『特例』を抱え込むことになりました」

隠すことなく嬰兒を見て来る仕草——これには黙ってることなく反論が返って来る。

「そちらがそう思うのも仕方ないでしょうが、この件は俺の所為ではないですよ。寧ろ落ち度があったのは『あの方々』の方——そうですよ、綾小路先生」

「……………こつちだつて被害者だ。奴らの介入でどれだけの騒動になったのか、お陰で俺の計画にまで支障をきたす結果になったんだ」
「それはそれは、ご愁傷様です」

(ここに居る全員が損失を被った被害者な訳か——オレ以外は)

綾小路の予想通り、嬰兒がこの学校に入學しなければならぬ『何か』がホワイトルーム停止の原因だと確信を得た遣り取り……………されど一体何がどうなつて異能力者を学校に通わせなければならぬのかが分からない。

「話が逸れたな——ともあれ牛井嬰兒による外部からの圧力と言うポーズはこれで達した。貴様も長生きしたければ注意することだな」
「心にもない言葉、ありがとうございます。それともあの方々の伝書鳩なんてさせたことを詫びるべきですか？」

嬰兒の含みを持たせた返答に再度緊張感が増した。

「なんだ。ここに来る口実を与えてくれて、ありがとうでも言つて欲しいのか？ 貴様のことなどなくても何も支障はなかったぞ」

「ほう。つまりそれだけご息が重要だと？」

「ああ、それこそ、このまま連れて帰りたいくらいにな」

男が目を向けるが綾小路はポーカークフェイスの涼しい顔のまま——意向に沿って退学する気など全く無いのは明らかだ。

それは理事長も同様のようで、

「私どもとしましてはご両親の意見を無碍にすることはしません——何でしたら三者面談を行い納得いくまで話し合うことも」

「生憎だが、そんな時間の無駄などするつもりはない——この学校はお前のテリトリーなのだから、お前の流儀に合わせてやる。それなら問題なからう」

「はい。何も問題ありません——特別扱いはあくまで牛井嬰兒くん、ただ一人だけです」

「いい答えだ——これで俺の仕事も終わった。ではこれで失礼させて貰う」

男は立ち上がり嬰兒の側まで来る。

「ここにはもう二度と来る事は無いだろう——門まで送れ」

「意外だな。嬰兒が変な気を起こすとは考えないのか？ アンタらしくもない」

「なにがなんでもコレの情報を得たいようだな——なら俺とこのまま来い。俺の敷いた道の先にこそ、答えはある」

「そうか、なら別にいい——取り敢えずは自力で足掻いてみるさ」

男はこれに応えず応接室を去り、すぐ後ろを嬰兒が付いていった。

余りにも男らしくない展開に釈然としないものが残る綾小路に理事長が話しかける。

「気になるかい？」

それは一体何に對してなのか——僅かに思案し答えを返す。

「はい。あちこちから恨みを買っているあの男が初対面の子供……いえ超能力者に護衛を任せるなんて。一体どんな絶対的根拠があるのか？」

「申し訳ないが何も答えることは出来ない——ただ君の言う通り、先生には絶対の安全を保障される。何事も起きることはないよ」

これもまたきつぱりと言い切られ、余計に釈然としないものが増した。

(でも今は)

綾小路は気を取り直して理事長に向かい頭を下げる。

「改めてはじめまして。入学の件ではお世話になりました——ずっとお会いしたいと思ってました」

「やはり僕の事は知ってるか——ただ君を昔から知っている僕としては何とも面映ゆいね」

理事長の態度には言葉通りではないニュアンスが感じられ、綾小路はやや緊張した面持ちで頭を上げる。

「……………」

そこには案の定、穏やかとは言い難い目を向けられている——その為綾小路の顔に冷や汗がひとつ流れた。

「あの……………」

自然と出る言葉の歯切れが悪くなる——そんな様子を見ながらも理事長の目は少しも変わる事なく、ゆつくりと口を開いた。

「有栖とのことは当然耳に入っているよ——随分と仲良くしてくれているようだね」

「……………えっと……………」

綾小路は今までに味わったことの無い緊張感に言葉が言い淀む——と言うよりも何を言うべきかが本気で分からなかった。

(謝る、ものなんか違う気もするし……………ただ認めるのも、なんだかちよつとな)

心中で何かが引つ掛かってしまい、掛けられた言葉を肯定すること

も出来ない——と言うよりもどんどん委縮してしまっている。

(別に疚しい事なんて何も無いのに)

それでもやはりうまく言葉が出てこない綾小路に理事長は暖かい目を向けて穏やかな声で再び話して来た。

「ハハハ。そんなに気負わなくても大丈夫——別に責めている訳じゃないから」

綾小路が落ち着けるように、そして改めて仕切り直す。

「有栖も昔から君の事を気に掛けていてね——念願を叶えてあげられたことは親として嬉しいものさ」

「いえ、まだ本当の意味では叶ってはいません——でも彼女の願いには最大限応えます」

綾小路のひとつの揺らぎもない自信を持ったニユアンスに理事長は気を良くする——そして同じく自信を持つて返す。

「本当に有栖に良くしてくれてる様だね——僕としてもエールを送りたいが、教育者としてアンフェアな事は出来ない。この学校のルールに則って生徒を育て守る——言っている意味は分かるね？」

「はい」

ルール違反は見逃せない——それが例えどんな特殊な立場であろうとも。

(嬰兒が退学する可能性は常にあるのもこれで確定だな——距離を置いた方が身の為だって忠告も含まれてるか)

だとしても綾小路は手を引くつもりなど更々なく、理事長に会えた機会に出来るだけ情報を得たかった。

「あの男がやりそうなことは想像付きますが、そこに嬰兒を入れて来ることは有りえますか？」

「綾小路先生ならやりかねないね——ただ下手を打てば、いくら先生でもどうにもならない。そこまでのリスクを負うようなことはしないだろう。僕がギリギリ言えるのはここまでだよ」

綾小路の事情を出しにして嬰兒の情報を引き出す——その意図を完全に見抜かれており、これ以上の会話はするつもりもないと逆に含みを持たせてきた。

最早、これ以上は実りが無いどころか有害になりかねない。

「分かりました。ではこれで失礼させて頂きます」

綾小路も元より理事長を困らせたい訳でもないので素直に引き下がった。

普段は通ることの無い職員施設への廊下——綾小路の父上の背を追うように一緒に歩きながら、周囲も警戒する。

「誰かを探してるのか？」

不意に前から声が掛かった——俺から喋らなきや何も言わないと思っただが、どうやら気にする必要はなさそうだ。

お父上は振り向くことなく偉そうに続けて来た。

「出口までは直ぐだ——用件があるならさっさと見え」

どうやら無駄は好みじゃないようだ——話しかけて来ながらも早く切り上げたというのが透けて見える。

「それならば遠慮なく——ひとつ、知りたいことがあります」

「なんだ」

「この学校は過去の十二大戦の優勝者の願いで出来た物なんですか？」

「違う。この学校はあくまで坂柳の一族が奴らの理念に基づいて開かれたものだ——国の承認を得るのは当然いくつも骨を折ったが、その手腕とこれまでの実績で貴様の受け入れ先として選ばれた。何を期待してたのかは訊かんが、そんなものは捨てて大人しく飼われていろ」

最後の台詞がなんとも強いニュアンス——もしかして本当はこの為に態々やって来たのか？

「今度は俺が訊く。時間が惜しいから簡潔に答えろ——清隆はお前にとって害になるんじゃないのか？」

息子が何を考えてるのか想像が付いてるって訳ね——俺の事情を加味した上で客観的に見れば邪魔に思うって帰結は無難だ。

う〜ん……なんだかんだで、やっぱり親子だな。思考回路が本当によく似てる。

「手を組み気はありませんよ」

「劣化コピーでも頭は悪くないか——ならばいい、今の問答は忘れる」
そうなるならいいんだが、どうにも引つ掛かるものがあるんだが——
—なんて言っても時間の無駄だから飲み込む。

そして無言のまま門まで行くと立派なリムジンに乗って行ってしまった。

本当に無駄が嫌いなようだ。

それにしても思わぬ形で知りたかったことを知れた——当初に抱いたこの学校に拘る理由が無くなってしまった。

ここから先は無理に物事に関わっていく必要もなくなった——なんだか結局は有力者達あいつらの思い通りにされてるみたいだな。

普段なら先々をじっくりと考えるべきなんだろうが、今は揉め事の真っ最中だ。しかも外側の思惑が関係ないのは確実——これは大事にしないとイケないよな。

その次にある冬休みも然り、新しい特例では大きな仕事をするみたいな言い回しだったが、実際にそんなことになるかは疑問だ。

あれは体育祭時のように事が起これば、俺が自分で手を回してやって言う体裁を取る為だろう。気に食わないが手早い対応だ——更に記してあった金額は700万、詳細を煮詰めてなきやだが、益々俺を利用するか取り入ろうとしてくるものも増えてきそうだ。さてそれをどう捌くべきか………なんだかんだ俺も相当に馴染んでるのを実感する。

お前はどうか、綾小路？

夜になり静かな時間を過ごしたかったが、端末には裁判の進捗についての状況が列挙されてて休むどころではなかった。

一回目の審議は明後日、もう直ぐ冬休みに入ることもあって早々に決着を付けたいってのもあったりもするかな？ズルズルともつれこ

んで休みが削られる、また丸々無くなるつても考えられるし——ここから先はかなりのスピード勝負になるかも知れない。

そうなるかと、いや龍園が何をして来るのか？

これまでの体裁上はギリギリまでは何も出来ない。動くなら仕掛けた後じやなきや……ああ、改めて思うと難儀なものだ。

軽く飯を済ませて片付けた後、一階から呼び出しが掛かった——さて、誰だろうか？

そう思つてモニターを見ると堀北元会長の姿があつた。

「はい」

『夜分にすまん——少し時間を貰いたい』

「どうぞ」

オートロックを解除して中に入れ、その間に出迎える準備もする。ポットから急須にお湯を注ぎ、湯呑に緑茶を注ぐ——全く慣れたものだな。

部屋のチャイムが鳴り、部屋に入って貰うと出したばかりのお茶に目がいかれた。

「不意な来客にも対応できるようにしてましてね」

「新しい特例に対してか？」

「耳が早いですね」

ま、前回と同じだし特に驚くようなことでもないが。

既に生徒会を退いている元会長殿が知ってるなら、教職員だけでなく現生徒会も明日には全校生徒にも知れ渡ると見た方がいいな。

「それでまさか、そのことを言う為だけに来た訳ではないですよ？」

「関連はある——南雲は間違いなくお前への接触を増やして来る。そして来年以降は前代未聞の退学者で溢れかえるような仕組みを導入する——お前の特例はそれを円滑に進めるいい材料になる。そうして事が起これば、また新たな特例が増える。違うか？」

「新会長は命が惜しくないのか？それともそんなに沢山のスケープゴートを飼ってるのか？」

「奴は既に二年のほぼ全てを掌握している——やりようはいくらでも有るだろう」

「三年に残された時間はもう無く、対抗するには一年を使うしかないって訳か——そして俺はそちら側に着くと言うことで南雲政権の独走……独走を防ぎたいと？それなら話すべき相手が違うんじゃないですか」

「綾小路には何度か生徒会入りを打診してみたが、その気が無いようだな——まず興味を抱かせるのが先決だ。奴は南雲に限らず、お前が他の誰かに使われるなど気に入らないからな」

「なんともハッキリと言いつ切るな——ただそれなら、もつと分かり易い手段がある筈では？」

「坂柳を危険に晒そうとする真似は逆鱗を踏むどころではあるまい——その結果、南雲以上に危険な存在になってしまつては元も子もない」

元会長殿はひと息ついて、お茶を口に含む。

「それにそれを言うなら南雲は既に一之瀬にご執心だ——お前としては面白くはないのではないか？」

まだその話が生きてたか……別に俺としては一之瀬が誰とどうなるうが思うところは無いんだがな。

ただ余計な揉め事が増えることが歓迎できないのは、その通りだ。

それでも事態はもう動き出してる——おそらく、時間も然程掛からない筈だ。

「まず言っておきますが、俺から生徒会に干渉することは出来ない——それが例えどんな形であっても。」

それでもそちらの要望を叶えようとするなら、取れる手段は限られる——先輩の在学中にそれは訪れるだろうから、その状況下で動けるなら何とか動いてみましょう」

「聞きしに勝る以上に訳の分からない返答だな——まだ俺の知らない何かがあるようだが、聞くのは止しておこう」

その方がいいと判断したんだろうが、俺としては別に隠す気は無いし、綾小路が関わって……と言うより奴が主体となってやってくることだから、より元会長殿の要望に近づくとと思うんだがな。

「ご馳走になったな」

立ち上がり部屋を去って行く。

もう直ぐ卒業する人間がそこまで気に留める案件——それだけ厄介なのか、それとも堀北学にとつての痛恨の汚点だと思ってるのか？ 妹に伝えてやれば積極的に動きそうな気もしてきたが、その場合はどうして来るかな？

俺を敵と定めて来るか——そうでなくとも言ってることと全く違う心持ち、ぶっちゃければ闘争心が向けられるのが伝わって来たぞ。そんな俺と戦いたいかね——案外、南雲がアンタに対抗しようとしてきたのも必然だったのかも知れないね。

審議まで翌日に迫った朝のホームルーム、進捗状況の確認が行われる。

「Cクラスの状況や諸藤さんの調査は集まったけど——どれも決定打に掛けるわね」

壇上に立つ堀北が纏めた結論を出す、言葉ほど悲観的な様子はない。

「でもそれはCも同じ——問題のあった日から諸藤さんが普通に生活してたのは証言があつまつたし、今になって軽井沢さんの所為だと言いつ張るには説得力が乏しいわ」

「でもそうなることやっぱい解せないよね——どうして今更蒸し返しに来たんだろ？ 龍園くんなら舌の根の乾かない内に使つて来るような案件なの？」

櫛田が追隨するように発言し、違う角度での思惑があるのかと緊張感が教室に走る。

「単純に考えるとやっぱり囿や目くらましか——この問題に集中させるとして本命は他にあるとか？」

「その理論からすると狙いは俺たちじゃなくて他のクラスって可能性もあるな」

「ねえ。嬰兒くんは一之瀬さんから何か聞いてないの？」

「何も」

話の流れが変わり、嬰兒に注目が集まるがあっさりと終わる——訳もなく、追隨が来る。

「なあ、嬰兒はずっと他のクラスの情報も集めてたんだろ。本当に何もねえのか?」

須藤のもたらした情報に注目が更に上がり、期待感が増した。

「え、そうなのか?」

「鈴音が言っただぞ——前にもそれで龍園の罨を潰したって」

「え、マジで! やっぱズゲエじゃん!」

「流石だな」

「情報無くても何か意見とかはないの?」

称賛の聲が上がる中に今回の件に対する何かが無いかと期待の声も混じる——それに負けてか、嬰兒はやれやれと言った感じで口を開いた。

「少なくとも俺が知ってる限りで、Cが他に対してやってることは何もない。

狙いは間違いなく? だけだ——もつとも馬鹿正直に訴えを鵜呑みにするのはどうかってのは俺も賛成だ。

何をして来るのかは分からない——それは念頭に置いておくべきだな」

実に当たり障りのないことを言っ流してきており、積極性は見られない——その態度に当然不満もある者も出る。

「そんなこと言うんだったらさ、やって来そうなこととか、その対策とかも言ってくれてもいいじゃない?」

「松下さん。これはクラス全体での問題よ——嬰兒くん個人に頼り切るのはいくわ」

「だからこそだよ、堀北さん。嬰兒くんだった? クラスの一員でしょ——これまでみんなで情報集めたり対策練ってるのに何もして無いじゃん。」

いざって時が出番だっ言うかもだけど、一番いいのはいざって時が来ないようにすることでしょう——寧ろ、その方が嬰兒くんスタンスの事情に

だつてあつてるんじゃないの？」

いつになく饒舌に語り、それでいて的を射ている意見にその通りだと嬰兒への注目が更に集まった。

「と言うか、今が正にそのいざつて時だろ——試験でもない場外乱闘なんて仕掛けて来て、こつちも受けて立つんだ。何も遠慮することなんか無いんじゃないのか？」

幸村が引き継ぐ形で釈然としない嬰兒の態度に言及する——そこに櫛田が疑問を投げて来た。

「それとも私たちの知らない所で何かあつたの——あの新しい特例以外にも？」

櫛田の目にはありありとした興味があつたが——動き辛くなつたのならば言えと、心配の色も無い訳ではなかつた。

「そうなの、嬰兒くん？」

壇上の堀北も呼応するように言う——新たなる特例の他にも我慢があるなら、それに応じて対応を変えて行かなければならない。

極めて強力だが同じくらい面倒な存在カードに辟易した目を向ける者も居たが、我関せずで何もしないよりかはマシだと別の誰かを非難する目を向ける者も居た。

そんな視線を受けながらも高円寺はいつも通り無言でふんぞり返つており何もする気配はない。

「そんなのは無い——龍園の狙いが何なのかは皆目見当が付かん。今やつてること以上の最善がないから出番は無いと判断しただけだ」

尤もらしいことを言つて再び口を紡ぐ嬰兒——その消極的姿勢に更に更に文句が来そうにもなるが、

「龍園の狙いが見えてこないことについてはオレも同意だ——表向きの問題に目を行かせて罊を仕掛けてる可能性も。寧ろオレもそつちの方が高いと思う——なら仕掛けてくるとしたら審議の直前である今ぐらいだ」

「僕も同意するよ——今日まで軽井沢さんの周りには全く何も無かつた。狙いを定めてるにして不自然過ぎる。」

堀北さん言つた通り、これはクラス全体の問題だ——慎重に越した

事は無いと思うよ」

綾小路が意見を述べて嬰兒への注目を逸らす——それに乗る形で平田も入って来る。

しかもしつかりと堀北を立てるようにして——リーダー格全員の意見が揃ったことで反論は完全に封じられた。

「話を戻しましょう。指摘された通り龍園くんが何か仕掛けて来るなら今日であるのが濃厚——新しく大々的にしてくるのか、個人に狙いを絞って来るのかは分からない以上は各々で警戒していくしかないわ」

堀北の言ったことに緊張感が増し、気の弱いものは息を呑む。

「だから何か可笑しな兆候があったなら隠さずに直ぐに報告して、審議は目前である以上は手をこまねている時間は一遍もないの。絶対にCクラスの思い通りにはさせられないわ」

「おう。その通りだぜ、鈴音！もうあんな奴らに負けてたまるかってんだ！」

須藤の気合いの籠った前向きな言葉に教室が明るくなる。

そこでちょうどホームルームも終わり、話し合いは上手くまとまった体裁で終わった。

今朝の事があっただけにいつも以上に緊張感が増した授業風景が続いている——ただ皆が思っているのは龍園が何をして来るかなのかは明らか。

授業が終わると廊下に目を向けたり端末で掲示板を見たりと何とも落ち着かない様子だが、特に何も起きることなく昼休みを迎えた——そして遂に来た。

教室の外には龍園がCの生徒を引き連れてやって来た。

「何の用だ？……は？クラスだぞ」

須藤が警戒感むき出しで威圧するように言う——尤も気にしてるのは堀北の方で、自分が守るとかって思いがありそうだ。

ただそれを言うなら一番気にしなきゃいけないのは軽井沢であり、何故か平田かれしでなく俺の方に目を向けてる……おいおい、それはどうなんだ？

そして平田の方もまったく気にした素振りもなく、それでも庇うように前に出る。

「審議はまだ先だよ——こんな真似は不利になるんじゃないかい？」

「安心しな。特に何かする気はねえ——ちよつと喋ったら直ぐに帰る」

にべもなく言いきりやがる龍園はさり気なく俺を視界に居れ、連れる連中の中には俺を意識してるのが隠しきれないのも居た。

何が目当てでやって来たのか、誰の目にもなんとも分かり易いシチュエーションだ。

「今回は随分と大人しいじゃねえか、牛井。もつとやりやえると思つて色々と期待してたんだがな」

「そんなに俺と戦いたいか？」

「それはそっちもそうだろう——俺の下に来れば存分にその力、存分に使えるようにしやるぜ」

なんとも見え見えの挑発だ——それが分かかって乗つかるのも癪つて感じて堀北が出て来た。

「もう勝った気でいるのかしら、気が早いんじゃない？」

しかも挑発を挑発で返してやがる。

「ククク——そっちこそ可笑しなこと言うな。少なくとも俺はお前らに負けたことなんてねえ筈だがな」

「そうだが。俺たちが負けたのは牛井にだ——それ以外はザルじゃねえか」

連れて来た取り巻きの一人の発言に教室に居る何人かは気が立つたようだが、

「そうね——嬰兒くんの前にして貴方たちは戦う前に尻尾を巻いたものね」

堀北が上手く立ち回って抑えた。

「あの時は時間の無駄だったからな——有意義な時間を満喫しておま

けに稼ぎにもなった」

不戦敗とは言え、得るものはあったってか——実際にその通りだが、過ぎた話をしに態々来るほど暇じゃないだろうに。

龍園は再び俺に目を向けながら言った。

「動けねえのはやっぱ新しい特例があるからか？ そうだって言うなら儲けの出る方法を一緒に考えてやってもいいぜ」

「それはどうも御親切に、とでも言えばいいのかな——ただ使い道に關して考えが無い訳でもないぞ」

このひと言に空気がガラリと変わった——特に綾小路の目が暗く光ってるな。

「くくく、そうか。それは無駄な気をまわしちまったな」

対して龍園はすこぶる愉しそうに笑う——実際にそうなんだろうな。その調子のままに軽井沢を一瞥しながら言う。

「審議の場では徹底的に遣りやおうぜ——余人を交えずに戦うのはオメエの望みでもあるだろう？」

俺もお前も同じ穴の貉だと言いたげだな——ただ俺が存分に戦うことが出来るのかどうかは未知数。

そっちこと俺の期待を裏切るんじゃないぞ。

「ふん、邪魔したな」

無言でそんな目を向けていると龍園も悟ったのか、意味深な笑みを浮かべ去って行った——と思いきや連れて来ていた女子の一人が不満そうな顔してたのであつさりした口調で言った。

「言いたいことがあるなら言つときな——真鍋」

「——」

許しを得た真鍋が一瞬驚きながらも意を込めて軽井沢に向かいきつい顔を向ける。

その様子に軽井沢は身構えることも驚く様子も無いから初対面でも意外って訳でも無いようだ。

「いつかのアンタが言った通りになったわね——リカにしてくれた分の報いはきっちり受けて貰うから」

「そうやって因縁付けて際限なくタカつてくるわけだ」

軽井沢も前に出て強気に言い返した——アイツもアイツで憤りみたいのを感じてるみたいだな。

なんとも不満のぶち明け合いをしてる様だ。

「前に謝ってくればいいとか言ってたわよね——それで済ます気なんて更々なくせに正義面するなんて反吐が出るわよ」

「逆ギレしてんじゃないわよ!」

「おい。止めろ」

一触即発しそうだったのを龍園が静かに、それでいながらドスの入った声で止めた。

「戦うのは今じゃねえ——余計なことはするんじゃない」

そう言つて黙らせた——品の無い光景だが、統率力の確かさを思われ教室内には僅かに憧れみたいな目を無得る奴もいる。

「それで格好つけてるつもりかしら?」

それを察してかは分からないが、堀北が再び前に出た——カリスマを比較すると少し物足りない気もするが、その分は品位でカバーしてるから引けを取るものじゃない。

「堀北さん、一々引き留める真似は止そうよ。折角、帰ってくれるつて言うんだから」

榎田もそれに張り合おうとしてるのも一緒に出て来た——そして出て来た榎田に対して龍園は下品な笑みを浮かべた。

「随分な優等生ぶりだな、桔梗。船上での時は鈴音を退学させたいつて手を組んだのに」

「あの時は嬰兒くんにちよっかい掛けられちゃ堪らないって思ったからね——彼の持つてるものは全部私の物したいのは今も変わらないよ」

突然のカミングアウトにあっさり即答したこと? だけでなくCの奴らも目を丸くした。

「もう隠れながらコソコソするのは止めたの——そちらさん達はこの学校での一番に固執してる様だけど、私はもつと上に行くよ」

そして堂々と野心を隠さなくなった——裏切りの暴露など霞んで

しまうほどに。

「……この間、龍園くんに聴いた時は半信半疑だったけど、本当だったのね」

「あははは、私の事嫌いになった——堀北さん？」

「いいえ、当時の私が不甲斐なかつたのは事実よ——何よりも大きくなったあなたの欲は分かり易くて、返って信じるに値するわ」

「誉め言葉と受け取っとくけど、使えないと判断したら容赦なく切るよ」

この前から間を置かずに再びの宣言——大半が付いていけなくて唾然として、俺を含めそうでないのは清々しきさを感じてるな。

「くくくくく——予想以上にいいもの見せて貰えたな」

そして龍園はひと際面白そうに笑う——裏切りを暴露して掻き回すつもりだったが空振りになった格好なのにな。

そんな面白そうな顔を改めて俺に目を向けた。

「改めて審議の場では楽しみにしてるぜ。存分に遣り合おうぜ」

「ああ、望み通りにな」

無難風に返すと満足したのか、去って行った。

教室内では緊張の糸が切れた感じになり殆どが安堵の息を付いたが、そうもいかないのも居たりする。

「ね、ねえ……ちよつと……今の話って本当なの、榎田さん？」

「龍園くんと組んで堀北さんを嵌めようとしたことはね——でももうその気はないから安心して、ってのは無理な注文だよね」

軽井沢が動揺気味に尋ねてきたが榎田は平然と、いや最早開き直ってる——そしてさり気なく俺との距離も詰めて来てる。

と言うか軽井沢が看過できないのは寧ろそっちの様だな——僅かだが焦りが濃くなってるやがる。

「嬰兒くんはどう？クラスを後ろから刺すのなんか要らないって言うなら、今直ぐに言ってくれば今からでも出ていくけど」

そしてゆっくりとブレザーのボタンを外していき、内ポケットから『退学届』と書かれた封筒を見せて来た。

誰もかれもが唾然とする——いきなり色っぽい事を始めて少し興

奮気味だった奴らなんかの期待外れを大いに吹っ飛ばしていた。

そんなクラスメイト全員に向かい櫛田は笑顔のまま言った。

「みんなも私の事が信用できないってのも仕方ないよね。これは私自身のことの結果なんだから——だから私なんか要らないって言うなら、嬰兒くんを説得してね。嬰兒くんが“うん”と言ったら喜んで退学するし、勿論誰も恨んだりしないよ」

捨て身で来たか——何より命の危険に怯えながらずっと考えてたのは間違いない。言い回しに一切の淀みがなかった。

「ど、どうして……そこまでして嬰兒くんに拘るんだい?」

平田がやつとの思いつて感じで櫛田に訊いた。

「言ったでしょ——Aクラスよりもっと上に行くって。そしてその為になんかを諦める気は無い、私って結構欲深いんだよ」

完全にキャラが変わった——いや棄ててしまった櫛田だが、前以上に生き活きして見える。何より本当に笑みも言葉のニュアンスもひとつつ含みを感じさせない本心であると実感させられる。

「ハハハハハハ」

だからか、俺も自然と笑ってしまった。

「ど、どうしたの?」

軽井沢が冷や汗かきながら尋ねて来た——当然、他の奴らも注目して、妙な緊張感が広がった。

「面白い——ただ口で言うほど容易い道じゃないぜ。寧ろ険しいどころじゃない、命懸けの道だよ」

「そうじゃなきゃ、登り甲斐がないじゃん」

とことん挑戦的に返すか——どこまで行けるか見てみたいって衝動が湧いて止まらない。

それは殆どが同じようで、疑心に駆られてた奴も今は好意的に近い感情を向けていた。

「それじゃ、手始めに今度の戦しんぎいで龍園たちをギャフンと言わせてみよう」

それを見逃さずに即座に仕切り始める——この辺りは流石と行ってやるべきだな。

「言われるまでもないわ——でも櫛田さん、一人で勝手に動くなんてのは認められないわよ」

堀北が呼応するようでありながら、しっかりと釘を刺して来る——こいつもクラスでの主導権を譲るつもりはないようだな。

協調してるとは言い難い——でも反目しあつてる訳でも無い。

堀北と櫛田——二人が初めて噛み合った、いやこの二人が？クラスの主役になった瞬間とも言うべきかな。

「勿論だよ。Aクラスを——上を目指して行こうってクラスである限り、私も全力は尽くす」

「十分ね。私は私、貴方は貴方——目的は違えど目指す所は一緒。そっちも異存はないでしょ——嬰兒くん、綾小路くん」

さり気なく俺たちまで巻き込んでも来た——全く随分とまあ、肝が据わって来たものだ。

「オレも目的が果たせるなら異存はないぞ」

「もう、きよぽん。そこは坂柳さんの為ならでしょ」

長谷部の言う事に佐倉を始めとしたグループメンバーも肯いてやる——もうすっかり馴染みな光景だが、教室内は朗らかなになり龍園がバラまいた事実は返って結束を固めた形に見えた……でもなんだから取り残されてる節のあるのも居たりするよな。

ただ出しゃばって来る事は無く、今日はこのまま解散となった。

才能が・・・

日も完全に暮れ、腹も空いたし何か飯でもとか思ってたらチャイムが鳴った——出て見ると深刻そうな顔した軽井沢の姿が。

『ごめん。ちよつと話したいんだけどいいかな？』

「悪いけど、まず飯を食いたいんだ。一時間、いや三十分したらまた来てくれ」

『そ、それならさ、あたしがご飯作ってあげるから——材料ないなら今から一緒に買いに行かない？』

「傍から見て、物凄く不味いシチュエーションだな——丁重にお断りするから、時間を改めてくれ」

『お願いーどうしても直ぐじゃなきゃいけないの！平田くんには誤解されないように言つとくから』

何が何でも部屋に入つて来るつもりか——このまま騒がるのも嫌だし仕方がないか。

軽井沢は入つて来るなり部屋を見渡して冷蔵庫に目を止めた。

「開けて見て言い？」

「ホントに作る気か——何か話があるんじゃないのか？」

「いや、それはそうだけど……お腹空いてるんでしょ。迷惑だったら止めとくけど」

無理を通しての自覚はまだある訳か——なら下手に拒絶するのは良く無さそうだ。

「好きにしてくれていい——ただ、そんな凝ったものじゃなくていいんで」

「うん。分かった」

許可した途端に軽井沢は冷蔵庫を開けて中を吟味する。

「結構揃ってるね——嬰兒くんって料理してるの？」

「そこそこな」

「へえ〜」

軽井沢は中から食材を取り出し調理していき、その姿はすぐく様になつている——俺に言わせればお前が料理してる方が意外だな。

程なくして軽めの食事が出て来た——見た目も臭いも良く、味も素朴だが、それだけにどんどんと箸が進んでいった。

「ふう〜、ごちそうさま」

「そ。じゃ、片付けるね」

「それは自分でやる——それよりも話ってなんだ？」

嬉しそうに弾んだニュアンスで食器に手を伸ばすのを止めて、用件を尋ねると一転して余裕がなくなった。

「嬰兒くんさ——櫛田さんのこと、どう思う？ 期末が終わってからすっかり変っちゃったし、今日のことだって……」

「変わったんじゃなくて、あれが本音なんだろう——欲深くて、自分の利にならないのには容赦ない。実に人間味が溢れてるし、何より堀北と二人でクラスをどうして行くのか——やらせてみたら結構面白くなりそうだな」

思った通りのことを返したが、軽井沢の表情は益々曇っていく——そして今言った中で特に反応したフレーズで、何しに来たのかも察しが付いた。

「……やっぱりあたしとは全然違うね。この前も思ったけど、なんでそんなに強いのに自分の人生諦めちゃってる訳？」

「その為に存在してるからだ——寧ろ俺如きにそんな労を割くぐらいなら、別の奴らに使って貰いたいぐらいだ」

「答えになつてないよ——あたしが訊きたいのは、あんたがどう思ってるかよ」

なんとも切実な顔をするな——相当思い悩んでここに来たと考えてもいいか。ならば黙って続きを待つか。

「……………不安だの怒りだの、そんなのは無い訳？」

「握られてること自体にはないな——ただ当初課せられたルールは順守してるんだから、それ以上は止して欲しいってのはある」

「結局、不満はあるんじゃない……一体何して、そんな目に合ってる訳？」

「俺は何も——強いていうなら身内の責任を取らされただけ」

取り敢えずは内実に触れないようギリギリを見て返してみたが、軽井沢が意外な表情を隠しきれていない——何も答えないか、適当にはぐらかして来ると思ってたのかな。

「尚更理解できない——結局あんたは悪くないじゃん」

「お前が理解する必要はない。そもそも身の上話なんてする気はない——だからお前の方もいらん。同情でも惹きたくて来たなら出直して来い」

「!?あたしだって、そんなのするつもりなんて無いわよ!」

どうだかな——ここに来た時には何が何でも擦り寄って俺を後ろ盾にしたいって顔に書いてあったぞ。

しかし、そこまで言うなら取り敢えずは話を合わせてやるか。

「やっぱりクラスの女王様に返り咲きたいか? Aクラスを目指さないんじや、俺は一切力添え出来んぞ」

「別にあたしだって、堀北さんがクラスを引っ張って行くのに反対な訳じゃないわよ——ただAクラスになりたいってのと櫛田さんとのことが、ごつちやになってる気がしてて」

「それだけ惚れ込んでることだろ——実際問題、堀北のパートナーとしては申し分ないし何も問題ないだろ」

「けど……櫛田さん、クラスを裏切ってたんだよ。それに邪魔な奴や切るって……」

「騒動の結果次第で自分が切られるかも知れない——それが不安な訳か」

そして櫛田はAクラス以上に俺に固執してる——退学届を出すことで覚悟のほどを示し、俺の意志を優先するとまで言ってきた。

裏返せば、俺がやるなど言えば安泰な訳だ——だから再び俺に擦り寄りを見せ来たと、なんとも分かり易いな。

ただ俺も特定の個人に固執する訳にはいかない——クラスも然ることながら学校全体のシステムに従っているポーズはどうしても通さきやいけない——それを承知で無茶をする為には相応の理由が必要だ。

——無礼な言い回しだが、一応論理立てつつ、俺にもメリットを用意している。

「使い古されてるが有効な手段ではあるな」

「じゃあー」

「却下だ。お前のおもりの為にそこまでするメリットが足りない——そもそもにおいて、お前は何が欲しいんだ？」

強い力を求めているのは分かるが、それでどうしたいのか？

その辺りがどうにも見えてこない——今クラスはいい感じに纏まりつつあり、今回の騒動に關しても力を合わせて戦おうとなつている。負い目があつたとしても焦つて覆さなきやいけない理由なんて無い筈だ。

櫛田の切ると言う発言に關しても軽井沢は纏め役としてよくやっている。もつと自信を持つても……いや寧ろ普段のコイツなら逆に脅し返しそうなものなんだがな。

「何が欲しい……………」

おやおや、やたら神妙な顔になつて——ならば久しぶりに。

「もしも、どんな願いでもひとつだけ叶うとしたら何を願う？」

「嬰兒くんと同じくらい強く……ううん、あなたの飼い主と同じくらいに力が欲しい」

櫛田と同じようなことを瞬く間に即答——だがあつちは飽くなき欲望あこがれつて感じだが、こつちは至極切実なニュアンスに聴こえる。

全く持つて余裕がない——庇護者おほやを求めてとかの状の類でも言うと思つたが、純粹に力が欲しいとはな。

「その力で何をしたい？」

「あたしの邪魔になる奴、皆まとめて叩きのめしてやりたい——それこそ二度と向かつてこないくらいに」

「なんと、まあ」

途轍もなく浅はかで美しくも面白くもないことだ——ただふざけてる様には見えない。寧ろ、より真剣なニュアンスであり深い怒りを感じさせた。

流さずに考え突き詰めていくと過去に相当なことがあったのは想像が付く——確信があつた訳じゃないが、死にそんな目にあつたつて言うのはいよいよ本当なのかもしれない。

目を『魚』モードにして軽井沢恵をよく観てみる——少なくとも目立つた後遺症みたいなものはない。

「な、なによ。突然、ジロジロと……」

気持ち悪いと感じたか身じろぎするが、それが返つて仇になつたな——腕を組んだ際に脇腹、特に左側を強く押した。

無意識であろうが、それだけ心に刻まれた何かがある証明だ。

「腹が痛いのか——特に左側?」

「?!そ、そんな訳ないでしょ!?!……なんなのよ、いきなり!」

おうおう、あつという間に青ざめて立ち上がった——更にそのまま化け物を見るような目を向けて来て怯え切つてる。

「なんだつたら、今診てやろうか?」

「!?!」

あらく、更に顔が引きつつてしまった——ついでに左脇腹に当てたままの手をより強く押し付けてる。

これじゃ、注視するなつてのが無理な注文だよな。

「い……いいか、いい加減にしなさいよ、この変態!」

たどたどしくもなんとか絞り出したが、完全に余裕がなくなつてて呂律も思考も回り切つてないな——これじゃ何を言つても無駄そうだから無言で待つ。

しかし軽井沢の顔色は良くなる気配はない——どんなことが頭の中で駆け巡つてるのやら。

「い、言つとくけど無理矢理とかするなら大声出すわよ……押し倒されて乱暴されたつて叫び散らすから」

成程、こいつの中で俺はすっかり暴漢認定されてるか——いつ襲い掛かって来るんじゃないかかって恐怖で一杯だと。

「何もしやしないから安心しろ——それも信じられないなら、早く帰れ。やせ我慢も限界だろ」

「?!い、言われなくなつたつて……もう二度と来ないわよ!」

叫ぶと同時に勢いよく部屋から出ていく——全く本当に何しに来たんだかな。

無人島では止めといたが、今回は少し考えてみるか。

まず第一に俺の後ろ盾を得たいのは確かだ——それは何故か？

最初はアクセサリ——感覚でスペックの高いのに目移りしてるだけかと思っただが、接してて感じたのは親を求めるものだった。

だから優しいお兄さんみたいな平田に擦り寄り、我儘して構って欲しい。少々困った、それでもありふれた思春期の子供——実際に船上試験で離れていた際はやたらと俺に電話して纏わりついてきた。

戻って来たから少しは落ち着いたら、飽きたのかと思っただが、どうもそう言う訳でもないか。

あの切羽詰まった顔は尋常ならざるものがあつた——あれは間違はなく死の恐怖を味わった奴の顔だ。

そして“受け継いだ”記憶を辿っていく中で該当するのは、心が折れてしまった類——ある意味で、挫折したかつての『寅』を想起させる。

まあ、もつともあつちはそれでも自力で立っていられるだけの下地があつたが、軽井沢にはそれはない——だからこそ、より強い存在に継りつきたいのか。

普段の強気が去勢なのは分かっていた、今の考察を根底において導き出されるのは“トラウマ”を負った事件の被害者。

身体以上に心に大きな傷を負ってて、それは未だに治っていないか。

さて、どうしたものかな。

荒い足取りで寮の廊下を歩いて行く軽井沢——その頭の中は数分前とは比にならない程に乱れまくっていた。

(ああ。なんなのよ、なんなのよ、なんなのよ！)

つい先程の嬰兒から向けられた目が脳裏を過ぎり、混乱は加速していく。

焦ってはいたが過去を気取られないよう注意は払っていた——それなのに、ただ見ただけで最も隠したかったものを気取られた。

色々な意味で只者じゃないのは解り切っていたが、いざ自分が体験してみるとやはり化け物だった。

一体、どんな経験をしてくれば、あんな洞察が身に付けられるのか。
(だいたい綾小路の奴も話が違うじゃない——守ってくれるって口添えするって言うじゃない！)

そう言う約束だからこそ協力することになった——そうして来た時間は悪いものではなかったからか、すっかりと約束の事が抜け落ちていた。

(ああ、もうなんでこんなことになるのよ)

そもそも、船上でこの件が話題に上った際は綾小路の介入により話は流れた——相手側は大事になることに慄いており、もう触れられる事は無いと思った。

なのに今更になってぶり返し、クラスどころか学校を巻き込んだの事態に発展——クラスメイトが味方になってくれてはいるが、それはあくまでCクラスと戦うことが主目的であり、軽井沢の事は口実に過ぎない些事ではない。

そのこと自体は別にいい——問題は状況次第によっては軽井沢自身への探りが始まるかも知れないこと。

下手を打てば最も知られたくない過去のイジメまで暴かれる可能性もある——今の状況下でそんなことになったら、軽井沢恵は終わるだ。

嫌な想像ばかりが浮かび、ストレスも高まっていく。

軽井沢は端末を取り出して綾小路の番号にかける——今すぐにも問い質さなければ本当に気が狂ってしまいそうだった。

『もしもし』

綾小路は直ぐに出たが、その淡々とした声は軽井沢の昂った精神を諸に刺激した。

「……今何処に居るの？直ぐに会って話したいんだけど！」
それでもどうにか声を抑えて言う。

『直ぐにか——悪いが少しでいいから時間を置けないか？』
「今直ぐよ！早くすっ飛んで来なさいよ!!」

『……………』

完全に切れて怒鳴り散らす——間違いなく電話の向こうで綾小路は絶句しているだろう。

そんな綾小路の向かいには残念そうな顔をしている坂柳が居た。

ケヤキモールのカフェのひとつ——夕食を終え、他愛ない談笑をしていたカップルの様相だが予期せぬ終わりに不快を抱かずにはいられない。ただ、

「清隆くん。私の事は気にしなくていいですから、行ってあげてください——何やら余程の事のようにです」

坂柳はしっかりと相手を立てて、笑顔で送りだそうとする——実に献身的な姿に余計に申し訳なさが湧いてくる。

『……………なに、坂柳さんも一緒に訳？』

電話の向こうで軽井沢の不機嫌な声が出て、それは増していく。
「まあな。ともあれ直ぐに行くから適当な所で落ち合おう」

綾小路は場所を指定して通話を切る——それを見ていた坂柳は笑顔だが、綾小路には残念がっているのがよく分かった。

「本当にすまん。少しはゆっくり出来ると思ってたんだが、バタつて」

「そちらが今、面倒事になっているのは存じてます——さっきの怒鳴り声からしても相手の方も相当に心細いみたいですね」

一定の理解を示す態度に心が少し軽くなる——ただそれでも完全に割り切っている訳でもないように、

「一件が片付いたら、しっかりと埋め合わせはして貰いますから。特にもう直ぐ冬休み——今度は私たちが主導でアレに当たるようにしましょう」

「あ、ああ」

執念にも似たものを出してきて、思わず気後れしてしまった。

ああ、なんとも目が冴えてしまうな——審議はもう直ぐ、場外乱闘によるクラス同士の一騎打ち。

龍園も堀北も本腰を入れて遣り合う展開だし、過程も結果も揃ってどるなるか今から楽しみで仕方ない。

ただ肝心の主役であるべき軽井沢がどうにも揺らいでいるのは頂けないな——もつと毅然とした態度で臨んで堀北に負けじと張り合いなながら、盛り上げて欲しかったのが理想だったんだが……。

ここはもうひとつダメ押しが必要な。

そう思うが、冬休み間近とあって俺に接触して来ようする輩が後を絶たず、やっぱり動き辛い——審議の事で忙しいと何とか躲しているが、それならばと何とも怪しい情報をチラつかせて来るのも居たりしてマジで鬱陶しい限りだ。

『地の善導』を駆使して無暗な接触は避けてるが、動きが妙な感じに阻害されてしまう——僅かな隙でもあれば『天の抑留』を使ってまた遥か上空に逃げることも出来るのだが広範囲での視線がある以上は下手な事は出来ない。

必然的に使えるのは『鵜の目鷹の目』になるが、やっぱり餌代がネットクダ——徹底管理されている敷地内では海に出て自力で魚を調達するのも出来ず、どうしてもポイントで買うしかない。

ああ、考えてるとまたストレスが増して来る——春頃みたいにもた酒でも飲みたいぐらいだ。

ま、流石にもう無理だけど……と益体の無いこといつまでも時間を割いてはいられない。

さっきの態度からすると命に関わることに遭遇したのはもう間違いない——そしてそれは左腹に明確に刻まれてるだろう事も確信した。

その事を自分から話すこともありえないこともな——長年によって苦しんでるのが一朝一夕で覆せるわけもない。それなりに時間が掛かるのは明白だが、俺はそこまで悠長に付き合っつてやる訳にもいかないし、その気もない。

それをやるべきは、あいつの親友になれるような思いを持った者とじっくりやっていくしかない——そうなると現時点での有力候補はあいつだな。

端末を取り出して話すべき番号に連絡を入れる——予想通りに直ぐに喰い付いたから、必要な情報も渡す。あとは吉と出るか凶と出るか、それとも出ないままに終わるか、その場合は………仕方ないよな。

すっかり暗くなり、人目の付かない一角に軽井沢は一人、綾小路を待っていた。

端末を取り出し時間を潰そうとも思ったが、どうにもそんな気分になれずポケットにしまい直す。

軽井沢の脳内には先の嬰兒の関心の無い態度だけでなく、訴えられた直後に行われた聞き取り調査で問題はなかったか——今はCクラスに向かっている関心がいつ自身に転じるかも知れない等の悪い方向への想像が次から次へと湧き上がっていた。

(早く来なさいよっ——全く!)

時間が過ぎていくのが異常に長く感じながら待つこと数分——漸く来た人の気配に無意識に声を上げた。

「遅い！一体、何してたのよ!?!」

「え、なに?」

「どうしたの、軽井沢さん?」

ただその相手は綾小路ではなく、自身が所属しているグループの佐藤麻耶と松下千秋だった。

「え、あ……その……えっ………」

全く予想外の展開に呂律が回らずに動揺する軽井沢——そんな彼女を困惑顔で見ながら松下が声を掛ける。

「なんだか、凄い顔色悪いけど……嬰兒くんと何かあった？」

「え、平田くんじゃないの？」

松下の質問が解せず佐藤が至極真つ当な疑問を口にする——軽井沢も同様のようで無言のまま“なんで”と顔に書いてあった。

「いや、この際だから言うけど……軽井沢さん、平田くんから嬰兒くんに乗り換えたがってるでしょ」

この説明に軽井沢はかつて平田に言われた『見る人が見れば分かる』の台詞が思い出され動揺から絶句に変わった。

そして直ぐにそんな観察眼を披露した松下に疑念の目を向ける——今まで猫を被っていたのかと。

「あー、実はかく言う私も嬰兒くんいいなって、かなり前から思ってたさ——色々興味尽きないんだよね」

それを直ぐに察したのか、自分も同じだからと一応の納得が出来る説明をする。

「この前の新しい特例もそうだけど——もう直ぐ冬休みじゃん、外との唯一の窓口なら頼みたい事もあるし」

「ああ、分かるな。どうしたらあんな特別扱いされるのか——謎を隠そうともしないのも不気味さを通り越して余裕すら感じるよねえ」

嬰兒の訳の分からなさの話題に盛り上がりを見せ始めたが、

「待たせてすまん、軽井沢」

本来の待ち人である綾小路がやって来た。

その余りの絶妙なタイミングに話を中断させる為——要するに少し前から居て訊いていたことを示唆させる。

「え、こんな所で密会……大丈夫なの、綾小路くん？」

佐藤が不安交じりに綾小路と軽井沢を交互に見ながら訊く——この素での反応に新たな緊張感が走ったが、当の綾小路の反応はあっさりしたものだった。

「有栖と一緒にだった時に呼び出されたから何も問題ない——オレの事より、お前らまで一緒だったのは驚いたな」

「ああ、私たちは偶々だよ——軽井沢さんが真つ青な顔してたから思わず後付けちゃって」

「うん……審議も近いし、不安ならやっぱり話して欲しいなって」

友情を感じさせる言葉は本来なら有り難いものだが、絶対に訊かれたくない話をするつもりだった為にまるで喜べない軽井沢——そんな彼女にお構いなく綾小路はあつさりとした態度のまま切り出した。

「それで一体何の用だ？」

「そ、その……」

軽井沢はさり気なく松下と佐藤を見て言い辛そうにする——聞かれない話をするから行って欲しいと無言のポーズだが、二人（特に松下）は引き下がる気は無いようで覚悟を決めた目で言う。

「嬰兒くんが動いてくれないことの愚痴でも言いたかった？」

「これはクラス全体の問題だぞ——嬰兒に固執するのはどうかと思うぞ」

いきなり確信を突かれ、冷や汗が出る軽井沢に対して綾小路は透かさず返す。嬰兒の話題——それも本人が積極的に動けばと言う流れは歓迎できるものではない。直ぐにでも断ち切り別の話題に移ろうと試みようとした。

「されど綾小路の回答は想定内だったのか、松下もまた即座に言ってきた。」

「でも嬰兒くんも？クラスの一員でしょ」

この話題から移るつもりは絶対にならないようで、どうやら覚悟の程も相当なようだ——この場から離れるつもりも皆無らしい。

その姿に今の状況は本当に偶然なのかと疑問が浮かぶ綾小路——そんな視線を受けた松下は受けて立つと言った表情だ。

「嬰兒くんもさ、もっと動き易くなれば上に行けるのも捗るでしょ——だから軽井沢さんが嬰兒くんの彼女になるのも応援したいんだあ」
「そうだよ。綾小路くんみたく好きな娘の為ならモチベーションだつて上がりそうだし」

松下の意見に佐藤が同調して来るが、趣旨が若干ズレており微妙な間が出来る。

「クラスを率いるべきは堀北であるべきだ——それが嬰兒の為にもなるから、余計な茶々は止して欲しいんだが」

「うわあ、キツイね。綾小路くん」

「ねえ、松下さん——あたし別に嬰兒くんにそう言うの持っていないから、期待してみたいで悪いけど」

軽井沢は提案を呑めないで暗に断り、多少強引にでも話を終わらせようとする——そこに綾小路も追従するように妥協案を提示する。

「クラスの体制に言いたいことがあるなら、嬰兒本人や堀北も交えて日を改めて話をしないか——ここで勝手に話を進めても意味はない」「そうかな——軽井沢さんの意志を固めるのは、少なくとも私たちにとっては大事なことだよ」

松下は改めて軽井沢を見据え、その真剣な仕草に軽井沢は息を飲んだ。

「ずっと一緒に居たんだもん。困ってたり不安なら力になりたい——それが嬰兒くんでききや嫌だつてなら応援したい」

再び友情を押し出して来る——佐藤も追従して力になりたいと言う思いを目に込める。

(どうやら相当の準備をしてきたようだな)

綾小路は半ば感心し、生半可な誤魔化しは無理だと悟った。

「済まないがその点に関しては余力になれない——軽井沢とは嬰兒の意に沿う形でのクラス作りで協力してるだけで、色恋に関しちゃうノータッチなんぞな」

「えー、坂柳さんとはあんなにラブラブなんだからアドバイスのひとつぐらい——」

「佐藤——オレと有栖とをそのまま当てはめても役に立つことじゃない」

ハッキリと言い切る姿は想いの強さを物語っており、女子ならではの羨ましさと憧れが込み上がる。

「ホントに格好いいねえ——坂柳さんが居なきや、私が告白してたよ」

「……それは、どうもありがとう」

思いがけない言葉に一瞬、言葉に詰まる綾小路——そして場の空気

は僅かに和やかなものに変わっていく。

「いいよねえ、こんな風に和気あいあいと盛り上げられるのは青春の醍醐味だよねえ——特にこの学校じゃ貴重だよ」

「だよねえ、松下さんの言う通りだよ——だからこそ、もうモヤモヤしたままのはどうにかしなきゃね」

直ぐに一転して真剣な雰囲気醸し出す佐藤は松下を見ながら肯き、切り出した。

「ここに来る前に話してたの——今回の件の発端、Cの娘との事は私たちにも責任があるって」

「そう。あの時、有耶無耶に流さないでキチンと謝つとくべきだったって」

「ちよ、ちよつと——」

軽井沢は望まぬ流れに声を荒げるが、二人は引く気配はない。

「最初に非があつたのはこっちなのは間違いないでしょ」

正論ではある——ただ軽井沢は過去の経験から弱みを見せられず、またそれを見せたなら際限なくやり続けると直感し、事実として今窮地に陥っており他に選択肢がなかった。

そんな軽井沢の不安を見て取った佐藤は、しっかりと向き合つて言った。

「もしその後で言い掛かりをつけて来たなら、その時こそ出るところ出て白黒ハッキリさせる——そうすべきだったって」

その姿は紛れもなく佐藤麻耶の本心だと思わせる——真正面からぶつかって来るのは美しさすら感じさせる。

「嬰兒くんや綾小路くんに比べたら、私たちなんて微々たる力しかないのは分かってる——でも友達が困ってるなら、やっぱり力になりた

い」
更にその姿勢は軽井沢の心をざわつかせた——それと同時に逃げ道を塞がれ追い込んでいた。

気圧されてる顔に冷や汗が滲み出るの見て、松下が冷静にフオロ—を入れる。

「別に今直ぐに信用して全部を曝け出してなんて言わないよ——絶対

に守り切れる自信なんてないしね」

この状況に綾小路はどうしたものかと思案する。

既に流れは隠し事を止めて全てを話せとなっている。綾小路としても軽井沢の過去や内面に關してもさわり程度しか知らないので強く出ようと言う気が起こらない——このまま流れに乗って、全てを話させるのも悪手ではない。

(ただ、ここに居る全員と嬰兒を天秤に掛けてなら……やっぱり嬰兒の方に傾くだろうな)

それと同じ結論を得ているのか、戸惑っている軽井沢を必要以上に追い詰めないようにしてきた松下——何が彼女にここまでさせたのか、今まで手を抜いていた状態を脱却しようと思ったのか。

(まず確かめるべきはそこか)

考えを纏めた綾小路は松下に向かい言った。

「いつにも増して積極的だな——何かあったのか?」

「私さ——この前、嬰兒くんに聞いたんだよね。本気で戦いたくないのって」

特におかしなこともない話だが、松下はスツと軽井沢に視線を移して続ける。

「その時は透かさずに軽井沢さんが話を逸らして流れちやっただけ……思い返せば、そう言う事って初めてじゃなかったよね」

「偶々だよ……仮にワザとだとして、どうだって言うのよ?」

「別に何も——ただ、軽井沢さんが嬰兒くんに尽くそうとしているのって、Aクラスになる為になるなら、何ひとつ力を貸さない理由はないじゃない。私だってAクラスで卒業したいから」

松下が語ったその理由は誰もが考えなかった訳はなく納得のいくものだった——しかし綾小路は今ひとつ納得しきれない顔で訊いた。

「本当にそれだけか?」

「ぶっちゃけると、ずっと前から気になってたんだよね。嬰兒くんのこと——本当に何者なんだろうって?」

色恋とは全く違う好奇心が透けて見える発言——彼女もまた、櫛田に影響を受けたかと綾小路は悟った。

(全く持って余計なことをしてくれたな——それとも異能のことまでは知られてないのを安心すべきか)

綾小路が本当に欲っしてるものとは被らない為に焦りはなく、既に学校中から好奇心な存在として認識されているだけに冷静に構えることは出来た。

「お前も嬰兒を暴くのに軽井沢を使いたいってことか？」

「そう言う言い方は人間きが悪いな——友達として恋心を応援したいって気持ちに嘘はないよ」

「櫛田だけじゃなくて堀北にも感化されたか……それとも逆か？」

少し前にあつた堀北とのやり取りを彷彿させられ綾小路は疑問を投げたが、全く予想外に松下は嬉しそうな顔をする。

「見てて面白いと思つた——正直言つてAクラスに上がるのはそこまで積極的にはなれない。なれなくたつてなんとか出来る自信はあるし……でも嬰兒くんの事はこの学校に居る間しか関わる事の出来ないレアな事柄だつて」

松下は聞き入つていた軽井沢に目を移す。

「軽井沢さんはどうなの？」

「え、あたし？」

「嬰兒くんのこと好きなの？それとも私や櫛田さんみたいに特別扱いされる背景に興味があるの？」

話の流れが色恋からミステリアスな方向になり、それは問題の本質を突いている分だけに相当のプレッシャーが押し掛かる。

「嬰兒くん、格好良いし頼りになるし、本気で惚れてるなら全力で応援するよ——約束する」

「私も同じく」

佐藤も追従し、女同士の空気に綾小路は割り込み切れず成り行きを見守るしかなかった。

(ここが正念場って感じだな——返答次第ではオレも色々と考えなきゃだな)

一同の注目が集まり冷や汗をかく軽井沢はどう答えていいかが分からず、だからと言って誤魔化すことも出来ない状況にたどたどしく

口を開くも、

「え……あの……その……」

「うわっ！」

その時に冷たい風が吹いて、佐藤が咄嗟に手を抑えた——ずっと話し込んでいた所為か、随分と時間が経っていたようだ。すっかり手が凍えており、薄っすらと赤みが浮き出ていた。

「取り敢えず場所を変えるか？」

「そ、そうだね」

綾小路が淡々と提案したのを受け、一同は綾小路の部屋に行くことになった。

ウエットに〇〇

「お邪魔しまーす」

「直ぐにお湯沸かすから、適当に待っててくれ」

部屋に入つてすぐに暖房をつけ人数分の飲み物を用意する綾小路を見ながら、女子三人は部屋の中を見る。

「今更ながらこんな時間に男子の部屋に来るって、ちよつとヤバくない?。」

「いやいや、この間、櫛田さんと二人きりでも何もなかったんだし——第一そんな変な気なんて起こすなら相手が違うでしょ」

「あー、確かに……」

必然的なのか、自然とベッドに目が向かう——それぞれの脳内に似通った想像がされているのか、興味津々の目で興奮が湧き上がっているようだ。

「あー、もう温まつてるようだし、お茶はいらないか?」

綾小路の全く心が籠つてない言葉に一気に興奮が冷めてしまった——振りむいてみた綾小路には一切変わった様子がないが、それが返って不気味さを醸し出していた。

「あはははは」

「いやー、また少し冷えちゃったから出来れば……」

「そうそう、なるはやで帰るつもりだしね」

冷や汗をかきながらの返答に何も感情を出さず、肅々と紅茶を準備して差し出す——慣れた手際を見てる内に焦りは緩和されていく。

気を取り直して紅茶に口を付ける女子たち——冷えていた体が温まっていき、完全に落ち着きを取り戻した。

そんな様子を見ていると綾小路の方も気持ちが悪く落ちて着いて、それとなく口が開いた。

「こんなことになるなら菓子も用意しとくべきだったな」

「いやいや、こうなったのは突然だし」

「そうそう……それにそう言うのは坂柳さんだけじゃなきや」

松下と佐藤が遠慮がちに言うが、綾小路は肩をすくめてあっさりと返す。

「有栖の場合は菓子持参が基本だ——美味しいのを見つけたってな」

「うわあ、惚気てるし」

茶化すように居ながら真っ先に喰い付く佐藤——軽井沢と松下もやや反応に困るような仕草だ。

「オレの事はまたの機会でもいいだろう——それよりも」

「さっきの話の続きだよね」

空気が一遍に変わり軽井沢に注目が集まる——そこに仕切り直しを籠めて松下が言う。

「軽井沢さん、まず言つとくけど今回の審議の件は私たちも微力ながら力になる——本当に助けて欲しい相手が嬰兒くんだったのも何も言わない。

ただどうしても嬰兒くんじゃなきやダメな理由はハッキリさせて置きたい——改めて訊くけど、嬰兒くんの事が好きなの？」

軽井沢は緊張した面持ちで周りの目を気にしながら途方もなく長い一瞬に苛まれる。

自らの過去を話すのは論外として、嘘でも恋愛感情があると貫き通すべきか——それとも松下や櫛田同様に自分も嬰兒の得体の知れない背景と実力に魅力を感じたと、多少の本音を交えたと言うべきか。

普通に考えれば後者の方がいいが、それでは嬰兒の中で複数いる一人になってしまい、いざと言う時が来たら切り捨てられてしまいかねない——そんな可能性が脳裏を過ぎり即座には答えられない。

（ああ、こんなことにならないようにって協力することにしたのに……）

何度目かも分からない思いを抱きながら軽井沢は綾小路を見たが、会話に入って来る様子もまたそんな場面でもないことから援護は期待できない。

こうなってしまうばと、もう一か八かの半ばやけくそ状態の心境で思いの丈をぶちまける。

「あたしの気持ちに恋愛感情なのかははつきりとは分からない——ただ今までに見たことがない強くて凄いい人だから頼りたいし、気に入らなれない」

「そもそも恋だの愛だのとは無縁……それどころではない生活を送って来たのだ。例え恋に落ちても余程の衝撃でも受けない限り確信など出来ない。」

「ただ知識として最も身近な例を見ている分には、そんな感情など欠片も持っていない——強者への依存、尤も優良な寄生先でしかないだろう。」

「でもそんなことバカ正直に言える訳ない——あたしはもうあんな思いはしなくない」

自身の中にあつた気持ちを再認識して、最悪手を差し伸べて来ている友人たちを失うことになっても構わないと言葉を続ける。

「あたしはAクラスになりたいだとか、もっと高みに行きたいとか、そんな高い志なんてない——でも叶えたい願い、欲しいものはある。あたしは負けたくないの——だから絶対的な強さを持った人に必要にされる存在になりたい」

「可能な限り嘘はつかず、本心を小出しにありふれた言葉で表した——これで通じないなら、これ以上踏み込んでくるなど突っぱねるしかない。」

（お願いだから、余計なこととしてこないで）

余裕を装いながら切実に願う——それは通じた。

軽井沢をしつかりと見ていた綾小路と松下は、決して表に出そうとしない軽井沢の悲鳴を上げたいような怯えを感じ取り、もう少し時間を掛けるのが最善であると——ただ同じく向かい合っていた佐藤はそうはならなかった。

「軽井沢さん——今嘘ついてるよね」

「嘘なんてついてないわよ！あたしは嬰兒く……強い人に取り入っていい思いがしたいだけの女なの。変な幻想とかはやめてよね！」

「嬰兒くんじゃなくてもいいのはどうでもいいよ——でもそれで本当に幸せ？」

「なに——嬰兒くんの真似？」

「うん、そう。どんな感じだった？」

「どんなつて……………」

佐藤は軽井沢に只管に向き合い粘って来る——この展開は綾小路も、そして松下にも予想外だったようで割って入ることもせず無言で成り行きを見定めている。

軽井沢当人はどうしてここまでして来るのか、訳が分からないまでも無意識に奇妙な危機感を感じて必死に続く言葉を模索する。

「……………嬰兒くんに比べたら何も感じないし、全く響かないよ」

たどたどしくも拒絶を表す——それでグループが壊れても構わないとも思いついてもおり兎に角早くこの場を終わらせたかった。

「そっかあ、そうだよね——でも、それでも私は軽井沢さんの味方だよ」

佐藤の言葉に迫力や凄みは一切ない——それでも不思議と重さを感じさせた。

「な、なんで？」

「この学校で初めてできた友達だもん——力になりたいのは当然じゃない」

「さ、佐藤さんってそんなキャラだったけ？」

この軽井沢の台詞に同席していた松下と綾小路も同意だと言う様な目で見て来る——それは本人も自覚してるのか、遠くを見るような顔でゆっくりと綾小路に目を向ける。

「ははは、自分でもそう思うよ——五月になるまでは普通に高校生活すると思ってたし、一学期の中間が終わった時までは、まだそれが諦めきれなくて恋に青春が欲しくて、よっぼど追い詰められなきゃ、今も自分の事で手一杯だったろうね」

一学期の中間テストの終わり——言わずと知れた超ド級のアクションデントがあった時だ。そして佐藤もその場面に立ち会っていたのを改めて思い出す。

「なんだ、オレの所為でそうじゃなくなったと？」

「誤解しないで、良い意味だよ——恋愛ドラマなんて比じゃないラ

ブストリーの始まりを見て、あれからずっと気になって見てきて。ああ、この学校に来て良かったって思えたんだよね——だから私も私の物語が欲しいって思ったんだあ」

正に夢見る少女——この面子の中で唯一の普通の女子高生だと言える。

その甘く儂い仕草と“余程追い詰められなきや”の件くだりから軽井沢の心に小さな波が立った。

「佐藤さん——あたし馴れ合いの友情ごっこがしたい訳じゃないから」

「私もそんな生半可な気持ちで言った訳じゃないよ」

軽井沢の冷たい突き放すようなニュアンスに即答で返した——これには軽井沢の反応が遅れて言葉に詰まった。

「私たちが一緒に居た時間が長いのか短いのか——私には分からない。でも私は軽井沢さんとはずっと友達でいたいし、増してや嫌いななんてなりたくない。

平田くんに嬰兒くんと、ただ遊んでるだけだったとしても格好良い男の子と仲良くしたいってのって別に責められるようなことじゃないでしょ」

一気に捲し上げた佐藤は一旦言葉を切って改めて綾小路を見る。

「さっき言った坂柳さんが居なきや告白してたつてのは割とマジだよ——もしもそうなら真つ先に軽井沢さんに相談してたと思う」

あつたかも知れない可能性——その内容に一同は反応に困る。

綾小路は佐藤の気持ちに伝えることはあるとは思えず、軽井沢にしても平田とは疑似的な関係なのでキチンと対応できたか分からず、松下としても上手く行った結末がどうしても想像できず……失恋の末にどうなったかと。

そもそも何故こんな話になったのか？

審議に向けて軽井沢から不安を払拭させる為だった筈——佐藤麻耶の軽井沢恵への友情度合いが、ここまでのものとは全く予想以上だった。

(これが嬰兒だったならサラッと見抜いたりしたのか?)

綾小路が淡泊に思いながら、思いがけない展開から若干逃避しよう
と意識が働くも直ぐに持ち直して冷静になるように努める。

(佐藤は嘘や駆け引きが得意なタイプじゃない……もしこれが演技
だったら大したものだが………ってそうじゃないな。重要なのは
佐藤もまた腹を括ったってことだ)

それは普通に見れば良い影響であり、更なるクラスの成長の兆しで
ある——ただ問題なのは相手である軽井沢が同じ域になっていない
こと。

軽井沢の心中がどうなっているのか——綾小路には分からない。
ただ友達として向かい合ってきた佐藤の事を信じ切れていないのは
間違いなく、必死で顔には出さないようにしているが余裕がないのは
透けて見える。

(予想以上に深いトラウマってことか——信じた結果、裏切られたっ
てこともあるのか?)

自分の身を守りたい——その手段として強い存在に寄生する。

軽井沢恵の処世術であり、それしかない諦めきつている——心が
打ち砕かれた要因が何なのか?

酷いいじめを受けて来ただけでは、どうしても納得しきれなくなっ
てきた。

(それにこの様子は何処となく少し前の櫛田に通じるものがあるな——
まさか、こいつもそうなのか?)

綾小路は心を決める前の櫛田——嬰兒に殺されかけて命の危険に
怯えていた姿と今の軽井沢が妙に重なって見えた。

(だとしたら、洒落にならないな——佐藤がどれだけ向き合い誠意を見
せようが、塗り替えられるとは思えない。と言うか、これなら嬰兒の
圧倒的な力にのめり込みたくなるのも合点がいくな)

現状はどうしようが軽井沢恵の心を動かすことが出来ない——結
論を得た綾小路は事態の悪化を防ぐために強引にでもこの場を終わ
らせることを決めた。

「佐藤。そう言って貰えるのは素直に嬉しいし光栄だが、"たられれば"
だろうとオレは有栖を裏切るような真似は出来ない——今の話を聞

いてこの状況を容認するのは出来ないから、悪いけど帰って貰っていないか」

「あー、いや……私は別に、そう言うつもりじゃ………」

「分かってる。ただ、それでもだ——接触して来るなどは言わないが、二人きりで会うのは金輪際止してくれ」

静かにそれでいながら威圧感を込めたニュアンスで、半ば脅迫とも見える様相で「帰れ」と促して来る——場の空気も主導権も一気に変わり、佐藤のみならず松下や軽井沢にも冷や汗が出て来た。

「二人とも今日はここで開きにしよう——時間も時間だし、続きはまた明日ってことで」

「そ、そうだね……」

「う、うん。それじゃ」

女子たち三人はいそいそと立ち上がり部屋から出ていく——完全に行った事を確認した綾小路はひとつ息を付いて思案する。

(得るものはあったが、実りがあったとは言えなかったな)

クルーズ船で初めて話を聞いた時は対して気にも留めてなかったが、予想を遥かに超える域で軽井沢恵の心の傷は深刻なようだ——これは一朝一夕でどうにか出来る代物ではないが審議は明日で時間は無く、悪影響を及ぼす要因になる気がしてならない。

短期間でどうにかするととなると、どうしても強引な手段にでなければならぬ——しかし一人で戦っている状態ならまだしも現状のクラスは纏まりを見せており、綾小路清隆がどうしても手に入れたい駒は牛井嬰兒である。

(もともとは嬰兒の籠絡に使えればと思ってたが、櫛田がしゃしゃり出て来た所為で大幅に狂ったしな……さて、どうしたものか)

じっくりと考えたい所だが、つい先日「あの男」との接触と理事長との会話などで、こちらに気を割いている余力がなかった為に上手く考えが纏まらない——今の調子ではいくら考えても無駄だとそう結論付けて寝ることにした。

(ま、どうせ組み直さなきゃいけなかったんだ。軽井沢がどうなったところでいくらでも取り返せる)

綾小路は目を瞑り冷徹な思考を研ぎ澄ましながら静かに寝息を立てていった。

ああ、待つてると大して時間も経ってないのに妙に長く感じる。

そして漸くと終わりが来たか、端末が震え画面には『松下』の文字——軽井沢と近く、こいつも何かと俺に絡んでくるんでちよつと動いて貰おうと向かわせたんだが、果たしてどの程度の結果になったのやら。

「もしもし」

『あ、嬰兒くん。良かった、寝てた訳じゃないみたいだね』

眠そうな声出したら明日の朝にしようとかになつたか——ただの心配りか、それとなくのアピールか。

「前置きはいらぬ——どんな感じだった？」

『ハハハ、せつかつちだね——ごめん。心を開かせるどころか、余計に意固地になつちやつた』

「そうか」

『……予想範囲内つてこと。なんかちよつと面白くないなあ』

「気に障つたんなら済まなかつた——ただそれなりに時間が要ると思つてたからな」

こう言うて察するものがあつたのか、僅かな沈黙があり電話の向こう側で思索してる顔が思い浮かぶ——もつともより深い内実までは計れないが。

『そつか——けど今はその肝心な時間が無いよ、どうすんの？ちよつと強引な手を使うつてなら余り賛成は出来ないよ』

「別にお前に何かさせる気は無いから心配せんでいい」

『お前に？』

「言葉狩りの趣味にでも目覚めたか？」

『いやだなあ、そんなセコイ趣味なんて持ち合わせてないよ——兎に角、何か手がいるならまたいつでも言つて。それじゃ』

軽口に否定してとつと通話が切れた——引き際もしつかりと心得てるか。

さて、松下にはああ言つたし俺自身も今はまだ何かするつもりはない——と言うか、俺が何かしなくてもな。

(あーあ、どうしてこうなるんだろ……)

綾小路の部屋から出た軽井沢は自室には戻らず人気のない道のベンチに座り、もの思いに耽つていた。

季節は冬、夜風も冷たく少々肌も痛い——それは彼女の脇腹に刻まれた古傷にも響き、嫌な思い出がぶり返した。

(……そう言えばチョコ味だとか言つて泥まみれの雪を食べさせられたな)

もう二年も経つが、それでも昨日の事のように思い出せる——再びあの日々が始まるかも知れないと言う恐怖に心が悲鳴をあげたくなくなる。

こんな思いをしない為に平田洋介の彼女と言うポジションを得たのに、当初はそれで上手く行つた——和を重んじる彼は助けられるならと嘘の恋人関係を喜んで引き受けてくれた。

しかし今はそれが仇になってしまった——和を重んじるが故に平和的な解決しか認めず、敵意を持ち危害を加えてくる相手には手ぬるいと言わざるえない対応しかない。

だからこそ、危害を加えて来る敵には暴力を行使することも厭わない嬰兒に魅力を感じた。

ただ嬰兒はこの奇異な学校の生徒の中に居ても普通じやなかった——嬰兒自身も取り巻く環境も得体の知れないと言う表現がここまで似合う存在を現実に見ることになるとは。

(綾小路くんや榎田さんも早くに知つてたみたいだし、完全に出遅れちゃつたな)

そんなありえない事への愚痴が心にこぼれる。

入学当初に出会った嬰兒は目立たない訳ではなかったが、それは決して良い意味ではなく名字で呼ばれることを嫌がる若干変わった男でしかなかった。

その後も不機嫌さを隠しきれず机を破壊するなど心証は悪い方向に行き、5月に入つてのひと幕——初めて異常性を見せつけた催眠を駆使した時は寧ろ全力で関わりたくないとする思つてしまった。

その直後にあつた中間テストまでも目を引くようなこともあつたが「神を信じる」と言う自分には最も縁遠い事柄の話題であり、積極的に関わり合う事など無いとその時は悟つた。

(でも思い返せば、櫛田さんやそれに綾小路くんが嬰兒くんに絡み始めたのって、あの時からだよな)

何があつたかまでは想像が付かない——ただ嬰兒の凄さを実感することが起こつたことは分かる。

もしもその場面に自分も立ち会つていたら………

(……………ああ、駄目だ。どうしても平穩で快適な高校生活が思い浮かばない)

寧ろ波乱万丈な事態を探して四苦八苦しているような、平穩とは正反対の生活を送っていたかも知れない——もしかしたら今回の審議ももつと早くに行われ、今頃は退学していたか、少なくとも今とは全然違う状況にはなつていただろう。

ただ、それもそれで悪くないんじゃないか——心の何処かでそう思つてしまう。

(世界を牛耳る組織の手先の手先か。ホント、漫画見たい……)

ならば今の自分はもう直ぐやられてしまう……切り捨てられる雑魚キャラか。

ある意味なんだか自分にはお似合いだなとも感じてしまい——哀しさを怒りも通り過ぎて乾いた虚無が広がっていく。

軽井沢の目の光も消えて肌寒さすら感じなくなつてきており、それでもまだ働いている意識は、このままいれば風邪ひいて審議が延期——いやいつそのこと、

「こんな寒空の下にいつまで居ては凍死してしまいますよ」

「!!？」

心の中で思ったことを代弁され急速に意識を取り戻し振り向くとそこには不敵な顔の坂柳が居た。

(なんなのよ、次から次へと)

予想外の展開ももう何度目か——驚くことも面倒になってしまい、おなざりな対応をしてしまう。

「なに、旦那さんを連れてっちゃったのに文句でも言いに来たの？」

「はい。私の至福の時間を割いたのに——どうやらない結果には至らなかったみたいですね。清隆くんにはもつと乙女心を大事にするよと言わなければなりませんか」

いきなり、さも当然の如く惚気て来る姿は乾いていた心に潤いを与える……物凄く不快な感じのものを。

「仲が良くて結構な事ね——そんなに好き合ってるのになんで戦いたいななんて思うのか、あたしにはさっぱり分からないわね」

その為か、言葉が刺々しいものになるも坂柳は気にした風でもなく満面の笑みを見せた。

「ええ、それが普通ですね——ただ私はどうしても覆したいことがあるので、その為には清隆くんに勝つことがどうしても必要なんです」
「訳分かんない——あんた達って、自分が強いのを見せつけなきゃ気が済まないの？」

「そうしなければ伝えられないこともあります。何も示すことなく言うだけでは右から左にスルーされてしまうのは目に見えてる——同等以上の者だと証明してこそ、初めて聞く耳を持つてくれる、これもまた珍しくない話ではありませんか？」

「え————……」

笑顔のまま語る坂柳に軽井沢は辟易した顔でドン引きした様子だ。

「……………そんな漫画みたいなこと実際にやる奴って居るなんてね」

「御尤もな反応ですね——ですが、事実は小説より奇なりですよ。特にあなたが熱を上げている牛井嬰兒くんは、そんな世界の住人です」
「!!？」

いきなりの思いも寄らない発言——しかし坂柳には話の途中から

意識していたのは丸わかりだった為の自然に行き着く先だったので
気負うことなく話を続ける。

「彼の背景については私もそこまで詳しくは知りません——知つてい
たとしても話すことは出来ない身の上です。現状で困っていること
の渦中にあること、その中心にあなたが居ることは存じています——
彼の力に縋ろうとする気持ちも理解は出来ます。ただ関わり合いに
はある程度は慎重に見極めないと文字通りに命に関わりますよ」
「脅しのつもり？」

「警告です——清隆くんだけならまだしも、堂々と深入り宣言してく
れたお陰で余計な注目まで集まってしまうましたからね」

櫛田の一件は当然坂柳の耳にも入っている——そして彼女は理事
長の娘、つまりは運営側に属する人間だ。無用な厄介事が起きるのは
歓迎できないのだろう——と軽井沢は推察する。

要するにこれ以上は関わり合いになるなど釘を刺しに来たのか——
—行き着いた結論にただでさえ不快だったのが益々深くなっていく。
それは抑えることも出来ない程に溢れて表情、そして態度にも表れ
る。

「いいわよね。そんな風に権力を笠に着て余裕ぶれて……あたしみた
いな一般庶民の苦労なんて全く縁が無いんでしょうね」

なによりも力に屈するしかない無力な者の悔しさとも無縁に見え
る姿は嫉妬どころではない暗い闇をいきり立たせる……それは容易
く殺意に変貌してしまう危険なものだった。

そんな気配を感じ取っているにもかかわらず坂柳有栖は笑顔のま
ま——それは益々、軽井沢恵の殺意こころに油を注ぐ。

「あんたさあ。頭いいなら、あたしが今何考えてるか分かる？」

「うん。そうですね、どの辺りが気に障ったのか詳細は計りかねま
すが、私に今直ぐに消えて欲しい——いえ、滅茶滅茶に叩きのめした
いと言ったところでしようか」

「うん、正解。だからさ、さっさとどっか行つてくんない——じゃな
きゃ、あたしなにするかホントに分かんないよ」

軽井沢なりの最後の理性で警告するも坂柳は一切立ち上がる気配

はなく笑みも消えない——寧ろ、やれるものならやってみると言った風な態度を透けて見せた。

「今そんなことをすれば困るのはあなた自身ですよ——なんて理屈は通じない域になってますね」

「冷静に分析するなら他でやって……って言うか、もういい加減にどっか行ってよ!!」

本当に精神的にギリギリの状態になり、声が荒げり目にも疑いような殺意が込められている——ここで漸くと坂柳は笑顔が消して真剣なニュアンスで言う。

「やっと本心を曝け出してくれそうですね——と言えるかと思いましたが、どうにも虚勢にしか見えません。そうして威嚇しなければ心を保てませんか？」

「そうやって分かっているぞって態度みせなきゃいけないキャラしてて楽しい訳?」

最早、我慢も限界ギリギリな状態で呂律もおかしくなってきた軽井沢——そんな彼女から目を逸らすことなく坂柳は真剣さを見せながら続ける。

「我慢は身体に良くないですからね——今のあなた自身がいい実例では。」

相当なんて言葉じゃ足りないくらいに溜め込んでいたようですが、そちらの方こそ、そんな状態のまま楽しいですか?」

「いい加減にしなさいよ!!」

そしてとうとう我慢は限界を突破した——軽井沢は勢いよく立ち上がり坂柳に向かって手を上げる。

満足に動くことの出来ない彼女には簡単に倒れる——軽井沢の手によってではなく自分でベンチからズレ落ちるようにして地面に。

「ッー」

とは言え全く衝撃がなかった訳ではなく、僅かに顔を歪ませる。

「ウウ!!」

回避する術はなく当たると思っていた手が空振り、軽井沢の中で殺意が増してしまう。

何故、こんなにも思い通りにならないのか。

見るからに脆い身体をしてる小さな奴にまでコケにされねばならないのか。

もう目に映る全てが憎く、何もかもを壊したいと気が狂い自棄を起こしてしまう。

「ああ！嫌いだ！嫌いだ!!みんなみんな、大っ嫌いだあ!!」

倒れ込んで満足に動けない坂柳に対して、半狂乱になっている軽井沢は？き出しの殺意を持って攻撃を加えようとする——それでも余裕を崩さない坂柳だが、僅かだが表情にこわばる。

「ああ!!あああ——……………」

ただそれは届く事は無く、背後からの一撃によつて叫びながら上がつていった興奮状態は一気に差し止まる。

「?!カハッ、カハッ——」

不意の一撃に崩れ落ち、せき込む軽井沢の背後からは掌底の構えを取った伊吹漣が表れた。

坂柳は驚くことなく寧ろ当然のように安堵しながらいつも通りの態度で感想を言う。

「漫画みたいに気絶とまでは行きませんか」

「そこまで強く入れたら流石にヤバいだろうが——そもそも何考えてんだよ?」

夜も遅い時間に突然連絡を寄こし、Cの利益になるものを提供するから来いと一方的に協力させられた。

訳が分からなかったまでも、今回を含め坂柳は一連の出来事でCの味方の様な可能性の示唆もあつて無視は出来ず、仕方なく来たが予想の斜め上をいく展開に益々訳が分からなかった。

そもそも一目瞭然で身体が不自由なのだから、危険を孕んでいるなら最初から一緒に居るか、まだ理性が働いている段階で自分の存在を知らせるなどすれば良かった話だ——無防備を晒してまで、ひとつ間違えば大怪我じゃ済まない状況に自分を置いてなんのメリットがあるのか?

「僅かでも彼女が不利な可能性があれば、直ぐに逃げてしまえますか

らね——あくまで彼女が優勢だと思わせなければ何もしてはくれません」

杖を突いてゆつくりと立ち上がった坂柳は服を払いながら、地面に四つん這いになっている軽井沢を見る——呼吸は整ったようだが、俯いて無言のまま。頭も完全に冷えたようだが、絶望的な状況に何を思っているのか。

「今起きたことを子細隠さず報告すれば彼女の心証はガタ落ちになり、Cの主張が正しいと印象付けることも出来ますね」

「……あなたがあたしを嵌めたんでしようが」

訊きながら軽井沢は顔を上げることなく反撃の言葉を必死に絞り出した——ただそれは空しくも届く事は無かった。

坂柳は上を向いてあるものを指しながら言った。

「残念ながら防犯カメラに一部始終が映ってます——音声まで拾えませんが、せんで立証は不可能です」

軽井沢はぎこちない仕草で指した方を見て決定的な絶望に叩き落された——もう終わりだと、結局自分は惨めに落ちていくしかないとあらゆる気概が砕かれた。

もうどうにでもなれ——そんな事しか心に浮かばず目の中の光が完全に消えた。

そんな軽井沢を視界に入れた伊吹は哀れに思ったのか、それとも陥れた坂柳に嫌悪を抱いたのか、不快な態度で口を開いた。

「あんたさ、綾小路の女房なんだよね——なんで亭主の損になるようなことなんか手を出した訳？」

「清隆くんは私にとつて特別な存在ですが基本的には戦うべき相手、つまりは敵です。時には手を組むこともあります、どんな時でも味方と言う訳ではありません」

「ダウト——やり合いたいなんてのは、みんな知ってるけど場外乱闘なんて形じゃないでしょ。この前も妙な所でフォローしてくれたみたいだし、こっちの知らない所で妙なしがらみがあるんじゃないの……あの男みたいに？」

伊吹が目を鋭くしながら強調した男が誰を指しているか——話の

流れが変わり、軽井沢も坂柳を見る。

坂柳有栖が動いた動機——それが牛井嬰兒に起因するものなら、何が起きているのか？

今回の騒動も単なるクラス間の争うじゃない何かに巻き込まれたからなのか——知ったところで何かが変わるかは分からないが、訳が分からないままでは居たくない。

そんな二人の視線を受けながら坂柳はどうしたものかと言う顔になり、僅かに間を置いて口を開く。

「何か大きな陰謀でも起きていると期待してるようですが、そんなものはありませんよ——起こってたとしても私如きが知る立場にはありません、残念ながら」

「結局は何も答える気は無いって——それとも口止めされてて答えられないの？」

予想通りとは言えはぐらかされ、無駄だと思ったが言わずにはいられない——伊吹のそんなニュアンスに坂柳も不愉快な顔を浮かべる。

「外側から余計な干渉を受けるのは私にとっても本意ではありません——それでもこの学校の生徒なのだからと言うのもあの方には通じません。」

だからこそ、いつまでも尾を引くような結果にならないよう完全に決着を付けて貰うしか早く終わらせる方法は無いんです。

勿論、穏やかに済ませられる方がいいですよ——ただ残念ながら、どうあっても私はあちらの味方になることは出来ませんから」

一気にまくし立てる様は余程早くに片を付けたいと物語っており、牛井嬰兒のことで振り回されるのは御免だと不満をぶちまけている様であった。

嬰兒に入れ込んでいる軽井沢に容赦がなかった動機の一端でもあるかも知れない。

「……なんだかんだアンタも大変なんだな」

「お気遣い痛み入ります。龍園くんにもそれとなく伝えて置いてくれると有難いです」

すました顔で淡々と語った坂柳はそのままに軽井沢を見て言う。

「そちらも面倒な立場は理解しますが、もう少し配慮をと言伝をお願いします」

「……恨むなら嬰兒くんを恨めって？」

「誰を恨むかは貴女の自由です——ただ、思うだけでは何も変わりませんよ」

月並みな台詞を吐き行ってしまう坂柳——その後ろ姿を見ながら伊吹は軽井沢に言う。

「なあ、あんたの事情なんて全く知らないし訊く気もないが………いや、やめとく。

ただそんな所にいつまでも居ると風邪ひくか——最悪凍死する。自分を憐れむなら部屋に帰ってからにしな」

「……………」

伊吹の言葉に軽井沢は一切の反応を示さない。

本当に放って置こうかとも思いましたが、しとしと雨が降り始めて流石にそうも言ってもらえない——そんな言い訳を胸に強引に腕を取って立ち上がらせる。

軽井沢もフラフラと立ち上がりながら無抵抗のまま、引っ張られていく。

そんな彼女を連れて寮まで辿り着いた時はスツカリずぶ濡れになつてしまい、伊吹自身も早急に風呂に入りたかった。

このまま自分の部屋に連れて行こうか、誰かを呼ぼうかと迷ったが、

「軽井沢さん、どうしたの!？」

何故か寮のロビーに佐藤麻耶が待つており、慌てて近づいて来る——余りの出来過ぎた展開に少し唾然となつてしまう伊吹だが、後の事を任せることが出来そうで安堵した。

「悪いけど、後よろしく。じゃ」

「ちよ、ちよつと待つて。一体何が？」

「本人に聞けば」

これ以上の相手は面倒だと取り合わずにさっさと行ってしまう——全く持つて訳が分からないが、兎に角今は軽井沢の事が先決と手を

取って連れて行った。

正しさが・・・

やれやれ朝っぱらから不穏な空気で気が滅入って来るな——軽井沢が坂柳に暴力を振るった。

教室、いや学校中がその噂で持ち切り状態——特に綾小路なんかはいつも通りに見えて、その実、無言の圧力を必死に抑え込んでいる様子。

いつもなら宥めようするグループメンバーや平田も今回ばかりは近づくことが出来ない。

全く、知らない所で何やってんだかな——軽井沢。

大して進んで無いのにやたら長く感じる時間——当人が来て欲しいと出来れば、まだ来ないでくれって願望があちこちから滲みあっている。

うくん、カオスだな。

「ねえ、嬰兒くん。これって一体どういう事なんだろうね？」

そんな中にも関わらず普通に——否、より積極的に俺に擦り寄って来る櫛田。

単純に意見を求めてるだけと思いたいが、対応するなら自分を使えとのアピールに見える。

「悪いけどこの件は俺もノータッチなんぞな。寧ろ何がどうなってるのか、俺の方が訊きたいぞ」

「そっかあ。時間があれば私も調べるんだけどねえ」

そう。今のタイミングではそんな余裕はない——これを加味すれば毘にかかったと見方も出来るが、坂柳がCと組むメリットなんてどこまであるか？

綾小路と戦うにしてもこんな形を望んでは無かった筈——そうすると、本人にとっても不本意な形で仕方なくだったりするかな？

そうこう考えてる内に——ガラッ——とドアが開いて注目が集まったが、

「あ、おはよう。佐藤さん」

「うん、松下さん。おはよう」

待ち人ではなく肩透かしを喰らう——かに思えたが、入って来た佐藤はバツの悪そうな顔を綾小路に一瞬向けた後で重苦しく口を開いた。

「あのさ……軽井沢さんだけど、昨日の雨で体調崩しちゃって、今日はお休みなんだ」

出てきた台詞に俺も含めて教室中が面食らった——特に綾小路は珍しく分かり易く反応してやがる。

ただな。目がどうしようもなく乾いてるんだよな、怖いくらいに……。

そして、そのままの状態で佐藤の方に近づいて行く——流石に不穏さを感じ取ったのか三宅や幸村、平田なんか焦って止めに入った。

「清隆、ちよつと落ち着こうぜ」

「そうだ。気持ちちは分かるが、少し頭を冷やせ」

「二人の言う通りだよ、綾小路くん。早まつちや駄目だよ」

しかし綾小路が歩みを止める気配はない——佐藤も冷や汗をかきながら固まってる。

正に一触即発の展開に気の弱い奴らはビビッて、そうでない奴も平田らの加勢に出た。

「綾小路くん、席に戻りなさい——話をするならみんなを交えてにしましよう」

「鈴音の言う通りだぜ——っていい加減に聞き分けるよ!」

って須藤よ。率先して実力行使に出てどうすんだよ……しかも簡単に躲されてるし。

しかも綾小路の優しい反撃で足をずらされ簡単にバランスを崩され、あつさり空いた穴に悠々と進ませてる——転ぶのを堪えた須藤が振り返り様にヤバいって顔して、完全に火に油を注ぐ結果になった。

「清隆、止まれ!」

「綾小路くん、駄目だよ!」

流石にもう限界だと思ったか三宅と平田も背後から抑えようと勢

いよく肩に手を伸ばすが、やるなら静かにやらないと。

「!？」

振り向くことなく往なされ、空ぶった二人は須藤同様にバランスを崩した——この光景に堀北も前に出て通せんぼの格好でもしそうな勢いだが、

「心配するな。大丈夫だ」

至極落ち着いた声で堀北の横も素通りする——おいおい、言ってることとなんかズレてる気がしなくもないんだが。

「ちよ、ちよつと嬰兒くん。出番じゃないの？」

「いや、松下さん。大丈夫だって言ってるんだしさ」

俺にせっついて来るのを櫛田が上手くガードして来た——ちよつと前は軽井沢が率先してやって、こいつは近づきもしなかったのに。

なんて浸ってる場合じゃないか——綾小路は佐藤の真正面に立ち、分かり易い程に重苦しい雰囲気醸し出す。

これには自然と佐藤も緊張した面持ちで遠目から見ても分かるほど冷や汗が浮かんでいる——異様に重い緊張感の所為か、僅か数秒が物凄く長くゆっくりと感じる。

マジで時間が狂ったとも思える感覚だ——ただ、それもまた当然だと誰もが理解しており誰も何も言わない。

客観的に見ると綾小路はいつもと変わらないんだがなあ——と言うか、綾小路自身も周りの反応にちよつと戸惑ってる風にも見えたりもする。

うん、やっぱり十二分に冷静さを保ってるし大丈夫だな——比較的にゆっくりと綾小路は口を開いた。

「佐藤」

「は、はいー」

もう殆ど反射だな——佐藤の緊張具合は頂点にも見え、様々な覚悟でもしたのか必死に身構えてる。

これは最早気休めなんて言うだけ逆効果だな——それは綾小路も悟ったのか、ひと呼吸おいていつも通りのニュアンスで言った。

「未遂で終わって良かったな——そう軽井沢に伝えてくれ」

「わ、分かった」

「頼んだぞ」

あつさりと踵返して席に戻って行く綾小路——時間にして数分も無い筈なのに大きな場面が終わったって安堵が教室中に広がった。

当の佐藤はへたり込みそうになるも篠原や松下に支えられて苦笑して、見ていたギャラリイも何も起きなかったことに盛大に安堵してか、胸に手を当ててホツとする奴や机に突っ伏してすっかりエネルギーを使い切ったみたいなき感じのも居る。

おいおい、まだホームルームだって始まってないんだぞ。

「いや、凄く冷や冷やしちゃったね——改めて綾小路くんには悪いことしちやったって心が痛むよ」

その件は片が付いただろ。態々自分から蒸し返しに来るとはどういうつもりだ、榎田？

無言のまま、そんな目を向けると榎田は意味深な笑みを浮かべて来た——ぶっちゃけると欲望交じりの顔かな。

「この調子じゃ軽井沢さんはもうダメみたいだし、綾小路くんもやっぱり一番は揺るがないし、嬰兒くんのパートナーは私しか居ないんじゃないかな」

こんな時までアピールかよ——空気を読めない訳じゃないし、クラスメイトの信頼よりも俺の方を重視するってか。

ここままであからさまだと誰も何も言う気も失せるみたいだし……いや存外それも計算付くのかな。

文句があるなら俺に否と言わせて見せろって演出に皆は不愉快そうに顔を逸らすばかり——全く強かさを褒めてやるべきか、それとも仲裁でもすれば美しいのかな。

「ねえ、きよぽん。坂柳さんのところ行くなら私も一緒にいいかな？」

「あ、私も」

「構わないぞ」

そんな中で長谷部と佐倉の申し出を綾小路が受けたことで、余計重苦しくなりそうなのは回避された——そして程なくチャイムが鳴りホームルームに。

ただならぬ気配を察したのか茶柱先生も一瞬怪訝そうにしたが、そこには触れず軽井沢の体調不良の為に審議が延期になった事を伝えた。

ま、自然な流れだよな——ただ、この猶予期間が？クラスにプラスに働くとは到底思えない。

何より内部から軽井沢を庇おうって奴は表立って減ってしまつてる状態だ——さて、どうしたものか。

ギスギスしたとまでではないものの、妙なしこりを残したまま一日が過ぎていく——綾小路の周りではグループの奴らが色々と機嫌を宥めるなりして、一方で佐藤や篠原と言つた軽井沢に近い奴らはなんとか出来る事は無いかと心配ごとに一杯一杯の様子だ。

そんな軽井沢に近い一人である松下は昼休みになるなり俺に近づいて来た。

「ねえ、嬰兒くん。お昼一緒にどう？」

最早誰が見ても助けて欲しいつてのが透けて見える誘い——良い顔するのは居ないが、事態の好転を期待するような視線は少なからず感じる。

「ねえ、それ私も一緒でもいい？」

そこに堂々と櫛田も混ざつて来る——全く欲望に正直なことだ。そして心なしか、そっちの方が活き活きとして見えるぞ。

「邪魔しないで大人しくしてるならいいぞ。それで学食でも行くのか？」

「え、あ……そうだね。行こうか」

「あ、私たちも」

あつさりと受けたか為か、気後れしてる様子の松下だが時間も惜しいし、とつとと行くように促すと佐藤と篠原も早足で付いてきた——傍から見ればある種のハーレムだな。

しかし羨ましがするような視線は感じない。寧ろ早く行ってくれって感じだ——やれやれ、どうしてこうなつたんだかな。

学食に着くころには、そう言ったのも無くなり佐藤たちはお盆に頼んだご飯を載せて少しは息が出来ると思はかりに落ち着いたようだ——
—されどもう少し待った方がいいか？

俺も注文した飯を食いながら待つことにするかと思ったが。

「嬰兒くん。この後で軽井沢さんのお見舞い行くの？」

櫛田が遠慮なく訊いて来た為に再び緊張感がぶり返す……いや余計に高まっちゃった。

「空気が読めない訳でもあるまいにえらく大胆だな」

「いつまでも引きずったままみたいで居たって仕方ないでしょ——拗れたら私の所為にしてもいいから、さっさと話を進めようよ」

全く持って計算高い——そんな余裕を持って受け止められるのは、この場では俺とあと一人ぐらいか。

急かされつつも発言しにくい空気の中で気にした風でもなく、寧ろチャンスだと言わんばかりに松下が言う。

「じゃ、お言葉に甘えて——このまま何もしていないの？ 軽井沢さんを気に掛けてなかった訳じゃないでしょ」

思った以上にグイグイ来るな——俺が指示した直後に起こった出来事だ、何かあるんじゃないかと疑問を持つのも当然か。ただなあ、俺もどうしてこうなったのか……だいたい想像は付くけど、だからこそ落としてどころを決めかねてる。

「手が居るなら、いつでも言ってくれれば」

「私も出来ることがあるなら……なんでも言って」

櫛田は打算で佐藤は友達を思つての言葉に一瞬、それじゃと思つたが、

「悪いがちよつとでいい。時間をくれ」

「いや猶予が出来たって、そんな悠長な事は——」

「今日の授業が終わるまでには決める——力を貸して貰いたいならその時言うから」

兎に角待て——とそう促してこの場での事は終わった。

同じ頃、Cの教室。

「全く、坂柳の奴は——何を考えてやがる?」

事の顛末を精査していた龍園は拭えぬ疑問に顔をしかめていた——同じく龍園の周りに居る取り巻きたちも皆、訳が分からないと言った様相だ。

「単純に考えて……坂柳は全面的にこっちの味方ってことでは?」

石崎が沈黙に耐えかねるように発言するが龍園の機嫌は余計に悪くなり、

「つまんねえことしか言えねえなら引っ込んでろ」

「す、すみません」

いそいそと引っ込み、引きずられて雰囲気も悪くなる——ただ取っ掛かりを得た為に話しやすくなつた。

「しかし龍園氏——先の特別試験の低難度の問題といい、今回のフォーロ——といい、彼女自身の意志によるものかは疑問ですが、それを差し引いても味方と捉えても問題ないのでは?」

そう判断した金田が言う——龍園は同じことを言わせるなど目に苛立ちを籠めるが、その前に結論を一気にまくし立てる。

「これでこの件に決着が付けば——今度こそ何の遠慮もなくこの学校の新セオリー通りを迎えられるのでは?」

「それで牛野郎が大人しくなれば、それまでだったか——ふん、結局は坂柳も権力の犬ってことか」

金田の言いたいことを即座に噛み砕き出た結論に面白くないまでの一応の納得を示す。

それを察した椎名が引き継ぐ形で話を進める。

「その様な宮仕えを良しとするタイプには見えませんが、それだけ私たちの見えない所で問題になっていると言う事でしょうか?」

「あり得ると言うか、それしか考えられないな——新しい特例の件と
言い、何がなんでも牛野郎を抑えつけて置きたいようだな」

紡がれた結論に龍園の頭は完全に冷えて、昨夜の当事者である伊吹に目を向ける。

「実際に坂柳はどんな感じだった？オメエの心証でいい、話せ」

「私も気になって訊いてみたけど、個人で動いてるのかどうかはハッキリしない——ただ牛井の事は良く思っていないのは間違いないと思う」

「そうか」

龍園はそれ以上なにか言う事もなく思案する——その内容は知ることには出来ないが、あまり愉快とは言えないもののようなのだ。

そんな様子に焦ったのか石崎が冷や汗を浮かべながら声を張る。

「まあ、これで今回の俺たちの完全勝利も確実つすよね！」

「……あんたにはプライドがないの？」

「いいじゃねえかよ、伊吹——そもそもこっちだって本意で仕掛けた戦いじゃねえんだから」

「石崎——あんまり不用意な事は言うんじゃねえ」

「す、すみません」

龍園のドスの利いた声に反射的に委縮してしまう。

そして静かになったことで再び思案を始める龍園——石崎の言う通り今回の件は本意で仕掛けて訳じゃない。

ただやるからには勝つつもりだった——何よりも試験外じょうがいでの戦いはもつと前に行うつもりだったので、乗り気でなかった訳でも無かった。

これは完全に個人的私闘に近いだけに横槍も気にせず徹底的に遣りやえると闘争心も燃えてもいた。

(にも関わらず、これは一体どういうことだ？桔梗の豹変ひょうへんぶりと言い、予想も及ばない域に居る奴なのは分かり切ってたが………俺も少し方針を考え直さなきゃいけねえか)

牛井嬰兒の背後にいる者達——この一国の政府肝いりの学校にもここまで干渉することが出来る存在。

考えが纏まっつていくに連れて龍園の心にも新たな高揚が湧き上がって来た。

「ククク、面白ええな。世界の頂点か——野郎を牛耳れば拝めるか？」

「龍園くん——あなたまで毒されましたか？」

「なんだ、ひより——オメエは興味が湧かねえのか？」

「私は平穩を愛するタイプなので……」

「おいおい、台詞と表情が微妙に一致してねえぞ」

龍園の言う通り、椎名の顔には彼女にしては珍しく誤魔化しとも思える様相が浮かんでいた。

ただ、それが得体の知れないものへの興味なのか——牛井嬰兒と言う男の反抗心が行き着く先への興味なのかが判然としない。

「フツ、今は止しとくが考えは纏めとけ——今はそれよりも目先の事をどうするかだな」

龍園が話題を切り出したことで、金田が真つ先に言った。

「延長された時間は僅かと言え何かして来ますかね？」

「あるとするなら、こつちの訴えを取り下げようにとか」

「そんな詰まんねえことしに来るなら、見込み違いもいいとこだな——ただここまで圧倒的優位で下手に動けば逆効果になりかねえ。念の為に諸藤に釘刺すぐらいが妥当か」

審議さえ始まってしまえば、坂柳の件での心証も相俟って？ クラスに勝つことは造作もない。

その結果として牛井嬰兒がどうなっていくのか？

(それを見極めてから決めても遅くは無いか)

龍園は消極的な結論になってしまった事への不満——とは別のもうひとつ、何がどうとは言えない心のモヤモヤが居座っており釈然としない心境になる。

しかし上手く言い表せない事柄にどうしようもなく、解散を指示したのだった。

審議当日——体調が回復した軽井沢と一緒に堀北、平田、担任である茶柱の四人が生徒会室に向かって行く。

彼らは終始無言であり表情は硬い——結局は有効的な手段を用意できなかったことを物語っていた。

(こうなってしまったからにはペナルティを出来る限り小さくするよ

うに持って行くぐらいしか……)

堀北はどうか軽井沢が退学になる事態は避けようと考えつつ、碌な打ち合わせも出来なかった現状に不満をぶちまけたかった。

体調が回復し朝から普通に授業も受けれた為、ホームルームなどに話し合いを持ちたかったが、坂柳の一件が尾を引いてか綾小路が乗り気でなく——二人を近づけさせないようにとそれぞれのグループが不干渉を敷いており、とても皆で話し合っただけの状態ではなかった。

ならばと昼休みに彼氏である平田も交えて直接の話をしようと試みたが、

(何なんのかしら、あの目の奥にあった暗い輝きは?)

既に諦めきっているのか、堀北の知る彼女らしくない肅々とした様子で佐藤たちの言う事にも簡素な応答しかしておらず、どうにもタイミングが掴めなかった。

平田も力になると元気づけようとしていたが、彼氏からの言葉にも素っ気なく——傍から見て既に三行半を突きつけられた有様に益々打つ手がなかった。

そして、そんな考えを続ける時間もなく生徒会室に着いてしまう——茶柱先生がノックして中に入り他も続いていく。

室内には長方形の長机が置かれており、Cクラスからは担任の坂上と当事者である諸藤リカと真鍋志保、藪奈々美が揃って席に着いていた。

更に部屋の奥には生徒会長である南雲雅が机の上にある資料に目を通していた。

(もしこれが一学期とかなら、あそこには兄さんが……)

堀北はこの状況が不幸中の幸いとも言っているのかと半ば現実逃避したい心持ちになりつつも持ち直して、Cの面々と対面する形で席に座る。

「それではこれより、Cクラスの訴えによる暴行事件——それによる精神的被害に関する審議を執り行いたいと思います。進行は生徒会副会長、桐山が務めます」

桐山は淡々とCからの訴えを読み上げるも余りにも時間がたち過

ぎている件を今になって蒸し返すことに疑念を持っているのか、チラチラとCの様子を見ていた。

当事者の一人、諸藤はビクビクと委縮しており、もう一人の当事者である軽井沢は無反応——ただそれは余裕とは違うように見え、一種の不気味さを感じさせた。

「諸藤氏はきちんと順番待ちをしていた所を突然割り込んで来た軽井沢氏に突き飛ばされた——この主張は間違いありませんか？」

「そうよ……こいつの所為でリカがどれだけ傷ついたか——きつちりと謝りなさいよ!!」

それでも進行を続ける——これに真鍋が乗り主張する。

「今は？クラスに訊いています——不用意な発言は慎んでください」

形式ばった注意に真鍋は不満を表すが一旦は引き下がる——そして桐山は再び？クラスに訊く。

「改めて訊きます——これは間違いなことですか？」

「事実です」

軽井沢は短く肯定し、Cの面々は勝ち誇ったような表情になるが、そこに堀北が手を上げる。

「発言を許可します」

「軽井沢さんが諸藤さんを傷つけたことは認めます——しかし今のお話は春先に起こったものであり、今回問題となる重度の精神的不調との因果関係があるかは定かではありません」

「つまり原因は別にあると？」

「はい。失礼ながらCクラスの——それを取り仕切っているリーダーと呼べる人物の評判は悪く、私たちも実際に接してみても非常に不快でストレスの溜まるものでした。」

あれを日常的に、それも抑圧的に受けていれば精神的に参ったとしても不思議ではありません」

「つまり問題の本質はCクラスにあり、？クラスは無関係だ」と

「全てに非が無いとは言いません——ですが問題の本質を突き詰めていくと避けて通れない可能性であると主張します」

堀北もまた客観的事実を持ってCの勝利に対抗する——この場に

龍園が居れば、さぞや高笑いしながら灼熱とした論争を展開しただろう。

ただ現実には龍園は居ない。

自らが出る必要もないと判断……否、興味が失せて白けてしまったのは想像に難くない。

それは担任を含めたCの面々の余裕が物語っている。

「問題の本質ですか——その理論からすると軽井沢さん個人についても踏み込んでいかなければなりませんね」

「坂上先生——今は生徒同士の——」

「私も担任として受け持った生徒が苦しまされたんです——見て見ぬふりは出来ませんよ」

茶柱が止めようと声を上げるが、正論を前に出されては引つ込まざるえない——何よりもこの坂上の台詞には煮え滾るような怒りを含みを感じさせる。

「……生徒にそこまで肩入れするなど、何ともらしくない」

「私にも最低限の教師としての矜持くらいはありますよ」

「……………」

意外な台詞なのか、珍しく茶柱が目を丸くする——つまりはそれだけ酷い状況になったと言う事か、問題になっている女子生徒に注目が集まるが、見ている限りは委縮しているだけですこぶる健康そうに見える、どうにも坂上の台詞とは合わない印象を受ける。

それでも嘘やハツタリで発言したニュアンスには聞こえなかった為と同じCの面々以外は不可解な顔だった。

「それでは改めて審議を続けさせて頂きます」

ただいつまでもそうして訳にもいかなないので南雲が先に進めようと促し、桐山も肯き言う。

「では軽井沢さん——揉め事があった事は認めましたが、何故そんなことを？」

「すみません。何分、相当前の事なんで、ちよっと思いい出せません」

「ふぎけないですよ！そっちが並ぶのが嫌だからって一方的に割り込ん

で来たんでしようが！」

とぼけてると思ったのか真鍋が怒りを込めて声を上げた。

「落ち着いてください。ちゃんと双方の話は聞きますので、途中で口を挟むのは慎んでください」

「……すみませんでした」

真鍋が引き、一瞬の静寂の後で南雲が言う。

「時間があまりにも経ち過ぎているのはその通りだ——訴えの原因であるかの因果関係を立証するのは至難と言わざるえない」

「待つてください。リカは気が小さくてずっと苦しんでたんです——それをずっとかけて苦しんでた」

「そこは信じてもいい——時間が経って癒える傷もあれば、悪化することもあるからな」

南雲はひと呼吸おいてCを見る。

「ただ、そうかと鵜呑みには出来ない。Cの評判や実際に俺も何度か見ての龍園の素行の悪さ——？クラスの主張も無視できるものじゃないからな」

生徒会長らしく公正中立な意見に皆の注目が集まる——そんな中で軽井沢に目を移し言う。

「しかし先に起こした騒動も含めると軽井沢の素行にも問題がないって訳でも無さそうだ——忌憚なく言わせて貰えば、心証的にはCの主張を信じてやりたい」

やはりと言うか、坂柳の暴行未遂が尾を引いて来た——これにCは優越な笑みを浮かべ、？は焦りで冷や汗が出る。

……当人である軽井沢恵を除いて。

この様子に違和感を覚え、南雲は改めて問う。

「軽井沢、何か言いたいことはあるか？」

「はい。この前、坂柳さんと揉めたのと今問題になっていることは全然違います」

「話が別なのはそうだが、問題になってるのはお前が感情のままに人を傷つける奴だっってことだ」

「だから、それが違うんです——坂柳さんのことは感情が原因なん

かじやありません」

軽井沢はいつになく丁寧な口調で落ち着いて話す様子に彼女を知る面々は驚きを隠せない。

何より意味深なニュアンスには奇妙な重みを感じさせた。

「ほう。ただの喧嘩じゃないってことか？」

軽井沢恵を深く知らない南雲は見掛けとのギャップに興味を抱き積極的に訊いて来る——対しての軽井沢も、らしくない程に毅然としたものだ。

「その通りです——坂柳さんと揉めたのは、あたしの中でどうしても抱えきれなくなった『ある事』に対して……愚かにも暴走してしまった事に起因します」

「ある事？」

この台詞に平田は動揺し、それが表情に出る——直ぐに取り繕ったが、彼氏とされる男の失態は余程の事があると見て取った全員に思わせた。

「……正直、話すべきかどうか迷ってます。この審議とは完全に無関係ですから」

「軽井沢さん、それなら尚更話すべきよ」

「無関係だと言うなら無理に話す必要もないのでは——単純にこの件と切り離して進めていけばいいだけです」

堀北が突然の発言に驚きつつも不利を覆せる可能性を見出し言う——それに対して坂上が即座に反論した。

「この一件は審議の結果に大きく関わることです——正しい判断を下すには彼女が決して感情のままに動く人間なのかハッキリさせる必要性があります」

「今重要なのは彼女の人格云々出なく、問題にしている事が起きた時にどうだったかです」

「問題にしているのは諸藤さんが塞ぎ込まなければならぬ程に追い詰められた事であり、その原因がなんなのか——そもそもこのタイミングで坂柳さんが接触し事を起こすなど、そちらと結託してる可能性すら考えられます」

「憶測でものを言うものではありませんよ」

「なればこそ、重要事項は曖昧にせずにしつかりと検証すべきです——それで無関係だと判断するなら、こちらとしても一切異存はありません」

二人の対立は熱を帯びていき、互いの有利不利を引き出すために更に加速していく流れを見せる——ただ、個人的にも役職的にもその流れを誰よりも容認できない南雲生徒会長が割って入る。

「双方、そこまですて下さい——伯仲した議論は見物ですが、こちらにも皆にもいつまでも付き合う訳にもいきません。ただでさえ猶予を取ったのですから、当事者同士でもない方々の主張にこれ以上時間を割くことは好ましくない」

「生徒会長の言う通りだ。本筋と関係ないかどうかを判断するかも含めて最終的には彼が決めること。これ以上は時間の無駄だ——さつさと話してしまえ」

茶柱も南雲の意見を組むような発言だったが、議論を断ち切り軽井沢の背中を押す援護に落ち着いた。

これには坂上も目をきつくするが、茶柱は涼しい顔のまま無言であり、それ以上の事が起こる気配はない——それはもう話すしかない、その準備は終わったという暗黙の合図に感じられた。

これに軽井沢も意を決し、制服のポケットから一枚の用紙を取り出す——そこには『高度教育高等学校予備費使用による申請書』と記されておられ、あまりにも場違いな物に皆が目を丸くした。

「先日、クラスメイトの牛井嬰兒くんの新しい特例により、通常とは違う手段で物品の購入が出来ることはご存知と思います——その際には運営に直接申請が必要で、これはその際に提出した物です」

予想を遥かに超えた大きな話が飛び出したことに誰もが啞然とした。

もう予兆は過ぎている。

「おいおい、牛井の名前が出て来るって……それがどう坂柳と結びつくって言うんだ？」

南雲が否定的なニュアンスで話を進めるように言うと、軽井沢は用紙を仕舞いながら深く思いつめたような顔で話を続ける。

「ご存知かも知れませんが坂柳さんはこの学校の理事長の娘さんです。えい……牛井くんの新しい特例に関してはこの学校の予備費から当てられ、それには当然理事長の承認が必要になります」

「ああ、それは聞いている——本来なら何か問題が無いか生徒会にも審査する必要とするのが筋だが、今回のはそれもすつ飛ばした——言うなれば異例の事態だ」

「最初、あたしはこの審議の件でどうしたらいいかアドバイスが貰いたくて牛井くんを頼りました——でも期待したものは得られず、その事で文句を言うと『それ所じゃない』と突っ返されてしまいました」

堀北と平田は嬰兒に擦り寄っていた軽井沢が、ある時を境に不機嫌になり素っ気なくなっていたことを思い出す——もつともその後も結局擦り寄りを見せていたので、いつものことだと気にも留めていなかった。

「それでも何かないかと粘ったら……牛井くんから驚くような話を聞かされ、その事で坂柳さんに接触を頼まれた。これが先日の事件の発端です」

「タイミングが重なったせいであらぬ誤解があったってことか——で、具体的に何があったんだ？」

「それは——牛井くんの特例で割かれる予備費に不審点が見つかった事です」

「有り体に言うところの横領や不正があったと？」

「勿論、あたしにはそんなことを断定することは出来ませんし、可能性……疑惑の段階なので定かではありません」

軽井沢が一旦言葉を切り、別の用紙二枚を更に出した。

「これは公式に政府の省庁が出してる予算表と牛井くんの特例に対して割かれてる予定の費用概要を記したものです——この二つをすり合わせていくと金額にズレが生じることが分かったんです」

「態々、こんなことまで調べたのか？」

「牛井くんがです——可笑しな不備が生じてしまっただけか、慎重を期さなきゃいけないとかで」

軽井沢のらしくない淡々とした説明口調は台本演出である認識が共有されて、軽井沢の背後の牛井嬰兒の姿が見えるような錯覚が一瞬起きる——そして嬰兒が不敵な顔をしながら南雲生徒会に抑圧を掛けていくように言う。

「この事は然るべき所に持って行くのが筋ですが、クラスメイトの幼馴染の家族の事ですので少し躊躇しました——だからこそ先に伝えるべきかと思いましたが、直接行くことは憚られたのであつたが代理を頼まれました」

事態の全貌が見え始めて来たが、その余りの重さに緊張感が際限なく高まっていく——その中で唯一平気な顔をしている軽井沢は気にした素振りもなく話を続ける。

「あの夜に……あたしがこの事を告げると……坂柳さんはそんなことはあるはずない、何かの間違いか、捏造だと取り合いませんでした。」

それを見て坂柳さんも人の子なんだと思いました——親御さんが犯罪に手を染めてるなんて信じられる訳が無いんだと」

「お、おい……」

犯罪と言う余りにも物騒な単語に、南雲は言葉を選べと言わんばかりに注意を促す——それでも構わずに軽井沢は続けていく。

「今のは後になつて思い直したことです。あの時はとんでもない事の渦中に自分が居るんじゃないか——その事で頭が一杯になつて、とても坂柳さんを気に掛ける余裕はありませんでした。」

だから……あたしも牛井くんの指示通りの事を伝えて終わりにしたかつた……そしたら余裕ぶつた顔で彼に騙されてるのはあたしの

方なんじゃないかって返されちゃって」

「それが切っ掛けになってヒートアップして頭に血が上っちゃったってことか」

「はい——そしてこれも後になって思ったんですが、あの時の坂柳さんはお父さんのことで意地になってたんじゃないかと………：………：本当にお父さんが大好きなんだって……：我ながら全く配慮の足りなかったって」

軽井沢の態度やニュアンスは本当に悔やみ反省している様で、糾弾することも慰めるようなことも出来る雰囲気ではなかった。

そんな流れのままに軽井沢は目を閉じて更に罪悪感を噛み知れるような様子を示す。

「あたしもこの学校に来て親から離れて、親の事を考えることも少なくなってきました——だから坂柳さんのことで改めて思い出して……：本当に悪いことをしてしまったと謝りたいです」

軽井沢はゆっくりと目を開けて今度はCの方にと向き直る——流れに吞まれていた者たちは息を飲み身構えた。

「諸藤さんにも親御さんに対しても酷いことしてしまった——あたしも人の子として、それがどれ程のことだったのかと思ひ至りました。

ご友人やクラスメイトの方々を含め迷惑をかけてしまったこと……：この事を忘れず、二度と起こさないように誓います。

そして遅くなりましたが、諸藤リカさん——あなたを傷つけてしまったこと、本当に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げて非を認めた軽井沢——この学校のセオリーならばここで攻めて自クラスに有利になるように持つて行くものだが、彼女のもたらしした流れから脱することなど出来ずに全員がドン引きしたまま長い沈黙の数秒が過ぎた。

「………：………：思わぬ形で脱線しそうになったが、謝罪を受けいるか？」

南雲が確認を取るが、Cは担任である坂上を含め最早審議の内容など完全に無くなっていった。

「は、はい——私としてはこれで十分です」

「リカの言う通り……：ちよつと大げさに騒ぎ過ぎたって思いますし」

諸藤と真鍋は一刻も早くこの場から去りたいと顔に書いており、「当人たちがそれでいいなら私としても言う事はありません」

坂上も彼女らの意見を尊重するようだが、受けた衝撃が抜けきっていないようで当初の堂々とした態度から若干たどたどしさが見えた。

「? クラスは?」

「あたしもこれ以上、戦う意思はありません——ね、堀北さん、平田くん」

「え、ええ。そうですね」

「は、はい……僕もこれで異存ありません」

「双方の合意を受けたことで審議は終了する——ただ、ここで話された内容は真偽が定かじやない分、口外は避けたい。よって、表向きには時間が経ち過ぎていて双方の主張は立証不可能——それによる話し合いの末の和解であるとだけで通して欲しい」

「分かりました」

南雲の提案に軽井沢が即答し、堀北と平田も肯く——そこに少し遅れて坂上も言う。

「受け入れます」

「では完全に合意したとして審議は閉会します」

皆が無言のまま、早々に退室していく——全く予想だにしていない展開による詰まらない幕引きとなったが、既にそんなことはどうでもよく誰一人振り返ることなく粛々と解散していった。

それから程なくして審議の結果は南雲の提案通りにCの主張が立証不可能であることと軽井沢の謝罪を諸藤が受け入れたことによる和解で締めくくったとなった。

このあまりにもあっけなすぎる結末に事情を知らない者たちは肩透かし……もしくは新たな段階に入ったのではないかと思う者も居たが、結局この件において何かが起きることは一切なかった。

事の顛末を聴き終えた龍園も既に結果には興味はなく、審議中に話された理事長の不正疑惑について思索していた。

ただ一向に考えが纏まる気がせず、取り巻きたちも学生の身では手

に負えない話にどうすればいいのか分からず途方に暮れていた。

無言の状態が続き、その中で伊吹が我慢できなくなつたのか口を開く。

「これってさ……結局は『あいつ』の思い通りの事が運んだってことなの?」

「いえ、それはないでしょう——坂柳さんの介入は間違いなく彼女の独断、身内の不正疑惑を公の場で晒すなど一切メリットがありませんから」

「僕も同意です。彼女はCクラスの勝利で審議が終わり、これ以上無用な騒動を起こして欲しくなかったのですよ」

Cの頭脳である椎名と金田による否定的見解にリーダーである龍園はどうなのかと視線が集まる。

「あ、なんだ?」

「いや、龍園さん的にはどうなのかと……」

龍園はその視線を鬱陶しそうにし、それを受けて石崎が遠慮がちに言う。

「そもそも今回の件って、牛井が遠慮なく戦うつてのが当初の目的だったんでしょ……それがなんだってこんなことになる訳?」

伊吹もずつと溜め込んでいたのか勢いよく言葉が出る——その問いに龍園は椎名に目を向け無言のまま説明しろと促す。

「はい、その通りです——ペーパーシャツフル前の試験では私たちは試験を受ける以前の状態にされてしまい、勝ち負けどころか生き残る事さえ危うい状況でした」

ペーパーシャツフルの全容を協議して直ぐ、龍園は嬰兒に接触を試み自分たちを襲っている絶不調を取り除き試験に望める様にする——その見返りとして学校の試験ではないクラスでの戦いを試験後に挑むことを提案した。

嬰兒が表立って力を振るうことが出来ず、試験でも不用意に目立つことをすれば、試験中だろうがまた引つ込められる可能性は高い。

それを回避する為に試験外によるクラス間の戦いを——またこの事に関して外側から介入があるのか、あったとしてどの程度のもの

なのかを測ることも出来ると話を持って行き、思いのほかにあつさりと了承を得たのだった。

「ただ、予想外に早い段階で介入があったのは驚きましね」

金田が眼鏡をいじりながら思い出す——Cクラス一人一人に回復を促進させる療法を施し、試験開始前にはどうか普通の状態に全員が回復したものの一夜漬けレベルの勉強しか出来ないのは、かなりのリスクであり退学者が出ることも考えられた。

しかし蓋を開けてみればAクラスから出題された問題は絶妙ならインに設定されていて勉強な苦手な者でも赤点を回避できるように組まれていた。

坂柳がCを狙っていたことは既に知れており、彼女の性格から考えても有り得ない——あるとすれば彼女以外の思惑が絡み、Cクラスから退学者を出さないように働きかけがあつたぐらいだろう。

そして直ぐ後に齎された牛井嬰兒の新たな特例——学校のポイント以外による資金の使用は龍園たちの予測を裏付けるものであり、今後おかしなことが起きた際には嬰兒に疑いが掛かると言う圧力に思えた。

それでも個人的な争いに近い今回の審議にまで介入してくるかは未知数だったので、当初は予定通りに？クラスに不和を生ませるように先制を仕掛けるなどし、審議の場では龍園自身が乗り込み嬰兒と徹底的に遣りやうつもりだった。

ただそれも坂柳が軽井沢に接触し、それを伊吹に態と目撃させたことで目論見は大いに狂った。

「嬰兒くんに関わることは金輪際終わりにしたいですか——坂柳さんの独断なのかは分かりませんが、彼の取り巻いているものは私たちの想像の外の更に外……なんてレベルじゃないようですね」

語り終え感想を言う椎名——それを聞いていた面々は改めて空恐ろしさを感じる。

それを横目で見ながらずっと無言で聴いていた龍園は漸くと口を開いた。

「ただそれでも牛野郎は引くつもりは無いようだがな——掛けられた

圧力も坂柳の介入も逆手に取って、逆に学校全体に得体の知れない危機感をバラまきやがった。

これから先は何か大きなアクションが起きて、予想だにしない形でこの学校は荒れるだろうな」

龍園のニュアンスからは確信がある訳ではないようだが、いつも通りに手放して喜んでいる風にもなかった。

それだけ大きな力が自分たちの直ぐ近くあり動いている——その事実には益々どうするのかと言う注目が集まる。

龍園はいつも通りの不敵な笑みも苛立ちもなく無表情に近い神妙な面持ちで立ち上がる。

「坂柳をメインデッシュに他を潰してAクラスと思ってたが……少し方針を見直さなきゃいけないかも知れねえなあ」

龍園自身、まだ考えが纏まってはいないよう取り巻きたちも何を言うべきかが分からず同じく神妙な面持ちになった。

「待ってたわよ」

おやおや、何とも懐かしいシチュエーションだな——エレベーターから降りて直ぐの寮のロビーで堀北が不機嫌な顔しながら俺に近づいて来た。

ま、予想範囲内だけだな。

俺たちは寒空の下で目的地も決めずに並木林を歩く——傍から見れば、また新しい女とでも思われるか、それとも特例に対する虫よけか？

どちらにせよ全く持って楽しくもない時間だ——堀北の方は特にそんな顔で色気もくそもない。

「今回の件、最初から貴方が仕組んだのかしら？」

おお、声もまた刺々しく、それでいていきなりだな。

とは言うものも、ある意味その通りではあるんだよな——ペーパー

シャツフルの時に龍園に話を持ちかけた時は折角巡ってきた貴重な機会だからと引き受けた。

ただ坂柳がここまで積極的に絡んでくるのは予想外——しかし彼女の動機について考えてみるとなんとなく察しは付いた。

だから対応策も直ぐに練ることが出来た。

そして軽井沢が寝込んだ日にあいつの部屋を訪ねたのを思い出す。

「陣中見舞いに来たぞ——体調崩したんだろ。医者には診て貰ったのか、何なら俺が診てやろうか？」

チャイムを押し扉越しに声を掛けるが中からは何のリアクションもない——このまま粘るのもひとつの選択肢だが、時間が惜しいからここは強引に行くか。

「それとも寒くなって腹の傷が疼いて動けないのか？」

あつという間に起き上がったな。『地の善導』を使うまでもなくドタバタと起き上がり扉に近い付いて来るのが分かる。

勢いよく扉が開き、少々顔色が悪い軽井沢が姿を見せ言った。

「なんなのよ、一体？」

「立ち話も辛いだろうから、中で話さないか」

「あのさ……解ってるんだったら帰ってくれない……マジでキツイんだけど」

「そうしてやりたくもあるが時間がない——兎に角、話は聞いて貰う」

「ああ、もう——さっさと済ましてよね！」

有無を言わさぬような形になったが、これで落ち着いて話が出来るな——入れて貰った軽井沢の部屋は思いの外に整頓されていたが、テーブルの上に風邪薬の箱が空いてるし慌てたからか、ベッドも乱れる。

ここで誰かが突然やってきたら絶対にあらぬ誤解されそうなシチュエーションだな。

俺的にもとつとと済ませた方が良さそうだな。

「明日には完全に回復しそうだが、心持ちの方はどんな感じだ？」

既に虚勢を張ってどうこうなる段階は過ぎている——有り体に言えばメツキが剥がれてる状態だ。

今のままなら100%で軽井沢恵は悪者にされるだろう——それが理解できない程の愚鈍ではあるまい。

「なに……冷やかしに来た訳?」

「もう諦めたか?」

「こんなんで一体どうしろって言うのよ——あの女がしゃしゃり出て来た所為でもう負けたも同然じゃない」

よし、まだなんとか冷静さは残ってる様だな。

「その事ならなんとかなるかも知れんぞ」

「え?」

「坂柳に関してのことは、感情的な諍いじゃなくてもっと根深い理由があつてのこと——そう言う風に持つて行ける」

「どういうこと……仕掛けて来たのはあつちなのに?」

俺は二枚の用紙——省庁が公開してる『高度教育高等学校の予算表』と新たな特例に添えられた『追加予備』に関する書類を出した。

「これを照らし合わせていくと不審な点が出て来てな——お前と坂柳が会ったのも争うことになったのも俺がこれをお前に回したことが発端であり原因だ」

「そ、それって……」

「坂柳の父親——この学校の理事長は近い内に責任を問われることになる」

「マジで?」

「勿論、これは捏造だ。きちんと捜査すれば身の潔白は証明される——ただそれでも相応の時間は掛かるだろうがな」

軽井沢は全容に関してはピンと来てないようだが、途方もなく大きな問題があるのは認識してるようで、完全に絶句してる。

そこに更にもう一枚用紙『高度教育高等学校予備費使用による申請書』を取り出す。

「あとはお前がどれだけ腹を括れて望めるかだ」

軽井沢は無言のまま息を飲んだが圧倒された状態からは少し抜け

出た——いや活力つてやつを取り戻して来たか、若干顔色がよくなつた感じだ。

「俺の威光を借りてデカイ顔したい——それが望みだと言ったな」

これに軽井沢はなんとも言えない顔して戸惑ったようだが、それで引くならそれまで——俺は構わずに続ける。

「前にも言ったな。俺と関わるってことはこんなんじゃないデカイことこの渦中に身を置くってことだ——綾小路と櫛田はそれぞれの思惑を持って肯いた」

正直、それはそれで困った話だがな——あいつらに比べれば軽井沢の方が、まだ使い勝手がいい気もするが果たしてどうなるか。

「Aクラスに上がるだのは些細な事に見えるだけのものを示して、Cクラス……いや龍園はまだ挑んでくる気はあるのか——審議の場で示して訊いてみてくれ、それが俺の最初のお前個人への頼み事だ」

慄きが僅かにまだ抜けきってない様子に目を合わせながら言う。

「軽井沢、お前は自分の願いに対してどれだけの代償を支払う覚悟がある？」

軽井沢は差し出した三枚の用紙に目を落とし、ゆっくりと手を伸ばして受け取った——答えは決まったか。

回想を終えた俺は心の中で笑みを浮かべる——そんな俺に堀北は更に言葉を続けて来る。

「綾小路くんに櫛田さん、それに軽井沢さんと貴方個人の事情に巻き込んで——いずれ私も含めてクラスを………いえ学校全部を束ねて戦争でもする気？」

「そんな気は更々ないさ——それに勘違いするな、あいつらは己の欲の為に俺を使いたいだけ。お前も遠慮は要らんぞ」

「最早、完全に開き直っちゃったわね——その心境の変化はいつからかしら？」

心が決まったのはついこないだだな——俺は再び綾小路の父親の

ことを思い出す。

僅かな会話しかなかったが中々のやり手なのは間違いなかった——そして綾小路を連れ戻すことを諦めるようなつもりのも無いもの明白だ。

そんなのがごたついている今の状況をただ見過ごすなど考え辛い、と思つてた矢先に理事長の不正疑惑——有力者たちへの受けも悪く無さそうみたいだし、直ぐにまた何か仕掛けて来ると確信した。

それは綾小路とて気付いているのは間違いない——だから軽井沢の前に綾小路にも連絡しといたが「そうか」のひと言だった。

綾小路がそうなら坂柳も同じ——今回持ち出した疑惑もひよつとしたら俺よりも早く耳に入ってる可能性だってある。

そして彼女なら誰が仕掛けたか予想も付いているだろう。

俺も含めて色々な思惑が流れ込み、ただでさえ普通とは言えないこの学校の生活は益々もって複雑になつていくのは想像に難くない——だからこそ余計な揉め事は止せと、そんな意図もあったのかも知れないな。

どうであれこの流れは止められない——ならば受けて立とうじゃないか。

「Aクラスに上がりたいって言うお前の願いにも適ってるんだから結構じゃないか——気にするなつてのは無理だろうが、俺の事情に踏み込みたいならそれ以上の覚悟が必要だぞ」

「櫛田さん同様に貴方の雇い主になれと？」

「なりたくないなら止めんど——お前の兄貴にもなつて見たらどうだって言つたし、将来一緒に働けるかも知れんど」

「?!」

一瞬で絶句してしまった——ただよくよく考えるとこれって堀北学の意に反することだったかな？

自分の真似じゃなくて、堀北鈴音自身の道をつてのを願つてたし

……余計なひと言だったかな。

……いや、これはひよつとしたら俺自身の無意識の願望なのかも知れないな。

有力者の席を狙う者たちを揃えば、それはそれでかなり面白い事になる。あの綾小路父は息子を次の席に就けたいみたいだし、ライバルが一杯でいい競争環境にもなると思うが、果たして綾小路清隆本人はどう思ってるかな——特に今現在は？

所変わり学生寮の綾小路の部屋では、綾小路清隆と訪ねて来た坂柳有栖が深刻な顔をしていた。

「……………理事長の不正疑惑か。これは十中八九“あの男”の仕業と見ていいな」

「ええ。牛井嬰兒のバックがやるには道理に合いません」

「お前個人にも迷惑をかけたようですまない」

「全くです——こんなことになるのは出来る限り先に延びて欲しかったのですが」

いつもの坂柳ならやんわりとしたフォローが混ざった返しが来るが、不満が溜まっていたのは間違いないようで勢いよく非難の言葉が出る。

それは表情にも表れており、いつもの余裕の混じった感じは全くない——見方を変えれば無邪気な子供の様だった。

滅多に見れない貴重な場面に綾小路の目は自然と釘付けになってしまう——それを更に面白くない感情の混じった坂柳が訊く。

「……………なんですか？」

「いや、有栖もそんな顔するんだなと思ってな」

「……………もう、人の気も知らないで」

綾小路のストレートな返しに坂柳は僅かに頬を染めて目を逸らす——先程からの珍しいものの連続に綾小路の視線は益々言いようなない感情が籠っていく。

これにとうとう耐えかねて坂柳は慌て気味に口を開く。

「兎に角、分からない先の事を考えても仕方ありません」

「そうか、あの男だけじゃなく便乗して他の思惑がやってくる可能性

だつてあるぞ？」

綾小路が被せるように言い、もう少し今の話題を継続しようとする——それは建設的な理由もあるが、その所為で坂柳に掛かる負担はどうなるかと言う心配な面と何よりも今の坂柳有栖をもう少し見たいと言う極めて個人的な無意識の欲求があるのかも知れない。

と、そんな考察が頭に浮かんでしまった坂柳有栖は僅かだった頬の朱色が濃くなっていってしまふ——それをじっくりと見ていた綾小路清隆はやや残念そうなニュアンスで折れることにした。

「ま、有栖の言う事もその通りだ——理事長だつて冤罪に潰されるようなヤワじゃないだろうし」

「当たり前です——私のお父様を舐めないで下さい」

これでこの話は終わりだと暗黙の了解を得た双方は、次の話に切り替えるべく時間を確認する。

「ドラマなんかだとこういうタイミグで来たりするんだがな」

「そんな都合よくは行きませんね——時間はもう直ぐですし、来られるまで待ちましょう」

そして再び沈黙が流れるが、流石に気恥ずかしさが抜けきらないのか坂柳は落ち着きがない。

また同じ流れになりそうだなと不思議な気持ちになった綾小路だが、部屋のチャイムが鳴り一気に場は冷めてしまった。

双方、複雑な面持ちになりながら来客を迎え入れる——そこにはトートバッグを下げた軽井沢恵が遠慮がちに来た。

「お邪魔しまゝす」

「びびんなくても取って食いはせんぞ」

「ええ、貴女ともこれで仲直りをしたとするんですから」

綾小路と坂柳はもう過ぎたことだと気にしてない様だが、軽井沢としてはそう簡単に割り切れる訳もなく、

「あ、そう。じゃ、手早くしちやおう」

若干焦りながらバックからファイルを取り出して開き坂柳に見せる——そこにはオーダーメイドで頼む『ウェディングドレス』の一覧が載っていた。

「うわあ、一杯あって流石に悩みますね——清隆くんはどんなのが良いと思いますか？」

「そうだな……有栖にはやっぱり清楚なのが色もデザイ的にも——」

「ちよつと、ちよつと。言ってることが普通過ぎるでしょ——もつと乙女心を考えなさいよ、あたしのセンスまで疑われるでしょうが」

「……………お前が着る訳でもないのに何とも真剣だな」

開き直った訳でもない軽井沢の様子は、綾小路には理解不能な領域に思えニュアンスには弱々しさがあつた。

「当然でしょ——嬰兒くんの特例をあたしが頼み込んでつてなってるんだから、手なんて抜けないわよ」

落としどころを綺麗に示す為と言う超が付くほどの打算的な動機に冷めた目を向ける綾小路と先日 of 件（と言つても坂柳的には微々たるもの）もあつて、より複雑な気分になる坂柳。

ただ冬休みが始まりと同時にイベントが楽しみで心躍らない訳がなく、どんな形であれ真剣に取り組んでくれる姿は非常に嬉しかつた。

「そうですね——今回はサプライズじゃなくて余裕を持って取り組めるんですから、より楽しみたいです」

そんな坂柳有栖の笑顔な台詞を見た綾小路は、

（ま、いいか）

と心の中であっさり状況を受け入れ、軽井沢と二人で盛り上がったのを見て先程まで抱いていた状況をこの一時だけ忘れるのだった。

差し障りの無い風景

12月23日、今日から冬休みか——晴れ渡った朝空を見ながら俺は今ひとつ楽しみとは言い辛い気分が目覚めた。

明日はクリスマススイヴであちこちが盛り上がるのが常であり、今のこの学校では輪をかけて盛大なイベントに花咲かせている。

……その発起人である筈の俺が何故、何も知らされないんだろうか？

こう言うのは普通、当事者同士にだけにするのがセオリーだろうに——昨晚に来たメールをまた見るが昨日と同じ文面。あたしが最高の結婚式を用意するから期待してて！”と豪く気合の入った軽井沢の顔が目浮かぶ。

ただ今日気にしなきゃいけない娘は軽井沢じゃない——テストが終わったらって約束だったのが思わぬ形になってしまい、その後もドタバタしてそれ処じゃなかった。

だから今日は仕切り直しだ、身支度を整えて外に出る——約束の間は早めにしといたからのんびりも出来ない。

ただ今はそれがいいと思ってる。

朝の肌寒い空気に晒されながら静かなに歩いていると何処からか鳥の声が聴こえた——鳴った方に目を向けてみたがもうそこには居ない。

うくん、やっぱり何事も思い通りにはいかないな。

厚手のジャケットを着直しながら自分の目でそれとなく辺りを見るが代わり映えしない景色だけ。

ああ、のどかだなあ。

思わずそんな感傷に浸りたくなってしまい、いつまでもこんなのがとも思ったが、どうもそうはいかんな。

「ヤッホー」

向うの道から一之瀬が手を振ってやって来た——ゆったりとした

紺色のニットワンピースにいつかのキャラメル色のトレンチコート
を羽織って、大人っぽさでも演出してるのかな？

「おはよう」

などと言う感想は別にいいから挨拶を返す。

「いや、今朝は一段と冷えるねえ。嬰兒くんは寒いのが苦手な方？」

「その手の事で苦手は無いな——好きな訳でもないが」

『午』から受け継いだ防御術『鎧』は熱や冷気にも耐えられる——と
なんで他愛無い雑談でこんな事を考えてんだ。

どうにもまだ審議からのが抜けきつてないみたいだ。

「にやははは——無理に明るくなることないよ。真面目なものも少しは
残しといたほうがいいだろうしね」

「すまん」

思いも寄らず変な気を使わせてしまった——我ながらちよつと不
覚だ。

ただ、いい感じに場の空気は絆されたので俺たちは歩きながらケヤ
キモールに行き適当な店に入る。

中は混んでたが、ひとつ席が残ってたのは運がよかった——互いに
モーニングを頼み、ゆっくりと待っていたかったが、

「やっぱりどうも落ち着かないね」

「重ね重ね、すまん——出来る限り早く済ませたくてな。ああ、勿論
面倒だからとかじゃないよ」

「分かってるって」

とこんな取り留めのない会話にも店中から聞き耳を立てられ注目
されてるのが丸わかりだ——相手が一之瀬じゃなかったら、割って
入って来られても不思議じゃない。

それは客たちだけじゃなく、注文を運んできた店員も同じようで営
業スマイルで『ごゆつくり』と言われたがどうにも妙な含みを感じさ
せるニュアンスがあった。

ぶっちゃければ「話はこの店で終わらせてくれ」と言わんばかり
だ——厨房からの小さな隙間からも視線を感じるし、文字通りに店中
の注目の的だな。

ま、それは何処に行っても同じだけど。

「それで嬰兒くんは今回いつ外に行くの？」

「12月31日から1月1日にかけてだな」

「うわあ、今度は泊りなんだ」

「ちなみに春は一日だけだと念押しされた」

「つてことは来年もこの時期は同じになる訳だ」

「そうだろうな……状況次第じゃ、もっと伸びるかもしれんな」

「にやははは、あんまり嬉しそうじゃないね」

「遊びに行く訳じゃ無いんだぞ」

そう。名目上は新しい特例の為に働くのだ——もっとも実際にはそこまで大したことをするかは分からないけど。

どこか適当な所に閉じ込められて無為に時間を過ごすのもありえる——それか、前回の様な回りくどいやり方じゃなくて、ストレートに任務でも与えられるか？

「ねえ……ちゃんと帰って来るよね？」

一之瀬が些か心配そうな顔してる——そんな不安にさせるような感じだったか？

「別に噛みついた訳じゃないんだ、居なくなることは無いだろう」

「そうだよ。ここは独裁国家じゃないもんね——これさよならなんて——」

「ストップ、ストップ。俺が言うのもの何だが、話が途方もなくなってる——この話はここで終わりだ」

強引にだが終わらせ宣言すると一之瀬もギャラリも胸を撫で下ろすが、まだ少し緊張感が残ってて何とも言えない感じだ。

とは言えこれで改めて仕切り直しだな。

「ペーパーシャッフルでは互いに意外な形で終わっちゃったな」

「そうだね——まさかとは思うけど、これもそつちが噛んでるとか無いよね？」

「ありえん。あらゆる意味で無意味だ——嫌がらせにすらなってる」

「じゃ、やつぱり偶然か——それとも嬰兒くん風に言えば、神様のいた

「ずらかな？」

「神は常に慈悲深い訳でも無いからな——時には不条理なのを齎して来る。そこに意味があるかは知らないけどな」

「あ、なんだか深いねえ——嬰兒くんが言うの特に」

「どうも。とても言っておこうかね」

さて前置きはこのぐらいでいいだろう——のんびり出来る時間もそんなにないしな、と思ったが一之瀬も何かを感じ取ったのか、

「ホント、平和だよね。こんな風に一緒にどうでもいいような話で和気あいあいとして——こう言うのが高校生には普通なんだよねえ」

「なんだか只管に引つ張って来やがった……『申』の話はそんなに聞きたくないのか？」

「嬰兒くん——こう言う時間ぐらい固い事なんか忘れて楽しんでかない？」

「まあ、俺も気が抜ける時には抜いときたいが……」

「つい、つられて相槌を打ったが個人的には『彼女』の話をするのは一切の苦なんて無いんだがなあ。」

寧ろ出来ないとなるのは、ちよつと残念だね。

ただ、あからさまにまたそんなのを顔に出すような真似はしたくないし、ここは一之瀬を立てて話を合わせるか。

「こういう時期と言えば明日はイヴだよな。一之瀬は誰かと一緒に過ごしたりするの？」

「うん。クラスの人々とささやかなパーティーするくらいかな——それ以上に盛り上がるのがもう直ぐあるし」

「ニヤニヤしながら俺の方はどうなんだと顔に書いてある——こつちとしても話を膨らませたいんだが、生憎と何も聞かされてないに等しい。」

寧ろ俺の方が訊きたいぞ。

「軽井沢の奴も気合入りまくってたからな——当事者達もとつくに気にしてる風じゃなかったし。と言うか、かなりの金額をいきなり要求されたし元が取れると有難いが」

「しみじみしてんのか、ワクワクしてるのか、なんとも微妙な表情だね」

——けど折角なんだから楽しんで待つてようよ」

「それはそうだが、俺が発起人なんだけどねえ」

つつい未練がましく愚痴ってしまうが、一之瀬は嫌な顔ひとつせず笑顔のままに付き合う気満々だ——かなりの私見が入った都合の良い見方だが歓迎してる様にすら見える。

「私も今回は関わらせて貰えないからねえ——あの契約はちよつと早計だったかなあ。」

ねえ、違約金払うって形で破棄するのはありかな——それで春休みの予約をいれたりとか?」

「……………うん。ま、ここまで来た以上は今更数なんて関係ないし、今回の費用を折半って形ならいいぞ」

「え、ホント!」

「ただもうひとつ条件がある——サプライズ形式はなしでだ」

「オツケー、いつもいつもじゃ飽きちゃうしね。でも全部を知らせるのはちよつと面白みに欠けるし、ヒントとかでもいいかな?」

「ほう。そう来るか——悩みどころだから即答しかねるな」

「別に時間はあるから、じっくり考えていいよ——こう言うのプロセスも楽しむ一環でしょ」

いつの間にか会話をリードされてしまい、一之瀬のペースに見事に嵌ってしまった——ただ全く不快な気分じゃなく、寧ろ心地いいとすら感じてしまう。

これもまた人柄、いや一之瀬帆波自身の魅力なんだかね。

ふとそう思い周りにそれとなく視線を向けると同じように一之瀬の方にすつかり注目が集まっている——もう俺の事なんか二の次になってしまうてる感じだ。

そしてこれが坂柳や綾小路、もつと言うなら櫛田とかなら俺へのアピールとかの計算かと勘繰るが、一之瀬に関してはそんなことを考える気すら怒らない。

やっぱり魅力的で素敵なお嬢だ——特に目の前で笑顔の一之瀬帆波は。

「ああ、なんだかそんな目で見られると照れちゃうな」

「ほう。俺はどんな目で見てたんだ？」

「ちよつと、そんなのを私の……女の子の口から言わせないでよ」

茶目つ気たっぷりな仕草であっさりと交わされてしまった——如才ない、といつもや他の奴なら感心するところだが、ここは素直に可愛いと思ってしまう。

やれやれ、ホントに調子が狂わされるな。

「あー、今度は意味深に笑って……何がそんなに可笑しいのかな？」

「そつちもそつちでコロコロとよく変わるな」

ジト目になった一之瀬に素直な感想を言うが顔をそのまま——『ムー』とか言って頬を膨らませるかなと思つたが、そうはならない。残念だね——本当に人の心は難しいものだ。

そんな気持ちだが不快さは微塵もない俺自身の心も含めて、そう思つた——それが一切の含みもなく純粹に楽しいと感じてしまう。

一之瀬の言う通り、こんな時間も悪くないな。

「……………」

昼食を終えた綾小路清隆は自室にあるテーブルに届けられた大きめの箱をジツと見ている——その表情はいつも通りのポーカーフェイスとも言えない、切実なものを想起させるものだった。

「    」

一方でその直ぐ隣に居る坂柳有栖は終始ニコニコしており、意気揚々と箱に手を掛けている。

「開けますよ」

「ああ」

互いに箱への意識が集中し、勢いよく蓋を開けて中身に視線を注ぐ——そこには花飾りのついた華やかなレースが入った青いウエディングドレスがあった。

その清潔感溢れる見栄えは一度も使われてない新品だとひと目で分かる代物であり、高校生の身ではまず縁のない代物——ただの

「ごっこ遊び」にしてもやたら豪華であった。

「ちよつと贅沢な気もするな」

ふと綾小路の口から洩れたひと言——別段なにかの含みがあった訳ではないが、

「ちよつと、何言つてんのよ！あたしのセンスに文句あるつての!？」

二人の向かいに居た軽井沢恵が聞き捨てならないと目くじらを立てる女性が声を上げる。

「そ、そうは言つてない」

その劍幕は鬼気迫るに等しく綾小路も流石に押され気味になり、ただどしく返す——それを真横から見ていた坂柳は満面の笑みであり、

「なんだ？」

と綾小路が訊いても無言のままニコニコしているだけで——それだけでなんとなく分かつてしまう。

(この前の意趣返しのももりか?………まったく性質が悪い)

「オホン！イチャイチャすんのは明日にしてくれ——我慢できないならあたしが帰つてからでもいいから」

苛立ちと呆れ交じりに軽井沢が指摘すると、二人は詰まらなそうにしながらも遣り取りを止めて改めてドレスに目を移す。

「ドレスの色が青なのは何か意味があるのか？」

綾小路のなんとなくの問いに軽井沢は少々得気な笑みを浮かべ、彼女の髪を留めているカチューシャを外してストレートになる。

「ああ、そう言う事ですか」

「？」

軽井沢の意図を瞬時に理解した坂柳に対して、綾小路は完全に蚊帳の外状態であり益々もつて訳が分からないと言った顔だ。

「これさ、そこまで古いものじゃないけど、それなりに使つてるやつなの——ドレスと同じで兼用になつちゃうけど、どうかな？」

「ええ、こんな風に気遣つてくれただけで十分嬉しいです——ふふ」

そんな当事者の一人を置いてきぼりにして話を進めていく女子たちになんと言えいいのか分からず、ただ成り行きを見るしかない——

―されど軽井沢が真剣に考え抜いて用意した趣向なのは理解でき、坂柳も間違いないと喜んでいるのもあって、

(ここは素直に感謝すべきだな)

と内心で謝辞を述べ、楽しそうな二人を見ることは悪い気分でもなかった。

「それじゃさ、早速試着しようよ——あたしも手伝うから」

「はい。お願いします」

盛り上がりながら活き活きと話を進めていくが、少しばかり冷たい視線を向けられた綾小路は渋々に近い形で立ち上がる。

「オレは外で待つてる。終わったら呼んでくれ」

ニユアンスは至って普通だが、内心では何故自分の部屋を追い出されねばと理不尽な感情に占められていた。

「楽しみにしてくださいね」

が、坂柳の満面の笑みでの返しに結局何も言うことが出来ないまま、小さく息を付いて部屋を出ていった。

そして待つこと数分、長いような短いような感覚でいるとドアが開き「ニヒヒ」と笑う軽井沢が顔を出した。

「お待たせ〜」

表情もそうだが声も態度も本当に楽しそうだ——そう素直に感心する一方で綾小路の心の一部には、

(ついでこないだまでとは大違いだな)

人の心は複雑だと冷静に分析するように見ている自分に少し辟易した気分もあった。

ただその心情を突詰めたと言う様な衝動はなく、冬の寒さも相俟って早く部屋に入りたい——否、そんな事とは関係なく部屋の奥にあるものを見たかった。

殆ど無視に近い形で軽井沢を通り過ぎて部屋の奥へと向かい、その様子を心底愉快そうに見送る軽井沢——後を追うことはせずにドアを閉める。

そして綾小路の視界に映ったのは、椅子に座り華やか青色のウエディングドレスを纏った坂柳有栖の姿だった。

ヴェールもこの前の様なおもちゃではなく本格的な物であり、一緒に付けている軽井沢のカチューシャも色合いが近いだけに違和感がない。

「どうですか？」

と坂柳が問いかけようとする——ただその前に綾小路の口から自然と、

「綺麗だ」

シンプルな感想が出て来た。そして口を開きかけていた坂柳は、無言のまま頬を染めてそのままの状態で固まってしまった。

綾小路もそれ以上は言葉が続かず無言のまま——そんな二人を少し離れて見ていた軽井沢はニヤニヤしている中に少し呆れが混じり小さく息を付く。

「ホントに飽きないわね——さっきも言ったけど、そう言うのは二人きりの時にしなよ」

絶妙なタイミングでの指摘にあつという間に二人の意識は引き戻された——ただ言われっぱなしは面白くないのか坂柳は困った風な顔で返す。

「それはすみません——佐倉さんなんかは寧ろ喜んでくれるものですから、つい癖になってまして」

色ボケたつぷりのニュアンスでの惚気を。

「うう……………」

これには流石に軽井沢もドン引きしてしまった。

坂柳はそのまま右手を差し出すと綾小路が手を取って立ち上がりせる。

そのまま数歩歩き、特に何もないまま再び椅子に座った。

一見すれば微笑ましい光景だが、一同は張っていた気を抜いて安堵する。

「杖なしでも問題は無いな」

「はい。〴〵面倒をお掛けします」

「別に面倒だとは」

「あああ、だからそう言うのは後にしてっ！」

流石に三度目ともなると軽井沢も声が大きくなり、少々辟易した表情となった——そしてひと息ついて改めて綾小路と坂柳を見る。

「うくん。やっぱり綾小路くんだけ普段着だと違和感バリバリよね——衣装はもう届いてるんでしょ、着替えて来なよ」

軽井沢は用意されていた、もうひとつの箱を押し付ける形で綾小路に風呂場の方に行くように促す。

受け取った綾小路は、何故自分の部屋でと思いながらも仕方ない状況に溜息を付きたくなるのを飲み込んで粛々と足を動かす。

「ふう。ホントにもう……よく飽きないわね、あんた達」

「ふふ。一向に心地いいと言いますか、愉快と言いますか——物凄く良いものですよ」

期せずして二人きりの状況になってしまった軽井沢恵と坂柳有栖は少し打ち解けた雰囲気では話を続ける。

本当にこの前の事での蟠りは無いようだ。

差し障りのない会話をしながらそれ以上は互いに踏み込んで行かない——あくまで目先にある事柄のみに終始している。

観察力の長けた者が居れば違った印象を受けただろう——特に扉越しに聴いていた綾小路などは。

（有栖も軽井沢も干渉しないのは暗黙の了解か？それともオレの知らない所で嬰兒が指示でもしてるのか？）

二人の事情を知っている身としては後者の仮説が望ましく、もしそうなら話に混ざってこれからの事をどうするのかとして行きたかった。

そんな雑念交じりでも着替え終えたので扉を開けると同時に女子二人が目を向け……同時にがっかりした顔になった。

「……清隆くん。正装なんですから、もつとちゃんと着てください」
「蝶ネクタイも曲がってるしい」

二人の言う通り白を基調としたタキシードは整っているとは言えず、黒の蝶ネクタイもよく見れば歪んでいるようだった——有り体に言えばだらしない格好で、盛り上がっていた空気が一気に冷めてしまった。

「すみません、軽井沢さん。ネクタイの直しをお願いしても」

「え、いいの？」

「はい。私では時間が掛かりますし」

「でも……あ、なんならさ、あたしが手伝おうか？」

困った顔で言う坂柳に納得しながらも軽井沢はやはり遠慮がちに言う。

「ふふ。お気遣いは有り難いですが、これくらいの事で拗ねるほど了見は狭くありませんよ」

「ま、そう言う事なら」

これ以上は返って無礼になると軽井沢は綾小路に近づいてネクタイを直し、タキシードも綺麗に整えながら言った。

「全く。可愛いお嫁さんの前でこう言うのをさせないでよね」

流石に反論の余地が無く何も言い返せない綾小路——そんな遣り取りを見ていた坂柳は可笑しいのか、それとも嬉しいのか笑みを浮かべる。

「ちよつと、なにニヤニヤしてるのよ？」

「いえ、厳しいプロデューサーさんに頼もしさを感じまして」

「当たり前でしょ——あたしのセンスが疑われちゃ冗談じゃないわよ」

素直じゃない誉め言葉とその返し——これを含めてずっと見ていた綾小路は、

(ひよつとしたら根底は似た者同士だったりしてな)

と漠然と思った——その間に直しも終わりキチンと着こなした風になるタキシード姿が出来上がる。

「よし。じゃ、早くこっちに」

軽井沢に急かされて綾小路は坂柳の隣に立つ——そこには程よい陽射しが差し込んでいたので新郎新婦の姿は鮮明に映えており、ある種の芸術とも言えるかもしれない。

そんな感慨を噛みしめながら軽井沢は出来前に満足した。

「うん、完璧。これなら本番はもつと絵になるわね」

「畏れ入ます」

これに坂柳は素直に謝意を示し、綾小路も無言だが満更でも無い……よくよく見ると若干愉しそうな色が見える気がした。

そんな軽井沢の方は隠すことなく笑みを深めていき、あまりの分かり易さに流石に綾小路も面白くないのか、ぶっきらぼうに言った。

「なんだ？」

「いや、なんだか嬉しそうだなって」

ストレートな即答——しかも全くの悪意でなく称賛が込められているところが面映ゆい。

そんな綾小路の心情をすぐ横で見ていた坂柳もより嬉しそうに言う。

「清隆くん、人は見たいように見るものですよ——もっとも私としてはプロデューサーさんと同意見ですけど」

後ろの件が余計だと思いつつも何かを言う気分にもなれない様子——飾らずに言えば照れている様相に坂柳は思った。

（ああ、この前の清隆くんはこんな気持ちだったんですね——確かにこれは癖になりそうですね）

そして一体何度目か、と軽井沢はもう元気よく突っ込む気にもなれず完全に呆れたニュアンスで言う。

「はいはい。褒めてくれてありがとうね——じゃ、後は簡単に明日の打ち合わせしようか」

もう、さつきと終わらせて帰りたい——腹がはち切れんばかりに見せつけられて、そんな気分で一杯だった。

それを察したのか、はたまた額面通りに受け取ったのか綾小路と坂柳は普通に対応する。

「ああ、そうだな」

「ふふふ、本当に楽しみですね」

全く持つて自然に息の合った姿——それは新婚ではなく長年連れ添って来た夫婦の様だった。

（はあ……）

軽井沢は心の中で溜息を付くも決して不愉快でもない気分で話を進める事にする——なんだかんだ言いながらも彼女もイベントが楽

しみなようだ。

こうして準備は滞りなく進み、高度教育高等学校至上における二度目の結婚式大イベントが迎えられる日になった。

割と古くからある、おまじない

さて冬休み二日目の12月24日——今日はクリスマスイヴだ。

一般に知れている神様の誕生日は明日だが、本当に盛り上がるのは今日——あちこちでパーティーが開かれているのが普通の日だ。

そしてこの高度教育高等学校でも例外じゃない——但し、内容は全く趣旨とは無関係だ。

ただそれでもめでたい……形式的にはそんな感じだし、ま、楽しく盛り上がるならいいか。

気を取り直して新調した一張羅——紳士服店で買った紺のスーツを身に纏って部屋を出る。

そして寮のロビーまで行くと俺と同じく正装した男子やパーティードレスを着た女子たちの団体さんが待っていた。

おっと、なんとも意外な面子も居るな。

「やっとな来たわね」

紫のパーティードレスに髪を結った堀北が近づいて来る——すぐ後ろには制服姿の須藤も居たが場違い感からか、なんともギョチナイ様子だ。

他の面々も少なからず制服姿が居るが、そっちは気さくな感じで談笑してる——さながら合コンに繰り出す前って感じだな。

「見た感じだとオーダーメイドね——今度の外出はそれで行くのしかしら？」

「その通りだ。そっちのドレスはレンタルか？」

「ええ、結構格安での触れ込みで——参加するなら絶対について文言付きでね」

あくまで仕方汲みみたいなニュアンスで言ってるが、その割にはピシッと決めてるし何よりも……

「……なによ？」

「いや、なんだか楽しそうだなってな」

思ったことをそのまま言っちゃった——さて、どんな反応してどんな返しが来るかな？

俺の目が可笑しくなったとかキツイのでも来るか——そんな風に見せてるだけだとか照れ隠しでも見れたりするのかな？

そんな期待……じゃない予想を胸に待って見たが、堀北は余裕を崩さず……いや益々持つて深めていった顔になる。

これは何とも予想外だな。

「その通りね——『ごっこ遊び』でもクラスメイトの幸せな門出を迎えられるのは喜ばしいことだわ」

そんな俺を見て心底嬉しそうな……いや勝ち誇ったように見える態度で返して来る。

そして続ける。

「貴方の言う通り少し楽しいとも思ってる——嬰兒くんはどうなの？」

おお、如才ない、を通り越して満点とも言える受け答えだ——堀北も成長したな。

「言い出しつぺとして楽しみじゃない訳なからう——今回、ちよつと蚊帳の外に置かれ気味なのは残念だが、だからこそ今日が待ち遠しくもあつたな」

俺の方も本心で返してみたら、堀北も愉しそうな笑みを深めていった——それを後ろから見ていた須藤の顔はなんだか複雑そうだが、そこは触れないでおこう。

別なのを相手しなきゃならんようだしな。

「うわあ、話弾んでるねえ。私も混ぜて貰っていい」
「どうぞ。構わないわよ」

櫛田が堂々と割って入ってきたが、堀北は笑ったまま快諾——それとなく見てたのもそうでないのも僅かに緊張感が走ったが、さてどうなるか？

そんな思いなど知らんとかばかりに櫛田は俺に向かって明るい赤色のパーティドレスを見せてクルリと回ってみせた。

「どう。嬰兒くん、似合うかな？」

「ああ、よく似合ってるぞ——でも今日の主役を喰っちゃだめだぞ」
「もう、そんなことする訳ないじゃん——意地悪だなあ」

困ったような顔して笑いながら俺との距離も詰めて来る——このままだとエスコート役にされるかな。

「櫛田さん、余興つといても場所を弁えないのはどうかと思うわよ——そう言うのは会場に着いてからにしましょう」

「ええ、固いなあ。堀北さん」

「これでも軽井沢さんから引率役を頼まれてるのよ——羽目を外し過ぎて減点とかも嫌だしね」

「ああ、だからこんな『ごっこ遊び』にも参加したんだ」

「あの二人をお祝いしたいのも本当よ——貴女は違うの?」

「勿論、心から祝福するよ——何よりこんなイベント、外に居たって早々お目に掛かれるものじゃないしね。ホントに楽しみだよ」

スラスラと言いなながら俺に意識を向けてるのがありありと見える——そもそもの立案者である俺に感謝してるってポーズでのアピールか?

なんだかそのまま俺に腕を回してきそうな感じもするな。

ただ何が面白くないのか、堀北の顔はすこぶる愉快とは遠いものになっっていく——本当に何が気に入らないんだか。

「そう。ならばこそ今は待ちましょう——騒ぎ過ぎてつまみ出されるなんて、格好悪いでしょ」

「ま、それもそうだね」

正論だな——櫛田の方もあつさりとしてるし、全く始まる前からヤキモキさせるなよ。

少し張り詰めそうだったのが回避されて、それとなく見てた連中もホッとしてる——そして談笑も再開した。

俺の後に来た連中も混ざっていき、いい感じに場の空気も温まってく。

ああ、良き哉、良き哉——実に平和で結構なことだ。

浸つてると時間が経つのも忘れるほどに早い——それでもって本日の大イベントに向けて引率役^{ほりきた}が出て仕切り始めた。

「みんな、時間よ。ただ最初から無粋だけど、休日の出来事での減点も有り得るから心の隅に留めて置いて」

本人が言った通りの無粋な事にちよつとテンションが下がるのも居たが、同時にある意味で堀北らしくあるな——その堀北は一度言葉を切つて小さく息を付いて改めて言った。

「それでも減多に味わえない貴重な機会——しっかりと楽しみましよう」

ほう。ニュアンスも表情も本当に楽しそうで嬉しそう——なんだか色んなのが一遍に吹き飛ばすような感じだ。

ここに居る全員が触発されて再び浮かれ気分だ。

「じゃ、行きましようか」

うじやうじやと堀北に続いていく皆は例外なく、いい顔してる——ああ、ひよつとしてだがこれが堀北の兄貴が見たかった光景なのかな？

ケヤキモールの一角にあるレストラン——本来なら客が入る事のないスタッフの休憩室に綾小路清隆はいた。

一人でただ座っている状態から、鏡の前に立って着ているタキシードが崩れていないか確認する——部屋に入ってから何度目になるかの様子にそれとなく見ていた店のスタッフたちは呆れつつも微笑ましい顔であつた。

当の綾小路本人は落ち着いているつもりで居るが、時間が経つのがやたら長く感じてしまい再び同じことを繰り返してしまう。

そしてやつとその時間に終わりを告げる者が来た。

「ちよつと、もう少し落ち着きなさいよ」

「お、軽井沢……いつから居た？」

「ついさつきよ」

制服でも普段着でもパーティードレスでもないスカートスーツを着た姿は自分たちのクラスの担任を真似したのか——普段はポニー

テールの彼女ならそう思うだろうが、本日は髪を下ろして綺麗に梳いたストリートヘアであり、丸で違う印象を受ける。

普段の軽井沢らしからぬキチンとした格好も然ることながら、参加者のドレスの手配や会場となる店も貸し切つて等、気合もそれに比例して動かした金額も相当なものだ。

スポンサーもここまで許すとは思ってなかったもので、それとなく意図を探ろうと話を振る。

「お前もお前で決まってるな——それでいてマジで奮発して」

「話してみたら結構融通利かせてくれたし、思ってたより割安にもしてくれて——あたしたちだけじゃなくて他も楽しみたいよ」

「嬰兒も太っ腹だな」

「結婚式が好きなんじゃないの………結婚自体に興味があるかは知らないけど」

「お祝いパーティが好きなら誕生日とかでも乗って来るか？」

「いや、嬰兒くんの誕生日つとつとくに過ぎてるから」

その間は正に審議によつてごたつており、それどころじゃなかった——原因の一端でもあるだけに軽井沢としては余り触れて欲しくない話題だ。

双方の間で意図が別れてしまい、このままの流れで会話を進めていくと折角のイベントに影を落としてしまう。

ただそれでも嬰兒に関する情報は欲しいので軌道修正しながら続けよう——と普段の綾小路ならそうしただろう。

「そうか。それより有栖の準備も出来てるのか？」

しかし自身が主役でもある今日のイベントで、そんなことは望ましくないとあつさり話を変えた。

「勿の論よ。さ、行こう」

軽井沢も気を取り直して嬉しそうにドアを全開して主役を促す。綾小路も無言のまま……より突っ込んで言うなら若干の緊張を顔に表しながら後に続く。

その表情を僅かに見た軽井沢は背を向けて顔が見えない状態で笑いたいのを堪えていた——ただ直ぐにもう一人の主役の元に着き、気

持ちと顔を整えて道を譲った。

そんな軽井沢の心情など気にもかけず綾小路は青のウエディングドレスを纏った坂柳有栖の元に寄って行く。

「……………よく似合ってる」

「ふふ、ありがとうございます。旦那さま」

「……………」

昨日ほどストレートな言葉が出てこない——そんな状態を面白おかしい気持ちで見ながら茶目っ気を込めて返すとまた無言になってしまう。

益々可笑しい気持ちに坂柳も傍から見ている軽井沢もポカポカしたものが胸に込み上げて来る。

出来るうることなら、もう少しこの状態で居たいと二人揃って思っってしまうが、大勢の待ち人——特に一番店付けたい、このイベントのスポンサーが居るので段取り通りの最終確認に入る。

「昨日も話したけど、今日一日このお店貸し切つてあるから、時間には余裕を持って望めるけどあんまりカツコ悪いのは無しにしてよね」
「スケジュールは叩き込んである」

軽井沢はまだ少し固そうな綾小路に言い、流石に面白くないのか少々不満気に返す。

それに益々気をよくした軽井沢は明るい口調で言った。

「そっか。じゃ、準備万端つてことで」

軽井沢は今日の主役二人を先導しながら、メイン会場へと歩き出した。

さて、そろそろ時間だな。

パーティー会場であるレストランに来て暫らく——？だけでなくAや他のクラスの輩も今か今かと待ち構えている。

レストランのフロアも広々としたものに大きめのテーブルに料理やスイーツが。

単純に見ればクリスマスパーティーだが、誰もが例外なく正装かパーティードレス——学生にしては不釣り合いとも言える光景に奮発した甲斐を感じてしまう。

そして今回の仕切りを任せた軽井沢がまず登場——いつも通りのポニーテールなら茶柱先生のコスプレみたいだな。

と思つてたら、早速仕切り始めた。

「ええ。本日は皆さま、ようこそお集まりいただきました——と堅苦しい挨拶は抜きにして、この学校一の公認カップルのお披露目です。ではどうぞ！」

何とも短く済ませて下がって扉が開く——どうやら余程見せたいつて気持ちがあうずうずしてみたいだな。

そしてタキシードの綾小路と青いウエディングドレスの坂柳が表れ、皆の目も一瞬で釘付け——それをニヤニヤしながら見てる軽井沢。

やはり相当の自信を持つてのものようだ、内心でどれだけの自慢が展開されてるかな。

そんな俺も今回の趣向はかなり気に入ってるな——レンタルじゃないオーダーした新しい青のドレスに合わせて、さり気なく軽井沢が普段髪を結つてる髪留めを付けてるとはな。

この趣向に気付いてるのは俺以外に何人いるか？

て言うか坂柳は兎も角、綾小路の方も気付てたりするのか——ちよつと聞いてみたくもあるな。

綾小路はしっかりと坂柳の腕を取つて、ゆつくりゆつくり一緒に歩く——その度に胸に来るものがあり、拍手が鳴る。

「いよつ、いいぞーお二人さん」

「この幸せ者ども」

「ねえねえ、今どんな感じ」

これぞ正に万人に祝福されてるつてのかな——かく言う俺も似たような気持ちだけど。

「おめでとう」

自然とその言葉が出た。

「ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「おやおや、すっかりと返してくれて——坂柳の方もまた満面の笑みとしか言えない顔しちゃって。」

祝福ムードが益々深まっていくな。

「設けられた貴賓席に坂柳を座らせ、すぐ横に立つても手を握り合っている。」

「全く、見たいものが見れるって言うのは本当に——いや想像以上に胸がすくな。」

「本日はたくさん集まってくれて嬉しく思う」

「はい。こんなに沢山の方々にお祝いして貰えて、感謝で一杯です」

綾小路と坂柳は横に控えている軽井沢に目を向ける。

「特にこの催しを開いてくださり、あまつさえ最高の贈り物をしてくれた軽井沢さんには一層の感謝しかありません」

坂柳の喜びに満ちた声に軽井沢は面映ゆいって感じて照れている——全くほんの少し前には考えらなかった光景だ。

隣に立ってる旦那とはえらい違いだな——そんな視線を向けるのも少なからずいたが、当人は涼しい顔で今ひとつ意味が分からないって顔だ。

「やっぱり気付いてなかった、と言うよりもそもそも知らないんだろうな。」

そんな顔が客の中、特に男子に多くいたりする——知っている女子たちからは呆れ顔だ。

内心ではデリカシーが無いとか思われてそうだな。特にそう思っただけでそうなのかな。そんな女子が近づいて来る。

それもとびつきりにニヤニヤしながら。

「軽井沢さんもやるねえ——これも嬰兒くんの好みに合わせたのかな？」

「榎田よ——リサーチは今度にもしろよ」

「おおっと、これはゴメンね。」

でも感心してるのはホントだよ——サムシングブルーなんて、洒落

たおまじないじゃない」

「お誂え向きに他の3つもそろえてる様だしな——それでも伝統通りとは言えないが」

本来、青は目立たないのが良いとされてるのをここまで派手に出して来るとは——それでもよく似合ってるけど。

「そこはアレンジしてことじゃない——実際に綺麗だし、シンプルで分かり易くもあるし」

「そんな褒めるのは本人の前にしろよ——ま、言いたいことは概ね同意だがな」

サムシングブルー、いやサムシングフォーが正しいかな——結婚式で花嫁が以下の4つのものを身につけると幸せになれるという、200年以上前からある欧米のおまじない。

本来は『なにかひとつ古いもの、なにかひとつ新しいもの、なにかひとつ借りたもの、なにかひとつ青いもの、そして靴の中には6ペンス銀貨を』とものはひとつずつ、青は目立たないようにするのが慣習なんだが、ここまで全面に押し出して来るとはな——しかも新しいものと兼ねてると来たもんだ。

同時に借りたものも薄い青で使い込んであるって兼用——軽井沢なりのオリジナリティーととるか手抜きと取るかは微妙だが、正式な場でもないイベントイベントだし別に水差すことも無いか。

花嫁とうじんも凄く嬉しそうだし、来客たちもすこぶる盛り上がってるしな。

「さて誓いの言葉はもう交わしてるから、今回のメインはコレになります」

軽井沢が二つの小箱を取り出し新郎新婦の前に出す——と言っても中身は夏に買ったペアリングなんだがな。

そんな風に分かり切っても沸々と興奮が湧いて来る——これと同じくするのは出席者の中じゃ一之瀬ぐらいだろ。

何も知らない殆どの客の目はもう釘付けた——箱が開きそれぞれに指輪を手にすると誰もが無意識に息を飲む。

綾小路は坂柳に合わせて膝をつき左手をそつと取った——これに

は流石に坂柳の頬も分かり易い程の赤みが差しており、ただ見てるこつちにまで幸せ気分が伝わって来る。

優しく添えた左手の薬指に指輪がされていく。

そして坂柳からも指輪交換も終わり、次の瞬間は会場中に溢れんぐらいの拍手が巻き起こった——勿論、俺のも含めてな。

この後のセオリーでは『誓いのキス』なんだが、今日はここまで——どうせなら一遍に全てをやるのは勿体ないとのこと。

この辺はちよつと逡巡したが、別にいいかと肯定した……もうちよつと考えた方がよかつたかな？

ともあれイベントは滞りなく進んでいき、俺も含め全員がグラスを手に持って綾小路の音頭を待つ。

「それじゃ、乾杯」

「「かんぱーい!!」」

ああ、これがジュースじゃなくてホントに酒だったらなあ。

全く酔えない味にちよつと不満を感じてると横にいた櫛田が呆れ顔で絡んでくる。

「なくに辛気臭い顔してんの？パーティーなんだから、もつと楽しまなきゃ」

皆みたいにと賑やかに談笑してるのを指してくる——今日の為に振る舞われた料理の数々に満足げな食い意地の張ったのから、主賓である軽井沢のプロデュースを称えて集まってるグループメンバーを始めとした女子たち。

今度は自分をとか、味を占めて俺にたかつて来そうなも………いや流石にこんなのは無粋か、止めておこう。

「それもそうだな——じゃ、俺もメインに挨拶して来るかな」

中でも最も囲まれ談笑してる坂柳と綾小路——特に坂柳は慣れたもののように笑顔で如才なく立ち回っている。

対照的に綾小路は失礼じゃない程度の対応がやつとって感じだ——もしかして、こういう場も初めてだったりするのかわ？

だとしたらちよつと意外だな——先日の父親からして、この手のパーティーにも経験はあると思ってたんだが。

そう思いながら近づいて行くと向うも俺に気付いたようで視線を向けて来る——遅れて囲んでいた者たち、綾小路のグループと坂柳の取り巻きたちも。

「今日はおめでとう」

「ありがとうございます」

シンプルにそう言うのと坂柳は嬉しそうに……と言うか、もうずっとこんな感じだ。対して綾小路の方は流石に慣れてないのか、言葉に詰まってる様だ。

それに気付いた……いや、ずっとツツコミたかったのか、長谷部が面白そうなニュアンスで言った。

「もう、きよぽんってば緊張しちゃってえ」

「波瑠香ちゃん」

窘めてる佐倉も言うほど気持ちが籠ってない——ぶつちやけると一緒に面白がってるな。

そんな女子たちを横目に見ながら三宅と幸村が話しかけて来た。

「それにしてもマジで豪華だよな」

「ああ。盛大にやるって言うてが、実際に来てみると想像以上に圧倒される」

さり気なく綾小路のフォローを入れてくる辺り、麗しい友情を感じればいいのかな？

ならば俺も綾小路を立てて。

「俺も予想以上に盛り上がってて驚いてる——結構楽しい」

「……そうか。なら今度は嬰兒がこの役をやってみたらどうだ？結構いいものだぞ」

綾小路め……やっと口を開いたと思ったら。

「あ、だったら私が私が！」

間髪入れずに櫛田が乗って来た——綾小路も案の定と言うか、完全に狙ってたって感じた。早速グルになってるんじゃないかと勘繰りたくなる。

ただ素直に流れに乗ってふざけて来るのも居たりするんだよな——特に綾小路と連んでる奴らとか。

「いやいや、嬰兒くんがするなら当然、一之瀬さんでしょ——つて言うか、その辺の事どうなの？ いい加減ハッキリさせなさいよ」

「お、それは俺も聴きたいな」

「長谷部の言う通りだな」

「うん。嬰兒くんが言い出しつぺなんだしね」

ちよつと訂正——ふざけじゃなくて、悪ノリして来た。

「いや、結婚は神聖なる神への誓い——遊びとは言え、想い合っていない者同士は気が進まない」

「ええ。全く妙な所で固いなあ——ただそう言うことなら軽井沢さんと平田くん辺りがベターかな？」

「ちよ、ちよつと櫛田さん!」

おや、珍しく平田が大慌てで割つて来た——軽井沢の方もちよつと息を飲んでるが、取り巻きたちは面白そうな顔してる。

完全に流れをそつちに持って行くのは流石と言うべきか——この櫛田のフォローには素直に有難いと思うべきだな。

ともあれ、これで流れは俺から平田に移り……………。

「あ、あのさー!」

と思ったその時、只管に声を上げた山内が近づいてきて場は一気に静まり返った——なんだ、どうしたってんだ？

いつものチャラけたのとは違い、切羽詰まつ……………もとい偉い真剣な顔して。

「そ、そういう話ならさ……………さ、佐倉!」

「あ、はい」

佐倉の正面に立ち、これまた真剣な声で言葉を発する姿は一世一代の決意の表れを醸し出してる——繰り返すが山内にしては珍しいことだ。

「今度の春にやるのは俺と一緒に出て貰いたい!!」

ガバツと頭を下げて言いやがった——余りの衝撃に会場の皆が固まり、同じく啞然としてる佐倉に注目が行く。

「でき、出来れば、ぶっつこ遊びとかじゃなくて…………俺と本当に付き合つて欲しい!」

言葉に詰まってる佐倉を見ることなく、直角に曲げた姿勢のまま山内は続けた——そのニュアンスはかなり勇気を振り絞ったのが伝わって来る。

これには誠意を持って答えなければって空気が蔓延し、固唾を飲んでる佐倉はオロオロしながら中々言葉が出てこない様子——うくん、このまま勢いに負けてつてのも有り得そうだな。

ちよつと、それは良くない気もするが外野が出しゃばるのも良くないしな。

「ちよつと、ちよつと！なにをどさくさに紛れて!!」

そこに長谷部が山内をも上回る剣幕で間に入った——これで一辺に長谷部が場を支配した感じになり、山内も頭を上げる。

「な、なんだよそれ……お、俺は別にそんなつもりじゃ」

「はっ、どうだか——愛里、押しに弱そうだし場の空気であればとか思ってるんじゃないの」

「ひ、ひでえ……」

山内も分かり易くショックを受けた——ただ俺もそれは言い過ぎだと思っぞ。それは後ろに居る彼女も同じよう友人を押し抜ける形で前に出た。

「波瑠加ちゃん。私の為なのは分かってるけど、返事はちゃんとするから」

傍目には長谷部を止める為の強がりだが、そう決断させたのは怪我の功名とでも言うべきか——佐倉は山内の真正面に立ち、そして山内ほどではないが頭を下げた。

「ごめんなさい——その気持ち、答えてあげられないです」

全くどもることなくストレートな拒絶な言葉——それでいて相手を立てた配慮も感じさせる。

正直初めてあった頃では考えられない対応だ——友情に恋愛と佐倉もこの学校での生活で色々と揉まれてるようだな。

「そっか……ありがとな、佐倉。ちゃんと答えてくれて」

一方、山内の方も声に震えはあるがそこまでショックじゃない——いや、気持ちに区切りがついてスッキリしたって顔だな。

これには少しは敬意を示すべきかな——そう思い、俺は緩慢なテンポで手を叩く。

「落ち込むなどは言わんが、恥ずべきことじゃない——寧ろ男を上がったことを誇れ」

「男が……上がったのか?」

「今はな。ただそれで慢心しちや、逆に廃るから気を付けろよ」

「ひと言多いっての……」

それは失礼したな——俺はそれ以上言うことがなく、それとなく須藤と池に目配せすると流石に察したのか、山内に近づいて肩に手を置いた。

「ま、元気出せや」

「後で愚痴ぐらいは付き合うからよ」

おうおう、こつちでも友情が展開されるか——ただ湿っぽくなつちまったのは思うところがある。

それは他も同様のようで、

「あー、ちよつと予定外だけど、もうここでやつちやおうか!」

そんな中で軽井沢が真つ先に声を上げて、待機していたスタツフに合図を送り間もなくして豪華なケーキが運ばれてきた——ちなみにチョコプレートにはメリークリスマスだった。

「ストレートなのは本番につてことで。今回は日にちに合わせてつてことで」

そう言つて坂柳と綾小路にナイフを差し出す——この演出に再び場は盛り返しの兆しに包まれた。

「有栖、ゆつくりでいいからな」

「ありがとうございます。清隆くん」

二人にしても嬉々とした様子で受け取り、坂柳を大事に支えながらケーキに入刀した。

同時に皆が拍手し、完全に盛り上がりを取り戻した——うん。やっぱりこういう瞬間はいいものだ。

次はどんな感じになるかな?

大晦日は猫の手も借りたい

さて、やってきました今年最後の日の大晦日——普通なら休みを満喫するか、そうでなきゃおせちでも用意するのだが、生憎と俺は仕事しなきゃの側だ。

朝の肌寒い空気に手を擦りながら正門に向かう。

今回は誰も見送りに来ないでと思ってたんだが、やっぱりそうはいかないか——前回同様に綾小路が居るのはそうだが、櫛田に軽井沢とそれに一之瀬まで一緒に待ってた。

何も知らない奴が見ると綾小路が女を侍らせてるみたいな光景だな。

「嬰兒くん。ここに佐倉さんが居たら、綾小路くんは浮気なんかしないって言うと思うよ」

そんな俺を見て開口一番に櫛田が笑顔で言ってきた——その優しい表情がなんとも癪に障るのも計算済みか？

「櫛田さん。それフォローしてるつもり？」

軽井沢もだが、周りも同意見みたいだ——対しての櫛田の反応はどうでしょう”と言ったもの。

ハハ、ホントに愉快的な女だな。

そんな心情のまま話に混ざりたいが、生憎と無駄話をしてる訳にもいかないみたいだ。

「嬰兒。予定時間前だがもう車は待ってる——グズグズしてるとどやされかねんぞ」

「綾小路くんももうちよつと言い方ないの？」

今度は一之瀬が突っ込んでるし……なんでこんな朝っぱらからコメントを見せれてるの、俺？

溜め息つきたくなるが、その前に一之瀬が近づいて来た。

「てつきり背広着て来ると思ってたんだけど、そんなラフな格好でもいいの？」

「正装だとやりにくい場合もあるからな——動きやすい服装にしたんだ。着替えなきやならの場合も準備して来たし」

新調したスーツを収めたガーメントケースを見せると安心した顔になる——素で気に掛けてくれるのは有り難いと思っておこうか。

「なくに、一之瀬さん。嬰兒くんのネクタイ直す役でもやりたかったの？」

堂々と割って入って来る櫛田の顔は嫌なものだ——全くここまで分かり易くあると返って清々しさを感じるよ。

「にやははは。そうだね、それが出来たらロマンチックだよね——私も高校生の青春を謳歌したいし、例えば普通じゃなくても」

「こら、朝っぱらから修羅場を醸し出すな——こっちはただでさえ気が重いんだからな」

「「「……………」」」

なんだよ、全員黙って胡乱な目で見て来やがって……………折角来たんなら、もつと気持ちよく見送れよ。

「……………嬰兒。先方も待つてるし早くした方がいい」

「うん、綾小路くんの言う通り待つてるよと時間が長ったらしいしね。それから贈り物の件、よろしくね」

綾小路は兎も角、軽井沢も「何を言ってるんだ」みたいな顔しやがって……………ただ無駄な問答するのも癪だし、そのまま足を進める。

「分かってるよ。じゃ、新年に会おうぜ」

「うん、行ってらっしゃい！」

「あ！」

正門を超えたあたりで言う和一之瀬が間髪入れずに返してくれて、櫛田の出遅れたって感じの音が響いた——さて今は一体どんな表情が出てるのやら気になるが俺は振り返らずに迎えの車に乗り込んだ。

嬰兒の乗った車が行ってしまい、綾小路たちは何とも言い知れない

空気に少々固まってしまうが、いつまでもそうしてる訳にもいかず、
「嬰兒くんさ、ちゃんと帰って来るよね」

「一之瀬……神妙な顔して何を言い出す？」

「綾小路くんの言う通りだよ——な、何を突然不吉な事を」

「軽井沢……どもってるぞ」

綾小路の指摘に慌てて呼吸を整えるが周りは特に気にした風でもなく、嬰兒が去っていた方向を見ている。

ドラマなどの定番ではこのまま帰って来ずにこれが今生の別れだと告げられるメッセージが後で送られてくるものだが、流石に妄想じみてると一蹴する。何より、嬰兒とてこんな形でのさよならを望む者ではない——そんな命令が出たとして否が応でもの状態になったならば、

「もしさ、もしもだけどさ——嬰兒くんがピンチになっちゃたら、綾小路くんどうする？」

「オレ如きじや、どうしようもないな。榎田は助けに行くのか？」

「うん。どうだろうね、命あつての物種だし」

話の流れが完全に物騒な方向に行つてしまい、益々思い雰囲気が押し掛かつて来る——そこに背後から第三者の声が響いた。

「それが賢明ですね——ついでと言つてはなんです、その調子で貴女の目標は正攻法で挑むことをお勧めしますよ」

「有栖。来てたのか」

「おはようございます、清隆くん。そして皆さん」

綾小路たちが振り返ると黒いケープコートにベレー帽の坂柳の姿が——自然と綾小路から距離を取る女子たちを気に留めることなく、近づいて隣に立つのは最早見慣れ過ぎていている風景だった。

だからこそか、一之瀬も自然なニュアンスで問いかけた。

「坂柳さんは嬰兒くんが外で何するか、やつぱり知ってるの？」

「いいえ、全く——ただ彼の家業と呼べるものは大凡聞き及んでおりますので、絶対に心配ないなどの無責任な事は言えませぬ」

「豪く不吉な含みを持たせて来るね」

「端的な事実です——そしてこれ以上の事は例え知ついても言えま

せんよ」

「分かってるって——坂柳さんの所為で死んじやったなんてのは私だつて望むところじゃなし」

「一之瀬も大概だな」

坂柳を庇う様な綾小路——不吉な空気が更に増してしまいそうになる。

「やめようよ、こんな日にギクシヤクするのは」

が、櫛田が絶妙に間に入って回避させた——この辺りの調整の仕方は流石だと全員が感心しつつ、その言い分の尤もさも理解しているので無言のまま手打ちを了承する。

そして再び正門に顔を向け、嬰兒が行ってしまった方向を見て程なく解散となった。

さて何カ月振りかの外は年末年始に彩られてると言えばいいのか、締め売り出しやら年明けへの宣伝やらで賑わつて見える——知識や諸々の記憶としては知っていても実際に見てみると得られる情報は文字通りに次元が違うな。

ただそんな感傷も長続きせず目的地のビルに到着した——さて一体何をするのか？

車から降りて指示された階まで行き、連絡があるまでホールで待機——特例の口上がある程度は建前だと思つてたが、まさか今日明日はずつとこのままで過ごさなきやいけないなんてことはないよな？

建前と言えば、軽井沢のイベントプロデュースの対価として指定された病院に贈り物をとのことだが、この『杉村』とやらは一体誰でどんな関係なのか？

詮索はしないで欲しいとの事だったから何も聞かなかつたが妙に切実にも感じた——暇するなら俺が直接行きたいものだ。

そうして暫らく待つてると人の気配がうじゃうじゃと——どうやら何もしないのは無いみたいだな。

「待たせたな」

「いいえ、それでこれから私は何を？」

「まずは着替えろ——その後すぐに移動だ」

ホールに入ってから来た警備服の集団の一人から声を掛けられたので立ち上がり予定確認——向こう側も肃々と答えてくれる。

真面目な方のようにでひと先ずは安心だな。

指示通り、ロッカーで警備服に着替えて彼らと混ざって移動——前は偶然を装ったテロの対処だったが、今回はストレートに大物の警護でもするのか？

姿勢や歩き方などの身のこなしからすると彼らは間違いなく訓練を受けたプロだ。俺の事を知ってるかは判断付かないが、職務に同行するなら少なくとも戦士の関係者なのは把握してると見た方がいいか。

さて再び車に揺られること数時間——このまま東京を離れて関東圏外でも思ったがそこまでじゃないようで、趣を感じる大きな神社の前で止まった。

ここが本当の目的地か。

一緒に降りて後に付いて神社の敷地内に入る——進んでいる中エリアの一角では既に初詣に向けて、いくつもの屋台が準備されている。

うーん、暇があるなら俺も回ってみたいな——そんな誘惑に駆られるようになるも飲み込んで神社の中に入っていく。

神主と思われる人と数名の巫女さんや宮司さんが真剣な面持ちで待ち構えていた。

「お待ちしていました。早速ではありませんがあなた方の警備地区はここをお願いします」

単刀直入だな——用意されている境内の見取り図の中で指されたのは本殿からは外れた、外苑って言うのかな、兎に角無駄のない会話で話は淡々と進み仕事が割り振られた。

そして、また即移動で忙しいものだ。

どうやら俺だけが飛び入りって訳じゃないみたいだな——この時

期の神社の警備なら、もうとつくに出来てるのが自然だ。そこに妙なのが割り込まれたら素っ気なくなるのも仕方ないかな。

それにしても広いし、まだ明るいのに参拝者——特に若者や外国人なんかが多い。

今日明日のことを思えば普通だが気を抜く訳にもいかん——前の事もあるし、何が起きても対処できるようにしておかなきゃな。

しかし何も起きることなく昼の休憩に入ってしまった——いや寧ろその方が良いんだけどさ。

休憩室で弁当をと思ってたが、なんで……いや、出来れば会わずに済ませたかったぞ。

「ご苦労様です——牛井嬰兒」

ドウデキャプルの紳士的な挨拶は相変わらず傲慢な心証を受けるな。しかも当人はまったく気にした様子もなく、頭を上げてそのままの態度で続けて来る。

「お手数ですがご昼食は私服に着替えての外でお願いします」

「つまり、ここからが本当の『お仕事』ってことか？」

思ったことをそのまま言ったが、当然無言のまま何も返ってこない——俺が知る必要はないってことね。

時間も勿体ないし、とつとと着替えて行くとするか。

近くにあるファーストフード店でコーヒーとランチを注文して適当な席に座る——そして直ぐに薄茶のトレーナーにジーンズのラフな格好した四十代と思しき男が近づいて来た。

「相席よろしいですか？」

「どうぞ」

座ると男は手にしてた新聞を広げる——俺の方から見える一面には『『市民党』直江元幹事長、体調不良で引退の噂も』と題されており……ああ、もうまどろっこしい！

「用件があるなら手短にお願ひ頂きたいんですが」

「無理してる風なのはワザとですか、それとも本当にご機嫌が悪いのですか？どちらにしてもこんな時期に勿体ないですよ」

新聞から顔を出すその顔は如何にも営業スマイルで、どの口が言うのかと言つてやりたいがここは話を先に進める事を優先すべきだ。

俺は無言で相手の出方を待つ姿勢を取ると男も察したようで、ひと息つくと言つた様相になり手にしてた空のカップを取つた。

「すみません。コーヒーのお代わりをお願いします」

「はい。ただいま」

近くに居た男性店員がポットを持つてコーヒーを淹れ、次に俺の方に尋ねて来る。

「お客様はいかがですか？」

「お願いします」

俺も入れて貰う間、向かいの男を警戒するがずっとその店員をにこやかに見ており、全く訳が分からない。

今はただ相手の出方を待つしかない、そう思いながら淹れられたコーヒーを口にするると男が口を開いた。

「いや、大晦日も働く勤労少年。感心しなければなりませんね」

顔を俺の方を向けているが意識はコーヒーを淹れた店員に向けてる——これって試してるのか？じゃあ取り敢えずは、

「お知合いですか？」

「いいえ、殆ど初対面ですね——この店も初めてですし」

今度はまた分かり易い含みを示して来る——全く用があるなら、とつとと言えよ。とそんな気持ちを込めた目を向けると、意識を俺に向けるも態度を変えることなく男は続けて来る。

「見た所、貴方も寛いでる様子ではなさそうですし、年末年始をアルバイトに精を出している勤労少年——さしずめお昼の休憩ですか」

明らかに疑問形じゃないニュアンスは白々しさを通り越してる——これ以上の時間の無駄は好ましくないな。

「面白くもない探り合いは止めませんか——そちらも仕事なら、ごちやごちや言いませんよ」

「おやおや、何やらご機嫌を損ねてしまったようで」

あくまでも白を切り通すか——コーヒを口に運び、これ以上の詮索はしないと無言で示している。俺の意に反して無駄な時間をお望みのようなだ——ならせめて何か面白い話でもして欲しいものだ。

なんとなくさつき見せられた新聞の一面に目を向ける——よく見ると日付が今日の物じゃない。

「政治に興味がおありで？」

気付いた途端にまた白々しい——ただここは話を合わせるべきか。

「いえ、なんとなく大変な事になってるかなと」

「ええ、事と次第によつては政変が起こるのではないかと言われてます——直江先生のような大物が亡くなると政界の勢力図が一変してしまいますからね」

「後継者争いとかでも勃発しますか？」

「さて、名乗りを上げられるほどの器がどれ程居るか——いずれにしてもこの国の大きな転換期には違いないですね。全く次から次へと面倒なことが続いて………難儀な物です」

「俺たちの様な下々の者がこんな所で議論してても——」

「いやいや、この超情報化社会——その気になって調べれば世界に何が起きてるかなど知るのは難しくは無いですよ。実際に各省庁のデータを発信してますし、若者たちにも特に興味を持って貰いたいものです」

なんだ、わざわざ先事の嫌味言いに寄りこされたのか？

どうにも意図が測りきれない、こうなると俺ももつと踏み込んで見るべきか——そう思った瞬間に、

「わー！」

直ぐそこでの大声に目を向けると、さつきの店員と客の女の子が慌てふためいていた——どうやら、ぶつかったようで床に零れたコーヒーと女の子の服に飛んだ跡があった。

「申し訳ありません！」

直ぐにカウンターから店長と思しき中年の男が出て来て店員も一緒に頭を下げた——ただ女の子の方は怒るでもなく寧ろ心配そうに店員に目を向けていて、こつちも訳が分からない。

「いえ、私が急に振り返ったのがいけなかつたんです。せんぱ……余り怒らないで上げてください」

成程、知り合い——それもかなり親しい関係のようだ。それは誰もが分かったが、「はい、そうですか」と行く訳もない店長は頭を下げたまま、更にしつかりと謝罪する。

「いいえ、ご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありません——クリーニングの代金はこちらが持ちますので」

「いえ、本当に大丈夫ですから！」

なんとも頑なに拒否する姿は妙な必死さを感じさせる——視線を向けてる店員の事から察するとそいつの給料からの天引きなんかでも気にしてるのかな？

「兎に角、私は気にしてませんから……彼の事も怒らないで上げてください。それじゃ」

これ以上、ここに居たら不味いと思ったのか財布から代金を置いて一目散に去って行った。

忙しい場面が過ぎ去ったら店長さんは、今度はフロア全体に向かい頭を下げた。

「お騒がせして申し訳ありませんでした——直ぐに片付けますので、どうかごゆっくりと」

そうして店員を下がらせ、別の店員がモップを持って床を掃除する——奥の方ではどんなことになってるか？

「やれやれ、こんな日にやらかしましたね——注意で済めばいいのですが」

「やっぱり知り合いなんですか？」

「おおっと、すみません——私ももう行かなければいけませんので」

男は答えることなく席を立つ——結局何しに来たんだよ？とそんな事を思った際の去り際に。

「それでは、また会いましょう——牛井嬰兒くん」

名乗っても居ない俺の名を言って去って行った——程なくして俺も立ち上がりカップを返却棚に置き店を後にする。

またね——ただの心証だが、あの調子だとそんなに先の話じゃ無さ

そうだな。

そうして日もすっかり暮れて寒さも増していく中、神社では人だかりも増して来た——ざっと見ただけでも万の規模を思わせる光景だし、全体的には数百万は居そうだな。

その中でも高校生や大学生と言った感じの若者が目立ち、グループやカップルで和気あいあいとしている様子を見るとあれが、真つ当な青春なんだなと妙に感慨深い気分になる。

「松尾先輩、元気出してくださいー！」

とそんな気分にも浸るも束の間、聞き覚えのある声に目を向けると昼間の店に居た女の子が男性店員を引つ張る形で来ていた。

男の方は暗い顔で……ぶつちやければ人生に絶望したようでもあった。

もう直ぐ年明けだったのに、なんとも愉快とは言えないな——ただ部外者が安易に立ち入ってもいい訳もない。

それにここは神様のいる場所、セオリーからすれば祈ること……ひよつとして、あの娘もそれが目的だったりするのかな？

しかしカップルか——あつちは今どうしてるかな？

雲ひとつない晴れ渡った夜、されど冬らしい寒空に外に出る事は無く高度教育高等学校の学生寮ではいくつも部屋に明かりが灯っていた。

その中のひとつ——綾小路清隆の部屋には一緒に新年を迎えようと来ていた坂柳有栖の姿があった。夜遅くに高校生の男女が二人きり、両者の親しい者たちも気を使ったのか——それとも別の思いがあるのか、それぞれの部屋で何を思っているのか。

そんなことを全く考えても居ない二人は暖房の利いた部屋にテーブルに向かい合い、ただ静かにお茶を飲み他愛無い話をしながら時間

が流れるのを忘れていた。

「こうして思う返すとなんだかあつという間の年でしたね」

「オレとしては入学して早々に大息吐息の連続で忙しない年だったよ」

「あらすりリングでいいじゃないですか——そう言うのはお嫌いですか?」

「平穩な三年間を夢見て入学して来たからな——ついでに言うバラ色の高校生活、青春って奴を体験してみたかったよ」

「友達が出来て彼女が出来て……外の学校なら今頃は初詣に集まるなんてのもありますね」

「有栖も寂しそうだな——流石に縁がなかったか?」

「ええ、御覽の通りの身体ですからそこまでの遠出は許されません——無理して危うい事にもなりかけましたから、一層に止められてしまいましたし」

「うくん、なんだか嬉しそうだな」

「あら、私そんな顔してますか?」

「ああ、とつても微笑ましい顔して嬉しそうに喋ってるぞ——実に可愛らしい限りだ」

「……………もー! 本当に言うようになりましたね」

流石に初めてじゃないだけにそこまでの動揺はなかったが、それでも照れが入るのはどうしようもないのか頬に朱色が差しながら言い返す。

「今日までずっと冷やかされ続ければいい加減になれるさ——しかも二度も式を上げた仲だろ、花嫁よ」

「全くもう、私専用のナルシストなんてならなくても——」

「いやいや、結構流行ると思うぞ——客観的に有栖は本当に可愛いし魅力的な娘だ」

「~~~~~」

綾小路としては私情を抜きにした分析を言っただけだが、真顔でそれも真正面から放たれた台詞の破壊力は計り知れず、坂柳有栖の精神に揺さぶりどころじゃない衝撃を与えたのだった。

「これもまた記念すべき瞬間だな」

「~~~~~」

ありのまま見たままの感想を述べる綾小路清隆に益々声が出ずに顔の朱色が増して行ってしまう——このまま思い通りになっっていくのは面白くないと頭では分かっているが、無意識が追い付いて行かないのか、結局無言のまま二人は全く違う面持ちで向かい合う時間が流れていく。

「お」

そうして幾分が過ぎた時、綾小路は何か気付いた——いや、待っていたものがやっと来たと言ったニュアンスで顔の朱色が引き、ざわついた気持ちが収まってきている坂柳に改めて何か言う態度を見せた。

(こ、今度はなんですか?)

不本意にも身構えてしまう坂柳に綾小路はいつも通りの口調で言った。

「おめでどう」

「へ?」

一瞬、何を言われているのか訳が分からずに間の抜けた声が出てしまう——綾小路は少し嬉しそうなニュアンスが混じりながら続ける。

「新しい年だ——こう言う時は明けましておめでどう、だったよな」
「あ……」

そもそもその為にこの部屋の来たにも関わらず、すっかり忘れていた自分の間抜けさに腹立たしくも……………

「一緒に新年を迎えられてよかった」

なることもなく、更に続けられた言葉に自然と笑みを浮かべてしまう——そして自然のまま綾小路の手を握り坂柳も言う。

「はい。今年もよろしくお願ひします——綾小路清隆くん」

ただ何気ない会話——それなのにそれを交わしていると本当に昔からの幼馴染だと感じてしまう。

お互いにお互いが抱いている気持ちが何なのか、彼も彼女にもまだ分かっていない——周囲に流されるのではなく、二人が自分自身で

悟った時にどんな結末が待っているのか。

ただ今は、このひと時を幸福だと感じることはどんなことがあるろうとも間違いじゃないはずだ。

(願わくば、またこんな時を)

手を握りながらの坂柳の思い——そんな気持ちに向けられた綾小路は訳が分からないまま、彼女の気の済むまで付き合おうのだった。

別のおめでどうを聞いて

新年あけましておめでどうございます。

まだ日の登る前の薄暗い時に俺は一人、祀られてている神様に祈る——手持ちの現金が無いから賽銭は出来ないが、そこはどうか大目に見てくださいと手を合わせながらの言い訳には神様はどんな顔してるかな？

ただ物思いに耽っている時間はない、初日の出と共にこの神社は開く——即ち今日の仕事の始まりだ。

既に近くの参道を始め、あちらこちらから初日の出を見た人達の足はこつちに向かつてる——これからどんどん増えていくだろう。

日も登り切り、晴れ晴れと澄み切った空の下で賑わいは増していき、俺の担当エリアも直ぐ様に人で溢れかえる様子を見せた——今日の為にか新品と思わせる和服を着た女性、厚着を着込んだ子供を連れた家族、そして新年早々からイチヤイチャしながらやって来るカップルと老若男女問わず、正に人の川の如く風景には傍から見ても感慨深いものだ。

それにしても昨日も感じたが、この神社はやたら若者や外国人が多い——これなら紛れてしまうことも出来そうだ。尤もそんなことしても消される理由を与えるだけ……もしかしてこれが狙い、もしくは逆らうなど念を押す為か？

「こら、ボーっとするな」
「すみません」

とは言え周囲への注意は怠っていないんだがな——前回同様に知らない間にまた何かやらされるのかね。

折角の年明けだし良い天気だし、こんな日ぐらいは何も起こって欲しくないもんだが。

なあ、ドウデキヤプルよ。

「やあやあ、お久しぶりです——牛井嬰兒。ご機嫌よろしゆう感じで

結構な事です——ここは礼節の則り、明けましておめでとうござい
ます。と言わせて頂きます」

俺が気付いた瞬間に可笑しな言い回しをして来るのはおちよくつ
てるのか？

「悪いけど仕事中でな——与太話していると怒られるから単刀直入にお
願いできるか」

振り向きもしないで言っただが、相変わらずの不敵な笑みを浮
かべてるのが手に取るように分かる——ああ、全く持って不愉快な限
りだ。

「勤労ぶりには頭が下がりますなあ——実に結構なことでごさいま
す」

台詞の一部に昨日のおっさんを思わせてきた——となると今回の
本当の仕事は。

「病床に臥せってる直江って爺さんをどうにかするの？」

「いいえ、全くその必要はありません」

即答で否定か——接触して来たのとあの記事は別に考えた方がい
いってことか？

最近の事で加味すると綾小路の父上殿か——派閥にでも入ってる
のか、敵対してんのかは分からないが直江と絡んでたのか。なんであ
れ政局に巻き込まれての騒動となるのか、綾小路と坂柳はさぞ御免な
展開になるだろうな。

その騒動が十二大戦に横槍が入った影響とかなら、俺も駆り出され
ても不思議じゃない——戻ったら敵同士になるなんてのは今の所は
望んで無いから勘弁してほしいんだがな。

「フッフ。色々と妄想を膨らませているようですが、そこまで大きな
変化が起こる事はありません。もっとも一寸先は闇——世の中は何
が起こるのか分からないのが常ですが」

「結果、俺の様なのが生み出されたりとかか——そこまで言うなら大
戦を仕切り直せば済んだんじゃないか」

「いえいえ、これは全くの私の勘なのですが通常通りに開催がなされ
ても余り彼らの状況は変わらないかと」

なんだ、元幹事長とやらのバックについてた有力者はそんなに勝負事には疎かったりするのか？

ベツトした国を全損失でもなった日には並行して一気に権威が吹っ飛ぶのも想像に難くない。

逆に他の有力者についてる奴に追い落とされたりとか——ひよつとして綾小路の父とはそう言う立ち位置に居るのか？

ただ普通に考えればそれは現総理の……確か鬼島だったか。そいつの方がしつくり来たりする——確かあの場では理事長は一線を退いたとか言ってたし、直接の側近とは考え辛いし、仮に敵対する立場だとして直江に取って代わろうとか下剋上でも狙ってるのか？

………てな考え事に没頭しそうになると背後にいるドウデキヤブルの笑みがありますます深くなってるのを感じる。

ったく、止めだ止めだ——憶測を並び立てたって分かるものじゃない。出たとこ勝負になるには本意じゃないし、もしも綾小路と坂柳と敵対することになったとしてもその時はその時だ。

「訳の分からない話を駄弁りに来たなら、またにしてくれないか——ここは神様の前なんだから穏やかなまま過ぎて行って欲しいんでな」
「確かにそれは御尤もです——無粋な事をしてしまうには時と場所があまりにも不適切でした。ではお詫びも兼ねて私めもご挨拶に伺うとしましょう——それではまた」

言いながら俺の見える方に移動し、紳士風にお辞儀——いつもとは違い人の川の中に消えていった。全く何し来たんだかな？

「ヤッホー、きよぼん。明けましておめでとう」

「おめでとう。清隆くん」

「朝から元気だな」

「ちよつとちよつと、折角のお正月だよ——もつと言うことあるでしよ」

「と言つとるが三宅と幸村はどう思う？」

「どうって、凄く綺麗だし似合ってると思うぞ」

「俺も素直にそう褒めるべきだよ」

男子二人からの呆れながらの指摘にいつも以上に目を眠たそうにしている綾小路は、

(そう言うものか)

となんとも覇気のない、もつと言えば無気力な状態で漠然と思い、再び晴れ着を着ている佐倉と長谷部を見た。

佐倉は赤を基調とした桜を散りばめた可愛らしいデザインで、長谷部は淡い青緑色を基調とした橙色や黒による様々な縷を散りばめられた鮮やかさを醸し出すデザインだった。

二人自身の素材がいいだけに本当によく似合っており、普通の男子高生なら目を奪われること必見なのだが……。

どうしても綾小路清隆の心には何も来るものがない——そんな様子は普通なら腹立たしくもありそうだが、佐倉と長谷部は寧ろ嬉しそうに面白そうな顔を浮かべる。

「きよぼくん。昨日の夜、坂柳さんと何かあったりした？」

「もしかして一緒にとか？」

「何もない」

それは即答できっぱりと否定された——ただそれでも普段以上に目は眠そうであり、元気も有るとは言い難い姿は納得出来るようなものではなかった。

「ホントにく、随分遅くまで居たみたいだったけど」

「カマかけなら無駄だぞ——年が明けて程なくして、有栖は部屋まで送った。そっちが期待するようなことなんて何もない」

「えー、あんな可愛い娘と一緒に居たのに」

長谷部の残念なニュアンスは他の面々も同様のようで、流石に少し不愉快さが込み上げて来たがそれよりも増して気怠さがあった。

「ねえ、清隆くん。もしかしてどっか悪いの？なら無理して付き合っ
てくれなくても——」

「ちよつと寝不足なだけだ——そんなに騒ぐようなものじゃない」

佐倉の心配そうな問いに大丈夫だと言って見せるのはその通りな

のだろうが、ただそれはそれでまた要らぬ好奇心を刺激させることにもなった。

「ねえ、本当に何もなかったあ？」

再びの長谷部の問いに慚然と否定しようとしたが、

「或いは何もなかったから中々寝付けなかったのか？」

「清隆も男だしな」

幸村と三宅の援護射撃によって深みに嵌って行ってしまう——このままでは新年早々に着にされて何処までも追及が来ると、あまり調子のよくない頭でも警戒感が灯る。

（全く、なんでこうなるのやら）

内心で愚痴りながら、どう対応するべきかと頭を悩ませるが……如何せん調子が悪いのも嘘ではないので全く何も考えが纏まらない。

（素直に嬰兒が戻って来るかどうか、あの男と接触してないかと言えたら楽なんだが……）

嬰兒を見送った際に一之瀬と坂柳が言っていたことは決して無視できる可能性ではなく、まだ全てを暴き切っていない身としてはなつて欲しくない事態だ。

もしも、そんな最悪な事態になってもこの学校から出たら終わりの身としては何が出来たのか——そう考えた時に「あの男」がして来そうな手にも思えてしまい、嫌な想像が巡ってストレスにもなっていた。

客観的に見て嬰兒のバックは「あの男」よりも遙か上だろうから、個人的な事情でしゃしゃり出るなどないと結論付けられる。

（ただ、もしも「あの男」にとって都合のいい偶然でも起こってしまったら………）

……そんなことを考え出しらキリがないと理性では分かっているが、嬰兒の取り巻いている環境も牛井嬰兒と言う存在そのものも常軌を逸している——そんな異常なものを測り知る術など綾小路には持っていない。

あるとするなら事情に僅かでも関わっている坂柳理事長——坂柳の父親に頼るしかなく、そうすると必然的に坂柳有栖も巻き込んでし

まうことに……。

(どうしてそんな風な流れになってしまったんだ)

と自分でも理解出来ず整理も付かない感情がごちゃ混ぜになり、結局夜更かし同然になってしまったのだった。

こんな時に誰かが助け舟を出しに表れてくれないかと柄にもなく漫画の様な事をおもってしまふ——当然、そんな事になる訳もなく好奇心に駆り立てられてるグループメンバーたちは逃がしてくれる気配もない。

「もしもそうなら、これから向うも誘って新年会でもするか？」

「あ、みやつちいいね！当然、きよぼんと坂柳さんを挟んでね」

「うん！私も良いと思う」

「右に同じく」

本人たちを無視して話が進んで行くのを止めることも出来ない——それでも決して拒否したい提案でもない。寧ろ当初この学校で求めていた友達との交流などを思えば歓迎するべきなのだが、

(なんか面白くないな——有栖には慣れて来たみたいと言ったが、やっぱり冷やかしの種にされるのは気分のいいもじゃないな)

そんな感想を抱きながらも話は進んでいき、連絡を入れていた長谷部が満面の笑みで言った。

「神室さんたちもオツケーだつて——みんな直ぐに集まるから、先に行っててさ」

「お、幸先がよくて今年は何だかいい年になりそうだ」

「私もそう思うよ」

「そうだな——クラスも良い感じになって来てるし、今年は一気に——」

「ゆきむー、こんな日にちよつと無粋だよ」

「なんだよ——こんな日だから決意表明にもいいじゃないか——清隆だつて早く坂柳とライバルとして戦いたいだろ？」

「ああ、そうだな——クラスもいい感じだし、思ってたよりも早く勝負できるかも知れないな」

力強いニュアンスで語る綾小路に幸村が眼鏡を持ち上げて言った。

「お、ようやく頭がハッキリとして来たみたいだな」

他の面々も「これでやつと」と言った表情をしており、長谷部は改めるように口を開いた。

「じゃ、元気な内に可愛いお嫁さんたちと合流してパーティーにしよう」

「うん！楽しみだね」

同調して嬉しそうにする佐倉の顔はいつになく魅力的で、これにはグループの男子（綾小路を含む）だけでなく、近くを通りすがっただけの者たちも目を向け立ち止まる者もいた。

普通なら一緒にお洒落をしている女子は面白く無いだろうが、長谷部は全くそんな素振りは無く、寧ろ同じくらいに嬉しそうにしていた。

「愛里もホントによく笑うようになったね——もう私がお嫁さんに欲しいぐらいだよ」

「!?……もう！波瑠加ちゃんったら！冗談ばかり」

「そ、そうだぞ！」

「明人も分かり易いな」

こうして新年の朝からの綾小路グループのじゃれ合いはひと区切りつき、ケヤキモールの和風喫茶でお洒落した坂柳たちと落ち合い、盛り上がりは更に高まるのだった。

ふう。やつとお天道様も真上に来る時間になり休憩に入った——人の川は途絶えることなく昼時とあつて参拝客たちもあちこちの店で寛ぎながら盛り上がってる。

平和だな——とふと思った瞬間に『申』の婚約者でも居ないかなと、ちよつと辺りを見てみたが流石にそんな偶然など起こる訳もないか。ただそうなるのは昨日のは幾分……いや大部分は必然な筈。出来るなら元旦ぐらいは何もなく学校に戻りたいな。

昨日みたいに見知らぬ誰かが来ても俺がどうこう出来る話じゃない

いいし、変に気負うのも止そう。

と言う訳で少し贅沢でもしてみるか——昨夜、寝る前に調べて置いた近くにあるレストランに入る。

用意していた正装も無駄にならなくて何よりだ——流石に一人で入るのは気が引けるような風体の店だが、昨日のことを思えば何も問題は無い筈だ。

「お待ちしてました。牛井嬰兒」

やっぱり待ってたか——少しばかりお前じゃない可能性も期待しなかったんだがな、ドウデキヤプル。

「それでは席に参りましょう——程なくしてランチが参ります」

そんな俺の心中などお構いなしにさっさと話を進めていく——手際が良いことだ、とでも思っておこう、その方が精神衛生的に絶対にいい。

そうして席で向かい合い料理が運ばれて来る。

「予算はこの度の分に合うようにしていますので、どうぞ遠慮なくお召し上がりください」

「ご丁寧な説明どうもありがとうございます——ではお言葉に甘えて遠慮なく」

そのまま手を付けようとした時、横を豪勢なケーキが通り過ぎて行った——なんだ、一体？

思わず目を向けると大きなテーブルを囲んでいる家族連れが。

「お誕生日おめでとう」

「おめでとう、お姉ちゃん」

両親だろう男女と中学生ぐらいの少女に祝福され、ケーキに蠟燭が灯った——赤くて長いのが一本で黄色いのが六本つてことは同学年だな。ケーキが目の前に来ると勢いよく息を吹いて火が消える。

「おめでとう」

家族三人の拍手に続き、従業員や他の客たちも拍手が舞う。当然、俺も……向かいに座ってる奴もな。

「いやはや、これは新年早々に良いものを見れました」

手を叩き続けながら言う姿は妙に様になってる——少しだけ、これも仕組んでき思ったが意味がある訳ないし穿ち過ぎだな。

本当にただの偶然だろう——ここは素直に祝福に加わろう。何より学校に戻った後に話せるしな。

「全くだな——偶々入った店でこんなイベントに遭遇するなんて、あ言う所では味わえない醍醐味だ。戻ったら自慢しよう」

だから思ったことをそのまま言ってみたが何が起こる訳でも変わる訳でもない。

「そうですね——確かにあの学校ではいい刺激になりました。願わくば卒業後への意欲にひと役買って貰うようお願いします」

と思ったが、しっかりと学校を立てて牽制してこられた。そんな感を味あわされて、すっかりランチの味の方が薄れていてしまう——全く喰えない奴だ。

しかし誕生日か——確か綾小路の誕生日ももう過ぎてたから、坂柳の方は確か……。

俺の方で設定されてる12月12日はもう過ぎてしまったが、あくまで戸籍上であり入学上の書類に必要な項目のひとつに過ぎないから日にちには何の興味はない。俺の本当に生まれた……と言ってもいいのは春だし、その辺りで誰か近いのが居たりしないかな？

「フッフ、何やら楽しそうですね——相当にこのお店の料理が気に入りましたか？」

「いいや、思わぬイベントに連想……触発されて何か面白い事でも出ないかなってな」

「そうですね」

って、だんまりかよ。内心を窺うことなんてのは不可能だし、単なる想像になっちまうが何か悪くみでもしてるかと疑ってるか——だとしてまた妙な特例を出して来るのは歓迎できないし失言だったか。

ちよつと後悔したみたいない気分之余計にランチの味が落ちたように感じてしまう——やっぱりで外で弁当にでもすれば………いいや、このイベントに遭遇しなくてもそんな大して違うことも無いか。

それにしても誕生日ひとつに何故ここまで振り回されなきゃならんのか。

これ以上考えるのは止めだ——としたいが、折角の外でのじっくり話せる機会だ。少し話題を振るのも悪くないか。

「よく絡んでくる奴のお嫁さんの誕生日が春にあつてな——どうにも俺は気に入られて無いみたいだから何かないかと思うんだが、どうしたらいいと思う?。」

「ほう。悪い印象を拭う方法ですか——月並みながら誠意を持って対応し続けるのしかないのでは」

本当に月並みつまらないだな——この事の原因はお前たちも無関係じゃないんだが。と思いつつながら更に無言でアドバイスをと訴えて見せるポーズを取る。

するとドウデキヤプルは可笑しそうな顔になり口を開いた。

「どうやら余程、気にかかるお方の様ですね」

「ああ、入学当初から『亥』に通じるものを感じてな——実際に愛情深く、特定の相手には物凄い執着だ。ただ、こちらの方は割と素直にそれを認めてたけどな」

「なんと、それは興味深いですな——ちなみに意中の相手とはやはり『申』のような?。」

「いいや、そつちに通じる奴に特定の相手は居ない——本人はモテモテだが望んでる愛とはかけ離れてて悩んでる様子だったな」

「正に若者の青春ですな。それで……」

「ああ、肝心の奴は強いていなら『卯』に通じるな」

「ほほう。それは益々興味深い、なんとあの『卯』と」

よし、上手く喰い付いた——しかし話術に関しては向うが遥かに格上なのを意識せねば。

「ああ、得体の知れなさに関してはいい勝負だと思うぞ——なにせ『卯』の事だけは妙なプロテクトが掛かってて誕生日を始め経歴が一切分からないからな」

「それはさぞかし違和感のある事でしょうが、残念ながら私にはどうすることも出来ません」

そんなのは分かっている、実際に俺もそこまで興味がある訳じゃない——今知りたいのは『卯』に通じる奴の話題をこのまま続けられるの

かどうかだ。

このまま打ち切ってしまうなら、それは俺に対してなのか——それとも「あっち側」に対してのものなのかは、この場でハッキリとさせたいところだ。

さあ、どう出る？

「それにしても『卵』に通じるですか——頓挫しかけたとは言え、あのプロジェクトもかなりの有意義な代物だと言えるのかもしれないですね」

「俺が誰の事を言いたいのか分かってるってか？」

「はい。その縁もあり綾小路篤臣氏には使者をお願いした次第ですの
で」

ここで綾小路父のフルネームが判明か——どうやら、そこまで有力者に近いつて訳じゃなさそうだな、まだ。

それが分かったただけで俺としては十分だが、折角だしもう少し突っ込んでみるか。

「息子の存在が邪魔なんじゃないか、と少し問答したが放って置いて問題は無いよな？」

「勿論です。彼の入学には理事長も随分と骨を折られたようですので、それを無にするようなことは信義に反します——こちらの事で迷惑は掛けないとの約束ですので、くれぐれも肝に銘じておくよう、そちらもお願いします」

やれやれ最終的には俺への警告に落ち着くか——ここまでが潮時だな。さつさと料理も平らげて、この時間も終わりにしよう。

得るものもあつたしな——しかし察しは付いてたが綾小路もまともとは言えない育て方されて来たのか。

そしてあの父親の事だから近い内に介入してくるのも間違いない——理事長の不正疑惑の件も考えると三学期が始まって直ぐに来て
も不思議じゃない。こう考えるとやって来るのは昨日の男か……ならせめて冬休み中は無しにして欲しいな。

問題はそれがいつまでかだな——表向きには会計上の事だが、あからさまなのは明らかだし、他の理由があつたとしてもこれも不思議

じゃない。

今の会話からして綾小路の入学は相当難儀なものようだ——そもそもまともに学校に通ってたかどうかさえ疑わしい。手続きや入学書類は理事長だけが目を通すものじゃない——もしかしてかなりの偽造があつたか？

そうなると本当は16歳じゃ……いや戸籍はあるだろうし年を誤魔化してはないだろうが、それを取り寄せるのも簡単じゃないだろうな。あいつが育った所は徹底した情報統制がなされてるのは想像が付く。権力があつても部外者にボロを見せるようなチャチな管理体制とは思えん。

提出書類にはかなりの捏造があると考えるのが妥当——だとすると書類上の経歴は誰かのものを借りたものだったり、それともオブラートに包んだストーリーでもあつたりするのか？年は兎も角、誕生日も誰かから借りたものだったりしてな。

そしてそれが表沙汰になれば、ただじゃ済まないのは綾小路篤臣だけ無い筈だ——昨日の男が見せて来た情報からすると直江元幹事長とやらが噛んでる可能性も無視出来ない。他にも複数の権力者なんか噛んでたら………今この時にも見えない戦いが繰り広げられてるなら、俺たちの学年じゃ最終的にはAクラスでの卒業どころじゃなくなつたりしてな。

それはそれで面白そうだし、事態の収拾に駆り出されたら俺の最終プランを披露できるのもいよいよ持つて現実味を帯びて来そうだな。

もしも、そんな時が来たらお前は どうする——綾小路？

などと考えてたら食べ終わってしまった、向かいも同じく——これでもう顔を突き合わせる必要もなくなった訳だ。

「ごちそうさまでした。お支払いは私が済ませますので、どうぞお戻りください——近い内にもまたお会いしましょう」

つまりまた外に出ることになるってか——全く何処までも人の気を苛立たせる奴だ。俺は大仰に立ち上がり無言のまま店を出る。その際にも意識しないようにしたが、ドウデキヤプルが深々と一礼したのが分かる——全く寛げないお昼だったな。

そうして仕事を終えた俺は、夕方には再び高度教育高等学校へと戻った——さて、今年はどんな年になるのやら。

再び、外にて。

冬休みは何事もなく終わりひと安心したが、三学期に入って直ぐにまた外に行くことになるとはな。

朝からバスに揺られ目的地までは三時間、全員がジャージ着用と予備を含め複数の下着も用意するようにとの説明だけ、長旅の間に許可されて持ちこんだ物や友人同士でのお喋りで各々が暇つぶしている様子は傍から見ればただの遠足だが、そんな事になる訳が無いことは分かり切っている。

「嬰兒は、年末年始はこの辺に来たのか？」

……だからって俺に絡んで来られても期待に応える気は無いぞ、綾小路。

バスの席は名前順で隣や真後ろじゃないがそれなりに近いから十分会話が出る——試験に向けてのって感じを装ってるが、試験にかこつけて俺の事を暴こうって魂胆が見え見えだぞ。

「いいや、俺は都内で警備のバイトしてただけだ——ってか、この話はどうしただろ」

「それはそうだが、また何か言えないだけで、ここまで来ればいいかと思ってるな」

尤もらしいこと並べやがって——周りにいる奴らだけじゃなくて聞き耳立ててる連中の緊張が高まったのを感じるぞ。

「本当に何もなし話せることもない」

「そっか。しかし今度もまた途中で居なくなったりとかも駄目か？」

「全く、遠慮なく来るな——そんなこと俺に分かる訳ないだろ。寧ろ何することになるのか俺の方が教えて欲しいぐらいだよ」

「それもそうか」

当たり障りのない返答に会話も途切れ、トンネルに入った——さっきの会話の所為か、それとも漸く来るのかと言った期待感でもあるのか、やたら長く感じるも明るくなってきたタイミングで茶柱先生が立ち上がったってマイクを取った。

全員が静かに待つ姿勢を妙に嬉しそうにしながら口を開く。

「これから何処に向かうのか説明する——最初に言つて置くが目的地は無人島などではない。あの手の試験は年に何回も開催するものじゃない——あれに比べれば今回の特別試験の会場は易しいものだ」
どこまで本当なんだか——間違いなく全員が同じ気持ちだろう。何よりこの試験次第では？クラスとつて最大の山場かも知れない。

先のペーパーシャツフルにてCはマイナス100、？はプラス50となり、その差は77となり、その後の審議においても和解となりクラスポイントに影響は出なかった——つまりはこの特別試験の結果次第ではCクラスへの昇格も大いにあり得る。

クラス全員が正念場だと気合の入り方が断然違う——その様子は入学当初では考えられない、素直に成長を感じさせる。

それは茶柱先生も同様のようで満足気に続きを話す。

「これからある山中の林間学校に案内する。一時間ほどで目的地に着くだろうから、しっかりと話を聞いておけ——でなければお前たちの『猶予』もより短くなるぞ」

こう言う脅しめいたニュアンスはこの人も変わらないな——ともあれ効果はあるようで何か言いたそうだった池も言葉を飲み込むように黙った。尤もその原因は隣に居る綾小路の圧によるところが大きいと思うが——ああ、また俺にちよっかい掛けて探ろうとしているな。

それは客観的に見れば試験への意気込み——延いては坂柳との戦いへの渴望と見え、バス内の何人かは薄ら笑いを浮かべ緊張感が若干弱まった。

「んんー」

堀北のなんともベタな咳払いで気を引き締め掛かって、それも直ぐ収まったが意気込みが大きいのは他にも多く、茶柱先生の顔はより笑みを増していった。

「では続けるぞ。今回の試験は一年生だけでなく、上級生と混ぜたの集団生活を7泊8日で行う——名称は『混合合宿』。詳しくは資料を配布するので目を通すように」

席の先頭から順に資料が回っていく——20ページほどある資料は一見すれば旅のしおりであり、寝泊りする部屋や大浴場に食堂とざっと見る分には楽しそうなものだが、要所所で特別試験の単語が出て来てやはり楽しいとは縁遠い物だ。

資料は行き渡り直ぐに説明が再開される、と思いきや先生は明らかに俺を見て一瞬何かを躊躇した。

これは何かあるな——もしくはやらされるかな？

「今回の特別試験は精神面の成長を主な目的としたものだ。普段関わりが無い人間とも円滑にやって行けるかを見定め、そして各々が学んでいく」

上級生との交流もその一環って訳か、そしてそれは相手側も同じ——向う側から見れば俺こそが最も関わるべきでない人種だと認識されてるのは間違いない。

やれやれ、何かすること長くてもこれは面倒な『合宿』になりそうだな——前に座ってる奴の思惑も含めて。

ルールの確認は念入りに行うのは必須だな。

「お前たちには目的に到着次第に男女別に分かれ、そこから更に学年全体での話し合いで6つのグループを作って貰う。詳しくは資料5ページを参照し、しっかりと把握するように」

5ページね。書かれてるルールは、

『1グループ形成には上限と下限を定める。人数は学年男女に分けた上での総合により算出される。同一月年の生徒が60人以上の場合は8人から13人。70人以上は9人から14人、80人以上は10人から15人とし、60人以下の場合別途参照』

と書いてある——生徒の人数に言及されてるのは退学者によるもの、ひとクラス40人が基本で男女別なら一学年は80人。つまりは災患20人以上の退学者が出た年もあったってことかな。

そう言えば二年生は例年になく退学者を出したとのことだが果たして何人残ってるのか？

ただ目下の注目はその下の項目『最低でも2クラス以上の生徒が存在するグループであること』だな。

この条件なら俺一人だけが他クラスだけで構成されたグループに入ることも可能だ——逆の条件でほぼ？のグループをと持ち掛けられても不思議じゃないな。

「グループは林間学校だけの一時的な物だ——ただその内容は薄くない、授業を受けるのは当然として炊事や洗濯、入浴から就寝まで共にする。特例はない」

最後のひと言で一斉に注目が集まったが、気にしてもしようがないから無言で続きを待つ。

「続いて特別試験の結果は最終日に行われる総合テストによって決まる——大まかな内容は資料7ページに記載、詳しいスケジュールは到着次第に発表する」

今度は7ページか、なにに。『道徳』『精神鍛錬』『規律』『主体性』と高校じゃ馴染みのない項目が並んでるな。しかも一蓮托生と来ている——グループの離脱や交代は認められず、やもう得ない場合の穴埋めもグループ内での対応とは。

さながら修行僧——俺的には軍事訓練みたいな内容に近づいてくれば気が楽だったりするんだが、そうなるとメンバーの連携は重要、組む奴は慎重を期さないとな。

「説明はまだ終わってないぞ。便宜上一学年だけのグループを『小グループ』と小グループを作った後は、二年三年のグループと合流し最大で45人、少なくとも30人の『大グループ』が6つ出来上がる——そして最終八日目に行う試験では大グループメンバー全員の平均点で評価される」

同学年だけでも面倒なのに他の学年もか——さて、何が起こるか分からなくなってきたな。

「次に肝心の試験結果だが報酬があるのは1位から3位まで、4位以下はペナルティがある」

詳細は最終ページだな。

『基本報酬』

- 1位 プライベートポイント10000。クラスポイント3
- 2位 プライベートポイント 5000。クラスポイント1

3位 プライベートポイント 3000
以上の報酬を生徒一人一人に与える。

『ペナルティ』

4位 プライベートポイント 5000。

5位 プライベートポイント10000。クラスポイント3

6位 プライベートポイント20000。クラスポイント5

以上を生徒一人一人が失うものとする——c1、prポイントが0以下となった場合、累積赤字となり今後の試験で得たポイントで相殺する。

『報酬』は小グループのクラス数で倍加し、総人数によって倍率も変わる。『ペナルティ』には適応されないから安心しろ——ただ最下位となったグループは『退学』が課せられる」

「救済措置は？」

平田がこれにいち早く声を上げた。

「それは最後に説明する。そしてこれが一番肝心な事だ——小グループは話し合いで『責任者』を決めて貰う。責任者と同じクラスの報酬は二倍となる——組み合わせ次第では100万以上のprポイントと300以上のc1ポイントを得ることも可能だ」

「めっちゃいいじゃん！」

「山内くん、そんな上手い話だけではないわよ——当然、それに見合うだけのリスクもあるんですよ？」

「その通りだ、堀北。それが先程の話に繋がる——最下位の取りペナルティで退学するのは学校側が定めたボーダーラインを下回った小グループの責任者だ。また責任者は同グループの一人を指名し連帯責任として一緒に退学させられる——勿論、最下位となった『一因』と学校に認められた者に限る」

ま、当然の帰結とも言えるか。大グループ全員を退学となれば、ひとクラスが無くなるも同然だ。誰かが文字通りに責任を取る仕組みは何処にでもある——それ故の高報酬だ。ただ今の話を聞いて名乗りを上げるのなんて普通は居ない——必然的に押し付けられた形になるなら、そいつ一人がバカを見るのは酷、それ故に道連れだな。増

してやそれをやらかした奴ならな。

「更に退学者を出したクラスは一人100c1ポイントが減少、不足している場合はこれも累積赤字となる」

「あの先生、それで……」

「焦るな平田、退学者の救済措置は今から説明する。退学の取り消しは原則として2000万prポイントと300c1ポイントを支払えば可能だ——ただペナルティは消失しないので100c1ポイントのマイナスもそのまま、合計で400のc1ポイントが必要になる。勿論、用意できると言う前提でだ」

「2000万ポイントはクラス全体で集めても？それとそれ場での売買で補填した物でも構わないでしょうか？」

平田の視界に明らかに俺が入った——特例を当てにする気満々でお前もお前で凶々しいな。

ただ別資金は俺の任意で動かせるものじゃないぞ……と言ってやりたかったが、課せられた意図を鑑みればそうとも言い切れないな。

俺がより不自由になるような使い方を提示すれば学校の外側は喜んで肯くのは想像に難くない——金額はまだ600万以上はあるが、当人たちのニーズ次第では金額以上の価値を付けるのは商売では当たり前。

俺と言う特例が所属してるクラスならではのやり方だ——それでもこんな形で話を進めていくのは面白くないがな。

「当人の了承を得れば可能だ——ただ、prポイントは小遣いとは違う。ポイントを分け合った故に譲渡が認められない時に必要な分が不足し退学になると言う場合もあるぞ。仮にその時に助けても次もと言う保証はないぞ。いつ自分がそうなるとも限らない訳だからな——自分の身は自分で守るのは心得ろ。成功報酬や働きに見合った対価を分け合うなんてのは社会ではレア中のレアケースだ」

これって先生なりの俺へのフォローか、それとも過去の前例を見てのただの忠告か？

どうであれ別資金を頼りにするのも慎重になるな、いざと言う時の為に温存して置きたいって考えるのも居るだろう。

「貴重なご意見ありがとうございます。今それを知れたことは大変有意義でした」

平田も如才なく返して引いた——この調子ならポイントへの論議に持って行く事は無いか。下手に過熱して俺の特例で何とかしろとかにもなられたらと思っただが、いやよかった。

ただ平田はそのまま立ち上がったって前に出る。

「先生、マイクをお借りしても？」

「好きにしろ」

そうしてマイクを渡した茶柱先生は席に戻り、平田は皆の方を見ながらマイクを口に近づけた。

「みんな、時間が無いみたいだから単刀直入に訊くよ——この試験を乗り切るためにどんなグループ分けが良いと思う？」

「そんなの俺たちだけの十二人グループ作って、あとは他のクラスに一人ずつ入れれば良いじゃねえか」

「須藤さんの言う事が理想だろうけど他クラスがすんなりと合流してくれるとは考え辛い——それに順位が思わしくなかった場合も考えないと」

「けどさ、勝ちを狙えないグループになったら結局ポイントが貰えねえじゃん」

山内の暗にポイントが欲しいってボヤキに賛同するのも居る。これも当然だよな——特にさっきの話を聞いた後じゃ、少しでもポイントを得たいと思うのが自然だ。

「それについては私から提案があるんだけど」

榎田が手を上げて注目が集まった——ただ山内はなんか嫌な予感でもするのか渋い顔だ。

「ポイントの分けるのって、あくまでその人がピンチの時ってだけにするのはどうかな——勿論、あからさまに足を引っ張るみたいのは例外として」

「私も一票入れるわ——仲間を助けるのはそうだけど、それに胡坐をかいて手を抜くなんて許せるものじゃないわ」

堀北が呼応するように賛同に回った——双方、必然的に山内や池を

見ているのは気の所為じゃないだろうな。

「な、なんだよ——そんなことする訳ねえだろ！」

「それなら結構だね——私も特別試験は例外なく全力を尽くすし」

「ええ、Aクラスへの道はまだまだ先——いいえ、卒業するまで油断なんて出来るものじゃないわ」

一見、息が合ってるが櫛田と堀北、双方のニュアンスは若干異なってると感じるな——それは俺以外にも。

「ま、まあ、これ以上は時間もないことだし詳細を煮詰めるのは現地に着いてからつてことで」

平田も妙な方向にヒートアップする気配を察したのか、早々に終わらせるようにしている。

「そうね。男女別の試験だし女子の方は私が責任を持つてことではないかしら、櫛田さん？」

「異存はないよ——その代わりしつかりと働いてよね」

ただそれでも熱は冷めそうにないな——決して悪い方向じゃ無い筈なんだがなあ、今ひとつ噛み合ってる気がしない。

「それなら、あたしもいいよ。調整が必要とかなら力にもなるし、佐藤さんや篠原さん、それに松下さんも手を貸してくれるよね」

「そうだね」

「うん」

「頑張つて乗り切ろう」

軽井沢が声を上げて上手く流れを収めた——これに平田もホツとした感じだが、それはちよつと早いぞ。

「あの先生、ひとつだけ訊きたいんですけど——男女が別れるつて合宿中ずつとなんですか？」

池が手を上げて訊いたことで茶柱先生は、またマイクを取った。

「いいや、基本的には二つの施設でバラバラに過ごすけど、一日に一時間だけ男女で食事を取る。その時には制限は無いから好きにしている」「分かりました！」

池が嬉しそうに答えると隣に座ってる綾小路にサムズアップした。「だつてさ。良かったな、綾小路——可愛いお嫁さんとも離れ離れ

じゃないってよ！」

これには全体で朗らかとなり、さつきまでの緊迫した空気は払拭された——これが計算じゃなくて打算であるのも幸いしたな、そこまでの裏がない分だけ素直に肯ける。

「ああ、そうだな」

綾小路も調子を合わせてる感じだが、何処となく嬉しそうにも見える——そして、それは俺だけじゃない。

「そう。それならモチベーションが下がること無さそうだし、男子の方は綾小路さんと平田くんは何とくしてくれるかしら？」

「勿論だよ、堀北さん——綾小路くんも頑張ろうね。嬰兒くんもね」

櫛田、堂々と俺を入れて来……いや今更言っても仕方ないから、無言のまま答えずに視線を平田に投げると嫌な顔ひとつせずに応じてくれた。

「分かったよ。僕も二人ほどじゃないけど最善を尽くす——あとは現地に着いてからにしよう」

何とか締めて平田も席に戻った。

これでちようどよく目的地でも見えてくればよかったが、そう上手い展開にもならないよな。

「ねえ、嬰兒くん。別々なら話せるのも限られるしき、今の内に試験の必勝法とかさ——」

どうあっても俺に絡んで来ようとする櫛田——周りも何も言わず、しかも耳を傾けてるし。

「そんなものが思いつく訳ないだろ——完全に分かれるなら何も出来ん、悪いがそつちで頑張ってくれ」

「もう冷たいなあ。いつもみたいなお特例で一緒にとかもダメエ？」

茶目っ気を入れ甘えた声を出してくる姿は並の男子には一ころで中々の破壊力だが、言って来た内容の含みに並じゃないのも手伝い注目が集まった——特に綾小路とか。

「そんなのは神のみぞ知るだよ」

「じゃ、神様にでもお願いしようかな——願いが叶ったら、よろしくね」

そして更に一部しか分からない含みを持たせおつて……なりたいたら止めんが、あんまり俺を当てにされても困るんだけど。

そのまま何も答えられない俺に皆は「さもあらん」みたいな顔を向けて来る——もうすっかりゲテモノ扱いだな。

ただ問題はこれ済むのかのどうかだな——今回は「外」である以上は試験とは別の事をやらされる可能性は少なくない。

それ自体は構わないが、もし櫛田の意に沿う様な事になったら……後が面倒になって綾小路がしゃしゃり出て来るのも………いかな、どうにも後ろ向きに考え過ぎだ。

先の事は分からんし、『子』の能力がない以上はその時で対処して苦しかない——ただそれでもなんだろうな、この嫌な感じは？

何かの予感じやないよな。

「そうだな。無事に乗り切れるように神に祈るしかないか」

考えが纏まらないのも相俟って無難に返すと櫛田もあつさりと言いた——その時ちょうど高速を降りて山道が見えて来る。

到着はもう少し先か。

目的地に到着し駐車場にバスが停車すると生徒たちが順次降りていく——その際には端末を提出させられ外部はもとより施設内でも連絡は取れなくなった、一般的には。

「嬰兒くん、直ぐに整列だつてよ」

降車して直ぐに空を見上げ、飛んでいる鳥を見ている嬰兒に櫛田が声を掛けた。

「今行く」

嬰兒は顔を向けて歩いて行くと櫛田が駆け寄って高揚とした様子だが、私語を慎めと見慣れぬ教師に言われそれは叶わなかった。

男女別に整列が終わると古めかしい二つの木造校舎にそれぞれが向かう——男子は少し大きめの方で入っていった体育館と思われる場所には、既に他の一年達が待機しており？クラスを見て直ぐ無言の

まま待機、続いて二年三年も合流して全学年の男子が集まる。

そして担当の教師だろう男がマイクを取り説明を開始した。

「事前説明は済んでいるので、概要に関してでは省略する。これよりすぐに六つの小グループを作って貰う——大グループは午後八時から設ける、以上だ。」

なお、大小のグループ決めに学校は一切関知しないし仲裁もしない、後々に揉めることが無いようにしっかりと話し合うように」

指示が出されまず学年ごとに集まっていき、直後に一年Aクラスが14人の集まりを作りその内の一人が前に出た。

「僕は的場と言います——御覧の通りAクラスはこの14人と他クラスからあと一人でのグループを作ります。どなたかは基本的に問いませんが、牛井嬰兒くんは拒みます」

嬰兒を一瞥しながらハッキリと言いつつ切った。

「俺は最初から入るつもりは無いぞ」

「ならよかった、揉めることがなくて幸いです——では五分設けますので話し合つて下さい」

「おい！勝手に話を進めてんじやねえ！」

流石に須藤も声を荒げるが、的場は気にすることもなく話を続ける。

「勿論、これが我が儘なのは分かっていますからメリットも提示します——他クラスの一人は特別枠として一切のリスクや負担を掛けないことを約束します」

話を主導していく的場は更にと、

「僕たちは1位を取りに行くつもりですが、その際に足を引っ張ることがなくても責任は問わないし、最下位になった場合も道連れにしません——ちなみにこのグループの責任者は葛城くんですので、意図的な場合は容赦しないですので真面目には受けて貰います」

「代わりに残ったの六人がこっちの足を引っ張ってくるんじゃないのか？」

「残ったメンバーはそちらの好きに配置しても構いません——全ての方針にも従うことも約束します」

「と言つてもな——それにその言い方だと五分過ぎたら今の約束も破棄するってことだろ?」

「どう取つて貰つてもいいですが、僕たちはこれ以上折れませんよ」
的場は下がり無言で話し合えと促す。

先の指摘でAの提案に魅力を感じた者も躊躇してしまふも検討はしなければならず話し合いが始まる。

「無視でいいんじゃないか、所詮は口約束だ——守る保証はない」
「だな」

神崎と柴田は話に乗るつもりは無いようで他のBも同意している。

「一番のネックはAクラスが約束を守る可能性はどの程度かだね——ちなみに僕は反故するのは無いと思う」

平田の言葉に注目が集まり大半が「何故だ」と言う顔になる——ただ何人かは例外のようでCクラスから金田が発言した。

「同意です。これが三年時ならまだしも一年の時に大っぴらにした約束を守らないのは長い目で見て損にしかありません」

「そう言うことだね」

「ただそれでも絶対とは言い切れないのでCとしても受ける気はありません」

金田の言葉に龍園を見た何人かの顔には疑問が浮かんだ——それに答えるように金田は言葉を続ける。

「現在、龍園氏は色々と心境を整理したこともあり休養中として、復帰するまでの代行を任されてる次第です。

ので更に提案なのですが、平田氏はAの提案を受けるつもりの様です、その上で四クラス複合のグループによるAクラス打倒を狙いませんか?」

四クラス構成のグループならば試験ポイント倍率はAのグループより確実に上がる——有り体に言う包囲網を作るのは理に適っている。

何より今回の試験は学力だけが物言うものではない——Aクラスとの差を縮める絶好の好機だ。

「僕は賛成だ。それで再度確認するけど加わった一人が平均点を下

「回っても責めないで、ここに居る全員の前で約束出来るかい？」

「誓いましょう。真面目にしてくればそれ以上は望みません」

「と、全クラスが証人になった訳だけど、希望者は居ないかな？」

平田の主導により不安感が薄まり、？の数人が手を上げて来た——これにより、じゃんけんがなされAのグループに入るのは山内に決まった。

こうしてひとつ目のグループが早々に決まり、Aの六人を残して報告に向かった。

「さて、残ったグループはどうしましょうか——Aを真似するのも有りですが、勝つ為の確実性を求めるなら四クラス構成が絶対です」

「そうなるのとクラス別で十二人で後は一人ずつが、まずは理想だな」

「そして残った二十人を分けて二つのグループをだね」

金田、神崎、平田が主導して話し合いを進めていく——それを見ていた綾小路が近くにいる三宅と幸村、そして嬰兒に言った。

「？で余るのは七人、うち五人は俺たちと高円寺で進めて貰いたいんだが、どうだろうか？」

「俺は構わないぞ」

「同じく。ただ清隆と嬰兒が一緒には無しだぞ」

三宅と幸村はあっさりと提案を呑み、高円寺は何も言わないが態度からは反対はしないようだった。

「ああ、それでいいぞ」

最後に嬰兒も了承し、綾小路は話し合いの中に入っていく。

「と言う訳で？のメンバーはこんな感じにしたいんだが？」

「Bとしては構わない——代わりに牛井をBの十二人の中に入れたいんだが？」

神崎が金田を見ながら言ったが、

「Cとしても牛井氏を取る気はありませんので構いません」

「ならば俺はCからは龍園を希望する」

話が纏まりそうだったが嬰兒も入って来て、その内容に神崎の顔には躊躇が浮かんだ。

「理由は？」

「多分だが、俺は試験中も他の事をさせられると思うんだ——それを間近で見たいのは龍園だろうから、余計な手間は省きたい」

「ハハ。そりや助かるつてもんだ、いいぜ。乗ってやるよ」

嬰兒の説明に龍園はせせら笑うように言う。

そして聴いていた面々は試験中に抜ける前例のある嬰兒なら有り得ること、そこまで実力を発揮できるのかに加えて龍園を抱え込むリスクに難色を示した。

「悪いが提案は取り下げさせて貰う」

「そうか。じゃ、俺と龍園は余り者同士つてことで誰か他に居ないか？」

「俺は入ってもいいぞ」

「俺もだ。牛井の特例がどんなのか知りたいしな」

嬰兒の呼びかけに三宅と橋本がまず名乗りを上げた。

「あと六人だがBからは希望者が居ないなら、抜きでも進めても？」

嬰兒の問いに神崎は即答できず、その間にCからは石崎が声を上げた。

「龍園さんが入るなら俺も——アルベルトもいいよな」

「イエス」

これで残りは四人となり嬰兒は他のAと？の面子を見てどうする言う様な仕草をすると。

「まてまて勝手に進めないでくれ、四クラスが揃えるのが理想だつて話だろ——Bからも三人選出するから少し時間をくれ」

「いいよ。で最後の一人は——」

嬰兒は高円寺の方を見て、これで面倒を一気に片付けようとしたが、

「済まないが、私も嬰兒ボーイとは一緒に組めない——申し出は辞退させて頂く」

「ああ、そうか——じゃ、俺から言う事は何も無いか」

あっさりとした遣り取りだったが、高円寺としては珍しい振る舞いに？の殆どは目を丸くしていた。

「綾小路たちの方はどうするんだ？」

そんな中で驚いてない綾小路に話を振ると少しだけ考える仕草をする。

「……そうだな。？の余り組はオレと啓成と高円寺でいいだろ——平田、問題はあるか？」

「二人が良いなら何も無いよ。それじゃ、こっちも——」

同じく驚いてない平田も肅々と受け答えて、？で集まるグループの十二人を決める方向に話を進めていく——これにBとCもメンバーの選定を行っていき最終的に複合グループは、

Aクラス：森重 橋本

Bクラス：墨田 森山 時任

Cクラス：石崎 アルベルト 龍園

Dクラス：嬰兒 三宅

の小グループともうひとつが、

Aクラス：鬼頭 戸塚

Bクラス：浜口 別府

Cクラス：小田 小宮 鈴木

Dクラス：綾小路 高円寺 幸村

となり、残った三つの小グループはB、C、Dが十二人にそれぞれのクラスが一人ずつに決まった。

嫌々○○

小グループが決まった後に決めなければならないのは責任者を誰にするかだが、当然名乗り出る者は居らず、無難にじゃんけんで決める流れになりそうになる。

「嬰兒は途中で居なくなるかもしれないなら外すってことで」

三宅の意見に他も同意する——もしもそうだったら、また責任者を決め直さなければならず二度手間になる。

「あー、だったら俺がなってやる——その代わり道連れは牛井だ」

龍園の言葉に息を飲む一同——当の本人は面白そうであり、嬰兒も全く気にした様子もない。

「お前がそうしたいならどうこう言う気は無い——精々、そうならないように頑張るよ」

「降ろされりや頑張るもクソもねえだろ——その場合はどうなるんだ？」

「俺に分かる訳ないだろ——確かめたいからって態と手は抜くなよ」

話があらぬ方向に膨らみそうになり、今度は冷や汗が出始める者も居たが橋本がくだけた顔で二人の間に入っていく。

「そんな事にならないように俺たちもしっかりやるとしようか——俺も引き受けてくれるなら龍園でいい。これで決まりってことでいいよな？」

やや強引だが話を締めに来て、僅かに間が開いたが元より他のCのメンバーに異論はなく、三宅や森重も同様のようで残ったBのメンバーも渋々に近い形だが賛成した。

他のグループも主体となるクラスから責任者を選出し、綾小路のいるグループ以外は報告を終え自由解散の流れになって行きそうだったが、南雲が前に出て全員に聴こえるように言った。

「意外に早く纏まったみたいだし、このまま大グループも決めないか？」

南雲はまず堀北学を見たが彼も三年達も肯定的のようだ。

「一年はどうだ？」

「僕らも問題ありません——やり方も先輩方にお任せします」

的場が一年を代表するように言った。

「よし。じゃ、ドラフト制みたいに決めるのが面白そうだし、一年の代表達がじゃんけんして勝った順から指名していくって言うのはどうですか？」

「一年がいいなら俺からは何も言う事は無い」

「だそうだが？」

「はい。それでいいです」

南雲が完全に仕切る形で話がとんとん拍子に進んでいき、一年の責任者達が集まってじゃんけんを開始する。

一番目はAを中心としたグループ、二番目は？、三番目はC、四番目は綾小路が居る複合グループで幸村が代表に出て、五番目はB、最後に嬰兒の居るもうひとつの複合グループとなった。

「俺らは余り物か」

「あ、なんか文句あんのか？」

「いいや、何も」

メンバーのぼやきに龍園が反応したが特に怒ってる訳でも無く双方はあっさりと流して推移を見る。

目玉である堀北学のグループは的場が、南雲は綾小路のグループが取り、各グループの思惑が交差する中で嬰兒たちは名前も知らない二年と三年達との大グループを結成した。

「堀北先輩——別グループになったことだし、ひとつ勝負しませんか？」

「またか、南雲」

堀北学だけでなく他の三年達も辟易した様子にこれが幾度となく行われてきたものだと同わせる——そんな中で堀北学は嬰兒を見て思いも寄らない提案を口にした。

「立会人として牛井嬰兒を立てるなら受ける——そして俺が提示する条件は他を巻き込まないことだ」

「……………へえ、珍しく乗り気っすね。」

ただ牛井は途中でまた居なくなるかもしれないっすよ——立会人

としちや適切じゃないんじゃない？」

「その場合は勝負そのものが無効だ——ちなみに条件を破った場合には、牛井の持っている特別資金を三倍の値段で買い取って貰うことにする」

嬰兒にもしつかりとメリットを提示し、罰金と言う尤もシンプルなペナルティを出したことで周囲全体にプレッシャーをばらまいた。

堀北学は嬰兒にも話を振る。

「詳しくは知らないがまだ600万前後は残ってるだろう——罰金とは別に俺と南雲からも100万ずつ支払う」

「つまり南雲会長が約束を破れば一気に2000万ですか——確かにおいしい話ですけど上が許してくれるか」

「そもそも生徒会を通さない資金と言うのも問題なんだ——そこを調整する為とするのも生徒会長の仕事の内だと思うが、どう思う？」

自分ならそうすると言わんばかりの態度は現生徒会長へのこれ以上は無挑発だった——当然、勝負を望む以上は南雲としては受けざるえないと言った雰囲気だ。

「それともやはり止めるか——俺としては全然構わないぞ」

その一方で前生徒会長はその方がいいと言ったニュアンスで言い、勝負を取り下げても構わない逃げ道を用意した——これより先は南雲雅個人の器量が試される場面となり、一同が見守る中で結論を口にする。

「まったく、やっぱり恐ろしい人ですね堀北先輩は——いいでしょう、その条件呑みましょう」

全く臆せず言い切ったことで場の空気は格段に盛り上がりを感じさせるものになった——その中でいつの間にか立会人にされてしまった嬰兒は二人の間に立った。

「それで具体的に何を持って勝ち負けを決めると？」

「シンプルにどちらのグループが高い点を取れるかでどうです？」

「構わない」

南雲雅と堀北学の両者の合意を確認して嬰兒は宣言する。

「では条件が成立したので勝負の開始とします——双方のご健闘をお

祈りします」

慇懃無礼に頭を下げた演出は何とも臭く、誰かの真似なのかと勘繰る者も居たが敢えて言及するものは居らず、これをもって漸くと解散となった。

やれやれ、丸で何も言わせて貰えないまま立会人にされてしまった——しかも特例でのポイントを全て懸けてとか。

元会長殿はどうしても特例的措置を排除したいようだ。

俺としてはどっちでもいいけど——南雲会長が約束をたがえなきや何事もなく終わるだけだしな。

ただ2000万って金額をポンと渡されるかも知れないってのはインパクトが強かったようだ——グループはおろか男子全員から何かしら話せないかと伺われているのは気分の良いものじゃない。

小グループごとに泊まる部屋に案内されてる間もその機会はないかとあちこちが牽制しあって結果、何もなく部屋に着いたが寧ろ大変なのはここからだろうな。

「へえ、予想よりも古い感じだな」

木製の二段ベッドが人数分用意されてるだけで他には何も見当たらない——念の為に監視用の仕掛けも探りたいな。

「龍園さん、俺え奥のベッドの上がいいんですけど？」

「好きにしな。他も早い者勝ちでいいだろ」

その言葉に石崎が真っ先に動いた——俺はドアに一番近いベッドの下を使うことにし、その上と直ぐ側の下にそれ以外が殺到した。

早速のピリピリした感じだが、無理もない展開だけに何も言えず様子を見るつもりだったが、程なくしたノックに俺を含めた全員がドアに注目した。

「牛井嬰兒。お話があるのでご同行を」

ドアを開けることなく丁寧な口調が響いたが、姿を見せないなら声も変えたらどうだ——ドウデキヤプル。

俺は無言のままに指示に従い部屋を出るが、見送るグループメンバー達の視線はかなり重かった。

施設内を歩きながら誰一人すれ違うこともなく二人だけでの会話はいつもながら正直ストレスが溜まる。

こんな凝ったことを態々見せつけるか。

「到着早々に随分な事になってしまいましたね」

「お陰様でな」

「フッフ——どうやらご機嫌がよろしく無いようですので、早速こちらでの職務についてのお話としましょう」

「外に出てる以上、仕事は付いてまわるって訳か」

「はい。報酬分の働きはして貰わなければなりません」

「結構なことだ——しかし試験中だし、あんまり突っ込んだ内容は学校側も困るんじゃないか？」

「ご心配なく。今回はあくまで施設での業務のみですので」

今回は、ね。

場合によっては試験に介入することもあり得るってことか——感じていた嫌な感じの正体はこれか？

「基本的には朝と夜の周囲への見回りと男女共同の場である食堂の準備とお片付けだけです」

「何か不測の事態でも起こったら、その限りじゃないか」

「何が起こるか分からないのが世の常ですので」

「御尤も。それで俺はどこまでの事が許されるんだ？」

「生徒は勿論、教師陣や職員等の人命に係わることに關しての裁量はお任せします」

「おいおい、不吉な事だな——なんか、そんな兆候でもあるのか？」

「あくまで便宜上です——何かあるかはこの学校が対応することですので、我々には」

関わるのは俺に關することだけで他は干渉しないか——節度があつて、つくづく結構だな。

「この先に食堂がありますので、本日の業務についての説明は中に居るスタッフに——それではまた」

これもいつも通りに振り向く間もなく煙のように消えた——またか、出来る限り先であつて欲しいもんだ。

食堂に入るとスタッフ達は物珍しそうな目で見て来るも何も言うこともなく用意された服に着替えて昼飯の準備と片付けの手順などの説明を受けた。

早速と割り当てられたのは皿を用意するだが、五百人近くもが一辺に来るとなると、ひとつの準備だけでも時間を喰う——人手はあつてもあつても余ることは無さそうで言葉にはされないが助けにはなつてゐる様だ。

そして昼飯の時間となり、予定通りに全学年の生徒が押し寄せて来た——男女共同の貴重な時間ともあつてそれこそ一斉だ。

入つて来た奴らは一瞬だけ俺を見たが、特に何も言うことなく普通に飯を食つていき各々で会話していく——その中でひと際賑やかなのは一之瀬の周りで男女問わず次から次へとやつて来ては笑顔で対応している。

「はあふうふうふう」

やっとひと段落ついてテーブルに突つ伏してた姿は文字通りに疲れてる——まだ試験は始まつてさえないのに大変だな。

「お疲れ」

ちよつと同情もあつて暖かいお茶を差し出すと顔を上げ、疲れた笑顔を向けられた。

「ありがと——嬰兒くんの方も大変そうだね」

「鼻肩されてる分、働かなきゃな」

「にやはは。相変わらず如才ないね」

「別に無理して笑わなくてもいいぞ」

「ふくん、そつかあ——じゃ、ちよつとばかり愚痴も聴いてくれる？」

「時間は取れないから手短にな」

「ぶー、ちよつと連れないなあ………つてこんな風にさつと話が進んでいたら楽だったんだけどなあ」

「結局、女子の方は昼過ぎまで掛かつたんだつてな」

「耳聡いね——でもだからこそ話も早くて助かるよ」

一之瀬の顔から完全に笑みが消えた——おいおい、再び緊張感持つてどうすんだよ。

「男子の方でも中々に面白い事になったって神崎くんから聞いたよ——もしポイントが貰ったらBクラスに来ない？」

「なんだ。南雲会長を誘惑でもして他にちよつかい出させるのか？」

「もしもの話だよ。って言うか私がそんな真似したら返って意固地になっちゃうんじゃないかな？」

「或いは一之瀬のクラスだけには行くなって条件で更に取り引が持ち掛けられるか」

いつの間にか俺らの周りは静かになって会話の行く末を見定められてる——俺が何と答えてくるか、一之瀬が何を引き出すか。

それ次第で試験はどうなるか——そんな暗黙のプレッシャーが生じ始めた。

「にやははは——流石に洒落にならないし、今の話はやっぱり忘れて」
が、一之瀬は早々に会話を切り上げた——流れからして性に合わないってのもあるが、本当に疲れてるんだな。

「無理はしないよにな」

気休めにもならんだろうがそう言うと、苦笑して手を振ってくれた——俺もこれ以上居てはまずい気もするのでさっさと退散して仕事に戻った。

朝の六時に軽快なBGMを目覚ましにほぼ全ての生徒が起床する——既に起きていた生徒は音楽を聴きながら施設へと戻っている。

「やれやれ、こんなに素晴らしい朝だと言うのに勿体ない限りだ——そうは思わないかい、 嬰兒ボーイ？」

「お前の方から話しかけて来るとは珍しいな。高円寺」

嬰兒はうっすらと汗をかいている高円寺をよく観ながら何事無いニュアンスで言う。

「どうやらよく眠れたみたいだな。慣れない土地だつてのに絶好調

だ」

「フッフ。ノープロブレムだよ——体調管理なんて基礎中の基礎を怠って迷惑は掛けないさ」

「どの口が言うんだ。しょっちゅう優れないから休むくせに」

「それはあくまで精神的な物さ——どなたかの言う通りに臆病な性分だね。だからこそこうして鍛えていざと言う時に万全に備えなければ安心できないのだよ」

「そうか。その通りだな——いざと言う時は突然やってくるものだからな」

高円寺の皮肉にも嬰兒の態度は変わらず淡々と返す。

ただ高円寺の目にはそうは映らなかつたようで目を細めて言う。

「君がこうして見回りをやらされているのもその為だろうが、学生同士のバカ騒ぎだけで時が流れていつて欲しいものだね」

「全く持って、その通りだ」

あつさりと同意するのに釈然としないものを感じるも二人の会話は終わり、それぞれの部屋に戻って行った。

それから程なくして全学年の生徒がひとつの教室に集まった——各グループ四十人前後に分けられ、今合宿だけのクラスが形成されているようだった。

一年が上級生に挨拶を済ませ、しばらく待つと教室に教師がやって来た。

「三年Bクラス担任の小野寺だ——点呼の後、大グループ毎に振り分けられた区間の清掃を行って貰う、これが朝の日課だ。」

そして今日からの授業は学校の教師だけでなく、様々な課題を担当する方々も来られるので失礼の無いよう心掛けるように」

簡単な説明を受け、それぞれの大グループは担当区間に向かった。

担当教師のチェックを終え、次に道場を思わせる部屋に案内される。

「今日から、ここで朝夕に座禅を行って貰う」

配られたカリキュラムにないことに戸惑いを隠せない面々——その中でも嬰兒と高円寺は平然としており、余裕で結跏趺坐と呼ばれる胡坐をかいた後に太ももの上に置く仏像の取っている体勢を組んだ。勿論、綾小路やCの時任など最初から出来る面々も居たが、そうではない者たちは片足をのせるだけの半跏趺坐を組んだ。

「なお試験ではこの結跏趺坐も影響するので極力出来るようになるように」

座禅の時間も終え午前七時の朝食の時間になると昨日の食堂でなく外に案内された。そこには広いスペースと調理器具があり、既に複数のグループが先に来ていた。

「今日の所は学校が提供するが、明日からは雨天時を除き朝食はグループで作って貰う」

この説明に顔をしかめる者も少なくなかったが、朝の献立や調理方法のマニュアルは用意されているので、そこまで重くもならなかった。

唯一決めるのは分担をどうするかだが、これも無難に学年ごとに二回のローテーションで決まるのが殆どだった。

ただひとつ通常とは違う話し合いをしているグループもあった。

「なあ、牛井。お前の学外ポイントで新しく食糧とか弁当仕入れるって出来ないか？」

「そうそう。こんなんじや足りねえよ」

嬰兒と大グループを組んだ上級生がせっついて来る——もつと食べたい、樂がしたいと言う思いがあるのか他の面々もほぼ追従しているが、

「何言ってる、みんなこれで我慢してるんだ。変な我がままで掻き回すな！」

三年Aクラスのメンバーが正論を持って異を唱える。

「でも折角特例の生徒と組んだんすよ——俺たちだってちよつとぐらい恩恵を受けたいじゃないですか」

「そうやって牛井のポイントを吐き出させて損失を小さくする気か——

「南雲、約束を破棄する気か？」
それでも食い下がって来るのに間髪入れずに疑念が投げかけられた。

「ちよつと、ちよつと、いくら何でも穿ち過ぎですよ——分かりました。我がまま言つて悪かった。今言つたのは取り下げます」

あつさり引き下がったことによつて、この件は立ち消えとなり状況を見ていた者たちにも安堵が訪れた。

「では順当に一年からローテーションを組むつてことで」

嬰兒の言うことに最早反論はなく、早く終わらせて朝飯が食べたいと皆が肯いた。

全く朝つばらから面倒な事になりかけてくれるな。

飯も食い終わり、午前中は座学、午後は体育の授業が行われているが、如何せんいつもと違うのはメンバーぐらいで、授業内容も初日と言ふこともあるのか特質すべきものはない。

冬に持久走し、最終日には駅伝をすると説明を受けたが、試験としてクラスの結果に影響することを除けば、この時期にマラソンするのはやっぱり珍しくない。

このまま何も起こらずに過ぎてつて欲しい——もう何度目かに湧く思いが自分でも不思議でしようがない。

そうこう考えてると綾小路が近づいて来た——なんだか、こんなのも久し振りに感じてしまうな。

「賭けを持ち出された時から予想してたが、必要以上に絡んできているな。南雲は」

「排除したいなら手を貸すつてことか？」

「そんな出しゃばる様なことはしない——ただ、南雲が約束守る気があるのかは疑問だ」

同感だな——結構信頼を積み重ねてる様だが、あまり知らないこつちからしたら何処まで当てになるのから。

「もしもだが、外ポイントを2000万で買い取る事態になった、嬰兒はどうするんだ?」

「どうもしないよ」

「それも上から許可がなきやか?」

「それはないかな——クラス移動したって結局は同じだし」

忘れそうになるが既に目的は果たされてる——正直、今消されたとしても不思議じゃない。

ただそうなるにしても正当性を示さなきゃ面倒になる——後で騒ぐ奴がいるとか、そんなんじゃないかと、主に俺がな。

「……………自棄を起こしても仕方ないなんて状況をワザと作ったりするなよ」

話からは脈絡なく俺の考えを読むとは……そう言えば、綾小路と絡むきっかけも命懸けの場面だったな。

本能か直感か、何か危険を察知したのかも知れないな。

結構、好都合だ。

「俺がそうでも、どうにもならないかも知れないぞ」

「何かあるのか?」

「何となくだ——嫌な感じがするだけ」

「お前が言うのと杞憂に感じないな」

「生憎だが未来視だとか、経験から来る予感だとかじゃないぞ」

「そうか。じゃ、心の隅でも留めておく」

ああ、その位にしてくれ。

ちようどよく持久走も終わらせて、ひと息つく——その後の授業は説明的なのが多く、滞りなく済み、そして今、最後の授業と言える座禅も終わった。

この後は夕食だが後片づけせにやらん身としては、とつとと済ませて欲しい——足が痺れて動けない、疲れたと足取りが重い奴らを見ながら活でも入れてやろうかと思っただが、まだ続くことを思えばと止めといた。

ここは社交性を身に付ける場だと言ってたし、どうにか遅しくなってくれ。

と思つてたのにな……。

「きやつー！」

小さな悲鳴を聞きつけ廊下に行くとき坂柳を抱き止めている綾小路——なんと大胆な。最早ありふれてると言つてもいい構図だが不思議と飽きないな。

「有栖、ケガは無いか？」

「はい。大丈夫です」

とほんわかした空気に見物客も絆されそうだが、直後の鋭い視線に一気に気温が下がった。

特に向けられた先である山内は冷や汗だらだらだ——あいつの不注意か、との共通認識が広まったことで汗の量もおかしくなってる。

「ああああ………ごごごごご、ごめんなさい！でも誓つてワザとじゃないんだ！許してください!!」

頭を床に擦りつけての即行の土下座——それでも綾小路からの圧が増すばかりで、理性ある者は止めようかと迷うのも出てきそうだな。

「気を付けろよ——出来ないなら、有栖の半径五メートル以内に近づくな」

「わわわわ、分かりました!」

頭を床に付けたまま大声で返す——必死なものもそうだが、絶対に綾小路と目を合わせたくないのもありありと伝わって来る。

もつともそれは山内だけじゃないがな——見物人たちも恐ろしくある様で二人から距離を取つて道を開けた。

「行くう」

坂柳は自力で歩こうとしたが、綾小路は頑として離さずに一緒に歩いて行つた。

二人が見えなくなった瞬間に緊張の糸が一気に切れ、一斉に息を吐いた。

「ふふああ………苦しかったあ」

「ホント」

「全くどんだけラブラブなんだよ」

「……けどちよつと羨ましいよね」

「うん。ちよつと過保護な気もするけど、あんな風に大事されて」

「ああ、私もあんな風に想ってくれる人が欲しいよ」

早速、着になつてる——例外は居るがな。

まだ土下座してる山内は肝が冷えたままか——いつもなら顔を上げて悪態でも付きそうなのに、よっぽど怖かったんだな。

「おい、いつまでそうしてんだ。部屋に戻りたくないにしても他で休め」

あえて冷たく言ってみたが、最早そんな事を感じる余裕もなしか、張り付いた冷や汗が引きつった顔を際立たせてる——後悔、反省を通り越してて誰も何も言わない中でフラフラと近くのソファ―に座る山内。

俺が戻るまでには気持ちが落ち着いてるといいな。

そう思いながら俺は片付けに戻った……ひよつとして嫌な予感ってこれか？

食事の時間を終え、また男女別々になる——必然的に綾小路と坂柳も別れねばならず名残惜しいのか、手を離す際も僅かに躊躇した様子だ。

「綾小路くん。坂柳さんはしっかりと私がつれてくから安心して」

廊下の一件から付かず離れず付いてきていた佐倉が申し出た——側にはいつも通り長谷部がいた。

「神室は居ないのか？」

「なに、きよぼん。私たちじゃ不満？」

「そう言う訳じゃない。気に障ったんなら——」

「謝らなくていいって。神室さんの方が安心なのも分かるし」

佐倉の気遣いに本当に感心してしまい、同時に綾小路は感謝する。

「そっか。じゃ、お願いする」

「はい。お手間をお掛けします」

坂柳も嬉しそうであり、もうすっかりさつきが出来事は忘れていているようだ。

二人に連れられ宿舎に戻って行くのを見届け、綾小路も自分の部屋に戻って行く。

そうして消灯の十時まで雑談やゲームを楽しむのが林間学校のセオリーだが、先の騒動はそれを遥かに上回る娯楽であり、男女問わず噂や憶測で持ちきりであった。

特に当事者である綾小路、坂柳はそれが顕著だったが、綾小路の方は到底愉快とは程遠い心境であるのが明白であり、ルームメイトたちは何も言うこともなく静かな夜を過ごす。

一方で坂柳のいる女子側は全く持って正反対の様相で恋バナに花咲かせていた。

「ねえ、坂柳さん。どつか痛い所とか無い？」

「そうだよ。無理とかしなくていいから、遠慮なく言って」

「あの、お気遣いは嬉しいんですが、そんなに大げさにしなくても——ホントに大丈夫ですから」

坂柳は笑顔で肩を摩り、何かに浸る様により嬉しそうにする——その姿は思春期の女子の心を大いに刺激するには十分過ぎた。

何故ならそこはさつきまで綾小路が抱き寄せていた時に手を当てていたから——坂柳の中でまだその感触が残っていると連想させる。

「うん、そっか。そうだね、顔色もメチャクチャ良いしね」

「これ以上は野暮だよ」

そう察した長谷部と佐倉に他も同調し、あわよくばこのまま二人の昔話をと打算的なのも混じりだしたが、

「しっかし、あの山内つてのもデリカシー無いよね」

ぶつきらぼうに……やや不機嫌な声でBクラスの姫野が流れを切ってきた。

「女の子をケガさせそうになったのに、謝ってたの彼氏くんだけに

じゃん」

「確かに旦那さんがいなきや、自分の不注意だつて自覚もなかったんじゃない」

「あいつつて、いつもあんな感じなの？」

責める意見が続き、同クラスの女子たちは少々肩身の狭い思いだ——特に佐倉はそれが顕著であり、坂柳に対して申し訳なさそうな顔を向けて口を開こうとした。

「佐倉さん。謝罪とかなら結構です、あなたの所為じゃないんですから」

坂柳の気遣いのようできて、責めるようなニュアンスに佐倉は黙る——これには少しきつかったかと坂柳は声を柔らかくするのを意識して続ける。

「非があるのは山内くん個人です——それにワザとでないのも分かっています」

(まあ、反省の色がなかったのは腹立たしいですが)

謝っていたのは綾小路にのみ——それには全面的に同意するし、然るべき報復も受けさせるべきなのが坂柳のスタンスだが、自分以上に綾小路が怒ってくれた。

それも見ているこっちが恐ろしくなる程に。

この事実が坂柳の心に屈辱以上……否、比にならない高揚感を齎し、あんな小物の事などどうでもいいに等しいと思わせた。

もしもこんな心情にする為、より大きな事態にさせない為による計算だったとしてもそれだけ綾小路清隆にとって坂柳有栖の存在が大きくなっている証明でもある。

そんな考えがどんどん湧き上がり、途方もなく幸せな気分ではばいになっていく。

「……………今のアンタの頭人中、手に取るように分かるわ」

ぶつきらぼうだった姫野が呆れたように言う。

「そうですか？」

対して坂柳は笑顔いっぱいであり、他の面々もその余りの嬉しさ満載の仕草に比喻でもなく胸やけがして来た。

(ま、あそこまで情熱的に愛してくれるならね)

先の一件を見ていた者には綾小路の怒りは疑う余地のない本物だった——その熱量は話を聞いてただけでも当てられる程だ。

ただ、ひと息ついてみると熱烈な惚気がやってきて複雑になる女子も居る。

そんな空気を当の坂柳は見逃さず、無為に拗れていく前に言う。

「ふふ、ちよつと聞いてみたいですが、流石にちよつと疲れが出ましたので、先にお休みさせて貰います。それではまた明日」

神室に連れられベッドに入って行く坂柳に気を使われたと更に複雑な気持ちになってしまう姫野ユキ——Aクラスが九人で坂柳が主導するグループで、坂柳が指名した唯一のBの女子。

その態度は善人の鏡の様に人気者の一之瀬のクラスメイトにしては、やや棘がある。

ただ、そんな姿は至極自然体に見え、それが坂柳の目に留まったのだと他のグループメンバーは理解した。

「……なに、私の顔に何か付いてる?」

故に視線が集まって再び不機嫌になる姫野——流石に失礼だと見るのを止めるのが大半の中、長谷部が話しかける。

「ごめんね。なんだか姫野さんも疲れてるみたいだなっと思って」

「そう思うなら、私も寝ていい——別に話すことも無いでしょ」

この突き放す態度もやはりBの生徒らしくない——もしかしくなくとも我慢して合わせてると共通認識が広がった。

「愚痴とかなら付き合うけど——この合宿じゃないやつでも」

「他クラスに情報を流せって?冗談でしょ」

姫野は完全に機嫌を損ねてベッドに行く——引き留める者は居ないが、一之瀬の統率力に僅かな疑問を生じさせるには十分だった。

程なく皆も話を切り上げて就寝に付き、林間学校の初日は終わった。

病的に〇〇

三日目の早朝、まだ薄暗い中での周囲の見回り——何も起こる気配はなく、鳥の声が響き今日も平和だと、ポエムでも口ずさみたくなる。

土曜の授業は午前中だけで午後は自由時間とのことだったが、俺は直ぐ様に別の仕事場に行き、日曜日もそこで指示を受けた。

学外だからある程度は想定してたが、殆ど休日返上で働けとは人使いが荒いことだ——ま、俺は人とは呼べないけど。

そういう思いながら巡回ルートは問題なく、ここからは学生としての時間だ。

校舎の方からも眠そうな目を擦って、うじやうじやと一年達が出て来て合流する。

「おはよう。お湯は今沸かしてるから早速始めよう」

朝食のメニューを確認して作業に入ろうとするが、毎度のことながら乗りが悪いのが大半——てきはき動いてくれる少数に仕事を振る。

「あいよ」

「OK」

橋本とアルベルトが卵焼きと野菜のカットを始め、俺は味噌汁を作り始める——他は食器の用意などの簡単な作業を任せ、スムーズに割と短時間で準備は完了した。

後は上級生が来たら炊き立てのご飯をよそって食べるだけ——こういう時の待ち時間って長いんだよな。

暇なんで他がどうしてるのか見てみると、慣れない作業に手間取ってるのが殆どで味噌汁を作り直すようなのも居た……勿体ない。

「ああ、ジツとしてると寒いな——嬰兒、ちよつとだけでも味噌汁飲んでもいいか？」

「温かいのなら、お茶もあるぞ」

自前の魔法瓶を取り出すと橋本が有難いと言った顔になるが、目には好奇心が見える。

「それって見回りの際のやつか——今日も昼からどっか行くんだろ。」

なんなら休日の他のグループの情報も取っておくが」

「お茶一杯では吊り合わんから別にいい」

「そっか。他に手駒があるか、それともそもそも必要ないのか」

疑問形でなく堂々と詮索してくるか——つまりは期待してるのは答えじゃなくて、俺がどう反応するか。

「どう言えば満足する?」

「はは、やっぱお見通しか」

「お前が分かり易すぎるんだよ——てか、そこまで坂柳は俺を敵視してるのか?」

「分からねえよ。寧ろこっちが教えて欲しいぐらいだよ」

本題はそれか。

「残念だが、俺にもどうなるのかは分からん——ただ確実に言えるのは外部からの干渉はある。それも彼女の望まない形でな」

「お前らの関係はそれが来てから、いやその都度が変わってくつてことか——難儀なもんだな」

「全くだ」

「けどよ、それだと綾小路とも対立するってこともあり得んのか?」

話の流れが若干変わった、いや戻したと言うべきか——全く持つてブレない奴だ。

「さあね、先の事は神様でもなきや分からんだろ」

「まあ、そういう風になるわな——嬰兒らしいぜ」

引き時を察したか——もうこれもアピールだと穿ちたくなるぞ。

暫らく待ち上級生たちもやってきて滞りなく朝飯の時間も過ぎた。

そして土曜日の授業も同じく滞りなく行われ、現在は最後の三時間目——道德の授業での自己紹介からのスピーチに関する説明を受けている。

一年はこの林間学校を通じて何を学んだか、これから何を学んできたか、何を課題とされたか——正直言って俺は合宿自体より仕事で手伝いやらされてた方が遥かに印象に残ってるんだがな。

そんなことを思いながら授業も終了し、その足で即座にグラウンドまで移動する——さて、今日は何処に行かされるのか?

「やつほー、嬰兒くん。今からご出勤かにや?」

「ジャージ姿の一之瀬が来た——いつも通りの笑顔で。」

「まあな。明後日の朝に戻る」

「にやははは。大変だね、この学校じゃ、こう言うのは無縁なはずなのにね」

「俺には当て嵌まらない——もういい加減にその括りが確定したってことだろ」

「場合によつちや普通の試験でも離れなきやとか?」

「そう命令されたら、そうするしかないな」

「ふう——嬰兒くん自身はそれでいいの?」

「なんとも真面目なニュアンスになり笑顔も消えた。」

「嫌だと言えば、一之瀬が何とかしてくれるのか?ポイントだの、この学校の仕組みでどうこう出来る話じゃないぞ」

「ましてや学生の身分だ。どんなに優秀でも——いや優秀だからこそ、俺如きに構うなんてするだけ損だろ。」

「嬰兒くんだって、ここの生徒でしょ——堂々と出来ないなんておかしいでしょ」

「おかしくない。俺はそういう立ち位置にある」

「じゃ、言い方を変える。私は嬰兒くんの友達だから助け——!?!」

「言い終わる前に壁に押し付けて黙らせた……俗に言う壁ドンに一之瀬もびっくりだな。」

「そう言う台詞はもつと強くなってから言え——例え本当にピンチになっても俺はお前らを頼りたいとは思わんし、寧ろ迷惑だ」

「……………私に似てるって聖人さんはそんなに強かったの?」

「ほう、脈絡なく話が変わった——そして、より真剣に訊いて来るか。「世界最強と言っても過言じゃないな——だからこそ彼女の言葉には力があつた」

「そう、力なき正義は無力、正義なき力は暴力」を体現した戦士、それが『申』——平和裏に殺す——って名乗りは伊達じゃなかった。」

「あー、なんだか嬉しそう——ホントに大好きなんだねえ」

「若干、呆れ気味の指摘に思わず我に返る——俺、そんな顔してたの」

か？

「いつか、その人の事話してくれるって約束だけど、そろそろ聞かせて貰ってもいいかな？」

「時間がある時にな——悪いがもう行かなきゃいけないから、今日明日は無理だ」

「分かってる。でも絶対だかね——約束があるんだから、その前に居なくなるなんて駄目だからね」

「しつかり覚えておくよ。じゃ」

「うん。いつてらっしゃい」

少しスッキリした顔になった一之瀬が手を振って見送ってくれだが、いつの間にか出来ていたギャラリィからは無言の言い知れぬものを感じさせられ、物凄く複雑な気分だ。

ああ、早く行こう。

嬰兒が見えなくなり、施設の窓から見送った綾小路と直ぐ隣に居る坂柳——ぴったりと寄り添っている光景には余人が入り辛い雰囲気だ、これでもかと言うほどにあつて必然的に二人きりになる。

「試験の最中でも仕事か。大変だな、とでも言えばいいのか」

「気になりますか、あの方に会っているのではないかと？」

「いいや」

綾小路のあつさりした答えに坂柳は眉をひそめる。

「分かっているとは思いますが、彼が自分の意志で誰かの味方になるなんてありえませんかよ」

「自分の意志よりも命令を優先させなきゃならない、だろ——それでも意思が無い訳じゃないのは明らかだ」

「……ええ、そうですね——!？」

少し不満が湧いてきたのを見越してか、綾小路は寄り添っていた坂柳をやや強引に抱き寄せた。

「とばつちりで相当ストレスがあるなら、いくらでも気晴らしに付き

合うが?」

「そ、それは有り難いですけど……ここまで近づかなくても」

「この方が喜ぶんじゃないのか」

この綾小路の台詞と行動は体育祭の時のことでの影響か——と普段の坂柳なら分析して冷静に返しただろう。

しかし、あの時以上に力を籠められてしつかりと抱き寄せられて、ある種の恐怖にも近い感覚が纏わりつき冷静さを保てなかった。

「あ、あの……ちよつと痛いです」

その所為か珍しく弱々しい声になってしまい、綾小路も坂柳と目を合わすとその目には怯えの様なものが見えた——ただそれでも力を弱めることも放そうともしない。

「有栖。身体が弱いのをもう少し自覚しろ——何が起こるか、先の事なんて分からないだから」

「うう、心配してくれるのは嬉しいですが……私は守られて満足できるとは——」

「これは気構えじゃなくて物理的なことだ——オレはお前に怪我したりして欲しくない」

山内の件がまだ尾を引いている——尤もそれは坂柳本人も同様だが、明らかに気持ちの入れ具合が違った。

「その事は生まれた時から重々心得てます——無理した結果、どれだけ迷惑をかけてしまうのかも」

何かを思い出したのか、坂柳のニュアンスには切なさがあった。

「そうか。ならいい——複雑な立場にあつて大変なのは分かるが、直ぐに言え。最善を尽くす」

「むう。そこはいつでも駆けつけるとか、お前の味方だからとか言うものではないですか?」

「オレは普通の人間なんだよ——そんな神の様なことなど出来ないし、言えない」

「……………」

明らかに嬰兒を意識しての台詞に坂柳の不満が増した——そしてこれは明らかにワザとだ。

綾小路は普段では決して見ることの出来ない表情を間近でまじまじと観察しており、不満だけでなく妙な複雑さも増して心の整理が付かなくなりそうであった。

（乙女心って奴と対抗心がせめぎ合ってるのか？ただなんにせよ、もう少し見ていたいな）

坂柳の心情を分析しようする一方で、別の何かが心に湧いてきており綾小路自身も複雑な心持ちになりそうになる。

時間にして一分にもなっていないが二人には熱烈に長く感じる時間——いや感じそうになった時にやっと理性が働き綾小路は抱き寄せた力を緩めた。

解放された坂柳は胸を押さえて呼吸と気持ちを整える。

「もう——そんな風に遊んでると流石に怒りますよ」

「別に遊んでるつもりは無いが」

「それならば女心を知る為ですか？学習意欲が旺盛ですが、方向がぶっ飛んでますよ」

「有栖の方こそ忠告のつもりか？」

「あら、私がいえば聞き入れて貰えますか？」

そんな訳がないでしょう——と、そんな含みが籠った返しに綾小路はうつすらと笑う。

「オレの事を理解しようしてくれるのは感謝するが、どうにか上手くやるさ」

「残念ですが全くそんな気がしません——また苦勞が増えそうです」

言っていることは裏腹に坂柳の表情には嫌な感じはなかった——それを見ていた綾小路は素直に言った。

「すまないな——そして、ありがとう」

お天道様が真上に来た時間、一人静かにコンビニ弁当で昼を済ませ正装に着替えた俺は合宿場所からほど近い町まで連れて来られた。

さて、今日明日は一体何をするのか？

中々に賑わつてる町中を見るが、何のイベントがあるのやら気になる——ただ指示があるまでは待機しろとのこととで詳細は分からない。こういう時こそ『鵜の目鷹の目』だが、視界の中に入る鳥の姿はない——これは偶然か？

何はともあれ思案する時間も無いか。

「時間です。参りましょう」

「本当に直ぐに会うことになるとはな」

皮肉を込めたがドウデキヤプルは涼しい顔だ——正月の件からすると、やっぱり政治関連のことか？

立ち上がり後を付いていくが、選挙などが行われてる様には見えな——目的地かと見えて来た大きなホールには賑わつてるから講演会でもあるのか？

ただ近づくると客たちの様相は遥かに程遠いものだ——真面目な感じは一切なく、素直に娯楽関係のイベントなのは一目瞭然だ。

「アイドルのライブでもあるのか？」

「いいえ、有名な音楽家の演奏会です——この町の市議たちもいらつしやいますので貴方にはそちらの警護を」

「承った」

スタッフ証を受け取り裏口から施設内に入る。

舞台裏から見たホールは、まあ予想した通りの広さで席もそれなりだが凄く新しいって感じが適切だ——開場前だから誰も居ないので見ると春の入学日の事を思い出す。

意図した訳じゃないが、一番乗りになってクラスメイト全員と顔を合わせた——もしかして今回も観客全員を覚えてなきやいけないってことにもなるのか？

試験の真つただ中に流血沙汰とかは勘弁してくれよ。

警戒を強めながら準備してるスタッフたちにも目を配る——催しはピアノか。渡されたパンフレットを見ながらスケジュールを確認して二階席まで移動する。

待つこと数分して護衛対象だろう年配の男がやって来た——連れも二人ほどいるが命を狙われるほどの重要人物には見えない。

こうなるとただのポーズつてのも考えられる——まったく、どうい
う意図なのかぐらいは説明して欲しいものだ。

色々と考えてる間にも客は入って来る——注意深く見ているが警
戒を感じさせるようなのは居ない、と思つてたんだがな。

新たな市議の連れと思われる男性が高校生程の女子を連れて来た
——『魚』で見るまでもなく精神的に病んでるな。

ただその割には身体や足取りには訓練を受けた形跡が見られる—
—さながら過酷な訓練に耐えきれずに脱落した兵学生つて感じた。

「雪、今日はお前の好きな曲が多く演奏される予定なんだ。楽しみだ
な」

市議の連れ、父親の言葉にも娘は無反応——つて言うか全く虚ろで
興味がない、ただ連れて来られただけ。

そしてこんなのは初めてじゃないのは同席してる者たちの様子か
らして明らかだ。

もしかして、この娘の為に今日のイベントをとさえ思つてしまう—
—そうしてピアノリストが挨拶を終えて演奏が始まった。

曲目は『ベートーベン』の『エリーゼの為に』——こういう場で聴
くと『天秤』の記憶が想起されるな。

最高裁判長だった数年の間には付き合いでプロの演奏を聴くこと
もあつた——もつとも傍らにはキナ臭い話が付いてまわり、いや寧ろ

彼女自身が積極的にして回つた方が多かつた。
このような美しい音色を聴かせ『許しの人』としての姿勢を貫いた

……貫き続けた。

時には暗殺を以てまでの所業は、法の番人たる身を省みないと言わ
れるほどに——つて流されてはいかん。

罪を罪とも思わない姿勢はもつとも許容してはいけないものだ—
—演奏中に考えるようなことではない。

やがてプログラムは順調に進み演奏会も終わった——開場中から
は惜しめない拍手があつたが、雪と呼ばれた娘だけは虚ろなままだつ
た。

予想通りの目的だとすると成果なしだな——何となく気になつて

視線を向けた時、ぽつりと口が動いた。

「清隆の方がもつと上手かった」

え、偶然か？

なんでアイツの名前が出て来るんだ。

あまりにも意外な事だったが表情には出さずに済んだ——ただそれでも虚ろな目がゆっくりと俺の方を捉えた。

なるほど、この娘の中でハッキリと残されてるのは『清隆』だけって訳か……それ以外は何も見えないと。

これが今回、俺がここに来た理由か？

それとなく父親の方を見るが目を合わせようとせず、今ひとつ要領を得ない。

そんなこともお構いなしに雪とやはらは俺に近づいて覚束ない、それでいて切実なニュアンスで訊いて来た。

「ねえ、清隆、何処に居るの？連れて行って……会いたいよ」

「申し訳ありませんが」

一応は丁寧にお断りしたつもりだが……この娘には通じないだろうな。

「会いたい……お話ししたいの………清隆、きよたかあ………」

だんだん呂律もおかしくなってきた——それでいながら『清隆』の事だけは変わらずにハッキリとしている。

それだけ無くしたくない、壊したくない思い入れがあるのは分かったが……で、どうすればいいんだ？

この場のお膳立てからして俺とこの娘の知る『清隆』は同一人物だろうが、それなら尚更何も話せない。

「繰り返しますが、そう言った許可を得てませんので何も言えません」あくまで事務的に言う以外に選択肢がない——これ以上を求められても俺が困る。そんな意図を込めて大人たちに目を向けるが、誰も

何も言わない。

つまりはここに居る人たちでは責任を取り切れないうつてことか——となると言うべき相手は、

「日も傾いて来ましたし、場所を移しましょう」

背後から現れたドウデキヤプルの提案に乗り流れる形になったが、それはこの場限りみたいだな。

「清隆に会いたい」

俺の服の裾を掴み、話すまでは逃がさないと執念さえ感じる——父親が出てなんとか落ち着かせてくれたが、予想以上に面倒が回って来たな。

会場から移動してレストランにでも行くかと思ったが、付いた場所は心療内科のクリニック——この娘の状態からして不思議じゃないが、初対面の俺をいきなり連れてってことは入院でもしてるのか？

通された個室は和を基調とした普通の部屋のようにだが、妙な違和感がどうにも部屋とマッチしてないものがある。

「すまないね——本来なら最初からここに来て貰いたかったんだが」
「構いません。建前を成立させなきゃならないのは分かってますので」

ここに来たのはあくまで仕事の後のついで——余程、公にしたくない事情があるか。

「ハハハ。流石はかの大戦の関係者だ——しっかりと弁えてる」

「ご配慮、感謝します」

本心から頭を下げた——十中八九、言うように指示された台詞だろうが、お陰で格段に気が楽になった。

そしてそれは相手も同じようだ。

「よかった——また突き放されたらと冷や冷やしていたんだ」

“また”ね。相手は想像するまでも無いな——こんな可愛い娘に何やってんだか。

ただこうなると、女関係での話はしない方がいいか。

「それで私はどうすれば——ご存知かと思いますが“彼”に関しても話せることは限られます」

「分かっているよ。守秘義務を破らせるようなつもりはない——君がそれを徹底して弁えていると判断されたから、この場での事も許可さ

れたんだ」

つまり他言無用なのは俺も同じか——これからは気だけじゃなく口まで固めなきゃならないとは。

「置かれている状況は把握しました——ご期待に沿えるように努めます」

取り敢えず社交辞令はこの辺でいいか——改めて雪かんじゃと向かい合う。

俺の方を見ながら何かしら期待しているようだが、その反面怯えている——『魚』モードで改めて診てみても身体的には健康そのもの、寧ろバランスよく鍛えられたのを確信した。

総合的に見て指導者に恵まれなかったかね。

そうなると『丑』の理論は逆効果、あまり気が乗らないが『天秤』を意識して臨んだ方がベターか。

ふう、とひと息吐いてなるべく静かさを意識する。

「まずは名乗ります。俺は牛井嬰兒——綾小路清隆くんの同級生です」

「私は……昔、清隆と一緒にだった……私の方が清隆のこと——」

「落ち着いてください。ゆっくりでいいんです——聞かせてください、彼のこと、そして貴女のことを」

とは言ってみたものの、話すことには途方もない抵抗感を見せ始めた——余程、思い出したくないのか、話すことを禁じられてるのか。多分、両方だろうな。

「雪、彼なら大丈夫だ——どんな話をしても何も問題ない」

父親からのフォロワーに若干の揺らぎが見せるが、大した効果は無さそうだ——こうなると取れる選択肢はこれしかないか。

「どんな願いでもひとつだけ叶うなら綾小路清隆くんに会いたいですか?」

「会いたい!」

完全に反射だな——目の色も一変に変わった。

「では彼は何を願うと思えますか?」

「清隆が……」

「ええ、私もずっと知りたいたいと思つてまして——ただ彼は本心を語つてくれないで未だに分からないんですよね」

もし今の綾小路に訊いたら、俺以上の異能とでも言いそうだが、その前なら何と答えるか——ちよつと好奇心も混じつたが、この娘が話してくれそうな話題はこれしかない。

「……………清隆は……………清隆は」

思い出を手繰りよせて考えていく内に小刻み震えていく——想定内だが止める訳にはいかない。

「……………分からない……………清隆、何が欲しいの？私がつつと一緒だったら——」

震えは増していき、目の焦点が完全に定まってない——この娘たちの過去に何があつたのか？

普段なら踏み込もうかと思案するだろうが、今の俺は『天秤』をトレースしている——『許しの人』の理論からするとこの娘をこんな状態にした「何か」さえも何も聞かずに許しを与えてしまひそうになる。

いかな、少しのめり込み過ぎている——冷静さを保たねば。

そう『天秤』が珍しく死刑を決断した第十二回大会——その罪科によつて俺が居る。そのお陰で救われたものがあるなんて胸糞が悪いだけだ。

ただ、そんなことはこの娘には関係ない——個人的な感情で判断を曇らせちゃいけない。

「ふう。お互いになんだか整理が付きませんね」と歩み寄りを見せようとした——しかし雪の様子が急変し「あ……………あ、ああ」と過呼吸を引き起こし始めた。

「雪！落ち着きなさい。ゆっくり呼吸するんだ」

父親が慌てて近づいて来たが、どんどん悪化していく——このままじゃ不味いか、と俺は

久し振りに『牡羊座』を発動させた。

時間にして数秒だが、当事者たちにはどれだけ長かつたか——どうにか眠り、支えながら触れた状態で『水瓶』に切り替えて興奮状態も

抑え、ようやくと症状が安定した。

「すみません。失態でした」

こつちから質問するのはまだ早い段階だった——あくまで聞き役に徹するべきだった。

「いいや、もとはと言えば私が蒔いた種だ——手を貸してくれただけでも有難く思うよ」

「恐縮です」

真つ当な大人の対応なんて初めてな気がする——外に出るのも存外悪いものばかりでもないかな。

「君の様な子供にこれ以上を強いるのも何なんだが……彼は綾小路先生に逆らい学校に通っていると聞いた」

「その通りですね——そして、かの先生は諦めずに連れ戻そうとします」

「先生とも接触済みか。なら話は早い——さっきの君と被るが彼は、綾小路清隆くんは父親に逆らってまで何を求めているんだ？」

今は俺の異能力だろうが、この問いの意図はそれ以前のもの——さて、なんだろうね？

入学時からあの海辺での接触前までの記憶を辿る——綾小路を注視していた訳じゃないが、当時の俺は内通者が居ないかクラス中を疑ってかかっていた。

そのフィルターを抜いて客観的に見てみる。

入学日のクラスでの挨拶はどもって戸惑っている様子は演技には見えなかった——そして次の日からは何かに脅えてビクビクとしていた。

今にして思えば、坂柳と会って父親からの追手か、過去を知る者がいることへのものだろう——そこから先はどうにか坂柳の情報を得たいので頭が一杯でクラスでもやや目立っていた状態だった。

こうして振り返るとアイツずっと坂柳のことだけを考えて学校生活を送って来たんだな。

もうこの際、坂柳有栖と結婚することと答えたいぐらいだ——ごっこ遊びも満更ではなさそうだったし。

坂柳抜きでの事は短すぎて推察することも不可能——素直に分かりませんと答えるのが誠実なんだろうが、

「これは全くの私の想像——勘なんです、それでも構いませんか？」
「勿論だ」

「普通の学校で普通の学生と言うのをやってみたかったのでは」

「なんでか、このフレーズが頭に☒と浮かんだ。」

「そうか」

偉く納得したニュアンスでの言葉に俺も思わず同調しそうになる——が、そのまま冷静さを失ったりはしない。

無言のまま、待機の姿勢を取る——暫らくしてひと息つき、また口を開いた。

「もしも伝えられるなら、清隆くんは『あの時』は済まなかったと伝えてくれないか」

それは贖罪か、それとも娘と同じ境遇からの同情か？

どちらにしてもあいつに届くかどうかは疑問だ——ただ、俺の個人的な感情を挟んでいいようなことでもない。

「ご要望とあらば」

あくまで事務的に答えるまで——何かしら気に入らなくても仕方がない。

そう思いながら答えたが、やはり大人なんだな。

「お願いするよ——それと今日はありがとう」

社交辞令だろうがこちらを立てる態度で接してくれた——そしてどうやら今日の仕事はこれで終わりのようだ。

「それでは」

出来る限り丁寧さを意識して言い部屋を出る——直ぐに見知った顔が目に入って一変に気分が下がったが、これも向うは計算付くだろうな。

張り付いた笑みが実に不快だ。

「やあやあ、お久しぶりです。牛井嬰兒くん」

大晦日に会った中年男が馴れ馴れしく寄って来た。

「そう言えば名乗ってなかったですね。私は月城常成と言います」

「〃あの方々〃の使者って訳じゃなさそうですね」

「はい。私如きには荷が重い役目で——精々、一学校の理事長ぐらいがやっとの身の上です」

少し嫌味を含んだのにも笑顔で答えるが、さっきの男性とは完全に正反対の印象だ。

それを向うも感じ取ったのか、張り付いた笑顔のままに様子が変わった。

そうそう。変な化かし合いなんて時間の無駄だよ。

「浅からぬ付き合いになる訳ですし、少し腹を割りましょう。」

ご存知の通り坂柳理事長に嫌疑が掛かってまして、近い内に謹慎処分が下ることが決まりました——その間の理事長代行を拝命予定ですので、どうぞよろしくお願い致します」

「出来る限り短い付き合いになることを願いますよ」

「ええ、その方が健全です——全ては収まるべき所に収まるのが良いに決まっています」

「全く持つて同意しますよ——世紀の大戦が〃あんな形〃で終わってしまうなんて、いやな夢だと思った日はありません」

「ははは……申し訳ありません。流石にお話が大き過ぎて私では何とも言えません」

「その謙虚さ、生徒たちにも見習わせたいですね——特に綾小路先生の〃子息には」

「それならば力になれると思いますよ——貴方にとっても纏わりつく虫など追い払ってしまうのが、誰にとっても最善でしょう」

要約すると手を組んで綾小路を退学させよってか——アイツに肩入れする理由はないが、それは誰に対しても同じ。

「ならば正式な代理人を通してから、またいらして下さい——〃あの方々〃の総意であるなら何も言うことなどありませんから」

おやおや、冷や汗が滲み出て来たが大丈夫か？

「はい、勿論ですよ——私だって命は惜しいですから」

「命で済みますかね？」

「……………なんとも有難い忠告ですね。お優しい限りで」

なんだ、最後の取って付けたようなのは？

「そんなお優しい貴方から見て、先程の娘はどう見えますか？」

怪訝を込めた目を向けると冷や汗が収まってないまま続けて来る——会話のペースを何が何でも取りたいみたいだが、この宮仕えはプロとしてのプライドから来てるのかな。

ならば義理を立てて、なんてはごめんだ。

「俺があ程度の事に易々と同情する身の上じゃないことぐらい知ってるでしょう——腹の探り合いは抜きにしてくれませんか」

「そうですね——いや中々のタマですな。流石は“あの方々”の直々なだけありますな」

嫌味か、なんでもいいけど結局何が言いたいんだ？

と、無言で待つと少しは落ち着いたか、冷や汗も引いた。

「では改めて腹を割りましょう——綾小路清隆を退学させることへの邪魔をしないと約束して頂きたい」

「手を貸せではなく？」

「そちらこそ冗談は無しにお願いしますよ——どんな形であれ、貴方と関わり持つて自由を奪われたくはありませんよ」

やはり嫌味か。

ただそこまで理解してるなら、こんな依頼を受けないのが正しいと思うが？

断ったとしても次が立てられるだけだし、月城にしてもデメリットがあるとは思えん——さて今ここで聞いてみるべきか。

「申し訳ありませんが、俺は何ひとつ約束なんて出来る身じゃありません——あの学校と関わるなら代理人と接触することもあるでしょうから、そちらで話を通して下さい」

「ハハハハ、ご尤もですな」

さつきとは一転、至極愉快そうにして来た。

「それでも私の意志と意図は伝えました——可笑しな邪推を持つての行動は反逆の意志と見なす場合もあるので、ゆめゆめ忘れないように」

なるほど、それが本当に言いたかったことで、この場を設けた目的

か。

「ご心配なく。あの学校のルールに従わなきゃいれなのは入学した日にしつかりと念押しされてますので」

手応えを掴んだと思ったのか、月城の余裕が増した——でも話はまだ終わってないぞ。

「ですから高度教育高等学校の理念に基づいて行動します——そこに何者の意志も介在させる気はありません。勿論、有力者の皆様は例外ですが」

「……あくまでもあの方々を通せと」

「少し勘違いしてるようですが、俺は長生きしたい訳じゃない——すすきりと終わりを迎えたいんです。もっと噛み砕いて言うなら未練を残したくないんですよ」

最初から卒業までには終わるのは決まってる——と言うか目的は既に果たされてるんだ。

生かして置く理由なんて無い以上は何事もなく平穏にと本当に最初の頃は思ったが、どうもそんなのとは無縁であり、更には外から妙な介入まで来たもんだ——受け手に回るのは性分にあわない、明日をも知れない身でこれ以上振り回されるのはごめんだ。

「失うことが決まってるから恐れない——ようは捨て身の覚悟ですか」

俺の事が少しは分かった——そんな風に聞こえるニュアンスは何とも複雑な気分させる。

ただ月城はある程度は満足したようだ——なら、もうこの場は終わりでもいいだろう。

「そう言う訳ですの事の上の方で話を付けて下さい——それでは、また」

「ええ、また」

最後まで笑顔のまま——ただ込められてるものを思えば何ひとつ愉快じゃない。

クリニックを出て宿泊施設まで歩きながらも周囲を探るが妙な気配はない——どうやら本当に今日は終わりでいいみたいだ。

さて、明日は何をするのやら。

水が・・・

日曜日の朝、まだ薄暗い時間帯に目を覚まして窓の外を見る——実に物静かで平和を感じさせる瞬間だ。

こんなポエムみたいなのを感じながら今日も一日が終わって欲しいものだ——そう思いながらタイミングよくかかってきた電話に出ると一気に気分が下降した。

『おはようございます。お目覚めは爽やかでしょうか』

お前の声を聴かなきゃな、ドウデキヤプル——出来るならもう五分でいいから、そのままですべて欲しかったよ。

「お陰様でバッチリだよ」

無駄だと分かっているが皮肉を込めて言うが、案の定愉快そうなのが電話越しにも伝わって来る——全く持って忌々しい限りだ。

気分がどんよりした来たら何故か天気までどんよりして来た——こりゃ雨だな、せめて外でしなきゃいけない事じゃないといいんだが。

窓を閉めて着替えと朝飯を済ませ宿舎の入り口で待機する。

この手の待ち時間はどうしても長く感じてしまい暇つぶしに何かしたいが、その手の道具も持ち込みが許可されてなく、どうしても手持無沙汰だ——そうしてるとなんとなく向うは何してるのかと思っ

た。
あつちでも雨は降ってないのか、いや山の中だしこつち以上にドシャ降りになってて外に出られなくなってるかな。

林間学校四日目——日曜日であり授業は休みだが朝食と清掃は予定通り、ただ雨天により朝食は食堂、外の清掃もなくなりその分の時間を校舎の清掃に割り振られた。

「あーあ、なんで日曜日の朝っぱらから」

本当ならもつと寝ていたいと愚痴を言う生徒も出る——監督役の教師が居れば「毎日の日課だと」正論が来そうで周りのメンバーが気を張るが、幸いな事に見咎める者は居なかった。

「先生の見てる前で言う訳ねえだろ」

そこまで愚かじやないと言うニュアンスに開き直るなど無言の圧力があちこちから来るが、時間が勿体なのでそれ以上は無く掃除を進めていく。

そんな中に居る綾小路はなんとなく空を見た。

(嬰兒は雨の中で待機でもしてるのか?)

雨に打たれながら無言で目を閉じて命令を待っている姿を想像し、より一層の反骨精神を高めていたら。

(オレが有利に立ち回れる可能性が高まる——なんて都合の良い展開になって欲しいものだ)

余りにも都合のいい希望的観測だと分かっているが、いつ「あの男」からの差し金が来ても不思議じやない状況な為か、どうしても強力な武器を独占したいと言う気持ちが増してしまう。

そのような考え事しながらもしっかりと手を動かして掃除を進めていき終わり際になると同じエリアを担当していた池が話しかけて来た。

「つまんねえよな。折角の山の中に来たのに外にも出られねえなんて」

「オレは別に。それに整備されてない山道なんかに出られたら——」

「おいおい、お嫁さんが大事なのは分かるけど惚気話は勘弁してくれよ」

「こういう話が見たいんじゃないのか?」

「それこそ俺も別にだよ」

言っている事と顔が一致していないと綾小路だけじゃなく、周りに居る全員がツツコミたかったがそれはされなかった。

話題がいきなり途切れてしまいそうになった池は、やや慌てるよう

にして話を変える。

「しつかし掃除が終わったらすることねえし、大した娯楽もないし、その意味じゃ嬰兒がちよつと羨ましいよな——どっかで可愛い女の子と一緒にだつたりとかしてたりすんのかな？」

誰が聞いても無理矢理感満載だったが、ただでさえ制限されている中で雨が重なった事はストレスでもあり僅かながらにも共感を覚えもした。

もしもそうなら自分も行きたいと不毛な妄想も。

そんな風に思われている嬰兒の方は正にそういう状況だった。

いやはや、これって何かのご褒美なのかな。

「みなさ〜ん。本日はありがとうございます！」

元気いっぱいのとびっきりの笑顔で挨拶してる少女たちをスマホで撮りながら、小ステージでのリハーサルに柄にもなく胸が躍ってる。

今日指示されたのはショッピングモールでの雑用と大雑把なもので、来て直ぐにイベントの手伝いの為に機材の搬入やネット配信するための動画を撮影せよと新しいスマホを渡された時には流石に驚いた。

広場自体はそこまで広い訳ではなく、それとなく聞いた話では地元のご当地アイドルと東京のグループのコラボとのこと。

ただ生憎の天気で客足がどの位になるのかが気になるが、そこは俺が気にしても仕方ない。

興味を持って貰えるかは彼女たち次第だ。

リハーサルも終わり、本番の段取りに入ったことで俺はライブ中の立ち位置などの説明を受けて別の仕事に取り掛かる——かと思っただんだが、特に何の指示もされず待機を言い渡された。

今日限りの分際で勝手なことする訳にもいかず、仕方ないから暇つ

ぶしにスマホでもと思ったが、☒と目にしたものに思わず眉をひそめた。

今日のコラボを宣伝する看板には両方のグループがあるが、東京からのグループ『暁の五星』のメンバーは文字からも五人なのに、さつき見たのは四人しか居ない。

どういう事かと思っていると、マネージャーらしき女性が声を掛けて来た。

「ああ、体調不良で今日はお休みしてるんですよ」

「へえ、そうなんですか」

何気ない遣り取りだが、このまま乗っていいものか？

「ふふ、緊張してます？見た所、地元の子じやなさそうだけど派遣か何かで？」

「まあ、そんな所です——すみません、この手のイベントとかには疎くて」

「あら、それは残念ね——結成したばかりだけど、それなりに力を入れてるのに」

「いえ、これは私自身が囚われの身に近いのが原因でして」

「なんだか突然物騒な話になったわね」

不良更生の為の社会奉仕活動とでも思われればと思ったが、まるで本気にして無さそうだ。

変わらないノリで話を続けて来る。

「芸能とかそう言うのは全く興味がないの？」

本当に申し訳ないが十二戦士たちにその手の記憶はない——普通の高校生活を送ってた『子』にしても、って言うかあいつの好みはアイドルよりもその後ろの娘だったしな。

当然、あの閉鎖高校ではそこまで話題に上がるようなものでもない——いや、そうでもないか。

『雫』って言うグラビアアイドルなら知ってますね」

これにマネージャーさんはちよつと驚いた様子だ——と言うか目を輝かせても見えるな。

「いや、こんな所でその話題に出くわすなんてね。これも神様の思

し召しかしら」

「神は時に思いも寄らぬものをもたらしめますからね」

便宜上だと分かっているにも出て来た言葉に俺も思わず調子を合わせてしまった——そして出来ることならばこの話題で盛り上がりたいが、そうはいかんだろうな。

「そうなのよね。彼女がここに居ないのも一体何の因果なんだか……」

「お知り合いで？」

「グループを立ち上げる際にスカウトしようとしたことがあってね……進学を優先したいって振られちゃったけど」

思いつ切り関係あるようだ——昨日といい今日といい、全くどういうつもりなんだか。

そんな感傷に浸って無言で居ると何を感じ取ったのか、少し真面目な顔して続けて来た。

「プライバシーや守秘義務があるから詳しくは言えないから、その手の事は聞かないでね」

いやクラスメイトですし、今どうしてるのかも思いつ切り知ってるんで。

そう返したかったが、迂闊な事を言ったら俺の方が守秘義務違反になつてしまう——もしかして、そんなしょうもない嫌がらせだったりとかはないよな。

「まだ雫の事、諦めてはいないんですか？」

ただなんとなくだが話を合わせた方がいい——それとも俺は俺で実は気になつてたのか、自然とそんな疑問を口にしていた。

「ええ、勿論よ——あの娘には光るものがある。それを私はプロデュースしたい」

即答した。ただ今のアイツは友達も出来て学生生活をエンジョイしてるから、肯定は出来ない。

「見事な心意気ですが無理強いは良くないですよ」

「そんなこと分かっているわよ——子供のくせに生意気よ」

「それは失礼しました」

「分かればよろしい」

とその時、スタッフからマネージャーを呼ぶ声が。

「はい。今行きますー!」

「あ、それじゃ」

「ええ、それじゃあ」

再び一人になり、雨が降る山の中に居るクラスメイトたちを思い出す——戻ったら色々聞かれるだろうし、さて何処まで話してもいいのか。

今の会話を聞かなかったとして『暁の五星』の事を話したら佐倉はどんな反応して何を思うのか

いや佐倉以上に山内当たりなら更に喰い付いてグイグイと来そうかな。

そうこう考えてる内に開店時間になり、ようやくと次の指示が来た——指示役の人は自分から動けよとか言う様な目で見られたが、そういう文句は俺の直接の上に乗ってくれ。

と内心で愚痴りながら開演時間まで雑用をこなす。

雨の方は思っていたよりも振らないみたいで客足の方も然程気にする必要は無さそうだ。

徐々に賑わっていき、学校では決して見れない親子連れや年配なんかを見ると平和を感じる。

と言うか、ここまでリラックスして外の景色を見るのは初めてな気もするな——お陰で時間の経つのも早い。

あつという間に昼になり開演となった。

モールの小さなステージだけに客のキャパは大したものじゃない——実際に集まっているのは数得られる程、それでも前の方には集まって今かと待っているファンたちが居る。

俺は後ろに引いて見ている客に交じる形でスマホを起動してステージを映す——あくまで仕事だと分かっているが何分ライブを見るのは始めたな為、ほのかな期待感もあったりもする。

願わくば彼女たちのパフォーマンスが呼び水となりますように。

そう思いながら舞台挨拶から一曲目が始まる——おっかけと思わ

れるファンたちの歓声に今日偶々来ていただけの客の何人かも足を止めていく。

正直、俺にはアイドルの曲の善し悪しなんて分からないが聴いている分には素直に上手だし元氣の出て来るとも思う。

そして、この舞台に佐倉が立っているのを想像しようとしたけど、普段のアイツからしてしっくりこない——いや、グラビアの写真や自撮りしてた時の表情からするとステージに立てば変わるとかってタイプだったりするの？

もし、そうだったらなら見てみたい気もするな。

二曲目、三曲目と続きあつと言う間に交代の時間となった——次の地元の娘たちのステージがセットしている間、録画を止める。

「ここでの事も戻ったら自慢したいですか」

警戒を怠ってなかったのに、いつ背後に立ったんだ——ドウデキヤプル。

「今、仕事中心なだけ」

「お邪魔するつもりはありません——少しお喋りしたら直ぐに行きます」

「なら早くしてくれ」

「では、どうにもお堅くなり過ぎていると見受けられましたので、少々——私共も貴方の事は買っておりますので、話してもいいラインだと判断したなら外での事も制限は付けません」

つまりは佐倉に今日の事を話してもいいってことか？

それとも昨日や年末年始であったことも綾小路に伝えろとでも言っているのかな——俺の事とは別に外からの介入があるのはやっぱり面白くない。もしくは俺の所為で容認しなくちゃいけなくなつたから責任を取れとでも言ってるのか？

「フッフ、深読みのし過ぎはよろしくはないですよ——偶には素直に聞き入れるのも大切な事です」

「有難い言葉と受け取っておくよ」

「はい。それでは」

意味深な笑みと共に去って行くのを見るが、ちょうどセットも終わ

りライブが再会され、録画ボタンを押す——全く何しに来たんだか。

特に何事もなくあつと言う間に夜になり、林間学校の宿舎の窓から晴れ渡った夜空が見える。

朝から夕方までずっと雨だった為に食事作りは無くなったが、大した息抜きも出来ず何も出来ずにいたのが殆どだった。

ただ明日からの予定を鑑みればそれが正解だったと思えなくもなく、就寝に付こうとしている面々は十分な休養によりリラックスしていた。

そんな中で綾小路は部屋を出て薄暗い廊下を歩く——向かった先には堀北学が待っており周囲を警戒する素振りを見せながら口を開く。

「時間通りだな」

「ああ、それで何の用だ？」

「単刀直入に訊く——南雲が何を画策してるのか掴んでいるか？」

「大グループには真面目にさせてるしか動きはない——オレが見てる限りはだが」

「もう少し具体的に訊こう——最終日の試験で何を仕掛けて来るか、お前なりに見当が付いているんじゃないのか？」

「約束を反故にするんじゃないのか——総合力でそっちの大グループに劣るなら、他を狙うのが理に適ってる」

「ありえん。奴は口にした事を破ったことは一度もない——ましてや大衆の前でした約束を破るのはこれまでの信用を無に帰す行為だ」

「それをしてでもアンタに黒星を付けたいと思ってる可能性は本当じゃないのか？」

「繰り返すがそれは無い——約二年、生徒会で一緒だった、断言できる」

「二年かけて仕込んだフェイクだとは」

綾小路は見解を曲げずに食い下がった。

「奴にはまだ一年以上の時間があるんだぞ。俺一人の為に積み上げたものを捨てるなど非合理だ」

「理屈はそうだし不利益なものも認めるが、それでも南雲個人の心情を優先して来たら」

「……お前ならやると言うのか？」

「有栖に危害を加えようとしたら、どんな大損しようとして報いを受けさせる」

迷いなく言い切った綾小路に一瞬絶句してしまうが、綾小路なら何も不思議じゃないと冷静に心を静める。

そして自分が買っている男が出した具体例に流石に考えさせられた。

二年生の現状においてAクラスは安泰と言える位置にある。クラス単位で上を狙えるのはBクラスでも殆どないと言わざるえない——南雲個人に対抗できる人材にしても心当たりはあるが、これまでを鑑みると動くとは思えない。

一見すれば盤石な支配体制と言えるが、裏返せば逆らう者、立ち向かって来る者が居らず戦えない退屈な状態とも言える。

堀北学なら安心して日々を過ごす、南雲ならどうか………と云うよりもその南雲がずっと突っかかって来たから伝統を重んじる生徒会長として安心が出来なかった。

南雲は退屈により飢えている——だからこそ自分と戦いたい。

そして堀北学が卒業するまではあと僅か。

導き出される見解に自分の甘さを漸くと実感したか眉間に皺がよる。

「………お前は坂柳を狙えば敵意を隠さんが、それを俺に当て嵌めるなら南雲が狙うのは」

「十中八九、橘先輩だろうな」

「既に試験期間は半分以上過ぎた——巻き返すのはほぼ不可能か」

「三年Aクラス以外が全て結託してるなら、しかも態と退学になる様に手を抜いてるなら個人で頑張ったって意味はないな」

「残された手段は2000万ポイントによる救済か」

「或いは別のグループを生贄にするかだな」

「南雲が計画している策をそのままやり返すと言う事か——だがどちらにしても2000万は消えることになる」

何よりも堀北学個人としても気が進まないようで、他の方法はないかと考えている様子だ。

尤も確実なのは退学者が出る結果を防ぐこと。

ただ、いくら考えようとも女子との接触が最低限である以上は直接対応することも助言することも難しい——既に話が付いていて、しかも実行している事を翻意させることなど、そんな僅かな要素で出来る訳がない。

かといって代理を頼もうにもそうした事が出居る者が浮かばない——何より南雲は既に前金などの報酬や安全の保障を渡しているだろう。

覆せるだけの物を今から用意することなど現実的に不可能だ。

堀北学の額に冷や汗がひとつ流れたのを冷やややかな目で見ていた綾小路は言った。

「明日の朝には嬰兒が帰って来るが外で何してたのかの話は聞けるかな？」

「知る訳ないだろう。前例どころかこの後にだって起こる訳もない特例なんだぞ」

唐突な話題にも関わらずそれでも冷静に返して来たのを見定めながら綾小路は思案した。

（嬰兒の特例ポイントを使い切りたかって思惑もあつただろうが絶対じゃない——寧ろ、南雲が他を巻き込まないことを優先した約束だった筈だ。だったら）

「確認だが、生徒会は特別試験での発言力があるんだよな？」

「そうだ。生徒目線での意見を取り入れる方式を採用している——ただ好き勝手に弄れるものじゃない」

「今回の試験は最初から南雲の狙いの為にあつたと言つてもいい——介入するのは試験が終わった後じゃなきゃ不可能だ」

「結局は橘を2000万で救え、諦めろと？」

そのニュアンスには不満がありありと伝わって来る——ポイント
を吐き出すことでも南雲に負けることでもない。

窮地に陥っている同級生を救うことがクラスを窮地に立たせる思
惑を飲むしかないと言う、皆に苦い思いをさせなければならぬ——
ダーとしての不甲斐なさを突きつけられたと感じているから。

「通常であれば打てる手はないだろうな。おそらく三年生はBだけ
じゃなくてCと？も南雲の策に乗ってる、正に多勢に無勢状態だ——
仮にAに全一年が付いたって向うが有利なのは変わらない」

綾小路が現状を整理している様で言葉の端々に潜ませた裏を堀北
学は正確に読み取った。

「その通りだな。ただ今年は色々和普通とは言えない年だった——耳
を疑う様な特例が次々と出される生徒を始めな」

「オレが言うのもなんだが、嬰兒だけって訳じゃないだろう」

「確かにそれはそうだが……この状況で『アレ』が何の役に立つ？」

「個人的な楽しみだろうとも使いようだ——何より試験ではもう詰み
なら、外側から仕掛けを打つしかない」

「訳が分からないのは俺の理解力が足りない所為か？」

「いや、態と解り辛く言ってる——ただの雑談でそこまで懇切丁寧に
やるのもオレ的には本意とは言えないからな」

綾小路にとって堀北学はクラスメイトの兄——ただの知り合いで
しかない、相談こそ受けたが無条件で助けを出すような間柄ではな
い。

より冷静さを取り戻した堀北学は綾小路が何を求めているかを思
案する——自分に頭を下げさせること、もつと実利のある報酬の提
示、普通に考えればそうだが何かがしつくりとこない。

そもそも、ただの知り合いの事情にここまで関わりを持つことを良
しとするようには見えない、にも拘らず考えの甘さを指摘し対応策が
あることまで匂わせて来た——そしてそれを自分で気付けと言って
来ている。

（俺を試すようなこととして何になる？何か、こいつの気に障る事でも

したか?)

心の中で深呼吸し綾小路との会話を思い返す——南雲の狙いを気付かせるのに坂柳を引き合いに出したのは自分を例えとして適切だが、その後脈絡もなく牛井嬰兒の話混ぜて来たのは——
(そう言う事か)

堀北学の中で納得のいく解答が出たことにより、綾小路が求めているメリットが導き出せた。

「この俺に信念を曲げろとは、なんとも怖いもの知らずだな」

「危機に陥ってる学友よりも大事だと言うなら別にいいが」

「俺はそこまで欲深くないつもりだ——と、無駄な時間は好ましくないので話を進めたい。俺は何をすればいい?」

「まずはアンタの任意で出せるポイントの上限を教えてください」

ふあゝ、まだ眠いな。

薄暗い早朝、軽自動車の助手席で欠伸びながら外を見る——空いている町の景色は新鮮さを感じたが、山岳地帯に入ってからはどうにも張り合いがない。

しかも戻った直ぐに朝飯作りに授業だから、気分が上がる材料もない——願わくば、それ以上の面倒が起こって欲しくないのだがな。

そんなことを考えながら合宿先に到着、先生方への報告を済ませると学生生活の再開だ。

グラウンドに向かうともう料理してる橋本たちが居た。

「よ、お帰り。もうすぐ出来るから嬰兒は座って待っててくれ」

「ああ、すまないな」

皿の準備ももう終わらせてる——段取りはいいことは感心すべきだが、なんだろうなあ、この妙な胸騒ぎは……。

「おお、嬰兒。帰ったか」

綾小路が声を掛けて来た——別段いつも通りなんだが、胸騒ぎが増した気がした。

「こっちは生憎の天気で何事もなく過ぎてったんだが、嬰兒の方はどんな感じだったんだ？」

この問いにグループだけじゃない近くに居たのも、それとなく注目して来た——ドウデキヤプル曰く話していい線引きは俺の裁量でいいとのことだが、さてどうしたものか。

「勿論、無理に答えてくれないならいいぞ」

「そう言う訳じゃない——やってたのはショッピングモールで『暁の五星』ってアイドルのミニライブの撮影だよ」

「なんだ、聞いたことないグループだな」

いい感じに橋本も話に入って来た——これなら土曜日の方は話さなくてもいいよな。

「最近結成されて現在売り出し中なんだと」

「へえ、ちなみにどんな娘たちがいたんだ？」

「撮影って言ってたけど、持って帰って来たりしてんのか？」

余程、退屈だったのか女に飢えてたのか、どんどんと話に入ってきた——そのまま朝飯も盛り上がって、この時間は流れた。

出来ればこのまま平和に残りも過ぎていつて欲しいな。

そして午前の授業に入った——課題内容は最終日の駅伝コースの確認で往復18キロを午後までに戻ってくることに。

折り返しまでの上り坂を俺が先導して走る——後ろにも気を配ってペースを調整し脱落や怪我をさせないようにするのは流石に手間だな。

「帰って来て早々に災難だな」

「この程度、苦でもないさ」

「ひゃー、やっぱ大したもんだよ」

称賛には素直に応じたいところだが、問答する体力も勿体ない——グループの面々はそんな感じた。

そんな中で龍園が俺に並んで来た——しっかりんと汗ばんでるが表情は涼しいものだ。

「何か用か？」

「おいおい、そりやねえだろ——外に行つたなら何してたのか教えてくれるんじゃないかねえのか?」

そう言えば、そんなことも言ったな。

「と言つてもな。特段話すことなんてねえしな——モールでバイトしてただけだし」

「その裏で何かやってたんじゃねえのか?」

「今回はそんなことはなかったぞ」

とでも言わせたいのかな——有り余る好奇心を隠さないシタリ顔からはそんなことを感じさせる。

「裏方の仕事なのは間違いないが、アイドルたちと話した訳じゃないからな」

「けつ。じゃ、聴き直すぜ——合宿中か終わった先にこの学校に何かある?それなら聞く権利はあるんじゃないかねえか」

「確定じゃないが大きな人事が起こるんじゃないか」

「坂柳の親父の件か——オメエの飼主の息のかかったのが乗り込んでくるって事か?」

もう度々来てるけどな——形式上にしても既に。

「正確にはそれに便乗しようとして来る輩だな——迷惑な限りだ」

「ほう。事と次第によっちゃ、潰すのに手を貸してやるぜ」

「お前の部下になれてなら不可能だぞ。例えこの学校限定でもな」

「ハッ。んなこたあとづくに分かってんだよ——まず第一には俺の邪魔されんのが我慢ならねえ。が、Aクラスに上がるに関しちや、今は

目的としちや見直してる最中でな——その判断材料になる情報があつたら寄せ」

「大したことは回せないかも知れんぞ」

「お前ほどの男が情報の価値、それもこつちが求めているかどうかを分かつてねえってか——もしも、そうだったらその程度の男だと思うことにするさ」

俺のプライドでもくすぐってるつもりか?

もう少し話しても良かったが言いたいことを言った龍園は離れて行く——まだ様子見を続ける構えってことか。

そうこうしてる内に折り返し地点に着くと茶柱先生が待っていた。

「中々のペースだ——この分ならお前たちは余裕そうだな」

ボードを取り出し点呼とのことで皆が名乗る——そしてここから先は各々のペースで走っていくことになってるので半ば必然的に競争の形になった。

全力で行つてとつとと終わらせるのも良かったが、少し気掛かりもあつて割とゆっくり目のペースで下つていくと他のグループとすれ違つていく。

その最後に綾小路たちのグループがあつた——なんともゆつくりと歩いてるが、既につらそうなのが一人、ついでに足りないメンバーも一人。

「高円寺はどうした？」

「ああ、イノシシ見掛けたらそつちに行つちまつて……」

立ち止まつて聴くとバツの悪そうな顔して幸村が答えた。

「すまん。追いかけて戻る様には言つたんだが」

聞き入れなかったか——まあ、それはいい。それよりも問題は、

「幸村」

少し責めるようなニュアンス込めて前に立つと顔色はますます悪くなつていく——さながら責任を問ひ質せられる形に綾小路以外は皆、先に行つてしまう。

「嬰兒。高円寺は誰にも制御出来ない——啓成を余り責めるのは——

——」

「何を言つとる——座れ、足がかなりきてるだろ」

庇おうとする綾小路の勘違いを解く——と言つてもそうさせたのは俺だから、驚くより責める目で見られた。

ちよつと強引だが幸村を地面に座らせて靴を脱がせ、足首を診る。

この様子からして休まず、不適切なペースでここまで来たな——そんな責任感、返つて逆効果だろうに。

「痛たたた——」

「テーピングすんのがいいだろうが、持ち合わせてない——少し荒つぽくなるが我慢しろよ」

ちよいと力を込めたマッサージをしながら『水瓶』で血行を整えていく——あんまりやり過ぎると不自然だから匙加減には注意しないとな。

「よし、これで帰るまでは持つだろ」

「流石だな」

綾小路が褒めるが、つぶさに観察してるのが丸わかりだったから喜ぶ気になれないな——そんな俺たちに対して幸村は俯いて愚痴る。

「つたく、なんで俺はこんなことも——」

「そう言うのは戻ってからにしろ。このままじゃ、昼休みが無くなるぞ」

流石に付き合ってられないから、もう行こうとしたが、

「嬰兒。戻ったらちよつと話せないか？有栖ことで聞いて欲しいことがある」

「……坂柳の？」

「詳しくは戻ってからだ。啓成、行こう」

「あ、ああ……」

妙なのを最後にやってくれる——幸村もさつきまでの自己嫌悪がすっかり吹き飛んだ様子だ。

やれやれ、なんでこうなるのか？

五日目の授業も終わった夕食——合宿中唯一の男女の交流がある時間、綾小路と直ぐ隣にはニコニコとした坂柳が座り談笑している。ここに普段ならそれぞれのグループが周りに居るのだが、今日は少し離れた所に居り二人の様子を見ている。

「大事な話があるから二人にしてくれなんて、きよぼんもよつぽど溜まってだね」

「は、波瑠香ちゃん……その言い方はちよつと……」

「愛里の言う通り少しは節度を持って」

「むう。なによ、みやつちまで」

「なんとも楽しそうだな」

そこに嬰兒が割烹着姿で現れ、皆の思考が一瞬止まる。

「嬰兒は大変そうだな——全然休めないなんて」

「そうだよ。ゆきむーの言う通りだよ」

「気遣いは有り難いが、余り揉め事は起こして欲しくないぞ」

言外に余計なことをするなど発しており、不満さが湧き出て来る——
嬰兒も流石に好ましくもないからか、ひと息ついて話題を振る。

「それに悪い事ばかりじゃない。昨日なんてアイドルの生ライブを拝
めたしな」

「え!?マジでか!」

これには近くに居た他の学生たちも喰い付いて一斉に注目を浴び
た。

「ああ。『暁の五星』ってデビューしたてのグループで中々に良かった」

この学校では丸で縁のない話題だけに大半が羨ましそうにしていたが、その中で佐倉はひと際大きく目を見開いて驚いていた。

「マネージャーさんとも話したが、参加出来なかった娘もいたが最高のプロデュースをしたって言ってたな」

驚いていた佐倉はやや複雑そうな顔をしてしまう——ただそれに気付いたのは僅かであり、多数は話の続きを求めて来る。

「実際にステージのパフォーマンスもよくよく見ると不自然さもあつてな——体調不良じゃ仕方ないとは言え、やっぱりメンバー勢ぞろいで見たかったな」

「えっ、体調不良、大丈夫なの?」

佐倉が心配そうに尋ねて来た。

「ちよつと大事を取ったってだけだつて。次のイベントには問題ないってさ」

「そっか、良かった」

「なに、ひよつとして愛里の知り合いの娘でも居るの?」

心底安心した様子に長谷部が訊くと、周りからも好奇の視線が集まった——これにどうしようかとオロオロしそうになるが、

「おいおい、話を振っておいてなんだが、その手のは部屋に戻ってからにしてくれ」

嬰兒が早く食べてくれと言外に示し、強引に流れを切りに来た。

「あら、なにやら楽しそうなお話なのに、もうお終いですか？」

そこに坂柳と綾小路も来た。

「そつちこそ、話は終わったのか？」

「ええ。ですのでもう少し、お外での事を聴きたいですね。土日はずっとその方々のお手伝いを？」

この質問に周り、特に佐倉も期待感を持って注目して来た——嬰兒は少し困ったような仕草をしながら仕方なしと言った感じで口を開く。

「いいや、クラシックコンサートの方にも顔を出したな」

「へえ、そうなんですか——それなら今度外に行く時は『麗華歌劇団』に行ったりする予定ですか？」

「歌劇団って、舞台が好きなのか？」

「嗜む程度には——特に今の星組のトップスター様は好きですね」

坂柳のうっとりした顔に男女関係なく見惚れるが、横に居る綾小路は少々面白くない顔だ。

無論、綾小路とて某劇団が女性だけで構成されるもだと知識としては知っている——ただこればかりは理屈じゃない、と心の中で言い訳して感情を押し殺すことをしないままには思春期の高校生らしくなった。

(と、こんな心情でしょうか)

そんな風に綾小路の気持ち想像しながら、益々嬉しそうに笑みを深めて坂柳有栖は提案する。

「清隆くんも卒業したら、お祝いに観に行きませんか？」

「すまないが、その手の話題には素人で——」

「戻ったら色々と教えますから」

やたら積極的な姿に押され気味になる夫婦のやり取り——これだけでも結構なものだが、それ以上にのめり込みたいと参加したい多くの女子達も居た。

「ねえ、だったらこの後で話さない？ 私も興味あるんだあ」

「わたしも」

「つて言うか、男役も良いけど娘役のお姫様なんかも良いよねえ」

「あたしはちなみに宙組の——」

「どんどんと盛り上がっていく気配に綾小路だけでない他の男子たちも気後れしていくが、

「はいはい。女子会は部屋に戻ってから、心行くまでゆっくりとしてくれ」

「嬰兒が手を叩いて再度『早く食べて、片付けろ』と促し、男子達は即即と、女子達は不承不承といった感じで、この場は解散となった。」

星が・・・

試験六日目、この日の早朝も見回りしてたが問題が起こる様子はなく実に結構なことだ——寧ろ問題が起こるとすれば内側かな。

とは言ってもそれは学生同士、それもこの学校特有の物だから大して気に留める必要性は無いだろう——あの賭けに対しても基本的には罰金の徴収が主だし、何より今更深く関わるのは無理だろうしな。

もしそれがあるとするとするなら、誰かから請われた時ぐらいだが元会長殿からして考え辛い——それでもあるなら第三者が何かした時かな？

なあ、綾小路。

「おはよう。朝っぱらから何か用か？」

「春休みの？イベント」の事で相談したい」

雑談する気もなく単刀直入か——つまり相当時間が惜しい案件ってことか。

「昨日あれだけお嫁さんとイチャイチャしてたのに熱がまだ冷めないか」

「寧ろ盛り上がったくらいだ——外での事を聞いたお陰で」

「なんだ、まさか責任取れとかか？」

「そうは言わないが、『そもそも』において嬰兒が発起人なんだ。話を聞く義理はあると思うが」

「だとしてもちよつと気が早くないか？まだ二か月は先だぞ」

「どうも長くなりそうだから前置きは省いて本題を話す——最終日に起こる事への対策に力を貸して欲しい」

「最初からそう言え。つてか、それって初日に言ってた勝負の事だろ

——元会長殿が負けると踏んでる訳か？」

「個人としては勝つだろ。ただAクラスのリーダーとしてはかなりの損害を出す結果になると思ってる」

へえ、そこまで見通したのか——ちよつと興味が湧いたので聞いてみると、なるほど有りえなくはなさそうだ。

「有栖や他にも探りを頼んで裏も取った——正直、試験での巻き返しは不可能だ」

「試験でつて事は他に対応する方策があるつてことか？」

「ああ、もうその為の協力も取り付けてある——ただこれには嬰兒の協力も必要になる」

「ほう。それが最初の話に繋がる訳か」

「相変わらず話が早くて助かる」

「されど春の僅かな楽しみとじゃ、メリットは向こうの方が勝ると思うが？」

「だから話がしたいんだ——それにぶつちやければ、あの条件は嬰兒には大した魅力じゃないだろう」

「まあ、確かに」

何より俺が言い出したことじゃない——いつの間にか話が決まったつて流れでなんとなくだったし。

そしてこんな話をしてるつてことは言い出しつぺの堀北元会長殿には既に話は通してると言う事——俺にクラス移動されるのは困るつてことか、そう考えるとちよつと微妙だな。

「オレの思惑にそのまま乗るのは面白くないつて顔だな。尤もだ——本来ならこつちからそれを呑ませるだけの条件を提示したいが、お前が戦う場を用意するにはもう難しいだろう？」

年末の裁判沙汰に関しては全て把握してるつてか——それとも外側からの介入に対してはお前も同じだから組もうつて言ってるのか？

「まず最初に言つて置くが金銭面において嬰兒にマイナスは出せないと堀北先輩と話は付けてある——そして面倒も掛けない。嬰兒には必要な物を手配してくれれば後は全部こつちでやる」

要は金だけ出してくれれば南雲会長の策も潰せるつてか——少し面白そうだし勝手に決められた思惑よりは良さそうだが、はつきりと良しとは言い難いな。

とは言えそれをストレートに言つたら話もたつくだけだし、ここは飲み込んで先に進めることにするか。

「取り敢えず聞いておくが一体俺に何を買わせたいんだ？」

綾小路は要望を言い、そこから何をするつもりなのかも話してくれた。

なるほど、面白そうだ。

最初にした話ともしつかり繋がってる——ただそれでも俺的には不十分だが。

「オレの方策に嬰兒なりに足したいことがあるなら聞く。この件と関係なく要望があるなら勿論それでもいい。協力して貰いたい」

正直、俺にとつては受けても受けなくてもどっちでもいい案件だ——綾小路にとつては俺が他クラスへ行く可能性を僅かでも排除するつもりなんだろうが、そのまま乗るのはやっぱり心につつかえるものがある。

それは綾小路とて心得てる——だからこそ交渉を持ちかけて来た。

ただ、そうは言われても見返りに何か欲しいものは現状無い——貸しをひとつつてことで手を打ってもいいが後々のことを考えるとやはり体面が悪い。

いや、待てよ……………。

「そうか。じゃ、ひとつ頼んでもいいか？」

正に今思い付いたことをそのまま伝えると綾小路も目を丸くした——ハハ、これはこれで愉快なものだ。

流石に二つ返事でつてことはなく、少し無言となり意を決したように返事が来た。

「分かった。今更、その程度の事はなんとでもない」

そうは言うが最後のは負け惜しみっばいぞ。

「じゃ、交渉成立だな」

願わくばこのタイミングで宿舎が着くぐらいが良かったが、まだ少し掛かる——のでもう少し話しても良かったが、綾小路は急ぐからと行ってしまった。

気恥ずかしさつての覺えたかな？

何事もなく授業も過ぎていき食事時間となった——唯一、女子と接触できる貴重な時間だけに和氣藹々となるのは不思議ではないが、今回は異色な雰囲気か漂っていた。

「それでですね。星組のトップペア様たちによる——」

坂柳が熱心に語る歌劇団の演目話に学年を問わず大半の女子たちが聞き入っており、丸で演劇に興味の無い男子たちからは他所でやって欲しいと思われたりもしていた。

「ああ、どうせ萌え話するならアイドルライブとかが良かったなあ」

誰が言ったか、その台詞に釣られる形で特例の男子に目が行った。

「言っとくけど、俺だって詳しい訳じゃない」

「ええ、どうせ春にはまた外出るんだろ。お土産とか——」

「欲しいなら、そう交渉してくれ——生徒会通せば出来たりするんじゃないか」

「おいこら。妙なのに巻き込んでんじゃねえ」

南雲が嬰兒の台詞に透かさず待ったをかけた——その顔も否定的で付き合う気は無いと書いてあった。

「ちえ、詰まんねえの」

男子の話題が途切れてしまうが、女子の方は全くお構いなしに盛り上がり、見ていた南雲が嬰兒に声を掛けた。

「女子の方はお前の方で牽制掛けとけよ——俺は知らないからな」

「はは。生徒会長もあの場には辟易しますか？」

「正直、ついていけない——これまで丸で縁がなかったからな」

南雲はふうーとひと息ついて、坂柳の元に集まっている女子たちを改めて見た。

そこには一年だけでなく二年三年の上級生たちも居り、その顔は本当に楽しそうであった。

「複雑ですか——なびいてるのを取られたようで」

「そこまで卑しくねえよ——ただ俺じゃ、あんな顔にはしてやれねえからな。今更ながらちよつとな」

「ま、この学校じゃ娯楽への話題は限定的ですからね。それは仕方な

いんじゃないですか」

「はは。ありがとよ——牛井の方こそ大丈夫なのか、実質休みもないだろ?」

嬰兒のフオローに南雲は苦笑し、別の話題を振って来た。

「特別扱いされてる分、働かなきゃいけませんから。ご心配なく」

「話は逆だと思いがな」

優遇されているから働くのではなく、働かせる為に特例を与えられている——南雲の顔には「不満は無いのか?」と書いてある。

つい昨日も龍園と似た遣り取りをしたばかりな為、嬰兒としては辟易した気分で言った。

「だから代わりに先輩の部下になれとでも?」

「体面上、お前自身が権限を持つのが無理なら、俺個人と契約するのはどうだ?」

「したとして何が変わる訳でもないでしょう」

「そうか?この学校の生徒会は普通の所とは違う——お前が望む最低限の自由を得られるぐらいにはフオロー出来ると思うぞ」

「いや、そう言うのをするなってお達しですから——やったら更に大きなのが来て、もっと大変な事になりますよ」

「それが望みだろう」

南雲がしたり顔で言う。

「手始めに特例ポイントの買い取ってやる——そうすれば負担も少しはマシになるんじゃないのか?」

「それって堀北先輩との勝負に出てた奴でしょ——まさか——」

「おいおい、早とちりするなつて——いくら何でも2000万をポンとだすなんて、すんなりとは言えねえ」

「つてことはもっと高値で買い取ってくれると?」

嬰兒の申し出に南雲も苦笑する。

「吹っ掛けて来るな——言い値を望むならある程度の分割じゃないと無理だぜ」

「卒業までに支払える保証は?」

「俺の代で無理なら一之瀬に引き継がせるのでどうだ」

暗に断ろうとしていた嬰兒は南雲の返答に流石に眉をひそめた。

「一之瀬もセツトつてことですか……聞いたらさぞかし軽蔑されるでしょうね」

「捻くれてるなあ——単に後任に任せようっただけじゃねえか」

「貴方個人との契約なのでは？」

「一之瀬の性格なら放つて置かねえんじやねえか」

「そして一之瀬の心に南雲先輩の意志を引き継いだつてのを卒業まで持ち続けさせたいと？」

この指摘に南雲は改めて盛り上がっている女子たち、その中心にいる坂柳に目を向ける。

「あいつは幸運だよな。彼氏が違うクラスなのに学校中から祝福されてて——普通、特にこの学校じゃ見ることの出来ない光景だ」

「南雲会長も充分、存在感残してると思えますよ。一之瀬には」
「けど、お前程じゃない」

「……蛇足かも知れませんが、俺は別に一之瀬に気がある訳じゃないから恋敵だと言うならお門違いですよ」

「あくまで知り合いに似てるだけだったか？」

「その通りです。彼女の代わりなんて目でも見てませんから、その辺りもご安心を」

嬰兒の態度や口調からは嘘は感じない——客観的に見ても嬰兒は恋や青春などを謳歌する余裕などないことは明らか。

事実を再認識し、かと言って安易な同情など無意味だと分かっているのも、そこには触れずに話を戻すことにする。

「だったら尚のこと女子の方も騒ぎ過ぎないようにさせとけよ——試験にまで影響して余計な仕事が増えたら堪らねえからな」

南雲の態度からはもう既に影響が出始めているとも受け取れる——実際に坂柳の周りだけでなく普段は関わりの無い女子たちも話している風であり、それは上級生も変わらない。

二年の女子にも既に影響が出ていることが想像できた。

「なんだか熱心に布教して回ってるみたいだな——あの調子じゃ、生で観たいから呼んでくれって言いかねない」

「そりや、生徒会長の腕の見せどころじゃないですか」

「気安く言うんじゃないよ——そこまで何でも出来る訳じゃない」

仮に骨を折ったとしても実現できるかどうかは未知数——結局駄目だった等となったら報われないにも程がある。

南雲のニユアンスからはそんな気苦労が見て取れ——嬰兒もそれは素直に理解した。

「生徒会長も大変ですか」

「当たり前だろ、役職を全うしてこそその権利だ——なんでも好き勝手に出来る訳じゃない」

「ご尤も」

この正論に嬰兒も肯定する——そしてそれは周りで聞いていた面々も同様の様で無言のまま関心の視線を向けて来た。

どうにも背中がかゆくなる——そんな感覚に南雲は居心地が悪くなり、話を終わりにしようと思ふつきらぼうに言う。

「兎に角、まだ試験中なんだ——余計な面倒掛けないように程ほどにしるよ」

去って行く南雲を見送り、嬰兒も仕事に戻る——食堂に居た他の面々も特に何も言うことなく、その場は静かに食事を再開し各々で戻って行った。

さて七日目を迎えた——昨夜の南雲会長の有難いお言葉と明日の試験の事もあって、今日は朝から皆気合が入っている様子だ。

男子は勿論、女子の方もまるで昨日までのバカ騒ぎが嘘の様——と言つても俺は何もしてないけどな。

ただ何も知らない輩から見れば、俺が南雲の言う事に従つたと思うのも居たりする。

「よう。俺の誘いは蹴ったくせに南雲の言うことを聞くんてことは、いよいよもってクラスを見限る気になつたか？」

「龍園、こんな時に輪を乱すような真似は止せ！」

「ああ。今しないでいつすんだよ？大金と権力が転がり込んでからじゃ面倒臭えだろうが」

それならある意味、今と変わらないけどな。

「それもそうだな——明日の結果に関係なくクラス移動出来るようになるなら、こつちにだつて無関係じゃない」

橋本め。尤もらしく乗って来やがつて——お陰でグループの皆も〃それなら聞く権利があるな〃つて感じになつちまった。

やはり気になるものは気になるか。

「何か誤解があるようだが、女子が大人しくなったのに俺は何もしてない——そして誰か個人の下に付くことは出来ないし、俺自身もそんな気は無い」

「下に付かなくてもギブアンドテイクの取引なら乗るんじゃねえのか？」

龍園の奴、しつこい限りだ——そしてこれがどうしても言質を取っておきたい事だろうな。

どんな形であれ俺を使うことが出来ることが可能——それが明文化した形でなら、他にもアプローチが来るのは明白。

ハツキリ言つて迷惑千万だが、それを回避するのにも貸しを作つて詮索を深めて来る——とこんな感じか、なんだか綾小路と話してるように気分になつて来るな。

「繰り返すが南雲会長たちの事で俺は何もしてないし、するつもりもない——クラス移動に関しても全くその気は無い」

「だが今のクラスに愛着がある訳でもねえだろ——もつとやり易いようにしたいんじゃねえのか？」

自分の所ならやれるつてか——まあ、こいつのやり方からすれば妙な説得力があるな。

ただそれと実際にやれるかは別だけど。

「つまり俺にそれだけのメリットを提示できるど？」

「それに見合う働きをするなら、命に懸けて用意してやるよ」

これはまた大胆な事を言つてつ来たな——普通なら冗談を、と流すだろうが相手は龍園、その目にはギラギラとした愉悦と本気さが醸し

出している。

いや、命を懸けるぐらいの覚悟がなきゃと悟ったってことか——つまりは綾小路たちと同じかそれ以上に「俺の飼ゆうりよくしやい主」に挑もうって腹か。

「いつになく面白いこと言うな——お前の命ひとつ程度でなんとかならん？」

「んな脅しを通じる段階なんざ、とつくに過ぎてるだろ」

うわ。即答しやがった……なんとも嫌な流れだ。

適当な誤魔化しは効かないって感じだが、今回は本当に直接的な関係は無い——南雲に限らず誰かの下に付く気なんて最初からないし、命を懸けたところで別に欲しくもない。

そうストレートに伝えるのがベターだけど、どうにも納得させるには弱い風を持って行かれた。

何か龍園が満足する面白い事で返すしかないだろうが、流石に咄嗟過ぎていいものが思い浮かばない。

しかも助け舟を期待できそうなのも居ないと来たもんだ——ここでの無言は、俺的に嫌な心証になって来ている。

仕方ないから話を元に戻すか。

「大した自信のようだが、それなら今回の結末ぐらいは予想で来てるのか？」

「いいや——ぶっちゃけ上がどうなろうと興味ねえしな。

それよりも外から何か来るのが気になって仕方なくてな」

注目してたのはあくまで俺だったか、嬉しくない限りだ。と龍園は龍園で自分のペースに持って行こうとしている——ひと筋縄じゃいかない、ただ想定範囲内だ。

「この前のインパクトが余程強かったみたいだな——ただあまり大きな目に向けてると見落としがあつたりするぞ」

「ってことはやっぱり何かしてるってことか？」

「何度も言うが俺じゃない」

「俺じゃ、か」

かなりベタだが龍園はしつかりと喰い付いた——それに釣られて

周りの奴らも「何かが起こる」とそんな期待感とも言えるものが宿った。

「南雲会長はただ試験を進めていくつもりは無く、堀北元会長もこのまま試験が終わるとは思っていないらしい——明日、試験が終わった後がある意味で本当の始まりになるそうだ」

「らしいだの、そうだだの、なんともハッキリしねえな」

「仕方ないでしょ。俺は何もしてないんだし」

「つまり動いてるのは他の奴で、その仕掛けはまだ言えないってことか」

よしよし、しっかりと言葉尻を捉えて龍園もしたり顔だ——その態度やニュアンスにも幾ばくかの満足感が見える。

この場はこれで満足として後は、明日のお楽しみってことにして貰いたいな。

その意図は伝わったようで龍園もこれ以上絡んでくる様子はないかった——全く朝っぱらから疲れるぜ。

試験前日とあって夕食も今までとは違う雰囲気があった——主に女子の方に。その様子は嫌でも目に入る様なあからさまであり、男子の方は大部分が辟易とした気分だった。

その中心と言える坂柳は笑みを浮かべながら向かいの相手に言った。

「橘先輩。そんなに縮こまってもっと気楽にしてください」

「え……あの……その……」

元生徒会書記の橘茜の顔は困惑一色であり、何故自分がここに居てこんな事になっているのか、丸つきり訳が分からない状態だった。

「ほら。明日は試験本番なんですから、しっかりと食べないと」

「そうですよ。たださえ先輩のグループ危なそうなんですから」

そして橘を囲んでいるのは坂柳だけではなく、別グループである堀北や櫛田などの一年？クラスを主に多くの女子たちが居た。

その集団は非常に目立ち、会話の内容も否応なしに耳に入ってきて来

る。

「それにしても災難ですよね——先輩のグループ、真面目にやってるのAのメンバーだけじゃないですか」

「本当にね。おまけに休み時間も嫌がらせなんかしていて、流石に目に余るわ」

最早、わざとやっているとしたか思えない櫛田と堀北の堂々たる非難いやみによる説明——これにより周りには虐められている橘に彼女たちが救いの手を差し伸べたと認識させられた。

「ちよつと、人聞きの悪いこと言わないでよね！」

「おや。何か間違っていましたか、猪狩先輩？」

声を荒げた猪狩と呼ばれた女子に坂柳が前に出た。

「当然よ。私たちの平穏を乱しているのは橘さんよ」

端的に被害者は自分達だとの主張に坂柳は丁寧ていねいに、そして大胆に返す。

「それはつまり真面目にやっつて“あれ”だと——それとも“そう”するのように真面目にやっつてると？」

事情を全く知らない物からしたら理解出来ない問いだが、坂柳だけでなく周りに居る女子の面子からも同調圧力があり、猪狩に冷や汗が浮かぶ。

「……豪く庇うじゃない。いつから貴方たちちつてそんなに仲良くなったのかしら？」

「春先のイベントには是非出席して頂きたいんで——あんまり暗い顔されているのは気持ち的に良いものでは無いんですよ」

途轍もなく個人的な意見だが、周りは賛同している様子であり、特に堀北は声を出してそれを示して来る。

「そうね。先輩たちとは春にはお別れですし——兄さんも含めて最後は笑顔で見送るには持つて来いの催しですし、つまらない事で水を差されるのは気分の良いものじゃないわ」

ただそのニュアンスには少なからず怒気が含まれており、端的に言えば？誰か”に文句を言いたそうでもあった。

「堀北さん。その言い方だと喧嘩を売ってるようですよ」

坂柳が窘めるように言う——ただそのワザとらしいニュアンスと出て来た名前に相手が堀北学の妹であると否応でも認識させられた。

これに猪狩の冷や汗は増して出て来た時の勢いも完全に殺された——寧ろ早くこの場を立ち去りたいと顔に書いてある状態だ。

一転して追い詰められた風な猪狩、見ていた男子たちは一体何が起こっているのか訳が分からない——そんな中で助け舟を出すのも居た。

「おいおい、たかが言い合いに堀北先輩の名前を使うとは大袈裟じゃないか」

南雲がやや面倒そうに仲裁に入ってきて来る——これにより猪狩も若干の余裕を取り戻した。

「そうよ。三年の事なんて何も知らない癖に——大体、クラスがAなのだって堀北君ひとりの力であつてで、他なんて尻馬に乗ってただけじゃないの、その女も含めてね」

橘を挑発して来る——対して橘は思うところがあるのか何も言えないように、流れが変わりそうになるが、代わりに坂柳が前に出る。

「随分と勢いよく言いますが、堀北先輩さえいなければ自分たちがAクラスだと?」

「彼さえいなきゃ、クラスの総合力で負けてるなんて思った事は無いわ」

「フッフ。たった一人にすら勝てないのに大した自信ですね」

「人の事、言えるのかしら——夏の試験じゃ、特例の男子一人にボロ負けしたって言うじゃない。それでもAクラスって言うんだから呆れるわ」

「それについては、そう思われても仕方ありませんね——彼の得体の知れなさは番号や記号じゃ計り知れませんか………：………：そういう意味ではお互いに厄介な年に入学してしまいましたね」

これを言った時の坂柳のニュアンスはこれ以上ない切実さが滲み出ており、一瞬全てを硬直させた。

その中で南雲がいち早く持ち直して手を叩く。

「ほら、良い感じにお茶が濁ったし、ここらで手打ちにしろ——これ以

上は飯が不味くなって他も迷惑だ」

「はい。それもそうですね——では行きましようか、橘先輩」

「え、あ、えっと……」

尤もな仲裁に従う形を見せるも橘を一人にはさせないと向かいの相手にアピールする。

周りで見ていた者たちは嫌な空気がぶり返すのかと緊張が走ったが、何も起こる事は無く杞憂に終わったことに安堵した——その様子を辟易した顔で見渡した南雲は仕切り直すように言う。

「ああ、試験前だつてのに妙な事になつちまったな——各々、色々あるみたいだがそれで評価を下げちゃ元も子もない。しつかり食べて今夜はゆっくり休んで全力で試験に望もう」

この演説に生徒会長も大変だと思ふ一方、明日の試験での勝負に自分を鼓舞していると察する者も居て、自分たちも敗けてはいられないと気合を入れ直させた。

いい感じに発破を掛けたことに気を良くした南雲は振り返り猪狩に言う。

「先輩たちも明日は頑張りましょう——期待してますから」

「ええ」

激励を与えられた演出——生徒会長として締めた認識が広がり、騒動は大きくなることなく漸くとひと段落ついた。

僅かな例外を除いて。

少し離れていた所で最初から見ている綾小路清隆は冷めた目のまま動こうとはしない。

「なあ、清隆——何も起こらなかつたんだし良かったんじゃないか。早く食べちまおうぜ」

三宅がいつも通りに話しかけて手を付けていた夕食を指す。

「ああ、そうだな」

短く答えた綾小路は手を動かして淡々と食事を進める——ただその纏わりつく雰囲気は何もないのが返って不気味さを醸し出してい

た。

「はあ」

三宅は短く溜息を付くと、嬰兒が近づいて来た。

「飽きないって言うか、ブレないなこいつも」

「もういつものこと過ぎて何か言う気にもならないけどな」

その台詞に嬰兒だけでなく聞いていた周りも内心で呆れる——対する綾小路とうじしやは気にすることも無く食事を進め何も言わない。

それに再び溜息を付きたくなるが、食べ終わるにはまだ少し掛かりそうなので少し話しかける。

「この前のことと言い、なんだかちよつと過保護になり過ぎてる気がするけどな」

「波瑠香や愛里もフォローしたけど坂柳の方は逆にメチャクチャ嬉しそうだったってさ」

「へえ〜」

ワザとらしい明らかないじり話に綾小路の手が一瞬硬直した——ただ直ぐに何事もなかったように手を動かして食べ終わる。

「御馳走様。さて片付けて部屋に帰るか」

あくまでも自然な仕草——それはさつきとは違う意味で返って別の雰囲気を出していた。

これには三宅や嬰兒、周りも面白おかしい気持ちにくすぐられる——それは内心だけに留める者も居れば、遠慮なく顔に出す者も居て綾小路の仕草は早くなっていった。

肅々と片付けて去って行く綾小路——最終日前夜にして、過激さと朗らかさを見せつけられそれぞれに思うところが出来た。

「しかし何度見せつけてられても飽きないもんだな」

そんな中で橋本が嬰兒に近づいて来る。

「仲が良くて結構じゃないか——それともいがみ合いながらも愛し合う展開が好みか？」

「それも需要がありそうだけだな——ってか、彼女の性格からするとそっちの方がしっくりくるくらいだ」

坂柳が揚々としながらかちよつかいを掛けて、辟易しながらもしつか

りと対処する綾小路——それでもお互いに認め合い一緒に居る姿は想像するに容易ではある。

ただその場合はここまで堂々としてたかは疑問だがな——するとしても見れるのはもつと先になる筈だ。そうなると力を合わせてとかの展開もなく、どっちが良かったかと問われれば微妙だな。

まあ、たれば並べても意味はない——『子』の能力を受け継いでないなら尚更だ。

詮無い妄想は切り上げたいが、橋本は何だか面白そうな目をしててもう少し引つ張りたいみたいだ。

「その場合、嬰兒への敵意も半端なく大きくなってるだろうが、そうなたらどうする？」

「時と場合、事と次第によるな——疎まれても仕方ないが『はい、そうですか』と殺られるのは嫌だしな」

「ハハハ。怖いねえ、お前が言うとおハツタリにも洒落にも聞こえない」
チャラけた態度で嘘は無いようだが、顔には同時に興味深いと書いてあるぞ——されど踏み込んでくる気もないと。

俺的にはちようどいい——そんな風な計算でのアピールか？

「そんな展開にならないよう祈ることだな——片付けたいから、そろそろ」

「ああ。分かってるよ」

素直に意を酌んで自分のお盆を持って行く——全く、どいつもこいつも面倒なもんだ。

のつぴきならない状況に持つて行けば。

さて、最終日の朝になった。

とは言つても俺の朝の日課は変わらない——これまで通り山道を見回るが、今日はより念入りに警戒して行かなきゃな。

ここまで来て予期せぬトラブルなんてあつちや堪らない。

用いる異能『未』や『酉』も併用して徹底的に調べたが異常はない——個人的には『辰』や『乙女』も使ってより上空からより広範囲に探索も出来たら良かったが、それを目撃されでもしたら……いやされなくてもペナルティになるかな？

何よりそれで疲れ果てて試験に支障をきたしなら本末転倒だしな。

なんて尤もらしい理由を並べてみたが、それでも心に来るワクワク……じゃない、ザワザワが収まらない。

さて今日はどんな結末を迎えるのか——今から楽しみではない。ない。

こんな気持ちを抱えながら朝飯の場に着いたから周囲からは？ 気合が十分だな”とか妙な誤解を受けてしまった——面倒なものもあるが釣られてモチベーションアップしてるのに水を差すのもなんなん

で、
「最善を尽くそう」

とだけ答えて今試験会場である教室で開始を待っている。

俺たち一年はまずは『座禅』から。それから『筆記試験』『駅伝』『スピーチ』の順で、二年は駅伝、三年はスピーチから。

『西』や『卯』の異能を使って様子見も考えたが、バレて誤解を受けたら流石に言い訳が立たんから止めておく。

「豪く集中してる面だな——この程度の事、テメエなら楽勝だろうに」
龍園がここに来て探る様に訊いて来た——ようするに俺が何に對して気を張ってるか？……つてことだな。

「手を抜いていい理由は無いだろ」

「だが全力を出すのも困難、だろ？」

無難に答えて流そうとしても、それを許さないってか——こんな時に、いやこんな時だからこそか。

集まっている全一年男子からは俺がどうするのか注目が集まっている——余り羽目を外すようなことしたら試験中だろうと、また退場するのかと好奇の目もあれば、単純にどの程度の力を出すまでがOKされているのかと言った警戒を持ってくるのも居る。

ぶっちゃけ駅伝以外は全力も何も無いと思うが、それでも独走状態になるのは面白くないのもその通り、僅かでも勝率を上げる要因が欲しいのも当たり前か。

まったくこんな時には堂々と手を抜くぞと表明してる高円寺が羨ましくも思えて来るな。

俺としてもセオリーの範囲内で気遣いなんてする義理は無いが、命令もとい建前上は学校に迷惑を掛けないようする義務はある。

「学生の本分に則って、ただ真面目にやるだけだよ」

だから当たり障りのないこと言って誤魔化すしないかな——そう答えるしかないってニュアンスも込めて、やや棒読みで言ったが龍園は何ひとつ満足してない。

ただこれ以上の追及は無理だよな——時間も然ることながら『地の善導』も使い、担当の先生がやって来た。

「ちっ」

如何にもワザとらしく舌打ちしながら龍園も引き下がった——なんとなく来るのが分かってたのかって顔に書いてあるように見えたが、これは俺がそう見たいだけなのかな？

「これより試験説明を始める。座禅の試験での採点基準は道場に入ってから動作、作法と座禅中の乱れの有無だ——終了後や各自教室で待機。では名前を呼ばれた生徒から整列し順次、試験開始とする——Aクラス、葛城康平。？クラス、石崎大地——」

これまでとは違う順番——いきなり揺さぶりを掛けて来たか、戸惑いとざわめきが広がる。

昨日までは小グループで固まり両隣は気の合う奴らだったが、本番

は学校側のランダムな組み合わせ——精神集中するのにこの手の些細な違いは割と大きい。特に一週間なんて付け焼刃の鍛錬しかしてないんじゃない、さぞかしびつくりだろうな。

そして俺の名前は一番最後に呼ばれた——しかもひとつ前より若干呼ばれるのも長かったから、道場に残ってるのは予想よりも少なく、おまけに隅の方には嫌な顔があった。

ドウデキャプルのいつもの紳士のお辞儀を見せられ、俺の精神も相当やられた——全く手が込んでるとでも言えればいいのか。

ただそれでもマイナスな仕草は表に出す訳にはいかない——俺は心の中で深呼吸して平常心を整え、いつも通りに座禅を組んだ。

続く筆記試験、これに関しては特質することも無い——出された問題は林間学校でやってたこと、そのままの内容で満点を取るのも多く出るだろう。

案の定、試験が終わった後のグループが集まったの自己採点は予想通りで、苦戦した奴もいたがそれでも問題になる様な点数ではない。

さて次は試験の山場と言える駅伝だ。

単純に考えれば一位を取れば満点だが、そこまで安易なのかは微妙だ。一人一人のタイムも加点対象なのも妥当と言える——その辺りの説明もされるのか？そう思いながら外に出ると生徒たちを送るバンプが何台もあった。

ただ乗った際にされたのは基本説明だけで——

生徒一人につき最低1・2キロ以上は走ること。

バトンの交代は1・2キロ毎でしか認められない。

アクシデントで完走出来ない又は最低距離を走れなかった場合は失格。

——の三つを念入りにされただけだった。

問題はここからグループ内での受け持ちだ——正直、他が最低距離で残りを俺が受け持っても良かったが、橋本と三宅と石崎がもう1・2キロ走り、俺はラストの3・6キロって配分に収まった。

最低限、俺だけじゃなくて体裁って配慮かな——ここは素直に有難

いと思っておこう。

そうしてやって来たゴール前の3.6キロ地点——何故かまた俺が最初に到着して他のグループたちを待つことになった。

少し待つと平田に外村、そこから少し遅れて綾小路と？クラスのメンバーがやたら揃ってきた………こればかりは偶然だよな？

「嬰兒もここか——ひよつとしてアンカーか？」

「まあな。そつちは違うみたいだな」

「ああ。オレの後に高円寺が控えてる」

「なるほど」

雑談のタイミングで残りの二人も合流して来た——とは言っても見ず知らずに近いからどのクラスの誰なんだか？

「Bクラスの渡辺さんとAクラスの竹本くん——二人とも自クラス寄りのグループだよ」

平田が教えてくれたが当の二人は話す気は無いみたいだから少々無駄だったかな。ともあれこれで全メンバーが揃った——後はどいつから先に行くかだな。面子が？に寄ってるからそこまで緊迫したものでは無いが、今か今かと待ち時間がやたら長い。

「あー、嬰兒くんはここから一位を取るつもりなのかな？」

外村が今までとは違う普通の口調で訊いて来た——俺も含め綾小路や平田もちよつと驚いた。

「あく、キャラ付けするのはもう終わりにしたんだ——座禅の時に注意されてさ、いい機会だし直そうかなって」

いつかは直さなきゃいけないとは思ってた訳か——これはこれで合宿にも意味があったのかなね。

「そうか。さっきののだが、手を抜く気は無い——ただ何処まで力を出すかは後の連中次第だな」

普通に考えれば高円寺や須藤は強敵だ、Bに関しては恐らく柴田が控えてる——もっともそれよりも警戒しなきゃは直ぐそこに居るけど。

「だったらオレたちも全力で行かなきゃ失礼か」

「アハハ……なんだか余計なこと言っちゃったかな」

綾小路の気合十分な返答に外村はよそよしく引き下がって行つた——他の面子も再度気合を入れ直した顔して雑談を止めて前の奴らが来るのを待つ。

それから数十分が過ぎて先頭を走る生徒が見えて来た——Bクラスを主にしたグループだ。すぐ後に続々とやって来て三位四位は混戦の様相——奇しくも混合グループで石崎と鬼頭だ。

そして軍配は石崎に上がった——叫びながら俺にバトンを差し出す。

「牛井、一位取れよ!!」

「分かった」

受け取りながら短く答えて走り出す——直後には鬼頭から無言でバトンを貰った綾小路……ああ、なんだか目がぎらついているような気がした。

適当なペースでも良かったんだが、方々にここまでされては仕方ないよな——あきまで常識的な範囲を意識して少しずつギアを上げていくと程なくして前の二人は抜いたが、綾小路はしっかりと喰らいついている。

表情にも余裕がある。

これはなんとなくだが出来れば最後まで戦りたいと顔に書いてある、様に見えるな。

ただ決まり事は守らなきゃな、俺はペースを維持してラスト1. 2キロ地点を抜けて行き、綾小路は無表情で高円寺にバトンを渡す——その目も冷めてたが奥には何を思ってたのか？

それを察してるのか、してないのか高円寺からは軽口が聴こえた。

「さて。ひと汗流してこようじゃないか」

余裕を醸し出しながら俺の後を追って来た——なるほど、結構速いペースなのに大したものだ。

ペースを落として少し話でもしようか、それとも上げて付いて来るのかどうか試してみようか——さて、どうしたものか？

「嬰兒ボーイ。私は君と張り合う気は無いよ——気にしないで好きなようにすることをお勧めするよ」

「おやおや、気取られないように直接視線は向けてなかったんだがな」「凡人たちと一緒にされるのは些か不愉快だね」

そこからは口を噤んで無言の構え、あくまで戦う気は無いか——それとも戦うとしたら勝てると思据えた時、それは今じゃないってことか？

そんな思いを込めて、今度は直接振り返ってみるが表情も走りも全く変わらない——これ以上は時間の無駄か。

結局俺はペースを維持したままゴールして一位、高円寺は直ぐ後で二位を獲得した。

結果的にはグループに貢献したが褒められることはないだろうな——尤もそれは俺も同じ、何より試験はまだ終わってない。

駅伝が山場だと思ってた分、疲れてる状態で声を上げるのはそれなりにキツイ——とか思ってたんだが、あつさりと無難に終えた。いや杞憂で済んでよかった、よかった。

なんであれこれ試験も終了——全学年の大半が疲れたって感じになってるが、結果発表までは気を抜くなよ。

何よりもこの合宿の本場の山場はそこから先だぞ。

すっかりと暗くなった夕方の五時前。結果発表の為、全校生徒が体育館に集められた——林間学校を取り仕切っていたと思われる初老の男性が前に出て報告を始める。

「八日間の林間学校、お疲れさまでした。数年に一度開催される特別試験、内容は違えども前回よりも全体的に高い評価の年になりました。ひとえに皆さんのチームワークが良かったからでしょう」

前置きあいきつを終えて、間を置く——いよいよ結果発表だと生徒に緊張が走る。

「男子生徒の全グループはボーダーを超え退学者は無しとなりました」

これに男子からは安堵が広がった——ただ一部では険しい顔のま

まの者も居る。

「総合一位のグループですが三年生の責任者の名前だけ読み上げます。三年Cクラス、二宮倉之助の所属するグループです——同大グループの生徒たちには後日報酬としてポイントが配布されます」

これには三年の一部で歓声が上がった。

「やったな。堀北」

「ああ」

どうやら南雲の持ちかけた勝負は堀北学が制したようだ——そこから先も二位以下の順位が発表されていくが最早蛇足でしかない。

「やったな幸村。俺たち二位だってよ」

「ああ、本当に良かった」

高順位を称え合う者、単純に退学にならずに安堵する者——どちらにせよ全体的に穏やかな空気ではあったが、この合宿で最も振り回された堀北学はそのどちらでもなく険しい目を維持しており周囲は不可解に思う。

「どうした?」

堀北学はそれに答えず向かって来る南雲をジッと見ている——その南雲は笑みを浮かべており、賭けの敗者には見えない。

「おめでとうございます。流石です堀北先輩」

南雲は賞賛を送るが堀北学は無言のままであり、側にいたクラスメイトの藤巻が揚々と言う。

「お前の負けだな。南雲」

「ええ、でも結果発表はまだ終わってませんよ」

「何を訳の分からないことを?」

藤巻の言うことは周りに居る殆どが同じだった——ただ堀北学はその限りではなさそうで重い口調で言う。

「藤巻、少し静かにしててくれ」

「どういうことだ?」

置いてきぼりにされてしまう面々に構わず、続いて女子の結果発表が行われる。

「女子の総合一位は三年Cクラス、綾瀬夏さんの所属するグループで

す」

男子の時と同様に女子からは歓声が上がる——同大グループに所属していた堀北や櫛田も結果には満足したようで静かに笑みを浮かべている。

ただそれも一瞬だけであり、直ぐにまた真剣な表情となり続きを待つ。

それに呼応するように発表する声にも重苦しさが乗ってきた。

「えー、非常に残念ではありますがボーダーを下回る小グループがひとつ存在します」

それはつまり最低一人、道連れを含めて二人の退学が決定してしまつたと言う事——この状況を唯一愉快そうにしている南雲に堀北学がひと際険しい目を向けている。

「まずは最下位のグループですが、三年Bクラスの猪狩桃子さんの所属するグループです」

女子からは悲鳴が上がる……かに思えたが、悲痛な表情をする者こそ居れども声を上げる者は居らず不気味なほどに静まり返っていた。

この訳の分からない展開に男子たちから置いてきぼり感が増す——かと言つて何を言うべき状況でもなく無言で発表の続きを待つ。

「そしてボーダーを割つてしまつた小グループは——」

コンマ一秒が途方もなく長く感じる間に座禅以上に静かになる体育館——読み上げられる瞬間は正に一瞬が永遠とも思える緊張感が走つた。

「同じく三年生——責任者、猪狩桃子さんの所属するグループです」

発表された瞬間に嬉しそうにする南雲と無念を滲ませて目を閉じる堀北学——そして全く自体が把握できない男子たちから声が入る。

「ど、どういうことだ……なんなんだ一体？」

「Bクラスから退学者が出たつてことですよ——まだ終わつてないし静かにした方が」

南雲がせせら笑いながらの説明——それはこの事態の首謀者であるとアピールしていた。

当然、藤巻を始めAクラスの男子たちは詰め寄ろうとしたが、
「その通りです、騒ぐのは終わってからで」

壇上からの制止の声に一旦、押し留まった。

「誠に残念ですが、責任者猪狩さんは退学が決定致しました——連帯責任を命じられますので後ほど私の所に」

最後に女子たちの順位が発表されていくが完全な些事であった。

「以上で今特別試験の結果発表を終わります。それでは解散して下さい」

そう宣言されたと同時に藤巻が南雲に詰め寄ろうとした——それとほぼ同時に大きく声を上げた女子があった。

「待ってください。猪狩先輩、もしかして橘先輩を道連れにするおつもりですか？」

その女子生徒、坂柳有栖に注目が集まる——これには余裕で居た南雲も驚いていた。

堂々と近づき真剣な顔で目を合わせて来るのに猪狩は冷や汗をかきながら肯く。

「そ、そうよ……私たちのグループの平穩を壊したのは彼女よ」

しかしその弱々しいニュアンスは全く説得力を持つものでは無かった——そして無意識なのか南雲に助けを求めるような視線を向けている。

「だとしたら私は異議を申し上げます——橘先輩はその主張に当て嵌まりません。寧ろそれは他の三年方のグループメンバー全員です」

「な、なによ！あんだ、他のグループ……それも一年でしょ………なんで私たちのことにとやかく言う訳？」

「猪狩先輩たちのグループは橘先輩を殊更に追い詰めるよう……ハッキリ言っただけイジメとしか思われないことしてました——この事は私以外の大勢が見てますよ」

イジメと言うどんな学校でも見過ごすことの出来ない問題を立ち上げられ、成り行きを見ていた教師陣も流石に顔色が変わった。

そして坂柳の主張通りに他の女子生徒が同調していく。

「坂柳さんの言う通りです——私もどんな些細な事であろうと常に橘

先輩を悪者にしようとする主張を何度も耳にしました」

「……鈴音」

堀北鈴音が前に出て前生徒会長ほりきたまなぶが漏らした言葉により、見えない説得力が加わった。

これにより一年だけでなく、三年の女子たちも主張し始めた。

「それに関しては私も証言します——結果が出なかったのは橘さんが夜中に騒いだかだとか、そんなことを何度か愚痴ってました。それもかなりあからさまに」

「な、あんた!？」

同学年、それもAクラスでない者が橘を庇うようにするのが信じられないのか絶句する猪狩——それは南雲も同様であり若干であるが目が驚いていた。

ただそれも一瞬であり、持ち直して落ち着いた様子で話に入って行く。

「……先輩、Cクラスですよ——AとBの問題に割って入って来るなんて、ポイントでも渡されたんですか?」

「この時期にAもBも無いでしょ——ただその質問に関してはイエスよ。アンタたちの勝負に女子を巻き込んで無いか、様子を見ていて欲しいって頼まれてもいたわ。そうでしょ、みんな」

これに一年と三年の半数以上、ほぼ間違いなくA・C・?の女子たちが頷いた——普通なら数の暴力に慄きそうだが、南雲は返って余裕を取り戻した顔になり言った。

「そうですか。ならその証言は信用できませんね——現物と引き換えに橘先輩に有利になるよう頼まれたって見なされますよ」

至極真つ当な意見に猪狩もひと安心といった様子だが、それを見せた瞬間に再び坂柳が前に出た。

「南雲先輩こそ、随分と猪狩先輩に肩入れしてるように見えますね」

「橘先輩にこれだけ有利な状況になってるんだ——それに同調して貶めるのはフェアじゃないだろ」

「なるほど、正論ですね」

坂柳の肯定的発言にこの件はこれで流れる……かに見えた。

「ただそれなら私たちの証言と猪狩先輩たちの意見をしっかりと検証することが必要だと思いますが」

食い下がり正論を返して来ており引き下がる気は無いとアピールする——最早、有耶無耶にするのは不可能だと悟った南雲はひとつ溜息を付き改めて気を引き締めた。

「どうやって検証する——ここには監視カメラがある訳でもないし、試験結果が振るわなかったのも覆しようもなく、責任者が道連れにする権利を行使するのもルールにしっかりと定められてるんだぞ。猪狩先輩の行為にはなんら咎められるものはない」

「そうでしょうか。道連れに出来るのはボーダーを下回った『要因』だと認められた生徒であると最初に説明されましたし、それもしっかりと明記されてます——私たちの証言と猪狩先輩たちのグループの成績を照らし合わせれば、橘先輩に落ち度があるのは怪しくなります」
「状況証拠でしかない——お前たちの見えない所でプレッシャーをかけていたことも考えられるだろう」

「つまり南雲先輩はその瞬間を見ていたと？」

今度は坂柳が攻勢に出て南雲に主張の証明を求める、それも挑発的に——ここまで来ると完全に橘と猪狩の代理戦の様相となり、南雲は完全に猪狩側に肩入れしていると先の坂柳の主張の通りだと見なされてもおかしくない状況に持つて行かれてしまった。

そして何故、南雲が三年である猪狩を庇い助けるようなことをするのか？

坂柳同様に密約を交わしているのか——返答次第ではそう持つて行かれ、南雲自身も火の粉を被ると読んだ。

(まあ、それならそれで悪くない気もするけどな)

本当の当事者は坂柳ではなく橘だ——本格的やり合うなら同じクラスのリーダーである堀北学が出て来るのは間違いない。

今までどんなに望んでも実現できなかった、それも白黒はつきりつける勝負が出来るなら、この挑発に乗るも決して悪くはない。

ただそれは対象が堀北学だけならばだ——よくて顔見知り程度でしかない坂柳を引っ張り出せたのは裏にもう一人いることは想像に

難くない。

そう思い今の状況を仕組んだと思われる男、綾小路清隆に一瞬視線を送るとすつとぼけた顔しながら目を逸らし、ほぼ確定だった。

いくら何でも二対一で戦うのは勝ち目が薄くなり、どうしたものかと躊躇してしまう。

そんな一瞬の間が置かれた時に更に別の女子が入って来た。

「南雲先輩。もしこれが正式な審議に持って行かれたなら生徒会長として公正な判断が求められます」

同じ生徒会メンバーである一之瀬帆波が出て坂柳の隣に立つ。

「何より先輩は女子の事には干渉しないと約束したと聞きます——ならば猪狩先輩を庇う理由もありませんよね？」

「その通りだ。勝負に女子は巻き込まない——これは男子全員が証人だ」

一之瀬は南雲だけでなく男子全体を見渡しながらの問いに藤巻が真っ先に同意した。

その主張は端的な事実であるだけに言葉通り男子全員が肯定を示し、必然的に二年を除く男子も橘の側に引き込んだ。

(やってくれるな)

南雲は形勢が圧倒的に不利になった事に内心で舌打ちする。

もとより、これまで積み上げて来た自身の信用を捨てて仕掛けた策だ——暗に肯定し開き直るのも想定はしていた。

ただそれは教師が居なくなってからであり、引き留められ更に生徒会長としての立場まで持ち出されては迂闊な言質を取られるのは予想を遥かに超えた大損害であり流石に割に合わない。

そんな打算が展開されてるのを見越して一之瀬は更に畳み掛けて来た。

「もし私たちの証言も無視して、猪狩先輩を秘かに助ける根回しをしてるなら、生徒会長としての資質も問う事態です——事と次第によっては生徒会長の辞任かそれ以上を求めることにもなりますよ」

「おいおい、脅迫するとはらしくないな」

「生徒会の一員として公正さを蔑ろにする人の下に付くことは出来ま

せんから」

一之瀬らしい正論は毅然として美しきすら醸し出す——そして釣られるように二年の男子からも動揺が生まれ始めた。

南雲雅が生徒会長を下ろされる——それだけに留まらなくなるならば、残り一年でまだ何かが出来るとは思えないか。

一部ではそんな期待感を抱く者、単純に南雲の支配体制が気に食わない者と盤石だと思われた二年生からの離反もありえなく無くなつて来た。

形勢は圧倒的から完全な不利になつて行き、その空気に猪狩も冷や汗が出て動揺を隠しきれない目で南雲を見る。

話が違ふ？と無言で訴えていると見える者には見え、いよいよ持つてのつびきならない状況になつてしまった。

もしも南雲がここで裏切つても既に渡しているプライベートポイントで退学は免れるだろうが、橘を道連れにしてAクラスに打撃を与えると言うのは不可能に近い——それでも強引にしようものなら、ポイント譲渡の記録も徹底的に調べられて意図的に試験で手を抜き他クラスの生徒を退学させようとしたとして、結局退学を掛けての審議に突入しかねない。

そうなつたら猪狩は全て南雲の指示だつたと全てを暴露するだろう。

いくら生徒会長でも否、生徒会長だからこそ学校全体を敵に回すような真似は出来ない——そんな事になれば一之瀬が言っていたように生徒会長を降ろされるどころでは済まない。

堀北学に敗北を与えるつもりが自身の進退に関わる事態に発展してしまい、更に全く勝ち目がなくては取れる選択肢はひとつしかなかった。

「一之瀬の言う通りだな——猪狩先輩の言うことも他の女子の言うことも立証できない以上、生徒会長としてはこれ以上出しゃばるのはフェアじゃない」

尤もらしく語る南雲に猪狩は見捨てるのかと視線を訴えて来る——無論、分かり切っている反応に対して冷静に対応する。

「猪狩先輩も退学の憂き目にあつてイラついてしまうのも無理ない事です——話を聞いて頭も冷えたでしょうから、今なら冷静な判断も出れますよね？」

周りの圧力と依頼者^{なぐも}が引く姿勢を見せたことで猪狩も安堵した顔となり口を開く。

「ええ、不甲斐ない結果を出してしまったのはグループの責任者である私の落ち度——誰かを道連れにするなんて筋違いでした。よって道連れの際は無しで、石倉君もそれでいいよね？」

「あ、ああ」

名指しされた三年Bクラス男子、石倉は弱々しく肯いた——そして余裕を崩さない猪狩の態度は退学が決まったものでは無く、2000万ポイントによる救済がある事を確信していると多くが悟った。

「あー、話は終わりましたね。では今度こそ解散と言う事で——改めて猪狩さんは後ほど私の所に」

設けられた自由時間、橘は緊張が切れたのか涙を流して膝をついた——そして堀北学がそつと肩に手を置いた。

「ありがとう……堀北くん」

「まったく……心配をかけるな。何故、相談しなかった？」

「それは……負担になることが分かってたから……それに気付いた時にはもうどうにもならないって……」

「バカ者——と言いきれないのが不甲斐ないな。確かに俺一人ではクラスの身を削るしか方法がなかっただろうしな」

堀北学はクラスメイトたちを見ながら申し訳なさそうに言うが不満を抱く者は誰も居らず、寧ろそうなったら別に構わないと言う様だった——堀北学のリーダーとしての高いカリスマと統率、何よりも信頼があることを優に物語っており、この場に居た誰もが感心する。

それは南雲も例外ではなく、だからこそか悔し顔で言う。

「本当に見事です、先輩——そんな貴方だからこそ俺は何を捨てても勝ちたかったし、それ故のこの試験でした」

「賞賛と受け取るが、それでも認めがたいな——こんなやり方は」

堀北は敵意丸出しに返すが、やり方そのものは巧妙であると認めざ

るえなかった。

実際に橘の小グループのAは彼女一人で、残りの主要メンバーは南雲の息のかかったBと？で構成されいた。

この時点で本来なら詰みと言える——グループ総出で橘を追い詰め、試験期間中に足を引っ張り続けたと主張すれば橘個人の成績が平凡でも道連れを認めさせられる。

異議があり審議に持ち込んでもグループ全員が見えない所で妨害されたと言裏を合わせればどうしようもない。

南雲の思惑通りに事が済めば、三年のAとBはクラスポイントを300失うが、Aに関しては2000万のプライベートポイントを失い大打撃となるのは必至だった——三年の三学期がまだ終わっていないこの時期にそんなことになれば最悪Aクラスの卒業すら危ぶまれる。

「それ位の強敵なんですよ、先輩は。ただ俺の誤算は敵が先輩一人じゃなかったことを想定できなかったことですね——まさか孤高を貫いてきた人が他人に頼るなんて思いませんでしたよ」

南雲は目線を綾小路、そして嬰兒へと移すが二人は何も言わない——その様子に『ふう』と小さく息を吐いて思い返す。

合宿終盤に坂柳が橘を囲っていたことに違和感があり、策に気付いた可能性は頭にあったが既に手遅れであり最終的な結果は変わらないうちと思っていた——ただ蓋を開けてみれば、自分が抱き込んだ以外の全ての女子たちを結集させ橘を守るよう動いていたと言う状況を作り上げた。

しかもそれは自らがした約束を守らせる為の買収によるものと、本来なら信用性を低下させる情報を開示することで逆に必然性を補強させた——報酬にしても単純なポイントで動くとは思えず、卒業して行く女子たちの心をくすぐる物を用意したの想像に難くない。

そんな事が可能なのは、ひとつしかない——それを裏付けるように坂柳は猪狩に笑顔で言う。

「その様子からすると猪狩先輩も退学する気は無さそうですね——なら春のイベントにも出席できますね」

「……そうね。卒業記念に歌劇団のチケットくれるんだっけ？」

「はい。素晴らしさは私が保証します——きつとお楽しみいただきますよ」

様子を見ていた南雲はやはりかとい応の納得感を得た。

自らは興味がなくさして注目していなかった有名劇団の鑑賞券——在生には無縁の物でも春に卒業する者にとっては別だ。

無論、全ての女子が好んでいる訳ではなかっただろうが、そこは坂柳の布教（巧みな話術）により？観てみたい”と思わされる方向に持って行った。

何より誰もが知っている100年の伝統を誇る大劇団のブランドは大きい。

そして坂柳有栖はいいとこのお嬢様であり、実際に舞台を鑑賞した事実もあるので説得力は段違いであり、増してや三年間も閉鎖的な学校で苦い思いをしていたCや？の女子などは自分達には関係ないクラス争いよりも魅力的報酬に思えた。

初日にした女子を巻き込まない問い約束、外部の力を持って来られる牛井嬰兒の特例——現行ある条件を最大限に使って自分の仕掛けた策を潰しに来た。

南雲は堀北学から対策の大本を考えただろう綾小路くろまに目を移し嬉しそうなニユアンスで言う。

「いやはや、お前がここまで介入してくるとは思わなかったな——そんなに牛井の移動が気に入らなかったか？」

「有栖と戦うのに戦力ダウンされるのは困りますから」

これに対して綾小路は冷めた口調で即答した——そして出た理由は相応に納得のいくものであり、綾小路だけでなく愉しそうに談笑している坂柳も視界に入れる。

「そっか——堀北先輩より分かり易い分、遊び甲斐がありそうだ——!?」

その台詞が出た瞬間に綾小路は最速で南雲の胸ぐらを掴み上げた——余りの唐突な展開は一斉に注目を集め、普通なら暴力は駄目だと止めようとするような者たちも綾小路の放つ圧倒的な怒気に固まっ

てしまう。

綾小路は最早殺気とも言える物を籠めてはつきりと言った。

「有栖に何かするのは絶対に許さん」

「OK、よく分かった。お前の女に手を出すのは止めておこう——と言つても信じないよな」

「当たり前だ。ただしつかりと覚えておけ」

綾小路は手を放して坂柳に近づいて行く——その姿に周りは無言で道を譲り、野次馬の一人である嬰兒は心底面白そうだった。

(まったく、何をさせるんだよ)

それとなく視線を送った綾小路はベタで臭い事をやらされたのを心の中で愚痴る。

嬰兒に報酬を女子たちへの用意して貰う際に出された条件——もう散々弄られてるとは言え、いいように使われてる感じは拭えず大なり小なり不満が募る。

(ただそれもいつまでもじゃないぞ)

最後には自分が勝つ——その事を強く再認識し綾小路は坂柳を伴って去って行く。

見送る周りからは良いものが見られたと好意的な冷やかしの目、そして隣を歩く坂柳は……

(いずれは貴方の一番の椅子を取りますから)

全てを理解しながらも誰よりも面白そうに綾小路の心中を思っていた。

しかし、この事はこれで終わりにはならず高度教育高等学校に戻って新たな火種へと続くのだった。

マジヨリテイの中のマイノリテイ。

合宿が終わり、再び高度育成高等学校に戻った二月上旬——俺は生徒指導室でドウデキヤプルと対面していた。

「長い時間お待たせしました——こちらがご注文の品です」

あくまで事務的に語るドウデキヤプルだが、どうしてもニュアンスには不遜さが拭いきれない——そんな心情の中で差し出された厚みのある封筒を受け取る。

中身は春のイベントで卒業生たちに渡す引き出物として用意した『麗華歌劇団』のチケット——熱心な布教活動もあつて最早学校中の噂となり、まだかまだかと催促が絶えないかったが漸くとって感じだな。

「今度もまた随分な物をお買いになりましたね。差し引きでどの位の利ぎやを？」

「いちいち言わなくても把握してだろ——何より俺自身の楽しみを増す為って名目なんだ。それともそう言うのは駄目か？」

「いいえ、使いどころさえしつかりと明記してその通りにしてくれるなら何も問題ございません」

事務的に言いはしたが不敵な笑みが増した。

「されど、それが過ぎてこちらの学校のご迷惑になるような事態にはならないよう、お気を付けて」

要するに騒ぎが大きくなる前になんとかしろか——それとも堂々と俺を消す口実を早く作れってことかな？

いずれにせよ、まだその気は無いから安心しろ——そうでないならもつとストレートに来るかな？

いつも通り、煙のように消えたドウデキヤプルを確認して俺も部屋を後にする——少しして校舎を出ると意外なのが待っていた。

「あ、こんにちは。嬰兒くん」

佐倉がぎこちなく挨拶して来るが、目にはどうしても聞きたいと

言った物が込められてる——おまけに普段なら長谷部と一緒になのに今は一人だ。一体、どんな風の吹き回しなのかな？

「ああ、こんにちは。偶然って訳じゃないようだが、何か用か？」

出来る限り穏やかに言ってみたが、それでもおどおどは若干ある——難儀だと苦笑したいな、主に可愛らしくて。

「う、うん……あの……チケットつてもう来たのかな？」

「今受け取ったところだ——やっぱり佐倉も興味あるか？」

「うん、凄く。それに嬰兒くんがこの前に会ったっていうグループもなんだけど……」

「本題はそれか。勧誘も受けたって話だもんな——なら安心しろ、佐倉がこの学校に居るのは言っていないから」

「あ、それは信用してるよ——ただ、体調不良の娘の事つてもう少し分かったりしないかな？」

偉く切実に訊いてくる様子は、またなんともグツとくるものがあるな——人気アイドルつても伊達じゃないと思わされる。

なんだかこの前のステージに佐倉が居なかったのがつくづく勿体なく思っても来た……あー、ひよつとしたらアイドルへの未練でも込み上げて来たのかな？

「悪いがマネージャーさんと少し話をした程度でその娘たちとは直接話した訳じゃない。ただそんなに気になるなら春先に様子を見に行くとぐらいは出来るが？」

「え、あ、えつと……」

おやおや、いつものオドオドした佐倉に戻っちゃった——正直、こうなると心中を推し測るのも出来なくなるから、ちよつと困るんだよな。

「まあ、なんにせよ今直ぐじゃないから返事は先でいい——どうしたいかはもうちよつと整理がついてからにしよう」

取り敢えずは無難な感じでこの場は終わらせたつもりだったが、

「……………どうしたい」

なんだか意味深なニュアンスで呟く佐倉に妙なスイッチでも入れちまったかな？と思わずにはいられなかったな。

いつも通りの朝、？クラスはいつも通りに目にする光景に半分はニヤニヤしており、残りの半数は呆れや飽きを感じて溜息を付きたい心情だった。

そんなクラスの反応などお構いなく堂々と教室に入り待っている坂柳有栖は上品な笑みを浮かべており、演技でもなく気分が高揚している様子だった。

「いや、それにしても遅いね。きよぼん」

綾小路の席に座っている坂柳に長谷部が気さくに話しかけた。

「寝坊でもしたのでしょうか——別に構いませんよ」

笑顔のままの坂柳だが流石に時間が気にして、さり気なく時計を見ると始業チャイムまで十分前となりそうであり残念そうに席を立つ。

それと同時に綾小路ではなく嬰兒が教室に入って来た。

「おはようございます、牛井嬰兒くん」

「ああ、おはよう坂柳——来てたのか」

「少しお話がしたかったんですが、それまたお昼休みに」

「綾小路じゃなくて？」

「はい。清隆くんではなく貴方と——この前の物が漸く届いたと耳にしたので」

「なんとも早い耳だな」

「ふふ。詳しいことは後ほどに」

上品にお辞儀して教室を去って行く坂柳——同時にクラス中の女子たちが嬰兒に詰めかけた。

「ねえ、嬰兒くん。今現物持ってたりする？」

「パンフレットとかグッズとかのオマケない？」

「ああ、やっぱり私も観てみたいなあ」

興味津々な様子を見ていた男子たち、その一部も些か興味を覚えさせる——ただ中に混ざってと言うのは物理的にも体面的にも厳しいものがあつた。

そしてチャイムまで五分となった時に綾小路が教室に来了。

「遅いぞ。さつきまでお嫁さんが居たのに」

「そうだぜ、なんでこんな時に遅刻して来るかな」

「山内、寝坊はしたが遅刻はしてないぞ」

「な、なんだよ……ちよつとじゃれただけじゃねえか」

綾小路のニユアンスには棘があり、若干気後れしてしまう山内——これに主に女子たちは合宿中、坂柳にした事がまだ尾を引いていると悟った。

ただそれをストレートに言うと思いの方向に行きそうであり、なんとか話を逸らすのが無難ではあった。

櫛田や平田がゆつくりと間に入ろうとしたが、

「つまらない事をしてないで、さつきと席に着いたら」

されどもそんなのは関係なしと堀北は真正面から仲裁に入って強引に話を切った。

「ああ、そうだな」

綾小路もあつさりと引く姿勢を見せ、この場はなんとか収まった——ただそれでもしこりの様なものは残り、山内は少し落ち着かない様相であり周囲も何とも言えない火種が燃え始めたのかと心に影を落とした。

さて朝の詰まらない騒動もなんのその、昼休みになり早速来たか。

「こんにちは。牛井嬰兒くん」

「ああ、朝はすまなかつたな、坂柳」

「いいえ、謝る様なことではありませんよ——ただ余り大っぴらにしたい話でもありませんので場所を変えませんか？」

「俺は構わないが、どうする綾小路？」

「勿論、いいぞ」

承諾を受けて一緒に教室を出る——目的地は適当なカフェか、いや歩きながらでも終わるなら食堂でも構わないかな。どつちにするに

せよ二人と一緒に同席するつもりはないからなるべく早くを意識して話すべきだな。

「単刀直入に言うが現物は今手元に無いから、見たいと言うならまた放課後ってことになるが」

「そこまでせつかちではありませんよ。第一、必要になって来るのはまだ先の話です……私たちにとってはですが」

明らかに含みのある言い方だな——つてか、一々考察させるような言い方は癖なのかな？

「誰も聞いてないし、そもそも聞かれて困るような話でもあるまい。もう少しストレートに話さないか」

「確かに時間は有限ですね——特に貴方にとっては。」

では結論から話します。卒業生への贈り物ですが今年だけでなく、来年も同じ物を用意して貰いたいと言う要望が来てます——ちなみにこれは南雲会長も了解してるので、手配出来ないかと?」

「予想以上に反響を呼んだって訳か……今回のだけで100万は要ったんだ、あんまりホイホイとバラまくのはちよつと考えさせられるな」

「気前よく全部S席にしたからな——オレも相場を調べてみたが、もし来年や再来年も同じのつてなったら、この事だけで半分近くが無くなる。」

報酬つて建前上、使い方には問題ないだろうが遊びでここまで好き勝手使えるなら、よからぬ奴も群がって来るのは想像に難くないな」

淡々と予想を語ってるようで、その実?対応には手を貸すぞ”つてアピールが見え隠れしてる——やるなどは言わんが、せめて坂柳の前ではよせよ。

不満顔を隠すことなく俺が睨まれるじやないか。

「清隆くん、それは甘いですよ——よからぬ事には既になっています」
「何、そうなのか?」

「はい。三年生の間ではご家族と一緒に行きたいから等と言った建前で転売なんかの契約が横行してるそうです。」

そして二年生の方々もそれを知って来年の講演チケットを求めて、

お金儲け出来ないかと話になつてゐるそうなの

「金……ポイントじゃなくてか？」

「ええ、この学校では卒業時にポイントを現金で買い取ることになつてますので、最後にもう少し上澄みが欲しいと思うのも不思議ではないでしょう」

「それは確かに」

三年生にしてみれば最早卒業を待つだけに等しい状態。終わりがあと少しだけなら、おこぼれに与らうつてのが居るのは予想できた——されど二年まで波及してゐるのはちよつと意外だったな。

南雲会長の独裁体制が確立してゐるのは有名な話だが、まだ一年以上あるこの時期に先物取引の如きものに手を出しに来るとは………いや、ひよつとして南雲の支配が及ばぬところから2000万を貯めようつて輩が出て来たつてことかな？

もしそうなら南雲が黙つてゐるか——坂柳の言いたいよからぬ事つてのはそう言う事なのかな？

「売り込みの対象としては当然三年Aクラスの方々が多く、かなりの金額が動こうとしていると囁かれていますよ」

「なんだか話が回るのが早すぎる気がするな」

「回りくどいのは抜きにしましょう——十中八九、南雲先輩が三年の他学年を焚き付けてると見ていいでしょう。勿論、間接的にですが」
「その調子で話が大きくなれば問題になる可能性は高い——当然、オレ達も騒動に引きずり込まれるだろうな」

夫婦で話してたよな………なんで聞いてただけの俺までひと括りにするニユアンスで言うかな？

そりゃ俺だつて当事者ではあるが、せめて『オレ達と嬰兒』つて言う風に分けるぐらいいはしろよ——向けられる目つきの鋭さがどんどん研ぎ澄まされてるじゃねえか。

つて、ひよつとして分かつてて愉しんでるんじゃないやねえよ？

「つて言うか、早速来てゐる様だしな」

おお、綾小路も気付いたか——階段の方から俺達を見てゐる女子生徒が一人。銀髪を腰まで伸ばしてゐる目つきの悪い………いや鋭い美人で

こつちが気付いたら堂々としながら近づいて来た。

「はじめましてだな。二年Bクラスの鬼龍院楓花だ」

「これはご丁寧に。一年？クラスの牛井嬰兒です」

名乗り返したが鬼龍院先輩は知っていると無言で語っており、坂柳と綾小路にしても挨拶は不要のようだ。

「何やら大事な話をしてる様子だったが、例のイベント関連のことでいいか？」

「ええ、その通りです。なんだか二年の方でも良くない状況になると今話してる所です」

「そうか。ならば単刀直入言おう——来年度の卒業時には私にSSのチケットを用意して貰いたい。勿論、個人としてだ」

ここまで堂々と来られるのは夏休みの葛城以来か？

半ば感心していると鬼龍院先輩は更に饒舌に続ける。

「どの組の講演かはその時になって指定させて貰いたい——今回はあくまで先行予約のような形だから代金は直ぐにでも払う。もしもその時に私が居ないなら、払い戻しなどを求めないと書面にて約束する」

「律義ですな」

「通常なら倍率の高いチケットが確実に手に入るんだ——寧ろこの程度の手間は安いものさ」

「まあ！もしかして先輩も劇団のファンなんですか？」

さつきまでとは一転して嬉しそうに坂柳が混ざって来た。隣に居る綾小路は話題に入って行けずに冷めた目で成り行きを見てる………出来るなら俺もそつちに行きたいかな。

「昔、嗜みにと家の方針みたいので連れて行かれたんだが、フィナーレの熱狂と興奮は今でも忘れる事は無いな」

「分かります。出演者が勢揃いしてトップスター様が大階段から降りて来る華麗なる演出は本当に素晴らしいの一言です」

「ああ、また観たいと思わされなんとも癖になる」

やれやれ、すっかり盛り上がっちゃったな——劇団の事は誰もが知ってるから素晴らしいのは分かるが、聞きかじりで全く観たことの

ない身としてはここまで密度のある話には入る隙間がない。

それは綾小路も同様でいつもの冷めた目に困ったと言う様な色が出ていた——何よりお嫁さんを取られたのは気に食わない奴だから、もう少ししたら嫉妬の色が………と思ったが、

「なんだか嬉しそうだな」

ちよつと意外だったから、耳打ちするように言うとおつさりとした返答が来た。

「あそこまで無邪気に楽しそうな有栖は滅多に見ないからな」

サラツと惚気が出て来てるのは無意識から来るものかな？

にしても盛り上がってるノリでキナ臭い話はお開きになって欲しいが、綾小路の目が僅かに細くなつて俺も彼女たちに目を向けると坂柳の笑顔に伶俐さが見えた——本当によく見てるな。

「鬼龍院先輩は南雲先輩に迎合しない稀有な方だと聞き及んでます——今回の事も騒動になる前にと思つての事でしょうか？」

対して鬼龍院先輩の反応も呼応して同じく伶俐さを纏つた——ただ面白がつてる訳ではなさそうで寧ろ、

「チケットの転売については気に喰わないな——折角の恩恵を金儲けに断固として受け入れがたい。寧ろ、高額転売は問題にすらなる行為だ——禁止を呼びかけるのが妥当だと思うが？」

不愉快な顔とニユアンス全開で俺に取り締まるべきだと投げて来た——その考えには異存はないが求めるべき相手がちよつと違う気がするかな。

「罰則を設けるべきだと議論も高まつてるが、今回取つたのは団体だし人数が揃つてさえいれば定価で譲渡する分には——」

「折角の贈り物だぞ。行く気がないなら無償譲渡するのが筋だ」

「……………正義感ですか、それとも劇団に思い入れが？」

「どう取ろうがお前の自由だ——ただ言わせて貰えば私はバレなければ大した罪じゃないと他者を傷つける行為には反吐が出る」

なんとも『寅』と話してる様な感じにもなるなあ——『丑』の教えがあつたが、こちらにはどんな物語があるのかな？

「なんだ？」

「いや、ちょっと先輩に興味が湧いてきました」

「はは、随分とストレートに来たな——ならば何か勝負でもするか？
それで私が勝った時は筋違いな事はしないと約束して貰う」

「いやいや、戦いたいとかって意味じゃありません。ただ単にその思想の源泉が何なのかが気になっただけで」

「つまり私を口説きたいと？」

「知り合いに通じるものがあるってだけです」

「おいおい、何も照れる事は無かろう——私ほどの美人に君の様な男子学生なら自然なことだ」

この自信満々さは高円寺の方に通じるな——ただアイツとは違い、まだ人情味はありそうだが。

いや、それもどうか疑わしいかな。

「……例えば、さつきから隠れて見てるその男子生徒みたいにですか？」

目線だけでなく指さしてみると皆もそっちを向き、指摘された恐らく二年生の男子は冷や汗かいて狼狽え始めた。

「いや、大方南雲に命令されたからだろうな——もうバレてるんだ、潔くこっちに来た方が面倒はないと思うが？」

鬼龍院先輩の呼び掛けに一瞬躊躇しながらも渋々と言った顔で近づいて来る——様子からして顔見知りでもないかな。

「こっちの自己紹介は不要だろうから、まずは名乗って貰おうか」

「二年？クラスの立花だ。察しの通り南雲に言われて後を付けてた——こうなったら全部白状していいって言われてるから話すが、理由は鬼龍院が珍しく積極的になってるからだ。

もし勝負できるようなネタでも掴めたなら報酬をより弾むとものことだ——これで全部だが俺は行った方がいいか、それとも残ってても？」

ペラペラとよく喋る——それでいてまだ居座ろうとするとはなんととも面の皮が厚い。

いや、目線は鬼龍院先輩だけじゃなく俺も含まれてる——何かを期待しているのを丸で隠そうともしてこない。

そもそもからして南雲会長に肩入れしてる訳でも無さそうだし、寧ろこの場に居る全員から引き出したのがありそうだな。

これは俺だけじゃなく他も同意見のようで、立花氏の期待を最も理解してそうな鬼龍院先輩に視線が集まる。

「ふう。これを機に私が南雲に下剋上を仕掛けると思ってるなら、それは間違いだ——私は好んでるものを汚す真似が気に食わんから、そうならないよう忠告しに来ただけだ」

「それはつまり南雲がそう動いたら、潰しにかかるってことでいいのか？」

なんとも軽率な発言だと一見思うが、ニュアンスには一切の躊躇がない——何より本人が乗り気なのが丸わかりだ。

二年は既に大勢が決していると噂だったが、そうでもなかったってことか——それとも、そんな兆しが表れ始めて息を吹き返した輩が出て来たってことか？

ただ、その兆しに俺も含まれてそうなのが迷惑なんだがな——妙な期待感はどうどん強くなっている。

ありていに言えば、俺らに南雲降ろしの言質を取りたいようだ。

個人としての願望と南雲の思惑が混ざった、なんともいい塩梅の人は見事だと言うべきかな？

かと言ってそれに乗るかどうかは話が別だけど。

「貴様の態度もまた好かん——そんなに南雲を倒したいなら、お前が挑めばいい。私を担ぎ上げてじゃなきゃ動けない、なんて小物など味方どころか捨て駒にすら値しない」

侮蔑と挑発をたっぷりと含んだ拒否の返答——ただ立花氏の様子には一切の変化はなく、寧ろ鬼龍院先輩の態度を面白がってる様だ。

「南雲が言ってた通りの返答だな——ちなみにこれ以上しつこくすると意固地になりそうだから早々に引けて言われてる」

「ご丁寧な説明をしながら視線を俺の方に移す——どうやら俺にも何か伝言を預かてるな。」

「夏休みにした提案はまだ有効だそうだ——流石に生徒会に入れとは言わないが、組むつもりならいつでも歓迎するってよ」

俺の特例と生徒会長の権限を合わせればッてやつか——確かに面白そうではあるが、やれば今度はどんな特例ふじゆうが追加されるか、何より俺自身が乗り気になれないんだよなあ。

返答しないで無言のままに居ると、立花氏は続けて来た。

「ちなみにさ、お前の学外ポイントって生徒会を素通り出来るんだろ。他にもAクラス以上の特権みたいなのもあつたりするののか？」

どうやら本当に訊きたかったことはそれみたいだな。

「立花先輩も何か欲しいものが？」

「ああ、ぶつちやけ言々と二年生おれたちの？クラスやCクラスには、まともなクラスポイントは殆どない——ポイントを得るには南雲の言うこと聞くぐらいしかないんだ」

今みたいにな——と不貞腐れたように言うのは紛れもなく本心だな。そして南雲からおこぼれを貰うくらいなら、下級生であつても俺の方がマシって訳か。

「今回のチケットだつてお前が手配したんだろ。だつたら——」
「ふあああ」

立花氏の弁に熱が入りそうなタイミングで、ワザとらしい欠伸が水を差した——その主である鬼龍院先輩はいかにもかつたるような態度で言う。

「すまん。余りにも退屈だつたんでな——と言うか、私の方が先客なんだ。こつちの用件を先に済ませて貰いたいんだが」

「卒業時にSSのチケット、並びに今回の団体チケットの転売禁止ですか——騒動になる前に手を打っておくのはいいですが、SSの方に關してはちよつと」

「理由もなく鼻負すると君個人の面倒が増すか——と言うか今更この程度のもが増えたところでも思うが？」

「先輩の方にも余計なのが来ますよ」

「ふん、私は変わらんんさ。何が来ようと今まで通りに過こすだけだ」
当初に感じた圧迫感が抜けてフレンドリーな態度で接してきた——こつちがいつも通りなんだろうな。

ともあれ本人がこう言っている以上は、後は俺がどうするか——正

直、ここでの会話にも飽きて来たし、よし。

「SSチケットの件は承りました——その分のポイントは取って置きますから、指定公演が決まったら連絡してください」

「おお、そうか。なら代金はこの場で払おう」

端末を出してボタンを押すと直ぐにポイントが振り込もうとする——事前に準備してたのか、と突っ込みたくなるのも楽しそうな仕事には失せてしまう。

「それは少し待ってください——後で連絡しますので」

「そうか、それで付加価値として何を求めて来る——単なる貸しひとつでは周りは納得しないぞ」

「そうですね。出来るなら、そうおいそれと真似できないような事がいいと思います」

全く夫婦そろって息の合ったツツコミを入れやがって——ただ、その通りではあるから、ちよつと考えてみる。

鬼龍院先輩は美人だし普通にデートって言う条件もありだと思いが、節操なしと思われるは違う意味で面倒が起る気がしてならない——具体的には目一杯、振り回されそうかどうか分からない。

ならば今この場限りか、それに近いようなことがいいかな——それなら、同じ状況にならなきゃ早々にやっても来ないだろう。

この事を念頭に置いて更に考えてみる——よし、決めた。

「それじゃ、こう言うのはどうでしょう——」

俺は纏めた考えを説明し、話が終わった時には鬼龍院先輩だけでなく、この場の全員が目を丸くする。勿論、立花氏も含めて——うん、これもなんとなくデジャヴだな。

「全く、夏にしたイベントといい、ホントにお祭り好きですね」

坂柳が呆れたような目で言ってきたと綾小路も無言で同意しているが、その何が悪いつてんだよ。

更に言えばこのメインはあくまで鬼龍院先輩だ——外野があまり口出しするなつての。

その肝心の当人も困惑と言うか、躊躇してると言った様子で、横で見ていた立花氏も物珍しそうにどうするのかと様子を見ている。

そして、少ししてやや落ち着いた口調で言った。

「全く。私も変わり者だと言う自覚はあるが、その私からしてもぶっ飛びそうだ」

ただ、その表情は言葉からは掛け離れる——ぶっちゃけ言えば、ワクワクしてるのが分かる。

「ただ面白い——正直、南雲や三年の堀北などを相手にする気は無かったが、お前が指定した相手は戦い甲斐がありそうだ」

「先輩の好奇心が満足してくれることを祈りますよ」

「お前の場合は嫌がらせに対する単なる意趣返しか——ならば、もつとストリートに行っても——」

「鬼龍院先輩、分かり切っていることを尋ねるのはどうかと思いますよ」

この台詞には俺じゃなくて坂柳が言い終わる前に反応した——間髪入れずなんてもんじゃない速さに見えない所で事が動いているのが窺える。

ま、それ直ぐに分かるか——その辺りも含めて軽く打合せし、詳細はまた後日と言う事で解散した。

水曜日の朝——学校の掲示板にとあることが挙げられており、クラスや学年を問わず騒ぎになっていた。

勿論、一年？クラスも例外ではない——その為、噂の中心人物が来るのを今か今かと待ち構えており、とうとうその時が来た。

「やつと来たな、嬰兒」

「おい、これ本当か？」

いち早く池と山内が端末を見せながら問い詰めて来た。

「朝っぱら鬱陶しいぞ」

「この程度の事なんて予想範囲内でしょ——それより、ここに書いてあることの真偽に伝えてくれないかしら」

嬰兒の反応も無視して堀北も掲示板に掛かっている内容について

問い詰めて来た。

『牛井嬰兒のバレンタインの返礼は豪華景品がある』

の見出しに続き、具体例として『100万円のダイヤモンド』などの写真と宝石販売のリンク先が添付されており、その他にも学生の身分ではありえない高級品の数々が載っていた。

「へえ」

「へえ、じゃないでしょ——既に学校中が大騒ぎになってるわ。それで本当にこんな事をするつもりなのかしら？」

「もしそうだとしたら何か問題あるのか、貰ったならホワイトデーに返すのは至極当然だろ」

「何事にも限度があるでしょ——学外ポイントがいくら残ってるか知らないけど、これじゃ景品を巡っての争奪戦になるわよ」

「だろうな。で、ちなみに堀北はどんなチョコを用意してるんだ？」

「……私はこんな低俗なのに興味ないわよ」

「別に俺には言ってないだろ——渡りたい相手が居たりしないのか？」

「しつこいわね。居る訳ないでしょ——分かり切ってることなんて一々聞かないでくれる」

堀北の即行の否定に？さもあらん”と言うのが大半だったが？詰まらない”や？がっかり”と言った反応を示す者も居た。

中でも一番落胆してる須藤の肩に本堂が手を置いて無言で慰めた——その一方でバレンタインの話題はまだ終わっておらず、今度は堀北が攻勢しゅもんに回る。

「そう言う貴方は貰いたい本命はやっぱり一之瀬さんかしら？」

ここで肯定するなら、騒動になる前に話は終わりに出来る——そんな魂胆を隠そうともせず、適当な答えやぐらかした場合は例え強引にでも認めたとの言質に変換するとの腹積もりであり、兎にも角にもこの場で終わりにすることを望んでの問いだった。

そして堀北とは別に櫛田や軽井沢は、嬰兒が内容を曲がりなりにも認めて、より権力を行使するような展開になって欲しかった。

(やっぱり腕によりかけての方がいいかな、それともシンプルなのが

いいかな?)

櫛田としては景品云々よりも嬰兒が気に入り、より背後の者達に近づけるチャンスに繋ぎたく、

(100万とかじゃなくて、もっと高い金額になる方がインパクトは大きいよね)

軽井沢はより騒動が大きくなる方向にと堀北とは真逆の展開を望んでいた。

それ以外の女子たちも嬰兒の返答次第で大金が入って来るかも知れないと、打算全開の興味が湧いており、男子は金で釣るとは卑怯だと非難の視線を向けていた。

そんな中で嬰兒の口から出た言葉は――

遊ぶ金、欲しさに〇〇②

「やるとしても、お返しは一人か二人に限定——それ以外は無難に返すか、そもそも断るかするかな」

「……………つまり景品を巡って競争でもさせると?」

堀北の心底軽蔑したようなニュアンスに対しても嬰兒は何でもないように言う。

「別にホワイトデー目当てでチョコをなんて珍しい話でもないだろう——目的が何であれ誠意を尽くしてくれなら、俺の方も相応の礼をするのは道理に叶ってるから問題も無いだろう」

全く否定する気はなく、寧ろ積極的に推し進める気満々であり、嬰兒本人からも面白そうだと言う雰囲気を感じそうともしない。

これには噂を流したのは嬰兒自身なのかと勘繰りたくなり、聴けば答えてくれるそうだがその事自体に最早意味はない。

嬰兒が大金に変わる物を用意すると肯定した時点で、多くが釣られるのは間違いない——特に卒業間近の三年生たちは喰い付いて来るだろう。

(まったく、よりにもよってこんな時期に兄さんに迷惑掛けるかもしれないなんて)

先の合宿の際の騒動を超える事態になるのも想像し易く、あと二か月もせずに卒業だと言うのに一体何のつもりなのか?

そして他学年の事もだが、目先の?クラスの面々からも釣られているのが早速出て来てる様で少々頭痛がしてきた。

「ねえ、嬰兒くん。決めるのってやっぱりコンペでもするの?」

「それだと一度は受け取って食べるよね。味の好みとかも訊いていい?」

「断るかもって言ってたけど、基準とかあるの?」

嬰兒が開き直った為か、女子たちも下心を隠さず堂々と質問してくる様子が男子たちは嫉妬とは違う複雑な感情を抱き見ている。

ただ全員がそうではなく、距離を取る女子も居る。

そんな様子を無言で見ている綾小路は、

(?クラスでこれなら、他も同様に大騒ぎだろうな)

と他所の様子を想像しながら、更に先——嬰兒が持つて行きたいと言っていた先の展開に対してどうするべきかと思案しようとした。

「ねえ、きよぽんはやっぱり坂柳さんだけだよね」

「それはそうでしょ。他の娘たちから貰うなんて駄目だよ」

そこに長谷部と佐倉がやって来て、茶化すように訊いて来た。

「……………二人はいいのか？」

綾小路は嬰兒の方に視線を向けるが、あっさりとした答えが返ってきた。

「いやいや、倍率高そうだし——何より」

「うん。別にそんな高価な物は——」

「ねえ、嬰兒くん。劇団の人をこの学校に来て貰うってのもあり？」

佐藤の発した台詞に佐倉は反射的に顔を向けた——勿論、佐倉だけでなくクラス中の全員が注目したが。

「いや、それは流石に予算オーバーになるんじゃないか——トツプスターなんかは引く手あまただろうし」

「でもさ、嬰兒くんだったらねじ込めたりとか出来そうじゃない？」

「悪いけど我儘が過ぎるようなのはちよつとな」

「だったらさ、もうちよつとグレードの低いのなら、なんとかあったりする？」

「そんなに観たいのがあるのか？」

「うん。だってさ、この前の坂柳さんの宣伝って言うか自慢話って言うのか、ホントに観てみたいって思わされたからね」

「あー、分かるな。この学校の唯一って言っつていい欠点だもんね、外に行けないってのは」

佐藤に同調する形で話は物品から外からの招待へとの流れになっていった。これに佐倉は興味が湧き益々注目の目を強めた——その姿にグループメンバーたちは、話に混ざれるようにするべきかと思わされる。

「ねえ、愛里。愛里も来て欲しい人いるの？」

「え、あ……その………」

長谷部が単刀直入に訊くと佐倉はしどろもどろになり、

「居るんだな——ただそうなる俺達に力になれることは」

「ああ、ないよな」

幸村と三宅も察しはしたが、イベントの内容的に余り関わりたくはない忌避があった——最後に無言でいる綾小路は腕を組んで何かを考えており何かしらの妙案が出て来るのではと期待の籠った注目が集まった。

「なあ、綾小路はやっぱ坂柳ちゃん一択だよな——手作りのとか貰ってたのか？」

ただそれはグループだけではなく、それも別の意味での注目により水を差されてしまい、不満が言った相手、山内に向いた。

「な、なんだよ？」

「いや、別に」

「ああ、気にしなくていい——それと質問の答えだが、有栖とは長いことあつてないから、その手のは貰った事は無いな」

「えー、でもさ。小学校ぐらいまでは一緒だったんだろ——だったら」

「あー、そうだよな。坂柳さん、かなり素直で何より積極的だし、子供の頃のやり取りなんてすぐ想像できそう」

好き勝手に盛り上がっていくのに対して綾小路は冷めた口調で言った。

「生憎だが学校は別々だったし、何より親同士の付き合いで一緒だっただけだ——そんなしよつちゆう会えてた訳じゃない」

「へえ、そんな途切れ途切れでもあんなに熱くなっちゃえるんだ」

「はあ、それもロマンチックだねえ」

それでも話題は長引きそうであり、綾小路は？「どうしたものか」と誰かに助けて貰いたかった。

ただそんな期待も空しく皆が好奇心剥き出しであり？「自力で乗り切るしかないか」と思い直し、そして直ぐに最適解を導き出した。

「まあ、そうだよな。昔ならともかく今貰うなら有栖以外はないな――

「だから他からがあっても丁重に断るしかないな。嬰兒もそうだな？」

「適当に肯定して話題の中心を再び嬰兒に戻し、更に切り返しが来ないように念押しの一と言を発す。」

「やっぱり大事な娘からののはどんなのでも特別だし、一之瀬がもし腕によりをかけてなら超が付く高級品にも勝るんじゃないか、嬰兒の場合？」

「そう言うものなのかしらね？だったら、もつとストレートに好意を表すのが正道なんじゃないかしら？」

「惚気交じりの援護を得て堀北は再び騒動が大きくなる前に収めようとした——それは成功して皆の注目は再び嬰兒に向いた。」

「何度も言うが一之瀬は知り合いに似てるっただけで、そう言う目で見てる訳じゃない」

これに櫛田と軽井沢は反応し、

「じゃあさ、嬰兒くん的にはどんなのなら嬉しいの？」

「お金目当てがOKなら、他のでも全然だよね？」

より直接的に突っ込んで来た——内容的に引く者も居たがそれを差し引いても興味が勝り、どこまでのものが飛び出して来るのかと期待が高まっていく。

「そりゃ、美味しいのが大前提だろ——それで俺好みであるならビターチョコとかがいいかな」

「へえ、苦みのある大人の味がいい訳か」

「ちよつと気取ってない？」

「それはそっちの好きに取ってくれていい——と言うか、あくまで俺の好みだっというなら」

「嬰兒がひと呼吸置いて、より深みのある雰囲気醸し出しクラス中が身構えた。」

「欲しいのものをどれだけのものを注ぎ込めるかか——それが感じられるだけの？なにか」があればケチ臭いことなんて言わずに本当に欲しいものを返すかな」

つまりはこれが言いたかったのか——全員がそう思った、そして更

に深読みした者達は嬰兒が積極的に動くには申し分ないものだ、今回の件の動機を悟ったのだった。

「そう。それってホワイトデーじゃなくてもいいってことかしら？」

堀北は先程までとは違うニュアンスで訊く——これまでに出て来た嬰兒の情報から、自分にとつての最大の利益になることへの下地を作ろうとしていると、更なる深読み（自分好みの解釈）に達したようだ。

「それを求めるなら——ただ出来る限りは形式を守って貰える方が助かるかな」

この返しに堀北は参加するだけの意義があるかとの思いが芽生え、見ていた者達の数人には面白くない思いが芽生えた。

「そういう意味では一番無難なのはやっぱ一之瀬かな——それとも誰かの命令でCからも貰えたりするのかな？」

的を射たような空気の中で、嬰兒はさらに茶化すように爆弾を投げる——それに堀北は流石に頭が痛くなって来たのか、こめかみを抑えた。

「ちよつと……」

「そんな顔するな。あくまでかも知れないって話だ——それに順当に考えれば積極的になるのは上級生だろうしな。特にポイントのないようなのなら、それこそ手作りが期待できそうだし」

さり気なくのつもりなのか、ちやつかりと要望を述べ、シリアスになつていた空気は再び下世話なものに戻つたのだった。

そして誰がやったのか、この情報は瞬く間に拡散されチョコの材料や研究に関するものがあつという間に底を尽きることになった。

さて昼休みになると想定通りに質問攻めだ……いや半分は要望を言いに来ただな。

やれ、このブランドのがいいとか、物品じゃなくてもOKなら此処までのはいいかとか、兎に角欲望剥き出しにやって来る女子たちが後

を絶たない——実に面白い。

「あのさ、お札にここまでしてくれるなら、小さいのでいいから——」

「すみませんが、それをするとキリが無くなるから丁重にお断りします」

イベントにかこつけて、今からアプローチを掛けてくる輩も想定内だ——ただ中にはそれも見越して俺へのアピールを狙って来るしつこいのも居た。

名前は確か、二年？クラスの山中だったか。

そして今、南雲会長とべつたりな先輩がいる。

「はじめましてだね、私は二年Aクラスの朝比奈なずな」

「これはどうも。ご丁寧」

さつきまでと違い落ち着いた感じで筋を通すと言った空気を纏っていたので、俺もそれに応じるよう心掛けたんだが、

「ふふふ。別に畏まらなくてもいいよ」

笑いながら気さくに接してきてくれた——ラフな外見は相手を委縮させない配慮だったりするのかね。

「ま、警戒するなつても無理な注文か——ならそのままでもいいから話しても？」

そんな推察をしながら見てみると朝比奈さんは苦笑しながら続けた来た——見た目とは裏腹に義理堅く、相手を立てるって評判は本当のようだな。

「これは失礼しました」

素直に頭を下げると、やっと会話が出来ると言った感じで口が開かれた。

「いいよ、いいよ——ただでさえ大変な立場なのに、今じやもつと大変だろうしね。ホント、神様もちよつとくらいは休ませてあげればいいのかにね」

「先輩も神様を信じてる口ですか？」

「まあね。もつとも私は故郷の神様だけ」

そう言つて神道の『お守り』を取り出した——用意のよさから芝居

も一瞬疑う、そんな感情も湧いてこなかった。

大事にしているのは間違いないと、心が言っている。

「俺も信仰の押し付けとかはしてませんからご安心を」

「そりゃ良かった——私も信じてるって言ってもそこまでのめり込んでいる訳じゃないしねえ、なんて言うか精神的支柱？持つてると安心するって感じで」

「元来、神との付き合いなんてそれ位が妥当ですよ」

「じゃ、君も同じ感じ？」

「ええ、その通りです」

「そっか」

朝比奈さんは少し嬉しそうにしながら、ひと息ついて変わらぬ態度で続けて来た。

「あんまり長話もするのなんだし単刀直入に訊くけど、今回の件つてまた雅にひと泡吹かせる為にやってるの？」

南雲会長と近いと言うのも知ってたので探りに来たのも想定内だが、ニュアンスからして妙な期待感を感じる——俺に倒して欲しいのか、それとも冗談で済ませたいのかは判断が付かないが。

だから礼に欠くが、ここは質問で返すかね。

「どういった論理の飛躍でそんなことに？」

「ああ、ごめんね。説明不足だったね——君の本命つて一之瀬帆波さなんだって話じゃない」

「つまり南雲会長も一之瀬に入れ込んでると？」

「まあね。一年の中では一番のお気に入りみたいだよ」

「よつて来る女には不自由してないとの話ですが、もしかして本気つてことですか？」

「さあ？それは私にも分からない」

態度はチャラけたものだが、しつかりと誠意を見せてくれるか——こうなるとまた礼を欠くようなのは出来ない、全くやり辛い人だな。「まず俺に本命は居ません——あくまで一之瀬は知り合いに似てるだけ、それ以上の思い入れはありません」

のでこつちもどつちつかずじゃなくて、ハッキリとした回答を示

す。ついでにダメ押しも付けておく。

「ちなみにその知り合いも好きではありませんが、ラブじゃなくてライクの意味ですから、より明確に言えば尊敬に値する強者つわものですね」

前にも思ったがここは戦士と言いたいな。

「尊敬する強者か……君も色んな意味で凄いと思うけど、そこまで言い切っちゃうとちよつと興味が出て来るね」

「知りたいと言うなら先輩も有力者うへえを目指してみますか？」

「アハハ、そこまではちよつと躊躇しちゃうかな——チョコのお礼に教えて貰うつてのは駄目？ 勿論、言つていいとこまででいいから」

「いやいや先輩もAクラスでしょうに」

と言つても良かったが、どうにも冗談で流して欲しいって顔に書いてある——初対面であんまりグイグイ行くのもなんだし、ここまでお開きかな。

「すみませんが、そのラインが何処かは俺にも分からないもので」

「じゃ、やるだけ無駄かあ」

残念だあ、みたいな態度でもうこの話はお終いと示した来た——そしてこのまま、お開きになると思つたが、

「じゃあさ、じゃあさ、もし一之瀬さんからマジ物のチョコを貰つてもそれでお終いつて事は無いんだよね？」

どうしても言質を取つて置きたい様だ。

「勿論、そのつもりです。尤も信じるかどうかは皆さんの自由ですけど」

「……………雅の事があつたから、二つ返事で信じるとは言えないかな。あいつもこの前の件までは？ 言つたことは守る」って信用がかなり高かつたからねえ」

「ちなみに誓約書を作れつて言うなら流石にお断りします——決めた相手が一之瀬だった場合は難癖付けられちゃ堪りませんから」

「ハハハ、結局は最有力候補つてことじゃん——雅、やつぱり黙つてないと思うよ」

そう言つて去つて行く朝比奈さん。忠告と取るべきか捨て台詞と取るべきか、どちらにしてもここでの話も直ぐに広まるだろう——そ

してこの手の話は大概の場合は放って置いたら悪い方向に行ってしまうのが常だ。

欲得ずくで動いて要求がエスカレートしていったなら、より直接的に俺を抑え込もうとしてくるか。

或いはハッキリと警告してくるか——そうなったなら交渉の余地も生まれるかな？

それとも俺の望むような戦場でも用意してくれたりするのかな？

木曜日の夕方——噂は更に広がっており嬰兒も然ることながら、注目されている生徒がもう一人いた。

「ねえ、一之瀬さん。こう言うデコレーションどうか？」

「いやいや見た目よりも味を重視した方がいいと思うし、この後試食会でもしない？」

「にやははは……ごめん、私そう言うのはちよつと疎くて……」

他クラス、他学年の女子たちがひっきりなしにやって来ては一緒にチョコを作ろうと持ち掛けられ、丁寧に断っているものの流石に辟易した顔になってしまう。

「いやいや、一之瀬さんの手作りなら絶対だつて！」

それでも引き下がる気のない輩も多く、

(そんなに何が欲しいんだろう?)

と僅かに興味を抱くこともあった——ただ、ひとたび肯定の兆しでも見せようものなら際限なく喰い付いて来るのも想像に難くないので、絶対に触れてはならないと可笑しなジレンマも抱えてしまい、更に精神的に疲れてしまう。

「あの先輩方……休み時間ももう終わりますし、そろそろお引き取り願いませんか」

見かねたのか、本人も迷惑なのか、神崎が時間を指しながらの正論を持って事態の收拾を試みる。

「あー、そっか……」

「……仕方ないね」

「一之瀬さん、また後でね」

集まっていた女子たちも解散し、この場は何とかなつたがまた来る気は満々であり、ひと息つく気にもなれない。

一之瀬のみならずBクラスの殆どの者が同じ気持ちであり、そんな皆の心情を代表するように神崎が口を開いた。

「全く、牛井のやつも面倒な事を」

「そうだよ。一之瀬さんもとんだ災難だよ」

それに呼応して白波が一之瀬を気遣う仕草を見せたが、当の一之瀬は素直に喜ぶ気にはなれなかった。

「にやははは。今度ばかりは私も嬰兒くんに文句言いたいかな」

しかしそれを顔には出さず無難な本心で応えた——ただそこに異をぶつきらぼう声が出た。

「でも牛井くんも太っ腹だよ。100万のお返ししてくれるなんて——本当に一之瀬さん、欲しい物とかないの？」

「なに言ってるの。一之瀬さんがそんなのに釣られる訳ないじゃない！」

姫野が勿体なくないかと言うニュアンスに顔にも書いてある——これに一之瀬とうにんではなく白波が速攻で異を唱えた。

「えー、でも折角くれるって言うならあやかりたいじゃん——言ってる本人だって、そんな程度の事なんて織り込み済みでしょ」

「だったら、姫野さんが努力すればいいじゃない。一之瀬さんを巻き込まないで」

「欲しい物あるかって聞いただけじゃない」

余程不満があるのか白波のテンションは上がっていく——それを見て姫野は辟易した顔になるもそれ以上をするつもりは無いようであつさりと引いた。

「にやははは。あんまり喧嘩しないでね」

一之瀬がやんわりとお茶を濁して、どうにか話を終わる——と思われたのだが、その一之瀬の内心も複雑な物があった。

(……欲しい物か)

一之瀬は何かを思い出すように考え始め、意味のない妄想が湧いた。

(もしもあの時だったら)

自分がBクラスであろう理由——その過去を思い浮かべながら、牛井嬰兒が居たならば自分は頼つただろうかと……………

(……………いや、やっぱり無理かな)

何よりもこんな事は考えるだけ不毛だ。既に過ぎたのだから、やり直しなど効かない。

思考を打ち切り、今をどうするかに切り替えなければと一之瀬はバレンタイン騒動の先を思い浮かべ、

(やっぱりなんか無関係じゃいられない気がするなあ……………)

と不安と難儀さに頭を抱えたい気分になるのであった。

いや、なんとも懐かしい感じだなあ。

放課後になり茶道部の部室で椎名にお茶をたてて貰いながら、ただひとつ違う——他の部員も居て一対一じゃないことにこの席の目的は窺い知れる。

さてどんな風に進んでいくかね？

「どうぞ」

そんな風に思い耽ってたら、椎名がお茶を出して来た——湯気が立ち、あの時よりも良い香りが鼻をくすぐり何より気を落ち着けさせる。

ではここは礼節に則って、ゆっくりとお辞儀して丁寧に器を持ち回しながら音を立てないよう味わって飲ませて貰う。

「結構なお手前で」

「恐れ入ります」

椎名もお辞儀して周りに居る部員たちも俺の反応に上々と言った面持ちになった——さて本題はここからだな。

「あの時よりも渋みも温度も飲み易くなってる——これも先輩方の指

導の賜物ですかね？」

「いいえ。椎名さんの呑み込みが早いのと、何より相手に合わせての観察力が凄いゆえですね」

上級生、多分茶道部の部長さんが如才なく答えてくれる——こうした落ち着いた雰囲気では話せるのは滅多にないから自然と気が緩みそうになっちまうかね。

そんな感じを隠さずに出してみると透かさず口が開いて話を続けて来る——目敏いのは椎名の専売特許じゃないか、それともこういつたので鍛えられたのかな？

「牛井くんもここのお茶が気に入ってくれたようで良かったわ——ひいてはもつと上達出来るなら、更に美味しいお茶が飲めると思わない？」

「売り込みが中々上手ですね」

「誉め言葉と受け取って置くけど、ストレート過ぎるのも時と場所によるわよ」

なんとも手厳しい。それでいて媚びずに毅然とした態度で来るのはリサーチがしっかりしてるからか——まず間違いなく進言したのは椎名だな。

「部長の嬰兒くんは回りくどいのは好きじゃないようですが、場に合わせて言葉は選んだ方がいいかと」

「では進言通りに質問に答えますと、美味しいお茶が飲めるのは素直に嬉しいですね」

責められ続けられそうなので切り返すと椎名は笑みを浮かべた。

「はい。私も出したお茶が喜んで貰えるなら嬉しいです」

「出来れば、こんな風にもつとお客さんに出すなりのお披露目の場もあればモチベーションも上がるんだけどね」

椎名に続くように発した部長さんの言葉に部員たちが肯いている——言われてみれば、この学校に文化祭みたいな行事もないし、茶道の大会もあるらしいが聴いてる限り参加してる訳じゃないようだ。

部員である椎名も放課後はよく図書室に居る——本好きってことで大して気に留めてなかったが、あんまり活動予算も無いのかね？

「お披露目ですか……この学校の校風を考えると寧ろ正面衝突しそうですね」

「そうなのよね——基本が外部への接触禁止だし、部として大会に出るなら認められるけど、見ての通り弱小だしあくまで生徒自身の実力を高める一環って方針なのよね」

「不用意に外部と接する機会は設けたくないって訳ですか」

「ま、多分そんな感じでしょ——もっとも例外もあるんだって知ってるけど」

「すみませんが、俺に何をさせたいのか、いい加減話してくれませんか——大会出場したいとかなら相手が違うと思いますが」

高額報酬でいいなら上に働きかけてくれって持って言いたいのか？

だとしたらそれは明らかに出来ない——いや、してはいけない類の相談だ。断るなら早くした方がいい。

「そうかしら——結構な大物とコネがあるのは間違いないし、入手困難なチケットも確実に取れる。大スターなんかもこの学校に呼んで貰えるって噂も耳にしたんだけど？」

ああ、なるほど。そう言う事か………

「……そちらも大概回りくどい方法を考えますね」

「部としての実績がなきゃ、この手の話は意味が無いでしょ——上に話を持って行くにも説得できる材料がある方がいいに決まってる」

頼む以上は誠意を見せるか——これまで堂々と来た連中の中では一番印象がいいな。ならば俺も腹を割ってじゃなきゃ失礼かね。

「先輩、俺は最初からギリギリの立場にあります——表立って下手な口実を与えれば即座に処分されるし、疑惑を持たれたってレベルで何されても全くおかしくありません」

まず俺の立場を明文化する——当たり前ながら場の緊張感が一気に高まった。その中で比較的冷静さを保ってるのは案の定、椎名ひよりだ。

「何かがしたい、欲しいってのは大いに結構だし、その為に俺が有効的手段だと捉えるのも当然です。俺自身がそう示してるんですから――

—だからこそこれは念頭に入れてください。

俺に関わったことで、この先何があっても俺は一切責任を取ることが出来ないって事を」

「……それって脅迫？」

「ある意味そうですね。その上でお尋ねしますが、この売り込みは本当に部の為ですか？」

部長さんと一緒に椎名も視界に入れて問う——総合的に考えて、打算でここまでするにしては無理がある。

茶道部員である椎名は放課後よく図書室で見かけるし、部の事に関してもそこまで活動熱心だとは聞いたことがない。

このもてなしは俺からポイントを稼いで高額報酬の権利を得てその後は、全く別の物を要求する策略だって可能性も十二分に考えられる。

そして椎名が矢面に立っていることを踏まえれば裏に居るのは誰なのかは自然と想像が付く。

そんな含みを持って椎名を見ると直ぐ察した……いや最初から想定していたようだな、いつも通りの落ち着いた顔のまま悠然としている。

と言うよりもなんだか目的を話したって顔に書いてある気がするな。

「嬰兒くん、仕方ないかも知れませんが穿ち過ぎですよ——そんな風に裏を探ればかりいてはいくら何でも疲れてしまいますよ」

「つまり龍園は関係ない？」

「いいえ、龍園くんも嬰兒くんが仕掛けて来たとあって、また何か？大きなもの”への反攻じゃないかと疑ってます——実際に私もその疑念には同意しますので、先輩方に協力して貰って真意を知ればと」

「そつちも大概回りくどい真似な」

「ストレートに訊いてもどこまで話せるかは分かりませんから——せめて嬰兒くんが本気なのか、遊びなのかは把握しておきたいので」

言いながら気品ある御淑やかさが抜けて、段々と険しいニュアンスに変わっていく——それだけ切実な心情であることを示してるから

先輩たちへの協力を得られた訳か。

何よりここまですることへの？心当たりは無いとは言わせないと無言で語ってる……これには俺は否定も肯定も出来ないな。

椎名は無言のまま？また大掛かりな企み”をしてるのか？”と言っている……ように見えるな。

体育祭での事がしつかりとぶり返してるな——見えない所での攻防に巻き込まれるのか、ハッキリとした答えが欲しい、それがCクラスの総意と見て間違いないだろうかね。

名目上は敵対してる訳だから、安心させてやる義理なんて無いんだが、今回はそう言うのは望んで無いし何より美味しいお茶もご馳走になったし、さっきの通り誠意を見せるかね。

「ぶつちやけて言えば、この件は噂が独り歩きした類だ——ただ貰ったからには相応のお返しって言うのも嘘じやない。常識的に見て問題があるような物は選んだりするつもりはないよ」

非常識なやり取りをするつもりは無いと遠回しに伝えたつもりだが、どうやら椎名には伝わったようで、少しホッとして表情が緩んだ。そしてそのまま、

「そうですね。ならば私も参戦を考えて見ましようか——さっきのお茶も気に入ってくれたようですし、抹茶味は好みですか？」

「いや、その手のは食べたことが無いからなあ——でもちよつと興味あるかな」

「ちよつと、ちよつと。神聖な部室でイチャつこうとしないで——こつちも混ぜなさいよ」

ゆるゆるの空気の元で緩い談笑が始まってしまった——うくん、これも青春の醍醐味かって感じていいのかな？

啄んで○○○

同じ頃、綾小路はカフェで一人の女子と向かい合っていた。

「今日はありがとう。付き合って貰えて」

その女子、クラスメイトである王美雨、通称『みーちゃん』はただどどしくお礼を言う。

「いいさ。それで相談って言うのは？」

対する綾小路の対応はあっさりしたものであり、その堂々とした様は何も後ろめたくないぞと周囲に語っている。

坂柳有栖以外の女子と二人きりで放課後のカフェ——ゴシツプネタとしては古典的であり興味をそそれそうだが、綾小路は開き直ることで乗り切るのに最早慣れてしまった。

ただ王の方はそうでもなく絶え間ない注目に緊張が増していき、もつと別の場所が良かったと後ろ向きな思考が回っていた。

(そんなことしたら返ってあらぬ疑いが掛かるだろうに)

王の思考を推察しながら、綾小路はもう少し待つべきか、もしくは自分の方から話を進めて行くべきかを思案する。

それは結果として王を待つことになり、緊張感に耐えられなくなつた形で王が口を開いた。

「あ、あのね。平田くんのことなんだけど……その、色々教えて欲しくて」

「軽井沢と今どうなってるかってことか？」

「う、うん……こう言っちゃなんだけど、軽井沢さんすっかり嬰兒くんの方に夢中みたいだし……」

「もともと本気じゃなかったってことだろ——単に平田が押し切られて付き合ってただけで。と言うか、最早完全に自然消滅してるよな」

綾小路は淡々とした口調で事実を当たり障りのないよう伝えていく——元々が軽い女と言う見掛けであり、本人もそれを通した来たのだから言ったところで含むものはなく、王もそれならばと意を決した表情になり勢いに任せて言った。

「じゃ、じゃあさ……平田くんって今、好きな人とか居ないってことだよね？」

「少なくともオレは聞いた事は無いな」

「そっかあ」

王の昂った気持ちを落ち着くのを待っていないながら綾小路は思案する。

(ここで好きになった切っ掛けでも訊いてみたいが……)

そうしたら綾小路と坂柳の馴れ初めに持つて行かれる可能性もあり(別にそうしても話は用意しているから問題はないが)余り突っ込んだことを話すのは気が進まない。

かと言つてこのままの状態だと余り会話が進んでいく気がしない

——あれこれと考えながら会話の方向性を固めて口を開いた。

「えーと、みーちゃん……いや王は——」

「あ、みーちゃんでもいいよ。皆そう呼んでくれてるし……あ、でも坂柳さんの事があるならそのままでも」

「有栖はそんな見の狭い女じゃない」

「あはは、即答しちゃんだ。素直に羨ましいなあ、二人みたいな関係」

そのニュアンスには自分も平田と同じ様なりたいたいと言う願望が表れており、綾小路は狙い通りに会話の流れが出来たと続けていく。

「みーちゃんも平田とそうなりたいと」

「えーと、まあ……その……」

一気に恥ずかしさが溢れ、もじもじとしてしまう姿は見る者にとっては眼福であったが、綾小路には全く心に来るものは無く今回の話の核心だと当たりを付けた事を切り出す。

「嬰兒が仕掛けたバレンタイン騒動に乗って平田にチョコを渡したいんじゃないのか？」

ついでに言えば告白に持つて行き、あわよくば正式な彼女の座に納まりたいと——ここまでストレートに言うのは避けたが、どこまでの事を望んでいるか測るには十分だと思えた。

「い、いや……勿論平田くんが喜んでくれるならだけ……その、軽井沢さんともまだ——」

「繰り返すがもう自然消滅も同然だし、二人が冷え切ってるのは火を見るよりも明らか——遠慮することはない、何の因果か巡ってきたチャンスは有効活用した方が絶対にいい」

「~~~~~」

綾小路の積極的に推しに王は顔を赤くして縮こまってしまい、寧ろ逆効果のように思えたが、

「すまん、ちよつと無責任が過ぎた——オレと有栖がバツと違ってなんとかあった口だからって、二人も同じ様になるとは限らんし今は聞き流してくれ」

自らの惚気を入れて引いて見せたことで、王の中に恥ずかしさから羨ましさと嫉妬の感情が湧いてそれが顔にも表れた。

「もう。自慢話が見たいなら、もつと役に立つのを教えて欲しいんだけどな」

「とは言われてもな、オレと平田じゃまるで違うからな——オレはあそこまでモテモテになった事なんて無いからな。どっちかと言うと恋愛話なんて疎い方だし」

「今度は嫌味？」

「端的な事実だよ。実際に有栖の事もこの学校で会うまでは忘れてたぐらいだし」

「むう〜」

それは正に運命だ——とやっぱり恋愛の自慢話を聞かされてしまい、なんでこんな話になったのかと今更ながらに相談したのは間違えたのかと思い始めてしまった。

「ただ事実だけを見て言うなら、焦らずにじっくり行くのがベターだと思うぞ。」

軽井沢の件は例外だとしても、本気で付き合うとなれば真剣に悩むだろうしな」

「そ、そうだよねえ」

唐突に話が戻り、ペースが乱れてしまう。

結局のところ、王はどうしたらいいのか——寧ろそれを教えて欲しかったのだが、会話の主導権は綾小路が完全に取っているのでどう言

えばいいのか計りかねてしまう。

「平田は真面目な奴だ——決して不義理は働かないだろう」

正に綾小路の狙い通りになり、王の内心を推し測りながら今がその時だと一気に畳み掛ける。

「そして今はちよūdい状況が来てる——嬰兒の事に乗っかってチヨコを渡しても乗りのひとつつてことにも出来るし、いざ本気で告白しようとした時にも良い経験になるんじゃないか」

「こゝ、告白って……」

「まず間違いなく軽井沢も嬰兒にチヨコを渡す——その当たりには流石にハッキリとさせてもいるだろう」

その事は言い含めて置いた方がいいと内心でしつかりと誓い、王の気持ちの後ろ向きに揺れないように更に発破を掛ける。

「最終的には平田が決めることだから、みーちゃんが振られたとしても精々愚痴を聞くぐらいしか出来ないが、今年のパレンタイムでやってみる分にはリスクは少ない」

綾小路は一度言葉を切り、脳裏に？誰か〃を思い浮かべて自論を展開する。

「ぶっちゃけ言えばオレに相談してくる辺り、相当気持ちが溢れて来てるんだろ——だったら少しでも前向きになった方がオレはいいと思うぞ、絶対に」

この私情100%の意見のろけを聞いた王は複雑ながらも決して嫌ではなく、寧ろ気持ちがさっぱりした感覚に包まれた。

気持ちを通じ合っているお手本とも呼べる相手——それをハッキリと見せられ、やはり自分も？彼〃と同じ様になりたいと再認識させられた。

「うん、ありがとう。綾小路くんのお陰で前を向いてみたいって思えた——相談して良かった」

「役に立てたようなら何よりだ」

その時、綾小路の端末に着信があり相手を確認すると、

「あ、みーちゃん済まないが——」

「うん。坂柳さんだよね——私の方はいいから行ってあげて」

「ありがとう」

綾小路は会計を取り行く——その後ろ姿を見送りながら王は思った。

(ごちそうさまでした)

そんな視線を感じなくなる程度に離れた綾小路は掛かってきた登録されていない電話番号に警戒感を抱きながら出る。

「……もしもし」

相手からの返事はなく無言の状態が続く——その中で相手が誰か推察を始める。学校指定の端末の特性上、外部からの連絡が入ることはまずない。

となると学校の敷地内に居る何者かと言う事になるが、十中八九？あの男”からの差し金だと言う直感が働いた。

(ただそうなると嬰兒のアプリ影響もまだ捨てきれないか)

綾小路の端末には嬰兒が入れた特注のアプリがあるが、それで基本設定が変化したとするのはまず考え辛い、嬰兒としてその程度の些事で追及を受けるのはよしとしないだろうから。

されど嬰兒のバックに居る者達の協力でも得たなら話は分からな——とは言え、そこまで論理を飛躍してしまうと纏まる考えも纏まらないので一旦は保留にするしかない。

まずは相手の出方を待つ、が30秒経っても何も言っていない。

「何もなければ切るぞ」

「綾小路清隆」

やっと相手の声を確認したが、全く聞き覚えの無い声だ——ただ声のトーンからして大人とは思えず、生徒からと思いき返す。

「あんたは？」

再び数秒の沈黙の後に通話は切られた——単に名前を呼ばれただけで一体何がしたかったのか？

(嬰兒が騒動を起こすのに便乗してオレを退学させる腹積もりなのか？)

意図が全く分からず、現状と照らし合わせてみるも無理矢理感是否

めないものの、綾小路の方でも嫌な状況が本格的に動き出したと認めざるえない。

(ただどうせなら嬰兒と手を組めるような展開が理想的なんだが)

さて日付が変わり金曜日となり今日もバレンタインの話題がと思ったが、意外な形でクラスは盛り上がりつついた。

「平田くん。ハッキリさせとかなきゃ不味そうだからさせろね——私たちの関係、白紙にしよう」

俺が入って来たのを見計らって軽井沢が堂々と別れ話をし出した——周りの様子から類推すると？大事な話があり、俺が来たら話す”みたいな感じで引つ張ってみたいだな。

内容も怖いとはいっても意外に思う者は皆無だ。

しかし最早終わってるって感じだったのに何で態々……って決まってるか。

「うん、そうだね——元々お試し期間って話がズルズルと行っただけだったし、何より」

平田の方もあっさりとした感じで、さり気なく俺に視線を送る——台詞といい少しは意趣返しみたいなのも含まれてるのかね、演出か本気かは知らないけど。

「そっか、そうだよ。分からない訳ないもんね」

軽井沢の方も淡々としたもので俺の方に顔を向ける——俺をダシにしての芝居は別にいいけど、勝手な解釈での修羅場はちよつと考え物だぞ。

ただ軽井沢はお構いなしに俺に近づいて来た。

「嬰兒くん。一之瀬さんはあくまで知り合いにってるだけなんだよね？」

「ああ、そうだが」

「だったら彼女の席は空いてるよね——あたしも櫛田さん同様にその

席に座りたいんだけど?」

「尻が軽いにも程があるんじゃないか?」

「それ位言わせるのを見せてくれたんじゃない——だったら、もうまどろっこしいのは無しで行きたい」

真正面からの宣言か——演出としては面白いな。しかしだからと言つて受けるかどうかは話が別だぞ。

「上を目指す覚悟決めたのは分かったが、何も色恋まで混ぜなくてもいいんじゃないか?」

「あれもこれも欲しがつて手に入るほど甘くないでしょ——丁度いい機会が来たから、あたしも本格参戦することにしたの。実際問題、嬰兒くんつて色恋どころじゃないでしょ?」

「悪いが答えられない——それしてこれ以上の会話は遠慮願いたいんだが」

「うん。それでいいよ——ただチョコは楽しみにしててね。思いつ切り腕を掛けるから」

強制的に切つてみたがあつさり引いて、しかもウィンクしながらのアピール——榎田とは違うあざとさがあり、ちよつと色つぼくも感じられた。

その氣に当てられた奴なんかは「権力の犬め」みたいな嫉妬の目を向けられる——ま、実際にそうなんだから何も言う事は無いけど。

そして出来ればこれで終わつて欲しかったんだが、黙つてられないと前に出て来るのが一人。

「ねえ、軽井沢さん。嬰兒くんに助けて貰つたからつて調子に乗つてない? 目先の欲に釣られて、あんまり軽率な事言うのはどうかと思うけど」

「なあに、榎田さん——あたしが誰とどんな関係になろうが別にいいでしょ」

「えー、私の気持ち知らない訳ないよね? 流石に後から出て来て酷いんじゃない?」

「おやおや、榎田も氣に入らないのを隠さず一触即発の空氣——俗に言う修羅場が展開され始めた。」

全く朝っぱらから。

ここはやはり俺が間に入って仲裁するのがベターか——と思つてたら、更に第三者のしかも女子が出て来た。

「二人ともいい加減しなさい——もう直ぐホームルームよ」

「なに、堀北さんもやっぱり参戦する気？」

女三人による女々しい戦いになるのかと奇妙な緊張感が入るが、堀北は冷静なようだ。

「生憎とバレンタインそのものに興味ないわ——それに人の恋路を邪魔する趣味もないけど、周りの迷惑になる様なことは感心しないわ。やるなら誰も居ない所でやってくれないかしら」

ど真ん中の正論に教室中から同意だと言う空気になった——かく言う俺もいい加減に終わって欲しかったから少しホッとした。

そしていつの間にか時間もホームルーム直前になっていて……長かったんだか短かったんだか分からない遣り取りは漸くと終わった。しかし、ある程度のバカ騒ぎは想定内だが思わぬ形で修羅場が展開されるとは——まったく世の中は何が起こるのか分からないものだな。

騒々しくも緊迫した朝を迎えている？クラスに対して、Bクラスもまた騒々しい朝となっていた。

「ねえ、一之瀬さん大丈夫？」

クラスメイトの網倉麻子がぐったりとして机に突っ伏している一之瀬を気に掛ける——いつもなら苦笑しながらも返事があるのだが、今朝ばかりはある意味無視に近く何も反応がない。

「……………」一之瀬さん？」

様子からして心配になり身体を摩ろうかとした時に緩慢としながら顔を上げた一之瀬——その顔は見るからに疲れていた。

「あ、ごめん。聴こえてなかった——何かあった？」

「……………」

最早、珍しいを通り越した姿に心配する者たちは増えていき、また原因も容易に想像が付く為に「元凶」に対して含むものが込み上げても来た。

「一之瀬さん、調子悪いなら休んだ方がよかつたんじゃない？」

「にやははは——それもちよつと考えたけど、そうしたらしたで部屋にどンドン押し寄せて来そうな気がしてき」

疲れたニユアンスで心情を語る姿に、それもそうだと納得してしまふ面々はこうなつては原因をきつぱりと断ち切るしかないんじゃないかかと共通の解決策が浮かぶ。

それを代表するように神崎が言う。

「一之瀬。もうハッキリと牛井にチョコ渡す気は無いと宣言したらどうだ——この調子なら土日をもつとひっきりなしに押し寄せて来るぞ。それじゃ、いくら何でも身が持たないだろ」

そう。牛井嬰兒のバレンタインによる豪華返礼——それを確実にしようとは本命と称される一之瀬帆波に取り入ろうとする女子たちによる誘い。

それは日を追うごとに増えて、内容も一之瀬本人の意思を無視して迫つて来ており、ここ数日の一之瀬は文字通りの意味で休む間がない状態になつていた——口にはしてないがストレスも当然溜まつている様でよく眠れていないのも分かる顔色であつた。

「もうさ、ここまですで来たなら先生たちに直談判するのも有りなんじゃない？みんな勝手すぎるよ、一之瀬さんの都合も無視してさ」

「それは牛井に関してもそうだよな——こんな事になることぐらい、アイツなら予想が付きそうなものだ。何を考へてるのかは知らないが、ちよつと配慮がなさすぎる」

学生同士の苦い青春——もうそんな言葉では流せない、Bクラスの殆どは憤りを感じており、出る所に出て騒動の収束をと盛り上がりを見せて来た。

「ちよつと、みんな……そんなことしたら返つて騒ぎが大きくなりかねないよ。私は大丈夫だから」

「いや、その顔で言つても説得力がないぞ」

神崎の突っ込みに皆が同意して肯き、一之瀬もどうしたものかと別の意味で面倒事に益々気分が下がっていく。

そんな中で解せないと言ったニュアンスで姫野が声を上げた。

「って言うかさ、こんなの誰がどう見ても迷惑じゃん——なんでそこまでされて笑える訳？もうお人好しが過ぎるってレベルじゃないじゃん」

「にやははは……そうなんだけどさ………いいものが欲しいって気持ち、私にもちよつと分かるからねえ」

少し黄昏ながらの無難な返答——誤魔化されると言う気もしたが、それ以上に一之瀬帆波の口から「欲しい」と言う単語が出て来たことが少し以外でもあった。

「ふくん。一之瀬さんもやっぱ人間なんだね」

「なあに言ってるの。当たり前でしょ」

「じゃあさ、一之瀬さんも欲しいものってあるの——勿論、抽象的なやつじゃなくて文字通りの意味での物で？」

少し興味が湧いたのか姫野の問いに熱が籠っている——それにつられてか、好奇心が刺激された面々も注目する。

ただ一之瀬本人は一変して微妙な顔に影が差して無言になってしまふ。

「え、あの……そんなに不味いこと訊いた？」

姫野としては困らせる意図はなく、改めて言った内容を振り返ってみるが問題があったと思うのは少し無理があるような気がして謝罪の言葉を出す気にもなれない。

これを見た一之瀬は重苦しく首を横に振りながら口を開く。

「ううん。そんなことないよ——ユキちゃんは何も悪くない。私の個人的な感傷って言うのかな。ちよつとそんなのに浸ってただけだから」

「え、ってことはやっぱり一之瀬さんにも欲しいものってあるんだ——だったらさ、牛井さんに頼んでみればいいじゃん。個人でそうするってなれば寄って来てる人たちだって何人かは大人しく——」

「あー、今はそう言うのは無いから。それに嬰兒くんにはお願いしたのは、物とかバレンタインとかに関係なく教えてくれるって約束してるから」

姫野が言い終わる前に勢いよく話を遮った——これにはちよつと不満が湧き、姫野の表情にも出そうになるが我慢して抑え込む。

「結局、誰にも渡す気ないってことじゃん。じゃ、やつぱりハッキリ言っちゃえばいいじゃん」

最初に話していた結論に戻し、姫野もこれ以上は話す気は無いと引き下がる——ただそれでも湧き出た好奇心は完全に消えた訳ではなく、「一之瀬の欲しいもの」と言う珍しいものは残った。

機会があれば聞いてみたい——そんな雰囲気を感じ取り、一之瀬は益々疲れた顔をしながら思った。

（やれやれ、余計な事言っちゃったな——これに関しては恨んでもいいかな、嬰兒くん？）

はて？

なにやら妙な悪寒みたいなものが背中に来たがなんだろうかね？

バレンタイン騒動とは関係なく普通に行われている授業を受けながら、ふと窓の外の鳩が目に入った——随分と久しぶりに『鴉の目鷹の目』を使い、敷地内を周回させてみるが何の変哲もない日常があり、そのまま放課後まで過ぎる。

こんな光景を戦士たち、特に『申』は守りたかったと何気なく思う一方——俺へのアピールしてくる女子たちは後を絶たず『子』が見てたなら、どんな感想を抱くのかと考えてしまう。

やつぱ「取り敢えず死ぬ」とか捻くれたことでも思うかね——どう思う、ドウデキヤプル？

「もう、こんばんはですね——健やかにお過ごししている様で何よりです」

言うほど時間は経ってないだろうに、それに俺の状態なんて逐一

知ってるくせに。

心の中でついた悪態はそのまま顔に出てると自覚するが、相変わらずの不敵な笑みを浮かべるだけ、気に食わない。

「それで、こんな人気のない所に呼びだしてまで何の御用で？」

「俺はただ散歩してただけだ」

「ほう。態々、鳥を使いルートの下見までしておいて？」

「やっぱり知ってるじゃねえか、ただこの程度で根負けする気は無いぞ。」

「最近騒がしかったから念を入れる必要があつてな」

「それならばあの噂を取り下げるとなりしたらいいだけではないですか？」

「よし、ここだ——俺は少し間を開けてから口を開く。」

「なんだ。文句でも言いに来たのか——基本的には俺の好きに使っていい金だったろ？」

「はい。犯罪を犯している訳ではありませんし、突き詰めれば問題はありません——しかし、この学校に迷惑を掛けるようなことは慎むようにとも申し上げたはずですが」

疑問形じゃなくて追及してのに込められた感情はいつもと変わらない——すつげえ不気味だが、突つ込む気にはなれない。

「これはあくまで事務的にしてるだけだと淡々とした態度が既に言ってるから。」

「ならばこちらも事務的に返すまで。」

「この学校か——だとしたら尚更問題ないんじゃないか。」

「Aクラスになる為に試験外での揺さぶりや攻撃なんかは珍しくないだろう」

「つまりこれも場外乱闘の一環だと？」

「正確にはそれを防ぐための予防策かね——先んじて騒ぎを起こして置けば、良からぬ考えをする奴を牽制できる」

「どうにも言い訳にしか聞こえませんね。それもかなり苦しい」

「このままでは帰れないか——宮仕えも大変だな」

「お気遣い痛み入ります——ので返礼として見落としをひとつ指摘し

ますと、この騒動に紛れて何かを企むのも出て来るのでは？」

それこそこの学校の醍醐味だと思うが、問題は俺と言う存在によって許容範囲を超えないかどうか——それに今はその辺を調整する上の方もごたついているだろうしな、余計な事を起こして欲しくないって直訴でもあったのかね？

「それとなく気を配ってるが、それらしい兆しは見えない——もつとも可能性があるのは生徒会長殿なんだが今の時点で何かして来ると情報もない」

「ふふふ、しっかりと配慮は行ってる——そして不測の事態が起きた際には貴方自身で対処すると取っても？」

「それで結構だよ。ただその一環としてひとつ訊いてもいいか？」

「どうぞ。しかし答えられるかは内容によりますが」

よし、ここからが本番だ。

「——この前のチケット、また来年も同じ物をもって話があるんだが前金って形で払うことは可能か？」

ひと呼吸おいて、この騒動の前に起こっていたことに対して考えたことを訊く。

この手の事で先んじて……出来れば使い切る形になれば、俺への関心は幾分か薄くなる。

バレンタインの事も半分はもう既に決まっているが、もう半分はこの問いの返答次第で変わる——無論、俺の意図ぐらい既に悟ってるし曖昧なことで誤魔化されるかも知れないが、学校への配慮って建前がある以上は答ええない訳にも行かない。

「来年度への前金ですか——それも珍しい話ではありませんが、その来年に卒業する生徒が何人いるのか。下手すればお金をドブに捨てる行為にもなりえないのは考え物ですね」

二年が史上最高の退学者を出してるのは有名だからな——南雲の気まぐれでどうなるかも分からないのが現状だ。

独裁者の気まぐれで消されるなんてザラだしな。

「いやいや、卒業後に〴〵褒美が待っているとすれば自棄を起こして変な行動を取るのも止める連中だって出て来るだろう——学校側だって

積極的に退学者を出したい訳でもあるまいし」

「物は言い様ですね——しかし学校経営への干渉まで含まれてきますと直ぐに肯くことは出来ませんね。この学校の母体はこの国ですの
で」

ひいては有力者の許可を得なきやいけないか——ハハ、最悪面倒になつて俺を消せつて言つて来るかね？

いずれにしても今の状態じゃ異能も満足に使えないし、そうならなつたで遠慮なく使い切つてから消えるつもりだ。

俺と話してるドウデキヤプルの表情がいつも以上の不敵な笑みを浮かべてる——俺の考へてることでも読みやがったのか。

別に不思議じゃないし、それなら態々言葉にする必要もない——普段は忌々しい優秀さだが使えるなら、こつちだつて使わせて貰う。

「思春期の反抗期ですか？なんだかんだと青春してるようですね」
「願いの趣旨には適つてると思うが」

そつちの意図とは違つてるかね——ただこつちにだつて不満はある、人権なんてものがない道具だとしても、それを扱う者が適当に使つて来るなら拗ねたくもなるぞ。

「ふふふ、それも尤もですね。ならば老人から小言をひとつ——若い内に経験を積むのは大切ですが、それには苦いものも含まれます」

なんだ、珍しくまともな説教でもするか？

「特に思春期は心も体も未成熟な分、とても強く残るもの——貴方が気に掛けていると噂の彼女への配慮をもう少しあつた方が良かったのでは」

間違いなく一之瀬の事だが、アイツが今苦しんでるつてか？

もつと詳しく訊いてみたい気もするが、それは完全にプライバシーの侵害と職権乱用になつてしまうしな……とは言うものの、このままでは何も出来ないし、何か具体的な情報がひとつでいいから欲しい。それをどう引き出すべきか？

「今回の事で何か無礼を働いたなら、確かに詫びは必要だな——ただお詫びの品に何を持って行ったらいいか、事のついでにアドバイスが欲しいんだが？」

「さて、個人の好みまでは……しかしそうですね、ヘアクリップやそれを連想させる類を送るのは止して置いた方がいいでしょう。では」

いつも通りに消えるのを見届け、さつき言っていたのを思い出す——意図せずして一之瀬のトラウマでも触っちゃったのか？

俺の知っている一之瀬の性格から考えると、誰かの為にした事が裏目に出たってことぐらいだが、寧ろそれが原因で今の様になったとも考えられる。

いずれにしても何があつたかはここで考えても分かる訳がない。

明日からの土日、訪ねてみるのは……余計な面倒が起こりそうな気もするし、少し鳥に様子見でもさせる………いやいや、それじゃストーカーじゃん。じゃ、誰かに頼むか、そしてそんな相手は一人しか思い付かない。

綾小路なら俺の事を暴く機会だとか、貸しだとかで引き受けるだろうが、問題は坂柳が何を思うかだな——あれは『亥』に通じるから一之瀬の事も気に掛けてくれたらと願望が湧くが、『あの二人』とは違うんだから、妙な気を起こすとも限らない。

特に俺からの頼みとなると反駁して来ても可笑しくないし………むう、ちよつと手詰まり感が出て来てしまったな。

マジでどうしようかね？

仕えて〇〇

週末の土曜日の朝、牛井嬰兒の部屋に訪ねようとした女子が居た。坂柳有栖の側近と認知されている神室真澄だ——神室はチャイムを押し、暫らく待つも反応がなく数度を押してそれでも無反応であり、ドアを大きくノックするがやはり中からの反応はない。

「朝っぱらうるさいぞ」

「あ、ごめんなさい——あのそれで牛井くん、今居ないんですか？」

隣の部屋の男子が眠そうな不満を込めた目で出て来て抗議する——対して謝罪し丁寧語で訊くも凶々しいさを感じ、男子は更に不満を抱きながらぶつきらぼうに答える。

「知らねえよ。こっちはアイツみたいな超人じゃないんだから、出たか返って来たかなんて分かる訳ねえだろ——ってか、そんだけノックして出てこないなら居ないんじゃないの」

「あ、そう。朝っぱらごめんね、じゃ」

形だけの謝罪をして去って行く神室に目を細めながらも引き留めるのは更にストレスになると飲み込んで男子も部屋に戻った。

寮の一階ロビーまで戻った女子は端末を取り出して電話を掛ける——相手は直ぐに出たので単刀直入に切り出した。

「あ、もしもし。なんか牛井くん、居ないみたい——隣の人も何処行つたか知らないって」

『そうですか、ありがとうございます。真澄さん』

電話の相手、坂柳有栖はそこから考え込んでいる様で無言になる——報告した神室はポケットに入れていた缶チューハイに手を置きながら訊く。

「ねえ、なんでこんなことしなきゃいけない訳？一之瀬の昔の事なんて伝えてどうするつもりだったの？」

『いえ、これは言うなればただのアリバイ作りのようなものです』

「……なんだか物騒そうだから、これ以上は聞かないことにするわ」
神室の脳裏に年末の騒動がよぎり関わるべきでないと本能が警告した——同時に理事長の娘と言う立場も思いのほか面倒で窮屈な物と僅かばかりの同情も。

『ふふ、そう言う賢明な判断が出来る所は好きですよ——ともあれ義理は果たしたと言う体裁は整いましたし、もう戻って貰って結構です』

「あ、そう。言っとくけど、あんまりヤバすぎる事に巻き込むのは止めてよね」

『勿論ですとも』

愉快的ニユアンスで即答されて通話が切られる——いつもながらの釈然としない気持ちになりつつもそれ以上は無く、神室は寮を出て休日をどう過ごそうかと思ひ直した。

一方、通話相手であった坂柳は自室のカーテンを開けて朝日を感じながら一度頭を空っぽにして気持ちを一新する。

「ふう。まったく人の事を何だと思ってるんでしょうね？と、真澄さんもこんな気持ちだったんですかね」

昨日の夕方、突然学校の上役から指示された事——牛井嬰兒に一之瀬帆波の過去を話せ。内容から吟味すると嬰兒自身は既に知っている可能性も高いが、どうやって知ったかは公に出来ない、また見えない所で動きがあったようだ。

今回の件は初めから嬰兒から意図を聞いているから含むものはないが、それでも気持ちの良いものではない。

お陰で休日にも関わらず南雲の元を訪ねて行かなければならなくなった——本当なら自分も彼の為にチョコやお菓子作りに時間を使いたかったのに。

そう考えると沸々と怒りも湧いてきてしまう。

されどその彼も嬰兒のやることを邪魔する気は無く、不測の事態には手を貸すつもりで、寧ろそれを望んでいる………気持ちを一
新した筈なのにどんどん不愉快さが増していき眉間に皺がよるの

を自覚してしまう。

(いけませんね。こんな顔、清隆くんじゃなくても誰かに見せる訳には)

才だけでなく容姿にも自信を持っている身として、してはならないと改めて深呼吸して気持ちを落ち着かせる——そしてこんな不本意な事をさせた原因に文句を言いたくなり、

(……ああ、そうか。こんな気分だったんですね)

と共感と同情の念を抱くのだった。

やれやれ最近立って続けに背中に妙な悪寒が走るな——今度は一体誰の恨みでも買ったんだかね。

それとも単純に冷えて来ただけか。

久しぶりに『天の抑留』で上空に留まり、朝の済んだ空気を肺一杯に吸い込んでたんだが、久しぶり過ぎて身体がビツクリしたのかな？ 休日とあつて生徒たちの大多数はまだ寝てるが、そうでない輩が朝のジョギングやら部活の練習なんかで出て来てる——そろそろ下に降りた方がいいかとも思った時に神室が何故か男子寮から出て来た。

出来れば一之瀬が良かったなど、ある意味失礼な感想を思いながら人気のないエリアに着地点を定める。

念のために『蠅』で気配を断ち、カムフラージュ用の外套を纏って視覚的にも目立たないようにしてる——大した手間じゃなくてもやっぱり面倒だな。

降りた後で背中を伸ばしながら、これからどうしようか考える。

昨日言われた件——俺の予想以上に一之瀬に気苦労だけでなく心労を強いてしまったなら、なんとかした方がいいだろうな。

幸いと言つていいのかは微妙だが、一之瀬の元が大勢が押しかけてるのは耳にしてるから会いに行く口実はある——それはそれで配慮が欠けると責められそうだが、既にそんなレベルじゃないとなれば正しい方がいいだろうな。

さつき上から見た限りでは外に出てはないし、まだ寝てるとなれば

会いに行くのはもう少し時間が経ってからの方がいいか——となる
とそれまで何してようかね。

ただここで待つてるのも芸がないし、情報を総合するとリラックス
効果のあるお茶か何かを持って行くは逆効果だよな……。

となると誰かに頼むのがベターか——それも下種の勘繰りをしな
い輩に。さつき丁度、外に出てるのも見かけたしな。

考えを纏めて俺は目的の人物の所へと足を進める。

早朝だし人が居ないルートもさつき見たばかりだから大した警戒
もせずにスムーズに目的地のテニスコートに着いた——アイツ、橋本
は結構真面目にコートで素振りしている。フォームや風切り音から
練習を積んでるのは分かる。

見掛けに反して真面目な奴か、外面取り繕うのに手を抜かないって
ことなのかは定かじやないが、こいつになら頼んでもいいと思わせて
くれるな。

『蠍』モードを解いて堂々と視線を送ると橋本は直ぐに気が付いて
こつちに来た——他の朝練に出てた部員たちも気付いたが相手が俺
だと認識すると無言でこつちを見ている。

「おはよう。なんか用があるなら場所を変えようか？」

それは橋本も同様で気遣うように言っただけ——これは素直に有
難いと思っておこう。

「気遣いには感謝するが、直ぐにすむ。お前に頼みたいことがあつて
な」

「いつかの言葉を覚えてたか——へへ、嬰兒ほどの奴に頼られるのは
嬉しいぜ」

「そうか。じゃ、単刀直入に言うと一之瀬が今、予想以上に大変な事にな
ってへトへトになってるって耳にしてな。後で滋養強壮効果のある
物でも差し入れようと思ってるんだが」

「嬰兒が直接行くと逆効果になるな——なるほど、それで俺に届けて
欲しい訳か。お安い御用だ」

察しが良く快く引き受けてくれる——しかも俺へのアピールって
下心も隠して無いから返って気が楽だ。

いや、その方が好印象だつて計算があるのかね——それはそれで愉快な気もするがな。

「それで物はもう用意してるのか、見てる限り手ぶらだけど？」

「用意はこれからする。二時間ぐらいにまた連絡したいんだが」

「いや俺の方から取りに行くよ——ついでに先に聞いておきたいんだが、一之瀬への言伝でもあるか？」

「うん……」

奇しくも妙な形でトラウマに触つちまったみたいだからな——何かしら言つた方がいい気もするが、デリケートな問題だけに何がどうなるのか分からん。

場合によっては悪化させてしまう可能性もあるし、それを他人にやらせるのは流石に凶々しいしな。

「……いや、その手のはバレンタインが過ぎてから直接言う」

「分かった。じゃ、またあとで」

橋本はあっさりとして引いて部活に戻って行く——引き際を見誤らない観察眼も大したものだな。

あれなら興味津々の部活仲間たちへの対処も気にする必要は無いかね。

コートに戻つた橋本は予想通りに好奇の目に晒されながら、それでも何事も無かつたように言う。

「すみません。中断させてみたいで」

そしてそのまま朝練に戻ろうとするが、

「あのさ、橋本くんって牛井くんと仲良かったの？」

同じクラスの元土肥千佳子が落ち着きのない様子で尋ねて来た——対する橋本の態度は至って普通であった。

「ちよつとした知り合つて程度だよ。今の俺のボスとの関係上、少し話す機会があつてな——その際に困つたことがあつたら手を貸すつて約束してな」

「え、そうなんだ……じゃ、牛井くんって今困ってるの?」

「ああ、なんだか一之瀬の事を気に掛けてるみたいだ」

「おいおい、いいのかよ……そんなことベラベラ喋って」

余りの口の軽さにテニス部の先輩が焦りながら入って来た——その言葉は他の部員たちも同様であり不味い空気が蔓延する。

「別に口止めされてる訳じゃないしな——ちゃんと説明しないと皆納得しないでしょ。あらぬ噂が立ったら俺が困るし、何よりいずればバレルことだろうし」

「ああ……そう。でもそうなるとやっぱりバレンタインの本命は一之瀬さんってことなのかな?」

元土肥が意を決したように更に訊いて来た——この言葉にある裏を橋本は瞬時に読み解く。

(牛井にかこつけて、俺の方の本命って風に持つてくつもりだな——はぐらかしてもいいけど……)

「……うん。そこはなんとも言えないな。ただ普通の奴より気に掛けているのは間違いないな。そしてこれ以上は訊いてくれるなよ」

「ハハハハ。分かってるって、そこまで無神経じゃないし」

如才なく濁して話を切りに来た——ように見せかけて、

「元土肥の方もやっぱり嬰兒に欲しいものを貰いたかった口か?」

「え、あ……ち、違うよ! 私は……」

「私は?」

本命は別に居ると簡単に予想が付く答えを橋本は敢えて待つようにした——これがバレンタイン間近でないなら、勢いでこの場で告白されていたかと想像するも、

(ま、こいつの性格じゃないかな)

と自らに向けられた好意に対して冷めた考察をしながら、しどろもどろに口ごもる元土肥に優しく言う。

「ああ、悪かった。あんまり突っ込んだこと訊いちゃったな——別に言いたくないなら無理に言わなくていいから」

再びお茶を濁して、それとなく先輩に目配せすると意図を汲み取ったように——

「さ、いつまでもお喋りしないで練習を再開するぞ」

手を叩きながら自然な形で場を収めていき、橋本は元土肥に見えないように小さく会釈し、先輩は気にすると言う様な顔で一緒に練習に戻った。

さて、話は付けたし戻って買い出しに行こうかな——ただそれだけでいいのか？

もうちよつと気の利いた物でも送った方が……いや、今そんなことしたら逆効果になるのは目に見えてる。

最低限度に留めて置くべきだ。

と理屈では解ってるんだが、なんだろうな——この心に引つ掛かるものは？

客観的に見れば本当に恋煩いでもしちまったのかと思うんだろうが、俺に恋だの愛だのを想う余裕はない——これも客観的意見からすれば、そんな理屈じゃないと言われそうだが、俺はあくまで人に似せた作り物だ。

元になった連中の感情に沿わない気持ちは……無い訳ではないだろうが、そこまで大きくかけ離れて物はない………はずだ。

ああ、変な方向にこんがらがり始めて来た——深呼吸して頭の中をクリアにしないと。

そして改めて自分の気持ちを整理する——俺は一之瀬の何が一体気になってるんだ？

何度も繰り返すがアイツは『申』に似てるから目が行った——それが始まりであり、今現在も全てだ。

ああ、そうか。

こういう時は作り物の身が役立つな——結構すんなりと気持ちの源泉が特定できた。

ドウデキャプルの奴もこれを見越して俺に情報を与えやがったな——個人的なのか、上からの指示による判断なのかは知らないが、あ

まり趣味のいい気遣いとは言えないかね。

ただ、そうなると今朝の神室の行動も大凡の察しが付くな——上から既に動くようにとお達しがあるなら直接アイツに——

いや機嫌がいい訳じゃないのは想像に難くないし、ここは気持ちを尊重するべきか。

空を見上げるが鳥の姿はなく『鵜の目鷹の目』は駄目、となると『地の善導』を展開しながら神室の向かった先に足を進める——ただこの方法じゃ、やはり手間と言うか時間が掛かる。

見つけるのに思っていた以上に時間が掛かり、これなら先に一之瀬の方の用件を片付けた方が良かったな。

「あ」

されど折角見つけたんだし、こつちもとつと片付けてしまおう——呆けてる神室に自然を意識しながら言う。

「何か用か？」

「え、あ、いや……」

調子が掴めない様子にいつもなら落ち着くのを待つが、約束があるから余り時間は掛けない。

「何もないなら別にいいが」

「ああ、ちよつと待って——用はあるから！」

慌てて引き留めて来るのに振り向き聴く姿勢を取る——それを認識して少しホツとした様子だ。

神室の方も早く済ませたいのは同じだろうから、これなら然して時間掛かるまい。

「それで？」

「一之瀬の事なんだけど、ちよつと耳に入れて置きたい話があつてさ」
「坂柳の差し金か？」

「……なんだ、もう全部しつてんじゃん。でも茶番はしつかりしなきやいけないでいい？」

ある程度は察したようだが、深いところまでは知ろうとしないか——橋本同様に周りに置く人選に抜かりはないか。

「そうしなきや困ることになるしな——時間も惜しいから早く済ませ

てしまおう」

「同感ね」

お互いに同意したことで神室も心の準備が出来たようで、落ち着いた仕草でポケットから缶を取り出し差し出して来た——高校生が持っているのは不自然な缶チューハイ、こいつも飲酒するのか？

「酒を酌み交わそうってか、こんな朝っぱらから？」

「んな訳ないでしょ。私、お酒なんて飲まないし」

「じゃ、俺へのプレゼントか——それともバレンタインのチョコ替わりなら猛烈に味気ないし寧ろ迷惑だぞ」

どうせならブランデーチョコにするくらいはして欲しいな——唐突に酒を出せれて『寅』の嗅覚が刺激されてしまい、ちよつと抑えるのに苦労してしまう。

「なんか、言葉と顔が一致してないようだけど——ひよつとしてお酒好きだったりするの？」

「身内がな——その辺は俺とも繋がってるみたいでな、目が行っちゃまうのは時々ある」

「うわ、意外。んな堂々と未成年にあるまじきこと言うなんて」

素で驚いてる様で口に手を当てて呆けた顔してやがる……つて言うかそんな話はどうだっていいだろ。

そう突っ込みたかったが、変に引きずるのも不本意だから触れないで置こう。

「話を先に進めてくれんか」

「これさ、実はお金払ってないから私のじゃないんだよね」

「盗んだのか。それを俺に渡そうなんてのは性質が悪いぞ」

「誰もそんなこと言っていないでしょ——そっちが勝手に勘違いしただけ」

「つてことは一緒に謝って欲しいってことか？」

とてもそんな事を望んでる様には見えない——寧ろ堂々とした様子は捕まったって構わないとも言ってる様だ。

ああ、そう言う事か。

「坂柳に従う理由か——もつとちゃんと説明して欲しかったが」

「それを考えたけど、あんた一応は公権に属してるんでしょ——それも坂柳よりもずっと上の」

「試したくなつた訳か——俺がどうするかも含めて」

そう言うのと神室の目にギラギラした物が宿って俺を見て来た。

「で、どうする逮捕する、学校側に突き出す——それとも坂柳同様に私を駒にするつもり？」

「スリルを求めてるところ悪いが後で店側と示談する準備を整えてやる——土下座して、後でもしませんが誓約書を出せばお咎めなしになるだろう」

「碌に話したことも無いのに優しいのね」

少し意外、いや拍子抜けしたように言っただけだが、

「二度目は容赦しないがな——そんなにブタ箱に入りたいって言うなら、そうなるように手配するけど？」

「……ははは、その権利は他に譲るよ」

最後には意味深なニュアンスになった——やっと話が戻るようだな。

「その相手ってのは一之瀬でいいの？」

「やっぱ知ってたんだ——プライバシーの侵害じゃん」

「軽口叩いてねえで、とつと結論を述べて貰いたいんだが」

そもそも俺だつて意図して知った訳でもないし、正確に何をしたのかも知らないんだ——この場での事は半分本当なら少なからず体裁は取り繕う。

「じゃ、そうさせて貰うわ。一之瀬の罪は私と同じ——過去に万引きしたことがあるんだつて。で、今回アンタが高価な返礼を用意してるつて話でその事がぶり返して感傷と罪悪感に苛まれてるんじゃないかって」

「あの一之瀬が」

「私も話を聞いた時は驚いたけど、あつちは未だに自分のした事が許せないみたいね——今も苦しんでる。このままじゃ心が死ぬかも知れないつてさ」

「俺が殺そうとしてるつて言ってるみたいだな」

「半ばそうでしょう——知ってたって言うなら、寧ろそうしようとしてるって勘繰りたくもなるし」

気に掛けてる女に何故そんなことをするのか？

責めるようなニュアンスの中に知りたいと言う好奇心も見えて来る——同じ穴の貉みたいな共感でも覚えてるのか、やたら一之瀬に肩入れしてるように見えるな。

それとも見えるだけであって、本当に怒ってるのは裏に居る坂柳だったりするのかね？

「確かにそう思われても仕方ないな——言い訳になるだろうが、俺が一之瀬の事を知ったのは本当について最近の事で噂が流れた後の事だ。

一之瀬を傷つけるつもりなんて無い——故意じゃないにしてもそうなってしまうたんなら、ちゃんと責任は取るから安心しろ。坂柳にもそう伝えてくれ」

坂柳の立場を俺の方から悪くするつもりは無い——気休め程度にしかないだろうが、やらないよりマシだ。

そんなつもりで言ったんだが、神室には別の捉え方をしたようだ——胡乱な目で俺を見て口を開いた。

「やっぱ本命ってこと？だったら、そもそもこんな騒動起こさなくても良かったんじゃない……誰かさんたちみたいに堂々とイチヤつくのもどうかだけど、普通に付き合えばいいじゃない？」

これは素直な疑問と感想だな——ならば俺の方も正直に答えよう。「知り合いに似てると思ってただけだ。そんな事には絶対にならないよ」

そう今の事で『申』とは決定的に違うと確信した——もう一之瀬の事で何かすることは無い。

よってこれは最後のケジメだ。

そんな思いを込めてきつぱりと言い切ったからか神室も目を丸くした。

「へえ。じゃあさ、結局バレンタインのイベントは当日に決めるってこと？」

そこまで詳しくは坂柳から聞いてないか——なら俺が言うのも興

醒めになるな。

「そう言うことになるな——お前も参加するのは構わんが、ブランデーチョコとかは止してくれよ」

「そもそも誰にもあげないし、心配しなくていい」

話は終わったからと背を向けて行ってしまった——これで情報源は坂柳によるものだと言う体裁はなったか。

この学校の特性上、この手の情報を集めておくことは上を目指す意味では必須とも言える——ただ単に相手を陥れるのも利用して優位に立つのも正確な情報が土台となつて成立するものだ。

それでもルールはある——俺みたくに運営よりも更に大きなバツクから情報を得るのは反則どころじゃないだろう。

例え俺自身が望んだ訳じゃないにしてもそう言う立場である以上は気を付けなきゃいけない——ああ、全く持つて気に食わない。こんな物がなくなつたつて、その気になれば幾らでも情報を集める手段なんであるのに……………。

まあ、だからこそ、むやみやたらに使うなつてお達しなんだろうが感情は納得しきれない。

この学校のルールを逸脱した訳じゃないし、暗黙の流儀にも従つているつもりだ——なにも普通に扱えとは言わないが、もうちよつと気楽に暮らしていけるようにはして欲しいものだ。

ハア。

ひと通り愚痴つたら少しはスッキリしたか——ともあれ今は目の前の出て来た事への対処だな。

ついであつて感じになつてしまふが、長いこと放置になつてしまつた“約束”もこの機会に果たしてしまおうかね。

早朝から朝と呼べる時間となり、休日の土曜を満喫しようとする生徒が外に繰り出した——ただ女子の大半は週明けのバレンタインへのイベントに夢中になつていよう様でチョコの材料やトッピングを

話し合い、どうやって景品を手に入れるかに熱を入れていた。

それを傍目で見ていた男子たちも面白くないと思いつつ——誰が選ばれるのか、どんな物が要求されて牛井嬰兒はそれに応えるのかと賭けが成立しそうな程に盛り上がっていた。

「順当に考えればやっぱ一之瀬かな」

「いやいや、一人とは限らない——噂じゃもう一人二人もあり得るんじゃないかって」

「そうなのか、だとしたら俺たちの方も上手く取り入れれば分け前が——」

提示された金額が金額だけに自分たちもあやかりたいと言う輩も当然出て来ており、そうでない者達からすれば辟易するような状況だった。

その筆頭とも言える全生徒会長、堀北学はカフェの席で小さく溜息を付いていた。

「全く牛井にも困ったものだ」

「ハハハ……ホント、何を考えてるんでしようね」

向かいに座る橘茜も渴いた笑いでぎこちなく答えた——そもそも遡った発端は自分を救う為と言うのもあるとも思えたから強く非難できない。

「面白い事が出来るからって味を占めちゃったんですかね？」

無難な予想を口にしてお茶を濁そうとするも当然通じる相手ではなく、普段通りのすまし顔でコーヒーを口にする。

「責任の一端は俺にもあるが、本来の首謀者は動くつもりもないか——全く、本当に今年は面白い生徒が集まる年だ」

堀北学は冷静さを装っているがニュアンスには苛立ちが混じっているのを長い付き合いである橘は感じ取った——これが生徒会での遣り取りならば何かしら動こうともするが、既に引退した身であり、自身も間接的に関わっているとも言える状況では身動きが出来ず結局こうして愚痴に付き合うくらいしか出来なかった。

「やはりあの時退学して置けばよかった——なんて馬鹿な事を考えては無いだろうな？」

「!?いいいや、そんなことは……」

全く考えなかった訳ではない——そんな心情をズバリと指摘されて狼狽えてしまう。

その様子に再び小さく溜息を付く。

「あの時、牛井によるカードがなくても俺は……俺たちはお前が退学になることを良しとはしなかった。今こうしてのんびりとお茶を飲むことすら出来なくなっていた可能性もが高い」

寧ろ絶対にそうなっていただろうと二人は無言のまま理解した。

牛井嬰兒の特例と言う強力な威光を持った条件でなければ南雲の策を打破するのはクラスポイントを吐き出す以外に手は無かった——そうなれば今の時期はBクラスとの最後の決戦に備えて緊迫した状況になっていたのは想像に難くない。

自分一人の所為で積み上げてしまったものを危うく無に帰してしまったかも知れない——そんな自責の念を感じ入る橘の姿に、この程度の済んだのは行幸だったと改めて堀北学は己の心中を納得させて気持ちの整理を付けた。

（今回の余興がその副産物だとするなら個人的な心情は目を瞑るのが筋だろうが……）

……ただそうとも言い切れない疑念が払拭できない。

多くの特例を与えられ目に見えての特別扱いを容認されている——傍から見れば羨ましくもあるだろうがその実、一般生徒には許されることも自由に出来ないのはストレスにもなる。

これも傍から見れば贅沢と言えるだろうが、牛井嬰兒の場合は明らかに不自由になることを前提に特例を付加されているとしか考えられない——本人はその立場を理解していても納得してないのは、これまでの行動から考えて一目瞭然だ。

今は学生間で騒ぎになる程度に済んでいるが、これがもしエスカレートしていったなら……

（……あまり想像したくない。いや、俺の想像を超えるような事態もなにかねないか）

「いつになく眉間に皺がよっているな——堀北学」

横方向からの突然の呼び掛けに目を向けると珍しいと思わされる人物が居た。

「……先輩に対して相変わらずの物言いだな。鬼龍院楓花」

私服姿で手には買い物袋を持ち、僅かに覗き見える品からチョコの材料だと判別できた。

「意外だな。お前が物欲しさにチョコを贈ろうとは——それとも別の意図があつてのものか？」

「前者だよ——私にだって欲しい物くらいあるさ」

堀北学の皮肉なのか好奇心から来る問いに鬼龍院は僅かに肩をすくめ無難に答える。

そしてそのままでは面白くないと言わんばかりの態度で続けて来た。

「ここであつたのも何かの縁だ。相席させて貰ってもいいか？」

「俺は構わないが」

「あ、私も大丈夫です」

二人の許可を取り席に着いて適当に注文する——その間に二人を見定めて言う。

「ただのクラスメイト、生徒会仲間だと思つていたが一体いつからそういう関係になつたんだ？」

「偶々予定が空いていたから一服しているだけだ——下世話な好奇心はほどほどにして置け」

「おや、今はそう言うような場面だと思つたが」

「そうか。ならば問い返すが、牛井には何を要望するつもりだ」

「君たちと同じだ——来年の卒業時にもっとグレードの高い席を要して貰う」

意図を汲み、現在進行形の話題を出して来るのに対し鬼龍院は面白そうな顔で即答した——そしてきつぱりと言いつつ切った様子に堀北学の目が鋭くなり何かを悟った。

お洋服が・・・

「そうか。お前も一枚噛んでいたのか——それともお前こそが首謀者か？」

「ふっ。直観なのか観察力なのかは知らんが、相変わらず察しの良すぎる程に優秀な男だ——全く持って面白味のない」

「それは結構な事だ——南雲ばかりか、お前に気に入られたならどんな生活になっていたのか想像もしたくない」

軽く流して話を打ち切ると思っていたが、皮肉交じりの肯定を返して来た事に鬼龍院は何かしら自分に要求があると悟った。

「……言って置くが私は牛井のお目付け役になどなるつもりは無いぞ」

「察しがいいのはそつちも同じだな——もし同学年なら南雲じゃなく俺が戦いたいとすら思っていたかもな」

「え、えつと……」

堀北学と鬼龍院楓花。共に折り紙付きの優秀さを持つ二人の会話に完全に置いてきぼりになってしまった橘茜は会話に交じるべきか、様子見するべきか判断に迷う。

「それとも今回の件はお前と戦う為に南雲が焚き付けに来た一環だったりするのか？」

「さあ、どうだろうな。大袈裟になることを私は望んでなど居ないが、これでも頼んでいる立場だから——相手の意志は尊重するさ」

「だとしても限度がある。学校の風紀どころか伝統まで破壊する事態になりかねないなら自嘲して貰いたいんだが」

「ふっ。気に入らないのは分かるが南雲も牛井も方向性は違えども、そう言うのにうんざりしてる口だ——例え悪しき前例と言われようが、止まる気なんて無いだろう。先の合宿がいい例だ」

これに橘は唇を噛む——それを見ながら鬼龍院は口調を和らげて言う。

「だけどお陰で卒業後の楽しみが出来た——南雲の仕掛けはいけ好かないし認める気はないが、一周回って大きなご褒美が出来たんだ。何が幸いするのか分からないのも世の常だ——そんなに悪い事ばかりでもあるまい」

少なくとも自分は幸せになったとなんとも微妙なフオローをしてきたが、やはり素直に喜ぶ気にはなれず複雑な心境になる。

ただ堀北学はその程度の誤魔化しで煙に巻ける男ではない。

「逆に何が災いとなるかも分からないのもな——そうなった時はお前に責任が取れるのか？」

一番の当事者である牛井嬰兒には取りたくても取れない立場——ならば関わった者達がどうにかするしかない。

自分が生徒会長のままならそれも可能だし口出しも出来たが今は卒業間近の一生徒でしかない——不安の種を刈り取る要因はひとつでも多く欲しかった。

「見損なうな。自分で蒔いた種ぐらい自分で狩るさ——少なくとも今回はお前が危惧するような事にはならないから安心しろ」

鬼龍院は言い終わると用は済んだとばかりに立ち上がり去って行く姿を見て——それが言いたかったのかとひとまずは安心感を得た。

さて滋養強壯の定番と言えばしょうがのブレンド茶だが、一之瀬のイメージからすればハーブティも捨てがたい。

約束もあるからあんまり時間を掛ける訳にはいかないが、だからと言つて手を抜いていい加減な物を贈る訳にもいかん——直接一之瀬の様子を見れば確実なんだが、まだ寝てるのか鳥を通して見た限りカーテンが締まつてて確かめられない。

つたく、何の因果でこんなストーカーのような真似してんだかな……。

軽い自己嫌悪に浸りそうになるのを振り払い真面目に検討する——つもりだったんだが、さっきの神室の話から薬膳酒の方にも目が

行ってしまう。

教師や職員もいるとは言え、仮にも学生の為のモールなんだからもつと気を払えと内心で突っ込みたくなる。

と不毛な時間を過ごしそうだし、ここはやはり定番のやつにするか。

俺はしようが茶を一袋買って店を出る——橋本との約束まではまだ少し時間があるから、適当にモールを歩いて（勿論『蠍』を発動かつ人目に付かない道を）何か他に良い物が無いかを散策する。

しかし流石に二月ともなれば肌寒さが来るな——夏休みの終わりに秋物のコートをプレゼントしたから、今度は暖かいマフラーや手袋でも。

そんなことを考えて服屋の近くまで来たら、佐倉が一人でウィンドーショッピングしてるのを見掛けた。

最近はグループかそうでないなら長谷部と一緒になのに珍しい……いや、この前の事もあるしそうでもないか。

なんとなく気になって見てる品物に目をやると普段使う様な物じゃなくて、祭りやイベントなんかで着るドレス——それも結構派手な物で普段の佐倉からは考えられない代物だ。

「おはよう。奇遇だな」

「うわ!?!」

はは、中々にいいリアクションだ——『蠍』は解いて、足音も普通にするように近づいたんだがな。

それだけ夢中だったってことか。

「なんとも派手なのが好みなんだな」

「え、あ、いや……欲しいとかじゃなくて」

普通なら驚かせたことに怒りそうなものだが、佐倉は逆に委縮して妙な弁明を始めて来た——そして何故かそれは本音のように聴こえた。

「そっか。じゃ、グラビアやってた時が懐かしくなったか?」

「……………!?!」

適当な推測だったんだが、どうやら凶星だったみたいだな——もし

かしてこれも俺が原因だったりするのかね？

ただ今はそれも含めて触れる時じゃないかね——まずは一之瀬の方を片付けなきゃだし。

「佐倉が着れば勿論似合うと思うが、一之瀬が来ても絵になると思うか？」

「え、一之瀬さん？」

かなり強引な話題変更だったが佐倉は気にすることも無く真剣に考えてくれる——ああ、本当にいい娘だね。

「えーと。一之瀬さんならなんでも似合いそうだから——」

と前置きしながらあまり派手であり過ぎないか、派手であってもその中に深淵を思わせる色を添えた方だとか、中々に饒舌に意見を述べて来た——この辺りは流石プロって感じだな。

これが誰かじゃなくて佐倉自身に向けられたら、きつと一之瀬以上にモテモテになってるだろうな——もしこの学校にミスコンなんてのがあったなら在籍中は完全制覇してるのも間違いない。

そんな妄想を抱きたくなるほどに今の佐倉は活き活きとしている——それはこの前の外でのアイドルイベントで見た娘たちと何処となく通じるものもあった。

だからか、思わず余計な事を口走ってしまった……

「佐倉もこう言うの着てステージに立ちたいとかあるのか？」

「え……」

活き活きとしていたのが一変に戸惑いになった——ああ、この様子だとずっと燻ぶってたんだな。

そしてまだ気持ちの整理がついてない——外野が口出すのはヤバかったな。

「……悪い、今のは忘れてくれ」

無理だと分かっているがこれしか言う事がない——何せ佐倉の一生にも関わりかねない事だ。

俺では責任を背負えない。

再び強引にでも話題を変えたいが、そう都合よく思い付くものでもなく。お互い無言で微妙な間が開いてしまった——もういつそ適当

なこと言って別れるのも有りかね？

「私は……今は普通の学生がしたいから………」

ただそれでも佐倉の方から話題を戻して来た——この手のなら本来なら友達、長谷部あたりに相談するのがベターだと思うが………いや、友達だからこそ話せないってこともあるか。

乗り掛かった舟だし、最後まで聞くべきか。

「友達も出来て、普通に授業受けて放課後に遊んで凄く大事な時間だって思ってる——波瑠加ちゃんも私を親友だって言ってくれて」

嬉しそうだが、その中に後ろめたさを感じさせるニュアンスがある——現在が大事なものは本当だが過去への未練がぶり返して揺れてる訳か。

こうなった切っ掛けが俺のした話であるなら、俺はどうすればいいのかね？

流星にこれは困ったな——同じグループである綾小路に相談するのもちよつと不味い気がするし、櫛田や軽井沢なんかだと佐倉に寄り添える気がしないしな。

と今丁度いいのに会いに行こうとしてたんじゃないか。

「佐倉——もう少し聞いてあげたいんだが、俺これから約束があつて」「あ、ううん。私の方こそゴメンね——嬰兒くんを困らせる気は無かつたんだけど」

わざとらしく時間を見て話を打ち切りに行ったが、佐倉は嫌な顔ひとつどころか逆に申し訳なさそうにして来た——かああ、罪悪感が胸に来てしまうな。

佐倉と別れて俺は『蠍』モードとなつて寮まで戻つた——時間的にも丁度よくロビーで橋本とも合流できた。

「じゃ、これ悪いけど頼んだ」

「引き受けた——で何か伝えることもあるか？」
「そうだな。事が落ち着いたら少し話がしたいんで、OKかどうかも訊いてくれないか」

「……なあ、やっぱり嬰兒が直接渡した方が、面倒がなくていいんじゃないのか？」

橋本の中で俺の一之瀬に対する気持ちがかなり固定されたようだ——そう言う意味じゃないと説明するのが妥当なんだが、実を言うならちよつと狙ってたりもした。

ただこのままストレートに“そうか”と肯定するのも不自然だから。

「今じゃなきや、そもそも頼んでないって」

「いや、そもそもって言うなら嬰兒が蒔いた種だろ——思わせぶりな事してないで“あの二人”みたいに堂々としてた方がスツキリと収まるとだろ」

「いや、あそこまでのちよつと……」

と言うか、あそこまですなつた切っ掛けも実は俺だから突きつけられるとちよつと困るな。

で、この事を当然橋本は知らないから他意も無く更に続けて来た。

「俺も別にそこまでイチヤイチャしろとは言つてない——ただ態度をハッキリさせるのがベストだと思うつてだけだ」

橋本はひと呼吸おいて改まったと様に言う。

「嬰兒は適当にはぐらかして体ていよくキープするなんてタイプじゃないだろ——例え実らなくてもスパツとさせた方がいいんじゃないか？」

「意外だな。そんな説教じみた事言うとは——他人の事だし正直あまり干渉しない奴だと思つてたが」

「相手がそう望んでるならそうするが、嬰兒のこういうハツキリ言う様なのが好みだろ——だからそれに合わせて見たつもりなんだが」

説教に見せかけた俺へのアピールか——如才ないと褒めておくべきか、八方美人はしつぺ返しを食らうぞと皮肉でも返してやるべきか。

それとも俺がどう返すかを試してたりもするのかな？

「ちなみに気に食わなかったなら切つてくれて構わない——俺だつて同じだからな、お前の方は裏切っちゃダメとかはフェアじゃない」

「とことん腹を見せて来るか——本当に相手をよく見てるな」

「そりやどうも」

素直な賞賛に満更じゃない笑みを見せて来た——かなりポイント

を稼げたと思ってるならそろそろ潮時かね。

「なら今回はお前に乗せられておこう——その代わり失敗したら愚痴には付き合って貰うからな」

「おう。朝までだろうとことん付き合ってやるぜ」
「!？」

快諾して行って来いと言わんばかりに背中を叩かれた——他愛無い遣り取りつもりだろうが危うく『午』モードになるところだった。こう言うのも気を付けないとな。

休日の土曜日——すっかり日も登り切った時間に一之瀬帆波は目を覚ます。

ただその目はまだ眠そうであり、質の悪い睡眠だったのが一目瞭然であった——そんな不調な思考の中、

（ああ、寝過ぎしたあゝ）

と間の抜けた感想を抱き、のそのそと立ち上がって部屋のカーテンと窓を開ける。

陽光が差し込み新鮮な空気が入って来るも一之瀬の気持ちは大して晴れず、胡乱な目のまま何気なく部屋のドアを見る。

（やっぱり今日明日も来るのかな？）

バレンタインまであと二日——嬰兒からの豪華返礼を目当てに一之瀬と一緒にと言う輩は後を絶たず、また唐突に一之瀬の心かの傷こを思い出してしまったのも相俟って気分は下がっていく一方だった。

「はあゝ」

憂鬱な溜息を付く姿は嫌な思考を振り払おうなどと言う気力が全く感じられず、そうかと言って誰かに愚痴を聞いて貰おうとも普段は聞く側であり、また進んで話したくない内容こそが一番である為一人で抱え込むしかないと言う悪循環に陥り、一之瀬の精神状態は良くなる要素がひとつも無かった。

ならばせめてもう少しゆっくりしたいとベッドを見て二度寝をと

思ったが、状況は一之瀬の都合に合わせてくれずインターンの音がして、下がった気分には追い打ちをかけた。

(うく……寝てるふりでもしてやり過ぎそうかな)

実際に寝るつもりだったしと普段とはらしくもない思考が浮かんで来る——ただ身についている習慣とも言えるものは、その程度でどうにかなるものでは無く再度溜息を付いて来客を確認する。

「はくい。どちら様ですか？」

新たな見知らぬ女子か、再び顔見知りの女子かと詰まらない予想をしながら出た先に居たのはもつともありえないと思っていた顔だった。

『凄い声だな——機械越しても不調が伝わって来るぞ』

「……………よく私の所に顔を出せたね」

寝起きじゃなくても今一番見たくなかった顔——牛井嬰兒の姿に一気に眠気が吹き飛んで脳が冴え渡った。

途轍もなく後ろ向きな方向に。

対して嬰兒は何も思うところなど無いと言わんばかりの顔(少なくとも一之瀬にはそう見える)で普通に言う。

『元気が出る物、持って来たんだが入れてくれんか』

「あのさ……余計に不調になりそうだから出直してくれない」

流石に一之瀬の声にも棘があり、言外に“邪魔だから帰れ”と含みを持って追い返そうとする。

しかし嬰兒の様子は全く変わらない——それがまた苛立ちを募らせる。

「……………ホントに今入って来られたらどうなるかなんて想像出来るでしょ。何のつもりにせよ月曜日過ぎてからにして」

それでも何とか抑え込んで出来る限りなだらかな言い方で断る——正直な所ここまでが一之瀬帆波の我慢の限界だった。

されどその誠意はあっさりとなりに帰した。

「なら嫌ってくれても構わんから準備が出来たら入れてくれ——それまでは待つてるから」

「……………だからあ」

帰れと言ってる——そんな事は分かり切っていると嬰兒の顔には書いており、これ以上の問答は無駄どころかより一層に状況を悪くすると不本意ながら悟らされた。

絶対にわざとだ——根拠はない直感であったが、一之瀬はそうしか思えず怒鳴りたくなる気分にもなったが、どうにか自制して嫌々をたっぷりと込めたニュアンスで短く言った。

「五分待つて」

通話を切って重い足取りで顔を洗おうと洗面所に向かい鏡を見た瞬間。

「!!?」

余りにもひどい顔をしている自分に思わず息を飲んだ。

(やっぱり帰って貰えばよかった……いや、今からでも遅くないかな) 他人には見せたくない女だてらに拒絶の意志が浮かんだ——ただこれが牛井嬰兒であるならと思いついて、

(この際だから文句言つてやろうかな)

とあらゆる意味でのストレスの元凶と対峙する道を選んだのだ。た。

絶対に嫌か感情を向けて来るな——そんな確信を抱きながら俺は一之瀬の部屋の前に立ち再度インターンを押す。

すると今度は直ぐにドアが開き、目にクマのある一之瀬が顔を出した——誰が見ても調子が悪いのが分かる有様で、

「いらっしや〜い」

いつもでは考えられない暗い声で中に招かれた。

予想はしていたが、こりやより気を引きしめて行かないとだな——下手したらサンドバックになってしまっても可笑しく無さそうだし。

そして予想外なのは精神面だけでなく肉体的にも不調が見られた点だ——病は気からとも言いが、早めに対処しないと本当に寝込むことになりそうだな。

「来て早々だが台所借りるぞ——今のお前には打ってつけのお茶買って来たから、飲めば楽になるぞ」

「用意がいいね——でもどうせなら騒ぎを起こさないでくれるのが一番有難かったんだけど」

流石に嫌味が剥き出しだな——素直に謝るのが妥当だが、それだと直ぐにまたストレスを飲み込んでしまいそうさ。

それでは意味がない。

「一之瀬も、あの方々」と同じことを言うか」

「ちよつと私の前で被害者面しないでよ！こっちはとぼつちり喰らった身なんだから!!」

「調子が狂う、愚痴を言いたのは私の方だってか——中々珍しい姿が拝めただけでもやった甲斐はあったかも知れんな」

「ああ、そう。そんなに見たいなら、これからたつぷりと見せてあげてもいいけど」

こりや相当来てるな——まず愚痴を聞いてからと思ってたが、そうすると日が暮れて来そうさ。

まあ、俺的にはそれでもいいけど。

一之瀬の方は望んでは無さそうさ——何しに来たのか？無言のまま、そう目が問いかけている。

「ゆつくり話したいから、まずはお茶だ」

「……………」

じれったいと一之瀬の意に沿わないと非難の色も目に宿ったが、どちらにしても今の状態は頂けない——気休め程度だが、効能は合ってるし沸かしたお茶を淹れて差し出すと表情を変えずにゆつくりと口を付けた。

「ああ、温まるなあ」

これ以上ない棒読み感想で、心はひとつも楽にならないと言ってる——もう分かったから。

「適度に飲んでれば少しは楽になる——それで本題だが、ずっと約束してた『平和主義者』の話を片付けてしまおうかなと思ってな」

「今、このタイミングで？」

もつと空気を読めと普通なら受け取るだろうが、一之瀬は何か意味があつての事かと深読みを始めて来た——薬効の効き目が出るのは早いからプラーシーボ効果だな。なんだかんだ素直に人の話を聞く娘だ。

「そうだ。やっぱり彼女とお前は違うって確信したからな——おそらく俺の方から接触するのも、もうそうは無いだろう」

「うわっ。バレンタインの前に私振られちゃうわけか——残酷なことをするね。もつともチョコあげるつもりは無かつたんだけど」

本音なのか強がりなのかはどうでもいいが、俺にペースを任せるつもりにはなつたか、しつかりと聴く態度になつた。

だからこそ茶化したり無駄な前置きなく本題を切り出す。

「彼女は地上最強とも言える戦闘能力を有した戦士だった——だがそれを人を傷つける為に使つたことはなかつた。戦う者でありながら戦いを止めるなんて矛盾した信念を持って314の戦争と229の内乱を和解に導いた——言葉の力で世界を変えるって方法貫き和平交渉を粘り強く続けてな」

「へえ。憧れちゃうなあ、正に絵に描いたような理想の解決方法だ」

「今のは成功した結果だけ、実際には同じくらい……いや、それ以上に救えなかつた命がある。

国が滅ぶのも謂われなき虐殺、正義の蛮行——人間狩り、奴隷制度、非人道兵器、仲間割れ、姥捨て、親殺し、文化の弾圧、資源の枯渇、差別と偏見、復讐と虐殺——見て見て見て見て見て見て見て——

「ちよ、ちよつとまってよ?!?どんだけスケールの大きな話してるの!!?」

「なんだよ。知りたいんじゃないのか?」

「そりゃ、そう言つたけど……」

余りにも悍ましい事実にも心の準備が出来てなかつたつてか——そうだよな、何処まで行つても普通の女子高生だもんな。

だが知つたこつちやない。

それも含めてこそ『申』は英雄なんだから——華々しい成果だけなんて都合のいい部分だけを知つて分かつた気になられるのは絶対に

イヤだ。

「聞く気が失せたんなら、とつとまとめるぞ——アイツはどれだけ酷い目に遭おうが過酷な現実を見ようが綺麗事を言うのを捨てようと思つたことは一度もなかった。みんなと仲良くなりたくない、幸せになりたいてな」

「にやはは……正に本物の聖人つて訳だ。確かに私なんかとは全然違うね——私はそんなに強くなつて無いし、なれるとも思わない」

「うくん。強いのもそうだが、プラスしていい意味で強か^{したた}とも言えるな——結果を、平和を求めるなら手を汚すことだつて躊躇するようになるでも無いしな」

「ふくん」

一之瀬の目に暗い輝きが宿つた——意図して誘導して見せた訳だが、どうやら乗るようだ。気付いた上でかは分からないけど。

「嬰兒くん。その聖人さんは嫌な現実を見て、見て、見続けてそれでも綺麗事を言うんだよね？」

「そうだ」

「じゃ、忖度しないで忌憚のなく答えて欲しい——取り返しの付かない過去とどう折り合いを付けてたの？」

「折り合いなんてものは付けない。一生悩む」

「考える素振りも無く即答かあ……ホントに大好きなんだね」

俺じゃなくて『亥』がな——戦士側で結局最後に死んだのは彼女なだけに影響が強く残つてるのかね。

一番心の底に在つた思いが。

と思わず感傷に浸つてしまつたが、それは一之瀬も同様で黙り込み暗い雰囲気醸し出して……忌憚のないつて注文だったが、やはりもう少し配慮のある言い方にすべきだったか。

ちよいと反省すべきか迷うが、なんにしても謝るのも違う気がするし……さてなんて声を掛けるべきか？

時間にして数分かと思うが豪く長く感じる沈黙が続き、一之瀬は再度お茶に口を付けた——そして一服し終えると、

「ぶはあ」

「なんだか色っぽい息を付いた——正直この一瞬は『申』じゃなくて『亥』に通じるものがあると思ってしまった。

「あ、今エロイこと考えてたりした？」

「いや、エロイ人に通じるなど思ってた」

「……………私ってそんなに魅力ない？」

「この学校でも一、二を争う美少女だと思うぞ——その手のコンテストがあれば間違いなく優勝候補筆頭だな」

「へえ、つまり嬰兒くんには私よりも可愛い娘が居るって言い訳だ」

「スゲエ不満だってニューアンスだな——ただハズレって訳でも無いがね。

「単純な容姿だけを見れば俺のクラスに居る佐倉も引けを取らないと思うぞ——何よりその手の見せ方についてならプロだしな」

「グラビアアイドルやってる娘だよな——嬰兒くん、ミーハーなの？」

「だとしてどうだと」

「ちよつと開き直らな——つて、なんでこんな話してんだっけ？」

「一之瀬が色っぽい息を出すからだろ」

「にや。私の所為だと？」

「おいおい、今度はぶりっ子か——可愛らしく頬を膨らませて。

「だって忌憚なくて注文だったじゃないか」

「それはさっきの話でしょ！って訳でも無いか、嬰兒くんが好きな人の話してたんだもんね」

「それはそれで大筋から逸れてるぞ——と指摘するのは流れる的に駄目そうだし、さっきいいネタも手に入ったし。

「恋だの愛だとじゃないけどな——佐倉も仕事復帰したいみたいで場合によっては良いものが見れるかもだし」

「え、なにそれ？」

「ミーハーなのはそっちじゃないか、下世話な好奇心が透けて見えるぞ。

「こないだ外で佐倉の知り合いと会ってな——その話をしたら仕事へ

の熱がぶり返したみたいだ」

「そうなんだあ。へえ」

「と言つてもまだ迷いの中だけだな——今の幸せと過去に打ち込んで来た事とで揺れてる」

「今と過去か——嬰兒くんは過去を取つて欲しいの?」

「舞台に立つ佐倉も観て見たいってのはあるな——それを本当にやりたいって言うなら応援もしたい」

「あー、要するに嬰兒くんって佐倉さんじゃなくて——えっと、雫ちゃんの方な訳だ」

納得と言えばいいのか微妙だが一之瀬の顔色は安定した——かと思いきや直ぐ様に重い表情になりおつて。

漸くここに来た本題に入れるかね。

「やっぱり私なんか大したことないよ——なんで皆こんなのにチャホヤしたりするだろ?」

何の自慢だと突つ込みたくなるが、そう言う前振りじゃない——益々重くなつていく雰囲気察してくれと無言で訴えて来る。

「一之瀬も過去に悩んでる口か?」

「佐倉さんとは全く正反対だけどね——私、中学の時に万引きしたんだ」

「サラツと豪いことをカミングアウトするな。もっと言い淀んでくると思つてたんだが」

「この学校でこの話をするのは二度目だし、何より嬰兒くんももう知ってるんじゃないの?」

「何故そう思う?」

「なんとなくだよ……こればかりは本当に……私の心が言うんだ——ああ、もう全部知られてるんだって、この話をする為に来たんだって」

もう既に諦めた——今度はそんな顔になった……全くコロコロと変わって忙しい奴だ。

他人が居ない一対一の状況で気が緩んでるのかね——それでなくとも自分の部屋だしね。

いや、そんな些事で自分の恥を晒す奴じゃない——ずっと誰かに聞いて欲しかったのか、それとも罰してくれる誰かを欲していたのか。それに俺が選ばれたか——これでも一応は公共に属してる身だし。いいや、これも違うな。

俺がそうしろって言う風に仕向けたように感じたんだな——見えない力が後ろにあるって脅し文句を引つ提げて自分を罰しに来たと。それも間違ってる訳じゃないから、何も言い訳出来ないけど——寧ろ言い訳を得て、ずっと溜め込んでたものを吐き出そうとしてるんだから、もうひと押ししてやるか。

「ならばぶっちゃけるが、俺が知った手段は職権乱用や守秘義務違反に近い物だから訴えるって言うならそうしてくれていい——俺も一緒に地獄でも何処でも付き合つてやる」

「にやははは——もうアリバイ作りは済んでるんでしょ。態々、身を危険に置くんなんて今度は櫛田さんや軽井沢さんに怨まれちゃうよ」

もう完全に目が覚めて脳にも血が巡ってるな——いつもの一之瀬らしく大凡を見通したか。ならば結構な事だ——その方がとつと話が進んで楽だ。無駄に勿体ぶつた前置きをしながらグダグダとするのは性に合わん。

俺は無言で待つ姿勢を取ると一之瀬は悟ったように僅かに残ったお茶を飲み干して語り始めた。

ふろしきが広がった、予期せぬ形で。

「私の家って母子家庭でね。お母さんと二つ下の妹との三人暮らしで、余裕のある経済環境じゃなくてさ。いつもお母さんは大変そうだった」

「ありふれた話だな」

「その通りだよ——よくある話。私だって特別不幸だと思ったことは一度もない」

だからこそ自分を許すことが出来ないか——俺は冷めた目で向けて無言のまま続きを待つ。

「小学校の頃は中学卒業したら就職するつもりだった——勿論、妹にはちゃんと大学まで行かせるんだって。姉として」

でも現実にはこうして進学してる——金が掛からない学校を選んだって言うのもあるんだろうが、一番の理由は万引き犯であることを知られたくなかったからか？

なんとなくだが違う気がする——そう思いながら続きを聞く。

「中三の夏にさ。お母さんが倒れちゃって……妹の誕生日プレゼントの為に無理してソフト増やして……でも結局入院しちゃって全部おじやんになっちゃってさ。」

今でも覚えてる。病院のベッドで泣きながら謝るお母さんにありつただけの罵倒を浴びせる妹の姿が」

「妹は普段は良い子だったか」

「そうだよ。甘えていい筈の年頃なのにお母さんにも私にも何ひとつ我が儘を言わず、色んな事を我慢して我慢して——そんな妹が始めて欲しいって言ったへアクリップ。妹の好きな芸能人が付けてた物で、相場は数万円」

「そんな物を欲しがること余程その芸能人のファンなんだな」

「それはもう筋金入り、姉である私が嫉妬しちゃうぐらいにね——だからこそ、そのたった一度だけ願ったへアクリップをプレゼントして

笑顔を取り戻さなきゃって思った」

「姉としてのプライドか——で、意地の張り方を間違えた訳か」

「そうだよ。誕生日当日の放課後にデパートに行って……都合のいい訳を並べ立てて……そして明確な意思を持って盗んだ」

罪を告白したことで一之瀬の心拍が上がった——ここは落ち着くのを待つのがいいだろうか、

「で、妹は喜んでくれたか？」

俺は敢えて追い詰めるように言い放った——当たり前ながら一之瀬の鼓動は更に加がり、このままじゃ過呼吸を起こすかも知れない。

でも容赦はしない——そんな事を一之瀬は望んでいない。

「凄く喜んでくれたよ——当然だよ。万引きしたなんて考えてもいなかったんだから、その笑顔に罪悪感は一瞬晴れるかと思ったけど」
出来る訳ないよな。一之瀬帆波は良心も罪の意識もある普通の女の子だ——今だって心が悲鳴を上げてるのは分かる。

「母親はどうしたんだ？」

「勿論、怒られたよ。ひっぱたかれてヘアクリップも取り上げて、まだ入院してなきゃいけないのにお店まで行って土下座して謝った——その時に初めて実感した。どんな言い訳があろうと犯罪が肯定される事なんて絶対にないって」

俺はどう思う——そんな目を向けながら一之瀬は事の顛末を語る。

「結局お店の人は警察沙汰にはしなかった——けど騒動は広がって、半年間はずっと引き籠ってた。

でもこの学校の事を教えて貰って、もう一度前を向こうと思ったの——頑張って卒業して一からやり直そうって」

全てを話し終えた一之瀬——ただ過去の話をしたのは前振りに過ぎない。

一之瀬が本当に言いたかったことはこれから、まだ黙るつもりは無い、話し足りない——俺に対して答えじゃなくて、凄まじく挑むような目がそう語っている……有り体に言えば恨みをぶつけようとしてると感じる。

そしてそれは直ぐに現実になった。

「ただ最近はどうなんだよね。もしも中学の時に嬰兒くんが居たらってさ」

目を座らせながら今日まで散々苦勞させられながら思ってたか……例えそれが無意味で道理に反してると分かっていたても。

「特にさっきの話を聞くと余計にそう思ったなあ——嬰兒くん、芸能人とも簡単に会えるんでしょ。きつと妹の好きな人にもアポ獲るのも出来たならって」

「そんな好き勝手出来る身分じゃないぞ——会ったのだって仕事のついでみたいなものだし」

「でも何も出来ない訳じゃないでしょ。じゃなきゃ、私はこんな目にあってないし」

良からぬ方向に行かないようにと思ったが、どうやら通じないかね。しかも迷惑したのを前面に出して黙って聴けとは………これは相当来てるな。

「今みたいにプレゼントのお返しにとか、貸しをひとつつて感じなら——私が欲しかった物ぐらい簡単に手に入った。家族には付き合ってる彼氏がお節介やいてくれたって言えば納得させられたかもしれないし」

「いやいや、それって俺がお前に貢いでるだけなんじゃ——またはお前が俺に集ってるだけじゃ。」

「もしも、そんなことになってたら私は絶対にAクラスで入学だったよね——それに嬰兒くんと近いなら色んなのが融通できてもつと我儘になって、そうだったら坂柳さんともいい友達になれたよね」

更に無意味な妄想を垂れ流して……こんな話をBクラスの連中に訊かれたら袋叩きに遭うかも知れんぞ。

「ああ、なんだか今なら櫛田さんや軽井沢さん——それに綾小路さんの気持ちも分かるなあ。きつとさぞかし甘美で気持ちいい毎日なんだろうね」

「いや、そう言うのにはそう言うのの苦勞があるし——何度でも言うがそんな好き勝手出来るようなものじゃないし」

「もう無粋だよ——ただの夢物語を語ってるだけなのに。」

それも嬰兒くんの所為で思い浮かんだよ——まだ付き合ってくれたっていいじゃん」

「それを望んでるんなら、お前も奴ら同様に上を目指すか？そうすれば俺の事を好き勝手に出来るぞ」

「にやはは。期待に沿えなくて悪いけど、私はまずクラスの皆でAクラスになることを優先したいの——私情で裏切るような真似は出来ないよ、少なくとも私の方からは」

つまり誰かの所為でならと逃げ道が欲しい訳か——いや一之瀬の目はまだ妄想の中だ。

「もしやるならそれこそ最初からにしたい——さっきの過去を無かったことにしたいの。」

そうなった私は今とは違う、嬰兒くんが生き返らせた英雄とは似ても似つかない私になっちゃうけど、そんな私に嬰兒くんは興味持ってくれる？」

な!? 一体、どうしてこんな話に？

一之瀬は慄く俺に構うことなくジツと見て来る——その魅力的過ぎるあどけなさには嘘は駄目、正直に言っただけだと迫ってきているようであり、柄にもなく背中冷や汗が流れた。

安易に肯定すれば、間違いなく一之瀬は語った夢物語を現実にするかと直感が言っている——そうなった一之瀬も興味があるのは事実なのだが、その後のBクラスで起こることは全部俺の責任にされるのも想像に難くない。

けれど、ここで否定してこれまで通りの一之瀬を望むと言うのは俺的には何かが違うと、これもまた心に引っ掛かるものがある。

「ねえ、どうなの？」

一之瀬は静かに答えを急かして来る——玉虫色の解答や何故そんな事を思ったのかを聞いてお茶を濁して何も答えないのもセオリーではあるが、

「私、ここに色々と考え過ぎちゃって疲れちゃった——罪を悔やんで、皆に尽くして、それでも消えることのない過去が頭の中をグル

グル回って、いい加減どうしたらいいのか教えて欲しくなった」

逃げることは絶対に許さない——そんな意図しか感じさせない心情を吐き出した。

「これ嬰兒くんの所為だよ——だから答えてよ。どんな私で居たらいいの？」

流石に無視できない——だから少しだけ考えて。

「俺は——」

週末が明けた月曜日の朝。

バレンタイムに色めき立ってる男子たち——と言うありふれた光景以上に盛り上がる話題に学校中がひしめき合っていた。

「なあ、結局誰が選ばれるんだろうな」

「いや、それはどうでもいい——肝心なのは」

「そうだよ。どれだけのものが要求されるかだな」

「嬰兒の性格からすれば、有り金全部使いきったって“うん”って言うよな」

どんな豪華景品が飛び出して来るのか——何かと娯楽の乏しいこの学校においては美味しいネタであり、その規模の膨れ具合は当然ながら女子たちは更に上だった。

「結構手間かけたけど大丈夫だよな？」

「取り敢えず食べて貰えれば」

「一之瀬さんの協力があれば絶対なのに」

正々堂々と味で勝負するのも居れば、徒党を組んで商品を分け合おうする者たち、手っ取り早くコネを使い確実性を高めた者たちと、本来の趣旨とはかけ離れた（とも言い切れない）光景は純粋に楽しみにしていたカップルたちからすれば辟易する。

その筆頭とも言える二人は朝も早くから学生寮のロビーで向かい合い。

「はい、どうぞ。清隆くん」

「ありがとう、有栖。開けてみても？」

「はい——そこそこ自信はありますので」

仲睦まじい会話を繰り広げていた——取り巻きたちは何度見ても「飽きないよな」と半ば呆れた感想を抱きながら無言で成り行きを見守る。

そして最早慣れてしまったのか、綾小路も気にしないで渡された箱を開けるとシンプルな小さなチョコレートケーキが出て来た。

「本の通りのレシピです。そこでここまで豪勢には出来ませんでした、味も確認してますから——あとは清隆くんの好みに合うかどうかで

——」

「有栖が手作りしてくれただけで、オレは十分に——」

「駄目です、それは。鼻根目抜きにキチンと美味しいと思って貰えなくては」

「こんな日までプライド高いな」

お互いを立て合いかと思いきや、(傍から見て恥ずかしい)意地の張り合いに移りそうになるも。

「ちよつとちよつと——イチャつくのは放課後にしなよ」

「もう時間がないぞ」

「こんなので遅刻なんてバカらしいぞ」

周りから制止され、二人はそれもそうだと口を閉じる——そしてこれ以上はと言葉を交わすことなく、それぞれの教室に向かった。

それを更に外野から見ている野次馬たちも自分たちも時間が無いと足を進めるも——羨ましいか恥かしいのか複雑の気分であり、それでも彼氏彼女がと思いつながら今日パレンタインと言う日に思いをはせた。

世間的には大きなイベントでも祝日な訳も無く授業は通常通り、更には学生には気の思い通達もある。

「明日の十五日には仮テストだ——成績には関係ないが、その先の学年末テストの予習とも言えるものだ。心して掛かるように」

茶柱先生の説明を持って今日の授業は終わった——ひと息つくか、気を引き締めるかしなきやだがクラス……いや、学校中の生徒の頭の中を占めてるのは別のことだ。

「ねえ、嬰兒くん。これ作っただけだ」

「あたしの先に食べて見ない——料理に得意だし、味に自信あるし」

櫛田と軽井沢が同時にラッピングされた箱を差しだして来た——放課後までは受け付けないとのらりくらりと交わしたが、律義に守つて来るあたり色んな意味で熱の入りようが違う。

他の女子たち、他クラスや他学年からもアピール付きでやって来られたが二人が全部遮断してくれて今まで無事に過ごせた——その借りがある分、無碍には出来ないよな。

「済まないが、先約が会つてな——お前たちのをどうするかはその後だ」

「ええー」

「それって、やっぱり……」

二人の……いや聞いてた連中の頭の中に誰が浮かんだのかは、それこそ手に取るように分かる。

ならこんな茶番を最初からするなど、目で言つて来ている連中も居て——特に堀北なんかは途轍もなく鋭い視線を向けて来た。

各々が何を思おうが自由だけど、ただの想像で非難されるのは正直気持ちの良い物じゃない。

何より実際には違うことを思えば尚更にな——このタイミングで彼女が来てくれるのが良かったんだが、やはりそう都合よくは行かないよな。

それとなく窓の外を見ても鳥は居ないから『未』モードになり『地の善導』を使ったが近くに居ないのを確信しただけ。

仕方ないから、こつちから行くしかないかね。

「じゃ、用件が済んだら貰つてくれる？二人まではOKなんでしょ？」
「ちよつと、それならあたしのを今貰つてよー」

櫛田が喰らいついたので軽井沢も意地になって来た——そりや確かに言つたけど、今受けるのは都合が悪いんだよ。

クラス中から注目されてるから逃げられない——とか普通なら思うが、俺にとつてはこの程度の事は造作もない。

悪いが囿になって貰うぞ、山内。

ずつとこつちを睨んでる山内の目に映るように数度指を回して、久しぶりに『牡羊』を発動——直ぐ様にボタンと眠つてしまい一瞬だけ注目がそつちに行つた。ホントにやり易い奴、その間に『蠍』に切り替えて速攻で教室を出た。

「あ!？」

「ちよ、ちよつと!」

既には背後にある教室から二人の女の大声が響いたが気にしてられない、早く行こう。

改めて『地の善導』を使って目的の人物の足音やテンポを探す——この場合は『鵜の目鷹の目』や『天の抑留』がベストなんだが、全く不便になってしまったものだ。

少しばかりストレスを感じながら、漸くと見つけたが何故かだっ広い通りのベンチにふんぞり返っていた。

一体何のつもりなんだ、鬼龍院楓花先輩？

「遅い。やつと来たか——レディを待たせるとは紳士のすることか?」

『蠍』を解き近づいたら開口一番に文句か——そもそもここで落ち合うなんて約束はしてないでしょ。

ただ既に人目が集まってしまったから下手な事は言えない——狙つてやったか?それとも盛り上げる演出だとか有難迷惑な気遣いか?」

「おいおい。来て早々にそんな不景気な顔を見せるとは更に減点物だぞ——折角、丹精込めて作った菓子を不味くしてどうする」

「別に俺を思つてじゃないでしょうに」

「ふっ、それもそうだ。私が想うは大スター様たちだ——来年の今頃が楽しみで仕方ないぞ」

欲望に正直な人だ——分かり易い程に興奮している様は清々しい

くらいだ。それは周りに居る野次馬たちも同様だろう——とことん手抜かりがなくて助かるよ。

「あの、それで」

「だからもう少しムードと言うものをだな——」

「無駄は省略したいんで——お互いに義理であるのは分かり切ってるでしょ」

「詰まらん。折角、盛り上がる土台が出来上がつてると言うのに」

今、彼女の心中では鮮烈な舞台の上に立っているんだろう——古典的な演出だが、嵌り切つてて壮大で美しさすらある。

観ていた野次馬もすっかり俺から鬼龍院楓花に引き込まれた——表情には出さないが、きつと満足感一杯だろうな、声の弾みが上がった。

「しかしお前の言うことも尤もだ——この気持ちを向けるべき時は来年だ、その為にさっさと済ませてしまおう。受け取れ」

なんとも偉そうだし投げて渡すかと思いきや立ち上がり、俺の真正面まで来て綺麗にラツピングされた箱を渡して来た。

「どうも。ここで開けますよ」

「いいぞ。ついでに全部食べて感想も言ってくれと嬉しい」

「では遠慮なく」

箱を開けて来たのはチョコチップクッキー、少し捻りを利かしたのかな——食べてみると味も口当たりも申し分なく自然と口に入つて直ぐに全部なくなつてしまった。

「ふふふ。そんなに美味しそうに食べてくれると作った甲斐もあつたな」

「ええ。掛け値なしに美味しかったです」

素直にそう言うより機嫌の良くしてメインを口にした。

「では来年の劇団SSチケットを頼むぞ——私にここまでさせたんだ。どんなことがあると出来ませんでしたは通じんからな」

「要望は承りました——儀礼的な事に報いるなら文句は出ないでしょうから心配は要りませんよ」

「え……」

嬰兒の発言に成り行きを見ていた生徒の一人が声を漏らす——それはその場に居た全員の心情も同様だった。

「ちよつと待つてよ!? 何、最初から相手は鬼龍院さんで決まっただってこと! そんなの出来レースじゃん!!」

二年の女子が声を上げる——豪勢に包まれた箱を持っていた手にも力が入り、箱が僅かに歪む。

「その通りだ。私の卒業後の楽しみに頼んだのが一連の騒動の始まりだ——ただの頼み事では通りにくいから何かしらのお返しと言う形を取った方がやり易いとな。それでバレンタインが近かったから丁度いいと思つてな」

「それを盗み聞きしてた誰かが尾ひれを付けて噂をばら撒いたんだろ」

事情説明する二人に周囲からは拍子抜けと憤りの感情を持つ二組のグループに分かれた。

「だったら最初からそう言えば」

「いや、豪華なホワイトデーが待つてるのは事実だし、何より面白そうだったんでな」

前者、主に男子からの突っ込みに鬼龍院は不敵な顔で答える——それに対して後者、主に女子からは不満の声が上がった。

「冗談じゃないわよ! だったらこれまでの事が全部徒労だったってことじゃない! 私たちの時間返してよ!!」

「それは言うべき相手が違う——だろ、南雲」

鬼龍院が不敵な顔で野次馬の中に居た仏頂面の南雲を指した——その後ろには委縮している立花の姿も。

大物の登場に一瞬、場の空気が緊迫したが南雲は仏頂面のまま口を開き更に緊張を高めた。

「今回の騒動はこいつ、立花が二人の会話を耳にしたのを変な解釈淹れて掲示板に上げたのが始まりだ——ただ、キチンと否定して修正す

ることなんて出来たのに何故しなかった？」

「おいおい。お前が監視によこしたんだろ——だったらその責任はお前が取るのが上に立つ者の務めだ。じゃなきゃ、なんの為の生徒会長なんだ？」

「正論っぽい事で煙に巻こうとしてもそうはいかんぞ——そつちがこいつを抱き込んで、学校中を巻き込もうとしたのは立花が白状したぞ」

引き合いに出された立花は縮こまったまま肯いた——これにより形成は南雲側に傾き、再び鬼龍院と嬰兒に糾弾の目が向く。

そして周りを味方に付けた南雲は更に続けた。

「大方、生徒会を巻き込んで学校と戦うなんてことを企んでたんだろ
うが——この学校を潰す気だったのか？」

「その心配は不要ですよ——そんな事は絶対にならないと断言出来
ます」

南雲の物騒な推論を嬰兒が速攻で切った——根拠もその背景も一切説明してないにも関わらず奇妙な説得力があり、改めて騒動の中心は嬰兒だと言う認識が広まった。

「そうか——それでも学生の域を超えた金額を動かして無用な騒動を起こしてくれたのは迷惑千万だ。特に一之瀬なんか無理してるのが明らかで、見てて痛々しかったぞ」

「だったら同じ生徒会メンバーとしてって口実で動けたんじゃ——そのまま放って置けば一之瀬へのポイントになると下心でも湧きま
したか？」

「話をすり替えようとするな——実際にこつちも迷惑を被ったんだ。特別扱いされてるからって調子に乗り過ぎだぞ。大金を使うにしてももつと真つ当な方法もあるだろ」

南雲はストレートに騒動の本質を突き、嬰兒を糾弾する——これには不満があるにしても節度は守れ、ついでに詫びにかこつけて学外ポイントを吐き出してしまえと言う含みを感じ取る物も居り、欲を刺激されて更に南雲側に付く者が増えた。

その一人が前に出て声を上げた。

「南雲会長の言う通り——やり方が下品だよ、嬰兒くん」

「つて居たのか、一之瀬」

話題にも上った一之瀬帆波の登場——今回、一番迷惑を被ったと言う見識は学校中が持っているのです、この場での嬰兒の糾弾は流石に苛烈な物となると誰もが思った。

実際に一之瀬の目は普段の彼女では考えられない程に鋭く据わっている。

「嬰兒くん、鬼龍院先輩、これって本来なら二人の間だけのささやか遣り取りで済んだ話ですよ——それをここまで大騒ぎにさせるとい何も感じるものはないんですか？」

「一之瀬には気の毒だと思う——なんだか予想もしてなかった事態にも見舞われたようだしな」

「……そうだね。思いがけずに思い出したくないのを思い出して、もう私の頭ん中ぐちゃぐちゃになっちゃったよ」

吐き捨てるように言う仕草は全く持つて一之瀬らしくなく、普段は他人に興味を持たない鬼龍院をしても目が引くものがあつた。

「そうか、不快な思いをさせてしまったのは謝罪しよう——ただ求めるなら対価を払うのは当然のことだ。そこまで文句を言われる事か？」

しかし一方的に非を認めるつもりはなく、正論を交えて一之瀬の出口を見る——鬼龍院の予想では一之瀬も正論で返して来ると思っていたが、その顔には暗い影が差した。

「あー、喧嘩になるのは勘弁だし、一応ここで手打ちにしないか——牛井もここまで話を大きくしたんだから鬼龍院の他にも一人二人の要望を聞いてやればどうだ？」

南雲が面倒そうに無難に収めようとするが、鬼龍院が茶化すように言う。

「お前もまたらしくないな、南雲。庇うのは一之瀬がそんなにお気に入りだからか？」

「そんなんじゃないですよ。南雲先輩は私の心の傷に配慮してくれているだけです」

「おい、一之瀬！」

話の流れが嫌な方向に向かい南雲が止めさせようとしたが、肝心の一之瀬は首を振って投げやりに言った。

「すみません。もう全部吐き出しちゃわないと本当にどうにかなりそうなんです」

一之瀬の言葉は南雲を気遣う様で、その座った目は嬰兒を捉えており、これもまた嬰兒の招いたことだと非難しているようにしか見えな

い。そして嬰兒は無言でそれを受け止める覚悟の様で、とても外野が止めていい空気ではなかった。

「……鬼龍院先輩の言う通り欲しい物には対価を払うのは当然の事です——でも私はそんな当然の事を破った人間……ぶつちやければ万引き犯なんですよ」

誰もが予想してなかった告白に周りの空気が一気に持つて行かれ、特に野次馬に混じっていた一年たちには衝撃的だった。

そのまま一之瀬は中学の時に犯した罪の経緯を話していき、聴いていく内に大半の者たちは糾弾する気は失せていた。

勿論、全てではない——その一人である鬼龍院が何も感情の無い乾いたニュアンスで南雲と嬰兒を見ながら言う。

「流石に驚いたな。もつともそうでない者共もいるようだが」

「俺は生徒会入りする際に全部聞いたからな——実際に店側も訴えなかったって言うし、公式に事件にもなってないなら言いふらす必要もないだろ」

「正論だな、だから止めようとしたのか。牛井の場合はどうなんだ？」
今度のニュアンスには若干の興味が含まれていた——特権を用いたのか、噂通り一之瀬に肩入れして彼女自身から聞いたのか。

それでも考えなければ、態々話したくもない過去をぶちまける必然性が分からない——秘密を知られているのに怯えるのに疲れた。

さっきの一之瀬の言葉にはそんな意図があったんじゃないかと察してしまい、事と次第によっては嬰兒の側に立つことが出来ない。

「答えられません」

「おい、それは許されないことを肯定してるものだぞ」

「じゃあ、言い直します。どう答えたら満足してくれますか?」

「聞く相手を間違えたか——で、どうなんだ一之瀬、牛井が知っているのはお前が?」

この問いに一之瀬は嬰兒から目を離すことなく、

「経緯は知りませんが知ってみたいですよ——とは言っても憶測で抗議するのは出来ませんが」

「言い訳は既に用意されてる訳か——ならこれ以上の問答は無意味だな。ただ余り気分の良い締めとは言えないな」

「なら、こうしたらどうですか」

鬼龍院の不愉快な態度に同意するように一之瀬が即座に声を上げた。

「そもそもにおいて嬰兒くんの特別扱いが過ぎてるのが問題なんです——背景を知ることとは出来ないとしても、実際に迷惑千万の事態が起きた訳ですから」

淡々と理路整然に語っているが、鬼龍院と同等かそれ以上の不快感を隠すことも無い様はどれだけのストレスが溜まったかを表しており、聴いていた面々には冷や汗がひとつ流れた。

「だから、嬰兒くんの持つているポイントを全部使いきって皆でパーティーを開きませんか。名目上は少し早いホワイトデーで、チョコを贈った皆の友達も参加OKってことにして」

「いや、それをすると春先のイベントが」

「別にそっちは盛大にしなくてもいいでしょ。もう二回もやってるんだし、坂柳さんや綾小路くんだって文句は言わないでしょ」

嬰兒の異議も全く聞く耳を持たず、一切を自分の意見だけで事を終わらせようとしてくる。

「おいおい、迷惑したのは分かるがあくまで牛井の金だろ——お前の意向で決めていい範囲を超えてると思うが」

「南雲会長——嬰兒くんが特別扱いされるだけの理由があるにしてもこの学校の一生徒であることには変わりないです。生徒間に迷惑が掛かるようなら上手く調整するのも生徒会の役目じゃないですか?」

「ここでそれを言うか——いつになく過激だが、そんなに牛井が憎くなつたのか？」

「当たり前です」

「即答か……まあ、無理もないが………牛井はどうなんだ？」

「俺としても一之瀬がそれで気が済むなら構いません」

「済む訳ないでしょ——出来るなら、今この場でハッ倒したいくらいだよ」

強引なれど何とか話が纏まりそうになつたと思いきや、再び一之瀬の恨み節が事態はまた悪い流れに戻す。

「でも私情でそんなことする程、私は気が違つてない——出来るなら正式な勝負でやりたいな」

「いや、それこそちよつとな……そればかりは俺じゃない方の先約があるし、特に坂柳が聞いてたら全力で異議を唱えるぞ」

「だよね。でも私もこのままじゃ気が収まらないんだけど？」

一之瀬が言葉を発すほどに悪い流れが加速していき観ていた者たちは関わりたくない、自分たちの手には負えないと必然的に生徒会長なぐもに視線が集まる。

(はあく、この前と言い、なんでこうなるんだ)

南雲もこの状況は不味いと思うと同時にこれまでになく攻撃的になつている一之瀬帆波の姿に含むものを感じる。

容姿、性格、能力とどれをとっても高く、一年女子の中で一番のお気に入りであり、いずれは自らの女とも思っていたのが横から搔っ攫われると危惧もしたが、その対象である牛井嬰兒は完全に嫌われており心配はなくなつた。

生徒会長としての周りの目も然ることながら、一個人としても一之瀬に付きたい……ただもう少し穏便に事を持って行きたいとジレンマに近い物も生じてしまう。

(ここで一之瀬を鼻負するようなことすれば、今度は他から響聲を買うのは目に見えてる——となると着地点は必然的に限られるか)

僅かな時間で纏めた結論にまた心の中で溜息を付きたくなる——いくら何でもここまでする予測していた訳ではないだろうが、うまく乗

せられた感もして気分が沈むが目の前の状況はそれを許してくれない。

「生徒会としてもこんな騒動が度々起っちゃ堪らん——牛井一人の所為で学校全体を巻き込んだの騒動を起こした責任の一端と事態の收拾の為に一年にはもうひとつ特別試験を設けるよう上に申請しよう」

南雲の提案に息を飲むも異を唱えるどころか、それで収まるならと期待の念が騒動の中心たちを集まる。

「この場はこれで収めてくれないか？」

その周りの援護を受けて南雲が毅然とした態度で今度こそ終わらせろと圧を掛ける。

「分かりました——この場は南雲先輩の顔を立てます」

「異例中の異例でしょうが、俺の責任である以上は言う事はありません」

当事者たちの合意を受けて、どうにか場は収まり皆の緊張の糸が切れて安堵の息を吐き、これ以上はこの場に居たくないと思つて即座に解散した。

そして申請の手続きをしなければと生徒会室に向かう南雲と一之瀬は今までになく緊迫した空気ですべて話を続けていた。

「なんだかいつになく過激になつたな？」

「色々捨てさせられましたから……だからこそ、この気持ちをぶつけて勝たなきゃいけません。試験の方、本当に頼みましたよ」

「全力は尽くす——結果が出るまでは大人しくしてろよ」

不用意な言質を取らせない曖昧な答え——異例を自ら作り出すことには乗りだそうとしていたが、まさか他人それも尤も縁遠いと思つていた相手に急かされてやることになると思つてもみなかった。

されど学生同士の諍いの延長線上で特別試験を実施するなど、いくら嬰兒が絡んでいても通るとは思えない——そうなつたらまた面倒が起これると思ひながら要望書を作成していく。

(もしもこれで通るなら……牛井嬰兒のバックつてはどんな奴らなんだ?)

一生徒の行動に国家運営の学校が振り回されるなど南雲からして

も異常である——流石にそこまではならないか、と自嘲しながら提出を済ませた。

そしてその日の内に「特例」として一年に特別試験が、もうひとつ追加されると通知されるのだった。

イレギュラーな試験。

ふう。

周りに誰も居ない——俗に言うボツチ状態なのはどれ位振りかな？

特例が出されてから、あちこちから監視されて満足に羽を伸ばせなかった——今は俺とは関わりたくないって思ってるのか逆に積極的に避けられてる。

お陰で久しぶりに警戒を下げて『天の抑留』を使えた——しかし冬の空は寒い『鎧』も併用して冷気が当たるのは皮膚だけにしないと。ああ、静かだ。

人はおろか鳥すらも気にしないで済むまで高くに来た甲斐はあった——何も気にしないで、ただ風に当たってられる。

そして考えることに没頭できる。

今回の試験が通った——問題はそれに俺自身が介入の余地が有るか無いかだ。

もし俺の意志など関係なく話が進んでいくようなら……。

最悪を想定して置く必要も出て来るか。

あ、もう考えることが終わった。

仕方ない、後は成り行きに任せるしかないか。

バレン^{ティン} 二月十四日の翌日に仮テスト、そして月末に学年末試験を終えて三月に入った。

赤点を取れば退学である結果発表の月曜日。貼りだされた結果は退学者無し——本来なら喜ぶべき、そうでなくとも山場をひとつ超えて安堵する筈が一人の例外も無く表情は重かった。

それを見渡した茶柱は同じく重苦しい口調で淡々と語った。

「安い言葉だがよくやったと褒めて置こう——例年では筆記試験の後

の三月八日に最後の特別試験があるのだが、知つての通りお前たち一年には「特例」として明日からもうひとつ特別試験が追加される」

教室中の意識が嬰兒に向いた——当人の顔色に一切の変化はなく、素なのかポーカーフェイスなのか、どちらにしても不快さを感じさせた。

「特別試験の内容は前日に説明する——はつきり言つてかなりの負担になるが、健闘を祈る」

茶柱の含みを持たせた言い方にこの件の元凶への皮肉が込められており、教師陣にも今回の特例は不本意であることが窺えた。

今年度は今日まで退学者が一人も居らず最終試験まで来れた——これはクラスに関係なく生徒も教師も喜ばしい事であり、上手く行けば文字通りの意味で全員が二年に進級する可能性もあった。

学校創設以来の快挙とも言える結果を期待値は寧ろ教師の方が遙かに上であった——にも拘らず余計な試験を増やしてその期待を潰されかねない「特例」には腹が立たない方がおかしい。

たったひとつの投稿で学校中を敵に回してしまったと言つても過言ではない状況だが、それでも嬰兒は微動だにしない——その様子からは何を考えているのかは窺い知れず、内心では怯えているのか、それとも戦うべき相手が巨大な事に歓喜しているのか。

どちらにしても不本意な試験を只受けさせられるのは気に入らないので、堀北が手を上げて質問した。

「先生、特例の試験と言うからには成功報酬の様な物はあるのでしやうか？」

「ああ、あるぞ」

即答した茶柱に注目が集まる。

「特例と言うこともあり、今回の試験は新制度である『プロテクトポイント』と呼ばれるものが与えられることになる——これは退学措置となつた際に無効化できる権利だ。テストで赤点を取つたとしてもポイント分無効にすることも出来る。ただし他人への譲渡は出来ない」

この説明にクラスが騒然となつた——今までは嬰兒のみに許されていた特例的措置の恩恵、それ以上のものを得られるチャンスに歓喜

している。

ただそんな旨みだけの話などある筈はないと冷静に受け止める者も居り、再び堀北が質問する。

「先生、逆に失敗と見なされる結果となった場合のペナルティはやはり退学でしょうか？」

「その通りだ。そこは通常の試験と変わらない……と言いたいところだが、今回の試験では四クラスの内の三つから一人ずつ退学者が出ることになる」

「それはつまり成功すれば全クラスに恩恵が、失敗すれば三クラスに損失——そしてひとつのクラスだけが実質ノーダメージで最終試験に臨めると言う事ですか？」

「悪いが詳しい内容に関してはノーコメントだ」

「ではこの前提で話を進めても問題はないですか？」

「好きにしろ」

堀北の問いに否定も肯定もしないが、その表情から決してかけ離れたものでは無いと思わされる。

成功と失敗——どちらになつたとしても利益を得られる。

これにはクラス内で心揺れる——成功して退学を回避できる権利を得たいのは当然として、それが他のクラスにも齎されるなら他クラスに損失を与えて有利な条件で最終試験に臨んだ方がいいのではな
いか。

そんな議論がこの後に待っている——と思われていたが、

「先生。報酬、プロテクトポイントを得られるのはクラスの中の何人ですか？」

平田が声を大きくしての質問——全クラスに退学回避が行き渡ること望んでいる内容に多くが「平田らしい」と納得しつつ、その内容もまた気になるところなので新たな緊張が走る。

「各クラスに一人だけだ。選出方法も試験前日に説明するから、これ以上は答えられない」

「全てが急ですね」

「決断とは常に突然しなければならぬものだ。その中でお前たちが

どう選択するかを試す——この試験の意図はそう言うものだ」

淡々とした事務的な説明——内容は尤もらしいが、やはり教師陣も納得していない。

そんなニュアンスだ。

話を終えた茶柱が教室を出て直ぐに平田が率先して前に出て教壇に立った。

「みんな。急な話で戸惑ってるだろうけど、先生の言う通り決断は突然だ——考えても仕方ないことよりも重要な事をまず決めたい」

いつも以上に活き活きとした発音に自然と耳が傾けられた——それぞれの内心は別にして。

「僕は試験方針としては当然、成功を目指すべきだと思う——？クラスのみ一人勝ちを狙ったところで、後で三クラスからの報復を受けるリスクを思えばベストだと考えてる」

「妥当だな。ただ安易とも言える——予期せぬ事態を前向きに捉えるのは良いが、そんな消極的な姿勢じゃ大損喰らう可能性も高いぞ」

幸村が真つ向から異を唱えた。

「龍園は言うまでも無く、坂柳や今回に関しては一之瀬にしたって一人勝ちを狙って来ても何も不思議じゃない——成功を持ちかけて土壇場で裏切るなんて、この学校のセオリーから考えても十二分にあり得るだろ」

噛み砕いた説明に納得が広がり、？クラスも攻撃的に行った方がいいのではないかとの思いが広がっていく。

ただそれでも平田は意見を曲げる気は無いようだ。

「尤もな意見だと思うよ。だから僕はその可能性に関しての提案として、？クラスから退学者が出た場合は僕自身がなることを誓うよ」

「な!？」

自分の退学を賭ける——平田の捨て身とも言える発言に今度は驚きが広がった。

「駄目だよ、そんなの!」

これに真つ先に王が勢いよく立ち上がり反対した。

「そうだよ。平田くんが居なくなっちゃったら、このクラス纏まらな

いじゃない」

「単純に先々を考えれば戦力ダウンだし」

「つて言うか、そう言うは事の発端となった人が言うべきことなんじゃないの？」

女子たちが続いていき、矛先は嬰兒に向かう——これにはバレンタインで振り回された恨みも含まれてるのか擁護に回る声は上がらない。

櫛田や軽井沢、綾小路にしても無言のままの態度にどうするべきか決めかねてる——勿論、これで本当に退学しなければと持つていかれば止めるつもりだが、現状は提案のひとつでしかなく無理に反対を示せば返って拗れかねない。

何より嬰兒自身がこの特別試験たかを望んでいるとしたら？

そんな疑念もあり様子見に徹するしか選択肢がなかった。

「……その辺りにしておきましょう」

そんな中で堀北が止めに入った——それは切実さを込めた声であり、このまま進むのを良しに出来ないと言う含みを感じさせる。

「試験の形式もペナルティがどう適応されるかも分からないのよ——ここで話しても意味はないわ」

ただそんな感情論だけでは収まる状況でもないので論理的な説明を加えて収拾を図った。

「分かってるよ。ここで決められるのは方針だけ——ただ駄目だった時にクラス内で決めなきゃいけないなら立候補するっただけだよ」

しかし平田は折れる気は無く、あくまでも成功——全クラスの恩恵を目的にした方針に持つて行きたいと固い決意を示す。

これには平田の退学を望んでいない者、もしもの場合に自分が退学になる心配が減ったと安堵する者とで分かれ、その空気を察した堀北は内心で冷や汗が流れた。

(絶対に成功じゃなきゃ、と言いたいけど)

微妙になりつつある空気を払拭すべきと頭では分かってはいても安易な事を言うべきでないと冷静な意見がそれを留める。

そんな蟠りを残しつつ、この日のホームルームは終了した。

ああ、なんだか学校中を敵に回した気分だな。

特に一年に關しては奇異な目で見られることはあっても、ここまで避けられるとはな。

客觀的に見れば好き放題にやり過ぎたんだから、全ては自分で蒔いた種だけ——問題はそれがどんな実となり花を咲かせるかだな。

場合によつては最悪を想定しとかなきゃとか……それはそれで楽しそうだ。

「……嬰兒くん」

背後から恐る恐るとした櫛田の声——振り返るのは止めた方が良さそうだ。

「なんだ」

「あの……もしき、もしもだけど……いや、もうその『もしも』が起きたらさ、少しだけ待つて貰えないかな?」

「俺の隣に立つんじゃなかったのか?」

「いや、その為にき、嬰兒くんの為になるように努力するから自棄だけは起こさないで欲しいなあ」

言いながら声が萎んでいく——よっぽど怖いのを我慢してるんだな。

「悪いが先の事がどうなるかなんて分からない——ましてや俺の事を決めるのは俺じゃないからな」

「だからさ! 私に嬰兒くんの味方になるから……その……」

「あ! ちょっと、櫛田さん何やってんの!」

「丁度よかった、軽井沢さん!」

「え?」

振り返らなくても軽井沢の顔が困惑してるのが分かるな。

「軽井沢さんもさ、嬰兒くんがこれ以上困った事になったら味方してくれるしき。それに綾小路くんだって居るし、きつと悪い結果にはならないと思うから——ね、軽井沢さんも嬰兒くんの味方だよね」

「え、そりゃ、まあ……」

櫛田は努めて明るく言ってるが、余りの必死さに軽井沢は訳が分からないか——可愛い女の子二人に慕われて、これも客観的に見れば嫉妬を買いそうな場面だな。

「気持ちありがたいが——」

「だから絶対に自棄になっちゃ駄目だよ！約束だよ!!」

「ちよ、落ち着いて……なんだか変だよ、櫛田さん」

いや、ヒステリーな展開にドン引きでもされそうだな——振り返れば軽井沢が慌てて櫛田を抑えてるのが見れそうだが余計に悪化しかねないから、このままで言うか。

「恐らくだが、今回の試験で俺が出来ることは何もない——どうなるかはお前たち次第かも知れないから——」

「分かった！全力でいい結果にするから、だから安心して!!」

「も、もう行こー！ごめんね、嬰兒くん。じゃ」

強引に軽井沢が櫛田を引っ張って行く——振り返ることなく『地の善導』で確認してやつと振り向いてみたら、まだ俺の方を見て必死に何かを訴える顔をした。

さつきも言ったが俺の出番があるかどうかは分からない——お前たちと俺の望む展開は恐らく一緒だと思うが、他はどうなのか？

そしてそっちが多数ならお前たちはどうする？

どちらにしても暫らくは沈黙だな。

特別試験を明日に控え、各クラスの教室では緊迫した空気に包まれていた。

特に発端である牛井嬰兒の居る？クラスは群を抜いており、無表情で無言のままである当事者の様はある意味で苛立ちすら感じさせられた。

何人かは余計な試験を増やしたことへの文句を言ってやろうかと思っただが、一定の緊張感が漂う中で行動に移すには、それなりの気力

が要り結局は誰もがただ静かに待つしかなかった。

しかし今日はそれだけでも長い時間を感じさせ、普通ではありえない緊張感も相俟って既に疲れの色が顔に出ている者も居る。

普段なら池辺りが早く茶柱が来るのを望むような軽口を叩くが、それもなく只管に長い数分間の中で誰もが担任が来るのを切望していた。

そしてホームルームが始まる時間直前になり扉が開き、茶柱佐枝が入って来た——漸くの登場に何人かは気が抜けかけたが、茶柱の表情はそれをさせるものでなく、再び新たな緊張感が走った。

茶柱もクラスの緊迫した空気を当然のものとして、自身も既に引き締まった気を前面に出して口を開く。

「ではこれより追加試験の内容を説明する——凝った名称は無いので、追加試験として呼ぶ」

前置きを終え、ルール説明が開始される。

「今試験は二つの選択肢をクラス単位で選んで貰う——四クラス一致の場合は、何もなくその選択肢通りのものが与えられる。」

しかし、三対一、二対二、二対一対一の結果となった場合は被ったクラスによる入札による結果でどれかひとつに決める」

「先生、被らなかつたクラスは？」

「選択肢の実行なく一名の退学者をクラス内から出すことになる——それは入札で負けたクラスも同様だ」

「つまり全会一致以外は各クラスで損失が生じると？」

「そう言うことだ——ちなみに棄権と言う選択肢はない、三つの内ひとつは必ず選んで貰う。クラスで意見が纏まらなかった場合は、その場でのクジでもなんでもしてな」

茶柱の目は分かり易く確実に嬰兒を向いた——それを感じ取ったクラスを思つてか、櫛田と軽井沢が同時に手を挙げた。

「質問か。悪いが一人ずつにしろ」

茶柱は指名せずにどちらが先にするかを促す——それにどっちも譲る気は無く、無言で手を降ろせと威圧し中々に話が進まなくなる。

それでも互いに譲る気配はなく、いい加減に痺れを切らした堀北が

声を上げた。

「申し訳ないけど私の方を優先させて貰います——入札と言うからには何かしらの対価が必要と言う事ですよ、それは一体？」

強引に割り込んで来た展開に榎田と軽井沢が一瞬睨みつけたが、内容はまともなものである為にその場は引き下がった。

それを見ながら小さく溜息を付いた茶柱は、やれやれと言う感じで話を進める。

「クラスポイントだ——ちなみに上限はないから、全て使い果たしても問題ない」

「つまりそれだけメリットのある選択肢が用意されていると？」

堀北もまた間髪入れずに核心を突いた質問を続け、無意味な介入が入る隙を潰した——リーダーとして上手く場をコントロールしている。

茶柱は少し気を良くするも直ぐにまた重い雰囲気醸し出して口を開く。

「それは今から説明する」

いよいよ本題である部分、茶柱の態度と先程までの展開も相俟って緊張感がひとつ上がった。

そして提示される三つの選択肢——

1. 選択したクラスに一名分のプロテクトポイントを与える。
2. 牛井嬰兒の“全ての特例”を破棄し、選択したクラスの生徒一人につき、5000ポイントを与える。

3. 退学時に牛井嬰兒を道連れにする権利を選択したクラス全員に与える。

「え、これって……」

誰かが間抜けな声を出したが、それはクラス全員の心証でもあった——そして一人の例外も無く牛井嬰兒に目を向けるが、当人は何の変化も無く何かをする気配もない。

客観的に見れば3の選択肢に関して抗議があつて然りだが、嬰兒は受け入れていると見て取れる——これに榎田は冷や汗を流して顔を真っ青にする。

「ちよ、ちよつと櫛田さん、凄い汗だけど大丈夫？」

「……………」

王が気に掛けて声を掛けたが櫛田は声も出せない様子で、見ていた大半は「なんで櫛田が焦る？」と半ば呆れた。

ただ一人、櫛田の気持ちがよく分かる綾小路は同情しつつも冷静に状況を把握する。

(つまりは試験の体裁を取り、嬰兒の処遇をオレ達で決めろか)

1は今まで通り、2は嬰兒を普通の生徒に、3は嬰兒を退学させる選択肢を提供——但し、最低でも生徒一人の退学を代償に。

(オレとしては3の選択肢は論外だとして、2も捨てがたい気もするが……なんだろうな、この心に引っ掛かるものは?)

嬰兒の特例が破棄させることは、即ちこれから先は外部からの干渉はしないと言う事——異能を用いることも含めて存分に力を発揮できることの容認は、綾小路の目的達成を格段に楽にする。

既にクラスのリーダーは堀北で固まっているが、それもまた綾小路をして都合のいい状況でもある。

(いくら自由を容認されても異能が知れ渡るのは駄目な筈、上手く間に入って調整すれば)

卒業までには全ての異能を把握し、綾小路清隆と組むことが最大の利益になると認識させることも可能——尤もこれも都合のいい妄想であり、綾小路自身もそこまで上手く行くとは思ってはいない。

ただそれを差し引いても牛井嬰兒の我慢の枷が外れることのメリットは計り知れない——その筈なのだが、心の奥で躊躇するものがあり気が進まない。

(何か悪い予感とも違う——久しぶりに訳の分からない気持ちで渦巻いている)

自分の心を整理するのに集中したいが今は説明の途中であり、この後の展開を考えるとそれは叶わない。

「先生。今日一日の猶予があると言う事は、他のクラスとの話し合いも？」

「当然有りだ——その場で約束を交わそうが、その約束が破られよう

が学校は一切関知しない。クラス、生徒間同士の約束事がどんな内容だろうとな」

「あくまで学校側は試験結果によるペナルティのみを実行するだけのことですね」

「そうだ、退学者に関してはそうなるからの説明になる。1の選択肢による恩恵は改めてクラス内での総意で決めて貰う」

茶柱は説明を終えて教室を出る——それと同時に室内はざわつき始めた。

「……あー、流石に調子に乗り過ぎたってことか？」

「いや、それなら回りくど過ぎるだろ——普通に停学とか退学にした方が——」

「何言ってるんだよ——そんな簡単に出来ないから、今まで特例が付けられてたんだろうが」

「いや、だから、なんなんだよ——その簡単に出来ない理由って？」

「知る訳ねえだろ」

話題の中心は必然的に嬰兒に向かうが、当人は無言のまま一切を語るつもりは無いと態度で示している——それとも語ることを許されていないのか、いずれにせよ面倒な立場が今まで以上に浮き彫りになった状況であった。

「皆、一度冷静になろう」

ざわついているクラスの中で平田が立ち上がり教壇に立つ、その様子は心なしか嬉しそうであった。

「この試験……と呼んでいいのかも分からないけど、兎に角もう始まってしまったものはどうしようもない。だからここからは先の事をどうするのかを話し合うのが建設的だよ」

「正論ね。分からないことに仮説を並べてても仕方ないわ——それよりもクラスにとって何がメリットになるかに焦点を絞るべきね」

堀北も続くように発言した——？クラスのリーダーと補佐役とも言える二人が場を纏めた矢先、

「となると一番のデメリットである3の選択肢は論外だな」

「そうだよ！絶対！それだけは駄目だよ！！」

綾小路と櫛田が間髪入れずに意見を発した。

「ま、まあ僕も同感だけど……それも含めて今から話そうってことだし、もうちょっと落ち着こう、特に櫛田さん」

「そうよ。かなりクールダウンしなきゃ、話が進まないわ」

窘めるように言う平田と堀北にクラスも同意だと思っただが、それでも櫛田の冷や汗は止まらず嬰兒をチラホラと見ながら落ち着きを取り戻す様子はない——これに下手に刺激しない方がいいと判断した堀北は溜息を付いて話し合いを始めることにした。

「それじゃ、まず私の意見を述べさせて貰うけど。私は2の選択肢が一番良いと思うわ」

「あたしも賛成！」

堀北の意見に真っ先に軽井沢が手を上げて賛同した。その目には大きな期待感が込められており、その意味はとても分かり易い。

堀北は自分の意図が瞬く間に広がっていくことに気を良くし隣に立つ平田に目を向ける——そしてこれには当然平田も賛成を表明し、そこから先のクラスの展望を皆で話し合っ行って行くと思うたが、「じゃ、次に僕が。僕は1の選択肢がベストだと思う」

しかし平田は強い意志を込めた目を堀北に向け、この意見を絶対に譲る気は無いと無言で示していた。

予想とは正反対に進行役の意見の不一致で始まり、いきなり暗雲漂う展開になった。

間を取って〇〇

「どういうつもりかしら平田くん？」

「僕の意見を述べただけだよ——僕は今のまま、クラスメイトが退学を回避できる選択肢を得るのが望ましいと思ってる」

堀北が短く問うのに対して平田は涼しい顔のまま答えた。

「クラス全体の力が上がればリスクは必然的に下がるわ——総合的に見て、ただ目先の利益を追い求めてるようにしか見えないわ」

堀北も冷静に、それでいて攻撃的に異を唱えた——これに賛同する者たちも続く。

「あたしも嬰兒くんを自由にさせてあげる方がいいと思う」

「俺も同意だ。そもそも同じ生徒なのに変な特別扱いされてる方がおかしいだろ」

「クラスメイトを守りたいって気持ちは理解出来なくはないけど、浅はかじゃない？」

賛同者を受けて有利な流れを得た堀北はダメ押しを込めて力強く言う。

「この試験だって嬰兒くんに妙な特例がなければ起きなかつたわ。

また余計な騒動が起きれば想定外のリスクが生まれる——とてもベストな選択とは思えないわ」

嬰兒の力が十全に発揮されることが出来る——この恩恵の大きさに心が動かされるのは多かつたが、

「堀北さんたちこそ浅はかだよ。その選択は？クラスだけのメリットだ——他クラスが容認するなんてありえないよ」

「そんな事は無いでしょ——坂柳さんだって振り回されるのはうんざりしてる筈だし、今回の件で一之瀬さんだって同じ気持ちなのは想像出来るわ。龍園くんは確かに微妙だけど、彼の性格から考えて戦うべき相手が強い方が望ましいと思っても不思議じゃないわ」

堀北の理路整然と反論を包み込んでいく姿は頼もしく、嬰兒が自由になってもリーダーは譲らない——可笑しな真似などさせないし止

めて見せる、とそんな期待感を抱かせた。

「それこそ希望的な観測だよ——寧ろうんざししてるなら3の選択肢を持って嬰兒くんを黙らせるくらいしても不思議じゃない。

特に一之瀬さんは汚点とも言える過去を自分で暴露するくらいだったんだ……嬰兒くんに対して生半可じゃない不快さを抱いてるのは間違いない」

平田もまた理路整然と返す——しかし堀北とは正反対に不安を駆り立てる説明に、平田らしくないと違和感がある。

「つまり平田くんはどうなると予想してると?」

「この試験は全会一致以外じゃ退学者が出る——そして全クラスが妥協できるのは1の選択肢しかない。

だからこの後で話し合いを設けて、1の選択肢で調整するのが最終的な落とし所になると思ってる」

「言ってることがおかしいわ——さっき嬰兒くんの特例に振り回せるのはうんざりしていると自分で言ってるじゃない。なのにそのまま放置することを選択するとは思えない。

確かに?クラスに塩を送る形になるけど、3は自クラスの誰かを退学させなきゃいけない——流星にクラスの賛同が得られるとは思えない」

「そのリスクを抱えても抑え込みにかかるって言ってるんだよ——寧ろ僕にはそんな意図を感じてならない。2の選択肢は他のクラスからすれば代償に対してメリットが少なすぎる」

言ってみれば兵器の使用制限を下げると言うもの——相手からすれば容認は出来る筈がない。

もしするなら同等のものを有して互いに牽制できる形でなければならぬ——その意味では3は抑止力としては有効と言える。

「そして当然?クラスとしては受け入れられない——今のまま行けば、全会一致はありえない。

退学者かクラスポイントの損失ってデメリットを抱え込むだけだ。

なら確実に恩恵を受けられる1で全クラスがプロテクトポイントを得るのが唯一の妥協点だよ」

平田は言いたいことを言い終え、皆はどう思うという視線を向ける。

ただ向けられはしたものの理に適った説明に対して早々に意見が上がらない。

他クラス、それもリーダーたちの性格や心情からして退学者を出しても3を選択するかも知れない——結果、選択が別れ何も得られないままで？クラスからも退学者が出る。

一番考えなければならぬリスクに不安感が格段に上がった——それを見越して平田は一転して普段通りの優しい口調で言った。

「大丈夫。最初に言ったでしょ、退学者が出る場合は僕が責任を取るって——皆は何も心配しなくていい」

これに心が軽くなる者も多かったが、逆もまた居た。

「駄目だよ！平田くんが退学するなんて!!」

王が真つ先に声を上げてたちが上がる。

「そうだよ」

「そんなの嫌だよ」

それに続く女子たちに男子からは嫉妬が湧くが、

「平田が居なくなるのは？クラスの損失だ——俺も容認できない」

冷静に意見を述べる例外も居て、すんなりとは纏まらない。

そこに櫛田が冷や汗を浮かべたまま、重い声で発した。

「だったら私が退学する」

「ちよつと櫛田さん。意見を言うならもう少し——」

落ち着いてからと言おうとしたのに被せて櫛田は、壇上に立つ平田と堀北に何を考えていると言わんばかりの言葉を投げた。

「二人とも。船上試験での話し合いを忘れたの？」

3を選ぶ時のリスクはその程度じゃ済まない——それでも選ぶなんてことになったら………はあ、はあ、はあ

「ちよ、ちよつと!!」

言い終わる前に櫛田は過呼吸を起こし始め、直ぐ近くの席の者たちが駆け寄ろうとするが、

「櫛田、ゆつくりと深呼吸しろ」

既に綾小路が背中を摩っており、焦点の定まらない目をした櫛田に目を向けられる。

「約束はちゃんと守る——これくらいしか言えなくて申し訳ないが、今直ぐどうこうなりはしない。もう喋らなくていいから、気持ちを着ち着かせることだけに専念しろ」

ただ事じゃない様子に皆がドン引きしてしまう。

その流れで話し合いの中断を提案する者も現れようとしたが、

「クラスでの結論を出そう。じゃなきや、これは収まりそうもない。ちなみにオレは平田同様に1を選ぶべきだと考えてる」

綾小路がはつきりと続行を呼びかける——そして不安定になっている櫛田の姿にそれしかないと思いが続々と出た。

「選択肢については2がいいと私は思うけど、まず考えなきやいけないのは退学者を出さないようすることじゃない？」

まず松下が問題の核心部分を提起した。

「そうだよ。嬰兒くん一人の為に誰かが退学になるなんて、やっぱりおかしいよ」

「それは他のクラスだって大なり小なり同じだと思うし、皆で得する1がやっぱり妥当かな？」

「何より無人島の時を思えば嬰兒が自由になる選択肢なんてナンセンスだよ」

「平田の言う通り、3を取ろうとする可能性もデカい。そうになると妥協点は1しかない」

まずは平田の意見に賛同する者たちが優勢になった——綾小路が賛同し、櫛田も同様であろうと言う状況が手伝い、クラスの主力に着こう言う流れが出来た為だろう。

堀北、並びに松下の意見は封じ込められたに見えたが、

「話は逆だろ——これまでと言うか、この間だって学校中を巻き込んだ騒動になったんだぞ。試験だけじゃないんだぞ、この学校は」

「そうだよ。場外乱闘なんて仕掛けて来たり……それでなくなつて不測の事態で危ない目にあうことだってあるんだよ」

幸村が異を唱え、更に長谷部も続いた——特に長谷部は佐倉を視界

に収めながら、より真剣なニュアンスで訴えるようだった。

「その通りだ——Aクラスに上がるだけじゃない、不測の事態が起りにくくするのに嬰兒が居るってのは大きい」

三宅もまたそれに賛同した——そしてそれは同じグループだけでは無い切実さが籠っていた。

「そうだよ。もう十分にただの生徒じゃないって分かってるんだし……もっと堂々としてられるだけでも全然違うでしょ」

軽井沢が立ち上がり訴えた——実際に彼女は試験外で仕掛けられただけに説得力が格段に違った。

もし軽井沢同様に自分たちも予期せぬ事態に遭遇したら——そんな考えが生まれ、嬰兒とその後ろにある絶対的な抑止力はあった方がいいんじゃないか？

いやそれでも全クラスで選択がバラバラとなり退学者が出る事態になったら？

そうした者たちとクラスの意見が二分される事態になり、教室内では不和が生じる。

無言のまま、我関せずなのは高円寺と嬰兒の二人のみ——高円寺はいつも通りだとして、話題の原因であり当事者である嬰兒も不気味な程に沈黙を貫いているのは異常とも言える。

やはり試験内容からして背後に居る輩の逆鱗に触れたか——生徒たちで処遇を決める体裁であることから、まだ情状酌量の余地はあると言う事か？

いずれにしても何も言わないのか、言えないのか全く話に入っていない訳は並々ならぬ興味を湧かせるものでもあった——故に悪乗りする輩も現れる。

「いつそのことさ。こつちも3を選んでみるってのは？」

「山内くん、何を言い出すんだ!!」

「ひっ!!」

平田の怒鳴り声に委縮し固まってしまおう——その態度になんとなくの乗りで言っただけなのは明白であり、加えて平田だけでなく数多くの非難の目を浴びせられる。

「い、いや……俺はただそれなら足並みが揃うんじゃないかと」

苦し紛れの言葉だろうが、完全に理に適って無い訳でない——それでも仲間を危険に晒す選択肢を提案したのは流せるものではない。

「いっそのこと、クラスからの退学者は山内でいいんじゃない」

「な!?!なんだよ、それ!!」

「だって嬰兒くんが退学してもいいってなら、自分もそうなったってさ」

「ああ、相互主義って奴か」

「確かにそれもありかもね」

「おい！俺は退学者が出ないようにつて提案しただけだろ！」

「そう言うの取って付けた言い訳って言うの——んな考えなしのズボラなんて、真っ先に切られても仕方ないじゃん」

「ふざけるなよ！それを言うなら、一番何もしてない高円寺が退学すべきだろうが！」

これもまた苦し紛れに出ただけだが、的外れでもない為に山内に同調する者も現れる。

「それは一考の価値有りだな」

「俺もそう思うぜ」

最初に池と須藤が、そしてクラス中から視線が集まった。

「ふふふ。なんとも陳腐だね」

注目が集まったことで高円寺が口を開いた。

「なんだよ。自分は安全だって言うのか？」

いつも通りの不遜な態度に須藤が真っ先に反発する。

「その通りだよ、レッドヘアークン——さつき堀北ガールが言っていないじゃないか、分からないことを議論していても仕方ない」と

堀北の名前を出されて事で須藤の勢いが怯む——そんな様子に構うことなく高円寺は更に続ける。

「ティーチャーはペナルティについては最後に伝えると言った。つまりその場合は既に決まっていると考えるのが道理だ」

「あ、そんなのオメエの勝手な思い込みだろうが」

「分かってないねえ。この狂言に学校側が示す理念は一切含まれてい

ない——特例を通り越した「異例」なのだよ。そんなものの為に更に余計な時間を割くなど勿体な事をする訳ないだろうに」

省略できるところは省略する——それでも試験と銘打った以上は決着を付けさせる。改めて矛盾を指摘したことで新たな不安が沸き起こる。

「それからして私である可能性はない。君たちが気に入らないと言うだけで優秀な者を切るなど実力主義とは言えない」

迷いなく大胆に自分には関係ないと言い張る姿はいつそ清々しさすらある——しかしそれでも憶測の域を出ない話でしかない。

クラス内での総意によって決める——そんなやり方が待っていたとしたら誰一人例外なく退学になる可能性がある。

だからこそ高円寺は自らが優秀であること、潜在能力が高いことをそれとなく示している。

(と、こんな感じか)

綾小路はそんな推論を浮かべながら、あくまで客観的に話し合いを見定める——と同時に自分の中でも定まっていけない結論を思案する。

単純に考えれば2が一番だが心に引つ掛かるものがあり、あえて1を提案した——そのただの勘とも言える選択故に論拠を持って発言できない為、話し合いに参加することは出来ない。

しかしクラスが二つどころか、更に意見が分かれる展開になれば既に1を推した自分を引き入れようとするのは必定——悠長に考えている余裕はないと冷静に状況と心情を整理する。

(オレ自身の中で答えが明確でないなら、言えることはひとつしかないか)

ただそれも率先して口に出すことは気が進まない——おかしなジレンマに思考が余計に纏まらなくなりそうで、珍しく自分自身が不快に思えて来た。

そうこう考えている間にも時間は流れ、各々が意見を言い合う——見ようによっては活気ある議論が展開されていく。

そして、いよいよその時が来た。

「綾小路くんも平田くんに賛成だったよね。理由を聞いても?」

「ただの消去法だ。3は望ましくないし、2も捨てがたいがそれで嬰兒のワンマンにでもなった日には有栖が失望するからな——有栖も大変なのは続くがそこはオレが力を貸すって風に説得すれば1で妥協してくれるんじゃない？」

とどのつまり、坂柳とイチヤイチャするのを見越して……そんな惚気にしか聞こえない理由を聞かされ、場は一変に白けてしまった。

それは平田も同様だったが、綾小路の台詞のろけの中で使えるものは聞き逃さなかった。

「坂柳さんが大変なのは同情するけど、嬰兒くんに頼り切る状況が出来上がりかねないのはクラスとしていい事とは言えない——クラスとしての団結はある程度は成熟してるけど、それはもっと高めて行く形の方がより長い目で見たらプラスなのは絶対だ」

「それなら嬰兒くんがまた妙な気を起さないように皆で団結するって形でもいいんじゃないかしら？」

しかし堀北とて簡単に主導権を渡すような真似はしない——牛井嬰兒と言う特殊要因を最大限活かす形を提案することで自らの意見を強く前に出した。

「そうだけ、鈴音の言う通りだ。俺たちだって今まで頑張ってたんだぞ——嬰兒が自由になるからって、もういいなんてグズは居ないに決まってる！」

「須藤くんと同じく私も堀北さんに一票入れる——折角、超強力なカードが使えるチャンスなのに棒に振るなんて勿体ないよ」

「松下さんの言う通りだよ——あたしも2を選ぶことが絶対にいいって思う」

軽井沢が断言し、唯一張り合える櫛田は相変わらず不安定で何も言わない為に女子たちの殆どが賛同の流れに傾く。

「俺もやっぱり戦力アップの機会を棒に振るなんて賛同できない」

幸村の冷静な意見に男子たちも同じ流れに沿う形が出来上がる。

「綾小路くんもその方向で坂柳さんを説得してくれないかしら？」

この流れに乗って堀北が締めに入りに来た——ここで綾小路が肯けば平田も折れざるえなくなり？クラスの方針は固まる。

「悪いが出来ない」

ただ綾小路はきっぱりと拒絶した——これにより再びIを支持する者たちが息を吹き返す気配を見せた。

「どうしても嬰兒くんを自由にすることを容認できないと？ 貴方もかなり同情して筈だったと記憶してたけど？」

それを察して堀北は軌道修正の意味も込めて問いただす。

「嬰兒が自由になりたいと思ってるのは分かり切ってるし、出来るなら叶えてやりたいのも嘘じゃない——ただそれで有栖の負担が減るかは疑問だ。場合によつては今以上に厄介になりかねない」

とどのつまり牛井嬰兒よりも坂柳有栖の方が大事であると言う事——かのじよ幼馴染がより悪い状況になる可能性があるなら、今のままの方がまだマシだとの主張。

とことんブレない綾小路の行動原理は怒りを通り越して清々しさを感ぜさせる。

しかしだからと言って肯定することが出来るかは話が別だ。

「そうね。貴方からしたらクラスや嬰兒くんよりもお嫁さんの方が大事よね——けどそれなら尚更、嬰兒くんが可笑しなことしないように貴方が頑張る方がいいんじゃないかしら？」

堀北がたつぷりと嫌味を込めた苦言に多くが賛同の視線を送る——ただ全てではなかった。

「ちよつと待ってよ。話が逸れて来てる！」

松下の叫びに場の空気が一瞬固まった。

「まずは全クラス一致で退学者を出さないようにってことだったでしょ——なんで惚気と僻みの言い合いになるの？」

そのズバリの指摘に流されそうになった面々は気まずそうに顔をそむけた——そして凶らずももつともものめり込みそうだった堀北は恥ずかしさに頬に赤みが差した。

「んん！その通りね。その為にクラスの方針を固めるのが趣旨だったわね」

いかにもな咳払いをして仕切り直す。

「まずは現状を整理しましょう。選択肢の中で3はありえない、戦力

アップの2と他クラスの妥協点として妥当な1のどちらかにするか——これが今までの話の中で出て来た中身で、

今の議題で適してるのは不本意ながら1であることは明らかね」

自らの推す選択肢が不適切であるとしながらも話を進めようとする姿勢に一応の纏まる気配が見えた。

「そして議題に合わせるなら、他クラスがどの選択肢を選ぶようになるか——掘り下げていくと退学者を出さないようにするか、退学者を出しても望んだ選択肢を取りに行こうとするかね」

相手に合わせて妥協する——聞きようによつてはそう感じる説明だが、堀北の顔にはそう書いてはいなかった。

「もし後者の場合だったらクラスポイントで後れを取る私たちは、ただ退学者を出すだけで終わってしまう——それでも取ることが出来ても大量のクラスポイントが無くなればAクラスでの卒業が不可能になってしまう可能性もあるわね」

正に本末転倒な結果だ——これに安易な戦力アップを期待していた者たちは、その浅はかさに気ままずさを覚えた。

そして改めて目指すべき目標を明確にした堀北は自らの心中と考えを整理して発言した。

「目先の事だけじゃなくて、もつと先も見据えましょう——例え嬰兒くんが全力を出せたからってAクラスになれるとは限らない。今までのポイントを使い切つても価値があるかとは言えないわ」

「つまり堀北さんも1を持って他クラスと妥協点を探るのに賛成ってことだね」

「平田くん、最後まで聞いてくれないかしら。大事なのは嬰兒くんのために誰かが退学になるなんて、おかしなことを回避することで選択肢そのものじゃない——場合によっては2の選択肢を望んでくる可能性を否定できないわ?」

話の流れはどつちつかずの結論になろうとしていて、不満を感じる者も多く出た。

「だから? クラスは3を絶対に選ばない——そしてその上で他クラスが選んだ選択肢に合わせる。これでどうかしら?」

ただその程度の事は堀北も織り込み済みであり、簡潔に纏めた結論を言う。

「他が割れたらどうするんだ？」

「3を含めた二対一になったら3じゃない方に、3を含めない二対一や3つがバラけた場合はより勝ち目のあるクラスの選択肢を選ぶわ」
聞きようによつては卑屈で卑怯とも言えるが、誰一人切り捨てる可能性を低くすると言う姿勢においては間違つてはいない。

「もし、他が同じ方針だったら？」

「それなら他クラスも自クラスから退学者を出したくないつて結論よ——現状維持か、特例に振り回されるのが嫌かを確認して結論を出せばいいわ」

冷静に理路整然と淡々に話を進めて行く。

「最後にもし退学者を選ばなきゃいけない場合」

再び緊張感が高まった——平田が立候補していると言っても他が望んで無いこと、高円寺や山内と言った声が上がったこと、また学校側は既に決めていて議論することが無駄である可能性とここまでに上がった意見にどうするか固唾を飲む。

「嬰兒くん、私は貴方を指名するわ」

「ちよつと、堀北さん！何言つてんの!?それなら私が退学するよ、今直ぐに!!」

櫛田が立ち上がつて絶叫した——これにはクラス中が慄いたが、綾小路が透かさず背中を摩つて興奮を沈めようと静かに言う。

「堀北。考えがあるなら先にそつちを言え」

櫛田が何に脅えているのか分かつているはずと非難を込めた目で、適当な答えは許さないと要求する。

「ええ、配慮が足りなかったわね。まずはそれを謝罪するわ」

「そう言うのはいい」

「せっかちなね。それじゃ順番に説明するけど、そもそも今回の騒動は嬰兒くんが発端であり、回りくどいやり方で抑え込もうとする意図がねじ曲がつて起きた事よ」

「つまり責任を取れと？」

「嬰兒くんの特例を与えた人たちにね——試験に則つての自然な退学つて形でならどうするのか？また新たな特例を用いてくるのか、それともすんなりと受け入れるのか？」

嬰兒を挑発、もとい試すような物言いに緊張感がどんどん高まっていく——これには流石に高円寺も気になるのか、目をしっかりと開いて嬰兒に向けた。

そして当の嬰兒は何でもないように自然体のまま、何も言わない——無言なのは、やはり何も言えないからか？

これには本当に牛井嬰兒が退学してもと思わされ、櫛田が冷や汗を増していき開放している綾小路の顔にも少し焦りの色が見え始めた。「何も言えないのか、言わないのかは分からないけど。嬰兒くんに異論を挟む気は無いと言う事でいいわね」

堀北は途轍もなく強引に話を締めようとして来た——このまま終わらせてはいけないと異論を上げようとするが、

「もしもそうなくても嬰兒くんなら自力でどうにかする算段は付けられるでしょ——これまでだって不満があるのを我慢してたんだし、失うものが無くなるなら遠慮は要らないんじゃない？」

反抗する気なら正攻法でやれ——そう遠回しに言い放ち、庇おうとする者たちを牽制して嬰兒本人にも発破を掛けた。

緊張感に加えて危機感と奇妙な高揚感が生じて、そうなら見てみたい”と言う好奇心が教室に行き渡った。

全体の空気感は嬰兒に何かしらの反応を求めていたが、それでも嬰兒は何も言わない。

やはり自分の意見を出すことを止められているのか——そう確信に近づくと同時に追い詰められて反逆を決意した時の想像に僅かな例外を除いて？クラスの心が纏まっていく。

そんな確信を抱き堀北は揚々とした態度で締め括りに入る。

「それじゃ、この方針で他クラスとの話し合いに臨むわ——それでも不測の事態が起きかねないから、皆も心して置いてちょうだい」

これにて話し合いは終了し大方が帰り、話し合いの算段を付ける為にと残った綾小路は堀北に近づいて行く。

「堀北。学校側がもう退学者を決めてたら皆で戦うのか？」

本来なら先の話し合いで言うべきことを二人だけの時に言う——この意図に堀北は無意味な引き延ばしは不毛だと簡潔に答えた。

「理論武装はしてるでしょうから異議を唱えるだけ無駄でしょうね」

「あくまで嬰兒だけの場合に学校と戦う訳か」

「嬰兒くんの事情は解らないし、公に出来ない以上は覆す可能性は見出せるわ——ただそれ以外の場合だと勝ち目があるとは到底思えない」

「下手すりゃ、巻き添えで退学も有りえるか」

「そう言う事ね」

嬰兒の場合なら上の判断で振り回されているとも言えるので感情論を際立たせての反論も可能だが、学校側の査定による退学ではただの生徒が異論を唱えても意味はない——何故なら退学させるだけの理由は既にあると言う事なのだから。

仮にこの試験そのものに反論を試みたとしても、それならそれで嬰兒を引き合いに出す必要が出て来て、最悪の場合は学校の存続に関わる問題にまで発展する恐れがある。

……それは綾小路が絶対に許さないだろうと堀北は考えを進めながら、小さな溜息を付いた。

「なんだ？」

「……………最悪を想定してたら、まず最初に？クラスが崩壊する光景が浮かんでしまったわ」

「おいおい、オレにそんな意思はないぞ」

責められるような目を向けられて綾小路は弁明したが、

「そこに坂柳さんの進退が関わってたとしても？」

さらなる追求に一瞬言葉が詰まり考えさせられた——その様に思いつまると念押しする気も失せてしまい、堀北は更に大きな溜息を付いた。

「はあ。まったく前途多難だわ」

「…………ちよつとだらしがいいな。この際だから嬰兒をものにする位の気概でも見せてもいいんじゃないか？」

「皮肉のつもりかしら……だとしたら、もうちよつと気を利かせて欲しいわね。そんな詰まらいのじゃ却って白けちゃうわ」

皮肉に対して皮肉を返す応酬に些か不毛さを感じ、会話を打ち切ろうとも考えたが、

「まだちよつと覚悟が決まらないのよ」

堀北が弱音とも取れる言葉を吐いたことに驚き聞くことにした。

「当初は嬰兒くんを御すことが出来れば、そのすぐ後も彼への圧力を緩和することが出来ればAクラスへの道が確実に近づくと思ってたわ——ただあの審議との時から、その程度の認識じゃ駄目だと悟った」

「要はビビったのか？」

「そう取られても仕方ないわね——はつきり言つて今の私の手に負えないのは間違いないわ」

「……ひよつとしてだが、クラスのリーダーから降りるなんてのも考えてるのか？」

会話が不穏な流れになり、思わずと言つた感じで尋ねられた——ただ、堀北は一転して不敵な顔になり首を横に振る。

「いいえ。私はただ見極めたいのよ——牛井嬰兒と言う生徒が？クラスの為になる形がどういう風になるのかを」

この返答に綾小路は不審から一転して意味深な顔になり、堀北鈴音の意図を——先程までの話し合いの流れを改めて思い返してひとつの結論を得た。

「クラスメイトを試したか？」

単純に2の選択肢を持つてクラスの戦力アップを求めるのか、それとも他の選択肢を持つて別の形で上を目指すことにするのか？

平田もグルだとも一瞬思ったが、彼の性格と心情を考えれば語ったことは本心だったのは間違いない——堀北としてはそれでも良かったが、敢えて反発を見せてそれに乗る者たちの意見を上げて議論を戦わせたかった。

ひとつ間違えるとクラスが崩壊しかねないが、それをしてもやる価値があると判断した——その考えの先にある物は、

「私は皆の力でAクラスに上がりたいの——それには嬰兒くんも含まれてるわ。ただ頼り切るんじゃないやなくて、彼が困っているならクラスで結束して乗り越えていきたい——馴れ合いじゃなくて全力を尽くす形で」

この学校が置く最終目標に彼女なりの具体性を練り込んだ。

「それが私の目指すクラスの形よ——仮にそれで失敗して、Aクラスに上がれなかったとしても更にその先の人生には絶対に糧になる。そう信じてるわ」

自分の力、または自分が中心になってでは無く、自分を含めてクラスをひとつに——入学当初の堀北鈴音では想像も出来なかった考えを聞かされ、綾小路は『成長したな』と実感した。

そんな上から目線の意図を感じ取ったのか、堀北から棘のある言葉が出る。

「ちなみに退学者の指名候補には貴方も入ってるから忘れないでね」

「おいおい」

「貴方がクラスの中では一番信用できない——前にも言ったけど、坂柳さんの為だからってクラスを後ろから刺す真似は絶対に許さないから、それはしつかりと心に留めといてちょうだい」

「尤もらしい理由があれば容赦しないか」

「坂柳さん、Aクラスを説得する材料に使えるなら何だって使うわよ」あくまで目的のための手札のひとつである——そんな理由を付けての牽制に堀北の成長に複雑な気分が湧いて来る綾小路であった。

そして、そんな心中にされされながら思った。

(さて、その肝心な有栖や他はどうして来るか?)

選択肢が・・・

Aクラスの場合――

「まず私の結論を先に言います。私、坂柳有栖はこの試験においてどの選択肢にも興味がありません」

壇上に立つ坂柳のその発言に皆が驚きを隠せない――後ろに控えている神室も同様であり、顔に「何故？」と書いてあった。

「私個人にとってはどの選択肢を取ってもこの先の苦労は変わらないでしょう――ですからAクラスの利益を最優先に話しを進めて行きます」

「何、普通の事を大袈裟に――当たり前だろうが」

戸塚が噛みついて来たが、今までの坂柳に接した来たクラスとしては珍しい事態であり、寧ろそちらの方に興味を湧かせるのだった。

故に好奇心を抑えられないのも出て来る。

「お姫さんがそうしたいって言うなら従うけど、本当に何もいいのか？」

てつきり3を選んでどうでもいいのと一緒に退学させるぐらいはやると思ってたんだが」

まずは橋本が。

「同感ね。それだってアレを牽制するには持って来いだし、クラスの為にもなって理に適ってる」

同調して神室が続いた――坂柳の側近二人の遠慮のない意見に慄いていた者達も胸の内を言う。

「確かに2の選択肢で特例がなくなっても、余計な揉め事が起こらなくなる保証はありませんしね」

「と言うか、何も変わらないなら1を選んでもいいんじゃない？」

冷静な意見を述べる森下藍と無難な選択を提案する山村美紀――坂柳が提示した通りに話を進めようとする。

その根底には物騒な事には関わりたくないという思いがあるようだ——そう察しながら葛城も意見を述べる。

「選択肢の中で最も明確な利益は1だ。クラスメイトの退学を回避出来るなら喜ばしい、俺も一票入れる」

「そうだぜーもうそれで決まりでいいじゃねえか」

殆ど反射的に戸塚も声を上げたが、クラスの反応は著しい——かつて葛城派だった面々も同様で無条件に賛成は出来ない様子だ。

女王である坂柳はどう判断するかと注目が集まったが、肝心の彼女は無表情で何も言うつもりは無いようであり、仕方なしとまた橋本が否定的なニュアンスを込めて口を開こうとしたが、

「それでいいとしても他クラスの選択肢が別れて、クラスポイントとでの入札となった場合はどの程度の上限を設けるつもりで？」

森下が静かに落ち着いた口調で問題の深堀を求めて来た。

「なんだよ。ポイントは目一杯引き離してるんだから心配ないだろ」

「……戸塚。流石にそれは浅はかだぞ——この試験だけでリードしてる分を一気に使い切るつもりか？」

「森重の言う通りだ」

「ああ、たった一人の為にAクラスじゃなくなるなんてゴメンだ」

「そうなると退学者を誰にするかも決めなくちやか？」

話の流れが不穏な方向に向き、その目は必然的に葛城と戸塚に向かった。

「なんだよ。俺たちに立候補しろってか？」

戸塚は当然抗議するが、葛城はすまし顔のまま言う。

「それがクラスの総意なら俺で構わない」

「葛城さん!？」

「弥彦、誰かがならなきやいけないんだ。」

それにあくまで候補だ——絶対に退学すると決まった訳じゃない葛城は坂柳に視線を送る。

「そうですね。私も詳細は存じませんが、もう学校側が決めている可能性もあります」

「だったらこんなこと話し合うだけ無駄じゃねえか！」

「かも知れませんが、そうでないかも知れません——なんでしたらクジ引きで決めますか？もしそれで私になっても文句は言いませんよ」

「……………あの、お二人はそんなに退学したいんですか？」

「いやそうじゃないだろ。最終的な責任は自分が取るって言ってるだけだろ」

Aクラスのリーダーとかつてのリーダー候補の態度に唾然とした問いが出て来た——これに橋本は不味いと感じ、即座に補足する形で流れが悪い方向に行くのを阻止した。

「立派な事だと言いたいです、それをやるのはまだ早すぎますよ」

「そうだぜ。まだ俺たち一年なんだから」

「それにこんなバカな決め事で誰かが切られるなんて、そもそもおかしいだろ」

クラスの流れは試験そのものへの不満と不振に向かう——そこに森下が手を上げて興味深いと言うニュアンスで坂柳に訊いた。

「坂柳さんはどれでも良いと仰いましたが、それならこの試験そのものに対して抗議すると言った4つ目の選択肢を他のクラスに提案して直訴すると言うのはどうですか？」

凄まじく大胆な提案にクラスは一瞬、時が止まったかの様になった——ただ直ぐに冷静さを取り戻した者たちは大いに有りかもしれないと思つた。

「なるほど——確かにそれは面白そうですね」

坂柳も肯定するように言うが、何の感情も籠ってない棒読みなニュアンスからは全く正反対の印象を受ける。

それは直ぐに現実になった。

「となると出る所に出るの法廷闘争となりますね——当然、学校のポイントじゃなくて費用も自前で用意しなければなりませんから親御さん達とも相談しなければなりません」

「ちよ、ちよっと……大袈裟にし過ぎじゃない!？」

「いいえ。相手は躊躇なくそうしてきますよ。彼の存在自体が特例と言つても過言ではないのですから、それを是正するなら正攻法で行きましょうと——笑顔で言つて来るでしょうね。勿論、負けた場合は退

学程度じゃ済まない可能性もありますから、そこも考慮しておいた方がいいですよ」

「そこまでするの……理事長代行って？」

「父の場合でも大して違わないと思いますよ——と言うか、試験に關しての異議に対して運営側が何のカードも持ってない訳ないじゃないですか」

「いやでも、明らかにおかしかったり理不尽だったりなら抗議するのは普通でしょ」

「学費や生活費はおろか、娯楽に至るまで面倒見て貰ってるのは、そんな理不尽を乗り越えられる実力を身に付ける為だと返されるでしょうね——そんな理不尽を正すなら、卒業した後で政府に働きかけるのが道理だと」

余計に話が大きくなり始めてクラスがドン引きし始めた。

「養われてるガキは大人しく言うこと聞いとけと？」

「少なくとも政府主導の学校を脅迫したり訴えたりするなら、第三者である法定機関が出る必要はあるでしょう。そして学校からの恩恵を全て取っ払った上で戦う——私たちが今こうしているのも国民の皆様からの税金なんですから、その投資に見合う実力を身に付ける義務が私たちにはあります」

肅々と語る坂柳にクラスはいつの間にか引き込まれた。

「戦うと言うなら相手を舐めてはいけません——敵を知り己を知らねば返り討ちにあうのが関の山です。」

元よりこの問題に關しては私たち一生徒のものと同列に扱うことは非常に危険です——私がギリギリ言えるのはここまでですから、それでも戦うと言うなら各自の責任でお願いします」

ある意味で裏切りとも取れる宣言だが、それだけ大きな力が動いている——それを教えてくれるだけでも有難いと思うべきか？

複雑な思いがクラスを駆け巡り、牛井嬰兒だけでなく坂柳有栖も面倒な立ち位置に居ると同情の念も湧いた。

「坂柳さんも苦しい立場なのはお察しします——ただこの試験について戦うと言うのは、もう少しだけ話し合いたいですね」

「珍しく積極的だな、森下」

普段は大人しくクラスの方針にも絡んで来ない彼女の姿への指摘に注目が集まる。

「はい。今回の試験は何とも興味深いですから——あれだけの実力を持ち、特別扱いされている牛井くんの事が気にならない訳がありません」

言われてみれば至極当然だとも思える動機を語り、

「ま、それもそうだな」

同意する声にくすぶっていた好奇心が刺激されて話が進んでいく。

「そう言う事なら牛井が前に出て戦うように持つて行くのはどうだ？ あいつだって、上の都合で振り回されるのは嫌だろう」

「それなら普通に2を選んだ方がいいじゃねえか」

「いやいやそれで特例が無くなれば、？クラスが得するだけだろ」

「だからそれで恩を売って、その上でこっちに來て貰うんだよ」

「それ、いいな」

「ああ、本来なら牛井は最初からそうなるべき奴だ」

「クラスの利益に尤もなる」

牛井嬰兒をAクラスに招き入れる——この方向で話が盛り上がっていくが全く賛同できない者も居り、その筆頭格が発言した。

「彼が来ることが利益になるとは限りませんよ」

坂柳の静かな声に場の空気は一気に静まり返った。

「それはつまり圧力はこれからも続くかと？」

「分かりません——ただ彼を野放しにすることを良しとするとは私には到底思えません」

森下の指摘に無難に答え、ひと呼吸置いた後で切実なニュアンスで言った。

「それになんだか、その選択が彼の為になるとは思えないのですよ」
「つまり私たちの知らない裏があるか？」

この質問に対してもまともに答えてくれるとは思っていないが、それでも何かしら推測を得る手掛かりまでは持つて行ける。

そんな感じの会話が続き行くと誰もが思っていた——故に坂柳

の口にした答えは意外のひと言だった。

「これは全くの私の直感です」

「え、勘ですか？」

「勘です。ですので明確な根拠などありませんから、私の意見は聞き流してくれて構いません。最初に言った通り、あくまでクラスの利益になる選択を最優先にする——その為に議論を続けて行きましょう」
淡々と澄まし顔で言う姿は、ある意味で何かを悟ったか諦めているかのように盛り上がりを見せた勢いが完全に殺されてしまった。

坂柳有栖の実力を疑う者などAクラスにはいない——その彼女にここまで言わせるのだから、異を唱えるなら相応の覚悟が必要だとの認識が浸透される。

その相応の覚悟は退学になる程度では済まない——下手をすれば自分だけでなく親兄弟にも被害が出るかも知れない。

先の坂柳の話からの補強としては十二分であり、嫌な実感がゆっくりと湧き上がって来る——そしてAクラスだろうと自分たちは一生でしかないと当たり前のことを思い出す。

「それで結局、森下さんはこの試験に抗議するのがいいと？」

「いいえ。牛井くんの為に我が身を犠牲に出来る程にはお人好しにはなれません——少なくとも彼自身が戦うとも言っていないのですから、その意思を確認してからにすべきでした」

あっさり引き下がり、試験に対して抗議する選択肢は消えた。

そして本題、どの選択肢にするかで仕切り直しが始まる——坂柳は下がり代わりに橋本が前に出る。

「それで結局、どの選択肢にするかだが——俺個人の意見としては、やっぱり3が一番メリットな気がする」

「それに関しては私も異議はありません——捨て身とは言え、彼の行動を制限できるカードは有用です」

森下が間髪入れずに賛成に回った。

やはり嬰兒に関しての興味は尽きないようだ——嬰兒に対して提示できる強力なカードを手に入れられるのは、彼女個人の好奇心だけでなく周りにも躊躇なく使用できると言うのはAクラスとして大き

なインパクトを与えることが出来る。

そう考えるのは森下だけではなく、主に坂柳派——特に当初から彼女を支持していた者たちも賛成に回った。

ただ、それに待ったをかけた者も居た。

「3を選択することを？ クラスが認めるとは思えん——その場合はクラスポイントによる入札となるが、一体いくら支払うつもりだ？」

葛城の淡々としながら理屈を交えての反論に出来上がりつつあった流れが寸断される——ただそれ以上の反対意見は出て来ず、殆どが水を差されたことに不満の視線を送った。

一学期までと違い完全に異物として認識されている。

唯一の味方である戸塚は声を上げたかったが、葛城の無言の圧力により黙らされていた。

無視して話を進めるべきかと思う者も居たが、意外な所から助け舟が出された。

「それもまた筋の通った意見です——私としても理想は全会一致で難に終わってくれる方がいいですし」

坂柳の言葉に議論の必要が有りとクラスに浸透し、仕方ないと言わんばかりに橋本が口を開く。

「それじゃ、まずは他クラスがどれを狙って来るかを予想してみるか」「そうだな。違ったとしても前提を踏まえなきゃ話が纏まらない」

そして再び葛城と戸塚に注目が集まった——とても悪い意味に思えるものが。

「繰り返すが、切り捨てるなら俺で構わない。もし既に決まっているなら潔く受け入れる以外ない——これでこの話題は終わりでいいだろう」

葛城が堂々としながらの宣言に拍子抜けにも近い感覚になる——が、だからと言って自分が立候補するなどと言う者が表れる筈もなく、唯一不満を持つ戸塚もある意味で自分の為にと言ってくれた宣言に異を唱えにくく、言葉通り話題を次に進む。

「それで、？ は3を選ばないとして1と2のどっちで来ると思う？」

「普通に考えれば2でしょうね」

「けど、？だって他が歓迎しないことが分らないようなバカじゃないだろう」

「全会一致を一番望んでるのは？なのは間違いないし」
「そうなるとうをを選んでくるのが妥当か？」

議論が建設的に進んでいき、それぞれが選択肢についての考察を披露し始めた。

普段なら一番意見を主張する坂柳が下がり、自由に発言して言い許可を出すという珍しい状況に熱が籠って行き、余り自分の意見を言わないような者からも意見が出る。

「？も然ることながらBやC……一之瀬さんや龍園くんがどう出て来るかも考えるべきでは？」

「確かに龍園なら3を選んできそうだな」

「一之瀬も今回はどう出て来るか、ちよつと読めないよな」

「そうだね。この前の様子からして、かなり頭にきてたみたいだし」

そもその発端からして一之瀬の申請だ——当然、その時に語った彼女の汚点かこも知れ渡っており、これまでなら1を選ぶだろうが今回はどうなるか分からない。

「一之瀬が3を選んでくるとしてBの面々は賛成するか？」

「大いに有り得ると思う」

「だよな。無人島試験の時だって牛井にやられたのは苦い記憶だ」

更に言えば今回の騒動だけでなく、その前のCと？の審議に關しても最終的には牛井嬰兒が裏で糸を引いていたんじゃないかとの噂があるくらいだ。

だからこそ坂柳も面倒な立場に追いやられてしまったとすれば、今の状況にも納得がいく。

この考察に至った橋本が坂柳を意識しながら発言する。

「いつそのことさ。綾小路を通して？も3を選ぶように説得して貰うのはどうだ？」

出て来た名前に坂柳は僅かに反応し、それをクラス全員が見逃さず

——新たな話題が投入されたことで盛り上がるの様相を見せた。

「悪くないね」

「そうだよな、お嫁さんの為なら頑張るんじゃないか」

「となると説得する材料を考えてあげなきゃいけないかな」

発言する度に坂柳に「どう思う?」とニヤニヤしながら冷やかす……もとい色っぽい視線を送られ、流石に当の本人は顔に渋さが浮かんで来た。

「清隆くんがそうでも軽井沢さんや榎田さんが肯くとは思えませんよ——寧ろ余計泥沼になるだけでは」

「坂柳の言う通りだ——特に榎田が3を選ぶことには大反対するのは予想が付く」

これもまた珍しく葛城が坂柳に同調した——これに船上試験で同グループだった西川、矢野、的場の三人が当時を思い出した。

「いや、いくら何でもあれは方便じゃ?」

「そ、そうだよ——もしやったら犯罪じゃ」

「ちよつと穿ち過ぎじゃないか」

「あのさ、一体何の話だよ?」

橋本の全く訳が分からないと問い、クラス全員も説明を求めていた。

「すまない。もっと早くに話すべきだったな」

葛城がそう前置きして、牛井嬰兒に関して話された事を説明——嬰兒に全力が出せないよう圧力が掛かっていること、その上で嬰兒を御するのは誰が適任かと続き、龍園が追い詰められたら嬰兒は殺人も厭わないと発し、榎田も同調したことを語った。

「ちなみに榎田は詳細に関して話さなかったが、あれは真面目に鬼気迫るものを感じさせた——ハツタリや脅しの類ではないと俺は確信している」

「……………本当か、それ?」

余りの内容に片言な台詞しか出ない、それは聞いていた皆も同じであった。

それは大袈裟に語った、出来るなら冗談の類である——と言う安心を求める期待感が根底にあったが、無言で堂々としている葛城の態度は「事実をありのまま」言っただけだと語っていた。

同じく話を聞いた者たちも同様であり、否が応でも事実であると認識せざるえない。

僅かな、それでいてとても長く感じる沈黙が訪れた——そこに、パンと小さく手を叩く音がして意思が向くと無表情のままの坂柳が淡々と言った。

「シヨックなのは分かりますが、このままで居ても仕方ありません。話を進めて行きましょう」

全く変わらない様子に坂柳は知っていた、またはそうしても不思議じゃないと分かっていたと思わされる。

良くない意味での好奇心が刺激されたが、詮索することは危ういと甲高い警報音が心に響き、この話題について深掘りしてはいけないと暗黙の了解が広がった。

その心の整理を見計らったように坂柳は再び口を開く。

「それで、Aクラスとしてはどの選択肢がベストだと思いますか？それともまだ考えが纏まらないなら、もう少し議論を続けますか？」

「坂柳さん、訊くだけ無駄かも知れませんが彼はと言う経緯でこの学校に入学したのですか？」

しかし空気を読まない質問がまたしても森下から出た——止めさせるべきだと思う一方、知りたいと言う好奇心がせめぎ合って誰もが無言で坂柳に注目する。

「残念ながら知りません。そして彼に関することは私ではどうすることも出来ません——あくまで私もこの学校の一生徒でしかありませんから」

「それにしても見えない所で何かしてらっしゃるようですが？」

「すみませんが、何も言えません」

「そうですか」

森下もこれ以上は無意味だと悟り、あつさりと引いた——そして別のアプローチで嬰兒の事を探る術を考えよう。

「それでお話を戻しますが、私はこの試験は1の選択肢を選ぶことを提案します」

「つまり葛城と同じく無難に乗り切ろうと？」

「少し違います——2と3の選択肢も牛井くんの状況を悪い意味にしかねない可能性が捨てきれません。そうなるとタガが外れてしまいかねません——故に今まで通り、何処かしら抑え込む力がある方が、牛井くんも長く学校に居られると思つた次第です」

嬰兒への詮索を諦めていない——そう、堂々と宣言する姿に、森下藍はこういう奴だったのか？”と言う思いを抱き、同時に坂柳が何と答えるのかに再び注目が行く。

「そうですね。そうしたいと言うなら止めませんが、何があつても私は何も出来ませんから、くれぐれも注意を怠らないようにして下さい」

「ご忠告、感謝します」

どうと言うことない、短い遣り取り——そう流すには余りにも重い威圧感に、これ以上の話し合いの継続は忌避する空気が蔓延し始めた。

それを敏感に感じ取つた橋本は強引にでも結論を纏めた方がいいと意識して声を上げた。

「ならAクラスとしては選ぶ選択肢は1で——そしてこの後で他クラスと話し合いつて事になるだろうから、そこで意見が別れたら調整するか押し通すかを改めて決める。他に何も無いなら、これで解散にしよう」

クラスからは異論を挟むものは居らず、宣言通りに話し合いは終わり皆が帰って行つた——残つたのは坂柳と取り巻きたちは釈然としないままに話をする。

「なあ、姫さん。ホントに大丈夫か、この学校？」

まず橋本が口を開いた——そして『大丈夫』には掛かる意味が多く、重かつた。

「さて私には分かりかねます。何度でも言いますが、私とて一学生でしかありませんから」

坂柳はその意味を理解していながらの玉虫色の解答を返す——はぐらかされたと、一瞬そう思ったが、直ぐにそれが坂柳有栖の正直な答えなのだと言つた。

「……そうかい。それじゃ話題が変わるが、もし牛井嬰兒をクラスに迎え入れるって方向になってたら賛成したかい？」

「どっちでもいいです」

即答、それもやや語気を荒くして——珍しく投げやりに行った。

「ハッ。今日は珍しいのオンパレードね」

神室のなんとなくと言った発言に無言だった鬼頭も同意する顔だ

——坂柳は少し不快さを顔に出したまま続けた。

「それは良かったですね。もし彼が来たらもつと刺激的な日々になるでしょうから、真澄さんもさぞ楽しくなりますよ」

「いやさ。楽しくなるなら綾小路が来てくれた方が良くと思うんだけど」

皮肉に対して茶化すように意地悪く返して来た——しかもそれは本心でもありそうで、橋本と鬼頭も僅かに笑みを浮かべており、坂柳がたじろいだ。

本日何度度目かの珍しいものに悪ノリしたくなるが、後で仕返しされるのが分からなくなる程には浮かれてはおらず、それ以上の突っ込みはない——それが返って坂柳の行動を鈍化させてしまう。

そして一瞬の沈黙を経て持ち直し、普段通りの笑顔で答えた。

「そうですね。ですが清隆くんとはクラスでの戦いを約束してますので、それは叶わないでしょうね」

「まあ、約束してるのは仕方ないよな——でもそりや次の試験で果たされる訳だし、それが終わったらさ、綾小路を迎えるのも本格的に考えて見てもいいんじゃないか？」

橋本が透かさず話題を繋いだ——他も“どうなのか”と言う目を向けて来る。

そして案の定、笑みが深まっていく——また、いつも通りに惚気交じりの話を聞かされると諦めに近い念を抱いたが、

「私としては清隆くんがAクラスでの卒業を絶対だと思っているなら構いませんね」

「……意外だな。のらりくらりと否定されると思ってたんだが」

「彼が居ないなら、そうだったかも知れません」

「一緒に牛井を倒そうって意味？」

「いいえ、そうではありません——清隆くんへの想いを凄まじく後押しされましたからね」

結婚式ごっこは勿論、直接『結婚しろ』と言われたこともあり、極めつけは坂柳有栖の「ファーストキス」を綾小路清隆に捧げさせられた。

何より最初の接触（？）の時の言葉が無ければ、綾小路を意識することははずつと遅れていただろう。

天才である事を自負し好敵手つよいてきと戦いたいが、一人の女としての恋心がそれ以上になりつつあるとの自覚もあつたりもした。

「へえ、そうなのか——嬰兒がそう思つてるなら寧ろ快く後押ししてくれるかも知れない訳か」

思いも寄らず望む展開へのお膳立てが成されていたことに、橋本は何かの助けいしでも働いているのかと感慨深いものを感じ入る。

それならばと、更に攻めて行くべきかと続ける。

「嬰兒への圧力も二人で対応するってシンプルな形にした方がやり易いかもれないし、その方向で話をして見るのも有りだよな」

「橋本くん。先を考えるのもいいですが、まずは目の前の問題ですよ」
「分かつてるよ。この後でクラスの代表での話し合いをつてのは何処も考えてるだろうし、直ぐにセッティングに取り掛かる」

「お願いします」

「けど今の話、本当に考えてくれよな。絶対に」

橋本は坂柳からの返事も待たずに端末を取り出し教室を出た——殆ど押し付けに近い形を取られたが、坂柳としては心情を理解出来ない訳ではないので少しだけ考えて見た。

（もし清隆くんが私と同じクラスに来たいと望むなら——）

「ちよつと！妄想に浸るなら、部屋に帰つてからにしなさいよ!!」

恍けた表情で笑みを浮かべる姿に神室が突っ込みを入れて現実に引き戻す——側で見ていた鬼頭も無表情なれど、何処か呆れている様であった。

生かして○○

Cクラスの場合――

「さて、オメエら予想は付いてると思うが、俺は3の選択肢を選ぶつもりだ」

壇上に座る龍園の宣言――誰も驚くことなく、さも当然と言った風に次の言葉を待つ。

「とは言え、他が別なのを選んでくるのも予想出来る――入札になった場合に出せるポイントの上限に加えて、勝とうが負けようが誰を切るかも選定しなきゃいけない訳だ」

流れからして至極当然の結論に緊張感が高まっていく。

龍園は一体誰を牛井嬰兒への道連れにするつもりなのか？

自分が選ばれるのではないかと、また親しい者が選ばれた場合はどうするべきか？といつもとは違う恐怖も広がっていく。

ただ、それをしても3を選ぶ価値はあるとクラス全員が思っていた。

「龍園氏、クラスポイントを全て使い切っても取りに行く価値はあるのは皆も分かっています――それでも牛井氏が黙って引き下がるとも思えません。最悪の場合をもっと突き詰めていくべきではないかと進言します」

金田の熱の入った言葉に龍園は逆に冷静になったように言う。

「最悪の場合か――ならオメエの領分だな、ひより」

指名された椎名はより真剣に深く考え込んだ。

「私が聞いた嬰兒くんの話と今までを総合すると、一線を超えることには躊躇しません――加えて最悪となると、それは学校全体それも見境なく行われるのも決して大袈裟ではないかと」

「ようするに皆殺しにするってか……俺も自分の手を血で汚すぐらいの心積もりはあったが、易々と超えて来るって訳だ」

椎名と龍園の想定は物騒などと言う領域ではない——しかし異論を挟むことはおろか、それを考える者も皆無であった。

よって学校中が皆殺しにされる——と言う最悪を前提に話が進められる。

「他にもこの事を伝えて、全体で抑え込みにかかるのは？」

「誰も本気にしないって……私たちだつて『体育祭の後』の事が無きや、こんなこと信じなかつたでしょ」

「けどさ、少なくとも何人かは信じてくれるんじや」

「そうだよ。学校全体で抑え込むって体裁がされりや、無茶苦茶な圧力だつて——」

まずは正面から協力を要請して正攻法で行くべきだと言う主張——龍園も少しの間は聞いていたが、

「あのな、何を弱腰に話してやがる——牛野郎一人の為に残りの学生生活を捨てるつもりか？」

「その通りです。皆さん、何の為にこの学校に来たのかをお忘れですか？」

金田が続いて話の核心を突いた——それに何人かは肯いたが大半は納得できない顔だ。

「言いてえことがあんなら、聞いてやる。言つて見な」

龍園は比較的ゆつくりとした口調で促し、少し間を置いて遠慮がちに口を開く者が出て来た。

「Aクラスになって卒業したいのはそうだけど、だからって死んじやつたら元も子もないんじや？」

真鍋が言う——ある意味でもっとも牛井嬰兒の恐ろしさを目の当たりにしただけに実感がこもり説得力がある。

「そうだよ。命懸けてまで卒業したい訳じゃないし」

「なんなら、ここで全員退学して逃げちやうのも有りな気が」

続々と弱気な意見が出始めた——しかし、それも無理ならぬこと。嬰兒の仕業と思しき体調不良で、死ぬかも知れないと本気で思わされる程の無茶をさせられた。

奇しくも嬰兒自身によつて回復させられ、気まぐれで殺される事は

無いと頭では分かっている、いつ心変わりしてくるか分からないのは恐怖だ。

ハッキリ言って龍園の支配の比ではない——そして龍園翔はそれが理解できないような馬鹿ではない。

「ハッ、そうしてえなら止めねえぜ——俺は一人でも残ってあいつを狩るまでの話だ」

「死ぬのを恐れないと?」

そこに椎名ひよりが問う——その態度は毅然としたものであり、発言した龍園同様に並々ならぬ覚悟を感じさせる。

「んなもん年越す前にとっくに済ませてるよ——命を懸けるに足る価値があるのは、十二分に実感させられた」

「しかし龍園氏、それは今でなくても良いのでは?」

「なんだ、金田——こんなチャンスがあっさりと回って来ると思うほど耄碌したか?」

金田の冷静な指摘に龍園は激高することなく冷静に返した——そして皮肉交じりの内容に同じく冷静さと保っていた者たちは安心した。

龍園は決して自棄になつてなど居ない——普段から暴力と威圧で来る独裁者でも頭の回転は速く目的を見失わない賢さも持っている。

そしてAクラス卒業よりもっと高く大きな目標を見つけ全力で挑もうとしている。

「耳に挟んだ世界の頂点——真偽は分かんねえが、俺は限りなく信憑性は高いと見てる。牛野郎を下し従えれば、俺はそこに喰い込むことが出来る筈だ」

その為には一歩たりとも引く姿勢は見せてはならない——などと言う短絡的な事ではない、引くとしても今はその時ではないと判断した。

故に龍園の目はこれまでにない程にギラギラとした輝きに満ちていた。

「俺も付いていきますよ、龍園さん!」

その雰囲気我真つ先に当てられた石崎が声を上げる——他の側近たちや見てみたいと言う欲望を秘めていた者たちも同じ様な気分にする。

ただ勢いに流されない者も当然いた。

「あのさ。言いたいことは分かるし、俺だつて興味はあるけど、だからつてお前に命まで預けるまでは出来ねえよ」

時任が反対意見を述べた——これにクラスの大半は冷や汗と嫌な緊張が走った。

場合によっては血を見ることになるかもしれない——恐る恐る龍園の反応を窺つて見ると、意外にも反応は冷めたものだった。

「ま、それも筋の取つた意見だな——そして俺に真つ向から否定しに来たつてことは切られる覚悟も出来てるんだよな？」

「当然だ。クラス全員で命を懸けてなんてことになるくらいなら退学の方がマシだ——3の場合は仮に全会一致になつたとしても俺はこの学校から出て行く」

「成程。そつちも覚悟は済ませてるか——なら切るのはオメエで決定だ。俺らの意志じゃない場合はどうしようもねえから、どうにかしてえなら自分でする。これで退学の話は終わりだ。いいな」

「分かつた」

問題がひとつ片付いたが、素直に安堵できない——何より一番決めなければならぬ事はまだ完全には決まつてない。

「それで入札になつた場合はクラスポイントを全部使つても獲りに行くのか？」

時任が龍園だけでなくクラス全体に問うように言う——それで嬰兒への牽制を手に入れてもAクラスに上がる可能性を大幅に下げることになるのはどうかと、分かり易い含みを感じさせる。

例え龍園が語つたようにAクラス以上のものがあつたとしても、所詮は可能性の話に過ぎず釣り合つていゝとは言い難い。

退学を腹に決めただけあつて遠慮なく力強く言う様は、龍園にも引けを取るものでなく先の演説に当てられ浮かれていた者たちも考えさせられた。

「いいや、Aクラスも捨てるつもりはねえ。寧ろそれに沿ってかなきゃ、牛野郎も動けねえから前提条件には一番にしなきゃいけねえな」

龍園はそんな揺れる者達に対してせせら笑うように言った。

大きな利益を見つけても決して足元を疎かないような真似はしない——リーダーとしての器を示しつつ、自らの欲するものと同じであると分かるようにすることでクラスが割れるのを上手に回避して見せた。

この手腕の見せ方に尤も愉快そうにする者が、愉しそうに意見した。

「しかし龍園氏。あれもこれも欲しがっていても、手に入る物も入らなくなるのでは？」

「話は逆だ、金田。全てを手に入れるだけの気概と覚悟を持たなきゃ潰される——どっちかを選ばなきゃになるとしても、早くても三年に上がってからだ。」

まだ一年でしかないのに、そんな枯れたこと言ってちゃ先が思いやられるぞ」

「ははは。一本取られましたね」

強烈な皮肉に思える返しに更に愉快に引いて見せる姿——内容とは逆に龍園の意に沿うことが最も利益になると言う認識を自然に広めていった。

これを即興でやってみせた事に対して、元より龍園に近い思いを抱いて者達からも？このクラスなら」と信頼感を高め、不安に感じてた者達の気持ちを払拭させて見せた。

「さて、他に意見のある奴は？」

龍園が話し合いの続きを促して来る——しかし反対意見は出ない。それを確認し更に自分の意見を言った。

「それじゃ、入札時の話だ——俺としてはクラスポイントを200残すって方針だ」

「おや、随分と手堅いですね」

先の発言から本当に全クラスポイントを使って来ると思っていた

のが殆どだっただけに、この方針は意外だった。

「この後は直ぐに最終試験だからな。そこで一発逆転出来るってなら全ポイントも考えたが、そこまでの博打を打てるかは流石に疑問なんぞな」

この説明を慎重と取るか弱気と取るかは個人の価値観だが、先の事を見据える姿勢はリーダーとしては正しい。

そう。本当の意味での試験は直ぐ控えている——その先もまだ二年はあると自身の発言を踏まえてしつかりと前提を共有させた。

あらゆる意味でその手腕は本物だった——と同時にそれだけ本気で全てを獲得しようとして来ていると危うさに近い物も感じさせた。

故に、

「龍園くん。貴方の熱意は分かります——それがクラスの利益になることも」

椎名から賛同に回る言葉が出るが、その表情はそれだけではないと言ふ切実さがあつた。

「ただそれが本当の、いえ深い意味でクラスの為になるのかは疑問です——もし龍園くんが突然居なくなる事になれば……このクラスは瞬く間に崩壊してしまいます。そして二度と立ち上がられません」

きつぱりと言ひ切つた姿にクラスは啞然とし、龍園は変わらない態度のまま言つた。

「ハハッ。悪いが俺が居なくなつた後のことまでは知つたこつちやねえな——そうなつたらなつたで、それがオメエ等の実力つてだけの話じゃねえか」

「リーダーであるなら、その発言は無責任が過ぎますよ」

「ならオメエが立て直しな、ひより。俺にイラついてるみてえだが、俺もいつまでも後ろに燻ぶつて前に出ようとしないのは氣に入らねえんだよ」

「……………申し訳ありませんが、私では力不足です」

正論による抗議に対して皮肉で返された——更に自分ではAクラスは無理だと言ふ椎名ひよりの姿は悔しそうに見え、龍園は面白そうに笑う。

されどその笑みには、ただ愉しそうと言う訳でないものがあるようにも見えた——それをおくびにも出さずせせら笑うように話を続ける。

「フツ。クラスを背負う気もねえのが俺に意見してんじやねえ——するならオメエがクラスを纏めるくらいにしてからにいな。俺はいつでも受けて立つぜ」

更に挑発を含んだ発言に普段の椎名なら負けを認めて引き下がり話し合いは終了する

——ただ今回は普段とは違い椎名は引く姿勢を見せなかった。

寧ろ今からが本番であると言う意を込めて言った。

「では戦意充分な龍園くんに訊ねます——この試験が目論見通りに終わろうと終わるまいと、私にはこれで終わりになるとは思えません。

また何かが起これば外部からの干渉はある筈です——もし仮に嬰兒くんの生殺与奪に関わることが起きたなら、それはどんな類になるかと？」

龍園くんの予想で構いませんので、聞かせて下しませんか」

「そうなった時に俺や牛野郎がどう動くかじゃなくてか？」

「お二人は戦うことなど分かり切ってますから、一緒になのかは別にして。

ただその時に私も戦うべきか逃げるべきか——心の準備がしておきたいので、どんな事態になるのか少しでも材料があるに越したことはありません」

「既に逃げ腰を示したのは前振りかよ——それでも飲み込まざるえないのは苦々しいもんだな」

「お褒めに与り光栄です——それで龍園くんはどうなると思いますか？」

「そうだな。少し考えさせろ」

龍園は目を瞑り無言となり、時間が恐ろしく遅く感じる沈黙が訪れた。

そしてどの程度が過ぎたのか分からなくなる程の緊張感の中、龍園が目を開けた。

「これまで起こった事と牛野郎のして来た事を基に、幾分かは俺の推理も入るが予想してみた。この試験が終わった後も牛野郎への締め付けは無くならない——これは分かるな？」

前振りに緊張感が更に高まった——そしていよいよ龍園の予想が披露される。

「それで牛野郎に関して推理して見ると漫画みてえな結果が導き出される——牛井嬰兒は政府の秘密機関のエージェントって結論だ。

そして任務でミスしたか、もしくは上に噛みついて謹慎みてえな罰としてこの学校に放り込まれた——俺は両方だと思ってるが兎に角、国か組織か上には表立って楯突く気はねえ」

前半はこれまでの嬰兒の異常性を見れば然して驚く内容ではない——ただ後半は疑問が残る内容だった。

少なくとも嬰兒が上に対して従順とは言い難く、手痛い思いをさせられた身としては反逆を企てる——その果ての今試験は牛井嬰兒の生殺与奪に関わるものだと思わされるのも止む無い。

龍園はクラスの反応を見定めながら、ただ聞くだけでなく考えを回しているのを確かめ笑みを浮かべる。

「牛野郎にとってこの学校から追い出されるのは文字通りの意味で死を意味する——だからこそ、最後に派手に暴れて道連れにしてやろうって腹なんだろ。上にとって牛野郎は殺そうと思えばいつでも殺せる——今現在も含めてギリギリのところ、奴は生かされてるって訳だ」

「想像してみると息苦しい限りですね——不満を持つなど言う方が無理な相談です。それでもやっつてはいけない事はダメですが」

「ひより。牛野郎はそんな平時のモラルが通じねえ世界の住人だってことぐらい、もう分かかってるだろ——かと言って、その世界に戻りてえって積極性も無さそうなのが不思議なところでもあるが」

命を懸けた戦場げんばに戻りたい——龍園は当初はそれが嬰兒の願いなのかと考えたが、それならば大人しくしている方が良い。学生生活は長くても三年、その先の時間を思えば今楯突くのは賢い選択とは言えない。

勿論、一生戻ることが出来ないと言われてはいるかも知れないが、それならば学生をやるなどそもそも受ける性分じゃないのも接して理解した。

「弱みや人質でも取られてるのかとも考えたが、それもやって来たことを思い返すと合わねえ——アイツの行動は失う物の無いか己の命ひとつしかないもんだ」

話しながら愉快さが増していくニュアンスに恐怖とも違うヒリヒリとした感覚が伝わってくるのが分かる——本当の意味での頂点の中の頂点に喰い込んで見せると言うはハツタリでもポーズでもない本気であること再認識させる。

同時に心意気だけでなく、得る為に払う代償も実力を高め行かなければならないのを十二分に理解していることも。

「……少し話が逸れそうになって来たな。まあ、牛野郎は最初から命懸け、背水の陣の状態で居る訳だ——で、今は片足が水に嵌っちまってるって訳だ。仮に今を通り過ぎてもそれは変わらない、寧ろ次はより露骨になって来る」

いよいよ本題になって来た——この先の牛井嬰兒にはどんなものがやって来るのか、性質は各々異なるが好奇心はすこぶる刺激され、誰もが次の言葉を待つ。

「特例が無くなるにせよ、持ち続けるにせよ、目一杯こき使われるような状況が用意されてる——表向きは優遇的って建前だな。試験への不参加も強制されても不思議でもなくなり、休みも無くなるに近い待遇……いやもしかしたら学校の都合に限らず外に呼び出されるものもあるかも知れねえな」

「……そしてそのまま帰ってこないと?」

「何かしくじれば有りえるだろうな——と言っても、言い掛かりで戻って来れないなら、それこそ俺らの知らない場所で血の雨が降るな」

あつても不思議じゃない——我が身に起こった嫌な実感を思い出しながら切実な思いで話は続く。

「ただそれは野郎の本意じゃ無い。奴は余計な干渉が無くなって、自

由になりてえ——ぶっちゃけて言えば学校の試験とは言え思いつ切りやりてえ、少なくなつた戦場を楽しみてえんだ」

ひと言に纏めると他愛ないこと……ただ、

「そして上はそうされるのが困る——牛野郎が羽目を外して全力を披露すれば、目立つ所じゃねえ俺らの常識が覆るほどのものが見れる。それが現実にある事が認識されること自体が面倒な訳だ」

「されどその程度の事、牛井氏ほどなら理解してる筈です——逆らう気が無いのに何故節度を無視した行動を？」

「匙加減が分からねえ程にストレス溜まってんのか、上の締め付けが極度の厳しいのか——デイスコミュニケーションが起きてるのは間違いないね。この試験はその落差を俺たちに埋めさせようって意図も有つたりするのかもな」

牛井嬰兒と言う特異な存在をそのままにするのか、解き放つのか、リスクを負って抑え込む力を得るのか——せいとたち当事者自身で選べ、龍園はそう解釈した。

この前提の基で龍園は抑止力を得ることを選択した——そうして残り二年の学生生活で嬰兒を御しきり確かな実力を見張っている輩に示して上に行く足掛かりにする。

「牛野郎自身と戦うのも面白そうだが、奴の飼い主の方が遥かに大きく挑み甲斐がある——Aクラス卒業なんて踏み台になるかも怪しいが、それでも無えよりかはいいだろ」

頂点を目指すも、そこまでの高みを目指せない者たちへのメリットもしつかりと提示する——強かな話の運び方に何人かは感心し、気付かない者たちは恐れつつも前向きにさせられる。

龍園に逆らう気は無かつたが、完全には賛同できない——そんな空気が払拭されようとしていた。

ただ異論がないものの、そのまま終わることを許容できない——そんな気持ちを胸に椎名が再度手を上げて訊いた。

「龍園くんの考えは理解出来ました。ので最後にひとつ訊かせて下さい——龍園くんは嬰兒くんをクラスに向かい入れる気はあるのですか？」

「少なくとも今は無いな——これから先に関してはケースバイケースとしか言いようがねえ」

龍園はひと呼吸置いて皆が言葉を飲み込める間を作る。

「何よりこれから先は本当に分からないことだらけになる筈だ——そして予測範囲には牛野郎が強制的に退学、要は処分されるって展開もあり得る」

「処分って……つまり」

「文字通りの意味で一番最悪な事態が起こるって思え——そしてその一端を俺は、いやこのクラスに握りに行く」

つまりは文字通りで命の遣り取りをする——既に抱かされた慄きを簡単に吹き飛ばす程の衝撃が広がった。

そんな恐れの中で椎名ひよりは気概を振り絞って訊いた。

「龍園くんは嬰兒くんと一緒に命を懸けて戦う道を選ぶ——それが最終的な結論と言う事でしょうか？」

「俺が牛野郎を使役して頂点にのし上がるだ。何の因果か回って来たチャンスなんだ——命のひとつも懸けなきゃ辿り着けるわけがねえ」
話が最初に戻り、3の選択肢を取るメリットを改めて強調した——現在進行形で命の危機に晒されている牛井嬰兒と同じ土俵に立ち、ある意味で救う道を用意することで絶大なる力を得て更なる力に挑戦する。

一生に一度しか巡って来ない巡り合わせ——勿論、素通りして関わらない方が賢明だと頭では分かっている。

ただ牛井嬰兒の先には世界を揺るがす力がある——この超特大の奇跡には強烈な魅力があった。

「俺は全部手に入れる——失敗して死ぬことになろうと戦う。怖気づいたならいつでも逃げろ——別に止めねえ、そのままこの勝負に乗らなかつたことを生涯後悔しながら死ぬ。きつとさぞかし平和な毎日だろうよ」

「賢い選択ですね。ただそれを今決断するのは愚かでしょうね」

金田が水を差すように指摘したことで注目を集めた——龍園も無言で続けろと促す。

「牛井氏への選択は選べばもう後戻りは出来ないと一見思えます——が、あくまで今試験は牛井氏を今現在どうするかです。逃げる選択をするにしてももう少し見極めてからでいい——寧ろその為の心の準備をさせてくれた温情とも取れます」

「雰囲気に？ まれていた中での的確な補足説明に皆の頭は冷えて行く——そして思う。」

「本当に大舞台に乗る選択はまだ先だ——ならば今降りるのは早過ぎる、と。」

「龍園。悪いがさつき言ったの撤回させて貰っていいか？」

「なんだ、時任。てめえも欲に釣られらるか？ 随分と不様じゃねえか」

「そう取って貰っていい。見つともないのも認める——それでもやっぱり今退学するのは勿体なく思えた。俺だつてAクラスで卒業したいし、その先にデカイ花火があるなら見てみたい」

「クククク——嫌いじゃねえぜ、そう言うのは」

龍園の愉快なニュアンスに皆も同意する顔であり誰も異論はない——話を聞いていて皆が同じ気持ちになったからだ。

よつて結論はなった。

「Cクラスは3の選択肢で行く——退学に関してはそうなつてから、もう決まつてる場合は潔く受け入れろ」

話が纏まり気持ちよく解散——そんな流れだったが、タイミングがいいのか悪いのか電子音が鳴り響き雰囲気に水を差した。

その主である金田はバツの悪そうな顔で端末を取り出す。

「すみません。Aクラスからです——これから各クラスの代表で話し合いを行いたいと」

「順当だが、もうちよつと後にして欲しかったな」

「全くです」

一転して不愉快そうな遣り取りだが放つて置く訳にはいかない——龍園は少し考えて言う。

「こっちは直ぐにでも始めてえから場所を教えろと返せ——まだ愚図ついているのが居るなら、とつととしろ。そう俺が言つてると付け加えておけ」

「了解です」

金田が言葉通りの返信を送り、少しすると再び電子音が鳴った。「どうもBクラスの返事がまだの様で、場所については開かれたカフェで行いたいとのことですが？」

「ちっ、なにしてやがんだか……場所に異存はねえ。準備が出来たらまた連絡しろと伝えとけ——行くメンバーは俺とひより、それと金田の三人だ」

「分かりました」

龍園の指名に肯く二人、これをもって今度こそ解散となった。

豊かに〇〇

Bクラスの場合――

壇上に立つ一之瀬帆波と直ぐ後ろに控えている神崎隆二――いつものBクラスなら和気あいあいに近い雰囲気の話し合いが始まるのだが、今回はただ只管に重い空気が充満し息が詰まるのがほぼ全員と
言う状況だ。

ただ一人の例外である一之瀬に関しては、これまでの彼女からは考えられないギスギスとしたオーラに声を発する勇気が誰も出ず、彼女からの言葉を最大の緊張感を持って待つしかなかった。

時間にして五秒も経っていない筈なのに、何時間も待たされたと錯覚してしまう――気の弱いものは既に倒れそうな程に心音が早くなっていく。

そんな中で漸くと一之瀬が口を開いた。

「さて今回の試験だけど、皆はどの選択肢が良いと思う？」

ただ出てきた言葉はいつも通りで拍子抜けしてしまう……それで
も空気は軽くなるはず神崎がクラスの皆が求めていることを代弁する。

「いや、一之瀬――まずはお前の意見を聞かせて欲しかったんだが」

「えー、だって私が言ったらその通りになっちゃいそうじゃん。だから私のは最後がいいかなって気を使っただけだ」

「こんな緊迫した中でそんな気になれる奴は居ないぞ」

「そうかな――言いたい事を言いたくて、うずうずしてる人も居ると
思うけど？」

一之瀬がさり気なく送った視線は誰を捉えているとも言えない――
しかし送られた方からしたら、それは自分の事を指しているのかと
刹那的に身構えてしまう。

それも一瞬のものだったが、今の一之瀬はそれを見逃さなかった――
笑みを作りながら反応した女子を指名する。

「姫野さん。何か言いたい事あるなら遠慮なく言つて」

「……別に何も無いよ」

「駄目だよ。嘘ついちゃ——これはクラス全員の話し合いの場なんだから」

普段なら相手を立てて引き下がるが、今は逃がす気は無いと笑顔のまま圧力をかけて来た——やはり明らかに一之瀬は頭に来ていると嫌でも再認識させらる。

これには一之瀬を慕っていた白波もドン引き状態で暴力とは違う恐怖を感じており、彼女ほどではないにしろクラス全員が同じ思いの中、発言を殆ど強要させられている姫野に同情しながらも何も言えなかった。

そんな複雑な感情が入り混じった視線を感じながら、姫野自身も段々と苛立ちが湧き上がりその勢いのまま口を開く。

「だったら言うけどさ。今回のつて一之瀬さんが言い出しっぺでしょ——だったら一之瀬さんが責任持つのが筋なんじゃないの？」

「責任は取るよ——だからこうして纏めるべき意見を出して貰おうとしてるんだよ。」

それで無意味な文句しか言う事が無いの？クラスの為に何か考えたりは無いのかな？」

一之瀬の様子は本当にいつも通りだ——ただ込められたニュアンスはどうにも挑発を含んでいると感じられ、湧いていた姫野の苛立ちに油を注ぐ。

それは直ぐに怒りに昇華した。

「クラスの為って……そもそもアンタが余計な事言ったから、こんな事になったんでしょうが！面倒事増やしてくれちゃって!!」

「……あのさ、それは言う相手が違うよ。余計な事したのは嬰兒くんで、それに悪ノリした所為で誰が一番迷惑したか忘れちゃったの——迷惑だから正して貰いたいって何が悪いの？」

正に売り言葉に買い言葉——完全に喧嘩になってしまいう土壤が成立してしまった。

「だったら尚更アンタが決めればいいじゃん。反対するのなんて居る

訳ないし、それで解散でいいじゃん」

姫野はさつきと帰らせろと投げやりに言うが、この話し合いが不毛で嫌な物だと言うのは本心であると伝わって来る——それが意味するところは、

「そっかあ。姫野さんもストレス溜まってたんだね——そんなにBクラスが嫌だった？」

一之瀬は心中を悟って割と穏やかに言ったが、現状では逆効果であり、どの口が言うんだ」と思いが駆け巡る——それは直接言われた姫野も同様、寧ろ一番逆鱗に触れたと言ってもよかった。

それは直ぐ様に表れた。

「当たり前じゃん——いい機会だから言わせて貰うけど、私は一之瀬さんの方針は嫌で仕方なかった。皆の為って綺麗事だけで、そんな同調圧力で言いたい事も言えない——こんなんでAクラスになるなんて出来っこないって何度も思った」

「ふくん。だったら早くそう言えば良かったのに」

「ふざけないでよ！言い出せない空気作ってる張本人でしょうが!!意見したってこつちが折れるまで囲まれ続けるなんて苦痛、まっぴらごめんよ!!!」

姫野は興奮し、どんどんと声が大きくなっていく——面と向かって一之瀬の表情は変わらないが、聞いていたクラスメイト達はドン引きしていた。

されど中には姫野の主張に納得したような顔も有り、特に神崎はより真剣に姫野の叫びに耳を傾けていた。

ただ反対に納得できない輩も居り、その一人である白波が声を上げた。

「姫野さん。一之瀬さんは皆の為を思ってる——」

「だからって無条件で何でも言うこと聞けって？やり方が違うだけでCクラスと同じじゃん——白波さんって誰かの手下になって満足するタイプなの？」

「ちよっと、それは言い過ぎだよ！」

「だよな……白波が本当になりたいのは……」

「そこも！余計な事言わない！」

渡辺を網倉が窘めたが、発言の内容から下世話な想像が掻き立てられ、なんとも趣味の悪い視線が辺りを交差する。

それを冷めて目で見ていた当事者とも言える一之瀬帆波は淡々と言った。

「それで。姫野さんや皆は結局どの選択肢がいいと思ってるの？」

この際だから言ってしまうと含みを持たせているのは明らか——更にそのニュアンスから、はぐらかすのは駄目だと圧力を感じさせるものがあつた。

喧噪に盛り上がり上ろうとしていた空気は一気に鎮静化されて無言の間が訪れる——それを見て一之瀬は小さく溜息を付いた。

「はあ……ずっと言いたいことを我慢してたんでしょ？私に遠慮しなくていいんだよ——と言うか、その為の話し合いでしょ」

正論で来られてクラスは更なる静けさに見舞われる——しかし黙っていることは出来ないと逃げ道も封じられてしまい、僅か数秒で息苦しさが充満した。

これが普段通りであるなら一之瀬が場を和ませるように率先して意見を出すのだが、今回は全く正反対の状況であり、初めての体験に苦しさは増していく——そして我慢の限界を感じたのか、勢いに乗ることにしたのか、声を上げる者が一之瀬の後ろから現れた。

「だったら話を進める為にも言わせて貰う——俺は3の選択肢を選んで牛井に対して俺たちからも圧力をかける方が良いと思う」

「へえ、珍しく過激だね。神崎くん」

振り返った一之瀬の態度は淡々としたもので不気味さが際立つ——やや怯みそうになるも神崎は続きを話すことにする。

「遠慮なくとのことだからな。そしてその上でこっちも怒ってるってことを示して、牛井嬰兒をこのクラスに迎え入れるように持つて行くのが、クラスにとって最も利益になると考える」

「そもそも？クラスが認めるとは思えないよ」

「ああ、当然ながら入札になるが恐らくCクラス……龍園も同じ事を考えてる可能性は高い。そしてクラスポイントの差からすれば勝ち

取れる」

神崎は言葉を続けて行きながら強気さを醸し出していたが、真正面から聞く形になっていた一之瀬からは何とも違和感を覚える。

「神崎くん……言葉とは裏腹なプレッシャーを感じるんだけど………言ってること本当に本心なの？」

一之瀬は思ったままを言ったが、神崎は狼狽えることなく力強い目——もとい期待が籠った視線を向けて来た。

それにより、なんとなくだが一之瀬は悟った。

「ああ。私に反対意見だして欲しいのか——そうだよ。私らしくないって思うもんねえ」

「違う、そうじゃない」

「え、じゃあ何なの？」

一之瀬としては面倒な探り合いは嫌であり分かるように言っただけだったが、神崎としては自身で察して気付いて欲しい。

ある意味で正反対の意図を持ってしまい話が止まる——気不味いとも違う無言状態の睨み合いに外野の方が先に嫌気が差して声が出る。

「二人とも。時間の無駄だからそう言うのは別ん所でやってくんない」

「それは済まないな——ただ姫野、俺の言いたいことは一之瀬だけじゃなくて、お前を含めたクラス皆にも気付いて欲しい」

「だから考えろって？面倒くさいし、分かりっこないでしょ——クラスの成長をとか考えてんのかも知らないけど、アンタの気持ちなんて一々くみ取って欄無いし、もつとストレートに言っただけ欲しいんだけど」

姫野の口調は棘があったが内容はクラスの殆どが思っていることもあり咎めるものは居ない——神崎としてもそれは理解しているが、それでも誰かに促される形はどうしても取りたくなかった。

ただ限られた時間の中でいつまでもと言う訳にはいかない。故に、「なら俺がどうしたいか言う。俺はAクラスで卒業したい——もつとシンプルに言えば勝ちたいんだ。当たり前前の事だと思っただろうが、今

のままじゃ絶対にそんな未来は来ない」

きつぱりと言いつつた——その内容に流石に誰もが啞然としてしまふ。

「……………神崎くん、それって私の所為ってこと？」

誰よりも近くで聞いていた一之瀬が言った——普段なら困ったような顔をする者だが、今回は目に不満の様な感情があった。

「一般論としてリーダーなんだからと言うのもあるが、お前のやり方はクラスの成長を阻害するデメリットもあつた——普通の学校ならそれでもいいが、競い合い勝ち取らなきゃいけないこの学校じゃ、そのスタンスは合わない」

「……………もしかして挑発されてる？」

一之瀬の問いに状況の緊迫度が一気に上がった——今まで温和だった一之瀬もそうだが、彼女を支え補佐役に徹して来た神崎もまたらしくないと言え、一触即発な展開に態と持って行ったとしか思えない意図に訳が分からないと言う思いが駆け巡り、それは更に加速する。

「もしかしなくてもそうだ——全部曝け出して堂々と本音を言う今の状況こそ、このクラスが変わり飛躍するチャンス……………牛井風に言うなら神が齎してくれたものだ俺は感じた」

神崎は勝負に出た——その演出もだが台詞に嬰兒の名前を入れたことで一之瀬の眉が僅かに引きつった。

「へえ〜」

一之瀬の目の色が変わり確実に逆鱗に触れたと誰もが思った——しかも意図的に。

「要するに色々な方向からの意見を出し合って良いのを見つけ出す方法を望んでる訳か——例えそれが喧嘩するような険悪なやり方でも結果が出ればそれでいいと」

「理解してくれたようで嬉しい——揉めることなく和気あいあいとするのも悪い訳じゃないが、それでは後れを取るばかりだ。それが俺の思ってたことだ——現に今までのやり方に100%賛同してる訳じゃないのだから」

「で、今の私なら通じると思ってた言いたいことを言った訳か——けど各々で言いたいことを言いまくるだけじゃ収拾がつかなくなるよ。そんなのを取りまとめるの私は嫌だな」

「ならリーダーを降りることだ」

面と向かっての大胆な台詞に緊張感が高まった……言われた一之瀬とうにんを除いて。

「ゴチャゴチャ抜きに言わせて貰えるなら、私だって好きでなった訳じゃないよ——他に居ないから仕方なくやってただけでね」

しかしその目は今まで見たことも無い暗い輝きを宿しており不穏さを感じさせる。

「それは済まなかったな。一之瀬にもそんな不満を抱えさせてたなんて今まで考えたことも無かった——そんな不満を軽減させる意味でもこれを機にクラスの方針を抜本的に見直して牛井を獲得すべきだ」
「ブレないね」

「その位のインパクトあることしなきゃ、Aクラスなんて本当にただの夢だからな」

神崎のこの発言はある意味で自クラスへの侮辱であるが、腑に落ちたと言う表情の者も少なくない——逆もまた居るが、

「ちよつとそれは言い過ぎなんじゃない——帆波ちゃんはこれまでずっと私たちを引つ張って来たし、神崎くんだって側で支えてたじゃん。なんでそんなこと言うの?」

「理由は簡単だ、白波。そんな風に一之瀬への妄信が過度になってると感じたからだ——何度でも繰り返し返すが現状のBクラスは方向性が違うだけでCクラスと同じ独裁状態だ」

神崎の攻撃的ニュアンスは増しており、一之瀬を誰よりも指示している白波をして慄くものであった——普段なら過激になる前に一之瀬が宥めに入ってきて来るが、今の状態でそんな期待が出来る訳も無い。寧ろ、普段とは正反対——Bクラスでは考えられない事態になっても不思議ではない。

一之瀬の目はそう思わせるには十二分であった。

「そっか……それなら神崎くんが代わりAクラスにしてくれろ?」

この前も言ったけど、私もう疲れちゃった——Aクラスで卒業はしたいけど、ハッキリ言って性に合わない立場になって、それでも皆の為に頑張らなきゃってさ。

傍から見れば格好良いかも知れないけど、物凄く大変だったんだよ——誰かが代わりにAクラスにするって言うなら喜んで譲るよ」

「いつになく饒舌だな」

「こう言うのが聞きたかったんじゃないの？それで私はリーダー降りていいの、それともまだ続けた方がいいの？」

一之瀬帆波の見たことも無い投げやりな態度にドン引きしている視線と？一之瀬も人間なんだな」と納得している視線が壇上に集まる中で神崎は口を開く。

「申し訳ないがこのクラスでは一之瀬がリーダーに相応しいと思ってる——ポテンシャルも先頭に立つ資質もお前自身は否定してるが、十二分にあると俺は思ってる」

「誉めてるんだらうけど、全然嬉しくないよ」

「そうだろうな。負担とプレッシャーを強いて来たんだから、不愉快なものも当然だ——だからこそ牛井を招いてより力になって貰いたいんだ。あいつが恋愛じゃないとしても一之瀬に好意を持ってるのは間違いじゃない——気持ち的にも似てるのを抱えてるなら、きつと力になってくれる」

「嬰兒くんのそれは私のとは性質も違うし、抱えてるのは比じゃないと思うけど」

二人の意見は全く一致する様子を見せない——ただそれでも見ていたクラスメイト達は危うさや不味さと言った後ろ向きの気持ちには一切ならず。

寧ろ、積極的に意見を交わす様子に新鮮さや面白さと言った前向きな感情が湧いてきていた——中には二人の話に混ざり、自分も意見を戦わせたいと思う者も。

神崎はそれを見逃さず透かさず言った。

「浜口。言いたいことがあるなら言ってくれ——今はそう言う場だ」

「え、あ、いや……」

指名を受けて狼狽える浜口——その様子は神崎と向き合い背を向けていた一之瀬にも分かり嫌でも悟らされた。

「あく。なんか私を見てないようだから、言ってることと裏腹なのを感じると思ってたけど、そう言う事か」

一之瀬はゆっくりと振り返り、クラスメイト達の顔を見て行く——暗い輝きを宿した目のままだった為、見られた面々は息を飲み冷や汗が出るが、じつくりと見定めた一之瀬は気にせず口を開く。

「ふふふ、怖がらないでって言うのも無理な相談だよ。だけどこは敢えて言うよ——自分の意見があるなら無理してでも言つて。」

私が発端だけど、この試験はクラス皆が参加して結論を出さなきゃいけない事なんだから」

言い終えて再び振り返る。

「こうなつて欲しかったんでしょ。神崎くん」

「意図を汲んでくれて何よりだ」

一瞬、置いてけぼりになりそうになりつつも見慣れた光景——息の合った連携を見せられて高まつていた緊張が解れて思考が働いて来た。

皆が参加し自分の意見を言う、それが一之瀬帆波の信条と違うものだとしても——議論するのなら、ある種健全と言えるものだが今までのBクラスでは有りえなかったこと。

その意思があつても言うことが出来ない暗黙の了解に近い物が今は機能しない——神崎が率先して示し、一之瀬も名実ともに問題ないと理解させられた。

「僕は3の選択肢を取るの賛成できない——でも牛井くんをクラスに迎え入れるのはいいと思つてる」

浜口が意見を述べた——これを切っ掛けに他の面子も自分もと続いていく。

「単純にクラスの利益を思うなら1がやっぱり妥当だよ」

「同感だ。全会一致を狙うなら落とし所にも一番持つて行き易い」

「でも牛井を招くのはちょっと考えものだぞ」

「そうだよ。一之瀬さんへの好意がマジでも面倒を抱え込むのは、

ちよつと」

「私も賛成！一之瀬さんが余計にしんどい思いするかも知れないじゃん！」

「白波……その手の私情は、今は抜きにしようぜ」

中には試験から完全に外れたものもあつたが、それでも多様の意見が各々から出た——これまでのBクラスでは無かつた光景に神崎は薄っすらと笑みを浮かべる。

（そうだよ。これでいいんだ）

そもそもにおいて自分たちの評価はBであり、最上位Aクラスに次ぐと判断された者たちだ——ポテンシャルは高く、Aクラスと張り合うことだつて決して夢ではない。

しかし早々に団結が固まり切り、それで満足と言う空気が確定してしまつた——それは決して悪いことではなかつたが、この学校の校風システムからすると最適とは言い難い。

現に多くの個性がそれぞれの考えを披露することなど出来なかつた——各々が優秀でありAクラスに挑める自覚を持つてクラスを高めて行く。

やつと本来あるべき姿になり、神崎も釣られて興奮が高まつていく。

「場の空気もいい具合に温まつて来たな——まだ意見は無いか？もつと存分に協議を続けよう——Aクラスになる為に！」

「違うよ。Aクラスで卒業する為でしょ、神崎くん」

「!？」

透かさず訂正した一之瀬に神崎は驚く。

（てつきり歓迎しないか、軌道修正を測つて来ると思つたんだが）

そう思つたのは神崎だけではないようで、何人かも驚きの表情だ——その一人、白波千尋が戸惑いながら口を開く。

「あの、一之瀬さん……」

「ん、なに？千尋ちゃん、やつぱりこんな空気は嫌？」

「あ、いや、それは……」

一之瀬の方ではないのか？

とそんな言葉が続けたかったが、一之瀬の満更でも無い表情に言葉を詰まらせる——その意味を察して言葉が続けた。

「私に遠慮なんかしないでいいよ——今までは皆を守らなきゃなんて思ってたけど。あの嬰兒くんだって自分のピンチに何も出来ないんだし、私如きがそんなの思うこと自体が十年早いことだよ」

一見すれば自虐的でいつもなら白波も率先して？そんなことない！”と声を上げた——しかし嬰兒がピンチの状況を作ったのは一之瀬帆波本人と言っても過言では無い。

完全な棚上げ発言に今まで接して来た一之瀬のイメージが崩れた——あらゆる意味での衝撃に無言になるクラスに一之瀬は続ける。

「幻滅したならそれでもいいよ——ただAクラス卒業は絶対に捨てる駄目だよ。」

その上で私の意見だけど、私は2を選んだ上で嬰兒くんを手に入れたい——もう振り回されるの嫌だし、嬰兒くんが存分に力を発揮できる状態の方がシンプルでいいでしょ」

私見を述べて協議に参加する——至極真つ当な光景だが、一之瀬のこれまでへの否定から始まっただけに衝撃はかなりのものだ。

とても素直に話を続ける気になれなかった。

「何度も言うけど私の顔色なんて気にしないで、クラスの為になるなら——Aクラス卒業を成せるなら私は何だって構わないよ」

「勝つことよりもクラスの和の方が大事なんじゃなかったの？」

「両方だよ、姫野さん。今までだって私は勝つことを諦めたことないよ——どうしようもなくて妥協したことはあってもね。それが気に入らなかつたんだよね、神崎くんも」

振り向きながらの問いに神崎は息を飲んだが、直ぐに持ち直して答える。

「ああ、もう腹割って話す。勝つ為にはクラスは変わらなきゃいけない、一之瀬も含めてな」

様相は対立しているようだが壇上の二人の意見は完全に一致している——勝ち上がり、Aクラスで卒業する。

その為に必要なのは何か？

改めて当たり前のことが浸透し、各々の中で燻ぶっていた物を沸き立たせるには十分だった。

「俺は一之瀬さんの言う通り、2で牛井くんに恩を売ってクラスに向かい入れるのが妥当だと思う」

「いや、来たって面倒が増すだけなら無難に1の選択肢が」

「変わらなきやつっていうなら、3を選んだ方が他にもインパクトがあっというんじゃない?」

意見はバラバラだが、皆の表情は活気があった——結果、協議は加速していき盛り上がっていく。

「いやいや、?が認めないってさっき言ってる」

「そうだよ。他がどう来るかも考慮しなきゃ」

「だとしたら、やつぱり1か?」

「?は2で来ると思うし、肝心の牛井に関心持って貰うには2がいいんじゃない」

「なら3を選ぶだろうCと共闘するってのも有りんじゃない」

「うお。大胆だね」

これまでには考えられない意見も出てたが、寧ろ前向きに考えるべきと言う空気へと移り、より深く掘り下げられて行く。

「共闘って意味じゃないけど、Aはどの選択肢で来るかな?」

「ああ、坂柳も牛井の特例にはうんざりしてるのは想像が付くし、2が妥当じゃ」

「そうなる綾小路が居るし、お嫁さんの為なら2を推すよね」

「じゃ、やつぱりうちも2を選んでが全会一致の可能性が高いか?」

「龍園が乗るとは思えないけど」

「それじゃ、退学者が出るだけでメリットないじゃん」

「そうだよな。3対1なら折れざるえない可能性もある」

「後はどう牛井を獲得して来るかか?」

「ここで一之瀬に注目が集まる。」

「何?」

「もうこの際だから、こつちも腹割って言うけど。一之瀬さん、牛井くんと一緒にAクラスを目指すのどう思うの?」

「目的はちよつと違うだろうけど、手段と目指す先が一致してるなら異論はないよ——ただ含むものはあるから、私が完全にコントロール可能かって事なら責任は持てない」

正直かつ妥当な解答だが、盛り上がりを削る——仮にクラス全員で牛井嬰兒の力を発揮させるか、外側の圧力に力を貸すと言う事になつても心持たないには変わらない。

「それに嬰兒くんはAクラスよりも自分を雇つてくれる立場になつて欲しい——櫛田さんや綾小路くんと同じ様に、そう言うよ。私も興味が無い訳じゃないけど、ちよつとピンとこないんだよね、それは」

「牛井の雇い主か……好奇心が刺さるが口で言うほど、いやどんな想像したところで軽く上回る道だろうな」

「神崎くんもいいとこの出なんでしょ、噂ぐらいは知らないの?」

「残念ながら——ただ俺の知ってる人なら何か知ってるかも知れないな。卒業してあの人に聞くなりすれば、少しぐらいは牛井を開放する可能性はあるかも知れない」

「つて、それって意外に良いアプローチじゃない?」

「だよな。地に足付いてると言うか」

「当然、坂柳よりも豪かったりするよな?」

「……………」

問いに対して神崎は神妙な面持ちとなる——意味深な態度に何かと誰もが思ったが、

「多分だが、案外近くに居たのかも知れないな」

訳の分からない独白から答える気は無いようだ。

「気を取り直して話を進めて行こう——クラスとして選ぶのは2で——」

一之瀬の発言に仕切り直して、また意見の出し合いになりそうだったが電子音が鳴り、メールを確認する。

「Aクラスが話し合いをしたって——まだ結論が出てないから少し待って、って返すね」

言葉通りに返信し、改めて顔を上げる。

「時間も余り無いみたいだから、結論を出そう——Bクラスの方針は

2を持って行き、他との話し合い次第で改めて本決めを。これでいいかな？」

「ま、妥当な所かな」

「足並みが揃わなかったら、やり直せばいいしね」

「だな。時間も無い訳じゃないしな」

「……ちよつと、これじゃ今までと変わらないじゃん」

一之瀬が決めてしまう流れに異を唱える姫野。

「それもそうだね——じゃ、納得するまでやる？」

「いや、他のクラスがどうするか分からないなら、選択肢に関して話すのは時間が勿体ない。ただ、選択がバラけて入札になった場合にクラスポイントをどこまで出すか——これだけは決めて置きたい」

神崎が軌道修正する形で区切る方向に持つて行く——他を待たせている配慮もあるが、一度各々で考えを突詰めた方がいいと判断したからだ。

(今回はなし崩し的になったが、考えを纏める時間を得れば)

更に良い方向に持つていける——そんな期待が高まつてか、表情も明るい。

だからか、釣られて積極的意見も出た。

「だったらいつそクラスポイント全部を賭けて、嬰兒くんに覚悟を見る？」

そうすれば後の試験も全勝出来て目的も達成できるかも知れないよ——勿論、私も覚悟を決めてなんだったってする」

その余りにも似つかわしくない台詞に教室の時が一瞬止まったかのような錯覚が起きた……当人である一之瀬帆波を除いて。

「あー、やっぱり取り敢えずの方針は2で……それ以降は他との話が終わってからにしよう」

「えー、折角いい感じなのに。勿体ないよ」

「一旦クールダウンしよう。特に一之瀬……今の状態じゃ、どんな方向になるか本当に想像が付かない……話し合いを続けてるってことで少し猶予を貰おう」

「えー、だったら本当に——」

「頭を冷やしてくれ……頼むから」

比喩ではなく本当に頭痛が襲い、一転して顔色を悪くする神崎——同調と同情の両方からクラスメイトたちも今回はここまでにした方がいいと、奇妙な形で的一致団結に一之瀬も折れる。

そして幾ばくかの時間を経て話し合いの場であるカフェに向かうが、一之瀬のテンションは下がり切っておらず一抹の不安を溺れる神崎と渡辺であった。

時間が・・・

放課後、ケヤキモールのカフェ。

既に揃って居るA、C、Dの代表メンバーにBの代表たちが合流した。

「すまない。遅くなった」

神崎が詫びるが誰も気にした様子はない——龍園も今は時間が惜しいと思ってるのか、早く座って始めろと言う様な圧力が目にあつた。

「にやははは。もう怖いなあ、そんなに眉間に皺寄せちやつて」

「……………真面目な話で集まったはずよ、一之瀬さん」

茶化しに来るのを堀北が制したが、

「ふふ。すっかり堕ちてしまつたつて演出ですね」

坂柳が混ぜつ返す台詞にそれは叶わなかつた——当の一之瀬は笑顔で席に着き言う。

「だつて。そうでなきや、やつてられないよ。特にこの話するならね」

「けつ、何をふぎけた事を。てめえが始めたことだろうが」

「龍園くんの言う通りだよ——不貞腐れるのは似つかわしい場じゃない」

「あれれ。榎田さん、もしかして嬰兒くん盗られるかもとか思つてたりとか?ある意味、龍園くんより怖いよ」

「一之瀬氏。元々が被害者だからと言って調子に乗り過ぎですよ」

「私も金田くんに同意します——そして龍園くん同様に早く本題に入りましょう」

金田、椎名とCは固まっております、?の堀北、榎田、綾小路にAの橋本、神室も同感だと言う顔だ——これには神崎と渡辺も同意の様で申し訳ない顔で席に着く。

「まあまあ。一之瀬さんだつて大変だったんですから、少しは察して

あげましょう」

ただ唯一、坂柳だけは違う様でいつも通りの不敵な笑みに同情を滲ませながら寄り添うような台詞が出た。

そこには同じ牛井嬰兒に振り回された者としての共感があつたのかも知れない——これには一之瀬は複雑な心境で、この場に来て初めて表情を崩した。

(ありがとうと言うべきか、少し皮肉でも返すべきか?)

内心での迷いは表情にも出ており、ここに居た全員が何とも言えないものを察する——坂柳の言つた通りに。

すっかり悪い意味でお茶を濁す展開になってしまったが、いつまでも不毛なやり取りは誰もが好む訳も無く、パンパンと手を叩く音に注目が集まる。

橋本は皆の目が集まった瞬間にくだけたように言う。

「前座はここまでにしよう——そこまで雑談する時間もある訳じゃないし」

「そうね、時間は有限。単刀直入に本題に入りましょう」

堀北が主導権を取る形で話の流れが切り替わり、一同は安堵した気持ちになつた——特に上手く話を繋いでくれたと橋本は堀北に好意的な視線を送る。

「早速だけど、？クラスは1か2の選択肢で決めかねてるの——だからどちらかを選ぶ方に着くつもりよ」

「ハハッ、仕切り始めたかと思いきやいきなり丸投げ宣言かよ」

「龍園氏の言う通り、締まらない出だしですね」

「はい。もう少し盛り上がる言い方にした方が」

Cクラスからは早速不評を得たが、堀北は気にした素振りも無い——寧ろそれも仕方ないと開き直りとも思える態度で答える。

「勿体ぶつたつて変わる物じゃないわ——何より当事者を抱えている身としては慎重にならざる得ないもの」

「尤もらしいこと言ってるが、それを言うなら一番の被害者であるA^っクラスのお姫さんのしてくれねえか——？^{そっ}クラスにも損はねえもんだしさ」

「橋本、今回の件で一番は一之瀬だ。更に言えば意味は違うが当事者でもある——勝手に話を進めないでくれるか」

始まって早々に纏まりのないものに話に加わらなかつた面々は？
どうなるものか」と溜息を付く無くなる。

そしていつまでも不毛なやり取りに興じている時間はない。

「問題の牛井は結局来ないのか」

「クラスでの話し合いが終わったら、取りつく島も無くさっさと帰った——自分の意志なのか、そうでないかは分からないがな」

「うん。自分の意志じゃない場合は残酷だよな——完全に物扱いだし」

綾小路に被せて櫛田が自分の意見を出す——ただそこに込められた感情は同情とはかなり違うものだった。

「にやはは。櫛田さん、嬰兒くんが心配じゃないの？」

「一之瀬さんもストレート来るね……完全に良い人辞めちゃつたの？」

「私は欲得づくじゃないけどね。嬰兒くんの知ってる平和主義者の聖人さんと比較されて見られるのは完全に終わりにして欲しいの」

「だったらさ、嬰兒くん自身を開放してあげるのに持って行った方が良くない？」

「同感。気が合うね」

話の流れを持って行きそうな展開に橋本は割り込もうとしたが、坂柳が興味深く一之瀬を見つめているのに気付き躊躇してしまう。

そして気付いたのは一人ではなかつた。

「どうかしたのか、有栖？」

「いえ、一之瀬さんがあの方と通じるのかと思ひまして」

「え、坂柳さんも知ってるの——嬰兒くんの本当の意中の人？」

改めて考えれば大して不思議でもない——しかし全くの予想外の情報に注目が集まった。

「噂話程度ですが——勿論、直接会ったことはありません。

ただ今の時代で最も多くの人間を救った——救国の英雄と、その筋では名高い戦士だと」

「へえ。 嬰兒くんから聞いた時は少し盛ってるかなとも思ったけど、本当に凄い人なんだね」

一之瀬の感想に坂柳は目を細めて言う。

「ええ。 本当に好きだったのは話していて分かります——だからこそ貴女にも興味を持ったのでしようね」

「素直に喜ぶ気になれないなあ」

「心中はお察しします——それで話を戻しますが、Bクラスは2の選択肢が希望でよろしいですか?」

「まだ本決まりじゃないけどね——皆、特に龍園くんは違うでしょ?」
「当たり前だ。 牛野郎に対して有利になれる材料を簡単に捨てられねえ」

その台詞は誰もが予想通りのものだが、納得しきるには丸で足りない——特に櫛田は誰よりも真剣なニュアンスで訊いた。

「龍園くん……本当に最悪の事態になる可能性あるの分かってる?」

「ビビり過ぎなんだよ、 桔梗。 本命はもつとデカイ獲物だ——この程度のリスクも負えなきや目端にも入りやしねえぜ」

「……じゃあ、更に訊くけど。 アンタは嬰兒くんの上に立って何が欲しいの?」

「んなもん手に入れてから考えりゃいいさ——人生の中で巡ってきた奇跡の様なチャンスだ。 挑もうとしない奴なんぞバカだ」

言わんとすることは分からなくはない——それぞれに抱いた気持ちに差異はあれど、 嬰兒のバックにある力に興味を持ってない訳がない。 という程度のものじゃない輩がこの場には三人居た。

「……聞き方を変えるね。 もし?どんな願いでもたったひとつだけ叶うなら、 何を願う?」

「なんだそりゃ?」

「何かの思考ゲームか?」

龍園だけでなく質問の意図が分からないと聞き返すが、答えは他から出た。

「嬰兒くんが時々言う台詞ですね——私も以前訊かれました」

椎名が懐かしむように言う——同時に嬰兒の願いも思い出し再び

一之瀬に注目する。

一之瀬は怪訝な顔をするが、綾小路がフォローを入れる。

「嬰兒はさっきの聖人を生き返らせたいと言つてたんだつたな——神を求めているのも案外その辺が起因しているのかもな」

「ケツ、真面目に聞いて損したぜ——んな意味のねえ問答は他所でやれ」

不毛だと流れそうになるが、

「違うよ。具体的にどの程度の欲を持つてるか——覚悟のほどを知りたいんだよ」

「ほう。だったらオメエはどうなんだ——人に訊くなら先に答えろよ」

「私は名誉か称号とかかな——それも世界一どころか、未来永劫超えられるものが無いって程の絶対的な」

「ガキみてえに世界征服して女王様になりてえってか——結局、フワフワしてるじゃねえか」

龍園の感想に皆が同感だと言う顔になるが、櫛田は気にした風でもなく意味深な笑みを浮かべる。

「そうだね。でもそんなバカげたことだつて可能かもしれない——それ位の期待を持つてるつて確信はあるよ。だよな？」

そしてその目は綾小路と坂柳に向く。

「嬰兒の言葉と態度を見れば、そう信じるに値するかもな」
「本当に何でも出来るくらいの大きさはあると思いますよ」

二人から出た言葉は曖昧なものだったが、それでも肯定であることには変わりなく、一概に一蹴出来なかつた。

「ほう。俄かには飲み込めねえが、ホントに何でも叶うなら——そうだな、歯ごたえがあつて強い奴を世の中に溢れさせてえな。そうすりゃ、退屈しねえ」

龍園らしい願いだが、それならばと綾小路は口を開く。

「……龍園。嬰兒曰く、世界は広いそうだ——練り歩いてけば、いくらでも有るんじゃないか？」

「バカか。んな簡単で会えるなら苦労しねえよ——つつても牛野郎み

たいに誰かに飼われて用意されるなんてもの癩だ。だから俺がてつ辺を取るんだろうが」

「フフ。面白い解答ですね——もし本当に実現できたなら彼も大喜びでしょうね」

坂柳が皮肉でも無く素直に賞賛を贈る。

「坂柳、何か俺らに言ってるねえことがねえか？」

「さて、どうでしょう。あつたとしても私の口からは何も言えません」意味深な態度に威圧を込めた追及が来そうになったが、

「そこまでしよう。いい加減に話が逸れてる」

神崎が仲裁に入り、龍園の他、殺気立ちそうだった輩の気を削いだ。「そうね。この話し合いの理想の締めは全会一致で退学者を出さないこと——その上でクラスの利益を追求する有意義なものにしたわ」

堀北も賛同を示し、余計な問答はこれ以上無しだと牽制して来た。

「にやははは。じゃ、改めて整理するとB^うクラスは2で？クラスは1か2がいい——AとCはどうなるのがいいの？」

「私たちは無難に1です」

「俺たちは当然3だ。これは予想通りだろ？」

全クラスの希望が揃った——見事にバラバラであり、今のままではCは退学者だけが出て、AとBも？の選択次第だ。

しかし、これもまた不測の事態な訳も無く、各クラスの代表たちは相手の出方を見ながらどう自分たちの意見を通すかに切り替わる——ここからが本番だと言わんばかりに。

「嬰兒くんの為を思うなら2がいいよね——それでも干渉が無くなる訳ないから、力になってあげられるクラスに身を置くのがベストだと思うな」

「要はBクラスに制限をなくした猛獣を入れると？」

「ハッ、オメエ等に飼い馴らされるのか、甚だ疑問だな？」

「私だって、そうなれば覚悟を決めるよ——何より散々振り回されたんだから、その分の借りはキツチり返して貰わないと割に合わないよ」

その言葉は決してハツタリではない——と暗い輝きを宿した目が

物語っていた。故にそれ以上の追及は無かった。

ただ別の懸念を持つ者も居た。

「あのお二方——盛り上がっていると何なんですが2を選んだ場合、お二人と言うか皆さんの考えてる展開にはならないと思いますよ」

「どういう事、坂柳さん？」

坂柳から出てきた台詞に？何を知っているんだ」と注目が集まる——その意思を代弁するかのように堀北が即座に反応し問うた。

「再び水を差すようですが、これは私の勘ですので何がどうとは言えません——ただ言って置いた方がいいかと思っただけです」

この返答が嘘か本当か確かめる術はない。

仮に事情を知っているものだとしても口止めされているだろうし、その前提で口を割らせてもそれが真実かどうか——また強引な手段を用いることは彼女の旦那が全力で許さないだろう。

下手をすれば血を見ることになる。

(ま、それもそれで面白そうなんだけどな)

龍園はそれとなく綾小路に目を向ける——嬰兒の陰に隠れがちだが、体育祭で見せた身体能力に格闘能力。明らかに訓練を受けた実力者であり、当初最大の獲物と定めていた坂柳が固執していることも含めて戦ってみたい。

更に言えば坂柳と違い自分の得意とする土俵で遠慮なくやれると言う思いも手伝い、無意識に闘争心が高まっていく——瞬間に透かさず、

「私の方が先約です——横破りは駄目ですよ」

怜悯な笑顔を向けて来た坂柳の言葉が刺さった——それ見て龍園の機嫌テンションは更に高まる。

「いや悪い悪い。余りにも美味そうなのが出て来てついな——つか、次から次にご馳走が出て来て目移りしちゃうぜ」

「それはさぞ贅沢な心持ちですね——ですが、清隆くんは私のです。獲るのは許しません」

坂柳としては戦うべき敵、獲物だと言ったのは理性では分かる——

が、台詞からは二人の関係性がどうしても真つ先に浮かび、場の空気は一気に白けた。

「……………あのさ、さっきも言ったけど惚気るなら帰ってからにして」
神室の突っ込みに無言の同意が広がる——例外は坂柳の亭主で、何を思ってるか分からない無表情で目を逸らした。

「んん！」

堀北がお約束な咳払いで仕切り直しを図る。

「話を続けましょう——正直、坂柳さんの言い分は不明瞭だけど、無視できないのが心にあるわ。そうなる？ クラスとしては1の選択肢を選ばざるえないわね」

「ま、無難だな——ちなみにAもその意見で一応の纏まりは付いた」

橋本がクラスでの焼き直しのようだと言う心証を抱きながら、自クラスの結論を述べる——これによって半数、もし坂柳の懸念に乗る流れなら全てに片が付くと期待を込めてBとCを見る。

「そっちはどんな感じなんだ？」

「あく、今のままじゃ退学が出るだけの損しかないねえ。でもこれで足並み揃えるのは、ちよつと面白くないよね」

「ほう。一之瀬の口からそんな台詞が出るとは思わなかったな——かく言う俺も同じ気持ちだがな」

一之瀬と龍園の意見が一致した——確かに珍しい光景にAと？だけでなく同席している自クラスのメンバー達も些か驚いた。

特にBとしては1の選択肢でも落とし所としては文句なく、趨勢が決した後でCを説得するか、出来なくても何処まで少ない損失で入札を勝ち取るかに移りたかった——それだけに波風を立てるかの一之瀬に感じていた危うさが増す。

（事と次第によつては、本当にクラスのリーダーから降りて貰うのも考えなきやいけないか？）

特に神崎の危機感は大きく龍園と手を組む流れもそうだが、このままより危うい方向にクラスが行ってしまうのではないかと漠然とした不安が生まれた——ただそれもAクラスになる為であれば飲み込むべきなのかとの葛藤もあり、無言で様子を見定める。

「坂柳さんの勘だと2は選べない、それで1もとなるとBクラスも3にするって事しか無くなるね——龍園くん的にはどう?」

「俺らの方に合わせるってなら寧ろ歓迎だな——ただそうなると二対二でそれぞれが戦うことになる」

つまり結局は敵だ——と敵意と愉悦を込めた視線を向ける。

「四クラスの入札による戦いか——それでも勝ち残るのはひとつ、絶対には負けないね」

「おいおい、リスクが高いなら不要なものを切るくらいは言えよ——調子が狂う奴だ」

「にやははは。それじゃ何も変わらないでしょ——やるなら何かしらの利益、欲を言うなら絶対的な武器を手に入れるぐらいじゃなきゃ」

今回の一之瀬は本当に好戦的だ——この場に居た全員が再認識し、一之瀬に対する認識を改めて臨まなければならぬと頭を切り替えた。

「利益を望むなら尚更1でも良いんじゃないかな? クラスで戦うのは直ぐなんだし」

「榎田さん。問題をずらして丸め込もうとしてる?」

「あつそ。じゃ、もうぶつちやけ言うけど、3を選んだ時のリスクはアタタたちが考えてる程度じゃ済まない——マジな話、殺されるよ」

榎田は切実に言い切った。

「貴女も面と向かって殺すと言われた口ですか?」

これに椎名が最も反応し訊く——その内容に榎田は船上試験で龍園が出した話題を思い出す。

「そつか。嬰兒くんと問答した人って椎名さんだったんだ……見た感じ、そっちはただの警告だったみたいだけど、アイツは本当に恐ろしいよ」

「重々承知してます。だからこそ興味もあるのですよね?」

「うん、そうだね……あんなに恐ろしい奴が逆らえないでコソコソ動かなきゃいけないなんて……」

切実さから一転、榎田の声に愉悦が混じる——表情にもいつもの榎田では考えられないどす黒いものが宿り、覗いていた神崎は一之瀬同様

に牛井嬰兒に色濃くやられたと悟った。

「何があつたかは訊かないが、常識で測るのは危険なのは伝わった——
——良くも悪くもな」

「へえ、神崎くんも嬰兒くんのバックに興味出たの?」

「いいや。俺としてはまず目先の問題を片付けたい——話を戻すが、
リスクを色々考慮して全会一致で1を選ぶのが落し所として最適
だ。要は今まで通りだが、それじゃ納得できないし、勿体ない——
それがネックになつてゐるでいいか?」

一之瀬並びに龍園を見て問う。

「当たり前じゃん。この前みたいなのが、何度もあつたんじゃ堪ん
ないよ——それは坂柳さんの方が痛感してるんじゃないの?」

「私はどうなつても変わらないから、どうでもいいです」

同意を求めた一之瀬に坂柳はあっさり和本音で返す——場の空気が
一瞬白けたが、別に不思議でもないと気を取り直して続ける。

「それならこつちで勝手に進めて行くけど、私としては二度と嬰兒く
んの都合で振り回されたくない——振り回されるにしても我慢に足
る何かが欲しい。パツと思いつくのはAクラス卒業の為かな」

「小さいぜ。牛野郎のバックはそれ以上の価値だ——俺はそれに喰い
込めるに足るインパクトを手に入れるチャンスだと思つてるんだが。
そつちはどうなんだ桔梗、それに綾小路——やっぱ命が惜しいから見
送るか?」

龍園の挑発的ニュアンスに二人はそれぞれの考えを返す。

「私は目先の快樂より明確な実利を取りたいかな」

「オレとしては、嬰兒を開放する方向に持つて行きたい——済まない
がお前らの考えには沿えないな」

「ケツ、どいつもこいつも詰まんねえ限りだ」

龍園は悪態をついたが、その目にあるのは不満ではなく明確な敵意
だ——綾小路、櫛田双方とも嬰兒を手元から離す気は無いと語つてお
り、龍園同様に嬰兒の背後にある力に誰よりも欲している。

とどのつまり、後から出て来てしゃしゃり出るな——二人の目はそ
う言つていた。

進路を思い通りに出来るAクラス卒業以上の絶大なる力——欲することに異論はないが命を懸けて、ましてや他を巻き込んでまでは考え物だ。

そんな心境に誰よりもなっている堀北は不味い流れを断ち切り、なんとか穏やかに済ます落し所が無いものかと考えを巡らせる。

（地道に一步ずつ——なんて正論なんかじゃ、耳を傾ける事すらしないのは目に見えてる。かと言って先延ばしに持つて行くのも無理か）
嬰兒自身がいつ何時、どんなことになるか分からない——今までの特例も今回の試験にしても外部からの干渉がどんどんあからさまになつて来ているのだ。

浅はかな希望を述べるのは寧ろ逆効果だろう——そしてここまで考えた時に一之瀬や坂柳の気持ちが少し分かった気がした。

「貴方たち……欲に溺れて酔っぱらつてると嬰兒くんの事が無くても潰されかねないわよ」

「なんだ鈴音——オメエも詰まんねえ正論で来るか？」

「悪いけど酔っ払いに説教なんて無駄な事はしないわ——そんなに命を粗末にしたいなら、これを機に退学して貰うのもいいかと思っただけよ。幸いこの後も含めて二回もチャンスはある訳だしね」

「ほう」

堀北の大胆な発言に場の空気が一遍に変わった。

「……退学つてのはオレや櫛田もか？」

「貴女の場合は坂柳さんに任せたいわね——約束はもう直ぐなんだし、終わったら面倒見て貰えると助かるのだけれど」

「堂々と丸投げしてきましたね……本当に良いんですか？」

「ええ。そもそも信じられないのだから、この際ちゃんとした形にしてくれた方がスッキリするわ」

つまりは綾小路をAクラスで引き取れ——大きな戦力低下になるが、もうその方がマシだと言っている。

この主張に橋本は大いに心躍らせ、期待を込めた目で坂柳を見る——ただ乗り気とは言い難い顔にもうひと押し何かないかと自らも話に入ろうとしたが、

「櫛田さんも嬰兒くんの隣に立ちたいのは構わないけど、命が大事な
のを見失うほど気が違ってないでしょう——それは一之瀬さんも同
様、ちよつと所の騒ぎじゃないのは分かるけど異を唱え戦うなら、
もつとスマートなやり方を模索してからでもいいない？」

続いて理性を保てと他を説得しに回ったことで出端をくじかれた。
「それとも今直ぐに戦わなきゃいけない事情があるの？ だったら話し
てくれないかしら」

Bのメンバーも堀北の押しに同調する。

「そうだ、一之瀬——牛井に腹が立つてるのは理解するが、明らかに判
断が曇ってる」

「冷静にとか、落ち着いてと言うのは無理な相談かも知れませんが、せ
めて自制心は取り戻してくれ」

「それは心外だよ——私は自分の欲の為に他人を巻き込もうなんて
思っけてないし、増してや勝つ為なら何でもしていいとか自分勝手な考
えなんて端から持ち合わせて居ないよ」

一之瀬は他クラスの面子の一部をそれぞれ見ながら言う——当然、
相手も黙ってはいない。

「何言っけてやがる——今のお前はどうか見たってそんな感じじゃねえ
か」

「ええ、ストレスが進行しすぎてタカが外れてるとしか見えません」
「まあ、それも仕方ないと思うから黙ってたけど、そんなこと言うなら
こつちもね」

龍園、坂柳、櫛田とそれぞれのクラスからの反撃と正に喧嘩の一步
手前の状況——ただ発端とも言える堀北は慌てることなく毅然とし
た態度で更なる一石を投じた。

「皆、思うところがるのは別にいいけど——戦うなら正式な場でする
べきじゃ？ そしてそれはこの場でもこの試験でもないはずよ」

戦うなら本来の学年末試験でやるべきと言う主張——ど真ん中の
正論であるが、威力としては弱いと言わざるえない。

現に指摘したことに対して、誰もが白けたと言うった顔だ——付け
加えるなら、それ以上のものもある。

それを堀北は読み取って口にする。

「その程度の事しか言えないなら黙ってろって顔ね——なら最後に言わせて貰うわ」

全ては計算済みであり、注目を再度集める為——そんな演出を見せたことで自然と耳を傾けさせた。

（堀北も中々に強かになったな——少しどうなのかと思ってたが心配はなさそうだ）

綾小路は心中で成長を称賛し、リーダーとして不安定な姿を見て抱いていた気持ちを払拭できる——そんな期待を込めて堀北が何を言うのかを見守る。

「？クラスは1の選択肢を選ぶことに決めたとわ——例え三対一になって退学者を出さなきゃいけないとなったとしても、その時は嬰兒くんを選ぶ。彼が黙って受け入れるとは思えないから、その時は全力でサポートするわ」

選択肢を定め、当初クラスで決めた方針を伝えた——正に勝負に出たのか、宣言通り無言になりそれ以上は何も言うことも、これ以上は口を挟むつもりも無いと引いて見せる。

場の主導権は宙に浮いた——堀北の言った方針に合わせるか、撤回させて自分たちの思う選択肢に持って行くか。

ただそれをしてもし詮は口約束程度だ——日も完全に暮れて来たのも手伝って、いつまでもと言う訳にはいかない。

「ほう。中々に大胆に来るじゃねえか——それで確かAも1って話だったな？」

「ええ。正直私はどうでもいいので、流れ的にも1でいいと思ってます」

「つまりこれで二クラスが1って訳だ。でもって俺らCクラスは3で行きたい——これが通る為の方法はひとつしかない訳だが、一之瀬たちはどうなんだ？」

龍園はニュアンス的に自分達に同調しろ——とは全く言っていない。寧ろ、そうしなくても全然構わないと言う風にも取れる態度だ。

全てはBクラスの選択次第で1か3になる——ただ、どちらにして

も全クラスに損失が出てしまう。望ましい展開ではないが、想定外と
言う訳ではなく——犠牲を出さずにするには入札で勝つのみ。

そうなる^{プロテクトポイント}と1の選択肢による三クラスの戦いか、二対二の全クラス
の戦いに持ち込むか。

(どちらにしてもAクラスとの競り合いになるなら損失は大して変わ
らない——なら退学者^{ぎせい}を飲み込んでAのポイントを落とすのも有効
ではある)

神崎は敢えて冷徹な論理を組んだが、いくら今の一之瀬でも認める
とは思えない——つまりは絶対に勝つしかなく、クラスポイントの大
幅な後退が避けられないとジレンマに陥ってしまった。

「うーん。仮にだよ——3を選んで入札となった場合、龍園くんは勝
ちに来るのかな？」

「さて、どうだろうな——魅力的な選択肢なのはそうだが、目的を見
失っちゃったら意味ねえしな」

「にやははは。なんだか3を選ぶのも怪しくなって来たね」

「それは全員がお互い様だろ——事が事だけに書面での約束なんてす
る気も起きねえ。口約束なんてどうとでも言い逃れができる」

堀北や坂柳の宣言も信用ならない——遠回しに指摘してみたが、双
方は全く何も言わない。

「ククク。これ以上は時間の無駄だな——じゃ、俺らは帰るとするか」
龍園に合わせて金田と椎名も立ち上がる。

「一応、言つとくが俺らが3を選ぶのは本当だ」

「そうですね。クラスの総意としては、ほぼ固まっていますし」
「誰かとお別れしなければならなくなったなら悲しいですが、最早ど
うにもならないようですし」

去って行くCを見送りながら次にAが立ち上がる。

「ちなみに私たちもそこまで積極的ではありません。退学者の候補は
葛城くんが決まっていますので」

坂柳の台詞は信憑性を増すものだが、ハツタリの可能性も否定でき
ない性質が悪いものだ——それを苦々しく思いながら？とBも席を

立つ。

「本当にどうなるかは未知数ね——出来るなら全会一致で終わる結果になって欲しいけど」

「じゃ、前言撤回かな、堀北さん？」

「いいえ。方針は変わらない——？クラスは1を選ぶ、そちらの返答はいいわ。無駄に混乱するだけだし」

「うん、そうだね。実際問題、ギリギリで心変わりするかも知れないしね」

十二分な揺さぶりをかけて帰っていく一之瀬たち——話し合いに意味がなかった訳ではないが、誰かを切る事が大きくクラスポイントが無くなるか。

更なる波乱が起こることが確定となった。

無言で〇〇

翌日、クラス代表の話し合いの結果を伝えた？クラスは何とも言えない空気に包まれていた。

「全会一致は結局無し、か」

誰が言ったか、ただ最も無難な展開にならなかったことは誰もが残念であった。

「けどさ、考えようによっちゃ上のクラスとの差を埋めるチャンスだよ——ペナルティが大き過ぎてすっかり失念してたけど」

櫛田が場の空気を払拭させるように……とは全然違うニュアンスでの発言に、流石に非難の目が集まった。

クラスポイントによる入札——これを勝ち取ったクラスは選択肢の権利を得ると同時に相応のクラスポイントを失う。

Aクラスになるだけを思えば悪くない展開だ——ただ、それが示す者は自クラスから退学者を出すことの容認。

素直に歓迎できるものでは無いし、もし自分になったならと言う不安は齎される恩恵と釣り合うものでは無い。

「その場合は宣言通りに嬰兒くんを指名して、相手の出方を見るしかないわね」

堀北は当初通りの方針で退学回避か、撤回させるなどの打開策を見出す可能性を示す。

「ん〜。でも堀北さん、退学には嬰兒くんは含まれないって特例が付いちちゃったら誰にするの？ひよつとして私？」

櫛田は方針を真つ向から否定し、継いで自分もその気はないと戦う姿勢を見せた——これにはクラスメイト達は自分たちも選ばれない為には、なりふり構わず戦わなければならぬと言おう思いを抱いた。

それは堀北も例外ではなかったが、雰囲気呑まれることなく冷静さを保つ。

「まだ起こっても居ない可能性を論じても意味は無いわ——その場合

は学校側で既に決まっている公算が高い。理由の開示とそれに納得がいかなきや、可能な限り異議を持って撤回に努める——それしかないわ」

「玉虫色だけど妥当なところだね——それで結局、？クラスは1の選択肢で決まりつてことでもいいんだよね」

「ええ、坂柳さんの勘を信じ切る訳じゃないけど、嬰兒くんが余計に悪くなるのは、どう考えてもマイナスにしかならないわ」

「だよね。と言う事だけど、皆は何かあるかな？」

話を振られたものの、聞いていたクラスメイトたちは困惑して直ぐに何かが出る事は無かった。

もし入札を勝ち取ってプロテクトポイントを得てもそれは一人だけの恩恵、クラスポイントは大きく失う——そうでない場合は誰かが退学になり、クラスの利益は無い。

かと言って試験そのものに異議を唱えた所で、ここまで話が進んでいる状況で覆るとは思えない。

全てに関して、この試験は異常だ。

殆どが不安を抱き弱気になるのも無理もない——そんな状況を見定めながら平田が立ち上がり言った。

「皆、心配する必要はない——忘れてないかい、退学者は僕になるって言ったのを？」

「いやいや、あれって場を収める為の方便だったんじゃない？」

何でもない風に言う姿に透かさず否定を示す軽井沢——それに王も続いた、彼女の方はより真剣に。

「そうだよ。平田くんが居なくなっちゃうなんて駄目！」

「心遣いは感謝するけど、僕だって進んで退学したい訳じゃない——1を選んで入札になったなら勝ち取れば済む話だ」

「平田……それはAクラスが遠のくのを意味してるのが分かってるのか？」

「委細承知の上だよ、幸村くん——代わりにプロテクトポイントで今後、一人を合法的に救われる権利を得られるんだ。Aクラスにはこれまで通りの姿勢で挑めば良いだけさ」

何ひとつ迷いなく言い切る姿はこれまでの平田とは違う何かを感じさせた——それには数人が気付き、声も上げる者も居た。

「フフフフ。成程、それが平田ボーイの願いと云う訳か——最終的な勝利よりも一時の間を、なんとも甘い話だ」

「その通りだよ、高円寺くん。僕は仲間が犠牲になるくらいならAクラスに上がれなくても良い。その考えが気に入らないなら、切つてくれて構わない——これでこの話題は終わりだ」

平田は強引に話を打ち切り席に座る——見方によれば我儘を通そうとしているだけだが、自らの退学と言う大きな対価を提示しただけに安易な反対は出来なかった。

「覚悟は伝わったわ……納得は出来ないけど」

堀北が重くなった教室の中でそれでも話を進めようと言う——いつまでもこの議論だけが続けて行く訳にはいかない、更に決めなければならぬことがある。それを全員に周知させる必要があると自身の心中に発破を掛けて。

「?クラスの選択肢は1。そして昨日の話し合いで入札になることは、ほぼ確実と言っているわ。なら出せるクラスポイントをいくらするか、この後の最終試験で大量のポイントを得られるなら、幾分か融通できるけど——それも勝てればの話、最悪は0ポイントで二年生を迎えなきゃいけない」

この説明に空気は更に重くなった——ただそれでも考えない訳には、今決めない訳にはいかないのは誰もが分かっている。

「0ポイントか。もしAクラスが入札も捨てて、後の方も勝ち上がったなら——完全に絶望的だな。例えば嬰兒の全力があったとしても」

ならば勝てばいい——そんな楽観を述べれる訳もない。各クラス目的は同じ、それぞれが全力を出してきているのだ。増してや倒すべきAクラスのことでも奇妙な形で、それなり知ることが出来ていた——何も犠牲せずに勝てるなどとメルヘンは通じない。

「これらを踏まえて考えると出せるクラスポイントは100までが限度だけど——正直に言って勝てる可能性は低いわね」

堀北は最悪を想定し、この次の試験を負けたとしても300は残し

たい——出来るなら、まだ煮詰めていきたいが如何せん時間がない。担任である茶柱が来れば否応なしに選択肢と入札額を提示しなければならぬ——やはり全会一致に持って行けるように粘るべきだったか。

(いいえ、口約束なんて信じられるレベルじゃない——柄じゃないけど、奇跡が起こって誰も退学しない結果を祈るしかないわね)

結局、なるようにしかならない——最早、それで腹を括るしかない。「?」クラスの選択肢は1。入札額は100——退学者が出た時は皆で戦う。これでいいかしら?」

最後の確認に皆が肯いた——程なくして茶柱が来てクラスの選択肢を聞き、彼女の端末に打ち込む。

投票と入札と言つてもたった四つ、結果は直ぐに出て各自の端末に表示された。

Aクラス、選択肢1——入札額、0。

Bクラス、選択肢1——入札額、120。

Cクラス、選択肢3——入札額、343。

Dクラス、選択肢1——入札額、100。

「ああ……一之瀬さん、心変わりしたのかあ」

「結果だけを見ると、勝ち目がある選択肢を選んだだけでも取れるわね」

櫛田と堀北が昨日の話し合いの様子を思い出しながら、拍子抜けしたように言う。

目に見えてやさぐれ、嬰兒に腹を立てていることからして、2の選択肢を選んでくる可能性も視野に入れていた——そうなれば?クラスが入札を勝ち取り、プロテクトポイントを得て退学者を出さずに済んだ。

しかしBクラスの選択と入札額からして一之瀬は退学者を出さない、かつギリギリでBクラスを保てる可能性を選んだ——普段の一之瀬らしく、意外でも何でもないが話を大きくした割にはあっけない展開であった。

「ただこれで最終試験前に三クラスほぼ並んだ——結果次第じゃ、来年は俺たちがBクラスだ」

幸村が前向きに言った——確かに現実味のある可能性だが素直に喜べない。

何よりも入札により決着した以上、今気にしなければならぬのはペナルティだ——誰もが息を飲み、茶柱を見る。

茶柱はいつも以上に難しい顔をして懐から一枚の封筒を取り出す。

「退学者の話をする前に伝えるべきことがある、牛井——新しい特例だ。内容を読み上げる——これは全生徒に関わることだから皆も心して聞け」

一段と緊張が高まる中、茶柱の口から説明される——その内容に誰もが驚愕する。

時を同じくして、それは他の全クラスも同様だった。

「試験結果1となり、その恩恵がひとクラスのみとなった——よって残り三クラスにも与えられ可能性のあった？三人分のプロテクトポイント”を与える”

「ちよ、ちよつと待ってくだ——」

「この前提の上で、特例として？他者への譲渡”を認めるものとする」

抗議の声を遮り続けられた説明に一応の落ち着きを見せる——つまりこれが意味するところは、

「先生。人が悪いですよ——結局この試験？……で退学者は誰も出ることには無いってことじゃないですか」

平田が疲れたような言う——そのニュアンスは安心しきったもので、誰もが共感するもので一回の気が抜ける。

ただそんな上手い話ではないと気を抜けない者たちも居た——その懸念は直ぐに現実になった。

茶柱は反応を無視して淡々と説明の続きを読み上げる。

「譲渡方法は牛井嬰兒から奪い取ることだ」

「え、奪い取る？」

物騒な単語にまた緊張が入り始めた——茶柱はタブレットを操作し、生徒たちにある画像を送る。

そこには『どす黒いキノコの様なイラスト』の刺繍が入った腕章があった。

「牛井が持つプロテクトポイントの証明書の様なものだ——譲渡を望む者はこれを牛井から奪い取る。もしくは挑戦者が奪った腕章を付けて牛井から逃げ切る——どちらかは挑戦者が決める」

「あの先生……詰まらない事なんです、もう少しソフトな言い方でお願いできませんか」

「済まないが、これも指示されててな——書いてあることをそのまま読めと」

茶柱も不本意であると引き下がり説明が続けられる。

「その手順はまず希望者が申請し、理事長クラスの承認を得る。次に承認者の立会いの下で牛井と腕章を取り合う勝負——シンプルに表現するなら格闘技の試合又は鬼ごっこのようなゲームをして貰う。制限時間は三十分だ」

「……鬼ごっこって」

ここに來ての拍子抜けな例えに緊張は一気に抜けた——と同時にこの条件ならと欲が刺激され、獲物を見る狩人のような視線が嬰兒に集中する。

「しかし当然、真面目にやって貰う——牛井が無抵抗、八百長が明らかな場合はその勝負は無効だ。また勝負に際して不慮の事態が起こる可能性も頭に入れておくように」

「先生、不慮の事態って……まさか？」

「怪我をさせないように相手を制圧するなど至難の業だからな——牛井が強いのは今更だろう」

全員の脳裏に体育祭で異常だったCクラスの男子全員を圧倒していた嬰兒の姿が蘇った——端的に嬰兒と戦えと言われ、さっきまでとは比じゃない緊張感が全員に走った。

「……先生。試合形式の方は兎も角として鬼ごっこなんですよね、なんで怪我するなんてことが？」

「それはあくまで分かり易く説明する為の比喩だ。基本は腕章を牛井から奪い取ること、牛井も全力で抵抗する——追いかける場合も全

力でな。シンプルに考えれば倒してから奪い取るのがてつとり早い」
「で、でもそれじゃ、運動が苦手な生徒は——」

「説明は最後まで聞け。更に挑戦者には十人までの助っ人を用意する権利もある——都合、最大十二人で戦うと言うコンセプトだ」

「いや、十一対一でも嬰兒に勝てる気しねえって」

「そこはお前たちの創意工夫だな——逃げる側を選んだとしてもフィールドは指定されてないから学校の敷地内なら何処だろうと構わない。罾を仕掛けるなりして制限時間を凌ぎ切るのも有りだし、戦う側を選んだとしても牛井には治療道具も装備させるから最悪死ぬことは無い筈だ——もし破った場合は解っているな？」

「はい」

茶柱は嬰兒に強く念押しし、嬰兒は短いながらハッキリと肯いた——ただそれは気休めにもならない。本気じゃないにしても嬰兒と戦い、無傷で済むイメージなど湧かないのだから。

「更に特例であるから勝者には獲得したプロテクトポイントを譲渡する権利もある——ただその場限り、指定した相手に無償譲渡するか有償にて競りにかけるかのどちらかだ。後者の場合は最低1000万prポイント、そこからの上限はない」

この追加説明に誰もが心揺さぶれたのは言うまでもない——通常、退学回避に必要とされる2000万prポイントが半額で手に入る。そうでなくとも最低1000万を獲得できる手段が転がり込んだのだ——もう話は今試験だけで収まる規模ではない。

欲がさらに刺激されたが、ここまで旨い話に警戒感を抱く者も出て来る。

「先生。失敗……嬰兒が勝った場合は挑戦者には、どんなリスクが？」
「何も無い。クラスポイントもプライベートポイントも減る事は無いし、内申や評価にも影響されることもない——強いて言えば、先に上げた不慮の事態が起きるかもしれないのが挑戦者のリスクだな。尤もこれも最大限の配慮は用意されているが」

挑戦者には何のリスクも無く、嬰兒だけがデメリットを被る——と一見思えるが、嬰兒のこれまでを振り返れば全くそうではない。

(中々に太つ腹なことするな——理事長代理とやらは)

嬰兒に公然と戦う場を与える——これは今まで通りを選択した生徒たちへの落とし前と言う面もあるのだろう。

いや、もしかしたらどの選択肢になっても嬰兒にはプロテクトポイントを複数与えられ、公式に奪取することになっていたかも知れない——もつともこれは今更確かめようもない。

どちらにしてもこれで嬰兒の自由は更に削られる——勝ち目のない低いリスクであっても退学を回避できる権利とそれを基に大金を獲得できるのは魅力的過ぎる。

実際に既にクラスメイトの何人かは嬰兒に視線が釘付け状態になっており、出来るなら今直ぐにでも戦いたいと言う顔だ。

(オレだったつら迷惑千万なんだがな。嬰兒なら——)

綾小路は嬰兒の心境を推察しながら自分にとって、どう持つて行くかが最良なのかを思案し始める。

それぞれが浮かれ気分になる中で話は続く。

「この特例は牛井がプロテクトポイントを全て失うまで終わる事は無い——ただし牛井や立会人にも都合があるから、いつでも何処でもと言う訳にはいかない。当たり前だが挑めるのには限りが出るから漏れたとしても異議は認められない」

つまりは早い者勝ちとクジ運的な要素も関わって来る——いや挑戦権を買うことも可能なのではないかと呑まれずに思考する者も居り、今肝心な事が誰の脳裏からも忘れられていた。

「特例に関しては以上だ。続いて、今試験での退学者を発表する」

教室の空気が一変する——絶大なる恩恵を齎す話に意識が言っていたが、今気にしなければならぬのはそれだ。

ただもし退学を宣告されても嬰兒に堂々と挑むことが出来ると樂觀視する者——それをダシにして優先的に挑み、土壇場で大きな利益を独占できるかも知れないと考えをめぐらす者も居り、余り重要視されてはいない。

「退学者は山内春樹——詳細な理由は最後に表示されている『OAA』と言う項目にある」

全員が一斉に項目を押すとover all abilityと題された画面に切り替わる。

「本来なら新年度から導入予定だった、お前たちの個人成績表だ——今回はブラウザで自クラスのみだが、新年度からアプリが正式にリリースされ全学年の生徒の成績が閲覧できるようになる」

全員が、特に山内が食い入るように自分の評価を見る。

1—D 山内春樹

学力 E—(22)

身体能力 D—(38)

機転思考力 D+(44)

社会貢献性 E+(30)

総合力 E(34)

項目の詳細、評価の算出は、

学力——主に年間を通じての筆記試験より。

身体能力——体育の授業、部活動の活躍、特別試験の等の評価より。

機転応用力——友人の多さ、その立ち位置を始めとしたコミュニケーション能力や、機転応用が利くかどうかなど、求められる社会への適応力より。

社会貢献性——授業態度、遅刻欠席を始め、問題行動の有無、生徒会所属による学校への貢献など、様々な要素より。

総合力——上記四つ(社会貢献性のみ影響は半減)より導き出される生徒の能力。

計算方法——(学力+身体能力+機転応用力+社会貢献性×0.5)÷350×100で四捨五入算出。

納得する者も居れば不満に思う者も居る中で、案の定と言うべきか——牛井嬰兒の項目だけが? 特例適応により無効」とあった。

「先に言っておくが、この特例は入学当初からあるものだ——牛井に關してはあらゆる記録を残すことを禁じられている」

「それって2の選択が成れば表示されてたってことですか?」

「建前上はそうなるだろうな」

茶柱は懐疑的な目で嬰兒を見る——無言のまま、何も答える事ない

様子に話を進める。

「もう言うまでもないだろうが、退学理由はO A A最下位だ——今回に関しては特例としてプライベートポイントも通常より半額の1000万を払うことで退学回避も受理される」

正に特例のオンパレード——何より、この説明が意味するところは。

「嬰兒！今直ぐに俺と勝負しろ!!」

山内が立ち上がって嬰兒に詰め寄る。

「全部、お前の所為でこうなつたんだ——俺に対して償いやがれ!!」

「……あのさ、八百長は駄目って聞いてなかった?」

「うるさいぞ、軽井沢！そこも上手に負ければいいだろ……クラスメイトの危機なんだ。お前だって自分がそうなつたら、なりふり構ってられるのかよ!!」

「醜いね」

高円寺の静かなひと言が興奮していた山内の意識を引き付けた。

「僅か数秒で嬰兒ボーイに眠らされたのをもう忘れたのかい——どんな奇跡が起ころうと君が勝つことなどありえないさ。無意味な事は止したまえ」

「!!」

嫌な思い出が甦り益々顔を歪める山内——そんな様相に構わず高円寺の煽りは続く。

「そもそも彼に何を言おうとすること自体無意味さ——彼は何も答えられないし、決められない。直訴すべき相手がそもそも違う事すら分らない無能など、消えた方が身の為だよ」

山内の怒りは頂点に達し、今にも高円寺に襲い掛かりそうだが、

「そこまでだ」

茶柱が制止した。

「お前たちが何を言おうが決定は変わらん。状況に文句があるなら然るべき手続きをしてからにしろ」

然るべき手続き——この台詞に再び嬰兒への注目が増す、茶柱自身も。

「嬰兒は絶対に嫌だろう——何より、

「全て上手く行ったとしても2000万もの大金を目の前にして、気が変わったたりしないかしら、私たちも含めて？」

堀北の指摘に静寂が訪れる。

2000万あればクラス移動が可能になる。退学回避にだけしか使えないプロテクトポイントよりも選択の幅が広がり、有事の際や最終的に得られる見込めるポイントを計算すれば残りの学校生活も上がりだと言っても過言ではない。

そんな私利私欲に駆られないと、どうして言い切れようか。

「もしさ手にしたポイントをネコババしたりしようとしたら平田くん、どうするの？」

「そんなことをしたらクラス中を敵に回すだけだよ——直ぐにクラス移動をしたって居場所なんてある訳がない。例外は居るだろうけど、その場合は一生許さないよ。僕は」

平田は二人の男子生徒をワザとらしく見ながら、見たことも無い荒んだ目で睨みつける。

「フッフ。なんとも醜いじゃないか、平田ボーイ。安心したまえ、そもそも私は戦う気は無い。真に戦うべき相手は彼じゃないし、それは今でもないと悟ったからね」

「それってつまり卒業後に嬰兒のバックに挑むって意味か？」

「それは好きに解釈したまえ、綾小路ボーイ」

「そうか。なら最終的には敵になるかも知れないか」

綾小路もまたらしくもなく好戦的ニユアンスで周りが引いたが、直ぐにそれは収まった——そして平田に言う。

「平田、そして皆。ポイントをどうするかは決めてはいないが、オレは直ぐにでも嬰兒と戦うつもりだ。無論負ける気も無い」

「え、綾小路くん。前に嬰兒くんに負けたんじゃ……リベンジマツチってこと？」

これに櫛田が真っ先に反応した——そして大半が初めて聞くことと、出された結論に男の子だなど一定の理解を見せるも、それでも無謀だと思った。

ただそれでも誰かが戦わなければ、そして勝たなければ状況は良くならない——これは確かであり、自ら名乗りを上げたことに異議はなかった。

「あ、綾小路、俺も協力するよ。だからポイントは俺の為に」

「ダチの為だ。俺もやるぜ」

「僕も手を貸すよ。綾小路くん」

「清隆がやるなら俺も」

退学の危機にある山内は勿論、須藤、平田、三宅と続々と名乗りを上げる——この流れに良くも悪くも皆が吞まれていく。

「嬰兒と真正面から戦っても勝ち目がないなら、選択肢は当然逃げる側だよな——フィールドが指定されてないし時間制限も有るなら戦略次第で」

「他のクラスからもさ、助っ人頼んでみる？」

「有りだよな。ある意味で運命共同体だもんね、今は」

しかし全員ではない。

「ちよつと雰囲気吞まれちゃ駄目よ」

「堀北さんの言う通りだよ——最悪、大怪我じゃ済まないよ。冷静になつて！」

「……いや榊田さんの方こそ落ち着こうよ」

「そうだよ。必死過ぎて逆に引いちやうよ」

「なんだかんだ言っても結局はゲームなんだから」

「分かってないのはそっちだよ。嬰兒くん、傷つけることを躊躇しないから！命令だつて言い訳があるなら何するか分からないよ!!」

榊田の魂の叫びとも思える姿に堀北は惚れ込んだ瞬間を思い出し、一瞬見惚れてしまう——そして考える。同じ意見を述べ、ここまで必死になるなら自分も続かなければ女が廃ると。

「嬰兒くんの親御さんの言葉を思えば、たかだかゲームでそこまでするとは考え辛いけど——嬰兒くん自身も学生でタカが外れてしまうことも考慮しなきゃ危険ね。その上で尋ねるわ——綾小路くん、命を懸けてでも勝ちに行く気があるの？」

「嬰兒に勝つにはそれ位じゃなきゃダメだ。アイツの恐ろしさはオレ

の方がよく知ってる。ハッキリ言えば素手の一撃で人を殺せる凄まじいのをこの目で見たからな——あれを喰らってたらと思うと今でもゾツとするよ」

「……そこまで分かってるのによく戦おうなんて言えるわね……………気が狂ったの？」

堀北の問いはクラス全員の代弁だった——高円寺ですら何と答えるのかと注目している。

「そうかもな。あの圧倒的な力を目にすれば誰であろうとも正気で居られないだろう——増してや更に上があるとも言い切ってたんだ。龍園の言葉を借りるなら、人生で巡ってきた奇跡の様なチャンスなんだ——命を懸けるに値する」

粛々と語る綾小路の姿に再び戦うと言う流れに呑まれそうになるが、

「例えそうだとしても皆を巻き込むのは賛同しないわ——下手したら周りを巻き込んだじゃうかもしれないなら、やっぱり自重しなきゃ駄目よ」

「堀北。オレがいつ皆と一緒に戦うって言ったんだ」

綾小路の静かなひと言は一斉に場を静寂にさせた。

「嬰兒とは一対一で戦う——無論、逃げる側じゃなくて嬰兒に挑む方でな」

「……たった今、ゾツとするって言ったんじゃ」

「倒すか倒されるかならだが、腕章を取るだけなら僅かだが勝つ見込みはある——嬰兒も気を付けるだろうがヤバいと感じたら直ぐに降参するさ」

「そう。なら仮に勝てたとしてプロテクトポイントは、Aクラスに売却してCクラスと折半するのが順当だけど、それに対して言いたいことは？」

「さつきも言ったが考えてない。ぶっちゃけて言えば殆どついだな」

あくまで嬰兒と戦うことが目的であり、その他の事はどうでもいい——そんなニユアンスは薄情極まりないが、それでも退学の憂き目に

あつてる当事者やそれを望まない者からすれば希望ではあつた。

「あく……ついででもいいから勝つてくれねえかな………感謝はいくらでもするから」

「僕からも頼むよ。君が勝つことが誰も不幸にならない一番確実な方法なんだ」

「悪いが何も約束は出来ん。本当に勝てる見込みは少ししかないからな——それが不服ならオレがやられた後で自分らでやってくれ。ただし何も保証はしないがな」

静かなれど凄みを感じさせる様相に多くが引いてしまいが、堀北は窘めるように言う。

「最後に脅して………たちが悪いにも程があるわよ」

「どうとでも」

短く答えた綾小路はこれ以上の問答は無用と立ち上がり教室を出て行った。

もう喋っていいですよ。

同時刻、理事長室——俺は見知った顔二人と対面していた。

「久しぶりですね。牛井嬰兒くん」

「ええ、大晦日以来ですね。ええつと?」

「はは、まだ名乗ってませんでしたね。この度、理事長代行を務めることになった月城と申します」

なんとも癪に障る笑顔だ——隣に立ってるドウデキヤプルといい勝負だ。

「フフフ。ご機嫌麗しゆうとは行かないようですね——しかし折角拾った命ですので、もう少し喜ぶべきと思いますが」

「やっぱり居なくなる予定だったんですか?」

「あくまで可能性の話ですよ——不快な思いをされた生徒さんの陳情は無視できませんから」

ただの口実ただけだろうに抜け抜けと。

「だとしても一之瀬をダシにするような事で喜ぶ気にはなりませんよ」

「ははは。噂通り彼女にはぞつこんですか——ならばもつと積極的になってもよかったのでは?」

「青春を謳歌なんて出来る訳ないでしょうに……特に今の一之瀬とは」

全く今思い出しても苦々しいものだ。

「だから答えてよ。どんな私で居たらいいの?」

一之瀬帆波からの逃げるのが許されない問い。それに俺は、

「俺はお前に限らず誰の人生にも責任は取れない——俺自身に関してもだ」

と前置き……アリバイ作りの言い訳でしかないが、それでも言えと向かい合う一之瀬は無言で待つ。

ここまでの美少女に見つめられるなんて普通なら喜ばしきことな

のに……全然そんな気分になれないよ。

「それでも俺の言う通りにするって言うなら、もっと遠慮なく向かって来て欲しいかね——それで一之瀬帆波って言う人間を見せて欲しい」

「要するに今の私が好みってこと」

「……いやだからそう言う事じゃないって、そもそも。彼女とは違うってことを明確にしたいだけ……ただの我儘だよ」

そう言うで一之瀬の目から光が消えた……いや暗い輝きを宿したと言った方がいいかね。

「結局は聖人さんに行き着く訳だ——どこまでも綺麗事を貫かない格好悪いのが見たいなんて趣味が悪くない?」

「なんだ、俺好みの女になってくれって言っただけか?」

「さて、どうか——参考までに聞くけど、嬰兒くんは結局聖人さんを女性としてどう思ってたの?」

「恋愛感情はない。あくまで、その在り方に惚れただけだ——敢えて言うなら親友を通り越した戦友と言う感情だな」

「ふくん。じゃ、女の子と付き合いたいか口説きたいとかはどうしたら思う訳?」

「……あのさ、この話題何処まで続くんだ?」

「だって、そう言う時期でそう言う話だから、こんな事になっちゃったんでしょ——私には聞く権利があると思うけどな?」

痛い所を突いて来るな——正論であるだけに反論も出来ない。

だから少し考えて見るか——結婚を考えていた『申』とハーレムを願っていた『亥』と既婚者でもあった『未』、学生には似合わないケースばかりがベースだが無いよりかはいいだろう。

俺自身が興味を持てる女性像——母性溢れる家庭的、天真爛漫な輝きを持つ、妖艶な色気を持つ、もつと単純に容姿や体形が色っぽいとか?

ざっと思いつく限り並べてみたけど、どれもピンとこないな。

ので視点を少し変えて見るか。万年ラブラブ状態と言ってもいい綾小路清隆と坂柳有栖をトレースしてみても……全然イメー

ジが進まないな。と言うか余計に俺の意識から外れた無意味なものになって来ている。

一旦、全部クリアにしてシンプルに考えよう。

とは言うものの、俺の人生なんて一年も無い——全く好感が持てない戦犯の願いを叶える為、十二大戦のケジメをつける為と生み出され。

この学校に放り込まれてからもいつ何時消されても可笑しくない状態の下、今日まで過ごして来た——殆ど何でも暗黙の了解となってる特別試験や場外乱闘有りの学校生活の中、特例を次から次へと与えられ特に異質な存在として奇異な視線に晒され続ける毎日。

まあ、異質なのはその通りだし普通なんてものを求めても居ない……と言うか『子』の記憶と照らし合わせて、ここまでぶっ飛んでる学校に何を求めようと言うのか？

ひと癖も二癖もある連中との掛け合いは面白くはあったが、やはり十二戦士たちの経験と比べると見劣りしてしまう——政府主導との謳い文句も『世界の現実』に一石を投じられる人材を見出す為とかの大義があつたりするのかね？

……ととと、またまた思考が完全に外れてしまっている。

今は俺がどんな女を求めているかだが……

「……俺の魂を揺さぶり、命と誇りの両方を賭けるに値する相手」
「なにそれ？」

「俺も自分で言ってるんだと思うが……俺が求めているのって結局は……強い相手と戦う戦場でしかないのかね」

戦犯共の横槍で無茶苦茶にされた第十二回十二大戦——十二戦士たちを生き返らせて仕切り直すこと。

流石にここまで言えないから、お茶を濁すような表現になっちゃった……当たり前のことだが一之瀬は怪訝顔だ。

「要するに龍園くんや坂柳さんと同じで戦ってさえいらればいいってこと……嬰兒くん、平和主義者さんが好きだったんだよね？」

「彼女は世界最強とも言ってもいい戦士だからな——そんな実力者だからこそ綺麗事にも耳を傾けざるえなかった。」

この学校に居る連中も大概だが、それでもただの怖いもの知らずの学生つてのが正直な感想だ」

「嬰兒くんだって学生じゃん……それともそんなのは仮の姿とかイタイこと言ったりするの？」

それは流石に小っ恥ずかしいな——学生やる為に生み出されたから、当たつてるとも言い難いし。

何よりそれは、

「これが綾小路当たりなら？オレは普通の高校生だ」とか言ったりしそうだな——アイツもただならぬ事情を抱えて、この学校に来たみたいだし」

「ちよつと話を逸らさないで。今は嬰兒くんの事でしょ」

ははは、物凄く不満顔だ——これはこれで可愛いけど。それでも、
「!？」

一之瀬の頬に手を添えてジツと見て見た——ビツクリして固まったが好都合だ。

学校一と言つても過言ではない美少女の顔を更にじっくりと見せて貰うこと十二秒、

「やっぱりそそられないな」

「むう！」

パン！

と勢いよく俺の手を振り払った——怪訝、不満を通り越して怒りは頂点に達したか。

「私つてそんなに魅力ないの」

と、そんな台詞でも出て来るかと思つたが——最早、殺意すら感じる視線を向けて出て来た言葉は、

「もう完全に頭に来た——『惚れさせてから殺す』一之瀬帆波が」

だった。これは一体何の因果か——勿論、殺すなんてのは方便の類だろうが、ただどうせなら殺すの前に肩書きもプラスしてくれば完璧だったんだが。

……ああ。俺自身がこんな宣言をされる日が来るとは思わなかった——この名乗りは殺し合いの儀式。俺はどんな肩書きを持って——どう殺すと言えいいのかね。言い表せない高揚感に笑みを作るのが分かる。分かっても止められない——叶うなら、望めるなら、血の匂いに今直ぐに酔いたい。

「……殺すか。出来るのか、お前に？」

「やる——絶対にやる」

一之瀬はまっすぐに俺を見て……小っ恥ずかしいが俺だけしか見てない暗い瞳には、愉悦に浮かれてる顔した俺が映っている。

普段なら俺を使いAクラスになってその先は？と訊くだろだが、今そんな気は全く無い——寧ろそんなのは無粋だとすら思えて来る。

今の俺は凄く分かり易いかね——きつと一之瀬もそう思い、俺の心を把握したと思ってるかね。

その顔に絶対に許さないと書いてある——女としてのプライドなのか、善人を捨てさせたことへの復讐心なのかは分からないが。

なんであれ異存はない。

もとより使い捨ての道具でしかない身だ——十二大戦を彷彿させる感覚を提供してくれるならこれ以上の喜びはない。

思い返しても一之瀬に変なスイッチをいれてしまったのは痛恨のミスだ——あの手のタイプは挫折を味わって迷いの中から這い上がってくのがセオリーなのに。

全く世の中何がどうなるのか、訳が分からないことばかりだ。

「貴方の望みを汲んだつもりだったのですが、お気に召したようではありません」

月城理事長代行がニコニコしながらの言葉に引き戻された——隣のドウデキヤプルはいつも通りだが、何故だか面白そうにしているように見えるのは俺の気持ちの問題かね？

ただ、だからと言ってありがたいと言う様なことじゃないし、そのつもりも無い。

「俺の気持ちなんて、どうでもいいでしょうに——客観的に見れば俺が消える展開が理想的だったのでは？」

「勿論、裏はありますよ。こちらこそ慈善事業で手を差し伸べるには相手が悪すぎますからね——いや寧ろ絶対に敵にたくはないですね『あの方々』とは」

賢明な事だ。そして言外に俺はどうなんだって含みが透けて見える——そっちの思惑を絡めてくれたことに感謝しろか、少なくとも表面上は。

生憎だが無くして惜しい命は持ち合わせてないぞ。

「ちなみに選択肢2が通った場合、この学校の状況は少しはマシだったのか、それともより荒れていたのか、どっちだったんですかね？」
「ほう。流石に気付いてましたか」

当たり前だろ。俺を舐めてるのか、ドウデキヤプル？

選択肢2による全ての特例の破棄、それが示すのは俺の入学自体も含まれる——俺と言う存在は入学しなかったことにされて？
どうでもいい
完結間際の願い”は泡沫の夢って締めるつもりだったんだらう。

もつとも俺が居なかったことになったって流れはそこまで変わると思えないけどな——綾小路と坂柳はいずれ接触するだらうし、軽井沢や櫛田も熱を上げる対象が変わるだけ。堀北や一之瀬にしても遅かれ早かれ成長の時は来ただろう。

尤もこんな？たられば”なんて今更意味は無い——俺がまだこの学校に居なきゃいけないのは確定したんだ。

目下重要なのは十二大戦ごっこと言える催しをどうするか？

便宜上は最低三回はやることは可能——今回で退学者が出るクラスはこぞって挑んでくるのは必定。いやBクラスからも助っ人として参戦も大いに有り得る——盛り上がりを考えるなら全学年の実力者を選びすぐつての戦いなんてのも……………

「何やら楽しそうですね——結構な事です」

「ええ、これでこちらもより堂々と貴方を使うことが出来ますしね」

ムカつく位に息が合ってるな——で、使うつてのは俺に何をさせるつもりだ？いや、それそのものに異論はないが、これだけは言っ

かないとな。

「察するに学校に関わることのようにですけど、一部を依怙贖するよ
うなのなら今聞いておきたいんですが」

それがそつちのメリットだろ、理事長代行？と含みが伝わったの
か、細目がより鋭くなった。

「流石はあの方々のコピーですね、物分かりがいい——お陰でこちら
も話し易くて助かります」

「くだけて来ましたね」

「ええ。私も遊びに来た訳ではありませんから、使える道具は多いに
越したことはありません」

「それはよかった。俺も事情を把握してる人が身近になるのは気持ち
的には有難いです」

人格的にどうであれね——目的のために俺を利用していると堂々
と示してくれるのも結構な事だ。

ただの同情より信じるに値する。

どの程度かは知らないが有力者の信任を得てる以上は、ただの伝書
鳩や使いパシリじゃないだろう。

目的の為に策謀を巡らす器量があるのは俺的には気が楽だ——で、
今回は俺的にアメをくれたって解釈でいいのか？それとも早速ウイ
ンウィンな方策を披露してくれるのか？

「ははは。かなり期待されているようですが、端的に行って私の目的
は子供の我儘を潰して連れ戻す——ただこれだけです。勿論、表立っ
て退学を迫る事など御法度ですので迂遠なやり方になってしまいま
すが、貴方にはその一助になって頂きます」

出揃った情報を組み合わせると、ターゲットは綾小路だな——
—そして俺を使い用意した舞台で退学させるとなると、

「それはつまり俺にアイツを半殺しにでもしろと？」

学生生活が再起不能になるか、もうこの学校……俺の側には居たく
ないって方向に持って行くほどに精神的にぶっ壊せばいいのか？

「まさか、やり過ぎはいけません。何より彼を壊してしまつたら元も
子もありません——そんなことになつては私がクライアントに殺さ

れます。理想はそのままに戻って貰う事ですが、少々色を付ける為の努力はします——これでもプロフェッショナルですからね、私も」

依頼以上の成果を出してクライアントに喜んで貰おうってか——
額面通りに鵜呑みにするなら賞賛に値するが、俺が捻くれてるからか
ね——大分胡散臭く感じるよ。元より俺を使うことでどうやって、そんな結果に持つて行くつもりなんだ？

手腕を期待していいものか——それとも何かの前振りなのか？

なんにせよ、まずは相手の出方を見るしかないか——出来ることなら俺の予想を超えるものを見せて来るのを願いたいかね。

と考えてたら笑みを深めているドウデキヤプルが目に入った——
ただの心証だが？楽しそうで何よりです」と言われてる気がした。

……あー、高揚した気分が残って不快さも込み上げてくる。

どんな道を辿ろうとも結局はコイツの手の平の上で躍らせれてる——しかも今回は俺が喜んでそうしたいと思わされてるなんて展開だ。

どうせ戦うなら、まずはコイツを再起不能にしてやりたいぞ。

「うふふ。興奮が抑えれないのは仕方ありませんが、それはもう少し我慢ですよ。牛井嬰兒」

なんだ。その出来の悪い生徒を窘めるようなニュアンスは——いつからお前は教職に就いたんだ？

やっぱり今ここでその顔面に一撃喰らわせて……いや駄目だ。隙だらけなのに、どうしても——どうやってもどんな攻撃も届く気がしないと心が言っている。

これって戦士の直感か、それとも仕込まれた安全装置とかかね？

慇懃無礼過ぎる態度を目の前にして思う自由すら干渉されちまうのは作られし物の性か——なんて割り切ることも難しい。忌々しい限りだ。

こんな時は『子』の能力があれば……二、三個でいいから試せる選択肢が欲しいと思ってしまうのは『子』に対する冒とくなのかね？

自分の異能力を良く思ってたのは分かるが、如何せん『子』に
関してだけは受け継いだものが少なすぎる——対戦開始前に殺され

たのは如何にも惜しかった。そもそも『子』が居れば、十二星座の戦犯に勝つことも出来た……いや、だからこそ最初に殺されたのか？

「まったく、ここに来てから意味のない？たられば」ばかりだ——やはり正常に十二大戦が開始されて終わっていた世界になつて欲しかったかね。

「相手を殺しちやいけないのは分かつてるが、対象が物の場合はどこまで許される？」

「いい加減、頭を切り替えないとな——大戦では辺り一帯を吹っ飛ばす爆弾だつて使えたが、ごつこでそこまでは許されまい。壊した分も後で働いて弁償する体裁を取つたとしても限度はあるだろう。」

「そうですね。理想は被害が皆無ですがその事も想定して置くべきですね……ここは分かり易く数字で表すとしますと『十数万円』に納まる範囲を考慮して来ると助かります」

「金額じゃなくて、誤魔化すに足る程度にか——ま、ハンデとしちや妥当の範囲内か。ただそこまで明確化してくれるなら備品の値段とかも教えてくれるといいんだが」

「直ぐに作成して送りましょう」

「そうですね。余り時間が無いのも抜きにても早いに越したことはないでしょう」

「時間が無いか……申請はまだの筈だが？」

「なんて野暮な事はいいか——寧ろ、早く終わらせるよう振つて来ただろう台詞にしっかりと便乗した方が得策かね。ここに居る全員にとって。」

「故に話をとつとと進めよう。」

「では次に相手に怪我させないようにと言うからには俺は素手で？」

「うふふ。焦らずとも公式ルールはきちんと開示しますので、今は気を落ち着けることをお勧めします」

「やり過ぎないようにって含みだろうが、そのニュアンスじゃ完全に逆効果——寧ろ煽つてるように感じるぞ。」

「ただその言葉に従うなら、これ以上ここに居るのは精神衛生上よくないよな。」

「じゃ、精神統一こころのじゅんぴに入りたいでこれで失礼しても？」

「はい。どうぞ戻って、お休みください——頃合いを見計らってご連絡いたします」

俺の事も考慮してくれるってか？

気遣いと取るべきなんだろうが、お前に言われるとやはり真逆に聞こえるぞ——深々と一礼するドウデキヤプルから目を切り立ち上がる。

ああ、もう早く帰るか……思考を割くのも面倒に思えて来る。

理助長室を出て寮へと向かう——全く有意義ながらも不愉快な時間だった。

……出来れば今日はこれ以上のは止して欲しかったんだが、これも仕込みか？

「お疲れ様です」

明らかに不機嫌な坂柳が待っていた。

「中々に面白い事になりましたね——これが貴方の望みですか？」

「俺の意志は一切介在してない——全ては上が決めたことだ」

正直にありのままの事実を返すと不機嫌さが増大した——傍目にも負のオーラが立ち昇って見えるのは間違いない。

だからと言って俺にどうしろと？

文句や愚痴を聞くだけなら吝かじゃないが、それは旦那にでもして貰った方が……

「清隆くんは早速貴方と戦うことを希望してる様で、私にも相談が来ました——私の方が先約なのに、これに関しても貴方は関知してない？」

「俺だっつてこうなると知ったのはついさっきだ」

と言ったが納得はしないだろうな——けど未来視なんて持ち合わせてないし、仮に『子』の能力を受け継いだとしても避けられたとも思えない。

改めて『子』がやさぐれるのも分かる気がして来る……こうして考えると言い訳が出来る分、受け継がなくてよかったかね。

そんな感傷にも浸っていたいが、目の前の彼女はそれを許してはく

れないかね——全くデリカシーの欠ける亭主だ。

普段はお嫁さんを大事にしてるんだから、気持ちが悪くない訳も無いだろうに。

「……………今、清隆くんを悪く考えてましたね」

ジト目で言い当てられた……………正直、反応に困るな。

「彼の境遇を思えば致し方ないのもありますから、余り押し付けがましいのは控えて下さい」

「愛してるんだね、本当に」

「!？」

いや、ついストレートに感想が漏れたら固まっちゃった——しかも驚愕に目を見開いた相当に面白い表情で。

いやはや、これはもう少し見ていたいな。

「なんですか？」

おっと、もう終わってしまった……………更には別の不機嫌が混ざったか、……………これはこれで需要がありそうだが、俺好みじゃない。

寧ろ、これは彼女にもっとも近い——

「今清隆くんがここに居たらとか思ってますね」

「ほう」

今の彼女なら気付かないと思ったが、ちゃんと冷静な部分は残ってたか——そうなる俺が今考えてることも察しは付いてるかね？

「考え当てゲームをしたい気分じゃないので普通に会話して欲しいんですが」

「それは失礼した。で、何の話だっけ？」

「……………」

仕切り直しを求めると負のオーラは和らいだようだが、表情は変わらず不機嫌さは健在だ——ちよっと、やりにくいな。

「十二人で戦うと言う今回の特例——性質上、私は参加できませんし、するつもりもありませんが、報酬に釣られて既に申し込みが殺到している状態です」

「そうだね。綾小路もその一人なのが気に入らないか」

「ええ。ですが彼の場合の報酬はポイントではない」

おや、てつきり旦那に手を引かせるよう協力しろとか言われると思っただが、

「提示された報酬が目当てなら説得は可能です。しかし今の彼が欲してるのは別の物——更なる大きな力と未知への興味でしょう。それが良くない方に盛り上がって、私にとつての最悪の結果になること……それはどうしても避けたいんです」

「建前上、安全は担保されてるし、俺としても極力怪我をさせないよう制圧するつもりだが」

「……サラツと凄いいこと言いますね。それ、普通に相手を倒すよりも格段に難易度が高いですよ」

「あのさ。そつちこそ俺を見くびらないで貰えるか」

流石に聞き捨てならない——仮にも十二戦士……不本意ながら十二戦犯どもの力を受け継いだ俺が後れを取ると？

「知ってるからこそですよ。清隆くんだって戦闘能力で上回ってるのは知ってます——それでも挑もうとする以上は何かしら勝算がある筈です。その何かしらが私には気掛かりなんです」

何をして来るか分からないか——ははは、結構な事だ。

「その喜びの感情も相俟って益々不安になりますね——だから来たんですよ」

「考えを読む気分じゃなかったんじや？」

「ええ、その通りです。ですから余計な手間は掛けさせないでくれませんか——これまでも色々と余計な仕事を回されて辟易してるのですから」

おやおや、完全に目が座ってしまった——しかも過去の面倒を引き合いに出して、絶対に要求を呑ませると脅迫に近い物を醸し出してる。

「やれやれだね——ならばバリ結論から入ってくれるかな」

「ではお言葉に甘えて。清隆くんの戦意を折る戦い方だけはしないで下さい」

「怪我をさせるな、じゃなくてか？」

「清隆くんが本気でやって、どうなるかは私にも想像は出来ません——

「ただ約束の時に前に戦意を失われては困るんですよ。彼を完膚なきまで叩きのめすのは、あくまで私ですから」

それだけ積もり積もった悲願って訳か……つい今しがたまで『亥』に通じると思ってたんだが『寅』の一面も持っていたのか。

意外ではないが、あくまで戦うだのは恋心の裏返しな面かなと思っただけに、ちと驚きだな。

ただ同時に俺が叩き潰さなきゃならない程の力を出さなきゃいけないと思われてるのはいい気分じゃないけどな。

「戦場での経験を持つ俺が、一介の高校生相手にマジになると？」

「彼もまた訓練を受けて頑張ってるんだ——余り舐めない方が——」

「だとしても奴は戦士じゃない——どんなものを抱えてようが一介の高校生だ」

戦士が戦うのは同じ戦士のみ——決戦前の『あの二人』の会話を思い出す。そして奇しくも『亥』と通じる坂柳が相手なのは、何の皮肉か。

でもこいつは『亥』じゃない、さつき決定的に確信した——戦士でもない——ただの女子高生だ。

己が才に自信を持っていようと戦士を凌駕するには役者不足だ。そんなに心配なら、もっと我儘になるべきだ——俺じゃなくて意中の相手にな。

「貴方のプライドはよく分かりました。ですが、それでも私は綾小路清隆くんが絶対に敵わないとは思えません——ですから、そのプライドが正しいことを、私如きの懸念など問題ないこと証明して下さい」
また俺の心を測ったか——そして要請から要求に瞬時に切り替えて見せた。

と、そんな戦略を演出してくる辺り、やっぱりまだ幼いな。

「……返答を頂きたいのですが」

語気が荒くなった……余計なお世話だと言わんばかりに……
考え当てはしたくないんじゃないやなかったのか？

まあ、それはその通りなんだろうが、最早癖なんだな——（色々な）身体的ハンデから舐められないよう、ずっと気を張った生活をして来たんだらう。『戌』が面倒見てた園児たちにも似たようなのが居た。

ついでに言えば『山羊』もそうであったから、少なからず気持ちも理解できる——考えるのはここまでにしとこう。

……………声だけでなく、とうとう目尻まで動き始めたし。

「分かった、善処する。アイツのプライドを叩き折らないよう心に留めとく事を誓おう」

「神様ではなく、平和主義者の戦士にお願いします」

「ああ、それはいいな」

『申』を意識すれば、注文通りの戦い方も決して苦じゃない——本人ほど見事に出来はしないが、最初の戦闘スタイルとしては悪くない。

「……………本当に頼みますよ」

念押しして去って行く坂柳——これ以上は精神衛生的に良くないと判断したか、やつぱり綾小路じゃなきや駄目か。

いや、結構な事だ。

そして日が暮れた時間——プロテクトポイント争奪の最初の挑戦者を決める申し込みが解禁され、多くの中から『1』？、綾小路清隆』が選出されたのだった。